魔法科高校の劣等生～初年度の部～

佐島勤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法科高校の劣等生～初年度の部～

【Ｎコード】
Ｎ２５６９Ｆ

【作者名】
佐島勤

【あらすじ】
現代の魔法遣い「魔法師」を養成することを目的とした国策高等学校、国立魔法大学付属第一高校。将来を約束されたエリート魔法師候補「ブルーム」と、その補欠、補充要員である「ウィード」。様々な問題をはらみながらも平穏だった学びの園に、ウィードの兄とブルームの妹、二人の兄妹が入学した時から、波乱の日々の幕が開いた。（※初年度の部、完結しました）

1－（1）　賢妹愚兄（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

1－（1）　賢妹愚兄

魔法。

それが伝説や御伽噺の産物ではなく、現実の技術となったのは何時のことだったのか。

確認できる最初の記録は、２０世紀末のものだ。

人類滅亡の預言を実現しようとした狂信者集団による核兵器テロを、特殊な能力を持った警察官が阻止したあの事件が、近代以降で最初に魔法が確認された事例とされている。

当初、その異能は「超能力」と呼ばれていた。純粋に先天的な、突然変異で備わる能力であって、共有・普及可能な技術体系化は不可能と考えられていた。

それは、誤りだった。

東西の有力国家が「超能力」の研究を進めていく過程で、少しずつ、「魔法」を伝える者たちが表舞台に姿を見せた。

「超能力」は「魔法」によって再現が可能となった。

才能は必要だ。

だが、高い適性を有する者のみがプロフェッショナルと呼べるレベルまで熟達できる、という意味では、芸術分野、科学分野の技能も同じ。

超能力は魔法によって技術体系化され、「超能力者」は「魔法技能師」となった。

核兵器すらねじ伏せる強力な魔法技能師は、国家にとって兵器であり力そのものだ。

二十一世紀末を迎えても未だ統一される気配すら見せぬ世界の各国は、魔法技能師の育成に競って取り組んでいる。

国立魔法大学付属第一高校。

毎年、国立魔法大学へ最も多くの卒業生を送り込んでいる高等魔

法教育機関として知られている。
それは同時に、優秀な魔法技能師（略称「魔法師」）を最も多く輩出しているエリート校ということでもある。
魔法教育に、教育機会の均等などという建前は存在しない。
この国にそんな余裕は無い。
それ以上に、使える者と使えない者の間に存在する歴然とした差が、甘ったれた理想論の介在を許さない。
徹底した才能主義。
残酷なまでの実力主義。
それが、魔法の世界。
この学校に入学を許されたということ自体がエリートということであり、入学の時点から既に優等生と劣等生が存在する。
同じ新入生であっても、平等ではない。
例え、血を分けた兄妹であっても。

◇◆◇◆◇◆◇

「納得できません」
「まだ言っているのか……？」
第一高校入学式の日、だが、まだ開会二時間前の早朝。
新生活とそれがもたらす未来予想図に胸躍らせる新入生も、彼ら以上に舞い上がっている父兄の姿も、流石に疎らだ。
その入学式の会場となる講堂を前にして、真新しい制服に身を包んだ一組の男女が何やら言い争っていた。
同じ新入生、だがその制服は微妙に、しかし明確に異なる。
スカートとスラックスの違い、男女の違い、ではない。
女子生徒の胸には八枚の花弁をデザインした第一高校のエンブレム。
男子生徒のブレザーには、それが無い。
「何故お兄様が補欠なのですか？　入試の成績はトップだったじゃ

ありませんか！
　本来ならばわたしではなく、お兄様が新入生総代を務めるべきですのに！」
「……お前が何処から入試結果を手に入れたのかは横に置いておくとして……
　魔法科学校なんだから、ペーパーテストより魔法実技が優先されるのは当然じゃないか。
　俺の実技成績は深雪も良く知っているだろう？　自分じゃあ、二科生徒とはいえよくここに受かったものだと、驚いているんだけどね」
「そんな覇気の無いことでどうしますか！　勉学も体術もお兄様に勝てる者などいないというのに！　魔法だって本当なら」
「深雪！」
「！」
「……分かっているだろ？　それは口にしても仕方のないことなんだ」
「……申し訳ございません……」
「深雪……」
　項垂れた頭にポンと手を置き、艶やかな癖の無い長い黒髪をゆっくり撫でながら、さて、どう機嫌をとろうか、と、少年は少しばかり情けないことを考えていた。
「……お前の気持ちは嬉しいよ。俺の代わりにお前が怒ってくれるから、俺はいつも救われている」
「嘘です」
「嘘じゃない」
「嘘です。お兄様はいつも、わたしのことを叱ってばかり……」
「嘘じゃないって。
　でも、お前が俺のことを考えてくれているように、俺もお前のことを思っているんだ」
「お兄様……そんな、『想っている』だなんて……」

（……あれっ？）

何故か、頬を赤らめる少女。

何かしら無視し得ない齟齬が生じているような気がしたが、少年は差し迫った問題の解決の為に、疑念を棚上げすることにした。

「……お前が答辞を辞退しても、俺が代わりに選ばれることは絶対に無い。この土壇場で辞退したりすれば、お前の評価が損なわれることは避けられない。

本当は、分かっているんだろ？　深雪、お前は賢い娘だから」

「それは……」

「それにな、深雪。俺は楽しみにしているんだよ。

お前は俺の自慢の妹だ。

可愛い妹の晴れ姿を、このダメ兄貴に見せてくれよ」

「お兄様はダメ兄貴なんかじゃありません！

……ですが、分かりました。我侭を言って、申し訳ありませんでした」

「謝ることでもないし、我侭だなんて思ってないさ」

「それでは、行って参ります。

……見ていてくださいね、お兄様」

「ああ、行っておいで。本番を楽しみにしているから」

はい、では、と会釈をした少女の姿が講堂へと消えたのを確認して、少年はやれやれとため息をついた。

（さて……俺はこれからどうすればいいんだろ？）

総代を渋る妹の付き添いでリハーサル前に登校した少年は、式が始まるまでの二時間をどう過ごすか、悩み、途方に暮れた。

◇◆◇◆◇◆◇

学校施設を利用する為のＩＤカードは、入学式終了後に配られる段取りになっている。

来訪者の為のオープンカフェも、混乱を避ける為か今日は営業し

ていない。
雨じゃなくて良かった、と埒もないことを考えながら、中庭のベンチに腰を落ち着け、携帯端末を開いてお気に入りの書籍サイトにアクセスする。
式の運営に駆り出されているのだろうか。
ぽつぽつと、校舎から出てきて、中庭を横切る、左胸にエンブレムを戴く在校生。
ぽつり、ぽつりと、風に乗って、余計な単語が流れてくる。
「補欠」「スペア」「ウィード」……
ウィードとは、二科生徒を指す言葉だ。
緑色のブレザーの左胸に八枚花弁を持つ生徒をそのエンブレムの意匠から「ブルーム」と呼び、それを持たない二科生徒を花の咲かない雑草（ｗｅｅｄ）と揶揄して「ウィード」と呼ぶ。
この学校の定員は一学年二百名。
その内百名が、第二科所属の生徒として入学する。
国立魔法大学の付属教育機関である第一高校も、魔法技能師育成の為の国策機関だ。
国から予算が与えられている代わりに、一定の成果が義務付けられている。
この学校のノルマは、魔法科大学、魔法技能専門高等訓練機関に、毎年百名以上の卒業生を供給すること。
残念ながら、魔法教育には事故が付き物だ。
ノウハウの蓄積により、死亡事故や身体に障害が残るような事故はほぼ根絶されている。
だが魔法の才能は、心理的要因により容易にスポイルされてしまう。
事故のショックで魔法を使えなくなった生徒が、毎年少なからず退学していく。
その穴埋め要員が「二科生徒」。
彼らは学校に在籍し、授業に参加し、施設・資料を使用すること

を許可されているが、最も重要な、魔法実技の個別指導を受ける権利が無い。
独力で学び、自力で結果を出す。
それができなければ、普通科高校卒業資格しか得られない。
魔法科高校の卒業資格は与えられず、魔法科大学には進学できない。
二科生徒は、最初からハンデを与えられた生徒たちだ。
魔法教育に、機会の均等など無い。
自分たちは、自分は、スペア部品だ。
そのことは、物心ついた頃から嫌というほど承知している。
だから、わざわざ聞こえよがしに思い知らせてくれる必要は無い。
本当に、余計なお世話なのだ……

◇◆◇◆◇◆◇

開いていた端末に、時計が表示された。
読書に没頭していた意識が、現実に引き戻される。
入学式まで、あと三十分。
「新入生ですね？　開場の時間ですよ」
愛用の書籍サイトからログアウトし、端末を閉じてベンチから立ち上ろうとしたちょうどその時、頭上から声が降って来た。
まず目に付いたのは制服のスカート。それから、左腕に巻かれたテンキー付の幅広ブレスレット。
普及型より大幅に小型化され、ファッション性も考慮された最新式の術式補助演算機だ。
術式補助演算機（Ｃａｓｔｉｎｇ　Ａｓｓｉｓｔａｎｔ　Ｄｅｖｉｃｅ）。
通称ＣＡＤ。デバイス、アシスタンスとも呼ばれている。
この国ではホウキ（法機）という呼称も使われる。
魔法を発動する為の起動式を、呪文や呪符、印契、魔法陣、魔法

書等の伝統的な手法・道具に代わり提供する、現代の魔法技能師に必須のツールだ。

ＣＡＤが無ければ魔法を発動できないという訳ではないが、魔法発動を飛躍的に高速化したＣＡＤを使わない魔法技能師は皆無に等しい。

但し、ＣＡＤがあれば誰でも魔法が使えるという訳でもない。

ＣＡＤは起動式を提供するだけであり、魔法を発動するのは魔法技能師自身の能力。

つまり、魔法を使えない者には無用の長物であり、ＣＡＤを所持するのはほぼ百パーセント、魔法に携わる者である。

そして少年の記憶によれば、生徒で学内におけるＣＡＤの常時携行が認められているのは、生徒会の役員と特定の委員会のメンバーのみ。

「ありがとうございます。すぐに行きます」

相手の左胸には当然、八枚花弁のエンブレム。

ブレザーを押し上げる胸のふくらみは、少年の意識に投影されない。

自分の左胸を隠す、ことはしない。

そんな卑屈さは、持ち合わせていない。

だが、劣等感が無い訳ではない。

生徒会役員を務めるような優等生と、積極的に関わり合いになりたいとは思えなかった。

「感心ですね、スクリーン型ですか」

だが、相手はそう思わなかったようだ。

少年はここに至り、ようやく相手の顔を見た。

立ち上がった少年より、二十センチは低い。

少年の身長が一七五センチだから、女性としても小柄な方だろう。

目線が、彼が二科生徒であることを確認するには、ちょうどいい高さ。

だがその眼差しには、彼を見下す一切の色彩が含まれておらず、

単純な、あるいは無邪気な、感嘆があった。
「当校では仮想型ディスプレイ端末の持込を認めていません。ですが残念なことに、仮想型を使用する生徒が大勢います。
でもあなたは、入学前からスクリーン型を使っているんですね」
「仮想型は読書に不向きですので」
彼の端末が年季の入ったものであることくらい誰にでも一目で分かるので、余計なことを訊き返したりはしなかった。
言い訳じみた返事は、余り素っ気無いと、自分よりも妹の不利益になると考えた結果だ。
妹は間違いなく、生徒会に選ばれるだろうから。
そんな打算の産物に、その上級生は一層感心の色を濃くした。
「動画ではなく読書ですか。ますます珍しいです。
私も映像資料より書籍資料が好きな方ですから、何だか嬉しいですね」
確かにバーチャルコンテンツの方がテキストコンテンツより好まれる時代だが、読書を好む人間がそこまで希少ということは無い。
どうやらこの上級生は、珍しいくらい人懐こい性格らしい、と少年は見当をつけた。
「あっ、申し遅れました。私は第一高校の生徒会長を務めています、七草真由美です。ななくさ、と書いて、さえぐさ、と読みます。
よろしくお願いしますね」
(数字付き……しかも「七草」か)
反射的に顔を顰めそうになったが、何とか愛想笑いを浮かべて、少年は名乗り返した。
「俺、いえ、自分は、司波達也です」
「司波達也君……そうですか、あなたが、あの司波君でしたか」
「……」
どうせ、新入生総代、主席入学の司波深雪の兄でありながら、まともに魔法が使えない落ちこぼれ、という意味の「あの」だろう。
そう思い、達也は礼儀正しい沈黙を選んだ。

「ふふふ、先生方の間では、あなたの噂で持ちきりでしたよ」
それは、ここまで出来の違う兄妹も珍しいだろう、と達也は思った。
……だがどうも、そういうネガティブなニュアンスではなさそうだった。
彼女の笑顔からは、ポジティブなイメージしか伝わってこない。
「入学試験、七教科平均、百点満点中九十六点。
特に圧巻だったのは魔法理論と魔法工学。合格者の平均点が七十点に満たないのに、両教科とも小論文を含めて文句なしの満点。
前代未聞の高得点だって」
「……ペーパーテストの成績です。情報システムの中だけの話ですよ」
そう言って、達也は自分の左胸を指差した。
その意味を生徒会長が知らないはずは無い。
「すごいじゃないですか。少なくとも、私には真似できませんよ？
私はこの学校で二年も学んでいますけど、同じ問題を出されても司波君のような点数はきっと、取れません」
「そろそろ時間ですので……失礼します」
達也は、返事を待たずに背を向けた。
真由美の笑顔を、このまま彼女と話を続けることを、彼は心のどこかで恐れていた。
自分が何を恐れているのか、自覚しないままに。

1－（2）　袖すり合う縁（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

1―（2）　袖すり合う縁

生徒会長と話しこんでいた所為で、達也が講堂に入った時には、既に席の半分以上が埋まっていた。

演台が底になっている擂鉢上の構造ではなく、演台を見上げる座席配置は、この講堂が講義用ではなく式典用であることを示している。

この権威主義は国策学校らしい、と、達也は少年らしからぬシニカルな感想を浮かべ、さて何処に座ろうか、と空き席を見回した。

座席の指定は無いから、最前列に座ろうが最後列に座ろうが真ん中に座ろうが端に座ろうが、それは自由だ。

今でも、学校によっては入学式前にクラス分けを発表してクラス別に並ばせる古風なところもあるが、この学校はＩＤカード交付時にクラスが判明する仕組になっている。

従って、クラス別に自然に分かれる、ということもない。

だが、新入生の分布には、明らかに規則性があった。

前半分が一科生――ブルーム。

後ろ半分が二科生――ウィード。

（最も差別意識が強いのは、差別を受けている者である、か……）

それも一種の生きる智恵であるのは確かだ。

敢えて逆らうつもりもなかったので、達也は後ろ三分の一辺りの中央に近い空き席を適当に見繕って座った。

壁の時計に目を向ける。

あと二十分。

通信制限の掛かっている講堂の中ではサイトにアクセスできない。端末に保存したデータは読み古しているし、何よりこんな所で端末を広げるのはマナー違反だ。

今頃、最後のリハーサルをしているであろう深雪の姿を思い浮かべようとして……達也は小さく首を振った。

あの妹が、こんな直前にじたばたするはずがない。
クッションの効いていない椅子に深く座りなおして、達也は目を閉じた。
「あの、お隣は空いていますか？」
その直後。
声が掛かった。
目を開けて確認すると、やはり、自分に掛けられた声。
声で分かるとおりの、女子生徒だ。
「どうぞ」
まだ空席は少なくないのに、何故わざわざ見知らぬ男子生徒の隣に座りたがるのか、と訝しむ気持ちが無いでもなかったが、ここの椅子は座り心地はともかくサイズだけはゆったりと作ってあるし相手は少女としてもスレンダーな体型だったので、隣に座られても不都合は無い。
寧ろ、むさ苦しい筋肉の塊に居座られるよりマシだから、達也は愛想よく頷いた。
ありがとうございます、と頭を下げて腰掛ける少女。
その横に次々と三人の少女が腰を下ろす。
なるほど、と達也は納得した。
どうやら四人一続きで座れる場所を探していたらしい。
友人、なのだろうが、この学校に四人も同時に合格して、その全員が二科生というのも珍しいのではないだろうか。
別に、どうでもいいことではあるが。
「あの……」
彼が視線を正面に戻すと、また、声を掛けられた。
一体なんだろうか？
間違いなく知り合いではないし、肘が当たってる訳でも足が当たっている訳でもない。
自分で言うのも何だが、達也は姿勢が良い方だ。
クレームを受けるようなことは、何もしていないはずだが――

「私、柴田美月っていいます。よろしくお願いします」
予想に反した自己紹介。気弱そうな口調と外見。人を見た目で判断するのは危険かもしれないが、自己アピールが得意なタイプとも思えない。
多分、無理をしているのだろう。誰からか、二科生同士助け合わなければならない、等と余計なことを吹き込まれたのかも知れない。
「司波達也です。こちらこそよろしく」
そう思ってなるべく柔らかな態度を心掛けると、大きな縁無しレンズの向こう側の瞳にホッとした表情が浮かんだ。
メガネをかけた少女は、今の時代、かなり珍しいといえる。
二十一世紀中葉から視力矯正治療が普及した結果、この国で近視という病は過去のものとなりつつある。
余程重度の先天性視力異常でもない限り、視力矯正具は必要ないし、視力矯正が必要な場合でも人体に無害で年単位の連続装着が可能なコンタクトレンズが普及している。
わざわざメガネを使う理由があるとすれば、単なる嗜好か、ファッションか、あるいは――
（霊子視覚過敏症か……）
少し意識を向ければ、レンズに度の入っていないことが分かる。
肉眼では分からないが、おそらく、オーラカットのコーティングがされた保護レンズ（度が入っていないのだから、レンズという名称は本来ならば不正確だが）。
所謂、見え過ぎ病。意図せずに霊子放射光が見える、意識して霊子放射光を見えないようにすることが出来ない、一種の魔力制御不全症だ。
昔の、霊能力者と呼ばれた人たちは、多くがこの霊子視覚過敏症だった。
他の人々には見えないものが見える。
見えないはずのものが、望まず、見えてしまう。
その所為で精神に異常があると誤解された人も多いし、実際に、

精神に異常を来たした人も多い。

認識や思考結果を記録する情報素子である思念子（サイオン）に対し、霊子（プシオン）はまだその正体が完全には解明されていない。思考や感情の活性化に伴って観測されるプシオンの量も増大することから、記録情報素子であるサイオンに対してプシオンは演算情報素子の役割を担っているのではないかという説、サイオンが客体に関する情報を記録するのに対しプシオンは主体＝自分自身の内部情報を記録する上位の情報素子ではないかという説、現状ではこの二つの説が有力だが、結論は出ていない。

プシオン情報体が精神そのものかどうかについては未だ仮説でしかないが、プシオンが個人の内部にのみ留まるものではないことは既に判明している。

例えば、宗教儀式が行われている最中の寺院・聖堂内部には濃密度のプシオンが検出される。

プシオン情報体がサイオンに結びつくと、特定の空間に残留する思念、所謂「地縛霊」となることも分かっている。

このプシオンの波動が霊子放射光であり、プシオン感受性の高い者にはそれが「光」あるいは「色」として「見える」。

ところで、最も見えやすい霊子放射光は、感情の波動だ。

強い感情ほど、強い光、濃い色として見える。

そして強い感情というのは、往々にして、ネガティブな感情だ。

悲しみ、妬み、憎しみ……

そのような強い負の感情は、強固なプシオン情報体を形成し、持続的に強い波動を放つ。

霊子視覚過敏症者は、このネガティブなプシオン波動の影響を強く受ける。

その為に、精神の均衡を崩しやすい。

これが、霊子視覚過敏症者に情緒障害が多発する理由とされている。

これを予防する為の手立ては、根本的には、プシオン感受性をコ

ントロールすることだが――その為の技能は魔法の一分野とてし既に確立されている――それが出来ない者には技術的な代替手段が提供されている。

その一つが、オーラ・カット・コーティング・レンズ。

だが二科生とはいえこの学校に入学するだけの魔法技能がありながら、保護用のメガネが必要ということは、この少女のプシオン感受性は相当高いということになる。

（見鬼、というやつかな……）

霊子放射光に対する視覚感受性が特に高い魔法技能師を、昔は「見鬼」と呼んでいた、という話を歴史の教本で見た記憶がある。

今はまだ制御が追いついていないようだが、自分の感覚をコントロールできるようになれば、二科生で終わる器ではないのかもしれない。

「あたしは千葉エリカ。よろしくね、司波君」

「こちらこそ」

達也の思惟は、美月の向こう側に座った少女の声で中断された。

ただそれは、タイミングのいいリリーフでもあった。

達也の視線は知らず美月を見詰める形となっていて、美月の羞恥心がそろそろ限界に近づいていたことに、達也は気づいていない。

「でも面白い偶然、と言っていいのかな？」

こちらは友人と違って、物怖じも人見知りもしない性格らしい。

ショートの髪型や明るい髪の色やハッキリした目鼻立ちが、活発な印象を増幅している。

「何が？」

「だってさ、シバにシバタにチバでしょ？　何だか語呂合わせみたいじゃない。チョッと違うけどさ」

「……なるほど」

確かにちょっと違うが、言いたいことは分かる。

（それにしても、また数字付きか……千葉があの「千葉」とは限らないが）

彼がそんなことを考えている傍らで、ホントだ、とか、面白～い、とか、いささか場違いな笑声が放たれたが、周りから白い目を向けられるほどではない。

残り二人の自己紹介が終わったところで、達也は些細な好奇心を満たしてみたくなった。

「四人は、同じ中学？」

エリカの答えは、意外なものだった。

「違うよ、全員、さっき初対面」

意表をつかれた達也の表情が可笑しかったのか、クスクス笑いながら説明を続ける。

「場所が分からなくてさ、案内板と睨めっこしていたところに、美月が声をかけてくれたのがきっかけ」

「……案内板？」

それはおかしいだろう。

入学式のデータは会場の場所も含めて、入学者全員に配信されている。

携帯端末に標準装備されたＬＰＳ（Ｌｏｃａｌ　Ｐｏｓｉｔｉｏｎｉｎｇ　Ｓｙｓｔｅｍ）を使えば、仮に、式の案内を読んでいなくても、何も覚えていなくても、迷うことは無いはずだ。

「あたしら、三人とも端末持って来てなくてさ」

「だって、仮想型は禁止だって入学案内に書いてあるんだもん」

「せっかく滑り込めたのに、入学式早々目をつけられたくないし」

「あたしは単純に忘れたんだけどね」

「そういうことか……」

本当は、納得した訳ではなかった。

自分の入学式なのだから、会場の場所くらい確認しておけよ、というのが偽らざる思いだったが、口にはしなかった。

無益に波風を立てるつもりは無かった。

◇◆◇◆◇◆◇

深雪の答辞は、予想したとおり見事なものだった。
この程度のことで妹が躓くなどと、達也は微塵も考えていなかったが。
「皆等しく」とか「一丸となって」とか「魔法以外にも」とか「総合的に」とか、結構際どいフレーズが多々盛り込まれていたが、それらを上手く建前でくるみ、棘を一切感じさせなかった。
その態度は堂々としていながら初々しく慎ましく、本人の並外れて可憐な美貌と相乗して、新入生・上級生の区別無く、男たちのハートを鷲掴みだった。
深雪の身辺は、明日から、さぞかし賑やかだろう。
それもまた、いつものことだ。
何のかんのと言いながら、世間一般の基準に照らしてシスコンと呼ばれる程度には深雪に甘い達也は、すぐにでも妹を労ってやりたかったが、生憎、式の終了に続いてＩＤカードの交付がある。
予め各人別のカードが作成されている訳ではなく、個人認証を行ってその場で学内用カードにデータを書き込む仕組だから、どの窓口に行っても手続可能なのだが、ここでもやはり、自然と壁が生まれてしまう。
深雪は多分、というか間違いなく、そんなものは無視してしまうだろうが、彼女は新入生を代表して、既にカードを授与されている。
そして今は、来賓と生徒会の人垣の中だ。
「司波君、何組？」
「Ｅ組だ」
「やたっ！　同じクラスね」
「私も同じクラスです」
「あたし、Ｆ組」
「あたしはＧ組だぁ」
この学校は一学年八クラス、一クラス二十五人。
こういうところは平等だ。

もっとも、ウィードはE組からH組と決まっており、ブルームと同じクラスになることは無いのだが。

カードの受取に並ぶ達也に、何故かあの四人がついて来たが、同じクラスになったのは美月とエリカ、他の二人は別クラス。

ここで自然と、別行動となった。

二科生徒の全員が拘りを抱えている訳ではない。

一寸背伸びした名門校に受かっちゃった、という意識の生徒も結構いる。

この学校は、魔法以外のレベルも全国上位クラスと評価されているからだ。

あの二人は多分、それぞれの同じクラスで一年間を共有する友人を探しに行ったのだろう。

「どうする？　あたしらもホームへ行ってみる？」

ホームとは言うまでも無くホームルームのこと。

古い伝統を守り続けている一部の学校を除いて、今の高校に担任教師という制度は無い。

事務連絡に一々人手を使う必要はなく、そんな人件費の無駄遣いをする余裕のあるところも少なく、全て学内ネットに接続した端末配信で済まされる。

学校用端末が一人一台体制になったのは、何十年も前のことだ。

個別指導も、実技の指導でなければ、余程のことでない限り情報端末が使用される。

それ以上のケアが必要なら、専門資格を持つ複数多分野のカウンセラーが学校には必ず配属されている。

では何故ホームルームが必要かというと、実技や実験の授業の都合だ。

それに、自分用の決まった端末があった方が、何かと利便性が高いという理由もある。

背景はどうあれ一つの部屋で過ごす時間が長ければ、自然と交流も深まる。

担任制度が無くなることで、クラスメイトの結びつきは寧ろ強くなる傾向にあった。
何はともあれ、新しい友人を作る為なら、ホームルームへ行くのが一番の近道であることは確か。
「悪い。妹と待ち合わせているんだ」
だが今日はもう授業も連絡事項もないと分かっている。
達也は諸手続が終わったらすぐ、深雪と一緒に帰る約束をしていた。
「へぇ……司波君の妹なら、さぞかし可愛いんじゃないの？」
「妹さんってもしかして……新入生総代の司波深雪さんですか？」
「えっ、そうなの？　じゃあ、双子？」
「よく訊かれるけど双子じゃないよ。俺が四月生まれで妹が三月生まれ。
それにしてもよく分かったね。司波なんてそんなに珍しい苗字でもないのに」
前半がエリカに対する回答、後半が美月に対する問い掛け。
それに対する応答は混線気味だった。
「いやいや、充分珍しいって」
「面差しが似てましたから……」
「似てるかな？」
そう言われるのは初めてではないが、達也には全く実感が無い。
というか、信じられない。
深雪は身内の贔屓目抜きに見ても稀有な美少女で、有り余る才能を抜きにしてもその場にいるだけで注目を集めずにはいられないという天性のアイドル、いや、スターだ。
妹を見ていると、天は二物を与えずという諺は嘘だという事が嫌というほど理解できる。
翻って自分はというと、一応標準以上、中の上くらい、かな？、というのが達也の自己評価だった。
毎日のようにラブレター（というより、あれはファンレターだと

達也は見ている）を押し付けられる妹を傍目に、達也はその手の物を貰ったことが一度も無い。

一部とはいえ同じ遺伝子を共有しているはずだが、血のつながりを疑ったことも一度や二度ではないのだ。

「そう言われれば……うん、似てる似てる。

司波君、結構イケメンだしさ。それ以上に顔立ちがどうとかじゃなくて、こう、雰囲気みたいなものが」

「イメケンって、何時の時代の死語だ……それに顔立ちが別なら、結局似てないってことだろうに」

「そうじゃなくってさ、うーん、何て言えばいいのか……」

「お二人のオーラは、凛とした面差しがとてもよく似ています。流石に兄妹ですね」

「そう！　オーラよ、オーラ」

「千葉さんや……君って実は、お調子者だろ。

それにしても柴田さん、オーラの表情なんて、そんな細かいところまで分かるの？　その、それ掛けてて……さ」

お調子者ぉ？　ヒドーイ、という抗議を聞き流して、歯切れ悪く問い掛けた達也の言葉に、美月は目を丸くした。

「司波君こそ、分かるんですか！？　このメガネが、オーラ・カットだって」

美月が驚くのも無理はない。

オーラ・カット・コーティングは可視光線を完全に透過させるので、肉眼で確認することはほぼ不可能だ。

装着者の目から発せられるプシオン波動が遮られているかどうかで、通常のレンズと見分けることはできるが、その為には波動の濃淡を相当明瞭に知覚しなければならない。

魔法技能師にとって必要なのはサイオンを扱う能力であり、サイオンの知覚訓練は受けていても、プシオンについてはそれこそ霊子視覚過敏症でもないかぎり、学ぶ機会は少ないのが現状だ。

「分かった訳じゃないけど……

そのメガネ、度が入っていないでしょ。
ファッションで掛けているようにも見えないし、過敏症じゃないかな、って」
「わぁ……そのとおりです」
「……司波君、鋭過ぎ。
名探偵シャーロック・タッちゃんの称号を進呈しましょう」
「じゃあ千葉さんは、探偵助手ワトソン・エッちゃんに任命してあげるよ」
「……ゴメン、エッちゃんは勘弁して」
苦い顔で呟くエリカの隣で、美月がクスクス笑いをこぼす。
緊張が取れたのか、随分雰囲気が明るくなっていた。
地は、結構笑い上戸のようだ。
ただその所為で、笑って誤魔化された形になってしまったが、差し迫った必要性がある訳でもなく、達也は自分の疑問を棚上げすることにした。
そろそろ時間だから。

１－（３）　兄妹の家（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

1―（3）　兄妹の家

「お兄様、お待たせ致しました」
そろそろ時間だ、と考えていた矢先、背後から待ち人の声が聞こえた。
予想通りのタイミング。
深雪の性格を良く知る達也には、どの程度で妹の忍耐力に限界が訪れるか、ほぼ正確に予想できる。
社交性に欠ける訳ではないが、お世辞やお愛想を嫌う潔癖症の傾向は否めない。子供っぽさ、と言えなくはないが、幼い時分から誉められる機会には事欠かず、その分、妬み・やっかみ混じりの上辺だけの賞賛に曝されることも少なくなかった。
それを考えれば、チヤホヤされることに多少懐疑的になっても仕方がない。今日は、良く我慢した方だと言える。
振り返りながら「早かったね」と応える、つもりだったが、言葉は予定通りでも、イントネーションが疑問形になってしまった。
予定通りの待ち人は、予定外の同行者を伴っていた。
「こんにちは、司波君。また会いましたね」
人懐こい笑顔に、達也は無言で頭を下げた。
愛想に乏しい応対にも関わらず、生徒会長・七草真由美は微笑みを崩さない。それが一種のポーカーフェイスなのか、それともこの年上の少女の地なのか、会ったばかりの達也には判断がつかない。
「お兄様、その方たちは……？」
隣と後ろについてくる上級生を気にしながらも、深雪は兄の傍らに親しげに寄り添う少女たちに対する興味が勝ったようだ。自分が一人じゃない事情の説明より先に、達也が一人ではない理由の説明を求めてきた。
「こちらが柴田美月さん。そしてこちらが千葉エリカさん。
同じクラスなんだ」

「そうですか……早速、クラスメイトとデートですか。お兄様がこんなに手の早い方だとは存じませんでした」
「そんな訳ないだろ、深雪。お前を待っている間、話をしていただけだって。
そういう言い方は二人にとっても失礼だよ？」
棘の生えた言いがかりを苦笑混じりで宥める達也。
彼にとってはこんな妹の拗ねた顔も可愛いのだが、紹介を受けて名乗りもしないのは、上級生や同級生の手前、外聞が余り宜しくないのも確かだ。
目に軽い非難の色を乗せると、一瞬だけハッとした表情を浮かべた後、深雪は淑やかな笑顔を取り繕った。
「……はじめまして、柴田さん、千葉さん。司波深雪です。
わたしも新入生ですので、お兄様同様、よろしくお願いしますね」
「柴田美月です。こちらこそよろしくお願いします」
「よろしく。あたしのことはエリカでいいわ。貴女のことも、深雪って呼ばせてもらってもいい？」
「ええ、どうぞ。苗字では、お兄様と区別がつきにくいですものね」
エリカの親しげな物言いに、戸惑いを覚えたのは達也の方だった。
深雪は馴れ馴れしさと紙一重の砕けた態度を気にした様子も見せず頷いた。
「あはっ、深雪って見掛けによらず、実は気さくな人？」
「エリカは見た目通りの、開放的な性格なのね。わたしは好きよ、そういう人」
二人は何やら通じ合うものがあったようだ。すっかり打ち解けた笑みを交わす深雪とエリカ。置いてきぼりの感を自覚せずにはいられない達也だったが、このまま突っ立っている訳にもいかない。生徒会長の一行が一緒だから邪魔者扱いされることはないが、だからこそ何時までもこうしていては、通行の邪魔だった。
「……深雪。生徒会の方々の用は済んだのか？　まだだったら、適当に時間を潰しているぞ？」

「大丈夫ですよ」
応えは、異なる相手から返された。
「今日はご挨拶させていただいただけですから。
深雪さん……と、私も呼ばせてもらってもいいかしら？」
「あっ、はい」
「では深雪さん、詳しいお話はまた、日を改めて」
「しかし会長、それでは予定が……」
「予めお約束していたものではありませんから。別に予定があるなら、そちらを優先すべきでしょう？」
尚も食い下がる気配を見せる男子生徒を目で制して、真由美は深雪に、そして達也に、意味有りげな微笑みを向けた。
「それでは深雪さん、今日はこれで。司波君もいずれまた、ゆっくりと……」
会釈して立ち去る真由美の背後に続く男子生徒が振り返り、舌打ちの聞こえてきそうな表情で達也を睨んだ。

「……さて、帰ろうか」
どうやら入学早々、上級生、しかも生徒会役員の不興を買ってしまったようだが、今のは不可抗力に近い。もとより、この程度でクヨクヨできるような順風人生を辿って来た訳ではないのだ。まだ十六年弱だが、その程度のネガティブな強さを身につけるだけの人生経験は有している達也だった。
「……すみません、お兄様。わたしの所為で、お兄様の心証を」
「お前が謝ることじゃないさ」
表情を曇らせた深雪のセリフを最後まで言わせずに、達也は首を横に振って、ポン、と妹の頭に手を置いた。そのまま髪を梳くように撫でると、沈んでいた表情が陶然の色を帯びる。傍で見ていると少々危ない兄妹に見えなくもなかったが、そこは初対面の遠慮もあってか、美月も、そしてエリカも、その事については何も言わなかった。

「せっかくですから、お茶でも飲んでいきませんか？」
「いいね、賛成！　美味しいケーキ屋さんがあるらしいんだ♪」
代わりに投げ掛けられたのは、ティータイムのお誘い。
家族が待っているのではないか、と訊くつもりはない。こんなことを言い出した時点で、無用な気遣いだろう。それを言うなら達也たちも同様だ。
それよりも達也には、訊いてみたいことがあった。ある意味、どうでもいいことなのだが……
「入学式の場所はチェックしていなかったのに、ケーキ屋は知っているのか……？」
「当然！　大事なことでしょ？」
「当然なのか……」
相槌の台詞が呻き声になってしまったが、それを誰が責められようか、と達也は他人事のように思った。
「お兄様、どういたしましょうか？」
だが、エリカの暴言にショックを受けているのは、達也だけらしい。
深雪も、式場より甘味処を優先した非常識には、気を留める素振りもなかった。――もっとも深雪は、事情自体を知らないのだが。
「いいんじゃないか。せっかく知り合いになったことだし。同性、同年代の友人はいくらいても多過ぎるということはないだろうから」
特に急いで帰宅しなければならない用事もない。元々、妹の入学祝いに何処か適当なところで昼を済ませて帰ろうか、とも考えていたので、ほとんど考え込むことなく、達也は頷いた。
深く考えられた台詞ではないので、そこには彼の何気ない本音が表れている。
「司波君って、深雪のことになると自分は計算外なのね……」
「妹さん思いなんですね……」
褒められているのか呆れられているのか、配合がそれぞれに異なる眼差しを前に、達也は苦い顔で黙り込むことしか出来なかった。

◇◆◇◆◇◆◇

エリカに連れて行かれた「ケーキ屋」は、その実「デザートの美味しいフレンチのカフェテリア」だったので、そこで昼食を済ませ、短くない時間お喋りに興じて（いたのは女性三人で、達也はほとんど聞いているだけだった）、家に帰り着いたのは夕方も近い時間帯になっていた。

出迎える者はない。

平均を大きく上回る広さのこの家は、ほとんど達也と深雪の二人暮らしのようなものだ。

自分の部屋に戻り、まず制服を脱ぐ。

こんな姑息な道具立てに影響されているとは思いたくないが、わざわざ「違い」を際立たせるように作られたブレザーを脱ぐと、少し、気分が軽くなったような気がした。そんな自分の心理動向に一度、舌打ちして、手早く着替えを済ませる。

リビングで寛いでいると、程無くして、私服に着替えた深雪が下りて来た。

素材は大きく進歩したが、服のデザインは百年前からほとんど変化していない。

今世紀初頭風の丈の短いスカートから綺麗な脚線をのぞかせながら、深雪が近づいて来る。

この妹のファッションはどういう訳か、家の中で露出が増える傾向にある。いい加減慣れてもよさそうだが、ここの所ずいぶんと女性らしさを増して、達也としては目のやり場に困ってしまうこともしばしばだった。

「お兄様、何かお飲み物をご用意しましょうか？」

「そうだね、コーヒーを頼む」

「かしこまりました」

キッチンへ向かう華奢な背中で、緩く一本に編んだ髪が揺れる。

水仕事をするのに、髪が邪魔にならないように、なのだが、普段は長い髪に隠れている白いうなじが、襟ぐりの広いセーターからチラチラと見え隠れして何とも言えぬ色香を醸し出している。

実の妹でなかったら襲っていたかもしれないな、と達也は今更のことを考えた。

ホーム・オートメーション・ロボット（ＨＡＲ／ハル）が普及している先進国では、台所に立つ女性は――無論男性も――どちらかと言えば少数派になっている。本格的な料理ならともかく、パンを焼く、コーヒーを淹れる程度のことに自分の手を使う者は、趣味でもなければほとんどいない。

そして深雪は、そのほとんどいない少数派に属している。

機械音痴という訳ではない。

友人が遊びに来たときなどは、大体ＨＡＲ任せだ。

しかし達也と二人のときは、手間を惜しむのを見たことがない。

ガリガリと豆を挽く音と、ブクブクとお湯が沸騰する音が小さく届く。

最も簡単なペーパードリップではあるが、旧式のコーヒーメーカーさえ使わないのは、何かの拘り有ってのことだろうか。

一度訊いてみたとき、そうしたいからです、という答えが返ってきたから、やはり趣味ということだろうか。それにしては、趣味なのか、と訊いたときには拗ねた顔で睨まれた憶えもあるが。

何にせよ、深雪の淹れるコーヒーが、達也の好みに一番合っていた。

「お兄様、どうぞ」

サイドテーブルにカップを置き、反対側に回って隣に腰を下ろす。

テーブルのコーヒーはブラック、手に持つカップの中身はミルク入りだ。

「美味い」

賞賛に多言は不要だった。

その一言で、深雪がニッコリと微笑む。

そして二口目を啜る兄の満足げな顔を窺い見て、安堵の表情を浮かべて自分のカップに口を付ける――それが深雪の常だった。
そのままコーヒーを嗜む二人。
どちらも、無理に会話を作り出そうとはしない。
相手が、自分の隣にいることが気にならない。
無言の状態が続いて間が悪い思いをする、という経験は、この二人の間では絶えて久しかった。

◇◆◇◆◇◆◇

目覚めは、いつもと同じだった。
彼が高校生になったからといって、地球の自転周期が変化するはずもない。
簡単に顔を洗い――後でもう一度、しっかりと洗顔することになるからだ――いつもの服に着替える。
ダイニングに下りると、既に深雪が朝食の準備を始めていた。
「おはよう、深雪。今朝は一段と早いな」
まだ空が白んだだけで、春の陽は顔を覗かせてもいない。
学校へは、当然早すぎる時刻だ。
「おはようございます、お兄様……どうぞ」
「ありがとう」
差し出されたコップにはフレッシュジュース。
律儀に礼を述べてから一息に飲み干し、差し出された手にコップを返す。
達也の呼吸は、深雪によって完全に掌握されていた。
「お兄様、今朝はわたしもご一緒させていただこうかと思っているのですが……」
そう言い終えると同時に、サンドイッチを詰めたバスケットを抱え上げて振り返る。どうやら、朝食を「作り始めた」ではなく、「作り終えかけていた」が正解だったらしい。

「それは構わないが……制服で行くのか？」
自分の着ているトレーナーと、エプロンの下から現れた制服を見比べながら達也が問う。
「先生にまだ、進学のご報告をしておりませんので……
それにわたしではもう、お兄様の鍛錬について行けませんから」
こんな早朝から制服に着替えていたのは、高校生姿を見せに行く為、という訳だ。
「分かった。別に朝練で深雪が俺と同じことをする必要はないんだが、そういうことなら師匠も喜ぶだろう。
……喜び過ぎで、たがが外れなきゃいいけどな」
「その時はお兄様、深雪を守ってくださいね」
可愛らしく片目をつぶる妹を前に、達也の顔には自然と笑みが浮かんでいた。

◇◆◇◆◇◆◇

まだ少し肌寒い、清々しい早朝の空気に長い髪とスカートの裾をなびかせて、ローラーブレードで坂道を滑り上る少女。
深雪は、一度もキックを入れずに、重力に逆らって緩やかだが長い坂道を疾走する。
その速度は、時速六十キロにも届かんとしている。
その隣を併走する達也。
こちらはジョギングスタイルだが、一歩一歩のストライドが十メートルにも達している。
ただ、深雪に比べて表情に余裕がない。
「少し、ペースを落としましょうか……？」
「いや、それではトレーニングにならない」
くるりと身体の向きを変え、後ろ向きに片足滑走しながら問う深雪に、疲労を滲ませながらも息を切らせることなく達也は答える。
二人とも、靴に何らかの動力を仕込んでいる訳ではない。

言うまでもなく、このスピードは魔法によるものだ。

移動と加速の単純な複合術式。

この場合、ローラーブレードを履いている深雪と自分の足で走っている達也の、どちらがより難度が高いかは、一概には言えない。

一見、ローラーによって運動量が軽減されている深雪の方が楽に見えるが、自分の足を使わないということは移動ベクトルを全面的に魔法で制御しているということだ。

それに対して達也は、走るという行為で魔法の方向性を決定づけている。

一歩ごとに術式を起動し続けなければならない達也と、一瞬も術式のコントロールを手放すことのできない深雪。

二人は性質の異なる訓練をそれぞれに課しているのだった。

1－（4）　師と、父と（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

1―（4）　師と、父と

二人の目的地は家から十分程の距離にある――あのスピードで、だが――小高い丘の上にあった。

一言で表現するなら「寺」だ。

だが、そこに集う者たちの面構えは「僧侶」や「和尚」、あるいは「（小）坊主」にさえ、到底見えない。

敢えて容れ物に相応しい存在を当てはめるとすれば、「修行者」、いや、「僧兵」の方が適当だろうか。

女性には敷居が高い、特に若い女の子は怯えて近づけないような雰囲気の中に、深雪はローラーブレードのまま躊躇なく入って行く。いつも礼儀正しい彼女には相応しからぬ作法だが、主が「構わない」と鬱陶しいくらい繰り返すので、いい加減馴れが出来てしまったのだ。

その時、達也は何をしていたのかというと、ペースについてこれなくなってまだ到着していない、のではなく、門人の手荒い出迎えを受けていた。

「深雪くん！　久し振りだねぇ」

人垣に埋もれてしまった兄を心配そうに振り返って見ていた深雪に、死角から唐突に陽気な声が掛けられた。

「先生……！　気配を消して忍び寄らないでくださいと、何度も申し上げておりますのに……」

なまじ感覚が鋭い為に、また同じような経験を繰り返して相応に警戒していただけ余計に、心臓に嫌なショックを受けて、無駄だと知りつつ深雪は抗議せずにおれなかった。

「忍び寄るな、とは、深雪くんも難しい注文を出してくれるんだねぇ。

僕は『忍び』だからね。忍び寄るのは性（さが）みたいなものだからねぇ」

きれいに髪を剃り上げ細身の身体に藍色の作務衣を着た姿はこの

場に相応しいものだが、実年齢はともかく見た目と雰囲気は、まだそれほど老いていない。

飄々としてはいるが名状し難い俗っぽさを滲ませており、僧侶の格好をしていても何処と言えず嘘くさかった。

「今時、忍者なんて職種はありません。そんな性は早急に矯正されることを望みます」

「チッチッチ、忍者なんて誤解だらけの俗物じゃなくて、僕は由緒正しい『忍び』だよ。

職業じゃなくて伝統なんだ」

「由緒正しいのは存じております。ですから不思議でならないのですけど。

何故、先生がそんなに……」

軽薄なのか、とは、あえて口にしない。口にしても無駄だということは学習済みだった。

この年齢不詳の僧侶もどき、九重八雲は、自称の通りの「忍び」だった。

より一般的な呼称は「忍術使い」。

本人が拘っていたとおり、身体的な技能が優れているだけの前近代の諜報員とは一線を画する、古い魔法を伝える者の一人だった。

魔法が科学の対象となり、世間からフィクションだと考えられていた魔法の実在が確認されたとき、忍術も単なる体術・中世的な技術の体系だけでなく、奥義とされる部分は魔法の一種であることが明らかになった。

虚構と思い込んでいた、思い込まされていた妖しげな「術」こそが、真実の姿に近かった訳だ。

無論、他の魔法体系と同じく、言い伝えがそのまま真実ということではない。

講談の中での忍術の代表格とも言える「変化」は、幻影と瞬間移動であることが解明されている。忍術だけでなく、古式魔法中、変身系統の魔法は全て、この種のトリックによるもので、変身、変化、

元素変換は現代魔法学では不可能とされている分野だ。
深雪が先生と呼び、達也が師匠と表現する九重八雲は、そんな忍術を昔ながらのノウハウで伝える古式魔法の伝承者だった。
しかし、僧形は別として、その佇まいも立ち居振る舞いも到底そのような由緒正しい存在には見えなくて――
「それが第一高校の制服かい？」
「はい、昨日が入学式でした」
「そうかそうか、う～ん、いいねぇ」
「……今日は、入学のご報告を、と存じまして……」
「真新しい制服が初々しくて、清楚な中にも隠しきれない色香があって」
「……」
「まるでまさに綻ばんとする花の蕾、萌え出ずる新緑の芽。そう……萌えだ、これは萌えだよ！　ムッ！？」
際限なくテンションをあげ、ソロソロと後退する深雪にジリジリと詰め寄っていた八雲が突然、身体を反転させつつ腰を落とし左手を頭上にかざした。
パシッ、という鈍い音をたてて、手刀が腕に防がれる。
「師匠、深雪が怯えてますんで、少し落ち着いてもらえませんか」
「……やるね、達也くん。僕の背中をとると、はっ」
左手で達也の右手を巻き込みながら右の突きを放つ八雲。
右手を八の字に振ることで極め技を逃れ、拳を包むように受けてそのまま脇に抱え込む。
逆らわず前転した八雲の足が達也の後頭部に襲い掛かり、それを達也は身体を捻ってかわした。
二人の間合いが離れる。
見物人から漏れる溜め息。
いつの間にか、対峙する二人を囲む人の輪が出来ていた。
再び交差する達也と八雲。
手に汗を握っているのは、深雪だけではなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

「先生、どうぞ。お兄様もいかがですか」
「おお、深雪くん、ありがとう」
「……少し、待ってくれ」
汗を垂らしながらもまだまだ表情に余裕の見られる八雲が深雪からタオルとコップを笑顔で受け取る一方で、土の上に大の字になった状態で荒い息を整えていた達也は、片手を上げて返事をした後、苦労して地面から上体を引き剥がした。
「お兄様、大丈夫ですか……？」
身体を起こしたものの、座り込んだままの達也の傍らに、心配そうな表情を浮かべた深雪はスカートが汚れるのも厭わずに膝をつき、手にしたタオルで流れ落ちる汗を拭う。
「いや、大丈夫だ」
八雲の生温かい視線を気にした訳でもなかったが、達也は深雪の手からタオルを引き取り、一息、気合いを入れて立ち上がった。
「すまない、スカートに土がついてしまったな」
「このくらい、なんでもありません」
笑顔で応え、深雪はスカートの裾を払う代わりに、内ポケットから細長い小型の携帯端末を取り出した。
カバーを外し、淀みなく短い番号を入力する。
魔法が、発動した。
深雪が手にしているのは、携帯端末形態の汎用型ＣＡＤ。最も普及しているブレスレット形態汎用型に対して、落下のリスクというデメリットはあるものの、慣れれば片手で操作可能というメリットがあり、両手が塞がることを嫌う現場肌の上級魔法師に好まれているタイプの物だ。
サイオンの光がＣＡＤからそれを持つ左手へ吸い込まれ、何処からともなく出現した実体の無い雲が、膝下丈のスカートから黒のレ

ギンスに包まれた脚、サンダルに履き替えた足の爪先までまとわりつく。
更に空中から湧き出した仄かな粒子が、達也の背中から全身を流れ落ちて行く。
薄く微かに輝く霧が晴れた後には、土埃一つ無い清潔な制服とトレーナーが二人の身体を包んでいた。
「お兄様、お食事にしませんか？　先生もよろしければご一緒に」
それが当たり前のことであるかのように、ごく普通の口調で、バスケットを軽く掲げて見せる深雪。
実際、この程度の魔法は妹にとって「何でもないこと」だと、達也は良く知っていた。

◇◆◇◆◇◆◇

縁側に腰を下ろし、サンドイッチを頬張る達也と八雲。
深雪は一切れ口にしただけで、お茶を差し出したりお皿に取り分けたりと甲斐甲斐しく達也の世話を焼いている。
その様子を微笑ましげに、但し何処か人の悪い表情で見ていた八雲が、別の弟子が差し出した手拭いで手と口の周りを清め、手を合わせて深雪に礼を述べてから、何やらしみじみとした口調で呟いた。
「もう、体術だけなら達也くんには敵わないかもしれないねぇ……」
それは紛れもない賞賛。
他の門人たちがこの場にいれば、彼らとは別に本堂で朝餉をとっていなければ、羨望の眼差しは避けられなかっただろう。現に、八雲の隣に控えた弟子は嫉妬と羨望の入り交じった視線を達也に向けている。
深雪は我がことのように顔を輝かせている。
だが、達也の心には、その単純な賞賛が素直に響かなかった。
「体術で互角なのにあれだけ一方的にボコボコにされるというのも喜べることではありませんが……」

「それは当然というものだよ、達也くん。僕は君の師匠で、さっきは僕の得意な土俵で組手をしていたんだから。

君はまだ十五歳。まだまだ半人前の君に後れをとるようでは、門人に逃げられてしまいそうだ」

「お兄様はもう少し素直になられた方がよろしいかと存じます。先生が珍しく褒めて下さったのですから、胸を張って高笑いしていらしたらいいのだと思います」

「……それはそれで、一寸嫌な奴に見えると思うが……」

八雲も、深雪も、笑顔で冗談めかしているが、自分をたしなめ、励ましてくれているのだということが分からないほど、達也も頑なではない。

苦笑いは、苦々しさのないただの苦笑に変わっていた。

◇◆◇◆◇◆◇

満員電車、という言葉は、今や死語となっている。

電車は依然として主要な公共交通機関だが、その形態はこの百年間で様変わりしていた。

何十人も収容できる大型車両は、全席指定の、一部の長距離高速輸送以外、使われていない。

キャビネットと呼ばれる、中央管制された二人乗り又は四人乗りのリニア式小型車両が現代の主流だ。

動力もエネルギーも軌道から供給されるので、車両のサイズは同じ定員の自走車の半分程度。

プラットホームに並ぶキャビネットに先頭から順次乗り込み、チケット、パスから行き先を読み取って運行軌道へ進む。

運行軌道は速度別に3本に分かれており、車両間隔を交通管制システムでコントロールしながら低速軌道から順次高速軌道へと移動し、目的地に接近すると今度は高速軌道から低速軌道へシフト、到着駅のプラットホームへ進入する仕組となっている。

高速道路で車線変更をしながら走行するようなものだが、管制頭脳の進歩により高密度の運行が可能となり、何十両も連結された大型車両を走らせるのと同じ輸送量が確保されている。

これが都市間の中・長距離路線になると、キャビネットを収納して走るトレーラーが４番目の高速軌道を走っており、乗客はキャビネットを降りて大型トレーラーの設備を利用し寛ぐことができるようになっているのだが、通勤・通学に使われることはほとんど無い。

昔の恋愛小説のように、電車の中で偶然の出会いが、等というシチュエーションは、現代の電車通学では起こりえない。

友達と待ち合わせるということもできなければ、痴漢の被害に遭う等ということもない。

社内に監視カメラ・マイクの類はない。

走行中に座席を離れることは出来ないようになっているし、席と席を隔てる緊急隔壁も装備されている。それ以上は、プライバシーが優先されるというのが社会的コンセンサスだからだ。

電車は、自家用車と同じくプライベートな空間になっていた。

一人ずつしか乗り込むことが出来ない防犯措置が施されているキャビネットは、二人乗りを一人で使うことも可能だが（四人乗りを二人以下で使うと追加料金が徴収される）、達也と深雪は当然、別々の車両を利用するようなことはなく、今日も隣り合せで通学電車に乗り込んだ。

「お兄様、実は……」

端末のスクリーンを展開してニュースに目を通していた達也は、躊躇いがちに話し掛けられて、急いで顔を上げた。

こういう歯切れの悪い口調は、この妹には珍しい。

何か良くない知らせなのだろうか。

「昨日の晩、あの人たちから電話がありまして……」

「あの人たち？　ああ……

それで、親父たちがまた何かお前を怒らせるようなことを？」

「いえ、特には……

あの人たちも、娘の入学祝いに話題を選ぶくらいの分別はあったようです。

それで……お兄様には、やはり……？」

「ああ、そういうことか……いつも通りだよ」

兄の言葉に、顔を曇らせて俯く、と、次の瞬間には歯軋りの聞こえてきそうな怒気が、表情を隠す長い髪の下から漂い出ていた。

「そうですか……いくら何でも、と儚い期待を抱いておりましたが、結局、お兄様にはメールの一本も無しですか……あの人たちは、あの……」

「落ち着けって」

声にならないほどの激情に震える深雪を、隣り合う手を少し強く握り達也は宥める。

突如室温が低下し規定温度を下回った車内に、季節外れの暖房が作動し、温風の吹き出す音が無言のキャビンを満たした。

「……申し訳ありません。取り乱してしまいました」

魔法力の暴走が収まっているのを確認して、達也は深雪の手を放す。

その際にポン、ポンと軽く手を叩き、拘りがないことを示す笑顔で深雪と視線を合わせる。

「仕事を手伝えという親父を無視して進学を決めたんだ。

祝いを寄越せるはずもない。

親父の性格はお前も知っているだろう？」

「自分の親がそんな大人げない性格だということからして、腹が立つんです。

そもそもあの人たちは、どれだけお兄様を利用すれば気が済むというのでしょうか。十五歳の少年が高校に進学するのは当たり前ではありませんか」

「義務教育ではないのだから、当たり前でもないさ。

親父も小百合さんも、俺のことを一人前と認めているから利用しようという気にもなるんだろ。

当てにされていたんだと思えば腹も立たんよ」

「……お兄様がそう仰るのであれば……」

不承不承、ではあったが、深雪が頷いたのを見て、達也は胸を撫で下ろした。

深雪は、達也が父親の研究所で何をさせられているのかを、正確には知らない。

彼が作業の片手間に作り上げたもので、まともな仕事を任せられていると誤解しているだけだ。

本当は、研究試料のリカバリー装置としての扱いしか受けていないと知ったら、本気で交通システムを麻痺させかねない。

そんな彼の危惧を他所に、通学電車は順調に低速レーンへ移行した。

1－（5）　クラスメイト（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

1－（5）　クラスメイト

１年Ｅ組の教室は、雑然とした雰囲気に包まれていた。
多分、他の教室も似たようなものだろう。
昨日の内に顔合わせを済ませた生徒も多いようで、既に教室のそこかしこで雑談の小集団が形成されていた。
とりあえず親しく挨拶する相手もいないことだし、まず自分の端末を探そうと、机に刻印された番号へ目をやっていた達也は、思いがけず名前を呼ばれて顔を上げた。
「オハヨ～」
「おはようございます」
声の主は相変わらず陽気な活力に満ちたエリカだった。その隣では、美月が控えめながら打ち解けた笑みを向けて来ている。
すっかり仲が良くなったようで、エリカは美月の机に浅く腰掛けるような格好でもたれ掛かって手を振っている。多分、彼を見つけるまでは二人でお喋りしていたのだろう。
達也は片手を上げて挨拶を返すと、二人の方へ足を進めた。
シバとシバタ、偶然というより五十音順という要因が働いたのだろうが、達也の席は、美月の隣だった。
「また隣だが、よろしくな」
「こちらこそ、よろしくお願いします」
「何だか仲間はずれ？」
「千葉を仲間はずれにするのはとても難しそうだ」
「……どういう意味かな」
「社交性に富んでいるって意味だよ」
「……司波くんって、実は性格悪いでしょ」
こらえ切れずに美月が笑いをこぼしているのを横目に、達也は端末にＩＤカードをセットし、インフォメーションのチェックを始めた。

履修規則、風紀規則、施設の利用規則から、入学に伴うイベント、自治活動の案内、一学期のカリキュラムまで、高速でスクロールしながら頭に叩き込み、受講登録を一気に打ち込んで一息入れる為に顔を上げると、前の席から目を丸くして手元を覗き込んでいる男子生徒と視線が合った。

「……別に見られても困りはしないが」

「あっ？　ああ、すまん。

珍しいもんで、つい見入っちまった」

「珍しいか？」

「珍しいと思うぜ？　今時キーボードオンリーで入力するヤツなんて、見るのは初めてだ」

「慣れればこっちの方が速いんだがな。視線ポインタも脳波アシストも、いまいち正確性に欠ける」

「それよ。すげースピードだよな。それで十分食ってけるんじゃないか？」

「……アルバイトが精々だろう」

「そぉかぁ……？

おっと、自己紹介がまだだったな。

西城レオンハルトだ。親父がハーフ、お袋がクォーターな所為で、外見は純日本風だが名前は洋風、得意な術式は収束系の硬化魔法だ。

レオでいいぜ」

「司波達也だ。俺のことも達也でいいぞ」

「ＯＫ、達也。

それで、得意魔法は何よ？」

「実技は苦手でな、魔工技師を目指している」

「なーる……頭良さそうだもんな、お前」

「え、なになに？　司波くん、魔工師志望なの？」

魔工技師、あるいは魔工師は、魔法工学技師の略称で、魔法を補助・増幅・強化する機器を製造・開発・調整する技術者を指す。今や魔法師の必須ツールであるＣＡＤも、魔工技師による調整抜きで

は埃をかぶった魔法書以下だ。
　社会的な評価は魔法師より一段落ちるが、業界内では並みの魔法師より需要が高い。一流の魔工師の収入は、一流の魔法師を凌ぐほどだ。
　そういう訳だから、実技が苦手な魔法科生が魔工師を目指すのは珍しいことではないのだが……
「達也、コイツ、誰？」
　まるでスクープを耳にしたようにハイテンションで首を突っ込んできたエリカを、やや引き気味に指差してレオは訊ねた。
「うわっ、いきなりコイツ呼ばわり？　しかも指差し？　失礼なヤツ、失礼なヤツ！、失礼なヤツ！！　モテない男はこれだから」
「なっ！？　失礼なのはテメーだろうがよ！　少しくらいツラが良いからって、調子こいてんじゃねーぞ！」
「ルックスは大事なのよ？　だらしなさとワイルドを取り違えているむさ男には分からないかもしれないけど♪
　それにな～に、その時代を一世紀間違えたみたいなスラングは。今時そんなの流行らないわよ～」
「なっ、なっ、なっ……」
　取り澄ました嘲笑を浮かべて斜に見下ろすエリカと、絶句が今にも唸り声へと移行しそうなレオ。
「……エリカちゃん、もう止めて。少し言い過ぎよ」
「レオも、もう止めとけ。今のはお互い様だし、口じゃ敵わないと思うぞ」
　一触即発の空気に、達也と美月がそれぞれ仲裁に入る。
「……美月がそう言うなら」
「……分かったぜ」
　お互い、顔は背けながら目は逸らさない。
　同じような気の強さ、似たような負けず嫌いに、実はこの二人、気が合うのかも知れんな、と達也は思った。

予鈴が鳴り、思い思いの場所に散らばっていた生徒たちが自分の席に戻る。

この辺りのシステムは、前世紀から変わっていないが、そこから先は趣が違う。

電源の入っていなかった端末が自動的に立ち上がり、既に起動していた端末には新しいウィンドウが開く。同時に、教室前面のスクリーンにメッセージが映し出される。

「――五分後にオリエンテーションを始めますので、自席で待機して下さい。ＩＤカードを端末にセットしていない生徒は、速やかにセットして下さい――」

達也にとっては全く意味のないメッセージだった。既に選択授業の登録まで終えてしまった達也には、過剰な視覚効果が盛り込まれたオンラインガイダンスなど退屈なだけの代物だ。一気にスキップして学内資料でも検索していようか、等と考えていたところで、予想外の事態が起こった。

本鈴と共に、前側のドアが開いたのだ。

遅刻した生徒ではない。制服ではなく、スーツを着た若い女性だ。

意外感に打たれたのは達也だけではなかったようで、教室に戸惑いが充満する。

誰が見ても、と言うほどではないにしろ、それなりに美人、そしてそれ以上に愛嬌の感じられるその女性は、せり上がってきた教卓の前に立つと、小脇に抱えていた大型携帯端末を卓上に置いて教室を見回した。

「はい、欠席者はいないようですね。

それでは皆さん、入学、おめでとうございます」

つられてお辞儀を返している生徒が何人もいた――現に、知り合ったばかりの前の席の男子生徒は「あっ、どうも」なんて素で答えながら頭を下げている――が、達也はその女性の妙な振る舞いに首を捻るだけだった。

まず、出席を確認するのに、肉眼で見回す必要はない。着席状況

は端末にセットされたＩＤカードにより、リアルタイムでモニターされている。

学校関係者があんなサイズの端末を持ち歩く必要もない。学内にはあちらこちらにコンソールが収納されている。現に今、床からせり上がって来た教卓にも、モニター付のコンソールが内蔵されているはずだ。

それに、そもそも、彼女は何なのだろうか？　この学校で、担任教師などという時代遅れのシステムを採用しているという情報は、入学案内にはなかったはずだが――

「はじめまして。私はこの学校で総合カウンセラーを務めている小野遥です。皆さんの相談相手となり、適切な専門分野のカウンセラーが必要な場合はそれを紹介するのが私たち総合カウンセラーの役目になります」

（……そういえば、いたな、そういうのが……）

悩み事を誰かに相談する、というアイデアがすっぽり欠如している達也は適当に読み飛ばしていたが、カウンセリング体制が充実しているというのもこの学校のセールスポイントだった。

「総合カウンセラーは合計十六名在任しています。男女各一名でペアになり、各学年一クラスを担当します。

このクラスは私と柳沢先生が担当します」

そこで言葉を切って、教卓のコンソールを操作すると、三十代半ばに見える男性の上半身が、教室前のスクリーンと各机のディスプレイに映し出された。

『はじめまして、カウンセラーの柳沢です。小野先生と共に、君たちの担当をさせて頂くことになりました。どうかよろしく』

「カウンセリングはこのように端末を通してもできますし、直接相談に来ていただいても構いません。通信には量子暗号を使用し、カウンセリング結果はスタンドアロンのデータバンクに保管されますので、皆さんのプライバシーが漏洩することはありません」

そう言いながら、達也が大型携帯端末と勘違いしていたブック型

データバンクを持ち上げて見せる。
「本校は皆さんが充実した学生生活を送ることができるよう、全力でサポートします。
……という訳で、皆さん、よろしくお願いしますね」
それまでの生真面目な口調が、一転して砕けた、柔らかなものになる。
教室内に、脱力した空気が漂った。
緊張と弛緩、自分の容姿まで計算に入れた中々見事なエモーションコントロールだ。
若さに――大学出たてのような外見に似合わぬ、場数を感じさせる。
一対一でこれをやられたら、喋るつもりのないことまで喋ってしまうかも知れない。
カウンセラーにとって重要な資質なのだろうが、女スパイとしても十分やっていけそうだ。
油断ならない人だ、と達也は思った。
「これから皆さんの端末に本校のカリキュラムと施設に関するガイダンスを流します。その後、選択科目の履修登録を行って、オリエンテーションは終了です。分からないことがあれば、コールボタンを押して下さい。カリキュラム案内、施設案内を確認済みの人は、ガイダンスをスキップして履修登録に進んでもらっても構いませんよ」
教卓のモニターに目を落とした遥は、あらっ?、という表情を見せた。
「……既に履修登録を終了した人は、退室しても構いません。但し、ガイダンス開始後の退室は認められませんので、希望者は今の内に退室して下さい。その際、ＩＤカードを忘れないで下さいね」
その言葉を待っていたかのように、ガタッ、と椅子が鳴った。
達也、ではなかった。
立ち上がったのは、窓側前列、少し離れた席の、神経質そうな顔

立ちの細身の少年だった。
教卓に向かってその場で一礼し、教室の後ろに回って廊下へ出て行く。
顔を上げ、左右から窺い見られる視線を全く顧みず、傲然たる態で教室を出て行く姿が強がっているように見えて、少し興味を引かれたが、それも一瞬のこと。
手元に目を戻し、さて、何を調べようか、とキーボード上で手を止めた達也は、ふと、視線を感じて顔を上げた。
教卓の向こう側から、遥が彼を見ていた。
視線が合っても彼女は目を逸らそうとせず、達也に向かってニッコリ微笑んだ。

◇◆◇◆◇◆◇

（何だったんだろうな、あれは……）
あの後も気づいてみれば、彼女が笑い掛けて来ていた。ずっと、という訳ではなく、他の生徒に不審を抱かれない程度に短く、控え目に、だが、それが余計に秘密めかした雰囲気を醸し出していた。
初対面だとは、断言できる。
明らかに愛想笑いを超えた頻度だったので、達也は自分の記憶をひっくり返してみたのだ。
おかげで、暇つぶしにはなったが……
（リラックスさせようとしていた……わけではないよな？　あれじゃかえって落ち着きを奪うようなもんだし……
まさか教室で、教職ではないにしろ学校関係者が、生徒をナンパしようとしていた訳でもないだろうし……）
考えられる線としては、出て行った生徒と同じように登録を終えていたにも拘らず、席に残った達也に興味を抱いた、ということだろう。しかし、それにしては随分親しげ――良く言えば――だったような気がする。

「達也、昼までどうする？」
一人で頭を捻っていたところに、前の席から声を掛けられた。
まるでそれがお決まりのポーズであるかのように、椅子をまたぎ背もたれに両腕を重ねその上に顎を載せる、さっきと全く同じ体勢でレオが達也へと顔を向けていた。
教室で食事をする、という習慣は、今の中学・高校にはない。耐水・耐塵性が向上したとはいえ、情報端末は精密機器だ。うっかり汁物でもこぼそうものなら、結構悲惨な羽目に陥らないとも限らない。
食堂へ行くか、中庭とか屋上とか部室とか、何処か適当な場所を見つけるか。
そして食堂が開くまで、まだ一時間以上ある。
「ここで資料の目録を眺めているつもりだったんだが……ＯＫ、付き合うよ」
実に分かり易いレオの表情に、達也は苦笑して頷いた。
「それで、何を見に行くんだ？」
本格的な魔法科教育は高校課程からであり、魔法科高校中、最難関校に数えられているとはいえ、普通中学からの進学生も多い。専門課程には、そんな生徒たちが見たこともないような授業もある。
魔法課程に馴染みの薄い新入生の戸惑いを少しでも緩和する為に、実際に行われている授業を見学する時間が今日・明日と設けられていた。
「工房に行ってみねえ？」
「闘技場じゃないのか？」
意表をつかれて問い返すと、レオはニンマリ笑った。
「やっぱ、そういう風に見えるのかね。
まあ、間違いじゃねえけどよ」
この学校に合格したのだから知的能力の水準が低いはずはないのだが、どうもこの少年は活気が溢れているというかアウトドア派というか、有態に言ってヤンチャな雰囲気がある。工房で精密機械を

いじっているよりは、闘技場で暴れている方が似合っている、と感じてしまうのは、達也ばかりではないだろう。

「硬化魔法は武器術との組み合わせで最大の効果を発揮するもんだからな。

自分で使う武器の手入れくらい、自分で出来るようになっときたいんだよ」

「なるほど……」

レオの希望進路は警察官、それも機動隊員だという。希望通りとなれば、警棒や楯、手斧、山刀のようなシンプルな武器を使う機会も多い。それらは硬化魔法と相性の良い道具であり、また硬化魔法は素材の性質を熟知しているかどうかで効き目が随分違ってくる。

見た目より遥かに、自分の適性、自分の進路についてしっかりした考え方を持っているようだ。

「工作室の見学でしたら一緒に行きませんか？」

「柴田も工房の？」

「ええ……私も魔工師志望ですから」

「あっ、分かる気がする」

「オメーはどう見ても肉体労働派だろ。闘技場へ行けよ」

「あんたに言われたくないわよこの野性動物」

「なんだとこら。息継ぎも無しで断言しやがったな!?」

「二人とも止めろよ……会ったその日だぞ？」

溜め息混じりに達也が仲裁に入ったが、そう簡単には止まらない。

「へっ、きっと前世からの仇敵同士なんだろうさ」

「あんたが畑を荒らす熊かなんかで、あたしがそれを退治するために雇われたハンターだったのね」

「さあ、行きましょう！　時間が無くなっちゃいますよ」

埒が開かないと見た美月は強引に軌道修正を図った。

「そうだな！　早くしないと、教室に残ってるのも俺たちだけになっちまう」

すかさず、達也が便乗する。早口でまくし立てる二人に遮られ、

レオとエリカは不機嫌そうな眼差しで睨み合って、すぐに、互いに、そっぽを向いた。

1－（6）　名家の雑草（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

1－（6）　名家の雑草

工房、工作室という語感に反して、工学実習室は小規模な工場といった趣の建物だった。
「工房と言うより実験棟だな、これは……」
「すごいですね……」
思わず呟いた達也の隣では、美月が目を丸くして辺りをキョロキョロ見回していた。
レオとエリカもさっきまでの反目を忘れて、仲良く絶句している。
四人の反応も無理のないものだった。
これだけの規模と設備の整った魔法工学の実験施設は、大学にも、そうはない。
最先鋭の国策教育機関の面目躍如といったところか。
「思ったより見学者が少ないな」
見学用の通路に上がり、施設の充実振りに比して見に来ている一年生が予想外に少ないことが分かった。
出遅れたこともあり、もしかしたら定員オーバーで入れないかもしれないと思っていた達也が、何気なく口にした疑問に、レオが皮肉っぽい口調で応えた。
「あいつらの所為じゃねえか？」
顎をしゃくった先には、教師に率いられた新入生の小集団。
「へぇ……ブルームには先生がつくんだ」
エリカの声には皮肉やひがみの色はない。その代わり、大袈裟だなぁ、と感じているのを隠そうともしていない。
「聞こえるわよ」
「大丈夫よ。プラズマ加工機の音も聞こえないくらい遮音性が高いんだから、授業の邪魔にはならないって」
「そうじゃなくって！」
小声でたしなめる美月の顔を、本当に分かっていないかのような

キョトンとした表情で見返すエリカ。
それが演技かどうか、達也には判らない。
だが、他に、分かることもある。
「全員に引率がつくという訳でもないだろう。それにしては人数が少ない。
第一科は魔法師志望が多いらしいからな。魔工師志望の一科生は大事にされるんじゃないか」
「フ～ン……」
達也の推論に納得したのか、興味を無くした表情で目線を外し、実験機器の見学に戻る。自動で動いている鍛造用ハンマーに見入っているレオとは対照的に、右を見て左を見て、右に動いて左に走ってと、アクティブに――良く言えば――工房を見て回っていたエリカは、知り合いを見つけたのか、急に、高く、右手を上げた。
「おーい、ミキ～！」
「エリカちゃん！」
流石に今の行動は顰蹙モノだと自覚したのか、小さく首をすくめたエリカは、自分が手を振った方へ小走りに駆け寄った。
足音が全くしないことに感心しながら、達也は後を追いかける。
一拍遅れで美月がついてきたのは、まあ、当然としても、レオまで追いかけてきたのは、さて、どういうことだろうか。
しかし、それを考えるのはまた別の機会だ。
「こら、ミキ。何で無視するのよ」
達也がエリカを追いかけて来たのは、彼女が何やらトラブルを起こしかけているように見えたからだ。
（やはり「彼」だよな？）
ミキ、という語感に反して、エリカが話し掛けている相手は男子生徒だった。それも、オリエンテーションのときに一人、先に退室したあの生徒だ。
「フ～ン、ミキってば、久し振りに会った昔馴染みにそういう態度を取るわけ。

それならあたしにも……」

彼が駆けつけるまで、二言、三言しか言葉を交わす、あるいは掛ける時間は無かったはずなのに、いつの間にか脅迫じみた台詞になってしまっている。

もしかして彼女は、根っからのトラブルメーカー気質なのだろうか。

達也がそんなことを思い浮かべた、その時。

「何度も言っただろう！　ミキなんて女みたいな名前で呼ぶな！」

相手の男子生徒の、忍耐が切れた。

「僕の名前は幹比古だ！」

「知ってるわよ。だからミキって呼んでるんじゃない」

「何が『だから』なんだよ！」

「ミキヒコだから、縮めてミキ」

そんなことも分からないの、という字幕が、エリカの傍らにありありと見えた。

「それとも、ヒコの方が良かった？」

「何でそうなる！　人の名前を勝手に縮めるな！」

「ミキヒコと呼べ、って？

ウ～ン……ミキヒコミキヒコミキヒコ……やっぱ、言い難いからヤダ」

理不尽だ、と感じたのは、一人ではあるまい。

「それに、何だか恥ずかしくない？」

「何処がだよ！？」

「ミキヒコクン……」

突如、甘い声音で囁かれて、その男子生徒は目に見えて動揺した。

「……誰よ、アレ？」

そう呼ばれた本人だけでなく、レオまで動揺していた。

「どう？」

ニンマリと笑うエリカから、微妙に目を逸らしながらも、男子生徒は強気な態度を崩さなかった。

「だ、だったら」
「あっ、噛んだ……」
ぼそり、と美月が呟いた。
実は結構容赦のない性格なのかもしれない。
幸い、美月の声が耳に入るほど、本人には余裕が無かったようだが。
「苗字で呼べばいいだろ！」
「えっ？　だって、ミキって苗字で呼ばれるの嫌がってたじゃない」
（マズイ！）
男子生徒の雰囲気が変わった。
顔は赤いまま、頭に血が上り、落ち着きは失せている。
しかし今までの怒気には、羞恥心が根底にあった。
だがそこに、憎悪に似た暗い情念が混じり込んだように、達也は感じた。
止めさせなければならない。
何か、別の話題を――
「じゃあよ、ミッキーってのはどうだ？」
達也が切り出すより早く、二人の会話に割り込んだのはレオだった。
「これなら男の名前だぜ」
「……」
「ミッキーねえ……まあ、いいかな」
「何でそんなに偉そうなんだよ……」
「気のせいよ」
「百パーセント！　客観的な！　事実だろうが！」
「やーねぇ、思い込みの激しいお子ちゃまは」
「てめえこのあまいいかげんにしやがれしまいにはおかすぞこら」
矛先（？）がレオへと向いたことで、平常心を取り戻したようだ。
息の合った漫才（？）を冷めた目で眺めていた男子生徒は、一言も残さず、背中を向けて立ち去った。

「……俺たちも行こうか」
尚も掛け合いを続ける二人の間に割って入り、達也が退出を促す。
美月はすぐさま頷いたが、レオとエリカは不満そうだ。
「もう行くのか？」
「まだ時間は残ってるよ？」
達也は無言で通路の反対側へ目を向けた。
二人もつられて振り返る。
そこでは、ブルームを引率している教師が、苦い顔でこちらを睨んでいた。
首をすくめたエリカとレオは、こそこそと達也の後に続いた。

◇◆◇◆◇◆◇

「やれやれ、バカ女の所為で追い出されちまったぜ」
食堂へ向かう並木道。
「調子に乗りすぎてたみたい。一応授業中なんだから、あんなに騒いじゃダメだよね。反省」
まだ授業時間は残っているが、別の実習を見学するには中途半端な時間だったので、四人は早目のランチに決めたのだった。
「わ、分かりゃいいんだよ」
「迷惑掛けてゴメンね、司波くん」
「達也だけかよ！？」
「美月も、ゴメン」
「……ううん、気にしなくていいよ」
「……」
「……何見てるの？　視姦も犯罪なのよ？　知らないの？」
「うがーっ」
いいように遊ばれているレオを、まっ、楽しそうだからいいか、と放置して、達也は躊躇いながら先の一幕について訊ねようとした。
「エリカちゃん……さっきの人、知り合い？」

が、美月に先を越された。
「うん、いわゆる、幼馴染み」
あっけらかんとした口調で答えるエリカ。今日は良く機先を制せられる日だ、と思いつつ、今回は気まずい思いをせずにすんで寧ろ有難かったので、達也はこのまま聞き役に回ることにした。
「フルネームは吉田幹比古。
家同士に昔から交流があってね。
中学は別だったんだけど、小学校に上がる前からの付き合いよ。
と言っても、そんなに仲良くは無かったんだけどね。アイツ、人間嫌いというか、他人が苦手だから」
「それにしては……随分、気が置けない間柄に見えたけど……」
「それはあたしが強引に行ってるからよ。
そうじゃなきゃアイツ、口も利かないんだから」
「強引なのは地だろ」
「だまれ」
パコン、と中々良い音がした。
笑顔のまま、目にも留まらぬスピードで振り下ろされたエリカの右手には、いつの間にか丸めたノート。
頭を抑えて座り込むレオを置き去りにして、女性陣はさっさと進んでいる。
「ドツキ漫才か？」
「んな訳ねーだろっ！」
ガァッ、と吼えて立ち上がったレオに肩をすくめて、達也は二人を追いかけた。
「じゃあ、三年ぶりの再会ってこと？」
「ううん、学校は別だったけど、親の付き合いもあるし、全く会わなくなった訳じゃないから。
それでも一年ぶりくらいかな……しばらく見ないうちに、ますます取っ付き難くなっちゃって」
「エリカちゃん？」

「分かる気もするんだけどね……アイツさ、喚起魔法なら跡取りであるお兄さん以上って言われてた、世間的に言う天才児だったのよ。
でも、去年の儀式中、事故に遭ってね……ホントなら、あたしと違って、ブルームとして入学しているはずだったんだけど」
（喚起魔法？　儀式？）
いくつかの単語が頭の中で組み合わさって、達也はつい、口を挟んでしまった。
「吉田って、あの、神霊魔法の吉田家か？」
「……司波くんって、ホント、鋭いし、何でも知ってるよね」
「うっ……ごめん」
気づかなくてもいいのに、と目で非難され、抗いようも無く、頭を下げる。
「神霊魔法って、ＳＢ（Ｓｐｉｒｉｔｕａｌ　Ｂｅｉｎｇ）を使役する系統外魔法のことだよな？」
「吉田家といえば、ＳＢ魔法の分野では日本屈指の名門でしたよね」
だが、空気を読めなかったのは、達也だけではなかったようだ。
「いいわよ、もう……その分じゃ他にも気づいたみたいだけど、そっちは言わないでね？
隠してる訳じゃないんだけど、打ち明けるときは自分の口で言いたいから」
「じゃあ……いや、了解」
「何のこと？」
「ヒ・ミ・ツ」
「うわっ、似合ってねえ」
「だまりなさい」
再び蹲る羽目になったレオの横を通り過ぎながら、美月をあしらうエリカの背中を見ながら、達也は飲み込んだ言葉を頭の中で繰り返した。
（彼女は、やはりあの「千葉」なのか？）
剣の魔法師、千葉家。

軍や警察の制服組、特にその第一線を務める実働部門に大きな影響力を有する、対人戦闘魔法の名家。
現代魔法の名門、「百家」の一つ。
しかしそれにしては、随分と普通な女の子だ。
魔法の腕は、まだ見たことがないから分からない。
だがエリカのざっくばらんな性格と、伝え聞くかの一族の偏執的な武への拘りは、まるで結び付かない。
もしエリカがあの千葉家の出身だとすれば、彼らに対する認識を改めなければならないのだろう。
百聞は一見にしかず、か。
（……いや……）
そこまで考えて、達也は思い直した。
何を以て自分は「普通」と判断しているのか。
何が普通であり何が普通でないのかなど、この自分に決められるはずがないではないか……

1－（7）　衝突（トラブル）（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

1－（7）　衝突（トラブル）

入学二日目にして早くも行動を共にするメンバーが固まりつつあった。

これを迅速と表現すべきか、拙速と表現すべきか、それとも当たり前のことなのか、達也には分からない。

ただ、アタリかハズレかでいうならば、十中八九アタリだろう、と彼は思う。

エリカもレオも明るく前向きで、美月も内気ながら屈託のない性格に見える。

自分が沈み込みがちな性向と自覚しているだけに、高校生活最初の友人が彼女たちだったのは運が良かった、と達也は思っている。

しかし、十中八九は百パーセントではない。

残り十～二十パーセント。

卑屈にならないのはとても良いことだが、こういうのはどうにかならないものだろうか。

「お兄様……」

「謝ったりするなよ、深雪。一厘一毛たりとも、お前の所為じゃないんだから」

「はい、しかし……止めますか？」

「……逆効果だろうなぁ」

「……そうですね。それにしても、エリカはともかく、美月があんな性格とは……予想外でした」

「……同感だ」

一歩引いた所から見守る――あるいは、眺める――兄妹の視線の先には、一触即発で睨みあう新入生の一団がいた。その片方は深雪のクラスメイト、もう一方の構成メンバーは、言うまでもなく、美月、エリカ、レオだった。

◇◆◇◆◇◆◇

第一幕は、昼食時の食堂だった。

第一高校の食堂は高校の学食としてはかなり広い方になるが、新入生が勝手知らずという事情から、この時期は例年混雑する。

しかし、授業を半分エスケープするような形で食堂に来た達也たち四人は、それほど苦労することもなく四人がけのテーブルを確保した。

四人がけと言っても長椅子の対面式で、細身の女子生徒なら片側に三人は座れる。

半分ほど食べ終わった頃（レオはもう食べ終えていた）、クラスメイトを引き連れた深雪が達也を見つけてやって来た。

そこで一悶着。

達也と一緒に食べようとする深雪。

座れるのは彼女一人。

深雪のクラスメイト、特に男子生徒は、当然、彼女と相席を狙っていた。

最初は狭いとか邪魔しちゃ悪いとかそれなりにオブラートに包んだ表現だったが、深雪の執着が意外に強いと見るや、相応しくないだのけじめだの、果ては食べ終わっていたレオに席を空けろと言い出す者まで出る始末。

達也は急いで食べ終えると、そろそろ爆発しかけていたレオに声を掛けて席を立った。

深雪は美月たちに目で謝罪して、達也と逆方向へ歩み去った。

第二幕は実習見学中の出来事だった。

通称「射撃場」と呼ばれる遠隔魔法用実習室では、３年Ａ組の実技が行われていた。

生徒会長、七草真由美の所属するクラスだ。

生徒会は必ずしも成績で選ばれるものではないが、今期の生徒会

長は遠隔精密魔法の分野で十年に一人の英才と呼ばれ、それを裏付けるように数多くのトロフィーを第一高校にもたらしていた。

その噂は、新入生も耳にしている。

そして噂以上にコケティッシュだった容姿も、入学式で見ている。

彼女の実技を見ようと、大勢の新入生が射撃場に詰め掛けたが、見学できる人数は限られている。こうなると、一科生に遠慮してしまう二科生が多い中で、達也たちは堂々と最前列に陣取ったのだった。

当然のように、悪目立ちした。

そして第三幕は、今まさに進行中だった。

「いい加減に諦めたらどうなんですか？　深雪さんは、お兄さんと一緒に帰ると言っているんです。他人が口を挟むことじゃないでしょう」

つまり、深雪を待っていた達也に、深雪にくっついて来たクラスメイトが難癖を付けたというのが発端だ。ちなみにそのクラスメイトは女子。流石にそこまで度胸のある男子生徒はいなかったようだが、すでにそんな遠慮、あるいは良識はこの場から立ち去っていた。

「別に深雪さんはあなたたちを邪魔者扱いなんてしていないじゃないですか。一緒に帰りたかったら、ついてくればいいんです。何の権利があって二人の仲を引き裂こうとするんですか」

理不尽な言いぐさに、意外なことに、最初に美月が切れた。

丁寧な物腰ながら、容赦なく正論を叩きつける。

そう、最初は正論だった、はずなのだが……

「引き裂くとか言われてもなぁ……」

「み、美月は何を勘違いしているのでしょうね？」

「……深雪……何故お前が焦る？」

「えっ？　いえ、焦ってなどおりませんよ？」

「……そして何故に疑問形？」

渦中の兄妹もいい塩梅に混乱し始めているのを横目に、思いやり

に溢れた（？）友人たちはますますヒートアップしていた。
「僕たちは彼女に相談することがあるんだ！」
「そうよ！　司波さんには悪いけど、少し時間を貸してもらうだけなんだから！」
「はん！　そういうのは自活（自治活動）中にやれよ。ちゃんと時間が取ってあるだろうが」
「相談だったら予め本人の同意をとってからにしたら？
深雪の意思を無視して相談も何もあったもんじゃないの。それがルールなの。高校生にもなって、そんなことも知らないの？」
「うるさい！　他のクラス、ましてやウィードごときが僕たちブルームに口出しするな！」
「同じ新入生じゃないですか。あなたたちブルームが、今の時点で一体どれだけ優れているというんですか？」
決して大声を張り上げていた訳ではなかったが、美月の声は、不思議と校庭に響いた。
「……あらら」
まずいことになった、と達也は思った。
「……どれだけ優れているか、知りたいなら教えてやるぞ」
美月の台詞は、ある意味でこの学校のシステムを否定するものだ。
「ハッ、おもしれえ！　是非とも教えてもらおうじゃねぇか」
道理は美月にある。
それが分かっているからこそ、今のシステムに安住する者は、生徒、教師の区別なく、感情的に反発する。
ここで明確なルール違反があったとしても、それが美月たちの側のものでなければ、見て見ぬふりをするだろう。
たとえそれが、学内のルールに留まらずとも――
「だったら教えてやる！」
学校内でＣＡＤの携行が認められている生徒は生徒会の役員と一部の委員のみ。
学外における魔法の使用は、法令で細かく規制されている。

だが、ＣＡＤの所持が制限されている訳ではない。
意味が無いからだ。
ＣＡＤは今や魔法師の必須ツールだが、魔法の行使に必要不可欠、ではない。
ＣＡＤが無くても、魔法は使える。
故に、ＣＡＤを所持している生徒は、授業開始前に事務室へ預け、下校時に返却を受ける、という手続きになっている。
またそれ故に、下校途中である生徒がＣＡＤを持っているのは、別におかしなことではない。
「特化型デバイス！？」
だがそれが、同じ生徒に向けられるとなれば、異常な事態、いや、非常事態だ。
特にそれが、攻撃力の高い特化型なら尚のこと。
見物人の悲鳴をＢＧＭに、小型拳銃を模したＣＡＤの「銃口」がレオに突きつけられる。
その生徒は口先だけではなかった。
ＣＡＤを抜き出す手際、照準を定めるスピード、それは明らかに魔法師同士の戦闘に慣れている者の動きだった。
魔法は才能に負う部分が大きい。
それは同時に、血筋に依存するところ大であるということ。
優秀な成績でこの学校に入学した生徒であれば、入学したばかりであっても、親の、家業の、親戚の手伝いといった形で実戦経験のある者も決して少なくはない。
「お兄様！」
深雪の言葉が終わらぬ内に、達也は右手を突き出していた。
手を伸ばしても届かぬ距離。
それは思考の埒外に生じた反射的な所作なのか。
それが何であったにせよ、この場では、何の結果も生まなかった。
何故ならば――
「ヒッ！」

悲鳴を上げたのは、銃口を突きつけていた少年の方。
ＣＡＤは、彼の手から弾きとばされていた。
そしてその眼前では、伸縮警棒を振り抜いた姿勢でエリカが笑みを浮かべていた。
「この間合いなら身体を動かした方が速いのよね」
「それは同感だがテメエ今、俺の手ごとブッ叩くつもりだっただろ」
残心を解いて得意げに説くエリカに答えたのは、ＣＡＤを掴みかけた手を危ういタイミングで引いたレオだった。
「あ～らそんなことしないわよぉ」
「わざとらしく笑ってごまかすんじゃねぇ！」
警棒を持つ手の甲を口元に当てて「オホホホホ」などと、ごまかす気があるのかどうかも定かでないごまかし笑いを振りまくエリカに、レオの堪忍袋は結構ギリギリだった。
「本当よ。かわせるか、かわせないかくらい、身のこなしを見てれば分かるわ。
アンタってバカそうに見えるけど、腕の方は確かそうだもの」
「……バカにしてるだろ？　テメエ、俺のこと頭からバカにしてるだろ？」
「だからバカそうに見える、って言ってるじゃない」
今や目の前の「敵」を忘れて、差し向かいでギャアギャアと漫才を繰り広げている二人に、誰もが呆気にとられていたが、いち早く我を取り戻したのは彼らと向かい合っていた深雪のクラスメイトの方だった。
特化型デバイスを叩き落とされた生徒の背後で、女子生徒が腕輪形状の汎用型ＣＡＤへ指を走らせた。
組み込まれたシステムが作動し、起動式の展開が始まる。
式の展開が完了後、展開された起動式を無意識領域内にある魔法演算領域に読み込み、座標、出力、持続時間等の変数に目的とする数値を入力、起動式に記述された手順のとおりにサイオン情報体（魔法式、術式ともいう）を組み立てる。

起動式とは魔法の設計図であり、魔法を構築するためのプログラムだ。

人の内部世界である演算領域内で組み立てられたサイオン情報体を、無意識領域の最上層にして意識領域の最下層たる「ルート」に転送、意識と無意識の狭間に存在する「ゲート」から、外部世界へ投射することにより、魔法式が投射対象の情報体――これを現代魔法学では、ギリシャ哲学の用語を流用して「エイドス」と呼んでいる――に干渉し、対象の情報が一時的に書き換わる。

現象には情報が伴う。

情報が書き換われば、現象が書き換わる。

サイオン情報体に記述された現象が、現実世界に顕現する。

これがＣＡＤを用いた魔法のシステムだ。

サイオン情報体を構築する速さが魔法の処理能力であり、構築できる情報体の規模が魔法のキャパシティであり、魔法式がエイドスを書き換える強さが干渉力、この三つを総合して魔法力と呼ばれる。

一方、起動式を展開するスピード、展開できる情報量はＣＡＤのハードとしての性能、どれだけ精妙で有効な起動式を展開できるかはＣＡＤに組み込まれたソフトの性能に依存する。

性能の劣ったＣＡＤでも、起動式を簡略化して魔法演算領域内の処理を増やすことで発動速度を上げることはできるが、それは上級者の場合であり、一般的には、ＣＡＤの処理能力が魔法発動速度の一次的な制約条件となる。

起動式も一種のサイオン情報体だ。

使用者から注入されたサイオン粒子を、信号化して使用者に返す。

大まかに言えば、これがＣＡＤのシステム。

特化型が銃の形をしていることが多いのは、起動式展開の時点で座標情報を埋め込み、使用者の演算負担を軽減する為で、銃口からサイオン波が放出されている訳ではない。

魔法師からＣＡＤへ、そしてＣＡＤから魔法師へ。

このサイオンの流れを妨害されると、ＣＡＤを用いた魔法は機能

しなくなる。
例えばサイオン粒子を、展開中あるいは読み込み中の起動式に撃ち込むことで、起動式を形成するサイオンのパターンを攪乱されると、効力のある魔法式が構築されず、魔法は未発のまま霧散する。
今のように。
「止めなさい！　自衛目的以外の魔法による対人攻撃は、校則違反である以前に、犯罪行為ですよ！」
女子生徒のＣＡＤが展開中だった起動式が、サイオン粒子塊の弾丸によって砕け散っていた。
サイオンそのものを弾丸として放出する、魔法としては最も単純な術式ながら、起動式のみを破壊し術者本人には何のダメージも与えない精緻な照準と出力制御は、射手の並々ならぬ技量を示している。
声の主の姿を認めて、エリカたちを攻撃しようとしていた女子生徒は、魔法によるもの以外の衝撃で蒼白となった。
警告を発し、サイオン弾で魔法の発動を阻止したのは、生徒会長・七草真由美だった。
常に――達也が目にしている限りにおいて――にこやかだった顔は、こんな時であっても、それほど厳しさを感じさせない。
だが魔法を行使する者の目には瞭然たる、並みの魔法師を大きく上回る規模の、活性化したサイオン光がその小柄な体をハーローのように包み、一種の冒しがたい威厳を彼女に与えていた。
「あなたたち、１－Ａと１－Ｅの生徒ね。
事情を聞きます。ついて来なさい」
冷たい、と評されても仕方のない、硬質な声で命じたのは、真由美の隣に立った女子生徒。入学式の生徒会紹介によれば、彼女は風紀委員長、渡辺摩利という名の三年生だ。
彼女のＣＡＤは既に起動式の展開を完了している。
ここで抵抗の素振りでも見せれば、即座に実力が行使されることは想像に難くない。

レオも、美月も、深雪のクラスメイトも、言葉無く、硬直している。

反抗心から動かないのではなく、雰囲気に呑まれて動けなくなった同級生を横にして、達也は深雪を従え、摩利の前に歩み出た。

「すみません、悪ふざけが過ぎました」

摩利の視野において、達也たちは当事者に見えていなかったようだ。

「悪ふざけ？」

突然出てきた一年生に、いぶかしげな視線を向けて、問い返す。

「はい。

森崎一門のクイックドロウは有名ですから、後学の為に見せてもらうだけのつもりだったんですが、あんまり真に迫っていたもので、思わず手が出てしまいました」

レオにＣＡＤを突きつけた男子生徒が、目を丸くして驚いている。

他の一年生も今までとは別の意味で絶句する中、摩利は、エリカが手にする警棒と、地面に転がった拳銃形態のデバイスを一瞥し、冷笑を浮かべた。

「ではあちらの女子が攻性魔法を起動していたのはどうしてだ？」

「驚いたんでしょう。条件反射で魔法を起動できるとは、流石は一科生ですね」

真面目くさった表情で答えていたが、その声は何処となく、白々しかった。

「きみの友人は、魔法によって攻撃されそうになっていた訳だが、それでも悪ふざけだと主張するのかね？」

「攻撃といっても、彼女が編成しようとしていたのは目くらましの閃光魔法ですから。それも、失明したり視力障害を起こしたりする程のレベルではありませんでしたし」

再び、息を呑む気配。

冷笑が、感嘆に変わる。

「ほう？……どうやら君は、起動式が読めるらしいな」

起動式は、魔法式を構築するための膨大なデータの塊だ。
魔法師は、魔法式がどのような効果を持つものであるかについては、直感的に理解することが出来る。
魔法式がエイドスに干渉する過程で、改変されまいとするエイドス側からの反作用により、魔法式がどのような改変を行おうとしているのかを読み取ることが出来る。
だが単なるデータの塊に過ぎない起動式は、その情報量の膨大さ故に、それを展開している魔法師自身にも、無意識領域内で半自動的に処理することが出来るのみ。
起動式を読む、ということは、画像データを記述する文字の羅列から、その画像を頭の中で再現するようなものだ。
意識して理解することなど、普通は出来ない。
「実技は苦手ですが、分析は得意です」
だが達也は事も無げに、その非常識な技能を、「分析」の一言で片付ける。
「……誤魔化すのも得意なようだ」
値踏みするような、睨みつけるような、その中間の眼差し。
ただ一人、矢面に立っていた兄を庇う様に、深雪が進み出る。
「兄の申したとおり、本当に、ちょっとした行き違いだったんです。先輩方のお手を煩わせてしまい、申し訳ありませんでした」
こちらは微塵の小細工もなく、真正面から深々と頭を下げられて、毒気を抜かれた表情で摩利は目を逸らした。
「摩利、もういいじゃないですか。達也くん、本当にただの見学だったんですね？」
いつの間にか名前で呼ばれているよ、と達也は思ったが、せっかく差し向けられた真由美の助け舟を無碍にはできない。
今までどおり、真面目くさった表情で頷くと、真由美は何となく、得意げに見える――まるで「貸し一つ」とでも言いたげな――笑顔を浮かべた。
「生徒同士で教え合うことが禁止されている訳ではありませんが、

魔法の行使には、起動するだけでも細かな制限があります。
このことは一学期の内に授業で教わる内容です。
魔法の発動を伴う自習活動は、それまで控えた方がいいでしょうね」
「……会長がこう仰られていることでもあるし、今回は不問にします。以後このようなことの無いように」
慌てて姿勢を正し、呉越同舟ながら一斉に頭を下げる一同に見向きもせず、摩利は踵を返した。
が、一歩踏み出したところで足を止め、背中を向けたまま問いかけを発した。
「君の名前は？」
首だけで振り向いた切れ長の目は、その端に達也の姿を映している。
「１－Ｅ、司波達也です」
「覚えておこう」
反射的に「結構です」と答えそうになった口をつぐんで、達也はため息を呑み込んだ。

1－（8）　勧誘（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

1－（8）　勧誘

「……借りだなんて思わないからな」
役員の姿が校舎に消えたのを見届けて、最初に手を出した、つまり達也に庇われた形になった男子生徒が、棘のある口調と視線で、達也へ向けてそう言った。
やれやれ、という表情を浮かべて背後を見る。
全員が彼と似たような顔をしていた。
無用にエキサイトする友人が、少なくともこの場ではいなかったことに安堵しながら、達也は視線を戻した。
「貸してるなんて思ってないから安心しろよ。
決め手になったのは俺の舌先じゃなくて深雪の誠意だからな」
「お兄様ときたら、言い負かすのは得意でも、説得するのは苦手なんですから」
「違いない」
わざとらしい非難の眼差しに、苦笑で返す。
「……僕の名前は森崎駿。お前が見抜いたとおり、森崎の本家に連なる者だ」
兄妹の、見ようによってはほのぼのとしたやり取りに気を殺がれたのか、やや敵意の薄れた顔で、少年が名乗りを上げる。
「見抜いたとか、そんな大袈裟な話じゃないんだが。
単に模範実技の映像資料を見たことがあっただけで」
「あっ、そういえばあたしもそれ、見たことあるかも」
「で、テメエは今の今まで思い出しもしなかった、と。やっぱ、達也とは出来が違うな」
「何を偉そうに。起動中のホウキを素手で掴もうなんてするバカに、頭の出来を云々されたかないわよ」
「あぁ！？　バカとはなんだバカとは」
「あの……本当に危ないんですよ。他の魔法師用に調整された起動

式は、個有情報体の拒否反応を起こしかねないんですから……」
「という訳なのよ。分かった？」
「エリカちゃんもよ？　直接手で触らなくたって、干渉を受ける可能性はあるんだから」
「大丈夫。これ、シールド済みだから」
背後では話がそれなりに意味のある方向へ発展していたが、達也は森崎と目線を合わせたまま、動かない。
「僕はお前を認めないぞ、司波達也。司波さんは、僕たちと共にあるべきなんだ」
返事を待たずに背を向ける。
返事を必要としないからこそ捨て台詞なのだろうが。
「いきなりフルネームで呼び捨てかよ」
独り言のように、但ししっかり聞こえる音量で呟く達也の隣で、深雪が困惑を浮かべている。
自省的な性格の癖に、敵を作るのを躊躇わない自己破滅型の無鉄砲さは、兄の大きな欠点だと彼女は以前から気に病んでいた。
もっともそれ以上に、森崎の思い込みに辟易している部分があったのだが。
「帰るか」
「はい」
とにかく精神的に疲れた、という実感を共有していた二人は、どちらともなく頷きあって、その場を離れることにした。
行く手を遮るように、あの女子生徒が立っていたが、今日はこれ以上関わりたくないというのが本音だ。
深雪に目配せして、そのまま通り過ぎようとする。
兄の意を汲んで、また明日、と挨拶をしようとした深雪だったが、それより先に、相手が口を開いた。
「光井ほのかです。さっきは失礼なことを言ってすみませんでした」
いきなり頭を下げられて、正直なところ、達也は面食らっていた。
先程までは控え目に言ってもエリート意識を隠しきれていなかっ

た少女のこの態度は、豹変と言えた。
「庇ってくれて、ありがとうございました。森崎君はああ言いましたけど、大事にならなかったのはお兄さんのおかげです」
「……どういたしまして。でも、お兄さんは止めてくれ。これでも同じ一年生だ」
「分かりました。では、何とお呼びすれば……」
思い込みが激しそうな目をしている。
厄介なことにならなければいいが、と思いながらも、不機嫌な口調にならないよう注意しながら達也は答えた。
「達也、でいいから」
「……分かりました。
それで、その……」
「……なんでしょうか？」
素早いアイコンタクトの結果、深雪がほのかの前に出る。
「……駅までご一緒してもいいですか？」
拒む理由はなかったし、拒める道理もなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

駅までの帰り道は、微妙な空気だった。
メンバーは達也、美月、エリカ、レオのＥ組の四人と、深雪、ほのか、そして同じくＡ組の北山雫という女子生徒。
達也の隣には深雪、そしてその反対側には何故か、ほのかが陣取っている。
「……じゃあ、深雪さんのアシスタンスを調整しているのは達也さんなんですか？」
「ええ。お兄様にお任せするのが、一番安心ですから」
我が事のように得意げに、深雪がほのかに答える。
「少しアレンジしているだけなんだけどね。深雪は処理能力が高いから、ＣＡＤのメンテに手が掛からない」

「それだって、デバイスのＯＳを理解できるだけの知識が無いと出来ませんよね」
深雪の隣からのぞき込む様に顔を出して、美月が会話に参加してくる。
「ＣＡＤの基礎システムにアクセスできるスキルもないとな。大したもんだ」
「達也くん、あたしのホウキも見てもらえない？」
振り返りながら、レオ、エリカ。
エリカの呼びかけが「司波くん」から「達也くん」に変わっているのは、光井さんに名前で呼ばせているんだからいいでしょ、との一方的な宣言によるもの。その代わり、あたしのこともエリカでいいから、という有難い交換条件付だ。当然、美月も同じ取引を主張して、早くも既成事実化している。
「無理。あんな特殊な形状のＣＡＤをいじる自信はないよ」
「あはっ、やっぱりすごいね、達也くんは」
「何が？」
「これがホウキだって分かっちゃうんだ」
柄の長さに縮めた警棒を、ストラップを持ってクルクル回しながら陽気に笑う。
ただ、その目の奥には、単純な笑み以外の光がある。
「えっ？　その警棒、デバイスなの？」
「普通の反応をありがとう、美月。
みんなが気づいていたんだったら、滑っちゃうとこだったわ」
「……何処にシステムを組み込んでるんだ？　さっきの感じじゃ、全部空洞って訳じゃないんだろ？」
「ブーッ。柄以外は全部空洞よ。刻印型の術式で強度を上げてるの。硬化魔法は得意分野なんでしょ？」
「……術式を幾何学紋様化して、感応性の合金に刻み、サイオンを注入することで発動するって、アレか？
そんなモン使ってたら、並みのサイオン量じゃ済まないぜ？　よ

くガス欠にならねえな？
そもそも刻印型自体、燃費が悪過ぎってんで、今じゃほとんど使われてねえ術式のはずだぜ」
「おっ、流石に得意分野。
でも残念、もう一歩ね。
強度が必要になるのは、振り出しと打ち込みの瞬間だけ。その刹那を捉まえてサイオンを流してやれば、そんなに消耗しないわ。
兜割りの原理と同じよ。……って、みんなどうしたの？」
感心と呆れ顔がブレンドされた空気の中、居心地悪そうに訊ねたエリカに、
「エリカ……兜割りって、それこそ秘伝とか奥義とかに分類される技術だと思うのだけど。
単純にサイオン量が多いより、余程すごいわよ」
全員を代表して、深雪が答えた。
何気ない指摘だった。
だがエリカの強張った顔は、彼女が本気で焦っていることを示していた。
「達也さんも深雪さんもすごいけど、エリカちゃんもすごい人だったのね……
うちの高校って、一般人の方が珍しいのかな？」
「魔法科高校に一般人はいないと思う」
だが、美月の天然気味な発言と、それまで押し黙っていた北山雫がボソッと漏らした的確すぎるツッコミで、色々と訳ありの空気は核心が見えぬまま霧散した。

◇◆◇◆◇◆◇

第一高校生が利用する駅の名前はずばり「第一高校前」。
駅から学校まではほぼ一本道だ。
途中で同じ電車に乗り合う、ということは、電車の態様が変わっ

たことにより無くなってしまったが、駅から学校までの通学路で友達と一緒になる、というイベントは、この学校に関して言えば頻繁に生じる。

昨日も、今日も、そういう実例を目にした。

しかし、いきなりこれはないだろう、と達也は思った。

「達也さん……会長さんとお知り合いだったんですか？」

「入学式の日が初対面……の、はず」

「そうは見えねえけどなぁ」

「わざわざ走ってくるくらいだもんね」

「……深雪を勧誘に来ているんじゃないか？」

「……お兄様の名前を呼んでいらっしゃいますけど」

彼の周りには美月、エリカ、レオの、既に「いつもの」と表現しても違和感のない面々。

昨日と同じく、そしてこれまでずっとそうしてきたとおり、深雪と二人で登校した達也を、まるで待ち構えていたかのように、駅の構内で、駅から出てすぐに、その直後に、彼女たちは次々と声を掛け合流してきた。

そのことに関しては、別に悪いことではない。

一日の始まりとしては、悪くない。

だが、五人で校門までのそれ程長くない道をのんびりと歩む背後から、「達也く～ん」と客観的に見れば割と恥ずかしいに違いない呼び声と共に、軽やかに駆けて来る小柄な人影を認めた瞬間、今日も波乱の一日になるに違いない、と達也は根拠のない確信を抱いた。

「達也くん、オハヨ～。

深雪さんも、おはようございます」

深雪に比べて随分扱いがぞんざいだ、と達也は感じたが、相手は三年生で生徒会長だ。

「おはようございます、会長」

それなりに丁寧な対応を心掛けなければならない。

達也に続いて深雪が丁寧に一礼する。他の三人も、一応礼儀正し

く挨拶を述べたが、やや引き気味なのはやむを得ないだろう。気後れする方が普通のシチュエーションだ。
「お一人ですか、会長？」
見れば分かることをわざわざ訊ねたのは、このまま一緒に来るのか、という問いかけでもある。
「うん。朝は特に待ち合わせはしないんだよ」
肯定は、言外の質問に対する肯定でもある。
しかしそれにしても……馴れ馴れしい。
「深雪さんと少しお話したいこともありますし……ご一緒しても構いませんか？」
これは深雪に向けて掛けられた言葉。
どうやら、達也の気の所為ではないようだ。
「はい、それは構いませんが……」
「ああ、別に内緒話をする訳じゃありませんから。
それとも、また後にしましょうか？」
そう言って、微笑みながら目を向けたのは、一歩離れたところに固まっている三人の方。
「会長……一人だけ扱いが違うような気がするのは、俺の勘違いでしょうか？」
滅相もない、と言葉と身振りで意思表示する三人にこぼれるような笑みで会釈した真由美に相対して、達也は憮然とした表情を隠しきれない。
「えっ？　そうでしたか？」
今更のように言葉遣いが変わったが、白を切っても、口調や表情が裏切っていた。
「お話というのは、生徒会のことでしょうか？」
この程度のことで達也は切れたりしないが、それでもストレスを感じない訳ではない。
深雪は急いで、話の流れを自分の方へ引き寄せた。
「ええ。一度、ゆっくりご説明したいと思いまして。

お昼はどうされるご予定なのかしら？」
「食堂でいただくことになると思います」
「達也くんと一緒に？」
「いえ、兄とはクラスも違いますし……」
昨日のことを思い出したのだろう。
やや俯き加減で答えた深雪に、何やら訳知り顔で真由美は何度も頷く。
「変なことを気にする生徒が多いですものね」
チラッと横を見る達也。
案の定、美月がウンウンと頷いている。昨日の一件を、結構引きずっているようだ。
しかし会長、貴女が言うと、それは問題発言なのでは？　と達也は心の中で呟いた。
「じゃあ、生徒会室でお昼をご一緒しませんか？　ランチボックスでよければ、自配機がありますし」
「……生徒会室にダイニングサーバーが置かれているのですか？」
物に動じない深雪が、驚きを隠せず問い返す。
呆れ気味でもある。
空港の無人食堂や長距離列車の食堂車両に置かれている自動配膳機が、何故高校の生徒会室に置かれているのだろうか。
「入ってもらう前からこういうことは余り言いたくないんですけど、遅くまで仕事をすることもありますので」
ばつ悪げに、照れ笑い。
「生徒会室なら、達也くんが一緒でも問題ありませんし」
それが、一瞬、人の悪い、遠慮なく言えば邪悪な笑みに変わったのは、達也の見間違いだろうか。
例え見間違いであっても、頭の痛い言い種であることに変わりはなかったが。
「……問題ならあるでしょう。副会長と揉め事なんてゴメンですよ、俺は」

入学式の日、彼を睨みつけていたのは二年生の副会長だったはずだ。

あの視線は、誤解しようのないものだった。

彼が気安く生徒会室で昼食など摂っていようものなら、喧嘩を売りつけられること、ほぼ間違いなしである。

「副会長……？」

真由美はちょこんと首を傾げ、すぐに、芝居じみた仕草でポンッと手を打った。

「はんぞーくんのことなら、気にしなくても大丈夫です」

「……それはもしかして、服部副会長のことですか？」

「そうですよ」

この瞬間、真由美にあだ名を付けられるような事態は絶対に避けよう、と達也は固く決心した。

「はんぞーくんは、お昼はいつも部室ですから」

達也のそんな思いとは無関係に――当たり前だが――ニコニコと笑みを絶やさず真由美は勧誘を続ける。

「何だったら、皆さんで来ていただいてもいいんですよ。生徒会の活動を知っていただくのも、役員の務めですから」

「せっかくですけど、あたしたちはご遠慮します」

（えっ？）

遠慮した、にしては、やけにキッパリとした返答、拒絶。

エリカの示した意外な態度に、気まずい空気が流れる。

だが、彼女の真意が解らない以上、それをひっくり返すことも、フォローすることも出来ない。

「そうですか」

ただ一人、真由美の笑顔は変わらない。

鈍い、というより、自分たちの知らない事情を弁えている……

理由はないが、達也にはそんな風に感じられた。

「じゃあ、深雪さんたちだけでも」

どうしましょう、と深雪が眼差しで問い掛けてくる。

さっきまでなら断っても良かったが、エリカのとった態度を考えると、角を立てずに断ることは難しい。

「……分かりました。深雪と二人でお邪魔させていただきます」

「そうですか。では、詳しいお話はその時に。お待ちしてますね♪」

何がそんなに楽しいのか、くるりと背を向けた真由美は、スキップでもしそうな足取りで立ち去った。

同じ校舎へ向かうというのに、見送った五人の足取りは重い。

達也の口からため息が洩れた。

1－（9）　指名・任命（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

1－（9）　指名・任命

足が重かった。
たかが二階分階段を上ったくらいでへばってしまうような、やわな鍛え方はしていない。
本当に重いのは気分で、足が重いというのは比喩でしかないのだが、前に進みたくなくなるという意味では同じだ。
達也とは対照的に、深雪の足取りは軽い。
まあ、何が楽しみなのか分からないほど、彼も鈍くはなかったので、改めて問うようなことはしなかったが。
四階の廊下、突き当りが目的地。
見た目は他の教室と同じ、合板の引き戸。
違いは中央に埋め込まれた木彫りのプレートと、壁のインターホン、そして巧妙にカムフラージュされているであろう数々のセキュリティ機器。
プレートには「生徒会室」と刻まれていた。

招かれたのは深雪で、達也はそのオマケだ。
淑やかに入室を請う深雪の声に、明るい歓迎の辞がインターホンのスピーカーから返された。
耳をそばだてていないと気がつかない程度の、微かな作動音と共にロックが外れる。
引き戸の取っ手に達也が指を掛け、妹をかばう様に体を傾けながら戸を開く。
別段、警戒すべきことは何もないはずと、判っては、いる。
これは、彼ら兄妹の身体に染み付いた癖だった。
――もちろん、何も起こらなかった。
「いらっしゃい。遠慮しないで入って下さい」
正面、奥の机から声が掛けられた。

何がそんなに楽しいんだろう、と一度訊いてみたくなる笑顔で、真由美が手招きしている。

深雪を先に通し、達也はその後に続く。

手を揃え、目を伏せ、深雪が礼儀作法のお手本のようなお辞儀を見せた。

こういう洗練された仕草は、達也には真似できない。

妹の作法や言葉遣いは、達也とほとんど触れ合うことのなかった、亡き実母に仕込まれたものだ。

「えーっと……ご丁寧にどうも」

宮中晩餐会でも通用しそうな所作を見せられ、真由美も少したじろいでいる様子だった。

他にも二名の役員が同席していたが、すっかり雰囲気に呑まれている。

もう一人、役員以外で唯一同席している風紀委員長は平静な表情を保っているが、それが少し無理をしたポーカーフェイスであることは、達也でなくともわかっただろう。

うちの妹は、随分気合いが入っているようだ、と達也は思った。

ただ、何故深雪がこんな威嚇じみた真似をしたのかまでは、彼には理解できなかった。

「どうぞ掛けて。お話は、お食事をしながらにしましょう」

指し示されたのは、多分、会議用の長机。

今時、情報端末が埋め込みになっていないのは、飲食用途を見越してのことなのか。

なんにせよ、学校の備品としては珍しい重厚な木製の方卓に、椅子を引いて深雪を座らせ、自分はその隣、下座に腰掛ける。

いつもは断固として兄を上座に座らせようとする妹ではあるが、今日は自分の方が主役だと弁えて、何とか我慢しているようだ。

「お肉とお魚と精進、どれがいいですか？」

呆れたことに、自配機があるのみならず、メニューも複数あるらしい。

達也が精進を選び、深雪が同じ物を、と頼んだのを受けて、二年生――確か、書記の中条あずさという女子生徒だ――が、壁際に据えつけられた和箪笥ほどの大きさの機械を操作した。

あとは待つだけだ。

ホスト席に真由美、その隣、深雪の前に三年生の女子生徒、その隣、達也の前に摩利、その隣にあずさという順番で席につくと、ようやく調子を取り戻した真由美が話を切り出した。

「入学式で紹介しましたけど、念の為、もう一度紹介しておきますね。

私の隣が会計の市原鈴音、通称リンちゃん」

「……私のことをそう呼ぶのは会長だけです」

整ってはいるが顔の各パーツがきつめの印象で、背が高く手足も長い鈴音は、美少女というより美人と表現する方が相応しい容姿の女の子だ。

確かに「リンちゃん」より「鈴音さん」の方がイメージに合っているだろう。

「その隣は知ってますよね？　風紀委員長の渡辺摩利」

会話が成り立っていない、が、誰も気にした様子がないのは何時もの事、だからだろうか。

「それから書記の中条あずさ、通称あーちゃん」

「会長……お願いですから下級生の前で『あーちゃん』は止めてください。わたしにも立場というものがあるんです」

彼女は真由美よりも更に小柄な上に童顔で、本人にそのつもりが無くても上目遣いの潤んだ瞳は、拗ねて今にも泣き出しそうな子供に見える。

なるほど、これは「あーちゃん」だろう。本人には、気の毒だが。

「もう一人、副会長のはんぞーくんを加えたメンバーが、今期の生徒会役員です」

「私は違うがな」

「そうですね。摩利は別ですが。

あっ、準備ができたようです」
ダイニングサーバーのパネルが開き、無個性ながら正確に盛り付けられた料理がトレーに乗って出てきた。
合計五つ。
一つ足りない……と思いつつ、自分が口を挟むことではない、どうするのかと達也が見ている前で、摩利がおもむろに弁当箱を取り出した。
あずさが立ち上がったのを見て、深雪も席を立つ。自動配膳機はその名の通り、自動的に配膳する機能もついているのだが、自配機対応のテーブルでなければ人の手を使った方が速い。
あずさがまず自分の分を机に置き、真由美と鈴音の分を両手に持つ。
続いて深雪が自分と達也の分を運んで、奇妙な会食が始まった。
まずは当たり障りのない話題。
とは言え、達也たちと真由美たちの間に、共通の話題は無いに等しい。
会話は自然と今食べている料理のことになる。
自動調理だからレトルトになるのは仕方が無いのだが、最近の加工食品は普通の料理に比べてもそれほど遜色が無い。
とは言うものの「平均的な」料理に比べてのことであり、物足りなさは否めない。
「そのお弁当は、渡辺先輩がご自分でお作りになられたのですか？」
「そうだ。……意外か？」
「いえ、少しも」
深雪に問われ、頷きを返した後、少し意地の悪い口調で摩利は問いを返した。
本気で嫌味を言った訳ではなく、出来過ぎに見える下級生を軽くからかっただけだったが、本人を狼狽させる前に、その隣から間髪を入れず否定の言葉を打ち返された。
「……そうか」

達也の目は、摩利の手元――指を見ている。機械任せか、自分で料理しているのか、どのくらい料理が出来るのか、出来ないのか……全て見透かされているような気分になって、摩利は気恥ずかしさを覚えた。

「わたしたちも、明日からお弁当に致しましょうか」

「深雪の弁当はとても魅力的だが、食べる場所がね……」

「あっ、そうですね……まずそれを探さなければ……」

「……まるで恋人同士の会話ですね」

にこりとも笑わず、爆弾発言を繰り出した鈴音だったが、

「そうですか？　血のつながりが無ければ恋人にしたい、と考えたことはありますが」

達也に軽く返され、不発に終わる。

「……面白くない男だな、君は」

「自覚しています」

「はいはい、もう止めようね、摩利。口惜しいのは分かるけど、どうやら達也くんは一筋縄じゃ行かないようよ？」

「……そうだな。

前言撤回。君は面白い男だよ、達也くん」

会長に続き、風紀委員長。

名前で呼ばれるのもいい加減、慣れてきそうだった。

「そろそろ本題に入りましょうか」

少し唐突な感はあるが、高校の昼休みにそう時間的な余裕がある訳でもない。

既に食べ終わっていたことでもあるし、真由美の言葉に、達也と深雪は揃って頷いた。

「当校は生徒の自治を重視しており、生徒会は学内で大きな権限を与えられています。

これは当校だけでなく、公立高校では一般的な傾向です」

相槌の意味で、頷く。管理重視と自治重視は、寄せては返す渚の波のようなもので、大小の違いはあれ、交互に訪れる風潮だ。三年

前の沖縄防衛戦における完勝とその後の国際的発言力の向上以来、それ以前の劣性な外交環境に起因する内政動揺を反映した過度の管理重視風潮への反動から、過度に自治を重視する社会的な傾向がある。更にその反動として、管理が厳格な一部の私立高校が父兄の人気を集めていたりもするのだから、世の中は単純には計れない。

「当校の生徒会は伝統的に、生徒会長が大きな権限を持っています。大統領型、一極集中型と言ってもいいかもしれません」

この台詞を聞いて不安に駆られたのは、多分、真由美に対して失礼なことなのだろう。

達也は心の手綱を引き絞った。

「生徒会長は選挙で選ばれますが、他の役員は生徒会長が選任します。解任も生徒会長の一存に委ねられています。各委員会の委員長も一部を除いて会長に任免権があります」

「私が務める風紀委員長はその例外の一つだ。

生徒会、部活連、教職員会の三者が三名ずつ選任する風紀委員の互選で選ばれる」

「という訳で、摩利はある意味で私と同格の権限を持っているんですね。

さて、この仕組上、生徒会長には任期が定められていますが、他の役員には任期の定めがありません。

生徒会長の任期は十月一日から翌年九月三十日まで。その期間中、生徒会長は役員を自由に任免できます」

そろそろ話が見えてきたが、口を挟むことはせず、達也は理解のしるしに再度、頷いてみせた。

「これは毎年の恒例なのですが、新入生総代を務めた一年生は生徒会の役員になってもらっています。趣旨としては後継者育成ですね。そうして役員になった一年生が全員生徒会長に選ばれる、という訳ではありませんが、ここ五年間はこのパターンが続いてます」

「会長も主席入学だったんですね」

「……あ～、まあ、そうです」

達也の質問は一種のお愛想だった。答えは最初から分かっていたのだが、真由美は律儀に照れて見せた。

演技でなく本当に照れているのは、すれていないというべきか…せいぜい同い年くらいに見える。

鈴音や摩利が大人っぽいので、余計に幼く――というか、可愛く見えるのかもしれないが。

「コホン……深雪さん、私は、貴女が生徒会に入って下さることを希望します」

この場合の「生徒会に入る」とは、言うまでも無く生徒会の役員になるという意味だ。

「引き受けていただけますか？」

一呼吸、深雪は手元に目を落とし、達也へと振り向いて眼差しで問い掛けた。

達也は小さく頷いた。

再び俯き、顔を上げた深雪は、何故か、思い詰めた瞳をしていた。

「会長は、兄の入試の成績をご存知ですか？」

「――っ！？」

全く予想外の展開に、達也は危うく叫び声を漏らしそうになった。

急に何を言い出すつもりだろうか、この妹は。

「ええ、知っていますよ。

すごいですよねぇ……

正直に言いますと、先生にこっそり答案を見せてもらったときは、自信を無くしました」

「……成績優秀者、有能の人材を生徒会に迎え入れるのなら、わたしよりも兄の方が相応しいと思います」

「おいっ、み……」

「デスクワークならば、実技の成績は関係ないと思います。寧ろ、知識や判断力の方が重要なはずです」

相手の言い終える前に、自分の言葉を被せて発言するのは、深雪には滅多に無いことだった。

それが達也であるなら、尚のこと、ほとんど無い。
「わたしを生徒会に加えていただけるというお話については、とても光栄に思います。喜んで末席に加わらせていただきたいと存じますが、兄も一緒という訳には参りませんでしょうか？」
達也は、顔を覆って、天を仰ぎたい気分だった。
自分はここまで妹に悪影響を与えていたのか。
身贔屓もここまで過ぎたものになると、不快感しか与えないと、分からない娘ではないのに。
これは盲目的というより、確信犯的な振る舞いだ。
「残念ながら、それはできません」
回答は、問われた生徒会長ではなく、隣の席からもたらされた。
「生徒会の役員は第一科の生徒から選ばれます。これは不文律ではなく、規則です。
生徒会長に与えられた任免権に課せられた唯一の制限事項ですから、覆すことは不可能です」
淡々と、どちらかと言えばすまなそうに、鈴音が告げる。
彼女も、一科生と二科生をブルーム・ウィードと差別している現在の体制に、ネガティブな考え方を持っているということが十分に分かる声音だった。
「……申し訳ありませんでした。分を弁えぬ差し出口、お許し下さい」
だから、素直に謝罪することも出来たのだろう。
立ち上がり、深々と頭を下げる深雪を咎める者も無い。
「ええと、それでは、深雪さんには書記として、今期の生徒会に加わっていただくということでよろしいですね？」
「はい、精一杯務めさせていただきますので、よろしくお願い致します」
もう一度、今度は少し控え目に頭を下げた深雪に、真由美は満面の笑顔で頷いた。
「具体的な仕事内容はあーちゃんに聞いて下さい」

「ですから会長……あーちゃんはやめて下さいと……」
「もし差し支えなければ、今日の放課後から来ていただいてもいいですか？」
泣きそうな抗議にも取り合わず、自分のペースで話を進めた真由美の言葉に対し、
「深雪」
ちらっと振り返った妹が何かを口にするより先に、短い言葉に込められた少し強い語調によって、達也は首肯することを勧めた。
瞳で頷いた深雪は、改めて真由美へと向き直った。
「分かりました。放課後は、こちらに参りましたらよろしいでしょうか？」
「ええ、お待ちしてますよ、深雪さん」
「あの～……どうしてわたしが『あーちゃん』で、司波さんが『深雪さん』なのでしょうか……？」
ある意味当然な疑問だったが、またしてもスルーされた。
……達也は、あずさが可哀想になってきた。
「……昼休みが終わるまで、もう少しあるな。
ちょっといいか」
もっとも、イジメとか悪ふざけとかいう理由ではなく、おもむろに手を挙げた摩利に皆の注意が奪われた所為ではあったが。
「風紀委員会の生徒会選任枠のうち、前年度卒業生の一枠がまだ埋まっていない」
「それは今、人選中だと言っているじゃないですか。まだ新年度が始まって一週間も経っていないでしょう？　摩利、そんなに急かさないで下さい」
「確か、生徒会役員の選任規定は、生徒会長を除き第一科生徒を任命しなければならない、だったよな？」
「そうですよ」
「第一科の縛りがあるのは、副会長、書記、会計だけだよな？」
「そうですね。役員は会長、副会長、書記、会計で構成されると決

められていますから」
「つまり、風紀委員の生徒会枠に、第二科の生徒を選んでも規定違反にはならない訳だ」
「摩利、貴女……」
真由美が大きく目を見開き、鈴音、あずさも唖然とした顔をしている。
この提案も、先の深雪の発言と同じく、随分突拍子も無いことらしい。
この渡辺摩利という三年生は、相当悪ふざけが好きな性格をしているようだ、と達也は思った。
――のだが。
「ナイスです！」
「はぁ？」
真由美の予想外な歓声に、思わず、達也の口から間の抜けた声が漏れてしまった。
「そうですよ。風紀委員なら問題無いじゃないですか。摩利、生徒会は司波達也くんを風紀委員に指名します」
いきなり過ぎる展開に動転したのは一瞬のこと。
「ちょっと待って下さい！
俺の意思はどうなるんですか！？
大体、風紀委員が何をする委員なのかも説明を受けていませんよ」
論理的思考に基づくと言うより、直感的な危機感に従って、達也は抗議の声を上げた。
「妹さんにも説明しませんでしたが？」
「……いや、それはそうですが……」
――が、達也の抗議は、鈴音によっていきなり出鼻を挫かれてしまった。
「まあまあ、リンちゃん、いいじゃないですか。
達也くん、風紀委員は、学校の風紀を維持する委員です」
「……」

「……」
「……それだけですか？」
「聞いただけでは物足りないかもしれませんが、結構大変……いえ、やりがいのある仕事ですよ」
取り敢えず、笑ってごまかした部分についてはスルー。
それよりも根本的な意思疎通の齟齬がある。
「そういう意味ではないんですが」
「はい？」
とぼけている訳ではないようだ。
達也は、視線を右にスライドさせた。
鈴音の目には、同情があった。
だが、助け船を出す気はないようだ。
その隣。
摩利は、面白がっている。
その隣。
視線を合わせると、あずさの目に狼狽が浮かんだ。
じっと見る。
瞳を覗き込む。
「あ、あの、当校の風紀委員会は、校則違反者を取り締まる組織です」
――外見を裏切らない気弱さだった。
「風紀といっても、服装違反とか、遅刻とか、そういうのは自治委員会の週番が担当します」
控え目に言っても個性の強そうなこの生徒会で、彼女はやって行けているのだろうか。
自分で仕向けたことながら、達也は少し心配になった。
「……あの、何か質問ですか？」
「いえ、続きをお願いします」
「あ、はい。
風紀委員の主な任務は、魔法使用に関する校則違反者の摘発と、

魔法を使用した争乱行為の取り締まりです。
風紀委員長は、違反者に対する罰則の決定にあたり、生徒側の代表として生徒会長と共に、懲罰委員会に出席し意見を述べます。
謂わば、警察と検察を兼ねた組織ですね」
「すごいじゃないですか、お兄様！」
「いや、深雪……そんな『決まりですね』みたいな目をするのはちょっと待ってくれ……
念の為に確認させてもらいますが」
「何だ？」
達也は、説明させていたあずさではなく、摩利へ視線を向けた。
「今のご説明ですと、風紀委員は喧嘩が起こったら、それを力ずくで止めなければならない、ということですね？」
「まあ、そうだな。魔法が使われていなくても、それは我々の任務だ」
「そして、魔法が使用された場合、それを止めさせなければならない、と」
「出来れば使用前に止めさせる方が望ましい」
「あのですね！　俺は、実技の成績が悪かったから第二科なんですが！」
達也はとうとう大声を出してしまった。
それは、魔法で相手を捩じ伏せられる力量を前提にした職務ではないか。
どう考えても、魔法技能に劣った二科生に与える役職ではない。
だが、難詰された摩利は、涼しい顔で簡潔すぎる返事をあっさりと返した。
「構わんよ」
「何がです！？」
「力比べなら、私がいる。
……っと、そろそろ昼休みが終わるな。
放課後に続きを話したいんだが、構わないか？」

「……分かりました」
「では、またここに来てくれ」
理不尽感を押し殺して頷く達也の横で、深雪は兄の感情を気遣いながらも、喜びを押し隠せずにいた。

１－（１０）　挑発Ｘ挑発（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

1－（10）　挑発X挑発

教育用端末の普及により、学校不要論が流行ったことがある。ネットワークで授業が出来るのだから、わざわざ長時間掛けて通学するのは時間の無駄だし、エネルギー資源の無駄でもある、という訳だ。

結局、学校不要論は流行（はやり）以上のものにはならなかった。

どれほどインターフェイスが進歩しても、仮想体験は所詮、現実ではない。実習や実験は、リアルタイムの質疑応答を伴う現実体験でなければ十分な学習効果が得られないこと、同年代が集団で学ぶことそのものに学習促進効果があること、この二点が人体実験まがいの試行錯誤により立証されたからだ。

だが同時に、端末を用いた「家庭でも学べる」授業方法にも一定の効果があることが立証され、通信教育だけでなく、学内の授業にも活用されている。この授業形態における教師の役割は、端末を通して生徒から寄せられる質問に回答することだ。通信教育との違いは、クローズド・ネットワーク内の豊富な資料を利用できる点と、質問に対する回答者が受講人数比で多いという点、同じ科目を受講中の他の生徒の質問とそれに対する回答を閲覧できるという点だが、これだけでもかなりの違いになる。特に、レベルの高い学校ほど、その恩恵は大きい。

個人個人で進捗が異なる端末授業は、ある意味で自由参加だ。他の生徒の邪魔をしないのが唯一のルールで、学期内にカリキュラムを消化しテストを合格できれば、出欠は問われない。受講科目も弾力的に決められる。

とはいうものの、入学後最初の授業から欠席している生徒は、流石に見当たらなかった。

「達也、生徒会室の居心地はどうだった?」

午前三時限、午後二時限合計五時限の授業の、四時限目と五時限

目の間の休み時間に、椅子をまたいで背もたれに両手と顎を載せる例のポーズでレオが訊いて来た。
　隔意無く、単に興味津々といった様子だ。
「奇妙な話になった……」
「奇妙、って？」
　美月の肩越しに、エリカが乗り出してくる。
「風紀委員になれ、だと。
　いきなり何なんだろうな、あれは」
「確かにそりゃ、いきなりだな」
「でもすごいじゃないですか、生徒会からスカウトされるなんて」
「すごいかなぁ？　妹のオマケだよ？」
「まぁまぁ、そう自虐的にならなくても。それで、風紀委員って何をするの？」
　あずさに聞いた話をかいつまんで説明するにつれて、三人とも目が丸くなっていった。
「そりゃまた、面倒そうな仕事だな……」
「危なくないですか、それって……エリカちゃん、どうしたの？」
　エリカは不機嫌、と言うか、怒っているような顔をしていた。
「……全く勝手な人なんだから……」
　視線が微妙に外れている。虚空を睨みながら呟かれた台詞は、ここにいない誰かを詰るものか。
「エリカちゃん？」
「えっ、あっ、ゴメン。ホントにひどい話よね。達也くん、そんな危ない仕事、断っちゃえ」
　険しい表情を悪戯っぽい笑顔に変え、わざと明るい口調で、唆すように。
「えぇっ、面白そうじゃねえか！　受けろよ、達也。応援するぜ」
　冗談に紛らせようとしているのは分かったが、何を誤魔化そうとしたのか。
「でも、喧嘩の仲裁に入るってことは、攻撃魔法のとばっちりを受

けるかもしれないんですよ？」
何となく、「勝手な人」が誰を指すのか、分かる気はする。
「そうよ。きっと、逆恨みする連中だって出てくるし」
だが、それを確かめられるような雰囲気ではなかったし、
「でもよぉ、威張りくさった一科生にしゃしゃり出られるよりは、達也の方が良いと思わねぇか？」
ずかずかと踏み込むつもりも無かった。
「う～ん……それは、そうかも」
「エリカちゃん、納得しないで！　そんなの、喧嘩しなければいいでしょう！？」
「でも、こっちにその気が無くても、火の粉を払わなきゃならない時だってあるだろうし　……昨日みたいに」
「うっ、それは……」
「世の中には濡れ衣とか冤罪とか、いくらでもまかり通っているしね」
「いや、その二つ、同じ意味だから」
「よっ、二科生の希望の星！」
「聴いちゃいないよ……」
それより、自分の方が外堀を埋めてしまわれそうだった。

◇◆◇◆◇◆◇

妬み、嫉みを受けないのはありがたい。
だが「頑張ってねぇ～」と送り出されるのも、調子が狂うというか、逆に気が滅入ってしまう。
達也本人は全く乗り気でないのだから、尚更だった。
昼休み時以上に重い足を引きずって、生徒会室へ。
雰囲気的に少し情けない構図だが、彼の屈折した心情が理解できるだけに、深雪は口をつぐんでいる。
既にＩＤカードを認証システムへ登録済なので（生徒会入りが既

定事実扱いされているのに抵抗はあったが、真由美と摩利に押し切られた）、そのまま中に入る。

と、明確な敵意をはらんだ鋭い視線に迎えられた。

「失礼します」

悲しいかな、また自慢できることではないが、この手の応対には慣れている。ポーカーフェイスを保って一礼すると、嘘のように敵意は霧散した。

とはいっても、達也に対する敵意が解消されたのではなく、後ろに続く深雪の姿を認めただけだとすぐに分かったので、別段、安心もしないし嬉しくもなかった。

視線の主が立ち上がり近づいてくる。

達也とほぼ同じ身長、横幅はやや細身か。

整ってはいるが特筆すべき程のものではない容貌と、これといって特徴の無い体つき。肉体的にはそれほど強い印象を与えないが、身の周りの空気を侵食するサイオンの輝きは、この少年の魔法力が卓越したものであることを示している。

「副会長の服部刑部です。司波深雪さん、生徒会へようこそ」

少し神経質そうな声だったが、年齢を考えれば十分に抑制が効いているといえるだろう。

右手が小さく動いたのは、握手をしようとして思い留まったからか。

何故止めたのかを、詮索する気にはならなかった。

そのまま達也を完全に無視して席に戻る。背中越しにムッとした気配が伝わってきたが、一瞬で消える。何とか自制してくれたようだ。

「よっ、来たな」

「いらっしゃい、深雪さん。達也くんもご苦労様」

既に完全な身内扱いで気軽に手を挙げて見せたのは摩利、ナチュラルに違う扱いを見せたのは真由美だが、この二人に関しては気にしても仕方がないという境地に早くも到達していた。

「早速だけど、あーちゃん、お願いね」
「……ハイ」
こちらも既に諦めの境地なのだろう。一瞬、哀しそうに目を伏せ、ぎこちない笑顔で頷くと、あずさは深雪を壁際の端末へ誘導した。
「じゃあ、あたしらも移動しようか」
僅か一日の間に話し方が随分変わっているような気がするが、おそらく、この蓮っ葉な方が地なのだろう。
「どちらへ？」
達也も話し方を気にするほど上品な育ちではない。簡潔に、告げられたことについてのみ応える。
「風紀委員会本部だよ。色々見てもらいながらの方が分かりやすいだろうからね。
この真下の部屋だ。といっても、中でつながっているんだけど」
「……変わった造りですね」
「あたしもそう思うよ」
そう言いながら、席を立つ。が、腰を浮かせたところで制止が入った。
「渡辺先輩、待って下さい」
「何だ、服部刑部少丞範蔵副会長（はっとりぎょうぶしょうじょうはんぞう）」
「フルネームで呼ばないで下さい！」
達也は思わず真由美の顔を見てしまった。
彼の視線に、真由美は「んっ？」という感じで小首を傾げる。
まさか「はんぞー」が本名だったとは……完全に、予想外だった。
「じゃあ服部範蔵副会長」
「服部刑部です！」
「そりゃ名前じゃなくて官職だろ。お前の家の」
「今は官位なんてありません。学校には『服部刑部』で届が受理されています！……いえ、そんなことが言いたいのではなく！」
「お前が拘っているんじゃないか」
「まあまあ摩利、はんぞーくんにも色々と譲れないものがあるんで

しょう」
その発言主、真由美に、一斉に視線が突き刺さる。
お前が言うな、と。
だが、彼女は全くこたえた様子がなかった。
気づいてもいないのかもしれない。
そして何故か、服部も、何も言わない。
苦手としている、とは、ちょっと違う。
服部の、摩利に対するものとは異なる感情が垣間見えて、中々に興味深い。
――第三者として見物している限りでは。
しかし、観客でいられたのは、ほんの短い時間だった。
「渡辺先輩、お話ししたいのは風紀委員の補充の件です」
顔に昇った血の気が一気に引いている。服部はコマ落としを見るように、落ち着きを取り戻していた。
「何だ？」
「その一年生を風紀委員に任命するのは反対です」
「おかしなことを言う。司波達也くんを生徒会選任枠で指名したのは七草会長だ。例え口頭であっても、指名の効力に変わりはない」
「本人は受諾していないと聞いています。本人が受け容れるまで、正式な指名にはなりません」
「それは達也くんの問題だな。生徒会としての意思表示は、生徒会長によって既になされている。決定権は彼にあるのであって、君にあるのではないよ」
摩利は、達也と服部を交互に見ながら言う。
服部は、達也を見ようとしない。あえて無視している。
そんな二人を、鈴音は冷静に、あずさはハラハラしながら、そして真由美は感情の読めないアルカイックスマイルで見ている。
深雪は、神妙な顔で壁際に控えている。だが、いつ妹が爆発してしまうか、達也はあずさと別の意味でハラハラしていた。
「過去、ウィードを風紀委員に任命した例はありません」

「それは禁止用語だぞ、服部副会長。風紀委員会による摘発対象だ。委員長である私の前で堂々と使用するとは、いい度胸だな」
「取り繕っても仕方がないでしょう。それとも、全校生徒の三分の一以上を摘発するつもりですか？
ブルームとウィードの間の区別は、学校制度に組み込まれた、学校が認めるものです。そしてブルームとウィードには、区別を根拠付けるだけの実力差があります。
風紀委員は、ルールに従わない生徒を実力で取り締まる役職だ。実力に劣るウィードには務まらない」
「確かに風紀委員会は実力主義だが、実力にも色々あってな。力づくで抑えつけるだけなら、私がいる。
相手が十人だろうが二十人だろうが、私一人で十分対処できる。この学校で私と対等に戦える生徒は七草会長と十文字会頭だけだからな。
君の理屈に従うなら、実戦能力に劣る秀才は必要ない。それとも、私と戦ってみるかい、服部副会長」
「……私のことを問題にしているのではありません。彼の適性の問題だ」
「実力にも色々ある、と言っただろう？　達也くんには、展開中の起動式を読み取り発動される魔法を予測する目と頭脳がある」
「……何ですって？」
「つまり彼には、実際に魔法が発動されなくても、どんな魔法を使おうとしたかが分かる。
当校のルールでは、使おうとした魔法の種類、規模によって罰則が異なる。
だが真由美がやるように、魔法式発動前の状態で起動式を破壊してしまうと、どんな魔法を使おうとしたのかが分からなかった。
だからといって、展開の完了を待つのも本末転倒だ。起動式を展開中の段階でキャンセルできれば、その方が安全だからな。
彼は今まで罪状が確定できずに、結果的に軽い罰で済まされてき

た未遂犯に対する強力な抑止力になるんだよ」
「……しかし、実際に違反の現場で、魔法の発動を阻止できないのでは……」
「そんなものは、第一科の一年生でも同じだ。二年生でも同じ、魔法を後から起動して、相手の魔法発動を阻止できるスキルの持ち主が一体何人いるというんだ？
それに、私が彼を委員会に欲する理由はもう一つある」
「……」
「今まで第二科の生徒が風紀委員に任命されたことはなかった。それはつまり、第二科の生徒による魔法使用違反も、第一科の生徒が取り締まってきたということだ。
君の言うとおり当校には、第一科生徒と第二科生徒の間に感情的な溝がある。
第一科の生徒が第二科の生徒を取り締まり、その逆はないという構造は、この溝を深めることになっていた。
私が指揮する委員会が、差別意識を助長するというのは、私の好むところではない」
「はぁ～……すごいですね、摩利。そんなことまで考えていたんですか？
私はてっきり、達也くんのことが気に入っただけかと」
「会長、お静かに」
真由美によって空気が壊れかかったが、鈴音によって制止された。
責めるような眼差し。
首を横に振る。
前者が真由美で、後者が鈴音だった。
感情的な対立は、有耶無耶にされぬまま毒素をなお、吐き出す。
「会長……私は副会長として、司波達也の風紀委員就任に反対します。
渡辺委員長の主張に一理あることは認めますが、風紀委員の本来の任務はやはり、校則違反者の鎮圧と摘発です。

魔法力の乏しい二科生徒に、風紀委員は務まりません。この誤った登用は必ずや、会長の体面を傷つけることになるでしょう。

どうかご再考を」

「待ってください！」

達也は慌てて振り返った。

恐れていたとおり、遂に深雪が耐えられなくなったのだ。

摩利の弁舌に引き込まれて、タイミングを計りきれなかった。

慌てて制止しようとしたが、既に喋り始めていた深雪の方が速かった。

「僭越ですが副会長、兄は確かに魔法実技の成績が芳しくありませんが、それは実技テストの評価方法に兄の力が適合していないだけのことなのです。

実戦ならば、兄は誰にも負けません」

確信に満ちた言葉に、摩利が軽く目を見開いた。真由美も曖昧な笑みを消して、真面目な眼差しを深雪と、達也に向けている。

だが深雪を見返す服部の目は、真剣味が薄かった。

「司波さん」

服部が話しかけた相手は、言うまでもなく深雪だ。

「魔法師は事象をあるがままに、冷静に、論理的に認識できなければなりません。

身内に対する贔屓は、一般人ならばやむを得ないでしょうが、魔法師を目指す者は身贔屓に目を曇らせることのないように心掛けなさい」

親身に教え諭す口調に、含みは感じられない。多分、彼は、同じブルームに対しては、独善的な面はあっても面倒見のいい優秀な「先輩」なのだろう。

――この場合、こういう言い方は逆効果になると、深雪が反論してきた時点で分かりそうなものではあるが。

「お言葉ですが、わたしは目を曇らせてなどいません！　お兄様の本当のお力を以ってすれば――」

「深雪」
冷静さを失いかけていた深雪の前に手が翳される。
「っ！」
言葉と手振りで妹を止めて、達也は服部の正面に移動した。
「服部副会長、俺と模擬戦をしませんか」
「なに……？」
意外な申し出に言葉を失ったのは、挑まれた服部だけではなかった。
真由美も摩利も、予想外の大胆な反撃に、呆気に取られた顔で二人を見詰めている。
全員の視線が集まる中、服部の身体がブルブルと震え始めた。
「思い上がるなよ、補欠の分際で！」
小さく悲鳴を上げたのは、あずさか。
他の三人は、流石に上級生だけあって、平静を保っている。
そして、罵倒を受けた本人は、困ったような顔で薄っすらと苦笑を浮かべている。
「何がおかしい！」
「魔法師は冷静を心掛けるべき、でしょう？」
「くっ！」
「あるがまま、の対人戦闘スキルは、戦ってみなければ分からないと思いますが。
俺は別に、風紀委員になりたい訳じゃないんですが、妹の目が曇っていないと証明する為ならば、やむを得ないでしょうね……」
後半は、独り言のような呟きだった。
それが服部には余計に、挑発的に聞こえた。
「……いいだろう。身の程を弁えることの必要性を、たっぷり教えてやる」
動揺を長引かせないのは、彼が口だけではない証拠か。抑制された口調が逆に、憤怒の深さを物語っていた。
「私は生徒会長の権限により、２－Ｂ・服部刑部と１－Ｅ・司波達

也の模擬戦を、正式な試合として認めます」
「生徒会長の宣言に基づき、風紀委員長として、二人の試合が校則で認められた課外活動であると認める」
「時間はこれより三十分後、場所は第三演習室、試合は非公開とし、双方にＣＡＤの使用を認めます」
真由美と摩利が、厳かと形容して構わない声で宣言すると、あずさが慌しく端末を叩き始めた。

1－（11）　私闘（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

1－（11）　私闘

「入学三日目にして、早くも猫の皮が剥がれてしまったか……」
生徒会長印の捺された許可証（こういう物は未だに紙が使われている）と引き換えにＣＡＤのケースを受け取ってきた達也が第三演習室の扉の前でぼやくと、後ろから泣きそうな声が聞こえてきた。
「申し訳ありません……」
「お前が謝ることじゃないさ」
「ですが、わたしの所為でまたお兄様にご迷惑が……」
振り返り、半歩進んで、達也は妹の頭を優しく撫でた。
ビクッと身体を震わせてから、深雪はおずおずと顔を上げる。
その目からは、今にも涙が零れ落ちそうだった。
「入学式の日にも言っただろ？
怒ることの出来ない俺の代わりに、お前が怒ってくれるから、俺はいつも救われているんだ。
……すみません、とは言うなよ。今、相応しいのは別の言葉だ」
「はい……頑張ってください」
指で涙をぬぐい笑顔で告げる深雪に、同じく、笑顔で頷き、達也は演習室の扉を開けた。

◇◆◇◆◇◆◇

「意外だったな」
「何がですか？」
演習室で達也を出迎えたのは、審判に指名された摩利だった。
「君が案外好戦的な性格だったということが、さ。他人の評価など余り気にしない人間だと思っていたからね」
意外と言いながらも、彼女の目は期待に輝いている。
「……こういう私闘を止めさせるのが風紀委員の仕事だと思ってい

ましたが」
「私闘じゃないさ。これは正式な試合だ。
真由美がそう言っただろう？
実力主義というのは、一科と二科の間にのみ適用されるものではないんだよ。寧ろ、同じ一科生の間にこそ適用されるものだ。
もっとも、一科生と二科生の間でこういう決着方法がとられるのは初めてだろうがね」
なるほど、口で決着がつかなければ力づくで決着をつけることが、かえって奨励されているという訳だ。
「先輩が風紀委員長になってから、『正式な試合』が増えたんじゃありませんか？」
「増えているな、確かに」
何の悪びれもない態度は、達也だけでなく、深雪にまで苦笑を浮かべさせた。
と、急に真面目な表情になって、摩利が顔を近づけてきた。
「それで、自信はあるのか？」
息遣いの聞こえる距離で、囁き声の問いかけ。
頭半分低い、上目遣いに見上げる切れ長の双眸に、微かに漂って来る甘い匂いに、性的な興奮を感じている自分を自覚する。
自覚した瞬間、それは自分という客体、自分の中に生じている現象となって、彼自身から切り離される。
「服部は当校でも五本の指に入る遣い手だ。どちらかと言えば集団戦向きで、個人戦は得意とはいえないが、それでも一対一で勝てるヤツはほとんどいない」
「正面から遣り合おうなんて考えていませんよ」
「落ち着いているね……少し、自信を無くしたぞ」
「はぁ」
「こういう時に赤面するくらいの可愛げがあった方が、力を貸してくれる人間が増えると思うがね」
ニヤッと笑って後退ると、そのまま中央の開始線へ歩いて行く。

「困った人だ……」
あれは治にあって乱を求め、乱にあって治をもたらすタイプだろう。
平穏に暮らしている人間には単なるトラブルメーカーだ。
入学以来、めっきり波乱含みとなった人間関係にため息を漏らしながら、ＣＡＤのケースを開ける。
黒いアタッシュケースの中には、拳銃形態のＣＡＤが二丁収められていた。
そのうちの一方を取り、実弾銃で弾倉に当たる部分・形状のカートリッジを抜き出して、別の物に交換する。
その様子を、深雪を除く全員が、興味深げに見詰めていた。
「お待たせしました」
「いつも複数のストレージを持ち歩いているのか？」
特化型のＣＡＤは使用できる起動式の数が限られている。汎用型ＣＡＤが系統を問わず九十九種類の起動式を格納できるのに対して、特化型ＣＡＤは系統の組合せが同じ起動式を九種類しか格納できない。その欠点を補う為に、起動式を記録するストレージを交換可能としたＣＡＤが開発されたが、元々特化型は特定の魔法式を得意とする魔法師が好んで使用するデバイスで、魔法のバリエーションを増やすニーズは余り高くなかった。複数のストレージを携帯しても、結局使うのは一種類だけ、というケースがほとんどだ。
だが、好奇心を丸出しにした摩利の問い掛けに対する達也の回答は、彼が少数派に属していることを示していた。
「ええ。汎用型を使いこなすには、処理能力が足りないので」
正面に立つ服部が、それを聞いて冷笑を浮かべたが、達也の意識には小波一つ生じなかった。
「よし、それではルールを説明するぞ。
直接攻撃、間接攻撃を問わず相手を死に至らしめる術式は禁止。
回復不能な障害を与える術式も禁止。
相手の肉体を直接損壊する術式も禁止。但し、捻挫以上の負傷を

与えない直接攻撃は許可する。
武器の使用は禁止。但し、素手による攻撃は許可する。蹴り技を使いたければ靴を脱ぐこと。
勝敗は一方が負けを認めるか、審判が続行不能と判断した場合に決する。
双方開始線まで下がり、合図があるまでＣＡＤを起動しないこと。
このルールに従わない場合は、その時点で負けとする。
あたしが力づくで止めさせるから覚悟しておけ。
以上だ」
達也と服部、双方が頷き、５メートル離れた開始線で向かい合う。
達也が拳銃形態の特化型ＣＡＤ。
服部はオーソドックスな腕輪形態の汎用型ＣＡＤだ。
達也はＣＡＤを握る右手を地面に向けて、
服部は左腕のＣＡＤに右手を添えて、
摩利の合図を待つ。
場が静まり返る。
静寂が完全なる支配権を確立した、その瞬間。
「始め！」
火蓋が切って落とされた。

服部の右手がＣＡＤの上を走る。
単純に、三つのキーを叩くだけとはいえ、その動作には一切の淀みがない。
彼が本来得意とする術式は、中距離以上の広範囲を攻撃する魔法。
近距離、一対一の試合は、どちらかといえば苦手としている。
だがそれも「どちらかといえば」であり、第一高校入学以来の過去一年間、負け知らずだ。
個人戦・集団戦を問わない対人戦闘のスペシャリストとも言える摩利や、驚異的な高速・精密銃撃魔法を駆使する真由美、鉄壁の異名を取る部活連会頭の十文字、この三巨頭には一歩譲るかもしれな

いが、他の者には生徒ばかりか教師陣にも引けは取らないと自負している。
それは必ずしも彼の思い込みではない。
スピードを重視した単純な起動式は即座に展開を完了し、一瞬とも言える速度で服部は魔法の発動態勢に入った。
その直後、彼は危うく、悲鳴を上げそうになった。
対戦相手の、身の程を知らないウィードの一年生が、視界を覆い尽くす近距離に迫っていたのだ。
慌てて座標を修正し、魔法を放とうとする。
基礎単一系統の移動魔法。
魔法式に捉えられた相手は、十メートル以上を吹き飛ばされ、その衝撃で戦闘不能となるはず、だった。
が、魔法は、不発に終わった。
起動式の処理に失敗したのではない。
敵の姿が、消えたのだ。
魔法式の座標はそれほど厳密性を要するものではないが、視界内の対象物が視界から、つまり認識から消失すれば、エラーの発生は避けられない。
サイオン情報体が空中で霧散し、慌てて左右を見回す服部を側面から激しい「波」が揺さぶった。
連続して三波。
別々の波動が彼の体内で重なり合い、大きなうねりとなって、彼の意識を刈り取った。

勝敗は、一瞬で決した。
秒殺、という表現があるが、今の試合には十秒もかかっていない。
達也が向けるＣＡＤの銃口の先で、服部の身体が崩れ落ちる。
「……勝者、司波達也」
勝ち名乗りは、寧ろ控え目だった。
勝者の顔に、喜悦はない。

ただ淡々と、為すべきことを為した顔だった。
軽く一礼して、ＣＡＤのケースを置いた机に向かう。
ポーズではなく、自分の勝利に何の興味も持っていないことが明らかだった。
「待て」
その背中を、摩利が呼び止める。
「今の動きは……自己加速術式を予め展開していたのか？」
彼女の問い掛けに、真由美、鈴音、あずさの三人も、今の勝負を思い返した。
試合開始の合図と同時に、達也の身体は服部の目前まで移動していた。
そして次の瞬間、彼の身体は服部の右側面数メートルの位置にあった。
瞬間移動と見間違える程の、速力。
生身の肉体には、為し得ない動きに見えた。
「そんな訳がないのは、先輩が一番良くお分かりだと思いますが」
だがこれは、達也の言うとおりだった。摩利は審判として、ＣＡＤがフライングで起動されていないかどうか、注意深く観察していた。見えているＣＡＤだけでなく、隠し持つＣＡＤの存在も想定して、サイオンの流れを注視していたのだ。
「しかし、あれは」
「正真正銘、肉体的なものですよ」
「わたしも証言します。あれは、兄の体術です。兄は、忍術使い・九重八雲先生の指導を受けているのです」
摩利が、息を呑む。対人戦闘に長じた彼女は、九重八雲の名声を良く知っていた。
「じゃあ、あの攻撃も忍術ですか？
私には、サイオンの波動そのものを放ったようにしか見えなかったんですが」
真由美が質疑に加わる。

サイオンの弾丸を駆使する彼女は、同じくサイオンそのものを武器としたように見える達也の攻撃の方に興味を持ったようだ。
「正解です。あれは振動の基礎単一系統魔法で、サイオンの波を作り出しただけですよ」
「しかしそれでは、はんぞーくんが倒れた理由が分かりませんが……」
「錯覚です」
「錯覚？」
「魔法師はサイオンを、可視光線や可聴音波と同じように知覚します。
サイオンの波動に曝された魔法師は、実際に自分の身体が揺さぶられたように錯覚するんですよ。
いきなり激しい船酔いになったようなものです」
「でも、魔法師は普段から、サイオンの波動に慣れています。
立っていられないほどのサイオン波なんて、そんな強い波動を、一体どうやって……？」
「波の合成、ですね」
「リンちゃん？」
「振動数の異なるサイオン波を三連続で作り出し、三つの波がちょうど服部君と重なる位置で合成されるように調整して、巨大波を作り出したんでしょう。
よくもそんな、精密な演算が出来るものだと思いますが」
「お見事です、市原先輩」
鈴音は達也の演算能力に呆れているが、それを初見で見抜いた鈴音の方が凄いのではないか、と達也は思った。
しかし、鈴音の本当の疑問点は、もっと別にあったようだ。
「それにしても、あの短時間にどうやって振動魔法を三回も発動できたんですか？
それだけの処理速度があれば、実技の評価が低いはずはありませんが」

正面から成績が悪いと言われ、達也としては苦笑することしか出来ない。

その代わり、あずさが怖々と、推測の形で答えてくれた。

「あの、もしかして、司波くんのＣＡＤはシルバー・ホーンじゃありませんか？」

「シルバー・ホーン？　シルバーって、あの謎の天才魔工師トーラス・シルバーのシルバー？」

真由美に問われ、あずさの表情はパッと明るくなった。

時に「デバイスオタク」と揶揄されることもあるあずさは、嬉々として語り出した。

「そうです！　フォア・リーブス・テクノロジー専属、その本名、姿、プロフィールの全てが謎に包まれた奇跡のＣＡＤプログラマー！世界で始めてループ・キャスト・システムを実現した天才！

あっ、ループ・キャスト・システムというのはですね、通常の起動式が魔法発動の都度消去され、同じ術式を発動するにもその都度ＣＡＤから起動式を展開し直さなければならなかったのを、起動式の最終段階に同じ起動式を魔法演算領域内に複写する処理を付け加えることで、魔法師の演算キャパシティが許す限り何度でも連続して魔法を発動できるように組まれた起動式のことで、理論的には以前から可能とされていたんですが魔法の発動と起動式の複写を両立させる演算能力の配分がどうしても上手く行かなかったのを……」

「ストップ！　ループ・キャストのことは知ってるから」

「そうですか……？

それでですね、シルバー・ホーンというのは、そのトーラス・シルバーがフルカスタマイズした特化型ＣＡＤのモデル名なんです！

ループ・キャストに最適化されているのはもちろん、最小の魔法力でスムーズに魔法を発動できる点でも高い評価を受けていて、特に警察関係者の間では凄い人気なんですよ！

現行の市販モデルであるにもかかわらず、プレミアム付で取引されているくらいなんですから！」

息が切れたのか、胸を大きく上下させながら、あずさは目をハート型にして達也の手元を見ていた。
「でも、リンちゃん。それっておかしくない？」
「ええ、おかしいですね。
ループ・キャストはあくまでも、全く同一の魔法を連続発動する為のもの。
同じ振動魔法といえども、波長や振動数が変われば、起動式も微妙に異なります。
その部分を変数にしておけば同じ起動式を使えますが、座標・強度・持続時間に加えて、振動数や波長まで変数化するとなると……まさか、それを実行しているというのですか！？」
今度こそ驚愕に言葉を失った鈴音の視線に、達也は軽く、肩をすくめた。
「多変数化は処理速度としても演算規模としても干渉強度としても評価されない項目ですからね」
「……実技試験における魔法力の評価は、魔法式の構築速度、魔法式の規模、対象物の情報を書き換える強度で決まる。
なるほど、テストが本当の能力を示していないとはこういうことか……」
呻き声を上げながら、シニカルな達也の言葉に応えたのは、半身を起こした服部だった。
「はんぞーくん、大丈夫ですか？」
「大丈夫です！」
少し腰を屈めて、覗き込むように身を乗り出してきた真由美に対し、寄せられて来た顔から逃げるように、服部は慌てて立ち上がった。
「そうですね。ずっと気がついていたようですし」
今の服部の台詞は、彼女たちの話を聞いていなければ出てくるはずのなかったものだ。
屈めていた身体を起こして納得顔で頷く真由美に向かって、

「いえ、最初は本当に意識がなかったんです！」
慌てて言い訳を始める姿は、
「意識を取り戻した後も朦朧としていて……身体を動かせるようになったのはたった今なんですよ！」
何と言うか……ある種の感情が容易に推測できるものだった。
「そうですか……？　それにしては、私たちが話していたことをしっかり理解しているようですけど？」
「……ええと、それはですね！　こう、朦朧としながらも、耳に入って来たと言いますか……」
そしてどうやら、真由美自身、服部が自分に向けている感情を、しっかり理解しているようだった。
悪女？、と思ったが、言葉の持つイメージと彼女の持つ雰囲気に何処かそぐわないものを感じて、達也はそこで考えるのを止めた。
実にどうでもいいことだと、気づいた所為でもある。
呼び止められたことで中断していた行為を、再開する。
……と言うほど大袈裟なことでもなく、単にＣＡＤをケースへ戻すだけなのだが。
物欲しそうに自分の手元を見詰めるあずさの視線には、気づかないふりをする。
手伝いたそうにしている妹の視線も、今回は無視。
深雪は余り、機械に強い方ではない。
メカ音痴、あるいはハイテクアレルギーというほど酷くはないが、彼のＣＡＤは色々と特殊なチューニングを施した結果、並の高校生程度では扱いきれない代物になっている。
カートリッジを入れ替えたりセキュリティを再設定したりとゴソゴソやっている背中越しに、足音と気配が近づいてきた。
ようやく言い訳を終えたらしい。
今やっている作業は別に後回しでも構わないものだったが、達也は敢えて、振り向かなかった。
「司波さん」

「はい」
歯切れの悪いテノールに、深雪が答える。
この部屋に男性は達也を含めて二人しかいないのだから、声の調子が今までと別人のように異なっていても、相手が誰か、間違えようもない。
「さっきは、その、身贔屓などと失礼なことを言いました」
また、話しかけた相手が誰であるかも、間違えはしない。
「目が曇っていたのは、私の方でした。許して欲しい」
「わたしの方こそ、生意気を申しました。お許し下さい」
深々とお辞儀をしているのが、背中越しでも手に取るように分かる。
どちらが兄か姉か分からない大人の対応にこっそり口の端を吊り上げながら、達也はケースをロックした。
おもむろに振り返る。
一瞬、たじろいだ表情を見せるも、服部はすぐに、強気な顔を取り戻した。
息継ぎは、和解の準備か、再戦の前触れか。
可能性は、現実とならぬまま、消えた。
結局、服部は、達也と視線をぶつけ合っただけで踵を返した。
隣でムッとする気配が生じたので、軽く肩を叩いておく。
今日から同じ生徒会で仕事をするのだから、感情的なしこりを残しておくのは、何より深雪自身の為にならない。
そんな彼の意図が伝わったのか、深雪はすぐに落ち着きを取り戻した。
「生徒会室に戻りましょうか」
鈴音、あずさ、服部を背後に従えた真由美の顔には「しょうがないなぁ」とでも言いたげな表情が浮かんでいる。
その後ろで、達也の視線に気づいた摩利が、他の四人に気づかれないよう肩をすくめていた。

1－（12）　委員会（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

1－（12）　委員会

事務室にＣＡＤを預け直し、達也が再び生徒会室を訪れると、いきなり腕に組み付かれた。

壁際であずさから端末の操作を教わっていた深雪が、こちらを見て眉を吊り上げたのに対し、不可抗力だとアイコンタクトのメッセージを送る……が、理解されたかどうかは疑わしかった。

投げ飛ばそうと反射的に動いた身体を強制停止させた隙をつかれた、とはいえ、摩利は体術の方もかなりのレベルのようだ。

「さて、色々と想定外のイベントが起こったが、当初の予定通り、委員会本部へ行こうか」

深雪が端末へ視線を戻した。渋々と、だが。

服部は達也が入室してから一度も顔を上げていない。

どうやら、彼のことは無視するという方向で、自分の感情と折り合いを付けたようだ。それは、達也にとってもありがたいことだった。

真由美は能天気に手首の先だけで手を振っている。一体何がしたいのか、あるいは言いたいのか……彼女は達也が出会った中で、最も不可解な人物かもしれない。

それも、今は後回しだ。

達也はおとなしく、摩利の後に続いた。

◇◆◇◆◇◆◇

部屋の奥、普通なら非常階段の設置されている場所に、風紀委員会本部への直通階段があった。

消防法は無視なのか？

とも思ったが、生徒＝見習いとはいえ優秀な魔法師が使用する施設で消防法を遵守することに余り意味がないのは確かだ。減速魔法

を使えば火は消えるし、煙は収束・移動の複合魔法で排出できる。実際に、超高層建築の大規模火災は、魔法師にとって最も華々しい活躍の場の一つだ。

エレベーターでなかった分だけ、許容範囲と思うことにした。

「少し散らかっているが、まあ適当に掛けてくれ」

少し、なのだろう。確かに、足の踏み場がないとか椅子が荷物でふさがっているとか、そこまで散らかってはいない。

だが、とても綺麗に整理された生徒会室から直行すると、少しという表現に抵抗を感じてしまうのも、仕方のないことではないだろうか。

書類とか本とか携帯端末とかＣＡＤとか、とにかく色々な物で埋め尽くされた長机の前に、半分引き出された状態の椅子があったので、軽く位置を直してから達也は腰を下ろした。

「風紀委員会は男所帯でね。整理整頓はいつも口を酸っぱくして言い聞かせているんだが……」

「誰もいないのでは、片付かないのも仕方がありませんよ」

皮肉なのか慰めているのか、どちらともとれる達也の発言に、摩利の眉がピクッ、と動いた。

「……校内の巡回が主な仕事だからな。部屋が空になるのも仕方がない」

現在、この部屋にいるのは二人きり。委員会の定員は九名ということだが、その倍は入れそうな広さでこの閑散とした空気は、物が散らばっていることによる無秩序感をむしろ増幅していた。

「……さてと、これ、片付けてもいいですか？」

「なに……？」

「魔工技師志望としては、ＣＡＤがこんな風に乱暴に放置されている状態は、耐え難いものがあるんですよ。サスペンド状態でほったらかしになっている端末もあるようですし」

「魔工技師志望？　あれだけの対人戦闘スキルがあるのに？」

「俺の才能じゃ、どう足掻いてもＣ級までのライセンスしかとれま

せんから」
　他人事のように淡々と返された自虐の回答に反論しようとして、反論すべき言葉が見つからないことに摩利は愕然とした。
　多くの国において、魔法師はライセンス制の下に管理されている。ライセンス発行に国際基準を導入しているところも多く、この国もその一つだ。
　企業に勤めるにしても官公庁に勤めるにしても個人で営業するにしても、仕事の難度に応じて必要とされるライセンスが指定されており、ランクの高いライセンスを持つ魔法師ほど高い報酬を得られる仕組になっている。
　国際ライセンスの区分はＡからＥの五段階。
　選定基準は魔法式の処理速度、規模、干渉力、つまり、学校の実技評価と同じ。と言うより、学校の実技評価基準が国際ライセンスの評価基準に沿って設定されているのである。
　警察や軍のように特殊な基準を採用しているところもあるが、その場合も評価はあくまで「警官として」「軍人として」であり、魔法師としての評価ではない。
「……それで、ここを片付けても構いませんか？」
「あ？、ああ、あたしも手伝おう。話は手を動かしながら聞いてくれ」
　慌てて立ち上がった彼女は、見た目以上に気配りの人かもしれない。
　座ったまま目の前の書類整理から始めた達也の方が図太いのかもしれないが。
　もっとも、気持ちと成果が必ずしも一致しないのも、また事実。
　手を動かす速度は両者同じだが、達也の手元にどんどんスペースが出来ているのに対し、摩利の前は何故か一向に長机の天板が見えてこない。
　チラッと達也が目を動かす。
　小さく、ため息。

摩利は諦めて手を止めた。
「すまん。こういうのはどうも苦手だ……」
この部屋の現状は、彼女に最大の責任があるのではないかと達也は思った。
思っただけで、口にしない程度には、彼も大人だったが。
「それにしても良く分かるな」
「何がでしょう？」
「書類の仕分けだよ。適当に積んでいるだけかと思ったら、きちんと分類されているじゃないか」
「……すみません、机に座るのはちょっと……」
開き直ったのか、彼が場所を空けた机の上に、摩利はもたれ掛かるように腰掛けて書類の束をパラパラと見ている。スカートの裾が彼の腕に触れそうな密着具合だ。
「ああ、悪い」
少しも悪いと思っていない口調だったが、これも指摘する必要のないことだった。
椅子を動かして、次のエリアに取り掛かる。紙束の中からブックスタンドを掘り起こして本を立てて行く。今時分、紙の本もブックスタンドもかなり珍しいものだ。
ましてそれが、魔法書ともなれば。
「君をスカウトした理由は――そういえば、さっきほとんど説明してしまったな。
未遂犯に対する罰則の適正化と、二科生に対するイメージ対策だ」
「憶えていますが、イメージ対策の方はむしろ逆効果ではないかと。……中を見てもいいですか？」
本を並び終え、端末の整理に取り掛かる。作業中のデータを見てもいいかどうか摩利に訊ね、首を縦に振る仕草で了解を取ると、サスペンド状態の端末は作動状態に復帰させてから電源を切り、電源の切れていた端末はそのまま収納形態に戻して、一箇所にまとめていく。

「どうしてそう思う？」
「自分たちは今まで口出しできなかったのに、同じ立場のはずの下級生にいきなり取り締まられることになれば、面白くないと感じるのが普通でしょう」
席を立ち、壁際のキャビネットを物色する。
空いている棚に端末を積み上げる背後から「それもそうか」という無責任な返事が聞こえた。
「だが同じ一年生は歓迎すると思うがね。クラスメイトに話くらいしたんじゃないのか？」
「それはそのとおりですが……」
端末を並べ終えて、別のキャビネを漁る。
「一科生の方には歓迎に倍する反感があると思いますよ」
ようやく目当ての物が見つかったのか、屈めていた腰を伸ばして肩を一回、グルリと回すと、既にジャケットを脱いでいたシャツの袖を捲り上げた。
「反感はあるだろうさ。だが入学したばかりの今なら、まだそれほど差別思想に毒されていないんじゃないか？」
「どうですかねぇ？」
ごそごそとキャビネの中の物を並べ替えて取り出したのは、ＣＡＤのケースだった。
「昨日はいきなり『お前を認めないぞ』宣言を投げつけられましたし」
袖を捲った手首にアース用のリストバンドを巻いて、一塊にしたＣＡＤの山に手を伸ばす。
「よくそんな物を持っていたな……森崎のことか」
「結構便利ですよ、これ……彼のことを知っているんですか？」
「教職員推薦枠でうちに入ることになっている」
「えっ？」
ＣＡＤの状態をチェックしていた手から力が抜けた。
机の上に落としそうになるのを、慌てて持ち直す。

「君でも慌てることがあるんだな」
「そりゃそうですよ」
ニヤニヤと笑みを浮かべた摩利に、達也はため息をついた。
変な対抗意識を持つのは止めて欲しいものだ。
「昨日騒ぎを起こしたんで、推薦を取り下げさせることも出来るし、実際、取り下げさせるつもりだったんだが、昨日の一件は君も無関係ではないからね」
「当事者です」
「そう、自称当事者の君をスカウトしているのに、彼を断るのは難しいだろ」
「いっそ、どちらも入れないというのはどうです？」
「嫌なのか？」
いきなりストレートな質問を向けられ、再び手が止まる。
とりあえず、手に持つＣＡＤをケースにしまい、顔を上げる。
机に腰掛けこちらを見下ろす摩利の顔に、笑みはなかった。
切れ長の眼が射抜くように彼を見ていた。
「……正直なところ、面倒だ、と思っています」
「フン……それで？」
「面倒ですが、今更引き下がれないとも思っていますよ」
摩利の顔に、にんまりと人の悪い笑みが再び浮かんだ。
その悪どさが、彼女のシャープな美貌を二割り増しに見せている。
「難儀な人ですね、先輩も……」
「屈折してるな、君も」
残念ながら、一本取られたことを認めざるを得ない、と達也は思った。

◇◆◇◆◇◆◇

「……ここ、風紀委員会本部よね？」
階段を下りてきた真由美の、開口一番がこの台詞だった。

「いきなりご挨拶だな」
「だって、どうしちゃったの、摩利。
リンちゃんがいくら注意しても、あーちゃんがいくらお願いしても、全然片付けようとしなかったのに」
「事実に反する中傷には断固抗議するぞ、真由美！
片付けようとしなかったんじゃない、片付かなかったんだ！」
「女の子としては、そっちの方がどうかと思うんだけど」
真由美が目を細めて斜に睨むと、摩利は咄嗟に顔を背けた。
「別にいいけどね……ああ、そういうこと」
固定端末のメンテナンスハッチを開いて中を覗き込んでいる達也の姿を目に留めて、真由美は納得顔で頷いた。
「早速役に立ってくれてる訳か」
「まあ、そういうことです」
背中を向けたまま答えた後、ハッチを閉じて、達也は振り向いた。
「委員長、点検終わりましたよ。少し埃が溜まっていただけですから、もう問題ないはずです」
「ご苦労だったな」
鷹揚に頷いて見せる摩利だったが、心なしか、こめかみの辺りが汗ばんでいるようにも見える。
冷や汗で。
「ふーん……摩利を委員長、って呼んでるってことは、スカウトに成功したのね」
「最初から俺に拒否権はなかったように思いますが……」
諦念を滲ませ投げ遣りな声で、人の悪い笑みを浮かべている真由美を見ようともせず達也は応える。
その態度が、真由美にはお気に召さなかったようだ。
「達也くん、私に対する対応が少しぞんざいじゃない？」
同じような印象を受けた場面でこれまでは流してきたが、今回は何故か、スルー出来ないものを達也は感じた。
「会長、念の為にといいますか、確認しておきたいことがあるんで

すが」
「何かな？」
「会長と俺は、入学式の日が初対面ですよね？」
達也の問い掛けに、真由美の目は丸くなった。が、それが段々と元の大きさに戻り、更に細められていくにつれて、邪な、としか表現しようのない笑みがその蠱惑的な顔を覆った。
自分がとんでもない悪手を打ってしまったことを達也は悟った。
さっき、摩利が同じような笑みを浮かべていたのを思い出して、なるほど、類が友を呼んだんだな、と達也は現実逃避気味にそう思った。
「そうかぁ、そうですかぁ……うふふ……」
小悪魔、という言葉がピッタリの笑顔だ。
「達也くんは、私と、実はもっと前に会ったことがあるんじゃないか、と思っているのね？
入学式の日、あれは、運命の再会だったと！」
「いえ、あの、会長？」
何なのだろうか、このテンションの高さは。
「遠い過去に私たちは出会っていたかもしれない。運命に引き裂かれた二人が、再び運命によってめぐり合った、と！」
本気で陶酔しているのなら単なるアブナイ人だが、一々芝居がかっていてそれが意識的な演技だと分かるようにやっているところが、尚更性質（たち）が悪かった。
「……でも残念ながら、あの日が初対面ね、間違いなく」
「……そうだと思っていました」
「ねっ、ねっ、もしかして、運命感じちゃった？」
「……すみません、何故そんなに楽しそうなんでしょうか？」
質問に質問で返しても、答えは得られない。
期待に満ちた眼差しを向けられるだけだ。
彼女はＳ気質だ、と達也は心のメモ帳に書き加えた。
とにかく、答えなければなるまい。

ため息を紫煙代わりに、間を取って、達也は答えた。
「……これが運命ならｆａｔｅじゃなくてｄｏｏｍですね、きっと……」
達也の回答に、真由美は表情を曇らせて顔を背けた。
罪悪感、を感じさせられたのは、幸いにもか、不幸にもか、一瞬だった。
「……チッ」
今度は達也が目を見開く番だった。
微かではあったが、この余り上品でない、はっきり言って下品な音は、舌打ち？
「あの、会長？」
「はい、何でしょう」
正面に戻された顔には、新入生男子一同を魅了した上品な微笑み。
「……何だか会長のことが分かってきた気がしますよ」
脱力する達也に、真由美が仮面を脱いで元の素顔を見せた。
即ち、あの、人の悪い笑顔を。
「そろそろ冗談は止めようか。達也くん、あんまりノリが良くないし」
「服部のようには行かないな、真由美。お前の色香もコイツには通用しないか」
「人聞きの悪いことを言わないで頂戴。それじゃまるで、私が手当たり次第に下級生を弄んでいるみたいじゃない」
「ええとですね、俺が訊きたかったのは」
不用意な質問をしたことを後悔しながら、達也は場の収拾にかかった。これ以上この二人の毒気に当てられていると、自分の方がボロを出しそうだった。
「真由美の態度が違うのは、君のことを認めているからだよ、達也くん。
君に何か、自分と相通ずるものを感じたのだろう。
この女はとにかく猫被りだからな。自分が認めた相手にしか、素

顔は見せない」
「摩利の言うことを信じちゃダメよ、達也くん。
でも、認めているというのは当たりかな？
何だか他人って気がしないのよね。
運命を感じちゃってるのは、実は私の方なのかも」
舌でも出しそうな悪戯っぽい、憎めない笑顔。
人間的な魅力において、彼女には到底太刀打ちできそうにない、
と達也は思った。

◇◆◇◆◇◆◇

真由美が降りてきたのは、今日はもうすぐ生徒会室を閉めるということを伝える為だった。そのついでに達也の様子を見に来た、という次第だが、ついでの方がメインになっていたのは、気の所為ではあるまい。
入学式が終わったばかりで、色々と忙しかったのが一段落したところらしい。
明日からは新入部員獲得競争で騒がしくなり、風紀委員会の出番も増えるということで、こちらも今日は切り上げよう、という話になった。
既に人手としてカウントされている点については、今更何も言わないことにしておく。
今の情報システムは、昔のように立ち上げ処理や終了処理は必要ない。
スイッチを切るだけなので何ヶ月もほったらかしに等しい扱いでも狂うことはないし、仮にスイッチを切り忘れても自動的に休止状態になる。
散々整理整頓した後なので、後はセキュリティを設定するだけ、だったが、ちょうどタイミング良く――か、悪くか、委員会本部に来訪者があった。

「ハヨースッ」
「オハヨーございまス！」
威勢のいい掛け声が部屋に響く。
「おっ、姐さん、いらしたんですかい」
ここは何処で、何時の時代だろう、と達也は思った。
上背は然程でもないが、やけにゴツゴツした体つきの、ねじり鉢巻が似合いそうな短髪の男が、とても板についた口調で「姐さん」と呼んだ、その相手は――
（渡辺先輩のことなんだろうなぁ……）
当の本人は、と見ると、微妙に恥ずかしそうだった。
彼女がまともな神経を（少しでも）持っていたことに、場違いな安堵を感じる。
「委員長、本日の巡回、終了しました！　逮捕者、ありません！」
もう一人の方は、比較的普通の外見と、比較的普通の言葉遣いだが、とにかくやたら、威勢がいい。
直立不動で報告する姿は、軍人か、警官か、あるいは今も変わらぬ体育会系かといった風情だ。
「ところで姐さん、そいつは？　新入りですかい？」
ごつい方の男が、呆気に取られている達也の方へ歩いてくる。
体重もそれ程ではないはずだが、不思議と、のっしのっし、という形容が似合う歩き方だ。
その行く手を、さり気なく、摩利が遮った、と見るや――
「ってぇ！」
スパァン！　という小気味いい音とともに、男が頭を抑えて蹲っている。
摩利の手には、何時の間に取り出したのか、硬く丸めたノート。
デジャヴを誘う光景だった。
「姐さんって言うな！　何度言ったら分かるんだ！　鋼太郎、お前の頭は飾りか！」
「そんなにポンポン叩かねえでくださいよ、あ……いえ、委員長」

電光石火で目の前に突きつけられた丸い紙筒に、鋼太郎と呼ばれた男は慌てて肩書きを取り替えた。
緊張に強張った顔を前に、摩利は肩を落としてため息をついた。
「……こいつはお前の言うとおり新入りだ。１－Ｅの司波達也。生徒会枠でうちに入ることになった」
「へぇ……紋無しですかい」
興味深げに、達也のブレザーを眺める。
「辰巳先輩、その表現は、禁止用語に抵触するおそれがあります！この場合、二科生と言うべきかと思われます！」
そう言いながらも、冷やかすような、値踏みするような態度自体を注意しようとはしない。
「お前たち、そんな単純な了見だと足元をすくわれるぞ？ここだけの話だが、さっき服部が足元をすくわれたばかりだ」
だが、ニヤニヤと、からかうように告げられたその事実に、二人の表情は急に真剣味を増した。
「……そいつが、あの服部に勝ったってことですかい？」
「ああ、正式な試合でな」
「何と！？　入学以来負け知らずの服部が、新入生に敗れたと！？」
「大きな声を出すな、沢木。ここだけの話だと言っただろう」
まじまじと見られて居心地悪いことこの上なかったが、相手はどうやら上級生で、風紀委員会の先輩だ。ここは我慢する以外の選択肢はない。
「そいつは心強え」
「逸材ですね、委員長」
拍子抜けするほど簡単に、二人は見る目を変えた。いっそ天晴れと言いたくなる切り替えの速さだ。
「意外だろ？」
「はっ？」
余りに端的過ぎて、何を問われたのか分からなかったが、摩利の方でも答えを期待しての問いかけではなかったようだ。

「この学校はブルームだ、ウィードだとそんなつまらない肩書きで優越感に浸り劣等感に溺れるヤツらばかりだ。正直言って、うんざりしていたんだよ、あたしは。だから今日の試合は、ちょっとばかり痛快だったんだがね。

幸い、真由美も十文字もあたしがこんな性格だって知ってるからな。生徒会枠と部活連枠は、そういう意識の比較的少ないヤツを選んでくれている。優越感がゼロって訳には行かないが、きちんと実力が評価できるヤツらばかりだ。

残念ながら、教職員枠の三人までそんなヤツばかり、とは行かなかったが、ここは君にとっても居心地の悪くない場所だと思うよ」

「３－Ｃの辰巳鋼太郎（こうたろう）だ。よろしくな、司波。腕の立つヤツは大歓迎だ」

「２－Ｄの沢木碧だ。君を歓迎するよ、司波君」

鋼太郎、沢木が、次々と握手を求めてくる。

確かに少し、意外に感じた。そして、確かに、悪くない空気だった。

挨拶を返し、沢木の手を握り返す。が、何故か、手が離れない。

「十文字さんというのは、課外活動連合会、通称部活連代表の、十文字会頭のことだ」

これを教えてくれる為か？　しかしそれなら、手を離してもよさそうなものだが。

「それから自分のことは、沢木と苗字で呼んでくれ」

手にかかる圧力が、達也の意識を現実に引き戻す。

ギリギリと軋みを上げそうな握力に、場違いな感心を覚えた。

この学校は魔法だけでなく、他の面でも優秀な生徒が集まっているようだ。

「くれぐれも、名前で呼ばないでくれ給えよ」

どうやらこれは、警告のつもりらしい。

別にこんな回りくどいことをしなくても、上級生を名前で呼ぶような習慣はないのだが。

「心得ました」
そう言いながら右手を細かく捻って、握られた手を解く。
沢木本人よりも、鋼太郎の方が驚いた顔をしていた。
「ほう、大したもんじゃねえか。沢木の握力は百キロ近いってのによ」
「……魔法師の体力じゃありませんね」
自分のことを棚にあげて、達也は軽口を叩いた。
少なくともこの二人とは、上手くやっていけそうな気がしていた。

１－（１３）　幕情（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

１－（１３）　慕情

ＣＡＤは伝統的な補助具である杖や魔法書、呪符に比べて高速、精緻、複雑、大規模な魔法発動を可能とした、現代魔法の優位性を象徴する補助器具だ。

しかし、全ての面において伝統的な補助具に勝っているかというと、そうではない。

精密機械であるＣＡＤは、伝統的な補助具に比べて、よりこまめなメンテナンスを必要とする。

特に、使用者のサイオン波特性に合わせた受信・発信システムのチューニングは重要で、ＣＡＤを用いた魔法はこの調整の良し悪しで起動速度が五割から十割以上、変動すると言われている。

ＣＡＤの調整は魔工技師の仕事であり、腕の良い魔工技師が重宝される理由だ。

サイオン波特性は肉体の成長、老衰によって変化し、体調によっても影響を受ける。

だから、本来は毎日、使用者の体調に合わせた調整を行うのが望ましいが、ＣＡＤの調整にはそれなりに高価な専用の機械が必要になる。

軍や警察、中央官庁、一流研究機関、有名学校、資金力の豊富な大企業ならば自前でＣＡＤの調整装置と人員を用意することも出来るが、中小企業や個人のレベルで自家用の整備環境を整えることはまず、出来ない。そういうところに所属する魔法師は、月に一、二回、魔法機器の専門店やメーカーのサービスショップで定期点検を受けるのがせいぜいだ。

第一高校はこの国でもトップクラスの名門校だけあって、学校専用の整備施設を持っている。生徒は教職員と共に、学校でＣＡＤの調整を行うのが普通だ。

だが達也の自宅には、ある特殊な事情から、最新鋭のＣＡＤ調整

装置が備わっていた。

◇◆◇◆◇◆◇

夕食後、地下室を改造した作業室で自分のＣＡＤを調整していた達也は、たった一人に等しい同居人に声を掛けられて振り向いた。
「遠慮しないで入っておいで。ちょうど一段落ついたところだから」
その言葉は嘘ではない。また、一段落つくタイミングを見計らっていたからこそ、深雪は彼に声を掛けたのだろう。
「失礼します。お兄様、ＣＡＤの調整をお願いしたいのですが……」
彼女の手には、携帯端末形状のＣＡＤ。
近づくにつれて心地よく鼻腔をくすぐる、ほのかな石鹸の香り。
病院の検査着の様な、簡素なガウンを身に着けている。
「設定が合っていないのか？」
これは、本格的な調整を行うときのスタイルだ。
「滅相もございません！　お兄様の調整は、いつも完璧です」
過分な賞賛はいつものことだから、特に改めさせようともしない。
こんなことで口論するのは不毛過ぎる、と悟る程度の経験値はあった。
だが、フルメンテナンスは三日前に行ったばかりだ。いつもは一週間のインターバルだから、何か急な理由があってのことだと、考えずにはいられない。
「ただ、その……」
「遠慮は要らないよ。いつも言っているじゃないか」
「すみません、実は、起動式の入れ替えをお願いしたいと思いまして……」
「なんだ、そういうことか。本当に、遠慮は要らないんだよ。かえって心配になるからね」
妹の髪を軽くかき乱し、手の中からＣＡＤを抜き取る。
深雪は少し恥ずかしそうに俯いた。

「それで、どの系統を追加したいんだ？」
ＣＡＤに登録できる起動式は一度に九十九本。これは最新鋭機を更にチューンアップした深雪のＣＡＤでも変わらない限界だ。
一方、起動式のバリエーションは、どこまでを起動式に組み込み、どこから自分の魔法演算領域で処理するかによって、事実上、無数に分かれる。
一般的には、座標、強度、持続時間を変数として魔法演算領域で追加処理し、それ以外のファクターは起動式に組み込んでおくというパターンが採られる。だが強度を起動式の定数として演算処理を軽減し発動速度を高めるという手法が採られることも少なくない。
防御系の魔法式は自分を中心とした相対座標を定数化することも多いし、接触系魔法で全ての値を定数とするというテクニックも実習授業の中で紹介されている。
深雪はこれらの例とは逆に、出来るだけ定数項目を減らして融通性を高めた起動式を登録するようにしている。
十五歳にして、一人の魔法師が習得できる魔法数の平均値を大きく上回る多彩な魔法を使いこなす深雪には、九十九という制限数は少なすぎるのだ。
「拘束系の起動式を……対人戦闘のバリエーションを増やしたいのです」
「んっ？　お前の減速魔法があれば、わざわざ拘束系を増やす必要はないと思うが？」
多種多様な持ち札の中でも、深雪は特に減速系を得意とする。減速系のバリエーションである冷却魔法では、近似的に絶対零度を作り出すことが出来るほどだ。
「お兄様もご存知の通り、減速魔法は個体作用式がほとんどで、部分作用式は困難です。
部分減速、部分冷却も不可能ではありませんが、発動に時間が掛かり過ぎます。
今日の試合を拝見して思ったのです。

スピードに重点を置いた、最小のダメージで相手を無力化できる術式が、わたしには欠けているのではないかと」

「うーん……深雪はそういうタイプじゃないと思うけどなぁ。相手の不意をつく、スピードで相手を攪乱するというのも一つの戦法だが、お前の場合は絶対的な魔法力で圧倒できるんだから、広域干渉で相手の魔法を無効化しつつ相手の防御力を上回る規模と強度の魔法をぶつけるという正統派の戦法の方が合ってるんじゃないか？」

「……ダメでしょうか？」

「いや、ダメということはない。そうだな……生徒会で、同じ学校の生徒相手にとる戦法としては、そういうのも必要になるかもしれないな。

分かったよ。手持ちの魔法を削らなくても済むように、同系統の起動式を少し整理してみよう。

本当は、もう一つＣＡＤを持つ方がいいんだけど」

「一度に二機のＣＡＤを操ることが出来るのは、お兄様だけです」

「その気になればお前にも出来るって」

ぷいっ、とそっぽを向いた深雪の頭を、苦笑しながら何度か撫でる。

彼女の小さな頭がすっぽり入りそうな兄の手の優しい感触に、深雪は目を細めた。

「じゃあ先に、測定を済ませようか」

妹の機嫌が直ったのを見て、達也が技術者の顔で言う。

手の平の感触を惜しみつつ一歩下がった深雪は、するりとガウンを脱いだ。

現れたのは、あられもない半裸の姿。

計測用の寝台に横たわる深雪の身体を覆うのは、一対の白い下着のみ。

清楚な純白が、この上なく扇情的な色に変わるシチュエーション。

例え妹であっても、否、類稀な美少女である深雪だから余計に、平静ではいられない状況だ。

だが、隠せない羞恥に目を潤ませた妹の眼差しを受け止める達也の眼は、一切の感情を映し出していなかった。

今の彼は、観察し、分析し、記録する、生身の身体で構成されたマシン。

感情を差し挟むことなく、あるがままの事象を認識する、魔法師の目指す一個の理想形を体現していた。

「お疲れ様、終わったよ」

達也の合図を受けて、深雪が寝台から起き上がる。

この種類の計測は、何処ででも行われているというものではない。

寧ろ、これほど精密な測定を行う調整は、珍しい部類に属する。

学校の調整施設では、ヘッドセットと両掌を置くパネルで測定している。

目を逸らしたまま達也から受け取ったガウンを羽織った深雪は、拗ねた顔で達也の背中を睨んだ。

兄は背もたれのない椅子に座り、何事も無かったように、端末に向かっている。

いや、ように、ではない。

何事も無かったし、これは毎週やっていることだ。

一々意識していたらきりがない。

恥ずかしさが無くなることはないし、羞恥心を無くしたくないとも思っているが、それ以上、何かを思うことはない。

思わないようにしている。

兄が平静でいてくれるのは、深雪にとってもありがたいことだ。

――いつもなら。

「お兄様、ずるいです……」

「深雪!?」

声がひっくり返っていた。

――滅多に聞くことのない、兄の動揺し、狼狽した声。
――その声に、乱れた鼓動に、高まる体温に、妖しい満足を覚える自分がいた。
ガウンを羽織り、前を閉じぬまま、達也の背中におぶさる様にしなだれかかった深雪は、頬と頬を摺り寄せながら、柔らかな双つのふくらみを背中に押し付けながら、実の兄の耳元で尚も囁く。
「深雪はこんなに恥ずかしい思いをしておりますのに、お兄様はいつも、平気なお顔……」
「いや、深雪、あのな？」
「それともわたしでは、異性のうちに入りませんか？」
「入ったらまずいだろう！」
正論だ。が、その正論が、言葉として具現化した瞬間、意識してはならないことへと無理やり意識を引きずっていく鉄鎖となる。
「深雪ではお気に召しませんか？　お兄様は七草先輩のような方がお好みですか？　それとも、渡辺先輩のような方がお好みですか？
本日は、随分親しくお話されていたご様子……」
「聞いていたのか！？」
そんなはずはない。
深雪はずっと、あずさから生徒会用の情報システムの操作を習っていたのだ。
第一、盗み聞きなどされていたら、達也が気づかないはずはない。
しかし、そんな反論を系統立てて組み立てる余裕は、今の彼には無かった。
「まあ、やはり……！　あのお二方はお美しいですものね」
「もしもし、深雪さん？　何か誤解されてはいませんか？」
「美人の先輩に囲まれて鼻の下を伸ばされていたお兄様は」
いつの間にか深雪の左手には、彼女のＣＡＤが握られていた。
「お仕置きです！」
「ぐわっ！」
完全に不意をつかれ、為す術もなく、深雪の放った振動波に、達

也は身体を痙攣させながら椅子から転がり落ちた。

（自己修復術式、オートスタート）

（コア・エイドス・データ、バックアップよりリード）

（魔法式ロード――完了。自己修復――完了）

気を失っていたのは一秒にも満たない刹那の時間。

一瞬以上、彼が意識を手放すことはない。

一瞬以上、倒れていることを、彼自身に許さない。

それは呪いにも似た、彼本来の魔法。

自然に開いた瞼の先には、上から覗き込む花の顔（かんばせ）。

「お兄様、おはようございます」

「……俺、何かお前を怒らせるようなことをしたっけ？」

「申し訳ありません、悪ふざけが過ぎました」

口では謝りながらも、深雪の顔は笑っている。

外では大人びた態度を崩すことの少ない妹の、年相応な可愛い笑顔。

この笑顔を前にすると、どうでもいいや、という思いしか湧いて来ない。

実際、他愛もない兄妹のじゃれ合いだ。

どれほど過激な手段をとろうとも、彼を最終的に傷つけることなど、この妹には出来ないのだから。

「勘弁してくれよ……」

差し出された手を取り、口ではぼやきながら、達也の顔も、笑っていた。

◇◆◇◆◇◆◇

目を覚ましたのはいつもの時間。

だが今朝はいつもより、寝起きが悪い気がした。

頭が少し、ぼんやりしている。

家の中に兄の気配はない。
朝の修行に行ったのだろう。
これも、いつものことだ。
あの兄は、毎晩彼女より遅くまで起きていて、毎朝彼女より早く目を覚ます。
一昨日のように、彼女の方が先に起きるのは本当に稀なことだ。
以前は身体を壊さないかと、心配したことがある。
今では、それが取り越し苦労だと分かっている。
彼女の兄は、あの人は、特別なのだ。
世間の人たちは、自分のことを天才だという。
自分たちとは違う、特別な人間だと称賛する。
――何も分かっていない。
本当に凄いのは、特別なのは、本物の天才は、兄だ。
あの人は、次元が違う。
彼らは知らない。
妬みを隠して自分に媚びへつらう彼女たちには、分からないだろう。
真に隔絶した才能は、嫉妬を超えて恐怖をもたらすものなのだと。
畏怖、ではなく、恐怖。
彼女たち兄妹の父親であるあの男が、その恐怖のあまりに、実の息子であるあの人に、どんな仕打ちをしてきたか、どんなに不当な扱いをしているのか、彼女は知っている。
兄は、自分がそれを知らないと信じている。
だから、知らない振りをしている。
あの男が兄の才を貶め、兄に偽りの挫折感を与えて心を、志を、遥か天上の彼方へ翔け上がる翼を折ってしまおうと今も画策していることを、本当は知っていた。
滑稽だった。
檻に閉じ込め鎖に繋いだつもりが、結局、息子の才能が自分を遥かに凌ぐものだと思い知る羽目になった。

自由を購う財力を、与えることになった。
唯一有していた拘束の力を、みすみす手放す羽目に陥った。
あの男に出来たのは、偽りの名を押し付け、世間の喝采を奪い取ることだけだった。
あの人はそんなものに興味がないと、知っているだろうに。
……思考がコントロールできない。
自分のことが、自分でない他人のことのように見えてしまう。
意識が、完全に覚醒していない、気がする。
眠りが、足りないのだろうか。
理由は分かっている。
昨晩の、あの出来事の所為だ。
あの時は平気でいられた。
狼狽する兄が珍しく、可笑しく、可愛いとさえ思えて。
気持ちで、優っていたから。
でも、兄と別れて、一人になって、ベッドに横になって、平気では、なくなった。
胸が高鳴って、眠れなかった。
心が乱れて、眠りに就けなかった。
愛しかった。
でも、
恋愛感情ではない。
恋であるはずがない。
あの人は実の兄だ。
わたしは、あの人の妹として相応しい者になろうと、これまで頑張ってきた。
かつてわたしが、あの人に助けられたように、何時かはあの人の助けになりたいと願ってきた。
わたしは、あの人に、何も求めない。
わたしは既に、無くしていたはずのこの命を、あの人に救ってもらったのだから。

今はあの人を縛る枷でしかないけれど。
何時かは、あの人を解き放つ鍵になりたい。
あの人の役に立ちたい。
――さしあたっては、朝食の準備。
あそこでもご飯は食べさせてもらえるのに、
律儀にお腹を空かせて、帰って来るはずだ。
美味しい朝御飯を食べてもらおう。
それが今、わたしに出来ることだから。

深雪は勢いをつけて立ち上がり、一つ、大きく、伸びをした。

１－（１４）　初仕事（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

1－（14）　初仕事

色々と特殊なところのある魔法科学校だが、基本的な制度は普通の学校と変わらない。

ここ第一高校にも、クラブ活動はある。

正規の部活動として学校に認められる為には、ある程度の人員と実績が必要である点も同じだ。

ただ、魔法と密接な関わりを持つ、魔法科学校ならではのクラブ活動も多い。

メジャーな魔法競技では、第一から第九まである国立魔法大学の付属高校の間で対抗戦も行われ、その成績が各校間の評価の高低にも反映される傾向にある。学校側の力の入れようには、一般のスポーツ名門校が伝統的な全国競技に注力する度合いを上回るかもしれない。九校戦と呼ばれるこの対抗戦に優秀な成績を収めたクラブには、クラブの予算からそこに所属する生徒個人の評価に至るまで、様々な便宜が与えられている。

有力な新入部員の獲得競争は、各部の勢力図に直接影響をもたらす重要課題であり、学校もそれを公認、いや、寧ろ後押ししている感もある。

かくして、この時期、各クラブの新入部員獲得合戦は、熾烈を極める。

「……という訳で、この時期は各部間のトラブルが多発するんだよ」

場所は生徒会室。

深雪の作った弁当をじっくり味わいながら、達也は摩利の説明に耳を傾けていた。

「勧誘が激しすぎて授業に支障を来たすことも。それで、新入生勧誘活動には一定の期間、具体的には今日から一週間という制限を設けてあるの」

これは、摩利の隣に座った真由美の台詞だ。
ちなみに達也の隣には、当然のように深雪が寄り添っている。
鈴音とあずさはいない。昨日は真由美が声を掛けていたからで、あの二人は普段、クラスメイトとお昼を食べているらしい。
なお、摩利も昨日と同じく自作弁当。一人だけダイニングサーバーの機械調理メニューを食べることになった真由美はかなりへそを曲げていたが、ようやく機嫌が直ったらしい。明日からは自分もお弁当を作ってくる、と張り切っていた。
「この期間は各部が一斉に勧誘のテントを出すからな。ちょっとしたどころじゃないお祭り騒ぎだ。
密かに出回っている入試成績リストの上位者や、競技実績のある新入生は各部で取り合いになる。
無論、表向きはルールがあるし、違反したクラブには部員連帯責任の罰則もあるが、陰では殴り合いや魔法の撃ち合いになることも、残念ながら珍しくない」
「ＣＡＤの携行は禁止されているのでは？」
「新入生向けのデモンストレーション用に許可が出るんだよ。一応審査はあるんだが、事実上フリーパスでね。
その所為で余計にこの時期は、学内が無法地帯化してしまう」
「学校側としても、九校戦の成績を上げてもらいたいから。新入生の入部率を高める為か、多少のルール破りは黙認状態なの」
課外活動の強制は生徒の人権を無視するものとして、何十年も前に所管省庁が禁止通達を出している。部活動の為にスカウトされた生徒も巷には溢れているし、学校選択の自由の建前でスポーツスカウトは事実上野放しにしているのだから自家撞着かつ意味のない通達なのだが、やはり、建前として無視できない効力を持ち続けている。
「そういう事情でね、風紀委員会は今日から一週間、フル回転だ。
いや、欠員の補充が間に合って良かった」
そう言いながらチラッと隣を見たのは、おそらく、嫌味のつもり

だろう。
「良い人が見つかってよかったわね、摩利」
笑顔でさらりと流して、二人とも眉一つ動かさないところを見ると、こういうやり取りは日常茶飯事年中行事か。
最後の一口を呑み込んで箸を置いた達也の湯飲みに、隣からお茶が注ぎ足される。
一口、喉を潤して、彼は小さな抵抗を試みた。
「各部のターゲットは成績優秀者、つまり一科生でしょう？　俺はあまり役に立たないと思いますが」
これは暗に、二科生を二科生が取り締まるべきという、昨日の摩利の建前論を言質としたサボタージュ宣言なのだが、
「そんなことは気にするな。即戦力として期待しているぞ」
すっぱりと却下された。
こうも真正面から切り捨てられると、流石に告げるべき二の句は無かった。
「……ハァ、分かりました。放課後は巡回ですね」
「授業が終わり次第、本部に来てくれ」
「了解です」
「会長……わたしたちも取り締まりに加わるのですか？」
深雪の言う「わたしたち」とは、生徒会役員のこと。表面的な人当たりの良さとは裏腹に、対人関係には少し気難しいところのある妹がこの生徒会には早くも溶け込んでいるのが窺われて、達也は微笑ましさを覚えた。
「巡回の応援は、あーちゃんに行ってもらいます。何かあった時の為に、はんぞーくんと私は部活連本部で待機していなければなりませんから、深雪さんはリンちゃんと一緒にお留守番をお願いしますね」
「分かりました」
深雪は神妙に頷いて見せたが、少しがっかりしていることが達也には見て取れた。

好戦的な性格ではないはずだが、実力的には問題ない。
新たに組み込んだ拘束系の術式を試してみたいのかもしれない。
そんな、本人に聞かれたら「違います！」と一喝され、更には「……お兄様のバカ」などと小声で罵倒されるかもしれない勘違いを抱きながら、達也はふと頭に浮かんだ疑問を口にした。
「中条先輩が巡回ですか？」
暗に、頼りないのではないか、という主張。
先と同じく「暗に」ではあったが、相手が違う所為か、今度は採り上げてもらえることになった。
「外見で不安になるのは分かるなぁ。でもね、達也くん、人は見かけによらないのよ」
「それは分かりますが……」
達也は寧ろ、あずさの気弱な性格を問題視したのである。
「ちょっと、いや、かなりかな？
気の弱いところが玉に瑕だけど、こういう時にはあーちゃんの魔法は頼りになるわよ」
「そうだな。
大勢が騒ぎ出して収拾がつかない、というようなシチュエーションにおける有効性ならば、彼女の魔法『梓弓』の右に出る魔法は無いだろう」
「梓弓……？　正式な固有名称じゃありませんよね？　系統外魔法ですか？」
「……君はもしかして、全ての魔法の固有名称を網羅しているのかい？」
「ふぁ～……達也くん、実は衛星回線か何かで、巨大データベースとリンクしてるんじゃない？」
目を見張って確認の為の問いを発した達也を、更に目を丸くして摩利と真由美が見詰め返した。
深雪はちょっと、吹き出しそうになったが、こういうシーンは初めてではないのでそれほど苦労することも無く慎ましやかな表情を

維持できた。

伝統的な魔法は、発生させる現象を象徴元素に当て嵌めて術式を分類していた。代表的な分類は「地」「水」「火」「風」の四大、四大に「空」を加えた五輪、「木」「火」「土」「金」「水」の五行など。「光」「闇」「虚」「無」「天」「月」「雷」「山」等が付け加えられることもある。

超能力研究を端緒とする現代魔法は、現象をその見掛けの性質ではなく作用面から分析し分類した。

即ち、

〔加速・加重〕
〔移動・振動〕
〔収束・発散〕
〔吸収・放出〕

以上、四系統八種類である。

無論、分類には必ず例外があって、現代魔法学においても四系統八種に分類できない魔法が認められている。

例えば四系統八種は作用面に着目した分類だから、超心理学にいうＥＳＰ、知覚器官外認識力、いわゆる「超感覚」は「知覚系魔法」として四系統魔法とは別分野の魔法とされており、この分野では超心理学的なアプローチも未だ健在だ。

現代魔法学が生まれてから百年足らず。魔法の実用化に多大な成果を上げてはいるが、学問としてはまだまだ未成熟ということなのだろう。

四系統魔法に属さない魔法は、知覚系魔法を含めて大きく三種類に分けられている。

一つは、対象物のエイドスを書き換えるのではなく、サイオンそのものを操作することを目的とする魔法で、これを無系統魔法と呼ぶ。真由美が得意とするサイオン粒子塊射出の魔法は無系統魔法の典型とされている魔法だ。達也が服部をＫＯした魔法も厳密には振動魔法ではなく無系統魔法になるのだが、四系統魔法と無系統魔法

の区別はそれほど厳格なものではない。
そして残るもう一つが、物質的な現象ではなく精神的な現象を操作する魔法で、これを総称して系統外魔法という。系統外魔法はまさしく系統に属さない、系統に分類できない魔法で、霊的存在を使役する神霊魔法・精霊魔法から読心、幽体分離、意識操作まで多種にわたる。
「達也くんお察しのとおり、あーちゃんの『梓弓』は情動干渉系の系統外魔法よ。
一定のエリア内にいる人間をある種のトランス状態に誘導する効果があるの」
情動干渉系魔法は精神干渉の魔法の一分類で、意思・意識ではなく衝動・感情に働きかける魔法を指す。
「梓弓は意識を奪う訳ではなく、意思を乗っ取る訳でもないので、相手を無抵抗状態に陥れることまではできない。
だが、個人ではなくエリアに対して働きかける魔法なので、精神干渉系の魔法には珍しく、同時に多人数を相手として仕掛けることができる。興奮状態にある集団を鎮静化させるにはもってこいの魔法だよ」
「……それは第一級制限が課せられる魔法なのでは……？」
系統外魔法はその特殊な性質から、四系統魔法以上に厳しく使用が制限されている。中でも精神干渉系魔法は使用条件が特に厳しい。
説明された限りでも、この魔法は使いようによっては恐ろしい洗脳の道具になる。トランス状態にある人間は、被暗示性も高まるからだ。
この魔法の存在を知れば、これを利用しようとする独裁政治家、テロリスト、カルト指導者は後を絶たないだろう。
達也がそう指摘すると、真由美は「大丈夫よ」と笑いながら答えた。
「あーちゃんが独裁者の片棒を担ぐとこなんて、想像できる？」
「無理矢理協力させられる、というケースもあり得ますが」

「それこそ無理無理。
あの子は道端で小額カードを拾っても涙目になっちゃうくらいなんだから。
そんな罪悪感で押し潰されちゃいそうな心理状態で、魔法がまともに使えるはずないでしょう？」
魔法が心理状態に左右されるのは常識に近い定説だ。
それほど善良な性質なら、集団洗脳という重大犯罪に関わり合うと意識しただけで魔法が使えなくなるかもしれない。
もっとも、極端に気が弱いというなら逆に、依存させて利用するという手もある訳だが、そこまでこの場で追求する必要も無かった。
「ですが、精神干渉系の魔法に対する法令上の制限は、中条先輩のご性格に関わりなく、適用されると思いますが……」
「あっ……
えっと、大丈夫よ、深雪さん。学校外では使わせないから」
「真由美……その言い方は著しい誤解を招くと思うぞ。
中条の系統外魔法使用については、学校内に限ることを条件として、特例で許可を受けている。
研究機関における使用制限緩和の抜け道をついた、いわば裏技だがね」
「なるほど」
「そのような手段があるのですね」
「ええ、そうなのよ……」
摩利のフォローに、司波兄妹は納得顔で頷き、真由美は誤魔化し笑いを浮かべた。

◇◆◇◆◇◆◇

午後の授業が終わり、気が進まないながらも風紀委員会本部へ向かおうとした達也を、キーの高い声が呼び止めた。
「達也くん、クラブはどうするの？」

振り向いた先には、ショートカットのスラッとした少女。スレンダーというよりスマートといった方が彼女には相応しいだろう。
「エリカ……珍しいな、一人か？」
「珍しいかな？　自分で思うに、あんまり、待ち合わせとかして動くタイプじゃないんだけどね」
言われてみれば、思い当たる節もある。
「美月はもう美術部に決めてるんだって。
でもあたしは美術って柄じゃないし。
面白そうなトコないか、ブラブラ回ってみるつもり」
「レオも、もう決めていると言ってたな」
「山岳部でしょ？　似合いすぎだっての」
「まあ……確かに似合ってるな」
「うちの山岳部は登山よりサバイバルの方に力を入れてるんだって。もう何て言うか、はまりすぎ」
ブツクサ悪態をついているエリカは、何処と無くつまらなさそうに見えた。
「達也くん、クラブ決めてないんだったら、一緒に回らない？」
本人に言えばむきになって否定されるだろうが、断ってしまうには少し、寂しそうな表情をしている。
「実は、早速風紀委員会でこき使われることになってな。
あちこちブラブラするのは結果的に同じなんだろうけど、見回りで巡回しなきゃいけないんだよ。
それでも良ければ、一緒に回るけど？」
「うーん……ま、いっか」
エリカは達也の誘いに勿体ぶった仕草で考え込み、不本意だけど、とジェスチャーつきで答えた。
ただ、その笑みが、自らの演技を裏切っていた。

◇◆◇◆◇◆◇

「何故お前がここにいる！」
それが再会の第一声だった。
「いや、それはいくらなんでも非常識だろう」
呆れ声でため息をついた達也の態度は、更なる興奮を招くだけだった。
「なにぃ！」
言葉だけでなく、今にも掴み掛からん勢い。だが、
「喧しいぞ、新入り」
摩利に一喝されて、森崎駿は慌てて口をつぐみ、更に、直立姿勢で固まった。
「この集まりは風紀委員会の業務会議だ。ならばこの場に、風紀委員以外の者はいないのが道理。
その程度のことは弁えたまえ」
「申し訳ありません！」
かわいそうに、森崎の顔は緊張と恐怖感にひきつっていた。
摩利に連行されかけたのは、まだ一昨日のことだ。それでなくとも、生徒会長、部活連会頭と並ぶ権力者の叱責は新入生には荷が重い。生真面目な人間ほど、特に。
「まあいい、座れ」
血の気を失い立ち尽くす一年生を前に対して、摩利は気まずい表情で着席を命じた。
昨日来の言動と併せ見るに、どうやら彼女は、自分より弱い立場の者を虐げて悦にいるタイプとは対極の心性の持ち主のようだ。
森崎が腰を下ろしたのは達也の正面。お互い、望まぬ座席配置だったが、二人が最下級生、一番下っ端である以上、下座の端でにらみ合いになるのはやむを得ないことだった。
「全員揃ったな？」
あの後、二人の三年生が次々に入ってきて、室内の人数が九人になったところで、摩利が立ち上がった。
「そのままで聞いてくれ。

今年もまた、あの馬鹿騒ぎの一週間がやって来た。
風紀委員会にとっては新年度最初の山場になる。
この中には去年、調子に乗って大騒ぎした者も、それを鎮めようとして更に騒ぎを大きくしてくれた者もいるが、今年こそは処分者を出さずとも済むよう、気を引き締めて当たってもらいたい。
いいか、くれぐれも風紀委員が率先して騒ぎを起こすような真似はするなよ」
一人ならず首をすくめるのを見て、トラブル巻き込まれ体質の自覚がある達也は、同じ轍は踏むまい、と自らを戒めた。
「今年は幸い、卒業生分の補充が間に合った。
紹介しよう。立て」
事前の打ち合わせも予告もなかった展開だが、二人とも無難に、まごつくことなく、すぐさま立ち上がった。
とはいっても、表情には随分温度差がある。
緊張を隠せず、隠そうともせず、逆にそれを熱意の表れとした感のある直立不動の森崎と、落ち着いた面持ちながら肩の力を抜き過ぎているような風情のある達也。
上下に厳しいタイプの人間には森崎の態度の方が好ましいだろうし、実力主義が徹底しているタイプには、達也の態度の方が頼もしく見えるだろう。
「1－Aの森崎駿と1－Eの司波達也だ。
今日から早速、パトロールに加わってもらう」
指差すだけの簡単な紹介。面倒くさい挨拶を強要されないのはありがたい。
「誰と組ませるんですか？」
手を挙げたのは岡田という名の二年生。教職員選任枠の一人だ。
「前回も説明したとおり、部員争奪週間は各自単独で巡回する。
新入りであっても例外じゃない」
「役に立つんですか」
形式上、岡田の言葉は達也と森崎の二人に向けられたものだが、

達也の左胸に向けられた目線が彼の本音を語っていた。
予想された反応だったので、達也は丸投げの意思を込めて摩利を見た。
摩利は岡田の方を、うんざりした顔で見ていた。
「ああ、心配するな。二人とも使えるヤツだ。
司波の腕前はこの目で見ているし、森崎のデバイス操作もなかなかのものだった。
一昨日は相手が悪かっただけだ。
それでも不安なら、お前が森崎についてやれ」
なげやりな回答に岡田は鼻白んだ表情を浮かべたが、辛うじて平静を保ち、嫌味な口調で「やめておきます」と答えた。
「他に言いたいことのあるヤツはいないな？」
あまり穏やかとは言えない、ハッキリ言って喧嘩腰の口調に達也は少なからず驚いたのだが、彼と森崎以外に、気にしている者はいないようだった。
日常的な光景、ということだろう。委員会内には根深い対立があるようだ。
トップが先陣を切って対立を煽るような真似もどうかとは思うが。
「これより、最終打合せを行う。
巡回要領については前回まで打合せのとおり。今更反対意見はないと思うが？」
異議なし、という雰囲気でもなかったが、積極的に反対意見を出す者もいない。
「よろしい。
では早速行動に移ってくれ。レコーダーを忘れるなよ。
司波、森崎両名については私から説明する。
他の者は、解散！」
全員が一斉に立ち上がり、踵を揃えて、握りこんだ右手で左胸を叩いた。
後で聞いたところによると、代々風紀委員会が採用している敬礼

とのことだった。
　他にも、挨拶は時間帯を問わず「おはよう」を使うというルールもあるらしい。
「まずこれを渡しておこう」
　摩利、達也、森崎を除いた六名が出て行った後、摩利は達也と森崎に薄型のビデオレコーダーを手渡した。
「胸ポケットに入れておけ。ちょうど、レンズ部分が外に出る大きさになっている。スイッチは右側面のボタンだ」
　言われたとおりブレザーの胸ポケットに入れてみると、そのまま撮影できるサイズになっていた。
「今後、巡回のときは常にそのレコーダーを携帯すること。違反行為を見つけたら、すぐにスイッチを入れろ。但し、撮影を意識する必要は無い。風紀委員の証言は、原則としてそのまま証拠に採用される。念の為、くらいに考えてもらえれば良い」
　二人の返答を待って、摩利は携帯端末を出すよう指示した。
「委員会用の通信コードを送信するぞ……よし、確認してくれ」
　二人が正常にインストールされた旨を報告する。
「報告の際は必ずこのコードを使用すること。こちらから指示ある際も、このコードを使うから必ず確認しろ。
　最後はＣＡＤについてだ。
　風紀委員はＣＡＤの学内携行を許可されている。使用についても、一々誰かの指示を仰ぐ必要は無い。だが、不正使用が判明した場合は、委員会除名の上、一般生徒より厳重な罰が課せられる。
　一昨年はそれで退学になったヤツもいるからな。甘く考えないことだ」
「質問があります」
「許可する」
「ＣＡＤは委員会の備品を使用してもよろしいでしょうか？」

達也の質問はかなり意外なものだったようで、答えが返ってくるまで短い間があった。
「……構わないが、理由は？」
釈迦に説法かもしれないが、あれは旧式だぞ？」
摩利は、昨日の試合とその前後の取り回し、部屋を片付けている最中のメンテを見て、ＣＡＤに関する達也のスキルがかなりハイレベルなものであると見当を付けていた。
また、あずさの熱狂で、彼が所持するＣＡＤがハイスペックな機種であることも分かっている。
そんな彼が、敢えて旧式のＣＡＤを使いたいと言うのだ。
好奇心を抑えられなかった。
「確かに旧モデルではありますが、プロ仕様の高級品ですよ、あれは」
果たして、苦笑交じりの回答は、思ってもみないものだった。
「……そうなのか？」
「ええ。
あのシリーズは調整が面倒なんで敬遠されていますが、設定の自由度が高く応用範囲の広い点が一部で熱狂的に支持されている機種です。多分、あれを購入した人がファンだったんでしょうね。
バッテリーの持続時間が短くなるという欠点に目を瞑れば、処理速度も最新型並みにクロックアップできます。
しかるべき場所に持ち込めば、結構な値段がつきますよ」
「……それを我々はガラクタ扱いしていたということか。
なるほど、君が片付けに拘った理由がようやく分かったよ」
「中条先輩ならあのシリーズのことも知っていそうな感じでしたが……」
「中条は怖がって、この部屋には下りてこない」
「ははぁ」
顔を見合わせて苦笑する二人。
ここで摩利は、ようやく、蚊帳の外になっている森崎の存在に気

がついた。
「コホン。そういうことなら、好きに使ってくれ。どうせ今まで埃をかぶっていた代物だ」
「では……この二機をお借りします」
「二機……？　本当に面白いな、君は」
昨日密かに、自分用の調整データを複写しておいた二機のＣＡＤを左右の腕に装着した達也を見て、摩利はニヤリと笑いを浮かべ、森崎は皮肉げに唇を歪めた。

◇◆◇◆◇◆◇

「おい」
部活連本部へ行く摩利と別れたところで、達也は背後から森崎に呼び止められた。
友好的な用件でないことは声音で分かる。
かなり本気で無視しようかと考えたが、厄介事が大きくなりそうな気がしたので、嫌々ながら振り向いた。
「何だよ」
敵意をむき出しにした呼びかけに横柄な応え。
友好的な雰囲気が生まれる道理がなかった。
「はったりが得意なようだな。会長や委員長に取り入ったのもはったりを利かせたのか？」
「羨ましいのか？」
「なっ……！」
この程度の切り返しで逆上するなら最初から嫌味なぞ口にするな、と達也は思う。
反面、こういう素直さは羨ましくもあった。
「……だが、今回はやり過ぎだったな。
複数のＣＡＤを同時に使うなんて、お前ら如きに出来るはずがない。

両手にＣＡＤを装着すれば、サイオン波の干渉で、両方のＣＡＤが使えなくなるのがオチだ。
この程度のことも知らずに格好を付けようとしたんだろう？
どうせ大した魔法は使えないんだ。恥をかかなくてすむように、こそこそ立ち回るんだな」
「アドバイスのつもりか？
余裕だな、森崎」
「ハッ！　僕はお前らとは違う。一昨日は不意をつかれたが、次はもう油断しない。
お前らと僕たちの、格の違いを見せてやる」
言い捨てて立ち去る背中を眺めながら、達也は思う。
次がある、と信じられることの、何と幸せなことか……

１－（１５）　事件＝発端（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

1－（15）　事件＝発端

待ち合わせ場所には、誰もいなかった。
（別にいいけどな……）
達也は入学以来すっかり習い性になってしまったため息をついて、携帯端末のＬＰＳを立ち上げた。
敷地内の平面図と、その中をゆっくり移動する赤い光点が表示される。
端末の電源を切らない程度の配慮はしてくれているということだ。
まだそれほど遠くへは行っていない。
（もしもの時の用心だったんだがなぁ）
探しに来ることを完全に当てにされている。
表示を拡大して位置を特定し、エリカの端末が発している信号へ向けて、達也は歩き出した。

◇◆◇◆◇◆◇

校庭一杯、校舎と校舎の間の通路まで埋め尽くしたテントは、さながら縁日の露天だった。
「お祭り騒ぎね、文字通り……」
ぼそりと独り言を呟くエリカ。そしてそんな自分に気付いて、独り笑いの衝動に呑まれそうになった。
彼女は元々、独り言が多い方だった。
だが、入学式からずっと、この癖は影を潜めていた。
（一人が珍しい、かぁ……案外、女の子を見る目がないよね、達也くん？）
約束をすっぽかした――彼女の方から、だ――男の子に向かって、心の中で話し掛ける。
中学生時代も、その前の小学時代も、彼女は一人でいることの方

が多い少女だった。
人間嫌い、という訳ではない。
どちらかといえば、愛想は良い方だ。
誰とでも、すぐ仲良くなれる。
その代わり、すぐ疎遠になってしまう。
四六時中一緒にいる、いつも連れ立って行動する、ということが出来ないからだ。
人間関係に執着が薄いからだと、自分では分析している。
比較的仲良くしていた友人からは、醒めていると言われた。
気まぐれな猫みたいだ、とも言われた。
仲違いした友人から、お高く留まっていると言われたこともある。
纏わりつく男の子は絶えなかったが、長続きした男の子もまた、いなかった。
自由に、気ままに、何の約束にも縛られず。
それが彼女のモットーだったのだ。
（……モットーだったんだけどねぇ……最近のあたしはチョットおかしいかも）
客観的に見て、最近の自分は彼に付きまとっている気がする、とエリカは思った。
自分から一緒に回ろうと言い出すなんて、少し前なら思いもよらなかったことだ。
まだ一週間足らずだから、その内、いつものように飽きるかもしれない、とも思う。
同時に、今度はいつもと違うかもしれない、とも思うのだ……

◇◆◇◆◇◆◇

「エリカ」
約束の時間から十分。
意外と早く追いついたな、とエリカは思った。

「達也くん、遅いわよ」
「……悪かった」
瞬時、苦い顔が垣間見えたが、すぐに何事か納得した表情になり、達也は素直に頭を下げた。
「……謝っちゃうんだ？」
予想を外されて、仕掛けたエリカの方が間誤付きを覚えてしまう。
「五分とはいえ、遅刻したのは確かだから。俺が遅れたことと、エリカが待ち合わせ場所にいなかったことは別問題だろ？」
「あぅ……ごめん」
いささか変な表現だが、大真面目な顔で微笑みかけられて、エリカは一矢も射返すことが出来なかった。
「……達也くんってさ～、やっぱり、性格悪いって言われない？」
「心外だな。性格に文句をつけられたことはない。人が悪いと言われたことならあるが」
「同じじゃん！　てか、そっちの方が酷いよ！」
「ああ、違った。人が悪いじゃなくて、悪い人だった」
「そっちのがもっと酷いよ！」
「悪魔と呼ばれたこともあるぞ」
「もういいって！」
荒く息をつくエリカを前に、深遠な哲学命題に思索を委ねているような風情で、達也は首を傾げた。
「随分疲れているようだが、大丈夫か？」
「……達也くん、絶対、性格悪いって言われたことあるでしょ？」
「実はそうなんだ」
「今までの流れ全否定なの！？」
エリカはがっくりと膝をついた。

◇◆◇◆◇◆◇

機嫌をとるのに少し手間取ったが、何とか、周りからおかしな目で見られる前に巡回――エリカの場合は見学、あるいは冷やかし――に復帰した。

予想通り、エリカの足が向く先は武術競技系が多い。

予想外だったのは、二科生のエリカに勧誘の声が多く掛かったことだ。

それも、結構熱心に。

「人気者じゃないか」

「失礼しちゃうわ、ぷんぷん」

素で言われたら五メートル以内に近づきたくなくなる台詞だが、棒読み口調でふざけているのは――幸いにも――明らかだ。

それに――ふざけて見せる仮面の下では、結構本気で怒っているのが伝わって来ていた。

「マスコット扱いがそんなに嫌だったのなら、試技をさせてもらえばよかったのに。

そうすりゃ一発で黙らせられたんじゃないか？」

宥めるつもりの軽い一言、だったのだが、エリカは目を丸くして彼を見返した。

「……そうか、達也くんにはもうバレてるんだっけ」

「隠すつもりはないんだろ？

隠すことでもないと思うし」

「そうなんだけどね～

勝手に期待されるのも逆に嫌だし」

「ははぁ……色々と複雑なんだな」

「そっ。乙女心は複雑なの」

そう言って、悪戯っぽくクスッと笑うエリカ。

達也も釣られて笑いをこぼす。

はぐらかされているのは分かっていたが、それはそれで構わなか

った。
本当の自分を隠しているのは、達也も同じなのだから。

◇◆◇◆◇◆◇

校庭一杯にテントが並んでいるとはいっても、それはあくまで「校庭」のことで、専用の競技場では、そこを普段から使っているクラブのデモンストレーションが行われている。
体育館も同様だ。
二人が足を運んだ時、格闘技用体育館、通称「闘技場」では、剣道部の演武が行われていた。
「ふーん……魔法科高校なのに、剣道部があるんだ」
「どこの学校にも剣道部くらいあると思うが？」
何の気なしに訊ねた達也の顔を、エリカは短くない時間、マジマジと見詰めた。
「……なんだよ？」
「……意外」
「何が？」
「……達也くんでも、知らないことがあったんだね。
それも、武道経験者なら大抵知ってるようなことで」
エリカが本気で驚いているのを見て、達也は少し悩んでしまった。
「……俺って、そんなに知ったかぶりかな……？」
「えっ、いや、そんなことないよ？
ただ何となく、達也くんって何でも知ってそうな気がして。
実際、美月の目のこともあたしのＣＡＤのことも、多分あたしの家のことも、本当に良く知ってるから」
「そりゃあ、多少他人より詳しいこともあるけど、その分知らないことも多いんだぜ？
で、剣道部が何故珍しいんだ？」
「そ、そうよね。同じ一年生だもんね……同じって言葉にチョッと

違和感あるけど……

ええと、剣道のことよね。

魔法師やそれを目指す者が高校生レベルで剣道をやることはほとんどないんだ。

魔法師が使うのは『剣道』じゃなくて『剣術』、術式を併用した剣技だから。

小学生くらいまでなら剣技の基本を身につける為に剣道をやる子も多いけど、中学生で将来魔法師になろうって子たちは、ほとんど剣術に流れちゃうの」

「へぇ、そうなのか……

剣道も剣術も同じものだと思っていたよ」

「達也くんの場合はきっと、剣道を剣術と同じものだと思ってたんでしょ」

「よく分かるな？」

「あたしにも段々達也くんのことが分かって来た。

何だかんだ言ったって、達也くんの知識って、魔法が軸になってるよね。

もうどっぷり魔法に漬かってるって感じ。

魔法だけで食べてるA級魔法師並みじゃない？

興味湧いて来ちゃったな、あたし。一体どんな家庭環境だと、ここまで魔法漬けの高校一年生ができあがるのか」

「俺の家庭環境については、おいおい話すとして……

今は大人しく見学しよう。そろそろ視線が痛くなってきた」

達也に促されて左右を見ると、こちらをチラチラと見ている目があちらこちらに。

エリカは愛想笑いを浮かべた後、無言で俯いた。

レギュラーによる模範試合は中々の迫力だった。

中でも目に止まったのは女子部二年生の演武だった。

女性としてもそれほど大柄とは言えない、エリカとほとんど同程

度の体格で、二回り以上大きな男子生徒と互角以上に打ち合っている。
力ではなく、流麗な技で打撃を受け流している。
しかも、彼女の方にはまだまだ余裕がありそうだった。
模範試合に相応しい華のある剣士だ、と達也は思った。
観衆もほとんどが彼女の技に目を奪われていた。
しかし、ここにも例外はいた。
それも、ごく身近に。
彼女が、殺陣のように鮮やかな一本を決めて一礼するのと同時。
不満げに、鼻を鳴らす音がすぐ傍で聞こえた。
「お気に召さなかったようだな」
「え？　ええ……」
自分が問われたのだとすぐには分からなかったようで、エリカの答えが返って来るまで、少し間が空いた。
「……だって、つまらないじゃない。
手の内の分かっている格下相手に、見映えを意識した立ち回りで予定通りの一本なんて。
試合じゃなくて殺陣だよ、これじゃ」
「いや、確かにエリカの言う通りなんだが……」
達也の口許が、自然に綻んでいた。
「宣伝の為の演武なんだから、それで当然じゃないか？
よくプロの武術家で真剣勝負を見せることを売りにしている人達がいるけど、本物の真剣勝負なんて、他人に見せられるものじゃないだろ？
武術の真剣勝負って、要するに殺し合いなんだからさ」
「……クールなのね」
「思い入れの違いじゃないか？」
不機嫌な顔でそっぽを向くエリカ。
だがその表情は、怒って見せている類のものだった。
多分エリカには、見栄え重視で武の本質を疎かにしている立ち回

りを、不誠実なものと捉え、憤りを感じているのだ。
ただ、それを口に出すとますます臍を曲げそうだった。
乱入する、等と言い出したりはしないだろうが、それに近いことはやらかしかねない。その前に、と達也はエリカを促してその場を後にした。
否、後にしようと、した。
二人が体育館の出口に差し掛かったとき、勧誘の口上とは別種のざわめきが背後から伝わった。
ハッキリとは聞こえてこないが、何事か言い争っているのは分かる。
隣を見れば、エリカも彼を見上げていた。
頷き合った二人は、興奮の高まりつつある人の輪の中へ飛び込んだ。

◇◆◇◆◇◆◇

輩蹙を買いながら人混みを掻き分けて――喧嘩にならなかったのは、エリカの愛想笑いの威力に依るところが大きい――なんとか中が見える所まで辿り着いた二人が目撃したもの。
それは、対峙する男女の剣士の姿だった。
女の方は、ついさっきまで試合に出ていた――エリカに言わせれば殺陣を演じていた――女子生徒。胴はまだつけているが、面は取っている。セミロングストレートの黒髪が印象的な、なかなかの美少女だ。あの技にこのルックス、勧誘には打ってつけだろう。
「ふ～ん、達也くん、ああいうのが好み？」
「いや、エリカの方が可愛い」
「……棒読みで言われても少しも嬉しくないんですけど」
斜に睨み付けながらも、上目遣いの目元はほんのり紅に染まっている。
「慣れてないんでな」

「……もう！」

まだ何やらぶつぶつ呟いていたが、取り敢えず絡むのは止めたようなので、今度は男の方へ観察の目を移す。

それほど大柄ではない――多分、達也より小さい――が、全身がバネのような体つきをしている。此方は竹刀こそ持ってはいるが、防具は全くつけていない。

一体何が起こっているのか、適当に見物人を捕まえて聞き出そうか、と達也は考えたが、その必要はなかった。

「剣術部の順番まで、まだ一時間以上あるわよ、桐原君！　どうしてそれまで待てないの！？」

「心外だな、壬生。

あんな未熟者相手じゃ、新入生に剣道部随一の実力が披露出来ないだろうから、協力してやろうって言ってんだぜ？」

「無理矢理勝負を吹っ掛けておいて！

協力が聞いて呆れる。

貴方が先輩相手に振るった暴力が風紀委員会にばれたら、貴方一人の問題じゃ済まないわよ」

「暴力だって？

おいおい壬生、人聞きの悪いこと言うなよ。

防具の上から、竹刀で、面を打っただけだぜ、俺は。

仮にも剣道部のレギュラーが、その程度のことで泡を噴くなよ。

しかも、先に手を出してきたのはそっちじゃないか」

「桐原君が挑発したからじゃない！」

切っ先を向け合っておいて、今更口論もなかろうに、とは思ったが、当事者同士が疑問に答えてくれるのは好都合だった。

――当人たちにその気はなかっただろうけど。

「面白いことになってきたね」

独り言ともそうじゃないともとれる口調でエリカが呟いた。

ワクワクしている、ということが、声音からも窺われる。

「さっきの茶番より、ずっと面白そうな対戦だわ、こりゃ」

「あの二人を知っているのか？」
「直接の面識はないけどね」
達也の問い掛けに即、応じたところを見ると、独り言ではなかったらしい。
「女子の方は試合を見たことあるのを、今、思い出した。
壬生紗耶香。一昨年の中等部剣道大会女子部の全国二位よ。当時は美少女剣士とか剣道小町とか随分騒がれてた」
「……二位だろ？」
「チャンピオンは、その、……ルックスが、ね」
「なるほど」
マスコミなぞ、そんなものだろう。
「男の方は桐原武明。
こっちは一昨年の関東剣術大会中等部のチャンピオンよ。
正真正銘、一位」
「全国大会には出ていないのか？」
「剣術の全国大会は高校からよ。
競技人口じゃ比べ物にならないからね」
それはそうだろう、と達也は頷いた。
剣術は剣技と術式を組み合わせた競技、ならば魔法が使えることが競技者の前提条件となる。
魔法学の発達により魔法を補助する機器の開発が進んでいるとはいえ、実用レベルで魔法を発動できる中高生は、年齢別人口比で千分の一前後。
成人後も実用レベルの魔法力を維持している者は更にその十分の一以下。
この学内でこそ二科生は落ちこぼれ扱いだが、全人口比で見れば彼らもエリートなのだ。
「おっと、そろそろ始まるみたいよ」
張り詰めた糸が限界に近づいているのは、達也にも感じ取れていた。

女子生徒の方には、防具をつけていない相手へ打ち込むことに対する躊躇もあっただろう。だが、切っ先を向け合って互いに引かない以上、剣を交えるのは避けられないことだ。

おそらく、男――桐原の方が先に動く。

「心配するなよ、壬生。剣道部のデモだ、魔法は使わないでおいてやるよ」

「剣技だけであたしに敵うと思っているの？　魔法に頼り切りの剣術部の桐原君が、ただ剣技のみに磨きをかける剣道部の、このあたしに」

「大きく出たな、壬生。

だったら見せてやるよ。

身体能力の限界を超えた次元で競い合う、剣術の剣技をな！」

それが、開始の合図となった。

いきなりむき出しの頭部目掛けて、竹刀を振り下ろす桐原。

竹刀と竹刀が激しく打ち鳴らされる。

悲鳴は、二拍ほど遅れて生じた。

見物人には、何が起こっているのか分からなかったことだろう。

ただ、竹と竹が打ち鳴らされる音、時折金属的な響きすら帯びる音響の暴威から、二人が交える剣撃の激しさを想像するのみ。

――少数の、例外を除いて。

「……女子の剣道ってレベルが高かったんだな。

あれが二位なら、一位はどれだけ凄いんだ？」

二人の剣捌きに、とりわけ紗耶香の技に感嘆の吐息を達也が漏らせば、

「……違う……

あたしの見た壬生紗耶香とは、まるで、別人。

たった二年でこんなに腕を上げるなんて……」

呆気に取られながらも、顔を隠して舌舐め擦りしているような、どこか好戦的な気配を放ちながらエリカが呟く。

鍔迫り合いで一旦動きの止まった両者が、同時に相手を突き放し、

後方に跳んで間合いを取った。
息をつく者と、息を呑む者。
見物人の反応は、二つに分かれた。
「どっちが勝つかな……」
息を潜めてエリカが問う。
「壬生先輩が有利だろう」
囁き声で達也が答える。
「理由は？」
「桐原先輩は面を打つのを避けている。
最初の一撃は受けられることを見越したブラフだ。
魔法を使わないという制約を負った上で、更に手を制限して勝てるほど、実力に差は無い。
平手の勝負でも、竹刀捌きの技術だけなら壬生先輩に分があると思う」
「概ね賛成。
でも、桐原先輩がこのまま我慢しきれるかな？」
エリカの台詞が聞こえた訳でもないだろうが、
「おおぉぉぉ！」
この立ち合いで初めて、雄叫びを上げて桐原が突進した。
両者、真っ向からの打ち下ろし！
「相討ち！？」
「いや、互角じゃない」
桐原の竹刀は紗耶香の左上腕を捉え、
紗耶香の竹刀は桐原の右肩に食い込んでいる。
「くっ！」
左手一本で紗耶香の竹刀を跳ね上げ、桐原は大きく跳び退った。
「……途中で狙いを変えようとした分、打ち負けたな」
「そうか、だから剣勢が鈍ったのね。
完全に相討ちのタイミングだったのに……結局、非情になれなかったか」

勝負あった、と見たのは達也たちだけではない。
剣道部の面々は安堵の表情を浮かべている。
見物人だけでなく、
「……真剣なら致命傷よ。あたしの方は骨に届いていない。
素直に負けを認めなさい」
凛とした表情で勝利を宣言する紗耶香。
その言葉に、桐原は顔を歪めた。
紗耶香の指摘が正しいことを、感情が否定しようとしても、剣士としての意識が認めてしまっているのか。
「は、ははは……」
突如、桐原が虚ろな笑い声を漏らした。
負けを認めたのか？
そうは見えなかった。
達也の中で、危機感の水位が急上昇した。
彼以上に、脅威を肌で感じ取ったのは、対峙を続ける紗耶香だっただろう。
改めて構え直し、切っ先を真っ直ぐに向け、桐原を鋭く見据えている。
「真剣なら？
俺の身体は、斬れてないぜ？
壬生、お前、真剣勝負が望みか？
だったら……お望み通り、『真剣』で相手をしてやるよ！」
桐原が、竹刀から離れた右手で、左手首の上を押さえた。
見物人の間から悲鳴が上がった。
ガラスを引っ掻いたような不快な騒音に耳を塞ぐ観衆。
青ざめた顔で膝をつく者もいる。
一足跳びで間合いを詰め、左手一本で竹刀を振り下ろす桐原。
片手の打ち込みに、速さはあっても最前の力強さはない。
だが紗耶香は、その一撃を受けようとせず、大きく後方へ跳び退った。

当たってはいない。
せいぜい、かすめただけだ。
それなのに、紗耶香の胴に、細い痕が走っている。
追撃をかける桐原。
再び振り下ろされる片手剣。
その眼前に、達也が割り込んだ。
飛び込む直前、腕組みをするように、左右の腕にはめたＣＡＤへ、一瞬で右左の指を走らせていた。
今度は、見物人の中に口を押さえる者が続発した。
乗り物酔いに似た症状が、急激に連鎖する。
その代わり、不快な高周波音が消えていた。
肉を打つ竹の音、は、鳴らなかった。
生じた音は、板張りの床を鳴らす落下音。
音と揺れから解放され、何が起こっているのか確認する余裕をようやく取り戻した見物人たちが見たもの。
それは、投げ飛ばされた桐原の左手首を掴み、肩口を膝で抑え込んでいる達也の姿だった。

1－（16）　秘匿技術（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

1－（16）　秘匿技術

「――以上が剣道部乱入事件の顛末です」
達也の前には三人の男女。
向かって右に生徒会長、七草真由美。
中央に、ある意味で彼の上司である風紀委員長渡辺摩利。
そして左の男子生徒がおそらく、部活連会頭、十文字克人だろう。
（巌のような人だな……）
身長は一八五センチ前後。見上げるような大男、という訳ではない。
だが分厚い胸板と広い肩幅、制服越しでも分かる、くっきりと隆起した筋肉。
そういう肉体的な特徴だけでなく、人間を構成する諸要素を凝縮するだけ凝縮したような、存在感の密度が桁外れに濃厚な人物だった。
流石は真由美、摩利と並んで第一高校三巨頭に数えられる人物、と達也はその外見と印象だけで納得した。
「当初の経緯は見ていないのだな？」
「はい。
桐原先輩が挑発したという剣道部の言い分も、剣道部が先に手を出したという剣術部の言い分も、確認していません」
彼は閉門時間間際の部活連本部で、本日遭遇した剣道部の騒動について報告を行っているところだった。
「最初、手を出さなかったのはその所為かしら？」
先の質問は摩利。この質問は真由美。
克人は当初より聞き役に徹している。
「危険と判断すれば介入するつもりでした。
打ち身程度で済むのであれば、当人同士の問題かと」
「……まあいい。確かに、いがみ合いが発生する度、毎回我々が出

て行くのも人員的に不可能だ」
勧誘時のトラブルは、部活連内部で処理するのが原則。摩利の発言はそれを踏まえたもので、真由美からも克人からも異論は出なかった。
「それで、取り押さえた桐原はどうした？」
「桐原先輩は鎖骨にひびが入っていましたので、保健委員に引き渡しました。
とはいえ、魔法ですぐに治癒可能な程度の損傷でしたが。
自分が取り押さえた際、非を認めておられたので、拘束は必要無いと判断しました」
「ふむ……いいだろう。訴追は、摘発した者の判断に委ねられているのだからな。
聞いての通りだ、十文字。
風紀委員会としては、今回の事件を懲罰委員会に訴追するつもりはない」
「寛大な決定に感謝する。
高周波ブレードなどという殺傷性の高い魔法をあんな場で使ったのだ。怪我人が出ずとも、本来ならば停学処分もやむを得ないところ。
それは本人も分かっているだろう。
今回のことを教訓とするよう、よく言い聞かせておく」
「頼んだぞ」
克人が軽く頭を下げ、摩利が頷く。
これで今回の件は終わりだ。
「でも、剣道部はそれでいいの？」
「挑発に乗って喧嘩を買った時点で同罪だ。文句をつけられる筋合いじゃない」
くすぶる不満の消火活動は、彼の仕事ではない。
達也は退出の許可を得て、部屋を後にした。

◇◆◇◆◇◆◇

部活連本部を出たその足で、達也は生徒会室へ向かうつもりだった。

日没まで、もう僅かだ。

いくら魔法が使えるとはいえ、年頃の少女が一人で出歩くには不適当な時間だし、それ以前に、深雪が達也を置いて帰ることを肯んじるはずもないのだった。

だが彼の予定は、道のりの半ばで修正を余儀無くされた。

部活連は生徒会室のある本校舎とは別棟におかれている。

部活連本部から生徒会室へ行くには、一旦校庭へ出て（靴を履き替える必要はない。上履き、という習慣はほとんど見られなくなっている）昇降口に回らなければならないのだが、そこに見知った顔が並んでいた。

「あっ、おつかれ～」

「お兄様」

真っ先に声を上げたのはエリカだったが、真っ先に駆け寄ったのは深雪だった。

思いがけない機敏さに、他の面々は目を円くしている。

「お疲れ様です。本日は、ご活躍でしたね」

「大したことはしてないさ。深雪の方こそ、ご苦労様」

腰の前に両手で提げる鞄を挟んだだけの間近から、自分の顔を見上げる深雪の髪を、達也は二度、三度とゆっくり撫でた。

深雪は気持ち良さそうに目を細めながら、兄を見詰める、その眼差しを逸らさない。

「兄妹だと分かっちゃいるんだけどなぁ……」

二人へ歩み寄りながらも、気恥ずかしげな表情で、微妙に視線を外しながらレオが呟くと、

「何だか、すごく絵になってますよね……」

その隣では、美月が顔を赤らめながらも、食い入るように二人を

見ている。
「あのね、君たち……一体何を期待しているのかな？」
「ババババカ言うなよ！　なな何も期待してねえって！」
「そそそうですよ、エリカちゃん！　変なこと言わないで！」
「……ハイハイ、そういうことにしといてあげる」
エリカのツッコミが入らなければ、レオと美月の勘違いは止まるところを知らなかっただろう。
そんなエリカの孤軍奮闘も知らず、達也はようやく妹の髪から手を放して、三人へ目を向けた。
深雪も、名残惜しそうな顔を見せつつ、兄に倣う。
――そんな表情を見せるから、変な妄想を招くのだが。
「すまんな、待っていてくれたのか」
「水くさいぜ、達也。ここは謝るとこじゃねえよ」
「私はついさっき、部活が終わったところですから。少しも待っていませんので」
「そいつも部活が終わったばかりだから。気にしなくていいよ」
三者三様の笑顔で達也を出迎えるレオ、美月、エリカ。
事実が言葉と裏腹であることに達也はすぐ気付いたが、彼女たちの心遣いを敢えて無にするような真似はしなかった。
「こんな時間だし何処かで軽く食べて行かないか？　一人千円までなら奢るぞ」
現在の通貨価値は、二度のデノミネーションで百年前とほぼ同じ水準になっている。
高校生にとって千円という金額は、少し高めではあるが妥当なラインだ。
待たせた謝罪を呑み込んだ、代わりの誘い。
それが分からぬ者も、余計な遠慮を口にする者も、ここにはいなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

入学式の日とは別のカフェで、五人は今日一日のこと――入部したクラブのこととか、退屈な留守番のこととか、勧誘に名を借りたナンパのこととか、色々な体験談に花を咲かせたが、やはり、最も関心を引いたのは、達也の捕物劇だった。

「――その桐原って二年生、殺傷性ランクBの魔法を使ってたんだろ？　良く怪我しなかったよなぁ」

「致死性がある、と言っても、高周波ブレードは有効範囲の狭い魔法だからな。

刃に触れられない、という点を除けば、良く切れる刀と変わらない。それほど対処が難しい魔法じゃないさ」

さっきから手放しで感心しているレオに、やや辟易した表情で達也が応じる。

「でもそれって、真剣を振り回す人を素手で止めようとするのと同じってことでしょう？

危なくなかったんですか？」

「大丈夫よ、美月。お兄様なら、心配要らないわ」

「随分余裕ね、深雪？」

今更のように顔を曇らせた美月を宥める深雪の表情は、エリカが指摘したように不自然なほど余裕があった。

「確かに達也くんの技は見事としか言えないものだったけど、相手の腕も決して鈍刀（なまくら）じゃなかったよ。

本当に、心配じゃなかったの？」

「ええ。お兄様に勝てる者などいるはずがないもの」

一分一厘の躊躇もない断言。

「――えーっと……」

これには流石のエリカも、絶句するしかない。

彼女はあの時の達也の技を間近で見ている。

あれは、達人レベルと言っても、過言ではなかった。

それでも、ここまで自信を持って言い切ることは、エリカにはできない。
「……達也さんの技量を疑う訳じゃないんだけど、高周波ブレードは単なる刀剣と違って、超音波を放っているんでしょう？」
「そういや、俺も聞いたことがあるな。超音波酔いを防止する為に耳栓を使う術者もいるそうじゃねえか。
まっ、そういうのは最初から計算ずくなんだろうけど」
「そうじゃないのよ。
単に、お兄様の体術が優れているというだけではないの」
美月とレオの懸念に応える深雪の表情は、苦笑いをこらえているようでもあった。
「魔法式の無効化は、お兄様の十八番なの。
エリカ、お兄様が飛び出した直後、床が揺れたような錯覚を覚えたのでしょう？」
「そうね。
あたしはそれ程でもなかったけど、乗り物酔いと同じ症状になった生徒もいたみたい」
「それ、お兄様の仕業よ。
お兄様、キャスト・ジャミングをお使いになったでしょう？」
ニッコリと、作り笑いを向けてくる深雪に、達也はため息の白旗を揚げた。
「……お見通しか。敵わないな」
「それはもう。
お兄様のことならば、深雪は何でもお見通しですよ」
「いやいやいやいや」
苦笑と微笑、笑顔を見合わせる二人の間に、素っ頓狂な声でレオが割り込む。
「それって、兄妹の会話じゃないぜ？　恋人同士のレベルも超えちまってるって」
「「そうかな（かしら）」」

ぴったりハーモニーを奏でた達也と深雪に、たっぷり一秒は硬直したあと、レオは力尽きたように突っ伏した。
「……このラブラブ兄妹にツッコミ入れようってのが大それてるのよ。アンタじゃ最初から太刀打ちできないって」
「ああ、俺が間違ってたよ……」
「その言われ様は著しく不本意なんだが」
「いいじゃありませんか。わたしとお兄様が強い兄妹愛で結ばれているのは事実ですし」
「ぐはっ！」
「わたしはお兄様のことを、誰よりも敬愛致しておりますので」
「あーっもうあたし帰ろーかなーっ」
「……深雪、悪ノリも程々にな？
冗談だって分かってないのも約一名いるようだから」
「……」「……」「……」
「……えっ？　えっ？　冗談？」
顔を赤く染めて俯いていた美月が、沈黙を浴びせられながら、キョロキョロと左右に目をさまよわせるに至って、誰からともなくため息がこぼれた。
「……まっ、これが美月の持ち味よね」
「あぅ……」
「……そういや、キャスト・ジャミングとか言ってなかったか？」
身の置き所がない雰囲気が漂う中、レオが強引に話題を戻した。
「タネを明かせば、そうなんだ」
達也としては、余り好ましくない話題なのだが、今は已む無し、と話を繋いだ。
「キャスト・ジャミングって、魔法の妨害電波のことだっけ？」
「電波じゃないけどな」
「慣用句よ」
言わずもがなのツッコミを、澄ました顔で切り返して、エリカは何事もなかったように言葉を継いだ。

「でもあれって、特殊な石が要るんじゃなかったっけ？
アンティ……アンティ何とか」
「アンティナイトよ、エリカちゃん。
達也さん、アンティナイトを持ってるんですか？
すごく高価なものだったと思うんですけど」
美月の言う通りだった。
キャスト・ジャミングは魔法式が対象物のエイドスに働きかけるのを妨害する魔法の一種で、同じように相手の魔法を無効化する『広域干渉』が自分を中心とした一定のエリアに対して、何の情報改変も伴わない、干渉力のみが定義された魔法式を投射することにより、他者の魔法式の干渉をシャットアウトする技法であるのに対し、キャスト・ジャミングは無意味なサイオン波を大量に散布することで、魔法式がエイドスに働きかけるプロセスを阻害する技術である。
広域干渉はある意味で魔法を予約することにより、他者の魔法の割り込みを防止するものあり、基本的に相手より強い干渉力が必要となる。
一方、キャスト・ジャミングは他のユーザーがデータをアップロードしようとしている無線回線の基地局に対し、大量のアクセス要求を行うことによりアップロードの速度を極端に低下させるようなもので、干渉力の強弱はそれほど問題にならないのに対して、四系統全ての魔法を妨害することのできるサイオンのノイズ、先の例で言えば、周波数を頻繁かつ不規則に切り替えることにより、一本の送信アンテナでも帯域を全て塞いでしまうような電波を作り出すことが必要とされる。
アンティナイトはこの条件を満たすサイオンノイズを作り出す物質として知られている。魔法師が自身の演算でキャスト・ジャミング用のノイズを作り出すことも理論上は可能とされているが、実行は困難ともされている。
広域干渉とは異なり、キャスト・ジャミングの影響下では自分の魔法発動も阻害されてしまう為、魔法師本人の意識がキャスト・ジ

ャミング用のノイズを構成しようとしても、無意識下では本能的にそれを拒否してしまうのである。

（魔法演算領域は無意識領域に形成されるものであり、意識の作用よりも無意識の作用の方が優先されてしまう）

その為、キャスト・ジャミングを使うには、サイオンを流すだけで条件を満たすノイズを発振するアンティナイトの利用が不可欠と考えられている。

……の、だが、達也の回答はその常識を覆すものだった。

「いや、持ってないよ」

「えっ？　でも、キャスト・ジャミングを使ったって……」

「あー……この話はオフレコで頼みたいんだけど？」

困惑した表情で間を取り、テーブルに身を乗り出して声を潜めた達也に、他の三人はつられたように身を乗り出して真剣な面持ちで頷いた。

「……正確には、キャスト・ジャミングじゃないんだ。俺が使ったのは、キャスト・ジャミングの理論を応用した特定魔法のジャミングなんだよ」

「……それって、新しい魔法を理論的に編み出したってことじゃないの？」

感心、驚愕、賞賛というよりも、呆れたようなニュアンスがエリカの声には含まれていた。

オリジナルの魔法を使う魔法師は少なくない。子供の頃からオリジナル魔法を得意とする魔法師の卵も多い。だがそれは、本能的、あるいは直感的に自分にあった魔法を自然に編み出すもので、理論的に新しい魔法を構築できる魔法師は数少ない。

魔法は無意識領域の作用に大きく依存している。

無意識に使える魔法を後から理論付けするのは易しくても、理論的に新しい魔法を作り出すことは、それが単なる既存魔法のバリエーションであっても、その魔法の構成と作動原理を完全に理解することが要求されるからだ。

「編み出したって言うより、偶然発見したと言う方が正確かな」
エリカの正直な反応に、達也は笑いながら答える。
「二つのＣＡＤを同時に使おうとすると、サイオン波が干渉してほとんどの場合で魔法が発動しないことは知っているよな？」
「ああ、俺も経験したことがあるぜ」
「うわっ、身の程知らず」
「何だと！？」
「二つのホウキを同時に使うって、魔法を並列起動させようとしたってことなのよ？
そんな高等テクができると思うなんて、身の程知らずとしか言いようが無い」
「うるせーな。できると思ったんだよ！
一応、得意属性だけなら多重起動はできるんだからな」
「ウッソーマッジーヤッダー」
「……バカにしてんのは分かってっから、その棒読みは止めろ。
余計にむかつく」
「ふ、二人とも、今は達也さんのお話を聞きましょう？　ねっ？」
「……」
「……フンッ」
互いにそっぽを向くエリカとレオ。
おろおろと視線を右左に振る美月に、達也は肩をすくめて見せた。
「俺としては、ここで止めてもいいんだが……続けて欲しいって？
まあ、いいけどな……
それでだ、二つのＣＡＤを同時に使用する際に発生するサイオンの干渉を、キャスト・ジャミングと同じようにエリアへ発信する。
一方のＣＡＤで妨害する魔法の起動式を展開し、もう一方のＣＡＤでそれとは逆方向の起動式を展開しておけば、各々のＣＡＤで展開した二種類の魔法と同種類の魔法発動をある程度妨害できるんだ。
高周波ブレードのような常駐型の魔法でも、魔法式の効果を永続的に維持することはできない。

いつかは必ず起動式を展開し直さなければならない。
今回はちょうどそのタイミングを掴まえることが出来たという訳だ」
「具体的にどうするかは全く分からねえが、おおよその理屈は理解できたぜ。
だがよ、何でそれがオフレコなんだ？
特許取ったら儲かりそうな技術だと思うんだがなぁ」
「一つには、この技術はまだ未完成なものだということ。
相手は二種類の魔法が使えないだけで、しかも全く使えない訳じゃなくて、使い難くなるだけなのに、こっちは全く魔法を使えなくなるんだからな。
これだけでも相当致命的なんだが、それ以上に、アンティナイトを使わずに魔法を妨害できるという仕組みそのものが問題だ」
「……それの何処に問題があるんだよ？」
「バカね、大有りじゃない。
国防や治安の分野では、魔法は今や無くてはならないものだわ。
高い魔法力や高価なアンティナイトを必要としないお手軽な魔法無効化の技術が広まったりしたら、社会基盤が揺るぎかねない」
「エリカの言う通りだと俺も考えている。
世の中には、魔法を差別の元凶と決めつけて、魔法の排斥を運動している過激派もいるからな。
アンティナイトは産出量が少ないから、現実的な脅威にならずに済んでいる面がある。
対抗手段を見つけられるまで、あのキャスト・ジャミング擬きを公表する気にはなれないな」
「すごいですね……そんなことまで考えているなんて」
「俺なら、目先の名声に飛び付いちまうだろうなぁ」
「お兄様は少し考え過ぎだと思いますけどね？
そもそも、相手が展開中の起動式を読み取ることも、ＣＡＤの干渉波を投射することも、誰にでも出来ることではありませんし。

ですが、それでこそお兄様ということでしょうか……」
「……それは暗に、俺が優柔不断のヘタレだと言っているのか……？」
「さあ？
エリカはどう思うかしら？」
「さあね～？
あたしとしては、美月の意見を聞いてみたかったり」
「ええ！？
私は、その、ええっと……」
「誰も否定してはくれないんだな……」
達也から恨めしそうな目を向けられて、深雪は朗らかな作り笑いで目を逸らし、エリカはメニューで顔を隠し、美月はオロオロと視線をさまよわせた、が、助けは何処からも現れなかった。

1－（17）　接触（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

1－（17）　接触

一週間が過ぎた。
新入部員勧誘週間は、達也にとって嵐の日々だった。
風紀委員の中で、一番忙しかったのは彼だろう。
――それも、本来の活動とは少し違った方向性で。
初日、達也が取り押さえた桐原武明は、対戦系魔法競技では当校有数の有望株だったらしい。達也が組み伏せた時には壬生紗耶香との試合で鎖骨にヒビが入っていたし、だからこそあれほど容易く捌くことが出来たのだという見方もあるのだが、同じ対戦系魔法競技者で細かい事情を知らない生徒にとっては、一年生の、しかもウィードに、レギュラー選手が負けたという事件は大層面白くないに違いなかった。
その結果――
「達也、今日も委員会か？」
帰り支度中の達也に、鞄を手にしたレオがそう訊ねた。
「今日は非番。ようやく、ゆっくりできそうだ」
「大活躍だったもんなぁ」
「少しも嬉しくないな」
憮然たる面持ちでため息をつく達也を前にして、レオは明らかに、噴き出すのを我慢している顔だった。
「今や有名人だぜ、達也。
魔法を使わず、並み居る魔法競技者（レギュラー）を連破した謎の一年生、ってな」
「『謎の』ってなんだよ……」
「一説によると、達也くんは魔法否定派に送り込まれた刺客らしいよ」
ひょっこり覗き込むように顔を見せたのは、同じく帰り支度を済ませたエリカだった。

「誰だよ、そんな無責任な噂を流しているヤツは……」
「あたし～」
「おい！」
「もちろん、冗談だけど」
「勘弁しろよ……性質（たち）が悪すぎだ」
「でも、噂の中身は本当だよ」
再び、ため息をつく破目になった。
そんなデマを真に受ける者はいないと思う――思いたいが、便乗してチョッカイをかけてくる輩は十分予想の範疇だ。
「随分大きなため息だな？」
「他人事だと思いやがって……
一週間で三回も死ぬかと思う体験をさせられた身になってみろ」
「真っ平だ♪」
面白がっていることを隠そうともしない笑い顔に、拳を叩き込みたい衝動に駆られたが、結局、達也は三度（みたび）ため息をつくのだった。
剣術部の次期エース、二年生ではトップクラスの実力者と目されている桐原武明を、新入生の、ウィードが倒した。
このニュースは、中途半端な魔法選民主義に染まった者達を驚愕させ、怒り狂わせた。
彼らは逆恨みにすらなっていない理不尽な怒りを達也に向け、的外れな報復行動に出る者も続出する有り様だった。
かといって、あからさまな私闘は、粛清の対象になる。
達也のバックには風紀委員長が控えているし、今回の件に関して生徒会長、部活連会頭も達也の擁護に回るであろうことは、細かい事情を知らない者にも容易に想像出来ることだ。
ならば、どうするか。
こういうときは、事故に見せかけるのが定石。
彼らも、そうした。
巡回中の達也が近づくのを待って、わざと騒ぎを起こす。
彼が仲裁に入ったところで、誤爆に見せ掛けた魔法攻撃を浴びせ

る。

大体、このパターンだった。

達也にとってみれば、行く先々で騒動が続け様に勃発するのだから、たまったものではなかった。

只でさえ、風紀委員という立場上、無視して通り過ぎることも出来ず、事態の収拾に努めなければならない。

その上で、彼を目掛けて魔法が飛んで来るのだ。

どうやら自分が狙われているらしいということは一日で分かったが、裏で結託している証拠が見つかるまでは予め手の打ちようがないし、証拠が見つかる頃には勧誘週間が終わっている。

つまり、みすみす罠の中へ飛び込んでいかなければならないような状態だったのだ。

「……考えてみれば、良く無事だったな、俺……」

「今日からデバイスの携帯制限が復活することですし、もう心配ないんじゃありませんか？」

「そう願いたいよ」

美月のかけた慰めの言葉に、達也はここぞとばかり頷いた。

◇◆◇◆◇◆◇

生徒会にオフはあっても非番はない。そもそも交代制ではないのだから。

深雪は今日も生徒会室でお仕事だ。

そして、達也たち兄妹には、片方を置いて先に帰るという選択肢は存在していない。

――客観的に見れば、ブラコン、シスコンと揶揄されても仕方のない二人だった。

それでも、

「申し訳ありません、お兄様……

わざわざお待ち頂くことになってしまって……」

相手を待たせることに罪悪感を覚える余地が残っているだけ、まだ救いがあるのだろう。

「気にするな、と言っても無理なんだろうがな……」

笑いながら、妹の頭をポン、ポンと軽く叩く達也。

それは叩くと言うよりも撫でると言った方が相応しい、優しい手付きで、深雪ははにかみながら気持ち良さそうに目を細めている。

――下校途中の生徒が行き交う廊下を歩きながら。

誤解（？）を推奨するような仲睦まじさを見せつけながら、生徒会室へ向かう二人に向けられる視線は、好意と悪意が相半ばしている。ただそれは、仲の良すぎるカップルに向けられるありがちなものとは顕著な違いがあって、悪意の視線は達也が一手に引き受けていた。

深雪と並んで歩いているとき。

彼に向けられる悪意の視線、その主成分は、先週までなら嘲りだった。

今は、忌々しげな反感、と、微妙に見え隠れする、恐怖。

強者に対する畏れ、ではなく、

未知なるものに対する、恐れ。

それは、彼の「活躍」に溜飲を下げてもいいはずの二科生も同じだった。

そういう訳だから、面識の無い相手から声を掛けられたのは、今週に入って初めてだった。

「司波君」

達也と深雪は同時に振り返った。

肉体的なスペックなら、明らかに達也が上回っている。

にも関わらず反応が同時になったのは、深雪の行動が反射的なものであったのに対して、達也の方には自分が声を掛けられたということに確信が持てない部分があったからだ。

それは、ややハスキーではあったが、女性の声だった。

「こんにちは。一応、はじめまして、って言った方がいいのかな？」

セミロングストレートの、なかなかの美少女。
彼女の顔に、見覚えはあった。
「そうですね、はじめまして。
壬生先輩、ですよね？」
達也にとって、激動の一週間の幕を開けたともいえる、剣道部の二年生。
剣道部乱入事件の、一方の当事者だった。
足を止めた達也へ向かって、躊躇の無い足取りで近づいてくる。
物怖じしない性格なのか、それとも下級生だからと安心――あるいは侮っているのか。
どちらであるにせよ、そのどれであるにせよ、変に隔意を持たれるよりマシではある。
深雪は、上級生が兄の前に立ち止まったのに合わせてスッ、と半歩、身を引いた。
達也に焦点を合わせていれば見えない、少しでも気を逸らせば自然と目に入る、そんな立ち位置だった。
「壬生紗耶香です。
司波君と同じE組よ」
達也の目が、自然と紗耶香の左胸に吸い寄せられた。
緑色のブレザーに縫い付けられた、緑色の、無地のポケット。
同じ、とは、そういう意味だと、達也にはすぐに分かった。
「この前はありがとう。
助けてもらったのに、お礼も言わないでごめんなさい」
親しげに投げ掛けられる微笑みは、同年代の少年にとって抗い難い吸引力を備えていた。魔法を扱う者にとって安易に使用してはならない言葉だが、心を奪う魔力が秘められている、という文学的な表現が相応しい。――文学といっても通俗文学だが。
「あの時のお礼も含めて、お話したいことがあるんだけど……
今から少し、付き合って貰えないかな？」
自分の笑顔が男子高校生に与える影響力を、意識しているか無意

識であるかは別にして、良く弁えているのだろう。
――もっとも、美しすぎる妹が常に傍らに在る達也に対しては、幾分勝手が違うかもしれない。
「今は無理です」
あっさりと拒絶された紗耶香は、ムッと来るよりむしろ呆気にとられているようだった。
「十五分後ならば」
「えと、それじゃあ、カフェで待ってるから」
詮索の暇もなく代替案を事務的な口調で提示されて、すっかり調子を狂わされながらも、紗耶香は達也の約束を取り付けることに成功した。

◇◆◇◆◇◆◇

達也が付き添うのは、生徒会室の扉の前までだ。
中まで入ってしまうと、服部と顔を合わせる可能性が高い。そうなるとお互い余り愉快な思いはしないので、自然と、用事の無い達也の方で放課後の生徒会室を避けるようになっていた。
――既に安全が確認されているというのが、大前提ではあったのだが。
「じゃあ、図書館で待っているから」
昨日までは深雪が達也を待つ立場だった。
達也が深雪を待つパターンは今日が初めてだが、入学前に達也がシミュレートしていたのはこのパターンだった。
深雪は間違いなく、何らかの役職に就くと分かっていたから。
故に、時間の潰し方を迷ったりはしない。
元々彼がこの学校に来た理由の一つが、国立魔法大学の関係機関からでなければアクセスできない非公開文献にあったのだから尚更である。
「図書館、ですか？」

しかし、そういう事情を知っているはずの深雪が、小首を傾げてわざわざ確認の言葉を返して来た。
「……その予定だが、何故そんなことを？」
「いえ……これから壬生先輩とカフェテリアで待ち合わせをされていらっしゃいますので……」
深雪の目は、達也の喉の辺りへ向けられている。
「深雪？」
達也が名前を呼んでも、顔を上げない。
目を合わせようと、しない。
寧ろ、視線を脇へ逸らしてしまう。
妹が何故こんな態度をとるのか、達也には分からない。
普通に考えれば拗ねているのだろうが、この妹に限って、ただそれだけであるはずがなかった。
問いただすにしても、ここは生徒会室の目の前で、お互いに人を待たせている状況だ。
「そんなに長話をする訳じゃない。
どうせ、部活の勧誘かそこらだろう」
見当外れなことを言っているという自覚はあった。
だが、事態を打開する切っ掛けにはなった。
「……本当に、それだけでしょうか」
「なに？」
「単なる、クラブ活動の勧誘なのでしょうか。
わたしは、違うような気がします。
理由はありません。
ですが……深雪は、不安です。
お兄様が名声を博するのはとても嬉しいことなのですが……
お兄様の本当のお力を、その一端でも知れば、私利私欲に役立てようと群がってくる輩は大勢います。
きっと、そうでない者の方が例外です。
どうか、気をつけて下さい」

杞憂、と笑い紛らすことは簡単だった。
彼が、司波達也でなければ。
相手が、司波深雪でなければ。
「……心配するな。
何があろうと、俺は大丈夫だ」
「だから！
それが、心配なんです！」
ようやく、妹が何を案じているのか、達也は朧気ながらも理解した。
「……大丈夫だ。決して、自棄を起こしたりしないから」
「……約束ですよ、お兄様」
「分かった。
……ところで深雪、たかが高校の委員会活動で、名声を博する、は言い過ぎだ」
「……もう！
いいじゃありませんか、そんなこと。
わたしにとって、お兄様のお名前は、名声なのです！」
クルリと身を翻してカードリーダーへ向かう深雪の、弧を描き流れた黒髪に隠れた頬が、ほんのりと紅に染まっていた。

◇◆◇◆◇◆◇

待ち合わせの相手は、すぐに見つかった。
何故なら紗耶香は、入口の脇に立って待っていたからだ。
「座って待っていれば良かったと思いますが」
「それじゃあ司波君が気づかないかもしれないでしょ？
こっちが誘ったのに、探させるのは悪いから」
女性らしい、あるいは年上としての気遣いなのだろうが、この人は自分のことを余り理解していないようだ、と達也は思った。
――思い切り、目立っていたのだ。

煩わしい噂がまた一つ増えたことを覚悟しなければならないだろう。

大喜びで肴にしそうな上級生の顔が二人分、脳裏に浮かび上がり、達也は心の中でため息をついた。

もっとも、それを表に（面に）出すような、不用意な真似はしない。

流石に初対面の女性と待ち合わせて、会った早々ため息をつくのは失礼だろうから。

「とにかく、座りましょう。話はそれからだ」

「そんなに混んでる訳じゃないから、飲み物を買ってからの方がいいわ」

疑問形でもなく、誘導形でもなく、断定。

少し、意外感を覚えた。

だが、あえて逆らう程のものでもない。

達也はコーヒーを、紗耶香はジュースを購入して、空いている席に、向い合わせで腰を下ろした。

一口、コーヒーを含み、カップを持ったままの体勢で、達也は向かいの席へと目を向けた。

紗耶香は鮮やかな真紅の液体を、ストローで夢中になって吸い込んでいる。

一気に三分の二程も飲み干して、ようやく顔を上げる。

目が、合った。

きょとんとした表情が、みるみる赤く染まる。

まるでジュースの色素が顔に巡って来たような塩梅だ。

「……好きなんですか、それ？」

達也としては素朴な疑問だったのだが、

「うっ……良いじゃない、甘い物が好きでも！

どうせあたしは子供っぽいです！」

いきなり怒られ……いや、拗ねられてしまった。

そんなに恥ずかしいなら最初から頼まなければいいのに、と達也は思った。

羞じらいの度合いと、無防備さ加減の釣り合いが取れていない、とも感じた。

だが口に出したのは、全くベクトルの異なる台詞だった。

「俺も、甘い物は好きですよ。

それは飲んだことがありませんが、家ではよくジュースを飲んでいます」

「そうなの……？」

「ええ」

「そっか……」

実際にそういう仕草をしている訳ではないが、胸を撫で下ろす紗耶香の様は、年長者に見えなかった。

――先週と、随分印象が違う。

「……えっと、気を取り直して、っと……

改めて、先週はありがとうございました。

司波君のおかげで大事に至らずに済みました」

揃えた両膝に手を置き、居住まいを正して、一礼する紗耶香。

流石は「剣道小町」というべきか、先程までの「可愛らしい女の子」より余程、様になっている。

「礼には及びません。あれは仕事でやったことですから」

達也は、半自動で紡ぎ出される考察を意識の裏で聞き流しながら、当たり障りの無い答えを返した。

「ううん、桐原君を止めてくれたことだけじゃないの」

だがその形式的な答えは、紗耶香のお気に召さなかったようだ。

「あんな野試合じみた真似をしたんだもの、あたしと桐原君だけじゃなくて、剣道部と剣術部の両方に懲罰があってもおかしくなかった。

穏便に済んだのは、司波君がお咎め無しを主張してくれたからでしょ？」

「実際に、騒ぎ立てる程のことではありませんでしたからね。
壬生先輩と桐原先輩以外、怪我人も出なかったことですし」
「そうね、女の子なのに、と思われるかもしれないけど……
武道をやっていればあの程度、よくあることだわ。
上達の過程で、自分の強さをアピールしたいという気持ちを抑えられない時期が、必ずと言って良いくらい、ある。
司波君にも、覚えがない？」
「そうですね。分かります」
――嘘だった。
少なくとも、その半分は。
彼には武道の修行をしているという意識は無い。
彼が学んでいるのは、あくまでも戦闘の技術。
任務を遂行する能力のアピールなら理解できるが、単純に強さを見せつけるという衝動には縁がなかった。
「そうでしょ？」
だが、当たり前のことだが、今日初めて言葉を交わす紗耶香に、達也の内心まで分かろうはずもなかった。
「大袈裟に騒ぎ立てる必要なんて無いのよ。
それなのに、あのくらいのことを問題にしたがる人が多いの。
今回も、同じ程度のことで摘発された生徒が大勢いる。
風紀委員の、自分の点数稼ぎの為にね」
「……俺も一応、委員会のメンバーなんで……
すみません」
「ご、ごめん！
そんなつもりじゃないのよ、ホントに！」
決まり悪げに装って頭を下げる達也を見て、いつの間にかエキサイトしていた紗耶香は、大慌てで釈明を始めた。
「あたしが言いたいのは、司波君はそんな連中とは違ってて、そのおかげで助かったってことで、えと、風紀委員会の悪口が言いたかったんじゃなくて、そりゃああの連中は嫌いだけど、って、あれっ

？……」

ゲシュタルト崩壊を起こしてしまった紗耶香を、達也は無表情に観察している。……目が、笑っていたが。

既に意味をなさなくなっていた単語の羅列は次第にフェードアウトしていき、遂には声にすらならず口だけを開閉していた紗耶香は、達也の視線に含まれる笑みに気付き、恥ずかしげに俯いた。

「……ねえ、司波君って、いじめっ子なの……？」

どこかで聞いたような台詞だった。

「そんな特殊な性癖は持ち合わせていません」

しれっと嘯く。そして、反論の機先を制して言葉を重ねる。

「それで、お話とは、なんでしょう」

「……単刀直入に言います」

唇は違う音韻を形作っていたが、諦めたのか、はたまた目的意識が勝ったのか、

「司波君、剣道部に入りませんか」

ようやく本来の用件を切り出した。

予想通り、過ぎて、いささか拍子抜けの感を否めないが、答えは決まっていた。最初からそう言ってくれれば、手っ取り早かったのだが、と小さな苛立ちを覚えつつ、達也は用意済みの答えを返した。

「折角ですが、お断りします」

「……理由を聞かせてもらってもいい？」

僅かな考慮の素振りも無い即答に、紗耶香はショックを隠しきれない面持ちだった。

「逆に俺を誘う理由をお聞きしたいですね。

俺が身に付けている技は、剣道とは全く系統が異なる徒手格闘術。壬生先輩の腕なら、分からないはずは、ありませんが？」

特に荒げたのでもなく、挑発的でもない落ち着いた口調だが、指摘自体が韜晦を許さぬ鋭い切れ味を持っていた。

紗耶香の視線が、宙をさ迷う。

必死に脱出路を探しているような仕草だった。

ある意味で、その通りだったのだろう。
彼女は一つため息をつくと、観念した顔で、口を開いた。
「魔法科学校では魔法の成績が最優先される……そんなことは最初から分かってて、こっちも納得して入学したのは確かだけど、それだけで全部決められちゃうのは間違っていると思わない？」
「……続きをどうぞ」
「……授業で差別されるのは仕方がない。あたしたちに実力が無いだけだから。
でも、高校生活って、それだけじゃないはずよ。
クラブ活動まで魔法の腕が優先なんて、間違ってる」
達也がこの一週間で見てきた限りにおいて、魔法競技に関係の無いクラブ活動が学校側から不当な抑圧を受けているという事実はなかった。
確かに、魔法競技系統のクラブは、学校から様々なバックアップを受けている。
だがそれは、魔法科高校としての名前を上げるための宣伝の一環であって、学校経営の観点から行われていることだ。
思うに、正面で熱弁をふるっているこの女の子は「優遇されていない」ということと「冷遇されている」ということの区別がついていないのだろう。
しかしそれは、達也が教えてやらなければならない筋のものでもなかった。
「あたしたちは、非魔法競技系のクラブで連帯することにしたの。剣道部以外にも大勢賛同者を集めた。
今年中に、部活連とは別の組織を作って、学校側にあたしたちの考えを伝えるつもり。
魔法が、あたしたちの全てじゃないって。
その為に、司波君にも協力してもらいたいの」
「なるほど……」
アイドルかと思っていたら、とんだ女闘士だった訳だ。

自分の見る目の無さを、達也は笑った。
「……バカにするの」
その笑いをどうやら勘違いしたようだ。
このまま誤解していてくれた方が、後腐れ無い気もしたが、達也はつい、余計なことを口にしてしまった。
「そんなつもりはありません。
自分の思い違いが可笑しかっただけですよ……
先輩のことをただの可愛いアイドルと思っていたんですから、俺も見る目が無い……」
「……」
後半は、半ば独り言だった。
入学以来、一癖も二癖もある美少女が次々と登場した所為か、普通の美少女を無意識に期待していたのか、と大声で自分を笑い飛ばしたい気持ちすらあった。
意識が内側へ向いていた為に、紗耶香が顔を赤らめてそわそわと挙動不審になっていたことに、達也は気付いていない。
「壬生先輩」
「な、何かしら」
笑いの衝動を収めて、達也は表情を改めた。
紗耶香の応える声が多少ひっくり返っていたが、達也に気に留めた素振りは無い。
そして達也は、本当の意味で余計な一言を、吐いてしまった。
「考えを学校に伝えて、それからどうするんですか？」
「……えっ？」

1－（18）　背後組織（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

1－（18）　背後組織

生徒会室での昼食風景も、最初の頃とは――と言ってもまだ二週間も経っていないのだが――様変わりしていた。

まず、ダイニングサーバーの出番がめっきり無くなった。

摩利、深雪に続いて真由美もお弁当を作ってくるようになったからだ。

実績の無い真由美の腕前はいささか懸念されるところだったが（と言っても懸念していたのは摩利だけだった）、まずまず無難なレベルはクリアしていて、今ではおかずの交換などして楽しんでいる。

それから、メンバーが増えた。

あずさは特に声を掛けられない限りクラスメイトと一緒に学食、がパターンだったのだが、最近は毎日声を掛けられている状態になっていた。

一年生と三年生だけではバランスが悪い、という、ワガママと言うべきか無茶苦茶と言うべきか、とにかく理屈になっていない理由による招集なのだが、それでも逆らえないところが――本人には不本意だろうが――あずさらしかった。

ちなみに男女比は一対四。

バランスが問題になるなら余程アンバランスだが、こちらは問題ではないようだった。

「達也くん」

「何でしょうか、委員長」

そんなメンバーでお昼をとっている最中だった。

本人は然り気無く切り出したつもりなのだろうが、野次馬丸出しの笑みが隠しきれていない。

そして、そんな表情までもがハンサムな少女だった。

「昨日、二年の壬生を、カフェで言葉責めにしたというのは本当かい？」

食べ終わっていて良かった、と達也は思った。
何か口に含んでいたなら、粗相しているところだ。
「……先輩も年頃の淑女なんですから、『言葉責め』などという、はしたない言葉は使わない方がいいと思いますが」
「ハハハ、ありがとう。
あたしのことを淑女扱いしてくれるのは、達也くんくらいのものだよ」
「そうなんですか？
自分の恋人をレディとして扱わないなんて、先輩の彼氏は余り紳士的な方ではないようですね」
「そんなことはない！　シュウは……」
そこまで言いかけて、摩利は「しまった」という顔で口をつぐんだ。
「……」
そんな上司を――と言っても高校の委員会の上役でしかないのだが――達也は無表情、という名の表情で見詰めている。
「……」
「……なぜ何も言わない？」
「……何かコメントした方が良いですか？」
摩利の視界の端で、豊かに波打つ黒髪が跳ねた。
甚だ不本意ではあったが、摩利は目線を横にスライドさせた。
予想通り、
真由美が背中を向けて、肩を震わせていた。
その背中を半眼で見る。
すぐに目を逸らした。
逆戻りした視線は、達也のものと交わった。
「……それで、剣道部の壬生を言葉責めにしたというのは本当かい？」
どうやら、今の一幕を全て、無かったことにしたいらしい。

達也は、摩利の隣を見た。
真由美が声を殺して笑う、のを止めて、芝居じみた仕草で肩をすくめていた。
――仕方がない。
ここは、ローカルルールに従うとしよう、と達也は思った。
「……ですから、『言葉責め』などという表現は止めた方がよろしいかと……深雪の教育にもよくありませんし……」
「……あの、お兄様？
……もしや、わたしの年齢を勘違いされていませんか……？」
不本意そうに、それでも遠慮がちに小声で深雪が抗議したが、達也に目で謝られて、すぐに引き下がる。
再び、沈黙という名のバトル。
しかし、この手の戦いは、往々にして千日手にしか成らない。
将棋なら、仕掛けた側が手を変える。
だがこの場のローカルルールでは……残念ながら、達也の方が手を変えざるを得ない。
立場というのは、色々な場面で理不尽に働くものなのだ。
「……そんな事実はありませんよ」
「おや、そうかい？
壬生が顔を真っ赤にして恥じらっているところを目撃した者がいるんだが」
不意に隣の席から冷気が漂って来たのを達也は感じた。
「お兄様……？
一体何をされていらっしゃったのかしら？」
気の所為では無かった。
物理的に、かつ局所的に、室温が低下している。
「ま、魔法……？」
あずさの呟きには怯えが混じっていた。
現代魔法学は超能力研究の発展上にある。
それはつまり、現代魔法は超能力と呼ばれた異能の持つ性質も潜

在的に受け継いでいるということ。
古式魔法と超能力の最大の違いは、発動に思考以外のプロセスが必要か、必要無いかということだ。
現代魔法がＣＡＤを必ずしも必須としないのも、根本的にはここに由来する。
しかし同時に、現代魔法は超能力とイコールでもない。
通常、「超能力者」は一種類、多くとも数種類の異能しか行使できない。
「超能力」をシステム化し体系化した現代魔法は、発動プロセスに魔法式を、そしてその構築ツールとして起動式を導入することにより、数十種類から多い者では百数十に及ぶ種類の魔法行使を可能にしている。
もっとも、現代魔法の分類は細分化され過ぎているきらいがあり、超能力と同じ尺度の大まかな分類では、せいぜい二、三十種類になるだろう。だがそれでも、圧倒的な多様性と言える。
現代の魔法遣い＝魔法師は、魔法式を介して多彩な魔法を行使する。それは同時に、多種多様な魔法を行使する魔法師は、魔法式を媒介とした魔法の発動に、自らの精神を適応させるということでもある。
特定の魔法に特化した、超能力者に近い魔法師ならば思考のみで、明確に意図することなしに魔法を発動することもありうるが、数十種類の魔法を行使する魔法師が意図せずに魔法を発動することは通常ありえないのだ。
確かに魔法式は無意識領域で処理するものだが、それは意識して無意識領域を使うということであって、無意識に魔法式が構築され処理されることは絶対に無い。
もし多種類の魔法を使いこなす魔法師が意図せずに魔法を発動することがあるとすれば……
「エイドスに対する干渉力がよっぽど強いのね……」
真由美の呟きに、達也は苦笑いを浮かべた。

切り捨てられた「超能力」の残り香でも、「現実」を変え得る程のエイドス干渉力。
魔法の暴走は、未熟の証であると共に、卓越した才能の証でもあった。
「落ち着け、深雪。
ちゃんと説明するから。
まず、魔法を抑えろ」
「申し訳ありません……」
兄の言葉に、深雪は恥ずかしげに目を伏せ、ゆっくり息を整えた。
室温の低下が止まる。
「夏場は冷房いらずね」
「真夏に霜焼けというのも間抜けですが」
真由美のジョークをさらりと流して、達也は紗耶香との会話を正確に再現して聞かせた。
「どうも、風紀委員会の活動は、生徒の反感を買っている面があるようですね」
最後にそう締めくくると、摩利と真由美が同じように表情を曇らせた。
「しかし、点数稼ぎに強引な摘発、等という事が本当にあるんですか？
少なくともこの一週間、そういう事例は見聞きしていませんが」
「わたしもです。
わたしの場合はモニター越しにしか現場を見ておりませんが、あの無秩序ぶりからすれば、風紀委員会の皆様の活動は寧ろ寛容だと思われますが」
達也と深雪の指摘に、真由美は一層沈痛な表情になり、摩利は首を振りながら口を開いた。
「それは壬生の勘違いだ。思い込み、なのかもしれないが。
風紀委員会は全くの名誉職で、メリットはほとんど無い。
対抗戦の成績のように、演習の評価が加点されるというようなこ

とも皆無だ。
風紀委員を務めた、ということで、多少は定性的な評価を得られるかもしれないが、それも校内だけのこと、生徒会役員のように卒業後も高評価の要因になる、ということもない」
「……だけど、校内では高い権力を持っているのも、また、事実。特に学校の現体制に不満を持っている生徒から見れば、学内秩序維持の実働部隊である風紀委員会は、権力を笠に着た走狗に見られることもあるの。
正確には、そういう風に印象を操作しているグループがいるんだけどね」
真由美の回答には、達也も驚かずにはいられない。
思いの外、根の深い話のようだ。
「正体は分かっているんですか？」
彼としては、当然の質問だった。
「えっ？　ううん、噂の出所なんて、そう簡単に特定できるものじゃないから……」
「……張本人を突き止められれば、止めさせることもできるんだがな」
だが、真由美たちにとっては、予想外の質問のようだった。
多分、さっきの発言も、つい口を滑らせてしまったのだろう。
達也は真っ直ぐに真由美の目を見た。
真由美は、すぐに視線を逸らした。
これほどハッキリと動揺している真由美を見るのは初めてだった。
「俺が訊いているのは、特定の個人の正体ではなく、グループの正体なんですが」
腕がクイッ、クイッと引かれるのを感じた。
目だけを動かして見ると、机に隠れて深雪が彼の袖を引っ張っていた。
踏み込み過ぎだ、と言いたいのだろう。
だが達也には、ここで退く気はなかった。

「例えば、『ブランシュ』のような組織ですか？」
動揺が驚愕に変わった。
硬直する真由美、そして摩利。
そんな二人の姿を、あずさが目を丸くして見ていた。
どうやら、あずさは詳しいことを知らされていないらしい――達也はそう思った。
「何故、その名前を……」
「別に、極秘情報という訳でもないでしょう。報道規制が掛かっているようですが、それこそ、噂の出所を根絶する事なんて出来ませんから」
達也にしてみれば、真由美がここまで驚いていることの方が、驚きだった。
反魔法組織「ブランシュ」。
魔法師が政治的に優遇されている現代の行政システムに反対し、魔法能力による社会差別を根絶することを目的に活動する、というのが彼らの掲げる理念だ。
だがそもそも、この国には魔法を使える者が政治的に優遇されている、という事実がない。
寧ろ、魔法師を道具として使い潰す軍や行政機関のやり方に、非人道的という非難が浴びせられているのが実情である。
これは、世界一の人口を抱える隣国に比べて、どうしても魔法師の絶対数で劣ってしまうハンデを質で埋めなければならないという、如何ともし難い必要性の故だ。
確かに魔法師の軍人・行政官は、そうでない者より高い報酬を受けているが、それは単純に労働の量に応じたものでしかない。命を磨り減らす過重労働の対価でしかない。
反魔法組織のほとんどは、自らが作り上げた虚構に対する批判を元に反体制運動を行っている組織であり、ブランシュはその中でも最も先鋭な活動を行っている組織の一つに挙げられている。
この国では建前上、政治活動の自由が保証されているから、単に

政府を批判するだけならば取り締まられることも弾圧されることもない。だが反体制運動は往々にして犯罪行為と結びつきやすいものであり、また実際に、テロ行為に走った反魔法組織の例も複数ある。

ブランシュは現在、公安当局から厳重にマークされている組織の、代表的なものだった。

「こういうことは中途半端に隠しても、悪い結果にしかつながらないものなんですがねぇ……」

いえ、会長のことを非難しているのではなく、政府のやり方が拙劣だと言っているだけなんですが」

達也が言い訳の形で慰めをかけても、真由美の眉は晴れない。

「……ううん、達也くんの言うとおりよ。

魔法師を目の敵にする集団があるのは事実なんだから、彼らが如何に理不尽な存在であるか、そこまで含めて正しい情報を行き渡らせることに努めた方が、一見もっともらしく不都合なアジテーションごとその存在を丸のまま隠してしまうより、効果的な対策を取れるのに、私たちは正面から対決することを逃げてしまっている……」

むしろ、自分を責めるような口調になっていた。

「それは仕方がないでしょう」

だからその、突き放すような口調は、随分冷たく感じられた。

「この学校は国立の施設ですから。

俺たち生徒は身分上、まだ公務員ではありませんが、学校運営に関わる生徒会役員が国の方針に縛られるのは仕方のないことです」

「えっ？」

温度のない声音と、掛けられた言葉の内容が頭の中で上手く結び付かずに、真由美は戸惑った顔で達也をまじまじと見詰めている。

「……会長の立場では、秘密にしておくのもやむを得ないということですよ」

居心地悪そうに目を逸らした達也を見て、摩利がにんまりと唇を歪めた。

「ほほぅ、達也くん、なかなか優しいところがあるな」

「でも、会長を追い詰めたのも達也さんなんですよね……」
ぼそっと呟く、あずさの一言。
すかさず摩利の追撃が入る。
「自分で追い込んで自分でフォローする、か。ジゴロの手口だね。真由美もすっかり、籠絡されているようだし、達也くんはなかなかの凄腕だな」
「ちょ、ちょっと、摩利、変なこと言わないで！」
「顔が赤いぞ、真由美」
「摩利！」
じゃれ合いを始める生徒会長と風紀委員長。
その間、達也は素知らぬ顔で明後日の方角を向いていた。
妹の冷たい眼差しにも、気づかぬふりをして。

「さてと……そろそろ時間ですから、俺たちは教室に戻ります。行こう、深雪」
まだじゃれ合いを続けている真由美と摩利に声を掛けて、達也は席を立った。
機嫌を損ねていた深雪は、誠意を込めた説得で懐柔済みだ。
それを見ていたあずさが顔を真っ赤にして部屋の隅に置かれた端末の前へ逃げてしまっていたが、達也の関知するところではなかった。
「ああ、待ち給え、達也くん。
っと、真由美、ストップだ、ストップ。真面目な話をするところだぞ」
「……続きは放課後、じっくり話をつけましょう」
「わかったわかった……全く、見かけによらず執念深いな……
それで達也くん、結局、返事はどうするつもりなんだい？」
「返事を待っているのは俺の方ですから、それを聞いてから決めますよ」
達也が投げかけた質問、

――学校側に自分たちの考えを伝えて、それからどうしたいのか――

に、紗耶香は答えることが出来なかった。

ただ「あ」とか「う」とか発音するだけで、意味のある回答を紡げなかった。

だから達也は、彼女に宿題を出したのだ。

自分の考えが纏まったら、もう一度、話を聞かせてもらうと。

「今の話を聞いて、放っておけることではないと分かりましたから」

「――頼んだぞ」

「何を頼まれれば良いのかさえ、今の段階では見当も付きませんが」

「出来る範囲で構わないさ」

「期待されているのか、いないのか、微妙なニュアンスですね……まあ、その程度で良ければ引き受けました」

達也たち兄妹の姿が扉の向こうに消えたのを見送って、摩利は小さく呟いた。

「多分それが、ベストの結果につながるだろうからね……」

１－（１９）　テロリストの大義（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

1―（19）　テロリストの大義

風紀委員会は、その業務の性質上、本部に毎日顔を出す必要はない。

委員長からして、普段は階上の生徒会室に入り浸っている。

人選も各方面から武闘派を選りすぐって集めたメンバーだから、事務とか整理整頓とかはどうしても疎かになりがちだったところに、人が居着かないものだから、部屋が荒れ放題という嘆かわしい事態に陥っていたのだった。

達也は新入部員勧誘週間の戦績以前に、唯一の事務スキル保有者として風紀委員会の中で確固たる地歩を――不本意なことに――築いていた。

今日も、本来ならば非番のところ、修羅場を極めた新入部員勧誘週間の活動報告が全く整理されていないということで、摩利からヘルプの要請が入っている。――ヘルプといっても、実際に作業するのは達也一人だが。

この状況は、全く彼の本意ではなかった。

放課後は非公開資料の閲覧に充てる、それが入学当初に立てた彼の予定だったのに、あれやこれやアレヤコレヤあって、研究が少しも進んでいない。

（とにかく、今日のところは報告書を仕上げるか……）

非生産的と知りつつため息混じりに心の中で独白し、まずは深雪と合流すべく、課題を終えた端末からログアウト――しようとした、その時。

まるでタイミングを見計らっていたかのように、ディスプレイに着信の通知が表示された。

そこには学校のサインが入っている。

つまりこれは、生徒に対して強制力を持つ指導あるいは通達のメールということだ。

当然、無視する訳にも行かず、腰を浮かせ掛けていた椅子に座り直して、受信メールを開いた。
送信者欄には、「小野　遥」と表示されていた。

◇◆◇◆◇◆◇

「急に呼び出してごめんね」
「いえ、特に急ぎの用はありませんから」
カウンセリング室で、少しもすまなさそうには見えない笑顔で形式的な謝罪を行った遥に、達也も心のこもっていない社交辞令で応えた。
彼の内心ではこの呼び出しについて、正直なところ、非常に迷惑に感じていた。
確かに急ぎではなかったが、手伝いを約束していた摩利に対して、断りのメールだけでは済まされず、音声通信で謝り倒した末に、予定以上の仕事を押し付けられる破目に陥ってしまった。
エスコートをキャンセルした深雪は、表面上こそいつもと変わらぬ様子を保っていたが、帰宅してからどうやって機嫌を取ろうかと、今から頭が痛い。
そもそも彼には、カウンセラーに相談したい事など無いのだ。
何故自分がここに呼ばれたのか、早く説明してほしいところだった。
「どう？　高校生活にはもう慣れたかしら？」
そんな彼の内心を知ってか知らずか――確実に、知らないだろうと達也は思っている――、遥は定番とも思える質問を投げ掛けてきた。
「いいえ」
それに対する達也の回答は、定番とは言い難いものだった。
「……何か困っていることがあるの？」
「想定外の出来事が多くて、中々学業に専念出来ません」

副音声は、無駄話は止めてさっさと本題に入れ、時間が勿体ないじゃないか、である。

心の副音声は聴こえなくても、非友好的な気分でいることは何となく分かるのか、遥は苦笑と微笑の中間のような曖昧な笑みを浮かべて、これ見よがしに足を組み替えた。

丈の短いタイトスカートの下から、薄手のストッキングに包まれた肉感的な太股が覗く。

向い合わせの椅子に腰かけている二人の間に、視線を遮る物は無い。

現代のマナーでは、公の場において肌の露出は抑えることを良しとする。

女子生徒も皆、スカートの下に素肌の色が透けないレギンスの着用が義務となっている校内において、成熟度を別にしたとしても、滅多にお目にかからぬ刺激的な眺めだった。（余談だが、肌を全く露出しないファッションでも、繊維素材の進歩により、真夏も快適に過ごすことができる）

そういえば上も胸元が大きく開いた淡い色のブラウスで、下着の線が透けて見えている。

学校の職員が生徒を前にする服装としては少々挑発的なファッションだ。

「……どうしたの？」

思わず目が離せなくなっている達也に、遥が悪戯っぽく問い掛けた。

慌てて目を逸らし、しどろもどろの応えを返す――

「セクシーな脚ですね」

――のが普通なのだろうが、達也の反応はそうではなかった。

「……えっ？」

「それに、胸元がとても色っぽい。

スタイルもセックスアピール満点だし、先生のその姿は男子高校生には刺激が強過ぎます」

そう言いながらも達也の目は、まだ、遥の太股に固定されたままだ。ただそこに、興奮の色はなく、

「ご、ごめんなさい」

寧ろ冷たさすら感じさせる視線と、声音に込められた軽い非難のニュアンスに、遥は慌てて脚を揃え、深く座り直した。

調子が掴めない。

主導権を握れないことに、遥は困惑を覚えていた。

「それで、自分は何故ここに呼ばれたのでしょうか」

抑制が効いた中にも、微かに苛立ちが感じられる口調。

そして、それすらも、彼自身による演出ではないか、という疑念が湧いてくる。

たかがもうすぐ十六歳、と侮る気持ちは無いつもりだった。

一筋縄で行く相手ではない、そう考えたからこそ、慣れない色仕掛けじみた真似もしてみたのだが、どうやらリスクの少ない遠回しな段取りは諦めなければならないようだ。

遥はそう、踏ん切りをつけて、改めて達也と向き合った。

「今日は、司波君に、私たちの業務へ協力をお願いしたくて来てもらいました」

「私たちの業務、ですか？」

知能が高いのは入学試験の結果だけでも、分かっていたことだった。

それでも、こうして的確に急所を突いてくる応答には、益々警戒心を掻き立てられてしまう。

「ええ、私たち、カウンセリング部の業務です。

――生徒の皆さんの精神的傾向は、毎年のように変化しています。

例えば、司波君は『自分』という一人称を使っていますね？

元々、軍務志願者の割合が高い魔法師候補生の間では珍しくないものでしたが、それでも、『自分』という一人称を使う生徒が一般的になったのは、三年前の沖縄防衛戦の勝利以来です。

社会情勢の変化は、生徒のメンタリティにも変化をもたらします。

特に、大きな事件が起こった後は、同じ年代の少年少女とは思えないほど、物事や自分自身に対する感じ方、考え方が変わってしまいます」

一旦言葉を切って、遥は目の前の少年の表情を窺った。

達也には少しも戸惑った様子がなく、寧ろ、遥の話を既知の知識として受け取っているように見えた。

「それで、毎年度、新入生の一割前後を選び出して、継続的にカウンセリングを受けてもらっているんですよ。

その年々の生徒のメンタリティ性向を把握し、的確なカウンセリングを行う為に」

「つまり、モルモットという訳ですか」

さらりと総括する言葉。そこには当然あるべき怒りや侮蔑や嫌悪感といった負の感情が、見当たらなかった。

頑なにさせてしまったか、と遥は思った。

「言葉は悪いけど、そういうことです。

どう、協力してもらえないかな？

もちろん、嫌だったら仕方がないけど」

努めて柔らかな笑みを浮かべ、言葉も砕けたものに変える。

それが功を奏したのか、達也もこの部屋に来て初めて、笑顔と呼べそうなものを見せた。

「その程度の事なら協力しますが、本当の目的は何ですか？」

微かな笑みと共に返された質問。

遥は、動揺を押し隠すのに全力を振り絞らねばならなかった。

「……本当の目的を隠してるって考えてるの？

心外だな。私、そんな性悪女じゃないわよ？」

あくまで軽く、冗談めかして。

年上の色香を匂わせるのではなく、同年代の友人感覚で。

「サンプルにするには、自分は特殊に過ぎると思いますが」

再び軌道修正。

「そうね。私も司波君は一般的な新入生とは言えないと考えている

わ。
でも逆に、だからこそ協力して欲しいのよ。
貴方は一科生と二科生の壁を乗り越えた最初の例になるのかもしれないけど、貴方が最後の例だとは限らないから」
今度は、あくまでロジカルに。
「……では、そういうことにしておきましょうか」
ようやく手掛かりを掴んだ、と遥は思った。
「私が未熟な所為で司波君に不信感を持たせてしまったようで、遺憾に思うわ。
……じゃあ、いくつか質問させてもらっても良いかしら」
「ええ、どうぞ」
警戒を解くことに成功した訳ではない、ということは分かっていたが、時間が無限に存在する訳でもない。
遥は準備していた質問を、順番に問い掛けた。

「……ありがとう。
それにしても、良く平気でいられるわね。
それだけストレスが積み重なれば、精神のバランスを崩す人だって珍しくない無いんだけど」
一通り話を聞き終えて、遥は医者のような顔でそう言った。
実のところ、遥は精神衛生を専攻して医師の資格を得ており、達也が彼女を「先生」と呼ぶのもそれ故なのだが、今の彼女はカウンセラーとして話を聞いているはずだった。
「医学的には、そうでしょうね。
ですが統計的なデータに例外はつきものです」
臨床データが統計処理の産物であることを指摘されて、遥は恥ずかしそうに目を逸らした。
しばし目を泳がせていた遥だったが、達也が（古風にも）壁に掛けられた時計にチラチラ目をやっているのに気付いて――無論、気付くようにやっていることだ――慌てて視線を戻した。

「えと、今日訊きたかったことは以上です。
……ところで、これはカウンセリングとは、直接関係無いんだけど……」
「何でしょう」
「二年の壬生さんに交際を申し込まれてるって、本当なの？」
「……本当に関係無いことですね」
達也は呆れ顔を隠そうともしない。
遥は焦って言葉を継いだ。
「相手が壬生さんだっていうから、少し気になって……
詳しいことは話せないんだけど」
「他人のプライバシーを聞かされても困ります。
それで、一体何処からそんなデマを聞き付けてきたんですか？」
「デマ……なの？」
「デマですが、何か不都合でも？」
「いえ、何でもないのよ……ううん、本当の事を言うと、もし司波君に壬生さんと交際する気があるなら、お願いしたいことがあったの。
でも、司波君にその気持ちが無いならいいわ」
「交際云々がデマだと言ってるんですが。
それで、その話は何処から聞き付けてきたんですか？」
重ねて問い掛ける達也から、遥は態とらしく目を逸らせた。
「ごめんなさい、守秘事項なの」
達也はそれ以上、追求しなかった。
「……失礼します」
追求する代わりに立ち上がり、返事を待たずに出口へ向かう。
「壬生さんのことで困ったことがあったら、何時でも相談してね」
その背中にかけられた声には、確信のようなものが込められていた。
――「困ったこと」が起こるという、確信めいたものが。

◇◆◇◆◇◆◇

夕食後、達也が自室でコンソールに向かっていると、扉越しに声が掛けられた。

「お兄様、深雪です」

この家には、実質的に、達也と深雪の二人しか居ない。

ノックされれば名乗るまでもなくそれが誰だか分かるし、声を聞けば名乗りを聞く必要もない。

それでも深雪は、事あるごとに、こうして自分の名前を告げる。

まるで、自身の名を達也の心に刷り込もうとでもするように。

まるで、自身の名を達也が忘れてしまうのを、恐れてでもいるかのように。

「入って良いよ」

達也はディスプレイから目を離さぬまま、入室を促した。

コンソールは扉から見て側面の壁に埋め込まれている。

高速でスクロールする文字列を読みながら、達也は視界の端に妹の姿を捉えた。

「お兄様に買っていただいたケーキが届きましたので……お茶にしませんか？」

誘いの言葉に躊躇いが含まれているのは、兄に余計な気を遣わせたという引け目だろうか。

達也としては、ケーキくらいで済めば安い物、というつもりだったのだが、こういう奥ゆかしさもまた、この妹の美点だった。――誰にでも発揮されるものかどうかは別にして。

物流システムの進歩は「荷物持ち」という言葉を死語に変えた。

ケーキのような小さな物でも、無料で配送してもらえる。

無論、店舗としては注文を受けてから作り始めて配送する方が、余計な商品の在庫を抱えずに済み、客の回転率を上げることが出来るという二つのメリットを、極小化された物流コストと秤に掛けた上でのサービスだ。

「すぐ行く」
そう答えて、達也は表示された情報をホームネットワークの共有ディレクトリへ保存した。

深雪の好きなチョコレートケーキの、口の中に残る甘過ぎないクリームを、苦味を強めにしてもらったコーヒーで洗い流して、達也はリビングのディスプレイをデータ閲覧モードに変更した。
「……わたしが見てもよろしいのですか？」
達也自身もまだ食べ終わった訳ではない。深雪のペースは更に遅い。
それにも関わらずデータファイルを呼び出そうとしているということは、明らかに、深雪にも見せようとしているということだ。
それでも一応、確認の伺いを立てて、肯定の回答に改めて腰を落ち着かせる。
「家族の団欒には相応しくない話題だと思うが、どうも、お前も無関係では済まされないことのようだし、早い内に情報を共有しておいた方が良いと思ってな。
……いや、そんなに畏まる必要はないよ」
フォークを置いて居住まいを正してしまった妹に、そんな必要はないと身振りを交えて示す。
達也の苦笑に、深雪は照れ笑いで応えて、再びフォークを手に取った。
「キャビネット名『ブランシュ』、オープン」
食べ物を広げたリビングのテーブルにフルキーボードは持ち込めない。
達也は余り好きではないのだが、音声コマンドを使って、調査結果のファイルをディスプレイ上に次々と表示した。
「反魔法活動を行っている政治結社ですね……？」
「当人たちは市民運動と自称しているけどな。
どうやらこのテロリストどもが、校内で暗躍しているらしい」

達也の言葉に、深雪が小首を傾げた。
「魔法科高校で、ですか？」
深雪の疑問はもっともだ、と達也は思った。
第一高校に限らず、魔法科学校は魔法を役立てよう――それが自分の為であれ他人の為であれ――と考えている人間が、魔法を学びに来るところだ。
魔法科高校の生徒が魔法を否定するのは、自家撞着でしかない。
「当たり前に考えればおかしなことなんだけどね……
その『当たり前』が通用しないから、ああいう気狂いどもが蔓延るんだよ」
「……何故そんなことになるのでしょう」
「こういうことは一般論で考えようとすると、迷路に陥ってしまうからね。
具体的に考えれば良い。
まず抑えておかなければならない点は、奴等が表向き魔法を否定していない、という事だ」
「そう言えば……そうですね」
「奴等のスローガンは、魔法による社会的差別の撤廃。
それ自体は、文句のつけようもなく、正しい」
「……はい」
「では、差別とは何だろう？」
「本人の実力や努力が社会的な評価に反映されないこと、でしょうか……？」
「さっき言ったはずだよ、深雪。
一般論で考えるべきではないと」
そう言いながら、達也はサイドボードに置いてあったリモコンを手に取り、スクリーンへ向けた。
十六に分割された画面の一区画が、前面に拡大表示される。
「奴等は魔法師とそうでないサラリーマンの所得水準の差を、魔法師が優遇されている根拠としている。

奴等の言う差別とは、詰まるところ平均収入の格差だ。
だがそれは、あくまで平均で、あくまで結果でしかない。
高所得を得ている魔法師が、どれほどの激務に晒されているのか、その点を全く考慮していない。
魔法スキルを持ちながら、魔法とは無関係の職しか得られず、平均的なサラリーマンより寧ろ低賃金に甘んじている大勢の予備役魔法師の存在を完全に無視している」
淡々と語る達也の声に、感情は希薄だった。ただ、少しだけ、遣る瀬無さが滲んでいた。
「どんなに強力だろうと、社会に必要とされない魔法は、金銭も名誉ももたらさない」
辛そうに、深雪が目を伏せた。
立ち上がり、回り込み、妹の肩に、達也は優しく、手を置いた。
「魔法師の平均収入が高いのは、社会に必要とされる希少スキルを有している魔法師がいるからだ。
絶対数の少ない魔法師の中に、相対的に高い割合で高所得者がいるから、平均収入が高く算出されるだけなんだ。
そして、そういう第一線で活躍している魔法師は、社会に貢献する――いや、この言い方は綺麗過ぎるな。魔法師は、金銭的な、あるいは非金銭的な、いずれにしても何らかの利益を生み出すことによって高い報酬を受けているのであって、ただ魔法師だからという理由で金銭的に優遇されているんじゃない。
魔法の素質だけで裕福な暮らしが出来るほど、魔法師の世界は甘くない。
俺たちはそれを、良く知っている。
そうだろう、深雪？」
「ええ……良く存じております」
肩に置かれた兄の手に、自分の手を重ねて、深雪は深く頷いた。
「魔法による差別に反対するという主張は、結局のところ、魔法師が金銭的に報われることに反対するという主張になっている。

魔法師は無私の精神で社会に奉仕しろ、という訳だね」

「……随分自分勝手で虫の良い主張に思われます。

生活する上で、金銭的な収入が必要なのは、魔法師もそうでない人も同じであるはずです。それなのに、魔法師が魔法で生計を立てることは許さない、魔法を使える者も、魔法以外で生きる糧を稼がなければならない……

それは結局、自分たちには魔法が使えないのだから、魔法を人の能力として評価したくないと言っているだけなのではないのですか？

魔法師が魔法を研鑽する努力は報われなくても構わない、魔法師の努力は評価されなくても当然だと言っているのですね……

……それとも、そのような人たちは、生来の才能だけでは魔法は使えないということを知らないのでしょうか？　魔法を使うには長期間の修学と訓練が必要だということを知らされていないのでしょうか？」

達也は深雪の背後から離れ、シニカルな笑みを浮かべながら自分の席に戻った。

「いや、知っていてさ。

知っていて、言わない。

都合の悪いことは言わず、考えず、平等という耳触りの良い理念で他人を騙し、自分を騙しているんだ。

深雪が最初に訊いたね。

魔法科高校の生徒が何故、反魔法活動に荷担するのかと」

「ええ……それは、魔法否定派の本音が分かっていないからではないと……？」

「魔法を使えない人たちが、自分たちがどんなに努力しても身につけられない魔法で、高い地位を得るのは不公平だと考える。

ならば、魔法を使えはするけれども、その才能に劣った生徒が、豊かな才能を持つ生徒に対して、自分がこんなに努力しているのに追いつけないのはおかしい、自分の方が下に見られるのはおかしい……そう考えても不思議はないと思わないか？

才能の違いなんて、魔法に限った事じゃない。芸術とかスポーツとかだけでなく、人の営みのあらゆる分野について回るものだ。

魔法の才能が無くても、他の才能があるかもしれない。

魔法の才能が無いことに耐えられないのなら、他の生き方を見つけるべきだ。

魔法を学んでいる者が、魔法による『差別』を否定するのは、魔法から離れられないからに他ならないと俺は思うんだよ。

魔法から離れたくはない、でも、一人前に見られないことには耐えられない。

同じように努力をしても、追いつけないという事実に耐えられない。

何倍もの努力をしても、追いつくことは出来ないかもしれないという可能性に耐えられない。

だから、魔法による評価を否定する。

才能ある者も努力という対価を払っているんだという事実は、当然知っている。目の前でそれを見ているのだから。それなのに、その事実から目を背け、生来の才能に全ての責任を押しつけて、それを否定する。

まあ……そういう弱さは理解できない訳じゃない。俺の中にもそういう気持ちは確かにある」

「そんなことはありません！

お兄様には誰にも真似の出来ない才能があるのに、ただ他の人たちと同じ才能が無いというだけで、それこそ何十倍もの努力を積み上げて来られたではありませんか！」

「それは俺に別の才能があったからだよ」

「あっ……」

「不足している現代魔法の才能を、別の才能で埋めた。

その術があったから、こうして第三者的な論評をしていられる。

もしそうでなかったら……『平等』という美しい理念にすがりついていたかも知れないな。

それが嘘だと分かっていても」
「……」
「魔法の才能に劣った者は、劣っているという事実から目を背けたくて、平等という理念を唱える。
魔法が使えない者は、それもまた人の持つ才能の一種に過ぎないということから目を背けて、嫉妬を理念という衣にくるむ。
では全てを分かった上で扇動している奴等の、本当の目的は何か？
奴等のいう平等とは、魔法を使えても使えなくても同じに扱えということだ。
魔法による社会的差別の撤廃とは、魔法という技能を評価しないということだ。
それは結局、魔法の社会的意義を否定するということだ。
魔法を評価しない社会で、魔法が進歩するはずはない。
魔法による差別反対を叫び、魔法師とそれ以外の者の平等を叫ぶ奴等の背後には、この国を、魔法が廃れた国にしたい勢力が隠れている」
「それは一体……？」
「良くも悪くも、魔法は力だ。財力も力、技術力も力、軍事力も力。
魔法は戦艦や戦闘機と同じ種類の力にもなる」
「では、魔法否定派は、この国で魔法を廃れさせることを目的にしており、その結果としてこの国の力を損なうことを目的にしているということですか？」
「多分ね。
それ故に、テロという非道も辞さない。
では、この国の力が損なわれて、利益を得るのは誰だ？」
「まさか……では、彼らの背後には」
「そういうことだ。
そしてそんな奴等を、十師族が放置しておくはずがない。
特に四葉家が、な
だから、気をつけるんだよ、深雪。

巻き込まれないように。
祭り上げられないように」
何に、とは言わない。
二人の間では、言う必要がない。
深雪は、兄の言葉に、蒼褪めた顔で頷いた。

1－（20）　決裂（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

1－（20）　決裂

新入部員勧誘（争奪？）週間の終了で、入学関連のイベントは一段落。

達也たちのクラスでも、今日から魔法実習が始まった。

本格的な魔法の専門教育は高校課程からだが、入学試験に魔法実技が含まれていることからも分かる通り、生徒たちは入学時点である程度の魔法スキルを身に付けている。

授業もそれを踏まえて行われるから、いくら基礎から体系的に教え直すといっても、実技が苦手な生徒は入学早々ついて行けなくなってしまうということも起こる。

一科、二科の区分けは、ある側面から見れば、この格差を考慮して双方に悪影響が出ないようにする合理的なものだった。――それが、一方の切り捨てであったとしても。

◇◆◇◆◇◆◇

「９４０ｍｓ（ミリ秒）……達也さん、クリアです！」

「やれやれ……三回目でようやくクリアか」

我が事のように目を輝かせて喜ぶ美月に、達也は疲れ気味の笑顔で答えた。

現在、達也たちのクラスは、初めての魔法実技の授業真っ最中。

基礎単一系魔法の魔法式を制限時間内にコンパイルして発動する、という課題を、二人一組になってクリアするのがその内容だ。

起動式を読み込み、無意識領域内に設定された魔法演算領域で魔法式に変換して発動する。

これが現代魔法のシステム。

このスキームの中で、機械に記録可能なデータである起動式を機械には再現不能な魔法式に変換するプロセスを、情報工学の用語を

流用して「コンパイル」と呼んでいる。
現代魔法は、魔法発動に必要な工程をデータ化して起動式に記録し、これを魔法式に変換するというスキームで正確性・安定性・多様性を実現した。
その代償として、念じただけで現象を書き換える、「超能力」の持っていた速度を犠牲にした。
魔法式の構築という余分な工程を介在させる以上、これはもう、どうしようもないことだ。
魔法式の構築時間をゼロにすることは出来ない。
――が、限りなくゼロに近づけることは出来る。
現代魔法が魔法式構築の速度を重視するのは、このような背景による。
ＣＡＤも元々は起動式を記録する為だけのストレージ機器だったが、すぐに魔法発動高速化に力点が置かれるようになった。
今日の授業で使っているＣＡＤは、個人別の調整が不要である代わりに高速化支援の機能は全く組み込まれていない。この、ある意味で原点なＣＡＤを使って、コンパイルの高速化を練習するのが今日の実習の目的だった。
ペアの一方がクリアできないともう一方も自動的に居残りとなる。
美月は一発クリアだったので、達也としてはホッと一息、胸を撫で下ろしたところだった。
「でも意外でした。
達也さん、本当に実技が苦手だったんですね……」
今日の課題のような単一系統・単一工程の魔法であれば、起動式の展開完了・読込開始から起算して魔法の発動まで５００ｍｓ以内が、魔法師として一人前と呼べる目安とされている。
１０００ｍｓを切るのに三回の試技を必要とした達也は、お世辞にも優秀とは言えない。
「意外って、結構何度も自己申告したと思うけど？」
「確かにお聞きしましたけど……謙遜だとばかり。

だって達也さんみたいに何でも出来る人が、実技が苦手だなんて」
心底不思議そうに首を傾げる美月に、達也は苦笑を漏らしてしまった。
――他に表情の選択余地が無かったのだ。
「……自分で言うのも何だけど、実技が人並みに出来ていたら、このクラスにはいなかっただろうね」
なるべく嫌みにならないよう、口調には気をつけた。その甲斐あってか、あるいは無用な気遣いだったか、美月は素直に頷いた。
「そうですね。
もし達也さんが実技も得意だったら……ちょっと完璧過ぎて、近寄り難かったかもしれません」
そう言って、美月は屈託のない笑みを浮かべた。
自分が彼女と同じように笑えているか、達也は少し、気になった。
「でも、達也さん……口惜しくは、ないんですか？」
「……何が？」
再び小首を傾げた表情には何も含むところが見当たらず、だからこそ達也は、彼女の質問に答える気になった。
「本当は実力があるのに、実力が無いみたいに評価されるなんて、普通なら口惜しいと思うんです。
私なら、口惜しくて仕方ないと思います。私に達也さんくらいの力があれば、ウィードなんて見下されて、とても平気でいられないと思うんですけど……達也さん、余り気にしてないみたいだから……」
非常に答え難い質問だった。
美月の性格からして、悪い噂を流すとか誰かに告げ口するとか、そういう真似をするとは考えられないが、納得のいく答えを返そうとすれば、彼が抱え込んでいる個人的事情にある程度踏み込まなければならない。
「処理速度も実力だよ。
それも、重要なファクターだ。

コンマ一秒が生死を分けるような事態だって、皆無ではないからね」

結局、達也は建前論を選択した。

美月がただの二科生であれば、それで納得させられただろう。

だが、彼女は、

「実践を想定するなら、達也さん、本当はもっと速く発動できるんでしょう？」

特別な「眼」の持ち主だ。

「……何故そう思う？」

こんな訊き方をすること自体、相手の発言を認めるもの、相手に言い負かされているのを認めるようなものと分かってはいたが、動揺した頭はそれ以上の応答を演算してはくれなかった。

「さっきの実技ですけど、達也さん、三回とも凄くやり難そうでした。

母が翻訳家をしているんでこういう言い方になるんですけど、まるで、英語の質問に英語で考えて英語で答えられる人が、無理やり日本語で回答してそれを英訳することを要求されているみたいで。

それに最初の試技のとき、達也さん、一旦構成し掛けた魔法式を破棄してコンパイルをやり直してたでしょう？

タイミング的に見て、起動式の読込と最初の魔法式の構築が並行していました。

あれを見て思ったんです。

達也さんって、この程度の魔法なら、起動式を使わずに直接魔法式を構成できるんじゃないかって」

頭の芯がスッと冷えた。

動揺がピークを超えて、逆に平常心を取り戻す。

動揺すること自体が少ない達也にとっては、滅多にない体験だった。

「そこまで見られていたとは思わなかった。

流石は天眼通の持ち主……」

今度は美月の顔がサッと蒼褪めた。
少し意地の悪い言い方だったか、と達也は微かに口の端を吊り上げた。
「確かに、基礎単一系程度なら、直接魔法式を組むことでもう少し速く発動できるよ。
でもその手が使えるのは工程の少ない魔法だけだ。俺には五工程が限界だな」
現代魔法において工程という言葉には、魔法を発動するプロセスそのものと、目的とする現象改変を行う為に組み合わせられた複数の魔法の、一つ一つの魔法処理の二通りの意味を持つ。ここで達也が言っている「五工程の魔法」は、五つの魔法処理を組み合わせて一つの現象改変を行う術式を意味している。
例えば卵をキッチンからテーブルへ魔法で移動させる場合、加速、移動、加速、移動の四工程が必要となる。
移動魔法は物体の速度と線形の座標を書き換える魔法であり、加速の工程を省略すると対象物に慣性を無視した加速が掛かる。卵であれば、割れてしまう。
移動の工程を省いて加速と減速だけで処理しようとすると、卵は放物線軌道で飛んでいくことになり、恐ろしく精密な減速制御が必要になる。工程が増えても加速魔法である程度まで減速をかけて、移動魔法で速度をゼロにする方が容易なのだ。
これに対して、対人戦闘で相手を吹き飛ばす魔法は、移動の単一工程で完結する。元々相手にダメージを与えることが目的なのだから、衝撃を緩和する為の工程は必要ない。
「五工程あれば、戦闘用には十分だと思うんですけど……」
一般論で言えば、民生用魔法は戦闘用魔法より多段階の工程が必要とされる。
美月の言うように、単一工程から五工程の魔法で戦闘用魔法の大半はカバーされるだろう。
「俺は、戦闘用に魔法を学んでいるんじゃないからね。

多段階工程の魔法を使いこなす為にはやはり起動式が必要で、その処理速度が劣っていることに対して相応の評価を受けるのは仕方の無いことだと納得しているよ」

そう言って、もう一度微笑んで見せると、美月は何故か、眼を潤ませて彼を見上げていた。

「？」

「凄いです、達也さん……尊敬します……」

胸の前で指を組んで、うっとりとした口調で、美月は（達也にとって）聞き捨てならないことを口走った。

「はっ？」

「魔法が使えるから魔法師になる……それが普通なのに、達也さんはちゃんと自分の目的を持って、その為に魔法を学んでいるんですね……」

「いや、まあ、確かにその通りだけど……」

「私、心を入れ換えます！」

「えーっと……」

「私は元々、この『眼』を治す為に魔法を勉強しているだけで、将来、魔法を使って何をしたいかなんて深く考えたことは無かったんですけど、これからしっかり、考えてみます！」

「もしもし、美月さん？」

「そうですよね、目的をしっかりと持っていたら、少し中傷されたくらいで挫けたりしませんよね。

自分の人生にとって大切な目標が達成できれば、学校の成績なんて副次的なものですよね。

それって、生き甲斐ですよね。

人は、自分だけの生き甲斐を求めて……」

「ちょっと、美月。なにエキサイトしてるの？」

美月の独演会は――授業中であるにも関わらず――エリカのツッコミが入るまで続いた。

クラスメイトから向けられた奇異の目――というより、白い眼差

しに、赤面して俯く。
美月のそんな姿を眺めながら、達也は皮肉な気分が面に現れないよう、慎重に表情を作っていた。
生き甲斐？
そんな、上等なものではなかった。
魔法と関わらない生き方など、彼には選びようがなかった。
魔法が使えるから魔法師になるのではなく、魔法が使えないのに魔法師にされた。
彼にとって魔法とは、誕生の瞬間にかけられた呪いだった。
それを何とか、自分にとって許容できるものへ変えようと、足掻いているだけに過ぎない。
しかし――魔法が使えるから魔法師になる、それが普通であるなら、魔法師の卵が魔法を否定することも決して難しくは無い。
自分は少し、思い違いをしていたのかもしれない。
――そう、思った。

◇◆◇◆◇◆◇

そして昼休み。
達也は結局、居残りをしていた。
――エリカとレオに懇願されて。
「１０６０ｍｓ……ほら、頑張れ。もう一息だ」
「と、遠い……０．１秒がこんなに遠いなんて知らなかったぜ……」
「バカね、時間は『遠い』とは言わないの。それを言うなら『長い』でしょ」
「エリカちゃん……１０５２ｍｓよ」
「あああぁ！
言わないで！
せっかくバカで気分転換してたのに！」
「ご、ごめんなさい……」

「ううん、いいのよ美月。
どんなに厳しくても、現実は直視しなくちゃいけないものね……」
「……テメエの三文芝居なんざどうでもいいが、いい加減、人を玩具にするのは止めやがれ」
エリカとレオは、授業時間中に仲良く一秒をクリアできなかった。
それで、達也にコーチを頼んだのである。
「レオはさ、照準の設定に時間が掛かり過ぎてるんだよ。
こういうのは、ピンポイントに座標を絞る必要は無いんだ」
「分かっちゃいるんだけどよ……」
弱音を隠す余裕も無くなったレオに、達也は同情を込めて頷いた。
「まあ、そうだろうけどな……
仕方が無い。裏技になるが、先に照準を設定してから、起動式を読み込んでみたらどうだ」
「えっ？　そんなことができるのか？」
「だから、裏技だ。応用の利かない、所詮はその場しのぎだから、余り教えたくは無いんだが……」
「そんな！？　頼む、達也！　この際、裏技でもカンニングでもいいから教えてくれ！」
頭上で両手を合わせて拝み込むレオに、達也は深々とため息をついた。
「人聞きの悪いことを言うな。別に、不正をする訳じゃない。
……ったく、俺も実技は苦手だって言ってるのに。教わるんなら、もっと上手いヤツに声をかけた方が良かったんじゃないか？」
「苦手って言っても、俺より上手いじゃないか。
それにコンパイルの仕組まで分かって、何処が悪いのかまで指摘できるようなヤツはお前だけだ」
「おだてなくても教えてやるって……
それから、エリカの方だが……」
「なになに？　裏技でもカンニングでも不正でもいいからお願いします！

いい加減、お腹空いたよぉ」
「だから、二人揃って人聞きの悪いことを言うな。
エリカの方は、何処が悪いのか分からない」
「えええぇ！？」
「正確に言うと、何で出来ないのか分からない。
俺より余程、スムーズにコンパイルできているのにな」
「そんなぁ！　達也くん、見捨てないでよ」
涙目になって――多少、芝居がかっていたが――祈るように指を組み合わせて上目遣いに眼差しで縋り付いてくるエリカに、ため息をもう一つ。
この二人、行動パターンがそっくりだ、と達也は思ったが、口にしたのは別の言葉だった。
「そこでだ。エリカ、起動式を読み込むとき、パネルの上で右手と左手を重ねてみてくれ」
「えっ？」
その言葉を聞いて、エリカだけでなく美月もポカンとした表情を浮かべた。
「……それだけでいいの？」
「俺も、確信がある訳じゃない。だから理由は、上手く行ったら説明するよ」
「う、うん……やってみる」
疑問はとりあえず棚上げにして、据付型のＣＡＤに向かうエリカ。
それを見て、達也はレオに裏技のレクチャーを始めた。

◇◆◇◆◇◆◇

「１０１０ｍｓ。
エリカちゃん、一気に４０も縮めたわよ！
本当に、もう一息！」
「よ、よーし！

なんだか、やれる気になってきた！」
「１０１６。
迷うな、レオ。的の位置は分かっているんだ。一々目で確認する必要は無い」
「わ、分かったぜ。
よし、次こそは！」
達也と美月が計測器をリセットしている傍らで、目を閉じる、腕を振り回す、それぞれの方法で精神を集中し、気合を高めるエリカとレオの二人。
その背後から、
「お兄様、お邪魔してもよろしいですか……？」
遠慮がちな声が掛けられた。
「深雪、……と、光井さんに北山さんだっけ？」
「エリカ、気を逸らすな。
すまん、深雪。次で終わりだから、少し待ってくれ」
「いっ？」
「分かりました。申し訳ございませんでした、お兄様」
さり気なく掛けられたプレッシャーに、レオの顔が引き攣った。
深雪が後続の二人に合図してドアの陰に身を隠す。
それを見て、達也は小さく頷いた。
「よし、二人とも、これで決めるぞ」
声を張り上げた訳ではない、が、有無を言わせぬ口調。
「応！」
「うん！　これで、決める！」
二人は気合を漲らせて、ＣＡＤのパネルへ向かった。

◇◆◇◆◇◆◇

「ようやく終わった～！」
「ふう……ダンケ、達也」

レオの謝辞に片手で応え、達也は深雪に声を掛けた。
笑顔を浮かべて歩み来る深雪。
遠慮がちながら、二人のクラスメイトもその後に笑顔で続く。
「二人とも、お疲れ様。
お兄様、ご注文の通り揃えて参りましたが……足りないのではないでしょうか？」
「いや、もう余り時間も無いし。
深雪、ご苦労様。光井さんと北山さんもありがとう。手伝わせて悪かったね」
「いえ、この程度のこと、何でもないです！」
「大丈夫。私はこれでも力持ち」
達也はもう一度礼を言って、三人からビニール袋を受け取った。
「ほら」
そして、エリカとレオに向かって、そのまま差し出す。
「なぁに？」
「サンドイッチ……か？」
袋の中身は購買で売っているサンドイッチと飲み物だった。
「食堂で食べてると午後の授業に間に合わなくなるかもしれないからな」
そう言いながら、達也は深雪から弁当箱を受け取っていた。
「ありがと～！　もうお腹がペコペコだったのよ！」
「達也、お前って最高だぜ！」
現金な友人たちに苦笑を浮かべながら、達也は近くの椅子に腰を下ろし、美月にも遠慮しないよう声を掛けた。
「……でも、いいんでしょうか？　実習室での飲食は禁止なのでは？」
「飲食が禁止されているのは情報端末を置いてあるエリアだけだよ。
校則では、教室内の飲食も特に禁止されていない」
「えっ、そうなんですか？」
「そうなんだよ。俺も禁止されているものだとばかり思い込んでい

たから、少し意外だった」
箸を取りながら悠然と答える達也に、「それなら」と美月も手を伸ばす。
「へぇ……そうと分かれば遠慮なく」
「アンタは最初から遠慮なんてしてないでしょ」
和気藹々と（？）テーブル……は無いから適当に椅子を寄せて、遅い昼食を摂り始める達也たち居残り組一同。
深雪たち差入組も、飲み物だけ持って、その輪に加わった。
「深雪さんたちは、もう済まされたんですか？」
「ええ。お兄様に、先に食べているように言われたから」
「へぇ、チョッと意外。
深雪なら『お兄様より先に箸を付けることなどできません』とか言うと思ったのに」
ニコニコ、と言うより、ニヤニヤと笑いながらエリカが茶々を入れる。
本気でないのは、顔を見れば分かった。
――唯一人を除いて。
「あら、よく分かるわね、エリカ。
いつもならもちろん、その通りなのだけど、今日はお兄様のご命令だったから。
わたしの勝手な遠慮で、お兄様のお言葉に背くことはできないわ」
「……いつもなら、そうなんだ……」
「ええ」
「……もちろん、なのね……？」
「ええ、そうよ？」
笑顔が引き攣り気味になっているエリカに、深雪は真顔で小首を傾げる。
妙な重量感を増していく空気を振り払うように、美月が不自然にトーンの高い声を発した。
「深雪さんたちのクラスでも実習が始まっているんですよね？

どんなことをやっているんですか？」
ほのかと雫が顔を見合わせる。
遠慮と気まずさが入り混じった表情だ。
そんなクラスメイトの態度と裏腹に、深雪は勿体も付けず、ストローから唇を離して即答した。
「多分、美月たちと変わらないと思うわ。
ノロマな機械をあてがわれて、授業以外では役に立ちそうも無いつまらない練習をさせられているところ」
達也を除いた五人が、ギョッとした表情を浮かべた。
淑女を絵に描いたような外見にそぐわない、遠慮の無い毒舌に。
「ご機嫌斜めだな」
「不機嫌にもなります。
あれなら一人で練習している方が為になりますもの」
笑いながら、からかい気味に掛けられた兄の言葉に、拗ねた顔と声で、それでも少し甘えていることが第三者にも分かる態度で、深雪は答えた。
「ふ～ん……手取り足取りも良し悪しみたいね」
「恵まれているのは認めるわ。
気を悪くしたのだったら、ごめんなさい」
「やっ、少しも気を悪くなんてしてないから」
真面目な顔で頭を下げる深雪に、エリカは軽く、手を振った。
「見込のありそうな生徒に手を割くのは当然だもの。
ウチの道場でも、見込のないヤツは放っとくから」
「エリカちゃんのお家って、道場をしているの？」
「副業だけど、古流剣術を少しね」
「あっ、それで……」
納得顔で頷く美月。
エリカが伸縮警棒で、森崎のＣＡＤを叩き落した時のことを思い出したのだろう。
「千葉さんは……当然と思っているの？」

そこへ、おずおずと口を挟んだのは、ほのかだった。
「エリカで良いよ。
いや、寧ろそう呼びなさい」
「なんでオメエは、そういつも偉そうなんだよ……」
呆れ声のツッコミは、ほのかにとってちょうど良い「間」になったようだった。
「じゃあエリカ、私のことも、ほのかで」
「オーケーおーけー。
それで、当然と思うかって、一科生には指導教官がついて、二科生にはつかないことかな？」
「……そう、そのこと」
「だったら、当然だよね。
当たり前のことなんだから、深雪やほのかが引け目を覚える必要は無いんだよ？」
「……やけにあっさりしてるな」
「あれ？　もしかしてレオ君は、不満に思っているのかな？」
「いや、俺だって仕方が無いことだと思っているけどよ……」
「そっか～
でもあたしは、『仕方が無い』じゃなくて『当然』だって思ってるんだけどな」
「……理由を訊いても良い？」
ほのかの質問に、エリカはちょこんと首を傾げた。
少し考えをまとめているらしき沈黙の後に、こめかみを人差し指で掻きながら口を開いた。
「ウ～ン……今まで当たり前のことだと思ってたから、説明が難しいなぁ……
例えばね、ウチの道場では、入門して最低でも半年は、技を教えないの」
「ほぉ」
興味深げに頷いたのは達也。

ほのかや雫や美月は、頭上にハテナマークを浮かべている。
「最初に足運びと素振りを教えるだけ。
それも一回やって見せるだけで、後はひたすら素振りの繰り返しを見ているだけ。
そして、まともに刀を振れるようになった人から技を教えていくの」
「……それじゃあ、いつまで経っても上達しないお弟子さんも出てくるんじゃない……？」
「いるね～、そういうの。
そして、そういうヤツに限って、自分の努力不足を棚に上げたがるんだな。
まず、刀を振るって動作に身体が慣れないと、どんな技を教わっても身に付くはずが無いんだけどね」
「あっ……」
「そしてその為には、自分が刀を振るしかないんだよ。
やり方は、見て覚える。
周りに一杯、お手本が居るんだから。
教えてくれるのを待っているようじゃ、論外。
最初から教えてもらおうって考え方も、甘え過ぎ。
師範も師範代も、現役の修行者なんだよ？
あの人たちにも、自分自身の修行があるの。
教えられたことを吸収できないヤツが、教えてくれなんて寝言こくなっての」
思いがけずエキサイトして罵詈雑言を繰り出しているエリカを、達也は興味深そうに眺めている。
「……お説はごもっともだと思うけどよ、俺もオメエも、ついさっきまで達也に教わってたんだぜ……？」
「ア痛！
それを言われると辛いなぁ」
レオの指摘に顔を顰めつつ、あっけらかんとした調子は変わらな

い。
「それはそれ、背に腹は代えられない、ってことも確かにあるけどさ……教わるには、教わる相手に相応しいレベルがないと、お互いに不幸だって思うのよ。
まっ、一番の不幸は、教える側が、教えられる側のレベルについていけないことなんだけどね」
ここでパチリと、意味ありげなウインク。
達也はニヤリと、人の悪い笑みを返した。
「残念ながら、今日は不幸な結果に終わったな。
最終的な記録は、俺よりエリカの方が１００ｍｓ以上、速かった」
エリカのこめかみから、一筋の冷や汗が流れる。
「あ、いや、あたしは、そういうことを言っているのでは……
そ、そういえば、さっきの種明かしを聞いてない！
ねえ、何で手を重ねて置いただけで、あんなにタイムが上がったの？」
強引な話題転換。
話を逸らそうとしているのは誰の目にも明らかだが、突っ込み過ぎると後々しこりを残しそうな話題なので、達也は大人しく逸らされることにした。
「なに、単純なことだ。
エリカは片手で握るスタイルのＣＡＤに慣れている。
だから、両手をパネルに置くスタイルの授業用ＣＡＤには、スムーズにアクセスできないんじゃないかと思っただけだよ」
「それで、両手を重ねさせて、接点を片手にしたんですね……」
「片手を置くスタイルでも良かったんだが、手を重ねるスタイルの方が気合が入るんじゃないかと思ってね。
要するに、気分の問題だ」
「……なるほど、あたしはまんまと達也くんに乗せられたのね」
空ろな笑いを漏らすエリカ。
その脱力具合が漫画チックで、皆が釣られ笑いを溢した。

「なーんか、気が抜けちゃったな……
そうだ。
深雪もこれと同じＣＡＤを使ってるんでしょ？」
「ええ」
頷きながら嫌悪感を隠そうとしない深雪に、エリカは好奇心をかき立てられた。
「ねえ、参考までに、どのくらいのタイムかやってみてくれない？」
「えっ、わたしが？」
自分を指差し、目を丸くする深雪に、エリカはわざとらしく、大きく、頷いた。
達也に目で問い掛ける深雪。
苦笑いを浮かべながら頷く兄を見て、深雪は躊躇いがちながら、承諾の応えを返した。
機械の一番近くに居た美月が、計測器をセットする。
深雪はピアノを弾くときの様に、パネルに指を置いた。
計測、開始。
サイオンが閃き、
美月の顔が強張る。
いつまで経っても結果を告げない友人に焦れたのか、エリカが結果発表を催促した。
「……２３５ｍｓ……」
「えっ……？」
「すげ……」
そしてたちまち、表情筋の硬直が伝染する。
「何回聞いても凄い数値よね……」
「深雪の処理能力は、人間の反応速度の限界に迫っている」
ため息を漏らしたのはＡ組の生徒も同じ。
ただ、その兄だけが驚いていない。
そして本人は、不満そうに眉を顰めている。
「旧式の教育用ではこんなものだろう。仕方がないよ、深雪」

「こんな雑音だらけで洗練の欠片もない起動式を受け入れなければならないなんて……本当に、嫌になってしまいます。
やはり、お兄様に調整していただいたCADでないと、深雪は実力を出せません」
「そう言うな。もう少しまともなソフトに入れ換えてもらえるように、その内、会長か委員長から学校側に掛け合ってもらうから」
拗ねるように、甘えるように身を寄せる深雪の頭を、幼い子供にするように、達也は優しく撫でている。
その光景を見ても、いつものように、当てられることはなかった。
目の前で見せられた実力と、兄妹の間で交わされた会話。
この格差を前にすれば、嫉妬という感情自体が、バカバカしいものだった。

◇◆◇◆◇◆◇

放課後のカフェを行き交う生徒たちを、達也はぼんやり眺めていた。
ぎこちない雰囲気が漂っているのは、新入生の利用が多い為か。
摩利に聞いた話では、入学直後が最も学内カフェの利用率が高いらしい。
慣れてくると、部室や中庭や空き教室等のたまり場を見つけて、足が遠のくのだそうだ。
まあ、営利でやっている店ではないから、客足が薄くても問題は無いのだろう。
テーブルの上のコーヒーは、既に冷めてしまっている。
先日とは逆の立場、逆のパターン。
自分を監視している視線を鬱陶しく感じながらも、待ち人の到来に注意を向ける。
約束から、十五分。
彼女はようやく現れた。

「ごめん！　待ったでしょう？」
「大丈夫です。連絡を貰ってましたから」
無理をしている訳ではない。
達也の端末には、確かに、十分前後遅れる旨の伝言が入っていた。
もっとも、着信があったのは待ち合わせ五分前で、既に予定を組み替えられるタイミングではなかったが、十分や二十分、待った内に入らない、という程度には、達也は気が長かった。
「そう、よかった……
怒って帰ってたらどうしようかと思っちゃった」
大袈裟に胸をなでおろす紗耶香。
どうやら今日も「可愛らしい女の子」モードらしい。
彼女の演技指導役は、自分のことを一体どういう趣味だと思っているのだろう、と達也は首を傾げた。
「どうしたの？」
不思議そうな声。
どうやら、動作に表れてしまったようだ。
「大したことじゃありません。先輩が時々『可愛らしい女の子』になるので、剣を握っているときとのギャップを感じたんですよ」
「やだ……もう、からかわないでよ」
慌て気味に、目を逸らされた。
これは、彼女の素の反応か、それとも作られた仕草か。
彼には判別がつかない。
残念ながら、探りは不発に終わったようだ。
「すみません」
笑いを含みながら、謝罪。
これは、彼の演技だ。
自信は、余り、無いのだが。
「もう……司波君って、本性はナンバ師なの？」
「魔法師ではありませんね、今のところは、まだ」
冷め切ったコーヒーに口をつける。

言葉遊びはお終い、という合図。
紗耶香に通じるかどうかは分からなかったが、腰を落ち着け直したところを見ると、こういう機微には敏い性質らしい。
「一昨日の話なんだけど……」
達也がカップをテーブルに戻したところで、紗耶香の方から本題を切り出した。
「最初は、学校側にあたしたちの考えを伝えるだけで、良いと思ってた」
腕がピクッと震えたのは、テーブルの下で拳を握り締めでもしたからだろうか。
「でも、やっぱり、それだけじゃダメだって分かった。あたしたちは、学校側に待遇改善を要求したいと思う」
随分踏み込んだな、というのが達也の印象だった。
本気なのか、それとも彼を引き込むハッタリなのか。
ハッタリだとすれば、逆効果だが。
「改善というと、具体的に何を改めて欲しいんですか？」
「それは、……あたしたちの待遇全般よ」
「全般と言うと、例えば授業ですか？」
「……それもあるわ」
「一科と二科の主な違いは指導教員の有無ですが、そうすると先輩は、学校に対して、教師の増員を求めているのですか？」
そんなことは不可能だ。
元々、有効レベルで魔法を行使できる成人が不足しているからこその国策学校。
二科制度も、魔法師、魔工技師の供給を確保する為の、ある意味無理を承知の施策だ。
「そこまで言うつもりは無いけど……」
案の定、返って来たのは歯切れの悪い否定。
「では、クラブ活動ですか？」
剣道部には、剣術部と共用とは言え、専用の体育館が割当てられ

ているはずですが」
昨日調べてみた限りでは、意外なことに、剣道部と剣術部の利用日は、平等に割当てられている。
「それとも、予算の問題ですか？
確かに魔法競技系クラブにはそうでないクラブに比べて予算が多く割当てられていますが、活動実績に応じた予算配分は普通科高校でも珍しくないと思いますが」
「それは……そうかも知れないけど……
じゃあ、司波君は不満じゃないの？
魔法実技以外は、魔法理論も、一般科目も、体力測定も、実戦の腕も、全ての面で一科生を上回っているのに、ただ実技の成績が悪いというだけでウィードなんて見下されて、少しも口惜しくないの？」
必死に言い募る紗耶香の姿に、達也は軽い苛立ちを感じた。
彼の不満も無念も、彼女自身の想いとは関係のないことだ。
変えたいと思っているのが彼女自身なら、何故自分の想いを語らないのか。
「不満ですよ、もちろん」
だから彼は、
「じゃあ！」
「ですが、俺には別に、学校側に変えてもらいたい点はありません」
自分自身の想いを、語る。
「えっ？」
「俺はそこまで、学校というものに期待していません」
僅かに一欠片ではあるが、紛れもない本心を。
「魔法大学系列でのみ閲覧できる非公開文献の閲覧資格と、魔法科高校卒業資格さえ手に入れば、それ以上のものは必要ありません。
ましてや、学校側の禁止する隠語を使って中傷する同級生の幼児性まで、学校の所為にするつもりはありません。
残念ながら先輩とは、主義主張を共有できないようです」

そう言って、達也は席を立った。
「待って……待って！」
振り返ると、椅子に座ったまま――もしかしたら、立ち上がることができず――蒼い顔で、縋りつく様な眼差しで、紗耶香が彼を見上げていた。
決して、睨みつける、ではなく、真摯な、必死な視線だった。
「何故……そこまで割り切れるの？
司波君は一体、何を支えにしているの？」
「俺は、重力制御型熱核融合炉を実現したいと思っています。
魔法学を学んでいるのは、その為の手段に過ぎません」
紗耶香の顔から表情が抜け落ちた。
多分、何を言われたのか、理解できなかったのだろう。
理解してもらいたいと思って告げた言葉でもない。
達也は構わず、再び、背を向けた。

1－（21）　決起（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

1－（21）　決起

何事も無く、一週間が過ぎた。
風紀委員会の見回り中も、勧誘週間のように闇討ち紛いの襲撃を受けることも無く、美月が予言（？）したように概ね平和だった。
達也はようやく、平穏な高校生活を手に入れた――ように、見えた。
所詮、束の間の平穏に過ぎなかったが。

◇◆◇◆◇◆◇

『全校生徒の皆さん！』
「何だ何だ一体こりゃあ！」
「チョッと落ち着きなさいただでさえアンタは暑苦しいんだから」
「……落ち着いた方が良いのは、エリカちゃんも同じだと思う」
授業が終わった直後、
放課後の冒頭。
ハウリング寸前の大音声が、スピーカーから飛び出した。
『――失礼しました。全校生徒の皆さん！』
「どうやらボリュームの絞りをミスったようだな」
「やっ、ツッコンでる場合じゃないから、きっと」
ボソッと呟いた達也の言葉を、耳聡く拾い上げたエリカから、すかさずツッコミが入る。
エリカちゃんもね、とは、心の中で呟いただけで、口にしない美月だった。
『私たちは学内差別撤廃同盟「スリー・ハーブズ」です』
「プハッ！」
思わず噴き出した達也に教室内から奇異の目が集まったが、
『私たちは生徒会と部活連に対し、対等な立場における交渉を要求

します』
「クックックックックッ……」
笑いの発作はその程度で収まってくれなかった。
「ねぇ、笑っててていいの？」
尚も放送設備を通じたアピールは続いていたが、耳から入ってくるそれを意識から締め出すことで、達也はようやく笑いを止めることができた。
「そう、だな」
だが、まだ少し、口調が怪しい。
「放送室を不正利用していることは間違いない。委員会からお呼びが掛かるか」
「……何がそんなに可笑しかったんだ？」
「いや、これが笑わずにいられるか。お前はよく平気だな、レオ」
再びこみ上げてくる笑いの衝動をこらえているのが、傍で見ていても分かる。
「スリー・ハーブズ……ククク……平均という発想自体が、区別を認めているんだがな」
「平均？」
「どういうことですか？」
「ｔｈｒｅｅ　ｈａｌｖｅｓ、つまり１．５……要するに、『１』科と『２』科を平均して１．５ってこと。差別撤廃とか言っておきながら、一科と二科の区別を存続させることを前提とした命名じゃないか」
一瞬、キョトンとした顔をしていたが、直後、エリカとレオが盛大に噴き出した。
「な、なにそれ？」
「あ、アホだ、こいつら」
苦しそうに身をよじる二人の傍らで、美月も失笑をこらえ切れずにいる。
「おっと、お呼びが掛かったか。

じゃあ、行ってくる」
「あ、はい、お気をつけて」
見送りの言葉は、美月のみ。
残る二人に、その余裕は無かった。

◇◆◇◆◇◆◇

「あ、お兄様」
「深雪、お前も呼び出しか？」
「はい、会長から、放送室前へ行くようにと」
途中で深雪と合流し、放送室へと向かう。
しかし、その足取りは、それほど速いものではなかった。
「これは、ブランシュの仕業でしょうか？」
「団体は特定できないが、その手の輩の仕業には違いないだろうね」
悪い予想が的中した割には、達也の表情には何処と無く安堵感が漂っている。
「いや、あの間抜けな放送をしたヤツが、知り合いじゃなくて良かったな、と」
視線の問い掛けを感じて、言い訳するように達也は答えた。
「壬生先輩、でしたよね？」
「ああ。
あんな放送をしたヤツと知り合いだなんて思われるのは恥ずかしすぎるからな」
「確かに、スリー・ハーブズという名称は滑稽ですが、要求自体は結構真面目なようですよ」
「バカをやっているという自覚無しに、真面目にバカをやるヤツの方が救い難い……っと」
放送室前には、既に摩利と克人と鈴音、そして風紀委員会と部活連の実行部隊が顔を揃えていた。
「遅いぞ」

「すみません」
ポーズだけの叱責に、ポーズだけの謝罪を返して、達也は現状確認に移った。
放送が止まっているのは、電源をカットしたからだろうか。
まだ中に踏み込んでいないのは、扉が閉鎖されている所為だろう。
立て篭もり犯人は何らかの手段で、鍵をマスターキーごと手に入れたと見える。
「明らかに犯罪行為じゃないか」
目的が手段を正当化すると考えている辺り、この連中は典型的な「活動家」らしい。
「その通りです。
だから私たちも、これ以上彼らを暴発させないように、慎重に対応すべきでしょう」
達也の台詞は全くの独り言だったが、鈴音はそう取らなかったようだ。
「こちらが慎重になったからといって、それで向こうの聞き分けが良くなるかどうかは期待薄だな。
多少強引でも、短時間の解決を図るべきだ」
すかさず、摩利が口を挟んできた。
どうやら方針の対立が膠着を招いているようだ。
有事の対応としては、最も拙劣な状態だった。
「十文字会頭はどうお考えなんですか？」
達也の質問に、意外感をたたえた視線が返って来た。
達也自身も、出過ぎているかな？　と感じながらの質問だったが、膠着状態を放置するよりは良い、と考えたのだ。
彼もまだ、大人ではないということなのだろう。
また、大人の対応を求められる場面でもない。
「……俺は彼らの要求する交渉に応じても良いと考えている。
元より言い掛かりに過ぎないのだ。しっかりと反論しておくことが、後顧の憂いを断つこととなろう」

「ではこの場は、このまま待機しておくべき、と？」
「それについては決断しかねている。
不法行為を放置すべきではないが、学校施設を破壊してまで早急な解決を要するほどの犯罪性があるとは思わない。
学校側に警備管制システムから鍵を開けられないかどうか、問合せてみたが、回答を拒否された」
強引な事態収拾は図らない、ということだ。
克人のスタンスは、結果的に鈴音に近いもの。
ならば、このまま待つこともやむを得ない。
一礼して引き下がった達也へ、摩利の不満げな視線が突き刺さった。
その棘に追い立てられた訳でもないが、彼は内ポケットから携帯端末を取り出して、音声通話モードを立ち上げた。
待機はやむを得ないが、何もせずに待つだけなら出しゃばって質問などしない。
コールは五回でつながった。
「壬生先輩ですか？　司波です」
ギョッとした視線が数本、追加された。
「はぁ、放送室に居るんですか。それは……お気の毒です」
直後、顔を顰めたのは、ボリュームコントローラーの制御が間に合わない大声で返された所為か。
ほぼ完全な遮音性を実現したカナル型の受話器では、推測するしかないが。
「いえ、馬鹿にしている訳ではありません。
先輩も、もう少し冷静に状況を……ええ、すみません。
それで、本題に入りたいんですが」
摩利と鈴音、その他数人が、聞き耳を立てている。
向こうの音声は拾えるはずが無いと分かっているだろうから、これから達也が、何を言おうとしているのかを、聞き逃さない為に。
「十文字会頭は、交渉に応じると仰っています。

生徒会長の意向は未確認ですが……いえ、生徒会長も同様です」
鈴音のジェスチャーで、達也はすぐに言い直した。
「ということで、交渉の場所やら日程やら形態やらについて打合せをしたいんですが。……ええ、今すぐです。学校側の横槍が入らないうちに。……いえ、先輩の自由は保障します。我々は警察ではないんで、牢屋に閉じ込めるような権限はありませんよ……では」
受話器を耳から外し、端末と一緒に内ポケットへ戻して、達也は摩利へ向き直った。
「すぐに出てくるそうです」
「今のは、壬生紗耶香か？」
「ええ。待ち合わせの念の為にとプライベートナンバーを教えられていたのが、思わぬところで役に立ちましたね」
「手が早いな、君も……」
「誤解です。
それより、態勢を整えるべきだとおもいますが」
「態勢？」
何を言っているんだ？　という顔で、摩利が達也を見た。
何を言っているんですか？　という呆れ顔で、達也が摩利を見返した。
「中の奴等を拘束する態勢ですよ。
鍵まで盗み出す連中です。ＣＡＤは持ち込んでいるでしょうし、それ以外にも武器を所持しているかもしれません」
「……君はさっき、自由を保障するという趣旨のことを言っていた気がするのだが」
「俺が自由を保障したのは壬生先輩一人だけです。
それに俺は、風紀委員会を代表して交渉している等とは一言も述べていませんよ」
摩利だけでなく、鈴音も、克人までもが、呆気に取られた表情を浮かべた。
この場にいるただ一人の例外は、達也を軽く、非難した。

「悪い人ですね、お兄様は」
「今更だな、深雪」
「フフ、そうですね」
但しそれは、楽しげな口調を伴っていた。

◇◆◇◆◇◆◇

「どういうことなの、これ！」
案の定と言うべきか当然と言うべきか、達也は紗耶香に詰め寄られていた。
放送室を占拠していたのは、彼女を含めて五人。
予想通り、ＣＡＤを所持していたが、それ以外の銃器、刃物は持っていなかった。
達也から見れば、覚悟がまるでなっていないが、悪いことをしているという意識が無いのだから、中途半端になってしまうのも当たり前かもしれない。
紗耶香以外の四人は風紀委員によって拘束されていたが、紗耶香はＣＡＤを没収されただけに止まった。
摩利が達也の名誉に配慮した結果だった。
達也自身は、口約束を守る必要など無いと考えていたのだが。
紗耶香の手は、達也の胸元に伸びており、その手首を達也の手に掴まれている。
胸倉を掴もうとした手をあっさりと捉まえ、達也は無表情に激高する紗耶香を見返していた。
「あたしたちを騙したのね！」
手を振り解こうともがく紗耶香を、達也はあっさり解放した。
そして尚も言い詰ろうとした紗耶香の背中に、声が掛けられた。
「司波はお前を騙してなどいない」
重く、力強い響きに、紗耶香の身体がビクッと震えた。
「十文字会頭……」

「お前たちの言い分は聞こう。交渉にも応じる。
だが、お前たちの要求を聴き入れる事と、お前たちの執った手段を認める事は、別の問題だ」
紗耶香の態度から攻撃性が消えた。
全課外活動を束ねる克人の迫力に、紗耶香の怒りは呑まれていた。
「それはその通りなんだけど、彼らを放して上げてもらえないかしら」
その言葉と共に、達也と紗耶香の間に小柄な人影が割り込んで来た。
達也に背を向けて、彼を庇う様な体勢で。
「七草？」
「だが、真由美」
「言いたいことは理解しているつもりよ、摩利。
でも、壬生さん一人では、打合せもできないでしょう。
当校の生徒である以上、逃げられるということも無いのだし」
「あたしたちは逃げたりしません！」
真由美の言葉に、紗耶香は反射的に噛み付いた。
しかし真由美は、直接には、紗耶香の言葉に反応しなかった。
「生活主任の先生と話し合ってきました。
鍵の盗用、放送施設の無断使用に対する措置は、生徒会に委ねるそうです」
遅れてきた事情と、彼らが現在置かれている立場についての、さり気無い説明。
それでも紗耶香たちに怯んだ様子がないのは、事の是非は別にして、評価に値する肝の据わり方だと達也は思った。
「壬生さん。これから貴方たちと生徒会の、交渉の打合せをしたいのだけど、付いて来てもらえるかしら」
「……ええ、構いません」
「十文字くん、お先に失礼するわね？」
「承知した」

「ごめんなさい、摩利。何だか、手柄を横取りするみたいで気が引けるのだけど」
「気持ちの上では、そういう面も無きにしも非ずだが、実質面では手柄のメリットなど無いからな。気にするな」
「そうだったわね。じゃあ、達也くん、深雪さん、貴方たちは、今日はもう帰ってもらっていいわ」
「……それでは会長、失礼致します」
意表を衝かれて生じた短い間。
そこから先に回復したのは深雪の方だった。
丁寧に一礼する妹に続いて、達也も無言で一礼し、その場を後にした。

◇◆◇◆◇◆◇

交渉は、二日後の放課後、公開討論の形式と決まった。
そして二日後。
全校生徒の半数が、講堂に集まった。
「意外に集まりましたね」
「予想外、と言った方が良いだろうな」
「当校の生徒にこれ程、暇人が多いとは……学校側にカリキュラムの強化を進言しなければならないのかも知れませんね」
「笑えない冗談は止せ、市原……」
順に、深雪、達也、鈴音、摩利の台詞である。
彼女たちは、舞台袖から場内を眺めていた。
真由美は少し離れたところに、服部と二人で控えている。
反対側の袖には、学内差別撤廃同盟を名乗る集団の三年生が四名、風紀委員の監視を受けながら控えていた。
その中に、紗耶香の姿は無かった。

「実行部隊が別に控えているのかな……？」
独り言のように、摩利が呟く。
あくまでも「ように」であって、独り言でないのは明らかだった。
「同感です」
まさに達也も、同じ事を考えていて、それが分かった上での呟きだった。
会場をざっと見渡す。
一科生と二科生の割合は、ほぼフィフティ・フィフティ。
その中に同盟のメンバーと判明している生徒は、十名前後。
その中にも、放送室占拠メンバーの姿は無い。
「とは言っても、こちらから手出しは出来んからな」
これもまた、言わずもがな。
先手は常に向こう側にあり、こちらは相手の出方を窺うことしか出来ない。
「専守防衛といえば聞こえは良いが……」
「渡辺委員長、実力行使を前提に考えないで下さい。
……始まりますよ」
まだ何事か反論――と言うか、ぼやきかけた摩利だったが、鈴音の一言に、視線を舞台へ移した。

パネル・ディスカッション方式の討論は、今回の経緯から必然的に、同盟側の質問と要求に対し、生徒会が反論するという流れを辿った。
とは言え、同盟側に何か具体的な要求があった訳ではない。
元々彼らは、達也に唆されて引っ張り出されたようなものだ。
聴衆に紛れた扇動の中ならば有効なスローガンも、舞台の上では具体性の伴わない観念論に過ぎない。
討論会は、やがて、真由美の演説会の趣を呈し始めた。
「……生徒たちの間に、差別の意識が存在するのは否定しません。
但しそれは、固定化された優越感であり劣等感です。

特権階級が、自らの持つ特権を侵食されることを恐れる、防衛本能から生まれ、制度化される差別とは性質が違います。

ブルームとウィード、学校も生徒会も風紀委員も禁止している言葉ですが、残念ながら、多くの生徒がこの言葉を使用しています。

しかし、一科生が自らをブルームと称し、二科生をウィードと呼んで見下した態度を取る、それだけが問題なのではありません。

二科生の間にも、自らをウィードと蔑み、諦めと共に受容する。そんな悲しむべき風潮が、確かに存在します」

幾つか野次が飛んだが、表立った反論は無かった。

反論は既に、尽きていた。

「この意識の壁こそが問題なのです。

第一科と第二科の区別は、学校の制度として厳然と存在するものですが、これは全国的な指導教員の不足を反映した、すぐには解決し難い背景によるものです。

全員に不十分な指導を与えるか、それとも半数の生徒に十分な指導を与えるか。

当校では、後者の方法が採用されています。

そこに差別は、確かに存在します。

そして私たちには、どうすることも出来ません。

当校で学ぶにあたり、当校の生徒に受け入れるべく強制されているルールですから。

しかしそれ以外の点では、制度としての差別はありません。

もしかしたら意外に思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、第一科と第二科のカリキュラムは全く同一です。

進捗速度に差が生じることはあっても、講義や実習は同じものが採用されています」

それは、達也にとっても深雪にとっても意外なことだった。

思わず「へえ……」と呟いた達也に、深雪が無言の賛同を示す。

それを見た鈴音が、口元を綻ばせた。

「課外活動においても、部活連と生徒会で、可能な限り施設の利用

は平等になるように割り振っています。
　所属人数の多いクラブが所属人数の少ないクラブに対して優遇されていることは否定しません。
　ですが、一人当たりの機会の均等も、クラブ間の機会の均等と同様に無視できないものだと、考えた上でのことです。
　決して、魔法競技系の課外活動を、制度として優先しているのではありません。
　先程『同盟』の方から、魔法競技系クラブに予算が手厚く配分されているというご指摘がありました。
　結果としてはご指摘の通りですが、この予算配分は活動実績を加味した結果である事は、先程グラフでご覧頂いた通りです。
　指導教員以外の問題については、第一科と第二科の区分以外の要因で全て説明可能なものです。
　それが合理的な根拠に基づくものである事は、ご納得いただけたと思います。
　他に原因があり、それが分かっているにも拘らず、第一科と第二科の区分の所為にする、一科生と二科生をお互いに隔てる意識の壁こそが問題なのです」
　再び、野次が飛んだ。
　だがそれは、賛否双方を含むものだった。
「……私は当校の生徒会長として、現状に決して、満足していません。
　時に校内で対立を煽りさえするこの意識の壁を、何とか解消したいと考えてきました。
　ですがそれは、新たな差別を作り出すことによる解決であってはならないのです。仮に二科生が差別されているからといって、一科生を逆差別しても解決には成りません。一時的な措置としても、許容されることではありません。
　一科生も二科生も一人一人、当校の生徒であり、当校の生徒である期間はその生徒にとって唯一無二の三年間なのですから。

制度上の差別を無くすこと、逆差別をしないこと、私たちに許されるのは、この二つだけだと思っています。

……ちょうど良い機会ですから、皆さんに私の希望を聞いてもらいたいと思います。

実を言えば、生徒会には一科生と二科生を差別する制度が、一つ残っています。

それは、生徒会長以外の役員の指名に関する制限です。

現在の制度では、生徒会長以外の役員は第一科所属生徒から指名しなければならないことになっています。

この規則は、生徒会長改選時に開催される生徒総会においてのみ、改定可能です。

私はこの規定を、退任時の総会で撤廃することで、生徒会長としての最後の仕事にするつもりです。

私の任期はまだ半分が過ぎたばかりですので、少々気の早い公約になってしまいますが、人の心を力づくで変えることは出来ないし、してはならない以上、それ以外のことで、出来る限りの改善策に取り組んでいくつもりです」

一斉に拍手が起こった。

そこには少なからず、アイドルに対する声援に似た浮ついた雰囲気が漂っていたが、一科生だけでなく二科生の多くも真由美を支持したことが明らかだった。

1－（22）　鎮圧（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

1一（22）　鎮圧

ここで終わっていれば、この一件は民主的に解決したと記録されただろう。

だが、民主的プロセス、合法的プロセスにおける敗北こそが、テロリズムの引き金を引く。

それは、学校という小社会でも、二十一世紀末を迎えた現代でも、同じだった。

◇◆◇◆◇◆◇

轟音が講堂の窓を震わせ、拍手という一体行動の陶酔に身を委ねていた生徒たちの、酔いが醒めた。

動員されていた風紀委員が一斉に動いた。

普段、まともに訓練など行っていないとは信じられない、統率の取れた動きで、各々マークしていた同盟のメンバーを拘束する。

窓が破られ、紡錘形の物体が飛び込んで来た。

床に落ちると同時に白い煙を吐き出し始めた榴弾は、白煙を拡散させずに、ビデオディスクの逆回し再生を見ているような動きで煙もろとも窓の外へ消えた。

達也が賞賛を込めた視線を向けると、服部は不機嫌そうに顔を逸らした。

それを見た真由美がクスッと笑いを漏らしている。

摩利が出入り口に向けて、腕を差し伸べていた。

防毒マスクを被った数名の闖入者が、段差に躓いたかの様に一斉に倒れ、そのまま動きを止めた。

この場のパニックは、誘発未遂で収まりつつある。

「外の様子を見てきます」

「お兄様、お供します！」

「気をつけろよ！」
摩利の声に送り出されて、達也たち兄妹は最初に轟音が聞こえた区画、実技棟へ向かった。

◇◆◇◆◇◆◇

魔法科学校には、魔法実技を指導する為、魔法師が教師として常駐している。
最高レベルの魔法科高校と目されている第一高校ともなれば、教師陣は魔法師としても一流ばかりだ。
この学校は、小国の軍隊程度なら、単独で退ける実力を持つ。
当然、外部からここを襲撃する者があるなど、想定はしていても予想はしていない。
危機感の無いところに本当の意味での警戒は無い。
「何の騒ぎだ、こりゃあ？」
まんまと先制を許した実技棟は、壁面が焼け、窓にひびが入っている。
その前で大立ち回りをしていた男子生徒が、達也の姿を見留めて大声で訊ねて来た。
深雪の指が、しなやかに踊る。
片手で操る、携帯端末形態のＣＡＤ。
一瞬で展開・構成・発動するサイオン情報体。
魔法師と魔工技師、「魔法遣い」のみが目にすることの出来る、魔法の煌き。
レオを取り囲んでいた三人の男が、一斉に吹き飛ぶ。
まるで地雷でも踏んだかのような勢いだったが、その中心にいたレオには何の影響も無い。
このピンポイントな選択性こそ、魔法の持つ最大の優位点だった。
「テロリストが学内に侵入した」
達也は詳細を一切端折った。

「ぶっそうだな、おい」
レオはそれだけで納得する――納得できる性質だと、居残りに付き合った折りに判っていたからだ。
今現在、重要なのは、排除すべき敵が存在するということのみ。
「レオ、ホウキ！　……っと、援軍が到着してたか」
反対側、事務室方向から走って来たエリカは、達也たちの姿を認めて足を緩めた。
「気にすんな。十分間に合ったタイミングだぜ」
「気にするわけ無いでしょ。殺したって死にゃしないくせに」
「んだとコラ！　……っと、今はテメエと遊んでる場合じゃねえ。さっさとオレのＣＡＤを寄越せ。
って、投げんなよ！」
ＣＡＤは精密機器とはいえ、タフな環境下で使用されることを前提とする機器である。
ソフトコートの路面に落としたくらいで、壊れるものではない。
それを知っていて投げ渡したエリカは、レオの抗議を当然のように無視した。
――壊れる危険性があったとしても、無視したかもしれないが。
「これ、達也くん？
それとも深雪？」
呻き声をあげて緩慢に這いずる侵入者を同情の欠片もない眼で眺めながら、簡潔に問うエリカ。
「深雪だ。俺ではこうも手際良くは行かない」
「わたしよ。この程度の雑魚に、お兄様の手を煩わせる訳には行かないわ」
回答は、全く同時。
「ハイハイ、麗しい兄妹愛ね……
それでこいつらは、問答無用で打っ飛ばしても良い相手なのね？」
「生徒でなければ手加減無用だ」
冷やかしをアッサリ、サッパリ無視して、微妙に方向性の異なる

答えを返した達也に、エリカはニッコリ笑った。
「アハッ、高校ってもっと退屈なトコだと思ってたけど」
「……お～怖え。好戦的な女だな」
「だまらっしゃい」
エリカの右手が半ばまで上がりかけたが、流石に特殊警棒でド突くのは自重したようだ。
「ところで、二人はこんな時間に実技棟で何をしていたんだ？」
それは、何気ない疑問だった。
「えっ！？
いや、そりゃ、まあ、何だ」
「えっ、ええ、まあ、その、何なのよ」
だから、これほど動揺するとは、予想外だった。
「……二人っきりで何をしていたんだ？」
真面目くさった声音。
だが、誰よりも達也のことを理解している深雪には、兄が生真面目な表情の裏に人の悪い含み笑いを隠していると、すぐに分かった。
「二人っきり！？」
エリカの声は、面白いほど裏返っていた。
「誤解だ！」
レオの声は、絶叫と言ってよかった。
「俺は実技の練習をしてただけだぜ！
この女が後から来たんだ！」
「あたしが練習しに来たら、この男が図々しくも居座っていたのよ！」
「図々しくとは何だコラ！」
「あーっ、分かった分かった。理解した。誤解してない」
事実はそれほど面白みが無かったが、二人の反応は十分満足の行くものだった。
達也は意識を切り替えた。
「他に侵入者は見なかったか？」

「反対側を先生たちが守っていたけど、流石ね、もうほとんど制圧してた」
「オレが言うのも何だか、こいつら、魔法師としては三流だな。三対一で魔法を練れないんだからよ」
何でも無いことのように言うが、そもそも三人を同時に相手取ること自体、容易ではない。
このクラスメイトは、思った以上に遣れるようだ。
「エリカ、事務室の方は無事なのかしら？」
深雪の問い掛けに、エリカが頷く。
「あっちの方が対応は早かったみたい。やっぱり、貴重品が多いからかな」
エリカの言葉に、達也は引っ掛かりを覚えた。
事務室には多くの貴重品が保管されているから、襲撃の対象となるのは分かる。
だが、実技棟には型遅れのＣＡＤが置かれているだけだ。
あえて価値を見出すとすれば、手榴弾の直撃を受けても表面が焦げる程度の損傷しか受けない耐熱・耐震・対衝撃の建物それ自体。
破壊されれば一ヶ月程度は授業に支障が生じるだろうが、所詮、その程度だ。
他に、破壊活動によって学校の運営に支障を来たす場所といえば……
「……実験棟と図書館か！」
「では、こちらは陽動？
予想以上の規模ですね。
お兄様、如何致しましょう？」
選択肢は三つ。
二手に分かれるか、
このまま実験棟へ向かうか、
このまま図書館へ向かうか。
「彼らの狙いは図書館よ」

決断は情報の形でもたらされた。
「小野先生？」
踵の低い靴に細身のパンツスーツ、ジャケットの下は光沢のあるセーター。
今日の装いは、先日とは打って変わった行動性重視。
光沢の元はおそらく、防弾・防刃効果を重視した金属繊維だ。
表情までもが厳しく引き締まり、別人のような雰囲気を醸し出している。
「向こうの主力は、既に館内へ侵入しています。
壬生さんもそっちにいるわ」
三人の戸惑った視線が、達也に向けられた。
達也は正面から、遥を見据えた
一秒に、満たない時間。
「後ほど、ご説明を頂いてもよろしいでしょうか」
「却下します、と言いたいところだけど、そうも行かないでしょうね。
その代わり、一つお願いしても良いかしら？」
「何でしょう」
逡巡の色を浮かべながらも遥は、口ごもったりして時間を無駄にすることは、しなかった。
「カウンセラー、小野遥の立場としてお願いします。
壬生さんに機会を与えてあげて欲しいの。
彼女は去年から、剣道選手としての評価と、第二科生徒としての評価のギャップに悩んでいたわ。
何度か面接もしたのだけど……私の力が足りなかったのでしょうね。
結局、彼らに付け込まれてしまった。
だから」
「甘いですね」
遥の依頼は、誠実な職業意識に基づくものだった、のだろう。

だが達也はそれを、容赦なく切り捨てた。
「行くぞ、深雪」
「はい」
「おい、達也」
そして、切り捨てられない友人に、一つだけ、アドバイスをする。
「余計な情けで怪我をするのは、自分だけじゃない」
それ以上の台詞は、時間が惜しい。
走り出した彼の背中は、そう語っていた。

図書館前では、拮抗した小競り合いが繰り広げられていた。
襲撃者は、ＣＡＤ以外にもナイフや飛び道具を持ち込んでいる。
三年生を中心とする応戦側は、ＣＡＤこそ持たないが、魔法力で圧倒的に上回っている。
ＣＡＤ無しで、武器を振るう敵に魔法で相対する技量は、流石に将来を約束された魔法師候補生たちだった。
それを目にした途端、まず、レオが突っ込んだ。
「パンツァー（Ｐａｎｚｅｒ）！」
雄叫びを放ち、乱戦へ飛び込む。
その咆哮には、意味があった。
「音声認識とはまたレアな物を……」
「お兄様、今、展開と構成が同時進行していませんでしたか？」
「ああ、逐次展開だ。十年前に流行った技術だな」
「アイツって、魔法までアナクロだったのね……」
幸いなことに、刻印魔法等という過去のものとなった技術を常用している自分のことは棚に上げたエリカの陰口（？）は、戦っているレオには届かなかった。
手甲のように前腕を覆う、幅広で分厚いＣＡＤで、振り下ろされた棍棒を受け止め、殴り返す。
なる程、プロテクターを兼ねたＣＡＤなら、可動部分やセンサーの露出が必要ない音声認識を採用するのも頷けるというもの。

とは言うものの……

「あんな使い方して、よく壊れないわね」

「ＣＡＤ自体にも硬化魔法が掛けられている。

硬化魔法は分子の相対座標を狭いエリアに固定する魔法だ。

どれだけ強い衝撃を加えても、部品間の相対座標にずれが生じなければ、外装が破られない限り壊れる事は無い」

「どれだけ乱暴に扱っても壊れないって訳か。

ホントに、お似合いの魔法」

乱戦を避けてエントランスへ回り込みながら論評と悪態を繰り返すエリカたちを他所に、レオは何かの鬱憤を晴らすかの如く暴れ回る。

黒い手袋に包まれた両手は、飛来する石礫や氷塊を粉砕し、金属や炭素樹脂の棍棒をへし折っていく。

時折火花が上がるのは、スタンパトンが混じっている為か。

かわし切れず突き込まれるナイフも、袖の下から騙し討ちで射掛けられるバネ仕掛けのダーツも、濃緑のブレザーを貫くことは無い。

「身に着けているもの全てを硬化しているのか。

全身を覆うプレートアーマーを着込んでいるようなものだな」

得意魔法、と躊躇無く言い切った言葉は伊達ではなかった。

レオの硬化魔法は、起動式の展開と魔法式の構築・発動が並列的に行われる逐次展開の技法により、継続的に更新されている。

武器を持っているとはいえ、素人に毛が生えた程度の錬度しかない駆け出しテロリストでは、あの鎧を貫くことは出来ないだろう。

そして、肉体の力のみで突き出されているはずの拳は、移動術式や加速術式を使っているのと遜色の無い破壊力を生み出している。

火器の使用が制限された近接戦闘なら、今すぐ軍の第一線で通用しそうな戦闘力だ。

「レオ、先に行くぞ！」

「おうよ、引き受けた！」

達也は、この場を、レオに任せることにした。

図書館内は静まり返っていた。
遥の言葉を信じるならば、撃退に成功した、のではなく、迎撃の方が足止めされていたということ。
館内には職員以外に警備員も常駐していたはずだが、既に無力化されてしまったらしい。
主力、というだけあって、段違いの錬度のようだ。
達也は一旦、入り口脇の小部屋に身を潜めると、意識を広げて、存在を探った。
気配、ではなく、存在を。
現代魔法は、存在の付随情報にして、存在と表裏一体の情報体たる、エイドスに干渉する技術。
現代魔法を使う者は皆、イデア――世界そのものの情報体であり、全てのエイドスを内包している「情報」のプラットフォームを、古代ギリシャ哲学の用語を流用してこう呼ぶ――の中に、個々のエイドスを認識している。
ただそれを意識して、見分けることの出来る者は、少ない。
達也は、通常の魔法の才能と引き換えに、イデアの中に個々のエイドスを見分ける特別鋭敏な感覚を有していた。
「……二階特別閲覧室に四人、階段の上り口に二人、階段を上り切ったところに二人……だな」
「凄いね。達也くんがいれば、待ち伏せの意味が無くなっちゃう。実戦では絶対、敵に回したくない相手だな」
「特別閲覧室で何をしているんでしょう？」
「クラックにしては大人し過ぎる。おそらく、機密文献を盗み出そうとしているんだろう」
達也の推測に、エリカがガッカリした、という表情を浮かべた。
「エリカ、何だか期待外れって顔をしているけど？」
深雪に訊ねられ、エリカはここぞとばかりオーバーアクションで肩をすくめて見せた。

「だってさ～、高校生の反乱なんて、青春の暴走、みたいな感じてチョッとワクワクするものがあったのに、種を明かせばありふれた諜報工作だなんて……夢を返せって感じ？」
「俺に訊くな。それから、そんな夢は最初から見る方が間違っている」
「答えてるじゃん」
ぐっ、と反論に詰まった達也を、深雪が慌ててフォローした。
「それより、特別閲覧室へ急がなくては。
待ち伏せはわたしが相手をしましょうか？」
「いーや、その役目、あたしがも～らい♪」
歌うように台詞を攫い、返事も待たずにエリカが飛び出した。
音も無く、気配も無く、滑るように階段へ急迫。
柄にＣＡＤを仕込んだ伸縮警棒は、既に伸展済み。
待ち伏せしていたはずの敵が、奇襲を受ける。
振り下ろされた警棒は、打ち込まれた瞬間、背後へ翻っている。
一瞬で二人の敵を打ち倒したエリカ。
荒々しいレオの闘い方とは対照的な、洗練を尽くした白兵戦技だった。
味方の倒れた音で、階上の待ち伏せ要員がようやくエリカに気付いた。
一人が駆け下りて来る背後で、もう一人が起動式を展開している。
だがその起動式は、サイオンの閃きと共に砕け散った。
呆然と立ちすくむ、魔法を否定する魔法師。
その身体が、不自然に硬直した、と見えた次の瞬間、バランスを崩して階段を転げ落ちた。
「あっ……」
「ドンマイ」
拳銃形態のＣＡＤをショルダーホルスターへ戻しながら、可愛く声を上げた妹に、一声かける。
二本足で立つ人間は常に、無意識のうちにも細かく重心を調整し

ながら立っている。
身体の動きを急減速＝強制停止された人間は、そのまま立っていられない。
そこまでは想定内だったが、階段から転げ落ちてしまうところまで予想していなかったのだろう。
まあ、首の骨を折った様子もなかったし、こういう暴挙に参加した以上、脳震盪と肋骨を二、三本折る程度は織込み済のはずだ。
その一方で、ナイフというより、脇差と表現する方が相応しい本身の刃で、エリカに斬りかかるもう一人の伏兵。
その顔には見覚えがあった。
剣道部のデモンストレーションで、紗耶香の相手をしていた男子生徒だ。
「ちっ。
達也くん、生徒には、手加減しなきゃ、ならないん、だよね？」
鍔迫り合いの中から問い掛けてくる声は、少し震えていた。
体格差から来る腕力の差は、膠着状態において諸に影響を及ぼす。
「無理に手加減する必要は無いぞ」
そう言いながら踏み出す達也を
「助太刀無用！　だよ」
制止するエリカ。
「この程度の相手、本気になれますかって」
瞬間的に圧力を上げ、直後、力を逸らす。
いなされた相手と上下の位置を入れ換え、エリカは先へ急ぐよう促した。
「ここは任せて」
「分かった」
挟み撃ちを警戒し、半身になる男子生徒。
だが既に、達也と深雪の眼中に、その生徒は存在しない。
達也が力強く床を蹴った。
深雪が軽やかに床を蹴った。

達也の身体は壁を跳ね、
深雪の身体は宙を舞う。
二人は、一気に階上へ降り立った。
「ひゅう～♪」
口真似で口笛を吹くエリカと、呆気に取られた同盟の生徒を残して、二人は突き当たりの特別閲覧室へ向かった。

1－（23）　剣と魔法（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

1－（23）　剣と魔法

紗耶香は目の前で行われている作業を、複雑な心境で見詰めていた。

機密文献――この国の魔法研究の、最先端を収めた文献資料にアクセスできる校内唯一の端末に、ハッキングを仕掛けている同士――「ブランシュ」のメンバー。

しかし、魔法による差別の撤廃を目指しているはずの自分たちに、何故、魔法研究の最先端資料が必要となるのだろうか。

リーダーは、魔法学の研究成果を広く公開することが、差別撤廃の第一歩になると言っていた。

（でも、魔法を使えない人に魔法理論を公開することに、意味があるとは思えない……）

何度も心の中でリフレインされた疑問が、再び脳裏に蘇る。

魔法を使えない人に、魔法学は役に立たない。

ある意味即物的な魔法理論には、宗教的な精神性も無い。

最先端の魔法研究の成果を欲しがる者がいるとすれば、それは、魔法を利用しようとしている者たちではないか……？

（ううん、きっと、魔法が使えない人たちにも役に立つ研究成果が、秘匿されているのよ……）

自分を納得させる為に考えた理屈。

だが、何度心の中で繰り返してみても、自分を納得させる事は、出来なかった。

「……よし、開いた」

小さく、ざわめきが走る。

慌しく準備される記録用ソリッドキューブ。

同士の――彼らの顔に、確かに「欲」が過ぎったような気がして、紗耶香は目を背けた。

扉の方へ。

だから、気がついたのは、彼女が一番早かった。
「ドアが！」
彼女の悲鳴に、残りのメンバーが一斉に振り向く。
その視線の先で、四角に切り取られたドアが、内側に倒れた。
「バカな!?」
驚愕の叫びは、事実に照らせば、控え目なものと言えただろう。
物理的に強固な物体は、エイドスの可変性も小さい。
対戦車ロケットの直撃に耐える複合装甲の扉を魔法で破壊する事は、確かに、不可能では無い。
だがその為には、加重に依るにせよ振動に依るにせよ溶解に依るにせよ、同一の工程を幾重にも重ねた、大規模な魔法式を構築しなければならないはずだ。
こんな一瞬の、静かな破壊など、あり得るはずが無い！
常識外の光景に意識も動作も凍りつかせた男たちの手許で、記録キューブが砕け散った。
続いて、ハッキング用の携帯端末が、製造工程を高速逆回転させたかの如く分解した。
接続されたデバイスからの信号が突如途絶え、閲覧用端末がロック状態になる。
「産業スパイ、と言っていいのかな？
お前たちの企みは、これで潰えた」
銀色に輝く拳銃形態の特化型ＣＡＤを右手に構え、淡々とした口調で終わりを告げる、見知った人影。
その背後には、携帯端末形態のＣＡＤを構えた華奢な人影が淑やかに控えている。
彼ら兄妹の表情には少しも興奮の色が無く、自分たちが犯罪行為を働いている最中ということを、忘れそうになる。
「司波君……」
呟いた紗耶香の隣で、右腕を上げる動き。
降参のサイン、ではなく、実弾銃を後輩へ向ける、仲間の男。

この男は第一高校生では無い。
学生ですらない。
リーダーが連れて行くように指示した男だ。
その、リーダーが直接指名した仲間が示した、明白な、殺人の意思。
「っ！」
だが、人の命を容易く奪う弾丸は、発射されなかった。
声にならない悲鳴を上げて、男が床をのた打ち回る。
その右手は拳銃を握ったまま、いや、拳銃が、その手に貼りついていた。
男の右手は、紫色に腫れ上がっていた。
「愚かな真似はお止めなさい。わたしが、お兄様に向けられた害意を見逃すなどとは、思わないことです」
その口調は静かで、丁寧で……威厳に満ちていた。
余りにも、格が違う。
何をしても、敵わないと分かる。
耳にするだけで、反抗の意思が凍り付いてしまいそうな声だった。
「壬生先輩。
これが、現実です」
「えっ……？」
焦点の合っていなかった目が、焦点を結ぶ。
彼女を正面から見詰める、後輩の無表情な目の中に、微かに見える感情は、
「これが、他人から与えられた、耳当たりの良い理念の、現実です」
憐れみ？
「どうしてよ！？
何でこうなるのよ！？」
そう感じた瞬間、紗耶香の中で、彼女自身にもよく分からない感情が、爆発した。
「差別を無くそうとしたのが、間違いだったというの！？

平等を目指したのが、間違いだったというの！？
差別は、確かに、あるじゃない！
あたしの錯覚なんかじゃないわ。
あたしは確かに、蔑まれた。
嘲りの視線を浴びせられた。
馬鹿にする声を聞いたわ！
それを無くそうとしたのが、間違いだったというの！？
貴方だって、同じでしょう！？
貴方はそこにいる出来の良い妹と、いつも比べられていたはずよ。
そして、不当な侮辱を受けてきたはずよ！
誰からも馬鹿にされて来たはずよ！」
紗耶香の叫びは、確かに、心からの嘆きだった。
心の底からの絶叫だった。
だがその叫びは、達也の心には届かない。
達也はただ、彼女が叫んでいる言葉の「意味」、彼女が叫んでいるという「現象」を認識するだけだ。
そこに、嘆き叫ぶ少女がいると、認識するだけだ。
紗耶香の見た憐れみの光は、彼女の自己憐憫が作り上げた錯覚でしかない。
紗耶香の叫びは、それを浴びせかけた少年の心に届かず――その傍らの、少女の心に届いた。
「わたしはお兄様を蔑んだりはしません」
静かな声だった。
だがその声には、紗耶香の嘆きを沈黙させる感情――怒りが込められていた。
「仮令わたし以外の全人類がお兄様を中傷し、誹謗し、蔑んだとしても、わたしはお兄様に変わることのない敬愛を捧げます」
「……貴女……」
「わたしの敬愛は、魔法の力故ではありません。
少なくとも、俗世に認められる魔法の力ならば、わたしはお兄様

を数段上回っています。
ですがそんなものは、わたしのお兄様に対するこの想いに、何の影響力も持ち得ません。
そんなもので、わたしのお兄様に対する想いは、微塵も揺らぐものではありません。
そんなものは、お兄様の、ほんの一部に過ぎないと知っているからです」
「……」
「誰もがお兄様を侮辱した？
それこそが、許し難い侮辱です。
お兄様を侮辱する無知な者共は、確かに存在します。
ですが、そのような有象無象の輩と同じくらい、いえ、それ以上に、お兄様の素晴らしさを認めてくれている人たちがいるのです。
壬生先輩、貴女は、可哀想な人です」
「なんですって!?」
声だけは、大きかった。
だがそこに、力は無かった。
「貴女には、貴女を認めてくれる人がいなかったのですか？
魔法だけが、貴女を測る全てだったのですか？
いいえ、そんなはずはありません。
そうでない人を、わたしは少なくとも一人、知っていますから。
誰だと思いますか？」
「……」
「お兄様は、貴女を認めていましたよ。
貴女の剣の腕と、貴女の容姿を」
「……そんなの、上辺だけのものじゃない」
「確かにその通り、上辺だけのものです。
でも、それも確かに、先輩の一部であり、先輩の魅力であり、先輩自身ではないのですか」
「……」

「上辺なのは当たり前です。
お兄様と貴女が直接顔を合わせたのは、まだこれで、四回目なのですよ。
たった四回、会っただけの相手に、貴女は何を求めているのですか」
「それは……」
「結局、誰よりも貴女を差別していたのは、貴女自身です。
誰よりも貴女のことを劣等生と、『雑草』と蔑んでいたのは、貴女自身です」
反論は、出来なかった。
反論しようという考えすら、浮かばなかった。
その指摘は、思考が漂白されるほどのショックを、紗耶香に与えた。
考えることを止めたとき、
人は、自らの意思を放棄する。
棄てられた意思の抜け殻に、悪魔の囁きは忍び込む。
否、この場合は、傀儡師の囁きか。
「壬生、指輪を使え！」
今の今まで、無様にも、十六歳の少女の背中に隠れていた男。
その男が突如叫んだ。
悲鳴にも似た叫び声と共に、床に向かって腕を振り下ろした。
小さな発火音と、白い煙。
同時に広がる、耳障りな不可聴の騒音。
それはサイオンのノイズ。
魔法の発動を阻害する、キャスト・ジャミングの波動だった。
三つの足音が煙の中から聞こえた。
達也は二度、手を突き出した。
煙の中の掌底打ち。
彼の目は閉じられている。
鈍い、肉を打つ音が二度、床を叩く音が二度、鳴った。

「深雪、止せ」
指示を出したのは、その合間。
深雪が編纂していた魔法式は、すぐに別のものに変わった。
風が渦を巻き、白い煙を吸い込んで行く。
ピンポン球の大きさまで圧縮された煙は、空中に出現したドライアイスに閉じ込められて床に落ちた。
視界が回復した部屋に、三人の男が横たわっている。
凍傷の激痛に転げ回る一人の男と、
顔面に痣を作って昏倒した二人の男。
「お兄様、壬生先輩を拘束せずとも良かったのですか？」
深雪が不思議そうに訊ねた。
そこに、達也の下心を疑う憶測はない。
達也の女性関係を深雪が勘繰ってみせるのは、兄妹の他愛もないコミュニケーションに過ぎないのだ。
達也がその手の私情を差し挟まないことを、深雪は良く知っている。
「お前の腕を疑う訳ではないが、不十分な視界の中では思わぬ番狂わせもあり得る。
お前がリスクを冒さなくても、壬生先輩はエリカが確保してくれるさ」
「エリカがそこまで熱心になる理由は無いと思いますが……」
「相手が壬生先輩でなければな」
深雪には、特定の敵に拘る気持ちというのは、良く分からない。
彼女にとって戦いはまず避けるべきものであり、次に、勝利すべきものだからだ。
相手が誰であろうと、それは同じ。
相手が何者であろうと、敵であるということ以外は、無関係。
だが、仕合う相手に拘る者もいることを、知識としては知っていた。
「そうですか。エリカならば大丈夫でしょう」

だから彼女のことはエリカに任せ、深雪はテロリストにして窃盗犯を拘束する兄を、手伝うことにした。

◇◆◇◆◇◆◇

紗耶香の行動は、ほとんど反射的なものだった。

アンティナイトの指輪は、逃走用に貸し与えられた切り札。

彼女も「魔法遣い」としての教育を受けている者として、キャスト・ジャミングの性質と限界は知っていた。

いや、これを実際に使用するに当たり、普通の魔法師候補生より詳しい知識を身につけた。

この指輪に、魔法師を倒す力は無い。

魔法を妨害するだけのキャスト・ジャミングは、魔法による攻撃を避けることにしか、役に立たない。

あの一年生には、それでは勝てない。

あの時見せられた、見たこともない、鮮やかな技。

あの一年生の武量は、目に焼き付けられている。

指輪を貸し与えられたとき、リーダーにも、何度も、念を押されていた。

この指輪は、逃走の為に使え、と。

目に焼き付けられた光景と、耳に刻み込まれた言葉が、彼女の四肢を操っていた。

背中越しに聞こえた床を叩く音。

彼女の後に続く者は無い。

仲間が打ち倒されたのは分かっていた。

だが、思考が麻痺した彼女には、助けに戻るという選択肢も思い浮かばない。

ただ、計画失敗時のマニュアルに従い、組織の中継基地へ帰還する、という強迫観念に支配され、廊下を走り階段を駆け下りる。

そこで、足が止まった。

「セーンパイ♪
はじめまして～」
一人の女子生徒――紗耶香を「先輩」と呼ぶからには一年生だろう――が、両手を後ろに組んで、ニコニコと微笑みながら彼女の前に立ちはだかったからだ。
「……誰？」
警戒心をむき出しにした声。
だが、一年生の朗らかな表情に、変化は無い。
「１－Ｅの千葉エリカです。
念の為に確認させて頂きますが、一昨年の全国中学女子剣道大会準優勝の、壬生紗耶香先輩ですよね？」
正体不明の衝撃が、紗耶香を襲った。
意識の陰、自分では見えない心の何処かに、竹刀で打ち据えられたような痛みが走った。
「……それがどうかしたの」
その衝撃を、痛みを隠して、問い返す。
「いえいえ、どうもしませんよ？
ただ確認したかっただけです」
エリカは相変わらず、両手を背中で組んだままだ。
だが、隙が無い。
彼女のスレンダーな身体は、廊下を塞ぐには程遠いが、すり抜けて通る「隙間」が見当たらない。
それに……背後に隠されたその両手は、素手なのだろうか？
何も、持っていないのだろうか？
「……急いでいるの。通してもらえないかしら」
背後から、追いかけてくる気配は無い。
だが彼ならば、気配を隠して近づくことなど朝飯前かもしれない。
紗耶香は焦る気持ちを抑えて、できるだけ穏便に話しかけた。
――もっとも、このままここを通り抜けられる可能性は、ゼロに等しいことも分かっていた。

「一体どちらへ？」
「貴女には関係ないでしょう」
「答えるつもりは無い……ということですね？」
「そうよ」
「交渉決裂ですね♪」
楽しそうに告げるエリカ。
無茶苦茶な言い分だが、最初から彼女を通すつもりの無い事は、紗耶香にも分かり切っていたことだった。
紗耶香は素早く、左右を見た。
生憎彼女は、得物を持っていない。
ＣＡＤは身につけているが、魔法を使うつもりなら、自分が有する唯一のアドバンテージである、キャスト・ジャミングは使えなくなる。
視界の隅に、銀灰色の棒が転がっていた。
彼女の仲間が持ち込んだスタンパトンだ。
少しリーチが短いが、慣れ親しんだ得物の代用にはなる。
紗耶香はゆっくりと、悟られないように重心を落とした。
身体の力を足に集め、
一気に、跳躍。
転がるようにしてバトンを拾い上げ、すかさず、道を塞ぐ女子生徒へ向けて構える。
エリカはそのさまを、呆れ顔で眺めていた。
「そんなに慌てなくても、得物を手に取る間くらい待ってあげるのに……」
かぁっ、と紗耶香の顔に血が上った。
一人芝居ならぬ、一人アクションの気まずさと気恥ずかしさを誤魔化すように、エリカを鋭く睨みつけて叫んだ。
「そこをどきなさい！　痛い目を見るわよ！」
「これで正当防衛成立かな。
まっ、そんな言い訳をするつもりも無いけど」

エリカは興が醒めたような声で呟くと、背中に隠していた手を前に回した。
右手には伸縮式の警棒、左手には本身の脇差。
そして、左手の得物をポイッと投げ捨てた。
「じゃあ、やりましょうか、先輩」
そう言って、エリカは右手を前に掲げた。
紗耶香もまた、構えを取った。
得物を正面に、右手に左手を添える。
諸手中段の紗耶香と、片手半身のエリカ。
始まりは唐突だった。
切っ先（剣先）合わせも気合も無い。
動いた、と見えた瞬間、エリカの警棒が紗耶香の首筋に迫っていた。
咄嗟に手を撥ね上げる。
身体に刷り込まれた、反射的な防御によって、辛うじてその攻撃を防ぎ止めた、と思った次の瞬間、相手は紗耶香の背後に回り込んでいた。
振り向きざま、勘だけでバトンを縦に立てる。
弾き飛ばされそうな衝撃を、手の内を締めて持ちこたえ、鍔迫り合いに持ち込もうとしたが、その瞬間には、相手の身体は間合いの外だった。
「加速術式……？」
呟く紗耶香。
エリカは応えない。
「……渡辺先輩と、同じ？」
だが、続いて放たれた言葉が、エリカの足を止めた。
それは一瞬の停滞、だが、転機を作り出すには十分な、間。
再び踏み出しかけたエリカの足を、廊下を満たした耳障りな騒音が止めた。
耳には聞こえぬ、サイオンのノイズ。

顔を顰めたエリカへ向けて、紗耶香が攻勢に転じる。
息もつかせぬ連続攻撃。
面、面、小手、胴、袈裟切り、切り上げ、面、逆袈裟……
その剣筋は、スポーツとしての剣道だけでなく古流もしっかりと学んでいることを窺わせるものだった。
攻めること、火の如く。
風林火山の金言のままの、まさしく、烈火の如き攻撃。
いつの間にか、サイオンのノイズは消えていた。
それは当然のことだった。
キャスト・ジャミングは、アンティナイトにサイオンを注入することで発動する。
サイオンの注入が止まれば、ノイズの発生も止まる。
屋内を満たすノイズも、やがては減衰し消滅する。
剣撃に全精力を注ぎ込んでいる今の紗耶香に、キャスト・ジャミングを維持できるはずも無かった。
いつでも魔法を発動できる状態、そして、如何に鋭く、激しい攻撃であっても、魔法を併用したスピードについていける程のものではない。
それなのに、エリカは魔法を使おうとしなかった。
魔法式を編み上げる余裕が無いのだろうか？
エリカはコンパイルの実技に苦労していた二科生だ。
しかし、エリカのＣＡＤは高速化に優れた特化型で、エリカはこの特殊な形状のＣＡＤに習熟している。
それに刻印術式の方には、キャスト・ジャミングの影響下においてすら、サイオンが安定的に供給されていた。
突き放して距離を取れば、得意魔法の発動は十分可能なはずだった。
突き放すことも出来ないほど、追い詰められているようにも見えない。
烈火のように、という賛辞とは裏腹、紗耶香の攻撃はガムシャラ

とも言えるものだった。
それをエリカは、無駄のない動きで、受け止め、捌いている。
その目に、焦りは無い。
呼吸に、乱れは無い。
先に乱れたのは、攻め疲れの見えた紗耶香の方だった。
瞬転。
攻守が、入れ替った。
切り上げの一撃を擦り上げ、棒立ちとなった紗耶香のバトンへ横薙ぎに叩きつける一閃。
根元を狙った一撃は、木刀や棍棒に比べて造りの脆いスタンバトンをへし折った。
「……」
眼前に突きつけられた警棒を、紗耶香は怯まず睨みつける。
その目には、強い怒りがこもっていた。
「拾いなさい」
得物を動かさず、エリカが告げる。
「……」
意味を理解できなかった紗耶香は、何も、応えない。
「そこに転がっている脇差を拾って、貴女の全力を見せなさい。貴女を縛るあの女の幻影を、あたしが打ち砕いてあげる」
突きつけられた警棒に構わず、膝を屈める紗耶香。
脇差を拾い、再び、構えを取る。
と、何を思ったのか、構えを解いて左手を右手に添えた。
右手中指に光る、真鍮色の指輪。
それを抜き取って、床へ投げ捨てた。
「こんな物には頼らない。
あたしは自分の力で、その技を打ち破る」
紗耶香が、刃を返した。
峰打ちは刀の構造を無視した打撃であり、徒に刀を折るリスクを増やすものだ。

そのリスクを負っても、人を殺すことへの躊躇いが剣尖を鈍らせてしまうことを嫌った、構え。
「あたしには解る」
構えを取って向き合い、
「貴女の技は、渡辺先輩と同門のものだわ」
「あたしの技は、あの女のものとは一味違うわよ」
互いに一言ずつ、言葉を交わす二人。
それきり、沈黙が支配する。
沈黙が、緊張に替わり、緊張が、緊迫に席を譲る。
そして緊迫が最高潮に達した瞬間、エリカの姿が消えた。
刹那の、交差。
甲高い、金属音が響く。
視認することも困難な、魔法で加速されたエリカの一撃を、紗耶香は確かに、受け止めた。
その、一の太刀を。
紗耶香の手から、脇差が落ちる。
紗耶香が右腕を押さえて膝をついたのは、その直後だった。
「ゴメン、先輩。
骨が折れているかもしれない」
「……ひびが入っているわね。
いいわ、手加減できなかったってことでしょう」
「うん。
先輩は、誇ってもいいよ。
千葉の娘に、本気を出させたんだから」
「そう……貴女、あの千葉家の、直系だったの」
「実は、そうなんだ。
ちなみに渡辺摩利は、ウチの門下生。
あの女は目録で、あたしは印可。
剣術の腕だけなら、あたしの方が上だから」
その言葉に、紗耶香は小さく微笑んだ。

それは儚くも、屈託の無い笑顔だった。
「そう……
ねえ、虫が良いお願いなんだけど、担架を呼んでもらえないかしら。
何だか、気が、遠くなって、ね……」
そのまま紗耶香は、がっくりと倒れこむ。
エリカはその身体を、丁寧に抱き起こした。
気を失った紗耶香に、こっそり、囁きかける。
「大丈夫だよ、先輩。
優しい後輩が、先輩を運んでくれるから」

◇◆◇◆◇◆◇

「で、俺に壬生先輩を運んで行け、と？」
達也の当然とも言える疑問に、エリカは一欠片の悪びれた様子も無く頷いた。
「大丈夫、そんなに重く無かったよ」
「いや、そういう問題ではなくてだな」
「可愛い女の子を大義名分つきで抱っこできるんだから、ここは喜ばなきゃ」
「そんなことで喜ぶ趣味は無い……いや、そういう問題でもなくてだな」
「……薄々思ってたんだけど、もしかして達也くんって、女性に興味ないの？
まさか、そっちの趣味？」
「そっち、って、どっちだよ？」
「ゲイ」
「んな訳あるか！
だからそういう問題ではなくてだな、担架を呼べばいいものを、何故俺が抱えて行かなきゃならんのだ」

深雪はクスクス笑っているだけだ。
達也は蓄積していく徒労感と戦いながら、エリカに常識論を理解させるべく試みる。
――ここに至り、既に諦めの心境が相半ばしていたが。
「そんなの、壬生先輩が喜ぶからに決まってるじゃん」
不覚にも達也は、返す言葉を失ってしまった。
ここまで理不尽にならられると、論理立てた説得は困難だ。
途方に暮れてしまう、と言ってもいい。
「良いではありませんか、お兄様。
一刻を争う傷ではないとはいえ、治療は早いに越した事はありませんし。
お兄様が抱きかかえて行かれるのが、一番手っ取り早いと思います。
とにかく、このままでは埒が明きませんよ？
相手はエリカなんですから」
「チョッと深雪、それ、どーゆー意味かな？」
「やれやれ、それもそうだな。仕方ない」
「チョッと達也くん、なにその便乗攻撃？
二対一なんて卑怯じゃない！」
「あら、わたしはエリカに味方してあげたつもりなのだけど」
「ウソ！
ぜ～ったい、ウソ！」
ギャーギャー騒ぐエリカと涼しい顔で受け流す深雪の微笑ましい（？）コミュニケーションをＢＧＭとばかり聞き流しながら、達也は紗耶香をそっと抱きかかえた。
勢いをつけて揺すり上げるような真似はしない。
何処に力が入っているのか分からない、滑らかな動作だった。
「うん、やっぱ、達也くんは凄いワ」
何をそんなに感心しているのか、エリカは何度も頷いていたが、取り合うとまた長くなりそうだったので、達也はそのまま歩き出し

た。

気を失っているはずの紗耶香の顔は、ぐっすりと眠っているように見えた。

心から、安心して。

1－（24）　反撃（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

1－（24）　反撃

保健室に着いて、紗耶香はすぐに目を覚ました。
今は右腕の治療をしながら、事情を聴取しているところだ。
最初はなるべく興奮させないように、と校医から制止が掛かったが、紗耶香自身の希望で、治療しながら話を聞くことになったのである。
「……という訳で、壬生先輩を追い詰めたのは、どうやら渡辺先輩のようですね」
エリカから、いつもの軽やかな喋り方をひっくり返したような棘のある口調の告発を受けて、摩利は目を白黒させていた。
「……すまん、心当たりが無いんだが……
壬生、それは本当か？」
俯いたのは一秒未満。
紗耶香は吹っ切れた表情で頷き、同じく、吹っ切れた口調で応えた。
「今にして思えば、私は中学時代『剣道小町』なんて言われて、いい気になっていたんだと思います。
だから入学してすぐの、剣術部の新入生向け演武で渡辺先輩の見事な魔法剣技を見て、一手のご指導をお願いしたとき、すげなくあしらわれてしまったのが凄くショックで……
相手をされなかったのはきっと、私が二科生だから、そう思ったらとてもやるせなくなって……」
「一寸……ちょっと待て。
去年の勧誘週間というと、あたしが剣術部の跳ね上がりにお灸を据えてやったときのことだな？
その時のことは覚えている。
お前に練習相手を申し込まれたことも忘れていない。
だがあたしは、お前をすげなくあしらったりしていないぞ？」

「傷つけた側に傷の痛みが分からないなんて、よくあることです」
「エリカ、少し黙っていろ」
真剣に首を捻っている摩利に、皮肉な口調を隠そうともせず茶々を入れたエリカ。
達也はそれを、制止した。
「なに？　達也くんは渡辺先輩の味方なの？」
「だから少し黙って聞いていろ。論評も非難も、その後でも遅くはない」
ピシャリと叩きつけられた正論に、不満げながらもエリカが黙り込む。
短い沈黙の後、紗耶香が少し辛そうに、反論した。
「先輩は、私では相手にならないから無駄だ、自分に相応しい相手を選べ、と仰って……
高校に入ってすぐ、憧れた先輩にそんな風に言われて……」
「待て……いや、待て。
それは誤解だ、壬生」
「えっ？」
「あたしは確か、あの時こう言ったんだ。
――すまないが、あたしではお前の相手は務まらないから、時間の無駄になってしまう。お前の腕に見合う相手と稽古してくれ――
とな。
違うか？」
「え、あの……そう、いえば……」
「大体、あたしがお前に向かって『相手にならない』なんて言うはずがない。
剣の腕はあの頃からお前の方が上だったのだから」
ポカンとした表情で見詰め返すだけの紗耶香に代わって、真由美が摩利に問い掛けた。
「ちょっと待って、摩利。
じゃあ貴女は、壬生さんの方が強いから、稽古の相手は辞退する、

と言ったの？」
「そのとおりだ。
そりゃあ、魔法を絡めればあたしの方が上かも知れんが……
あたしが学んだ剣技は、魔法の併用を大前提としたものであって、魔法を最大限活かす為に身体をどう動かし武器をどう使うか、というものだからな。
純粋に剣の道を修めた壬生に、剣技で敵う道理がない」
「じゃあ……あたしの誤解……だったんですか……？」
居心地の悪い沈黙が保健室に忍び込み、ゆっくりと広がった。
「なんだ、あたし、バカみたい……
勝手に、先輩のこと誤解して……自分のこと、貶めて……
逆恨みで、一年間も無駄にして……」
ただ、紗耶香の嗚咽だけが、沈黙の中に流れた。
「……無駄ではないと、思います」
その沈黙を破ったのは、達也だった。
「……司波君？」
「エリカが先輩の技を見て、言っていました。
エリカの知る壬生先輩の、中学の大会で準優勝した『剣道小町』の剣技とは別人のように強くなっていると。
恨み、憎しみで身につけた強さは、確かに、哀しい強さかも知れません。
ですがそれは、紛れもなく、壬生先輩が自分の手で高めた、先輩の剣です。
恨みに凝り固まるでなく、嘆きに溺れるでなく、己自身を磨き高めた先輩の一年が、無駄であったはずはないと思います」
「……」
「強くなるきっかけなんて様々です。
努力する理由なんて、千や万では数え切れないでしょう。
その努力を、その時間を、その成果を否定してしまった時にこそ、努力に費やした日々が本当に無駄になってしまうのではないでしょ

うか」
「司波君……」
達也を見上げる紗耶香の目は、涙をぼろぼろと流し続けている。
だが彼女はその時、確かに笑みを浮かべていた。
「司波君、一つだけ、お願いがあるんだけど」
「なんでしょう」
「もう少し、こっちに来てくれないかな？」
「こう、ですか？」
「もう一歩」
「はぁ」
雰囲気が変わり、ホッとした空気が流れた。
だがそれは、
「じゃあ、お願い」
すぐに、
「そのまま、動かないでね」
ギョッとしたものに、変わった。
「うっ、ううう、うわあぁぁん……！」
達也の胸にすがりついて、紗耶香は大声で泣き始めた。
皆がおろおろした表情で顔を見合わせる中、達也は無言でその細い肩を支え、深雪はそれを見て、目を伏せた。

◇◆◇◆◇◆◇

ようやく落ち着きを取り戻した紗耶香の口から、「同盟」の背後組織が「ブランシュ」であることが語られた。
「予想どおりですね、お兄様」
「本命過ぎて面白みがないけどな」
「現実はそんなものですよ、委員長。
さて、問題は」
脱線しかけた軌道を、それこそ面白みがない処世訓で元に戻して、

「やつらが今、何処にいるのか、ということですか」
達也は今後の行動方針を、既定のものであるかの如く口にした。
「……達也くん、まさか、彼らと一戦交えるつもりなの？」
「その表現は妥当ではありませんね。
一戦交えるのではなく、叩き潰すんですよ」
おそるおそる訊ねた真由美に、達也はあっさりと、過激度を上乗せして頷いた。
「危険だ！
学生の分を超えている！」
真っ先に反対したのは、摩利。
学内限定とはいえ、常にトラブル処理の最前線に立っている彼女が、危険性に対して敏感になるのはある意味当然と言えた。
「私も反対よ。学外の事は警察に任せるべきだわ」
真由美も厳しい表情で首を横に振った。
だが、
「そして壬生先輩を、強盗未遂で家裁送りにするんですか？」
「っ！」
達也の一言に、顔を強張らせて絶句してしまう。
「なる程、警察の介入は好ましくない。
だからといって、このまま放置することも出来ない。
同じような事件を起こさない為にはな。
だがな、司波」
炯炯たる克人の眼光が、達也の眼（まなこ）を貫いた。
「相手はテロリストだ。
下手をすれば命に関わる。
俺も七草も渡辺も、当校の生徒に、命を懸けろとは言えん」
「当然だと思います」
しかし達也は、その眼光をものともせず、淀みなく答えた。
「最初から、委員会や部活連の力を借りるつもりは、ありません」
「……一人で行くつもりか」

「本来ならば、そうしたいところなのですが」
「お供します」
すかさず飛び込んで来た妹の声に、達也は苦笑を浮かべた。
「あたしも行くわ」
「俺もだ」
エリカから、レオから、次々と表明される、参戦の意思。
「司波君、もしもあたしの為だったら、お願いだから止めて頂戴。会長の仰るとおり、警察に任せましょう？
あたしは平気。罰を受けるだけのことをしたんだから。
それより、あたしの所為で司波君たちに何かあったら、そっちの方が耐えられない」
慌てて紗耶香が止めに入るが、振り返った達也の表情は、彼女の誠意に応えるには相応しからぬ、シニカルなものだった。
「ご心配なく。壬生先輩の為じゃありません」
「っ……」
冷たく突き放す口調に、紗耶香がショックを受けた顔で黙り込む。
「虻蚊を叩き潰すのは、自分が刺されないようにする為です。ご近所の為にゴキブリを駆除する人はいないでしょう？」
気休めを言っている印象は無かった。
深雪ほど彼のことを理解してはいないレオにも、エリカにも、真由美にも、摩利にも、達也が本気で害虫駆除とテロリスト退治を同列視しているということが、何となく分かった。
氷刃の如き眼差しで、理解させられた。
「……ゴキブリ駆除なんてＨＡＲ任せだけどね」
エリカの飛ばした然して気の利いていないジョークで、何とか雰囲気が常温に戻った。
「しかしお兄様。どうやって『ブランシュ』の拠点をつきとめればいいのでしょうか？
壬生先輩がご存知の中継基地はとうに引き払われているでしょうし、大した手掛かりが残っているとも思えませんが」

「そうだな。
残っていない、というよりも、最初から手掛かりになるようなものは何も置かれていなかっただろうね」
「では？」
手掛かりがないと言いながら、それほど困った様子の無い兄に、深雪が答えを促す。
「分からない事は、知っている人に聞けば良い」
「……知っている人？」
「心当たりがあるのか、達也？」
エリカとレオの問いには答えず、達也は黙って、出入り口の扉を開いた。
「小野先生？」
真由美の声に、困惑交じりの曖昧な笑みを浮かべたのは、パンツ・スーツ姿の遥だった。
「……九重先生秘蔵の弟子から隠れおおせようなんて、やっぱり、甘かったか……」
苦笑い混じりながらも、悪びれの無い声で話しかけた相手は、達也。
「隠れているつもりも無かったでしょうに。
あんまり嘘ばかりついていると、その内、自分の本心さえも分からなくなりますよ」
「気をつけておくわ」
達也に招き入れられる形で、遥はベッド脇まで歩み寄った。
身を屈めて、ベッドに腰を下ろした紗耶香と、目線を合わせる。
「もう大丈夫みたいね」
「小野先生……」
「ごめんなさいね、力になれなくて」
首を横に振る紗耶香の肩に手を置いて、その瞳を少しの間じっと覗き込んでから、遥はベッドを離れた。
「遥ちゃんが、ブランシュとかいう連中の居所を知っているのか？」

誰だ？、というベタなボケは、流石に無かった。
その代わり、聞いたことの無い、発言者にもそぐわない、妙な呼称が聞こえて来た。
「遥ちゃん？」
「あれっ？　達也、知らないのか？」
当然の疑問かと思ったのだが、逆に訊き返されて、達也は何と返せばいいのか戸惑ってしまう。
「クラスの連中は皆、そう呼んでるぜ？
遥ちゃんも、それで構わないって言ってるし」
「皆じゃないわよ。そんな呼び方してるのは、一部の男子だけ。
達也くん、騙されちゃダメよ」
「あ、ああ……」
思わぬ寸劇で、緊張感が大暴落していた。
だが、下手に緊張し過ぎるよりはこの方が良いかもしれないと、達也は思い直した。
――多分に、自分を納得させる為の成分が混じっていたが。
「――さて、小野先生」
「遥ちゃんで良いのに」
まさかと思った本人のボケに、挫けそうになる心のテンションを、何とか維持する。
「……小野先生。事ここに至って、知らない振りはありませんよね？」
「ノリが悪いのね」
「……」
「……オッホン」
達也の向けた真っ白な視線に、流石に拙いと思ったのか、一つ咳払いして――それも必要以上に芝居がかっていたが――遥は居住まいを改めた。
「地図を出してもらえないかしら。その方が早いから」
達也は無言で情報端末を取り出した。

スクリーンを展開し、地図アプリを呼び出す。
遥も――達也の物より随分華奢でお洒落な感じだったが――端末を取り出し、指向性光通信を作動させた。
送信された座標データに従い、地図が立ち上がり、マーカーが光る。
「……目と鼻の先じゃねえか」
「……舐められたものね」
徒歩でもここから、一時間は掛からない距離。
縮尺を下げ、詳細表示に変える。
そこは、街外れの丘陵地帯に建てられた、バイオ燃料の廃工場だった。
「……環境テロリストの隠れ蓑であることが判明して、夜逃げ同然に放棄された工場ですね」
添付データを達也が読み上げる。
「当局が気付かないうちに、舞い戻っていたということかしら」
「根は同じだと？」
形式は質問だったが、摩利も、真由美と同じ考えである事は、その表情から分かる。
「放置されているところを見ると、劇毒物の持ち込みはないようだな」
「ええ。私たちの調査でも、ＢＣ兵器は確認されていないわ」
克人の呟きに、遥が頷く。
「車の方が良いだろうな」
「魔法では探知されますか？」
「探知されるのは一緒さ。
向こうは、俺たちのことを待ち構えているだろうから」
「正面突破ですね？」
「それが一番、相手の意表をつくことになるだろうな」
達也はともかく、深雪までもが当たり前のように好戦的な台詞を口にして、攻略の方針を決めて行く。

「そうだな。妥当な策だ。
車は、俺が用意しよう」
「えっ？
十文字くんも、行くの？」
真由美の疑問は、達也も共有するものだった。
克人は、配下の参戦を否定しながら、自分だけは前線に赴くタイプには見えない。
「部活連会頭として行くのではない。
第一高校生徒として行くのでもない。
これは、十師族に名を連ねる十文字家の者としての務めだ」
「……じゃあ、」
「七草。お前はダメだ」
「真由美。この状況で、生徒会長が不在になるのは拙い」
二人掛かりの説得に、真由美は不承不承ながら、頷く。
「司波、すぐに行くのか？
このままでは、夜間戦闘になりかねないが」
「そんなに時間は掛けません。
日が沈む前に終わらせます」
「そうか」
達也の態度に、何事か感じるものがあったのだろう。
克人はそれ以上何も訊こうとせず、車を回す、と言い残して保健室を出て行った。
「会頭と会長が十師族なのは分かったけどよ……遥ちゃんって、何者なんだ？」
「その話は後だ。行くぞ」
敢えて誰も口にしていなかったレオの質問は、達也によって棚上げにされた。
達也、深雪に続き、レオとエリカが保健室を後にした。

◇◆◇◆◇◆◇

車は、オフロードタイプの大型車だった。
そしてその助手席には、追加のメンバーが座っていた。
「桐原先輩」
「よう、司波兄(あに)。
あんまり驚かねえのな」
「……いえ、十分驚いてますよ」
主に、その呼び方に、とは、口にせぬが花だった。
「司波兄、俺も参加させてもらうぜ」
「どうぞ」
一体どういう心境で桐原がこのようなことを言い出したのか、達也には分からない。
だが、押し問答するには、時間が惜しかった。
それに、桐原が大怪我をしようと命を落とそうと、達也には関係のないことでもあった。

1－（25）　スペシャリスト（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

1―（25）　スペシャリスト

茜色に染め上げられた世界の中、
夕陽を弾いて疾走する大型オフローダーが、
閉鎖された工場の門扉を突き破った。

「レオ、ご苦労さん」
「……何の。チョロイぜ」
「疲れてる疲れてる」
いきなり、時速百キロ超で悪路を走行中の大型車全車体を、衝突のタイミングで硬化する等というハイレベルな魔法を要求されたレオは、集中力の多大な消費にかなりへばっていた。
「司波、お前が指示を出せ」
克人の言葉に、達也は頷いた。
「レオ、お前はここで退路の確保。
エリカはレオのアシストと、逃げ出そうとするヤツの始末」
「……捕まえなくていいの？」
「余計なリスクを負う必要は無い。安全確実に、始末しろ。
会頭は桐原先輩と左手を迂回して裏口へ回って下さい。
俺と深雪は、このまま踏み込みます」
「分かった」
「まあいいさ。逃げ出すネズミは残らず切り捨ててやるぜ」
「達也、気をつけてな」
「深雪、無茶しちゃダメよ」
居残りを指示されたレオも、エリカも、不平を鳴らすような真似はしない。
抜き身の刀――但し、刃引き――を手に提げた桐原が駆け出し、克人が悠然とそれに続く。
達也と深雪は、ＧＭＳ（ゼネラルマーチャンダイズストア；総合

スーパー）にでも入るような足取りで、薄暗い工場の中へ進んだ。

◇◆◇◆◇◆◇

遭遇は意外に早かった。

達也は遮蔽物の確保など気にせず進み、相手もホール状のフロアに隠れもせず整列していたからだ。

「ようこそ、はじめまして、司波達也くん！

そしてそちらのお姫様は、妹さんの深雪くんかな？」

「お前がブランシュのリーダーか？」

大袈裟な仕草で手を広げ、歓迎のポーズをとった男に対して、達也は冷ややかに問い掛けた。

年齢は三十台半ば。

ヒョロッとした身体つきに縁無しの伊達メガネ。その男は、学者か法律家といった趣の外見をしていた。

「おお、これは失敬。

仰せの通り、僕がブランシュのリーダー、司一（つかさ・はじめ）だ」

「そうか」

一言頷いて、達也はショルダーホルスターから、銀色のＣＡＤを取り出した。

「ふむ、それはＣＡＤだね。

拳銃くらい用意してくるかと思っていたが。

それにしても大胆なことだ。ここまで、身を隠さずに入ってくるとは。

如何に魔法師とはいえ、銃で撃たれれば死ぬのだよ？」

「俺は魔法師じゃない」

狙撃を仄めかされた相手の意外な反応に、ブランシュのリーダーはわざとらしく、目を丸くして見せた。

「おお、そうか。君はまだ学生だったね。

あんまり堂々としているから忘れそうになったよ」

「お喋りな男だな。
まあ、アジテーターなど、それが商売なのだろうが」
「若いのに手厳しいね、君は。
若いうちからそんなに穿った見方ばかりで、窮屈ではないかね。
その調子では、その内、窒息してしまうよ？」
「一応、投降の勧告をしておく。
全員、武器を捨てて両手を頭の後ろに組め」
「ハハハハハ、君は魔法の苦手なウィードじゃなかったのかい！？
おっと失礼、これは差別用語だったね。
でも、君のその自信の源は何だい？
魔法が絶対的な力だと思っているなら、大きな勘違いだよ」
司一が右手を上げた。
左右に並ぶ、総勢二十人を超えるブランシュのメンバーが、一斉に銃器を構えた。
拳銃だけでなく、サブマシンガン、アサルトライフルを持つ者すら混じっていた。
「交渉は、対等なものでなければならないから、こちらからも機会をあげよう。
司波達也くん、我々の仲間になり給え。
君のアンティナイトを必要としないキャスト・ジャミングは、非常に興味深い技術だ。
君が我々の仲間になると約束するなら、妹さんは無事に帰してあげようじゃないか」
「やはり、それが狙いか。
壬生先輩を使って接触したのも、キャスト・ジャミングが狙いだな」
「ふむ、頭の良い子供は好ましいね。
だがそこまで分かっていてノコノコやってくるとは所詮、子供だ。
とは言うものの、子供は強情なものでもある。
全く勝ち目がないと分かっていても、大人しく言うことをきかな

いだろう」
「だったらどうする」
「こうするのさ……
司波達也、我に従え！」
その仕草は、学者というより手品師のようだった。
外連味たっぷりに伊達メガネを投げ捨て、前髪をかき上げて正面から目を合わせる。
その両眼が、妖しい光を放った。
達也の顔から表情が抜け、身体から力が抜ける。
「ハハハハハ、君はもう、我々の仲間だ！
では手始めに、ここまで共に歩んで来た君の妹を、その手で始末してもらおう！
妹さんも最愛の兄上の手に掛かるなら、本望だろう！」
命令することに慣れた口調。
己が権威を疑わぬ表情。
だが、
「……猿芝居はいい加減に止せ。
見ている方が恥ずかしくなる」
その顔は、冷ややかな達也の侮言に、瞬時に凍りついた。
「意識干渉型系統外魔法、邪眼（イビル・アイ）。
と、称してはいるが、その正体は催眠効果を持つパターンの光信号を、人の知覚速度の限界を超えた間隔で明滅させ、指向性を持たせて相手の網膜に投射する光波振動系魔法。
洗脳技術から派生した、映像機器でも再現可能な、単なる催眠術だ。
大袈裟な機械を使わずに済む為、相手の意表をつくことが出来るというメリットはあるが、所詮、それだけのものに過ぎない。
確かこれは、ソビエト新連邦が熱心に開発していた手品だったな」
魔法ではなく、言葉で、達也は敵を凍りつかせた。
「壬生先輩の記憶も、これですり替えたのか？」

「お兄様、では……？」
大きな目を更に見開いて問い掛けた深雪に、達也は無表情なまま、頷いた。
「壬生先輩の記憶違いは、不自然なほど激しいものだった。聞き間違いをした直後は動揺しているから、あんな極端な思い込みに捉われることもあるだろう。
だが普通は、時間の経過と共に、冷静になっていくものだ」
「……この、下種ども」
深雪の端正な唇から迸った、怒気。
その熱が、凍りを解かしたのか。
「……貴様、何故……」
「つまらんヤツだな。
メガネを外す右手に注意を引きつけ、ＣＡＤを操作する左手から目を逸らす、そんな小細工がこの俺に通用するものか。
起動式が見えていればどんな魔法を発動しようとしているのかも分かるし、対処も出来る。
お前のちゃちな魔法など、起動式を部分的に抹消するだけで十分だった。肝心の催眠パターンに関する記述が抜け落ちては、邪眼も単なる光信号に過ぎない」
「バカな……そんな真似が……貴様、一体……」
「ところで、二人称は君、じゃなかったのか？
大物ぶっていた、化けの皮が剥がれているぞ」
この時、司一は初めて気がついた。
この少年の表情が消えたのは、脱力したのは、彼の魔法を確認し無効化したことで、彼に対する一切の興味が失せたからだ。
目の前のこの少年は、最初から、彼のことを同じ人間と見ていなかった。
彼らのことを、人間として見てはいなかった。
この少年の目は、これから自分が踏み潰そうとしている、虫ケラを見る目だ……

「う、撃て、撃てぇ！」
威厳を取り繕う余裕は、最早なかった。
同士、いや、部下たちが向ける疑惑の眼差しにも、気付く余裕はなかった。
生物としての原初的な恐怖に駆られて、司一は射殺を命じた。
だが――
弾丸は、一発も発射されなかった。
「な、な、……」
「何だこれは！？
何が起こったんだ！？」
パニックが、フロアを満たした。
床には、バラバラに分解された、拳銃、サブマシンガン、アサルトライフルが散乱している。
男たちが引き金を引こうとした瞬間、彼らの武器は、部品に戻っていた。
パニックの中、
それを鎮めようともせずに、
司一が、逃げ出した。
彼は背後を、仲間を、一顧だにしなかった。
「お兄様、追って下さい。
ここはわたしが」
「分かった」
達也は奥の通路へ向けて、歩き出した。
自然に、人垣が割れる。
彼は何もせず、司一が逃げて行った通路へたどり着いた。
そのまま彼を通していれば、残されたブランシュのメンバーは、捕まるだけで済んだはずだ。
だがメンバーの一人が、ナイフを手に、達也の背中へ襲い掛かった。
襲い掛かろうと、した。

「愚か者」
常であれば、人を魅了してやまない可憐な響きが、絶望をもたらす裁きを運ぶ。
「ほどほどにな。
この連中に、お前の手を汚す価値は無い」
「はい、お兄様」
言葉を交わす兄と妹の間では、全身を霜で覆われた彫像が、傾き、倒れている最中だった。

◇◆◇◆◇◆◇

彼女の兄に害を為そうとした者は、一人だけ。
その愚か者は、既に凍り付いている。
だが、彼女にとってはそれだけで十分であり、それだけでは不十分だった。
十分な理由、
不十分な結果。
たった一人の華奢な少女を前に、二桁の男たちが、一歩も動けなくなっていた。
凍りついた足は、踏み出すことも、後退ることも出来なくなっていた。
精神的にも——物理的にも。
床は一面、白い霜で覆われていた。
少女の立つ小さな円内、そこだけが、屋外と同じ季節だった。
白い霧が、渦を巻き流れる。
霧は、冷気で出来ていた。
少女が右手を上げた。
その姿は、死者に裁きをもたらす、氷の女王の現界か。
「お前たちは、運が悪い」
いつもとは異なる口調。

だが、命じ、裁く、権威と共にあるその言葉遣いに、些かの違和感もなかった。
「お兄様に手出しをしよう等とさえ、しなければ、せめて安らかに眠れたものを」
冷気が、徐々に、這い上がってくる。
男たちの顔が、恐慌と、絶望に染まる。
「わたしはお兄様ほど、慈悲深くは無い」
冷気は既に、首の下までを、覆い固めていた。
「祈るが良い。
せめて、手足が腐り落ちずに済むように」
振動減速系広域魔法「ニブルヘイム」。
声なき断末魔の絶叫が、霧の中に満ちた。

◇◆◇◆◇◆◇

待ち伏せはなかった。
戦力を分散させない程度の頭はあったようだ、と達也は思った。
存在を知覚する達也に、待ち伏せは意味を成さない。
隠れることもまた無意味。
次の部屋に、十一人の人間が待ち構えている。
サブマシンガンが、十丁。
達也は壁越しに、ＣＡＤの引き金を引いた。
物理的な障壁は、魔法の障碍にはならない。
達也が自由に使える二つだけの魔法、その一つ「分解」が、サブマシンガンのエイドスを書き換える。
再びあがる、狼狽の声。
彼が存在を知覚できるのは、魔法式のみならず起動式をも解析することが出来るのは、この魔法と、もう一つの魔法の副産物だ。
構造を認識し、構造を分解する。
物体であれば、その構造情報を物体が構成要素へ分解された状態

に書き換え、情報体であれば、その構造それ自体を分解する。
魔法としては最高難度に数え上げられる、構造情報に対する直接干渉。
それを生来の能力として持ってしまったが故に、彼は他の魔法をまともに使えない。
擬似的にしか、仮想的にしか、使えない。
彼の魔法演算領域は、二つの最高難度魔法に占有されてしまっているからだ。
だが今は、多様な魔法は必要ない。
絶対の一、それこそが、必勝の武器。
敵に、手持ちの銃器は無い。
最奥の部屋に足を踏み入れた達也に、銃弾ではなく、不可聴の騒音が浴びせられた。
「ひゃはははははは、どうだい、魔法師？
本物の、キャスト・ジャミングは？」
狂ったように笑う男の手には、真鍮色の輝きを持つアンティナイトのブレスレット。
残り十人の男たちの指にも、同じ色の指輪がはまっている。
アンティナイトは産地が極めて限定された物質だ。
旧アステカ帝国の一部、旧マヤ諸国地域の一部、チベットの中心部、スコットランド高地の一部、イラン高原の一部、など。
高山型古代文明の栄えた地にのみ、アンティナイトは産出する。
まるで、高地でのみ精製された人工物であるかのように。
「パトロンは中華連合か」
動揺が伝わって来た。
心底、つまらないと思う。
彼らは三流もいいところだった。
正直なところ、これ以上付き合いきれない。
「やれ！
魔法が使えない魔法師など、ただのガキだ！」

拳を合わせるのも面倒だったので、達也は右手を上げて、ＣＡＤの引き金を引いた。

射線上の男が、太腿から血を噴き出して倒れた。

前と、後ろの二箇所から。

細い、針で刺したような小さな穴が、神経節を直撃して、大腿部を貫通していた。

次々と引き金を引く達也。

男たちは、肩から、足から、次々と血を噴き出して倒れる。

魔法式で設定した射線上の、肉体を構成する皮膚と筋肉と神経と体液と骨格と、あらゆる細胞物質を、分子レベルに分解して穴を穿っているのだ。

物体の、情報体の、一部分のみを変化させる。

これもまた、現代魔法においては高難度に属する技術だが、能力の極端な限定を代償とした達也の魔法演算力にとっては、造作も無いことだった。

「何故だ！？」

この男がこの台詞を口にするのは、一体何度目だろう？

記憶を辿れば答えが出るが、数え上げるのも、バカバカしかった。

「何故、キャスト・ジャミングの中で魔法が使える！？」

キャスト・ジャミングは、他者の魔法発動を阻害するサイオンのノイズを作り出す、一種の無系統魔法だ。アンティナイトによって作り出されるノイズの構造が、魔法式の作用を妨げる。

達也はその構造を分解し、ノイズをサイオンの細波（さざなみ）に変えた。

キャスト・ジャミングは、他者の魔法式の通路に立ち塞がる障碍物。

その障碍物そのものを、達也の魔法は分解することが出来る。

ただ、それだけのことに過ぎない。

邪眼を使うのだから、この男も魔法師だろうに、そんなことも分からない。

最早、始末することすら、億劫だった。

その時。
男が背にした、壁が切れた。
細かく煌く銀光は、高速振動する鋼の乱反射。
振動魔法、高周波ブレードの、刀身だった。
「ひいぃっ！」
腰を抜かしたか、と思わせる無様な姿で、男が壁から跳び退いた。
男が今まで立っていた場所に、乗り込んできたのは、桐原武明。
どうやら裏口から逆に進んで、ここまで道を、文字通り、切り開いてきたらしい。
「よぉ。コイツらをやったのは、お前か？」
他に答えなどあるはずは無い。
達也が肯定を返す前に、桐原は何度も頷いた。
「やるじゃねえか、司波兄。
それで、こいつは？」
怯えた眼で壁に貼り付く男を、蔑みの目で桐原は指した。
「それが、ブランシュのリーダー、司一です」
「こいつが……？」
変化は、一瞬。
達也ですらたじろぐほどの怒気が、桐原の全身から放射された。
「こいつか！
壬生を誑かしやがったのは！」
「ひいぃぃぃぃ！」
憤怒の表情で詰め寄る桐原に、窮鼠の力を振り絞ったのか、先に数倍するサイオンのノイズが浴びせられる。
本来であれば、桐原の高周波ブレードは、効果を失わなければならなかった。
それほどの強度で、キャスト・ジャミングは発動していた。
だが。
「テメエの所為で、壬生がぁぁ！」
「ぎゃあぁぁぁぁ！」

刃引きされた桐原の刀は、真鍮色の腕輪がはまる司一の右腕を、肘から切り落としていた。
桐原の開けた穴から、克人が姿を見せた。
彼は一瞬、眉を顰めた後、左手のＣＡＤを操作した。
深雪と同じ、携帯端末形態の汎用型ＣＡＤ。
五感で知覚できるタイムラグは無かった。
肉の焼ける臭いと共に、出血が止まり、絶叫も止まった。
司一は、泡を吹き、失禁して、失神していた。

1－（26）　エピローグ（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

1―（26）　エピローグ

事件の後始末は、克人が引き受けてくれた。
達也たちの行為は、良くて過剰防衛、悪くすれば傷害・及び殺人未遂・プラス魔法の無免許使用だが、司直の手が彼らに伸びることはなかった。
十師族の権勢は、司法当局を凌駕する。
現代魔法の才能が先天的素質に左右されることが分かってしまえば、当然の帰結として、血縁による強化が企図される。
それは、魔法を体系的に研究するだけの国力のある国なら、世界中どの国でも、現代魔法と超能力がまだまだ未分化であった時代から既に、行われていた。
無論、この国でも実行された。
その結果、この国の魔法界に君臨する新たな一団が形成された。
それが、十師族。
一世紀に満たぬ歴史では、その序列はまだまだ流動的だ。
だがそれは、十師族と呼ばれる家系の中での話であり、十師族とそれ以外の人々の間には、既に乗り越えがたい垣根が出来上がっていた。
十師族と同様に血縁による強化を重ね、十師族に次ぐ、と見なされている百家も、その格の差を自ら認めざるを得ないほどに。
十師族は、決して政治の表舞台には立たない。
表の権力者には成らない。
寧ろ、兵士として、警官として、行政官として、その魔法の力を使い最前線でこの国を支えている。
その代わり――表の権力を放棄した代わりに、政治の裏側で不可侵に等しい権勢を手にした。
それがこの国の、現代の魔法遣いが選んだ道だった。
現在、十師族の中で最も有力とされているのが、四葉と七草の両

家。

それに続く三番手が、十文字。

十文字家の総領が関わる事件に、普通の警察が、関与できるはずもないのだった。

事件の後、遥は長期の、出張扱いとなっている。

扱い、というのは、それが事実から乖離した名目だからだ。

あの時のレオの質問に対する回答は、未だに、本人の口からは語られていない。

交代のカウンセラーが着任していないところを見ると、一応、戻ってくる予定ではあるようだが。

後始末といえば、達也が「分解」の応用で切断した図書館特別閲覧室の扉は、ブランシュの工作員によって破壊されたことになっている。

その方が学校側としても、鍵管理の不始末を追求されなくて済むからだ。――もっとも学校には、達也が自分で複合装甲の扉を切り離した、などとは申告していないので、半分以上、本気で信じている向きがあったが。

学校側が行った工作は、生徒に鍵を盗まれた事実の隠蔽だった。

そもそも、あの場に第一高校の生徒がいたという、事実自体が無くなった。

紗耶香のスパイ未遂も、大人の事情により、最初から無かったことになった。

紗耶香はしばらく入院することになった。

右腕の亀裂骨折は入院するほどの怪我ではなかったが、ブランシュのリーダーが光波振動系魔法・邪眼の使い手であることが判明した為、マインドコントロールの影響が残っていないかどうか、様子を見ることになったのである。

入院中、達也は一度お見舞いに行っただけだが、エリカは頻繁に足を運んでおり、すっかり親しくなった様子である。

達也の特殊な魔法の才能は、あのとき廃工場へ同行した戦友以外には、まだ、知られていない。

真由美や摩利にも知られていない。

友人である美月や、ほのかや、雫も知らない。

正確には、レオにもエリカにも、肝心な部分は知られていない。

克人が何を考えて桐原にも口止めしてくれたのかは分からないが、達也にとってはありがたいことだった。

彼の、あの魔法は、彼の思い描く進路には、ほとんど役に立たないものだったから。

もっとも、真由美と摩利は、薄々何かを勘付いているようではあった。

深雪はあれから一週間ほど落ち込んでいた。

表面上は相変わらず完璧な美少女だったが、ふとした弾みに両手で顔を覆っている姿が見られた。

――自宅内、限定で。

流石に「ニブルヘイム」は遣り過ぎだったと思っているらしい。

幸い、減速率が高過ぎてコールドスリープ状態になっていた為、肉体に回復不能の欠損を負った者はいなかったようだが。

そんなときは、達也がいくらでも深雪を甘えさせたので、かえって、落ち込みモードから脱却するのが遅れるような、笑えない状況も生じていた。

学校での達也は相変わらず、風紀委員会と生徒会の諸雑事に振り回されていたが、ようやく入学時に思い描いていたような、静かな修学環境も手に入れつつあった。

◇◆◇◆◇◆◇

そして、五月になった。
今日は、紗耶香の退院の日。
達也も深雪と一緒に、お祝いに病院を訪れた。
そこには……
「あれは、桐原先輩ではありませんか？」
深雪に言われるまでもなく、達也は気づいていた。
紗耶香は既に、入院着から普段着に着替え、エントランスホールで家族や看護師に囲まれている。
その輪の中で、紗耶香の隣で談笑に加わっている桐原の顔は、何処か照れ臭げであり、また、少しばかり浮かれ気味のようにも見えた。
「随分親しげですね？」
一連の騒動の、謂わば発端となった「剣道部乱入事件」の顛末は、深雪も当然知っている。
その当事者である紗耶香と桐原があそこまで親しげにしている光景は、確かに一寸、不思議な感じがした。
「桐原先輩、毎日来てたんだって」
「へぇ、それはまた」
何の前触れもなく掛けられた声に振り向いてみると、エリカがつまらなさそうな顔で立っていた。
「ちぇっ、やっぱり、驚かすのは無理かぁ」
「いや、驚いたぞ。
桐原先輩がそんなにマメな性格だったとは」
「そっちじゃない！」
無論、達也も分かった上で話を逸らしているので、膨れっ面のエリカに、ただ誤魔化し笑いを浮かべるだけだった。
「フンだ。そんな風に性格悪いコトばかりやってるから、さーやにもフられちゃうのよ」

ふられた云々については、達也はそれほど気にならなかった。
自慢ではないが、女性にモテた経験はゼロだ。
それより――
「エリカ……『さーや』ってもしかして、壬生先輩のことなの……？」
問い掛けの声は、深雪の方が一足、早かった。
「んっ？　そうだよ」
「……随分親しくなったんだな」
「任せて」
何を？　と喉元まで出掛かったが、混沌がどんどん深まって行きそうだったので、未発のまま、呑み込むことにした。
それより今日は、退院のお見舞いに来たのだ。
「壬生先輩」
後ろに深雪とエリカを引き連れて――エリカが大人しくついてくるかどうか、少し不安だったのだが、流石に杞憂だった――達也は人の輪の中へ、声を掛けた。
「司波君！　来てくれたの！？」
少し、吃驚した顔で、ちょっと意外だと、表情で語りながら、驚きもまた喜びの中に溶かし込んで、紗耶香は満面の笑みで達也を迎えた。
――隣で桐原が、一瞬、ムッとした表情を浮かべたのも、きっとご愛敬、それもまた平和な日常を演出するスパイスなのだろう。
「退院おめでとうございます」
深雪が両手に抱えていた花束を渡す。
最初達也は、現代の風習にならい、デリバリーにしようとしていたのだが、こういうものは自分の手で持っていくことに意味があるのです！　と珍しく強固に反対した深雪の剣幕に押されて、持参することにしたのである。
花束を抱えた深雪は、余りにも似合いすぎていて逆に、都会の日常風景から浮いてしまっていたが、嬉しそうに受け取る紗耶香の笑

顔を見ていると、妹の言うとおりにしておいて良かった、と達也は思うのだった。

「……君が司波君かね」

女子高校生同士のお喋りから一歩引いたところで、相槌役に徹していた達也に、壮年の男性が声を掛けてきた。

苗字だけで呼び掛けられても、視線で、誤解の余地はない。

引き締まった身体とブレのない姿勢は、武道の賜だろうか。

顔立ちも、紗耶香との血縁を感じさせるものだった。

「私は壬生勇三、紗耶香の父親だ」

「初めまして、司波達也です」

「妹の司波深雪です。初めまして」

達也が挨拶を交わしていたのに目敏く気づいた深雪が、達也の後ろで丁寧に一礼する。

その優雅な挙措に少したじろいだ様を見せたが、すぐに表情を引き締めたところは流石に武道家と言うべきか。

紗耶香の剣は、きっと、この父親譲りなのだろう。

「深雪、エリカを見ていてくれないか」

達也に言われ振り返ると、桐原がエリカのトークに追い詰められているところだった。

「はい。

小父様、失礼いたします」

深雪の「小父様」という人称に、紗耶香の父親は動揺を隠しきれぬ様子だったが、何とか無難に返事を返した。

もちろん、達也も深雪も、気づかないふりをした。

改めて、達也は紗耶香の父親と向き合った。

紗耶香の父親も、深雪を外させたのが達也の気配りであることは理解していたので、余計な前置きで時間を浪費するような真似はしなかった。

「司波君、君には感謝している。

娘が立ち直れたのは、君のお陰だ」

「自分は何もしていません。
壬生先輩を説得したのは妹と千葉です。
入院中に先輩の力になったのは、千葉と桐原先輩です。
冷たく突き放しただけの自分は、恨まれこそすれ、感謝されるに値しません」
「それを言うなら、私は突き放すことすら出来なかった。
忙しさを口実にして、おかしな連中とつきあい始めた娘と向き合おうともしなかった駄目な父親だ。
……今回のことは、一通り娘から聞いたよ。
娘は、君の話を聞いて、久しぶりに迷うことを思い出した、と言っていた。
それが、悪夢から醒める、きっかけになったと。
そして娘は君に感謝していたよ。
無駄ではなかった、と言ってもらえて、救われたと。
それが何を意味しているのか、私には分からなかったが、娘の感謝が本物であることは分かった。
だから、言わせて欲しい。
ありがとう」
「……本当に、感謝されるようなことは何も」
困惑気味に、微かに首を振った達也に、紗耶香の父親は小さく笑った。
「……君は風間に聞いていたとおりの男なのだな」
その台詞は、達也の冷静さを奪うには十分なものだった。
「……風間少佐をご存じなのですか？」
「私は既に退役した身だが、兵舎で起居を共にした戦友だよ。
歳も同じでね。未だに親しくさせてもらっている」
ただ「親しい」だけでないことは、今までの言葉で分かる。
分かってしまう。
単なる友人に――それが親友であっても――風間が達也のことを他人に話すはずがないからだ。

「私は、紗耶香が君と知り合いに成れたことは、天の配剤だったと思っている。感謝しても感謝しきれないと思っているのだよ。できればこれからも、君のような男に紗耶香を支えてもらいたかったのだが……」

「……自分は、誰かの支えになれるような人間ではありませんよ」

「……そういうことにしておこうか。

今のは、他愛もない親バカな願望だと、忘れてやってくれ。

それと、風間から聞いたことは誰にも、無論、娘にも、他言しないから安心して欲しい。

私はただ、君が娘を救うことの出来る人間で、実際に救ってくれたのだということを知っていると、君に伝えたかっただけだ。

本当に、ありがとう」

そう言って、返事を待たず――これ以上の卑下を達也に言わせず――紗耶香の父親は、妻のところへ戻っていった。

頭を小さく振って小さくなかった動揺を意識外へ追い出し、達也も妹たちの所へ戻った。

「あっ、司波君。お父さんと何を話していたの？」

すぐさま、渡りに船あるいは溺れる者の藁という感じで、紗耶香が話し掛けてきた。

どうやら深雪一人では、エリカを抑えきれなかったようだ。

「俺が昔お世話になった人が、お父上の親しいご友人だった、という話をしていたんですよ」

「へえ、そうなの」

「ええ、世間は狭いですね」

「達也くんとさーやって、やっぱり深い縁があるのね」

そこへすかさず絡んでくるエリカ。

どうやら今日の彼女は絶好調らしい。

「ねえ、さーや。どうして達也くんから桐原先輩に乗り換えちゃったの？

達也くんのこと、好きだったんでしょ？」

「チョ、チョッとエリちゃん！？」
慌てふためく紗耶香を見ながら、達也は少し違うことを考えていた。
（エリちゃん、ねぇ……）
この二人、余程気が合うのだろう、と達也は思った。――他人事のように。
「エリカ、貴女今日は、少し調子に乗り過ぎよ」
深雪が窘めても、馬耳東風と聞き流している。
絶好調を突き抜けている好調ぶりだ。
「ルックスだけなら、達也くんの方が上だと思うんだけどな」
「……つくづく失礼な女だな、お前」
「ドンマイ。桐原先輩、男は顔じゃないよ」
「……マジに泣かしたろか、コイツ」
「まあまあ。
それで、さーや、やっぱり決め手は、まめまめしさ？
不器用な男の優しさって、グッと来るよね？」
紗耶香の顔は、耳まで赤くなっていた。
何とか目を逸らそうとするが、その度にエリカが素早く回り込んでくる――多分、魔法まで使って――ので、ついには泣きそうな顔で俯いてしまった。
「エリカ、そろそろ――」
いい加減、頃合いだろう。
そう思った達也が、実力行使込みで止めに入ろうとしたとき、
「うん……多分、エリちゃんの言うとおり」
か細い声で、紗耶香が告白し始めて、しまった。
動揺が極に達して、精神の防壁が壊れてしまったようだ。
「あたし、司波君に恋してたんだと思う……」
「おおぅっ！？」
紗耶香の告白に、一番目を白黒させていたのは何故か、エリカだった。

「あたしが憧れた、揺るぐことのない強さを持っているから。
でも、憧れると同時に、怖かったんだと思う」
深雪の向ける気遣いの眼差しに、達也は微かな苦笑いで応えた。
どうもこの妹は、彼のことを繊細な神経の持ち主だと思い込んでいるらしかった。
「あたしがどんなに一所懸命走っても、司波君にはきっと、追いつけない。
司波君みたいになるには、あたしはずっと走り続けなくちゃいけなくて、多分、どんなに走っても、あんな風に強くはなれない……
いっぱい力になってもらった司波君には失礼な言い方だと思うけど、そう思ったわ」
「……分かる気がするよ。達也くんには確かに、そんな風に思わせる所、あるね」
「桐原君は……まともに会話したのは、お見舞いに来てくれた時が初めてだったけど、多分この人なら、喧嘩しながらも同じ速さで歩いてくれると思った。
だからかな……」
「……ごちそうさま」
おちゃらけた言い方には賛同しかねるが、心情的には、達也もエリカに同感だった。
その時の紗耶香は、達也の前で演じていた「可愛らしい女の子」ではなく、本当に「可愛い女の子」だった。
「ねえ、桐原先輩は？
いつからさーやのこと、好きだったの？」
「……うるせー女だな。別に良いだろ、そんなこと。
お前にゃ関係ねえ」
「そうだぞ、エリカ。
いつからなんて、関係はない」
それまで口を挟もうとしなかった達也が、突如教訓じみたことを、何処か人の悪い口調で言い出したので、エリカが頭上に疑問符を浮

かべて振り向いた。
「大切なのは、桐原先輩が本気で壬生先輩に惚れているということだ」
「なっ！　おまっ！？」
「へぇ……」
「詳しいことは、プライバシーにも関わってくるから言えないが……ブランシュのリーダーを前にした桐原先輩の勇姿には、男として敵わないと思ったな」
「そっか……
ねえ、達也くん」
「なんだ？」
「後でコッソリ教えてね」
「千葉、テメエ！
司波も、喋りやがったら承知しねえぞ！」
「喋りませんよ」
「えーっ、いいじゃない」
「この女(あま)ぁ！」
猛り狂う桐原ときゃあきゃあ言って逃げ回る真似をするエリカを、紗耶香の両親も、看護師も、紗耶香本人も、暖かい眼差しで笑って見ている。
そのうち本当に追いかけっこを始めてしまった二人を暖かい――と言うより生暖かい目で見ていた達也の横に、深雪がそっと、並んだ。
「お兄様」
「うん？」
達也はエリカたちに視線を固定したまま、短く応えた。
「深雪は、いつまでも、お兄様について行きますから。
仮令お兄様が、音の速さで駆け抜けて行かれても。
空を突き抜け、星々の高みへ翔け昇られても」
「……置いて行かれるのは、どちらかと言えば俺の方だと思うんだ

がな」

兄妹は、どちらからともなく、小さく、笑い合った。

〔第一章　完〕

2－（1）　試験の後で（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

2－（1）　試験の後で

七月。

三学期制を採用している国立魔法大学付属の各高校は、定期試験が終ると一気に、夏の九校対抗戦準備に雪崩れ込む。

ここ第一高校でも、例外ではない。

「達也」

「レオ……どうしたんだ、皆揃って」

達也が指導室を出ると、そこにはレオ、エリカ、美月が顔を揃えていた。

深雪は九校戦の準備で、どうしても先に生徒会室へ行かなければならない、という事情で、ここにはいない。

その代わり、とでも言うように、ほのかと雫まで心配そうな顔を並べていた。

指導室は教職員用フロアにあり、生徒が使う教室は同じ棟の同じ階にはない。

だが、生徒が全く通らないという訳でもない。

通りかかった同級生も上級生も、達也とその前に並ぶ五人を、こっそり、あるいはジロジロ、あるいはさり気なく、見て行く。

それも、無理がないことだった。

彼らは目立っていた。

今ばかりでなく、今日ばかりでなく、いつも。

二科生でありながら風紀委員に選ばれ、新入部員勧誘週間の、数々の武勇伝でその抜擢が伊達でなかったことを示した達也は、全校的な有名人になった。その直後、テロ組織を潰したことは、秘密にされていながらも、尚。

エリカは、十人が十人とも認めるだろう、陽性の美少女。

美月も、普段は深雪とエリカの二人に挟まれている為か地味なイ

メージを持たれているが、顔立ち自体は大人しげな癒し系美少女で、主に上級生の間で密かな人気を集めていたりする。

レオはエリカにこそボロカスに貶されているが（もっとも、ほぼ百パーセント「憎まれ口」の類いだ）、ゲルマン的な彫りの深い顔立ちと卓越した運動神経で、女子生徒の間では「ちょっと気になる男の子」の地位を確立している。（レオの言う「純日本風」は黒髪黒目のことらしい）

それに加えてほのかと雫は、一年一科生の中でも特に成績優秀な二人。容姿も十分、可愛いと評される範疇だ。（結局、容姿の面では達也が一番平凡ということになる）

これだけのメンバーが、一科、二科の枠を超えて連んでいれば、嫌でも目立つ。

それでも今は、主席入学、今年度新入生総代、生徒会役員の肩書に加えて、稀代の美少女である深雪がいない為か、視線の纏わり付き具合がいつもに比べて、まだ、大人しい。

もっとも、そんな視線を気にも留めない人間も、割りと身近にいるものだが。

例えば、この男のように。

「どうした、ってのはこっちのセリフだぜ。

指導室に呼ばれるなんて、一体どうしたんだよ？」

レオの答えに、達也はなるほど、と思った。

どうやらこの友人たちは、自分を心配して集まってくれたらしい。

一瞬、適当に誤魔化そうか、という考えが達也の意識を過ったが、それでは彼女たちに不誠実だろう、と考え直した。

「実技試験のことで尋問を受けていた」

「……尋問とは穏やかじゃねえな。

何を訊かれたんだ？」

「要約すると、手を抜いているんじゃないか、って疑われていたようだな」

達也の答えに、まずエリカが憤慨を見せた。

「何それ？　そんなことしたって、達也くんには何のメリットも無いじゃない。
バッカみたい」
全くエリカの言う通りなので、達也はただ、苦笑で応えた。
点数を上げる為の不正ならともかく、わざと悪い点数を取ることに何の意味があるというのか。
「でも、先生がそう思いたくなる気持ちも、分かる気がする」
「どうしてですか？」
雫の呟きに、美月が小首を傾げた。
「それだけ達也さんの成績が、衝撃的だったということですよ」
ほのかの答えに、表情の選択に窮した達也は、もう一度苦笑いを浮かべた。
第一高校の、というより魔法科高校の定期試験は魔法理論の記述式テストと魔法の実技テストにより行われる。
語学や数学、科学、社会学等の一般教科は、普段の提出課題によって評価される。
魔法師を育成する為の高等教育機関なのだから、魔法以外で生徒を競わせるのは余計なことだ、と考えられているのだ。（達也たちは魔法師と魔工師を区別しているが、それは彼らの進路がこの二つで明確に区分されるからであって、社会の一般的な分類では、魔工師は魔法師の一種であり、魔法を使えない魔法工学技術者のことを魔工師とは呼ばない）
記述式テストが行われる魔法理論は、必修である基礎魔法学と魔法工学、選択科目の魔法幾何学・魔法言語学・魔法薬学・魔法構造学の内から二科目、魔法史学・魔法系統学の内から一科目、合計五科目。
魔法実技は処理能力（魔法式を構築する速度）を見るもの、キャパシティ（構築し得る魔法式の規模）を見るもの、干渉力（魔法式がエイドスを書き換える強さ）を見るもの、この三つを合わせた総合的な魔法力を見るものの四種類。

成績優秀者は、学内ネットで氏名を公表される。
一年生の成績も、無論、公表済みだ。
理論・実技を合算した総合点による上位者は、順当な結果となった。
一位が深雪。
二位がほのか。
雫は五位。
馴染みのある名前では他に、森崎が九位。
氏名公表の対象となる上位二十名、全て一科生だ。
実技のみの点数でも、総合順位から多少順位の変動が見られるが、やはりランクインしているのは一科生のみ。
ちなみに順位は、一位が深雪、二位が雫、三位が森崎、四位がほのかと、A組が上位を独占する形となり、教師陣を少しばかり悩ませているとか。
だがこれが理論のみの点数になると、大番狂わせの様相を呈してしまう。
一位、司波達也。
二位、司波深雪。
三位、吉田幹比古。
四位がほのか、八位に雫、九位に美月、十七位にエリカ、レオと森崎はランク外。
確かに一科生と二科生の区分けには実技の成績が大きな比重を占めているが、普通は実技が出来なければ理論も十分理解出来ない。
感覚的に分からなければ、理論的にも理解できない概念が多数存在するからだ。
それなのに、トップスリーの内、二人が二科生。
これだけでも前代未聞なのだが、更に達也の場合、平均点で――合計点ではなく――二位以下を十点以上引き離した、ダントツの一位だったのだ。
「いくら理論と実技は別だといっても、限度がある」

「でも、達也さんが手抜きなんて、考えられません」
客観的な評価をして見せた雫に、美月が少しむきになって反論すると、
「そんなことは雫にも分かっていますよ」
「でも先生はあたしたちみたいに、達也くんの人となりを直接知ってるって訳じゃないしね」
ほのかとエリカが二人掛かりで宥めに入った。
「そうだな。向こうは端末越しにしか俺たちのことを知らない訳だし……」
レオの言う通り、これは現代式教育の大きな欠陥の一つと言えるだろう。
もっとも、前世紀風に同じ教室で教鞭を取っていても、生徒の内面が理解できるとは限らないが。
それに現代の学校では、こうした問題に対処する為、前世紀の担任制度に代わるポストが設けられている。
「……そうだなぁ、遥ちゃんに相談してみたらどうだ？」
学校に対する不満、学校とのトラブルの相談も、カウンセラーの職務とされている。
「遥ちゃん」という呼称の是非はともかく、提案自体は妥当なものだったが、達也は首を横に振った。
「小野先生とは、昨日既に話しているんだ。
実は、今日の呼び出しのことも概要は聞いていた」
「当てにならないセンセイね」
「まあそう言うな。
もとより新米カウンセラーに、そう大した権限があるはずもない」
歯に衣着せぬエリカの物言いを、達也は笑ってたしなめる。
「……達也くんの方がよっぽど酷いこと言ってるんですけど」
だが確かにエリカの指摘する通り、達也の方が余程遠慮の無い言い種と言える。
「おおぅ！？」

その的確なツッコミに、レオが奇声をあげた。
「……なによ」
半眼で問い返すエリカ。
「この女がまともなことを言ってるぜ」
目を丸くして、独り言のように呟くレオ。
「黙りなさい」
エリカが、硬く丸めたノートを振り下ろした。
ちなみに、情報システムがこれだけ発達した現代においても、紙のノートの需要は無くなっていない。特に魔法科学校では、字を書くこと自体に重要な意味がある魔法言語学や、情報端末より手で書く方が容易な図形を扱う魔法幾何学のような授業があるので、ノートを持ち歩く生徒は普通科学校に比べ多いと言える。
「ってぇ……！」
そして、頭を抑え、蹲るレオ。
こういうシーンで、彼が余計な一言を口にして痛い目に会うのは、いつものことだった。
「……この暴力女、オレの頭は太鼓じゃねぞ！」
レオの真っ当な抗議を、エリカはそっぽを向くことで聞き流す。
三ヶ月も同じようなイベントが繰り返されれば流石に慣れるのか、当初はオロオロするばかりだった美月も、困惑気味な笑みを浮かべながら、二人のコミュニケーションに余計な口出しをすることなく、脱線していた場の流れを元に戻すことで、それ以上のエスカレーションを未然に防いだ。
「それで達也さん、先生の誤解は解けたんですか？」
「ああ、まあ、一応ね」
「一応？」
美月の示した短い疑問の声に、達也は気が進まない風な表情と口調で説明を付け加えた。
「手抜きじゃないと理解はしてもらえたよ。
その代わり、転校を勧められたが」

「転校！？」
「そんな、何故です！？」
血相を変えて叫んだのは美月とほのかだが、他の三人も似たような顔をしていた。
「第四高校は九校の中でも特に魔法工学に力を入れているから、俺には向いているんじゃないか、ってね。
もちろん断ったが」
ホッと胸を撫で下ろした二人と、憤慨を顕にする二人。
前者が美月とほのか、後者がレオとエリカ。
尚、残る一人は内面の窺い知れぬポーカーフェイスを維持していた。
「……実技が苦手だから、実技が出来なくても良い学校に行けってのは、学校として自己否定じゃねえのか？
成績が悪くてついて行けない、ってんならまだしも、達也は実技でも合格点はクリアしてるじゃねえか」
「目障りなんでしょ。
下手すりゃ、センセイたちより達也くんの方が魔法について良く知ってるから」
「少し落ち着けよ、二人とも」
放っておくと何処までも燃え上がってしまいそうな勢いだったので、達也は消火活動に着手した。
「レオの言う通り、例え赤点ギリギリであっても落第しなきゃ強制もされないんだから実害は無いって。
もしかしたら、本当に善意だったのかも知れないしな。
まっ、だとしたら、随分と無神経な善意ではあるが。独善というヤツだ」
達也がサラリとした口調で綴った辛辣な評価に、義憤に燃えていたはずの二人がたじろぐ。狙い通りの冷却効果ならば中々に深謀と言えるだろうが、残念ながら今回は結果的に、という色合いが濃かった。

「でも、そもそもの前提が間違ってる時点で教師としてダメだと思う」

独特の平板な口調で雫がフォローともそうでないともつかぬセリフを口にする。そのお陰で達也の吐き出した毒が薄れたのだから、これまた結果的に、ではあるが、フォローなのだろう、これは。

「四高は実技を軽視している訳じゃない。九校戦の成績に反映するような戦闘向きの魔法より、技術的な意義の高い複雑で工程の多い魔法を重視してるだけ」

「そうなんですか？

雫さん、よく知ってますね」

「従兄が四高に通ってるから」

なるほど、それならば確実な情報だろう。

一同は雫の言葉に頷くと同時に、達也を呼び出した教師に対する不信感を募らせた。

が、いつまでも、この場にいない他人のことに、若い彼らの興味が留まり続けるはずもない。

「そう言や、もうすぐ九校戦の時期じゃね？」

雫の台詞に連想が働いたのであろうレオの言葉に、達也が頷きを返した。

「深雪がぼやいていたよ。

作業車とか工具とかユニフォームとか、準備する物が多いって」

「深雪さん、ご自身も出場されるんでしょう？

大変ですよね」

「深雪なら新人戦なんて楽勝っぽいけどね。

寧ろ準備の方が大変そう」

「油断はできない。今年は三高に一条の御曹司が入ったらしいから」

「へぇ……」

「一条って、十師族の一条か？」

「そりゃ、強敵かも。

それにしても雫、随分詳しいのね？」

エリカの問いかけに、雫が少し、照れた様に見えた。
――相変わらず表情の変化が乏しくて、がさつな（？）達也やレオの目には分かり難かったが。
「雫はモノリス・コードのフリークなのよ。
だから九校戦も毎回見に行ってるのよね？」
「……うん、まあ」
「なるほど。
確かに、モノリス・コードの試合は全日本選手権と魔法科大学の国際親善試合以外では、九校戦以外にやってないからな」
九校戦は魔法大学付属高校間の、謂わば身内の交流試合だが、外部にも公開されている。
九校戦は、魔法競技を目にすることができる数少ない舞台だからだ。
魔法科高校各校の定員は、第一から第三高校が各二百名、第四から第九高校の六校が各百名、合計千二百名。
それに対して国内の十五歳男女の内、実用レベルの魔法力を持つ者の合計人数は、毎年千二百から千五百名程度だ。
つまり、魔法の才能を持つ少年少女で魔法師・魔工師になろうとする者は、ほぼ百パーセント九校の何処かに入学する。
高校の魔法競技は、剣術や拳法といった一部の競技を除き、九校の独占状態にある。
魔法競技に対する関心を高め、理解を深め、ひいては魔法そのものに対する社会の認識を深めるために、九校戦は数少ないアピールの場となっているのであった。
「今年も強敵は三高かな？」
「多分」
得意分野と分かって、エリカが水を向けると、雫は簡潔に、だが何処と無く嬉しそうに、頷いた。
「今年は見る側じゃなくて、競う側ですね」
雫は実技の学年二位だ。

新人戦メンバーの正式発表はまだ行われていないが、深雪と同様、雫が選ばれるのはほぼ確実と言える。

「うん……」

控え目に頷いた顔には、やる気が芽を出していた。

◇◆◇◆◇◆◇

試験が終了してから、達也はほぼ毎日、放課後を風紀委員会本部で過ごしていた。

夏休みが終わればすぐ、生徒会選挙。

新しい会長が決まれば、新たに選任された風紀委員の互選により新しい風紀委員長も決まる。

伝統的に、と言っても悪しき伝統だが、風紀委員長の引き継ぎがまともに行われた試しはない。

ほとんど整理されていない活動記録と共に丸投げ――大体がこのパターン。

それでも摩利は一年の頃から委員として活動していたので、引き継ぎ無しでもそれほど困らなかったが、彼女が次期委員長にと目をつけている二年生は風紀委員会の経験が無いので、出来るだけ困らないような引き継ぎをしてやりたいと考えていた。

――その為の資料作りを、達也に丸投げして。

「……何だか自分がとんだお人好しに思えてきましたよ……」

「極悪人でお人好しか。中々に興味深い二面性だ」

「……」

余りにも的確なツッコミなので、達也にも返す言葉が見当たらなかった。

「しかし今回は、君の中のお人好しな人格に感謝だな。

君が手伝ってくれなければ、またいつもの轍を踏むところだ」

黙々と作業を続ける姿に、流石に罪悪感を覚えたのか、フォローを入れる摩利。

だが、達也は多重人格ではないし、手伝っているのではなく一人で資料を作っているのだ。
フォローになって、いなかった。
「しかし、随分前もって準備するんですね」
手を動かしながら、何気なく浮かんだ疑問を達也は口にした。
彼の作成している引継資料は、あと一週間足らずで完成する。
この後、より詳細な資料を作成するというのでなければ、三ヶ月近い猶予がある。
その間、更に引き継ぎを要するような大きな案件が発生しないとも限らない。
この手の資料は、早ければ早いほど良いというものでもないのだ。
「九校戦の準備が本格化すれば、資料作りの時間なんて取れなくなるからな。
メンバーが固まったら出場競技の練習も始まるし、道具の手配、情報の収集、分析、作戦立案、やることは山積みだ」
事情を聞いてみれば、達也には余り関係の無さそうな都合だった。
「……九校戦は何時から開催されるんでしたっけ？」
とはいえ、ここでこの話題を止めてしまうのも唐突な感があり、意識のウェイトをほとんど資料作りに戻しながら、達也は惰性で尋ねた。
「八月三日から十二日までの十日間だ」
「結構長丁場ですね」
「んっ？　観戦に行ったことはないのか？」
「ええ、夏休みは毎年野暮用で忙しかったものですから」
達也の答に、摩利は益々大きく首を傾げた。
「……真由美に聞いた話では、妹さんは毎年観戦に行ってて、あたしたちの出た試合も覚えているそうだが……？」
達也は危うく噴き出しそうになった。
「いえ、俺たちも一年三百六十五日行動を共にしている訳じゃないんで……たまには別行動くらいとりますよ」

「ふむ？　……いや、それもそうか。
君たちを見ていると、どうも、片時も離れることは無いんじゃないか、という気がしてくるんだが」
「そもそも学校でもほとんどの時間、別行動です」
客観的事実を提示されて、要領を得ない表情ながらも摩利は取り敢えず納得したようだった。
「ならば九校戦の準備と言われても、ピンと来ないのは仕方が無いか」
「ええ、実を言えばどんな競技が行われるのかも知りません。
モノリス・コードとミラージ・バットくらいは知っていますが」
資料を作成しながらのお喋りではあるが、達也にとってはこの程度の思考分割は眠気覚ましのようなものだし、することもなく、と言うより何もさせてもらえずにいた摩利には格好の暇潰しだったので、必要以上に舌が滑らかになっていた。
「あの二つは有名だからな……
九校戦はスポーツ系魔法競技の中でも、魔法力の比重が高い種目で競われる」
「それは知ってます」
手を止めずに、達也は相槌を打った。
「以前は毎年種目を変更していたらしいんだが、今では毎年同じ競技が採用されている。
モノリス・コード、ミラージ・バット、氷柱倒し（アイスピラーズ・ブレイク）、スピード・シューティング、アクセル・ボール、バトル・ボードの六種目だ。
剣術やマーシャル・マジック・アーツのような格闘技系の競技、レッグ・ボールやハイポスト・バスケットのような球技は別に大会が開催される」
「アクセル・ボールやバトル・ボードは身体能力が結構重要になってくると思いますが？」
「まあな。

魔法師も人間だ。身体能力を軽視して良い道理はない。
魔法師同士、一対一の決闘でも、最後にものを言うのは身体能力、というケースも決して例外じゃない。
あたしが改めて講釈するまでも無いだろうが」
「それはそうですね」
思い当たる節が少なくない達也は、摩利の言葉に深く頷いた。
「六種目の内、モノリス・コードだけが団体戦、残り五種目は個人戦で行われる」
「アクセル・ボールはダブルスじゃないんですか？」
「そこが九校戦のいやらしいところさ。
魔法力の比重が高くなるよう、競技に独自ルールが設けられているんだ。
ルールを要約したパンフレットがあるんだが、見るかい？」
「ええ、後ほど」
達也はキーボードを叩く手を止めて、摩利から薄い冊子を受け取った。
「印刷物なんて珍しいですね」
「九校戦絡みでは珍しくないぞ。
仮想型端末は魔法力を損なうという考え方は根強い。
その一方で、魔法師以外にスクリーン型の端末を使用する者は、今では少数派だ。
魔法師の中にも、仮想型の利用者が増えてきている」
「なるほど。だから九校戦では、情報端末そのものを使う必要の無い紙の印刷物を使っているということですか」
「おや？　達也くんは仮想型容認派なのかな？」
達也の声に、批判的な成分を聞き分けたのだろうか。
普段の濶達な言行と整理整頓が苦手という微笑ましい（？）短所につい誤魔化されてしまいそうになるが、彼女は非常に鋭い感性の持ち主だ。
そのことを改めて思い出しながら、達也は慎重に――但し、手は

止めずに――言葉を選んだ。
「仮想型端末が未熟な魔法師に悪影響を及ぼすという主張は、根拠の無いものではありません。
特に十代の、能力が発展途上の内は、仮想型の使用を避けるべきだと俺も思っていますよ。
ですが既に魔法力が固まった成人の魔法師に仮想型を禁止する理由は無いと思います」
「……それも一つの考え方だな。
子供に有害だからといって、大人にまで利便性を放棄しろというのは、確かに行き過ぎかも知れん」
しばらく話し声が途絶えた。
自分が打ち込んでいるディスプレイの文字を追いかけている達也には、摩利がどんな表情で何をしているのか分からないが、おそらく彼に示唆されたことについて考え込んでいるのだろう。
普段どんなに破天荒を装ってみたところで、根っこの部分で真面目な生来の気質は隠し切れていない。
それが何だか、達也には微笑ましかった。
「……話が逸れてしまったな」
何かしら自分の中で結論が出たようで、摩利は前触れも前置きもなく、話題を九校戦に戻した。
「選手は本戦、新人戦、男女各十名ずつの合計四十名になる。
新人戦は一年生のみで、本戦は学年制限無し。とは言っても、一人の選手が出場できる競技は二種目までと決められているから、本戦に一年生が出ることはない。
新人戦には去年まで男女の区別が無かったんだが、今年から本戦と同じく、男女別で行われる。
去年までなら一年生女子が種目を掛け持ちすることは無かったんだが、今年はそうも行かないだろうね」
摩利が深雪を念頭に置いて喋っているのは、固有名詞を聞かなくても明らかだった。

女子の体力で魔法競技の連戦は厳しいものがある。
いくら普通より鍛えていると言っても、元が華奢な体つきだ。出来る限りフォローしてやらねば、と達也は思った。
「六種目の内、四種目は男女共通。
モノリス・コードは男子のみ、ミラージ・バットは女子のみになっている。
モノリス・コードは唯一、直接戦闘が想定される種目だからね。男子のみというのも理解できない訳じゃない」
そう言いながら、摩利の顔にはありありと「面白くない」と書かれていた。
風紀委員会で聞いた話では、摩利の魔法は対人戦闘向きとのことなので、出場できないのが本音では不服なのだろう。
「つまり、本戦、新人戦とも、男女各五人が五種目のうち二種目を選び、残りの五人が一種目に絞って出場する訳だ。
誰をどの種目に出場させるか、力の有る選手の出場種目を一つに集中させて確実に勝ちを狙うか、掛け持ちさせてポイントを稼ぐか、敵のエースは何処に出てきてこちらは誰を当てるか……
チーム戦だから、そういう作戦も重要になってくる」
「なるほど」
「それで九校戦では、選手とは別に四人まで作戦スタッフが認められている。
もっとも、どの学校でも作戦チームを編成するという訳じゃない。うちは毎回枠一杯を連れていくが、例えば三高は毎年作戦チームを連れて来ない。あそこは、選手が全部自分で考えて取り仕切っている」
「それで毎回当校と優勝を争っているんですか。
面白いものですね」
「あそこに負けたのは、三年前と七年前の二回だけどな。
九校戦が今の形式で夏の定例行事になったのが十年前。
これまでの九回で、優勝はうちが五回、三校が二回、二校と九校

が一回ずつだ」
「今年は三連覇がかかってるんでしたっけ？」
「そうだ。
あたしたち今の三年にとっては、今年勝ってこそ本当の勝利だ」
第一高校の現三年生は「最強世代」と呼ばれている。
七草真由美、十文字克人、そして渡辺摩利。
十師族直系が二人と、それに匹敵する実力者。
この三人が一つの学校の一学年に揃っているというだけで驚くべき偶然だが、それ以外にも高校在学中にして既にクラスＡ判定取得済みの実力者が何人も控えている。
今年の九校戦は、メンバー発表前の段階から、第一高校が大本命視されていた。
もし九校戦を対象にトトカルチョが企てられたとしても、今年は賭けにならないだろう――そんな戦力なのである。
「大本命でしたよね？」
「まあな。
選手の能力面に不安はない。
新人戦の順位も加算されるとはいえ、大きく転けなければ、本戦のポイントで勝てるだろう。
不安要素があるとすれば、エンジニアの方か」
「エンジニア？
ＣＡＤの調整要員のことですか？」
「ああ。九校戦の公式用語では、技術スタッフと言うんだがね。
九校戦で使用するＣＡＤには共通規格が定められていて、これに適合する機種でなければ使えない。
その代わり、ハードが規格の範囲内であれば、ソフト面は事実上、無制限だ。
如何に規格の範囲内で選手に適したＣＡＤを用意し、選手の力を引き出すチューニングを施せるかどうかも、勝敗に大きく影響してくる」

起動式の展開速度はＣＡＤのハード面に依存するが、魔法式の構築効率は寧ろＣＡＤのソフト面に大きく左右される。
一瞬の差が勝敗につながるスポーツ系競技では、ソフト的なチューニングの巧拙が、確かに重要な意味を持つ。
ソフトは高度・多機能であれば良いというものではない。
ハードの性能を超えるソフトは、ハードの作動を阻害し、かえって低いパフォーマンスしか生まないものだ。
ハードの性能が制限されているのであれば、ソフトの選択とアレンジはより重要性を増す。
この条件なら、ソフトウェアエンジニアの腕次第で番狂わせも起こり得るだろうな、と達也は思った。
「今の三年生は選手の層に比べて、エンジニアの人材が乏しい。真由美や十文字はＣＡＤの調整も得意だから不自由は感じないだろうが……」
「……」
どうやら摩利は、機械が苦手らしい。
言葉を濁した台詞まで達也は正確に推測していたが、分かっていたからこそ、彼は何も、言わなかった。
そのまま摩利のお喋りはフェードアウトし、達也は資料作りへ没入した。

※＊※＊※＊※＊※＊※＊※＊※＊※＊※

＜九校戦パンフレット　競技ルール解説＞

◎使用するＣＡＤについて
九校戦で使用できるＣＡＤには性能上の制限が掛けられています。
この規格内であれば、ＣＡＤの形状に制限はありません。
また、選手が携行できるＣＡＤの個数にも制限はありません。
ＣＡＤに組み込むことの出来る起動式には、殺傷力の制限があり

ます。
　警察省ガイドライン附表で殺傷性ランクＢ以上に指定されている魔法、またはこれと同等の殺傷力を持つ魔法用の起動式は禁止されています。
　殺傷性ランクＣ以下の魔法に対応する起動式であれば、組み込みにもアレンジにも制限はありません。
　但し、使用するＣＡＤから違法なコピーが発見された場合には、その選手は失格になります。
　尚、起動式の有無にかかわらず殺傷性ランクＢ以上の魔法は禁止されています。

◎各競技について
1．モノリス・コード
　男子を対象にした一チーム三名で行う集団競技です。
　試合は、屋外に設置された複数のステージ（森林、岩場、平原、渓谷、市街地）で行います。使用するステージは、試合毎に大会実行委員会が指定します。
　勝利条件は二通りあります。
　一つは、敵チームのメンバー全員を行動不能にすることです。
　但し、物理的な直接攻撃はルール違反で、違反を犯した選手は即失格となります。
　失格となった選手は行動不能と見なされます。
　魔法による質量体の投擲はルール違反ではありません。
　魔法によって物理的な振動波を起こし、これによって攻撃することも認められています。
　二つ目の勝利条件は、特定の魔法式に反応して分解する直方体の柱（通称モノリス）を、競技用ＣＡＤにプログラムされた起動式を使って鍵となる魔法式を発動し分解、その内部に隠された５１２文字のランダムな文字列を端末に打ち込むことです。
　モノリス・コードの競技名は、このルールに由来します。

モノリスを分解せずに、知覚系魔法で文字列を透視してコードを入力しても、無効となります。

モノリス分解の鍵になる魔法式は、射程距離が最大十メートルに設定されています。

一旦分解されたモノリスを修復することは禁止されていますが、魔法により分解を阻止することは可能です。

2. ミラージ・バット（フェアリー・ダンス）

女子を対象にした個人競技です。

屋外に直径二十メートルの、円形の競技フィールドを設営し、選手はその上空十メートルに投影される直径二十センチのホログラム球体を、長さ六十センチの専用バトンで叩いて消します。

一回の試合で選手は最大六名、十五分を一ピリオド、休憩五分を挟んだ三ピリオド制で、消した球体の数を競います。

ホログラム球体は競技場に内接する二十メートル四方のエリアにランダムに投影され、色に応じて投影持続時間が異なります。

赤が二十秒、緑が一分、青が三分と定められています。

出現頻度は、投影時間に反比例します。

ホログラムを中心とした一メートル圏内に先に到達した競技者に優先権があり、他の競技者の邪魔は失点となります。

競技者が一メートル圏内から離れると優先権は失われますので、他の競技者のアタックが可能になります。

この競技は足場となるフィールドの形態で難易度が変わってきますが、九校戦では湖の上に直径一メートルの円柱をランダムに配置したものが使用されます。（これは最高難度のフィールド設定です）

選手はこの円柱を足場に、加速、移動の魔法を駆使してジャンプを繰り返し、ホログラムへアタックします。

水上に落下しても減点にはなりませんが、フィールドの外に出ると失格になります。

但し、空中でフィールド外に出ても失格にはなりません。

3. 氷柱倒し（アイスピラーズ・ブレイク）
男女を対象にした個人競技です。
屋外に設営した縦十二メートル、横二十四メートルのフィールドを半分に区切り、それぞれの面に縦横一メートル、高さ二メートルの氷の柱を十二個配置します。
相手陣内の全ての氷柱を先に倒し終えた方の勝利となります。
なお、砕かれたり削り取られたり溶かされたりして、半分以下の大きさになった氷柱は倒れたものと判定します。
自陣の氷柱は自由に動かして構いませんが、柱同士を接触させるのは禁止です。
但し、相手の攻撃の結果、接触が起こるのは構いません。
競技者はフィールドの両端外に作られた櫓の上から、フィールド全体を見渡しながら敵陣の氷柱を攻撃します。
将棋倒しにならないように各柱の間隔を広くとるのが戦術の定石ですが、完全に倒れなければいいというルールを逆手にとって、倒れそうになった柱の側に別の柱を寄せて相手の攻撃で倒れかかったところを支えるという防御もルール上は可能です。
純粋に魔法力のみで競う競技で、スポーツ系魔法競技の中では魔法力の差が最も顕著に表れると言われています。

4. スピード・シューティング
男女を対象にした個人競技です。
三十メートルの先の空中に投射されるクレーの標的を、制限時間内に破壊した個数で競います。
クレーを破壊する魔法の種類は問いません。
クレーに攻撃できるのは幅十五メートルのレンジ内のみで、レンジ外に飛び去ったクレーを破壊しても得点にはなりません。
クレーの投射機はレンジの左右に各五機配置されます。クレーはランダムな間隔、ランダムな速度で投射され、複数のクレーが同時

に投射されることもあります。

スピード・シューティングの試合には、スコア方式と対戦方式の二つの形態があります。

スコア方式は一人ずつ試技し、破壊した個数で順位をつけます。

対戦方式は、紅白二色の標的を使用し、二人の選手が同じレンジで同時に自分の色の標的を狙い撃ち、その破壊個数を競います。

九校戦では、スコア方式で予選を行い、対戦方式で決勝トーナメントを行います。

魔法の発動速度と照準の正確さが問われる競技です。

5. アクセル・ボール

男女を対象にした個人競技です。

通常はダブルスで行われる競技ですが、九校戦ではシングルスで行われます。

縦六メートル、横三メートル、高さ三メートルの透明な箱の中央を高さ一メートルのネットで区切り、直径六センチの低反発軟性ボールを六個同時に使って、制限時間内に相手コートの得点エリア（ネット、壁面からそれぞれ五十センチ離れた二メートル四方のエリア）の床面にボールを落とした回数を競います。バウンドも一ポイントと数えます。（なお通常のダブルス用コートは、縦横がこの倍になります）

基本的な禁止事項は

（1）相手コート内のボールに干渉すること

（2）ボールを三秒以上静止させること

（3）同じボールに三回連続して干渉すること

の三つです。禁止事項は一回につき相手の一ポイントになります。

プレーヤーは原則として魔法でボールを動かしますが、直径三十センチの円形のフェイスを持つラケットの使用も認められています。ラケットは使用しなくても構いません。

移動や加速の術式を使ってボールを直接操作する、加重の術式を

使ってボールを反射する壁を作る、自己加速の術式を使ってラケットでボールを打ち返すなど、プレーヤーのタイプ次第でバリエーションが豊富な、スピーディな競技です。

6. バトル・ボード

男女を対象にした個人競技です。

水上コースを長さ一六五センチ、幅五一センチの紡錘形ボードに乗って走破する競争競技です。九校戦では全長三キロの水路を三周します。

ボードには当然動力はついていません。また水路には登り坂や滝状の段差もあります。選手は自分の乗るボードを魔法で操ってゴールを目指します。

他の選手の身体やボードに対する攻撃はその場で失格となります。但し、水面に対する魔法の行使は認められます。攻撃と見なされない範囲内で、進路上に波を起こしたり水面を爆発させたり凍らせたりして、競争相手の妨害をするのもこの競技のテクニックです。

坂や段差をジャンプでクリアするのは問題ありませんが、コースをジャンプでショートカットすることは禁止行為として失格になります。

2－（1）　試験の後で（後書き）

第二章、開幕しました。

当初は各章ごとに別のページを作る予定でしたが、知人より「この小説は前の話を読み返しながらでないと設定が分からなくなるので、章ごとにページを分けると読者が不便だ」との指摘を受け、同一ページを更新することにしました。

これに合わせて、タイトルから［第一章・入学編］を削除し、『魔法科高校の劣等生』に変更しました。

第二章は週1回の更新で、一話毎の長さが第一章より長くなる予定です。

更新日は日曜日を予定しておりますが、多少のずれは生じるかも知れません。

第二章も引き続き、よろしくお願いいたします

2－（2）　二つの顔（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

2－（2）　二つの顔

交通集中管制技術の進歩は、電車の形態を根本的に変化させ、キャビネットを都市内公共交通機関の主役に据えた。

軌道上における車両の運行はほぼ完全に制御され、安全性と利便性と輸送量を同時に成立させている。

一方、公道上の交通管制は、期待されたほど進んでいない。

都市間を結ぶ高速道路では自動運行システムも導入されているが、一般道及び都市高速に、個別の自走車両をコントロールするシステムは、まだ実現されていない。

その代わり、ドライバーをアシストする車載頭脳の開発が進んだ。

現代の自走車は違法な改造をしない限り、交通事故を起こしたくても起こせない。（十文字の車がブランシュのアジトへ突っ込むことができたのは、あれが軍用車両をベースとした改造車だからだ）

輸出されている自走車両も同じ車載頭脳を搭載しているから、大規模な交通管制システムを導入する余力の無い小国も交通事故撲滅の恩恵を受けることが出来る、ということで、世界的に見れば集中管制技術よりも個別管制技術の方が評価される傾向にある。

もっとも、安全性の代償に、未熟な――もっと率直な表現が許されるならば、下手なドライバーは、交通事故の代わりに交通渋滞を起こす。玉突き事故の代わりに、玉突き急ブレーキが掛かるのだから渋滞が起こるのも当然と言えば当然かもしれない。

このような社会的損失を防止する為、という名目で、安全面の懸念が薄れた今でも、運転免許制度は堅持されている。

真新しい電動二輪車の前で、達也は妹が出て来るのを待っていた。

免許は十六歳になった四月中に、もっと正確に言えば誕生日の次の日曜日に、即、取った。

この電動二輪車はその次の週末に買ったものだ。

ただ、彼が免許を取ったのは純然たる実用目的なので、実際に走った回数はまだ一桁台、長距離を走ったことは無い。
その割りに整備はしっかり行っているので、二ヶ月以上経っても真新しい印象のままなのである。
「お兄様、お待たせしました」
門灯に浮かび上がる妹の華奢な肢体。
長い髪をアップにした妹は、彼が着込んでいる物とほぼお揃いのライダースーツを着ていた。身体にピッタリ貼り付くツナギは、未成熟ながらも女性らしい優美な曲線を露わにしている。
手に持っていたヘルメットを被せてやると、つい、と頤（おとがい）を上げる。当たり前のような妹の仕草に小さく苦笑しながら、達也は顎の下でストラップを締めてやった。
くすぐったそうに首をすくめた深雪に最前とは異なる微笑を向けて、自分もヘルメットを被り、達也はバイクに跨った。
シールドを上げて、タンデムシートに跨った深雪に、しっかり捕まるよう促す。
腰に回された手と背中に密着した身体の感触を確認して、達也はスロットルを開いた。
兄妹の跨る電動二輪は、星空の下、静かに発進した。

◇◆◇◆◇◆◇

毎朝十分で走破する道のりにそれ以上の時間をかけて、二人は目的の寺に着いた。
自分の足で走らなかったのは、早朝と違い他の車が通っているからだ。
ランニングやローラーブレードに制限速度は無い。
その代わり、魔法使用制限に引っ掛かる。
――本来ならば、達也が毎朝行っているランニングは、官憲による取締りの対象なのである。

今夜の目的は、達也ではなく深雪のトレーニングだ。
深雪が九校戦の選手に内定したので、その為の準備。
九校戦で行われる競技は、魔法競技の中でも魔法のウェイトが高いものがセレクトされている。
それでも、肉体の運動能力が不必要というものではない。「バトル・ボード」は身体的な反応速度とバランス能力が高い方が有利だし、「アクセル・ボール」は戦術の選択によっては高い運動能力が必要となる。
減速魔法、冷凍魔法を得意とする深雪にとって「アイスピラーズ・ブレイク」は彼女の為にあるような競技であり、新人戦どころか本戦に出ても優勝はほぼ確実だろう。
だが、個人戦が今年から男女別になったことによる出場種目の増加で、深雪が出場することになるであろうもう一つの競技「ミラージ・バット」には、バトンでホログラムを叩き割るというアクションが必要になる。
達也と共に八雲の手解きを受けていた深雪は、その華奢な体格からは想像もつかぬほど高い運動能力を有しているが、最近は身体を動かす機会が減っていたので念の為にトレーニングしておくことにしたのだった。
モーターを止め、敷地の中にバイクを押して入る。境内の駐輪場に愛車を置いて、二人は八雲の元へ挨拶に向かった。
この時間であれば、門下生に暗闇稽古をつけているはずだ。
灯りが落ちた道場に近づくと、予想通り、押し殺された息遣いと、時々殺しきれずに外まで洩れる踏み込み、転倒の板鳴りが聞こえた。
稽古の邪魔をしないよう、古びた引き戸をそっと開く。
間髪を入れず飛来した棒手裏剣を防弾防刃仕様のグラブで打ち払い、ツナギに仕込んだ鉛の玉を投げ返す。
達也の遠当てに手応えは無かった。
「鉛玉は余り上達していないようだね。
魔法があるからと安心せず、飛び道具も練習しなきゃ。

でも、手裏剣を掴み取らず払い落としたのは的確な判断だよ、達也君」

気配は無く、声だけが聞こえた。

達也は声が聞こえた正面奥に向かって、ではなく、右横の壁に向かって再度鉛の玉を投擲した。

「うひょ！？」

気の抜ける悲鳴と共に、撃ち込んだ辺りから気配が波紋のように広がる。

達也は咄嗟に、深雪を抱いて後ろへ跳んだ。

間一髪、妹を庇う背中の紙一重を、上から下へ、天井から急降下した黒い剣風が疾り抜けた。

片足で、素早いステップを踏む。

踏みつけた足の下で、表面を全て黒く塗り潰した木刀が動きを止める。

引き抜いて二の太刀を放とうとしていた八雲は、ビクとも動かぬ得物に、諦めて手を離した。

「……師匠、随分手荒な歓迎でしたね」

「……君の遠当てこそ、殺気がこもっていたんじゃないのかい？」

暗闇の中で睨み合う師弟は、どちらからとも無く、腹黒い笑みを交した。

◇◆◇◆◇◆◇

四隅に篝火を燈した境内の一角。普段は護摩焚きに使われる場所に（一応、この寺は比叡山の末寺を標榜しているが、八雲が題目や念仏の修法を行っているところを達也も深雪も見たことは無い）、仄かに蒼い、茫っと紅い光球がふわふわと漂っている。

場所が場所だけに、人魂か？　と、何も知らない人間ならば腰を抜かしかねない光景だが、幸いなことに、この場に部外者はいない。

細長い影が蒼い光の中を通り抜け、光球が一つ、フッと消えた。

光の球は二つ、三つと増えて行く。
散らばり、漂う光球を、たおやかなシルエットが、意外な素早さと力強さを伴う身のこなしで追いかけ、手に持つ短い杖で両断して行く。
両断した光球の数が三十を数えたところで、達也は深雪に小休止の合図を送った。

大きく息をつく八雲に飲み物を差し出す役目は、いつもならば深雪のものだが、今日は達也が代理を務めている。
今夜は深雪も、同じように大きく息をついている、ふるまわれる側だからだ。
「ありがとうございます、師匠。
場所を貸して頂くだけでなく、修行の相手までして頂いて」
飲み物を差し出した後、改めて頭を下げる達也へ、八雲は鷹揚に頷いて見せた。
「実体を打つのと幻影を打つのでは、随分勝手が違うからね。
深雪君も僕の可愛い生徒だし、協力は惜しまないよ」
可愛い、の所に妙な力が入っていたようにも感じたが、九校戦までは気にしないようにしよう、と達也は考えた。
幻影魔法は「忍術」の得意分野であり、投影のスピード、映像のリアリティ、動きの滑らかさ全ての面において現代魔法以上の洗練度を誇る。現代魔法は多種類の異能を高速・精確に発動可能としたが、限定された得意分野では、まだまだ古式魔法に及ばない部分も少なくはない。
限られた魔法しかまともに使えない達也では、八雲の代わりにホログラム投影機の代用になることはできないのだ。
「深雪、今夜はここまでにするか？」
息を弾ませている妹にドリンクを渡しながら、達也はそう尋ねたが、深雪は首を横に振って、一口、喉を湿らせた。
「もし先生がよろしければ、もう少し身体を動かしておきたいんで

すが」
「僕は構わないよ。なんなら達也君も一緒に鬼火を追いかけてみるかい？」
「いや、俺は……止めておきます」
八雲がニヤリと浮かべた笑みの意味は、何となく想像がついた。
その思惑をひっくり返してやりたい気持ちが無いではなかったが、今日は深雪の練習が先だ。
「そうか、いや、残念」
本当に残念そうな顔で、それでも隠しきれない含み笑いと共に首を振る八雲。
その顔を見れば、辞退して正解だったと確信できる。
「じゃあ、始めようか」
「はい、よろしくお願いします」
再開の合図に腰を折る深雪。
二人の手にあったカップは、達也が既に回収済みだ。
深雪が篝火で囲まれた方形の中央に立ち、八雲が再び術を行使しようとしたその時、
「誰だ」
降って湧いたような、人の気配。
誰何を発したのは、達也。
いや、時系列はその逆だ。
コーチングの為にイデアへ知覚を広げた瞬間、彼の認識ネットワークに引っ掛かった存在へ向けて、達也が何の気配も無い暗闇に誰何を発した直後、何処からとも無く、人の気配が生まれた。
「おや、遥クン」
その気配へ向けて、八雲が気安く声をかけた。
その名に、達也も、深雪も、覚えがあった。
暗闇から、ゆらゆら揺れる明かりの中へ歩み出てきた、深雪より少し大人びたシルエット。
深雪と同じような暗色のツナギを着ている為か、胸や腰の辺りが

随分強調されているように感じる。
達也の視線を辿って、深雪がムッとした表情を浮かべたが、兄の脇腹に肘を突きたてる前に、その瞳が凍てついた鋼鉄色に染まっているのを見て、落ち着きを取り戻した。
嘗め回すような達也の視線は、遥の身体能力を測っていた。
「達也君、そんなに警戒しなくても大丈夫だよ。遥クンも僕の教え子だ」
「司波君のように親しく教えていただいた訳ではありませんけど」
遥の声音は、闇に溶け込む今の不穏な格好に似合わぬ、軽くお道化たものだった。
「それにしても、先生はともかく司波君に気付かれるとは思いませんでした。
もしかして、私の技が衰えているのですか？」
「自分を誤魔化すのは良くないなぁ。
遥クン、あんまり嘘ばかりついてると、自分の本音すら分からなくなってしまうよ？」
「それ、司波君にも言われました」
「おっと、余計な一言だったか。
まっ、それはこの際置いておくとして、遥クンの隠形は完璧に近かったから余計な心配はいらないよ？
もし本心から、衰えたなんて思っているんならね」
八雲から投げ掛けられた眼差しを、これぞ典型、と言いたくなる様な誤魔化し笑いで遥は受け流した。
多分、誤魔化せるとも思っていないし、誤魔化すつもりも無いのだろう。
八雲もニヤニヤ笑っているところを見ると、これがこの二人の、いつものコミュニケーションスタイルなのか。
「達也君は気配に気付いた訳じゃないよ。
僕たちとは、少し違う『眼』をもっているからね、達也君は。
彼の目を誤魔化したかったら、気配を消すんじゃなくて、気配を

偽らなきゃ」
「なるほど……勉強になりました」
「そろそろ、こちらの疑問にも答えて欲しいんですが」
自分を出汁にして師弟ごっこに興じている二人に、達也は不機嫌をわざと丸出しにした声で訊ねた。
「フム……確かに、遥クンにだけ情報をあげるのも不公平だね。遥クン、構わないかな？」
「ダメだと言っても、私がいないところで話しちゃうんでしょう？」
肩をすくめる仕草はさばさばしたもので、遥が既に諦めの心境だったことが窺われる。
「じゃあ、本人の了解が取れたということで……
遥クンは公安の捜査官だよ」
実に端的な、八雲の説明だった。
それだけでも訊きたかった事は十分理解できたが、本音を言えばもう少し、説明が欲しいところだ。
「んっ？　あまり驚いていないね」
しかし、説明を求めたのは、八雲の方が先立った。
八雲は兄妹がビックリする姿を期待していたらしい。
達也だけでなく深雪も、遥の正体を平然と受け容れたのが不思議だった、というか、面白くなかったようだ。
「俺にも少しは自前の情報網がありますから、小野先生が軍関係者じゃないことは分かっていました。
そうすると後は公安（警察省公安庁）か、内情（内閣府情報管理局）か、あるいは外国のスパイということになりますので」
「情報網というと、彼か。
いいのかねぇ……彼の立場上、一高校生に情報を漏らしたなんてばれたら、ただじゃ済まないだろうに」
「立場で言えば、師匠もそんなに変わりませんよ……
で、小野先生は第一高校内におけるブランシュを始めとした反政府組織の活動を探る為、カウンセラーに偽装した公安の潜入スパイ

という理解で、間違いありませんね？」
「違うわ」
行間、文字間を埋めつつ、達也が確認の意味で再度訊ねた。
だが、遥から返って来たのは、割と強い調子の否定だった。
「私が公安のスパイというのは事実だけど、カウンセラーは偽装じゃないわよ。
時間的な前後関係で言えば、カウンセラー資格を目指していた私に今の上司が接触して来て、第一高校に配属になった後、公安の秘密捜査官になった、という順番。
先生の教えを受けたのは二年前から一年間のことだから、達也君のほうが兄弟子になるわね」
「それにしては、見事な隠形ですが」
「それが私の魔法特性だもの。
他の魔法は使えないけど。
上司が私に目をつけたのも、それが理由よ」
「……なるほど、ＢＳ（Ｂｏｒｎ　Ｓｐｅｃｉａｌｉｚｅｄ）魔法師でしたか」
「その肩書きは好きじゃない」
まるで同い年の少女のような拗ね方でそっぽを向いた遥に、達也は失笑を漏らしてしまう。
ＢＳ魔法師、あるいはＢＳ能力者。先天的特異能力者、先天的特異魔法技能者とも呼ばれる、魔法としての技術化が困難な異能に特化した超能力者のことだ。
ＢＳ魔法師は、「ＢＳの一つ覚え」という陰口からも分かるように、普通の魔法師からは一段下に見られているが、その特異能力は他者に真似のできないものが多く、例え真似できたとしても極めて高いレベルを示す。
職務と特異能力がマッチすれば、「何でも出来る」通常の魔法師より役に立つことが多いのである。
「何もかも中途半端であるより、何か一つを極めている方が優れて

いると思いますけどね。
まあこれは、小野先生の価値観の問題ですが」
何やら生徒とカウンセラーの役割が逆転しているような気もしたが、ここは学外で今は放課後を通り越した夜更けだから、気にする必要も無いだろう。
同じ逆転の構図を感じ取ったのか、遥も不機嫌ながら、拗ねるのを止めていた。
「司波君、今日のところは仕方ないけど、秘密捜査官の身分は本来極秘だから。
他の人にはオフレコで頼むわよ」
無意味じゃないかな、と達也はすぐに思った。
公安のスパイの身元程度、十師族にはすぐに分かってしまうだろう。
実家が警察と太いパイプを持つエリカにも、既に分かっているかもしれない。
達也自身も、所属までは分からなかったが、遥が諜報関係の人間だという事はほぼ確信していた。
正体がばれていないと思っていたのは、遥本人だけかもしれない、のだが、そんなことは口にしない。
達也は遥の頼みに、こう答えた。
「分かりました。他言はしません。
その代わりと言っては何ですが、四月のようなことがあった場合は、早めに情報をもらえませんか」
「……分かったわ。ギブアンドテイクで行きましょう」
様々な思惑を秘めて、二人は握手を交わした。

◇◆◇◆◇◆◇

言うまでも無く、魔法科高校にも魔法以外の一般科目の授業がある。

その中には体育もあり、試合形式の授業に、少年が必要以上の熱い闘志を燃やしたりするのは、今も変わらぬ風景だ。

今日の授業はレッグボール。

フットサルから派生した競技で、無数の小さな穴が開いた透明の箱でフィールドをすっぽり覆ったフットサル、但し選手は頭部保護のヘッドギアを着け、ヘディングはハンドと同じ扱いで禁止、というのが百科事典でよく見かける解説だ。（余談だが、この「透明の箱の中で球技」という競技形態は、二十一世紀後半のスポーツトレンドの特徴の一つである）

魔法を併用した競技として行われることもあるが、今日の授業では魔法抜きで行われている。

レッグボールでは反発力を極端に高めた軽量ボールを使用しており、フィールドを囲う壁と天井にもスプリング効果を持たせてある。上下左右からピンボールのような目まぐるしさで跳ね返るボールを追いかけ、相手ゴールに蹴り込むというスピーディかつパワフルな球技で、見た目が派手な為、「観る」スポーツとしても人気が高い。

今も、休憩中の一年E組とF組の女子生徒が、自分たちの授業はそっちのけで声援を送っている。

「オラオラ、どきやがれ！」

こぼれ球にレオが突進する。

ボールの反発力が極端に高いので、サッカーやフットサルと違い、ドリブルは難しく、ほとんど使われない。

レッグボールは五人のフィールドプレーヤーの間で、壁や天井を利用してパスをつなぎ、相手ゴールにシュートを放つのが一般的な戦術である。

こぼれ球を拾う運動量は、勝敗を大きく左右する。

「達也！」

縦横無尽に走り回るレオが、シュートの勢いで中盤の達也にパスを送る。

胸や腹でトラップしようものならノックダウンを喰らいそうなパ

スを、達也は真上に蹴り上げることでその勢いを殺し、天井から跳ね返ってきたところを踏みつけて抑える。
機械の様な精密なボール捌きでパスを受けた達也は、側面の壁に向けてボールを蹴りだした。
跳ね返った所にいたのは、幹比古。
ワントラップで、シュート。
ゴールを告げる電子ブザーが鳴り渡り、見物の女子生徒から歓声が上がる。
「やるな、あいつ」
達也の横に並んだレオが、素直な賞賛を幹比古に向けた。
「ああ。読みが良いし、見掛けより身体が動く」
見かけによらず、という以上の、見かけを裏切る身体能力に、達也も意外感を禁じられない。
吉田家は系統外魔法の名門であり、古式魔法の修行方法を受け継いでいると聞いている。
ならば、相応の荒行で、身体を鍛え上げているのは分かる。
ただ、幹比古の外見は、そのような形跡を覚らせない。それが達也の意外感の源泉だった。
爪を隠した鷹は、思いがけない所に潜んでいるものだ……
そんな感慨を抱きつつ、達也は飛んで来たボールを華麗な上段回し蹴りで相手ゴールへ蹴り返した。

試合は達也たち三人の活躍で圧勝。
見学席に戻った達也は、レオと共に、少し離れた位置に腰を下ろした幹比古の近くへ移動した。
「ナイスプレー」
声をかける達也の呼吸は、既に落ち着きを取り戻している。
「そっちもね」
応える幹比古も、達也と同じく、既に呼吸の乱れは無い。
いつもは何処か刺々しい雰囲気を纏っている幹比古だったが、今

は流した汗と、体育の授業とはいえ、勝利の美酒の効果もあってか、他人を拒絶するオーラが薄くなっている。
「やるじゃねえか、吉田。こう言っちゃ何だが、予想外だぜ」
「幹比古」
レオの開けっ広げな態度に感化されたのか、
「苗字で呼ばれるのは好きじゃない。僕のことは名前で呼んでくれ」
幹比古はこれまでにない、打ち解けた態度を取っていた。
「おう。じゃあ、俺の事はレオって呼んでくれ」
入学から三ヶ月が経過している今の時期に交わす会話としては、いくら前世紀のようなクラス単位の活動が少なくなったからといって、おかしいかもしれない。
だがそれだけ、幹比古はクラスメイトを含めた全ての人間に対し、壁を作って過ごしていた。
今だけの、気まぐれに近い変化かもしれないが、確かにこれは、一つのきっかけに違いなかった。
「俺も幹比古と呼ばせてもらっていいか？
その代わり、俺の事は達也で良い」
「オーケー、達也。
実を言うと僕は、前から君と話をしてみたいと思っていたんだ」
「奇遇だな。実は俺もだ」
「……何となく疎外感を感じるぜ」
「気の所為だよ、レオ。
君とも話をしたいと思っていた。
何と言っても、あのエリカにあれだけ根気良く付き合える人間は珍しいからね」
「……なんか釈然としねえなぁ」
エリカとワンセット扱いに顔を顰めたレオを見て、達也と幹比古は同時に吹き出した。
前の――つまり、達也たちの――試合に比べれば、今度の試合は

接戦になった。
先程から交互に点が入っている。
どちらも技術的に拮抗している、高校生らしい、平凡な試合だった。
「達也はどうしてこの学校に来たんだい？」
見学という建前上、フィールドを見てはいるが、意識は完全に横へ向けて、幹比古が訊ねた。
最近良くこの話題が出るな、と思いながら、達也は答える。
「正直に言うと、付属なら何処でも良かったんだ。
だから、一番近い所を選んだ」
「……何だかいい加減に聞こえるけど？」
「実際、いい加減なんだろうな。
大学の非公開文献と、受験資格だけが目的だから」
「そりゃあまた、随分な割り切りだ……
でも納得した。確かに、達也には相応しい選択だと思うよ。何と言うか、こう、イメージ的にね」
達也の回答に呆れ顔ながらも、幹比古は深く頷いている。
「イメージか……どんなイメージなんだ？」
それが必要以上に深い頷き方であるような気がして、達也は少し突っ込んだ質問をしてみた。
「孤高」
返って来た答えは、世間話にしてはやけにキッパリとした響きを帯びていた。
「超然。
あるいは、達観。
悪い意味に取らないで欲しいんだけど、達也には僕たちより遥かに老成したイメージがある」
表情は変えていないはずだ。
だが、自分の腕の筋肉が、ほんの僅か、拳を握る為の強張りを示したことに、達也は気付いていた。

「……悪い意味に取るなと言われてもなぁ……
十六歳で老成していると評価されるのは、流石に一寸、自分を省みるところがあるな」
わざとらしくピントを外してぼやいて見せたのは、見え透いた韜晦。
だが達也の見込みどおり、幹比古は空気を読めるタイプだった。
「そうだね。枯れてる、と言うべきだったかな？」
「そりゃ同じだって」
「達也のは枯れてるんじゃなくて、採点が辛すぎるんだよな」
レオが益々脱線した話題を振って来たのも、空気を変える為だろう。
彼は意外と気がつく性質だ。
ただ、行き過ぎやり過ぎの傾向はあるが。
「何のことだ？」
「あんだけ美少女な妹がいれば、大抵の女にゃ興味が湧かないだろ」
「ああ、確かに。
深雪さんだっけ？
入学式で彼女を初めて見たときは、見とれるよりビックリしたよ。
あんなに綺麗な女の子が実在するなんて信じられなかった」
「おっ？
達也、可愛い妹が狙われてるぜ。
兄貴としてはどうよ？」
人の悪い笑みを浮かべて問い掛けるレオに答えたのは、話を振られた達也ではなく、出汁にされ掛かった幹比古だった。
「よしてくれよ。
そんなんじゃない。
話をするだけならともかく、それ以上の関係になろうなんて、考えただけで怖気づいちゃうって。
彼女にするなら、もっと気楽に付き合える相手がいいな」
幹比古の言葉に、レオは深く頷いた。

「そうだよなぁ。
まあ、それでなくても彼女は難攻不落のブラコンっぽいし、付き合う為には無敵のシスコン兄貴を突破せにゃならんし……ハードルが高すぎるぜ」
「レオ……お前とは一度、とことん話し合う必要があるようだな」
「おお怖、遠慮しとくぜ。
オレはこんなことで命を懸けたかねえよ」
重く据わった達也の視線にレオは大袈裟に震えて見せた。
見るからに演技ではあったが、そこに少なからぬ本気が混じっているように見えて、幹比古は興味深げに二人を見比べた。
身体は一回り、レオの方が大きい。
手足の太さも、それに見合うものだ。
さっき一緒にプレーした感触では、敏捷性もそれ程、差が無いように見える。
噂では、達也は高名な忍術使いに体術の手解きを受けているらしいが、それ程に圧倒的な技術差があるのだろうか？
魔法力に劣っているというハンデを覆してしまう程の？
幹比古にとって、魔法力の差を埋める手段を見つけ出すことは、切実な望みだった。
半年前、失ってしまった「力」に代わるもの。
物心ついて以来、あの時まで、ずっと強者であり続けた幹比古は、弱者に甘んじることに耐えられない。
自分が焦っていると分かってはいた。
余裕皆無の今の心理状態が、必要以上に自分自身を消耗させていることも自覚していたが、それでも自分を追い込まずにいられない。
この半年間、かつて覚えが無いほど勉学に打ち込んだ。
それまで余り熱心とは言えなかった武術にも、真剣に取り組んだ。
それでも、喪失感は埋まらなかった。
だから、魔法実技の成績で劣り、現実に魔法の実践で劣っているにも拘らず、魔法力で遥かに勝る上級生を打ち負かしてしまう達也

に興味を持ったのだ。
魔法力の差を埋める、白兵戦技術？
幹比古は、達也とレオを闘わせて見たい、と思った。
達也と戦ってみたい、と、意識することなく考えた。
「幹比古？」
「えっ？」
その所為か。
急に名前を呼ばれて、ほとんど臨戦態勢で身構えてしまう。
その姿を見て、達也もレオも、二人とも苦笑いを浮かべた。
「おいおい、物騒だな」
「どうしたんだ？
急に黙り込んでしまったかと思ったら、今度はいきなり」
「あっ、いや、
……ゴメン、なんでもない」
幹比古としては、決まり悪い思いで謝るしかない。
元々コミュニケーションは余り得意な方ではないのだ。
せっかくの友好的な雰囲気が、ギクシャクとしたものに変わり、
達也とレオが盛んにジョークを飛ばしたにも拘らず、授業時間終了
まで修復されることは無かった。

2－（3）　抜擢（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

2－（3）　抜擢

魔法大学付属高校にとって、夏の九校対抗戦は秋の論文コンペティションに並ぶ一大イベントだ。

イベントとしての華やかさでは論文コンペを大きく引き離すナンバーワンイベントと言える。

九校戦はスポーツタイプの魔法競技による対抗戦（魔法競技にはスポーツタイプ以外に立体パズルやボードゲーム、迷路や宝探しのタイムを競うゲームタイプがある）。第一高校にも各競技のクラブが存在するが、学校同士の対抗戦という色彩が強い九校戦の出場選手はクラブの枠組みを超えて全校から有望な選手が選び出される。

こうした性質上、九校戦の準備は部活連ではなく生徒会が主体となって行われる。

「……だからといって、各クラブの選手（レギュラー）を無視するわけにもいかないし、選手を決めるだけで一苦労なのよね……」

いつも活き活きとした笑顔が魅力の真由美も、今日はどこか、精彩を欠いていた。

弁当箱に箸を伸ばす手も、心なしか勢いが無い。

最近、深雪も相当に忙しそうにしているが、単に事務仕事だけではすまない生徒会長は、普段のお気楽そうな佇まいからは窺い知れない気苦労があるのだろう。

「それでもまあ、選手の方は十文字くんが協力してくれたから、何とか決まったんだけど」

今日の昼食会は、真由美による、延々と続く愚痴の独演会の様相を呈していたが、ようやく終息を迎えたようだ。

この程度で消化不良を起こす柔な胃腸は持ち合わせていないが、食事時のＢＧＭが愚痴ばかりというのはやはり、精神的によろしいものでは無いな、と、達也はネガティブな話題から解放されたと考えてホッと一息ついた。

「でも、選手以上に問題なのはエンジニアよ……」
……のだが、どうやら彼の早とちりだったようだ。
「まだ数が揃わないのか？」
摩利の問い掛けに、真由美は力無く頷いた。
「ウチは魔法師の志望者が多いから、どうしても実技方面に優秀な人材が偏っちゃってて……
今年の三年生は、特に、そう。
魔法工学関係の人材不足は危機的状況よ。
二年生はあーちゃんとか五十里くんとか、それなりに人材がいるんだけど、まだまだ頭数が足りないわ……」
「五十里か……あいつも専門は幾何の方で、どちらかと言えば純理論畑だ。調整はあまり得意じゃなかったよな」
「現状は、そんなこと言ってられないって感じなの」
真由美と摩利が二人揃ってため息をついているという珍しい光景が、事態の深刻さを如実に物語っていた。――そんなことで深刻さの度合いを測るのは、何処か間違っているような気もしたが。
「私と十文字くんがカバーするっていっても限度があるしなぁ……」
「お前たちは主力選手じゃないか。
他人のＣＡＤの面倒を見ていて、自分の試合が疎かになるようでは笑えんぞ」
「……せめて摩利が、自分のＣＡＤくらい自分で調整できるようになってくれれば楽なんだけど」
「……いや、本当に深刻な事態だな」
疲労の故かそれ以外の要因もあるのか、いい感じに据わった真由美の眼差しから、摩利は空々しく顔を背けた。
生徒会室は、本格的に、精神衛生上好ましくない雰囲気になってきた。
達也は教室に戻る――ここから逃げ出すべく、深雪に目配せして、意思の疎通とタイミングを計った。
「ねえ、りんちゃん。やっぱり、エンジニアやってくれない？」

九校戦前の修羅場で、昼休みも生徒会室に釘付けの鈴音に、真由美から何度目かのアプローチが飛んだ。
「無理です。
私の技能では、中条さんたちの足を引っ張るだけかと」
そして何度目かの、すげない謝絶に沈没する。
すっかり意気消沈してしまった真由美には悪いが、ここがチャンスだろう。
深雪とアイコンタクトをとって、達也は腰を浮かせ――
「あの、だったら司波君がいいんじゃないでしょうか」
――かけたところで、あずさから思わぬ攻撃を喰らって、離陸に失敗してしまう。
「ほえ？」
テーブルに突っ伏していた真由美が、顔だけを上げて何語か分からない奇妙な応答を返した。
「深雪さんのＣＡＤは、司波君が調整しているそうです。
一度見せてもらいましたが、一流メーカーのクラフトマンに勝るとも劣らない仕上がりでした」
真由美が勢い良く身体を起こした。
最初の気の抜けた返事が嘘のように、真由美の顔に生気が戻った。
「盲点だったわ……！」
獲物を見つけた鷹のような視線が、真由美から達也へ向けられた。
達也はそれだけで、諦めの境地に半ば、至った。
「そうか……あたしとしたことが、うっかりしていた」
そこに摩利まで加わっては、最早逃れようも無いだろう。
「そういえば委員会備品のＣＡＤも、コイツが調整していたんだったな……
使ってるのが本人だけだから、思い至らなかったが」
何を言っても無駄だろうな、と達也は既に九割九分まで諦めていたが、不戦敗は主義に反する部分があるので、ささやかな――だがおそらく、無駄な――抵抗を試みた。

「ＣＡＤエンジニアの重要性は先日委員長からお聞きしましたが、一年生がチームに加わるのは過去に例が無いのでは？」
「何でも最初は初めてよ」
「前例は覆す為にあるんだ」
間髪を入れず、何やら過激な反論が返って来た。
「……進歩的なお二人はそうお考えかもしれませんが、他の選手は嫌がるんじゃないんですか？
一年生の、それも二科生、しかも俺は色々と悪目立ちしてますし」
自分で言っていて少々気が滅入ってきたが、事実から目を背ける訳には行かない。
「ＣＡＤの調整は、ユーザーとの信頼関係が重要です。
ＣＡＤが実際にどの程度の性能を発揮するかは、ユーザーのメンタルに左右されますからね。
選手の反発を買うような人選はどうかと……」
一見、もっともらしい達也の意見に、真由美と摩利が顔を見合わせる。
だが口で何と言おうと、達也の本音は彼女たちにとって見え透いていた。
厄介事お断りの怠け者な（？）後輩に引導を渡すべく、アイコンタクトで攻撃（口撃？）手順をすり合わせる二人。
そこへ、予想外の援護射撃が撃ち込まれた。
「わたしは九校戦でも、お兄様にＣＡＤを調整して頂きたいのですが……
ダメでしょうか？」
思いがけない深雪の裏切り（？）に、達也は凍り付いてしまった。
彼の心情を古典劇風に表現すれば「ああ深雪（ブルータス）、お前もか……！」である。
「そうよね！
やっぱり、いつも調整を任せている、信頼できるエンジニアがいると、選手として心強いわよね、深雪さん！」

すかさず、真由美が追い討ちを掛ける。
「はい。
兄がエンジニアチームに加われば、わたしだけでなく、光井さんや北山さんも安心して試合に臨むことが出来ると思います」
あの二人が新人戦の選手に選ばれているというのは、今初めて耳にしたことではあるが、予想通りの妥当な人選だと達也は思った。
――現実逃避気味に。
明らかに、チェックメイトだった。

放課後、部活連本部の準備会議で、達也をチームへ加えるかどうかを最終的に決定することになった。
一縷の望みが残った訳だが、達也は既に、完全に諦めていた。
そもそも深雪に望まれた時点で、彼に逃げ道など無いのだから。
仮に難色を示されたならば、今度は逆に、彼の方から積極的にアピールしなければならない、という局面も想定される。
どちらにしても、欝なことだった。
こういう時、人はついつい、自分の得意分野に手が伸びる。
その場の優先順位は限りなく低くても、とりあえず、出来ること、慣れていること、得意なことで自分の価値を再確認し、落ち着きを取り戻す、一種の代償行為だ。
蓄積されたストレスの故か、滅多にないことだが、達也もこの些細な代償欲求の罠にかかってしまった。
昼休みは三分の二以上が過ぎていたが、山積みになっているデスクワークに取り掛かった深雪を待つ間、手持ち無沙汰になってしまった達也は、ショルダーホルスターから銀色のＣＡＤを抜き出して、カートリッジのドライブや起動式切替のスイッチその他、物理的な可動部分のチェックを始めた。
「あっ、今日はシルバー・ホーンを持って来てるんですね」
それを目敏く見つけて近寄ってきたのは、深雪と同じく、大量のデスクワークを抱えているはずのあずさだった。

何となく視線を、真由美でも摩利でもなく、鈴音の方へ向ける。
達也の声無き声を正確に理解した鈴音は、器用に、眉毛だけで肩を竦めるのと同じ感情表現をして見せた。
つまり、今のあずさには、デスクワークなど手につかないだろう、ということだ。
「ええ、ホルスターを新調したんで、馴染ませようと思いまして」
朝に三つと言われれば怒って、朝に四つと言われれば喜ぶあれか、等と、客観的に見ればかなり酷いことを内心で考えながらあずさに視線を戻し、表面だけは愛想良く達也は答えた。
「えっ、見せてもらっていいですか？」
キラキラと目を輝かせながら、あずさが更に近寄って来た。
ＣＡＤ本体だけでなく、周辺装備にも興味があるようだ。
普段はどちらかと言えば避けられている――と言うか怖がられている――印象があるだけに、達也としては苦笑を禁じ得ない気分だったが、小動物的な雰囲気があるあずさがこういう風にちょこまかと寄って来ると、とても邪険には出来ない。
これも一種の人徳だろうか、と思いながら、達也は真夏でもきちんと着込んでいる上着――無論、防暑加工のハイテク生地で仕立てられている――を脱ぎ、ショルダーホルスターを外してあずさに手渡した。
「うわーっ、シルバー・モデルの純正品だぁ。
いいなぁ、このカット。抜き打ちし易い絶妙の曲線（カーブ）。
高い技術力に溺れないユーザビリティへの配慮。
ああ、憧れのシルバー様……」
……今にも頬ずりしそうな勢いだ。
達也は、ポーカーフェイスを保つのに一苦労だった。
その後も一頻り撫で回すように観察していたが、ようやく満足したのか、あずさは満ち足りた笑顔で達也にホルスターを返した。
「司波君もシルバー・モデルのファンなんですか？
単純に値段とスペックだけ見れば、マクシミリアンのシューティ

ングモデルとかローゼンのFクラスとか、同じFLT（フォア・リーブス・テクノロジー）の製品でもサジタリアス・シリーズなんかに比べると割高感がありますけど、シルバーのカスタマイズには値段が気にならなくなる満足感がありますよね！」

あずさが「デバイスオタク」だということは、以前に摩利から教えてもらったことがある。

それを聞いた時には、酷い言われようだ、とあずさに同情したものだが、今の姿を見ていると、そう言われても仕方が無いかな、という気にもなってしまう。

達也の考え方では、値段とスペックの対比、つまり費用対効果で劣っていれば、満足感でも劣っている。

要は、数字に表れないスペックを何処まで評価するかということであり、その分析無くして「満足だ」というのは単なる信仰だろう、と彼には思える。

とは言うものの、こういうことは本人の価値観の問題だから、本人が満足していると言うのに他人が水を注すことでもない。

「いえ、実は一寸した伝手がありまして、シルバーのモデルはモニターを兼ねて安く手に入るんですよ」

彼がこの台詞を口にした瞬間、端末に向かっていた深雪の肩が大きく揺れたが、それに気付いた者はいなかった。

「えーっ！　ホントですか!?」

あずさの顔には大きく大きく、「良いなぁ」と書かれている。

今度は達也も、少しばかり顔が引き攣ってしまった。

「……今度、新製品のモニターが回ってきたらワンセットお譲りしましょうか？」

「えっ!?」

ホントに!?

ホントに良いんですか!?

ありがとうございます!!」

答えを差し挟む余裕も無かった。

辛うじてジェスチャーで頷いてみせると、あずさは達也の空いている左手を両手で掴んで、ぶんぶん上下に振り回し始めた。
「……あーちゃん、少し落ち着いたら？」
流石に見かねたのか、真由美が山積みの案件処理の手を休めてあずさに声を掛けた。
あずさがピタッと動きを止める。
恐る恐る、目線を自分の手元に落とし、
自分の両手が達也の手をしっかり握り締めているのを、触覚だけでなく視覚の上からも認識し、
そっと顔を上げて達也の顔を窺い、無表情に見返してくる眼差しを避けてもう一度手元に目を落とし、
あずさは火に触れたような勢いで、両手を離した、だけでなく、全身で飛び跳ねた。
「ゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさい……！」
耳まで赤くなる、という表現があるが、比喩ではなく、あずさは本当に耳まで赤くして何度も勢い良く頭を下げている。
その内、目を回すのではないか、と本気で心配になってきたので、達也はアイコンタクトで真由美にヘルプを求めた。
「……あーちゃん、もうそれくらいにしたら？
達也くんも、何だか困っちゃってるみたいよ？」
真由美も達也と懸念を共有していたのか、悪戯に（徒に、ではない）場をかき回すことも無く、あずさを宥めにかかった。
言われるがままに深呼吸などして、何とか落ち着きを取り戻すあずさ。
呆れ顔のため息一つと共に、真由美は案件処理へと戻る。
あずさは、達也の顔を見て照れ臭そうに笑うと、急に真面目な顔になって、
「じゃあ、もしかして司波君は、トーラス・シルバーがどんな人かも知ってたりしませんか？」
等と訊ねてきた。

――まあ、照れ隠しである事は、誰に言われなくても分かる。
ただこの質問は、達也にとって、非常に答え難いものだった。
「……いえ、詳しい事は何も」
壁際でビープ音が鳴った。
深雪が使っている情報端末の、不正操作のアラームだ。
誰にでもミスタイプくらいあるので別におかしなことでは無いが、アラームが鳴る程のミスを深雪がしてしまうのは珍しい。
真由美と鈴音が「おやっ？」という表情で壁に向かっている深雪に視線を投げたが、深雪は何事も無かったようにデータ処理を続けていたので、声を掛けることも無く二人も自分の仕事へ戻った。
「……深雪さんがミスするなんて珍しいですね」
「偶々でしょう」
状況に照らして、達也の返事はスムーズ過ぎるものだったが、あずさは特に気に留めた様子も無く、元の――始めたばかりの、話題に戻った。
「いくら正体を隠してる、って言っても、同じ研究所の人たちは知ってるはずですよね？
それとも、一人で全部作ってるんでしょうか？」
「……いや、それは流石に無理なのではないかと」
「そうですよねぇ。
そうだ、司波君、その『伝手』で研究所の人に話を聞けませんかね？」
「……いえ、伝手と言ってもそのような類のものでは無く……
それに、フォア・リーブスが何らかの経営上の理由で秘密にしているんでしょうから、研究所の人から話を聞きだすのは無理だと思いますよ」
「うーん、そうですねぇ……」
「……分かっているとは思いますが、秘密情報の取得に精神干渉系魔法を使うのは重罪ですよ」
「えっ、や、やだな、そんなこと考えるはず無いじゃ……ないです

か……」

達也から半眼の視線を浴びて、あずさの小さな身体が更に縮こまった。

「……いえ、本当に分かっているなら良いんです。

あくまで、念の為ですから」

「だ、大丈夫ですよ。その位、分かってますって。アハ、アハハハ……」

一筋、二筋と、比喩的な意味ではなく肉体的に冷や汗を流している様子を見て、達也はあずさに対するプレッシャーを緩めた。

「……それにしても何故、中条先輩はトーラス・シルバーの正体がそんなに気になるんですか？」

あずさが使っているＣＡＤはＦＬＴ製ですらない。

シルバーモデルのユーザーでもないのに、その設計者の素性がそんなに気になるものだろうか。

達也にとっては素朴にして、当然に思える疑問だったのだが。

「えっ？」

あずさは、その質問こそ意外過ぎるもの、という顔で達也を見返した。

「気になりますよ。寧ろ、司波君、気にならないんですか？

トーラス・シルバーですよ？

ループ・キャストを世界で初めて実現し、特化型ＣＡＤの展開速度を二十パーセントも向上させ、思念スイッチの誤認識率を五パーセントから二パーセントへ三パーセントも低下させた、あのトーラス・シルバーですよ？

しかもそのノウハウを惜しげもなく公開し、独占利潤よりも魔法界全体の進歩を優先させた、あのトーラス・シルバーですよ？

魔工師を目指す者なら、僅か一年の間に特化型ＣＡＤのソフトウェアを十年は進歩させたと言われているあの天才技術者がどんな人なのか、興味が湧かないはずは無いと思いますけど」

何やら、責められている様にも感じるひしひしとした迫力に、達

也は不覚にもたじろいでしまった。
世間の「トーラス・シルバー」像がここまで大きな物になっていたとは、彼の予想を超えていた。
「……認識不足でした。ユーザーとしては全く不満が無いという訳でもなかったので、それ程、高い評価を得ているとは……」
「はあ……なるほど。司波君にとってはモニターを務めるほどシルバーモデルは身近な物ですから……わたしとは感じ方が違うのかも知れませんね」
不得要領顔ながらも、あずさは何とか納得してくれたようだ。
「ねっ、ねっ、司波君は、トーラス・シルバーって、どんな人だと思いますか？」
純粋な、好奇の瞳。
これはどうやら、もう暫く付き合ってやらねば収まりそうもない、と達也は諦めた。
「そうですね……
意外と、俺たちと同じ日本人の青少年かもしれませんね」
再び壁際でビープ音が鳴った。
深雪は背筋をピンと伸ばした姿勢を崩すことなく、仕事を続けている。
――彼女は決して、今どんな顔をしているのかを、こちらに見せようとはしなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

部活連本部で開かれた九校戦準備会合は、始まる前からピリピリとした空気に包まれていた。
試合で活躍すればその生徒にはそれに見合う成績加算が与えられるが、メンバーに選ばれただけでも、長期休暇課題免除、一律Ａ評価の特典が与えられる。
それは選手だけでなく、エンジニアに選ばれた生徒も同様だ。

それだけ学校側にとっても九校戦は重要な行事であり、生徒にとっても九校戦メンバーに選ばれる事は大きなステータスとなる。
メンバーの最終調整を目的とする会合が、刺々しく生々しい雰囲気になるのもやむを得ないところだ。
――と、達也も第三者の立場であったならば、一喜一憂する同級生・上級生を同情を込め冷笑混じりに眺めていられただろうが、当事者として俎板の上に載せられる身となれば、鬱々とした気分でため息をこらえ、一刻も早くこの茶番が終わることを望むばかりだった。
九校戦自体に興味が無い訳ではない。
同年代の魔法師候補生たちを相手に自分の技術を振るうことに対する欲求は、父親の研究室でＣＡＤ改良に費やした知的な自己実現欲とは別種の飢餓感として、達也の中に確かに存在する。
一般人よりもかなり感情に乏しく作られていたが、本来ならば最も血気盛んな年頃だ。他人と競うことに全く無関心でいられるほど、彼も――クラスメイトに何と評されようとも――枯れてはいない。
ただその為には、自負と嫉妬と虚栄と嫌味と、その他諸々の渦巻くセレモニーを片付けなければならない。それが彼には憂鬱だった。
そんな彼の思いに関係なく――当たり前だが――着々と会議室の空席が埋まり、全ての空席が埋まったところで、真由美が議長席に腰を下ろした。
「それでは、九校戦メンバー選定会議を開始します」
既に選手・エンジニアの内定通知を受けている二、三年生のメンバーと、実施競技各部部長、生徒会役員（但し、深雪は生徒会室で留守番中）、部活連執行部を出席者とする大人数の会議が始まった。
達也に与えられた席は、内定メンバーと同じオブザーバー席だった。
そして彼のような異分子を目敏く見つけ出す煩型（うるさ）は、ある程度以上の規模の集団には必ずと言っていいほど存在する。
案の定会議は、冒頭早くも、何故この場に一年の二科生がいるの

か、という所から縺(もつ)れて行った。
達也に対して、好意的な視線が無かった訳ではない。
寧ろ、予想外に好意的な意見が多かった。
同級生と違い上級生の間には、風紀委員としての実績がある達也は二科生と言っても別格だ、という認識が存在するようだった。
それでも尚、反対意見の方が多い。
それも明確な反対、論理的な反対ではなく、感情的な、消極的な反対である為、余計に、ダラダラといつまでも結論が出ない迷走状態に陥っていた。
「要するに」
不意に、重々しい声が議場を圧した。
然程大きな声では無かったが、その場の誰もが無秩序な言い合いを止めて、発言者へ目を向けた。
それまで沈黙を守っていた克人が、自分に向けられた視線を端から一通り見返して、言葉を継いだ。
「司波の技能がどの程度のものか分からない点が問題になっていると理解したが、もしそうであるならば、実際に確かめてみるのが一番だろう」
広い室内が静まりかえった。
それは単純で効果的で、誰も文句のつけようがない結果が明らかになる反面、少なからぬリスクを伴うが故に、誰も言い出さなかった解決策だった。
「……もっともな意見だが、具体的にはどうする？」
「今から実際に調整をやらせてみればいい」
沈黙を破った摩利の問い掛けに対する克人の答えは、またしても単純明瞭なものだった。
「何なら俺が実験台になるが」
現在実用に供されているＣＡＤは、使用者に合わせて調整しなければならない。
十人の魔法師がいれば、同じ機種を使用しても十通りの調整が必

要となる。
魔法師はＣＡＤが展開した起動式を自分の無意識領域へそのまま取り込む。
つまり、魔法師の精神は自分のＣＡＤに対して無防備な状態になっている。
近年のＣＡＤは、起動式の読込を円滑化・高速化するためのチューニング機能を備えており、それだけ使用者の精神に対する影響力が強い。
このチューニングが狂うと、魔法効率の低下から始まって不快感、頭痛、眩暈や吐き気、酷くなると幻覚症状などの精神的ダメージをこうむることになる為、最新・高機能なＣＡＤほど精確緻密な調整が必要とされる。
実力の定かでない魔工師にＣＡＤの調整を任せるということは、魔法師にとって大きなリスクを背負う行為だ。
克人の発言は、自らの発案とはいえ、勇気のあるものと言えた。
「いえ、彼を推薦したのは私ですから、その役目は私がやります」
すかさず、真由美が代役を申し出た。
責任感に基づく発言、ではあろうが、裏を返せば完全には信用されていないということであり、達也としては余り愉快なものではない。
「いえ、その役目、俺にやらせて下さい」
だが、それに続く桐原の立候補は、意外でもあり、驚きでもあり――その男気が快かった。

学校が職員・生徒に開放しているＣＡＤの調整設備は実験棟にある。
しかし今回は、実験棟の備付調整機器ではなく、九校戦で実際に使用する車載型の調整機を会議場に持ち込んでテストを行うことになった。
調整するＣＡＤも九校戦の規格に合わせた物が準備された。

本番の準備は、道具面に関する限り、滞りなく進んでいることが分かる手際の良さであり、人選面の遅れが逆に際立つ風景でもあった。

調整機の前に腰を下ろした達也と、機械を挟んでその向かい側――と言っても、お互い顔は見えない――に座る桐原を、生徒会役員と各部の部長がグルリと取り巻いている。

まず調整機の立ち上げ段階から、意地の悪い目が達也の手元に注がれていたが、日常的に、遥かに複雑な調整用機器を操作している達也にとっては、居眠りしながらでも躓きようが無いプロセスだ。

計測準備までの手順を流れるようにこなして、忌々しそうな視線をポーカーフェイスで受け流す。

「再確認させていただきますが、課題は競技用ＣＡＤに桐原先輩のＣＡＤの設定をコピーして、即時使用可能な状態に調整する、但し起動式そのものには手を加えない、で間違いありませんか」

「ええ、それでお願い」

真由美が頷くのを見て、達也は小さく首を振った。

「……どうしたの？」

「スペックの違うＣＡＤの設定をコピーするのは、余りお勧めできないんですが……仕方ありませんね。

安全第一で行きましょう」

「？」

首を傾げたのは真由美だけではなかった。ＣＡＤの設定のコピーは、機種変更の際、普通に行われていることなので、何を問題視しているのか分からなかったのだろう。

ただ流石に、あずさを始めとするエンジニアチームのメンバーは、達也の発言の意味が理解できたようだ。小さく頷く者、お手並み拝見とばかりニヤリと笑う者、概ね二通りの反応を示している。

達也はそれ以上無駄口を叩かず、早速作業に取り掛かった。

まず、桐原からＣＡＤを借りて、調整機に接続する。

設定データの抜き出しは半自動化されており、スキルの違いが表

れる作業ではない。
ただ、設定データをそのまま競技用デバイスにコピーせず、調整機に作業領域を作って保存した手順に「おや？」という表情を見せた者が数名いた。
次に、桐原本人のサイオン波特性の計測。
ヘッドセットを着け、両手を計測用パネルに置く。
これも通常の手順であり、オートアジャスター機能付きの調整機であれば、ＣＡＤをセットしてサイオン波を計測するだけで自動的に調整が完了する。
生徒が学校の調整機を使って自分でＣＡＤを調整する場合は、ほとんどこの段階止まりだ。
逆に言えば、自動調整に頼らず、マニュアルでＣＡＤのオペーレーション・システムにアクセスし、より精密な調整を施すのがエンジニアの腕の見せ所となる。
「ありがとうございます。外していただいて結構ですよ」
達也から計測終了の合図を送られて、桐原がヘッドセットを外した。
普通なら、後は設定を行うＣＡＤをセットして、自動調整結果に微調整を加えるだけだが、その為には設定済の、この場合なら設定をコピー済のＣＡＤが準備されていなければならない。
手順のミスか、と見物しているほとんどの者が思った。
それを裏付けるように、達也はディスプレイを見詰めたまま動かない。
ただその佇まいは、順番を間違えて途方に暮れているという感じではなかった。
そんな頼りなさは無く、怖くなるような真剣な眼差しがあった。
好奇心が抑えきれなかったのか、あずさがひょこっと首を伸ばして、達也の肩越しにディスプレイを見た。
「へっ？」
途端に彼女は、花の乙女には些か似つかわしくない、間の抜けた

声を上げた。
その雑音に、達也は眉一つ動かさない。
どうしたの?、と声を掛けることも憚られて、真由美と摩利もあずさの隣から、ディスプレイを覗き込んだ。
二人とも、寸でのところで声を抑えた。
そこには、当然映し出されているべきグラフ化された測定結果は表示されておらず、ディスプレイ一杯を無数の文字列が高速で流れていた。
辛うじて所々の数字が読み取れる程度で、二人には流れ去る文字列を目で追う事も出来ない。
文字の行進は、すぐに止まった。
時間にして数十秒、達也が凝視を始めてからも、五分は過ぎていない。
達也は競技用デバイスをセットして、猛然とキーボードを叩き始めた。
次々と、いくつものウインドウが、開かれては閉じる。
開いたままになっているウインドウの一つが、今の今まで読み取っていた測定結果の原データであり、もう一つのウインドウがコピー元の設定を記述した原データであることに、あずさだけは気がついた。
今、自分たちの目の前でどれほど高度なオペレーションが行われているか、理解している者はほとんどいないだろう。
この場の大多数は、今では珍しくなったキーボードオンリーの入力スピードに目を奪われていることだろう。
だが本当に驚くべきは、サイオン波特性の計測結果を、原データから直接理解するスキルだ、とあずさは思った。
このやり方なら、測定結果の全てを、デバイスのキャパが許す限り、調整に反映させることが出来る。
これは、自動調整機能に全く頼らない、完全マニュアル調整だ。
彼女の目の前で、一時作業領域に保存された設定データが瞬く間

に書き換えられた。
出来上がった設定は相変わらず生のデータだったが、あずさには辛うじて読み取ることが出来た。
安全マージンを大きく取った、まさしく「安全第一」の設定だった。
これなら自動調整よりユーザーの負うリスクは小さく、自動調整より遥かに効率の良い起動式の提供が可能だ。
実際に、試してみるまでも無かった。
この一年生の調整技能は、自分たちエンジニアチームの誰よりも、上だ。
あずさは何としても、達也をチームに引き込もうと決意した。

起動式には手を加えない、という条件だったので、調整はすぐに終わった。
見物人にとっても、呆気なく感じるほどの手際だった。
すぐにテストが行われる。
桐原の顔が、傍目に分からぬほど微かに、緊張に強張っていたのは「ご愛嬌」の範疇だろう。
実際には、事故も事故未満の不都合も、何も起こらなかった。
達也が調整したＣＡＤは、桐原愛用のデバイスと全く同じように作動した。
「桐原、感触はどうだ」
「問題ありませんね。自分の物と比べても、全く違和感がありません」
克人の問い掛けに、桐原は即答した。
それが個人的な友誼に基づく過大評価でないことは、この場にいる者ならば、魔法の発動状態を見るだけで理解できた。
ただ、魔法をスムーズに発動できた、というある意味平凡な結果以上のことは、見ているだけでは分からない。
「……一応の技術はあるようですが、当校の代表とする程のレベル

には見えません」
「仕上がり時間も、平凡なタイムだ。余り良い手際とは思えない」
「やり方が変則的ですね。それなりに意味があるのかもしれませんが……」
案の定、まず出て来たのは、地味な結果に対する否定的な評価だった。
生徒会長直々の、しかも特例的な推薦ということで、無意識のうちに目を見張るようなハイレベルの技量を期待していた反動でもあった。
「わたしは司波君のチーム入りを強く支持します！」
それに猛反発して見せたのはあずさだった。いつもの気弱な佇まいが嘘のようだ。
「彼が今、わたしたちの目の前で見せてくれた技術は、高校生レベルでは考えられないほど高度なものです。オートアジャストを使わず全てマニュアルで調整するなんて、少なくともわたしには真似できません」
「……それは確かに高度な技術かもしれないけど、出来上がりが平凡だったら余り意味は無いんじゃあ……？」
「見かけは平凡ですけど、中身は違います！
あれだけ大きく安全マージンを取りながら、効率を低下させないのは凄いことなんです！」
「中条さん、落ち着いて……
不必要に大きな安全マージンを取るより、その分を効率アップに向ける方が適切だと僕は思うけど？」
「それは……きっと、いきなりだったから……」
だが元々弁が立つ方ではないのか、勢いが尻すぼみになってしまう。
「桐原のＣＡＤは競技用の物よりハイスペックな機種です。
スペックの違いにも拘らず、使用者に違いを感じさせなかった技術は高く評価されるべきだと思いますが」

「えっ？……服部君？」
ここで助け舟を出したのは、意外なことに、服部だった。
「会長、私は司波のエンジニアチーム入りを支持します」
「はんぞーくん？」
「九校戦は、当校の威信を掛けた大会です。肩書きに拘らず、能力的にベストのメンバーを選ぶべきでしょう。
エンジニアの仕事は選手が闘い易い様にサポートすることです。桐原に『全く違和感が無い』と言わせた技術は、中条の言うように非常にレベルの高いものと判断せざるを得ない。
候補者を挙げるのにも苦労するほどエンジニアが不足している現状では、一年生とか前例が無いとか、そんなことに拘っている場合ではありません」
所々に垣間見える棘が、服部の本音を雄弁に物語っている。
であるにも拘らず、服部が達也のチーム入り支持に転じたという事態は、この場の雰囲気を変えるのに十分なインパクトを有していた。
「服部の指摘はもっともなものだと俺も思う。
司波は、我が校の代表メンバーに相応しい技量を示した。
俺も、司波のチーム入りを支持する」
克人が旗幟を明らかにしたことにより、大勢は決した。

2－（4）　空を飛ぶ魔法（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

2―（4）　空を飛ぶ魔法

いつもどおり兄妹二人きりの夕食を終えた直後、見計らったように、電話が鳴った。

ところで、ご存知の通り現代の電話機はほとんどが映像を伴う「テレビ電話」であり、電「話」機ではなく電「影（映）」機ではないか、と実にどうでもいい議論が三流文化人の間で喧（かまびす）しく交わされたことがあるが、結局、立体映像が実用化し始めた今でも「電話機」「電話」と呼ばれている。

閑話休題。

深雪は現在、食事の後片付けに台所。

流石に食器洗いまで手作業に拘ったりせずＨＡＲ任せだが、ようやく普及が始まったばかりの３Ｈ（Ｈｕｍａｎｏｉｄ　Ｈｏｍｅ　Ｈｅｌｐｅｒ；所謂「お手伝いロボット」）は、この家にはいない。鬱陶しい天井移動マニピュレーターの導入は二人揃って却下した。従って、食器の上げ下ろしは自分でやらなければならないのである。――その程度の労を惜しんでいては身体が退化してしまいます、とは深雪の弁。

再び閑話休題。

達也が電話に出たのは、要するにそういう事情であって、偶然の産物でしかなかった――はずだ。

「お久し振りです。……狙ったんですか？」

『……いや、何のことだか分からんが……久し振りだな、特尉』

画面に映ったのは不得要領な顔をした、旧知の人物だった。

「リアルタイムで話をするのは二ヶ月ぶりです。

しかし……その呼び方を使うということは、秘匿回線ですか、これは。

よくもまあ、毎回毎回一般家庭用のラインに割り込めるものですね」

『簡単ではなかったがな。

特尉、一般家庭にしては、君の家はセキュリティが厳し過ぎるのではないか？』

「最近のハッカーは見境が無いですから。家（うち）のサーバーには、色々と見られてはまずい物もありますので」

『そのようだな。今も危うく、カウンターでクラッキングを喰らいそうになった』

「そりゃ、自業自得というものです。余程深い階層までアクセスしようとしない限り、カウンタープログラムは作動しません」

『うちの新米オペレーターにも、良い薬になっただろう』

画面の中の、日焼けや火薬焼けによってなめし皮の様になった顔面に、人の悪い笑みが浮かんだ。

それにしても、三年前から少しも老けた様子がない、と、達也はその笑顔を見て思った。

地位と所属部署からして、相当な激務であるはずだが、微塵の疲れた様子も無い。

……脳裏に浮かんだ思惟に促されて、通話相手、陸軍１０１旅団・独立魔装大隊・隊長・風間玄信（はるのぶ）少佐は、前置きで時間を浪費するのは好ましくない相手だということに、達也は今更のように気がついた。

「少佐、本日はどのようなご用件なのですか？」

『そうだな、前置きはこの位にしておこうか。

まずは事務連絡だ』

「はい」

『本日、「サード・アイ」のオーバーホールを行い、部品を幾つか新型に更新した。

これに合わせて、ソフトウェアのアップデートと、性能テストを行って欲しい』

１０１旅団の読み方は、イチマルイチ旅団。百一旅団ではない。通常の編成とは別系統の、魔法装備を主兵装とした実験的な旅団で、その中にあって更に、独立魔装大隊は新開発された装備のテスト運用を担う部隊。

機密の度合いが通常の軍事機密から更に五、六段階ほど撥ね上がっており、本来ならば一介の高校生が関わり合うことなど、それどころか部隊の存在を耳にすることすらも許されないはずだ。

しかし達也は、成り行きとしか言いようの無い事情から、風間の部隊に事実上組み込まれていた。

「分かりました。明朝出頭します」

『……いや、学校を休むほど差し迫っている訳ではないが？』

「いえ、次の休みには新型デバイスのテストで研究所の方へ行く予定ですので」

『本官が口にできることではないのだろうが……高校生になって益々、学生らしくない生活になったようだな』

「この台詞は好きではないのですが、仕方がありません」

『そうだな……本官が忙しいのも、特尉が忙しいのも、仕方の無いことだ。

では明朝、いつもの所へ出頭してくれ。生憎本官は立ち会えないが、真田に話を通しておく』

「了解しました」

事務的に敬礼した達也に、画面の中の風間も事務的に答礼した。

軍の儀礼的には形のなっていない敬礼だったが、イレギュラーメンバー扱いということもあって、そこまで厳しい要求はされていない。

『では次の話だが、聞くところによると特尉、今夏の九校戦には君も参加するそうだな』

「……はい」

返事をするのに少しの間を要したが、この場合「少し」で済んだことを、賞賛されるべきだろう。

彼がエンジニアチームのメンバーに決まったのは、三時間前のことに過ぎない。

訊くだけ無駄と分かっているので、ニュースソースに関する好奇心は、心の中でねじ伏せた。

『会場は富士演習場南東エリア。これはまあ、例年のことだが……気をつけろよ、達也』

風間の話が唐突であるのはいつもの事だが、今日は唐突の度合いが別格だった。

階級でもなく苗字でもなく偽名でもなく、本当の名前で呼んだということは、上官としての警告ではなく、旧知の者としての警告ということだろうが、軍の諜報・防諜ネットワークに掛かった情報を警告として民間人、それも何の社会的地位も無い高校生に与えるなど、徒事（ただごと）ではない。

達也は気を引き締めて、続きを待った。

『該当エリアに不穏な動きがある。

不正な侵入者の痕跡も発見された』

「軍の演習場に侵入者ですか？」

『実に嘆かわしいことだがな。

また、国際犯罪シンジケートの構成員らしき東アジア人の姿が、近隣で何度も目撃されている。

去年までは無かったことだ。

時期的に見て、九校戦が狙いだと思われる』

たかが高校の対抗戦に、と言いかけて、達也は思い直した。

たかが高校生と言っても、この国この年代のトップクラスが魔法の技量を競う為に集まるのだ。

例えば、表彰式を狙って爆弾テロを仕掛ければ、この国は人材面で大きなダメージを被ることになる。

「国際犯罪シンジケートと仰いましたが？」

相手がブランシュのようなテロ組織ではなく、犯罪シンジケートならばそのような殺傷そのものを目的とする行動は取らないだろうが、テロ組織ならともかく国際犯罪組織に関して言うならば、軍人の風間は門外漢のはずである。

どうやって正体を特定したのだろうか。

『壬生に調べさせた。既に面識があると思うが』

「第一高校二年生、壬生紗耶香の御父君ですか？」

『ああ。壬生は退役後、内情に転籍して、現在の身分は外事課長だ。外国犯罪組織を担当している』

「……驚きました」

達也は素直に驚いて見せた。

諜報組織に所属する者の素性が電話口であっさり暴露されたことにも驚いたし、ある種、軍の不始末を、文官・武官の常として決して友好的とは言えないと噂される内閣府の情報機関にあっさりリークして協力を仰いだという事実にも驚いたが、それより何より、対外諜報・防諜の一責任者の娘が、外国の工作機関の息が掛かったテロ組織に下請けとはいえ所属していて、それを外事第何課かは分からないが、その課長たる父親が放置していたという非常識な放任振りに最も驚かされた。

『犯罪シンジケートとテロ工作組織は担当が別だからな。セクショナリズムは国家機関の業病だ』

そんな達也の内心を的確に言い当てることが出来たのは、付き合いの長さ故と言うより風間の個人的な洞察力と、少なからぬ共感のもたらしたものだろう。

『だが、自分が掌握している分野の情報は信頼できる。壬生の話では、香港系の犯罪シンジケート「無頭竜（Ｎｏ　Ｈｅａｄ　Ｄｒａｇｏｎ）」の下部構成員では無いか、ということだ。目的はまだ不明だが、追加情報が入り次第、連絡しよう』

「ありがとうございます」

『明日は無理だが、もしかしたら、富士で会えるかも知れん』

「楽しみにしています」
『私もだよ。……少し長話をし過ぎたようだ。新米が焦っているからそろそろ切るぞ』
どうやら、ネットワーク警察に回線割込みの尻尾を掴まれたらしい。
この場合、ネット警察の技術を褒めるべきか、風間の部下の腕に嘆息すべきか、微妙なところだ。
『師匠によろしく伝えてくれ』
「分かりました」
『ではな』
応えを返す前に、画面はブツッと暗転した。
さて、今の話の何処までを明かしていいのやら、正式な僧籍を持っているにも拘らず「似非」という言葉が良く似合う共通の師匠の顔を頭に浮かべながら、達也は小さく息を吐いた。

◇◆◇◆◇◆◇

「お兄様、よろしければお茶にしませんか……？」
いつの間にか閉められていたリビングの扉の向こうから、深雪の声が聞こえた。
どうやら達也たちの話が耳に入らぬよう、電話が終わるのをキッチンで待っていたらしい。
本来ならば、軍事機密だろうが外交機密だろうが遠慮なく話を聞けるだけの、達也より余程強い立場を深雪は有しているのだが、妹がその立場を兄の前で行使することは無かった。
達也は無言でキッチンの方へ向かい、再び声が掛かる前に閉ざされていた扉を開けた。
目を丸く見開いて硬直した深雪の手には予想通り、ティーカップとティーポット、それにお茶菓子が載せられたトレー。
「……驚かせないで下さい。

お返事下されば良いのに……深雪が吃驚した姿をお笑いになる為に足音を忍ばせるなんて、お兄様、意地悪です」

「ゴメンゴメン」

ふいっ、と拗ねた顔を横に向けた深雪からトレーを取り上げて、達也は笑いながら謝罪した。

「でも、意地悪した訳じゃないよ。

両手が塞がっているだろう、と思ったから、急いで来たんだ。

可愛い妹に、いつまでも重たい思いはさせられないからね」

「……嘘だということは百も二百も承知なのですけど……今回は騙されて差し上げます」

不機嫌な表情を保とうとしても、口元が緩んでしまっている。

兄の他愛も無い一言で簡単に懐柔されてしまう自分。

だが深雪には、それが不快ではなかった。

「今日は紅茶か」

「ええ、セカンドフラッシュの良い茶葉が手に入りましたので、たまにはよろしいかと思いまして」

深雪の言葉に頷いて、テーブルに着くなりカップを顔に近づけて達也は香りを確かめた。

「マスカテルか。珍しい……

手に入れるのに苦労したんじゃないか？」

「いえ、本当に偶々なのですけど……お兄様に喜んでいただけるのが、深雪には何よりです」

一口、ゆっくりと含んで、満ち足りた笑みを浮かべた達也を見て、深雪は心から嬉しそうな微笑を浮かべた。

「うん、紅茶も美味しいけど、このショートブレッドもとても美味しい。

これは深雪が作ってくれたんだろう？」

「はい、あの……少し、不揃いになってしまいましたけど」

「いや、全然気にならないよ。

本当に美味しい」

恥ずかしそうに俯いていた深雪は、次から次へとショートブレッドへ手を伸ばす兄の様子に、つられるように顔を上げ、やがて、ニコニコと幸せそうな笑顔になった。

風間の電話は、達也も話題にしなかったし、深雪も訊こうとはしなかった。

達也の口は、妹が作ったお茶菓子を食べ、妹が苦労して手に入れた紅茶を味わうのに忙しかったし、深雪のティータイムは、兄の満足げな顔を見るだけで充たされていた。

◇◆◇◆◇◆◇

改めて明記するまでも無く、深雪は自他共に認める優等生である。生来の才能だけでなく、努力も怠らない。

兄の世話を焼く傍ら、毎晩遅くまで勉学に勤しむ。

今日もそろそろ日付が変わろうかという時間になってようやく、電子粉流体ディスプレイ（いわゆる電子ペーパー）のスイッチを切り、デスクに収納して立ち上がった。

今日はまだ、それほど疲れていない。

このまま神経が興奮した状態ですぐにベッドに入ったのでは、なかなか寝付けないであろうことは、経験則で分かっている。サウンドスリーパーを使えばそんなことにはならないだろうが、今や普及世帯率が国内で七十パーセントに達しているこの機械を、彼女の兄は毛嫌いしている。達也が否定しているテクノロジーを、深雪が使用するはずも無かった。

気分転換に、紅茶でも淹れよう、と深雪は思った。

無論、夜更かしをする兄の為に、である。

散々苦労して、稀少品であるマスカテルの中でも最高レベルの物を手に入れた甲斐あって、今日のお茶は凄く喜んでもらえた。兄の笑顔を思い出すだけで良い夢が見られそうな気もしたが、寝る前にもう一度本物を見て、更に、頭を撫でてでももらえれば言うことは

無い。
キッチンへ向かおうとして、ふと目に入った姿見の前で足を止め、少し、考え込む。
小さく頷いた深雪の顔に、悪戯っぽい笑みが浮かんだ。

◇◆◇◆◇◆◇

「お兄様、深雪です。
お茶をお持ちしました」
「ちょうど良かった。入って」
この時間に深雪がお茶やコーヒーを持って行くのはほぼ日課と言ってもよかったが、いつもは済まなさそうに礼を言う兄が見せた、明らかに彼女を待っていたような応答に、深雪は小首を傾げた。
だが、待っていてもらえたのは、むしろ嬉しいことだ。
兄がどんな顔をするのか少しわくわくしながら、深雪は達也が研究室に使っている地下室に入った。
「ちょうど、呼びに行こうかと思っ――」
――ていたところだ、と続けるはずの台詞は、沈黙に取って代わられた。
椅子に座ったまま振り返った兄の、まじまじと自分を凝視する顔に小悪魔的な満足を覚えて、深雪はトレーを片手で保持したまま、空いている手でスカートの裾をちょこんと抓み、外連味たっぷりに膝を折って一礼した。
「……ああ、もしかして、フェアリー・ダンスのコスチュームか？」
「正解です。よくお分かりですね、お兄様」
ヒラヒラとなびくカラフルなシルクテイスト・オーガンジーが幾重にも重ねられたミニスカートと、綺麗な脚のラインを惜しげもなく見せ付ける薄手のレギンスにエナメル調のタイトなショートブーツ。

ウエストを絞った後ろ開きのベストは厚みの感じられない光沢素材で作られており、縫製によるものではなく素材自体に曲面を持たせた精確な立体成形で胸をしっかりガードしている。

ベストの下は、肩の部分に余裕を持たせ腕にピッタリと貼り付くレギンスと同じ柄のシャツ。いや、もしかしたらレギンスとシャツではなく、袖の長いユニタードなのかもしれない。ベストが無ければ女子フィギュアスケートの衣装に似ている。

そして、長い髪を纏めているのは羽の飾りがついた、イヤーパフのような幅広のカチューシャ。

この、空気抵抗と胸部保護を考慮しながら華やかさを兼ね備えた装いは、九校戦でも採用されているスポーツ系魔法競技の花形、ミラージ・バット、別名フェアリー・ダンスのコスチュームに違いなかった。

「如何ですか？」

トレーをサイドテーブルに置き、ニッコリ笑ってクルッと回ってみせる深雪。

フワッと浮かび上がるスカートが、丈の短さにも拘らず、しなやかになびく髪と相俟って、言いようも無くエレガントだった。

「とても可愛いよ。とてもよく似合っている。それに、ジャストタイミングだ」

正面を向いたところでターンを止めて、今度は両手でスカートを抓み膝を折る深雪を、達也は手放しで褒め称える。

「ありがとうございます……？」

兄が褒めてくれることについては、百パーセント確信していた。故に、お辞儀したまま紡ぎ出す台詞も、一種類しか用意しておらず、また、一種類で事足りた。

だが、達也の台詞の最後のフレーズが理解できず、予定の返礼は、予定外の疑問形になってしまった。

膝と腰を伸ばし、椅子に座ったままの達也を見上げる。

いつもの目線で「ジャストタイミング」の意味を問おうとして、

深雪は強い違和感を感じた。
正体はすぐに分かった。
腰を下ろしているにもかかわらず、達也の目がいつもの、立って並んでいる時の高さにある。
慌てて下を見て、深雪は息を呑むことになった。
そこにはあるべきものが――椅子が無かった。
達也は、右脚を上に脚を組み右膝の上に右肘をつき、身を乗り出すような体勢で……何も無い空中に座っていた。
「深雪にも、このデバイスのテストをして欲しかったんだ」
達也はそのままの姿勢でスーッと滑るように深雪へ近づいた。手が届く距離まで接近して止まり、身体を起こして脚を解き、椅子から立ち上がる時の動作で足を伸ばす。
そうすることで、彼の身体は自然に床の上へ復帰した。
「……飛行術式……常駐型重力制御魔法が完成したんですね！」
呆然としたのは僅かな間。
深雪は抱きつくような勢いで兄の手を取って、歓声を上げた。
「おめでとうございます、お兄様！」
それは、達也がずっと研究していた魔法だった。
系統魔法、四系統八種の最初に挙げられる「加速・加重」系統。
それは単純なサイコキネシスから発展した、現代魔法では最も基本的とされる系統魔法だ。
だが、加速・加重系統により理論的に実現可能な飛行術式、常駐型重力制御魔法は、その可能性が現代魔法学確立の初期から提唱されているにもかかわらず、公式に発表されている限りにおいて、今日まで実現していない。
飛行術式は、理論的には可能でも実行は不可能に近いというのが現代魔法学のコンセンサスだった。
しかし今、深雪の目の前で、現代魔法学の定説がまた一つ、覆された。
「お兄様はまたしても、不可能を可能にされました！

わたしはこの歴史的快挙の証人になれたことを、この快挙を成し遂げたお兄様の妹であることを、誇りに思います！」

今にも抱きつかんばかりに彼の右手を握り締める妹の両手を、達也は優しく左手で包み込んだ。

「ありがとう、深雪。

空を飛ぶこと自体が目的ではなかったし、古式魔法では既に実現している飛行術式だが、これでまた一歩、目標に近づくことが出来たよ」

「古式魔法の飛行術式など、事実上ＢＳ魔法師にしか使えない、属人的な異能ではありませんか。

お兄様の飛行術式は、理論的に必要な魔法力を充たしていれば、誰にでも使えるのでしょう？」

「一応、そういう風に作ったつもりだ。

それを深雪にもテストして欲しいんだが」

「喜んで！」

深雪は目を輝かせて、大きく頷いた。

術式の説明を受けた深雪は、左手に握る、調整を終えたばかりのＣＡＤに目を落とした。

いつも深雪が使っている物と同じ、携帯端末形態のＣＡＤ。

だが大きさは、小型化が進んだ深雪のＣＡＤより更に小さく、彼女の小さな掌の中にすっぽり納まる程度。

似ているのは携帯端末形態という点だけだ。

このＣＡＤは、特化型のデバイスだった。

特化型は使い慣れていなかったが、操作方法は至極簡単だ。

オン・オフのボタンがあるだけで、一旦スイッチをいれるとそれをオフにしない限り、バッテリーが尽きるまで使用者から自動的にサイオンを吸い取って起動式を処理し続けるという、ある意味暴力的と言える代物だった。

但し、サイオンの使用量は限界まで抑えられている。

ユーザーの負担を最小限のものとする工夫が、設計上の基本コンセプトになっていた。

「始めます」

抑えきれない緊張に、ごくりと喉が動いた。

呑み込むべき水分は、口内に残っていなかった。

手が震えていないのを、自分で褒めてやりたい、と深雪は思った。

もし自分がこのテストに失敗しても、兄は自分を責めたりしない。

その代わり兄は一から、この「飛行デバイス」の設計をやり直すだろう。

自分の力不足で兄にそんな無理をさせるのは、絶対に嫌だった。

ＣＡＤのスイッチを入れる。

何も意識しなくても、自分の身体からサイオンが吸い取られていくのが分かった。

但し、意識していなければ、気がつかない程の、微量の吸収。

日常的に放出している、余剰サイオンの流量に毛が生えた程度の規模に過ぎない。

そう気付いたときには、起動式が魔法演算領域に写し取られていた。

予め教えられてはいたが、驚くほど小規模な起動式だ。

深雪の処理能力なら、同じものを数十個同時に処理してもまだ余裕がありそうな程に。

それでいながら、必要な要素は余すことなく記述されている。

徹底的に無駄を削ぎ落とし効率化された、洗練の極みにある起動式だ、と深雪は思った。

起動式の変数部分にデータをインプットして魔法式を構成する。

通常ならば、このプロセスを魔法師が意識することはない。

魔法師は現実に対する改変を、言語、数式、若しくは映像により、明瞭にイメージして無意識領域へ送る。

このイメージを魔法式のインプットデータに変換するのが魔法演算領域の役割であり、イメージを補完するのが起動式の役割だ。起

動式の変数部分とは、魔法師が特に強くイメージしなければならない部分を指す。

魔法師は自分の中に読み込まれた起動式を認識し、自分の中で構築された魔法式を認識することが出来る。しかし、魔法式を構築する処理そのものは、本人の意思が及ばぬ半自動プロセス。

またそうでなければ、人間の情報処理能力で物理現象を改変するに足る情報体の作成など、出来るはずもなかった。

深雪は、天井の高さまで浮かび上がる自分をイメージした。

その途端、重力の束縛が消えた。

五感から自重という情報が消えて、自分の身体が無くなってしまったような錯覚が、軽いパニックをもたらす。

しかし、それ以上の快感が深雪の心を満たした。

空を飛ぶとは、これほどの解放感をもたらすものなのか。

これと同じ快感を得てきたであろう宇宙飛行士に嫉妬しそうだった。

同時に、狭い船内やゴテゴテとした宇宙服を着なければこの快感を味わうことの出来ない彼らに、憐れみを覚えた。

こんな地下室ではなく、大空を自由に飛んでみたい、と深雪は思った。

「どうだ？　起動式の連続処理が負担になったりしていないか？」

兄の声に、ハッと現実に引き戻された。

大切な実験中、快感に溺れそうになった自分を、深雪は恥ずかしいと思った。

だが今は、自己嫌悪に浸っている場合でもない。

しっかりしなさい、深雪、と心の中で自分を叱りつけて、深雪は兄の質問に答えた。

「大丈夫です。頭痛も倦怠感もありません」

「良かった。

じゃあ次は、ゆっくり水平移動してみてくれ。

慣れてきたら徐々にスピードを上げて、思うように飛んでみてく

れないか」
「分かりました」
兄に言われたとおり、ゆっくりと水平に移動する自分をイメージする。
自動的に展開・複写されている極小規模の起動式から、重力のベクトルを水平方向に改変する魔法式が構築される。
この飛行デバイスの仕組は、連続的に処理される起動式による魔法の連続発動。
変数の代入値は、新たなイメージが演算領域に読み込まれない限り、前の値を引き継ぐようにプログラムされている。
同じ起動式を魔法演算領域内で複製し変数代入のみを求めるルーブキャストと、いわば対を成すシステムだ。
「魔法の断続感は無いか？」
「ありません。
流石はお兄様です。
タイムレコーダー機能は完璧に作動しています」
このシステムの要は、発動中の魔法の発動時点を正確に記録する機能。
こういうデジタルな処理は、人間には不向きなもので、機械により補完してやらなければならない部分である。
魔法技能のみによる飛行に拘っていては、このシステムは到底実現不可能なものだった。
達也に指示されたように、深雪は徐々に飛び回るスピードを上げた。
スピードだけでなく、ターン、スピン、宙返りなど、自由自在に空中を舞い踊る。
軽やかになびくスカートとしなやかに撥ねる長い髪。伸び、反らされたはずみに露わとなる優美なライン。
いつしか達也は観察者の立場を忘れ、思いがけない天女の舞に忘我となって見とれていた。

※＊※＊※＊※＊※＊※

◎飛行術式に関する研究ノート（司波達也）

加速・加重系統を得意とする魔法師は、数十メートルをジャンプすることが出来る。

世界には百メートルを超える高飛び記録を樹立した魔法師もいる。また、空中で落下速度を緩めることも出来る。

二千メートルの高度から、素潜りならぬ素飛び降りを成功させた魔法師もいる。

だがこれまで、空を飛ぶことに成功した魔法師はいない。

短時間、浮かぶことは出来るが、そのまま浮かび続けることが出来ない。

浮かんだまま移動することも出来ない。

魔法式は、現実を改変する現象の種類、方向性、強度、座標等と共に、必須項目として終了条件を定義しなければならない。

現象としての終了条件が定義できない魔法は、時間で終了条件を定義する。

百メートルを飛び上がる、という魔法は、到達高度という終了条件が決まっているが故に、持続時間の定義が必要ない。二千メートルの高度から飛び降りる、という魔法は、対地高度ゼロの時点で落下速度をゼロにする、という終了条件が定められるから、落下に要する時間を計算する必要は無い。（但し飛び上がる場合は、加速度を定義する代わりに持続時間を定義することで、自動的に加速度を調整することが多い。今日普及している起動式は、持続時間の定義が不要な場合も持続時間を変数としているものが一般的であり、魔法の効率を損なう要因となっている）

だが浮遊の魔法は、ただ空中に浮かぶことが目的であって、魔法

発動時点で目的地が決まっていない。それ故に、時間で終了条件を定義しなければならない。

既存の浮遊術式は必ず制限時間付きであり、魔法師に余力があっても、発動時点で定義した時間を延長する為には、改変中のエイドスに対して新たな改変を行わなければならない。

これはつまり、自分の魔法に対して、新たな魔法を上書きしなければならないということだ。

発動中の魔法に別の魔法を上書きする為には、より強い干渉力が必要となる。

また、翼も推進機関も無く空中を移動する為には重力の作用する方向と強さを変えるしかない。浮遊という現象改変中に重力のベクトルを変えるという新たな現象改変を付け加える場合も浮遊時間延長と同じく、上書きを可能とする干渉力が必要となってしまう。

つまり従来のアプローチで飛行魔法を実現する為には、干渉強度を段階的に引き上げながら魔法を発動し続けるというテクニックが必要となる。

だが、同一の結果を得る魔法を、異なる干渉強度で連続的に発動する、などという職人芸は、現実には不可能だった。

普通は、エイドスに対する改変の規模に応じて、干渉強度は自動的に決まる。

広域干渉のように、最大の干渉強度で、という発動の仕方は可能でも、干渉強度を意識的に調整するとなると、使い分けが出来てもせいぜい五～十段階程度。

そもそも揚力にも浮力にも頼らず、重力に逆らって空中に浮かぶという現象は、自然現象に著しく反するものであり、強いエイドス干渉力が必要になる。

ただでさえ強い干渉力が必要となる魔法を、干渉強度を段階的に高めながら連続発動するなど、理論的には可能でも現実には不可能に等しい、というのが今日における魔法学界のコンセンサスだった。

しかしこれは、魔法を上書きし続けることに限界があるのであっ

て、飛行術式そのものが不可能であることを意味しない。

そもそも一つの術式は、複数の魔法工程を組み合わせて現象の改変を行うものであり、一つの対象物に複数の魔法を同時に発動することは当たり前に行われている。

要するに、ある種の魔法工程が発動している最中に、これと相反する現象改変を行う魔法を発動させることに無理が生じているのだ。

相対高度十メートルの座標に十秒後まで浮かび続けるという術式が発動して二秒後に、相対高度五メートルまで五秒で下降して五秒間静止するという術式を実行しようとすると、定義された現象改変が相克を起こし、より強い干渉力による強制的な魔法の上書きが必要となる。

では例えば、相対高度十メートルの座標に十秒後まで浮かび続けるという術式が発動して十秒後に、相対高度五メートルまで五秒で下降して五秒間静止するという術式を実行しようとしたならばどうか。

十秒間経過時点で前の術式は効力を失っており、次の術式発動の瞬間、対象物には何の現象改変も行われていない。対象物はまさに自由落下を開始しようとしている状態にある。五秒間で五メートル下降して五秒間静止するという術式は何の相克も起こさない。

更に、その術式発動十秒後に、相対高度二十メートルまで二秒で上昇して八秒間静止するという術式も、更にその術式発動十秒後に水平方向へ重力加速度で五秒間移動するという術式も、相克無しに発動する。

つまり短時間で効力の切れる魔法を途切れ目無く連続的に発動することで、魔法の上書きによる限界に突き当たることなく、自在に空中を浮遊し移動する飛行術式が可能となる。

試作した飛行術式用のＣＡＤは、コンマ五秒毎に起動式が展開され、発動中の魔法の発動時点からコンマ五秒後に継続時間コンマ五秒で作用するよう設定された魔法式が連続して構築されるようになっている。

即ち、コンマ五秒ごとに新たな術式を発動し、飛行状態を変更する仕様となっている。

この間隔は、使用する魔法師の処理速度に応じて調整されるべきものである。

継続時間を極めて短時間に設定すれば、本来ならば負担の大きい重力制御魔法も小さな負荷で発動できるし、他の魔法を多重発動する余裕も生じる。

変数のインプットはループキャストのロジックを逆転させ、新たな入力が完了しない限り、前の入力値を引き継ぐようにプログラムした。新たなインプットの最中であっても、それが完了していない限り、同じ状態が維持される。空中に静止中は同じ場所に浮かび続け、加速中は同じ加速度で、等速飛行中は同じ速度で飛行を続ける。

尚、魔法の発動時点とそこからの経過時間を記録するシステムはソフトウェアにより実装しているが、普及にはハードウェアの実装が望ましい。

また、術者から自動的にサイオンの供給を受けるシステムについても、現在のソフトウェアによる処理からハードウェアによる処理が望ましい。

この点については、牛山主任に相談してみなければならない。

2－（5）　四葉家の呪い（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

2－（5）　四葉家の呪い

フォア・リーブス・テクノロジー（英語発音を忠実に表記するなら「フォー・リーヴズ・テクロノジー」だが、会社登記及び商標登録の表記を故意に「フォア・リーブス」としている）、略称ＦＬＴのＣＡＤ開発センターは達也たちの住まいから交通機関を乗り継いで二時間の辺鄙な場所にある。

達也にとっては通い慣れた道だが、慣れれば逆に、長距離の移動は単なる面倒でしかなくなる。

「深雪……？」

「はい。何でしょうか、お兄様」

「……いや、すまない。何でもないんだ」

「はい……？」

本社付属の研究室ではなく、こちらの研究所へ通う時は大抵深雪も一緒なので、同じくらい慣れてしまっているはずだが、ピクニックにでも来ているような上機嫌に、達也は思わず理由を訊きたくなったのである。

途中で言い淀んだのは、変な質問だと思い直したからだった。

当然深雪は首を傾げたが、すぐにまた、鼻歌が漏れて来そうな上機嫌に戻った。

既に研究所の敷地の中なので、実際に歌い出したりはしなかったが。

ここは技術力を売りにする企業の研究中枢であり、ＦＬＴの謂わば心臓部である。警備もそれに見合った厳重なものだ。機械による監視だけでなく、人手を使った警備も過剰なほどに配置されている。

だが、当たり前のことながら、達也たちが呼び止められることは無い。

受付すら通さずに、窓の無い通路をどんどん奥へと進んでいく。

やがて二人は、壁一面がガラス張りとなった部屋に出た。

ガラスの向こうは半地下吹き抜けの広い、格納庫のような空間。
対面には、この部屋と同じような観測室。
ここは、ＣＡＤのテストが行われている区画なのである。
部屋の中では十人以上の技術者や研究員が、忙(せわ)しなく歩き回り、議論を交わし、計測器を動かしていた。
「あっ、御曹司！」
全員がそうして忙しく働いているにも拘らず、観測室に入った達也はすぐに声を掛けられた。
珍しいことに――多分、この場所以外ではないことだが――注目を集め敬意を以って迎えられているのは、深雪ではなく、達也。
御曹司という呼び方は当初、彼がオーナーの息子のコネでここに出入りしていることを揶揄するものだったが、今では次期リーダーに対する尊称として使用されている。
達也としては、恥ずかしいから止めて欲しい呼称だったが、彼らが今では好意からそう呼んでいることも理解できるので、彼の方から妥協しているのだった。
「お邪魔します。牛山主任はどちらに？」
兄に向けられている敬意の眼差しに我が事のような上機嫌の微笑を振り撒いて、それが業務妨害になりかけている深雪を背後に従えながら、最初に話しかけてきた白衣の研究員に尋ねる達也。
その問い掛けに対する応えは、人垣の背後から生じた。
「お呼びですかい、ミスター？」
人の壁を掻き分けて姿を見せたのは、ヒョロリと背の高い、但し弱さは微塵も感じさせない、灰色の作業服に身を包んだ技術者だった。
「すみません、主任。お忙しい中を、お呼び立てして」
「おっと、いけませんな、ミスター」
折り目正しく一礼した達也に向かって、牛山という名の技術者は、苦い顔で頭(かぶり)を振った。
「腰が低いのも結構ですが、ここにいるのはアンタの手下だ。

手下に謙り過ぎちゃあ、示しが付きません」

「いえ、皆さんは親父に雇われているのであって、俺の部下という訳では……」

「何を仰いますやら。天下のミスター・シルバーともあろうお方が。俺たちゃあ皆、アンタの下で働けるのを光栄に思ってるんですぜ」

牛山の声に、彼の声が届く範囲にいた技術者、研究者の全員が頷いた。

フォア・リーブス・テクノロジーＣＡＤ開発第三課。

ここは世に言う『シルバーモデル』の開発部署である。

シルバーモデルは、今ではＦＬＴの技術力を代表する製品として世間から認知されている。技術部のはみ出し者を集めて作られた、謂わば厄介払いの部署であった開発第三課が、シルバーモデルを世に出したことでＦＬＴ社内で高い発言力を有するに至った。

故にここでは、シルバーモデル開発の中心人物であるトーラス・シルバーの片割れたる達也に対して、技術者や研究者が高い忠誠心を抱くのは無理のないことだった。

「それを言うなら、名実共に此処のヘッドはミスター・トーラス、貴方でしょう。

管理職になりたくないって貴方が駄々をこねるから、いつまで経っても第三課は課長も係長も不在のままなんですよ」

「止して下さいよ。『ミスター』も『トーラス』も、柄じゃねえって。

俺はただの技術屋でさぁ。

アンタの天才的アイデアを少しでも使い易くする為に、チョコチョコッと部品を弄っているだけの俺が共同開発者なんて、誰より俺自身が納得してねえ。

俺はそんな恥知らずな人間じゃありませんぜ。

御曹司が未成年の学生さんで、単独の開発権利者だと拙いってっから、仕方なく名前を連ねているだけです」

「……牛山さんの技術力が無ければ、ループ・キャストは実現しま

せんでしたよ。
俺にはハードに関する知識も技能もノウハウも不足している。
技術も理論も、ハードとして製品化して、始めて意味を持つものでしょう？」
「……あ～っ、止めヤメ。やっぱ、理屈じゃアンタにゃ敵わねえや。
それよか仕事の話をしましょうや。
まさか、俺たちの顔を見に来ただけじゃねえでしょう？」
頭をガリガリ掻きながら、牛山が白旗を揚げると、達也も生真面目な表情を崩して人の悪い笑みを浮かべた。
「オーケー、牛山さん。
今日の試作品はこれです」
意識的に変えた、ざっくばらんな言葉遣いと仕草で差し出された携帯端末形態のＣＡＤを、牛山は十秒ほど、まじまじと見詰めた。
この試作用ＣＡＤ、Ｔ－七型は、ある目的の為に牛山が用立てたものだ。
それが試作機として、ソフトウェア実装済になっているということは……
「もしかしてこれは……飛行デバイスですかい？」
達也の手からＣＡＤを摘み上げた指が、少し震えていた。
「ええ。牛山さんに作ってもらった試作用ハードに、常駐型重力制御魔法の起動式をプログラムした物です。
この試作用、システムの書き換えが簡単で、とてもやり易かったですよ」
「テストは……」
「いつも通り、俺と深雪でテストしてみましたけど、俺たちは一般的な魔法師とは言えませんからね……」
息を呑む音が聞こえた。
一人や二人ではなく、彼らの声を聞いていた全員が、強張った顔で牛山の手元を凝視していた。
「……テツ、Ｔ－七型の手持ちは幾つだ？」

やがて、静かに、と言っても差し支えの無い口調で、牛山が部下に尋ねた。
十機です、という答えに半ば閉ざしていた目をカッと見開く。
「バカ野郎！　たった十機かよ！？　何で補充しとかねえんだ！　ああ？　部品の発注なんぞ後回しだ。あるだけ全部調整機にセットして御曹司のシステムをフルコピーしろ！
ヒロ、テスターを全員呼び出せ！　なにぃ？　休みだぁ！？　そんなもん関係あるか！
首に縄つけて引きずって来い！
残りのヤローどもは今の作業を中断して精密計測の準備だ！　分かってんのか？　飛行術式だぞ？　現代魔法の歴史が変わるんだ！」
内線がつながっていたのだろう。
この部屋の中だけでなく対面の計測室でも、休日出勤していた所員たちがバタバタと一斉に動き出した。

試験場の高い天井から通信ケーブルが吊り下げられ、テスターが着込むベストにつながれた。
このケーブルは命綱も兼ねている。
浮遊の術式は既知のものであり、このテストラボでも測定を経験済みだが、飛行術式は空中に浮かぶというところまでは同じでも、背後にある仕組みは全く違う。ジャンプとも、落下減速とも異なる、未知の魔法だ。
テスターの顔は緊張に蒼褪めている。
新種の魔法は、それが良く知られた魔法のバリエーションに過ぎないものであっても、どんなリスクが潜んでいるか分からない。
魔法式の一寸したバグが、魔法師を死に至らしめる可能性もゼロではない。
それが全く新しいスキームを用いた、（知られている限り）世界初の魔法となれば、どれほど用心しても用心のし過ぎということは

無い。
床面が緩衝素材に切替られ、吊り下げテストを行って、ようやく実験準備が完了となる。
「実験開始」
観測室に退避した――これは観測員の安全の為だけでなく、テスターの安全の為でもある――牛山の合図で、テストが開始された。
上からではヘルメットの陰に隠れて、テスターの表情は良く見えない。
だが、二十代にして既にベテランと言えるだけのキャリアを持つファースト・テスターが、グッと歯を噛み締めたのは見て取れた。
それでも、ＣＡＤのスイッチを入れる動作に躊躇は、無い。
「離床を確認」
「床面接地圧の上昇、観測されませんでした」
視認するより早く、計測機器からの報告が飛び交う。
「上昇加速度の誤差は許容範囲内」
「ＣＡＤの動作は安定しています」
ゆっくりとテスターの身体が上昇する。
今やはっきりと、その足が床から離れているのが分かる。
弛んだケーブルが、吊り上げによるものではないと物語っている。
観測機器の音と計測結果を報告する声以外、観測室には衣擦れの音一つ無かった。
全員が動くことを忘れて、目の前の光景を、計測器の示す数値を凝視していた。
「上方への加速度減少……ゼロ。等速で上昇中」
ゆっくりと浮かび上がるテスターの身体が、観測室の目線に並ぶ。
「上昇速度ゼロ。停止を確認」
ここまでは、浮遊術式でも可能な範囲。
「水平方向への加速を検知」
誰かが、誰もが、息を吸い込み、息を詰めた。
「加速停止。毎秒一メートルで水平移動中」

観測報告が耳に入る前に、ハッキリと分かる速度で空中を移動しているテスターの姿が目に入る。
「動いた……」
「飛んでる……」
半信半疑の呟きが逆に、目にするものが事実であると実感させる。
『テスター・ワンより観測室へ。
僕は今、空中を歩いて……いや……空を、飛んでいる。
僕は、自由だ……』
そして予定外の通信がスピーカーから流れ出して、驚愕に押し込められていた感情の、箍が外れた。
「やった！」
「成功だ！」
「おめでとうございます、御曹司！」
万歳を叫び始める観測要員。
ランダムな航跡を空中に描くテスター。
狂騒を示す所員たちの祝福を、達也は独り熱に冒されていない、穏やかな笑顔で受け止めていた。

「お前ら、揃いも揃ってアホか……？」
牛山が呆れ顔で見下ろしているのは、魔法の使い過ぎでダウンしたテスターたちである。
テストは予定時間を大きく超過し、九人のテスター全員の魔法力が尽きるまで続いた。
観測が上手く行かなかったのではなく、テスターが止めなかったのである。
彼らの要望で命綱を兼ねた有線ケーブルは無線通信に切り替えられ、仕舞いには予定に無かった空中での鬼ごっこを始める有様だった。
「常駐型魔法がそんなに長時間、使える訳ねえだろうがよ」
現代魔法のほとんどは、瞬間的に発動するもの。

継続的に作用する魔法の大半は、発動時に作用時間を指定するのであって、連続的に発動し続ける魔法を常用する魔法師は少ない。例えば高周波ブレードは常駐型に分類されてはいるが、実態はほとんどの遣い手が斬撃の都度、魔法を発動し直している。

魔法を連続的に発動するというテクニック自体、つい最近まで一部の魔法師の特殊技能とされていたのであり、ループ・キャスト・システムの実用化によって市民権を獲得したばかりなのである。

「バカやったツケは自分で払えよ。超勤手当なんぞ出さねーからな」

幸い、後遺症の残るような魔法力枯渇を起こしたテスターはいなかった。

洒落になる範囲で済んだので、牛山は抗議の声を鼻先で笑い飛ばして粉砕し、テスト結果に目を通している達也の許へ歩み寄った。

「何か気になるところがあるんですかい？」

振り返った達也の表情は、満足には程遠かった。

「欲を言えば限(きり)が無いけど、ね」

「まあ、それはそうですな」

牛山は、適当に相槌を打った。

彼は達也が、基本的に水臭い性質(たち)で、積極的なアプローチは逆効果だということを弁えている。

「でもやはり、起動式の連続処理は、負担が大き過ぎるようだと思って」

「そりゃ、お姫様や御曹司に比べりゃ、そこらの魔法師の保有するサイオン量は微々たるもんですからね」

現代の魔法力の尺度で測れば、達也は落ちこぼれの魔法遣いでしかない。

だが魔法力の尺度は、魔法の発達に伴い、時代により変遷してきたものだ。

例えば三十年前は、起動式のノウハウが現代ほど進んでおらず、起動式から魔法式を構築する速度に意味を持たせることが、実践的には無意味と言えるほど、遅かった。魔法式の効率は低く、実効性

のある魔法式を構築する為には現代の何倍ものサイオンが必要とされていた。

その当時は、魔法式の構築速度より魔法師が体内（肉体・精神体を合わせた「体内」）に保有するサイオンの量が、魔法師の力量を測る尺度として重要視されていた。

その当時の尺度を当てはめれば、達也は深雪と共にSクラスの判定を受けるサイオンを保有している。

現代においては、起動式と魔法式、そしてCADの進歩により、サイオンの保有量が直接問題となることは少ない。

無系統魔法のうちで、サイオンそのものを放出する術式以外では、見栄え以上の意味は通常、持たない。

だが起動式を展開するにも魔法式を構築するにもサイオンを消費することには変わりなく、それが何百回、何千回と繰り返されれば、一回一回の消費量は小さくても、やはり魔法師にとって負担となってくるのである。

「CADのサイオン自動吸引スキームをもっと効率化しないと……」

「……それは俺の方で考えますよ。ソフトじゃなくハードで処理すりゃ、少しは負担も減るでしょう。

タイムレコーダーも専用回路をつけた方が良い」

少し考え込みながら牛山がそう言うと、達也は我が意を得たりとばかりに破顔した。

「実は、同じ事を相談しようと思っていました」

「それは光栄ですな」

二人はニヤリと、同じような笑みを交し合った。

◇◆◇◆◇◆◇

ハード面の改善ポイントは幾つか判明したものの、術式の稼動について言えば、満足の行く結果が得られた。市販のCAD、平均的な魔法師でも、飛行術式は十分可能だと判明したことが、今日、最

大の収穫だ。
今日の実験結果を整理して、来週中にでも早速、飛行術式のノウハウをトーラス・シルバーの名で発表する。こういうことは拙速なくらいの方が望ましい。「世界初」と「世界で二番目」ではインパクトがまるで違うからだ。
またそれとは別に、飛行術式用の専用ＣＡＤをデザイン面から新設計し九月（半期決算月）を目処に製品化する。
以上二つのスケジュールを詰めて、打ち合わせは終わった。
ティーラウンジで待たせていた深雪と合流し、家路につく達也たち。
多忙を押して、と言うより蹴り倒して見送りに来た牛山は、申し訳無さそうに頭を掻いた。
「すみません、一応、本部長には連絡しといたんですが……」
実験中も、実験成功が明らかになっても、各開発センターを統括するＦＬＴの開発本部長である達也たちの父親が遂に顔を見せなかったことを、牛山は気に病んでいるのだった。
「気にしないで下さい。今日は休日ですし、出て来ているとしても本社の方でしょう」
本音を言えば、顔を合わせないで済む方が、達也としては気が楽だった。
深雪としては寧ろ、顔を合わせたくなかった。
だが曲がりなりにもＦＬＴの社員である牛山に、オーナー一家の恥を晒すのは好ましいことではなかった。
そういう思惑から、建前論で返した達也の言葉に、牛山は益々居心地悪げな表情を浮かべた。
「……いえ、実は、本部長は今日、こちらにいらっしゃってるんですが……」
深雪の眉がピクッと吊り上ったのが、背中を向けていても手に取るように達也には分かった。
達也はといえば、胸を撫で下ろしたい気分だった。

危ういところでニアミスが避けられた訳だから。
「本部長ともなれば、現場に顔を出せる時間も減るということでしょう。
決して研究部門を軽視している訳では無いと思いますよ」
「いえ、そりゃあ分かってますが。予算も以前の倍に増やしてもらいましたし」
話を逸らし、逆に牛山を慰める形に捻じ曲げる。
余計に恐縮してしまった牛山には申し訳ないが、達也にだって話題にしたくないことはあるのだ。
だが世の中、中々上手くは行かないものである。
牛山と別れ、研究所を後にしようと、玄関ホールまであと一区画という廊下で、達也たちはバッタリ、顔を合わせたくない人物と鉢合わせしてしまった。
「これは深雪お嬢様、ご無沙汰いたしております」
無言で顔を見合わせてしまった親子三人の空間で、最初に口火を切ったのは四人目の人物だった。
達也にも、深雪にも、旧知の人物だが、「旧知」とはこの場合、「親しい」ということを意味しない。
「お久し振りです、青木さん。こちらこそご無沙汰いたしております。
しかし、ここにおりますのは、わたしだけではありませんが。
お父様も、お元気そうですね。先日はお電話をありがとうございました。しかし偶には、実の息子にお声を掛けていただいても罰は当たらないと存じますが？」
滑らかに返された可憐な声は、棘だらけだった。
「お言葉ですがお嬢様、この青木は四葉家の執事として、四葉家の財産管理の一端を任せられている者にございますれば、一介のボディガードに礼を示せと仰せられましても。
家内にも秩序というものがございますので」
「わたしの兄ですよ」

深雪の声は、精一杯、平静を保っている。だがそろそろ限界に近いことは、少なくとも達也には、明らかだった。

「畏れながら、深雪お嬢様は四葉家次期当主の座を家中の皆より望まれているお方。

お嬢様の護衛役に過ぎぬ其処の者とは立場が異なります」

「おや、青木さん。口を挟んで失礼かとは存じますが、随分穏やかならぬことを仰る」

あからさまな侮蔑の言葉も態度も、達也の心には少しも響かない。彼の心はそういう風に出来ている。

それより、彼の代わりに深雪が怒り、傷つくことが、達也には厭わしかった。

「構わんよ。たかがボディガードとはいえ、君が深夜様のご子息であることは間違いない。

多少礼儀というものを勘違いしても仕方なかろう」

「深雪が次の四葉家当主になることを、四葉家の使用人全員が望んでいる、と言われたように聞こえましたが、それは他の候補者の皆様に対して、余りにも不穏当ではありませんか？」

だから深雪が逆上する前に、間髪いれず言葉を畳み掛ける必要があった。

「叔母上はまだ、後継者を指名されていないはずですが。

それとも、叔母から指名の内定でもお聞きになられましたか」

見るからに切れ者の、執事というより弁護士といった風情の壮年の紳士が、十六歳の少年の指摘に言葉を詰まらせた。

「もし叔母がそのような意向を固めたのであれば、深雪にも色々と準備をさせなければなりませんので、いい機会ですから是非お教え頂きたいんですが」

「……真夜様はまだ何も仰せになられていない」

苦虫を噛み潰した表情で、青木が答える。

達也はわざとらしく、眼を丸くして見せた。

「これは驚いた！

序列第四位の執事が、次期当主候補者に、家督相続について自分だけの思い込みに過ぎない憶測を吹き込んだという訳ですか？

さて、秩序を乱しているのは一体どなたなのやら」

芝居がかった仕草でため息をつく達也を、青木は赤い顔で睨みつけた。

「……憶測ではない。同じ家中に仕えていれば、何となく思いは伝わってくるものなのだ。

他心通などなくとも、心を同じくする者同士、思いは通じる。

心を持たぬフェイク如きに分かりはしないだろうが」

突如、結露を通り越して、壁に霜が貼りついた。

空調が、急激に低下した気温を元に戻そうと、唸りを上げる。

深雪の足元から渦を巻いて流れ出す冷気。

だがそれは、達也の左手が指差すと同時に、まるで磁気テープを高速で巻き戻している時の様な軋み音――但し、魔法を知覚できる者のみに聞こえる幻聴――と共に、消失した。

赤や蒼を通り過ぎて蒼白となった妹を片手で抱き寄せながら、達也は斬りつけるような厳しい眼差しを青木に向けた。

「その『心を持たぬフェイク』を作ったのは、俺の母親にして四葉家現当主・四葉真夜の姉である司波深夜、旧姓四葉深夜ですが。

禁忌の系統外魔法、精神構造干渉を使い、意識領域内で最も強い想念を生み出す『強い情動を司る部分』を白紙化（フォーマット）して、魔法演算を行うエミュレータを植え付ける人造魔法師実験を計画したのは、当時四葉家の当主となったばかりの四葉真夜で、魔法の才能が無いと判明した六歳の息子を使ってそれを施術したのが司波深夜です。

つまり、その実験台であるこの俺を贋作（フェイク）呼ばわりするということは、四葉家現当主とその姉が行った魔法実験が贋作作りだったと誹謗している、ということになるんですが、その点は当然、理解しておいででしょうね？」

「……」

「達也、止めなさい」

絶句し、硬直した青木を庇い、達也を制止したのは、それまで無言を続けていた彼の父親、司波龍郎だった。

「お母さんを悪く言うものではない」

しかし、その言葉は全く的を外れた頓珍漢なもの。

ただ、本家のご機嫌を損なわない為の、保身の台詞。

この会社は四葉家が正体を隠して出資し設立したものであり、亡き妻の持ち株を相続して最大株主になったとはいえ、実質的な支配権は未だ四葉家に握られているのだから、卑屈になる気持ちも分からないではないのだが……

達也は思わず、失笑を漏らしそうになった。

「達也、お前がお母さんを恨む気持ちも解らないではないが……」

そして、彼のそんな表情すら、この父親には見えていない。

ここは早く別れた方が、お互いの精神衛生の為だ、と達也は心の底から思った。

だがその前に、一言だけ付け加えておく必要を感じた。

「親父、それは勘違いだ。

俺は母さんを恨んでなどいない」

「そ、そうか」

付け加えるのは一言だけ。

口にしなかった台詞は、敢えて聞かせる必要のないものだ。

彼の心に「恨む」という機能は残っていない。

強い怒り、強い悲しみ、強い嫉妬、怨恨、憎悪、過剰な食欲、過剰な性欲、過剰な睡眠欲、そして……恋愛感情。

彼は、怒りに我を忘れることがない。

悲嘆に暮れることがない。

嫉妬に胸を焦がすことがない。

恨みを持たず、憎しみを持たない。

異性に心を奪われることがない。

食欲はあれど、暴食の欲求は生じない。

性欲はあれど、淫楽の欲求は生じない。

睡眠欲はあれど、惰眠の欲求は生じない
情も欲も、その最も強い部分は、世界中で彼の母親だけが使えた特殊な魔法によって、彼の心から抹消されてしまっている。
彼は母親を恨んでなどいない。
怒ってもいない。
彼は本気で怒ることが出来ないし、本気で恨むことが出来ないのだから。
彼に残された唯一の強い感情は、四葉一族の中で彼に課せられた義務に伴い、意図的に残された一つの情念だけだった。
無論それは、この父親に対する肉親の情などではなく。
達也は、すすり泣く深雪の肩を抱いたまま、別れも告げずその場を後にした。

2－（5）　四葉家の呪い（後書き）

2－（4）と2－（5）は元々一話に纏められたエピソードでしたが、飛行魔法の解説を挿入する関係で二話に分割しています。
長さ的にも2－（5）は短めですので、今回、同時掲載としました。

2－（6）　神霊魔法（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

2－（6）　神霊魔法

学校において、決まった教室を割当てることの利点は、人間関係の構築・醸成を促進するという点にも見られる。

昔から血縁と並んで地縁が強力な人間的結合をもたらしてきたことからも分かるとおり、場所的な所属が組織的な帰属につながるのは、フォーマルグループ、インフォーマルグループに共通の傾向だ。

つまり、何が言いたいのかというと、

「おはよう。聞いたぜ、司波。凄いじゃないか」

「おはよう、司波君。頑張ってね」

「おはようございます、司波くん。応援しています」

「オッス。頑張れよ、司波」

……こんな具合に、普段それほど親しくない相手でも、挨拶のついでに激励してくれる程度の友好関係は作り出せるということだ。

「みんな、情報が早えなぁ」

「本当ですね。まだ先週決まったばかりで、正式発表にはなっていないのに」

月曜日、教室に到着してから、達也は次々とクラスメイトのエールを受け取っていた。

何について、といえば勿論、九校戦のチームスタッフに選ばれたことについてである。

「ホント。一体、何処から聞き出してくるんだろうね？」

真剣に首を捻っているところを見ると、エリカたちが宣伝して回っているということでもなさそうだ。

まあ、緘口令が敷かれている訳でもない。

会議の場には上級生しかいなかったが、クラブの先輩辺りから聞いたのだろう。

「そう言えば今日が正式発表じゃなかったっけ？」

首を傾げたまま問い掛けるエリカに、達也は冴えない表情で頷い

た。

九校戦のメンバー選定は、エンジニアチームを含めて先週の金曜日にようやく、完了した。

本来のスケジュールでは、先々週にメンバーの選定を終わっているはずだったのだから、少なからぬ遅れが出ている。

幸い、と言っていいのか、選手の方は先に選抜が終わっていた為、競技用ＣＡＤやユニフォーム等、準備に最も時間を要する道具類の手配は進んでいるが、納入された機器のチェックや実際の作動テストはエンジニアが固まっていなかった為、ほとんど進んでいない。

自身も選手でありながら準備にすっかり手を取られている深雪の為にも、相当骨を折ることになるだろう、と達也は覚悟を決めている。ただ、不本意だという思いは拭えずにいるのだった。

「確か、五限目が全校集会に変更されていましたよね」

午前三時限、午後二時限の時間割は全学年共通のもの。

とはいえ、実験と実習以外は各生徒が個別に割当てられた端末を使って自分のペースで学習を進める現代式の学校では、各時限の始業、終業はそれ程厳密に守られていない。

上の学年になる程、授業時間と休み時間の区別を無視する傾向が強い現代（いま）の学校で、高々代表チームの発足式の為に全校生徒を集めるというのは、それだけで学校側が如何にこのイベントを重要視しているかを示していると言える。

「達也さんも発足式に出るんでしょう？」

「うん、まあ……」

実はそれこそが、彼が浮かない顔をしている最大の理由だった。

「一年生じゃ達也だけなんだろ？」

「ブルームの連中、か～な～り、口惜しがってるみたいよ」

レオの言うとおり、技術スタッフに選ばれたのは、一年生では達也のみ。

ＣＡＤの調整には経験が不可欠なので、ある意味これは、当然の結果だ。達也のスキルの方が異常なのである。

無論、彼がＣＡＤソフト開発の分野で第一線のプロとして活躍していることを考えれば、高校の大会のエンジニアなど役不足とすら言える。

しかしそのことは、同級生も上級生も、誰も知らないこと。

妹の深雪だけが知っていることだ。

つい先日、定期試験でプライドを盛大に逆撫でされた一科生が、この抜擢に苛立ちを募らせているのは、確かめるまでも無く明らかだった。

「選手の方は一科生だけなんだがな……」

達也の言い分はこの通り。

新人戦の代表選手は全員一科生なのだから、彼がスタッフに選ばれたからと言って目くじらを立てる必要はないはずなのだ。

――もっとも、これは選ばれた側の理屈。工学系志望の一科生にとっては、慰めにもならない。

達也は嫉妬される側に立つことが少ない。

嫉妬心も乏しい。

この辺りの機微を察するには、まだまだ人生経験が不足していた。

「仕方ないですよね。嫉妬は理屈じゃありませんから」

だから、美月にズバリと指摘されて、達也は一言も返せなかった。

「大丈夫よ。今度は石も魔法も飛んでこないから」

そして、エリカの極端過ぎる慰めには、苦笑することしか出来なかった。

◇◆◇◆◇◆◇

四時限目終了後、指定された時間に講堂の舞台裏へ出頭すると、先に来ていた深雪から薄手のブルゾンを差し出された。

「これは？」

何となく、見たままの物の様な気もしたが、確認の意味を込めて一応、訊ねてみる。

「技術スタッフのユニフォームよ。
発足式では、制服の代わりにそれを着てね」
回答は真由美から返って来た。
――予想通りの回答だった。
当の真由美は、テーラード型スポーツジャケットを羽織っている。
こっちは多分、選手のユニフォームなのだろう。
制服のままの深雪が、期待に満ちた笑顔で両手を達也の方へ差し出している。
一瞬、天邪鬼な衝動が意識を過ぎったが、抵抗には何の意味も無いと分かっていた。
達也は素直にブレザーを脱いで、用意してあったハンガーに掛けた。
深雪が広げたブルゾンに、膝を軽く屈めて袖を通した。
伸び上がるように手を伸ばして襟を整え、後ろに回りこんで肩を合わせて、再度前に回りこんで襟と裾を整え、一歩下がって達也の上半身を視界に収め、深雪は満足げな笑みを浮かべた。
妹が上機嫌な理由は達也にも見当がついている。
多分、ブルゾンの左胸に縫い付けられているエンブレムを見るのが嬉しいのだろう。
その図案は、八枚の花弁。
彼女の制服にも、同じ物がついている。
第一高校の校章。
補欠でない、第一科生の象徴。
「よくお似合いです、お兄様……」
学校同士の対抗戦、ユニフォームの形状にそれ程バリエーションがある訳でもないので、どの学校のメンバーであるかを識別する為には当然のデザインだ。
だが深雪にとっては、在るべきものが在るべき場所にようやく収まった、そんな感慨を抱かせる姿だった。
達也本人にとってはどうでも良いことだが、どうでもいいからこ

そ、水を注す必要も無い。
「お前は着替えなくていいのか？」
「わたしは進行役ですので」
「そうか、大役だな」
「プレッシャーを掛けないで下さい……」
この程度のことで気後れなど感じるはずも無いのに、そんな台詞で心細げに瞳を揺らして見せる妹の頭に、達也は笑いながら手を置いた。
――そんな二人に、周囲の人間は冷たい眼差しを突き刺した。

◇◆◇◆◇◆◇

発足式という名のお披露目は、つつがなく始まり、つつがなく進んだ。
達也が壇上に上がっても、石も魔法も飛んでこなかった。――まあ、当たり前のことだが。
しかし彼にとって、居心地は非常に悪かった。
選手とエンジニアは分かれて列を作っており、エンジニアチームは彼以外上級生ばかりだから仕方の無いことだ。
準備会議で一応の腕前は見せているので、変に敵視されたり蔑視されたりということは無い。
だが、好意的に迎えられているとも言えない。
好意的な評価と、好意そのものは、イコールでは無いのである。
色んな意味で彼のチーム入りは、異例の抜擢であり特別扱いだ。
そして今、彼は二科生でありながら、八枚花弁のエンブレムをつけている。
挑発された、と受け取る者もいるだろうし、反感を持たれても仕方が無い、と彼は眩しい照明の中で他人事のように考えていた。
その間にも、一人一人、選手の紹介が進んでいる。
プレゼンターは真由美だ。

紹介を受けたメンバーは、競技エリアへ入場する為のＩＤチップを仕込んだ徽章をユニフォームの襟元につけてもらう。
その役目には、舞台栄えがするという理由で、深雪が選ばれていた。
選手だけで四十名（深雪と真由美を除いて三十八名）だからかなりの手間なのだが、淑女教育の成果か、にこやかな表情を崩さず器用な手つきで徽章を取りつけて行く。
息遣いの聞こえてきそうな至近距離で深雪から笑顔を向けられた男子生徒は、ほとんどが顔を紅くして崩れそうになる表情を懸命に引き締めていた。
それだけなら全校の女子生徒から後々嫌がらせを受けそうな光景なのだが、同じように徽章を取りつけて貰った女子生徒まで、半数以上が顔を赤らめて照れ臭そうに、あるいは落ち着きをなくしているものだから、観衆、特に上級生の微笑みを誘っていた。
徽章は選手だけでなく、スタッフにも同じものが配られる。
作戦スタッフの紹介が終わり、いよいよ技術スタッフの順番になった。
「何だか緊張するね」
不意に隣から話しかけられ、達也は目立たぬように顔を動かした。
同じように小さく顔を動かしてこちらを見ている、男子生徒と目線が合う。
目の位置は少し、達也の方が高い。
確か、五十里啓（いそり・けい）という名の二年生だ。
「そうですね」
彼は達也に明らかな好意を向けて来る少数派の一人だ。
中性的な優しいイメージの容貌を持つ美少年であり、華奢な体格も相俟って、スラックスをスカートに履き替えればそのまま「背の高い女子生徒」で通りそうな外見の持ち主だが、魔法理論の分野では二年生トップ、実技の成績も上位をキープしている猛者である。
改めて間近でその美貌を見ると、人は見掛けによらないと、達也

でもしみじみ思ってしまう。
舞台の上ということもあり、会話はそれきりで終わった。
だが、曖昧な悪意の中で示されたさり気ない好意は、彼のように鈍感な人間にも、心を軽くする効果をもたらした。
靄々としたものが晴れた気分で、舞台の下を見渡す余裕が生まれた。
相変わらず席割りは自由で、相変わらず一科生が前、二科生が後ろと自然分裂している。
だがその前半分の人の列に、異分子が紛れ込んでいた。
達也の視線に気がついたのだろう。
何と、前から三列目、ほぼ最前列と言っても過言で無い席で、エリカが手を振っている。
達也もこれには、ギョッとした。
更に目を凝らしてみれば、エリカの隣には美月、その逆側にはレオ、更にその隣には幹比古、その後ろにも見覚えのある顔が並んでいる。
１－Ｅのクラスメイトが、一科生の白い目にもめげず、一塊に陣取っているのだった。
達也が彼らの勇気ある行動に目を奪われているうちに、深雪の押すワゴンが目の前まで来ていた。
選手四十名、作戦スタッフ四名、技術スタッフ八名、マイナス、プレゼンター二名、計五十名の内、四十九人まで紹介及び徽章授与が終わった。
いよいよ五十人目、最後の一人。
つまり、達也の番である。
真由美が彼の名を告げた。
その声に、随分と力が入っているように感じたのは、彼の意識過剰だろうか？
一歩前に進み出て一礼する。
深雪が蕩けそうな笑みを浮かべて――達也が妹の精神状態に少し

ばかり不安を禁じ得なかった程の笑顔だった――達也の前に立った。
深雪がブルゾンの襟に徽章を付け終えると同時、
大きな拍手が起こった。
目を向けるまでも無い。
エリカとレオに煽られたクラスメイトが一斉に手を打ち鳴らせたのである。
進行役の真由美や深雪にとっては、予定外の騒動だ。
だが１－Ｅの暴走に、同じ一年生の一科生クラスからブーイングが起こりかけた、寸前。
その機先を制するようなタイミングで、真由美と深雪が計ったように同時に、舞台の両脇から手を叩き始めた。
最後のメンバーの紹介が終わった直後の拍手。
それは、選ばれたメンバー全員に対する拍手にすり替わって、講堂全体に広がった。

◇◆◇◆◇◆◇

発足式が終わり、九校戦へ向けた準備が一気に加速した。
出場種目も決まり、深雪は雫、ほのかと共に、毎日閉門時間ギリギリまで練習している。
達也はＣＡＤの調整と深雪の仕事の肩代わりで、これも毎日遅くまで駆けずり回っている。
運動部に所属しているエリカとレオも、色々と下働きを仰せつかっている様だ。
文科系クラブは美月だけなので、この一週間は彼女が一人で他のメンバーを待っていることが多い。
先週の発足式は、彼女にとってドキドキものだった。
席は自由、とは言っても、暗黙のルールを踏み倒すには勇気が必要だった。
彼女だけでは到底無理だった。と言うより、エリカがいなければ

他のクラスメイトが一緒でも到底無理だった。
引っ込み思案という自覚があるだけ余計に、あの友人が眩しく、また羨ましく思えてしまう。
（でもエリカちゃんは何故あんなに一所懸命だったのかな……？）
美月自身は、エリカに引っ張られての行動だった。
無論、達也を応援したいという気持ちは強かったが、後ろの方で拍手しているだけで自分なら満足だったと思う。
エリカには愉快犯的な気質もあるので、一科生のエリート意識を逆撫でしてやりたい、という動機もあったことだろう。
だが同時に彼女は、気まぐれで刹那的な気質の持ち主でもある。
面倒ごとに首を突っ込むのは好きでも、面倒ごとを自分から積極的に企図する方ではないと美月は見ている。
自分たちだけならともかく、他のクラスメイトまで動員した熱心さは、単なる悪戯心だけでは説明できない気がするのだ。
（やっぱりエリカちゃんって、達也さんのこと……なの、かな……？）
エリカと一番仲が良い男子といえば、彼女の見た限り、レオだろう。
定期試験で理論三位を取った吉田とも、浅からぬ縁があるようだ。
しかし、達也に対するエリカの感情は、また別の種類、別の重さがあるように美月には思えた。
それを、思考の中でさえ、明確に言葉で定義することが、美月には何故か憚られた。
昇降口に立って、まだ五分も経っていない。
待ちくたびれるには早過ぎる時間だ。
しかし同時に、思惟が取り留めを無くすには十分な時間だった。
考えるとも無しに、色々なことを思い浮かべる美月。
それは、ぼんやりしている、とも表現できる状態だった。
そうして、知覚が何か一つのことに集中していない状態、感覚が開放されている状態で、彼女は見慣れぬ波動に気がついた。

悩んだのはちょうど、一秒。
美月は思い切って、メガネを外した。
その途端、色の洪水が押し寄せた。
視界に様々な色調の光が溢れる。
目を痛めつける刺激に、美月は少しの間、じっと耐えた。
彼女にとってメガネを外す行為は、暗室からいきなり真夏の太陽の下へ連れ出されるようなものだ。
見えないようにしていたものがいきなり見えるようになる。
自分でもコントロールできない感覚がもたらす過剰な情報に、それを処理する視覚神経と脳が、悲鳴を上げる。
しかし、普通の人間ならそのまま意識を失ってしまうような情報量の暴虐も、彼女にとっては生まれたときから付き合って来た「もう一つの世界」だ。
人の目は、照り付ける最盛の陽光にも、しばらく待てば慣れるもの。
強い光に適応した、濃い色の瞳を持つ種族なら、時間を置かずとも、すぐに慣れる。
美月もギュッと瞼を閉じた後、二、三回瞬きするだけで、普通の魔法師が見ているものの何十倍ものサイオン光と、並みの魔法師では色を見分けることも難しいプシオン光（霊子放射光）に目を馴染ませた。
メガネを丁寧にケースへ仕舞ってから、先程違和感を覚えた波動へ目を凝らす。
コーティングレンズに遮断された状態でさえ目に付いた光は、すぐに見つかった。
呼吸音のような、揺らぎを持ちながらも規則的なプシオンのシグナル。
光源の方向までハッキリ分かる。
美月は誘われるように、波動の発信源、実験棟へ足を向けた。

実験棟に近づくにつれて、ひんやりとした空気が漂い始めた、ように感じた。

季節は真夏、夕陽は山や丘の稜線によって凹凸に切り取られた、地平線ならぬ地「曲」線に近づきながらも、尚、汗ばむ熱量を届けている。

これは錯覚だ。

真夏の熱気に、偽りの冷気を紛れ込ませる「何か」。

その「何か」は、引き返せと命じているような気がした。

近づくな、と脅しているような気がした。

未知のモノに対する不安で、身が竦んだ。

それなのに、足は止まらなかった。

理性は引き返せと告げていたが、魔法に携わる者としての、魔法と共に生きることを運命付けられた者としての直感が、この先に待つものを、この「眼」で確かめるべきだと言っていた。

実験棟の入り口は、軋みを上げたり哄笑を響かせたりといった効果音も特に無く、静かに開いた。

天井の照明パネルが、細かい文字を追うにも不自由の無い明るさを保っている。

何もかも、いつも通り。

いや、ここは魔法を教える学校で、利用者の多い実験棟だ。

何か異常があれば、教師や上級生が気付かないはずは無い。

魔法科学校には、普通科学校よりも、怪談の入り込む余地は少ないのである。

何の警報も出されていない以上、彼女の感じている異変は何らかの魔法による現象なのだろう。

あるいは――現代魔法が検知出来ない、本物の怪奇現象か。

心を翳(かす)めた不吉な思惟にゾクッと背筋を震わせながらも、美月の足は止まらなかった。

駆り立てられるように、あるいは引っ張られるように、前へ前へと進む。

導かれるままに階段を上がると、空気に僅かな香気が混じった。
この香りは、魔法薬学の実験で嗅いだ覚えがある。
鎮静効果を持つという複数の香木をブレンドした香りだ。
彼女がここまで追いかけて来た波動は、薬学実験室へと続いている。
異常な霊子放射光は、生徒の誰かが行っている魔法実験の産物らしい。
少なくとも未知の怪奇現象では無いと見当がついて、美月はホッと一息ついた。
そうすると、今まで不安の陰に隠れていた好奇心が頭をもたげた。
他人が魔法実験を行っている場に、招かれず立ち入ってはならないというのは、魔法実験の実習で最初に教わる注意事項だ。
発動中の魔法と招かれざる闖入者の魔法領域の干渉により、思わぬ魔法の暴走が生じる危険性があるからだ。
特に、未熟な魔法師――例えば、彼女たちのような新入生――の魔法実験に飛び込む行為は、大きな危険を伴う愚行だと繰り返し注意を受けている。
しかし今、美月の意識から、その警告がスッポリ抜け落ちていた。
方向性を取り違えた警戒心は、彼女の足音を殺し、閉ざされていた実験室の扉にそっと、覗き見る隙間を作った。
物音を立てないように細心の注意を払いながら、僅かに開けた隙間に目を当てる。
美月は、危ういところで悲鳴を呑み込んだ。
いや、悲鳴というより、それは単なる驚きの声か。
薬学実験室の中では、青や水色や藍色の光の球がいくつも、空中を踊り回っていた。
一つ一つの光には「力」があり「意思」があった。
自然界のエネルギーの分布は均質ではなく、均質化する一方でもなく、散ったり集まったり絶えず流動しているということを、彼女は「見て」、知っていた。

自然現象を引き起こすの「力」の塊が泡となって漂う姿は、美月にとって馴染みの光景だった。

彼女の「眼」に映る森羅万象のエネルギーは、人の心から流れ出すプシオンの輝きに良く似ていた。

だが、漂い、飛び交うその塊に「意思」を感じたのは、今日が初めてだった。

（……精霊……？）

これが精霊というものだろうか、と彼女は思った。

それ以外の思考が飛び去ってしまうほどの衝撃を――感動を、彼女は覚えていた。

そして、その精霊を呼び出しているのは――

「吉田くん……？」

なけなしの警戒心も忘れて、美月は呟いていた。

全く意識に無い、行動。

だが名前を呼ばれた方は、そうは行かなかった。

特に、誰も来ないはずの場所で、誰も見ていないはずの「術」の行使を見られた方としては。

「誰だ！」

条件反射に等しい誰何。

そこに込められた反射的な怒りに、「光」たちの「意思」が反応した。

「きゃっ！」

押し寄せる光の球に、美月は悲鳴を上げて目を閉じた。

そしてその直後、横合いから吹き抜けた「突風」に、彼女は思わずしゃがみこんでしまう。

髪も揺らさずスカートもなびかせない、サイオンの奔流。

それが彼女へと押し寄せる光の球を押し流し、彼女を守ったということに、目を閉じた美月は気づいていない。

恐る恐る瞼を開けた彼女が目にしたものは、憎悪に等しい激情をたたえて睨みつける幹比古と、その視線を無表情に受け止める達也

の姿だった。
「……落ち着け、幹比古。
今、ここで、お前とやりあうつもりは無い」
何も持たない掌を開いて両手を挙げる。
それは魔法師にもそうでない者にも共通する、戦意の無い標(しるし)だ。
幹比古はハッとした表情を浮かべると、それまでの敵意が嘘のように消えた。
「……すまない、達也。
僕も、そんなつもりじゃなかったんだ」
悄然と項垂れたその姿は、居場所を無くした子供のようだった。
衝動的に「慰めてあげたい」と思いながら、適当な言葉が出てこない自分が、美月は歯痒かった。
「気にしていない。
だからお前も気にするな。
元はと言えば、SB魔法の発動中に術者の心を乱すような真似をした美月が悪い」
「ふえっ!?
私ですか!?」
慌てて振り返り、達也が人の悪い笑みを浮かべているのを見て、本気で責められているのではないと理解し、美月は胸を撫で下ろした。
「いや、彼女は悪くないよ」
だが幹比古は、そうは取らなかったらしい。
少し早口に、達也の言葉を否定する。
達也の指摘が一面の事実なだけに、余計慌てたのだろう。
「声を掛けられたくらいで心を乱した僕の未熟の所為だ。
……それから、ゴメン、大事なことを忘れてた。
ありがとう、達也。
君のおかげで、柴田さんに怪我をさせずに済んだ」
「俺が手を出さなくても、怪我には至らなかったさ。

俺には、ＳＢは見えないが、術の制御が効いていたのは分かる。
それに、人払いの結界の中に踏み込んでこられては、驚くなと言う方が難しいだろうな」
「何故、結界のことを……そうか、達也は古式魔法も学んでいるんだったね。
それに、術が効いているかどうかまで分かるなんて……君は色々な面で、非、いや、僕の理解を超えているようだ」
「素直に『非常識』と言ってくれても構わないが？」
からかうように笑いながら達也が言うと、幹比古も苦笑いを浮かべた。――喰いしばっていた口元を緩めて。
「まあ……いくら見られたくないからと言って、学校の実験室に結界を敷く方も相当非常識だとは思うが」
「違いない」
二人の笑い声が、張り詰めた空気を拭い去った。

「今のは自然霊の喚起魔法か？
実際に見るのは初めてだが」
「……今更隠しても仕方が無いね。
達也の言うとおり、水精を使って喚起魔法の練習をしていたんだ」
達也の問いに、香木を焼（く）べていた卓上炉を片付けながら、幹比古は答えた。
美月は幹比古の隣で、灰の落ちた机に雑巾を掛けている。
幹比古は当然遠慮したのだが、生真面目な美月はこういう所で頑固だった。
「水精ね……残念ながら俺には、プシオンの塊があるということしか分からなかったんだが……
美月にはどう見えたんだ？」
「えっ？
あっ、私も同じようなものですよ。
青系統の色調の光の球が見えただけですから」

美月は曖昧な笑みを浮かべながら両手を目の前で振った。
雑巾を持ったままそんな真似をした所為で、汚れた水滴が幹比古の顔に飛んだりしたのだが、急に話を振られて慌てていた美月は気付かなかった。
一方、汚水を浴びせられた幹比古の方はと言うと……これも、気付いていないようだった。
彼は目を大きく見開き、顔を強張らせていた。
「色調……？
……色の違いが、見えた……？」
「あの、えっと、……はい」
美月には、幹比古が何故（美月の主観的に）怖い顔をしているのか分からず、少しビクビクしながら答えた。
「あの……青とか水色とか藍色とか……
ああっ！」
真っ直ぐに幹比古を見ることが出来ず、チラチラと覗き見しながら答えていた美月は、幹比古の顔についた水滴に気付いて奇声を上げた。
「ごごごめんなさい！
ええと、そうだ！
ハンカチハンカチ」
慌てて鞄からハンカチを取り出し、幹比古の頬を拭こうとする。
その伸ばされた手を、幹比古は乱暴に掴んだ。
驚きに顔を強張らせた美月を、そのまま手元に引き寄せる。
バランスを崩した美月を受け止め、キスを迫るように顔を寄せて、幹比古は美月の目を覗き込んだ。
「あっ、あの……」
当惑と焦りで声が言葉にならない美月の意思は、幹比古に届いていない。
そのままじっと視線を動かさない幹比古と、パニックで顔を背けることも出来ない美月。

図らずも、見つめ合う二人。
「……合意の上なら席を外すが、そうでないなら問題だぞ？」
「わわっ！」
「きゃっ！」
呼吸すらも忘れてしまったかの如く、無言で固まっていた二人だったが、達也の呆れ声でようやく我に返ったのか、弾き合うように身体を離した。
「……ごめん」
「い、いえ……こちらこそ」
良く分からない遣り取りだった。
幹比古が謝罪したのは分かるが――あんなセクハラまがいの行為、頬を張り飛ばされても文句は言えないところだ――、何故美月が謝る必要があるのか。
多分、混乱しているんだろう、と達也は取り敢えず納得することにした。
「それで、急にどうしたんだ、幹比古？」
となると、次なる興味は幹比古の突然の乱心。
一体、何が原因なのだろうか。
「ごめん、一寸、吃驚して……」
「いや、俺に謝る必要はないが……
吃驚したって、一体何に？」
「そうだね……」
達也にそう言われて、幹比古はもう一度、美月に頭を下げた。
「本当にごめん。
まさか、精霊の色を見分けられる人がいるなんて思ってもみなかったから……
もしかして、水晶眼の持ち主かと思ったら、いてもたってもいられなくなって、思わず……
言い訳にしかならないけど、決して不埒な真似をしようとしたんじゃないから。

本当に、ただ、確かめたかっただけなんだ」
本人も言っているとおり、これは言い訳でしかない。
それはあくまで幹比古の好奇心、幹比古の事情であって、美月には何の関係もない。
だが、必死で言い訳をする幹比古を見る美月の眼差しは、柔らかく微笑んでいて、彼の行いをもう咎めてはいないと物語っていた。
「もう、いいですよ、吉田くん。
私も、ビックリしただけですから」
そう言って、相手を和ませる笑顔でニッコリ微笑んだ後、小さく早口で「でも、恥ずかしかったんですから、もうこれきりにしてくださいね」と囁いた。
赤面しながらも、何度も頷く幹比古。
どうやら先ほどのセクハラ未遂は、平和的に解決したようだ。
「ところで幹比古、何をそんなに驚いていたんだ？」
それを待っていたかのように、達也は幹比古に質問を繰り出した。
「精霊の色を見分けられるのが珍しいみたいなことを言っていたようだが？」
達也の問い掛けに、美月も同調の視線を幹比古へ向けている。
「それに、水晶眼というのは……？
差し支えなければ教えてくれないか」
自分もそれを訊きたかったと、美月は眼差しで語っていた。
「……いいよ、それほど秘密って訳じゃないし。
精霊には色がある。僕たち精霊を使役する術者は、色で精霊の種類を見分けている。
でも、それは本当の意味で見えている訳じゃないんだ」
美月が首を捻っていた。
達也にも幹比古の言葉の意味は分からなかったが、性急に問うことはせず、目線で続きを促した。
「実は、精霊の色というのは決まったものじゃないんだ。
術の系統、式の流派によって、術者が『見る』色は変わってくる。

例えば僕の流派では、水精は青色をしている。
でも欧州には、水精の色は紫だと明言する流派もある。
大陸系の流派には、黒に近い紺色だとするものもある。
これは、場所によって、使役する術によって、精霊の波動に違いがある訳じゃない。
術者の認識の仕方が違うから、違う色に『見えて』いるんだ」
「……つまり、視覚的に捉えているのではなく、術を介して波動を解釈しているということか？」
「ご名答。
僕たちは、精霊を見分ける便宜上、その波動を色で解釈している。
精霊に色を付けている、と言えばいいのかな。
だから僕たちの認識する精霊の色は画一的だ。
僕の流派では、
水精は青。
火精は赤。
土精は黄色。
風精は緑色。
そこに濃淡はないし、明暗もない。
頭の中で分類して色を塗っているんだから、色調の違いが生じるはずもない。
水精はどんなものでも青一色。
認識のシステム上、水色とか藍色とかに見えるはずがないんだ」
「……だが美月には、それが見えた」
「多分彼女は、水精の力量の違い、性質の違いを色調の違いとして知覚している。
本当に、精霊の色が見えているんだ。
そういう眼のことを、僕たちの流派では『水晶眼』と呼んでいる。
他流派では別の意味で使われることもある単語だけど、僕たちの流派では『神』を見ることの出来る眼、とされている。
精霊の色を見ることが出来る者は、精霊の源であり集まりである、

自然現象そのものである『神霊』を見て、認識して、そのシステムに介入する為の鍵を見つけることのできる存在だと伝えられている。
僕たちにとって、水晶眼の持ち主は、神霊というシステムにアクセスするための巫女（シャーマン）なんだ」
「……つまり、お前たちにとって、美月は喉から手が出るほど欲しい人材だということだな？」
「そうだけど……そんなに警戒しなくても良いよ。
今の僕に神霊を御する能力など無い。
半年前の僕なら自惚れて、有頂天になって、強引に彼女を自分のものにしたかもしれないけど、今の僕にはそんな欲も気概もない。
だからといって、他の術者に神霊へつながる鍵の存在を教えてやる気にもなれない。
他の術者が神霊魔法を極めるのを、指をくわえて眺めているなんて、たとえそれが親兄弟であったとしても、真っ平ごめんだ。
柴田さんの水晶眼のことは、誰にも言わないよ」
幹比古の強い眼差し。
それはどこか、狂おしい光をはらんでいた。
達也はそこに、変質した独占欲を見て取った。
自分だけのものにしたい、ではなく、誰のものにもしたくない。
幹比古は美月をそんな目で見ている。
「……そうだな。俺も、今の話は、胸の裡にしまっておこう」
友人を利用させないという点において、達也の利害は幹比古の想いに一致していた。
だから彼は、そう言って、頷いて見せた。
幹比古に対して。
美月に対して。
美月はそんな達也のサインをキョトンとした顔で見返して、その意味を理解できないまま、慌てて曖昧な笑みを返した。

2－（7）　交通事故（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

2－（7）　交通事故

八月一日。

いよいよ九校戦へ出発する日になった。

小樽の八校、熊本の九校のような遠方の学校は、一足早く現地入りしているが、東京の西外れに居を構える一高は、例年前々日のギリギリに宿舎入りすることにしている。

これは戦術的な意味と言うより、現地の練習場が遠方校に優先割当される為である。

本番の会場は競技当日まで下見すら出来ない立入禁止なので、敢えて早めに現地入りする必要もない――

「と言う訳なのだよ」

「はあ……まあ、分かり易い説明でしたから良いんですが」

一体誰に向かって講釈しているのか、と茶々を入れたくなるのを我慢して聞いていた達也は、摩利の短い説明が終わると同時に、誰の利益にも何の利益にもならないツッコミ衝動を小さく頭を振ることで意識の外へと追い出した。

二人が立ち話をしているのは、太陽が激しく自己主張している夏空の下だった。

この炎天下、何を好きこのんで暑い思いをしているのか？　と問われても、達也としては答えようがない。

これは別に、彼の嗜好ではないからだ。

「ごめんなさ～い！」

軽快に鳴るサンダルのヒール音をＢＧＭに近づいてくる声の主を見て、自分だけちゃっかり日傘の下に避難していた摩利はため息混じりの笑みを浮かべ、ジリジリと太陽に炙られていた達也は無言で端末に表示されたリストにチェックを入れた。

――遅刻すること一時間三十分。ようやく、全員集合。

「真由美、遅いぞ」

「ごめんごめん」
咎める言葉も謝罪の言葉も、ただ、それだけ。
二人は何事もなかったように、大型バスへ乗り込んで行った。
と、思ったら、真由美が手ぶらでバスから出て来た。
「……何か忘れ物ですか？」
ポーカーフェイスが保てているかどうか、少し不安を覚えながら達也は問い掛けた。
着替えや化粧品などの宿泊用品――宿泊に化粧品という知識は無論、深雪から教わったものだ――は、コンテナにパッキングして積み込み済みだ。各自の自宅から直接配送された箱をそのままコンテナに詰め込む時点で、全員分漏れがないことは確認している。
仮に入れ忘れたものがあったとしても、大抵のものは宿舎に用意してあるということだし、せいぜい二時間程度のバスの旅に必要となる手荷物などそれほどは無いだろう。
「ううん。そうじゃなくて……
ゴメンね、達也くん。私の所為で、ずいぶん待たせちゃって」
「いえ、事情はお聞きしていますので」
真由美が遅刻したのは、寝坊したとか時間を間違えたとかそういう無責任な理由によるものではなかった。
急遽、家の事情で遅れるという電話があったのは、今から三時間前。
その時の電話口で真由美は、現地で合流するので出発しておいて欲しいと言っていたのだが、三年生全員の意見が彼女を待つということで一致したので、真由美も大急ぎで合流したという次第だった。
彼女は七草家の跡取り、という訳ではない。
彼女の上には二人の兄がいる。
十師族直系といっても、まだ高校生の、三番目の妹にまで家の仕事が回ってくるものではない。少なくとも、頻繁に起こることではないだろう。
それが、学校の公式行事に絡んだ、当日の朝になって、急に呼び

つけられるというのは余程の用だったに違いないのだ。
真由美にとっては、他の生徒が先に出発していてくれた方が、おそらくは急かされることもなく、都合が良かったことだろう。
だが彼らが――と言っても達也は内心反対だったのだが――待っていると言い出したが為に、真由美は無理をして駆けつけたのである。
一時間や二時間程度の遅刻を責める気持ちには、達也はなれなかった。
「でも、暑かったでしょう？」
「大丈夫です。まだ朝の内ですし、この程度の暑さは、何ともありません」
達也が乗車確認役を言い付かったのは、彼が裏方唯一の一年生だからという必然的な理由によるもの。
選手四十名、作戦スタッフ四名、技術スタッフ八名。
選手を除いた十二名のうち、一年生は達也だけだ。
無論、これ以外にも裏方は用意されている。
作戦・技術スタッフ以外にも、会場の外でのアシスト要員として有志二十名が組織されていたが、彼らは別ルートで現地に向かっている。ここには教師もいない。大型バス一台、作業車両四台の此のキャラバンで移動するのは、運転手を除けば正式スタッフのみだった。
「でもそんなに汗を……って、あら？
ホントに、余り汗をかいてないのね」
「いえ、まあ、流石に汗を乾かす程度の魔法なら使えますので……
真夏に汗をかかない程、変態ではないつもりです」
彼が使用したのは汗の水分と成分を、皮膚と衣服から空中へ発散させる魔法。
達也の固有魔法『分解』は、系統で言えば分離魔法の亜種、『発散』と『放出』の複合魔法。
それも、どちらかと言えば『発散』の比重が高い。

その為か、彼は、発散系統の魔法なら比較的得意としている。
「変態って……」
そんなに変な台詞ではなかったはずだが、一寸したツボにはまったのか、真由美はクスッと笑みを浮かべた。
多分、季節の所為だろう。
向日葵のような笑顔だと、この時、達也は思った。
おそらくは、日差しと気温と湿度がもたらした錯覚。
……その証拠に、真由美の笑みは一瞬で、いつもの悪戯好きな笑顔に変わった。
「ところで達也くん、これ、どうかな？」
これ、と言うのは、まあ……間違いない。
真由美が着ているサマードレスのことだろう。
幅広の帽子のつばを両手で押さえて、気取ったポーズをつけられては、敢えて誤解したくても少しばかり難しい。
今日は宿舎に入るだけで、公式行事は一切無い。
それ故にか、学校行事の一環であるにも関わらず、制服の着用は義務づけられていない。
一年生は達也も含め、一人残らず制服を着ているが、二年生は半数以下、三年生に至ってはほぼ全員が私服姿だ。
それでも、公の席では肌の露出を抑えるべし、という現代流の服装マナーが染みついているのか、摩利のように、風通しの良いゆったりした長袖シャツに踝まである薄手のパンツ、というような格好の生徒が多かった。
目についた例外は、千代田という二年生女子生徒の、ショートパンツに大腿部まである長いソックスという、露出が多いのか少ないのか分かり難いファッションと、彼女に強要されたという五十里の、ハーフパンツにハイソックスというある種ペアルックじみたハイキングスタイル。（因みにこの二人は付き合っているらしい）
その中で、真由美のファッションは非常に目立っていた。
異常に目立っていた、と表現した方が適切かもしれない。

両腕両肩が剥き出しのサマードレス。
スカート丈も膝上まで。
素足に、ヒールの高いサンダル。
肌が褐色味を帯びているのは、赤外線反射、紫外線カットの通気性コーティングフィルムを塗り着けているからだろう。その点を考えに入れれば全くの素肌を露出しているという訳では無いのだが、その色合いが逆に、程好く日焼けしたセクシーな肌、という困った錯覚を演出してもいる。
「とても良くお似合いです」
大胆な花柄のワンピースは、本当に良く真由美に似合っていた。
「そう……？
アリガト」
おどけた口調と少しはにかんだ表情の組合せもまた、絶妙。
「……もうチョッと照れながら褒めてくれると、言うこと無かったんだけど」
指を絡めた両手を腰の前へ伸ばし、上目遣いで摺り寄る、二歳年上の女の子。
小柄な身長に平均的なサイズの胸は、両腕に挟まれてくっきりとした谷間を覗かせている。
ここまで来ると、狙ってやっているとしか思えなかった。
「……大変だったんですね」
「……えっ？」
急な用事というのがどんな内容のものだったのか、今の彼に知る術は無いが、余程ストレスが溜まっているに違いない。
「行きましょう、会長。
バスの中でも、少しは休めると思います」
――達也は、そう考えることにした。
「チョッと、あの、達也くん？
何か勘違いしてない？」
急に、労りに満ちた態度と何処か同情を含んだ視線を向けられて、

真由美は目を白黒させた。

◇◆◇◆◇◆◇

「……もうっ、達也くんったら人を躁鬱扱いするなんて、失礼しちゃうわ」

走り出したバスの中で頬を膨らませて怒る真由美へ、隣に座った鈴音が生暖かい目を向けていた。

「隣に、って言ったのに、さっさとあっちへ逃げちゃうし」

ちなみに達也は技術スタッフの一人として作業車両に乗り込んでいる。客観的に――あるいは、表面的に見るなら、真由美を避けた訳ではない。

「私のことを何だと思ってるのかしら」

「的確な判断です」

「えっ、リンちゃん、今なんて言ったのかな？」

ハイテンションで愚痴をこぼし続ける真由美に、鈴音が淡々とした口調でツッコミを入れる。

にこやかな笑みを形作りながら、目はちっとも笑っていないという怖い笑顔で、これまた表面上――だけは――朗らかな声で問い返されても、鈴音の冷静な表情は全く刃毀れしなかった。

「会長の餌食になるのを回避するには、的確な判断だと申しましたが」

「チョッ！？　ヒドイ！　それ酷すぎない！？」

寧ろ、大真面目に断言されて、真由美の余裕ぶった仮面の方にひび割れが生じた。

「会長の艶姿に耐えられる男子生徒は、ほとんどいないでしょう。会長の美貌にはそれだけ大きな魔力がある、ということですが」

「……えっと……」

「……」

あまりにも真面目くさった顔で言われた所為か、真由美はそれが

本気なのか冗談なのか、少し戸惑ってしまった。
——魔法師になろうとする者が「美貌の魔力」等と口にした時点で、冗談なのは決まりきっているのだが。
「もっとも、聞けば司波君は相手の魔法を無効化する技能に長けているとか。
彼には会長の魔顔も、通用しないかもしれませんね」
口で発音されただけであるにも関わらず、真由美は何故か「マガン」を「魔眼」ではなく「魔顔」と、鈴音の意図する通り正確に認識した。
「……リンちゃん！」
それでようやく、百パーセントからかわれていたのだという事に気付いた。
「まあまあ、落ち着いて下さい、会長」
「貴女がそれを言う！？」
依然として大真面目な表情を崩さない鈴音を憤然とした顔で詰問し、やはり効果がないと見届けて、真由美は鈴音へ背を向け不貞寝気味に丸くなった。
背中を丸めて横向きになった姿は、見ようによっては——
「あの、会長。やはり、ご気分が悪いんですか……？」
心から心配そうに掛けられた、緊張した声。
「えっ？　ううん、そういうんじゃ……」
「会長がお疲れのようだと司波が言ってましたが、杞憂では無かったのですね。
あの男も、分を弁えていない点を除けば……いえ、そんな場合ではありませんでした」
「えっと、はんぞーくん？　だから私は別に、気分が悪かった訳では……」
「我々に心配をさせたくないという会長の御心遣いを尊重すべきとは存じましたが、ここで無理をされて益々体調を崩されては元も子もありません」

服部は大真面目な表情で――こちらは心から心配していると分かる真剣な眼差しで、真由美を見詰めている。

少し顔が赤いのは、少々だらしなく座っていた所為で、サマードレスのスカートから太股が覗いている為だろうか。それでも、膝はきちんと閉じているのだが。

「服部副会長。何処を見ているのですか？」

念の為にもう一度状況を説明するが、服部は真由美の顔を見詰めている。

それ以外の箇所は見ていない、が、それは同時に――見ないようにしているという側面もあった。

心配になって席を覗き込んで、視界に飛び込んで来たものから慌てて目を逸らした――後ろめたさを感じるだけの、身に覚えがあるだけに、服部は狼狽を隠し切れなかった。

……そんなことに後ろめたさを覚え、そんなことで動揺してしまうのは寧ろ、彼が真面目で純情な少年であるという証でもあるのだが。

「市原先輩！？　私は別に、何も見てなどっ……！

いえ、その、会長に、ブランケットでもと思いまして……！」

しかしこの場合は、上級生のお姉さまにとって、いい餌食である。

「服部副会長が会長にブランケットを掛けて差し上げるんですか？

ではどうぞ」

さも納得したと言わんばかりの訳知り顔で席を立ち、鈴音は目で、服部に促した。

真由美はといえば、心得たとばかり、恥ずかしそうな上目遣いで大きく開いた胸元を両手で隠す真似などしている。

ブランケットを両手で広げた姿勢でフリーズする服部。

真由美の目には、確かに、嗜虐心が見え隠れしている。

どうも少し、真由美は抑えが利かなくなっているようだ。

……司波君の見立ては正確でしたね、と鈴音は内心で思った。

自分のことを棚に上げて。

◇◆◇◆◇◆◇

「……何をしているんだ、あいつらは……」

硬直している服部を、期待に満ちた眼差しで真由美が見上げ、それを横から鈴音が冷ややかに見ているという変則的な三竦みに、摩利は呆れ声とため息を同時に吐き出した。

どうやらいつも通り服部が真由美の玩具にされているらしい、と分かって、浮かせていた腰を座席に戻す。

口には出せないが、摩利も真由美の体調を少しばかり心配していただけに、脱力感も一入（ひとしお）だった。

「まあ……いつもどおりか……」

ああして真由美が弄り倒すから、服部がストレスを溜め込んで必要以上に二科生に対し見下すような態度を取り、更に副会長のそういうスタンスを会長として真由美が思い悩むという悪循環が生じていると、摩利は密かに睨んでいる。そしてそのことを、彼女は内心で苦々しく思っていた。

とは言うものの、真由美が自分より遥かに大きな気苦労を常日頃抱えている、ということも、摩利は知っている。

彼女の実家は、家系こそ古いものの――嘘か真か、渡辺綱の末裔らしい――現在の勢力地図上で見るなら、百家の末流に辛うじてぶら下がっている、という程度だ。

摩利は一種の突然変異と言うか先祖返りと言うか鬼子と言うか、とにかく親類縁者の中で一人だけ突出した魔法の才能を有しており、その分、家族の期待は大きいものの、魔法界――この場合、魔法師の社交界――で他家との駆け引きに煩わされるということはほとんど無い。

それに対して、現在、四葉家と共に十師族の頂点に君臨している七草家の、跡取りではなくとも直系、しかも長女である真由美には、高校在学中にして、どころか、高校生にもならない内から、度々縁

談が舞い込んで来ている。（これは噂ではなく確実な情報だ）

また彼女自身、十師族の中で比較しても尚、傑出した、と言える魔法の才能の持つ、将来を嘱望されているエリート候補生だ。

それに加え、学校では生徒会長など務めて要らざる気苦労を背負い込んでいる有様。

いくら芯はタフといっても、楽ではないはずだ。

少し羽目を外すくらい、見逃してやるべきだろう、と摩利は思うのだ。

友人として――と、例え思考の中だけであっても付け加えないところが、彼女の偽悪的というかシャイな一面かも知れない。無論、そんなことを面と向かって本人に言えば、その人間は殴り倒される破目に陥るだろうが。

閑話休題。

そんな訳で、エスカレートするまで放置しておこう――何だかんだ言って、服部も構ってもらえて嬉しいようだし――、と決めた（決めつけた？）摩利は、窓の外へ目を遣った。

彼女の席は二人がけ通路側。

必然的に、窓側に座っている人間が目に入る。

「……何でしょうか、摩利さん？」

こちらも余り元気がなさそうな女子生徒が、摩利の視線に気付いて問い掛けて来た。

「んっ？　いや、あたしは外を見ていただけだよ、花音（かのん）」

摩利も遠景から隣の座席へ焦点を移し、とりわけ女子に人気の高いクールな笑みをその二年生、千代田花音へ向けた。

彼女は摩利が特に目をかけている後輩で、次の風紀委員長には彼女を据えようと色々手を回しているところだ。

達也に頼んだ（達也が聞けば、有無を言わさず作らせられたんだ、と強く主張するに違いない）引継ぎ資料も、実を言えば彼女の為の物だった。花音がいなければ、摩利も詳細な資料を作ろう等とは思わなかっただろう。

花音の千代田家は、同じ百家の中でも本流を構成する家で、優秀な魔法師を輩出する、本当の意味での「百家」だ。

百家、というのは、家の数が百あるという意味ではない。

十の位の次は百の位、という駄洒落みたいなもので、「十師族に次ぐ位の家柄」を意味する。

ちなみに十師族も十の家系で構成されているという訳ではない。

十師族を名乗る資格のある家系は合計二十八あって、その中でその時代に強い魔法師を数多く出している家を上から順番に十家選んで「十師族」としている。

真由美の七草家は特に多数の優秀な魔法師を輩出することによって、四葉家は当代における世界最強の魔法師の一人と目され、「極東の魔王」「夜の女王」の異名を持つ、四葉真夜を当主に戴く事によって、十師族の双璧と見なされている。

現在十師族を構成する家は、「一条」「二木」「三矢」「四葉」「五輪」「六塚」「七草」「八代」「九島」「十文字」と、偶々一から十までの数字が揃っているが、これは十師族という序列が生まれてから初めてのことで、今までは二つ三つの重複・欠番があるのが当たり前だった。

十師族と、その補欠とも言える残り十八の家系、そしてその次に位置する本物の「百家」。

その百家の一つが花音の千代田家であり、対物攻撃力なら摩利を凌ぎ、陸上兵器相手なら十師族の実戦魔法師に勝るとも劣らない戦闘力を誇る彼女は、千代田の直系を名乗るに相応しい魔法力の持ち主だった。

もっとも、花音に元気が無いのは、真由美とは随分事情を異にしている。

摩利の答えに「そうですか」と呟いた花音は、視線を窓の外へ戻し、「はぁ……」とアンニュイなため息をついた。

その様が無駄に色めいていて、摩利には少々鬱陶しかった。

「花音……」

「はい？」
再び振り向いた花音の視線の先には、先程と打って変わった顰め面。
もっとも、顰に倣うの故事に似て、そんな表情さえ、摩利は魅力的だった。――主に、女性から見て。
「宿舎に着くまで、せいぜい二時間だろう。何でそのくらい、待てないんだ？」
「あっ、それ、酷いです！　小さな子供じゃあるまいし、あたしだって、二時間や三時間程度、待てますよ！」
摩利が呆れ声で訊ねた途端、花音は別人のように元気になった。唇を尖らせて抗議する顔の動きに合わせて、ボーイッシュなショートの髪が軽やかに撥ねる。
「でもでも、今日はバスの中でもずっと一緒だって思ってたんですよ。
少しくらいガッカリしてもいいじゃないですか！」
「お前たちはいつも一緒にいるじゃないか……いくらフィアンセとはいえ、下手をすれば、あの司波兄妹よりも一緒にいる時間が長いんじゃないか？」
「バス旅行なんて今時滅多に無いんですから、楽しみにしてたんですっ。
去年はあたし一人でしたし。それに、兄妹と許婚同士なら、許婚同士の方が一緒にいる時間が長くて当然です！」
「……そうなのか？」
「勿論です！」
胸を張って――こう言っては何だが、少々ボリュームが不足している――断言する花音を前に、摩利はこっそりため息をついた。
この後輩、普段は果断即決・有言実行、タフでポジティブで摩利好みの凛々しい少女なのだが……

（毎度の事ながら、五十里が絡むと別人だな、コイツ……）
「だいたいなんで、技術スタッフは別の車なんですか！
走行中に作業なんて出来ないんだから、分ける必要なんて無いじゃないですか。
このバスだってまだまだ乗れるし、席が足りないなら二階建てでも三階建てでもあるだろうに！」
いいはけ口を見つけたとばかり、尚もキャンキャンと不満をぶちまける花音に、摩利はもう一度、こっそりため息をこぼした。

◇◆◇◆◇◆◇

このバスには、花音と同じ不満を抱えている少女がもう一人いた。
――こちらは、花音のように騒いだりせず、しかしそれがかえって、彼女の友人たちには妙に怖かったのだが。
「……」
「……ええと、深雪？
お茶でもどう……？」
「ありがとう、ほのか。
でも、ごめんなさい。まだそんなに喉は渇いていないの。
わたしはお兄様のように、この炎天下に、わざわざ、外に立たせられていた訳じゃないから」
静かで、柔らかな口調だった。
見ているだけでヒンヤリとさせられる、全てを白く埋め尽くし塗り潰す深い雪のように。
「あ、うん、そうね」
慌てて相槌を打ったほのかの脇腹が、軽く肘でつつかれる。
（お兄さんのことを思い出させてどうする）
（今のは不可抗力よっ）
ほのかも雫も、テレパシーは有していない。にもかかわらず、目と目でここまで明瞭に通じ合うのは、不気味な威圧感を漂わせてい

る深雪を「何とかしたい」という思いを、一つにしているからだろうか。

「……まったく、誰が遅れて来るのか分かってるんだから、わざわざ外で待つ必要なんて無いはずなのに……

何故お兄様がそんなお辛い思いを……」

遂にブツブツ声に出して愚痴り始めた深雪は、ハッキリ言って怖さ倍増だった。

ほのかは、逃げ出したかった。

せめて雫に、席を替わって欲しかった。

だがこの状況で席を替わったりしたら、深雪に何をされるだろうか？

――いや、深雪はその程度のことで友人に何かをするような少女ではないのだが、彼女が身に纏わせている不穏な空気は、そんな妄想すら抱かせるレベルのものだったのだ。

「……しかも機材で狭くなった作業車で移動だなんて……せめて移動の間くらい、ゆったりとお休みになっていただきたかったのに……」

怯えているほのかを見て、雫はため息をついた。

深雪の独り言に、「わたしの隣で」が抜けてるよ、と思ったのだが（つまり雫の脳内では、深雪の独り言は「わたしの隣でゆったりとお休みに」と変換されていた）、口にしたのは別の台詞だった。

「でも深雪、そこがお兄さんの立派なところだと思うよ」

話し掛けるついでに、乗り出すようにしてほのかと席を替わる。

背後で拝んでいるほのかの姿は、背中を向けている雫はもちろん、深雪の目にも留まらなかった。

独り言を聞かれていたとは思っていなかった深雪は、咄嗟に反応できない。

雫はそこへ、すかさず、普段の口数の少なさが嘘のように畳み掛けた。

「バスの中で待っていても文句を言うような人は、多分ここにはい

ない。
　でもお兄さんは『選手の乗車を確認する』という仕事を誠実に果たしたんだよ。
　確かに出欠確認なんてどうでもいい雑用だけど、そんなつまらない仕事でも、手を抜かず、思いがけないトラブルにも拘らず当たり前のようにやり遂げるなんて、なかなか出来ることじゃない。
　深雪のお兄さんって、本当に素敵な人だね」
　こういう歯の浮くような台詞を赤面もせずに言えるのは雫のキャラクターよねぇ、と思ったのはほのかだ。
　深雪は雫の、大真面目な表情から繰り出された大袈裟な賛辞に、虚を衝かれたのか目を見開いて絶句している。
「……そうね、本当にお兄様って、変なところでお人好しなんだから」
　辛うじて照れ隠しで応じた深雪から、底冷えのする威圧感は消え去っていた。
　ほのかは雫の背中に隠れて、ガッツポーズをとっていた。

◇◆◇◆◇◆◇

　人という生き物は、一部の例外を除いて、見たいものしか見ないように出来ている。
　見たくないものを見なかったことにするようになってしまった、と言う方が正確かもしれない。
　五感から得られる情報は、快適なものよりも不快なものの方が、生物にとっては重要であることの方が多い。
　不快なものとは自分を脅かすものであり、脅威をいち早く見つけることが生存の鍵となるのだから。
　だが人は、見たくないものから目をそらす。
　例えば、自分たちを皆殺しにする大量破壊兵器が、間違いなく自分たちへ向けられていると知っていても、土壇場になるまでその事

実を無視している。
本当の意味での生存競争と縁が遠くなった先進国の人間ほど、その傾向は強い。
それほど大袈裟な例でなくとも、見たくないものを見なかったことにしてスルーするという事例は、日常生活の中で枚挙の暇がない。
――例えば、見目麗しい美少女が撒き散らしていた、剣呑なプレッシャーとか。
いつものお淑やかな雰囲気に戻った深雪の周りには、男子生徒が群がっていた。
さっきまで、近づこうとさえしなかったのだが。
深雪は気後れを感じるほどの美貌だから、馴れ馴れしく付きまとわれるようなことはなかったが、主に一年生が、それに混じって二年生や三年生も、何かにつけて声を掛けてくる。
いい加減、それを見かねた摩利が、深雪たち三人の席を強制的に自分の席の近くへ移動させた。
そんな訳で現在は、ようやく平穏を得られた深雪と、好きなだけ愚痴ってすっきりした花音が窓際の席の前後に座り、横には摩利、彼女たちの後ろには克人を呼び寄せて睨みを利かせることで、バスの中は何とか落ち着きを取り戻していた。（なお真由美は、服部を散々弄り倒して満足したのか、すやすや眠っている）
女友達同士のお喋りも楽しくはあるが、何となく物足りない。
同じ想いを抱いた二人の少女は、窓際の席で、流れ去る風景をぼんやり眺めていた。
だから、それに気付いたのは、二人が一番早かった。
「危ない！」
叫んだのは花音だった。
彼女の声につられ、バスの中のほぼ全員が対向車線側の窓へ目を向けた。
対向車線を近づいて来る大型車――といってもこのバスより小さい、レジャー向けのオフロード車――が、傾いた状態で路面に火花

を散らしているのだ。
パンクだ、と誰かが叫んだ。
脱輪じゃないか、と誰かが興奮した声で語った。
その声に、危機感は無い。
ハイウェイの対向車線は道路として別々に作られており、堅固なガード壁で仕切られている。
対向車線の事故で影響を受けることはまずあり得ない。
対岸の火事は、若い彼らにとって、興奮を呼ぶ見世物だった。
ほんの短い時間、――その瞬間までは。
誰かが、悲鳴を漏らした。
一人では、なかったかもしれない。
それも、無理のないことだった。
いきなりスピンし始めてガード壁に激突した大型車が、どんな偶然か、宙返りをしながら自分たちの方へ飛んで来たのでは。
急ブレーキがかかり、全員が一斉につんのめる。
苦鳴は、注意事項を無視してシートベルトを締めていなかった生徒か。
直撃は避けた。
だが、進路上に落ちた車は、炎を上げながらこのバスへ向かって滑って来る。
「吹っ飛べ！」
「消えろ！」
「止まって！」
「っ！」
パニックを起こさなかったのは、本来であれば寧ろ、褒められるべきかもしれない。
だがこの場合は、事態をかえって悪化させた。
瞬間的に、無秩序に発動された魔法が無秩序な事象改変を、同一の対象物に働きかけた。
その結果、全ての魔法が相克を起こし、事故回避が妨げられる。

「バカ、止めろ！」
摩利はそのことに、すぐ気付いた。
幸い、行使された魔法は全て、発動中のまま未完成の状態だ。
中途半端な状態の魔法を全員がキャンセルすれば、意味ある手を打つ時間はまだ残されている。
強力な魔法は一瞬で現実を書き換える。
ここには、卵あるいは雛鳥とはいえ、それを可能にする魔法師が揃っているのだ。
だが――彼女の声に従うだけの判断力を残していたら、そもそも無秩序に魔法を放ったりはしていない。
そして、先に発動された魔法の効果を打ち消して意図した効果を実現する為には、発動中の魔法を圧倒する魔法力が必要だ――
「十文字！」
摩利は、その可能性を持つ魔法師を呼んだ。
克人は既に、魔法発動の態勢に入っている。
だが彼の顔に、滅多に見せぬ焦りの色を見出して、摩利は絶望に捉われそうになった。
彼女にも分かっている。
この無秩序に魔法式が重ね掛けされた空間は、広域干渉の影響下と類似した状態になっている。
（これではいくら十文字でも、炎と衝突を両方とも防ぐことは……）
「わたしが火を！」
慣性を残す車内、窓際で立ち上がったのは、たおやかな一年生。
彼女は既に、発動準備を終えていた。
それを見た克人が、防壁の魔法式を構築する。
だがいくら飛び抜けた才能を持つとはいえ、このサイオンの嵐の中で、一年生が魔法を有効に使えるのか――？
その瞬間、摩利はそれを、自分の錯覚かと思った。
魔法を知覚する、魔法師としての、自分の感覚を疑った。
深雪が魔法を発動するその直前、迫り来る、炎を纏う鋼の塊に対

して、無秩序に発動していた魔法式が、一瞬で、全てかき消されていた。

そしてまるで、それが起こることを予期していた様なタイミングで、深雪の魔法が発動した。

炎上した自動車を凍らせることもなく、ドライバーを窒息させる空気遮断でもなく（とはいっても、生存は絶望的だが）、常温へ冷却することにより瞬時に消火を果たした鮮やかな魔法。

その手際に、摩利は感嘆の息を漏らした。

同時に、それが分かったということは、摩利の魔法感受性が正常である証だった。

克人が展開した防壁の魔法――設定したエリアに設定した方向から侵入した物体の運動状態を静止状態に改変する移動系魔法――で、既に残骸となっていた車が潰れる音を聞きながら、摩利の意識は眼前の脅威から離れていた。（克人の魔法が突っ込んでくる自動車を受け止めることを、摩利は全く疑っていなかった）

今、一体何が起こったのか。

事故回避の為の魔法を妨げていた魔法式をかき消したあの現象は、一体何だったのか。

真由美の魔法だろうか？

ふと浮かんだその考えを、摩利はすぐに打ち消した。

確かに真由美ならば、あの無秩序な魔法式の乱舞に対処することも出来るだろう。

だが真由美の対抗魔法（魔法に対抗する為の魔法）なら、投射された複数の魔法式を、同時に撃ち抜き破壊するという形態をとったはずだ。

あんな風に、全ての魔法式を無差別に、粉微塵に破砕して、かき消してしまったりはしない。

真由美の魔法が精密に管制された対空砲火なら、あの魔法は（あれが魔法だとしたら、だが）絨毯爆撃で市街地を焼け野原に変えてしまうようなものだ。柱の一本も残さず鉄骨も全て溶解し基礎のコ

ンクリートすら吹き飛ばして、完全な更地に変えてしまう――そんな、暴力的な代物だった。

深雪は、摩利も克人も魔法力の混沌に立ち竦んでいたあの場面で、相克状態が消し飛ばされるのを知っていたかの様に、躊躇なく魔法を放った。

彼女はあの「魔法」の主を知っているのだろうか？

まさか、あの魔法は――？

「みんな、大丈夫？」

追走していた作業車――今はこのバスのすぐ後ろで止まっている――を凝視していた摩利は、落ち着いた真由美の声にハッと我を取り戻して振り向いた。

「危なかったけど、もう心配要らないわ。十文字くんと深雪さんの活躍で、大惨事は免れたみたい。

怪我をした人は、シートベルトの大切さを噛み締めて、次の機会に役立ててね？」

次の機会なんて無い方がいいけどね、とおどけてウインクしてみせる真由美に、あちこちで笑い声が生じた。

全員が緊張と恐怖から解放され、ホッとした表情を浮かべていた。

「十文字くん、ありがとう。いつもながら見事な手際ね」

「いや……消火が迅速だったから、止めるのに集中できた。

あと、無闇にばら撒かれた魔法式を消したのは七草か？」

克人に問われた真由美は、バツ悪げに目を泳がせた。

「あ～……

私、バスが止まるまで気付かなかったから……」

そういえば、真由美は事故の直前まで眠っていたのだった。

克人もそれをすぐに思い出したようだが、眉を一度上下させただけで、追い討ちを掛けるようなことはしなかった。――この学校の幹部の中で、一番の人格者は間違いなく克人だろう。

「あっ、それに深雪さんも。

素晴らしい魔法だったわ。

あの短時間にあんな絶妙なバランスの魔法式を構築できるなんて、私たち三年生にも難しいわね」

真由美の言葉に、克人も、摩利も頷いた。

三人とも、あの様な緊急時に、やり過ぎない――適切な魔法を選択し、その威力を適度に抑えることの難しさを十分理解していた。

真由美から手放しに褒められて、深雪はほんのりと頬を染めた。

「光栄です、会長。

ですが、魔法式を選ぶ時間が出来たのは市原先輩がバスを止めて下さったからで、そうでなければ咄嗟にどんな無茶をしてしまったことか、自分でも少し怖いです。

市原先輩、ありがとうございました」

深雪から丁寧なお辞儀を向けられて、鈴音も無言で会釈を返した。

深雪の前の席では、花音がポカンとした顔で背もたれ越しに振り返っていた。

摩利も驚きを隠せなかった。

言われてみれば、バスのブレーキだけで、あそこまで速やかに停止できるはずは無い。

ブレーキが掛けられた後、それを補う形で減速魔法が働いたのは想像に難くなかった。

だが彼女は、突っ込んで来る車を相手に放たれた魔法に気を取られて、バスを止める鈴音の魔法に気付かなかったのだ。

誰もが目の前の脅威に目を奪われていた時、足元を見据えて的確に講ずべき手を講じる。

精度においては摩利たち三人をも凌ぐと評される鈴音の面目躍如たる活躍であり、同時に、誰も気付かなかった鈴音の魔法に一人だけ気がついていた深雪の才能は空恐ろしくさえあった。

「それに比べてオマエは……」

「いたっ！　摩利さん、いきなり何するんですか！？」

突然頭を叩(はた)かれて、花音が涙目で抗議の声を上げた。

「うるさい。

文句を言える立場か、花音。
森崎や北山が慌てて魔法を放って事態を悪化させたのは、まあ、仕方がない。
あいつらはまだ一年生だ。
だが二年生のオマエが、真っ先に引っ掻き回すとはどういう了見だ！」
「うう、でも、あたしが一番早かったんです。
まさか、他の人が重ね掛けしてくるなんて思わなかったんですよぉ……」
花音の言い訳に、森崎と雫が恥ずかしそうに俯いた。
他にも、居た堪れなげな顔をしている者が何人もいた。
「何でも早けりゃ良いってもんじゃない！
もう少し状況を良く見ろ。
ああいう時はまず、声を掛け合って相克が起こらないようにするのが基本じゃないか。
それに、相克が生じた時点で魔法を解除しなかったのは、判断力を失っていた証拠だ」
「……すみませんでした」
シュンとしてしまった花音を見て、摩利もそれ以上、責めようとはしなかった。
ああは言ったが、あのような場面で冷静な判断力を保ち続けることは、場数を踏まなければ普通は出来ない。
それを考えると、深雪はキチンと、自分が消火を担当すると声に出していた。
才能だけで出来ることでは無いし、天才は往々にして自分だけ突出しようとする傾向があり、この手の協調を取るのは逆に苦手としているものだ。
花音はその意味で、典型的な天才肌。
深雪は何か、余程の修羅場を経験しているのだろうか。
バスが走り出すのを大人しく待っている落ち着いた佇まいは、そ

のような経験値に相応しいとも相応しくないとも、どちらとも取れる。
「そういえば、司波」
「はい」
摩利は、達也のことを名前で呼び、深雪のことを苗字で呼び捨てる。
彼女は基本的に他人を苗字呼び捨てで、真由美や花音や風紀委員会の一部メンバーのような特に親しい相手だけを名前で呼ぶ。達也に関しては、異例の親近感を持っていると言える。
「あの魔法式を……いや、いい。何でもないんだ。本当に見事だった」
「はい？
ありがとうございます」
摩利は「あの魔法式を消した対抗魔法を使ったのが誰なのか、知っているのか？」と問うつもりだった。
だが質問しかけたその最中、彼女はその答えを知るのを躊躇ってしまった。
何故かは分からないが、その答えが彼女を取り巻く「何か」を決定的に壊してしまうような気がしていた。
窓の外では、技術スタッフの男子生徒が分乗していた作業車から出て来て、救助活動を開始していた。
とはいえ、宙を舞うほど激しく激突した上にあれだけ派手に炎上していたのだ。
ドライバーの生存は、ほぼ絶望的。
女子がいなかったのは、無残な焼死体を見せたくなかったのだろう。
既に鎮火しているとはいえ、燃料のエタノールに再び引火する危険性もゼロでは無い。
ドアを切り取ろうとしている三年生の後ろで、現場記録の為かビデオカメラを設置している一年生の姿が目に入る。

自分がその背中を目で追っていることに気がついて、摩利は慌てて目を逸らした。

2－（8）　開戦前々夜（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

2－（8）　開戦前々夜

事故の後、警察の事情聴取とか現場を通行可能にする為の手伝いとかで三十分程度の時間をロスしたが、出発の遅れと合わせて、昼過ぎには宿舎に到着した。

その競技の性質上、九校戦で活躍した選手から軍人の道に進む者は多い。

軍としても優秀な実戦魔法師を確保する為に、九校戦には全面的に協力しており、会場と共に宿舎も、視察の文官や会議の為に来日した他国の高級士官とその随員を宿泊させる為のホテルを九校戦の期間中、生徒と学校関係者の為に貸切の形で提供している。

と言っても、至れり尽くせりという訳ではない。

ホテルといえど軍の施設だから、専従のポーターやドアマンはいない。いつもはここを統括する基地の当番兵がその役目を担うのだが、高校生の大会ということもあって、九校戦では自分たちで荷物の積み下ろしをすることになっている。

作業車に積み込んだ大型機器は、車に載せたままで使用するものだから荷降ろしは発生しない。

だが小型の工具やＣＡＤは部屋で微調整をしたりするので、台車に載せて押していくことになる。

手早くその作業を終えて、荷物を載せた台車を押す一年生の技術スタッフと、その隣を笑顔で談笑しながら付いて行く女子生徒を視界に納め、服部は沈んだ面持ちで頭を振った。

「どうした、服部。随分不景気な面だな」

そんな彼に、背後から気さくな声が掛けられた。

「桐原……いや、そんなことは無いさ」

振り返った服部は、そこに声から予想した通りの友人の姿を認め、反射的に、余り意味のない否定の言葉を返した。

「そうかぁ？

少なくとも、好調って顔はしてないぜ」
自覚があるのだろう。
桐原の言葉にそれ以上反論しようとせず、服部は自虐的な笑みを浮かべた。
「一寸……自信を無くしてな」
「おいおい、明後日から競技だぜ。こんな時に自信喪失かよ？」
桐原の出場種目は二日目のアクセル・ボールのみだが、服部は一日目、三日目のバトル・ボードと九日目、十日目のモノリス・コードにエントリーしている。
単一エントリーの桐原と違い、服部は二年生ながら主力選手なのだ。
彼の不調は、チームの戦略に大きな影響を及ぼす。
桐原が慌てるのも無理のないことだった。
「一体何に落ち込んでるんだ？」
桐原の知る服部刑部という男は、努力家であり自信家だ。努力に裏打ちされた自信家、と言うべきかもしれない。
二年生ながら三巨頭に次ぐ全校トップクラスの戦闘能力は、よく陰口を叩かれているように才能だけによるものではない。態度が傲慢なので――これについては、友人であっても弁護できない――誤解されがちだが、才能以上に努力もまたトップクラスだ。少なくとも、桐原の見ている限りでは。
努力と才能と実績、この三つの裏付けがあれば、そう簡単に自信を無くしてしまうことはないはずだが……
「お前は感じなかったんだな。羨ましいよ……」
「なんだぁ？
そりゃ、俺がバカだって言っているか？」
「いや？
鈍いとは思っているが」
「おい！」
服部は、他人から誤解されがちな、皮肉っぽい笑みを浮かべてい

る。
　少し、いつもの調子が戻ってきたようだ。
　自分をからかう為に、という点は、桐原にとって些か複雑だったが、安心できるのに違いはない。
「……似合わないぜ？
　一体何をクヨクヨしてるんだよ？」
　多少の意趣返しを込めて、桐原はそう訊ねてみた。
　服部も、友人の不器用な思い遣りが分からない程に鈍感ではなかった。
「さっきの事故の時……」
「あ～、ありゃあ、危なかったな」
「そう、何もしなければ重傷者が何人も出ただろう。死人が出たかもしれない」
「だが会頭たちが上手くやってくれたじゃねえか。
　現実にならなかった被害で悩むのは『たられば』の一種だぜ？
　ベクトルが逆向きでも、不健康なことに変わりはねえよ」
　桐原の骨太な発言に、服部は小さく笑った。
「お前のそういう割り切ったところは、本当に羨ましいよ、桐原。
　だが俺が考えていたのはそういうことじゃない」
　言葉を切って、服部はまたしても小さく頭を振った。
「……あの時、俺は結局何も出来なかった」
「そりゃ、あの状態で下手に手出ししたら、もっと収拾がつかなくなっちまう虞があるからな。
　手出しをしないだけ、まともな判断力を残していたと思うぜ」
「だが……司波さんは、正しく、対処して見せた。
　自分の得意な分野から分担すべきことをキチンと判断して、コミュニケーションをとることも忘れなかった。
　もしあの直前、相克を起こしていた魔法式が突然消滅しなくても、彼女は十文字会頭と協力して事態を収拾出来ただろう」
「あん時は渡辺委員長も手出しできなかったんだぜ？

司波妹は冷却系が得意みたいだし、魔法の向き、不向きの問題なんじゃね？」

「渡辺先輩の得意分野は対人戦闘に偏っているから、あの場面で手を出さないのは寧ろ自制心の賜だ。ああいう状況なら、俺の方が出来ることは多い。

……魔法力だけの問題じゃない。

渡辺先輩は、あの場面で自分が手を出すべきじゃないと瞬時に判断して、十文字会頭に対処を求めた。

十文字会頭は声を掛けられる前に、自分が何とかしなければならない場面だと判断して、魔法式構築の準備をしていた。尚且つ、自分だけでは回避が難しいことを見抜いて、慌てて魔法を放ったりしなかった。

司波さんは、自分に出来ることを冷静に判断した上で、声に出すことで協調を取っていた。

それは単に、魔法力が大きいとか小さいとか、多彩な魔法を使えるとか強力な魔法を使えるとか、そういう技能的な問題じゃなくて、魔法師として、魔法を使わなければならない場面で正しく魔法を使えるかどうか――そう、魔法の資質ではなく、魔法師としての資質の問題だ。

確かに彼女の魔法力は飛び抜けている。

多分、単純な力比べでは、俺は彼女に勝てないだろう。

だがその点については、さっきのことがあるまで、それほど気にしてはいなかった。

魔法師としての優劣は魔法力の強さだけで決まるものではないからな。

しかし――魔法の資質だけでなく、魔法師としての資質まで、年下の女の子に負けたとあっては……自信を失わずにはいられんよ」

またもや消沈してしまった服部に、桐原は「仕方ないな」とでも言いたげな表情を浮かべた。

「あ～、そういうのは場数だからなぁ。

その点、あの兄妹は特別だと思うぜ」
「兄妹？」
評価の対象が「彼女は」ではなく「あの兄妹は」だったことが予想外だったのだろう。服部は桐原へ訝しげに問い返した。
「兄貴の方は……多分ありゃ、殺ってるな」
「ヤってる？」
「ああ、実際に人を殺しているな。それも一人や二人じゃない」
「……殺人、という意味じゃないよな？
実戦経験があると言いたいのか？」
「雰囲気が、な……
俺の親父が海軍の揚陸部隊にいたのは知ってるだろ？」
「ああ。対馬海域で何度も交戦された経験がお有りなんだよな？」
「下士官だけどな。
まあ逆に、下っ端だからこそ、最前線を経験したりもするし、実際に命の遣り取りをくぐり抜けて来た知り合いも多い。
親父の戦友が偶に俺ん家でワイワイ騒いでたりするんだが、俺たちとはやっぱ、雰囲気が違うんだよ。どんなに剣術とか射撃とか、戦う為の技術、人を殺傷する為の技を鍛えてても、実際に人を殺したことのある兵士とそうじゃないアスリートじゃ、殺気の質が違う。
四月の事件の顛末は知ってるか？」
「何だ、いきなり……反魔法派のテロリストの仕業だったらしいな。テロ組織は十文字家が潰したらしい、という程度しか知らないが」
「そうか……だったら詳しい話はできねえな……
ま、お前にだったら、この程度は話しても良いだろ。
俺はあの時、テロリストを掃除した現場にいた。
司波の兄妹も、な」
「……本当か？」
「そう言いたくなる気持ちは分かるが、事実だぜ。
そしてその場で、俺は多分、司波の――兄貴の方の、本性を見た」
「本性？」

「ああ、本性、あるいはその一端。
ありゃあ、ヤバいな。
前線で殺し合いをして生き延びた兵士と同質で、何倍も濃密な殺気をコートでも着込むように身に纏っていやがった。
何であんなヤツが高校生やってるんだ、ってゾクゾクするくらいヤバかったぜ」
口ではそういいながら、桐原の表情はどこか舌なめずりしているような趣があった。
「……歳を誤魔化したりは出来ないはずだが」
「経験、イコール年齢じゃねえってことだろ」
「……司波さんもか？」
「妹の方は直接見た訳じゃねえけどよ。
あの兄貴が、荒事の現場に連れて行ったんだ。ただの女の子なはずねえよ。
今日のあの様子を見てると、綺麗なバラには刺がある、どころか、鋭い爪と獰猛な嘴で毒蛇を喰らう孔雀ってとこじゃねえか？
あんなのにちょっかい出そうなんて、随分と命知らずだと思うがね。まっ、無知は幸いなりってとこか？」
与えられた情報を消化し切れずに戸惑いを隠せない服部へ目を向けると、桐原は揶揄の混じった笑みを浮かべた。
「しかしあの服部の口から、あんな台詞が聞けようとはな」
「……何のことだ」
桐原の意味ありげな笑い方が気に食わず、不機嫌をむき出しにした声で問い返す服部。
だがニヤニヤ笑う桐原の顔は、小揺るぎもしなかった。
「魔法師の優劣は、魔法力だけで決まるものではない、か。
その台詞がお前の口から飛び出したって会長が聞いたら、大喜びするんじゃねえの？」
「っ……！」
服部は鋭い眼差しで桐原を睨み付けた。

だが桐原が相変わらずニヤニヤ笑いながら、否、服部の過剰な反応に益々笑みを深めながら、真っ直ぐに彼へ視線を向けているのを見て、服部は顔を背けた。

「優劣はともかく、強い弱いは魔法力だけで決まるもんじゃねえよなぁ」

服部は一言も断らず、桐原を置いてその場を立ち去ろうと歩き始めたのだが、桐原はそんなあからさまな拒絶など「知ったことか」とばかり、彼のすぐ後ろを歩きながら話を続けた。

「ブルームだ、ウィードだなんて、たかが入学前の実技試験の結果じゃねえか。

一科の中にも、伸びる奴もいれば伸びない奴もいる。

千代田なんて、才能だけに胡座かいてた去年の夏から比べれば完全な別人だぜ。

二科の連中だって、自分で諦めちまわなきゃ、強くなれる奴は一杯いるんじゃねえの？

……いや、将来性だけの話じゃねえな。

現に、二科生にだって『できる』奴は少なくない。

今年の一年は特にな。

おっと、別に、司波兄に負けたから言うんじゃないぜ」

服部の肩がビクッと震えた。

それを見て「ああ、そう言えば、コイツもあの野郎に苦杯を嘗めさせられた口だったな」と桐原は思った。

「まっ、現時点では俺より奴の方が強い。

それは認めるさ。

だが、アイツがいくら、詐欺みたいに強いからって、負けっ放しにしとくつもりは無しだ。

腕を磨いて磨いて磨き抜いて、次に立ち合うときは勝ってやる。

今、劣ってるからって、諦めちまったら、負けたままだからな。

今までの二科の連中は、過去に劣ってたからって、今を諦めていた。

だから強くなれなかったし、そんな奴等なら対等と認めてやる必要もなかった。

だが、強くなろうとして、実際に強くなった奴なら逆に、バカにする理由は無いだろうさ」

服部は相変わらず応えない。

口を閉じたまま、さっさと割り当てられた部屋へ向かっている。

桐原は肩をすくめて、話の肴に使っていた兄妹の方へと振り返った。

背後では妹の方が、何やら深刻そうな顔で兄貴の顔を見詰めていた。

それを見て桐原は、ふと「また厄介事にならなきゃいいが」と思った。

そして、自分の思惟の脈絡の無さに、苦笑いを漏らした。

◇◆◇◆◇◆◇

桐原の予感は、些細な、だが切実かも知れない彼自身の願望を裏切る方向で的中していた。

「……では、先程のあれは、事故では無かったと……？」

眉を顰めて問い返す妹に、達也は小さく頷いた。

「あの自動車の跳び方は不自然だったからね。

調べてみたら、案の定、魔法の痕跡があった」

人の目、他人の耳を気にして小声で答える兄に倣って、深雪も声を潜めた。

「わたしには何も見えませんでしたが……」

反問の形になってはいたが、深雪は兄の言葉を全く疑っていなかった。

彼女はあの「事故」を最初から見ていた。

そして、魔法が使われた形跡を最後まで知覚しなかった。

しかし「現在」しか見ることの出来ない自分とは違い、兄の知覚

は「過去」にも及ぶ。
兄が「あった」と断言する以上、それは確かに存在した事なのだということを、深雪は知っている。
「最小の出力で瞬間的に行使されている。魔法式の残留サイオンも検出されない高度な技術だ。専門の訓練を積んだ秘密工作員なんだろうな。
使い捨てにするには惜しい腕だ」
「使い捨て……ですか？」
その単語の不吉な響きに、深雪の声が、本人の意図する以上に小さくなった。
「魔法が使われたのは三回。
最初はタイヤをパンクさせる魔法。
二回目が車体をスピンさせる魔法。
そして三回目が車体に斜め上方の力を加えて、ガード壁をジャンプ台代わりに跳び上がらせる魔法。
何れも、車内から放たれている。おそらく、魔法が使用された事を隠す為だろう。
現に、お前も含めてあれだけ大勢の優秀な魔法師がいたのに、誰も気が付かなかった。
俺にも分からなかった。
全く、見事なものだ。
特に最後の術式は、スピンする車内で振り回されながら、衝突の瞬間を正確に捉えた訳だからな。
並大抵の錬度じゃない」
「では、魔法を使ったのは……」
「犯人の魔法師は運転手。
つまり、自爆攻撃だよ」
足を止めて、俯く深雪。
その肩が微かに震えていた。
「卑劣な……！」

それは、哀しみ故ではなく、怒りの発露。
妹が、犯罪者に対する誤った同情に溺れるのではなく、それを命じた者の遣り口に憤りを示したのを見て、達也は満足げに頷いた。
「元より、犯罪者やテロリスト等という輩は卑劣なものだ。命じた側が命を懸ける事例など稀だという点でも然り。だから、そんなことで一々怒ってたら切りがないぞ？」
それより、何が狙いだったかが気になるところだね」
ポンポンと宥めるように妹の背中を二度叩いて、達也は再びカートを押し始めた。
深雪もすぐ、その後に続いた。
――が、十歩も進まぬ内に、再び立ち止まることになった。
ショートパンツに編み上げサンダルで健康的な素足を惜しみ無く人目に曝し、上もタンクトップで肩を剥き出しにした少女が、壁際に置かれたソファーから手を振っていた。
深雪に合わせて達也が立ち止まると、何処かのリゾートビーチと間違えているんじゃないかと思いたくなる格好をした友人が、手を振るのを止めてソファーから立ち上がった。
「一週間ぶり。元気してた？」
「ええ、まあ……それよりエリカ、貴女、何故ここに？」
「もちろん、応援だけど」
気軽な挨拶を交わした後、訝しげに問う深雪に、エリカはあっさりと答えた。
無論、その程度の回答は深雪も予想済みであり、それ故、彼女を納得させるものとはならなかった。
「でも競技は明後日からよ？」
「うん、知ってる」
どうもエリカは悪戯っ子気質と言うか、他人を煙に巻いて楽しむ傾向があり、中々本題に入れない時がある。
「深雪、先に行ってるぞ。
エリカ、また後でな」

そう、さっさと見切りをつけた達也は、機材を載せた台車を技術スタッフの作業用に確保した部屋へ運ぶべく、二人を置いてエレベーターホールへ進んだ。
「あっ、うん、またね……って、挨拶くらいさせてくれても」
「ごめんなさい。スタッフの先輩方が待っていらっしゃるのよ。それで、何故二日も早く来たの？」
一先ず兄の代わりに謝ってから、深雪は質問を再開した。
「今晩、懇親会でしょ？」
「……」
「……」
「……それで？」
回答の続きを待ったが、何時まで経っても説明を完結させる気配が無かったので、深雪は仕方なく自分の方から会話を繋げることにした。
「念の為に言っておくけど、関係者以外は、生徒であってもパーティーには参加出来ないわよ」
「あっ、それは大丈夫。あたしたち関係者だから」
「えっ？　それは」
「エリカちゃん、お部屋のキー……っと、深雪さん？」
関係者とはどういう意味なのか、それを尋ねようとした深雪の言葉は、小走りに近づいて来る少女の声に遮られた。
「美月、貴女も来ていたの？」
「こんにちは、深雪さん……どうしたんですか？」
深雪に話し掛けられて朗らかに会釈を返した美月だったが、返事の代わりにマジマジと見詰められて、居心地悪そうな愛想笑いを浮かべた。
「……派手ね」
「えっ、と……そうでしょうか」
心許なげに自分を見下ろす美月のファッションは、キャミソールのアウターに、膝より随分上のスカートと、見る人によってはエリ

カよりも扇情的と見られかねないものだった。
深雪の率直な感想は「何処の避暑地と勘違いしているのかしら？」である。
「エリカちゃんに、堅苦しいのは良くないって言われたものですから……」
「そう……」
深雪は何か一言、エリカに言ってやろうと考えたが、素知らぬ顔でそっぽを向いている姿を見て、何の効果も無いだろう、と諦めた。
エリカの相手をしながら、よく溜め息をついている兄の気持ちが少し分かったような気がした。
「美月、悪いことは言わないから、早めに着替えた方が良いわ。その服、似合っていて可愛いんだけど、ＴＰＯに合っていないと思うから」
だが、苦笑いで済ませるには、深雪は兄より少しだけ生真面目で少しだけ負けず嫌いだった。
「そう……ですか？」
……やっぱり？」
「ええ、多分」
チラッとエリカの方を見て訊ねた美月に、同じくチラッとエリカへ視線を投げて深雪は頷いた。
「えーっ、そーかなー？」
流石に知らん顔も出来なくなったのか。
エリカが不満げに反論した、が、
「ところで、部屋のキーって言ってたけど、ここに泊まるの？」
……今度は深雪が素知らぬ顔でスルーした。
「はい」
答える美月の隣でエリカは憮然としていたが、深雪に食って掛かるような真似はしない。
この虫も殺さないような美少女が、実は強かで容赦の無い性格であることを、エリカは四ヶ月の付き合いで学んでいた。

「よく部屋が空いていたわね……
いえ、それより、よくホテルが受け入れたわね。
ここは、一般の人が宿泊できる所じゃないのに」
「そこはコネよ」
気を取り直したエリカの、何の悪びれもない種明かしに、深雪は小さく噴き出してしまった。
「流石は千葉家」
声に笑いの成分が残留していたが、深雪は決してからかってそう言った訳ではなく、本心から、単なる事実として相槌を打っただけだった。
十師族の苗字に一から十までの数字が入っているように、百家の中でも本流とされている家系の苗字には“『千』代田”、“『五十』里”の様に、十一以上の数字が入っている。数値の大小が力の強弱を表すものではないが、苗字に数字が入っているかどうかは、血筋が大きく物を言う、魔法師の力量を推測する一つの目安となる。この様に苗字に数字が含まれる魔法師の家系は、「数字付き」の隠語で呼ばれている。（無論、それは推測の為の目安に過ぎないのであって、第一高校の生徒会を見ても、会長の真由美しか「数字付き」には該当しない）
そしてエリカの実家も“『千』葉”家、つまり「数字付き」と呼ばれる百家本流の一つだ。
千葉家は特に、自己加速・自己加重魔法を用いた白兵戦技で知られている名門。千葉家の特異な点は、魔法の行使において優れているだけでなく、それを体系化し白兵戦魔法師育成のノウハウを作り上げたことにある。
警察及び陸軍の歩兵部隊に所属する魔法師の約半数が、直接・間接に千葉家の教えを受けているとされている。海軍や空軍でも、白兵戦が想定される部隊においては、千葉一門より教官の派遣を受けていることが多い。
千葉家は、実戦部門に対する「コネ」という面から見れば、ある

いは十師族以上の権勢を有しているのである。
「……でも、いいの？」
エリカは、ご実家の後ろ盾を使うのが嫌いだと思っていたのだけど」
「嫌いなのは『千葉家の娘だから』って色眼鏡で見られること。コネは利用する為にあるんだから、使わなきゃ損よ」
相手によっては刺々しい雰囲気になりそうな問い掛けだったが、訊いたのが深雪で訊かれたのがエリカだったからか、非常にあっけらかんとした問答になった。
「フフッ、そうね。じゃあ、わたしも荷物を整理しなきゃならないから。どういう関係者なのか知らないけど、パーティーで会いましょう？」
手を振るエリカと会釈する美月に見送られ、深雪はエレベーターホールへ向かう。
「おい、エリカ。自分の荷物くらい自分で持ちやがれ」
「柴田さん、荷物、持って来たよ。事後承諾で悪いけど、フロントが混み合ってきたから」
その途中で、エリカたちを呼ぶ少年の声を聞いた。
一人は聞き覚えのある、もう一人は聞いた事のない、声。
女の子二人組、ではなく、男女二組だった訳だ。
深雪は足を止めず、振り返らずに、こっそり笑みを浮かべた。

◇◆◇◆◇◆◇

そもそも深雪たち一行を乗せたバスは何故、前々日の午前中などという早過ぎる到着時間を予定していたのか。
それは、夕方に予定されているパーティーの為である。
高校生のパーティーだから勿論ノーアルコール。これから勝敗を競う相手と一同に会する立食パーティーは、プレ開会式の性格が強

く例年、和やかさより緊張感の方が目につく。
「……だから本当は出たくないのよね、これ……」
真由美の、生徒会長にあるまじき放言を、達也は礼儀正しく聞かなかったことにした。
技術スタッフは裏方ではあるが、競技場内で活動する正規のメンバーとして、パーティーに出席しなければならない。
パーティーとかレセプションとかの類いを苦手としている達也は、内心、真由美の意見に賛成だった。
パーティーのドレスコードは各学校の制服。着る物にあれこれ悩まなくていいのはありがたいのだが、借り物のブレザーはどうも身体にしっくり来なくて、パーティーに対するネガティブな気分を増幅していた。
「やはり、新調された方が良かったのでは……？」
小さく身体を揺すっていたのに気付いたのだろう。
深雪が眉を曇らせて達也の顔を見上げていた。
「いや、大丈夫だ。
すまないな、気を遣わせて」
言葉だけでなく、達也は恥じた。これではどちらが兄（姉）か分からない。全員参加の公式行事なのだから、苦手とか嫌いとか言っている場合ではないのだ。
「いえ、滅相もありません」
微妙な表情の変化で、達也が鬱々とした気分を吹っ切ったのが分かったのだろう。
深雪は嬉しそうに微笑んだ。
「はいそこ。
兄妹（きょうだい）で雰囲気作るの禁止」
冷やかし含みの声に目を上げてみれば――厳密に言えば、一旦上げた目線を下ろさなければならなかった――笑いをこらえている表情で真由美が達也たちを見ていた。
「雰囲気、って……何ですかそれは……」

世の中には男女関係を全て色恋事に結び付けたがる病に罹った少女たちがいると、ゴシップサイトで読んだことがあるが、それが事実で患者が自分の身近にいるというのは、正直勘弁して欲しいと達也は思った。

まあおそらく真由美は、いつもの調子で彼のことをからかいたがっているだけなのだろうが。

まずまともな答えは返ってこないと分かっていたが、一応、達也は視線で回答を促してみた。

しかし、真由美の目は、達也ではなく彼の隣に向けられている。

今にも吹き出しそうになっている、その視線を辿ってみると……

「深雪……そこで何故お前が照れる……？」

恥じらいを浮かべて俯いている妹の姿があった。

「さあ、行きましょうか」

先程の後ろ向きな態度とは打って変わって、何故か、晴れ晴れとした表情で真由美が一同に促した。

何だか、気分転換の肴にされたようで釈然としない気持ちはあったが、足取りが軽くなった真由美の後姿を見て、「まあ、いいか」と達也は思った。

◇◆◇◆◇◆◇

九校戦参加者は選手だけで三百六十名。裏方を含めると四百名を超える。

全員出席が建前とはいえ、様々な理由をつけてパーティーを欠席する者は決して少なくない。

それでも、懇親会は出席者数三百人から四百人の、大規模なものとなる。

会場も必然的に大きなものとなり、ホテル側のスタッフもそれなりの人数が必要だ。

ホテルの専従スタッフや基地の応援だけでは賄い切れないだろう、

ということも容易に推測できるし、明らかにアルバイトと思しき若者が給仕服に身を包んで会場内を行き来しているのも納得できる。

しかし――その中に知り合いの姿を見つけたとなると、驚かずにはいられない。

短い開会の辞の後――長さだけが取柄の退屈な演説が無いのはありがたかった――早速料理を取りにいった達也に背後から掛けられた声。

「お飲み物は如何ですか？」という聞き覚えのある声に振り返ってみると、そこには、ドリンクを載せたトレイ片手のエリカが立っていた。

「……関係者とはこういうことか……」

「あっ、深雪に聞いたんだ？

ビックリした？」

「……驚いた」

楽しそうに笑うエリカに、気の利いた反撃を考え付く余裕も無く、達也は頷いた。

「よく潜り込めたな……いや、その位は当然か」

場所が場所だ。

例え日雇のアルバイトであったとしても、高校生が簡単に雇ってもらえる所ではない。

年齢制限だってある。今回はアルコール抜きだとしても、それで条件が緩和されるものでもないのだ。事実、会場を行き来するウエイターもコンパニオンも、大体二十歳以上に見える。

流石は千葉家、というところだろうか。

コネの使い道を間違っているような気もするが。

「それにしても……」

「んっ？　なぁに？」

「いや……」

彼らしくもなく、達也は言葉を濁した。

流石に本人を前にして「それにしても化けたな」とは言い辛かっ

たのだ。
本人も、年齢的に拙いということは分かっているのだろう。
エリカは随分、大人びたメイクをしていた。
これだけ間近に見ても、他のコンパニオンとそれほど変わらない年頃に見える。
普段は歳相応に溌剌とした美少女のイメージが強いエリカだが、スレンダーな彼女には、大人びたメイクも似合っていた。
（彼女には……？）
達也はふと、自分の思考に違和感を覚えた。
エリカは一人ではなかった。
美月が一緒だったはずだ。
人ごみが苦手で接客に向いているとは言い難い彼女に、パーティーのコンパニオンが勤まるのだろうか……？
「ハイ、エリカ。可愛い格好をしているじゃない。関係者って、こういうことだったのね」
彼が黙り込んでしまった空白を、ちょうど補うタイミングで深雪が会話に入って来た。
「そういうこと。
ねっ、可愛いでしょ？
達也くんは何も言ってくれなかったけど」
身体を左右に捻ってフワリと広がったスカートを揺らして見せながら、エリカは不満げにそう言った。
突如矛先を向けられた達也だったが、そこは持ち前の切替の速さで、すぐさま反論を繰り出そうとした、が、深雪の方が一拍早かった。
「お兄様にそんなことを求めても無理よ、エリカ」
笑いながら首を振った深雪を、達也より寧ろエリカの方が意外そうな目で見つめた。
深雪が達也を庇わず、否定的な発言をしたのに意表を衝かれたのだ。

――だが、それはエリカの早合点だった。
「お兄様は女の子の服装なんて表面的なことに囚われたりはしないもの。
きちんと、わたしたち自身を見て下さっているから、その場限りのお仕着せの制服などに興味を持たれないのよ」
それは過小評価で過大評価だ、と達也は思った。
今回に関して言えば、他の事――美月のことが気になって、そこまで気が回らなかっただけだ。
彼にだって女性の服を褒めるくらいの気配りはあるし、際どい格好をされれば目のやり場に困ったりもする。
――いや、その場合は服ではなく、その下に見えているものが問題なのかもしれないが。
「ああ、なるほどね。
達也くんはコスプレなんかに興味は無いか」
「それってコスプレなの？」
「あたしは違うと思うんだけど、男の子からしたらそう見えるみたいよ」
だが少女たちの会話は、本音を口に出せない彼を置いてけぼりにして突っ走っていた。
「男の子って、西城君のこと？」
「アイツじゃその程度のことさえ言えないって。
ミッキーよ、コスプレって口走ったのは。
しっかりお仕置きしといてやったけど」
達也の耳には、不穏な台詞がしっかりと残った。
だが深雪には、然して気にならなかったようだ。
「ミッキー？」
全く知らない固有名詞が、話している相手の口から当たり前のように出て来たら、そちらの方が気になるのは当然かもしれないが。
「ミキのことよ。
女みたいな呼び方するなって、やたらグチグチと拘るもんだから

ミッキーって呼ぶことにしたの」
「……だから、その『ミキ』とか『ミッキー』とかって誰？」
深雪の再質問に、エリカは「あっ」という表情を浮かべた。
「そうか。深雪は知らないんだっけ」
そう呟くや否や、エリカは呼び止める間もなくその場を走り去った。
「器用だな。バランス感覚が余程優れているのか……」
片手にトレイを持ったまま、ドリンクを溢さずに走って行くエリカを見て、達也はしきりと感心している。
それも少しずれているのでは？、と深雪は思ったが、口に出したのはもっと当たり障りのないことだった。
「一体どうしたのでしょうね……？」
実のところ、答えを期待しての質問ではなかった。
ただいきなり放置されて、間が持たなかった為に口から零れた台詞だ。
だが、予想に反して、
「多分、幹比古を呼びに行ったんだろう」
明確な答えが返って来た。
「吉田幹比古。名前は知っているだろ？」
「お兄様と同じクラスの方ですね？」
定期試験の上位者リストで話題になった名前だ。深雪もしっかり覚えていた。
「エリカとは幼馴染らしい。
深雪は幹比古に会ったことがなかったからな。
紹介するつもりじゃないのか？」
なる程、エリカのやりそうなことだった。
何も言わず、いきなり走り去ったことも含めて。
「深雪、ここにいたの」
「達也さんも、ご一緒だったんですね」
何とは無しにエリカの姿が消えた方を見ていた兄妹に、今度は二

人の女子生徒が話しかけてきた。
「雫、わざわざ探しに来てくれたの？」
「ほのか、雫。……君たちも、いつも一緒なんだな」
「……そう言えば、そうですね」
「友達だから。
別行動する理由もないし」
「そりゃそうだ」
達也が二人を名前で呼ぶようになったのは、つい先月のことだった。
熱心に「お願い」していたのはほのかの方だが、達也としては、雫の無言のプレッシャーに押し切られたという面の方が強かった。
「他のみんなは？」
訊ねたのは深雪。
但し、余り気乗りしていない声だった。
「あそこよ」
ほのかが指差す方を見てみると、慌てて目を逸らす男子生徒の集団がいた。
チームメイトの一年女子も、同じところに固まっている。
「深雪の側に寄りたくても、達也さんがいるから近づけないんじゃないかな」
「何だそりゃ。俺は番犬か……？」
雫の推測に、呆れ声を漏らす達也。
当たっている可能性が高いだけに、笑い飛ばすことも出来ない。
「みんなきっと、達也さんにどう接したらいいのか戸惑っているんですよ」
ほのかが口にしたのは慰めの台詞だが、それもありそうなことだと達也は思った。
彼は、自分が「異端」だと自覚している。
本来ならば、彼の方から歩み寄るべきなのだろうが……
「バカバカしい。

同じ一高生で、しかも今はチームメイトなのにね」
竹を割るように断じたのは、新たな声だった。
「千代田先輩」
花音がグラスを片手に（無論、ソフトドリンクだ）、達也たちの輪の中に入って来た。
その後ろには、同じようにグラスを持った五十里の姿もあった。
「分かっていてもままならないのが人の心だよ、花音」
「それで許されるのは場合によりけりよ、啓」
花音と五十里は互いのことを名前で呼び合う。
まあ、婚約者なら当然過ぎるほど当然かもしれない。
「どちらも正論ですね。
しかし、今はもっと簡単な解決方法があります」
お節介かな？　とも思ったが、こんなことで言い争いをされては達也の方が愉快ではない。
恋人同士のコミュニケーションの邪魔をするのは忍びなかったが、達也はさっさと収束を図った。
「深雪、クラスメイトの所へ行っておいで」
「ですがお兄様」
「後で部屋においで。
俺のルームメイトは機材だから」
選手もスタッフも基本的に部屋はツインだが、達也が唯一の一年生スタッフで唯一の二科生である為、気を遣わなくてもいいように、と機材番の名目で、真由美がツイン・シングル（シングルユースツインルーム）を割り当ててくれたのだ。
「ほのか、雫も。良ければ後で」
深雪はまだ不服そうだったが、達也が何故そんなことを言ったのか、その理由は彼女自身よく理解していた。
「……分かりました。では、後ほど」
「後でお邪魔させてもらいますね」
「また後で」

笑いながら手を振っていた達也は、不機嫌な眼差しを感じて振り返った。
「大人の対応ね。
でも、それじゃあ先送りにしかならないと思うけど？」
達也と花音の関係は、顔見知りの範疇を超えるものではない。
達也の交友関係に花音が口を挟むのは筋違いなのだが、花音の発言が義侠心から出たものだと解っていたので、達也も真面目に対応することにした。
「先送りで良いんですよ。
今すぐ解決する必要の無い問題で、時間がある程度の解決をもたらす類いの事なのですから」
「それは……っ」
言葉に詰まったまま、花音は悔しそうな目を向けてきた。どうやらこの上級生の少女は、相当な負けず嫌いらしい。
「花音、司波君の言う通りだよ。
世の中には、拙速を尊ばないこともあるんだ」
「だが、若々しさが無いのも確かだな」
「摩利さん」
新たに絡んできた摩利に、達也は反論せず、ただ軽い会釈を返した。
「五十里、中条が探していたぞ」
そして、達也のそんな反応は織り込み済みとばかり、摩利はさっさと用事を済ませた。
「すみません、それで、中条さんは何処に？」
「一号作業車だ。
もうすぐ来賓挨拶が始まるから、早く用を済ませて中条も引っ張って来てくれ。
他の有象無象はともかく、老師のお言葉に欠席者がいるのは外聞に障る」
「そうですね。分かりました」

「摩利さん、失礼します」
五十里と花音を手を振って見送った後、摩利は達也へ向き直った。
「サイズは合ってたようだな」
「少し窮屈ですけどね」
「それは仕方がない。
肥満体型は想定してても、筋肉の発達で幅が足りないというのは貸衣裳の想定外だ。それ以上大きなサイズにすると胴回りが余ってみっともないからな」
「そうですね。仕方がありません」
「新調すれば良かったんじゃないか？」
「二回しか着ないブレザーを新調するのは、もったいなさ過ぎますよ。
ワッペンなら取り外して着るという選択肢もあったでしょうけど、刺繍ですからね、これは……」
そう言いながら、達也は少し忌々しげに自分の左胸を見下ろした。
そこには八枚花弁のエンブレムが縫い付けられている。
他校の生徒との親睦会に、校章が無いと分かり難い、と言われて無理矢理着せられたものだ。
「二回だけとは限らないぞ？
秋には論文コンペもあるし、君が一科に転籍しないとも限らないからな」
笑いながらではあったが、摩利の目は結構本気だった。
達也は憮然として答えた。
「論文コンペに選ばれたとしても、自分の制服で構わないでしょう。
一科への転籍はありえません。そんなことは規定も前例も無い」
達也の言葉に、摩利は声を上げて笑った。
「前例？　今の君の立場自体が前例に無いじゃないか。
君の様な二科生は前例に無いんだから、前例が無いというだけで可能性を否定する根拠にはならないよ。
前例が無い、等と言うより、君こそが『前例』になるべきだ。君

の様な後輩の為にね」
「……」
苦虫を噛み潰してしまった達也を見て、摩利はもう一度、楽しそうに笑った。
「さて、あたしは他校の幹部と少し話をしてくるが、君も一緒にどうだ？」
「……いえ、多分、エリカが俺を探しに来るでしょうから」
エリカの名前が出た瞬間、摩利の目に一瞬の動揺が走った。
意趣返しのネタにしようか、という思考が脳裏を過ったが、冗談の種に使うには少々根が深そうだ。
達也は、無言で摩利を見送った。

◇◆◇◆◇◆◇

「あれっ？
深雪は？」
エリカは達也の予想通り、幹比古を伴って戻ってきた。
「クラスメイトの所へ行かせた。
後で俺の部屋に来るから、その時に紹介するよ」
「あ、うん」
達也の台詞は前半がエリカに、後半が幹比古に対するもの。
幹比古の反応は、残念そうというよりホッとしたという色合いの濃いものだった。
「……無理にとは言わんぞ？」
「……えっ？」
すぐには自分に掛けられた言葉と分からなかったのだろう。
幹比古の回答には少し間があった。
「いや、そういう訳じゃないよ！
少し緊張するのは確かだけど……」
「や～ねぇ、男って、美人の前だと格好つけたがるんだから」

「エリカも十分美人だよ。今日は特にね」
「えっ？　チョッと、ヤダもう……」
「それで？」
茶々を入れて来たエリカを茶々返しで撃退し、達也は幹比古に続きを促した。
「達也、君って……
いや、初対面にこの格好というのは、チョッと恥ずかしかったからね……」
幹比古は何か言いたげに口を開きかけたが、疲れた様子で首を振って、訊かれたことに答えた。
そう言われて、達也は改めて幹比古とエリカの衣装を見た。
幹比古の衣装は白いシャツに黒の蝶ネクタイ、黒のベスト。
エリカの衣装はスカートがフワリと広がった黒のワンピースに白いエプロン、頭に白いヘッドドレス。
端的に言えば、執事とメイド、ではなく、召使いとメイドだった。
「別におかしな格好ではないと思うが？
ホテルの従業員ならそんなものじゃないか？」
フロアを行き来しているウェイターは皆、幹比古と同じ格好をしている。
「ほらご覧なさい。
自意識過剰なのよ、ミッキーは」
「僕の名前は幹比古だ」
同じ遣り取りが何度も繰り返されたであろうことが窺われる口調と表情。
どうやら幹比古は、今の自分の姿が余程気に入らないらしい。
もしかしたら旧家出身の彼には、使用人と同じ格好をするということに抵抗があるのかも知れない。
「ところで、あとの二人はどうしたんだ？」
何故こんなところでアルバイトの真似事をしているのかも気になったが、そこには触れないでおこうと達也は思った。

「レオに接客が務まると思う？」
「その程度の使い分けくらいはできると思うが……」
友人の為に控えめな弁護を達也は試みたが、今にも吹き出しそうなエリカの表情は変わらなかった。
「美月もこの格好は嫌なんだって。
実はミキと気が合うのかしら」
「僕の名前は幹比古だ！」
「了解りょーかい。
という訳で、二人とも裏方。
レオは厨房で力仕事、美月はお皿を洗ってるよ」
何が「という訳」なのかは分からなかったが、言わんとすることは理解できた、気がした。
「二人とも機械の操作は得意だからな」
「そうね。二人とも、見掛けによらないけど」
今の時代、倉庫の出し入れも食器の洗浄も、人手を使う部分はほとんど無い。
かなり細かい部分まで、機械が人の手の代わりを務める。
要するにあの二人は、裏でキッチン用オートメーションを操作しているということだろう。
「僕もそっちのはずだっただろう。
何故いきなり給仕をやらさせられるんだ！？」
「何度も説明したじゃない。
チョッとした手違いだって」
「説明になってないだろう！」
「ハイハイ騒がないの。
アルバイトとはいえ、あたしたちはお仕事中なのよ。
ほら、あっちのお皿、空いてるわよ」
「……後で覚えてろよ、エリカ」
そう言い捨ててテーブルへ向かった幹比古だったが、達也にはその捨て台詞にあまり「本気」が感じられなかった。

「忘れちゃうのはミキの方なんだけどねぇ……」
呆れ声で見送るエリカの声音にも表情にも、それ以外の感情は見受けられなかった。
だが達也には、それがエリカの本音の全てでは無いように思えた。
「……どういう事情があるのかは知らないが、もう少し手加減してやったらどうだ？」
エリカは何について言われたのか、咄嗟には分からなかったようで、答えが返ってくるまで少なからぬ間があった。
「……そんなに大した事情がある訳じゃないんだけど。
でもそうね。あたしも少し八つ当たり気味だったかな。
ミキがこういうの苦手なのは良く知ってるんだけど。
でも、ね……」
「……怒らせたかったのか？」
「う～ん、どうだろ……？
屈折し過ぎて、見ていてイライラする、ってことはあるんだけどね。
まだ素直に笑えないのは仕方ないと思うんだけど、怒ることすら忘れちゃう執着ってのはどうなんだか……それってもう、妄執の域だと思うんだよね」
「優しいんだな」
「止してよ」
達也としては相槌程度の、何気ない一言だったが、返って来た拒否反応は予想外に激しいものだった。
「八つ当たり、って言ったでしょ。
あたしもミキも、今日ここにいるのは自分の意思じゃない。親に無理強いされた結果よ。
優しく見えたとしても、それは単に、同類が相憐れんでいるだけ」
「……事情は聞かない。
聞いてもどうしようもないからな。
今の言葉は、忘れることにしとくよ」

「……ごめん、そうしてくれる？
……ねぇ、達也くん」
「ん？」
「達也くんってさ……冷たいよね」
「……いきなりだな」
「でも、その冷たさがありがたい……かな。
優しすぎないから、安心して愚痴をこぼせる。
同情されないから、惨めにならない。
……ありがと」
最後の一言は、聞き取れるか聞き取れないかの、小さな声。
逃げるように配膳台へ向かうエリカの後姿を見ながら、悩みは誰にでもあるものだな、と達也は思った。

◇◆◇◆◇◆◇

深雪は真由美に声をかけられて、クラスメイトと別れ、生徒会のメンバーと同行していた。
他校の生徒会役員と挨拶を交わす――傍ら、腹黒い探り合いを演じる――真由美と鈴音の背後で、エリカを見送る兄をこっそり横目で見つめる。
声に出さず、表情にも出さず、心の中だけでため息をついた。
深雪は達也を誰よりも高く評価しているが（深雪が誰よりも高く、ではなく、達也を誰よりも高く、である）、それでも完璧な人間だと考えている訳ではない。――或る種の超人だと考えてはいるが。
兄には少なくない欠点がある、と深雪は思っている。
その欠点の一つが、他人から寄せられる好意を信じられない、ということだ。
鈍感過ぎて他人の好意が分からない、という面も多少はある。
しかしそれ以上に、他人が自分に好意を持っているということを、達也は心の底で疑ってしまう。

それはある意味で仕方の無いことだ。
愛情という最高の好意を実の親から与えられなかったばかりか、実の親の手によって「愛情」そのものを心の中から剥ぎ取られたのだから。
兄が自分の愛に応えてくれるのは奇跡みたいなものだ、と深雪は理解している。
それでも、可愛い同級生から（エリカは深雪の目から見ても文句無く美少女だ）恋慕にも似た好意――あれは既に「恋」ではないかと深雪は感じている――を示されて、その後姿を醒めた目で見送っている兄の姿には、安堵よりも切なさを覚えてしまう。
兄は自分がこうして見つめていることに気づいてもいないだろう、と深雪は思った。
もしかしたら視線には気づいているかもしれない。
でも、自分がどんな想いを抱えているのか、など、想像すらもしていないに違いない。――そう思って、深雪はますます切なくなった。
そして、段々腹が立ってきた。
――これはもう、一度文句を言わなければ気が済まない。
――円滑な人間関係構築の為に、余り鈍感過ぎるのは兄の為にもならないはずだ。
――そう、これは兄の為、愛の鞭に他ならない。
淑やかなアルカイック・スマイルの下で、深雪はそう決意した。
……そんな彼女が、自分を見つめる視線に気づくはずも無かった。
誰しも、自分のことは分からないもの、なのかも知れない。

◇◆◇◆◇◆◇

今、真由美たちと（表面的には）笑顔で談笑しているのは、第一高校にとって最大のライバル校と目されている第三高校の生徒会役員だ。

その背後で、三高の一年生が何事かこっそり囁き合っていた。

先輩の情報戦に耳を傾け、戦力分析に勤しんでいる、のであれば、流石は尚武の校風を掲げる第三高校。上級生も感涙に咽たかもしれない、が……

「見ろよ一条、あの子、超カワイクねぇ？」

「超って、お前……何時の時代の高校生だ」

「うるせーな。おめーには聞いてねーよ。

なっ、なっ、一条、どう思う？」

「何サカってるんだよ……無駄無駄。あんな美少女、高嶺の花もいいトコだろ。お前じゃ相手にされないって」

「つくづくるせーな。俺じゃダメでも、一条ならイケるかもしれねーじゃんか。

なんせ一条は顔良し腕良し頭良し、そのうえ十師族の跡取りなんだからよ。

そしたら俺にもお近づきになるチャンスくらいめぐってくるだろ」

「なに威張って情けないこと言ってんだよ……」

実態は、このような会話が交わされていたのであった。――まあ、実に高校生らしいと言えない事も無い。

「将輝（まさき）、どうしたんだ？」

ただ、その輪の中心にいた男子生徒は、盛り上がる仲間に応えも返さず、じっと話題の女子生徒を見つめていた。

「……将輝？」

「……ジョージ、お前、あの子のこと、知ってるか？」

「え？　ああ、制服で分かると思うけど、一高の一年生だよ。

名前は司波深雪。

出場種目はピラーズ・ブレイクとフェアリー・ダンス。

一高一年のエースらしい」
「げっ、才色兼備ってやつ？」
大袈裟に仰け反るチームメイトを尻目に、一条将輝はポツリと呟きを漏らした。
「……司波深雪、か……」
「珍しいね？
将輝が女の子に興味を示すなんて」
「そう言や、そうだよな」
「一条の場合は、女の方から寄ってくるからな。
ガツガツする必要なんて無いんだろ」
「贅沢なんだよ、コイツは」
段々「モテナイ男の八つ当たり」の様相を呈してきたが、将輝は黙り込んだまま応えない。
ただ、露骨にならないように、時々視線を外しながら深雪を見つめているだけだ。
その視線には、ただならぬ熱が込められていた。

◇◆◇◆◇◆◇

来賓の挨拶が始まり、今日の主役達は世慣れない高校生らしく、食事の手を止め、談笑を中断し、必要以上に真面目な態度で大人たちの声に耳を傾けていた。――あるいは、傾ける振りをしていた。
エリカが仕事に戻ってから、話しかけてくる者も無くなった達也にとっては、手持ち無沙汰からの解放だ。
入れ替り立ち替わり壇上に現れる魔法界の名士の顔を見るだけでいい暇つぶしだった。
初めて見る顔もあれば、映像で見ただけの顔もある。
無論、直に見たことのある顔もあるし、言葉を交わしたことこそないものの、同じ部屋に同席した経験のある者もいる。
その中でも彼が特に注目していたのは、「老師」と呼ばれる、十

師族の長老の登場だった。
九島烈（くどう・れつ）。
十師族という序列を確立した人物であり、約二十年前までは世界最強の魔法師の一人と目されていた人物だ。
最強の名を保持したまま第一線を退き、以来、ほとんど人前に出てくることのないこの老人は、何故かこの九校戦にだけは毎年顔を出すことで知られている。
直に見たことは無い。映像で知っているだけだ。
歴史上の人物を直接目にするに等しい興奮を、達也は自分の中に見出していた。
順調に激励、訓示が消化されて行き、いよいよ九島老人の順番になった。
年齢はそろそろ九十歳近いはずだ。
かつて最強と呼ばれた魔法力は、どの程度残っているのだろう。
魔法を行使するだけの体力は残っているのだろうか。
司会者がその名を告げた。
息を呑んで、登壇を待つ。
そして現れた人物の姿に、達也は思わず、その息を吐き出すのを忘れてしまう。
眩しさを和らげたライトの下に現れたのは、パーティドレスを纏い髪を金色に染めた、若い女性だった。
ざわめきが広がった。
衝撃を受けたのは、達也だけではなかった。
意外すぎる事態に、無数の囁きが交わされていた。
壇上に上るのは、九島老人ではなかったのか。
何故、こんな若い女性が代わりに姿を見せたのか。
もしや、何らかのトラブルがあり、彼女が名代として派遣されたのか。
（――いや、違う）
達也はようやく、真相に気付いた。

壇上に現れたのは、この女性だけではない。
彼女の背後に、一人の老人が立っている。
ただ、自分たちの意識が、派手に装った若い美女に吸い寄せられているだけだ。
（――精神干渉魔法）
おそらく、会場の全てを覆う大規模な魔法が発動しているのだ。
目立つものを用意して、人の注意を逸らすという「改変」は、改変と呼ぶまでもない些細なもの。何もしなくても自然に発生する「現象」。
ただそれを、全員に、一斉に引き起こす為の、大規模ではあるけれども、微弱で、些細な、それ故に気付くことの困難な魔法。
（これがかつて最強、いや「最高」にして「最巧」と謳われた「トリック・スター」九島烈の魔法か……）
達也の凝視に気がついたのか。
女性の背後の老人が、ニヤリと笑った。
それは、悪戯を成功させた少年のような笑顔だった。
老人の囁きを受けて、ドレス姿の女性はスッと脇へどいた。
ライトが老人を照らし、大きなどよめきが起こる。
ほとんどの者には、九島老人が突如空中から現れたように見えたことだろう。
老人の目が、再び達也を見た。
達也は目立たぬように目礼を返した。
老人の目は、上機嫌そうに笑っていた。
「まずは、悪ふざけに付き合わせたことを謝罪する」
その声は、マイクを通したものであることを差し引いても、九十歳近いとは信じられぬほど若々しいものだった。
「今のは一寸した余興だ。
魔法というより手品の類だ。
だが、手品のタネに気付いた者は、私の見たところ五人だけだった。

つまり」

老人が何を言い出すのか、何を言いたいのか、大勢の高校生が興味津々の態で耳を傾けていた。

「もし私が君たちの鏖殺を目論むテロリストで、来賓に紛れて毒ガスなり爆弾なりを仕掛けたとしても、それを阻むべく行動を起こすことが出来たのは五人だけだ、ということだ」

老人の口調は、特に強くなった訳でも荒げられた訳でもない。

だが会場は、それまでと別種の静寂に覆われていた。

「魔法を学ぶ若人諸君。

魔法とは手段であって、それ自体が目的ではない。

そのことを思い出して欲しくて、私はこのような悪戯を仕掛けた。

私が今用いた魔法は、規模こそ大きいものの、強度は極めて低い。

魔法力の面から見れば、低ランクの魔法でしかない。

だが君たちはその弱い魔法に惑わされ、私がこの場に現れると分かっていたにも関わらず、私を認識できなかった。

魔法を磨くことはもちろん大切だ。

魔法力を向上させる為の努力は、決して怠ってはならない。

しかし、それだけでは不十分だということを肝に銘じて欲しい。

使い方を誤った大魔法は、使い方を工夫した小魔法に劣るのだ。

明後日からの九校戦は、魔法を競う場であり、それ以上に、魔法の使い方を競う場だということを覚えておいてもらいたい。

魔法を学ぶ若人諸君。

私は諸君の工夫を楽しみにしている」

聴衆の全員が手を叩いた。

だが残念ながら、一斉に拍手、とはいかなかった。

戸惑いながら手を叩く同年代の少年少女の中で、達也は同じように手を叩きながらも、他の少年たちとは違い、声に出さず笑い続けた。

――これが「老師」か

――この国の魔法界も、捨てたものでは無いな

達也はこの時、そう、思った。

2－（9）　開幕（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

2－（9）　開幕

懇親会が前々日に催されたのは、前日を休養に当てる為だ。
技術スタッフや作戦スタッフは最後の追い込みに余念がないが、選手は既にベッドに入り、明日からの戦いに備えている。
達也は今晩も彼の部屋に遊びに来ていた深雪、ほのか、雫を自分の部屋に返した後、作業車で起動式のアレンジをしていた。
「司波君もそろそろ切り上げた方がいいよ」
声を掛けられて周りを見れば、車内には既に彼ともう一人を残すのみとなっていた。
「こんな時間でしたか」
時計はそろそろ、日付の更新を示していた。
達也の言葉に、五十里は性別不詳の笑顔で頷く。（余談だが、五十里は私服もヘアスタイルもユニセックスなもので、実はこの先輩、わざと男っぽくない外見を演出しているのではないか、と達也は疑っていた）
「司波君の担当する選手の出番は四日目以降なんだから、あんまり最初から根を詰めない方がいいと思うよ」
「そうですね」
達也が担当するのは一年生女子スピード・シューティング、ピラーズ・ブレイク、ミラージ・バットの三種目。これは深雪たちの希望であると同時に、一年生男子（主に森崎）が嫌がった所為でもある。（深雪はピラーズ・ブレイクとミラージ・バット、ほのかはバトル・ボードとミラージ・バット、雫はスピード・シューティングとピラーズ・ブレイクにエントリーしている）
一年生の競技、つまり新人戦は四日目から八日目にかけて行われる。
明日から担当選手が登場するスタッフに比べて、達也に余裕があるのは確かだった。

花音は二日目・三日目のピラーズ・ブレイク単一エントリーだが、五十里は明日の出場選手の中にも担当を持っている。
「では、お先に失礼します」
敢えて一緒に引き上げようとは言わずに、達也は作業車を後にした。

真夏の夜は、真夜中であっても、それほど気温が下がらない。
Tシャツ一枚で散歩するには丁度いい位だ。
すぐには部屋へ戻らず、ラフな格好でホテルの周りをブラブラ歩いていた達也は、妙に緊張した気配を感じた。
周囲を窺いながら息を殺している、そんな気配だ。
泥棒か？　と最初は考えたが、すぐに自分で打ち消した。
隠そうとして隠し切れていないこの気配は、もっと暴力的で好戦的なものだ。
達也は感覚を開放し、イデア――あらゆる存在物の情報体を包含する巨大情報体――にアクセスした。
（数は三人。場所は……ホテルを囲む、生垣に偽装したフェンスの間際か）
三人はそれぞれ拳銃と小型の爆弾を持っている。
武器を所持しながら、軍の管理地内に侵入してきた相手だ。
ＣＡＤは手許に無いが、放置しておくことは出来なかった。
達也は足音を消して駆け出した。
彼の感覚は、同じように不審者へ向けて近づいている知人を捉えていた。
達也に劣らぬ隠密技術。
最初の位置関係から、不審者への接触は向こうが――幹比古の方が早い。
援護の為の術式を、達也は走りながら編み上げた。
特定の魔法に特化した彼の魔法能力は、特定魔法に限るなら、ＣＡＤが無くとも、他の魔法師がＣＡＤを使用した場合と同等のスピ

ードと精度と威力で行使し得る。
幹比古が魔法を放つ体勢に入った。
ＣＡＤは使っていない。
イデアを通じた認識は、映像ではなく概念として流れ込んでくる。
幹比古が取り出したのは三枚の短冊――おそらくは、呪符だ。
幹比古は、現代魔法ではなく、古式魔法を使うつもりだ。
達也が「知覚」している前で、サイオンが幹比古の手を伝って呪符に流れ込み、術式が構成された。
現代魔法も古式魔法も、「存在」に付随する「情報」に干渉し、「現象」を書き換えるという基礎構造に違いは無い。
ただ、その干渉の方法・態様が異なるだけだ。
幹比古が発動した魔法のシステムは、魔法演算領域内で干渉の為の情報体、即ち魔法式を形成するのではなく、手に持つ呪符に情報を書き足し、それを媒体として「存在」から離れイデアの海を漂っている「独立した非物質存在となった情報体」を支配下に置き、それを通して現象を書き換えるという三段階の構成になっている。
存在に付随する情報体、エイドスを直接書き換える現代魔法に比べれば速度と自由度で劣るものの、改変に対する抵抗を受け難いというメリットがある。限定された現象改変ならば、現代魔法より少ない力で大規模な効果が得られるだろう。
魔法式を解析することの出来る達也は、この一瞬の間にそれだけのことを理解した。
そして、幹比古の術式に、焦りを覚えた。
（それでは間に合わない）
幹比古が行使している魔法には、複数の無駄な迂回路がある。それによる術式発動の遅延は、無視できない長さになるはずだ。
達也は、「分解」の照準を、賊が手にしている拳銃にセットした。

◇◆◇◆◇◆◇

幹比古が不穏な気配に気付いたのは、彼が魔法の訓練をしていたからだった。

ホテルの庭の、奥まった部分。

建物から離れ、敷地を囲む生垣に近い、人気のない場所を見つけて、日課となっている「修行」を始めた。

個々の現象から離れ、「風」「水」「土」「火」等の、抽象的な「概念」の塊である「精霊」と感覚を同調させる、神霊魔法の基礎訓練。

現代魔法学の解釈では、精霊とは、実体を離れ情報の海を漂う情報体。

概念そのものが情報の世界を移動することに付随して、その概念によって表現されるエネルギーが塊となって実体世界を移動する。

それが非物質体として観測されるのだとされている。

しかし幹比古は、こうして「精霊」と触れ合うことにより、彼らを、確かに、この世界に「在る」ものとして感じていた。

理屈、ではなく、実感。

幹比古にとって、精霊とは確かにここにいる、意思を持つ存在であり、こうして触れ合うことで、彼らが「見聞き」した様々なことを教えてくれる「モノ」だ。

幹比古は、同調訓練を始めてすぐ、ホテルの敷地外に人がいることを「聞いた」。

最初は何か用があって外に出ていた人か、さもなくば巡回兵か、と思って気に留めなかった。

だが、精霊が繰り返しその存在を告げるにつれて、幹比古はそれが警告ではないかと考えた。

同調訓練の応用で、感覚の糸を精霊が告げている方へ伸ばす。

糸にかかったのは、「悪意」だった。

幹比古の顔が、緊張に引き締まった。

誰かを呼ぶか、それとも自分で対処するか、咄嗟に迷った。

だが、自分の中に生じている焦燥が、「急げ」という精霊からの

警告のような気がした。
幹比古は、「悪意」へ向けて駆け出した。
不安はあった。
もしも相手が銃器で武装していたとしたら、未熟な自分に対処出切るのか、という不安。
至近距離で向き合ったとき、拳銃に勝てる魔法師は稀だ。
遮蔽物があれば、物理的な障碍に左右されない魔法の方が有利。
遮蔽物が役に立たない状況では、指を曲げるだけの拳銃のスピードに対抗することは難しい。
だが幹比古は、そんな、合理的な不安を怯懦として思考から排除した。
昨日のことが脳裏を過ぎった。
幹比古がボーイの真似事までさせられたのは、父親の意向だ。
エリカは手違いだと言っていたが、本当は分かっていた。

――本来、お前が立っているはずだった場所を見て来い

一昨日の夜、彼の父親は、彼に、そう言った。
ボーイの真似事は、それを実現する為の手段だ。
幹比古の父は、晴れ舞台に立つ彼と同年代の者たちの姿を見せて、発破を掛けたかったのかもしれない。
発奮を促したつもりかもしれない。
だがその言葉は、そのやり方は、幹比古の中で屈辱としてわだかまっていた。
幹比古はこの時、「自分は無能ではない」と証明したがっていたのかもしれなかった。
照明がまばらな場所だったが、幹比古は実家の修行の一環として、暗闇の中で行動する訓練を積んでいる。
仮に星明りだけだとしても、不自由は無い。
悪意が明確な人の気配として捉えられるまでに接近した所で、幹

比古は呪符を取り出した。
三人の賊に、三枚の呪符。
向こうも幹比古に気づいたのだろう。
浴びせられる悪意と敵意に、幹比古はこの三人が賊であることを確信していた。
躊躇は出来ない。
敵意は殺気に変わっていた。
躊躇えば、やられる。
身元の確認は二の次だ。
幹比古は符に魔力を込め、術を放った。

◇◆◇◆◇◆◇

幹比古の手許に閃光が生じ、それに呼応するように、賊の頭上に電子が集まっていく。
一秒以内に、電撃が賊を襲う。
しかし、引き金を引く為の時間は、半秒もかからない。
達也は「分解」を発動した。
三人の賊が持つ三丁の拳銃は、エイドスの改変に従い、バラバラに解体された。
その直後、
空中に生じた小さな雷が、賊を撃ち倒した。
「誰だ！」
幹比古が鋭く問い掛けた相手は、生垣の向こうに倒れている姿の見えない敵ではなく、背後から駆け寄ってくる彼を援護した魔法師だった。
幹比古は、理解していた。
彼の魔法が、本来ならば、間に合わなかったことを。
彼が怪我をしなかったのは、他の魔法師による援護があったからだということを。

自分の魔法から、以前のスピードが失われていることを、実戦の中で突きつけられていた。
「俺だ」
「達也？」
幹比古がショックを受けていることは、気配で分かった。
だが達也は、短く答えただけで足を止めず、生垣の手前で跳び上がった。
自己加重の術式により負の加重をかけ、二メートル超の生垣を飛び越える。
幹比古はそれを、呆気に取られて見送っていたが、ハッと我を取り戻して新たな呪符を取り出し、同じように自己加重の術式を行使した。
幹比古が生垣の向こう側へ降り立った時、達也は倒れた賊の傍らに膝をついていた。
「達也？」
それは、色々な意図を含んだ問い掛けだった。
どんなつもりで問い掛けているのか、幹比古自身にも良く分かっていなかった。
「死んではいない。
良い腕だな」
それを達也は、賊の状態を訊ねたものだと受け取ったようだ。あるいは、幹比古の混乱をある程度見抜いて、最も当たり障りのない解釈を選んだのかもしれない。
「えっ？」
幹比古は、達也が何を褒めているのか理解できなかった。
本来なら自分はやられていた、という自虐的な想いが幹比古を捕えていた。
「ブラインドポジションから、複数の標的に対して正確な遠隔攻撃。
捕獲を目的とした攻撃で、相手に致命傷を与えることなく、一撃で無力化している。

ベストの戦果だな」
達也の口調は冷徹と言い換えてもいいくらい冷静で、お世辞や慰めを掛けているのでは無いと聞いているだけで分かった。
幹比古が信じられないのは達也ではなく、自分自身だった。
「……でも僕の魔法は、本来ならば間に合っていなかった。達也の援護が無かったら、僕は撃たれていた」
「アホか」
「……えっ？」
「援護が無かったら、というのは仮定に過ぎない。お前の魔法によって賊の捕獲に成功した、これが唯一の事実だ」
「……」
達也の、容赦の無い罵声と容赦の無い指摘に、幹比古はすっかり面食らっていた。
「現実に俺の援護があって、現実にお前の魔法は間に合った。本来ならば？
幹比古、お前は一体、何を本来の姿と思っているんだ？」
「それは……」
「相手が何人いても、どんな手練（てだれ）が相手でも、誰の援護も必要とせず、勝利することが出来る。
まさかそんなものを基準にしているんじゃないだろうな？」
心臓がひっくり返ったような衝撃を幹比古は感じていた。
達也の口にした「基準」が余りに馬鹿げたものであることは、彼にも理解できる。
だが自分は心の奥底で、達也の指摘と似たようなことを、確かに考えていなかっただろうか？
「やれやれ……もう一度、敢えて言おう。
幹比古、お前は阿呆だ」
「達也……」
「何故それ程までに、自分を否定しようとする？
何故それ程、自分を貶める？

何がそんなに気に入らないんだ？」
「……達也に言っても分からないよ。
言っても、どうにもならないことなんだ」
「どうにかなるかもしれんぞ」
壁を作り、その影に逃げ込む幹比古の反論を、達也は言葉の破城槌で打ち砕いた。
「えっ……！？」
今度こそ、絶句する幹比古に、達也は射貫くような視線を浴びせた。
「幹比古、お前が気にしているのは、魔法の発動スピードじゃないか？」
「……エリカに聞いたのかい？」
「否」
「……じゃあ何で……」
「お前の術式には無駄が多過ぎる」
「……何だって？」
「お前自身の能力に問題があるのではなく、お前が使用している術式そのものに問題がある、と言ったんだ。
魔法が自分の思うように発動しないのはその所為だ」
「何でそんなことが分かるんだよ！」
幹比古は叫んだ。
混乱の余り。
憤りの余り。
彼の使う術式は、吉田家が長い年月を掛け、古式魔法の伝統に現代魔法の成果も積極的に取り入れて、改良に改良を重ねてきたものだ。
それを、一度や二度、見ただけで、欠陥品扱いする達也に、幹比古は怒った。
自分がずっと、都合のいい妄想と否定し、見ないようにしてきた疑念を言い当てられた気がして、幹比古は混乱した。

「俺には分かるんだよ。
無理に信じてもらう必要は無いがな」
「……何だって？」
「俺は、『視る』だけで魔法の構造が分かる。起動式を読み取り、魔法式を解析することが出来る」
幹比古の混乱は、この時、極みに達していた。
そんなことが出来る魔法師など、聞いた事が無い。
そんな異能が本当に存在するとすれば、現代魔法学の抱える課題の半分は解決してしまうだろう。
「……無理に信じてもらう必要は無い」
達也はもう一度、突き放すようにそう言った。
幹比古は、「ここから先は、お前自身の問題だ」、と言外に告げられたような気がした。
「今日のところは、この話はここまでにしよう。
それより、コイツらの処置だ。
俺が見張っているから、警備の方を呼んで来てもらえないか？
それとも俺が呼びに行こうか？」
正直なところ幹比古は、達也の「告白」が嘘か本当かを考えることも出来ない状態だったので、棚上げの提案は願ってもなかった。
「あ、僕が呼びに行くよ」
「分かった。待っている」
幹比古は再度「跳躍」の術式を発動し、生垣の向こうへ消えた。
一方、達也は、賊を拘束する手段を少し考え、地面に埋めてしまうことに決めた。
「分解」では埋め直す為の土も消えてしまうから、「分離」と「発散」と「移動」を別々に使わなければならない。
ＣＡＤ無しでは少し辛い作業だが、先程の「跳躍」のように、単純な術式であれば、また複数同時発動ではなく一つずつであれば、魔法式を丸ごと暗記しているので実行に問題は無い。
皮肉なことだが、人為的に作られた仮想魔法演算領域は、意識領

域内に作られているが故に、丸暗記した魔法式をそのまま使えるというメリットがある。

（ズルいな、俺は……）

一方で被害者意識を抱えながら、もう一方でそれを都合のいい道具として利用する。

節操のない自分に自嘲の笑みを浮かべて、達也は魔法を発動しようとした。

――しかし、その必要はなくなった。

近づいて来る知人の気配に、達也は魔法を中断した。

話し掛けられるまで、それほど待つ必要はなかった。

「随分容赦のないアドバイスだったな、特尉」

「少佐、聞いておられたのですか？」

達也は、盗み聞きする風間の気配を掴んでいなかった。

だが、驚くには足りないことだ。

風間は達也より遥かに長い期間、九重八雲の教えを受けた、九重門下の筆頭なのだから。イデアにアクセスしていない状態の達也では、風間の気配を察知するのは困難だ。

ぞんざいに敬礼する達也に、風間はニヤリと笑って答礼した。

「他人に無関心な特尉には珍しいのではないか？」

「無関心は言い過ぎかと思いますが」

「それとも、身につまされたか？

あの少年も貴官と似た悩みを抱えているようだからな」

「あのレベルの悩みなら、自分は卒業済みです」

「つまり、身に覚えがあるということか？」

「……この者たちをお願いしてよろしいでしょうか」

人の悪い笑みを浮かべて、それこそ容赦のない追撃を重ねる風間に、退路を失ってしまった達也は、話を逸らすのが精一杯だった。

「引き受けよう。基地司令部には、俺の方から言っておく」

ただ風間の方も、これ以上追求を重ねても意味は無いと理解していた。

笑みを消し、真顔になって、達也に向かい頷いて見せる。
「お手数をお掛けします」
「気にする必要は無い。余計な仕事をさせられたのは貴官も同じだ」
「はい」
「だがこの連中……予想以上に積極的だな。技量も想像以上だ。達也。十分、気をつけろよ」
「ええ、ありがとうございます」
「明日の昼にでも、ゆっくり話すことにしよう」
「そうですね。それでは、失礼します」
「ああ、またな」
部下と上官の顔から、知人・兄弟弟子の顔になって、二人は別れた。

◇◆◇◆◇◆◇

翌日。
九校戦は、何事もなかったように開幕した。
昨晩の一幕を知る者は、当事者以外にほとんどいない。
選手は皆、一流の魔法力を持つとはいえ、まだ高校生だ。
全くの未遂に終わったことだし、不安を与えるのは好ましくない、との判断が下された結果だった。
開会式は華やかさよりも規律を強く印象付けるものだった。
魔法競技はそれ自体がとても派手なものだから、セレモニーを華美にする必要は無いのである。
長々とした来賓挨拶もなく、九校の校歌が順に演奏された後、すぐに競技に入った。
一日目の競技はスピード・シューティングの決勝までと、バトル・ボードの予選。
スケジュールの違いは、両競技の所要時間の違いを反映している。

「お兄様、会長の試技が始まります」
「第一試技から真打登場か。
渡辺先輩は第三レースだったな」
「はい」
達也たちは、真由美の試合を観戦すべく、スピード・シューティングの競技場へ移動した。左から、雫、ほのか、達也、深雪の順番で、会場内の関係者エリアではなく、一般用の観客席に陣取る。
スピード・シューティングには二つの試合形式がある。
予選は五分の制限時間内に破壊した標的の数を競うスコア型。
同時に四つのシューティングレンジを使い、六回の試技で予選を終えて、上位八名が準々決勝に進む。
ちなみに、エントリーできる選手は二十四名。
九校が三名ずつエントリーすると二十七名になるのだが、三校は前年度の当該競技順位により足切りにあい、二名しかエントリーできない。
これはモノリス・コードを除く全競技に共通のルールだ。
準々決勝以降は、対戦型。
紅白の標的が百個ずつ用意され、自分の色の標的を破壊した数を競う。
「予選では大破壊力を以って複数の標的を一気に破壊するという戦術も可能だが、準々決勝以降は精密な照準が要求されるという訳だ」
達也の言葉に、雫が熱心に頷いた。
彼女はこのメンバーの中で唯一、新人戦スピード・シューティングにエントリーしている。
「従って普通なら、予選と決勝トーナメントで使用魔法を変えてくるところだが……」
「七草会長は予選も決勝も同じ戦い方をすることで有名ね」
達也が言いかけた台詞は、背後に座った少女に横取りされた。
「エリカ」
「ハイ、達也くん」

「よっ」
「おはよう」
「おはようございます、達也さん、深雪さん、ほのかさん、雫さん」
達也たちの背後にずらりと並んだのは、右から順にレオ、エリカ、美月、幹比古。
都合よく四人分の席が空いていたのは、彼らの座席が最後列に近いから、という事情による。
「もっと前の方が空いてたんじゃないか？」
「達也くんたちの姿が見えたから。
それにこの競技は、離れた所から見ないと分からないでしょ」
「まあな」
観客席は後列ほど高い階段構造。
空中を高速で飛ぶ標的を打ち落とすのだから、最前列近くの席から観戦する観客は、選手と同等の視力が必要となる。
それでも観客が前へ前へと詰めかけているのは――
「バカな男どもが多い所為ね」
「青少年だけではないようだがな」
「お姉さま～！、ってヤツ？
ホント、嘆かわしいったら」
「そう言うな。確かにあれは、近くで見る価値があるかもしれん。
毎日のように顔を合わせていた俺でも、別人かと思ってしまうくらいだからな」
「うわっ！
深雪、どうする？　浮気よ、ウワキ」
エリカの暴言に、達也も深雪も、ただ苦笑いを浮かべている。
彼らが何を言っているかというと……
「エルフィン・スナイパー、ですか。
ピッタリのニックネームですね」
「本人は嫌っているようだから、会長の前では言わない方が良いぞ」
達也に釘を刺されて、ほのかは首をすくめるような仕草をした。

前列に押し掛けた青少年及び少女たちのお目当ては、この第一レンジで開始の合図を待つ真由美の姿を見ることにあった。
豊かに渦巻く長い髪の上から耳を保護するヘッドセットをつけ、目を保護する透明のゴーグルをかけた真由美の姿は、ストレッチパンツの上にミニワンピースと見間違えそうなウエストを絞った詰め襟ジャケットというユニフォーム、スピード・シューティング用の小銃形態デバイスと相俟って、可愛らしさと凛々しさが絶妙にミックスされ、近未来映画のヒロインのような雰囲気があった。
「会長さんをネタに同人誌を作ってる人たちもいますしね……」
「……それは初耳ね」
「……美月、貴女はそれをどういう経緯で知ったのかしら？
もしそういう『趣味』があるのなら、わたしたちの友情を見直したいのだけど」
「えぇ！？　いえ、そんな趣味なんてありませんよ！」
「始まるぞ」
鋭いツッコミに慌てふためいていた美月は、達也の一言に慌てて口を閉ざした。
観客席が静まり返る。
ヘッドセットをつけているので、少しくらい観客が騒いでも選手には関係ない。
単発小銃のように細長い、見ようによっては杖にも見える競技用ＣＡＤを構えた選手の集中と気迫が、観客席を巻き込んだ結果だ。
開始のシグナルが点った。
軽快な射出音と共に、クレーが空中を翔け抜ける。
「速い……！」
思わず呟いた雫の一言は、標的の飛翔スピードに対するものか、
――それを撃ち砕いた真由美の魔法に対するものか。
真由美は首を傾げず、真っ直ぐに立ってＣＡＤを構えている。
元より銃身から弾を撃ち出しているのではないのだから、照星に視線を合わせる必要は無い。ＣＡＤには最初からマズルサイトもス

コープも付いていない。
その立ち姿は、銃よりも寧ろ、弓の構えに似ていた。
クレーが次々と、不規則な間隔で撃ち出される。
射出数は五分間に百個。
平均すれば、三秒に一個。
これだけでも実弾射撃に比べれば異常なハイペースだが、時には連続的に、時には十秒以上の間隔を置いて、時には五個、六個の標的が同時に宙を翔ける。
真由美はその全ての標的を、一個の取りこぼしもなく個々に撃ち砕いて行く。
五分の試技時間は、あっという間に終了した。
「……パーフェクトとはね」
ゴーグルとヘッドセットを外し、客席の拍手に笑顔で応える真由美を見ながら、達也は呆れ声で呟いた。
「ドライアイスの亜音速弾、ですよね？」
拍手を送りながら訊ねた深雪に、達也は笑顔で頷いた。
「そうだ。良く分かったな」
「……その位、あたしにも分かったんですけど……」
不満げな声のツッコミに、達也は苦笑いを浮かべる。
「そうだな、同じ魔法を百回も見せられれば分かるか」
決まり悪げに目を逸らした者もいたが、達也は見なかったことにした。
「百回？　一発も外さなかったんですか！？」
こちらは素直な性質なのか、正直に驚きを見せながら、ほのかが達也にそう訊ねた
「ああ。
驚くべきは、魔法発動のスピードでも反復回数でもなく、あの精度だろう。
いくら知覚系の魔法を併用していたといっても、手に入れた情報を処理するのは自前の頭だからな。

余程マルチサイトの訓練を積んだのか、それとも天性なのか……流石に十師族直系は伊達じゃない」

「会長さん、知覚系魔法まで併用していたんですか？」

驚きの声を上げたのは美月。

だが今回は、同じような表情をしている者の方が多かった。

「遠隔視系の知覚魔法『マルチスコープ』。

非物質体や情報体を見るものではなく、実体物をマルチアングルで知覚する、視覚的な多元レーダーの様なものだ。

会長は普段から、この魔法を多用しているぞ？」

気付かなかったのか？、と目で問われ、美月はブンブンと首を振った。

「全校集会の時なんか、この魔法で隅から隅まで『見張って』いたんだけどな。

レアなスキルではあるが……肉眼だけであの射撃は無理だと思わないか？」

「確かに無理」

即座に応じたのは雫。彼女は自分がシューティングレンジに立つ時のことを考えながら、試技を見ていたのだろう。

「でもよ、空気分子の運動を減速してドライアイスをつくり、これを亜音速に加速し、更に知覚魔法を併用していたんだろ？

知覚魔法は常駐、減速魔法と加速魔法は百回も繰り返して。

良く魔法力がもったな」

ここでレオが言っている「魔法力」とは、実技判定における「魔法力」ではなく、通俗的な意味での魔法を反復行使するスタミナのことだ。

良く誤解されていることだが、魔法はエネルギーを消費する運動では無い。

サイキカルなエネルギーを消費して現象の改変しているのではなく、情報の改変により現象を改変しているのだ。

情報改変にはサイオンで作成した魔法式の投射が必要だから、魔

法式の規模に応じて魔法を行使し得る回数に限界はあるが、レオが今使った意味での「魔法力」とは、類似物を求めるならば思考力のスタミナに近い。

「会長の射撃魔法は『ドライ・ブリザード』のバリエーションだが、原型となっている『ドライ・ブリザード』は効率の良い魔法だからな。

会長の魔法技能なら、百回どころか千回でも可能だろうさ」

手放しで真由美を褒める達也の言葉に、深雪たち一科生組は複雑な表情を浮かべた。

真由美の魔法力は彼女たちも凄いと思っているが、魔法に関して辛口な達也の、無条件で賞賛する言葉は、嫉妬心を呼び起こさずにいられないものだった。

だが、レオの関心は別の点にあったようだ。

「えっ、でもよ、この真夏の気温でドライアイスを作るのも、それを亜音速まで加速するのも相当なエネルギーが必要なはずだぜ？

いくら魔法がエネルギー保存法則の埒外だからといって、それだけの現象改変を伴う魔法の負担が少ないってのは、いくら達也の言葉でも俄かにゃ信じられんのだけど」

「埒外であっても、無関係じゃないのさ」

バトル・ボードの会場へ移動する為に立ち上がりながら、達也は謎掛けの様な回答を返した。

「そりゃどういう意味だ？」

追いかけるように立ち上がりながら、レオが再度、問い掛ける。

「魔法はエネルギー保存法則に縛られず、現象を改変する技術だ。

だが改変される側の対象物まで、エネルギー保存法則から自由になっている訳じゃない。

例えば、状態維持の式を組み込まずに物体を加速した場合、加速された物体は冷却される。

運動維持の式を組み込まずに運動中の物体を加熱すれば、その物体の運動速度は低下する。

通常の魔法式には、改変を意図しない要素について現状を維持する式が必ず組み込まれているから意識する機会は少ないがな。

物理法則ってヤツは結構強固なもので、魔法という理不尽な力の干渉を受けても、何とか辻褄を合わせようとする復元力が働くんだよ。

だから、逆に言えば、物理法則にとってはエネルギー保存法則を破らないように組まれた魔法の方が自然な現象で、魔法の面から見れば、少ない干渉力で実行可能な魔法となるんだ。

もう分かるだろ？

ドライアイスを作ってそれを加速するという魔法は、ドライアイス形成過程で奪い取った分子運動エネルギーを、固体運動エネルギーに変換するというスキームで物理法則を欺いている。

エントロピーを逆転させる、自然には絶対にあり得ない現象なんだが、ドライアイスを加速させることで、ただ単にドライアイスを作るより、熱力学的には辻褄が合ってるんだ」

「……何か上手いこと騙されてるような気がすんだけど」

「覚えておいた方がいいぞ、レオ。

世界を『上手いこと騙す』のが、魔法の技術だ」

「つまり、あたしたち魔法師は、世界を相手取った詐欺師ということね？」

「強力な魔法師ほど、極悪な詐欺師ということになる」

エリカと雫の茶々に、達也は笑うことしか出来なかった。

◇◆◇◆◇◆◇

バトル・ボードのコースには、統一された規定がない。

元々海軍の魔法師訓練用に考案されたもので、魔法の使用が大前提である為、統一ルールを必要とするほど一般に普及することはあり得ないのだ。

九校戦のバトル・ボードは全長三キロの人工水路を三周するコー

ス。

コースは男女別に一本ずつだが、難易度に差がある訳ではない。予選を一レース四人で六レース、準決勝を一レース三人で二レース、三位決定戦を四人で、決勝レースを一対一で競う。

平均所要時間は十五分。

最大速度は三十ノット超――時速五十五～六十キロに達する。一枚のボードに乗っているだけの選手に、風除けは全く無い。追い風で速度を稼ぐセイリング競技と違って、まともに向かい風を受けるのだ。この風圧に耐えるだけでも、選手は相当な体力を消耗する。

「女子には辛い競技だ。ほのか、体調管理は大丈夫か？」

「大丈夫です。達也さんにアドバイスしていただいてから体力トレーニングはずっと続けて来ましたし、選手に選ばれてからは睡眠も長めに取るようにしていますから」

今回の九校戦に関係なく、達也はほのかと知り合って間もない頃、彼女の体力不足を危惧して、魔法の訓練だけでなく肉体的なトレーニングも積極的に行った方が良いとアドバイスしたことがある。

達也にとっては日常会話の中のついでのようなアドバイスだったのだが、ほのかは思いの外、真剣に受け取っていたらしい。

「ほのかも随分筋肉が付いてきたんですよ」

「やだ、止めてよ、深雪。

私はそんな、マッチョ女になるつもりはないんだから」

自分を挟んで交わされた会話に、達也は思わず噴き出してしまった。

「ほら……達也さんに笑われちゃったじゃない」

「笑われたのは、ほのかの言い方がおかしかっただけだよ」

「雫まで。

いいわよ、どうせ私は仲間外れだし。

二人と違って、達也さんに試合も見てもらえないし」

いきなりいじけ出したほのかに、達也は困惑し、笑っていられなくなった。

ここで何故、自分に矛先が向けられたのか。
「……ミラージ・バットは調整を担当させてもらうんだがな」
とりあえず、言い掛かりと思しき部分だけは反論しておく。
しかし、
「バトル・ボードは担当してもらえませんよね。
深雪と雫は、二種目とも達也さんが担当するのに」
どうも、逆効果くさかった。
「……その分、練習もつきあったし、作戦も一緒に考えたし、決して仲間はずれにしている訳では……」
言い訳しながら、どんどん泥沼にはまっているような気がして、達也は遂に口ごもってしまった。
「達也さん、ほのかさんはそういうことを言ってるんじゃないんですよ」
「お兄様……少し、鈍感が過ぎると思いますよ?」
「達也くんの意外な弱点発見」
「朴念仁?」
女性陣から集中砲火を浴びて、達也は絶句を余儀なくされる。
男性陣地からの援護は無い。
達也はレース開始の合図まで、ひたすら耐える破目に陥った。

◇◆◇◆◇◆◇

コースの整備が終わり、選手がコールされて、達也はようやく解放された。
途中から深雪たちが何を言いたいのかは理解できた。
だが、相手の主張が理解できるかどうかということと、それに対応できるかどうかということは、全くの別問題なのである。
今後は余計なことを言わないように、より一層注意しよう、と達也は決意した。
そんな後ろ向きな決意を心に秘めて、スタートラインにたゆたう

四人の選手を見る。
水上コースだから、ラインなどは引かれていない（引きようがない）。
四人が横一列に並ぶと少々狭く感じる水路の中側に、摩利は位置取っていた。
他の選手が膝立ち、または片膝立ちで構える中、摩利だけは真っ直ぐに立っている。
それは大部分、バランス感覚の違いを反映したものだが、見ようによっては他の選手を傅かせている女王様の様な佇まいだった。
「うわっ、相変わらず偉そうな女……」
エリカの呟きを聞いて、相変わらず敵意むき出しだな、と達也は思った。
つい今しがた決意したばかりなので、口には出さなかったが。
エリカの左右に座るレオも美月も、聞かなかったことにしたようだ。
空中に吊るされている大型ディスプレイ――残念ながら、魔法によってではなく、飛行船を使って、だ――に四人の選手のアップが映し出された。
摩利はただ一人、不敵に笑っていた。
確かに彼女は、敵役タイプだよな、と達也は思った。
女子高生の多数派意見は違ったようだが。
選手紹介アナウンスにより、摩利の名が呼ばれた瞬間、黄色い歓声が客席を――特に最前列付近を――揺るがした。
手を挙げて歓声に応える摩利に、黄色い絶叫が益々高まる。
「……どうもうちの先輩たちには、妙に熱心なファンが付いているらしいな」
熱狂度では、真由美のファンの少年たちより、こちらの方が数段上である。
「分かる気もします。
渡辺先輩は格好良いですから」

今回の九校戦で、真由美以上の男性ファン、摩利以上の女性ファンという、男女を問わぬ熱心なファンを獲得することになる自分の未来を知らない深雪は、冷静な口調で客観的に評価した。

真夏の水上競技、ではあるが、選手が身に着けている物は水着ではない。

身体にピッタリ貼り付くウェットスーツに、各高校のロゴが大きく、カラフルに入っている。

バンダナを巻いたショートボブの髪を微風に揺らして水上に立つ摩利の姿は、少年少女向け騎士道物語の挿絵のようだった。

エリカにもその台詞は聞こえたはずだが、特に反論はなかった。

『用意』

スピーカーから、合図が流れる。

空砲が鳴らされ、競技が始まった。

「自爆戦術？」

呆れ声で呟いたのはエリカ。

達也は呆れて声も出なかった。

スタートの直後、四高の選手が後方の水面を爆破したのだ。

おそらく大波を作ってサーフィンの要領で推進力に利用し、同時に他の選手を撹乱するつもりだったのだろうが……

「あっ、持ち直したぜ」

自分がバランスを崩すような荒波を作って、何がしたかったのだろうか。

レースはスタートダッシュを決めた摩利が、四高選手の作り出した混乱にも巻き込まれず、早くも独走態勢に入っていた。

水面を滑らかに進む摩利のボード。

移動魔法によりボードを動かしているのではなく、ボードと自分自身を一纏まりの存在として移動させているのだろう。

あるいは、自分の肉体と自分が乗っているボード、二つの対象物に同時に移動魔法をかけているのか。

どちらにしても、魔法をかける対象物を余程明確に定義しない限り、可能なことではなかった。
ボードで水を掴み、直角の曲がり角を鮮やかにターン。
まるで足の裏にボードが貼り付いているような安定度だ。
「硬化魔法の応用と移動魔法のマルチキャストか」
魔法式の解析ではなく、水上を走り去る姿、ボードの上の姿勢とバランスの取り方で、摩利が何をやっているのかを達也は見抜いた。
「硬化魔法？」
耳聡く聞きつけて、問いかけてきたのはレオ。
自身の得意魔法だけに、当然、無関心ではいられないのだろう。
「何を硬化しているんだ？」
「ボードから落ちないように、自分とボードの相対位置を固定しているんだ」
「？」
「硬化魔法は、物質の強度を高める魔法じゃない。パーツの相対位置を固定する魔法だ。それは理解しているだろ？」
「そりゃ、実際に使っているからな」
「渡辺先輩は、自分とボードを一つのオブジェクトを構成するパーツとして、その相対位置を固定する魔法を実行している。
そして、自分とボードを一つの『もの』として、移動魔法をかけている。
それも、常駐じゃないな。硬化魔法も移動魔法も、コースの変化に合わせて持続距離を定義し、前の魔法と次の魔法が被らないように上手く段取りしている」
「へぇ……」
「……しかし、面白い使い方だな……確かに硬化魔法の対象は、単一構造物のパーツである必要はない。うん、これなら……」
「お兄様？」
天才技術者の性か、マッドな物思いに耽りかけた達也を、深雪の声が引き戻した。

摩利の姿は、少し目を離した隙に、スタンドの陰に入って見えなくなってしまっている。
達也は「何でもない」とお茶を濁し、大型ディスプレイに視線を移した。
「加速魔法」
水路に設けられた上り坂を、水流に逆らって摩利は昇って行く。
その挙動から見て、外部から受けた加速のベクトルを逆転させる術式だ。
「発散魔法も併用しているのか」
同時に、水面を細かく砕いて表面張力を弱める魔法も使われているようだ。
「凄いな。
常時、三種類から四種類の魔法をマルチキャストしているのか」
一つ一つの魔法はそれほど強力なものでない。
ただ、その組合せが絶妙だった。
芸術の域まで高められた魔法で観客を圧倒した真由美に対して、摩利は臨機応変、多種多彩、虹のように重ね合わされた魔法で観客を魅了している。
どちらも、高校生のレベルではなかった。
坂を昇り切って、滝をジャンプ。
着水と共に、水面が大きく波打った。
摩利の魔法により作り出された大波は、彼女のボードを前方へ押し流すと共に、二番手で飛び降りた選手を呑み込み落水寸前へ追い込んだ。
「戦術家だな……」
「性格が悪いだけよ」
一周目の、コース半ばも過ぎないうちに、摩利の勝利は確実なものとなっていた。

◇◆◇◆◇◆◇

今日のバトル・ボードは予選のみ。昼食後に第四レースから第六レースが行われるのみだ。

午後はスピード・シューティングの準決勝と決勝を観戦することにして、達也は一旦、皆と別れた。

ホテルの、高級士官用客室へ向かう。

風間の階級は少佐だが、その戦歴と率いる部隊の特殊性から、軍内では階級以上の待遇を受けている。

本来であれば大佐クラスが使用する広い客室にルームサービスのティーセットを並べて、風間は大隊の幹部と共に一服しているところだった。

「来たか。まあ、掛けろ」

警備の兵士（この基地の兵士ではなく風間の部下）に案内されて来た達也は、風間からざっくばらんな口調で椅子を勧められたが、居並ぶ幹部連に躊躇いを見せた。

達也に与えられた「特尉」の階級は「準士官」の意味ではなく、「国際法上の軍人資格を持つ非正規の士官」としての意味を持つ（今日、この国の軍制には「準士官」を意味する特務士官の制度は無い）。軍の階級秩序に全面的に縛られている訳ではなく、交戦者としての保護を受ける為、独立魔装大隊で作戦行動に従事する時のみ命令系統に従うことを約している身なのだが、制度的な強制力は無いとは言ってもそこはやはり上官であり、それ以上に目上の大人たちだ。「掛けろ」と言われて「では遠慮なく」とは行かなかった。

「達也君。今日我々は君を、『戦略級魔法師・大黒竜也特尉』として呼び出したのではなく、我々の友人『司波達也』君として招いたのだ。余り遠慮されると我々の方が困ってしまう」

「それに君が立ったままだと、話もし難い。座ってくれないか」

「真田大尉、柳大尉……

分かりました。失礼します」

年齢を超えて示された友誼に、それ以上の遠慮で礼を失する愚を

冒さず、達也は一礼して風間の向かい側へ腰を下ろした。
テーブルの天板は円形。
独立魔装大隊のティータイムは円卓の精神をモットーとしている。
このテーブルは部屋に備付のものではなく、風間がわざわざ運び込ませたものだった。
達也の席が最も扉に近いとはいえ、大人たちは彼を同列の友人として迎えていた。
「まずは久し振りですね。
ティーカップでは少し様になりませんが、乾杯と行きましょうか」
「藤林少尉。ありがとうございます」
風間の副官――というより秘書役――を務める女性士官からカップを差し出され、達也は目礼しながらソーサーごと受け取った。
今日の彼女は軍服ではなくレディースのスーツを身に着けているので、余計に「大企業の若手女性秘書」的な雰囲気を漂わせている。
彼女だけではなく、全員がスーツ上下やシャツ・上着無しの平服姿だった。
「私は先日会ったばかりだが、まあこの場は藤林君の顔を立てるとしようか」
「無理なさらずともよろしいのですよ、山中先生」
「いや、再会の祝杯に横槍を入れるほど、私は野暮ではないつもりだからな」
「……先生はカップにブランデーを注ぎ足す口実が欲しいだけでは？」
「目出度い席に酒精はつきもの」
「やれやれ……医者の不養生というのは、もう少し別の意味で使われる言葉だと思っていたのだが」
柳大尉により示された疑惑に悠然と嘯きを返したのは、医者であり一級の治癒魔法師でもある山中軍医少佐。
その言葉に、嘆かわしげに首を振っている風間を加えた五人が、この場に達也を迎えた独立魔装大隊幹部の面々だった。

「柳大尉、藤林少尉、お久し振りです。真田大尉、先日はありがとうございました」
「いや、こちらの方こそ助かったよ。『サード・アイ』の微細精密照準システムは、君でなければ手に負えないからね」
「あのＣＡＤは元々自分用ですから……」
山中先生、そう言えば先日の検査結果をまだ頂戴しておりませんが」
「……私だけ扱いが違わないか、達也？」
「先生……、面と向かって人体実験をさせろと言う医者に、好意を持つ人はいないと思いますが」
山中の抗議にツッコミを入れたのは藤林嬢。
山中はわざとらしく、そっぽを向いた。
円卓は笑いに包まれた。

久しぶりと言っても何年も会わなかった訳ではない。
最も長く顔を合わせなかった者で半年強、真田と山中は、先月一緒に仕事をしたばかりだ。
話題は自然と現況報告になり、この九校戦と、それに対する犯罪組織の蠢動へ移って行った。
「昨夜は活躍だったわね。もしかして、警戒してたの？」
「買い被りですよ、少尉。散歩してたら、たまたま気配を掴んだだけです」
「あんな遅い時間まで？」
「競技用ＣＡＤの調整をしていたものですから」
年齢が近いこともあり、このメンバーで達也と最も会話が多くなるのは、自然と藤林少尉になる。軍務で鍛え上げられた彼女はメリハリのある目に毒なプロポーションの持ち主だが、服装もルックスも地味で、性格にも飾り気がないので、達也も気楽に言葉を交わすことができた。
「やはり技術スタッフとして参加か。チームメイトは『シルバー』

のことを知っているのか？」
「いえ、それは一応、秘密ですから」
山中の問いに、達也は首を振りながら答える。
「君が高校生の大会のＣＡＤエンジニアを務めるというのは、イカサマの様な気もするけど。
レベルが違い過ぎるんじゃないか？」
「真田大尉、達也君も歴（れっき）とした高校生ですよ？」
笑いながらある意味尤もな疑念を呈した真田を、やはり笑いながらたしなめてから、藤林は達也へ視線を戻した。
「選手としては出場しないの？
フラッシュ・キャストの技術があれば、結構いい線行くと思うんだけど。いざとなれば、『マテリアル・バースト』はともかく、『雲散霧消（ミスト・ディスパージョン）』もあるんだし」
「いえ、『雲散霧消』や『マテリアル・バースト』は機密指定という以前に殺傷力でレギュレーション違反ですよ。
そもそも『マテリアル・バースト』は『サード・アイ』が無いと使えませんしね」
「でも『トライデント』は持って来てるんでしょう？」
「あれもオーバースペックでＣＡＤのレギュレーション違反です。
それと、フラッシュ・キャストは一応、四葉の秘匿技術なんですが」
苦笑しながら藤林の言葉を打ち消す達也。
その後に、柳が呆れ声で続いた。
「藤林……高校生の競技会と、戦略級魔法にして究極の『分解』魔法たる『マテリアル・バースト』を結び付けて考えることそのものが、大きくずれていると思うが」
「私も別に、九校戦で『マテリアル・バースト』を使う機会があるなんて考えていませんよ。
でも去年の大会では、十文字家の御曹司が『ファランクス』を、七草家のご令嬢が『魔弾の射手』を使ってるんですから、『雲散霧

消』を使ってもそれほどおかしくないと思うんですけど」
「藤林君、十文字家の『ファランクス』は防御用魔法に分類されていて、殺傷性ランクの対象外だよ。
七草家の『魔弾の射手』はフレキシブルな威力設定がセールスポイントで、殺傷力は事後的に評価される。
一方、物質を分子レベルに分解する『雲散霧消』は、殺傷性Aランク相当。
同列視は出来ないよ」
「あら、真田大尉、ご存知ないんですか？
九校戦の殺傷力規制は、対人影響の可能性がある競技に掛けられたもので、スピード・シューティングとピラーズ・ブレイクは対象外なんですよ。
パンフレットは安全性を強調するあまり、この点に触れていませんけど」
九校戦が現在の形態・ルールで開催されるようになったのが十年前。このメンバーの中で実際に九校戦を戦ったことがあるのは二高の優勝メンバーだった藤林だけだ。
お互い、得意分野の薀蓄合戦になり始めたところで、風間からストップが掛かった。
「どちらにしても軍事機密指定の魔法を衆人環視の競技会で使う訳にはいかないのだから、そんなことで言い争っても仕方がなかろう？
それより達也、もし選手として出場するようなことがあった場合は」
「分かっていますよ、少佐。
『雲散霧消』を使わなければならないような状況に追い込まれたら、諦めて負け犬に甘んじます。
……しかし、自分が選手として出場するような状況は考え難いんですが」
「心掛けの問題だ。
分かっているならそれでいい」

互いに失笑気味の笑顔で話題を締めくくる風間と達也。

世の中、何が起こるか一寸先は闇、とはいえ、合理的に考えれば達也の指摘が正しいことは二人とも分かっている。

だが心の底では、風間だけでなく、達也の方も、自分の推測に十分な自信を持ち得ていなかった。

2－（10）　花形と裏方（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

2－（10）　花形と裏方

「達也くん、こっちこっち！」
風間たちとのティータイムから戻ってみると、スタンドは既に満席だった。
達也が待ち合わせメンバーの姿を探していると、彼を先に見つけたエリカの方から声が掛かった。
「準々決勝から凄い人気だな」
人の波を掻き分けるようにして進み、エリカの隣の席に座る。
「会長が出場されるからですよ。他の試合は、これほど混んではいません」
達也の台詞は独り言に近い何気ない感想だったのだが、律儀に答えを返したのは、反対側の隣席をキープしていた深雪だった。
今回は深雪の向こう側にレオ、エリカの後ろに美月、達也の後ろにほのか、深雪の後ろに雫という座席配置だ。
「ほのか、観辛くないか？」
達也の身長は入学時から順調に伸びて、今では１８０センチ近く（正確には１７８センチ）になっている。
段差があるとはいえ、観戦しにくいのではないか、との懸念は当然出て来る。
だが振り返って訊ねた達也に、ほのかは笑顔で首を横に振った。
「……ところで幹比古はどうしたんだ？」
「気分が悪くなったんだって。部屋で休んでるって言ってた」
達也の質問に答えた後、だらしない、とエリカは表情で付け加えた。
「熱気に当てられたみたいですよ。
私もメガネを掛けていなかったらダウンしてたかもです」
美月が幹比古をフォローする。
なる程、感覚が鋭敏すぎるとそういうこともあるか、と達也は思

った。
彼女たちの心理模様も興味深かったが、今は考えないことにした。
真由美がシューティングレンジに姿を見せた瞬間、嵐のような歓声がスタンドを揺るがした。
スタンドの其処彼処に設置されたディスプレイが一斉に「お静かに願います」のメッセージを映し出し、潮が引くように歓声が収まる。
声は消えたが、その分、熱気は強まったような気がする。
達也は対戦相手の選手が少し可哀想になった。
人気選手の相手をする時には、競技の種類によらず付き物のプレッシャー、ではあるのだが。
相手を気遣ってのことだろう。
真由美は観客の応援など存在しないような素振りで小銃型ＣＡＤのトリガーロックをリリースし、開始の合図を待つ態勢を整えていた。
競技の開始はシグナルで示される。
実質的には、投射機が標的を撃ち出さない限り、この競技は始まらない。
それでもスピード・シューティングの選手にとって、縦に並んだ五つのライトが、始まりを告げる角笛だ。
最初のライトが点った。
一つずつ光源が増え、光が最上段に到達した瞬間、素焼きの円盤が空中を飛び交い始めた。
空中を白い円盤が乱舞する。
真由美の撃ち落すべき標的は赤。
赤く塗られたクレーは、有効エリアに飛び込んで来た瞬間、ほぼ同時に撃ち砕かれていく。
「すごい……」

後ろから聞こえてきた感嘆の声に、達也は心の中で頷いた。
確かに凄い。
戦術的には、あまり賢い戦い方では無い。
先に自分の標的を撃ち落してしまえば、相手は自殺点を心配しなくても良くなる。相手選手は、手当たり次第に攻撃することが可能になる。
だがそんな小利口な理屈など粉砕してしまう、圧倒的な技量がここにある。
「えっ！？」
思わず、といった感じでほのかの口から漏れた驚きの声。
声にこそ出さないものの、雫も同じように驚いているのが気配で分かった。
「『魔弾の射手』……去年より更に速くなっています」
空中を乱舞するクレーから目を離さず、頷く仕草だけで達也は深雪の言葉に応えた。
白いクレーの向こう側を飛ぶ赤いクレーを、下から撃ち抜いたドライアイスの弾丸。
誘導弾ではない。（そんな非効率な魔法を使う物好きはいない）
白いクレーが邪魔にならないポイントでドライアイスの弾丸を形成し、狙撃した遠隔魔法。
魔弾を作り出すのではなく、その銃座――射手を作り出す魔法、それ故に『魔弾の射手』。
遠隔物に働きかける魔法自体は、ごく一般的なものだ。
スピード・シューティングでも魔法で弾丸を生成して狙撃する真由美のような戦い方をする選手は寧ろ例外で、クレーに直接振動魔法を掛ける、クレーに移動魔法を掛けて別のクレーにぶつけて破壊する、という戦い方がこの競技の主流だ。
魔法は物理的な障碍物に左右されないのだから、今のようにブライインドになった標的を破壊するのに特別な技術を使用する必要は本来、無い。

では『魔弾の射手』と名付けられたこの遠隔弾丸生成・射出の魔法は、何を目的とし如何なるメリットを有するのか。

それは、他人が魔法を使用している領域外から、死角をついて攻撃することができる、という点にある。

例えばスピード・シューティングの対戦で、お互いに振動魔法を撃ち合った場合。

互いの標的が接近している場合、互いの魔法が干渉し合って予期せぬ現象――例えば魔法が発動しないとか、超音波の衝撃波を撒き散らすとか――を引き起こすことがある。

他の魔法師と競合する環境下で遠隔物を魔法で操作する場合は、座標を厳密に絞込み、より強い干渉力を発揮する集中力が必要とされる。

対戦型スピード・シューティングは元々、魔法の発動速度と共に、魔力の集中を要求する競技なのだが、真由美は対戦相手の魔法行使領域外から狙撃することにより、一人で魔法を行使するのと同じ状況を作り出しているのである。

無論それは、相手選手にとっても同じ。

そうなれば戦いは純粋に、スピードと照準の精確さの勝負になる。

そしてスピード、（照準の）精確性において、真由美の魔法力は世界的に見ても卓越した水準にある。

高校生レベルでは、勝負にすらなっていなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

一日目の競技、スピード・シューティングは、大方の予想通り、女子部門で真由美が圧勝、男子部門も一高が優勝した。

「会長、おめでとうございます」

「ありがとう。摩利も無事、準決勝進出ね」

「まずは予定通りだな」

既に夜も更け、食事も入浴も終わって、後は眠って英気を養うば

かりの時間、真由美の部屋に女子生徒会役員（プラス風紀委員長）が集まっていた。
まだ一日目が終わったばかりであり、真由美は明日も競技がある。本格的なお祝いは総合優勝の後ということで、今はジュースで簡単な祝杯を挙げているところだった。
女性限定なのは時間を考慮してのこと、だが、別にパジャマパーティーという訳でもなく、男性がいても本当は差し支え無い。
それなのに何故、女性のみになったかというと――
「少しヒヤッとしたが、服部も何とか勝ち残りか」
「ＣＡＤの調整が合ってなかったみたいです。
試合が終わってからずっと、木下先輩と二人で再調整してましたけど……」
「まだ終わっていないようですね」
あずさの言葉を受けて、鈴音が端末で各スタッフの作業報告を確認した。
「木下くんも決して下手じゃないんだけど」
「残念ながら、名人とも言えないな」
摩利の歯に衣を着せない評価に、真由美が苦笑を漏らした。
「あの、木下先輩の所為とばかりも言えないと思います。
ここに着いてから服部くん、何だか不安定になってた気がします」
「厳しい言い方をするようだが、そういうのをひっくるめてアジャストするのがエンジニアの腕だ」
「それは……そうですけど……」
「こらこら摩利。あーちゃんを虐めないの。
幸い、はんぞーくんは明日オフだし、本人の気が済むまでやらせてあげるしかないでしょう。
……でもそうすると、明日の木下くんの担当をどうするかが問題ね」
「木下君は女子アクセル・ボールの副担当になっています。
サブですので、抜けても問題は生じないかと」

「そうねぇ……イズミんがいるから大丈夫とは思うけど……」
「和泉一人に任せるのもリスキーじゃないか？
アクセル・ボールのコートは六面だ。
一回戦でも二試合が同時になるし、一回戦を三人全員が勝ち抜けば、二回戦は三試合同時。
真由美は自分で調整できるとしても、残る二人分を一度に調整する必要が出てくるかもしれない。
各試合のインターバルが長く取ってあるとはいえ、時間が足りなくなる事態も十分予想される。
その為のサブだろう？」
「男子のサブの石田君を女子兼任にするのは如何ですか？」
女子の試合は午前、男子の試合は午後。鈴音の提案は、スケジュール的には可能なものだったが、真由美の反応は否定的だった。
「午前も午後もじゃ、石田君に負担が掛かり過ぎよ。
アクセル・ボールは一日の試合数が一番、多いんだから」
「では、明日、明後日の両日ともオフの司波君では如何でしょう？」
鈴音の代替案に、真由美は少し考えてから頷いた。
「……それが一番かな。
じゃあ、深雪さん。達也くんに伝えてくれる？」
「はい」
真由美の依頼に、深雪は笑顔で頷いた。

◇◆◇◆◇◆◇

「……それでこんな夜更けに来たのか」
いくら兄妹とはいえ、およそ若い女の子が男性の部屋を訪れる時間ではない。
達也はベッドに腰掛けるよう深雪に手振りで示しながら、呆れたように呟いた。
「……ご迷惑でしたか？」

不安げに眼差しを揺らして深雪が問う。
「いや、知らせてくれたのはありがたいが……」
深雪にこういう目をされて、達也が強く出られた例は無かった。
「いくらホテルの中とはいえ、女の子が部屋の外を出歩く時間じゃないよ？
色々と不穏な動きもあるんだ。
もしかしたら廊下に不審者が侵入しているかもしれない」
ここは一応、軍事施設。
セキュリティは一流民間ホテルより更に上だ。
いくらなんでも考え過ぎではないか、と深雪は思ったが、達也が心配してくれるのは嬉しかった。
「はい、申し訳ありませんでした、お兄様」
「満面の笑顔で謝られてもなぁ……」
ぼやく達也の方も、顔が笑っている。
これでは叱責どころかお小言にすらなっていないが、元々妹を厳しく叱り付けるには、達也は深雪に甘過ぎるのだった。
「とにかく、伝えてくれてありがとう。
部屋まで送っていくよ」
達也が椅子から立ち上がると、深雪も慌てて立ち上がり、大急ぎで両手を振った。
「いえ、一人で大丈夫です。
お兄様は作業中でいらしたのでしょう？
ただでさえお邪魔してしまったのに、これ以上お手間を取らせる訳には……」
「作業中と言っても、これは遊びのようなものだから気にしなくて良いよ」
妹の視線から隠すように、達也はノート型端末を閉じた。
「ですが、今のはＣＡＤのプログラムですよね？」
ハードはあまり得意でない深雪だが、達也の影響でソフトにはある程度のスキルがある。

チラッと見ただけで内容を理解することは出来ないが、開いていたエディターの種類やコードの書式から、それが起動式用のプログラムだという程度のことは見分けがついた。
「今回の競技とは無関係のものだから、中断しても少しも構わない。プログラム自体、玩具用みたいなものだからね」
「玩具、ですか？」
「一寸、新しい近接戦用の武器を思いついたんだが、実用性はほとんど無いんだ。
相手を驚かせるくらいの効果しかない、だろうなぁ。
完成しても製品化はできないだろうね」
「それでも新しい魔法としての意義はあるのでは？
お兄様がお作りになるもので、無意味なものなど無いかと」
「ジョークとしての価値はあるかな。
まあ、そういうものだから、急いでいる訳じゃない。
それよりお前の方が重要だ」
「そんな……お兄様ったら、わたしの方が大切だ、なんて……」
（んっ？）
両手を頬に当てて俯く妹に、達也は少なからぬ違和感を感じた。
今、自分の台詞が妙な方向へ改竄されたような気がしたのだ。
（意味は合ってる、が、ニュアンスが致命的に違うような……）
戸惑いは一瞬では収まらなかったが、現実に復帰したのは達也の方が早かった。
「……行こうか」
「はい、わたしの大切なお兄様」
達也は思わず膝が抜けそうになった。
深雪はまだ、現実に復帰できていないようだ――と、信じたい。
達也はこの時、そう思った。

◇◆◇◆◇◆◇

九校戦二日目。

達也は技術スタッフのユニフォームを着て、競技エリア内に設けられた第一高校の天幕に居た。

このユニフォームに袖を通すのは発足式以来だ。（開会式に出席するのは選手のみ）

懇親会のブレザーといい、このブルゾンといい、どうにも抵抗感を拭い切れない。

だが、ユニフォームとして定められている以上、彼の方で慣れる以外に無いことも分かっていた。

「どうしたの？　何か不機嫌？」

「いえ、特には。何故そのようなことを？」

真由美に問われ、落ち着いた声で問い返したが、内心、動揺を禁じ得なかった。

ポーカーフェイスを保っていたつもりだったが、そんなに分かり易かっただろうか。

「んーっ、なんとなく？」

「いえ、そんな曖昧なことを疑問形で言われましても……」

字面とは別の意味で、達也は脱力した。

どうやら、特に表情に出ていたとか雰囲気に棘があったとかそういう理由では無さそうだ。

もっとも、何の兆候も無しに彼の心の裡を言い当てたとなれば、寧ろその方が怖い、というか脅威ではあるのだが。

「それより何か御用があったのでは？」

今は気にしても仕方のないことを脇にどけて――気にしても対策など立てようもないし――達也は試合前の真由美が彼の所へやって来た理由を訊ねた。

「様子を見に来ただけ、だったんだけど……データはもう頭に入ったの？」

彼が女子アクセル・ボールの副担当をするのは昨晩急遽決まったことであり、実際にＣＡＤの調整を手掛けなければならなくなった

場合の為に、達也は各選手のサイオン特性データを大急ぎで頭に叩き込んでいたのだった。

「ええ、まあ」

「全員分？」

「ええ、まあ」

全く同じ短い答えを繰り返した達也を、真由美は目を丸くして見詰めた。

「何か今更、って感じだけど……達也くんってホントに凄いのね」

「瞬間記憶とか完全記憶とかいうらしいですよ。俺としてはこんなものより、普通の魔法力が欲しかったんですけど」

「受験生としては許しがたい贅沢ね」

受験などしなくても推薦で進学できるくせに、真由美はそんなことを言い出した。

――両手を腰に当て、頬を膨らませるオマケつきで。

「……」

「ん？　どうしたの？」

片手の親指と中指で両のこめかみを揉み始めた達也に、真由美はちょこんと小首を傾げて見せる。

「会長、もしかして……いえ」

「？」

言いかけた台詞は「演技じゃなくて素だったんですか？」なのだが、達也はその台詞を呑み込んだ。――まず、賢明と言えよう。

「……そろそろ試合が始まるんじゃありませんか？」

「そうね。

じゃあ、行きましょうか」

「はっ？」

「だから、一緒に行きましょうか」

「……ええ、そうですね」

試合中の調整は許されないが、試合終了後すぐに再調整をしなけ

ればならないケースも考えられる。
スタンドではなく、コート脇についていなければならないのは当然だった。
達也は振り返る真由美の横へ並んだ。

「深雪さんはスタンドなの？」
「ピラーズ・ブレイクを観に行ってます」
「そっか……本当に別行動することもあるのね」
真由美は歩きながら随分感慨深げに頷いた。
達也は少々情けない気持ちになった。
「……そんなにいつもいつも一緒にいるように見えるんですか？」
余程情けない顔に見えたのだろうか。
真由美は大慌てで両手を振って、否定の意思を示した。
「えっ、いえ、本当はそうじゃないって分かってるのよ？
生徒会の仕事中はいつも別々だし、教室だって実習だって一緒じゃないって知ってるし。
ほら、何と言うかその……イメージよ、イメージ！」
「会長……魔法師にとって、イメージは現実そのものなんですが……」
湿度と重量を増した眼差しに、真由美は見えない汗をだらだらと流さなければならなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

重苦しい空気は、コートに着くまで続いた。
流石に試合場を前にして、士気に差し障る態度を取り続けるのは拙いと考えた達也は、自分で自分に一喝を食らわせて表情を引き締めた。
しかしそれは、真由美が上に羽織っていた膝上丈のクーラージャンパー（熱電効果による冷却機能がついた防暑用スタジアムジャン

パー）を脱いだ瞬間、危うく崩れ落ちそうになった。
「……もしかしてそのウェアで出るんですか？」
「そうよ？」
当たり前のように頷かれて、達也は頭痛を感じた。
「本当に、そのスコートで試合をするんですか？」
「えっ、おかしいかな？
……似合ってない？」
「……とても良くお似合いです」
「そう……？　フフッ、ありがと」
上機嫌でストレッチを始めた真由美の姿を、達也はもう一度確認の意味を込めて見てみた。
何度見ても、彼の見間違えではなかった。
テニスウェア、としか表現しようのない、ポロシャツにスコート姿。それも競技用というよりファッション性重視。
少し身体を傾けるだけで裾が跳ね、アンダースコートが見えてしまう。
アクセル・ボールは動きの激しい競技だ。
通常は半袖シャツにショートパンツ。転んでも大丈夫なように、膝・肘用のプロテクターを着ける選手もいる。
魔法オンリーで戦えばその限りでは無いが、ラケットを使わない選手は逆に、ボールがぶつかっても怪我をしないようなウェアで試合に臨む。
こんな両手両足むき出しの、ヒラヒラした格好で出場する競技ではなかったはずなのだが……
（この女性（ひと）なら何でもありか）
見慣れてくると何となくそんな気がして、達也は納得してしまった。
「達也くん……今なにか失礼なことを考えなかった？」
「滅相もありません。
ラケットは使わないんですか？」

中々鋭い指摘を真面目くさった顔でサラリと流し、事務的な口調で話を逸らす。
「うん、私はいつもこのスタイルよ」
一瞬、いつも「テニスウェア」スタイルなのか、と勘違いしそうになったが、これは勿論「魔法オンリー」の競技スタイルという意味だ。
「ＣＡＤは何を？」
「これ」
そう言って真由美は、小さなバッグの中から拳銃形態の特化型ＣＡＤを取り出した。
ショートタイプ、一部でシビリアンタイプと呼ばれる、実弾拳銃の銃身に当たる部分が短いタイプの物だ。（達也のＣＡＤはロングタイプ、一部でキャバルリータイプと呼ばれる銃身部分が長いタイプ）
拳銃形態・小銃形態ＣＡＤの銃身部分には照準補助装置が詰まっている。魔法的な座標（対象物エイドスのイデア内における相対座標）を計測する為のアクティブレーダーがこの「銃身」の正体だ。
長い銃身を持つＣＡＤは、それだけ照準補助を重視しているということになる。
逆に言えば、特化型の起動速度のみを求め、照準補助を必要としていない魔法師には、軽くて携行も取り回しも便利なショートタイプの方が向いていると言える。
「会長は汎用型をお使いでしたよね？」
「普段はね。
どうせ一種類しか使わないから」
随分省略された言い方だが、「試合中はどうせ一種類の魔法しか使わないから特化型を選んだ」という意味だと、達也は正確に理解した。
「移動魔法ですか？　それとも、逆加速の魔法ですか？」
「正解。『ダブル・バウンド』よ」

真由美は入念なストレッチを続けながら、特にもったいぶることもなく達也の質問に答えた。
「達也くん、ちょっと手を貸してくれない？」
「いいですよ」
ぺたりと座り込んで大きく脚を広げた真由美の背中を軽い力で斜めに押す。
ほとんど抵抗もなく、彼女の胸は脚についた。
「運動ベクトルの倍速反転ですか……しかし、あれ一種類ではリスクがありませんか？
低反発性ボールでは、壁や床で運動エネルギーが失われると、相手コートまで戻らない可能性もありますが」
少し低めの体温を掌に感じながら、達也は肩越しに囁く形で注意を促してみた。
「んーんんん……っと、一応、他の加速系魔法も入れてるけど、去年も使わなかったし」
事も無げに言っているが、これは相当の力量差が無いと出来ないことだ。
真由美のレベルがどれほど飛び抜けているのか、達也は改めて実感した。
「もう良いわ」
左右四回ずつ繰り返したところで真由美に言われ、達也は手を離した。
腰を伸ばして距離をとると、両足を揃えた真由美がこちらを見上げて手を差し出している。
何がしたいのかすぐには分からなかったが、じっとこちらを見詰めるだけで動こうとしない真由美の少し不満げな表情を見て、達也はようやく彼女の意図を理解した。
正面に回りこんで差し出された手を握る。
小さく、柔らかな手だった。
彼が軽く引っ張ると、真由美は膝を揃えたまま器用に立ち上がっ

た。
「ありがと」
「いえ、どういたしまして」
我ながら愛想に欠ける受け答えだと達也は思ったが、真由美は何故か嬉しそうだった。
「う～ん、何か新鮮」
「はっ？」
流石にこの発言は脈絡が無かった。
反射的に問い返した達也へ、真由美はニコニコと笑みを返した。
「私って、兄と妹はいるけど弟はいないのよね」
「はぁ……」
それは知っていた。
秘密主義の四葉と違い、七草家は社交的な家柄だ。
子供たちの誕生日パーティーも大勢の招待客を呼んで毎年盛大に祝っている。
少し調べれば、七草家の家族構成を知ることは特に難しく無い。
確か、兄二人の他に、中学三年生になる双子の妹がいたはずだ。
「達也くんって私のこと特別扱いしないじゃない？」
「……そんなに馴れ馴れしくしているつもりもありませんが……」
達也が落とし穴に警戒しながらそう言うと、真由美はクスッと笑った。
「そういう意味じゃなくって。
変に構えたりオドオドしたりソワソワしたりしないでしょ？」
最初のはともかく、後の二つは真由美がそう仕向けているからじゃないのか、と達也は思ったが、無論、そんなことは口には出せない。
「一応敬語を使ったりしてるけど、実は遠慮がないし。
冷たいのかと思うと、こんな風に我侭も聞いてくれるし。
弟ってこういう感じかな～、なんてね」
達也は思わず、目を瞠って真由美を見返してしまった。

確かに身長を除けば、それなりにしっかりしているし意外と色気もあるし少々分かり難いが気配りも出来るようだし、「姉」と自称されても違和感は無い。

だが正直言って、こんな姉がいたら気の休まる時が無くなりそうだと思う。

「……さあ？

俺も妹だけですから」

「それもそっか」

これから試合だということを忘れてるんじゃないか、と思いたくなる笑顔で、真由美は達也をニコニコと見詰めている。

いい加減、居心地が悪くなった達也は逃走を試みた。

「すみません、他の選手の様子も見ておきたいと思いますので」

「その必要は無いわ」

だが彼の逃走計画は、第三者の介入によりあえなく失敗に終わった。

「あら、イズミん」

「七草……アンタ、相変わらずその呼び方なのね」

頭痛をこらえるような仕草を見せたのは、達也と同じブルゾンを着た女子生徒。技術スタッフ三年生の和泉理佳である。

「リカちゃんの方が良かった？」

「わざとやってるでしょ！

はぁ、良いわよもう、イズミんで」

「それで、和泉先輩。

必要ない、とは？」

真由美の言葉遊びに付き合っていたら限（きり）がない、と達也は既に学んでいた。

真由美と和泉、二人のやり取りを完全に無視して、達也は最初の台詞の意味を訊ねた。

「えっ？　ああ……

司波君、貴方は七草の試合を見ていて。

あっちは私が見てるから」
この和泉という女子生徒は、達也が技術スタッフに加わっていることを余り好意的に思っていない。
エリート意識、と言うより自負心が強いタイプだ。
多分、彼の手を借りなくても自分だけでカバーできる、と考えているのだろう。
「そうですか。分かりました」
本当は逃げたいのだが、分担がそういう風に決まれば達也に否やは無い。
余計なことを言わずに、達也は頷いた。
「じゃ、頼んだわよ」
付け足しのようにそう言い捨て、和泉はすたすたと去って行く。
「悪い子じゃないんだけどねぇ」
やれやれ、という空気を醸し出しながらその背中を見送る真由美だったが、達也にあえて聞かせるように呟いたその台詞も、彼には風のそよぎと同じだった。
和泉がどのような態度を取ろうと、達也には関係のないことだった。

◇◆◇◆◇◆◇

アクセル・ボールはテニスやラケットボールに似た球技だが、サーブという制度は無い。
一セット三分、インターバル三分の、三セットマッチ。（男子は五セットマッチ）
試合開始の合図と共にコートの両サイドから圧縮空気で射出された六個のボールは、ブザーがセットの終了を告げるまで、コートを目まぐるしく飛び交って止まることは無い。
――普通ならば。
だが達也の目の前で行われている試合は、少々毛色が違っていた。

対戦相手も真由美と同じ魔法オンリーのスタイル。
この競技に出てくるだけあって、移動系統を得意としているようだ。
身体の動きでイメージを補完するタイプなのか、両手で保持したショートタイプ拳銃形態ＣＡＤを忙しくボールの方へと動かしている。
移動魔法に捕らえられたボールは、得点エリアに落ちる前に空中で運動方向を変え、真由美のコートへ不自然な弧を描いて飛んで行き――ネットを越えた瞬間、倍のスピードに増速されて反転する。
全てのボールが、一球の例外も無く。
真由美は胸の前に両手でＣＡＤを構え、コートの中央に立っている。
まるで絵のモデルのように、ただ、立っているだけ。
透明の壁で覆われたコートの中は、彼女の髪を、短いスコートの裾を揺らす風も吹かない。
伏せ気味の両眼に神秘的な光をたたえ、祈るようにＣＡＤを捧げ持っている。
ただそれだけで、相手の得点を許さない。
目測で、およそ十センチ。
それが、相手ボールに許された侵入の限界線。
真由美の魔法は、ボールに細かいコントロールを付加していない。
相手の得点エリアを狙うのでもなく、単純に打ち返しているだけであり、見た目の難易度はボールの軌道を折り曲げて様々な角度から得点エリアを狙う相手選手の魔法の方が高度に見える。
だが現実に得点を重ねているのは真由美の方だ。
一方的に、一つの失点もなく。
三分の笛が鳴らされた瞬間、相手選手は両膝をついてコートにへたり込んだ。
その崩れ落ちるが如き動作が、相手選手の絶望を映し出しているように見えた。

◇◆◇◆◇◆◇

ペースを乱されず、集中を崩されず、超然と魔法を操っているように見えた真由美だったが、彼女の内心はそれほど穏やかなものではなかった。

セット終了の合図を聞いて、思わず長い息を吐き出してしまう程度には。

試合自体は、苦戦しているという意識はない。

傲りではなく、客観的な認識として、自分の魔法力は相手選手を圧倒していると分かっている。このまま次のセットで、確実に勝負は決まる。

問題は、コート脇から彼女を見詰めている視線だった。

見られることには慣れている。

彼女は物心ついて以来、ずっと注目され続けてきたのだ。

純粋な賞賛を込められたものもあれば、陰湿な嫉妬や生々しい劣情を隠したものも、彼女には空気のようにお馴染みのものだった。

だがこの三分間で感じた視線は、初めて体験するものだった。

自分の全てを見られているような錯覚。

単に裸を見られている、というレベルのものではない（それだって大問題だが）。

短いスカート（あるいはスコート）の裾や大きく開けた胸元にこっそり向けられる眼差しなら、寧ろお馴染みのものだ。

真由美が彼――達也から感じた視線は、そんなありきたりなものではなかった。

素肌にとどまらず、その下――肉や骨や血、彼女を物質的に構成する要素、プラス、彼女の意思や感情や価値観、癖、習慣、嗜好、今の彼女を形作っている過去、彼女を支える才能と努力、「七草真由美」という人間を構成する全要素が読み取られ、さらけ出される様な、得体の知れない不安感をもたらす視線。

達也が真由美の試合を間近に見るのはこれが初めてだ。
だが、担当する一年生の練習試合はこの距離で何度も見ているはずで、見られていた一年生たちから、不安を訴えられたことはない。
この感覚に自分より年下の少女たちが耐えられるはずはない、と思う。
そうするとこの感覚は、本当に自分の錯覚か、それとも――自分だから感じ取ることができたのか。
今から三分間のインターバル。普通はその間に、汗を拭いたり水分を補給したりする。
しかし、タオルやドリンクを入れたバッグは、達也に預かってもらっている。
コートの外に出るということは、自分から達也が待っているところへ――待ち構えている所へ行くということになる。
コートの外に出るのが、真由美は少し、怖かった。
とはいうものの、このままずっとコートの中にとどまり続けるのも不自然だ。
一歩も動いていないとはいえ、座った方が良いのは間違いないし、水分を補給すべきでもある。
コートチェンジだってしなければならない。
運営委員から変に思われるだけならともかく、応援に来てくれている同級生や下級生に不安を与えるのは、彼女の立場として如何にも拙い。
真由美は一つ深呼吸して、吐き出す息と共に不安感を身体の外へ追い出した。
（えーい、女は度胸！）
真由美は自分の足に前進を命じた。

◇◆◇◆◇◆◇

「お疲れ様でした」

タオルを差し出す下級生を前にして、あの得体の知れない息苦しさは少しも感じられなかった。

いつも通りの、真面目くさった表情の下に一癖も二癖も隠しているに違いない、彼女にも内心を読み取らせないポーカーフェイス。何を考えているのか分からないという不安感と、それでも決して裏切られることだけはないという奇妙な安心感を与える年下の男の子。

さっきの「弟のようだ」という台詞は、その場の思いつきでも達也をからかう為の冗談でもなかった。冗談であることに違いはないが、一面では真由美の本音でもあった。

彼のことを怖がっていた自分が何だかバカバカしくなって、真由美は不必要に強気な態度を取った。

「お疲れ様でしたって、まだ試合は終わってないわよ。気を抜いちゃダメ」

達也はチームの一員ではあるが、選手ではない。

彼の出番は試合が始まる前と試合が終わってからで、試合中は傍観者に過ぎないのだから「気を抜くな」というのはおかしな台詞なのだが、達也はその点に気づきながら敢えて指摘はしなかった。

「いえ、もう終わりでしょう」

「えっ？」

その代わり、現状においてもっと有意義な指摘を選んだ。

「相手選手に試合を続ける余力はありません。このまま次のセットに入っても、途中で力尽きることは明白です。向こうのスタッフにも分かっているはずだ。この試合は、向こうが棄権して終わりです」

真由美がコートの方を振り返ってみると、果たして相手チームの作戦スタッフが審判団と何事か話をしている。

相手選手は、ベンチに座り込んで腕にメディカルチェッカーを巻いていた。

「魔法の連続発動によるサイオンの枯渇です。ペース配分を誤ったのでしょう。

会長の試合相手を務めるには、少々役者不足でしたね」
「……見ているだけで、そこまで分かるものなの……？」
「キチンと視ていれば、分かるものですよ」
達也の台詞が聞こえていた訳ではないだろうが、彼がそう言った直後、審判団から相手選手の棄権が告げられた。
惚けた表情で立ち尽くす真由美は、レアで且つ、他愛のない笑いを誘う姿だったが、達也は微笑を浮かべることもなく、真由美に移動を促した。
「テントへ行きましょう。
次の試合に備えてＣＡＤをチェックしておいた方が良い」
「ええ、そうね。お願いするわ」
主導権を完全に達也に握られた形となっていたが、真由美は無意味に反発を示すこともなく、彼女の荷物を持って歩き出した達也の後に続いた。

◇◆◇◆◇◆◇

調整機の立ち上げを終えた達也にＣＡＤを渡しながら、真由美はその隣に腰を下ろした。
向こう側、ではなく。
膝まですっぽり隠すクーラージャンパーは羽織っておらず、試合中の「テニスウェア」スタイルだが、これは真由美の悪戯心によるものではなく、達也が不自然に体を冷やすことを止めた所為だ。
肩が触れ合うほどの至近距離に椅子を並べているのだが、例によって達也はむき出しの太ももに見向きもしない。
真由美も別段、そのことに口を尖らせたりはしない。
彼女の注意は、調整機と、そこにつながれた自分のＣＡＤに向いていた。
「私の計測はしなくてもいいの？」
「十分や十五分では、プログラムの書き換えは出来ても、テストを

する時間がありませんから。
わざわざ機械を使って測定する意味はありません」
彼と話をしていると間々あることだが、真由美は無意識に小首を傾げてしまった。
今の言い方は、まるで機械を使わなくても大まかな計測が出来るように聞こえたが……
「……見ただけで分かるの？」
「分かりますよ。会長にも分かるでしょう？」
「えっ、と……」
「魔法が正常に発動しているかどうか、ＣＡＤが正常に機能しているかどうかは、計測機を使わなくても魔法師ならば見ただけで分かります。
会長にも勿論、分かりますよね」
「それは分かるけど」
「俺にはそれが、ある程度詳しく分かるだけです」
達也の目はずっとディスプレイを流れる文字列へ向いたままだ。
ある程度、がどの程度なのか、真由美は非常に気になったが、単なる好奇心でエンジニアの作業を邪魔することは彼女にも流石に憚られた。

◇◆◇◆◇◆◇

達也は調整機から取り外したＣＡＤの電源をオフにして、トリガーや起動式切替スイッチの感触をチェックしてから、真由美に手渡しで返した。
自分で明言したとおり、中のプログラムは弄っていない。
その事に真由美は少しホッとしながら（本人は隠しているつもりだったが、達也にはバレバレだった）、何を思ったのか、手渡されたＣＡＤのグリップを握りトリガーに指をかけたまま、膝の上においた。

「会長……あまり良い気分はしないので、銃口をこちらに向けないでもらえますか」
正確に言えば、ＣＡＤに「銃口」は無い。
ライフルタイプの大型ＣＡＤの中には、先端に撮像素子がセットされたものもあり、それが光学兵器の「銃口」に見えないこともないのだが、拳銃形態のＣＡＤではショートタイプであろうとロングタイプであろうと「銃身」の先端は単なる金属面だ。
だが全体の形状が実銃に酷似しているので、銃器の恐ろしさを熟知した者にとっては、「銃口」を向けられると少なからず不安になるのである。
「あっ、ごめんなさい」
そういう事情をどの程度理解しているのかは分からないが、真由美は素直に謝罪を口にして、くるりとＣＡＤを回転させ、銃身を持って銃口を自分の方へ向ける格好で持ち直した。
「俺の方こそすみません。細かいことを言って」
「気にしないで。もっともな事だしね。
それで、どうだった？」
省略の多過ぎる質問だったが、喜ぶべきか悲しむべきか、真由美が何を訊きたいのか達也には解ってしまった。
「上手に調整されていると思いますよ。
無理をせず、奇を衒わず、基本に忠実に、確実性が確保されています。
確実性重視のあまり、起動式にいささか冗長な部分もありますが、会長の魔法力を考えれば、満点じゃないでしょうか」
とりあえず、誤魔化したり煽てたり粗を探したりする場面ではないので、達也は思ったままを口にした。
調整機に表示されたままの起動式を見ながら答えて、真由美に視線を戻すと――彼女は微妙に、照れていた。
「そう……？
フフフ、何だか、嬉しいわね」

目元をほんのり赤くして、視線を僅かに逸らし、照れ笑いを浮かべ。
派手に赤面されるより、かえって気恥ずかしさを覚える反応だった。
「……そうですか？」
間がもたない、という要素もあったが、真由美は褒め言葉など日常的に聞き飽きるほど聞いているだろうに、という純然たる疑問もあった。
「ええ。
お世辞を言わないって分かってる相手から褒められるのは嬉しいじゃない？」
達也も自分のことを、分別を備えた大人だと考えている訳ではない。
客観的に、自分はまだまだ未熟な子供だと思っている。
それでもこの、真由美の評価は、お世辞も言えない社会不適格者と言われているような気がして少なからず不本意だった。
「……俺も人並みにお世辞くらい言いますが」
しかし達也の、ある意味月並みな反論を、真由美は見透かしたようにニッコリ笑って切り返した。
「お世辞なの？」
「……いえ、違いますけど」
したり顔で笑われているのが少し口惜しかったが、これ以上足掻くと底なし沼にはまり込んでしまうのは間違いない。
そもそも最初から反論が必要な場面でもなかったのだ。
達也は潔く、真由美の笑顔を受け容れた。

◇◆◇◆◇◆◇

アクセル・ボールは九校戦中、一日の試合数が最も多い競技だ。
試合数自体はモノリス・コードが六試合と最も多く、アクセル・

ボールはピラーズ・ブレイクと同じ五試合だが、モノリス・コード、ピラーズ・ブレイクが二日間にわたり競技日程が組まれているのに対して、アクセル・ボールは五試合を半日で戦い抜かなければならない。

試合時間も短いとはいえ、競技の性質上、三分間のセット中は息をつく間もないほど魔法を連発しなければならないから決して一試合あたりの負担が小さいとは言えない。

故にこの競技を勝ち抜く為には、如何に魔法力の消耗を抑えるかが重要になると言われている。

二セット連取が望ましいのは勿論のこと。

セット中も遮二無二全てのボールを返しに行くのではなく、ある程度の失点は織り込んだ上で無理のないペース配分を行わなければならないとされている。

最初から最後まで同じペースで魔法を使い続けられる真由美の様な選手は、反則級の規格外なのだ。

とは言っても、真由美も考え無しの力自慢ではない。

彼女も一応、戦法は考えている。

二セット連取は必須条件。――いや、それは単なる力ずくだろう、というツッコミは禁則事項だ。

余りこの競技向けとは言えない、単純にボールを跳ね返すだけの魔法一種類で戦うのも、複数の魔法を使い分けることによる消耗を抑える為だ。――それは魔法力の消耗を抑えることにはならない、というツッコミも却下する。

とにかくそういう訳で、試合が始まれば最初から迷わず全力全開、が彼女の身上なのだが……

第二試合が始まって、彼女は珍しく、戸惑っていた。

調子が悪い訳ではない。

相変わらず、相手に一得点も許さぬまま既に第一セットの半分が過ぎている。

寧ろ、その逆だった。

（何故……？）

第一試合が相手の棄権で終わった為、通常より長い休憩時間を取れたのは確かだ。

だがそもそも、半日で五試合というタイトなスケジュール。

疲労により調子が落ちていくことはあっても、実感できるほど調子が上向きに変わるというのは、普通なら考えられないことだった。

ということは、普通ではない原因がある、ということに他ならない。

思い当たる節は一つだけだ。

セット終了のホイッスルと共に、

真由美は、嘘つきな下級生を問い詰めてやろうと決心した。

◇◆◇◆◇◆◇

「達也くん、プログラムは弄らないんじゃなかったの！？」

第一試合とは正反対。

セット終了の合図と共に、真由美はコート外へ、達也の所へ突進した。

真由美の剣幕に達也は驚きを隠せなかったが、応える口調は落ち着きを保っていた。

「プログラムは弄っていませんよ。

動作上の不都合は無かったはずですが、何か気になる点がありましたか？」

「嘘！」

ビシッ、という擬音が本当に聞こえてきそうな勢いで、真由美は達也の鼻先に指を突きつけた。

「術式構築の効率が明らかに上がっていたわよ。

ハードを改造する時間なんて無かったから、ソフトを弄ったとしか考えられない！」

「……効率が上がったんですよね？　下がったんではなく」

困惑気味に達也がそう問うと、真由美のテンションが見る見る萎んでいった。

「それは……そうだけど……」

効率が損なわれたならともかく、効率が上がったといって文句をつけている自分の態度が理不尽なものだとようやく自覚したようだ。

「とにかく、座りませんか」

困惑顔のままでタオルを差し出された真由美は、少し恥ずかしそうで少し拗ねた顔をして、ベンチに腰を下ろした。

「効率が上がったのは、ゴミを取り除いたからでしょう」

身体半分の隙間を空けてその隣に腰を下ろした達也は、あえて真由美に顔を向けぬまま、宥める様にそう言った。

「誤魔化さないで。私、隣で見てたのよ。分解掃除なんてしなかったし、クリーナーも使ってなかったじゃない」

半ば意地になって言い返す真由美に、達也は根気よく答えた。

「いえ、ハードの掃除ではなく、ソフトのゴミ取りです」

「ソフトのゴミ取り？」

どうやら真由美にはピンと来なかったようだ。

ＣＡＤの性能は使用者の精神状態にも左右される。

エンジニアに対する不信感は、ＣＡＤの性能を顕著に低下させる。

事後承諾なので正確にはインフォームド・コンセントと言えないが、ここはキチンと説明しておくべきだろう、と達也は思ったのだ。

「会長のＣＡＤのシステム領域に、アップデート前のシステムファイルの残骸が散らばっていましたので、それを取り除いておきました。

ＣＡＤのＯＳはそういうゴミが残り難く出来ているんですが、それでも完全ではありません。

そういう不要データを消去することで、ＣＡＤの効率が多少アップするんですよ。

もっとも、普通なら意識できるレベルではありませんので、さっ

きは説明しませんでしたが。
会長の感受性がそれだけ鋭いということでしょうね。
俺が迂闊でした」
「あっ、えっと、いいのよ、そういうことなら」
大袈裟に頭を下げられて、真由美は狼狽気味に両手を振った。
「だったら達也くんは、自分の役目を果たしてくれただけだもんね。
私の方こそ、疑うようなことを言ってゴメンナサイ」
達也が顔を上げると、目の前にはぺこりと頭を下げた真由美の頭があった。
随分切替が早い人だな、と達也は思った。
「じゃあ、この話はこれまでと言うことで」
随分素直に頭を下げることが出来る人だな、とも達也は思った。
「そうね」
年長者の余裕、なのだろうか。
「ねえ、達也くん」
と言っても、上から目線の余裕ではない。
「はい？」
「後でその『ゴミ取り』のやり方、教えてくれる？」
悪い気は、しない。
「いいですよ。
ですが今は、試合に集中してください」
「もちろんよ。
お姉さんに任せなさい！」
殊更に年上ぶった態度が、寧ろ微笑ましかった。

真由美はそのまま、相手選手をまるで寄せ付けない、全試合無失点・ストレート勝ちで、女子アクセル・ボール優勝を飾った。

◇◆◇◆◇◆◇

アイス・ピラーズ・ブレイクは極めて大掛かりな舞台装置を必要とする競技だ。

この真夏に、巨大な氷の柱を何百本も用意しなければならないのだから、いくら軍の全面的な協力があるといってもそう何面も競技フィールドを用意することは出来ない。

用意できる競技場は、主に製氷能力の制約から、男女二面ずつ合計四面が精一杯。

二面のフィールドで一回戦各十二試合、二回戦六試合、合計十八試合をこなすのが、一日のスケジュールとしては限界だった。

「もっとも、魔法力の消耗が激しい競技だからな。一日で五試合全部となると、今度は選手の方がもたないだろう。

二日目の決勝リーグは、試合と試合の間隔も短い。ピラーズ・ブレイクが『最後は気力勝負』と言われているのも一面では真実を突いている」

達也が教訓じみた解説をしている相手は、熱心に頷いている雫。

深雪もこの場にいるが、妹だけなら今更聞かせる話でもなかった。

三人がいるのは観客席ではなくスタッフ席。

次に登場する花音の試合を間近に観戦することで、実際の試合の感触をつかもう、という趣旨だった。

花音と五十里は最後の打合せで、とても声をかけられる状態ではない。

他のメンバーは、男子アクセル・ボールの試合を見に行っている。

桐原の応援に来た紗耶香にエリカが付き合い、エリカに美月が引っ張られ、美月が幹比古を誘い、幹比古がレオに声をかけ、という構図だ。

この話を深雪から聞いた時、素直じゃないな、という感想を達也は持ったが、誰が何に素直じゃないかは言わぬが花だった。

いよいよ花音がステージに上がった。

フィールドの両端に設けられた高さ四メートルの櫓。

選手はそこから、魔法のみで自陣の氷柱を守り、敵陣の氷柱を倒

す。
　フィールド内であれば魔法の安全規制が解除される、魔法競技中、最も過激と言われる競技。
「司波君」
　花音をステージへ送り出した五十里が、達也を手招きしている。
「僕たちも上がろう」
　深雪と雫を引き連れた達也に、五十里はそう誘いをかけた。

◇◆◇◆◇◆◇

　選手が立つ櫓の後方に、スタッフ用のモニタールームがある。
　ここには選手の体調をモニターできる機器と、フィールドを直に見渡すことのできる大きな窓が設けられている。
「千代田先輩の調子はどうですか？」
　黙ったままでいるのも失礼な気がして、達也は当たり障りの無い話題を振った。
「随分気合が入っているよ。
　入れ込み過ぎて明日に影響しないか、心配なくらいだね」
　達也の繰り出した定番の質問に、五十里は笑顔で答えた。
　そこに、不安の影は見当たらない。
「一回戦は最短決着だったそうですね」
「花音はああいう性格だから。
　もう少し慎重に行ってくれると、見ている方も安心なんだけど」
　苦笑しながら返された言葉に、達也は興味を覚えた。
　午前中はずっと真由美についていた達也は、午前の一回戦を当然見ていない。
　ただ、花音が一回戦の最短時間で勝利したという結果を知っているだけだ。
　そういえば、試合時間が短かった割りに、自陣の柱（ピラー）も結構倒されていたようだが――

「始まる」
零の呟きに、達也はフィールドへ視線を向けた。

試合開始の合図と共に、地鳴りが生じた。
「地雷源」
地雷原、でなく、地雷源。
達也は眼前の光景から、反射的にその二つ名を呟いていた。
速さと共に多能性が現代魔法のセールスポイントだが、やはり人である以上、魔法師にも得意・不得意がある。
魔法の才能が遺伝するものである以上、血縁者の間で得意・不得意が共通することが多いのも、また当然の傾向と言える。
四葉のように、一族一人一人の特性がまるで異なる、という方が例外だ。
有力な一族にはその共通する特性を以て、個人に対するものとは別に、一族に対する二つ名が贈られる――と言うか、つけられることがある。
有名なところでは、十文字家の「鉄壁」。
一条家の「爆裂」。
七草家は不得意とする系統が無いことを以て、逆説的に「万能」と呼ばれたりする。
千葉家は「剣の魔法師」。これは特性と言うより技能に贈られた二つ名だが、一族総体を指すものという意味では同じだ。
そして千代田家の「地雷源」。
振動系統・遠隔固体振動魔法、その中でも特に、地面を振動させる魔法を千代田家の魔法師は得意としている。
土、岩、砂、コンクリートなど、材質は問わない。
とにかく「地面」という概念を有する固体に強い振動を与える。
それが千代田家の得意とする魔法「地雷原」であり、「地雷を作り出す者」＝「地雷源」が千代田一族に与えられた二つ名だった。
直下型地震に似た上下方向の爆発的振動を与えられ、相手陣内の

氷柱が一度に二本、轟音を立てて倒壊する。
相手選手は移動速度をゼロにする移動系統魔法「強制静止」で防御を図るが、標的を変えて次々と炸裂する「地雷原」に防御対象の切替が追いついていない。十二本の柱の内、五本を続けざまに倒されたところで攻撃に転じた。
「あら？」
「えっ？」
「……？」
達也たちが三人三様の表現で意外感を表している横で、五十里が苦笑を浮かべた。
あっさり倒されていく自陣の氷柱を見て、やれやれという感じで首を振っている。
「思い切りが良いと言うか大雑把と言うか……
倒される前に倒しちゃえ、なんだよね、花音って……」
「……いえ、まあ……戦法としては間違っていないと思いますが……」
攻勢に転じたことで、相手の防御力も落ちている。
自陣残り六本となったところで、花音は敵陣の氷柱を全て倒し終えた。

◇◆◇◆◇◆◇

「勝利！」
櫓から降りて来た花音が、得意げな笑顔でVサインを作って見せた。
笑顔を向けた相手は無論、五十里だ。
しょうがないなぁ、という表情を浮かべながら、五十里もやはり笑顔だった。
「なんと申しましょうか……」
「お似合い？」

「理解し合っている、と言っておこうよ、二人とも」
達也は達也で、連れの二人に別の意味で苦笑を余儀なくされていた。
本音は達也も「お似合いだ」と思っていたのだが。
この二人は本当に息が合っている気がする。
選手と裏方、共に舞台上へ上がることはなくとも、二人は力を合わせて戦っていた。
しかし――と、達也は思う。
これだけ息があったコンビになってしまうと、他の選手と組んだ時、五十里は裏方としての役目を果たせるだろうか。
選手四十人に対して、エンジニア八人。
単純に平均しても、エンジニア一人で選手五人を担当しなければならない。
達也も一年生女子だけとはいえ、六名を担当している。午前中の飛び込みもカウントすれば七名だ。
一人の選手と感情的に強く結び付いて、他の選手に対しても同じようにベストを尽くせるものだろうか。
そしてこれは、達也自身にも言えること。
彼は本当に、深雪に対するのと同じように、雫やほのかに対してベストを尽くせるだろうか。
「……司波君、どうしたの？」
「いえ、何でもありません」
まさか五十里に面と向かって「他の選手にも同じように熱心になれますか？」と訊くわけにもいかない。
達也は意味も効果もない無難な決まり文句で、五十里の問い掛けを誤魔化した。

2－（11）　アクシデント（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

2―（11）　アクシデント

三回戦進出を決め、意気揚々と天幕に引き揚げて来た花音たち―同伴者である達也・深雪・雫の三人を含む――は、重苦しい雰囲気に思わず顔を顰めた。

「……何があったんですか？」

比較的いつもの雰囲気を保っていた鈴音に、五十里が訊ねる。

振り向いた鈴音の顔は、いつもより表情が乏しく見えた。

「男子アクセル・ボールの結果が思わしくなかったので、ポイントの見通しを計算し直しているんですよ」

九校戦の順位は各競技のポイントの合計で決まる。

一位が五十ポイント、二位が三十ポイント、三位が二十ポイント。スピード・シューティング、バトル・ボード、ミラージ・バットは四位が十ポイント、アクセル・ボールとピラーズ・ブレイクは四位から六位までの順位が決まらないので三回戦敗退三チームに各五ポイントが与えられる。

モノリス・コードは一位チームに百ポイント、二位チームに六十ポイント、三位チームに四十ポイントが与えられ、ポイント上で最も比重の大きな競技になっている。

新人戦のポイントは二分の一にして総合順位点に加算。

これが九校戦のポイントシステムだ。

上位四名又は六名に残らなければ全くポイントが得られず、優勝を逃しても二位、三位、四位を占めればポイントで上回るチャンスがあるこの構造は、出来るだけ多くの競技で決勝リーグ・決勝トーナメントに勝ち残ることが勝利の第一条件となる。

「思わしくなかったといいますと……」

「一回戦敗退、二回戦敗退、三回戦敗退です」

恐る恐る訊ねた五十里に返された声は、冷淡とも聞こえるものだった。

「来年度のエントリー枠は確保しましたが、計算外でしたね」
そう聞こえてしまうのは、聞いている側がショックを受けているからかもしれない。
確かに他の競技に比べて、男子アクセル・ボールの布陣は力不足の感があった。
だがそれは、女子スピード・シューティングや女子アクセル・ボール、これから行われる男子ピラーズ・ブレイクや女子バトル・ボードのような「優勝間違いなし」と言える有力選手がいなかったというだけで、実力的には十分優勝を狙えるレベルにあったはずだ。
「新人戦のポイント予測が困難ですが、現時点のリードを考えれば、女子バトル・ボード、男子ピラーズ・ブレイク、ミラージ・バット、モノリス・コードで優勝すれば安全圏と思われます」
作戦スタッフの二年生が試算結果を報告した。
それを横で聞いていた達也は、少しハードルが高い計算じゃないか、と思った。
男女合わせて残り六種目のうち、四種目で優勝しようというのだ。
克人と摩利が出場する種目だから優勝は確実、と見込んでいるのかもしれないが、こういう見通しの立て方では、万が一アクシデントが生じた場合に、心理面から総崩れになるおそれもある。
だが――それは、達也が気にすることではない。
彼がその様な懸念を抱くのは、僭越というものだろう。
それよりも、個人的に気になることがあった。
男子アクセル・ボールには、桐原が出場している。
無鉄砲な面もあるが、責任感の強い性格だ。
ショックを受けているのではないだろうか……

◇◆◇◆◇◆◇

桐原と顔を合わせたのは一日の競技が終了した後、日没間近のラウンジだった。

一見、いつもと変わらぬ様子だ。
桐原の隣には紗耶香が腰を下ろしている。
努めて明るく振舞っているが、こちらは無理に笑っているのが見ただけで解った。
「桐原先輩、お疲れ様です」
「ああ、司波か」
何も言わずに通り過ぎるという選択肢も当然あったが、達也は、そう、しなかった。
「早々と二回戦で負けちまったよ。惨敗だ」
空元気、には違いないが、思ったより立ち直りが早いようだ。
勝ち負けを繰り返すアスリートは、心理的な弾力性、負けることへの耐性も高いのだろうか。
稽古では負け続けだが、「試合」は余り経験の無い達也には、理屈以上の理解は出来ない。
慰めの言葉が今この場で適切かどうかの判断がつかなかった達也は、事実のみを口にすることを選んだ。
「くじ運に恵まれませんでしたね。
二回戦で優勝候補とぶつかってセットカウント三対二、総得点差八点で惜敗。その優勝候補は先輩との試合で消耗してしまった所為で三回戦ストレート負けしていますから、事実上の痛み分けでしょう。
三高にむざむざと漁夫の利を占めさせたのは残念ですが」
「……ハッキリ言うんだな、お前」
敗戦の事実をオブラートに包もうとせず、慰めているとは到底思えない冷静な分析を口にした達也に、桐原は怒らなかった。
「俺が落ち込んでるとか思わなかったのかよ？」
むしろ、面白がっているような口調と表情だった。
「思いましたが、慰め方を知らないものですから」
桐原が吹き出した。
ソファの上で、腰を折って爆笑する。

隣の紗耶香がオロオロし出す笑いっぷりだった。
達也はその姿を無表情に見下ろしていた。
「……司波……やっぱ、おもしれーよな、お前って。
普通、そういう時は気不味〜い顔をして、見なかったフリをして通り過ぎていくもんだ。
わざわざ自分から声をかけたりしねーよ」
それ――知らぬ振り――も選択肢に入っていたが、何となく黙って通り過ぎるのも愛想が無いような気がした、というのが達也の側の理屈だ。だがどうやら「余計なお世話」の類だったらしい。
愛想などと、似合わぬことを考えるものではないな、と達也は思った、が、
「けどまあ、おかげでスッキリしたぜ。
お前さんが『痛み分けだった』って言うんなら、実際、そうだったんだろ。
俺もそんなに捨てたもんじゃないってことだな」
……案外そうでもないようだった。
桐原が本心からそう思っているのかどうかは、別にして。
達也の意図したとおりの結果だったかどうかは、別にして。

◇◆◇◆◇◆◇

思わぬ苦戦になったからといって、一番の下っ端のやることに変化がある訳ではない。
雑用係ならその限りでもないだろうが、達也は一応、技術者として採用されている。余計な雑用を押し付けて本来の作業に支障を来たすリスクを作り出すような愚か者は、一高幹部には流石にいなかった。
明後日からの新人戦に備えて、担当する選手のコンディションをチェックし、ＣＡＤの設定に不適合が生じていないかどうかを確認して、今日の作業は終了。

ホテルのフロントで、自分宛に届いていた細長い小包を受け取って、割り当てられた部屋に戻る。
時刻はまだ夕食前だ。
今日は随分時間に余裕があるので、届いた荷物のテストをしてみることにした。
時計を見て、食堂の割り当て時間を確かめる。
深雪が迎えに来るまで、まだ少し余裕があった。
小包を解いて、中身を確認することにする。
これは彼が今朝、というか、今日の未明、ＦＬＴ開発第三課（フォア・リーブス・テクノロジー）に試作を依頼した物だった。
部品は普及しているものばかりで、形状も単純、設計図はそのまま自動加工機に読み込ませるレベルまで作り込んでいたとはいえ、半日で造形して、組立てて、到着する仕事の早さには感心してしまう。
（牛山さん、まさか無理したんじゃないだろうな……）
無理したと言うか、させたと言うか。
依頼メールに「遊び半分です」と、しつこいくらい念を押しておいたのだが。
まあ、本当の意味で時間を巻き戻すことは彼にも出来ないのだから、今更気にしても仕方の無いことではある。
再利用を前提とした郵送用のカバーを外すと、薄く細長い、ダイヤルロック式のハードケースが出てきた。
通常はショットガン・サイズのＣＡＤを搬送する際に使用されるケースだ。
ダイヤルをいつもの番号に合わせて開錠する。
ケースの中には「剣」が入っていた。
達也が取り出した物の形状は、ナックルガード付のミドルソード。
全長七十センチ、刃渡り五十センチ程度の片手剣。
――形だけは。
刃はついていない。

刃引きしてあるのではなく、最初から「剣」として作られていないのだ。

漢字の意味を考えれば定義矛盾だが、ミドルソードの形状に作られた金属製の木刀、というのがイメージ的に最も近いかもしれない。

あるいは、剣の柄がつけられた平べったい棍棒か。

無論これは、単なる棍棒ではない。

柄尻のスイッチをひねって軽くサイオンを流すと、達也の手に馴染みの感触が返って来た。

これはエリカの警棒と同じ、ＣＡＤが組み込まれた武器なのである。

用途は通常の特化型ＣＡＤよりも更に限定されており、一種類の起動式を提供するのみ。エリカのＣＡＤが通常の特化型ＣＡＤとしてのプログラム交換性を保持しているのに対して、これは完全な単一機能特化型のＣＡＤ試作機だった。

壁までの距離を目で測り、さて、テストを、と達也が考えた丁度その時、ドアがノックされた。

まるで計ったようなタイミングに苦笑を浮かべ、達也は机の上に試作機を置いた。

約束の時間には少し早いが、ドアの向こう側の、隠そうともしていない気配から、友人たちが一斉に押し掛けてきたのだと分かる。

チラッと、試作機をしまおうか、とも考えたが、別に秘密にする必要もないと思い直した。

それより、この試作機はあの友人向きだ。

自分でテストするより、アイツにテストさせた方が面白そうだ――そう考えながら、達也はドアを開いた。

「お兄様、お邪魔しましてもよろしいでしょうか？」

先頭にいて最初に口を開いたのは、彼の妹だ。

外開きのドアを押さえて招き入れると、深雪に続いて必要以上に近い、ほとんど触れ合わんばかりの間合いで彼の鼻先をエリカが通り過ぎて行った。

その後をほのか、雫、美月と続き、レオ、幹比古で打ち止め。
これはレディファーストと言うよりも、単純な力関係によるものだろう。
しかし、いくら機材用のスペース確保を名目としたツイン・シングルとはいえ、これだけの人数が一度に押し掛けると手狭になる。
椅子とベッドだけでは足りず、机に座っている者もいる。――それがだらしなく映らず、むしろ格好良く見せているので、達也も何も言わないが。
そしてその当人、机に座ったエリカは、机の上に放置された「剣」に当然気付き、当然のように興味を示した。
「達也くん、これ……模擬刀？　刀じゃなくて剣だけど」
「いや」
「じゃあ、鉄鞭？」
「いいや……この国じゃ鉄鞭を好んで使う武芸者なんていないと思うが」
「武芸者って、今時（いまどき）……じゃあ、なあに？」
……あっ、もしかして、ホウキ（法機）？」
手にとって裏表眺めていたエリカは、グリップの上端にあるトリガーに気付いて声を上げた。
「正解。
より正確には、武装一体型ＣＡＤ。
完全に単一の魔法に特化したＣＡＤと、その魔法を利用した白兵戦用の武器を一つに纏めた物だよ」
「へぇ……」
手に持ったまましげしげと見詰めるエリカだけでなく、ほのかと雫も興味深げな視線を向けている。
深雪は昨晩の話を憶えていたのだろう。「ああ、それが」という顔をしている。
美月と幹比古は余り興味がなさそうだ。新しい物よりも手に馴染んだ物に惹かれるタイプなのかも知れない。

達也は残る一人の横顔をチラッと見て、人の悪い笑みを浮かべ、エリカの手から試作機を取り上げた。
「レオ」
それを、そっぽを向いていたレオへと放り投げた。
「おっと！
達也、危ねえじゃねえか」
本当は触りたくてウズウズしているのに、天敵（？）のエリカに妙な対抗心を起こして興味のない素振りを装っていたレオは、表面上、慌てた振りをしながら、待ってましたとばかりその柄を掴み取った。
達也はその見せ掛けだけの抗議をすっぱり無視して、挑発的な笑い顔をレオに向けた。
「試してみたくないか？」
「えっ、オレが？」
レオの顔が一瞬、にやけた。
隣でエリカが「分かり易いヤツ……」とでも言いたげな顔をしていたが、達也はそれを目の端に捉えただけで、レオに視線を戻した。
「その武装デバイスは、渡辺先輩がバトル・ボードで使用した硬化魔法を応用した打撃武器だ。
刀身部分を作り替えれば、斬撃武器にもなる。
お前に向いていると思うが」
「達也が作ったのか？」
「ああ」
「ちょっと待って」
レオと達也の会話に、幹比古が割り込んで来た。
最初は興味のなさそうな顔をしていたが、しっかり聞いていたらしい。
「渡辺先輩の試合は昨日だよ？
それをたった一日で作ったのかい？
あり合わせの物には見えないけど」

「部品自体はあり合わせだが？
外装もありきたりの合金で、特別な材料は使っていない」
「でも、まさか手作りじゃないだろう？
そんな暇もなかったはずだし」
「そりゃ勿論だ。
設計図だけ引いて、知り合いの工房の自動加工機で作ってもらった」
「へぇ……」
内情を知っている深雪は「知り合いの工房」の部分で思わず吹き出しそうになったが、利用可能状態で何枚も常備している猫の皮のお陰で、兄を疑惑の眼差しに晒すような粗相をせずに済ませた。
「さて。
レオ……試してみたくないか？」
達也の口調は、まるで、メフィストフェレスの囁きだった。
明らかに裏がありそうで、それが分かっていても抵抗し難い魅力があった。
「……いいぜ。実験台になってやるよ」
「堕ちた」
ボソリと呟いた雫の一言が、友人たちの抱いた印象を簡潔に代弁していた。

次に達也が取り出したのは、スピーカーが一体となったミラーシェード型ＨＭＤ（ヘッドマウントディスプレイ）だった。
「マニュアルだ」
「？」
「その武装デバイスのマニュアルが記録されているから見ておいてくれ」
「あ？　ああ……」
どうやらこれは、手渡された（正確には、投げ渡された）武装一体型ＣＡＤのマニュアルを映像と音声で記録したものらしい。

「それって、仮想型端末の一種になりませんか？」
そう感じたのは、実際に問い掛けたほのかだけではなかった。
未熟な魔法師にとって、仮想型情報端末は有害。
この常識に従い、第一高校でも仮想型端末を生徒に禁止している。
自分でも頑なにスクリーン型の端末を使用している達也が、視覚と聴覚に限定されるとはいえ仮想型の再生機器を友人に勧めていることに、彼女たちは疑問を抱いたのだ。
「そんなに大袈裟なものじゃないが、確かに似たような物だな」
「……良いんでしょうか？」
「えっ？　ああ……
仮想型端末の有害性？」
「え、ええ……」
「それなら心配要らないよ。
仮想型端末の有害性は、誤った成功体験をすり込んでしまうリスクにある。
実際に出来ることを仮体験させるには、寧ろ有益なツールだ」
「……仰る意味が良く分かりませんが……」
ほのかは達也に対して最初から丁寧な喋り方をしていたが、これはまるで深雪の口調が伝染したような言葉遣いだった。
「魔法は、架空のイメージで現実を一時的に作り変える技術。
仮想型体感機器は、架空のイメージを現実と錯覚させるテクノロジー」
達也の解説が丁寧で詳細なものになったのは、条件反射的な対応だったのかもしれない。
「両者は、現実でない事象を現実の事象として認識するに至る、という点で一致している。
その一方で、仮想型体感機器による体験は、現実を改変する為の労力を必要としない。
改変を失敗することもない。
仮想型端末のリスクはここにある」

達也は一旦、言葉を切った。
自分でも説明臭いと思ったからだ。
しかし、理解している顔が半分、理解していない顔が半分、どうやら言葉が不足しているようだ、と思い直して、説明を続けることにした。
「仮想型体感機器は、何の苦労もなく現実の事象を改変出来たような錯覚を魔法師に与える虞がある。
魔法を使えない人間は、最初からそんな錯覚をしない。
熟練した魔法師なら、自分に出来ることと出来ないことをしっかり弁えている。
だが未熟な魔法師は、仮想型体感機器の中のフィクションと魔法により改変された事象という現実を混同して、自分の力量を見誤ってしまう可能性があるんだ。
苦労も失敗もなく改変された『現実』に慣れてしまった未熟な魔法師は、何故自分が魔法に――事象の改変に失敗したのかを考えられなくなる。考える力も考える意欲も損なわれる。
だから魔法を学ぶ未熟な学生には、仮想型端末が有害だって言われているんだよ」
再び言葉を切る。
もうこれ以上、説明は不必要にも見えたが、念の為の結論だけ付け加えておくことにした。
「つまり、出来ないことを出来ると錯覚させる点に、問題があるんだ。
出来ることを仮想的に事前体験させることに問題はない。そういう仮想体験は、魔法式構築に必須のイメージ形成に、寧ろプラスに働くという面もあるんだよ。
ただ、そういう有益なコンテンツのみを選び出すのが難しい、という実情があるんで、仮想型端末の一律禁止もそれなりに合理的だと思うけどね」
「そうなんですか……すごく、勉強になりました」

ほのかの頷き方が必要以上に熱心な気がして、達也は「少しやり過ぎたか」と思った。
余り依存心を持たれても、自分には応えられないのだが……
それが達也の本音だった。

◇◆◇◆◇◆◇

試作ＣＡＤのテストは、夕食後、九校戦会場外の、屋外格闘戦用訓練場を借りて行うことになった。
達也の手配ではなく、エリカのコネである。
エリカはここに来て、自棄になったように実家の影響力を使いまくっている。
何か心境の変化を強いられるような出来事があったのだろうか？
そういえば懇親会の場で、それらしき事を聞いた記憶が達也にはあった。
もっとも、いくら心配したところで達也に出来ることは何も無いのだ。
それに、自分が本心から心配している訳ではないということも、達也には分かっている。
所詮自分の感情は表層的なものでしかない。
ならば開き直って、この場は技術者としての好奇心を優先させる方が余程誠実というものだ。
達也は自分にそう言い聞かせて、余計な世話を焼きそうになる自身を戒めた。
「レオ、使い方は理解したか？」
意識をこれから始めるテストに集中する。
余興で作った物とはいえ、既存魔法の単純なアレンジとはいえ、新魔法・新デバイスのテストであることに変わりはない。
今回、気を抜いて事故に遭うのは、達也ではなくレオなのだ。
「おう、まあな……けどよ、ホントにあんな事が出来るのか？」

あんな事、とはＨＭＤで見せられた試作機の予定動作のことだろう。
だろう、と言うか、それ以外には無い。
「それを確かめるためのテストだ」
「そりゃそうか」
この訓練場はホテルから歩いて三十分程の距離にある。
昼間ならともかく、今は夜中。
町中ならともかく、ここは山の中の軍事演習場。
深雪もエリカも頑強に抵抗したが、何とか説き伏せてホテルに残して来た。
それでも不安だったので、深雪の監視をほのかに、エリカの監視を美月に頼んである。
そして現在この場には、達也とレオの二人のみ。
「じゃあ、始めるか」
「りょーかい」
最初は試し斬り（今回は試し打ち）用の人形（ダミー）も無し。
何もない状態で、武装一体型ＣＡＤの武装部分の動作を確認する。
「行くぜ」
レオは、柄尻に付いているスイッチを捻った。
カチッとはまりこむ軽い手応え。
グリップ上端のトリガーを人差し指で押し込み、サイオンを流し込む。
外見から受ける印象とは違い、爆発力は無いが、粘り強い持久力に優れたサイオン供給。いや、タフでスタミナに溢れているという側面は、見た目通りか。
個人用に調整されていないＣＡＤは術式構築のアシスト機能がほとんど働いておらず、起動式から魔法式を構築するコンパイルのプロセスにはそれなりの時間を要した。
およそ、ゼロコンマ六秒。
それでも実習の成績より随分速い。

これは、得意魔法であるということと、ＣＡＤ及び起動式の性能に依るものか。

今は、どうでもいい事だ。

時間を測っているのではなく、発動する魔法そのものを観測する為に、今、ここにいるのだから。

「おっ？」

レオが声を発したのは、発動した魔法に対してというより、手に伝わってきた慣性が予想以上だったが故。

「ハハッ、ホントに浮いてら。

面白れ～」

子供のような笑みを浮かべて、レオは刀身が半分以下になった「剣」を振り回す。

その動きに合わせて、空中に浮いた刀身の片割れが弧を描いて飛び回る。

「三、二、一」

「オッと」

達也のカウントを聞いて、レオは手を止めた。

「ゼロ」

時間切れのカウントと共に、空中の刀身が勢いよく手元に戻って鍔元に残った刀身の「切れ端」と噛み合い、一本の「剣」に戻った。

「大成功だな、達也」

楽しくて仕方がない、といった表情で親指を立てて見せたレオに、達也もサムズ・アップを返した。

「でもよ、よくこんな物を思い付いたな？

分離した刀身と残った刀身の相対位置を硬化魔法で固定することにより、刀身を『飛ばす』なんて、自分でやってても嘘みたいだぜ。

硬化魔法って、つながってなくても機能するんだな」

「硬化魔法の定義内容は相対位置の固定だからな。固定観念を取っ払ってやれば、接触している必要はない。

それと、このデバイスの作動形態は『飛ばす』というより、『伸

ばす』の方に近いだろう。
間が中抜けになってるだけで、刀身の延長線上でしか動かん訳だし」
「その方が余計なことを考えなくて済むぜ。
長〜い剣を振るのと同じ感覚で良いんだからな」
レオの言う通り、この武装デバイスは遠隔操作系統の武器に付き物の、コントロールに精神力を磨り減らすという側面は無い。
術式の効力が切れるまで、単純に手を動かした通りに、同じ距離を保って飛び回るだけだからだ。
「ところで今はどうやって繋がってるんだ？
術式は働かせていないぜ？」
「ああ、それは簡単。
電流反応型の形状記憶合金に着脱の瞬間だけ電流を流して、噛み合わせを外しているんだ」
なるほど、とレオは頷いた。
現代では割とポピュラーな留め金の仕組みだ。
「だから魔法を解いている状態で強い衝撃を与えると、ポキッと逝ってしまう可能性が高いんだけどね」
「問題ないだろ。使わん時は鞘に収めてればいいだけじゃねーか」
「まあな。
じゃあ次は、実際に人形（ダミー）を叩いてみるか？
それとも、分離間隔の変更をテストしてみるか？」
「なあ達也、これって飛ばしてる最中に間合いを変えることは出来ねえのか？」
「不可能ではないが、難しいぞ？
今は柄尻のスイッチで分離間隔に関する起動式の定数を調整するようにしているが、魔法式の変数にすることも勿論出来る。
だが、途中で分離間隔を変えるとなると、発動中の魔法の上書きになるからな」
「そっか。

まっ、戻って来るまでの時間を短くしときゃ、途中で間合いを変える必要もないか。
実剣でも、斬り込んでいる途中で間合いを変えるなんて出来ないしな」
「エリカあたりなら出来そうだけどな。
で、どうする？」
「……そうさな。
ダミーを頼む」
「了解」
達也がノート大のリモコンを操作すると、地面から実物大の藁人形が突き出てきた。
「……古い」
「……誰の趣味だよ」
再生可能なバイオ素材が主流の時代とはいえ、まさかのアナクロに二人は顔を見合わせて脱力する。
「まあ……試し斬りの相手として、機能的には十分な訳だが」
「藁人形に『機能』もねえだろ……
けど確かに、文句を付けることでもねえよな」
レオは空いている左手で自分の頬を張って気合いを入れ直すと、藁人形に向かって構えを取った。

◇◆◇◆◇◆◇

九校戦三日目。
男女ピラーズ・ブレイクと男女バトル・ボードの各決勝が行われる此の三日目は、九校戦の前半のヤマと言われている。
第一高校の勝ち残り状況は、男子ピラーズ・ブレイクと男女バトル・ボードが各二人、女子ピラーズ・ブレイクが一人。
予定通りとは行かないが、作戦上誤差の範囲には収まっていた。
「服部先輩が男子第一レース、渡辺先輩が女子第二レース、千代田

先輩が女子第一試合で十文字会頭が男子第三試合か……」
組合せ表を見て、達也は少し悩んだ。
競技によって開始時間も試合時間も多少ずれるとはいえ、服部と花音の試合を両方とも観に行くのは不可能だ。
（服部先輩は俺に観に来て欲しくなどないだろうしな……）
とは言え、同じ生徒会役員同士、深雪が服部のレースを知らん顔するのも問題だ。
「あっ、いたいた。
達也くん！」
しかし、それほど長く悩む必要もなかった、というか、無くなった。
「会長、何かご用ですか？」
「一寸手伝って欲しいのよ」
真由美に引きずられる格好で、達也は作業車へ連れて行かれた。

◇◆◇◆◇◆◇

「お兄様、もうすぐスタートですよ！」
結局、達也が解放されたのは、摩利のレースが始まる直前だった。
作業中わざわざ「あたしのレースは観に来るんだろうね？」と念押しまでされて、見逃したなどということになれば、それが一部分だけであろうとも、後で何を言われるか分からない。
席を取ってくれた妹と友人たちに一通り礼を言って、達也はスタートラインへ目を向けた。
本当にギリギリのタイミングだったようだ。
バンダナで纏めたショートボブの髪を揺らし、摩利は既に、スタート姿勢を取っていた。
準決勝は一レース三人の二レース。
それぞれの勝者が一対一で決勝レースを戦うことになる。
他の二人が緊張に顔を強張らせている中、摩利だけが不敵な表情

でスタートの合図を待っている。
用意（レディ）、を意味する一回目のブザーが鳴る。
観客席が静まりかえった。
一拍の、間。二回目のブザー。
スタートが、告げられた。

先頭に躍り出たのは摩利。
だが予選とは違い、背後に二番手がピッタリついている。
少し遅れて、三番手。
「やはり手強い……！」
「流石は『海の七高』」
「去年の決勝カードですよね、これ」
激しく波立つ水面は、二人が魔法を撃ち合っている証だ。
普通ならば先を行く摩利の方が引き波の相乗効果で有利だが、七高選手は巧みなボード捌きで魔法の不利を補っている。
スタンド前の長い蛇行ゾーンを過ぎ、ほとんど差がつかぬまま、鋭角コーナーに差し掛かる。
此処を過ぎれば、スタンドからはブラインド。スクリーンによる観戦になる。
達也はチラリと大型ディスプレイに映ったコーナー出口の映像に目を向けた。
「っ？」
其処に見つけた小さな異常に、目を奪われる。
「あっ！？」
だから不覚にも、その瞬間を見逃してしまった。
観客席から聞こえた悲鳴。
急いで戻した視線の先では、
七高選手が大きく体勢を崩していた。
「オーバースピード！？」
誰かが叫んでいた。

確かに、そう見えた。
ボードは水を掴んでいない。
飛ぶように水面を滑る七高選手は、そのままフェンスに突っ込むしかない。
――前に、誰もいなければ。
彼女が突っ込むその先には、減速を終えて次の加速を始めたばかりの摩利がいた。
摩利はフェンスに身体を向けている。
それでも、背後から迫る気配に気付いたのか、肩越しに振り返った。
そこからの反応は、見事の一言に尽きた。
前方への加速をキャンセルし、水平方向の回転加速に切替。水路壁から反射してくる波も利用して、魔法と体捌きの複合でボードを半転させる。
突っ込んでくる七高選手を受け止めるべく、新たに二つの魔法をマルチキャスト。
突っ込んでくるボードを弾き飛ばすための移動魔法と、相手を受け止めた衝撃で自分がフェンスへ飛ばされないようにするための加重系・慣性中和魔法。
本来なら、そのまま事故を回避できただろう。
不意に水面が、沈み込んだりしなければ。
小さな変化だった。
だが、ただでさえ百八十度ターンという高等技術を駆使した後だ。
摩利はサーフィン上級者という訳ではなく、ただその優れた魔法・体術複合能力により無理に行った体勢変更は、突如浮力が失われたことにより、大きく崩れた。
その所為で、魔法の発動にズレが生じる。
彼女の足下を刈り取ろうとしていたボードを、側方へ弾き飛ばすことには成功した。
だが、慣性中和魔法が発動するより早く、足場を失った七高選手

が摩利に衝突した。
そのまま、もつれ合うようにフェンスへ飛ばされる二人。
大きな悲鳴がいくつも上がった。
レース中断の旗が振られる。
達也も我知らず立ち上がっていた。
摩利は七高選手とフェンスに挟まれる格好で衝突している。
受け身が取れたようには見えない。
「お兄様!?」
深雪が蒼褪めた顔で彼を見上げている。
「行って来る。お前たちは待て」
幼い頃からボディガードとして、あるいは兵士としての訓練を積んで来た達也には、簡単な外科手術ならこなせる程度のスキルがある。
「分かりました」
達也の落ち着いた声で、自分たちが行っても混乱を増幅するだけだと理解した深雪は、腰を浮かせている友人たちに手振りで座るよう指示しながら、達也に頷いて見せた。
達也は人の密集するスタンドを、手品のようにすり抜けながら駆け下りて行った。

2－（12）　代役（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

2―（12）　代役

覚醒は速やかなものとは言えなかった。
意識に靄がかかったように、現状が上手く把握できない。
自分はここで何をしているのか……？
目が覚めて、摩利の意識に最初に浮かんだ思惟が、この疑問だった。
「摩利、気がついた？　私が誰だか分かる？」
悪友が――と、こんな時、しかも心の中だけの台詞であるにも関らず、摩利は友人という言葉を使わなかった――自分の顔を上から覗き込んでいる。
質問の意味は分かっても、何故そんなことを訊ねて来るのか理解できなかった摩利は、訝しげに問い返し――
「真由美、何を言っている？　そんなことは訊くまでも――あっ……」
自分の台詞の途中で、その理由と、現在の状況に自分で思い至った。
「ここは病院か……」
「ええ、裾野基地の病院よ。
良かった……意識に異常は無いようね」
「あたしはどのくらい気を失っていたんだ？」
後頭部から伝わってくる鈍痛が、自分は眠っていたのではなく受身を取り損ねて気絶したのだと、摩利に教えていた。
「お昼を回ったところよ。
あっ、まだ起きちゃダメ」
ベッドの上に身体を起こそうとした摩利を、真由美はすばやく先回りしてベッドに押し戻す。
それほど強い力ではなかったが、摩利の方で、いつもの半分も身体の自由が利かなかった。

「肋骨が折れていたのよ。
今は魔法でつないでいるけど、まだ定着していないわ。
当然知っていると思うけど、魔法による治療は結局のところ応急処置で」
「定着するまでは仮に治っているだけだ。
決して、瞬時に健康状態を取り戻すものじゃない。
――大丈夫だ。そのくらい、弁えている」
真由美の台詞を横取りする形で、自分に言い聞かせるように口に出すと、摩利は力を抜いてベッドに身体を預けた。
「それで、定着までどのくらい掛かる？」
「全治一週間。一日寝てれば日常動作に支障はなくなるけど、念の為に、十日間は激しい運動を禁止」
「おい、それじゃあ！？」
「ミラージ・バットも棄権ね。仕方ないわ」
「そうか……」
摩利は、ため息をついて、目を閉じた。
再び瞼を開くまで、少し時間が掛かった。
「……レースはどうなったんだ？」
「七高は危険走行で失格。
決勝は三高と九高よ。
三位決定戦はウチと二高。小早川さん、随分気合が入ってるから三位は取れるんじゃないかな」
「精神的なムラが無ければ、実力は十分だからな、小早川は」
「そうね。
それから、七高の選手の怪我は大したこと無いそうよ。庇った甲斐があったわね」
「……自分が大怪我をしてれば世話は無い」
憮然とぼやいて見せた摩利を見て、真由美は失笑気味にクスッと笑った。
摩利は顔を背けて、それを見なかったフリをした。

「男子は、はんぞーくんが決勝進出。村上くんも惜しかったんだけどね。
男子ピラーズ・ブレイクは十文字くんが決勝リーグ進出。女子ピラーズ・ブレイクも花音ちゃんが決勝リーグ進出」
「あたしだけが計算違いか……」
「仕方が無いわ。
摩利、貴女の判断は間違っていなかったの。
あそこで貴女が加速を止めなければ、間一髪で衝突は回避できたでしょう。
決勝にも進めたと思う。
でも……七高の選手は大怪我をして、多分、魔法師生命を絶たれていたと思うわ。
それほど危険な突っ込み方だった。
これは達也くんも同意見ね」
「……おい、そこで何故、アイツの名前が出て来るんだ？」
「貴女を此処に運んで来て、治療に付き添っていたのは彼だから」
「なに？」
「もちろん、達也くん一人に任せた訳じゃないけど。
……ビックリした？」
にんまりと笑った真由美から、苦虫を噛み潰した表情で摩利は顔を背けた。
自分がホッとしていることを自覚できるだけに、真由美の笑顔が忌々しかった。
「女の子の着替えを男の子に見せるはず無いじゃない。
治療中はちゃんと廊下で待っていたそうよ。
でも、後でお礼は言っておいた方がいいわね。
救護班と同じくらい真っ先に駆けつけて、水路から引き上げるのを手伝ってくれたし、骨折してるって一目で見抜いて応急措置を指示したのも達也くんだから」
「……何者だアイツは」

呆れ顔で目を丸くした摩利に、真由美も深々と頷いた。
「なんと言うか、事故とか怪我人とかに矢鱈と手馴れていた気がするのよねぇ……
ところで、気分はどうかしら？」
「どうしたんだ、いきなり……
少し頭が痛むが、外傷的なものだろう。意識はしっかりしている」
「脳にも損傷は見られないそうよ。
……そっか、じゃあ今、訊いちゃおうかな」
「？」
首をかしげる摩利の目を、真由美は真剣な眼差しで覗き込んだ。
「どうしたんだ、急に」
「摩利……あの時、第三者から魔法による妨害を受けなかった？」
「……どういうことだ？」
「七高選手を受け止める直前に摩利が体勢を崩したのは、第三者による不正な魔法で水面に干渉された所為じゃないのか？　ということよ」
真由美の言っていることの意味を理解して、摩利の目が鋭く光った。
「……確かに、ボードが沈み込む直前、足元から不自然な揺らぎを感じた。
だがそれが魔法によるものかどうか、ましてや不正な干渉によるものかどうかは、あたしには分からなかった。
……何故、そう思うんだ？」
「あの時、貴女が足元を取られた水面の動きは不自然だったわ。
魔法による事象改変に特有の不連続性があった。
でもあの時、七高の選手も九高の選手も、そんな魔法は使っていなかった。
残る可能性は、第三者による魔法。
これも達也くんと同意見よ。
彼、大会委員会からビデオを借りて、水面の波動解析をしてみる

そうよ。
それで少なくとも、自然現象以外の力が働いたかどうか分かるんですって」
「……まず、そんなことが高校一年生のスキルで出来るのか、と言いたいところだが、それは横に置いておくとして……
あたしも他の選手も魔法を使っていたんだから、自然現象以外の力が働いていたのは調べるまでもないんじゃないか？
意味があるとは思えないが……」
「選手が使った魔法の影響も計算に入れて、それ以外の力が働いていなかったかどうか検証してみるって言ってたわ。
五十里くんも今日の試合が終わってから手伝うって言ってた。
多分、意味のある結果が出てくるんじゃないかしら。
摩利も何か思い出したことがあったら教えて頂戴ね。
これはウチの――第一高校の順位だけに関る問題じゃなくて、九校戦全体、魔法科高校全体に関る問題なのかもしれないから」
「……」
横になったまま黙り込んでしまった摩利に「そろそろ戻らないといけないから」と声をかけて、真由美は病室を出て行った。
一人残された摩利は、尚も真剣な眼差しで、天井を見詰めていた。

◇◆◇◆◇◆◇

ノックに応じて深雪がドアを開けると、そこには上級生の男女がいた。
「どうぞお入りください。
……お兄様、五十里先輩と千代田先輩がお見えになられました」
深雪の声に、達也はキーボードを叩いていた手を止めて立ち上がった。
「わざわざすみません」
「いいよ、気にしないで。

手伝うって言ったのは僕の方だし、作業中の端末を持って来させる訳にも行かないしね」

軽く頭を下げた達也に、五十里は気安げに手を振った。

達也はもう一度会釈して、今度は花音に目を向けた。

「千代田先輩、優勝おめでとうございます」

「ありがと。

摩利さんがあんなことに巻き込まれちゃったからね、その分、あたしたちが頑張らないと！」

グッと拳を握ってみせる花音は、熱血という言葉がよく似合っていて、達也には少し眩しかった。

「それで、何か分かったの？」

「一通り、検証してみました。

やはり、第三者の介入があったと見るべきですね。

五十里先輩、確認していただけますか」

「了解。

……流石に司波君は仕事が速いね」

勧められた椅子に腰を下ろしながら、五十里はジェスチャー混じりで感心を表現して見せた。

卓上用の小型ディスプレイ（と言っても伝統的な単位系で二十インチに相当する）の画面は二分割されていて、ビデオの映像とそれをワイヤーフレーム化したシミュレーション映像が表示されている。

五十里は脳波アシスト付モノクル型視線ポインタの、後方部分が欠けた細い金属環を押し広げて慣れた手つきで額に装着し、モノクル部分を右目に合わせて、キーボード中央下段のクリックボタンに親指を置いた。

脳波アシストも視線ポインタも、元々はキーボードから手を離さなくてもいいようにと作られた入力補助装置だが、今ではキーボードを使わずに済ませる道具になっている。

しかし五十里はどうやら、キーボード入力の補助という本来の使い方をするようだった。

五十里の操作によって、実写映像とシミュレーション映像が同時に動き出す。

事故の場面に差し掛かったところでタイムゲージにポインタが合わせられ、再生がスローダウンした。

シミュレーション画面の上部に、水面の変化に影響を与える諸要素が数字で表示される。

そして問題の、水面が陥没した瞬間、項目名に“ｕｎｋｎｏｗｎ”が表示され、誤差では解決できない「力」が水中から掛かっていることが示された。

画面を止め、五十里が振り返った。

「……予想以上に難しいね、これは……」

「啓、どういうことなの？」

「花音も知っているとおり、九校戦では外部からの魔法干渉による不正を防止するため、対抗魔法に優れた魔法師を大会委員として各競技場に配置すると共に、監視装置を大量に設置している。

この監視網に引っ掛からなかったという事は、監視装置の走査範囲を超えた高空に局所的なダウンバーストを作り出して、高圧の空気塊を叩きつけることで水面を陥没させたんじゃないか、って僕は予想していたんだよ。

そんなことをされて渡辺先輩が気づかないはずはないから、かなり無理がある仮説だとは分かっていたけどね。

でも司波君の解析に依れば、水面を陥没させた力は水中に生じている。

外部から水路に魔法式を投射すれば間違いなく監視装置に引っ掛かるし、自然現象で水面下から水面を陥没させる現象なんて、水底が抜けるくらいしか考えられないから、それもあり得ない。

可能性としては、水中に工作員が潜んでいた、ってことくらいだけど……それこそありえないしね……」

「司波君の解析が間違っているんじゃないの？」

遠慮のない花音の指摘に深雪が顔色を変えた。

「それはない」
だが、深雪が何か言うより先に、五十里が花音の疑念を否定した。
「司波君の解析は完璧だ。少なくとも僕のスキルでは、これ以上のことは出来ないし間違いも見つけられない」
五十里と花音が揃って考え込んでしまった。
無言のまま秒針が二回転ほどしたところで、再び、ドアがノックされた。
目線で兄に問い掛けた深雪は、頷きが返されたのを確認して、来訪者の応対へ向かう。
彼女はすぐに戻ってきた。
その背後には、二人のクラスメイトがついて来ていた。
「美月は、お兄様に呼ばれた、と言っていますが……？」
「すまんな、二人ともわざわざ」
間接的に妹の問い掛けを肯定して、達也は二人の先輩の方へ向き直った。
「ご紹介します。俺のクラスメイトの、吉田と柴田です。
二人とも、知っているとは思うが、二年の五十里先輩と千代田先輩だ」
幹比古と美月が緊張気味に、五十里と花音がざっくばらんに自己紹介を終えたところで、五人から向けられた「？」の眼差しに達也は簡潔な答えを返した。
「二人には、水中工作員の謎を解く為に来てもらいました」
無論、それだけでは誰も理解できるはずがない。
そのことは達也にも最初から分かっていたので、途切れることなく説明を続けた。
「俺たちは今、渡辺先輩が第三者の不正な魔法により妨害を受けた可能性について検証している」
これは幹比古と美月に向けた説明。
幹比古は眉を顰め、美月は驚きを露わにした。
「渡辺先輩が体勢を崩す直前、水面が不自然に陥没した。その所為

で渡辺先輩の慣性中和魔法のタイミングがずれ、フェンスに激突することになってしまった。

この水面陥没は、ほぼ確実に、水中からの魔法干渉によるものだ」

美月はまだ驚きから脱し切れていない。

だが幹比古は達也の此の言葉を聞いて、目に強い光を宿していた。

「コース外から気づかれることなく、水路内に魔法を仕掛けることは不可能だ。

遅延発動魔法の可能性も低い。もしそうなら、小早川先輩が第一レースで気づいたはずだ」

現代魔法にも遅延発動の技術はあるが、その為には対象物に魔法式を「記録」しなければならない。遅延発動魔法をかけた時点で対象物は魔法による改変を受け、その改変が次の魔法を遅延発動させるという仕組みになっている。

「だとすれば、魔法は水中に潜んでいた何かによって仕掛けられたと考えるべきだ、というのが五十里先輩と俺の意見だ」

確認の視線を向けると、幹比古と美月がそれに応えて頷いた。

「しかし、生身の魔法師が水路の中に潜んでいたと考えるのは荒唐無稽です。

現在知られている限り、そこまで完璧に姿を隠す術（すべ）は、現代魔法にも古式魔法にもありません」

達也の言葉に、今度は五十里と花音が頷く。

「ならば、魔法を行使する人間以外の何かが、水路内に潜んでいたと考えるのが合理的でしょう」

五十里と花音は顔を見合わせ、お互いの表情に戸惑いの色を見つけた。

問い返すには、しばしの時間が必要だった。

「……司波君は、ＳＢ魔法の可能性を考えているのかい？」

五十里の言葉に達也は頷いた。

現代魔法を行使する魔法師は、通常、サイオンの波動によって魔法を知覚している。

しかしＳＢ――Ｓｐｉｒｉｔｕａｌ　Ｂｅｉｎｇ（心霊存在）の本体はプシオンで構成されるものであり、同時に観測されるサイオンは、その「運動」を方向付けする外的付加物――例えば精霊を使役する為のコマンド――というのが、現時点で最も有力な仮説だ。

魔法師にプシオンを知覚できないということではない。

だが、サイオンのようにその状態を見分けることは、普通出来ない。

例えて言うならば、赤外線を「暖かい」という漠然とした認識で知覚することは出来ても、赤外線の波長の違いを可視光線の波長の違いのように色彩として捉えることは出来ないようなものだ。

活性化したプシオンならば、そこにあるということを魔法師は知覚することが出来る。

しかし、活性が低い状態のプシオンを知覚することは難しい。

つまり、現代魔法の魔法師にとって、潜伏状態のＳＢを見つけ出すことは困難なのだ。

心霊存在使役魔法――ＳＢ魔法による遅延発動型の術式が仕掛けられていたとしたら、確かに、大会委員の監視を潜り抜けた可能性は高い。

「吉田はＳＢ魔法を得意とする魔法師です。

また、柴田は霊子光に対して特に鋭敏な感受性を有しています」

「だから二人に来てもらったんだね」

もう一度、五十里に頷いて、達也は幹比古の方へ向き直った。

「幹比古、専門家としての意見を聞きたい。

数時間単位で特定の条件に従って水面を陥没させる遅延発動魔法は、ＳＢ魔法により可能か？」

「可能だよ」

幹比古の答えは、即答だった。

「今の条件ならば、第二レースの開始時間を第一の発動条件、水面上を人間が接近することを第二の発動条件として、水の精霊に波あるいは渦を起こすよう命じることで達成できる。

精霊じゃなくて、式神でも可能だろう」
「お前にも可能か？」
「準備期間による。
今すぐやれと言われても無理だけど、半月くらい準備期間をもらって、会場に何度か忍び込む手筈を整えてもらえれば、多分可能だ」
「前日に会場へ忍び込む必要は？」
「無い。
地脈と地形が分かっていれば、地脈を通して精霊を送り込むことが出来る。
事前調査はその為のものだ。
……但し」
「？」
「そんな術の掛け方では、ほとんど意味のある威力は出せないよ？
精霊は術者の思念の強さに応じて力を貸してくれるものだ。
そんなに何時間も前から仕掛けたのでは、せいぜい侵入者を驚かせる程度の猫騙しレベルにしかならないと思う」
「と言うと？」
「水面を荒らすことは出来ても、それだけで渡辺先輩がバランスを崩すほどの大波は作れないはずだ。
七高の選手が突っ込んでくるという事故が重ならなければ、子供の悪戯にしかならないんじゃないかな」
幹比古の言葉に、どういう訳か、達也は深く頷いた。
「あれも単なる事故であれば、な」
「えっ？」
意味深な台詞に幹比古は当然の疑問を示したが、すぐには答えず、達也は美月へ目を転じた。
「美月、渡辺先輩の事故のとき、ＳＢの活動は見なかったか？」
「……メガネを掛けていたから……ごめんなさい」
「いや、そうだな。
これは俺がうっかりしていた。

美月が謝る必要は無い」
項垂れた美月に達也が頭を下げ、深雪が美月を慰めに掛かった。
「さっきの話だが」
達也が目を向けた先は幹比古。
だがその言葉は二人の二年生にも向けられていると、五十里にも花音にも分かっていた。
「七高選手の暴走も、単なる事故ではないと俺は思っている。これを見てくれ」
幹比古をディスプレイの前に連れて行って、シミュレーション映像を最初から再生する。
横から覗き込んでいる五十里と花音を意識しつつ、達也は衝突の少し前で再生を止めた。
「本来ならばここで、七高の選手は減速に入らなければならない」
コマ送りで再生を再開する。
「だが見てのとおり、実際にはここで更に加速している」
「……その通りだね。確かに、不自然だ」
「そうね。こんな単純ミスをする魔法師が、九校戦の選手に選ばれるわけ無いか」
五十里、花音のコメントに首肯して、達也は再生速度を通常に戻した。
「おそらく七高の選手は、ＣＡＤに細工をされていたのだと思う」
ギョッとした気配が部屋に満ちた。
「コースで減速が必要になるのは、このコーナーが最初だ。減速の起動式を加速の起動式とすり替えられた場合、間違いなくこのコーナーで事故を起こす。
そして去年の決勝カードのラップタイムを見れば、渡辺先輩と七高の選手がほとんどもつれ合う状態でこのコーナーを回るであろうことは簡単に予想できる。
もし俺に妨害の意思があれば、優勝候補二人を一度につぶすチャンスだと考えただろう」

「……確かに理屈は通っているけど……ＣＡＤに細工なんて出来るのかい？」

もし細工したとしたら、一体何時？」

「七高の技術スタッフに裏切者が紛れ込んでいるとか？」

五十里と花音の質問に、達也は頭を振った。

「残念ながら確証はありません。

七高にＣＡＤを見せろと言っても、一蹴されることは分かり切っています。

ただ、細工する機会はあると思います」

「やっぱり裏切かな？」

「その可能性も否定し切れませんが……

俺は、大会委員に工作員がいる可能性の方が高いと思います」

会話が途切れた。

五十里も花音も幹比古も、今度こそ絶句していた。

一様に「信じられない」という顔をしていた。

「……しかしお兄様、大会委員に工作員がいるとして、一体何時、どのようにしてＣＡＤに細工したのでしょうか？

競技用のＣＡＤは各校が厳重に保管しているはずですが」

そして達也の言葉を信じられないということがあり得ない深雪が、推理の更なる開陳を求める。

「ＣＡＤは必ず一度、各校の手を離れ大会委員に引き渡される」

「あっ……！」

「だが、手口が分からない。そこが厄介だが……」

万に一つであっても、警戒を怠ることは出来ない。

これから試合を控えている深雪、そしてそのＣＡＤを調整する達也は、そのことを深く心に刻んだ。

◇◆◇◆◇◆◇

第一高校、三日目の成績は男女ピラーズ・ブレイクで優勝、男子

バトル・ボード二位、女子バトル・ボード三位。
第三高校が男女ピラーズ・ブレイクで二位、男女バトル・ボードで優勝という好成績を収めた為、両校のポイントは前日より寧ろ接近していた。
大会が始まる前、摩利は達也に、新人戦のポイントは総合順位に大きく影響しないだろうと言っていたが、どうやら彼女の予想は外れたようだ。
明日からの新人戦に備え、担当選手が使用するＣＡＤの入念なチェックを行っていた達也は、端末で真由美から呼び出しを受けた。
作業を中断し、「こんな遅い時間にどうしたのだろう？」と頭を捻りながら、一高に割り当てられたミーティングルームへ足を運ぶと、扉の前でバッタリ、深雪と顔を合わせた。
「深雪も会長に呼ばれたのか？」
「ええ、お兄様もですか？」
達也は、五十里たちと検証した妨害工作の可能性と技術的な防衛策について、協議するために呼ばれたと考えていた。
しかしそれでは、深雪も一緒に呼ばれた理由が分からない。
「行くか」
「はい」
世の中には、考えなければ分からない事と、考えても分からない事がある。
そして考えても分からない事ならば、行動してみるしかない。
古人も言っている。
下手な考え休むに似たり、と。
「失礼します」
それほど密度の濃い事――と言うか、理屈っぽい事を思考に乗せた訳でもなかったが、少なくとも無駄に思い悩んだりせずに、達也はドアを開けた。
そこには真由美と鈴音と克人と――まだベッドで寝ているはずの摩利の姿があった。

「ご苦労様。明日の準備は終わった？」
「いえ、もう少し掛かります」
「そう……ごめんなさいね、達也くんまで呼び出したりして」
すまなさそうに言う真由美の台詞で、どうやら呼び出しのメインは深雪であるらしいことが分かった。
「掛けてくれる？」
勧められるままに、並んで腰を下ろす兄妹。
「少し相談したいことがあって……いいえ、少しじゃないわね。二人には、大事な相談があって、来てもらいました」
真由美に改まった口調で話し掛けられるのは、何だか久し振りな気がして、達也は少し新鮮に感じた。
「リンちゃん、説明してもらえますか？」
改まった口調でも「リンちゃん」なんだな、と、何となく考えながら、達也は鈴音に目を向けた。
「今日の成績は二人も知っていると思います」
当たり前のことだから、返事を期待されているとは思わなかったが、達也は深雪と同時に頷いた。
「アクシデントもありましたが、当校の今日のポイントはプラスマイナスでほぼ計算どおりです。
しかし、三高が予想以上にポイントを伸ばしている為、当初の見込みより差が詰まっています」
ここで再び、理解した標しに頷く。
「新人戦で優勝できないまでも大差をつけられなければ、最後のモノリス・コードに勝利することで総合優勝を果たせます。
ですが万一、新人戦で三高に大差をつけられるようなことがあれば、本戦ミラージ・バットの成績次第では逆転を許してしまう可能性もあります」
仮定ばかりの話だが、要するに新人戦で頑張れ、と言いたいのだろうか？
そんな用事で呼び出す必要は無いはずだが……と、ポーカーフェ

イスの裏側で達也は首を捻った。
「本戦のポイントは新人戦の二倍。
私たち作戦スタッフは、新人戦をある程度犠牲にしても、本戦のミラージ・バットに戦力を注ぎ込むべきだという結論に達しました」
（新人戦を犠牲にしても？　まさか！？）
「ええ、そうよ、達也くん」
達也の僅かな表情の変化を鋭く読み取って、真由美が質問を先取りする。
「深雪さん。貴女には、摩利の代役として本戦のミラージ・バットに出場してもらいます。
達也くんは引き続き深雪さんの担当エンジニアとして九日目も会場入りしてもらうことになります」
本人の発言に反して、真由美の台詞は相談ではなかった。
決定事項の通達だった。
「しかし、先輩方の中にも一種目にしかエントリーされていない方々がいらっしゃいます。
何故わたしが新人戦をキャンセルしてまで代役に選ばれるのでしょうか？」
深雪の声は落ち着いていた。
突然の抜擢に舞い上がることも無く、常識的な気遣いと冷静な計算に基づく質問を投げ掛ける。
彼女の反問に、摩利が「ほう……」という表情を見せ、克人が微妙な意外感を表した。
「その方が合計ポイントで高得点を見込めるからです」
答えは、更に冷静な鈴音の声に乗って返って来た。
「ミラージ・バットには補欠を用意していなかった。
それが最大の理由だな」
説得――だろう――の言葉を重ねたのは、本来の選手だった、摩利。
「空中を飛び回るミラージ・バットにぶっつけ本番で出場しろとい

うのは、いくら本校の代表選手でも酷な話だ。
それより、一年生であっても、事前に練習を積んでいる選手の方が見込みがある。
それに――」
言葉を切ったのは、意図的な「間」だろう。
摩利は意外と芝居気のある少女だ。
「達也くん。君の妹なら、本戦であっても優勝できるだろう？」
しかも、搦め手で攻めて来た。
些かあざとい論法のような気もするが、達也に謙遜する理由は無い。
「可能です」
「お兄様……」
当然のように、と言うより決定事項のようにあっさりと言い切った達也に、摩利はニヤリと笑い、克人は一つ頷き、真由美は目を丸くし、鈴音は眉を動かし、そして深雪は、恥じらいを浮かべて俯いた。
「そのように評価して下さってのことなら、俺もエンジニアとして全力を尽くしましょう。
深雪、やれるな？」
「ハ、ハイ！」
ただでさえ美しい背筋を更にピンと伸ばし、深雪は上ずった声で達也に答えた。
それは、代役を引き受ける返事でもあった。

2ー（13）　新人戦～空中機雷～（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

21（13）　新人戦～空中機雷～

大会四日目。

本戦は一旦休みとなり、今日から五日間、一年生のみで勝敗を争う新人戦が行われる。

各校の第一目標は総合優勝だが、新人戦のポイントも二分の一とはいえ総合順位ポイントに加算されるし、出場する一年生にとっては新人戦優勝こそが自分達の栄誉になる。

気合いの入り方は本戦に劣るものではなかった。

競技の順番は本戦と同じだ。

本日の種目はスピード・シューティング（予選・決勝）とバトル・ボード（予選）。

但し本戦とは違い、スピード・シューティングは午前が女子、午後が男子で、一気に決勝まで行うというスケジュールになっている。（これは本戦スピード・シューティングが開会式に引き続いて行われる為、午前中だけで決勝までを終わらせることが出来ないという理由によるもの）

試合中にＣＡＤを調整することは出来ないが、選手の希望を聞いて試合と試合の合間に細かな調整を行うのは、エンジニアの重要な仕事だ。

だからエンジニアは基本的に、試合時間中、担当する選手の傍に付いている。

同一競技で同じ学校の選手が同時に試合をすることがなるべくないように、大会委員会で調整はされている。

だがアクセル・ボールの様に一日の試合数が多い競技では、どうしても時間が重なることもあり、エンジニアもメインとサブの二人がつく。

同じ競技でもこのようなことが起こるのだから、一人のエンジニアが同じ時間帯に行われる別の競技を同時に担当することは出来な

い。
試合順の関係で、結果的に試合時間が重ならなかったとしても。

◇◆◇◆◇◆◇

「ほのかは最終レースか……」
「ハイ！　午後のレースですので、女子のスピード・シューティングとは重なりません！」
ニコニコと笑いながら、ヒシヒシとプレッシャーを掛けて来るほのかを、達也は先程から持て余し気味だった。
達也が担当する競技は女子スピード・シューティング、女子ピラーズ・ブレイク、ミラージ・バットの三種目。
女子の競技ばかりなのは、彼が女誑(たら)しだから、では勿論なく、一年生男子選手の方で達也に対する反発が強かったからだ。
――無論それだけではなく、一年生女子選手の一部から強い要望もあったのだが。
例えば、深雪とか、ほのかとか、深雪とか、ほのかとか、深雪とか。
……つまりは、この二人が熱心にアピールしたということなのだが。
しかしここで一つ、問題が生じた。
深雪の魔法力に最も向いている競技はピラーズ・ブレイク。
彼女が振動減速系統を得意としていることは、生徒会役員もクラスメイトも知っている。
何と言っても、無意識に冷却魔法を発動させる程なのだ。（真由美たちはその現場を見ている）
深雪はピラーズ・ブレイクと、花形競技であり各校とも女子のエースをエントリーしてくるミラージ・バットに出場させるとして、問題は、ほのかを何に出すか、という事だった。
一年生女子の中では深雪、雫に次ぐ実技優秀者のほのかだが、彼

女の魔法力は、実は余りスポーツ系魔法競技向きではない。
全ての系統をそつなくこなし、複雑な工程の魔法式も然程苦労することなく組み上げる。どちらかと言えば、ほのかは研究者タイプなのである。
得意魔法を敢えて挙げるとすれば光波振動系統の幻影魔法だが、同じ振動系統でも大出力の振動・加速系を得意とする雫の方がピラーズ・ブレイクには向いている。
達也が深雪を担当するのは、最初から決定事項。この事に異議を唱える蛮勇の持ち主は上級生にもいなかった。
従って、達也に担当してもらうことを望むなら、深雪と同じ競技にエントリーするのが一番確実なのだが、ナンバーワン、ナンバーツー、ナンバースリーの選手を同一競技に出場させるのは、作戦上得策ではない。と、言うか……無理だ。
ではピラーズ・ブレイクと試合が重ならない競技に、ということになるのだが、残念ながらスピード・シューティングも雫の方に適正がある。元々競技日程は、選手が得意分野にエントリーできるように、と考慮されて決められているのだから、最初から仕方のないことなのだ、とも言える。
作戦上の要因も重なり、結局ほのかの出場種目はバトル・ボードとミラージ・バットに決まった。（作戦スタッフはバトル・ボードとアクセル・ボールの組合せを第一案としたのだが、本人の希望と彼女の意を汲んだ友人たちの口添えで、一種目は深雪と同じ競技になったのだった）
……このような事情があったので、「試合時間が重ならない」ことを盛んにアピールするほのかが、本当は何を言いたいのかは、達也にも察しがついた。
だが例え時間的に可能でも、チーム事情として今更エンジニアの担当替えは無理なのである。それに、今日は大丈夫でも六日目――新人戦としては三日目――のピラーズ・ブレイクとバトル・ボードの試合が重ならないという保証はどこにもない。

この程度のことは、ほのかにも分かっているはずなのだが……

今日に限って何故か助け船を出そうとしない妹にも込みでため息をつきながら、達也は二股男の言い訳のような台詞を口にした。

「……本当はＣＡＤも診てやりたいんだが、それは無理だから、せめてレースは傍で観ていることにするよ」

「本当ですか！？　約束ですよ！」

誰かがクスリと笑った。達也には誰の声だか分かっていたが、彼の意識はそれを分からなかった振りをすることを選択した。

端から見れば、彼は紛うことなく「女誑し」である……のかも、知れなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

当事者にとっては決して「些細な」では片付けられない幕間劇であっても、メインストーリーからすれば所詮、サイドエピソード。

幕が上がれば、意識をそこに集中しなければならない。

最終チェックを終えた、スピード・シューティング専用の細長い小銃形態ＣＡＤを手渡して、達也は雫にコンディションを確認するよう指示した。

ＣＡＤは魔法師からサイオンを吸収し、サイオン情報体である起動式を送信する。

この交信機能にトラブルが生じると、他の部分をどれほど巧みに仕上げていても役に立たない。

ハード的な交信障害があれば予備機に交換しなければならないし、ソフト的なバグがあれば大急ぎで手直しする必要がある。

「んっ……万全。

自分のより快適」

顔にも声にも表情が乏しいので、雫とコンビを組んだ当初は、どの程度本気か嘘か戸惑うこともあったが、今では達也も大分慣れてきた。

彼女は基本的に嘘は言わない。
都合の悪いことは黙秘するだけだ。
「達也さん、やっぱり雇われない？」
ただ、未だにこういう、本気か冗談か判断がつき難いことを言い出す点には慣れることが出来ない。
「……この試合直前に冗談を言う余裕があれば大丈夫だな」
「冗談じゃ無いよ」
「……」
ちなみに彼女が何を言っているかというと、「自分と正式にＣＡＤメンテナンス契約を結ばないか」という意味である。
雫が「雇われないか」と達也に訊くのは、既に十回を超えている。
彼女の性格からして同じ冗談を繰り返したりはしないだろう、と達也も思うのだが、どうにも本気とも思えないのだ。
「専属じゃなくていいから」
競技用ＣＡＤのアレンジの参考にする為、一度見せてもらった彼女のＣＡＤは、達也にも手を加える余地が無いくらい巧みに調整されていた。
それもそのはず、雫のＣＡＤをメンテナンスしているのは、現在この国で五指に入ると言われている有名魔工師だった。
雫の、と言うより、北山家の、と言った方が、より正確ではあるが。
最初に聞いたときは達也も意外感を禁じ得なかったのだが、雫の家は、いわゆる「大富豪」なのである。
もっとも北山家は、十師族や百家のような、魔法師の名門という訳ではない。
一流の魔法師である母親が大富豪の跡取り息子に見初められて、すったもんだの末にゴールインした、という事情で、父方の家系に魔法師はいないし、年の離れた弟も実用レベルと言える程の魔法の素質は持ち合わせていないそうだ。
その所為なのかどうなのか、父親の雫に対する――雫の魔法の才

能に対する入れ込みようは、常軌を逸しているらしい。
雫がモノリス・コードに嵌り込んだのも、父親が財力にものを言わせた魔法競技観戦ツアーを毎年組んでいた結果なのだそうだ。
「……何度も言っていると思うが、その件は俺がライセンスを取ってからな？」
達也が何の返事もしないうちから雫が提示した契約金と作業料は、トーラス・シルバーとして巨額と言える収入を得ている達也から見ても、破格のものだった。
彼がただの脛かじり学生だったら、目が眩んでいたに違いない程に。
だがこうして学校行事の一環として無報酬で調整を行うのと、報酬を受け取って本物の仕事として調整を行うのとでは訳が違う。
ライセンスが無くとも違法ではないが、世間的に「モグリ」であることに間違いはないのだから。
「分かった」
いつものように雫は聞き分け良く頷いて見せた。
だが本当はどこまで理解しているのか、疑わしいものだった。

雫本人にとってはどうと言うことも無かったかもしれないが、達也にとっては試合の直前に、大幅に緊張感を殺がれる会話だった。
まあ、選手に悪影響が無ければ、それで良いのかもしれないが。
作戦は事前に何度もミーティングを重ねた。
達也が雫の為に考案し、その為のＣＡＤを組んだ秘策もある。（「秘策」の出番は対戦型となる決勝トーナメントからだが）
「いよいよだな、雫」
「うん」
出番を前にして、言うべきことは一つしかない。
「よし、頑張れ！」
「ウン、頑張る！」
単純だが、それこそが最後の作戦なのである。

◇◆◇◆◇◆◇

「隣、空いてる？」

「アラ、深雪。

空いてるわよ。どーぞドーゾ」

実は先程から同じ問い掛けが繰り返されていたのだが、訊ねてくる相手が下心の見え隠れするヤローどもばかりだったので（レオと幹比古が隣に座っているにも関らずである！）、殺気を乗せた嘘八百で悉く追い払った結果の空席だった。

「レオ、あっち」

「……つくづく偉そーな女だな、お前って……」

ボヤキながらも素直に席を立ち、レオは深雪たちの更に外側へ回り込んだ。

無論、軟派除けだ。彼はこう見えても（？）紳士なのである。

――最初からそうしなかったのは、エリカがレオの隣を拒否し、幹比古がエリカの隣を拒否した為だったりする。

深雪はレオにお礼を述べて、一つずつずれた席に腰を下ろした。

レオが微妙に照れているのは、深雪に笑顔を向けられたからというより、ほのかの隣になったからという要因が大きい。ほのかも世間的に見れば十分「可愛い」と評価される容姿の持ち主であり、レオはエリカや深雪ほどにはほのかと親しくしていない。

相手の容姿よりも親密度が顔色に反映する当たり、硬派と言うか純情と言うか、評価の分かれるところだろう。

「……ほのかさん、準備はいいんですか？」

「大丈夫です。私のレースは午後だから」

美月に問われて、ほのかは少し、硬い笑顔で答えた。

「ほ・の・か。

今から緊張していては、試合までもたないわよ？」

「うっ、分かってるんだけど……」

「大丈夫よ、ほのかなら。
お兄様もそう仰っていたでしょう？」
「う、うん……」
「レースのことを考え過ぎないように、こちらを観に来たのでしょう？
今は、雫の応援をしましょう」
「……ウン、そうよね」
必要以上に強く頷く仕草から、到底緊張を紛らせ切れていないことが窺われた。
生真面目で思い込みが強い性格だから、緊張するなと言う方が無理なのかもしれない。
「……あの、私、余計なこと言いましたか？」
そして美月の繰り出す悪意の無い追い討ちに、ほのかの顔が、僅かに引きつった。

◇◆◇◆◇◆◇

そんな一年生たちの、ある意味初々しい一幕が繰り広げられている客席から少し離れたところに、生徒会プラス風紀委員長の三年生トリオは陣取っていた。
「摩利、寝てなくて良いの？」
「病気じゃないんだ。暴れなければ問題ない。
それより真由美の方こそ、テントに詰めていなくて良いのか？」
「大丈夫よ。
何キロも離れている訳じゃないんだし、何かあったら知らせてくるでしょ」
そう言って真由美は、頬に掛かる髪をかき上げて見せた。
露わになった耳には音声通信用のレシーバーが引っ掛けられていた。
「しかし、真由美だけならともかく市原まで一緒に席を外すのはど

うかと思うが」
「問題ありません。
今日の私は強制オフみたいなものです」
「……お前の冗談は相変わらず分かりにくいぞ、市原……」
ニコリともせず返された答えに、一瞬、参謀の役目を事実上取られてしまったことに不満があるのかと摩利は疑ってしまった。
無論、そんなはずがないことは摩利も知っている。
鈴音は作戦スタッフの総責任者だが（と言っても作戦スタッフは四人しかいないが）、個々の作戦立案は分業体制に従っている。
最も大きな担当分けとしては、男子の試合は男子のスタッフが作戦を立て、女子の試合は女子のスタッフが作戦を立てる。
本日の競技では、女子スピード・シューティングが鈴音の担当種目だ。
――が、元々この競技は余り細かな作戦が入り込む余地の無い、能力任せの色合いが強いもの。
力任せ、と言ってもそれほど的外れではない。
参謀が関与する部分があるとすれば、選手の特性に応じた魔法種類の選択と、それに合わせたＣＡＤのセッティング傾向になるのだが……この部分については技術スタッフの仕事と重なる領域だ。
そして一年女子スピード・シューティングの魔法種類選択とＣＡＤセッティングは、計画から実行まで達也が全て一人でやってしまっていた。
とはいっても、そのプランについては事前に鈴音も了解済みだ。
また彼女は、この程度のことでへそを曲げるような性格ではない。
「さて……考えてみれば、アイツのエンジニアとしての腕を実戦で見るのはこれが初めてだな」
「そうね。
私のときは、本当にお手伝い程度だったし。
彼が一から調整したＣＡＤがどんな性能を見せてくれるのか、楽しみだわ」

「北山さんを始めとして、選手からはとても好評のようですが」
鈴音の言葉に誇張は無かった。
一科生のみで構成される一年女子の選手団には当初、深雪、ほのか、雫の三人を除けば、同学年のしかも二科生に自分のＣＡＤの調整を任せることに対してアレルギーに近い抵抗感が、大なり小なり見られた。
だが彼が調整したＣＡＤで何回か練習を重ねるに連れて、そんなマイナス感情はすっかり消え失せていた。
その激変振りは、「吹っ飛んでしまった」という方が適当かもしれない。
「今日も自分のＣＡＤを持ち込んでいる選手がいたようですし」
「おいおい……競技に差し支えるんじゃないか？」
「その辺りは司波君の方で上手く調整しているみたいですね。サービスしてあげるのは試合が終わってからのようですよ」
サービスというのは、ＣＡＤの調整のこと。
達也が調整した競技用ＣＡＤを使った選手が、私用のＣＡＤの調整まで持ち込んでくるようになったのだ。
それも、一人や二人ではなく、一年生女子選手のほぼ全員が。
「地道にファンを増やしているのね」
「変なところで人が好いんだな」
真由美と摩利が、顔を見合わせてクスッと笑い合った。

◇◆◇◆◇◆◇

もし達也が真由美の「ファンを増やしている」発言を聞いていたなら、苦い顔で否定したことだろう。
事実懇親会では、彼女たちから避けられていたのだ（と達也は感じていた）。
だが言うまでもなく、彼はそのような「順風耳」など持ち合わせていない。

それに彼の注意は、雫の立つシューティングレンジに集中していた。
彼には、美月のような「目」は無い。
しかしその代わり、達也には情報構造を読み取る力がある。
自分で一から調整したＣＡＤの情報構造は、全て頭に入っている。
そこに少しでも手が加われば、その「手」を知覚できなくてもその「結果」を認識することが彼には出来る。
――雫が構えを取った。
スタートのランプが点り始めた。
（どうやら今回は大丈夫のようだな）
尚も「眼」を逸らすことなく、達也はそう思った。

◇◆◇◆◇◆◇

ランプが全て点った瞬間、クレーが空中に飛び出した。
得点有効エリアに飛び込んだ瞬間、それは、粉々に粉砕された。
次のクレーはエリアの中央で砕け散った。
次はエリアの両端で、二つ同時に破砕された。
雫の視線にブレは無い。
ただ正面を真っ直ぐ向いていて、飛び込んでくる標的を見ていないようですらある。
「うわっ、豪快」
「……もしかして有効エリア全域を魔法の作用領域に設定しているんですか？」
「そうですよ。雫は領域内に存在する固形物に振動波を与える魔法で、標的を砕いているんです。
内部に疎密波を発生させることで、固形物は部分的な膨張と収縮を繰り返して風化します。急加熱と急冷却を繰り返すと硬い岩でも脆くなって崩れてしまうのと同じ理屈ですね」
「より正確には、得点有効エリア内にいくつか震源を設定して、固

形物に振動波を与える仮想的な波動を発生させているのよ。魔法で直接に標的そのものを振動させるのではなく、標的に振動波を与える魔法力の波動を作り出しているの。

震源から球形に広がった波動に標的が触れると、仮想的な振動波が標的内部で現実の振動波になって、標的を崩壊させるという仕組みよ」

ほのかと深雪が二人掛かりで行った丁寧な解説に、美月は頬(しき)りと頷くばかりだった。

◇◆◇◆◇◆◇

「……という仕組みですね」

偶然か必然か、同じ会話が同じタイミングで、三年生トリオの間でも交わされていた。

「ご存知のとおりスピード・シューティングの得点有効エリアは、空中に設定された一辺十五メートルの立方体です。

司波君の起動式は、この内部に一辺十メートルの立方体を設定して、その各頂点と中心の九つのポイントが震源になるように記述されています」

解説役は達也から調整プランを見せられている鈴音だ。

「各ポイントは番号で管理されていて、展開された起動式に変数としてその番号を入力すると、震源ポイントから球状に仮想波動が広がります。

波動の到達距離は六メートル。つまり一度の魔法発動で、震源を中心とする半径六メートルの球状破砕空間が形成されることになります」

「……余計な力を使っているような気もするが……北山は座標設定が苦手なのか？」

「確かに精度より威力が北山さんの長所ですが……」

摩利の問いに答える鈴音の顔は、彼女のデフォルトとも言うべき

クールなポーカーフェイスのままだ。
しかしその目の中に、同情交じりの苦笑の影が垣間見えた。
「この魔法の狙いは精度を補うことではなく、精度を犠牲にする代わりに速度を上げることにあります」
「……つまり、その気になればもっとピンポイントな照準も可能という事よね？
どういうことかしら？」
「この魔法の特徴は、座標が番号で管理されているという点です」
視線を正面に――試技中の一年生に戻して、鈴音は説明を始めた。
すらすらと繰り出される答えは、彼女も以前に同じ質問をして既に回答を得ていたから、だろうか。
「スピード・シューティングは、選手の立つ位置と得点有効エリアの距離、方向、エリアの広さが常に同じです。
ですから、この魔法で設定する必要がある震源ポイント、その位置決めをする仮想的な立方体と選手の距離、視野角も常に一定です。
故に、座標を変数として毎回入力する必要は無く、起動式に選択肢の形で組み込んでおいて、発動時にはその番号を指定するだけで魔法を発動させることが出来ます。
この程度の粗い狙いであれば、ＣＡＤの照準補助システムでその時に最適なポイントを自動的に選び出すことも可能です。
そしてこの魔法は、威力も持続時間も、変える必要がありません。
実際にそれらは、起動式で定数として処理されています。
つまり選手は、ＣＡＤの補助に従ってポイントを設定するだけで、ほとんど変数入力を意識することなく、事実上ただ引き金を引くだけで、標的を破壊することが出来るのです」
試技は終盤に差し掛かっていた。
撃ち漏らしはまだ、一つも無い。
「制御面で神経を使う必要がありませんから、魔法を発動することだけに、演算領域のポテンシャルをフル活用することが出来ます。
連続発動もマルチキャストも思いのままです」

試技時間が終了した。
結果は、パーフェクト。
「魔法の固有名称は『能動空中機雷（アクティブ・エアー・マイン）』。彼のオリジナルだそうですよ。
まあ、色々な要素が詰まっている分だけ大きな起動式になりますから、北山さんの処理能力があってこその魔法ですが」
「……真由美の魔法とは、発想がちょうど逆だな」
「……よくもこんな術式を考え付くわね」
真由美の声には、感心の成分よりも呆れ声の成分の方が多く含まれていた。
「しかし……面白いな。
空中に仮想立方体を設定するのではなく、自分を中心にした円を設定して、その円周上に震源を配置すれば全方位に有効なアクティブ・シールドとして使えないかな？」
「持続時間が問題ね。
短すぎるとタイミングが難しいし、長すぎると自分が巻き込まれる可能性が出て来るわよ？」
「そこは術者の腕次第だ。お前の言うとおり、タイミングを見極めることが出来れば持続時間は短く出来る。
……よし、早速今晩にでもアイツを捉まえて、あたしのＣＡＤにインストールさせよう」
「……試合の邪魔にならないようにね」
今度はハッキリ、呆れ声の純度、百パーセントだった。

◇◆◇◆◇◆◇

「お疲れ様」
シューティングレンジから引き上げて来た雫に、達也はタオルを渡しながら労いの言葉を掛けた。
エンジニアはマネージャーではないので、タオルの手渡しまでです

る必要は無いのだが、彼にはそんな、ちっぽけなプライドの持ち合わせは無かった。
「何だか拍子抜け」
斜に構えている訳ではなく、本当にそう感じているのだろう。
額に軽く滲んだ汗を拭きながら、雫の表情は物足りなげだ。
だが同時に、喜びも隠し切れていない（隠す気も無いのだろうが）。
新人戦の予選突破ラインは、毎年大体、命中率八十パーセント前後。
皆中ならばそれ以上の得点は無いのだから、ボーダーラインに関係なく、当然決勝トーナメント進出となる。
「死角を突かれることは無いと思っていたが、予想通り、そんな意地の悪い軌道設定はされていなかったな」
雫に使わせた魔法は、有効エリアの全てをカバーしていたわけではない。
外縁部を掠めるようにして、死角が存在する。
しかし、クレー投射機の性能から見て、そのようなギリギリを狙う軌道設定はされていないだろうと予測していた。
もしクレーが有効エリアを通過しなかったら、公平を期する為にその試技はやり直しとなり、大会委員の失態となる。
競技の性質上、これは必要の無いリスクだ。
そこまで読んだ上の作戦なのだからそれほど心配はしていなかったが、実際に裏もかかれず上手く行ってみると、やはりホッとするものだ。
「達也さん、心配し過ぎ。
ふるい落としの為に、わざわざ死角を突かなければならない程、新人戦のレベルは高くないよ」
雫の言い分はもっともだ。
達也は自分の気分を切り替えて、雫の気分の切替にかかった。
「まずは予定通り。

だが準々決勝からは対戦形式だ。
ＣＡＤの調整は朝のうちに済ませてあるから、感触を確かめておいてくれ」
「分かった」
予選と決勝トーナメントでは試合形式が違うので、使用する魔法も変えてくるのが普通だ。
そして競技用の特化型ＣＡＤは、魔法の種類に応じてＣＡＤ自体も変えるのが一般的。
達也はこれから次の選手――次の次の試合の準備に入る。
雫は、決勝トーナメント用のＣＡＤが保管されている天幕へ、一人で向かった。

◇◆◇◆◇◆◇

「三人とも予選通過か……」
一高本部の天幕に戻った真由美の元へ、スピード・シューティングの予選結果が届けられていた。
「今年の一年女子はレベルが特に高いのか？」
決勝トーナメントに進出するのは、予選二十四名の内、八名。
その八名に同じ学校からエントリーした三名が共に入っているというのは、本戦、新人戦を通じて、過去にも余り例が無い。
「摩利、分からないフリはやめたら？」
真由美から質問をツッコミで返された摩利は、無言で肩をすくめてみせた。
お手上げ、のポーズである。
「バトル・ボードの方はどうなっているのかしら？」
真由美の問い掛けに、鈴音がわざわざ端末を取り出して確認する。
（「わざわざ」というのは、本当は既に頭に入っているからだ）
「男子は二レースを終了していずれも予選落ち、女子は一レースに出場して予選突破です」

「男子はあと一人か……女子の方では、最終レースの光井さんが予選突破確実でしょうから……こっちもあーちゃんが頑張ってるからかな」

「当校ももう少し、技術者の育成に力を注ぐべきかもしれんな」

同じ成績表を見ていた克人が、苦味の混じった声で、言葉を挿んだ。

◇◆◇◆◇◆◇

スピード・シューティングの準々決勝は四つのシューティングレンジを使用して行われる。

決勝トーナメント進出の八名が全て別々の学校であれば、四試合が同時に行われるが、同じ学校の選手が含まれている場合、試合が重ならないように時間が調整されることになる。（準々決勝では、同じ学校の選手同士の対戦は無い）

とは言っても、同じレンジで一試合ずつ行う準決勝に比べ、各試合のインターバルはどうしても短くなる。

今回の第一高校女子チームのように、三名が準々決勝に進出すると、エンジニアは非常に忙しい思いをすることになるのだ。

「……達也さん、大丈夫？」

最後の順番に回された雫は、控え室（天幕の中だから厳密には「室」とは言えないが）に駆け込んできた達也を見て、思わずそう声をかけた。

心做（こころな）しか、雫には達也が少し息を切らしているようにも見えた。

「大丈夫」

短くそれだけを答え、達也はＣＡＤの最終チェックを始めた。

雫が見守る――と言うよりジッと凝視している前で、調整機のモニターを高速スクロールさせ、異常個所が無いことを確認して、達也はようやく雫へ目を向けた。

「分かっていると思うけど、予選で使った物とは全くの別物だ。

時間は無いが、少しでも違和感があったら可能な限り調整するから遠慮なく言ってくれ」

達也から受け取ったＣＡＤで一旦構えを取り、二、三回、トリガーに指を掛けては離すという仕草を繰り返して、雫はＣＡＤを下ろした。

「そんなの、無いよ。

寧ろしっくり来過ぎて怖いくらい」

「そうか」

実際に胸を撫で下ろしたりはしないが、ホッとした顔で緊張を緩めた達也に、雫は随分気合の入った顔を向けた。

「二人とも、勝ったんだよね」

「ああ」

二人とも、というのは先に試合をしたチームメイトのことだ。

雫と同じく決勝トーナメントに進んだ二人は、いずれも準決勝に勝ち上がりを決めている。

「大丈夫」

もう一度、異なる意味で、同じ言葉を達也は使った。

「いつも通りにやれば、雫も勝てるさ」

「もちろん」

そして雫も、いつもと同じく簡潔に、いつもと違って力強く頷いた。

「優勝する為のお膳立ては、全て達也さんが整えてくれたんだから、あとは優勝するだけだよ」

「その意気だ」

少々気の早い優勝宣言を敢えて修正したりせず、達也は雫を笑顔で送り出した。

◇◆◇◆◇◆◇

「いよいよ雫さんの出番ですね」

「コラコラ、美月が緊張してどうするの」
「だって、エリカちゃん、ドキドキしない？
これで雫さんが勝てば、当校から三人がベストフォーに進むことになるのよ」
「あんまり興奮しすぎて倒れないようにね？
雫は間違いなく勝ち抜くから」
自信たっぷりに断言した後で、「だから深呼吸でもして落ち着きなさい」と深雪からからかい混じりに促された美月は、何も考えず素直に深呼吸を繰り返した。
「……これも一種のお約束かしら……」
「……美月さんって時々お茶目よね……」
深呼吸の成果と言うより、深雪とほのかに全く心配している様子が見られないのを間近で感じて、美月もようやく落ち着きを取り戻した。
「今度はどんな工夫を見せてくれるのかな」
幹比古の声が少し弾んでいるのを耳に留めて、エリカがオヤッという表情を見せた。
「そうだよな。今度は何が飛び出してくるのか、予想がつかないぜ」
だが実際に声に出して応えたのは、レオだった。
「まるでビックリ箱だよ、彼の頭脳は」
「言えてる」
エリカにとって、幹比古が魔法に対して前向きな興味を示したのを見るのは随分久し振りだった。
この変化は、単に他人の試合を見ただけでもたらされるものとは、彼女には思えない。
自分の知らないところで、達也と幹比古の間に何があったのだろうか……声に出さず、エリカはそんな事を考えていたのだった。
「えっ！？　あれって……？」
その思惟は、意識を向けていた当の本人が上げた、調子外れな声に破られた。

「どうしたんだよ？」
「あのＣＡＤ……」
幹比古の視線は、雫が襷掛けにストラップでぶら下げ、脇下に抱え上げたＣＡＤに向けられている。
小銃形態のＣＡＤは一見、ストラップがついている以外は、他の選手が使用している競技用の物と大差が無いように見える。
だが実弾銃の機関部に当たる部分が、他の選手が使用している物に比べて幾分厚みを帯びていた。
幹比古の流派では、元来ＣＡＤをそれほど重視しない。
未だに呪符による術式の発動が主流だ。
だが去年の事故以来、幹比古は取り憑かれたように現代魔法の技術について学んだ。
失ったものを、補う為に。
その成果は、定期試験の成績にも表れている。
ＣＡＤについても、並みの現代式魔法師より詳しくなったという自負が、幹比古にはある。
その彼の目に間違いが無ければ……
「あれって……汎用型？」
「えっ、マジ？」
「えっ、でも、あれは」
「小銃形態の汎用型ホウキなんて聞いたこと無いよ？
第一、照準補助システムと汎用型の組み合わせなんて、技術的に可能なの？」
次々に上がる、当然な疑問。
だが幹比古は自信を持って頭（かぶり）を振った。
「でもあの、トリガーの真上に配置されたＣＡＤの本体部分は、ＦＬＴの車載用汎用型ＣＡＤ『セントール』シリーズに間違いないよ。
セントール・シリーズは本体にインターフェイスを持たず外部の入力機器につないで使用するタイプだけど、その為のコネクターでグリップと照準補助装置につないでいるんだ」

「よくお分かりですね」
ニコッと笑って振り向いた深雪の一言が、幹比古の観察を裏付けた。
「えっ？　じゃあ、アレって」
「そうよ、エリカ。
あれはお兄様のハンドメイド。
汎用型ＣＡＤで照準補助システムを利用する為にお作りになった物よ」
深雪が得意げに返した答えに、自身も特殊形状のＣＡＤをオーダーメイドして、その手間を知っているエリカは絶句した。
「……もう驚く気にもなれんのだけど……
一体、何の為に？」
「もちろん、試合の為ですよ」
簡潔に告げられたほのかの答えは、レオの、そして他の三人の疑問に対して十分なものではなかった。
だが、それに続く説明はなかった。
示し合わせたように息を呑み、六人の視線が前へ向いた。
競技開始のシグナルが点り始めていた。

◇◆◇◆◇◆◇

紅白のクレーが宙を舞う。
紅に塗られた三つのクレーが軌道を曲げ、有効エリアの中央に集まって衝突し、砕け散った。
「移動系……いえ、違うわね。
収束系？」
各校が本部に使っている天幕には、進行中の全競技を映し出すことが出来る大画面の多段階分割モニターが設置されている。
そのモニターをほぼ一杯に使って、真由美と鈴音は雫の試合を観ていた。

「ご名答です」
今度は有効エリアの奥を飛び去ろうとしていた紅のクレーがエリア中央に吸い寄せられて砕け散った。
「今のは予選で使った魔法よね……？」
「はい。収束系魔法と振動系魔法の連続発動ですね」
白いクレーは二つずつ、衝突によって破壊されている。
移動系魔法により標的自体を弾丸として、他の標的にぶつけるオーソドックスな戦法。
だが先程から、エリア中央付近で頻繁に的を外している。
外縁部ではほとんど命中させているから、本人の技術的な未熟の所為というより……
「……有効エリア内を飛び交うクレーをマクロ的に認識して、中央部における紅色のクレーの密度を高める収束系魔法の影響で白のクレーが中央部からはじき出されているのは分かるんだけど……」
収束系魔法は、魔法式で定義した空間内に存在する、魔法式で定義した「情報」を持つ対象を、魔法式で定義した座標に選択的に集める魔法。これを物質に対して使用した場合、対象物質の密度を高めると同時に、対象物質以外の物質の密度を低下させる効果を持つ。
例えば真由美が使用したドライアイスの弾丸を作って飛ばす魔法も、十分な弾数を得る為に初期工程で二酸化炭素を集める収束系魔法を組み込んでいる。
この際、一箇所に集められた二酸化炭素がそれ以外の気体を押し除けて、二酸化炭素密度の高い空間が作り出されている訳ではなく、指定された座標に二酸化炭素が流れ込み、同時にそれ以外の気体が流れ出して行くのである。
この魔法の気体分子をクレーに置き換えたのが、雫の使っている魔法だ。
特定の空間――この場合、有効エリアの中央部――の情報を「紅色のクレーが集まっている空間」に書き換える収束系魔法。
より具体的には、得点有効エリアをすっぽり覆って尚余る二十メ

ートル四方の空間を「中央部に近づくほど紅色のクレーの密度が高い空間」に改変する魔法。

空間の体積は巨大だが、同時に飛んでいるクレーの総数が少ないので、術者の負担はそれ程でもない。

改変の対象は空間そのものではなく、その空間内に存在するクレーの分布だからだ。

紅のクレーは魔法式による情報改変によってエリアの中央部へ引き寄せられ、白のクレーは中央部を横切る軌道から外される。

相手選手が直接干渉しているクレーはこの副次的な干渉の影響を受けないが、相手選手がぶつけようとしている「的」の側のクレーは、相手選手の魔法によるコントロールを受けている訳ではないので、零の魔法の影響により軌道が変わって、その結果、相手選手が的を外すという現象が起こっているのである。

「でも、最後の振動系が発動したり発動しなかったりしているのは何故？」

複数の標的が集まった場合は、そのまま中心部で衝突させて壊している。

飛翔中の紅色のクレーが一つだけの場合に限って、振動系の破砕魔法が行使されている。

一つの魔法として構成されているなら、振動系魔法で標的を破壊するという最終工程が、発動したり発動しなかったりするのはおかしいのだ。

「標的が複数の場合、振動系が発動する前に衝突するようにスケジュール設定されているのかしら……？」

口に出した推論を自分でも信じていないのは、真由美自身の口調が物語っている。

そんな時間差を設けるメリットは、何も無いのだから。

「会長、私は『収束系魔法と振動系魔法の連続発動』と申し上げましたが」

少し人の悪い笑みを含んだ声で、鈴音が真由美の勘違いを正す。

真由美はその言葉の意味を即座に理解した。
そして反射的に、反論の声を上げた。
「嘘！　特化型は系統の組合せが同じ起動式しか格納できないはずよ！？」
「お疑いはもっともですが、あれは特化型ではなく、汎用型ＣＡＤです」
「そんなのありえない！
汎用型ＣＡＤと特化型ＣＡＤは、ハードもＯＳもアーキテクチャからして違うものよ。
そして照準補助装置は、特化型のアーキテクチャに合わせて作られているサブシステム。
汎用型ＣＡＤの本体と照準補助装置をつなぐことなんて、技術的に不可能なんじゃない？」
真由美の語勢は徐々に落ち着いたものになって行ったが、紅潮した頬にまだ醒め切れぬ興奮の影が窺われる。
鈴音の笑みも、穏やかで大人びた、相手を落ち着かせる様なものに変わっていた。
「私もそう思っていました。
ですが、実際は可能でしたね。
これは司波君のオリジナルではなく、ドイツで一年前に発表されたものだそうですよ」
「……一年前なんて、ほとんど最新技術じゃない」
「この程度のことで驚かない方が良いですよ、会長。
彼に口止めされていますが、もっとすごい最新技術を司波君は用意していますから」
「ハァ……まあ、秘密というなら訊かないけど。
でも、リンちゃんには話して、私には話せないなんて、チョッとショックかも」
「会長は選手ですから。
きっと彼は、会長を動揺させたく無かったのでしょう」

「まぁね……
こんな術式があるなんて事前に知らされていたら、確かに動揺したかも」
ため息を吐いて視線を戻したモニターの角に、残り時間と両選手の得点が表示されている。
残り時間僅かで、勝利は既に確定していた。

◇◆◇◆◇◆◇

（残り三十秒）
この二週間、何度と無く繰り返し、積み重ねた練習により、体感時間で五分の競技時間を正確に測れるようになっている。
雫は、ゴーグルに映し出される青い球体の内側に紅のクレーが飛び込んだ瞬間、ＣＡＤの引き金を引いた。
標的は速やかに砕け散る。
保護ゴーグルを照準器として利用することは大会規定で認められている。寧ろ、そのようなギミックを仕込んでいない選手の方が稀だ。（自前の照準手段を持っている真由美の様なケースは別として）
だが、標的に狙いをつける為ではなく、空間を仕切る為にＨＭＤ（ヘッド・マウント・ディスプレイ）の機能を組み込んでいるのは、おそらく雫くらいのものだ。――いや、達也くらいのものだ、と表現した方が正確か。
何から何までオーソドックスなノウハウとは異なる仕掛けを提案してくる達也に、雫も最初は戸惑った。
しかし、実際の競技経験が無いことが逆に幸いしたのか、慣れるまでに時間は掛からなかった。
そして慣れてしまえば、これ以外の装備、これ以外の術式が考えられない程、雫のフィーリングにピッタリとマッチした。
とにかく、楽なのだ。
魔法行使に伴うストレスを、ほとんど感じない。

雫は自分が細かい制御を不得手としている、ということを自覚している。

だから彼女がこれまでＣＡＤエンジニアにリクエストしてきたのは、細かな設定をスムーズに行えるようアシストする機能だった。

ある程度スピードを犠牲にしても、確実に魔法を照準し、確実に威力を制御できることをＣＡＤに求めていた。

スピードは自分の処理能力で補う自信があった。

しかし達也の組み上げた術式は、細かな設定を不必要としたものだった。

短所を補うのではなく、長所を最大限に活かすことをコンセプトとしていた。

雫の、高速な連続発動を可能とする処理能力と、大規模な魔法式を構築するキャパシティを、最大限に発揮する為のものだった。

そして今、彼女が手にしているＣＡＤ。

照準補助システムと汎用型ＣＡＤをつないでしまったということにも驚いたが、それ以上に、起動式を処理するスピードに驚かされた。

汎用型は、処理速度において、特化型に劣る。

これは常識というより、理論的な事実だった。

汎用型ＣＡＤと特化型ＣＡＤは、ハードもソフトもアーキテクチャからして異なる。

両者の違いは、組込コンピュータと汎用コンピュータの違いに似ている。

中枢となる演算装置の性能が同等なら、その処理速度において、汎用型は特化型に決して敵わない。

その差は通常、明確に実感できるレベルだ。

それなのに――このＣＡＤは、特化型に劣らぬスピードを発揮している。

（あと五秒）

――標的が飛び込む。

――引き金を引く。
――魔法が発動する。
――標的が砕け散る。
この処理速度は、予選で使った特化型と比べても、ほとんど遜色が無い。
達也はその絡繰りを「二種類の起動式に限定したから」と言っていた。
競技専用だから可能なことで、日常的に使用するＣＡＤには使えない裏技だ、とも。
詳しい理屈は、雫には理解できなかった。
理解する必要は無い、と雫は思っている。
魔法は道具。
ＣＡＤも道具。
道具は使いこなせればいい。
それ以上のことは、専門家に任せておけば良いのだから。
最後の二つは、「能動空中機雷」を使うまでもなく、ループキャストされた収束魔法で砕け散った。
「パーフェクト」
自分の成績を口に出して確認し、雫は勝利の笑みを浮かべた。

2－（14）　新人戦～眩惑の水路～（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

2－（14）　新人戦～眩惑の水路～

正午。

第一高校の天幕は、少し浮ついた雰囲気に満たされていた。

「すごいじゃない、達也くん！　これは快挙よ！」

背中をバシバシと何度も叩かれ、達也は少し辟易していた。

小柄な真由美の腕力はその外見に見合ったもので、然して痛くはないのだが、余りにしつこいので鬱陶しくなって来たのである。

「……会長、落ち着いて下さい」

アイコンタクトで助けを求められた鈴音が、すぐに真由美を諫めてくれた。

頼りになる先輩である――のだろうが、助けを求められるまで放置している時点で「同じ穴の狢」のような気もする。

「あっ、ごめんごめん」

自分がはしゃぎ過ぎている、と自覚できる程度には冷静さを残していたのか、真由美はすぐに叩くのを止めた。……が、達也を解放するつもりは無いようだった。

「でも、本当にすごい！

一、二、三位を独占するなんて！」

「……優勝したのも準優勝したのも三位に入ったのも全部選手で、俺ではありませんが」

「もちろん北山さんも明智さんも滝川さんもすごいわ！

みんな、よくやってくれました」

生徒会長から満面の笑顔で労われ、スピード・シューティング一年生女子チームは、緊張しながらも嬉しそうに「ありがとうございます」と声を揃えて一礼した。

「しかし同時に、君の功績も確かなものだ。間違いなく快挙だよ」

真由美ほど興奮していないものの、上機嫌な顔で摩利が称賛の環に加わった。

「はぁ、ありがとうございます」
「なんだ、張り合いのない。
今回の出場全選手上位独占という快挙に、エンジニアとしての君の腕が大きく貢献しているという点は、我々皆が認識を共有しているところだぞ」
摩利の言葉に、雫たちが真っ先に、大きく頷いた。
「自分でも信じられません」
「何だか急に魔法が上手くなったって錯覚しそうです」
雫ではなく、残る二人のコメントである。
雫は当然とばかりの表情で、うんうんとただ頷いている。
「特に北山さんの魔法については、大学の方から『インデックス』に正式採用するかもしれないとの打診が来ています」
しかし、後に続いた鈴音の言葉に、真由美は目を見開き、摩利は絶句し、雫は硬直した。
『インデックス』の正式名称は、『国立魔法大学編纂・魔法大全・固有名称インデックス』。
国立魔法大学が作成している魔法の百科事典に収録された魔法の固有名称の一覧表のことであり、ここに採用されるということは、大学が正式に認めた新種魔法として『魔法大全』に収録されるということを意味する。
これは魔法の開発に従事する国内の研究者にとって、一つの目標とされている名誉なのである。
「そうですか。開発者名の問合せには北山さんの名前を回答しておいて下さい」
「そんな！？　ダメだよ！」
余り興味無さそうに返した達也に、雫が大慌てで詰め寄った。
「あれは達也さんのオリジナルなのに！」
「……新種魔法の開発者名に最初の使用者が登録されるのはよくある事だぞ？」
暴れ馬でも宥めているような仕草で雫から距離をとりながら、達

也は尚も低いテンションで抗弁した。
「フム……謙遜も行き過ぎると嫌味だぞ？」
少し興醒めした表情で摩利に窘められると、達也は不本意とばかり頭を振った。
「謙遜ではありません」
「では何だ？」
「俺は、自分の名前が開発者として登録された魔法を、実際には自分で使えないなどという恥を曝したくないだけです」
確かに、新種魔法の開発者として名前が知られれば、その実演を求められることが多い。
自分で開発した魔法なのに「使えません」では、他人が開発した魔法を横取りしたという疑いを掛けられることもあり得る。
達也が忌避するのも、故無き事ではないのだが……
「……自分が使えない魔法を、どうやって作動確認したんだ？」
理論だけで魔法を組み上げることができるとすれば規格外が過ぎるが、仮にそれが可能だったとしても、実際に作動を検証していない魔法を他人に使わせるのはリスクを無視したマッドサイエンティストの行為であり、著しくモラルに反する。
「全く使えない訳ではありませんよ。
ただ発動するまでに時間がかかり過ぎて、『使える』というレベルじゃないということです」
「まあまあ、摩利も達也くんも、今はそんなことで口論しなくていいじゃない」
達也の受け答えが段々投げ遣りになってきたのを見て、真由美が二人の間に割って入った。
「せっかく幸先の良いスタートを切ったんだし。
達也くん、この調子で他の競技も頼むわよ」
笑顔で彼の肩を叩く真由美に向けて、達也は控え目に頭を下げた。

◇◆◇◆◇◆◇

第一高校スピード・シューティング一年生女子チームの成績は、他校でも波紋を呼んでいた。

特に「今年こそは覇権奪取」の意気込みで九校戦に乗り込み、女子バトル・ボードの思わぬアクシデントで「気の毒だが、これはチャンス」と盛り上がっていた第三高校では過剰とも見える程の反響があった。

「じゃあ将輝、一高のアレは、彼女たちの個人技能によるものではないってことか？」

二十人――三高新人戦選手の全員――の輪の中で、一条将輝は集まった視線の全てに向けて頷きを返した。

「確かに、優勝した北山って子の魔法力は卓越していた。あれなら優勝するのも納得できる。

だが他の二人は、それほど飛び抜けて優れているという感じは受けなかった。

魔法力だけなら、二位、三位まで独占されるという結果にはならなかったはずだ」

「それに、バトル・ボードは今のところウチが優位なんだし、一高のレベルが今年の一年だけ特に高いとも思えないよ」

ここまでのバトル・ボードの成績は、三高男子が二名出場していずれも予選突破、女子も二名出場して一名予選突破。

これに対して一高は、男子が三名全てレースを終えて一名が予選突破、女子は一名が出場して予選突破となっている。

「ジョージの言う通りだ。

選手のレベルでは負けていない。

とすれば、選手のレベル以外の要因がある」

「一条君、吉祥寺君、それって……何だと思う？」

スピード・シューティングの準決勝、三位決定戦で一高に連敗した女子選手の問いに、将輝と吉祥寺はアイ・コンタクトでお互いの意見が一致していることを確認した。

「エンジニア、だと思う」
回答は吉祥寺の口から告げられた。
「多分、女子のスピード・シューティングについたエンジニアが、相当な凄腕だったんじゃないかな」
「賛成だ。
ジョージ、あの優勝選手のデバイス……気がついたか？」
「ウン……あれは、汎用型だったね」
吉祥寺の答えは、彼ら二人以外の、三高の一年生に、大きな衝撃を与えた。
「そんな……だって、照準補助がついていましたよ？」
「そうよ！　小銃形態の汎用型デバイスなんて聞いたことないわ！」
「確かに。
どのメーカーのカタログでも、そんなの見たことないぜ？」
一斉に上がった反論に、将輝は益々顔を曇らせた。
「……確かに、市販はされていないだろう。
だが、照準補助と汎用型を一体化したデバイスの実例はある」
「マジかよ……」
将輝の言葉に、呆然とした声が上がる。
尚も「信じられない」というニュアンスが強かったが、吉祥寺がダメ押しを口にした。
「去年の夏にデュッセンドルフで発表された新技術だよ」
「去年の夏！？　最新技術じゃねえか！」
「ああ、俺も今回のことで調べ直してみるまで知らなかった」
「一条も知らなかったんじゃ、俺たちが知ってる訳ないよな……」
居心地の悪い沈黙が一年生の輪を覆った。
驚愕、不安、半信半疑、そして……畏怖の欠片。
「……吉祥寺君はよく知ってたわね。流石にあたしたちのブレーンだわ」
「うん……でも、デュッセンドルフで公表された試作品は、実用に耐えるレベルじゃなかったはずなんだ。

動作は鈍いし、精度は低いし、本当に『ただ繋げただけ』の、技術的な意味しかない実験品だったんだ」

「しかし今回、一高の北山選手が使ったデバイスは、特化型にも劣らぬ速度と精度と、系統の異なる起動式を処理するという汎用型の長所を兼ね備えたものだった。

それが全て、エンジニアの腕で実現しているのだとしたら……到底高校生のレベルじゃない。一種のバケモノだ」

「将輝、お前がそこまで言う相手かよ……」

「一人のエンジニアが全ての競技を担当することは物理的に不可能だけど……」

「そいつが担当する競技は、今後も苦戦を免れないだろう。少なくとも、デバイス面で二、三世代分のハンデを負っていると考えて臨むべきだ」

重苦しい沈黙が、将輝に応えた。

◇◆◇◆◇◆◇

ライバル校の主力選手から人外扱いを受けた達也は、その様なことなど露ほども知らず（当たり前だ）、少し遅い昼食を済ませた後、女子バトル・ボードのコースに来ていた。

午後に予定されているのは第四レースから第六レース。

ほのかの出走は、第六レース。

彼女との約束を守るだけなら、こんなに早く来る必要は無い。

「あっ、司波君、どうしたんですか？」

深雪と雫を引き連れた達也の姿を見て、あずさはチョコンと首を傾げた。木の実を抱えたリスを連想させる、小動物的な仕草で、達也は思わず頬を緩めてしまった。

「……いまバカにしませんでした？」

「滅相もない。

中条先輩の人徳に感心していたところです」

「……やっぱりバカにしていますね？」
ジト目で睨み付ける顔も、小さな子供が拗ねているようにしか見えなくて、達也は吹き出すのをこらえる為に目を逸らさなければならなかった。
「……いいです、別に」
しばらくそのまま達也を睨んでいたあずさだったが、やがてため息をつき、自分に言い聞かせるように呟いた。
おそらく彼女にとって、日常的な反応だったのだろう。
その姿には何処となく、哀愁が漂っていた。
放置するのが後ろめたくなる姿だった。
「――本当に、バカにしてなどおりませんよ」
「……本当に？」
「本当に」
「本当に本当ですか？」
「本当です」
疑わしそうに見上げる――身長差の所為で顔を上に向けても上目遣いになっている――あずさに、達也は力強く頷いて見せた。
その無駄に堂々とした態度に、あずさはようやく納得した（誤魔化された？）のか、笑顔を取り戻した。
「分かりました。司波くん、信じてますからね」
あずさがそう言って達也にニッコリ笑いかけた直後、彼の傍らでザワッと気配が揺らいだ。
達也には、目を向けなくても分かる。
深雪の眉がピクッと跳ね上がった様が、彼の脳裏にまじまじと浮かんだ。
（やれやれ……）
今晩はまた妹の機嫌を取らなければならないな、と心の中でため息をつきながら――その事を然程嫌がっていない達也は、精神的に少し病んでいるのかもしれない。
――それはともかくとして。

「それで、どうしたんですか？
光井さんのレースまで、まだ二時間以上ありますよ？」
「居心地が悪くなったので避難させてもらいに来ました」
「？」
再度首を傾げたあずさは、達也の隣で深雪が苦笑しているのに気づいた。
「……兄が気にし過ぎなんですよ」
目で問われ、「しょうがないですね」という口調で深雪が答える。
「やる気につながったんだから、結果オーライだと思うよ？」
その反対側で、雫が達也を慰めている。
「あ、ああ、そういうことですか……」
それだけで事情を察したあずさは、中々鋭いと言えるだろう。
雫たちの上位独占は、昼食時も賞賛の的になった。
幹部だけでなく、観戦していた本日オフの上級生達も、口々に雫たち三人を褒め称し、そのついで、という感もあったが、達也の功績に言及する者も少なくなかった。
その事に、男子スピード・シューティングチームが異常な対抗心を燃やしたのである。
それ自体は、雫も言っているように、寧ろ望ましいことだ。
気合が入って勝利に対する執着心が増せば、空回りにならない限り、プラスに働くだろう。
だが親の仇でも見るような目つきで睨まれる方としては、いい加減にしろよと言いたいところだった。
「一旦宿舎に戻ってもよかったんですが、折角ですから何かお手伝いすることがあれば、と思いまして」
「本当ですか！」
歓声を上げたのは、あずさではない。
何処で聞いていたのか、ほのかが選手用のスペースから突然飛び出してきたのだ。
「じゃあ、是非！　私のアシスタンスも看て下さい！」

飛びつかんばかりの勢いに笑いの衝動がこみ上げてきたが、達也は顔を引き締めて、ほのかを窘めた。
「こら、ほのか。その言い方は中条先輩に失礼だろう？」
今の態度、今の台詞は、あずさの腕に不満があると取られても仕方がない。
「えっ、あ、すみません！」
大慌てで頭を下げるほのか。
「気にしないで。そんなつもりじゃないのは分かっていますから」
あずさは苦笑いしながら首を振った。
微妙に口調がお姉さんっぽい。
今度は笑いの衝動を抑えるのに、少し苦労した達也だった。

◇◆◇◆◇◆◇

バトル・ボードの平均的な競技時間は一レース十五分。
しかし、ボードの上げ下ろしや水路の点検、魔法で損傷した箇所があればその修復など、レースの準備にはその倍以上の時間が掛かる。
そうした要因もあり、余裕時間を織り込んだ結果、バトル・ボードの競技スケジュールは一時間に一レースで組まれている。
予選六レースに六時間。（厳密には最終レース終了後の整備時間は無視できるから五時間十五分）
最終レースの開始は午後三時半。
長すぎる待機時間にテンションの調整が上手く行かず、実力を発揮できないまま終わってしまうということもあり得るのだが（実際に毎年、本戦男女、新人戦男女のいずれかでそういう例がある）、深雪や雫と井戸端会議に興じていたのがプラスに働いたのか、ほのかは上手い具合にコンセントレーションを高められたようだ。
達也に纏わりつくほのかの姿に段々と機嫌の勾配を傾けていった深雪が、ほのかを兄から引き離すようにしてどうでもいいような雑

談に引きずり込んだ、という次第なのだが、結果的に良い気分転換になったようだ。
ボード上に片膝をつくスタイルで、ほのかはスタートを待っている。
ＣＡＤは前腕部を覆う、幅を広くし厚みを薄くしているタイプで、面積が増えた分だけ操作用のボタンも大きくなっている物だ。
最初から言っている通り、達也はほのかのＣＡＤに手を加えていない。
一応システムを覗きはしたが、どうしても直さなければならないような箇所は無かった。
あずさとほのかの二人からアドバイスを請われて、達也が口を出したのは一点。
ほのかが着けている、濃い色のゴーグルは、彼が持って来た物だ。確かに随分西へ傾いて来た真夏の日差しは、直接向き合うと邪魔に感じる程度には眩しい。
しかしグラス面に付着した水飛沫が視界を遮るのを嫌って、ゴーグルやサングラスの類を使用する選手はほとんどいない。
あずさには視界を狭めるデメリットしかないように感じられたが、ほのかは迷わず達也の持って来たゴーグルを着用した。
「……そういえば光井さんは何故、光学系の起動式をあんなに沢山準備してるんでしょう？」
エンジニアが起動式の種類にまで口を出すのは稀なこと。
起動式のラインナップまで自分で決めてしまう達也は例外で、普通エンジニアは、選手の希望したとおりに起動式をＣＡＤへインストールする。
ほのかが光波振動系の幻影魔法を得意としていることは、あずさも選手プロフィールから知っていたが、この競技の性質上、幻影魔法の出番は無いのではないか、というのがあずさの正直な感想だった。
「バトル・ボードのルールでは、他の選手に魔法で干渉することは

禁じられています。
　但し、水面に干渉した結果、他の選手の妨害となることは禁止されていません」
「……どういうことでしょう？」
　重ねて問われた達也は、人の悪い笑顔を返したのみだった。

◇◆◇◆◇◆◇

　新人戦女子バトル・ボード、スタートの直後。
　観客はほぼ反射的に、揃って、水路から目を背けた。
　まるでフラッシュでも焚いた様に、水面が眩く発光したのだ。
　選手が一人、落水した。
　他の選手がバランスを崩し、加速を中断する中、一人ダッシュを決めた選手が先頭へ躍り出た。
　これある事を予期していたが如く――と言うか張本人なのだが――濃い色のゴーグルを着けた選手、つまりほのかだ。
「よし！」
　してやったり、と声を上げた達也の横顔を、あずさは呆気に取られて見上げていた。
「……これがお兄様の作戦ですか？」
　サングラスを外しながら問い掛ける深雪の声も、流石に呆れ声だった。（ちなみにサングラスは、スタート前に達也から三人に配られていた物だ。深雪たちは訳が分からぬまま、達也の指示に従って掛けているだけだった）
「……確かに、ルールには違反していないけど……」
　雫の声も、幾分非難混じり。
　これはフェアプレーの精神に反していると言われても仕方が無い、と感じているのだろう。
　しかし、著しくアンフェアなプレーがあった場合に示されるイエローフラッグ、競技中断の旗は振られていない。ルール違反選手の

失格を示すレッドフラッグは言うまでも無い。
大会委員は、ほのかの魔法を、達也の作戦を合法的と認めた、ということだ。
「……水面に光学系魔法を仕掛けるなんて、思ってもみませんでした」
どこまでも素直な性格なのか、あずさが感嘆と共に呟いた。
「水面に干渉と言われると、波を起こしたりとか渦を作ったりとか、水面の挙動にばかり意識が向きがちですが、ルールで許可されているのはあくまでも『魔法で水面に干渉して他の選手を妨害すること』ですからね。
水面を沸騰させるとか全面的に凍結させるとかは流石に危険過ぎますけど、目眩まし程度のことは今まで使われなかった方が不思議だと、俺は思っていますが」
何の心構えも無く目潰しを喰らわされて、すぐに視力を回復できるものでもない。
緩やかにではあっても蛇行しているコースは、視界を塞がれた状態で全力疾走できるものでもなく、ほのかと他の選手の間には既に決定的とも言えるだけの差がついていた。

◇◆◇◆◇◆◇

「……決まりだな」
「……誰が考えたの、この作戦？」
モニター越しに見ていた真由美たちは、モニターの方で光量の調節が行われたので眩しい思いをせずに済んだが、それだけに作戦の独創性を冷静に評価し、驚きを覚えていた。（冷静に驚く、というのも奇妙な表現ではあるのだが）
「司波君ですが」
「えっ、でも達也くんは、この競技を担当していないはずだけど」
「作戦の具申は光井さん本人からです。しかし起動式のラインナッ

プを含めて作戦プランを作ったのは司波君だと、その際に言っていました」

「……次から次へとやってくれるな」

摩利の口調からは、舌打ちが聞こえてきそうだった。

「どうしたの？　何か不機嫌みたいだけど」

真由美の問い掛けに、摩利は答えなかった。

もっとも、その沈黙自体が、摩利の内心を雄弁に物語るものではあったが。

「……工夫って大事よねぇ。老師の仰るとおりだわ」

真由美の見たところ、摩利は自分が思いつかなかった作戦を見せられて不機嫌になっているのだ。

多彩なテクニックを売りにしている摩利にとって、面白いことではないのだろう。

「過去九年、誰も思いつかなかった作戦ですから、ここは素直に感心すべき所かと」

「……感心しているさ。だから癪に障るんじゃないか」

鈴音にズバッと斬り込まれて、渋々、嫉妬していることを摩利は認めた。

認められるだけの度量があるから、鈴音も敢えて突っ込んだのだが。

「でも、これって一回限りの作戦じゃないかしら？

決勝トーナメントはどうするのかな？」

摩利に対するフォロー、でもないだろうが、真由美がそんな疑問を口にする。

しかし、

「心配は要らんだろ。あの男がそこまで考えていないはずはない」

「そうですね。これは次の試合の布石でもあります」

どうやら杞憂のようだった。

◇◆◇◆◇◆◇

「うーん……これは、ほのかに悪いことをしたかな……」
最初の奇策で稼いだリードを最後まで守りきってゴールしたほのかを見て、達也は少し苦い声で呟いた。
彼の隣では、深雪が眉目を曇らせて兄の顔を見上げている。
「……どうしたんですか？」
二人の様子に、何となく他人に聞かれるのが憚られる様な気がして、あずさは達也に、声を潜めて問い掛けた。
「あ、いえ……」
返って来たのは歯切れの悪い、言い訳の為の枕詞。
それでもそのまま黙殺するようなことは無かった。
「このレースは単純なスピードだけでも勝てたようですから……目眩ましなんて必要なかったかな、と」
「はあ……でも、最初の眩惑魔法でリードを奪えたのですから、作戦として成功しているのでは？」
達也たちが何を案じているのか分からないあずさは、再度首を捻った。
「ああいう目立つことをすると、他の選手からマークされるんですよね……」
「準決勝は三人一組のレースですから……次の試合で、一対二の戦いになってしまう虞がありますね」
達也の言葉を深雪が補完する。
それでようやく、あずさは彼らが何を心配しているのか理解した。
「何だ、そんなことですか」
そして達也たちの心配をあっけらかんと笑い飛ばした。
「そんなことって……かなり不利だと思いますが……？」
控え目に反論した深雪に向けて、あずさは朗らかに頭を振った。
「そんなこと無くたって、ウチは最初っからマークされてますよ」
「はぁ……」
あまりにも朗らかに言い切ったので、達也は一瞬、あずさが自慢

しているのかと勘違いしてしまった。
――まあ、一瞬だけのことだったが。
いくら鈍感といっても、慰められているのだ、ということが分からない程、鈍くは無かった。

◇◆◇◆◇◆◇

「勝ちました！　勝ちましたよ、達也さん！」
水路から上がるや否や、達也の所へ駆け寄って勝利を報告するほのかは、今にもピョンピョンと飛び跳ねそうな勢いだった。
「あ、ああ、見てたよ。おめでとう」
チームメイトばかりか他校のスタッフの視線まで集めている気がして、達也は祝福を送りながら両手を前に出して押し止めるような仕草で、ほのかを落ち着かせようとした。
しかし、それは逆効果だった。
「ありがとうございます！」
どんな風に勘違いしたのか、ほのかは目の前に差し出された達也の両手をガッシリと握り締めて、うるうると今にも嬉し涙を零しそうな潤んだ瞳で彼の顔を見詰めだしたのだ。
深雪でもここまでストレートな感情表現を示すことは余り無い。
この方面における経験値の絶対的な不足から棒立ちになってしまった達也を前に、ほのかは本当に泣き出してしまった。
「私、いつも本番に弱くて……運動会とか対抗戦とかこういう競技会で勝てたことってほとんど無いんです」
初耳だった。
もし本当なら、新人戦の戦略上エライ誤算につながりかねないところだ。
だが、途方に暮れた達也が右に左に目線を彷徨わせると、ほのかの背後で雫が指を揃えた掌をヒラヒラと左右に振っているのが見えた。

まるで「ソンナコトナイナイ」とツッコんでいるかの如く。
ほのかに両手を委ねたまま、雫へ視線を固定すると、彼女は達也へ向けて口だけ動かし始めた。
その唇の動きは「しょ・う・がっ・こ・う・の・こ・ろ・の・は・な・し・だ・よ」と読み取れた。
（小学校の頃の話、ねぇ……）
天を仰いで嘆息する達也。
「予選を突破できたのは、達也さんのお陰です！」
嘘をついているつもりはないのだろうが……少し思い込みが激し過ぎないだろうか。
深雪から向けられた氷柱（つらら）の視線（氷の、と表現するには、先端が鋭く尖っていたのだ）にもめげず、ほのかが落ち着きを取り戻すには暫しの時間が必要だった。

◇◆◇◆◇◆◇

運動競技でも盤面遊戯でもヤル気が無ければ勝利は覚束（おぼつか）ない。
それは魔法競技でも同じ。
チームメイトの活躍を見て「今度は自分が」と意気込むことは、ヤル気を生み出す基本的なシステムで、それゆえ勝利は士気を高める特効薬とされている、のだが。
時として、「ヤル気」は「気負い」につながり、「気負い」は容易に「空回り」へと直結する。
彼女たちの目の前に、その実例があった。
「森崎くんが準優勝したけど……」
「あとの二人は予選落ち、か……」
新人戦一日目が終了し、ミーティングルームに集まった一高の幹部三年生は、男子スピード・シューティングの順位表を前に、ため息を吐いた。
「男子と女子で逆の成績になっちゃったわね……」

「そうとも言えません。
三高は一位と四位ですから、女子で稼いだ貯金がまだ効いています。
あまり悲観し過ぎるのもどうかと」
「……そうだな。
市原の言う通り、悲観的になりすぎるのも良くない。
元々、女子の成績が出来過ぎだったんだ。
今日のところはリードを奪ったことで良しとしなければ」
「しかし、男子の不振は『早撃ち』だけではない。
『波乗り』でも予選通過女子二名に対して、男子一名だ」
自分自身に言い聞かせるような口調だった摩利の発言に対し、克人が険しい表情で異を唱えた。
（「早撃ち」はスピード・シューティング、「波乗り」はバトル・ボードの通称。アクセル・ボールは「アクセル」、アイス・ピラーズ・ブレイクは「棒倒し」、ミラージ・バットは「ミラージュ」、モノリス・コードは「モノリス」と略されることがある）
「このままズルズルと不振が続くようでは、今年は良くとも来年以降に差し障りがあるかもしれん」
「それは、負け癖が付くということか？」
「その虞があるだろう」
克人の指摘に、摩利も真由美も苦い顔で黙り込んだ。
魔法科高校のリーダーを自認し、常勝を自らに課している一高の幹部としては、「今年さえ良ければ」という安逸に甘んじることは出来ないのだ。
「男子の方は、梃入れが必要かも知れんな」
「しかし十文字、梃入れと言っても今更何が出来る？」
苦い声で呟いた克人に対する、摩利の反論。
確かに「今更」だ。
既に新人戦は始まっているのであり、今更選手もスタッフも入れ替えることは出来ない。

視線で回答を促されても、克人の再反論は無かった。
ただその佇まいは、答えに窮したと言うより、何か腹案があって今は敢えて黙っているという印象をもたらすものだった。

◇◆◇◆◇◆◇

例の犯罪組織が関っていると思しき妨害工作は、摩利の一件以来動きが無いが、達也としては気を抜くことは出来ない。
いよいよ明日は、いや、既に「今日」は、深雪の出番なのだから。
彼の推測が正しければ、「敵」がＣＡＤに細工を仕掛けるタイミングは競技の直前。
夜の内に妨害工作を受ける可能性は低いと見ているが、念を入れるに越したことはない。
相手は彼に手の内を読ませない、高いスキルを持っているのだ。
最終調整を終えたＣＡＤをシステム的に厳重ロックし、更に保管庫へ入れて三重に施錠し、達也はようやく作業車両を後にした。
人影はない。
人の気配も、人間以外の気配も感じられない。
敵にとっても、こちらの警戒は予想以上なのだろう。
風間やその配下、独立魔装大隊の精鋭が密かに協力してくれているのだから、例えその企てがあったとしても、直接的な攻撃は及ばないと考えて良い。
達也は不必要に彷徨き回ることなく、ホテルの通用口を通って（無論、バイオメトリクス認証が用いられている）、自分の部屋へ戻った。
彼のルームメイトは息をせぬ機材。
故にこの真夜中、彼が廊下にいる以上、中から人の気配が漏れてくるはずはない――のだが、達也は迷わずキーを開けて中に入った。
「こら、何時だと思っているんだ」
先手を打って叱りつける。

今日はいつもと違って、すこし厳しい声を出すことが出来た。
それだけいつもと違って、笑って済ませることが出来ない背景があるのだ。
いつもと違う、そのことを、叱責を受けた方も感じ取ったのだろう。
ビクッと身を竦ませて、深雪は恐る恐る、兄の顔色を窺った。
「睡眠不足は集中力を低下させる。いくらお前でも、思わぬミスが敗北につながらないとも限らないんだぞ」
「申し訳ありません！」
泣きそうな声で深々と頭を下げる。
妹のこんな声を聞くと、こんな姿を見ると、達也にはもう、厳しい態度をとり続けることは不可能だ。
「……分かれば良いんだ。
さあ、もう部屋へお帰り。送っていくから」
和らげられた声に力を得たのか、顔を上げた深雪は、眼差しで兄の言いつけを拒んだ。
「深雪？」
「……お兄様、少しだけ、本当に少しだけ、お時間をいただけませんか？」
「……少しだけだよ」
意地の張り合いは時間の浪費にしかならない。
経験のもたらす智恵で早々に諦めをつけた達也は、消極的な肯定で妹に先を促した。
「……雫に聞きました。
お兄様、『インデックス』にお名前を連ねる名誉を、断られたそうですね」
「正式に、ではないがな」
「正式のお話があっても、お断りになるおつもりでしょう？」
「ああ」
短く首肯した達也を前にして、深雪は、何かに耐えるように、唇

を噛んで、暫し、立ちつくした。
「……それは、叔母上のご意向を汲んでのことですか？」
「ああ」
短い、即答。
深雪は、泣き出すのをこらえているような顔で、俯いた。
「……魔法大学の調査力は極めて高い。ニュースサイトという名のゴシップサイトを運営している、そこらの報道機関など比べものにならない。あるいは、軍の諜報機関に匹敵するかも知れない。
新魔法の開発者には大学の資料を利用する上で様々な特権が与えられる関係で、その身元を詳細に調べ上げられる。敵性国家群のスパイや、テロ組織を排除する為にね。
高校の入学審査とは桁が違う調査だ。
四葉が念入りに情報をブロックしている『シルバー』ならともかく、『司波達也』では四葉とのつながりを暴き出される可能性が低くない」
「……」
「確かに、九校戦に出るだけでも、身元が調べられてしまうリスクはゼロじゃない。
しかし、魔法大全に名を残すとなれば、高校の競技会で活躍するのとは訳が違う。
四葉の『ガーディアン』はあくまでも日陰の存在。
日陰者が脚光を浴びるのを、あの叔母上が、『夜の女王』が容認すると思うかい？」
深雪は何も答えない。
気休めすらも、口に出来ない。
それが、彼の問い掛けに対する答えだった。
「……今はまだ、力が足りない。
今の俺では、四葉真夜を倒すことは出来ても、四葉を屈服させることは出来ない。
武力だけでは、暴力だけでは、不十分だ。

叔母上を退けても、別の、もっと質の悪い操り手が姿を見せるだけだ。

今は、従うしかない」

妹に言い聞かせる台詞、というより、自分に言い聞かせる台詞。

そうやって自分を納得させた達也に、

「！？」

深雪は、正面から抱きついた。

彼の胸に、泣き出しそうな顔を埋める。

その姿は「しがみついた」と表現する方が相応しくも見えた。

「……わたしは味方ですから」

「深雪……」

「わたしはいつまでもお兄様の味方ですから。

その時はきっと、やって来ます。

必ず、やって来ます。

その時まで、その後も、わたしはずっと、お兄様の味方ですから」

「……」

時計の針は「少しだけ」を大幅に超過している。

だが「もう少しだけ」妹の好きにさせてやろう……深雪の背中に優しく手を回して、達也はそう、思った。

2－（15）　新人戦～氷炎～（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

2－（15）　新人戦～氷炎～

九校戦五日目、新人戦二日目。
氷柱倒し（アイス・ピラーズ・ブレイク、日本語名称は「ひょうちゅうたおし」。「つららたおし」ではない）は一見、アラスカとかシベリアとかスカンジナビアとかの極寒地方を持つ国で考案された競技と思われがちだが、実はこの日本が発祥地である。
一日目は一回戦十二試合、二回戦六試合、男女合わせて三十六試合が行われ、使用される氷は八百六十四本、千七百二十八立方メートル。
これだけの製氷能力を確保する為には余程強力な冷凍装置が無ければならず、自然環境より電機技術が進んでいることが必要だ。
また、それだけ大量の水も当然必要となる。（無論、水については大部分再利用されるのだが）
潤沢な水資源と先進電機技術。
この競技が日本で生まれた所以だ。
野戦工作用の特殊車両が大型の機械アームで一メートル×一メートル×二メートルの氷の柱を等間隔に並べていく。
こういう光景を間近に見ると、前世紀のロボットアニメが現実のものとなる日もそんなに遠いことではないという気になってくる。
「……効率性を無視すれば、だけどね」
「お兄様？　何のことでしょうか？」
馬鹿げた空想を否定する為の言葉が、つい独り言になって洩れていたらしい。
「いや、何でもないんだ」
意味の無い回答に対する再度の質問は無かった。
「そろそろ行こうか」
「はい」
元々試合に向かう途中で少し足を止めただけのこと。

達也は深雪を促して、「櫓」の根元に隣接する控え室へと向かった。

◇◆◇◆◇◆◇

今日最初の試合となる一回戦第一試合の開始まで、まだ三十分以上ある。

達也は十分に余裕を持って会場入りした――はずだった、

「おはようございます！」

……のだが、そこには既に、第一試合の出場選手が来ていた。

「おはよう……ごめん、待たせてしまって」

「いえいえ、私が早過ぎたんですから」

女子ピラーズ・ブレイク第一試合の選手、明智英美（あけち・えいみ）は笑顔で首を振って、顔に掛かった、ルビーのような光沢の赤い髪を、片手でかき上げた。

「おはよう、エイミィ。早いわね？」

「おはよう、深雪。

何か、目覚まし鳴る前に目が覚めちゃって。

昨日の興奮が抜けてないみたい」

彼女のもう一つの名前はアメリア＝ゴールディ。フルネームで英美＝アメリア＝ゴールディ＝明智。英美はイングランド系のクォーターなのだ。

エイミィという愛称は、「英美（エイミ）」という日本名より寧ろ、「アメリア」という英国名に由来している。

魔法師としての能力は遺伝的素質に大きく左右される。

魔法が国力と強く結びつくにつれて、各国は魔法師の血を囲い込み、公然あるいは非公然と魔法師の国際結婚を禁止するようになった（表向き婚姻の自由を標榜するこの国では「非公然」である）。

しかし達也たちの祖父母の世代では、「優秀な血」の「交配」によって、より優れた魔法師を「開発」するという目的から、同盟国

間で魔法師の国際結婚が奨励された時代がある。
その結果、魔法科高校には全高校の平均を上回る比率で、西欧系及びインド系の血統を持つ生徒が在籍している。
レオもその一人。そしてこの明智英美という女子生徒もその内の一人だ。
本人の台詞からも分かるとおり、彼女は昨日のスピード・シューティングにも出場しており、達也と組むのも二日連続。深雪たち三人を除けば女子チームの中で最も早く達也に打ち解けたのは彼女であり、達也にとっても気分的に楽な相手だった。
二人が挨拶代わりの軽口を交換する傍らで、達也は手に提げて来たケースからＣＡＤをテキパキと取り出し、ざっと外回りをチェックしてから英美に手渡した。
少女の手には些か不似合いな、全長五十センチの無骨なショットガン形態・特化型ＣＡＤ。
反動を考慮しなくて良い分、実弾銃に比べ大幅に素材の軽量化が図られているとはいえ、拳銃形態の物に比べれば見た目に応じた重量を有するそれを、英美はウェスタンムービーよろしくクルクルと振り回し、窓の外へ向けてピタリと構えを取った。
「……エイミィ、貴女本当は、イングランド系じゃなくてステイツ系でしょう？」
「違うって何度も言ってるのに、深雪までそんなこと言うの？　グラン・マの実家はテューダー朝以来『サー』の称号を許されているんですからね」
台詞の内容に反して、口調は気さくそのものだ。
そのままのポーズでＣＡＤにサイオンを流す。
何時の間にセイフティを解除したのか、森崎のクイック・ドロウとはまた別の意味で、鮮やかなＣＡＤアクションである。
「どうかな？」
「うーん……雫の気持ちが分かりますねぇ」
大富豪・北山家の令嬢が達也を「お抱え」にしようとアプローチ

していることは、一年女子チームの間に知れ渡っている。
「問題ない？」
「ええ、バッチリです」
構えを解いてニコッと笑う英美。
髪の色と瞳の色以外は日本人の血が色濃く表れている彼女の外見は、同級生より寧ろ子供っぽい印象がある。
今の笑みも「ニコッ」というより「にぱっ」という効果音をつけたくなるような無邪気なものだった。
「……自分じゃ気づかないのか……」
「？」
その笑みは達也の独り言に首を傾げている間も消え去ることは無かった。
「少し調整するよ。
ヘッドセットをつけてくれる？」
「えっ、何故です？」
「エイミィ、君、実は早起きしたんじゃなくて、昨日あまり眠れてないでしょ？」
しかしこの思わぬ指摘には、流石に笑っていられなかったようだ。
「……分かります？」
目を丸めた質問に達也は無言で頷きを返し、英美の手からＣＡＤを受け取って調整機にセットした。
「……ウチの親より鋭いかも」
素直に測定用のヘッドセットを着けた英美は、「まいったなぁ」と言いたげな口調で呟きながらセンサーパッドに両手を置いた。
計測数値が次々と並ぶディスプレイを見ながら、達也の表情は徐々に険しいものになっていく。
そして達也の表情の変化とともに、英美の身体が徐々に縮こまっている様に、深雪には見えた。
「……あの、お兄様？」
具体的な指摘は何も無かったが、達也はその声にハッと顔を上げ

て、愛想笑いしながら眉間を指で揉み解した。
「……もしかしてエイミィも、サウンドスリーパーを使わない人かい？」
「もっ、て、司波君も？」
幾分和らいだ表情で達也は頷く。
「ワァオ、お仲間♪
あれって何か、気持ち悪いじゃないですか。妙なウェーブが出てて」
「一応健康に害は無いことになっているけど……気持ち悪いのは同感。
だけどどうしても眠れない時はまた別の話だよ。
特に、次の日に試合を控えているような場合は」
「は～い」
親に叱られている子供のような返事に、達也は苦笑するしかなかった。
「じゃあ、フィードバックを少し強めにしておくから……刺激が強いように感じるかもしれないけど、我慢すること。
寝不足で負けたなんて言われたくないだろ？」
「我慢するからお願いします！
そんなことになったら、みんなのオモチャにされちゃうよ」
台詞だけなら大した意味は無かったが、そう言いながら顔を赤らめてスラックスの上から微妙な辺りを手で押さえたりしているものだから、達也はたっぷり一秒、ピシリと固まってしまった。
「……疑うようなことは言いたくないが、深雪……お前たちは部屋で何をしているんだ？」
「い、嫌ですね、お兄様、深雪は何も疚しいことなどしておりませんよ！」
「そっか～、深雪の部屋は安全地帯なのね」
「エイミィ！　お兄様の前で変な事を言わないで！！」
居心地の悪い沈黙がステップを踏んで控え室を一周した。

「……あ～、幸い競技は朝一番だし、試合が終わったら二回戦まで仮眠を取ること。深雪、悪いけど、『カプセル』が使えるように手配してきてくれないか」

「分かりました。すぐに戻って参りますので」

感覚遮断カプセル（完全防音、防振、遮光の閉鎖型ベッド）を借りる為の手続に深雪を送り出して、達也はＣＡＤの微調整を始めた。

◇◆◇◆◇◆◇

第一試合は些かドーピング気味ではあったが、残り三本で何とか勝ち抜いた。

ちなみにその反動で、英美は今、「暗いよ～」とか「狭いよ～」とかごねる暇も無く熟睡に近い眠りについている。

そして第五試合、一高女子にとっては二試合目が始まる前の控え室。

（同じようなことをつい最近、口にした記憶があるぞ）

達也はそう思いながら、やはり、そう言うのを止められなかった。

「雫……本当にその格好で出るのか？」

「そうだけど？」

何かおかしい？　という表情で問い返されて、達也は頭を抱えたくなった。

ピラーズ・ブレイクは高さ四メートルの櫓の上から十二メートル四方の自陣に配置された氷柱十二本を守りながら、十二メートル四方の敵陣の氷柱十二本を先に倒す、あるいは破壊するという競技である。

選手は純粋に遠隔魔法のみで競い、肉体を使う必要は全く無い。

それはつまり、この競技に選手の服装は一切影響しないということだ。（ＣＡＤを構えるのに邪魔になる、とかいう服装は論外だが）

ルール上も服装に対する規制は唯一つ、「公序良俗に反しないこと」。

その結果、必然的に――とは思いたくないが、何時の頃からか女子のピラーズ・ブレイクはファッション・ショーの様相を呈していた。

ちなみに花音は私服とほとんど変わらないスポーツウェア。丈の短いスパッツと、それがスッポリ隠れてまるでミニワンピのように見えるシャツと、太ももまであるニーハイ・ソックスにスニーカーだった。

英美は白のハイネックシャツに赤いライディングジャケット、白い細身のスラックスに黒のロングブーツ、同じく黒のホースキャップという乗馬服スタイル。

しかしまあ、ここまでは良くあるコスチュームで、それほど派手な部類でもない。

だが、雫の衣装は……

「なあ、雫……」

「なに？」

「その振袖……邪魔にならないか？」

そう。

問答無用で「振袖」だった。

「大丈夫だよ。

袖は小さめだし、襷を使うから」

そう言って、達也の見ている前で器用に襷を掛ける雫。

その淀みの無い仕草を見ていると、彼女が和装に慣れているということが分かる。

しかし――

（襷で袂を抑えなきゃならんのなら、最初から振袖は止めた方がいいんじゃないか？）

やはり達也は心の中で、そうツッコまずにはいられなかった。

試合前にそうそう余分な時間が取れるはずも無く、達也はすぐに説得を諦めた。――気合を入れる為に「正装」したのだ、と言われ

れば、引っ込むしかなかったのである。
雫が選択した――というか、達也が彼女に持たせたCADは汎用型。
これは攻守にバランス良く力を配分した戦術を取ることを意味している。
達也も奇策ばかり使う訳ではない。
と言うか、達也本人には「奇策」を弄しているという意識はないのだ。
彼としては、プレーヤーにとって最適の道具と、それを活かす作戦を提供しているだけなのだ。
故に正攻法が最も効果的な場合は迷わず正攻法を採用する。
今回がそれだった。
雫がステージに姿を見せると、その奇抜なスタイル故か、観客席がどよめいた。
しかし本人は何処吹く風とばかり平気な顔で、襷によって露わになった左腕を胸の前に持ち上げた。
雫のCADは普段使っているものと同じく、コンソールが腕の内側を向いているタイプ。
最近では女性魔法師もコンソールが外向きのタイプを主流としている中で、フェミニンなコンソール内向きタイプを愛用しているのは、流石にお嬢様と言うべきか。
普段の無口無表情から時折容赦のないツッコミを繰り出している姿からは、正直違和感を覚えるが。
そんな、本人に聞かれたら無言で殴られそうな感想を頭の片隅に抱きながら、達也もモニター機器のピントを合わせた。
これからの時間は、
フィールドに集中するのが、雫の役目。
その彼女に集中するのが、達也の役目だ。

◇◆◇◆◇◆◇

「深雪……達也さんの所に行かないの？」
一般観客席ではなく、選手・スタッフ用の観戦席で試合開始を待っている深雪に、隣からほのかが問い掛けた。
一回戦の英美の試合でも、達也がモニター室に上がる直前、深雪は彼と別れている。
同じ学校の選手なら、モニター室から応援してもおかしくはないのだが――
「ピラーズ・ブレイクは個人戦ですもの。わたしと雫はいずれ対戦することになるのだから、手の内を盗み見るのはアンフェアでしょう？」
手の内ならば、練習中にいくらでも見る機会があったはずだ。第一高校といえど、この競技の練習に使える大規模施設をいくつも持っている訳ではないのだから。
だから深雪が本当に言いたいのは、別のことだ。
いずれ自分と対戦する選手のサポートに、達也が余計なことに気を取られないように、という配慮なのだろう。
また雫が、彼女の存在に気を取られないように、という配慮でもあるのだろう。
ほのかと雫は小学校時代からの親友でありライバルだ。
中学時代まで、ほのかにとっての最高の好敵手は雫であり、雫にとっての最高の好敵手はほのかだった。
二人に比肩し得る魔法の才能を持つ子供は、彼女たちのコミュニティに存在しなかった。
高校に入って、本格的に魔法を学ぶことになって、お互い以外の切磋琢磨するライバルが得られることを、ほのかも雫も望んでいた。
だが同時に、自分たち以上の才能には巡り会えないのではないかという思いも心の片隅に棲みついていた。
同じ学校、同じ塾に十師族の子供はいなかったが、「数字付き」の百家の子弟とは何人か知り合った。

その中にも、好敵手と呼べる同級生はいなかった。
しかし、そんな彼女たちの「思い上がり」は、高校の入学試験で、粉々に打ち砕かれた。
今、隣にいる、この美し過ぎる少女によって。
定期試験におけるほのかの実技成績は、深雪、雫、森崎に続いて四番目だが、ほのかとしては、雫はともかく森崎に劣っているという意識はない。
高校最初の定期試験の課題になったのは十工程の単純な術式だった。（十工程の術式を「単純」と言えるのは、ほのかの才能あってのことだが）
処理に負荷が掛からなかった分、単純なスピードで森崎に後れを取っただけで、もっと工程数の多い複雑な術式ならば自分の方が明らかに上だと、ほのかは考えている。
しかし深雪は、「別格」だった。
嫉妬することすらもバカバカしくなるほどの、圧倒的な才能、そして実力。
彼女が十師族直系と言われても、自分は素直に信じるだろう。
寧ろそれが当然と思うだろう。
――入学試験の会場で、深雪の魔法を最初に見たとき、ほのかはそう思った。
ほのかは、それと知らず真実に到達していた訳だが、それ程に深雪の魔法は衝撃的で圧倒的だった。
その印象は入学してから四ヶ月、一向に薄れることはなく、寧ろ益々強まっている。
いくらマイペースな雫でも、間近に深雪を感じていつも通りの魔法は使えないだろうな、とほのかは思う。
深雪が本戦のミラージ・バットに回って直接対戦することが無くなったと聞いて、自分は思わず胸を撫で下ろしたくらいなのだから。
入学試験の時のことを思い出して、連鎖的に、ほのかは「彼」を初めて見た時のことも思い出していた。

ほのかが達也を意識したきっかけは、実は、あのオリエンテーションの日のトラブルではなかった。
入学試験の日、深雪だけでなく、達也も偶々、ほのかと同じ試験グループだった。
この兄妹の外見はそれ程、似ていない。
全員の名前を記憶する程、ほのかにも余裕はなかった。
だから達也に目を留めたのは、深雪の兄だから、ではない。
実技の結果は平凡なものだった。
スピードも、威力も、規模も、いずれも見るべき所は無く、平均より寧ろ下。
だが、彼の魔法は、美しかった。
ほのかは達也のように、魔法式を解析出来る訳ではない。
美月のように、サイオンやプシオンに対する特別鋭敏な感覚を持っている訳でもない。
ただ光波振動系統を得意とするほのかは、一般の魔法師に比べて、魔法行使の副作用で生じる光波のノイズに敏感だった。
余分な魔法力、魔法式の無駄が余剰サイオン波となって空間を震わせ、光子がそれに反応して生じる光波のノイズ。
そのノイズが、彼の魔法からは全く感じられなかったのだ。
その意味するところは、一切の無駄がない魔法式。魔法力を全て事象改変に使い切った、計算され尽くした精緻な魔法。
それをほのかは、美しいと思った。
今までに見たことのない、美しい魔法だと感じた。
その後、深雪の圧倒的な魔法を見せられても尚、忘れられない程に。
だからあのオリエンテーションの日、左胸に八枚花弁のエンブレムをつけていない達也を見て、ほのかは裏切られた、と感じた。
あの日、ほのかが達也たちに過剰な敵意を抱いてしまったのは、その所為だった。

――何故貴方はそちら（二科生）側にいるのか！？

――何故貴方はこちら（一科生）側にいないのか！？

そういう理不尽な怒りをほのかは抱いてしまったのだ。

確かにスピードも威力も規模も、（一科生としての）合格ラインには程遠かった。

でも、あれほど美しい魔法を編み上げる「彼」が「ウィード」に甘んじているなど、許し難い背信に思えたのだ。

「……ほのか、どうしたの？」

ハッと顔を横へ向けると、不思議そうに――不審そうに、深雪が自分を見ていた。

会話の途中で考え事に耽ってしまった自分のことを、ヘンに思ったのだろう。

「ご、ゴメン、何でもない」

そんなことをされれば、自分でも訝しむだろう。

今の自分の行いと、あの時の自分の「逆ギレ」と、それが「彼」のことを意識していた所為だったという三重の理由で、ほのかは赤面して俯いた。

◇◆◇◆◇◆◇

「いよいよ北山の出番か」

「今度は普通のＣＡＤみたいね」

本部のモニターの前でまたしても、女子の幹部二人が雁首を揃えているのを見て、次々と舞い込んでくる試合結果の纏め上げに忙しい鈴音はため息をついた。

だがこれ見よがしな不満の表明にも、二人は全く動こうとしなかった。

「今度はどんな奇策を見せてくれるかしら？」

「いや、分からんぞ？
そう思ってるあたしたちの裏をかいて、正攻法で来るかも知れん」
真由美と摩利は、お気に入りのビデオプログラムに群がる子供のような目で拡大表示された大型モニターを見ている。
鈴音は諦めて、もう一度ため息をつき、手伝ってくれる者の無い仕事へ戻った。
真由美も摩利も、雫の衣装には眉一つ動かしていない。
九校戦三回目の彼女たちにとっては、振袖などそれ程奇抜なコスチュームではないからだ。
寧ろ「あら、今年は少ないのね？」程度のもの。
まあ、だからこそ、九校戦を毎年観戦に来ていた雫が、特に恥ずかしがることもなくこの衣装を選んだのだろうが。
「おっ、始まるな」
二人は心持ち、ディスプレイに顔を近づけた。

◇◆◇◆◇◆◇

フィールドの両サイドに立つポールに赤い光が灯った。
光の色が黄色に変わり、更に青へと変わった瞬間、
雫の指が、コンソールを舞った。
自陣十二本の氷の柱。
その全てを対象として、魔法式が投射される。
一拍遅れで相手選手の魔法式が雫の陣内に襲い掛かった。
移動系統の魔法で敵陣の氷柱を倒すポピュラーな戦術。
だが、対戦相手の魔法は、雫の氷柱を僅かに揺らしただけだった。

◇◆◇◆◇◆◇

「ほう、情報強化か」
各校本部のモニターは、発動中の魔法を解析してその種類と強度

をサーモグラフ映像の様に色で表示するオプションを備えている。
その機能が、今の攻防の詳細を教えていた。
情報強化。
対象物の現在の状態を記録する情報体であるエイドスの、一部又は全部を魔法式にコピーして投射することにより、対象物の持つエイドスの可変性を抑制する対抗魔法。属性の一部をコピーした情報強化は、その属性に対する魔法による改変を阻止する機能を持つ。
モニターの映像は、敵校の選手が放った移動魔法が、位置情報、つまり「そこにある」という属性を強化した雫の魔法によって、無効化された様子を映し出していた。
「これはまた、随分と正攻法だな」
「摩利の予想が的中したのかな？」
その会話を聞いていた鈴音が「別に、貴女方の裏をかく目的で作戦を考えた訳では無いと思いますが……」と、心の中でツッコんだが、観戦に夢中な二人には当然、届かなかった。
「もっとも、北山さんのように干渉力が特に強い魔法師なら、情報強化より広域干渉を使うのが『正攻法』だと思うけど」
「昨日から見ている限り、北山はキャパシティもなかなかのものだ。エイドスの複写が苦になる、ということもないだろう。
それに特定の系統を妨害するなら、広域干渉よりも情報強化の方が効率的だしな」
画面の中では、再び移動系魔法を仕掛けた相手校の攻撃が、最初と同じように無効化されていた。
そして攻撃の魔法が不発となった一瞬の間隙、
敵陣の氷柱が続けざまに三本、粉々に砕け散った。
「……今のは何だ？
真由美、見えたか？」
訝しげに問い掛けて来た摩利に向けて、真由美は少し自信なさげな顔を向けた。
「モニター越しでは推測にしかならないけど……」

ほぼリアルタイムで分析画像が表示されるといっても、その場で直に魔法を感じ取るのとは、やはり訳が違う。
「多分、『共鳴』の応用だと思うわ」
間接的に仕掛けられた魔法は、対象物に魔法の効果が表示されない為、周囲の映像から使われた魔法を推測しなければならない。
「周波数を無段階に変更する振動魔法を敵陣の地面に仕掛けて、ピラーと共鳴が生じたところで振動数を固定、一気に出力を上げて共振を作り出したんじゃないかしら」
「なるほどな……対抗魔法を避ける為に、ピラーに直接魔法を仕掛けるのではなく、地面を媒体に使ったか。
同じ地面媒体でも、力任せな花音の『地雷原』に比べて、高度に技巧的な術式だ。
どっちが上級生か分からんな」
「共鳴点を探るのに時間が掛かるから、情報強化でその時間を稼いでいるのね。
振動数の操作はお手の物、ということかしら？」
「そうだな」
真由美と摩利が共通に思い出しているのは、服部を破った達也の無系統魔法、サイオン波の振動数を緻密に制御して合成波を作り出したあの技術だった。
モニターの中で展開されている技巧は、雫の個人的なテクニックというより、達也のアレンジによるものという性格が強いことを、二人は疑っていなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

（流石に雫はキチンと仕上げてきてるな……）
選手の状態を監視するモニターを見ながら、達也は無言で頷いていた。
既に敵陣は氷柱四本となっている。

こちらはまだ、十二本とも健在だ。
モニターのバイオリズム曲線は、軽い疲労状態を示しているだけで、魔法の行使には全く影響しないレベルを保っている。
英美のように寝不足で体調を崩しているというような兆候は全く無い。
そして『情報強化』も『共鳴』も、練習と同様、否、それ以上にスムーズに発動している。
真由美たちの推測は、半分当たりで半分外れ、だった。
『共鳴』は雫の母親が得意としていた魔法で、雫も達也と組む前から高校生にしては高いレベルで使いこなしていた。
ただ本来の『共鳴』は、対象物に無段階で振動数を上げていく魔法を直接掛けて、固有振動数に一致した時点、「振動させる」という事象改変に対する抵抗が最も小さくなった時点で振動数を固定し、対象物を振動破壊するという二段階の魔法だ。
対象物に直接振動魔法を掛ける場合は、魔法式の干渉に対するエイドスの抵抗で感覚的に共鳴点を探ることが出来るが、間接的に仕掛ける場合は対象物の共振を別に観測しなければならない。
それを観測機械に頼るのではなく、魔法の工程として起動式に組み込んだのが達也の工夫した部分だった。
自分が慣れ親しんだ魔法に新たな工程を追加したこの『共鳴』の派生術式を、雫は良く使いこなしている。学校の練習時間だけでなく、学校外でも自分一人で相当練習を積んだことが窺われる熟達ぶりだった。
敵陣の氷柱が一本砕けるのと同時に、自陣の氷柱が一本倒された。
だがそれは、相手の「最後の悪足掻き」に過ぎないことが達也の目には一目瞭然だった。
相手選手は、今の攻撃に魔法力の全てを注ぎ込んでいる。
おそらく敗北は免れないと認め、一本も倒せずに終わる完敗だけは避けようと考えたのだろう。
モニターではなく、自分の眼で雫の背中を観察する。

彼女の放つサイオン波に乱れは無い。
動揺も気負いもなく、今まで通り自陣の氷柱を守り、敵陣の氷柱に攻撃を仕掛けている。
元々完全勝利などという変な欲目は持っていないのだろう。
見ていて安心できる戦い振りだ。
そして全力を放出した直後の敵選手に、意味のある抵抗が出来ようはずもなく。
残り三本となっていた敵陣の氷柱は、砂の城が波にさらわれるが如く、脆く崩れ去った。

◇◆◇◆◇◆◇

深雪の試合は、一回戦の最終ゲーム。
朝から考えれば長い待ち時間だが、間に昼食の時間が入るので、本人もそれ程待たされたという感覚は無いだろう。
達也はといえば、朝からこれで三試合目なので「待つ」どころではなかった。
選手の控え室には深雪と達也。
ほのかと雫の姿はない。
昼食時に観客席で応援する、と言っていたから、今頃はエリカたちと合流しているだろう。
その代わりに、という訳でもないだろうが、五十里と花音と、そして真由美と摩利まで応援に来ていた。
（大応援団だな……）
呆れ混じりに心の中で呟いた達也だったが、口にしたのは無論、別の台詞だ。
「応援に来ていただけるのは嬉しいのですが……委員長、寝てなくて大丈夫なんですか？」
「何だ、君まであたしのことを重病人扱いするのか？
飛んだり跳ねたりするのではないのだから、問題ない」

いや、一応重傷です、という台詞は呑み込んだ。
「はぁ……
会長は、本部に詰めていなくても宜しいので？
確か男子の方も、試合中だと思いますが」
「大丈夫よ。
向こうははんぞーくんに任せてきたから。
私も再来月には引退だし、何でも私一人でやっちゃうのは良くないと思うのよね」
正論である、が、どうにも白々しく聞こえる。
だが、彼女たちが競技の邪魔をするはずもないし、これ以上の問答は無益で寧ろ有害だった。
「深雪、頼もしい応援団だが、逆に緊張し過ぎるなよ」
プッ、と小さく吹き出す音が聞こえたが、達也は無視した。
多分、過保護だなぁ、とか思われたのだろうが、達也にとって妹はいつまで経っても妹（のはず）なのだ。
「大丈夫です。お兄様がついていて下さるのですから」
そして、全幅の信頼を込めて兄を見上げる深雪の耳には、そのような雑音など届くはずもなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

深雪がステージに上がると、観客席が大きくどよめいた。
「そりゃあ、驚くよね、あれは……」
「でも似合ってるよ。花音はそう思わないの？」
「似合い過ぎて驚くって言ってるの」
花音と五十里の会話をＢＧＭとして聞き流しながら、達也はテキパキとモニターの準備を進める。
瞬く間に準備を終わらせて、深雪に目を向け、何をそんなに驚くのだろうと、ふと、思った。
深雪の衣装は白の単衣に緋色の女袴。長い髪を白いリボンで纏め

たスタイル。
そう、髪の纏め方が厳密には異なるが、ＣＡＤの代わりに榊か鈴を持たせると更に絵になる、あの格好だ。
ただでさえ整いすぎている美貌が、その衣装と相まって、神懸かった雰囲気さえ醸し出している。
いや、神懸かりを通り越して、神々しいという形容すら、過言ではない程だった。
「可哀想に、相手の選手は呑まれちゃってるわよ」
「仕方がなかろうな。あれはあたしでも、チョッと気後れするかも知れん。
……ああ、もしかして、それが狙いか？」
背中からかけられた声は間違いなく自分の方へ向けられていたので、達也は身体ごと振り返って答えた。
「狙いと仰いますと？
魔法儀式の装束としては、珍しいものではないと思いますが」
もっともその答えは認識が噛み合っていない疑問の応酬の形を取っていた。
「……達也くんのお家は神道系？」
戸惑いは、反問された方に大きかったようだ。躊躇いがちに再度質問を返した真由美に、達也は躊躇いなく首を振った。
「そういう訳ではありませんが、日本人ですから」
「……そう、かも、ね」
歯切れ悪く真由美が頷くのを見て、「この話題はこれでお終い」とばかり達也はモニターのコンソールへ身体の向きを戻した。
達也の言い分は、反論が難しい程度には、一応筋が通っている。
だが今日の出来事を全て見ていた者がいれば、彼の態度に首尾不一致を見出すに違いない。
同じ和装でも雫の振袖にはあれほど抵抗感を見せておきながら、妹の巫女姿には何の疑問も抱かない達也の感性は――客観的に見れば、やはり何処か、おかしかった。

◇◆◇◆◇◆◇

舞台裏でそのような寸劇が演じられているとは露程も考えていない――まあ、それが当たり前だ――深雪は、心を落ち着けて開始の合図を待っていた。

フライングは重大なルール違反だ。

あまり気合いを入れ過ぎると、無意識に魔法を発動させてしまう自分の悪癖を十分自覚している深雪にとって、試合開始を待つこの時間は、他の選手のように闘志を高める時間ではなく、ひたすら自分を抑えつける時間だった。

……それが、端から見ると「静謐な佇まい」に映る訳だが。

フィールドの両サイドに立つポールに赤い光が灯った。

深雪が、薄く閉ざしていた目を開いて、その瞳を真っ直ぐ敵陣へ向けた。

観客席でため息が漏れた。

一箇所だけでなく、観客席のあちらこちら、否、そのほぼ全域で。

意外なことに、若い男性より若い女性が、その強い光を放つ瞳を陶然と見上げていた。

既に会場は、試合を観戦する空気ではなくなっている。

相手選手には気の毒だが、観客の目は深雪の一挙手一投足に釘付けになっていた。

ライトの色が黄色に変わり、更に青へと変わった瞬間、

強烈なサイオンの輝きが、自陣・敵陣関係なくフィールドの全面を覆った。

そしてフィールドは――二つの季節に分かたれる。

極寒の冷気に覆われた深雪の陣地。

熱波に陽炎が揺らぐ敵の陣地。

敵陣の氷柱はその全てが融け始めている。

相手選手は必死の面持ちで冷却の魔法を編み上げているが、まる

で効果がない。
味方の陣は厳冬を超えて凍原の地獄となり、
敵の陣地は酷暑を越えて焦熱の地獄となっていた。
だがそれすらも、過程。
程なくして、
自陣は氷の霧に覆われ、
敵陣は昇華の蒸気に覆われ始めた。

◇◆◇◆◇◆◇

「これはまさか……」
「氷炎地獄（インフェルノ）……？」
呻き声の呟きが、達也の背後で漏れた。
良く知ってるな、と思いつつ、振り返りはしなかった。
達也の目は、モニターと深雪の後ろ姿を往復している。
中規模エリア用振動系魔法『氷炎地獄（インフェルノ）』。
対象とするエリアを二分し、一方の空間内にある全ての物質の振動エネルギー、運動エネルギーを減速、その余剰エネルギーをもう一方のエリアへ逃がし加熱することで辻褄を合わせる、熱エントロピーの逆転魔法。
時折魔法師ランク試験でAランク受験者用の課題として出題され、多くの受験者に涙を呑ませている高難度魔法だが、深雪にとっては当たり前に使える魔法でしかない。
元々が対エリア用の魔法だからフィールドからはみ出すルール違反の心配もなく、それ程神経質になることもないのだが、魔法というものはどんな簡単な術式でも油断は禁物だ。何かあれば例え失格負けを宣告されるようなことがあっても、あらゆる手段で介入する心づもりで達也は深雪を見守っている。
だがそれも、無用な心配に終わりそうだった。
既に敵陣内の気温は摂氏二百度を超えていた。

急冷凍で作った氷柱は、内部に多くの気泡を含む粗悪な氷だ。その気泡が膨張して、熱で弛んだ氷柱にひび割れを起こしている。

不意に、気温の上昇が止まった。

次の瞬間、敵陣の中央から衝撃波が広がった。

深雪が魔法を切り替えたのだ。

空気の圧縮と解放。

脆弱化していた敵陣の氷柱は、その全てがひとたまりもなく崩れ落ちた。

2－（16）　新人戦～同級生対決～（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

2－（16）　新人戦～同級生対決～

選手数三百六十名、技術スタッフ七十二名。
作戦スタッフを連れて来ない学校もあるものの、選手団は九校で合計四百五十名を超えている。
パーティー（宴会でも可）ならばこの人数でも賄い可能だが、大会期間中毎日宴会という訳にもいかない。
朝食はバイキングで早い者から順に済ませていく形式、昼食は仕出弁当を各学校の天幕や作業車、あるいは部屋に持ち帰って食べるのが基本、夕食は三つの食堂を学校別に各一時間三交代で利用する決まりになっている。（学校別になっているのは作戦の漏洩を防止する為）
実は、この夕食の時間は、自校のメンバーが一堂に会する一日で一度の機会。
一時間の夕食時間は、その日の戦績に喜びと悔しさを分かち合う時間でもあった。
そして今晩、第一高校の食卓は、見事に明暗が分かれていた。
暗は、一年生男子選手が集まった一角。
明は、一年生女子選手が集まった一角。
そして女子選手の集団の中に、逆・紅一点（白一点と言うべきか？）で、達也の姿があった。

「すごかったわよねぇ、深雪のアレ」
「『インフェルノ』、って言うんでしょ？
先輩たち、ビックリしてた。
A級魔法師でも中々成功しないのにって」
「エイミィ、結構、決まってたよ。
一回戦はハラハラしたけど」
「乗馬服にガンアクションが格好良かったよね」

「雫もカッコ良かった！
振袖、素敵だったし、相手に手も足も出させず追い詰めていく戦い振り。
クールだったよ～！」
女子アクセル・ボールは準優勝と入賞（六位以上）一人で「まあまあ」の成績だったが、ピラーズ・ブレイクで出場全選手三回戦進出という、スピード・シューティングに続いての好成績に女子選手はお祭り気分に浸っていた。
ピラーズ・ブレイクのトーナメントの仕組みは、出場二十四選手、一回戦十二試合、二回戦六試合。
三回戦に三人が進出するということは、上位六名の半分を一校で占めているということなのだ。
三回戦の勝者三名で競う決勝リーグを同一校の選手のみで独占という、まさしく快挙の可能性も見えているだけに、浮かれるな、と言う方が難しいのかもしれない。
上級生も「仕方ないな」と言いたげな表情で笑いながら、彼女たちがはしゃぐ姿を見守っている。
「司波君、雫のあれって『共鳴』のバリエーションだよね？」
居心地悪そうに（他の席に移ろうにも深雪が放そうとしなかったのだ）黙々と食事を進めていた達也は、突如注目を浴びてたじろぎながら、何とか普通に返事をすることが出来た。
「正解」
素っ気無い回答だが、それでもいつもに比べて声が柔らかい。
同じ学校、同じ一年生といっても、相手は普段ほとんど接する機会のない一科生の女子生徒だ。
怖がらせないように、という程度の気遣いは、達也も持ち合わせているのである。
だがその気遣いは、喧騒を増幅する結果となった。
「やっぱり起動式は司波君がアレンジしたの？」
「雫がスピード・シューティングで使った術式は司波君のオリジナ

ルだったんでしょう？」
「インフェルノをプログラムできたのも司波くんだからですよね」
「ほのかの眩惑作戦も司波君が考えたって聞いてるよ」
一つ一つ返答する暇も無く矢継ぎ早に話し掛けられ、達也は内心辟易していたが、彼女たちが一種の躁状態にあること、競技会の緊張が続く中ではこのようなお祭り騒ぎが大きな気分転換になること、この大袈裟な賛辞も裏を返した自画自賛であり自信を高め不安を払拭する為のものであること、そうした心理が理解できるので、わざわざ水を差すような真似はしないつもりで聞いていた。
「いいなぁ……あたしも司波君に担当してもらえれば優勝できたかも」
しかし、流石にこの発言は行き過ぎで、看過することは出来ない。
それでも彼の口から注意したのでは角が立つ。
達也は隣に座った深雪に、そっと目配せした。
「菜々美、それはちょっと問題発言よ」
柔らかく窘められて、その女生徒は、自分の台詞が担当エンジニアに対する不満の表明とも受け取られかねないということにすぐ気づいた。
あわわわ、と態度だけでなく口にも出して慌てて立ち上がり、上級生の中に担当エンジニアの姿を探したが、本人が笑いながら手を振っているのを見つけてホッとした表情を浮かべ、ピョコンと大きく頭を下げて席に戻った。
「あーっ、焦った」
「ナナ、自分の未熟をＣＡＤの所為にしちゃだめだよ」
「えへへ……反省」
少女たちのお喋りは幾分、ボリュームが下がったが、まだ内緒話と表現するには程遠かった。
「でも司波君のおかげで、いつも以上の力が出せたのも間違いないし」
スピード・シューティングで三位になった滝川という女子生徒が

そう言うと、英美が大袈裟に頷いた。
「ＣＡＤの調整って、ある意味自分の内側を曝け出す訳じゃない？
それが男の子のエンジニアなんて……って最初は思ってたけど、
司波君が担当してくれて、ホント、ラッキーでした！
司波君を譲ってくれた男子には感謝ですね」
無邪気な笑みに込められた多大な勘違いに、達也は苦笑するしか
なかった。
だが、苦笑で済ませることの出来ない者も、いた。
「あっ、おい！」
ガタッ、と荒々しい音を立てて、一人の男子生徒が立ち上がった。
制止の声に振り向きもせず、森崎は食べ終わった食器を手にして
配膳口へ向かい、そのまま食堂を後にした。

◇◆◇◆◇◆◇

奇しくも同時刻。
高校生の食卓より遥かに高価な食材が並ぶテーブルを、陰鬱で苛
立たしげな表情が取り囲んでいた。
「……新人戦は第三高校が有利ではなかったのか？」
「せっかく渡辺選手を棄権へ追い込んだのに、このままでは結局、
第一高校が優勝してしまうではないか」
「本命が勝利したのでは、我々胴元が一人負けだぞ」
「今回のカジノは特に大口の客を集めたからな。
支払い配当は、我々にとっても安くはない。
今期のビジネスに大きな穴を開けることになるだろう。
そうなれば……」
「……ここにいる全員が、本部の粛清対象になる。
損失額によっては、ボスが直々に手を下されることもあり得るぞ」
重い沈黙が、男たちの頭上から襲い掛かった。
「……死ぬだけならまだいいが……」

ポツリと漏らされた呟き。
その声は、恐怖に震えていた。

◇◆◇◆◇◆◇

魔法競技は非魔法スポーツ競技ほど、性差の影響は大きくない。
それでもバトル・ボードやアクセル・ボールのような身体能力が勝敗に影響する競技の存在を考慮して、新人戦も今年から男女別になった。
裏を返せば、新人戦が男女別になったのは今年が最初ということだ。
去年までは男女混合だったから、バトル・ボードやアクセル・ボールは男子選手、女子選手は身体能力の影響が小さいピラーズ・ブレイクやスピード・シューティングという棲み分けが出来ていたし（学校によっては男子選手に比率が偏っていたところもあった）、観客が同時開催される男女の競技に分かれるということもなかった。
男子競技と女子競技、どちらの人気が高いか。
本戦では例年、一般客は女子の競技に、軍・警察・消防・大学などの関係者は男子競技に集まる傾向がある。
――それで、今年の新人戦は、と言うと。
「すごい人ねぇ……」
「男子の方は結構余裕があるみたいだがな」
混雑とは縁の無い、大会参加者用の観覧席から、ぎっしり満員になった一般客席を同情の眼差しで見詰める少女二人。
真由美と摩利である。
「何だか随分、大学の関係者が多い気がするけど」
今度は招待客席に目をやって、真由美が、そう呟くと、
「昨日のアレを見せられれば、映像記録だけでは満足できないのも当然じゃないか？」
回答の形で、摩利が同意を示す。

「それもそうか。私たちも改めて見に来てるんだしね」
コンディションの公平を期す為、試合の順番は昨日とひっくり返されている。
大会六日目・新人戦三日目。
ピラーズ・ブレイクの三回戦第一試合。
深雪の登場を待って、真由美は時計に目をやった。

◇◆◇◆◇◆◇

時間は少し遡る。
達也と深雪の二人がピラーズ・ブレイクの控え室に赴いたところ、その前に二人の三高生が立っていた。
いずれも男子生徒。
一人は達也とよく似た体格。身長も肩幅もほとんど変わらない様に見える。――もっとも、ルックスは相手がだいぶ上だった。
もう一人はやや小柄。だが戦闘実技を重視する校風ゆえか、ひ弱な印象は無い。
向こうも同時に気づいたのか、達也たちの方へ真っ直ぐ歩いて来た。
「第三高校一年、一条将輝だ」
大柄な方が口火を切った。
初対面の相手には横柄な口調だが、不思議と不快感は覚えなかった。
同じ一年生でありながら、自然とリーダーシップを取る、リーダーとして振舞うことが自然だと思わせる風格のようなものがあった。
そしてその眼は、真っ直ぐに達也を見ていた。
「同じく第三高校一年の、吉祥寺真紅郎です」
小柄な方は丁寧な口調で、だが挑戦的な眼差しで、古風な名前を名乗った。
「第一高校一年、司波達也だ。

それで、『クリムゾン・プリンス』と『カーディナル・ジョージ』が試合前に何の用だ？」

害意は感じない。

敵意、とも少し違う。

だが、友好的な態度でないことも確かだ。

敢えて言うなら、剥き出しの闘志。

ここで今、上辺だけの礼儀を取り繕うのは、この二人にかえって失礼だと達也は感じていた。

「ほう……俺のことだけでなく、ジョージのことまで知っているとは話が早いな」

「しば・たつや……聞いたことが無い名です。

ですが、もう忘れることはありません。

おそらくはこの九校戦始まって以来の天才技術者。

試合前に失礼かとも思いましたが、僕たちは君の顔を見に来ました」

「弱冠十二歳にして基本コード（カーディナル・コード）の一つを発見した天才少年に『天才』と評価されるとは恐縮だが……確かに非常識だ」

自分勝手な言い草に、歯に衣を着せるつもりも無い返答。

だがお互い、逆上している気配は無い。

確かな意志をもって、敵を見据える構えだった。

「深雪、先に準備しておいで」

もう少し相手をしなければならないようだ、と判断した達也は、目線を動かさず、深雪にそう指示した。

「……分かりました」

深雪は達也に一礼した後、将輝たちがそこに存在していないかの如く、一瞥もせずに控え室へ入った。

敢えて眼を逸らしているという素振りも無い、自然で完璧な無視。

一瞬、将輝の目が深雪を追いかけたが、すぐに視線を達也へ戻した。

「……『プリンス』、そっちもそろそろ試合じゃないのか？」

だがその一瞬に、見間違えようの無い動揺と未練を見て取った達也は、やや気を抜いてしまっていた。

呆れていることを隠そうとしていない達也の視線に、将輝は返事に詰まってしまった。

「……僕たちは明日のモノリス・コードにも出場します」

替わりに応えたのは吉祥寺だった。

吉祥寺は新人戦男子スピード・シューティングの優勝者だし、将輝は新人戦男子ピラーズ・ブレイクの優勝候補筆頭。

各校がエース級を投入してくるモノリス・コードにエントリーしてくるのは、言われるまでも無く予想の範囲内だった。

「君はどうなんですか？」

どうとは何だ、と問い返してやりたかったが、そろそろ時間が惜しい。

「そっちは担当しない」

とは言うもののこちらだけ丁寧に答えるのは癪に障るので、同じように抽象的な回答を返した。

「そうですか……残念です。

いずれ、君の選手と戦ってみたいですね」

「時間を取らせたな」

そう告げて、二人は達也の横を通り過ぎていった。

――最後まで偉そうなヤツだったな、と達也は思ったが、敢えて振り返ることはせず、深雪の待つ控え室へ向かった。

◇◆◇◆◇◆◇

「結局、彼らは何をしに来ていたのですか？」

更衣室から出てきた深雪は、開口一番、先程の一幕について訊ねた。

「偵察、かな？

意味は無いと思うが」

達也は首を傾げながら、着替えている間に準備を済ませたＣＡＤを深雪に手渡した。
試合前だ。
余計なことに気を取られるのはマイナスにしかならないので、達也はもう、この話を終わりにしたかったが、深雪は達也の返事にクスッと意味ありげな笑いを漏らした。
「宣戦布告、だと思いますよ、お兄様」
妹が何を言いたいのか、分からない訳ではなかった。
だが達也にはそれが、突拍子も無いことに思えた。
「……信じていらっしゃいませんね？」
上目遣いに拗ねた眼差しを向けられても、そう簡単に納得は出来ない。
「いや、だってな……俺は選手ですらないんだよ？
魔法科高校の枠を超えて、魔法師の世界で既に評価を確立しているあの二人が、俺を敵視するとは思えないんだが」
この場合の「敵視」とは、対等の敵手と認めること。
客観的に見て、表面上の自分はあの二人より随分格下だ。
格を問題にすることそのものがおこがましい程に。
かと言って、自分の裏事情を知っている様子もなかった。
普通に考えれば、『クリムゾン・プリンス』や『カーディナル・ジョージ』が自分のことをライバル視することなどありえない――それが達也の考えだった。
謙遜ではなく、本気でそう思っている兄を見て、妹は深くため息をついた。
「……お兄様、ご自分の過小評価はこの場合、戦況の誤認につながります。
どれだけご自分が注目され、意識されているのか、どれだけ他校がお兄様に――お兄様の技術と戦術に対抗心を燃やしているのか、もう少し客観的に認識なさるべきだと思いますが」
深雪にしては珍しい、遠慮のない諫言だった。

思わぬ迫力で思わぬ非難に晒されて、達也は目を白黒させた。

◇◆◇◆◇◆◇

深雪が三度（みたび）、神秘的な美貌で客席を虜にし、神懸りとも思える圧倒的な力で敵陣を蹂躙している頃。

バトル・ボードの水路では、女子準決勝の第一レースが始まろうとしていた。

既に選手はスタート位置についている。

その中に、ほのかの姿もあった。

「う～ん……」

「……」

「これはチョッと……」

「……」

「まあ、その、ね……」

「……」

「さっきから何だよ、二人して」

スタート位置に並んだ三人の選手を見て、客席で悩ましげに唸っているエリカとその隣で絶句している美月に、レオが呆れ顔で問い掛けた。

「何かさ～、異様じゃない？

選手全員、黒メガネって」

「エリカちゃん、そこは『ゴーグル』と言おうよ……」

そう、エリカと美月の言うとおり、今回はほのかだけでなく、他の二人も濃い色のゴーグルを着けていた。

「当然じゃないのか？

光井さんの眩惑魔法対策としては一番手頃で確実なんだから」

幹比古が常識的な推測を返すと、エリカは「つまらないな～」とでも言いたげな気の抜けた笑い声を漏らした。

「……何が不満なんだよ？」

「だってさ～、これって多分、達也くんの思うツボだよ？
バトル・ボードで選手がゴーグルを使用しなかったのは、付着した水飛沫で視界が妨げられるのを嫌った、っていうちゃんとした理由があるのに、一回、目眩ましが使われたのを見たからって、安直にゴーグルを使用するなんて……
眩惑魔法対策なら他にも色々な手があるのにねぇ……」
「ほのかさん、今度は水飛沫で目潰しを掛けるってことなの？」
興味の薄れた表情でエリカは頷いた。
しかし。
「それはどうかな……
達也がそんな、単純な手を使ってくるとは思えないんだけど」
「……それはそうかも」
幹比古の指摘に、エリカは好奇心を漲らせた。

◇◆◇◆◇◆◇

スタート直後の閃光、は、今回無かった。
「出遅れた！？」
「いや、ついて行ってる！」
スタンド前の緩い蛇行を過ぎて、ほのかは二番手で最初の鋭角コーナーへ侵入した。
「えっ？」
ここで先行していた一番手の選手が、妙なコース取りを見せた。
大きく減速しながら、コースの中央をターンしたのだ。
同じように減速してコースの内側ギリギリをすり抜けたほのかが、大回りした選手を抜いてトップに立った。
「何だ、今のは？」
普通なら、大きく減速してインベタを回るか、減速を抑えてアウトギリギリを回るか。
今のように大きく減速しながら、内側を広く空けてコーナーを回

るのは、中途半端というしかない。
「……コースに影が落ちたような気がしたけど」
レオの声に、エリカが鋭く目を細めて呟いた。
「あっ、まただ！」
今度は緩く大きなカーブ。
ほのかに抜かれた選手が、アウトに大き過ぎる余裕を残し必要以上に減速してカーブを抜けた。
その結果、ほのかとの差が更に開く。
「……なるほど、そういうことか」
「えっ、なに？」
頷く幹比古にエリカが訊ねる。
「達也の狙いが、他の選手にも遮光効果のあるゴーグルを着けさせること、というエリカの読みは正しかったようだよ」
いつもの感情的な確執も忘れて、興奮した口調で幹比古は答えた。
「但しそれは、水飛沫で視界を遮る為じゃなくて、暗いところを見え難くする為だ」
「そうか！
幻術にこんな使い方があるなんて……！」
「ああ。
明るくする、暗くするというだけで、敵の行動をコントロールすることも出来る。
魔法って本当に、使い方次第なんだな……」
「……二人で納得してないで、どういうことか教えてくれよ」
不満げに口を挿んだレオの声に、自分の世界へ沈みかけていた幹比古がハッと我を取り戻した。
「ゴメンゴメン。つまり、達也の作戦は……」

◇◆◇◆◇◆◇

「司波君の作戦は単純なものですよ。

光波振動系で、水路に明暗を作る。
ただでさえ濃い色のゴーグルで視界が暗くなっているのです。
明るい面と暗い面の境目で水路が終わっていると錯覚して、相手選手は暗い面に入らないようにする……つまり、相手選手にコースを狭く使わせているのです」
男子ピラーズ・ブレイクの観戦に行った克人の代わりに本部へ詰めている服部と、彼について来た桐原は、食い入る様な表情で鈴音の解説に耳を傾けていた。
「本当はもっと広いはずだと頭で分かっていても、目から入ってくる情報に逆らうことは困難です。
そしてどんな選手でも、狭いコースでは広いコースよりスピードが出せません。
相手選手に、その実力を発揮させない。
戦術の基本ですね」
「……しかし、光井さん自身は影響を受けないのですか？」
「その為の練習を積んでいますから」
服部の質問に対する回答は、実にシンプルなものだった。
「……普通なら、術者本人は影響を受けない、って安心しちまうものだと思いますがね？」
「安心できなかったんでしょうね。
コースの幅は決まっているんだから、目に頼らず身体で覚えろ、と司波君は言っていました」
鈴音の回答に、桐原は唸り声を上げた。
「……奇策に見えて、実は正攻法という訳かい……性格が悪いだけじゃねえんだな」
桐原の漏らした感想に、鈴音は声を上げて笑った。

◇◆◇◆◇◆◇

午前の競技が終わって、第一高校の天幕は完全なお祭り状態にな

っていた。
新人戦女子ピラーズ・ブレイク三回戦三試合、三勝。
午後の決勝リーグを第一高校の出場選手で独占することになったのだ。
バトル・ボードでもほのかが決勝に進んでいる。
快進撃、という言葉に相応しい成績だ。
ただ、一年生男子選手十名は、一緒に浮かれることなど出来ずにいた。
女子チームの活躍にも関らず、男女合わせた新人戦のポイントは、二位の第三高校とそれほど差が付いていない。
いつもどおりに戦えば女子にそれ程見劣りしない成績を収めることが出来るだけのメンバーを揃えていながら、気合が空回りしてミスから敗退、益々焦りを募らせるという完全な悪循環に陥っていた。
そんな中、女子ピラーズ・ブレイクの三選手――深雪、雫、英美と、その担当エンジニアである達也は、本部天幕ではなく、ホテルのミーティングルームに呼ばれていた。
「時間に余裕がある訳じゃありませんから、手短に言います」
呼んだのは、真由美。
待っていたのは、彼女一人だった。
「決勝リーグを同一校で独占するのは、今回が初めてです。司波さん、北山さん、明智さん、本当によくやってくれました」
丁寧に、静かに、慌てて、三者三様ではあったが、三人は同時にお辞儀して、真由美の賛辞に応えた。
「この初の快挙に対して、大会委員会から提案がありました。決勝リーグの順位に関らず学校に与えられるポイントの合計は同じになりますから、決勝リーグを行わず、三人を同率優勝としてはどうか、と」
三人が顔を見合わせ、達也は皮肉げに唇を歪めた。
どう建前を取り繕おうと、自分たちが楽をしたいという大会委員会の本音は丸見えだった。

「大会委員会の提案を受けるかどうかは、皆さんの意思に任せます。但し、あまり考える時間はあげられません。今、この場で決めて下さい」

真由美の言葉に、英美がそわそわと目を泳がせ始めた。

自分の力では、深雪にも雫にも勝ち目が無いことを、彼女はよく弁えていた。

さっきまでは三位でも十分、と思っていたが、同率であっても優勝の可能性が出てきたとなれば、人の心理として色気を出すなと言う方が無理だ。

深雪は、達也を見ていた。

そして雫は、深雪を見ていた。

「……達也くん、貴方の意見はどうかしら？

三人が戦うとなれば、貴方もやり難いと思うけど」

なる程、真由美としては同率優勝で落ち着かせたいようだ、と達也は思った。

確かにチームリーダーとしては、それが一番望ましい決着ではあるだろう。

「正直に言いますと、明智さんはこれ以上の試合を避けた方が良いコンディションですね。

三回戦は激闘でした。

あと一時間や二時間程度で回復できるとは思えません」

まあ、達也としては、そんな思惑に慮る必要は感じない。

ただ彼が知る事実を告げるだけだ。

「そうですか……

明智さん、達也くんはこう言っていますが？」

「あ、あの、……私は今のお話を伺う前から、棄権でも構わないと思っていました。

さっきから調子が悪いのは確かだし、司波君に相談して決めようって……司波君は私自身より、私のコンディションが分かっていますから」

少し口調に後ろめたさが混じっているのは、大会委員会の思惑に便乗するのが狡いと感じているからだろう。
落ち着きが無かったのも、主にこの所為だったようだ。
「そうですか」
真由美は労わりを込めた微笑みで頷き、視線を深雪と雫に向けた。
「私は……」
先に口を開いたのは、雫だった。
「戦いたい、と思います」
強い意志が込められた瞳で、真由美の目を真っ直ぐ見返して。
「深雪と本気で競うことの出来る機会なんて、この先何回、あるか……
私は、このチャンスを逃したくない、です」
「そうですか……」
真由美は視線を床に落として、一つ息を吐いた。
「深雪さんはどうしたいですか？」
「北山さんがわたしとの試合を望むのであれば、わたしの方にそれをお断りする理由はありません」
実は極めて気が強い性格の深雪であれば、こう答える事は真由美にも分かり切っていたことだった。
「分かりました……
では、明智さんは棄権、司波さんと北山さんで決勝戦を行うことにすると大会委員に伝えておきます。
決勝は午後一番になるでしょうから、試合の準備を始めた方が良いでしょうね」
真由美の言葉に、真っ先に一礼したのは達也。
ミーティングルームを出て行く彼の背中に、すかさず真由美へお辞儀した深雪と雫が続き、英美が慌てて「失礼します」と頭を下げた。

◇◆◇◆◇◆◇

観客席は、超満員だった。
新人戦女子ピラーズ・ブレイク決勝リーグは、決勝戦に看板を架け替えて、午後一番、他の競技とわざわざ時間をずらして行われることになった。
一般客席だけでなく、関係者用の観戦席もギッシリ満員。
そこには真由美と摩利に挟まれた達也の姿もあった。
二人のＣＡＤの調整を済ませた達也は、深雪につくことも、雫につくこともなく、関係者用客席の最後列に席を取っていた。
二人にもそう告げていた。
二人とも頑張れ、という言葉と共に。
「でも本当は、深雪さんの方につきたかったんじゃないの？」
しかし、折角の「良い話」をぶち壊しにするように、人の悪い笑みを浮かべて真由美がそう問い掛けた。
どうも彼女は達也に対すると、小悪魔の度合いを増すようだ。
「ええ」
それはきっと、こういう手応えのなさにムキになっている、という面があるのだろうが。
「……随分あっさり認めるんだな」
偽悪家ではあるが素顔は真由美より余程善良――なのかもしれない――摩利が、既にパターンとなりつつあるため息交じりのツッコミを入れる。
「シスター・コンプレックスという言葉を知っているかね？」
「試合で肉親を応援するのが何故シスコンにつながるのか理解しかねますが？」
そしてこれも恒例となりつつある、白々しい正論返し。
しかし真由美たちも流石に学習しているようだ。
「うわっ、聞いた、摩利？　この子、開き直っちゃったわ」
「重症だな。完治の見込みは無いんじゃないか？」
いつもと違う「下級生イジメ」に、聞こえよがしの内緒話は本人

を挟んでいては意味が無いんじゃないか、と達也は呆れ果てながら考えた。

その様な幕間のコントは、最終幕が上がるまでの息抜きでしかない。

それを証明するかのように、二人の選手がステージに上がると同時、客席は水を打ったように静まり返った。

フィールドを挟んで対峙する二人の少女。

片や、目に清冽な白の単衣に緋の袴。

片や、目に涼しい水色の振袖。

深雪は髪を縛っておらず、雫は襷を掛けていない。

長い髪と振袖の袂が、夏の微風になびいていた。

締め付けるような静けさが、二人の少女から放たれている。

それは、純粋に魔法のみで競うこの競技に相応しい、熱狂を伴わない冷徹な「戦う意志」だった。

始まりを予告するライトが点った。

灯火が色を変え、開戦を告げる狼煙となった瞬間、

同時に、魔法が撃ち出された。

熱波が雫の陣地を襲う。

だが氷柱はよく持ちこたえていた。

エリア全域を加熱する『氷炎地獄』の熱波を、氷柱の温度改変を阻止する『情報強化』が退けているのだ。

深雪の陣地を地鳴りが襲う。

だがその震動は、共振を呼ぶ前に鎮圧された。

自陣全域の振動と運動を抑えるエリア魔法が、地表・地下にも魔力を及ぼしたのだ。

二人はお互いの魔法をブロックしながら、事象改変の手を敵の氷（ピラー）

柱に伸ばしている。
玄人受けする、専門家を唸らせる、互角の攻防――に、見える。
だが当人たちは、そう考えていなかった。
（届かない……！　流石は、深雪！）
雫の『共鳴』は敵陣から完全にブロックされている。
それに対して、深雪の熱波は雫の陣地を覆っている。
『情報強化』は魔法による対象の情報書き換えを阻止するもの。
物理的なエネルギーに変換された魔法の影響は排除できない。
魔法による氷柱自体の加熱は阻止できても、加熱された空気により氷柱が融け出すのは時間の問題だった。
（だったら！）
雫はＣＡＤをはめた左腕を、右の袖口に突っ込んだ。
引き抜いた手に握られていたのは、拳銃形態の特化型ＣＡＤ。
達也が雫に持たせた切り札だった。
銃口を敵陣最前列の氷柱（ピラー）へ向けて、雫は左手でＣＡＤの引き金を引いた。

（二つのＣＡＤの同時操作！？　雫、貴女それを会得したの？）
雫の左手に拳銃形態のＣＡＤが握られたのを見て、深雪の心に動揺が走った。
複数のＣＡＤを同時に操る技術は、彼女の兄の得意技。「特異」技、と言ってもいいくらい、難度の高いテクニックだ。
深雪も達也に複数ＣＡＤの同時操作技術の習得を勧められていたが、彼女はそれを無理だと断っていた。
魔法を暴走させてしまう自分が、サイオンの完全な制御を必要とする複数ＣＡＤの操作技術に挑戦するのはまだ早過ぎると思っていたし、兄の得意技に手を出すのは畏れ多いような気持ちもあったからだ。
しかし雫は、今、彼女の目の前で、二つ目のＣＡＤを手に取った。
サイオン信号波の混信を起こすことなく、二つ目のＣＡＤで起動

処理を完了させた。
一瞬、深雪の魔法が止まった。
魔法の継続処理が中断する。
そこへ、雫の新たな魔法が襲い掛かった。

「『フォノンメーザー』！？」
真由美が上げた悲鳴に、達也は「本当によく知っているものだ」と他人事のように感心した。
深雪の陣地、その最前列の氷柱から白い蒸気が上がっている。
今までの三試合、相手選手に触れさせもしなかった――魔法的な意味で――深雪の氷柱（ピラー）が初めてまともに攻撃を受けダメージを受けているのだ。
『フォノンメーザー』――超音波の振動数を上げ、量子化して熱線とする高等魔法によって。
達也が、深雪を倒す為に、雫に授けた作戦だが……彼の表情は冴えなかった。
深雪がやられそうだから、ではない。
結局この程度では、あの妹を凌駕することは出来ないと分かってしまったからだ。

動揺は、ほんの一瞬だった。
雫が新たな魔法を繰り出したのに合わせて、深雪も魔法を切り替えた。
氷柱からあがる蒸気――氷の昇華が止まった。
熱線化した超音波射撃を遮断した訳ではない。
『フォノンメーザー』による加熱を上回る冷却が作用し始めたのだ。
深雪の陣地がたちどころに、白い霧に覆われた。
霧はゆっくりと雫の陣地へ押し寄せて行く。
雫が『情報強化』の干渉力を上げたのが、深雪には分かった。

だが、しかし。
（……残念だけど、甘いわ、雫）
押し寄せる霧は「冷気」。
温度変化――融解を妨げる魔法は、この攻撃には意味がない。

「……『ニブルヘイム』……だと？
どこの魔界だ、ここは……」
呻き声が、摩利の口から漏れた。
達也としても、かなり共感できる部分があったが、言葉にはしなかった。
広域冷却魔法『ニブルヘイム』。
ダイヤモンドダスト（細氷）、ドライアイス粒子、そして時に液体窒素の霧すらも含む大規模冷気塊を生み出す魔法。
そしてその威力は今、最大レベルに上げられていた。

液体窒素の霧が雫の陣地を通り過ぎ、フィールドの端で消えた。
雫の氷柱は、その一つの面――深雪が見ている面に、液体窒素の滴をびっしりと付着させ、その「足元」に「水溜り」を作っていた。
深雪は『ニブルヘイム』を解除し、再び『氷炎地獄（インフェルノ）』を発動した。
『情報強化』は、「元々其処にあった」氷柱に作用しており、「新たな」付着物には作用していない。
気化熱による冷却効果を上回る急激な加熱によって、液体窒素は一気に気化した。
その膨張率は、七百倍。

轟音を立てて、雫の氷柱が一斉に倒れた。
その轟音は、氷柱が倒れた音だったのか、足元を掘り崩された音だったのか、はたまた蒸気爆発そのものの音だったのか。
氷柱はその表面が粉々に弾けていて、爆発の激しさを物語っていた。

あるいはその光景に、呆気に取られていたのか、
一拍遅れて、試合終了が告げられた。

2－（17）　動揺（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

2－（17）　動揺

「優勝おめでとう、ほのか」
先に部屋へ戻っていた雫は、レース終了後のメディカル・チェックを終えて着替えに戻って来たほのかを、立ち上がって祝福した。
「ありがとう……雫は残念だったね」
「うん……悔しいよ」
淡々と語られた声音は「本当に悔しいのか？」と、その発言内容を疑わせかねないものだったが、小学校からの親友であるほのかは、雫の本音を誤解するはずも無かった。
「雫……」
ほんの少し、自分より低い雫の頭を、ほのかは胸の中に抱え込んだ。
雫はダラリと手を下したまま、ほのかの胸に頭を預けた。
「最初から、勝てるとは思ってなかった」
「そう……」
「でも、手も足も出なかった」
「……」
「悔しいよ、ほのか……」
「……残念だったね」
そのまま、幾何（いくばく）かの時が過ぎた。
「……ありがとう。
……もう、大丈夫」
そう言って、身体を離す雫。
彼女の顔に、涙の跡は無かった。
「そう……？
ねっ、お茶に行かない？　少しお腹が空いちゃったの」
「……うん」
「じゃあ着替えるから、チョッと待っててね？」

明るく振舞うほのかに、雫は少し恥ずかしそうな笑顔で頷いた。

◇◆◇◆◇◆◇

ティーラウンジに足を踏み入れてすぐに、ほのかは立ち尽くす羽目に陥ってしまった。

先客――深雪と、バッチリ目が合ってしまったのだ。

そのまま踵を返すことなど出来ようはずもなく、かと言っていつものように気軽に同席することも出来ず。

余りのタイミングの悪さに、ほのかは泣きたくなった。

「ほのか、優勝おめでとう」

その気まずい空気を断ち切るように、達也がいつも通りの口調で声をかけた。――それは同時に、彼女の逃げ道を塞ぐ行為でもあったが。

「あっ、その、ありがとうございます……」

「達也さん、同席しても良い？」

進むに進めず、退くに退けず、の状態を打開したのは、雫だった。

「良いよ、もちろん」

そう言いながら立ち上がって、達也は空いている椅子の背後に回り、深雪はソーサーごとカップを持って達也の向かい側から隣の席へ移動した。

「どうぞ」

「ありがとう」

達也が引いた椅子――深雪の向かい側に、雫は躊躇わず腰を下した。

達也の向かい側の席には、同じように椅子を引いてもらって、ほのかが頬を染めながら腰掛けた。

丁度通りかかったウェイトレスを呼び止め、ほのかと雫がケーキセットを注文し終えてから、達也は改めて二人へ目を向けた。

「優勝と準優勝のお祝いだ。ここは俺がご馳走するよ」

「えっ、良いんですか」
「……じゃあここは、遠慮なく」
ほのかは逡巡を見せたが、雫は達也の真意――彼が自分を慰めようとしているということが何となく分かったので、必要以上に遠慮することなく首を縦に振った。
思ったより早く友人が立ち直りを見せたので、ほのかはホッと一息ついて、ようやく自分のことに意識が向き始めた。
「あっ、あの……」
「うん？」
「その、優勝できたのは達也さんのお陰です！
ありがとうございました」
自分のことに意識が向いて、自分がまだ達也に優勝のお礼を述べていないことに気付き、さっきまで以上の動揺に捕らわれたほのかだったが、何とか台詞を噛むこともなく感謝の気持ちを伝えることが出来た。
達也は笑って頷いた。
「少し、だけどな」
謙遜し、否定しなかったのは、大袈裟にしたくないからだ。
少し、という言葉を打ち消したりしなかったほのかは、その笑みの意味を理解できたのだろう。
それを確認した後、達也は雫に目を転じて、笑みを消した。
「雫には悪いことをしたな」
「えっ？」
何の事だが分からない、という表情で、雫は達也の顔を見返した。
「勝敗はともかく、本来ならもっと拮抗した試合になったはずなんだが……俺の判断が甘かった。
たった二週間で『フォノン・メーザー』をものにするのは、流石に無理があったと思う」
「あっ、そのこと……ううん、達也さんは全然悪くないよ。
そもそもアレがなかったら、反撃の手段すらなかったんだし」

達也が何について謝っているのかを理解して、雫は勢い良く頭を振った。
「マスターできなかったのは私の所為。私の方こそゴメンナサイ。アレを使いこなせていれば、もっと良い試合が出来たのに……」
深雪にも、歯応えが無い相手で申し訳無かったって思ってる」
「そんなことないわ。本当にビックリしたのよ、あの時は……いきなりあんな高等魔法が、複数ＣＡＤの同時操作なんていうオマケ付きで出て来るんだもの」
雫に向かって笑顔で首を（横に）振って見せた深雪は、そのあと冗談っぽく、達也を睨みつけた。
「お兄様、あれは本気で、わたしを負かすおつもりでしたね？」
何とも答え難い質問で、達也もすぐには回答できなかった。
「……俺は二人のどちらにも、最善を尽くしただけだよ」
結局、そういう建前論しか捻り出せなかったが。
建前と言っても決して嘘はついていない、とは分かっている。分かってはいるが、深雪にとってそれは、本音の部分で満足できる答えではなかった。
「もう……この人は妹が可愛くないのかしら」
「手を抜いたりしたらそれこそ本気で怒るだろうに」
友人に対して兄のことを愚痴るという、世間的には当たり前でも深雪の場合極めて珍しい姿は、反論した達也ばかりでなく、ほのかと雫の笑いも誘った。

◇◆◇◆◇◆◇

大会七日目、新人戦四日目。
今日は、九校戦のメイン競技とも言えるモノリス・コードの新人戦予選リーグが行われる日だが、観客の関心は花形競技ミラージ・

バットに集まっていた。
女子のみを対象とするミラージ・バットのコスチュームは、カラフルなユニタードにひらひらのミニスカート、袖なしジャケット又はベスト。
ファッションショー（コスプレ大会？）と化している女子ピラーズ・ブレイクとはまた、一味違った華やかさがある。
いや、このコスチュームで若い女性が空中を舞い踊るのだ。
華やかさにかけては、魔法競技中随一だろう。
男性ファンの関心（と言うよりも注目）が集まるのも無理からぬことだった。
しかし――達也の気の所為でなければ、少し注目され過ぎている気がする。
それも煩悩まみれの色ボケな視線ではなく、敵意の棘を大量に生やした視線だった。
「……自分のことになると鈍いってのは本当なんだね」
第一試合に出場する為のスタンバイを終えた選手が、からかうように達也へ声をかけた。
「鈍いのは否定しないが……里美（さとみ）には分かるのか？」
「もちろん」
彼女の名前は里美スバル（さとみ・すばる）。里美、というのは実は苗字で、名前で呼ぶほど親しい間柄という訳ではなかった。
「みんなは司波君を見てるんだよ」
彼女は少し、摩利に似ている少女だ。具体的に何処が似ているかというと、異性よりも同性に人気が高いところ、だったりする。
もっとも似ているのはあくまで「少し」であって、二人が並んでいるとだいぶ印象が違うだろう。
例えば二人にタキシードを着せてみるとする。
摩利の方は「男装の麗人」。
スバルの方は「劇団の美少年役」。
おそらく、こんな具合に印象が分かれる。

そんな自分の外見を意識してか、スバルは言葉遣いも立ち居振る舞いも、少年っぽい部分が多い。

もっとも、だからといって「がさつ」ということではなく、現在見せているように、中々鋭い観察眼の持ち主でもあった。

「スピード・シューティングに続いてピラーズ・ブレイクでも上位独占だもんね。

見る人が見れば、高度に効率化されたデバイスソフトの貢献が大きいって分かるだろうし、一体どんなエンジニアが調整したんだ、って考えるのは当然だと思うよ」

「……そりゃあ、担当したエンジニアが誰かなんて、少し調べれば分かるものだが」

「そういうこと。

司波君はさ、各校の警戒の的なんだよ」

もしスバルの言うとおりならば――否定する材料は何も無いのだが――事態は達也にとって、好ましくない方向へ進んでいるということだった。

およそ全ての物事は、準備不足のまま着手することを余儀なくされる。それが「世の常」というものだ。

だがそれにしても、今はまだ、準備不足が過ぎていた。

予定では、「司波達也」の表舞台登場は、高校を卒業した後のこと、のはずだった。

「さてと……今回は僕も、役得で勝たせてもらうとするかな。

このデバイスなら、正直、予選程度で負ける気はしないからね」

競技フィールドへ続く扉の前で立ち止まり、ブレスレットをはめた右腕を持ち上げて朝日にキラキラと光らせながら、スバルは肩越しに不敵な笑みを見せた。

達也は親指を立てて彼女を送り出した。

彼女が自分で言ったとおり、スバルは予選を勝ち抜くだろう。

彼の調整したＣＡＤを使って。

目立つのは好ましくない、とはいえ、手を抜くことも出来ない。

二科生――ウィードとして入学仕立ての頃の、ただ一人を除いて誰からも期待されていなかった時分ならいざ知らず、今の彼にはそんな事は許されない。

この九校戦に彼を抜擢した真由美と摩利、それを支持した克人、己の心を押し殺して彼を推した服部と危険を顧みず実験台になった桐原、彼に期待を寄せるほのかや雫や他の女子選手たち、そして――彼を無条件で信じてくれる、力を貸してくれる、深雪。

一度(ひとたび)絡み合った人間関係は、彼にも「分解」し難いものだった。

◇◆◇◆◇◆◇

ミラージ・バットは四人一組で予選六試合を行い、各試合の勝者六人で決勝戦を行う。

九校戦で試合数が最も少ない競技だが、それは、選手にとって負担が小さいということを意味しない。

まず十五分一ピリオドの三ピリオドという試合時間が、九校戦中で最長だ。ピリオド間の休憩時間五分を加えた総試合時間は約一時間にも達し、時間制限の無いピラーズ・ブレイクやモノリス・コードに比べても格段に長い。

しかも、その試合時間中、選手は絶え間なく空中に飛び上がり空中を移動する魔法を発動し続けなければならず、選手に掛かる負担はフルマラソンに匹敵するとも言われている。

それが一日に二試合。

スタミナ面では、アクセル・ボールやモノリス・コード以上に苛酷な競技とも言われている。

それ故に、選手の疲労を考慮して予選と決勝のインターバルが長く取られているのも、この競技の特徴と言える。

第一試合の開始時間は朝八時。

二つのフィールドを使用し、正午に予選が終了する。

そして決勝の開始時間は午後七時。

九校戦唯一のナイターとなる。
こんな無理をせずに、予選と決勝を二日に分けて開催すれば良さそうなものだが、こんなスケジュールになっている理由は一応、ある。
ミラージ・バットは空中に投影した球体のホログラム球体（正確には立体映像の球体。現代の空中結像技術は厳密な意味でのホログラフィーとは映像形成の原理が異なる）をスティックで打つ競技。
十メートル上空の幻像が地上から見分けられなければならない。
真夏の明るい日差しの下で行うには向かない競技であり、晴れの日には昼近くの第三試合になると、上空に飛行船で日除けのスクリーンを広げたりもする。
その性質上、ミラージ・バットは本来、ナイターで行われる競技なのである。
立体映像の投影設備自体が、選手の身体で投影の光線が遮られて幻像が消えてしまわないように、フィールドを円形に取り囲む照明塔の頂上に設置されていることからも、この競技がナイターを前提としたものであると言うことが理解できよう。

◇◆◇◆◇◆◇

第二試合を終わって――予定通り、ほのかとスバルは二人とも予選を勝ち抜いた――達也は仮眠を取る為に、一旦ホテルの部屋へ戻った。
選手の二人もそれぞれの部屋に戻ってサウンドスリーパーで熟睡中のはずだ。
この競技に決勝に備えた体力の回復は不可欠。
エンジニアの達也は身体を休める必要も無いのだが、神経を休めておいた方がベターであるのは間違いない。
本当は感覚遮断カプセルを使いたいところだが、あれは選手に優先割り当てされているので、部屋の遮光カーテンを閉め切ってベッ

ドで横になることにした。
今頃ミラージ・バットは第三試合が行われているだろう。
第一試合・第二試合に割り振られたのはラッキーだった。
一時間しか違わない、が、その一時間が体力の回復と精神力の回復に大きく影響することもあり得る。
本戦の予選でも、深雪には早い時間に試合をさせてやりたいが、これは彼の自由になることではない。
考えても仕方が無い、と割り切って、達也はこの思考を中断した。
肉体的に疲れている訳ではないので、無理に眠ろうとせず、意馬心猿に意識を委ねる。
目を閉じたままベッドに横たわる達也の思考は、昨日の朝に跳んだ。
一条将輝と吉祥寺真紅郎――同じ年齢でありながら、魔法師の世界において既に確固たる名声を確立している二人の天才少年。
一条将輝――三年前の中華連合による沖縄侵攻に同調して行われた、新ソ連の佐渡侵入作戦に対し、弱冠十三歳で義勇兵として防衛線に加わり、一条家現当主・一条豪毅（いちじょう・ごうき）と共に『爆裂（コンバット・ブローブン）』を以って数多くの敵兵を葬った実戦経験済みの魔法師。
戦闘自体は小規模だったものの（新ソ連は未だに佐渡へ侵入した武装集団との関係を否定している）、彼はこの実績により「一条のクリムゾン・プリンス」と称せられることになった。（この『クリムゾン（血に塗れた）』という形容詞は、「敵と味方の血に塗（まみ）れて戦い抜いた」という敬意の表れであり、「血に飢えた」という蔑称ではない）
吉祥寺真紅郎――弱冠十二歳にして、仮説上の存在だった「基本コード」の一つを発見した天才魔法師。本名と彼が発見した「基本（カーディナル・コード）」からつけられた『カーディナル・ジョージ』の異称は、魔法式の原理論方面の研究者なら、知らぬ者はいないと言われるほど注目されている英才。
あの二人が同じ学校の同じ学年に在籍しているというのは、反則

級の偶然だ。
あの二人がチームを組むモノリス・コードは、少なくとも新人戦のレベルでは敵無しだろう。
森崎たちも気の毒にな、と達也は完全に他人事として同情した。
救いがあるとすれば……
（『爆裂』が殺傷性Ａランクの魔法だということ……くらいか）
『爆裂』は対象物内部の液体を気化させる発散系魔法。
生物ならば体液が気化して身体が破裂、内燃機関動力の機械ならば燃料が気化して爆散。燃料電池でも結果は同じ。可燃性の燃料を搭載していなくても、バッテリー液や油圧液や冷却液や潤滑液など、およそ液体を搭載していない機械は存在しないから、『爆裂』が発動すればほぼあらゆる機械が破壊され停止する。
純粋に軍事目的で開発された『爆裂』は、当然モノリス・コードのレギュレーションに引っ掛かる。
（とは言っても、『クリムゾン・プリンス』の異名を取る十師族次期当主の手持ちカードが『爆裂』一種類であるはずもない……
……そう言えば）
手綱が外された思考は、モノリス・コードに出場するとわざわざ彼の前で宣言した二人から、モノリス・コードの試合そのものへ移った。
戦力分析や三高対策に取り組み始めた、のではない。
単に、もうすぐ二試合目が始まるな、と思っただけだ。
（一試合目は順調に勝ったということだし、二試合目はここまで最下位の四高だ。流石に取りこぼしはしないだろう……）
達也は目を閉じたまま、ゆったりと押し寄せて来た眠気に身を委ねた。

◇◆◇◆◇◆◇

昼寝を終えて競技エリアに戻った達也は、会場が動揺に包まれて

いるのを感じ取った。
パニック一歩手前の空気が各校の天幕が置かれたエリアを覆っている。
その中心は、第一高校の天幕だった。
「お兄様！」
天幕に足を踏み入れた途端、深雪がお約束のように駆け寄ってきた。その隣には雫の姿もある。
「深雪……雫も、エリカたちと一緒じゃなかったのか？」
ほのかが起きてくるまで――五時から決勝の準備を始めることになっている――深雪と雫はエリカたちとモノリス・コードを観戦している予定だったはずだ。
それが今、ここに居るということは……
「何があったんだ？　モノリス・コードで事故か？」
答えを待たずに、達也は更に質問を重ねた。
何かあったのか、とは訊かない。何かがあったことは、この雰囲気から明らかだ。
ただそれが、思った以上に深刻な事態かもしれない、と達也は考えたのだった。
「はい、事故と言いますか……」
「深雪、あれは事故じゃないよ」
言い淀む深雪の横から、雫が強い口調で口を挿んだ。
「故意の過剰攻撃（オーバー・アタック）。明確なルール違反だよ」
その口調は抑制を保っているが、雫の目には見間違えようの無い憤りが燃えていた。
「雫……今の段階で余り滅多なことは言うものじゃないわ。まだ四高の故意によるものという確証は無いんだから」
「そうですよ、北山さん」
二人の背後から、今度は真由美が割り込んできた。
「単なる事故とは考え難い……それは確かですけど、決め付けてはダメ。

疑心暗鬼は、口にすればするほど益々膨れ上がって、それが何時の間にか事実として独り歩きしてしまうのだから」

こういうことを考えては多分、失礼なのだろうが、随分と上級生らしい正論だった。

優しく窘められて反省を口にする雫を傍目に、「生徒会長は伊達じゃないんだなぁ」などと達也は考えていた。

……と、真由美がジトッとした視線で達也を睨みつけた。

「……何でしょうか？」

「……今なにか、とても失礼なことを考えたでしょう」

（す、鋭い……！）

余りに的確な洞察に、達也は動揺を禁じえなかった。

しかしそこは彼も、年齢どおりの人生経験ではない。

「……いえ、流石は生徒会長だ、と考えていただけですが……？」

誠実そうな仮面に、濡れ衣を着せられた人間に標準的な偽りの動揺をトッピングして、相手の表情を窺うような声音で答える。

「……そう？」

尚も疑わしそうな目をしていたが、一応、真由美は矛先を納めた。

達也の演技に穴が見つからなかっただけでなく、今はそれどころではない、という理由もあったのだろう。

「それで、怪我はどの程度のものなのですか？」

「……今の会話だけで森崎君たちが怪我をしたって分かるのね……」

ため息をつく真由美の顔には「やりにくい」と書かれていた。

「……重傷よ。

市街地フィールドの試合だったんだけど、廃ビルの中で『破城槌』を受けてね。

瓦礫の下敷きになっちゃったの」

「……屋内に人がいる状況で使用した場合、『破城槌』は殺傷性ランクＡに格上げされます。

バトル・ボードの危険走行どころではない、明確なレギュレーション違反だと思いますが」

『破城槌』は『念爆』と呼ばれるＰＫの研究から開発された魔法で、対象物の一点に強い加重が掛かった状態に対象物全体のエイドスを書き換える魔法。建物に使用される場合は壁の一面、天井の一面といった、少なくとも柱で区切られた「一つの面」として認識できる広さに干渉しなければならず、大きなキャパシティと強い干渉力が必要になる。

単に建物を破壊するだけなら、移動系でハンマーを飛ばしたほうが簡単に済むという、難度の高い魔法だ。

その能力に特化したＢＳ魔法師でない限り、間違いで発動できるような代物ではない。

「そうね……

いくら軍用の防護服（プロテクション・スーツ）を着けているといっても、分厚いコンクリートの塊が落ちてきたんじゃ気休めにしかならないわ。

それでもヘルメットのお陰と、立会人が咄嗟に加重軽減の魔法を発動してくれたお陰で大事には至らなかったけど……三人とも、魔法治療でも全治二週間。三日間はベッドの上で絶対安静よ」

だがあくまで真由美は、故意か事故かの判断を避けたいようで、話の方向性を微妙に逸らした。

「……想像以上に酷いようですね」

真由美の立場上、不用意な発言は出来ないということは良く理解できたので、達也もそれ以上の追及は控えることにした。

「ええ。不謹慎だけど、治療を見てて気持ち悪くなっちゃった」

本人の言うとおり、これは怪我人に対する問題発言だった。

まあ、それだけ真由美も動揺していて、それだけ達也に心を許しているということかもしれない。

「しかし、状況が良く分かりませんね。

三人が同じビルの中に固まっていたんですが？」

達也が気にすることではないかもしれないが、オフェンス一人とディフェンス二人、あるいはオフェンス二人とディフェンス一人に分かれる戦法が定石となっているモノリス・コードで、チームの三

人が同一の攻撃で全員行動不能に陥るというのは、どのような状況だったのか少し理解し難かった。
「試合開始直後に奇襲を受けたんだよ。開始の合図前に索敵を始めてなきゃ出来ないこと。『破城槌』はともかく、フライングは間違いなく故意だと断言できる」
答えをくれたのは、憤懣遣る方無いといった雫の声だった。
「なるほど……そりゃあ、大会委員も慌てているだろうね」
「フライングを防げなかったから……ですか？」
人の悪い笑みを浮かべた達也に、深雪が首を傾げながら訊ねた。
素直な深雪には、達也ほど捩じくれた思考は出来なかったようだ。
「それは大した問題じゃないよ。それより、崩れやすい廃ビルにスタート地点を設定したことが、今回の事故――と一応言っておくけど、事故の間接的な原因だと言えるからね。
大会委員会としては、このまま新人戦モノリス・コード自体を中止にしたいんじゃないかな」
「……そういう考え方もあるんですね」
「確かに、中止の声もあったけど。結局、うちと四高を除く形で予選は続行中よ。最悪の場合、当校は予選二試合で棄権でしょうね」
真由美の言葉に、今度は達也が首を傾げた。
「……最悪の場合も何も、選手が試合を出来る状態ではないのですから、棄権するしかないと思いますが……」
「それについては、十文字くんが大会委員会本部で折衝中よ」
「はあ……」
九校戦では予選開始後の選手の入れ替えは認められていないが、相手の不正行為を理由に特例を認めさせる、ということだろうか。
しかし、モノリス・コードのチームは一年男子の実技トップスリーを揃えたメンバー。代わりを出しても、勝ち抜くことは難しい。

それより不正が行われたことを理由に、モノリス・コードのポイントを全体のポイント集計から外させる方が有利なのでは?、と歯切れの悪い受け答えの裏で達也は思った。

達也が心の中でそんな腹黒い計算をしていることなど、真由美は勿論知らない。

「――ねぇ達也くん、少し、相談したいことがあるんだけど」

真由美の声に媚びるような響きが混ざっていたのは、立て続けのアクシデントに不安を覚え、無意識に依存の対象を求めているからに違いない。

現在進行形で妹からきつい視線を向けられている達也は、逃避気味にそう思った。――というより、この場合の睨む相手は真由美にしてもらいたかったのだが、そんなことは言えるはずも無かった。

「チョッと一緒に来てくれないかな」

他聞を憚る話、ということだろう。

きつい視線がデュエットになったが、達也は気付かない振りをして真由美の背中に続いた。

◇◆◇◆◇◆◇

奥に、と言っても仕切りはあるが天幕なのでそれは当然、布でしかなく、普通に考えれば遮音性など無いに等しいはずだ。

しかしそこは世界の理を覆す魔法の領分、真由美はチョコチョコ、っという感じでたちどころに外界から音が遮断されたフィールドを作り上げた。

「見事な遮音障壁ですね」

「そう……？　フフッ、ありがと」

照れ笑いと共に真由美は腰を下し、達也にも椅子を勧めた。

「それで、早速なんだけど……」

「はい」

「……」

早速、と言いながら、真由美はなかなか切り出そうとしない。
いつまでもここで二人っきり、というのは流石に色々と具合がよろしくないので、達也は自分の方から話を進めることにした。
「今回の件も、妨害工作と考えられるかどうか、ですか？」
「……ええ。そのことで、達也くんの意見を聞きたかったの。達也くんはＣＡＤに細工をされた可能性を指摘していたわよね？」
「はい」
「今回も同じ手口だとすれば、四高の暴挙も説明がつくんだけど……どうすればそれを立証できると思う？」
「細工の現場を捕まえるしかないでしょうね」
「四高からＣＡＤを借りられたとしても……ダメかしら？」
「起動式を入れ替えた痕跡が残っていれば良いんですが……失格になった七高が沈黙しているところを見ると、期待できません」
「そうか……」
テーブルの上で指を組んだ両手に、真由美は視線を落とした。
期待を外してしまったな、と考えながらその姿を見詰めていた達也に、真由美は目を上げぬまま、再度問い掛けた。
「……達也くんの考えているとおり、当校を標的とした妨害工作が行われているとして……目的は何だと思う？
遺恨かな？
それとも、春の一件の報復かな？」
なる程、真由美はそれを悩んでいたのか、と達也は思った。
達也はそれを打ち消すカードを持っている。真由美の心労を減らしてやることが出来る。
だがそれを彼女に明かして良いものかどうか、少しの時間、彼は迷った。
「……春の事件とは別口ですよ」
しかし結局、達也は手札を見せることにした。
「えっ、何故そう言えるの？」
勢い良く顔を上げた真由美の反問は、そう言える根拠があって欲

しい、という願望によるもの。
ただ、全てを明かすことは、彼にも出来ない。
「開幕前日……いえ、日付は変わっていましたか。とにかく開幕日直前の真夜中に、ホテルへ忍び込もうとした賊がいたんですよ。人数は三人、いずれも拳銃で武装していました」
「……初めて聞いたわ」
「口止めされていましたから。
それで、たまたまその場に居合わせた俺は、賊を取り押さえるのに少し協力することになりまして……そいつらの素性も少しであれば知っています。
香港系の犯罪シンジケートらしいですよ。今回の九校戦にちょっかいを出しているのは」
事実を使って、もっともらしい経緯をでっち上げる。
真由美にそれを疑っている様子は無かった。
「……偶然なのかもしれないけど……あんまり危ない真似はしないでね」
「どちらかと言えば、いつも巻き込まれている立場だと思うんですが」
肩をすくめる達也を真由美は疑わしげな目でジーッと見詰めていた。が、そんな場合ではないと、程なく自分で気が付いたようだった。
「そっか……口止めされていたんでしょう？　教えてくれてありがとう」
「その代わり、他言は無用に願います」
「分かってる。約束します」
右手を上げて宣誓の真似をする真由美。
ナチュラルにお茶目なその仕草に、達也は危うく、吹き出すところだった。
「……重ね重ね不謹慎だけど、少し気が楽になっちゃった」
「……他所では聞かせられない台詞ですね」

「大丈夫よ。達也くんの前でしかこんなことは言わないから」
はて、それはどう解釈したら良いのだろうか？
先日の「気の置けない弟」発言をまだ引きずっているのだろうか？
相変わらず真由美の考えていることは、達也にとって謎が多かった。

◇◆◇◆◇◆◇

あの後、一年生の女子に動揺が広がらないよう協力して欲しい、と言われて天幕に居残った達也だが……具体的に何をすればいいか、彼には全く分からなかった。
そもそも女子選手のメンタルケアは、女子の上級生の役目だと思うのだ。
うっかり頷いてしまった自分の迂闊さに内心で臍を噛みながら、表面上「何事も無かったように」、決勝戦に備えたＣＡＤの調整に取り組んでいた。
ただそれだけなのに、彼は何時の間にか、一年生の女子選手に囲まれていた。
いや、これは単に、彼の隣に一年生女子のリーダー格である深雪が貼り付いているからだ、と達也としては思いたかった。
無言の視線に囲まれて非常にやり辛かったのだが、まさか威嚇して追い払うことも出来ない。
無駄話を振られて邪魔をされている訳でもないので、彼はいつもどおり黙々と作業を進めた。
いつもと変わらない姿。
いつもと変わらないもの。
その価値を、彼は知らない。
万物流転の理を直視し続けることを、自らの能力により強制されている達也にとって、変わらぬものなど何一つ無いのだから。
だから、いつもと変わらぬ彼の姿に少し落ち着きを取り戻した少

女たちの姿を見て、深雪が兄の代わりに微笑み、頷いた。

彼の平常心――あるいは平常を演じる心――による精神安定の効果が最も大きかったのは、ほのかだった。

最初、森崎たちが「事故」に遭ったのを聞いて顔の色を真っ青にしていたが、何事も無かったかのようにブリーフィングを始めた達也を前に、見る見る落ち着きを取り戻した。

その変わり様に、今度は達也の方が不安を覚えたくらいだ。

「……予選と戦い方が変わる訳じゃない。とにかく持久力勝負だからね、ミラージ・バットは」

だからと言って、今何が出来る訳でもない。

もうすぐ決勝戦なのだ。そんな時間があるはずは無かった。

「気力で勝負、は厳禁だ。必要なのは、あくまで冷静なペース配分」

達也の眼差しを受けて、スバルが大袈裟に首をすくめた。

「余計な細工も無しだぞ、ほのか。

練習でやってたみたいに、幻影魔法でダミーをばら撒くなんて、スタミナの浪費でしかないからな」

釘を刺されて、今度はほのかが首をすくめる。

「二人とも、自分の持ち味を出すことだけを考えていれば良い。

大丈夫、それでワンツーフィニッシュはいただきだ」

達也の大胆な一位、二位独占宣言に、二人は嬉しそうに頷いた。

◇◆◇◆◇◆◇

真夏と言っても一番日が長い時期は過ぎている。

夜七時となれば、日はすっかり落ちきり、青空は星空に変わっていた。

湖面が、照明の光を反射してキラキラと煌めいている。

その中に点在する、足場となる円柱に立つ六人の少女。

身体の線を浮き立たせる薄手のコスチュームは不思議と生々しさ

が無く、水面（みなも）に揺らめく光の中で妖精郷の趣を醸し出していた。
――男性ファンが多いのも宜（むべ）なるかな。

ミラージ・バットは、地上十メートルに投影される立体映像の球体を専用のスティックで叩いて消し、その数を競う競技だ。
叩くと言っても手応えは無いし、球体が割れたり散ったりするわけでもない。
選手の持つスティックが出す信号と球体の投影位置を演算機で分析し、両者が重なった時点でその球体の投影が終了しスティックの信号から選手が判別されてポイントが加算される、という仕組みだ。
この競技に勝利するためのスキルは二つ。
如何に速く球体に接近するか。（最初に一メートル以内に接近した選手に優先権が与えられる）
如何に早く球体の投影位置を把握するか。
この二つのファクターのうち、二番目のファクターは意外に見落とされがちだ。
光より速いものは無いのだから、立体映像の光を確認してから動くのが結局は一番早い、と考えられているからだ。
だがここにも例外がある。
空中立体映像は、結像するまでにコンマ数秒のタイムラグがある。
この結像中の光波の揺らぎを知覚できれば、ほんの一瞬ではあるが、実際の光を確認するより早く光球の位置を把握することが出来る。
光波に――正確には、光波の発生を意味するエイドスの変化に鋭敏なほのかの感覚は、予選に続いてこの決勝でも、彼女に大きなアドバンテージを与えていた。
頭上に赤い球体が結像する一瞬前に、ほのかの術式が発動した。
他の選手は諦めを以ってそれを見送っている。
次の光球が結像した。
色は青。光っている時間が最も長く、その分、最もポイントをゲ

ットしやすい球体だ。
五人の選手が一斉に起動式の展開を始める。
最初に跳び上がったのは、スバル。
同時に起動処理を始めて、その処理が最初に完了するのは常に第一高校の二人だった。
選手よりも、それを見ていた技術スタッフが唇を噛み締めている。
（比喩であって実際に血を流しているスタッフはいないが）
ここまで安定的に差が生じている以上、ＣＡＤの性能差を認めぬ訳にはいかないからだ。
各校ともレギュレーションの上限ギリギリの機種を選んで来ているはずだから、ハード面の性能は同じ。
残るは、ソフト面の性能差。
エンジニアの腕の違い、ということになる。
「クソッ、何であんなに小さな起動式で、あんなに複雑な運動が出来るんだ！」
何処かで、そんな声が上がった。
キルリアン・フィルター（サイオンの濃度と活性度を可視化するためのフィルター）付のカメラで、ほのかやスバルの起動処理（起動式の展開から読み込みまでの処理）を撮影していたのだろう。
一直線に――重力加速度の影響を無視して――立体映像へ向かって飛び、光球の前で静止、得点後に放物線を描いて足場へ戻り、慣性をキャンセルして着地。
この一連の運動中、ほのかもスバルも一度もＣＡＤを操作していない。
つまり、跳び上がる時点で使用した起動式に、着地までの工程が全て記述されているということだ。
起動式が小さいほど、起動処理は早く終わる。
起動処理の回数が少なければそれだけ、魔法師の負担は軽くなる。
最小の魔法力で、最速の事象改変。
「……まるでトーラス・シルバーじゃないか！」

誰かが、舌打ち混じりにぼやいた。

「あーちゃん、どうしたの……？」

あずさがハッと振り向くと、目を見開いて突然硬直してしまっていた彼女自身を、真由美が不思議そうに見ていた。

「いえ……何でもありません」

俯いて縮こまるあずさに、「そう？」と応えて真由美は観戦に戻った。

あずさのこういう反応はいつものことだから、余り気にならなかったのだろう。

だがあずさの心中は、いつもと違って、羞恥心とは別のもので占められていた。

（……まるで、「トーラス・シルバー」みたい……？）

先程、誰かがぼやいた声。

歓声と悲鳴に紛れたその言葉が、あずさの耳には何故かハッキリと響いた。

（あの起動式の完全マニュアルアレンジ……汎用型のメインシステムと特化型のサブシステムをつなぐ最新研究成果の利用……汎用型ＣＡＤにループ・キャストを組み込んだ技術力……『インフェルノ』……『フォノンメーザー』……『ニブルヘイム』……どれも起動式が公開されていない高等魔法のプログラム……）

同じ魔工師を目指す者として、この大会で度肝を抜かれ続けた数々の「離れ業」が、あずさの脳裏をグルグルと駆け回る。

（まるで？　トーラス・シルバー「みたい」？

ううん、これって……シルバーじゃなきゃ……不可能なんじゃ……）

――俺たちと同じ日本人の青少年かもしれませんね――

不意に、あずさの中から、彼の声が聞こえた。

「……ホント、どうしたの？
具合が悪いんだったら休んでてもいいのよ？」
「いえ、本当に、何でも……」
いきなり跳び上がったあずさを怪訝と心配が綯い交ぜになった眼差しで真由美は見詰めていたが、あずさにそれ以上の取り繕う余裕は無かった。
記憶の中から蘇った声。
もしかしたらあれは、推測なんかじゃなくて……
（まさか？　まさかまさか？　まさかまさかまさか？）
そのフレーズだけが、今のあずさの意識を占めていた。
遠ざかった現実の中で、二人の下級生が圧倒的リードを奪って、第一ピリオドの終了を迎えていた。

2－（18）　補欠の義務（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

2－（18）　補欠の義務

結局、新人戦ミラージ・バットは達也が予言したとおり、ほのか、スバルのワンツーフィニッシュで幕を閉じた。

試合が終わってすぐ、優勝の喜びを分かち合う間も無く、達也はミーティング・ルームへと呼び出されていた。

そこでは、完全にたがの外れた狂躁状態となった同級生（の女子）とは対照的な、抑制の効いた感情さえも改まった表情の下に隠した上級生が達也を待っていた。

真由美、摩利、克人、鈴音、服部、あずさ。

第一高校の幹部が勢揃いしている。

他にも桐原や五十里の顔が見える。

重傷者を出したばかりだから立場上喜びを表に出すことは出来ないのだろうが、それにしても、彼ら（彼女たち）は少し表情が硬い――緊張しているような気がする。

特に服部は、どういう顔をしていいか分からず、その結果自分の顔で仮面を作った、とでも言えそうな、コチコチの表情になっている。

余り愉快な話ではなさそうだと判断して、達也は心の中で身構えた。

「今日はご苦労様。期待以上の成果を上げてくれて感謝しています」

真由美が随分と格式張った――というより形式張った言葉を掛けてきた。

彼女がその言葉を発する前に、克人と瞬きほどの目配せを交わしていたのを、達也は目敏く見留めていた。

「選手が頑張ってくれましたので」

達也も無難に形式的な答えを返す。

こういう緊張感は、入学直後以来久し振りだった。

「もちろん光井さんも里美さんも他のみんなもそれぞれに頑張って

くれた結果です。
でも、達也くんの貢献がとても大きいのは、ここにいる全員が認めているわ。
担当した三競技で事実上無敗……ポイント上、現段階で新人戦の二位以上を確保できたのは、達也くんのお陰だと私は思っています」
「……ありがとうございます」
達也は少し間をおいて、控え目に頭を下げた。
そして視線を合わせぬまま、次の言葉を待った、が、真由美は中々本題に入ろうとしない。
達也がソロリと目を上げると、真由美が克人を目で抑えていた。
どうやら言い難い話を、克人が代わりに切り出そうとした様子だ。
ここまで躊躇わなければならない話とは、一体何なのだろうか。
達也が自分を観察しているのに気付いて、真由美は観念したように少し長い瞬きをした。
「今も言ったとおり、モノリス・コードをこのまま棄権しても新人戦の準優勝は確保できました。
現在の二位は第三高校で、点差は五十ポイント。モノリス・コードで三高が二位以上なら新人戦は三高の優勝、三位以下なら当校が優勝です」
では、新人戦でポイントを引き離されないという、総合優勝の為の戦略目標は達成したことになる。
彼女たちは一体何をそんなに緊張しているのだろうか。
それに、自分は何の為に呼び出されているのだろうか。
達也はいい加減、気持ちが焦れていた。
「新人戦が始まる前は、それで十分だと思っていたのだけど……」
彼が気分を害し始めているのが、真由美にも分かったようだ。
取り繕っていた表情に、軽い狼狽の色が混入した。
「ここまで来たら――」
この段階で、達也はようやく彼女たちが自分に何をさせたいのかを悟った。

「――新人戦も優勝を目指したいと思うの」
いつの間にか真由美の口調が、いつもの口調に戻っていた。
「三高のモノリス・コードに一条将輝くんと吉祥寺真紅郎くんが出ているのは知ってる？」
真由美に問われ、達也は無言で頷いた。
「そう……一条くんの方はともかく、吉祥寺くんのことは達也くんの方が詳しいかも知れないわね。
あの二人がチームを組んで、トーナメントを取りこぼす可能性は低いわ。
モノリス・コードをこのまま棄権すると、新人戦優勝は、ほぼ不可能です」
だから、彼に――
「だから達也くん……森崎くんたちの代わりに、モノリス・コードに出てもらえませんか」
――真由美から告げられた「用件」は、達也が途中から予想したものと寸分違わぬものだった。
「……二つほど、お訊きしてもいいですか？」
「ええ、何かしら」
答えは九割方分かっていたが、一応、ハッキリさせておこうと達也は思った。
「予選の残り二試合は、明日に延期された形になっているんですね？」
「ええ、その通りよ。
事情を鑑みて、明日の試合スケジュールを変更してもらえることになっています」
「怪我でプレーが続行不能の場合であっても、選手の交代は認められていないはずですが？」
「それも、事情を勘案して特例で認めてもらえることになりました」
これまた、予想通りの答えだった。
しかし、予想通りの事情だからといって、受け容れられるかどう

かは別問題だ。
「……何故自分に白羽の矢が立ったのでしょう？」
これは質問ではなく、拒絶。
上辺だけの礼儀正しい反応に、真由美は困り顔の愛想笑いを浮かべた。
「達也くんが最も代役に相応しいと思ったからだけど……」
「実技の成績はともかく、実戦の腕なら君は多分、一年生男子でナンバーワンだからな」
ここまでの話を全て真由美に任せていた摩利が、形勢不利と見たのか「説得」に加わってきた。
「モノリス・コードは『実戦』ではありません。
肉体的な攻撃を禁止した『魔法競技』です。
こんなことは自分が指摘しなくとも、ご理解されているはずですが」
「魔法のみの戦闘力でも、君は十分ずば抜けていると思うんだがね」
摩利がチラッと服部に視線を投げ、服部は苦虫を噛み潰した表情に顔を顰めた。
「しかし、自分は選手ではありません。
代役を立てるなら、一競技にしか出場していない選手が何人も残っているはずですが」
今度は摩利からも、反論がなかった。
「一科生のプライドはこの際、考慮に入れないとしても、代わりの『選手』がいるのに『スタッフ』から代役を選ぶのは、後々精神的な痼(しこ)りを残すのではないかと思われますが」
それは多分、彼女たちが最も悩み、最も言われたくなかった部分。
新人戦は新入生の育成という性格が強い。
例え今年優勝できたとしても、来年・再来年の本戦に悪影響があるようでは、ある意味本末転倒だ。
メイン競技の代役にスタッフ、しかも二科生が選ばれたとなれば、残っている選手だけでなく、一年生一科生全体のプライドが、ズタ

ズタに切り裂かれることにもなりかねない。
真由美たちから反論はない。
どうやらこの話はこれで終わり、と判断して、達也がキッパリと辞退の言葉で締め括ろうとした、――その時。
「甘えるな、司波」
克人のズッシリと重みのある声が響いた。

達也は咄嗟に応えを返すことが出来なかった。
何を言われたのか、理解できなかったからだ。
彼が口にしたのは確かに、正論に包(くる)んだ逃げ口上だ。
だが、正論であることも間違いないはずだ。
彼が出れば、三高には勝てなくても、二位にはなれるかもしれない。
モノリス・コードの一位と二位のポイント差は四十点。
二位になれば、新人戦は優勝できる。
しかしその場合、新人戦優勝の立役者は誰が見ても達也だ、ということになってしまう。
それは、薄っぺらいエリート意識に凝り固まった「ブルーム」にとって、受け容れ難い結果に違いなかった。
例え予選敗退という結果に終わったとしても、彼が、「ウィード」がモノリス・コードの代表選手として出場するということ自体が彼らには耐え難いはずなのだ。
「……お前は既に、代表チームの一員だ」
しかし、克人の指摘は、達也の思考のエアポケットを抉るものだった。
「選手であるとかスタッフであるとかに関わりなく、お前は一年生二百名の中から選ばれた二十一人の内の一人」
言外に、克人は言う。
彼の、達也の存在は、既に一科生の精神に大きな衝撃と混乱を与えている、と。

「そして、今回の非常事態に際し、チームリーダーである七草は、お前を代役として選んだ。
チームの一員である以上、その務めを受諾した以上、メンバーとしての義務を果たせ」
「しかし……」
しかし、それでも言わずにはいられない。
それで、彼らが……
「メンバーである以上、リーダーの決断に逆らうことは許されない。その決断に問題があると判断したなら、リーダーを補佐する立場である我々が止める。
我々以外のメンバーに、異議を唱えることは許されない。
そう……本人であろうと当事者であろうと、誰であろうと、だ」
「！」
達也は目を瞠って、言いかけた台詞を中断した。
克人が何を言っているのか、達也にもやっと理解が出来た。
克人は、誰が納得しなかったとしても、どのような結果に終わったとしても、その責任は全て責任者である自分たちが負うと、そう言っているのだ。
「例え補欠であろうとも、選ばれた以上、その務めを果たせ」
この台詞は、九校戦のみを念頭に置いたものではなかった。
――二科生であることを逃げ道にするな。
――言い訳にするな。
――弱者の地位に、甘えるな。
補欠であっても、とは、そういう意味だ。
逃れる道は、全て塞がれてしまった。
また――ここまで言われて、逃げるつもりもなかった。
「……分かりました」
真由美と摩利の顔が安堵に弛んだ。
克人は確りと頷いた。

「……それで、俺以外のメンバーは誰なんでしょうか」
上級生を前にして、少し砕けた口調になったのは意識してのこと。
と言うより今までが、いつもより堅い口調を意識して作っていたのだった。
「お前が決めろ」
「はっ……？」
達也は別に、とぼけたわけではない。
またしても、何を言われたのか理解できなかったのだ。
「残りの二名の人選は、お前に任せる。
今この場で決めるのが望ましいが、時間が必要なら一時間後にまたここへ来てくれ」
「……いえ、選ぶだけなら時間をいただく必要はありませんが……」
達也の脳裏には既に、二人の候補者がピックアップされていた。
「相手が了承するかどうか」
「説得には我々も立ち会う」
……つまり、拒否はさせないということだ。
十文字家の総領は、実はかなり強引な性格だということを、達也は今日初めて知った。
「誰でも良いんですか？
チームメンバー以外から選んでも？」
達也は何だか、愉快な気分になってきた。
存分に悪ノリしてみたくなる気分だった。
「えっ！？　それはチョッと」
「構わん。どうせ例外に例外を積み重ねているのだ。あと一つや二つ、例外が増えても今更だ」
「十文字くん……」
真由美が呆れ顔で軽い非難の目を向けたが、克人の顔面筋は小揺るぎもしなかった。
「では、１－Ｅの吉田幹比古と、同じく１－Ｅの西城レオンハルトを」

「おいっ、司波！」
慌てた声で服部が口を挿もうとしたが、鈴音に手振りで制止される。
「良いだろう。中条」
「は、はいっ！」
過剰な反応を見せたあずさにも、克人は全く気にした様子を見せなかった。
「吉田幹比古と西城レオンハルトをここに呼んでくれ。
確かその二人は、応援メンバーとは別口で、このホテルに泊まっていたはずだ」
豪放で大胆に見えて――実際その通りなのだろうが――こんな細部まで良く知っているものだ。まあ、この時期に正規メンバーでも応援メンバーでもない生徒がこのホテルに宿泊しているというのはかなり異例なことで、そういう事情を知っている者にとっては目につく事ではあろうから、知っていたとしても不思議ではないのだが、それでも達也は克人にすっかり感心してしまっていた。
「……達也くん。その人選の理由を訊いても構わないかね？」
摩利も克人に説得を任せた以上、今更異議を唱えるつもりもないのだろう。
ただ、納得できない、というより不審を覚えていることも間違いないようだった。
「無論です。
最大の理由は、俺が男子メンバーの試合も練習もほとんど見ていないということです」
達也は女子のメンテに掛かりきりで、事実全く、男子一年生メンバーの試合も練習も見ていない。
「俺は彼らの得意魔法も魔法特性も何も知りません。
試合は明日です。一から調べていたのでは、作戦も調整も間に合わない」
「……今の二人なら、良く知っているということか？」

「ええ。吉田と西城のことは、同じクラスであるというだけでなく、良く知っています」
「ふむ……一理ある。
調整は他のエンジニアが手伝うとしても、相手のことが分からなければチームプレイは難しいだろうからな。
それで、『最大でない』理由は何かね？」
「実力ですよ」
「ほぅ……？」
摩利だけでなく、真由美からも、克人からも、鈴音からも、興味深げな視線が達也に向けられた。

◇◆◇◆◇◆◇

「なあ、達也……マジ？」
「七草会長ならともかく、十文字会頭がこんな手の込んだ嘘を吐くと思うか？」
「いや、会長さんならともかく、ってのも俺には良く分からんのだけどよ……
はぁ、やっぱりマジか」
今にも自分の頬を抓り出しそうな勢いで、レオが深いため息を吐いた。
その隣では幹比古が途方に暮れた顔でそわそわと視線を彷徨わせている。
「ミッキー、チョッとは落ち着いたら？」
「僕の名前は幹比古だ」
いつものお約束をこなして少しは気が紛れたのか、幹比古は空いているベッドにどっかりと腰を下ろした。
ここは達也が使っているツイン・シングル。
幹部総出で二人に代役を引き受けさせた後――あれはもう、ほとんど強制だった――今後の段取りを説明する為に、達也が二人を引

っ張ってきたのだ。
そこにエリカや美月がついて来ているのはそれこそ「お約束」だろう。
なお深雪とほのかと雫は、英美やスバルや他のメンバーに捕まって狂躁の輪の中から抜け出せずにいる。
「でもよ……俺も幹比古も、なーんも準備してないぜ？」
「そうだね……ＣＡＤはおろか、僕たちは着る物も用意していないよ？」
「安心しろ。試合用の服を準備していないのは俺も同じだ」
「いや、それ、不安にしかならんのだけど」
すぐさまツッコんできたレオに向かって、達也はヒラヒラと手を振った。
「安心しろ。
それが無理なら、心配するな」
「やっ、それ、同じだから」
今度の打てば響くツッコミは、エリカのもの。
やはりこの二人は、息がピッタリだな、と達也は思った。
「まあ、そうだな。
つまり、同じことしか言えない、ってことだが。
大丈夫だ。
防護服とアンダーウェアは中条先輩に頼んである。
ああ見えて中条先輩は、段取りの良い女性（ひと）だからな。
抜かりなくジャストサイズの物を揃えてくれるって」
ああ見えて、に反論は無かった。
外見に反してしっかり者、という評価に異論は無いようだ。
「ＣＡＤは俺が準備する。
一人一時間でバッチリ仕上げてやる」
ＣＡＤを白紙の状態から魔法師個人に合わせて使用可能な状態まで調整する為には、通常その三倍の時間が必要と言われている。
だが、レオにも幹比古にも余り驚いた様子はなかった。

一つにはこの「一時間」の凄さが良く分かっていないということもあるのだろうが、この四日間で散々「ビックリ箱」を見せられた所為で、「達也なら何でもアリかな」という気持ちが生まれているのだった。

「大丈夫？　もう九時だよ？　自分のもあるでしょう？」

この四人の中では最もＣＡＤの調整の手間を知っているエリカが、唯一、心配そうな目で問い掛けてきた。

「大丈夫だ。自分のなら、十分で終わる」

しかしそれは、杞憂だったようだ。

彼の規格外の加減を改めて思い知らされることになって、エリカは盛大にため息をつくこととなった。

「……十分間ね、そう、十分……

何だか心配するのがバカバカしくなってくるわ」

「残念ながら、それ程余裕があるって訳でもないんだ、実のところ」

「えっ？」

だらけた顔は、達也が珍しく漏らした弱音に、キュッと音が聞こえそうなくらい迅速に引き締まった。

「何せ急な話なんで、作戦らしい作戦も立てられない。練習する時間なんてあるはずもないから、ぶっつけ本番で行くしかない。

大雑把な段取りをつけて後は出たとこ勝負なんて、力ずくとそれ程変わらない。

俺にとっては、不本意な条件ばかりだよ」

「……そっか。

悪知恵が達也くんの持ち味だもんね」

「酷えな、その言われ様」

敢えて偽悪的な表現を使ったエリカに、達也はフッと肩の力を抜き、ついでに顔面筋の力も抜いた。

「さて……決まってしまったことを愚痴っていても何一つ片付かな

いからな……
　市原先輩と中条先輩が必要な機材を揃えてくれている間に、作戦の打ち合わせを終わらせておこう」
「作戦、立てられないって言ったクセに」
　すかさず揚げ足を取りに掛かったエリカの前に、美月が沈鬱な表情で立ち塞がった。（と言うか、単に目の前に立っただけだが）
「エリカちゃん……せめて、達也さんの邪魔をするのは止めようよ」
「ひどっ！
　美月、あたしはこの重た～い空気をどうにかしようと思って……」
「ハイハイ、その重た～い空気がハッチャケて散り散りになる前に、少し静かにしていようよ。
　時間がないって言ったの、エリカちゃんだよ」
　美月も最近ようやく、この友人の扱いのコツが分かってきたようで、以前のように振り回されてオロオロ、ということも少なくなっていた。
「むぅ……」
　軽くあしらわれて頬を膨らませたエリカだが、流石にそれ以上茶々を入れようとはしなかった。
　何を言ってもどういう態度を取っても、彼女は結局の所、達也とレオと幹比古が心配になって、この場にいるのだから。
「まずフォーメーションだが」
　達也も今の茶々を無かったこととして話を進め始めた。
「オフェンスが俺、ディフェンスはレオ、幹比古は遊撃を頼みたい」
「いいぜ。
　けどよ、ディフェンスって、何すりゃ良いんだ？」
「僕も訊きたいな。遊撃って？」
「ディフェンスは、自陣のモノリスを敵の攻撃から守る役目だ。
　モノリス・コードの勝利条件は知ってるだろ？」
「相手チームを戦闘続行不能にするか、モノリスに隠されたコードを端末に打ち込むか、だよな？」

「ああ。それで、モノリスに隠されたコードを読み取る為には、無系統の専用魔法式をモノリスに撃ち込まなきゃならない。
　専用の魔法式が鍵になって、モノリスが二つに割れるんだが、一旦分割されたモノリスを魔法でくっつけることは禁止されている。だが、モノリスの分割を魔法で阻止することは禁止されていない。
　また、専用魔法式の最大射程は十メートルに設定されていて、それ以上の距離で発動させても、鍵として機能しないようにプログラムされている」
「……ってことは、ディフェンスの役目は敵のチームをモノリスから十メートル以内に近づけないこと、鍵の魔法式を撃ち込まれてもそれでモノリスが割れないように抑えておくことか？」
「満点だ。
　普通は対抗魔法で『鍵』の発動を阻止するんだが、例の使い方で硬化魔法でもモノリスの分割を阻止できる。
　――正確には、割れてしまってもくっついたまま、の状態を作り出し維持することが出来る。これなら、割れてしまったモノリスを再びくっつけることにはならないから、ルール違反は取られない」
「言いたかないけど、達也、それは立派な『悪智恵』だぜ……？」
「レオはエリカと同じことを言うんだな」
「止してくれよ！」
「どーゆう意味よ！」
「ハイハイ、エリカちゃん、抑えて抑えて。レオくんも落ち着いて下さい」
　美月の仲裁によって、二人はすぐさま、ぶつけ合った視線を逸らした。
「……『鍵』の方は理解できたけどよ。敵を撃退する方は、どうすりゃ良いんだ？
　殴るのも蹴るのもダメなんだろ？
　自慢じゃないが、遠隔攻撃魔法は苦手だぜ、俺」
「これを使う」

そう言いながら達也が取り出したのは、あの「剣」だった。
「……でもよ、物理的な打撃は禁止されてるんじゃなかったっけ？」
レオがそう言うと、達也は薄い小冊子を差し出した。
「パンフレット？」
それがどうしたんだ？、と問う前に、ページの角が一枚、折ってあるのに気付いて、レオは質問の代わりにそのページを開いた。
「モノリス・コードのルールか……？」
そのページは、モノリス・コードについて、予備知識の無い者用に簡単なルールと、試合の様子が写された写真が印刷されていた。
「そこに書かれてあるとおり、質量体を魔法で飛ばして相手にぶつける攻撃はルール違反にならない」
「質量体を魔法で飛ばして……って言や、そうか。
じゃあ達也、そこまで考えてソレを作ってたのか？」
レオの結構本気な質問に、達也は苦笑しながら首を振った。――無論、横に、である。
「どうも買い被られてる気がするな……これは単に思い付きで作った物だ。
俺はそこまで、何時も何時も悪企みばかりしている訳じゃないぞ」
レオもエリカも、この達也の言い分に納得していないのは何となく分かったが、時間が惜しかったので達也は無視することにした。
「この武装デバイス――『小通連』には、レオの個人設定を済ませてある。
この前言ってた分離距離と持続時間の変数化も処置済みだから、操作を間違えないでくれよ」
「うへぇ、ブッツケ本番かよ」
「明日は全部ぶっつけ本番みたいなものだ。
それに、この前より格段に使い易くなったのは保証するぞ」
「まっ、だったら大丈夫かね」
セリフよりも遥かに不敵な表情で、レオは『小通連』を達也から受け取った。

「次に幹比古の方の役目だが……」
「そうだよ、達也、僕は何をすれば良いんだい？」
幹比古がベッドの上で身を乗り出してきた。
戸惑っているみたいなことを言いながら――実際、急過ぎる抜擢に戸惑っているのだろうが――幹比古は随分前向きに、あるいは、やる気になっているようだ。
少しくらい血気に逸るくらいの方がこの状況では望ましいので、達也はその点については何も言わずに説明に移ることにした。
「遊撃はオフェンスとディフェンス、両方を側面支援する役目だ。この前の雷撃魔法、あの種類の遠隔魔法は他にも持っているんだろう？」
「それは、まあ……」
幹比古の返事は歯切れが悪い。
古式魔法を継承する家では、自分たちが保有する魔法技能を秘匿しようとする傾向が強い。
現代魔法学の下で魔法の分類と体系化が進んだ現状において、その意味は一部の特殊な魔法を除いて形式的なものとなっていたが、すり込まれた価値観が無意識の行動に色濃く反映し続けているということだろう。
しかし明日チームを組んで戦うのだから、今は正直になってもらわなければ困るのだ。
「あの雷撃魔法はＣランクだよな？
低殺傷性魔法は他にどんなものが使える？」
「……あれはあくまで麻痺させることが目的の魔法だからＣランク相当だよ。公開してなかったからランク表には載ってないけど」
「非公開か……じゃあ、明日使うのは拙いんだろうな？」
「いや……構わない。秘密にしているのは魔法そのものの原理じゃなくて発動過程だから。呪符じゃなくて、ＣＡＤで発動すれば問題ないよ。
……達也」

「何だ？」
「達也は……言ったよね？
僕の……吉田家の術式には無駄が多くて、その所為で僕は魔法が思うように使えていないって」
「ああ」
エリカが目を丸くして見詰めている横で、達也は躊躇無く――あるいは、遠慮無く、頷いた。
美月は、両手で口を押さえていた。
レオですら、絶句していた。
古式魔法の名門が、長い年月を掛けて練り上げた術式を「欠陥品」と断ずるなど、余程の自信がなければ出来ることではない。
あるいは、我流が最高と思い込んでいる井の中の蛙、身の程を弁えない浅慮者か。
達也は、後者とは思えない。
「……じゃあ、達也は僕に、もっと効率的な術式を教えてくれるのかい？」
「教えるんじゃない。アレンジするんだ」
「……ゴメン、違いが分からない」
よく見ると、幹比古の両手は強く組み合わされ、微かに、だが確かに、震えていた。
「この前の術式、多分あれは『雷童子（らいどうじ）』の派生形の一種だと思うが、俺に出来ることは、あの術式に含まれた無駄を削ぎ落としてより少ない演算量で同じ事象改変効果を得られる魔法式が構築できるように、起動式を組み上げるだけだ。
使う魔法はあくまで、幹比古が前から知っていた魔法だ」
「……見ただけで分かるっていうのは本当なんだね。
確かにあれは『雷童子』の派生形。術の弱点を衝かれないように、術の正体を分かり難くする偽装が施されている。
でも多分それが、達也の言う無駄につながっているんだろうね」
「長い呪文を必要としていた頃なら、施術の途中で妨害される可能

性に対する備えも有効だろうが、ＣＡＤで高速化された現代魔法では、術式が固有に持つ弱点につけ込むという対抗手段は、起動式の段階で魔法の種類を判別できない限り、ほとんど意味がない。
魔法式から術式を認識して、対抗手段を選択している内に、発動してしまうからな。
現代魔法に対して本当に有効な対抗魔法は、魔法の種類を問わずその効力を打ち消すものだけだ」
幹比古が小さく吹き出した。
その笑いには不思議と、自嘲の色は無かった。
「ハハッ、なるほど……威力では勝っているはずの古式魔法が、現代魔法に敵わない訳だ」
「それは違うぞ、幹比古」
「えっ？」
「古式魔法と現代魔法に、優劣は無い。
それぞれに長所と短所がある。
単に正面からぶつかり合えば、発動速度が圧倒的に勝っている現代魔法に分があるというだけで、知覚外からの奇襲ならば古式魔法の威力と隠密性に軍配が上がるだろう。
老師も仰っていたじゃないか。
要は、使い方だ。
そして俺がお前を推薦したのは、お前の持つ魔法の奇襲力が大きな武器になると考えたからだ」
「奇襲力ね……そんなことを言われたのは初めてだよ。
分かった。僕が使える術式は、呪符だけじゃなくてＣＡＤにも一応プログラムしてあるから、達也が思うとおりにアレンジしてくれよ。
僕は、達也を信じることにするから」
「ありがとう、幹比古。
信じてくれたついでに、もう一つ、教えて欲しいことがある」
「良いよ。必要なことなんだろう？

だったら隠すつもりはない。
僕をここに送り込んだのは父上なんだから、こういう経緯で秘密が漏れても、家として文句は言えないはずだ」
「安心してくれて良い。口は堅い方だ」
「あ～……俺も口は堅い方だ。ここで聞いたことは他言しないと約束するぜ」
「私もです」
「あたしが口、堅いの、知ってるでしょ？」
達也以外の同席者が、競うように口の堅さをアピールした。
最後の一人については、胡散臭げな眼差しを向けた幹比古だったが、感情を理性で納得させて、達也へ向け頷いた。
「じゃあ手短に訊くぞ。『視覚同調』は使えるか？」
答えに少し、間があったのは、躊躇いによるものではなく、驚きによるものだった。
「……そんなことまで知ってるのかい？
九重先生はそんなことまで君に教えているの？」
「まあな」
「……つくづく君には驚かされるよ、達也。
えっと、質問の答えはＹＥＳだ。
『五感同調』はまだ無理だけど、一度に二つまでなら『感覚同調』を使える」
「視覚だけで十分だよ、幹比古。
じゃあ、作戦だが……」

◇◆◇◆◇◆◇

達也が自分で宣言したとおり、レオのＣＡＤの調整は一時間も掛からず終了した。
調整し直した自分のＣＡＤと武装デバイスの二つを受け取ったレオは、武装デバイスの慣熟訓練の相手を買って出たエリカと一緒に、

野外演習場へ向かった。
随分遅い時間だが、レオが一緒なら間違いも起こらないだろうし間違いも起こさないだろうと、達也も妥協したのである。
そして今、幹比古用のＣＡＤを猛スピードで調整している達也の隣で、あずさがそれを、呆然と見詰めていた。
ユーザーとして同席している幹比古も、その独特の調整方法とタイピングのスピードに目を丸くしているが、あずさがショックを覚えているのは、そんな表面的な部分ではなかった。
今、達也が扱っているのは、古式魔法の伝統的な術具で発動することを前提に組み立てられた術式を、現代魔法用にアレンジした起動式。
その「翻訳」はお世辞にもスマートなものではなく、自動翻訳のぎこちなさに似た細かな無駄と細かな間違いが其処此処に散らばっている。
それを修正するだけなら、あずさにもそれほど難しくはない。
だが彼女の目の前で展開されているアレンジは、本格的な起動式の書き換えだった。
起動式から魔法式の作動原理を理解し、魔法式の機能を損なわない形で起動式を書き換える。
起動式は、魔法式の設計図。起動式を書き換えるということは、魔法式を書き換えるということでもある。魔法師の適性に合わせた細かな修正に止まらず、魔法式のプロセスに存在する無駄を取り除き効率化するというレベルになれば、それは最早「修正」や「アレンジ」ではなく魔法式の「改良」であり、魔法そのものの改良と言えるのではないか。
調整前に達也からその方針を示されたとき、あずさは正直、そんなことが可能なのか、と疑った。
だが、あずさの目の前で現に今、実験による検証も無しに、いやそれ以前に、魔法が実際に発動している様子を観測することもなしに、起動式から直接魔法のエッセンスを抜き出し、不必要な部分を

削ぎ落として、新たな起動式として再構成するという作業がエディター上で行われている。

元々新人戦モノリス・コードを担当していたエンジニアに代わって達也のアシストに手を挙げたあずさだったが、こんなクレイジーな作業には到底手が出せない。

せめてこの位、ということで請け負った、書き上がった起動式の文法チェックをしながら、あずさの抱いた疑惑は確信に変わりつつあった。

彼は――司波達也は、断じて高校生レベルの魔工師ではない

それどころが、魔工師という枠をも超えてしまっている

彼こそが――

そんなあずさの混乱を他所に、達也はジャスト一時間で、幹比古用の起動式書き換え作業を終わらせた。

２－（１８）　補欠の義務（後書き）

今回は第２章第１８話と第１９話、二話同時に投稿します。
ゴールデン・ウィークスペシャル、という訳ではなく、来週と再来週の投稿をお休みさせていただく代わりです。
応援してくださっている読者の皆様には誠に申し訳ございませんが、仕事の都合上、５／１０と５／１７はどうしても投稿が出来そうにありません。
重ねてお詫び申し上げます。
次回の投稿は５／２５（月）を予定していますので、その節はまた、よろしくお願い致します。

2－（19）　弱点（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

2－（19）　弱点

新人戦五日目は、困惑の空気と共に幕を開けた。

前日のモノリス・コードで、前例の無い悪質なルール違反があり、その為に負傷・試合続行不能となった第一高校チームは、通常であれば残り二試合が不戦敗となるところを、大会委員会の裁定により代理チームの出場による翌日順延が認められることになった。

モノリスコードの予選は一校が四試合を行い、勝利数の多い上位四チームが決勝トーナメントに進出するという変則リーグ戦を採用している。

勝数が並んだ場合、不戦敗や相手チームの失格による勝利がある場合それを勝数から落とし、不戦敗・失格勝ちが無ければ直接対決で勝利した方、直接対決がなければ勝った試合の試合時間の合計が短い方がトーナメントに進出する。

現在の勝数は第三高校が四勝、第八高校が三勝、第一高校と第二高校と第九高校が二勝で並んでいるが、勝った二試合の試合時間合計は九高の方が二高より短く、一高は四高の失格による勝利が含まれている為、二勝ではトーナメントに進めない。

今日の特例の試合で一高が二高にも八高にも勝った場合、トーナメント進出は一高と三高と八高と九高。

二高に勝って八高に負けた場合も一高と三高と八高と九高。

二高に負けて八高に勝った場合は一高と二高と三高と八高。

二高にも八高にも負けてしまうと、トーナメント進出は二高と三高と八高と九高。

……という、微妙な星勘定になっている。

要するに、一高が本来不戦敗のはずの二高に勝利すると、二高は予選敗退となってしまうのだ。

今回の特例措置に対して、二高が強い不満を示しているのも当然と言える。

かと言って、一勝したところで手を抜いたりすれば、九高が八百長と騒ぎ出すだろう。

「……っていう訳で、八方丸く治める為には、ウチが二試合とも負ければ良いんだろうけど……」

「出る以上は、勝ちに行きますよ。当然でしょう。

そもそも負けたのでは、特例で試合をする意味が無い」

「余計な心配だったみたいね」

とは、達也と真由美の間で交わされた会話。

一高の代役が三人とも登録選手外だったことも困惑の種となった。

実力者トッププテンを揃えているはずの代表選手から代役を選ばずに、一人は技術スタッフ、後の二人は新たに招集したメンバー。

もしや、モノリス・コードのスペシャリストを隠し玉に持っていたか、と憶測する向きもあったが、だったら最初からモノリス・コード単一エントリーのメンバーとして入れておけば済む話であり、各校とも第一高校の意図を測りかねていた。

そして、フィールドに登場した三人の姿が、困惑に拍車を掛けていた。

◇◆◇◆◇◆◇

「……なんか目立ってる気がするんだけど」

「フィールドに立つ選手が注目を集めるのは当たり前だ」

「いや、そういうんじゃなくて……」

達也の嘯きに首を振り、幹比古は遠慮がちにレオへ目を向けた。

「……やっぱり、これが目立ってるんだろうなぁ……」

その視線の意味を理解して、レオは自分の腰に目を落とした。

◇◆◇◆◇◆◇

レオの推測を、客席の声が裏付けていた（もっとも彼らに客席の

声は聞こえないのだが）。
防護服（プロテクション・スーツ）にヘルメットを被った姿は他校のチームと同じ。
だが……
「剣？　直接打撃は反則だろ？」
……レオが腰に差した「剣」が武装一体型ＣＡＤであることを看破した観客が、全体の一割もいなかった。
出場選手・技術スタッフでさえ、武装一体型ＣＡＤの存在を知っている者は少数派なのだから、やむを得ないことかもしれない。
しかも、通常、武装一体型ＣＡＤの使用方法は、一体化した武装――「武器」の性能を高める魔法を編み上げるものだ。
「刀」ならば切断力。「槍」ならば貫通力。「棍棒」ならば打撃力。「盾」ならば防御力。
それは例えば『高周波ブレード』であったり『加速』であったり『慣性増大』であったり『硬化』であったり『リフレクター』であったりするのだが、いずれの場合も通常、武装部分が本来持っている武器としての性能を高める魔法が武装一体型ＣＡＤには組み込まれている。
「剣」であるならば切断力か貫通力か、いずれにしても直接物理攻撃の効果を増幅する魔法が組み込まれているはずであり、モノリス・コードのルールに違反していると、ＣＡＤに詳しい者ほどその様に考えるに違いなかった。
しかし、注目を浴びているのはレオだけではなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

「……出て来たね、彼が」
「そうだな。
選手として出て来るとは思わなかったが」
「二丁拳銃スタイルに加えて、右腕にブレスレット……同時に三つのデバイスなんて、使いこなせるのかな？」

「アイツがやることだ。伊達やハッタリじゃないだろう。
特化型は、左右のレッグホルスターにロングタイプの拳銃形態か」
「隠し玉じゃなくて、最初から二つの特化型デバイスを同時に操作するスタイルだね。
異なる系統の魔法を使いたいだけなら、普通は汎用型をチョイスするところだけど……」
「複数デバイスの同時操作、その狙いを見せてもらおうか」
この、将輝と吉祥寺の会話で象徴されるような視線が、各校の選手とスタッフから達也に注がれていた。
担当競技を悉く上位独占した、忌々しいスーパーエンジニア。
それが、達也が二科生であることを知らない各校メンバーの認識であり、その彼がまたまた披露したイレギュラーなスタイルは、相手校の警戒を招きこそすれ、それを嘲笑する者はいなかったのだ。
唯一の例外は、他ならぬ、第一高校選手団が観戦しているスタンドの一角。
一年生女子選手たちの熱狂的な声援と、対照的な一年生男子選手たちの皮肉で冷ややかな視線。
相手チームに対する声援と、
その全てを圧する無数の好奇心。
その中で、第八高校との試合が始まった。

◇◆◇◆◇◆◇

「八高相手に森林ステージか……」
「不利よね……普通なら」
第八高校は魔法科高校九校の中で最も野外実習に力を入れている学校であり、森林ステージは彼らのホームグラウンドのようなものだ。
ステージの選定は乱数発生プログラムによってランダムに行われる、という建前になっているが、特例試合に本来ならば不戦勝だっ

たチームに有利なステージが選ばれた、というのは作為の介在を疑わずにいられない。
――が、真由美も摩利も、他の幹部たちも、それほど心配していなかった。
彼が「忍術使い」九重八雲の個人的な教えを受けているということは、第一高校の首脳部にとって周知の事実であり、森林ステージのような遮蔽物の多い環境は「忍術」が最も得意とするフィールドだということも、彼らにとっては常識だった。
だが、その「事実」を知らない相手校にとって、それは大きな計算違いだ。
双方のスタート地点――モノリスが置かれた場所の間には、直線距離で八百メートル。
プロテクション・スーツを着け、ヘルメットを被り、ＣＡＤを携えた状態で、樹々の間を縫いながらこの距離を走破する為には、最低五分は掛かる。
まして敵に警戒しながら進むとなれば、途中戦闘がなかったとしてもその倍の時間は掛かると見るべきだ。
ところが――開始五分も経たない内に、八高のモノリス近くで戦端が開かれた。

◇◆◇◆◇◆◇

選手の姿はルール違反監視用のカメラが追いかけている。
その映像は、客席前の大型ディスプレイに映し出される。
障碍物の多いステージでは、この映像が観客の頼りとなる。
今、空中に吊るされた大型ディスプレイに、八高ディフェンダーの前に躍り出た達也の背中が映し出されていた。
「速い……！」
「自己加速か？」
吉祥寺の呟きに、目を画面に固定したまま将輝が質問の形で応え

る。

一瞬映し出された背中は、次の瞬間、画面の外に出ていた。

その向こうには片膝をついたディフェンス選手の姿。

画面の角度が変わり、ディフェンダーの右側面に回り込んだ達也がモノリスへ向かって疾走する姿を映し出している。

「いや、移動に魔法を使っている様子は無いけど……あっ！」

ディフェンダーがＣＡＤの銃口を達也へ向けた。

先程の達也の攻撃は、相手の体勢を崩すに留まっていたようだ。

ショートタイプの特化型ＣＡＤが、起動式を展開。

その直後、サイオンの視覚化処理が施された画面は、その起動式が急激に拡散するサイオン粒子の衝撃波――サイオンの爆発に消し飛ばされる様を映し出した。

さっきは、確かに、左手にＣＡＤを握っていた。

背中越しに見えた限りでは、右手は空いていた。

だが今、画面の中の達也は、走りながら右手に握ったＣＡＤの銃口をディフェンス選手へ向けていた。

「何時の間に？」

抜いたんだ？　という言葉が省略された将輝の問い掛け。

だが吉祥寺の応えは、質問に対する答えではなかった。

「今のは、まさか……術式解体（グラム・デモリッション）！？」

「術式解体だと！？」

◇◆◇◆◇◆◇

起動式が破壊された衝撃で棒立ちになったディフェンダーを尻目に、達也はモノリス手前で右手の引き金を引いた。

「やった！　モノリスが開いたわ！」

達也が打ち込んだ鍵が作動し、敵チームのモノリスが二つに割れたのを見て、ほのかが手を叩きながら飛び上がった。

「……おかしい」

だがその隣で雫は、訝しげに眉を顰めた。
「雫、何がおかしいの？」
一年生女子が集まった中で、英美が雫に問い掛けた。
「モノリスが開いたのに、何故離脱するんだろう？」
雫の言うとおり、達也はモノリスのコードを読み取る為に接近するのではなく、走るコースを変えて樹々の陰へ飛び込んでいた。
「そう言えば……ねっ、深雪、どう思う？」
「いくらお兄様でも、敵の妨害を前にして五百十二文字の打ち込みは難しいわ」
左腕につけたクラムシェル型のウェアラブルキーボードが、コードを打ち込み送信するための端末だ。
いくら達也のタイピングスピードが速いといっても、この扱い辛いキーボードで五百十二文字のコードを打つには、それなりの時間が掛かっても仕方が無い。
「そうか……ディフェンスを無力化する前に鍵を使うなんて、見るの初めてだから」
雫が言い訳のように呟く中で、ディフェンスが達也を追いかけて樹々の間へ突っ込んだ。

◇◆◇◆◇◆◇

「今のは……あれは……」
達也が使った対抗魔法に最も衝撃を覚えていたのは、摩利だったかもしれない。
喘ぐ様に、意味の無い言葉を漏らす隣で、真由美が妙に感情の希薄な声で呟いた。
「……『術式解体』か……もしかしたら、と思ったけど、達也くん……使えたんだね」
「真由美、今のが何か、知っているのか！？」
掴み掛からんばかりの勢いで迫る摩利にチラッと視線を投げて、

真由美はすぐに視線をディスプレイへ戻した。
「術式解体は、圧縮したサイオン粒子の塊をイデアを経由せずに対象物へ直接ぶつけて爆発させ、そこに付け加えられた起動式や魔法式なんかの、魔法を記録したサイオン情報体を吹き飛ばしてしまう対抗魔法よ。
魔法の記録（グラム）を粉砕（デモリッシュ）する魔法だから、グラム・デモリッション。
魔法と言っても、事象改変の為の魔法式としての構造を持たないサイオンの砲弾だから情報強化や広域干渉には影響されないし、砲弾自体の持つ圧力がキャスト・ジャミングの影響も撥ね返してしまう。
物理的な作用は一切無いから、どんな障碍物でも防ぐことは出来ない。
そうして、対象座標で発動途中の魔法を力ずくで吹き飛ばしてしまうの。
強力なサイオン流で迎撃するか、サイオンの壁を何層も重ねて防御陣を作ることで、ようやく無効化できる。
射程が短い以外、欠点らしい欠点が無い、術式解散（グラム・ディスパージョン）と並んで最強の対抗魔法って呼ばれている無系統魔法だけど……使える人はほとんどいないわ。
私にも無理。
術式を乱すんじゃなくて、吹き飛ばす圧力なんて、私のサイオン保有量じゃ作り出せないから。
本当に、超・力技なのよ」
「……つまり、大男が力任せにハンマーを振り回して建物を壊しているようなものか？」
摩利の回りくどい例えに、真由美はプッと吹き出した。
「余裕ね、摩利。そんな嫌味が言えるなんて。
でも概ねそのとおり。
はんぞーくんとの試合で、達也くんって繊細な技巧派だと思ってたんだけど……実は凄いパワーファイターだったのね」

「じゃあ、やはり、事故の時……」
「そういうこと、でしょうね。
あれだけ重ね掛けされた魔法式を消し飛ばしてしまうなんて……
一体どれ程のサイオン粒子量なのかしら……」

◇◆◇◆◇◆◇

八高のフォーメーションは、ディフェンス一人、オフェンス二人。
左右に分かれて進攻する二人のオフェンスのうち、一人が一高の本陣へたどり着いた。
「ああん、達也くん、早くしないと！」
「レオくん、頑張って！」
エリカと美月が見詰める先で、レオは敵が姿を見せる前に、腰の「剣」を抜き放っている。（自校のモノリスが置かれている地点は、応援席から直接見える）
木の陰からオフェンスが姿を見せた。
手に持つＣＡＤは、チームメイトが携えていたのと同じタイプの特化型。
モノリスを開くより先に、ディフェンス、つまりレオを倒す意図が明らかだった。
オフェンス選手が銃口をレオへ向けるのと、
レオが武装デバイス『小通連』を横薙ぎに一振りしたのは、
全く同時だった。
「やった！」
「やるわね、アイツ！」
美月とエリカ、二人の口から歓声が上がった。
八高の選手は、木立の間を抜け真横から弧を描いて飛来した金属板によって、強かに打ち据えられ転倒していた。
木の配置から計算された迎撃位置に立っていたレオは、注文どおりの距離で立ち止まったオフェンス選手を、分離した刀身で殴りつ

けたのだ。
勢い良く飛んで来た「刃」と合体して元の姿に戻った「剣」を、レオは天に向けた。
その手元から「刃」が垂直に撃ち出され、空中高くに、静止した。
「ウォオオリャァァ！」
雄叫びと共に振り下ろされた「刃」は、運動半径に相応しい速度を以って、倒れ伏す八高の選手に止めを刺した。

◇◆◇◆◇◆◇

「何ですか、今のは？」
声を荒げるようなことは無かったが、問い掛ける鈴音の口調は、持ち前の冷静さが少し刃毀れしている様にも聞こえた。
「司波くんが開発した武装デバイスとオリジナル魔法、『小通連』です」
答えを返したのは、昨晩調整を手伝った時にその存在を知ったあずさだった。
「武装デバイスと同じ名前のオリジナル魔法ですか……一体どういう仕組みなんですか？」
簡潔なあずさの説明に、鈴音は繰り返し頷いた。
「なるほど、斬新な発想です。ですが、司波君にしては随分、杜撰なシステムですね」
「杜撰、ですか？」
鈴音は、小首を傾げたあずさに、言い含めるような口調で答えた。
「ええ、この魔法は使用者の肉体的な条件と、使用できる環境条件が著しく限定されています」

◇◆◇◆◇◆◇

第八高校三人目の選手は、樹々の間を彷徨っていた。

森林ステージと言っても富士の樹海を会場に使っている訳ではなく、演習場の一部に人工の丘陵地形を作りそこに樹木を移植した、あくまでも訓練の為のフィールドだ。

既に移植から半世紀が過ぎて自生化しているが、八百メートル程度の道程を迷うような密林ではない。

だが現実に、八高の選手は自分の現在位置を見失っていた。

「何処だ、畜生！　こそこそ隠れてないで姿を見せろ！」

苛立ちが剥き出しになった声で喚きながら、八高選手は超音波を打ち消す魔法を発動する。

超音波の威力自体は、大したことがない。

せいぜい、軽い耳鳴りがする程度だ。

だがその耳鳴りが妙に鬱陶しかった。

選手が被っているヘルメットは軍が使用している物とはいっても、衝撃と圧力から頭部を守ることだけを目的とした一般歩兵用の基本装備で、ガスや音波の遮断効果は無い。耳の部分には音を通す為の細かな穴が多数開いている程だ。目を保護するシールドも鼻の上までしかなく、口元は剥き出しになっている。

音波攻撃を受ければ、自分の魔法力で防御しなければならない。

八高の選手は、チームメイトでお揃いのＣＡＤをホルスターにしまって、予備の携帯端末形態・汎用型ＣＡＤをポーチから取り出し、断続的に襲ってくる超音波に対抗しながら敵チームのモノリスへ向かっている、つもりだった。

しかし何時まで進んでも、敵の本陣が見えてこない。

彼は気付いていなかった。

超高周波音と超低周波音を交互に浴びせられ、高周波音にばかり気を取られている内に低周波音によって三半規管を狂わされてしまっていたことに。

視界が制限され、右に左に次々と方向転換――回転を重ねなければならない状況で、回転を知覚する器官を狂わされては、自分が今どちらを向いているか正確に把握できなくなるのも当然のことだ。

方向を見失ったという自覚があれば磁石（コンパス）を見るという対応も取れるが、気付かぬ内に感覚を狂わされては、迷うはずが無い人工的な環境であるが故にこそ、修正が効き難い。

八高の選手はこの「思い込み」の陥穽に落ちてしまっているのである。

この罠を作り上げたのは幹比古だった。

ＳＢ魔法『木霊迷路』。

反撃しようとしても、方向感覚が狂わされているから術者の位置が分からない。

いや、仮に方向感覚が正しく機能していたとしても、幹比古の居場所は掴めなかっただろう。

幹比古は精霊を介して、この音波攻撃を仕掛けていたのだから。

仮に魔法の発信源を突き止められたとしても、それは精霊が漂う座標でしかない。

相手に居場所を掴ませない隠密性。

これこそが精霊魔法、幹比古の流派で言う「神霊魔法」の最大の武器だった。

前に進んでいるつもりで後戻りしている八高選手の後をつけながら、そろそろ次のミッションへ移行しようか、と幹比古は考えた。

◇◆◇◆◇◆◇

ディフェンダーをモノリスから引き離し、樹々の間に誘い込んだところで、達也は迎撃か、連携か、どちらの戦術を選択するか考えた。

迎撃は、彼がディフェンス選手をコードを打ち込むのに必要な時間、行動不能の状態にする。

連携は、彼がこのままディフェンス選手を引き付け、幹比古がコードを入力する。

思案は一瞬。

達也は迎撃を選択した。
左のＣＡＤを抜き、地面に向けて引き金を引く。
加重軽減の術式が発動し、軽く地面を蹴った身体は樹上に舞い上がった。
魔法を使った以上、相手に自分の居場所が分かったはずだ。
魔法の行使には、エイドス側から不可避の反動が生じる。
この波紋を辿れば術者の位置から、熟練者であれば使った魔法の種類まで分かるが、今の微弱な魔法から、加重軽減の魔法を使ったと八高の選手は見分けられただろうか？
仮に魔法の種類を見分けられたとして、それを樹の上に跳び上がる為に使ったということまで推測できただろうか？
――その方が、達也にとっては望ましい。
彼は枝の上から隣の樹へ、魔法を使わずに跳び移った。
脚のバネで樹の揺れを、ほぼ完全に抑え込む。
果たしてディフェンダーは、彼が跳び上がった地点で立ち止まった。
その視線が、上へと動いた。
その背中へ向けて、達也は右手の引き金を引いた。

◇◆◇◆◇◆◇

ディスプレイの解析画像は、無系統魔法のサイオン波が八高のディフェンダーに浴びせ掛けられる様子を映し出していた。
よろめき、崩れ落ちるディフェンス選手。
「……『共鳴』、だろうね。無系統の」
「生体波動とサイオン波の共振で倒したのか」
吉祥寺の言葉に将輝が頷いた。
「どうやら、右手のデバイスが無系統、左手のデバイスが加重系統って使い分けてるみたいだ」
「ジョージ……アイツの無系統魔法、妙に古式魔法っぽいと思わな

いか？」
「将輝もそう思うかい？
修験道か……忍術か。
生体波動――古式だと『気』って言うのかな、その操作を得意とする系統の魔法に似てるね」
「今は古式の連中も、『気』なんてイカサマくさい言い方はしてないと思うぞ」
「うわっ！？
揚げ足を取るなんて、らしくないよ、将輝」

◇◆◇◆◇◆◇

八高のディフェンダーは完全に行動力を喪失した訳ではなかった。
少なくとも、意識は保っている。
しかし今の彼に、達也を追う脚力は無い。
達也は枝をしならせ、その反動で大きく跳躍した。
地面に向けて左手の引き金を引き、着地姿勢をほとんど取らず疾走へ移行。
瞬く間にモノリスへ到達した。
クラムシェルのカバーを開けて、滑らかにコードを打ち込む姿がディスプレイに映し出されている。
八高応援団の悲鳴を遠くに聞きながら、真由美は何となく、摩利の方を見た。
摩利も、真由美の方を見ていた。
「……勝ったな」
「……勝ったわね」
これで、決勝トーナメント進出が決まった。
だが二人は何故か、諸手を挙げて喜ぶ気になれずにいた。

◇◆◇◆◇◆◇

コードが受信され、試合終了のサイレンが鳴った。
一高の校旗が掲揚されるその途中から、第一高校の応援席は大騒ぎだった。
「勝った！　勝った！！」
「すごいすごいすごい！
完勝ですよ、完勝！」
「おめでとう、深雪！」
「お兄さん、やったじゃない！」
黄色い声ではしゃいでいるのは、一年生女子選手たち。
まるでもう、優勝したような騒ぎだった。

◇◆◇◆◇◆◇

一般客席では、もう少し落ち着いた祝賀風景が繰り広げられていた。
「ふぅ～……心臓に悪いわ、コレ」
「なんで？　達也さんもレオくんも吉田くんも、全く無傷なのに？」
「いや、なんか達也くん以外は危なっかしくてさ……」
「？　変なエリカちゃん」
美月に変人扱いされたことに対して、エリカの方には十も二十も反論があったが、友人をむやみに不安がらせるのは彼女の趣味ではなかったので、今回は変人扱いに甘んじておくことにした。

◇◆◇◆◇◆◇

次の試合、一高ｖｓ二高戦は三十分後に指定された。
必要以上にインターバルが短い気もするが、確実に今日対戦することになる（と確信している）将輝たちが心配することではない。
寧ろ、一高選手の消耗は歓迎すべきことだが、そういう考え方をし

ていると性根が卑しくなっていきそうなので、意識的に頭の中から追い払った。

次のステージはまだ発表されていない。

試合が終わった後のスタンドに腰掛けたまま、将輝はやはり隣席に座ったままの吉祥寺に話し掛けた。

「今の試合、どう思う？」

「将輝が訊きたいのは試合の総括じゃなくて、『彼』のことだよね？」

省略した言葉を正確に補足されて、将輝は苦笑いを漏らした。

「そうだ。ジョージ、お前ならヤツをどう攻める？」

「彼は凄く、戦い慣れている気がする。

身のこなし、先読み、ポジション取り……魔法の技能よりも、戦闘技術の方が警戒すべきじゃないかな」

「その魔法技能はどうだ」

「そうだね……『術式解体』には驚かされたけど……最後の『共鳴』、背後から完全な狙い撃ちだったにも関らず、意識を刈り取るには至らなかった。

その辺りに攻略の糸口があるんじゃないかな？」

「フム……」

「考えてみれば、最初の接触のときも、多分あれは加重系統魔法で重力バランスを崩して相手を転倒――投げ倒そうとしたけど、片膝をつかせるに留まった、ってとこだと思う。

樹の上に跳び上がった重力軽減魔法だって、それだけで身体を持ち上げる出力は無かった。

彼はそれ程、強い魔法が使えないんじゃないかな？

もしかしたら、普段極めて高性能なデバイスを使っている反動で、スペックの低い競技用デバイスだと実力を出せないのかもしれない」

「ありそうなことだな。

あれだけのアレンジスキルがあれば、ハードの方も高度にチューンナップされた物を使っている方が自然だ。

急な代役だった所為で、スペックの低いデバイスに慣れる暇が無かったという可能性は高い」

「本当の事情は分からないし、分かる必要も無いんじゃない？　とにかく魔法力だけを見れば、『術式解体』以外は警戒する必要も無いと思う。

最後に八高のディフェンダーが引っ掛けられたように、彼の駆け引きに嵌ってしまう事こそ警戒すべきだよ」

「――正面からの撃ち合いなら恐れるに足りない、ということか？」

「そうだね。

どうやって力ずくの真っ向勝負に引きずり込むか……それができれば、百パーセント、将輝が勝つよ。

例えば試合が『草原ステージ』だったら、九分九厘、こちらの勝ちだ」

◇◆◇◆◇◆◇

次の試合を待つ一高選手控え室では、幹比古がソワソワと落ち着かなげに立ったり座ったりを繰り返していた。

「幹比古……少しは落ち着いたらどうよ？」

試合後の微調整を済ませた『小通連』を、その重みを確かめるようにユラユラと振りながら、レオが呆れ声で言葉を掛ける。

「レオ……君はよく平気だね。その……普段接点が無いクラスの人たちばかりなのにさ」

何がだよ？　という視線を向けられて、苦し紛れに幹比古が捻り出した答えに、深雪がクスッと艶やかな笑みを漏らした。

「吉田君は、意外と人見知りなんですね」

力を抜き背もたれに身体を預けるような格好で座っている達也の背後に立ち、その肩を揉みながら、深雪は輝き出さんばかりの笑顔を幹比古に向けた。

「幹比古の態度の方が普通だと思うぞ？

少年はシャイなんだよ、深雪」
「まぁ、お兄様ったら。
シャイなお兄様なんて、深雪は見せていただいたことがありませんよ？」
閉ざしていた目を薄く開き、首を逸らして下から見上げてくる達也に、深雪はコロコロと笑いを溢す。
その間にも、彼女の白魚のような指は兄の肩を優しく揉み解している。

――確かに僕は人見知りだけど！――
――それ以上に貴女たちを見ているのが恥ずかしいんです！――

……と口に出来ない幹比古は、苦労人の素質十分だった。
と、そこへ、キャンバスの仕切り（と言っても本当に麻で織られている訳ではなく、二十一世紀仕様のハイテク布なのだが）をめくって、真由美とあずさが入って来た。
兄妹の姿を認めた瞬間、二人はカチンと固まり、あずさの顔は見る見る茹で上がった。
真由美はそこまで赤面することは無かったものの、薄汚れた野良犬でも見るような目を達也へ向けた。
「……何だか酷く非難されているというか、蔑まれている気がするんですが？」
「気の所為よ」
姿勢を正した達也に素っ気無く言い放ち、真由美は横を向いて「コホン」と一つ、咳払いをした。
顔の向きを戻した時には、既に、達也は立ち上がっていた。
（何だか……軍人さんみたいよね、この子って……）
軽く足を開き、背筋を伸ばし、手を後ろに組んだ立ち姿が凄く自然で、緊張しているとか鯱張（しゃちほこ）っているとか粋がっているとか、少しもその手の違和感を感じさせない。

対する自分の振る舞いが、如何にも子供っぽく思えてしまう。
「……本当に、何でもないの」
その結果、言わずもがなの言い訳を口にしてしまった真由美は、軽い自己嫌悪を抱えながら、さっさと用事を済ませてしまおう、と思った。
「次の試合のステージが決まったから」
「わざわざ知らせに来て下さったんですか。
ありがとうございます」
真由美の台詞を途中で攫い、目線で「それで、何処です？」と問い掛ける達也。
「市街地ステージよ」
真由美の言葉は、達也を絶句させるほど意外なものだった。
「……昨日あんな事があったばかりで、ですか？」
「ステージの選定はランダムだもの。そんな事は考慮されないんでしょうね」
「はぁ……」
建前もそこまで徹底すれば立派なものだ、と達也は思ったが、口にしたのは別のことだった。
「早速移動します。ＣＡＤの調整は終了していますので」
「ご苦労様」
真由美が頷いたときには、既にレオと幹比古が準備に掛かっていた。
とは言っても、上半身だけ脱いでいた防護服を着直し、ヘルメットとＣＡＤを携える。
準備はそれだけだ。
ジャケットに袖を通して、ファスナーと留め金をシッカリ締める。
「あの、司波くん……」
ホルスターを巻いてＣＡＤを収めたところで、達也はあずさに話し掛けられた。
「何でしょうか？」

「西城くんのデバイスは……どうするんですか？」
「どうする、とは？」
「だって……室内とか階段が張り出したビルの谷間とかじゃ、『小通連』は使えないんじゃありませんか？
あの魔法は刀身を宙に浮かせるだけで、打撃力はそれを振り回すユーザーの腕力に依存しているもの、でしょう？　刀身が『伸びている』ことによって同じスイングで高速の打撃が可能になるというメリットはそのまま、振り回すだけのスペースが無ければ相手を倒すだけの勢いを稼げない……ということになると、」
「市原先輩が仰っていたんですね？」
見事に裏事情を看破されて、あずさは先程と別の意味合いで赤面した。
「流石は市原先輩、正確な分析です。
ですが、ご心配には及びませんよ。
室内であっても、ロングソードを振る程度のスペースはあります。
十メートルの剣として使えなければ、一メートルの剣として使うまでです」
達也の目配せを受けたレオは、「任せておけ」とばかりに頷いた。

2－（19）　弱点（後書き）

今回は第2章第18話と第19話、二話同時に投稿します。
ゴールデン・ウィークスペシャル、という訳ではなく、来週と再来週の投稿をお休みさせていただく代わりです。
応援してくださっている読者の皆様には誠に申し訳ございませんが、仕事の都合上、5／10と5／17はどうしても投稿が出来そうにありません。
重ねてお詫び申し上げます。
次回の投稿は5／25（月）を予定していますので、その節はまた、よろしくお願い致します。

2一（20）　精霊の眼（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

2－（20）　精霊の眼

一高ｖｓ二高の試合は、昨日の事故にもめげず、双方のモノリスが屋内の中層階――具体的には五階建ビルの三階に設置された。

自分たちの責任・過失をあくまで認めようとしない強情さは、魔法大学も事務方は官僚機構なのだと再認識させられるものだった。

――もっとも、昨日の「事故」は大会運営側の責任とも過失とも言い切れない部分もある。

それに達也としては、見通しの良い屋外に置かれるより、いくらでも隠れる場所があるビルの中の方が都合が良かったから、文句を言うつもりは全く無かった。

彼は今、二高のモノリスが設置されているビルの最上階に潜んでいた。

二高の索敵を掻い潜って隣のビルへ回り込み、魔法を使わずに屋上から屋上へ跳び移ると言う荒業でディフェンダーに気付かれることなくここまで接近したのである。

建物の陰から陰へ、身を隠しながらの接近だったから、ここまで辿り着くのに随分時間が掛かっている。

この試合は負けても決勝トーナメントへ進めるとはいえ、トーナメントの組合せは予選の一位と四位、二位と三位だ。準決勝で三高と当たるのと、決勝で三高とぶつかるのとでは、意味合いが全く異なってくる。

今回は幹比古をレオのバックアップに残しているが、余り時間は掛けられない。

「幹比古、聞こえるか」

『聞こえるよ、達也』

モノリス・コードで通信機の使用は禁止されていないが、使用する学校は少ない。

内容は解読できなくても、電波の発信地点くらいなら、今の技術

で簡単に探知できるからだ。
それに僅か三人のチームでこれだけ広いフィールドでは、通信機を使用しなければならないほど離れてしまうと、意味のある連携はほとんど不可能になる。
それでも今回、達也が通信機を使用しているのは、無論、意味がある。
「やるぞ。モノリスの位置を探査してくれ」
『こっちも、そうはもちそうにない。急いで』
「了解した」
向こうは既に交戦状態のようだ。
達也は右手のブレスレットを操作して、喚起魔法を発動した。

◇◆◇◆◇◆◇

気合と共に、レオが『小通連』を横に薙いだ。
長さ三十センチ、幅七センチの小さな金属片――刀身の片割れが弧を描いて飛翔し、二高の選手を襲う。
刀身の重量不足を腕力で押し切り、レオはオフェンスの足を刈り取った。
転倒する二高オフェンス。
これが「実戦」ならば、駆け寄って踏みつけ止めを刺すところだが、モノリス・コードのルールは肉弾戦を禁じている。
「幹比古！」
聞こえないと知りつつ、ビルの何処かから精霊を介してこの部屋を「観て」いる幹比古に合図を送るレオ。
返事は、空中に生じた球電の形で返された。
電撃が、二高の選手を撃つ。
しかしレオには、一人撃退の戦果を喜ぶ暇は無かった。
自分の身体に移動魔法が仕掛けられたのを察知し、レオは慌てて叫んだ。

「Ｈａｌｔ！（ハルト！）」
ヘルメットの口元に仕込んだマイクを通じて、音声認識スイッチが左腕のＣＡＤを作動させた。
二つのＣＡＤを同時に使ったパラレル・キャストだが、発動する魔法が同じ種類のものであれば、混信による発動障害は生じない。
幸い――この場合は、という限定がつくが――レオの私有ＣＡＤは頑丈さと機械的な信頼性を重視したもので、起動式展開のスペック面では二世代前の物、つまり九校戦の規格に収まる物だった。
音声認識スイッチの曖昧さとタイムラグは達也の趣味に合わないのだが、今回は本人の慣れを優先すべき状況、ということで、インストールされている起動式に（大幅に）手を加えただけで、私有のＣＡＤをそのまま使わせているのである。
そしてその目論見どおり、レオのＣＡＤは完全な「後出し」だったにも関らず、移動魔法による敵の攻撃をブロックする魔法を間に合わせた。
自分が立っている所――自分の靴裏と接触している面を基準点として、自分の肉体と基準点の相対座標を固定する魔法。摩利がバトル・ボードで使っていた魔法の応用、と言うかダウングレード版だ。
水上を移動するボードと自分の身体の相対位置を固定しながらも肉体を自由に動かせるよう構成していた摩利の魔法と違って、レオが今使った『固定』の魔法は不動の床を基準点とし自分の四肢頭部胴体が動かないようにするもの。継続時間もほんの一瞬だ。
だが大幅にダウングレードされているが故に、敵の魔法が発動している途中からでも、その相殺を間に合わせることが出来るのである。
このビルは、学校の校舎を想定しているのだろう。
破れた窓から、廊下を横切る敵選手の姿が見えた。
レオは右手を引いて突きを繰り出す体勢を作ったが、敵は既に走り去っていた。
倒れたまま時折痙攣しているオフェンス選手へ慎重に接近して、

ヘルメットを脱がせる。
これは「首を取った」という意味の象徴的な行為であり、ヘルメットを取られた選手はそれ以上の競技行動を禁止される。
（さて、とりあえず一人かよ……）
通じないと知りつつ、レオは頭の中で話し掛けた。
（頼むぜ、達也。
こっちは結構ギリギリだ）

◇◆◇◆◇◆◇

達也の喚起魔法によって、彼に貼り付けられた精霊が活性化した。
彼にＳＢ魔法は使えない。
活性化したＳＢ（心霊存在）を察知することは出来ても、ＳＢの種類を見分けられないのだから、制御のしようがないのだ。
だが、喚起魔法を発動するだけなら出来る。
人為的に作られた彼の仮想魔法演算領域は、意識領域内に作られているが故に、起動式（＝魔法式の設計図）が記述されている魔法式であれば如何なる魔法であろうと、起動式を意識的に読み解くことで、魔法式を組立てて投射するところまでならば可能なのである。
それは魔法を使っているというレベルではなく、単に魔法発動のプロセスを模倣しているだけに過ぎない。
だがそこに必要な情報が記述されていれば、模倣であろうと記述された範囲の効果は発揮する。
幹比古が不活性化して達也に貼り付けた精霊は、達也の魔法によって再活性化された。
そして元々の「主」である幹比古との間に、すぐさまリンクを確立する。
達也には精霊を制御することが出来ない、が、この場合は彼が制御する必要は無いのだ。
ある意味、彼の役目は、幹比古とリンクしている精霊を敵の本陣

へ連れて来ることだったのだから。
今の魔法によって、ディフェンダーが彼の存在に気付いたことだろう。
相手がモノリスを離れ、この階に上がってくるなら望むところ。
達也は足を忍ばせて移動を開始した。

◇◆◇◆◇◆◇

自分が「契約中」の精霊に呼ばれ、幹比古は達也が「喚起」に成功したことを知った。
（本当に、何で君が二科生なんだい、達也……？）
心の片隅でそんな呟きを漏らしながら、幹比古は遠く離れた精霊へ意識を集中する。
実のところ、魔法にとって物理的な距離は、余り関係ない。
巨大な情報プラットフォームであるイデアには、物理的な距離などそもそも存在しないからだ。
本来であれば、イデアを経由しない、サイオンを直接撃ち出す類の無系統魔法だけが物理的な距離の影響を受ける。
だが、人間は五感に縛られ、経験に縛られるものだ。
物理的な距離が遠ければ、「遠い」と認識してしまう。
この認識上の距離が、魔法にとっての「距離」となる。
認識上の距離が遠くなれば、それだけ魔法も効き難くなる。
だから、遠くのものに魔法を掛ける秘訣は、対象物を近くに感じることなのだ。
その点、ＳＢ魔法――精霊魔法は、精霊と意思を通わせることで、精霊を近くに感じることが出来る。
精霊魔法は、物理的な距離を飛び越えやすい魔法と言える。
――今のように。
（……見えた）
視覚同調。

招き寄せた精霊から話を聞くのではなく、影響下に置いた精霊からイデアを経由したリンクを通じて情報を取得する技術が、精霊魔法の『感覚同調』。

それを視覚情報に限定することによって、より鮮明な映像を取得する技が『視覚同調』である。

幹比古は風の系統に属する精霊を操ることで、容易に敵モノリスの位置を突き止めた。

「達也、見つけたよ」

だが、ここからが本番だ。

幹比古は敵陣の精霊とレオにつけた精霊、二つのリンクを維持したまま、達也に話し掛けた。

◇◆◇◆◇◆◇

（早いな……もう見つけたのか）

精霊魔法とは便利なものだ、と呑気なことを考えながら、彼の肉体は最高度の緊張を保っていた。

何せ今彼は、天井にぶら下がっているのだから。

左右に眼を配りながら慎重な足取りでディフェンダーが通り過ぎて行く。

通信の声を聞きつけたのだろうが、まさか頭上にいるとは思い至らなかったようだ。

いや、と達也は思う。

彼の見るところ、この選手は緊張による視野狭窄を起こしている。

階段を駆け上がってきたのか、少々息も乱れていた。

あまりディフェンス向きの選手ではないように思えたが、敵の配役ミスは歓迎すべきことであって、同情するのは偽善というものだろう。

このままやり過ごそうか、とも考えたが、達也は身体を支えていた両手を離し、身を捻って着地する空中で右腰からＣＡＤを抜いた。

着地と同時に引き金を引く。
相手は振り返る素振りも見せない。
発動した魔法は、単純なサイオンの衝撃波。
ほんの数秒、脳震盪の錯覚を誘発して戦闘不能にするだけの術式。
実戦であればその数秒は決定的なアドバンテージとなるが、これは直接攻撃が禁止されたスポーツの試合。
達也は相手選手の体勢が崩れたのを眼の端に留め、幹比古からもたらされた座標の真上へ向けて走った。
僅か二部屋の目的地点まで、十秒も掛からない。
ディフェンダーがようやく動き出した気配を捉えながら、達也は真下へＣＡＤを向けた。
このビルは一階層の高さが三メートル五十。
五階の床から三階の床まで、約七メートル。
余裕で「鍵」の射程、十メートル以内だ。
引き金を引く。
微かなエイドス改変の手応えが返って来た。
達也は念の為、来た方向とは逆側の階段から、下の階へ向かった。

◇◆◇◆◇◆◇

精霊と同調した視覚は、幹比古にモノリスの内側に刻まれたコードを見せていた。
視点を移す。
現在、レオは敵と接触していない。
少しばかりの幸運を祈りつつ、精霊から送られてくる視覚情報に従って、幹比古はウェアラブルキーボードにコードを打ち込んでいった。

◇◆◇◆◇◆◇

試合終了のサイレンが鳴った時、
達也はディフェンダーが繰り出す『鎌鼬（カマイタチ）』から逃げ回り、
レオはモノリスを背中に一か八かの突撃を繰り出そうとしているところだった。
「ふぅ……スリル満点の試合だったわね」
「アイツ……最後は遊んでたんじゃないか？」
「えっ、そうなの？」
「……あんな攻撃、かわすのは簡単だろうに……何故さっさと倒してしまわないんだ」
「そうしたくても出来なかったんだと思うけど」
苦りきった表情で達也を詰った摩利に、真由美は醒めた声で反論した。
「何故だ？　前の試合で使った『共鳴』だって服部を倒したあの魔法だってあるだろう」
「はんぞーくんに使った魔法は、競技用ＣＡＤではハードの性能不足で処理出来ないんですって。
前の試合の『共鳴』も、相手を完全に沈黙させるまでには至らなかったでしょう？
摩利、忘れたの？
私たちが達也くんに代役を押し付けたのは昨日のことで、彼は準備期間に一晩しか与えられていないのよ？
その一晩で、西城くんのＣＡＤを調整して、吉田くんのＣＡＤを調整して、二人の得意技を活かした戦術を考えて……
摩利が達也くんのことを買っていて、それで歯痒くなるのは分かるけど、準備時間も与えずに高過ぎる期待を押し付けるのはチョッと無責任だと思うな」
「それは……そうだな……」
頬りに首を振って反省の意を表していた摩利が、ふと、その動作を止めた。

「……ところで真由美」
「むっ、何よ」
なにやら陰湿な（？）報復の気配を感じ取って、真由美が身構える。
だがそれは多分、摩利の思うツボだった。
「達也くんのことを随分熱心に弁護するじゃないか」
「なっ！？　ち、ちがっ……」
「照れるな照れるな。
まあ……あのシスコンっぷりじゃ、いくらお前でも苦戦は免れんと思うが……」
「違うって言ってるでしょ！」

◇◆◇◆◇◆◇

摩利の疑念は女子高校生らしい（と言えば語弊があるかもしれない）脱線により有耶無耶になったが、観客席には同じような不満を異なる確信を以って漏らした者もいた。
「結局、使った魔法は『術式解体』『共鳴』『幻衝（ファントム・ブロウ）』に加重系統か……『分解』を使わぬのは解るが、フラッシュ・キャストも『精霊の眼（エレメンタル・サイト）』も使わぬとは、手抜きが過ぎるのではないか？」
「彼には秘密にしなければならない事情があるんですよ。先生もご存知でしょう？」
「しかしな、藤林……フラッシュ・キャストはともかく、『精霊の眼』は使ったからといって、そんじょそこらの魔法師が端から見ているだけで、何をしているのか分かるという類のものではないぞ」
独立魔装大隊の山中軍医少佐と藤林少尉は、観客席で随分と突っ込んだ会話を交わしていた。知識がある者が聞けば飛び上がって驚きそうな内容だが、目立たぬ夏服姿で客席に紛れ込んでいる二人は、一見、恋人同士――ではなく、医者と看護師に見えていて（先生、

という呼称も誤解に一役買っていた）、断片的に聞こえてくる耳慣れぬ単語も超心理医学関係の専門用語だろう、と回りの観客がスルーしていたのだった。

「それでも、見えないはずのものが見えているように行動すれば、注意深い者の不審を誘うでしょう。

『精霊の眼』は知覚魔法というより異能ですからね。

事に依ると『分解』以上に耳目を集めることになります」

彼らが話題にしている『精霊の眼』は、達也が持つイデアの「風景」を観る能力のことだ。

系統魔法は、イデアを経由してエイドスに魔法式を投射するもの。つまり系統魔法を使う魔法師は皆、イデアにアクセスする能力を持っているのであり、イデアにアクセスして「存在」を認識することが出来る達也の知覚はこの能力を拡張したものと言える。

だが……その「拡張」がもたらす効果は、絶大だ。

この世界に実体を持って存在する限り、イデアにエイドスを刻まぬものは無いのだから。

また、五感や「透視」や補助システムのもたらす情報によって魔法の座標を定めるのでなく、エイドスを認識して直接照準することも出来る。（透視によってもたらされる映像は対象物の映像であってエイドスの「姿」ではない）

『精霊の眼』に狙われて逃れられる者は、存在しないものだけなのだ。

ところで『精霊の眼』という名称は、実は誤った翻訳であり、それが定着してしまった為に本来の意味が解らなくなってしまった「専門用語」である。

エレメンタル・サイトの本来の意味は「元素を視る力」。この場合の「元素」は四大元素説に代表される象徴元素のことだ。

ところがこの言葉を最初に翻訳した学者が、形容詞として使われている「エレメンタル」を名詞の「エレメンタル（四大精霊）」と勘違いしてしまい、「四大精霊の眼」を縮めて『精霊の眼』として

しまったのだ。
無論、その勘違いに気付いた者は大勢いたが、『精霊の眼』の語感が『元素視力』より魔法的だという、詩的であっても少々非科学的な理由で、修正されないまま放置されてしまったのである。
こういう「誤訳」は専門家とそれ以外の人々をますます隔ててしまう有害物なのだが……それを誰も直そうとしないのは、困ったこととというべきか、嘆かわしいこととというべきか。
閑話休題。
藤林の言っていることは、山中も先刻承知だ。
『精霊の眼』もまた、『雲散霧消』同様に機密指定されてもおかしくはない技能なのだから。
しかしそれでも、山中は納得しなかった。
「手の内を見せるなと言ったのは我々も同罪なのだろうが……」
暗に四葉の秘密主義を非難した山中に対し、
「でも多分、フラッシュ・キャストは使うことになると思いますよ。いくら彼でも『プリンス』と『カーディナル』を相手にして、低スペックのＣＡＤだけでは戦えないでしょうから」
藤林はこの場をそう締め括った。

◇◆◇◆◇◆◇

観客の誰もが達也のことばかり注目していた訳ではない。
観客の目は寧ろ、初公開の武装デバイスで派手なアクションを見せて（魅せて？）いるレオに集まっていた。
そして少数ではあるが、遠隔地点から五百十二文字ものコードを正確に「透視」した幹比古に注目した観客もいる。
その絡繰（カラクリ）を知らない観客も――知っている観客も。
「……なんだ、ミキったら……昔どおりじゃない」
「えっ、何が昔どおりなの、エリカちゃん？」
思わず漏らした独り言に首を傾げて食いついて来た美月を、適当

な言葉であしらいながら、エリカの意識は自分の世界へ沈み込んで行った。

幹比古が何をやったのか、自分で言うより、自分で思っているより幹比古との付き合いが深かったエリカには理解できた。

『感覚同調』は決して簡単な技術ではないが、事故を起こす前の、「天才少年」だった頃の幹比古ならば、息をするように当たり前に出来たことだ。

だが、あの事故以来、こんなにスムーズに魔法を行使することは出来なくなっていたはずだった。

（なんだ……もう、心の傷は癒えているんだ）

時々、身体の傷は治るけど心の傷は治らない、という感傷的な台詞を耳にすることがある。

しかし実際には、身体の傷も、治る傷と治らない傷がある。

同じように心の傷も、癒える傷と癒えない傷があるはずだ。

（ミキ……気付いてる？　今日のアンタは、前と同じように魔法が使えてるよ）

エリカは精霊を見分ける力を持っていない。

精霊を視る眼は、備わっていない。

だから、精霊魔法が成功したかどうか、直接確認することは出来ないが、彼女は対人魔法戦闘を磨き続けた千葉家の娘だ。

一寸した仕種や目線の動き、表情の変化などから、その人間が何時魔法を使ったか、何に魔法を使ったか、それが成功したか失敗したか、ある程度までなら読み取ることが出来る。

その、千葉家の娘としての眼、「剣士の眼」は、幹比古が思い通りに魔法を成功させたことを見抜いていた。

（じれったいわね、ホント……早く気付きなさいよ。アンタはもう、立ち直っているのよ）

「力」は戻っても「自信」は戻っていない。

何気ない表情からそんな事まで分かる程度には、子供の頃からの付き合い、無理矢理に付き合わせ付き纏っていた実績の積み重ねが

ある。
　後はもう、本人が自信を取り戻すだけ。自分を、信じる、ただそれだけで――
「……リカちゃん、どうしたの？　エリカちゃん！」
「えっ？　なに？」
「えっ、なに、じゃないよ。
どうしたの、急に考え込んじゃって？
何か心配事？」
「えっ、うん、まあ、心配事って言えば心配事かな。
さっき、結構ピンチだったじゃん？
次の試合、大丈夫かなぁ～、って」
咄嗟にでっち上げた言い訳に、「そういえば」とか「でもきっと次も」とか「応援するだけ」とか素直に誤魔化されてくれている美月を放置して、エリカは再び自分の世界へ沈み込んで行った。

◇◆◇◆◇◆◇

決勝トーナメントの組合せが発表された。
準決勝第一試合、第三高校ｖｓ第八高校。
第二試合、第一高校ｖｓ第九高校。
予選リーグの成績は、一位・三高、二位・一高、三位・八高、四位・九高であり、大会規定通りなら準決勝は三高ｖｓ九高、一高ｖｓ八高になるはずなのだが、一高と八高はつい先程試合をしたばかりであり、またしても特例が適用されることになったのである。
トーナメントの開始は正午。
達也たちの出番は第二試合だが、三高の試合を見逃す訳には行かない。
　少し早い昼食になるが、達也はランチボックスを手に深雪を連れてホテルへ戻って来た。
　――テントは落ち着いて食事を摂れる状態ではなかったのである。

レオと幹比古は一足先に自室へ避難していた。
ほのかは一緒に来たそうな顔をしていたが、彼女に誘発されて他の同級生たちがゾロゾロとついて来るという事態になればテントを抜け出した意味がない。そう耳打ちして雫が止めてくれたのである。
色々な種類の視線――深雪に向けられた熱い視線が最も多かった――を振り切るように足早に競技エリアを抜けてホテルのロビーへたどり着いた兄妹は、そこで珍しい光景を目にした。
「んっ？」
「まあ……」
ロビーの一角に、恥じらいにほんのりと頬を染めて、摩利が立っていた。
彼女の目の前には、少し年上の若い男性。
十歳は違わないだろう。
達也よりせいぜい四、五歳上、大学生か、あるいは――士官学校生か。
摩利に年上の恋人がいるらしい、ということは二人とも知っていた。
この青年が、彼女の恋人だろうか。
中背というより長身の部類、達也より僅かに背が高いくらいだろうか。
身近にその手の専門家が多かった二人には、その細身の引き締まった身体がアスリートのものではなく、武術・格闘術の類で鍛え上げられたものと一目で分かった。
涼しげな眉目は、世間一般の嗜好に照らして美男子と形容されるもの。
二人は似合いのカップルと言えた。
不意に、達也の足取りが鈍った。
「お兄様？」
半歩先に出た深雪が、小首を傾げて振り返った。
達也は別に、冷やかしてやろうとか出歯亀してやろうとか怪しか

らん事を企んだのではない。
青年の顔に見覚えがあったのだ。
記憶を検索するのに、一瞬、足の方が疎かになったのである。
「……流石は九校戦。あちらこちらで有名人に出会えるな」
話を聞いてみたい、という思いが意識を掠めたが、自重すべき場面であることは充分理解していた。
「ご存知の方なんですか？」
「その方面では世界的な有名人だ」
横に並んで深雪を促す。
答えは歩きながらにするつもりだった。
だが、彼が思いとどまった「逢瀬の邪魔」を敢行した者がいて、その些か甲高い声に達也も深雪も足を止めることになった。
「次兄上（つぐあにうえ）！　何故このような所にいらっしゃるのですか！？」
聞き慣れた声が、いつもと異なる丁寧な言葉遣いで、青年を糾弾していた。
「兄上？　ではあの方はエリカの……？」
大股で青年に詰め寄るエリカから視線を戻して、深雪は達也に確認を求めた。
「俺の記憶違いでなければ、二番目の兄上だ。
『千葉の麒麟児』、千葉修次（ちば・なおつぐ）。
まだ士官学校の候補生でありながら、三メートル以内の間合いなら世界でも十指に入る使い手と噂されている魔法白兵戦技の英才だよ」
「そのように凄い方だったのですか。
……しかし、そのような方なら、エリカにとっても自慢の兄君でしょうに、何やら尋常な剣幕ではありませんが」
「そうだな。
修次氏は、千葉家の中では異端視されているとも聞いているが……
エリカが『正統』に拘る性格とも思えないしな……」
「そうですね……」

兄妹がそのような会話を交わしている内に、エリカは彼女の兄へ食って掛かっていた。――すぐ側に立っている摩利には、目もくれずに。

「兄上は来週まで、タイへ剣術指南の為のご出張のはずです！　何故ここにいらっしゃるのですか！」

エリカはすっかり、頭に血が上っているようだ。

いつも他人や世の中を何処か斜に構えて傍観しているような風情のある彼女には、本当に珍しいことだった。

「エリカ……少し落ち着いて」

「これが落ち着いておられましょうか！　和兄上（かずあにうえ）ならばいざ知らず、次兄上がお務めを放り投げるなど、昔であれば考えられませんでした！」

「いや、だから落ち着いて……僕は仕事を放り投げてきたわけではなくてね……」

青年――千葉修次は、その武名に似合わず気が弱いというか、気性が優しい青年のようで、公衆の面前で収まる気配のない妹の昂奮を前に、窘めるでなく、言い訳しか出来ずにいた。

「ほぅ……そうですか。

では、タイ王室魔法師団の剣術指南協力の件は、私（わたくし）の思い違いだと仰るのですね？」

「いや、それはエリカの言う通りなんだけど……無断で帰国したわけではなくて、ちゃんと許可はもらったというか……」

「そうですか。日本とタイの外交にも関わる大事なお務めを中断しなければならなかったのですから、さぞや重要なご用事なのでしょう。

その大切な大切な緊急のご用事で帰国された兄上が、何故高校生の競技会の会場になどいらっしゃるのです？」

声のトーンはマシになったが、反比例してエリカの機嫌は急角度で傾いているように、達也には見えた。

多分、修次にもそう見えていることだろう。

その証拠に、彼の顔は少しばかり、引きつり始めていた。
「いや、外交ってそんな、大袈裟な……士官学校の候補生同士の親善交流で、大学生の部活の一環みたいなものなんだけど……」
「兄上っ！」
「はいっ」
「学生レベルの親善であろうと部活であろうと、正式に拝命した任務ではありませんか！
疎かにしていい理由などございませんっ！」
「はいっ、仰るとおりです！」

世界で十本の指に入る猛者、の意外な姿に、達也は驚きを禁じ得なかった。
「……恐妻家という言葉は聞いたことがあるが、恐妹家というのは一寸記憶に無いな……」
何となく直視し辛くなって目を逸らすと、少し離れた所で美月がオロオロしているのを見つけた。達也が手で合図すると、美月はホッとした顔で小走りに駆け寄って来た。
「達也さん……エリカちゃん、どうしちゃったんでしょう？」
「どうしたんだろうな、本当に……？」
美月に問われても、首を捻ることしかできない。
「お兄様、エリカは八つ当たりしているのだと思いますよ？」
すると、深雪が笑い出すのをこらえているような声で、達也には意味不明の説明をしてくれた。
「八つ当たり？
何についての八つ当たりなんだ？」
「きっと、もうすぐ分かりますよ」
ますます訳が分からず首を捻った達也たちの視線の先で、「兄妹喧嘩」は新たな局面を迎えていた。

「兄上、まさかとは思いますが、この女に会う為に、お務めを投げ

出したのではないでしょうね？」
「いや、だから投げ出したのでは……」
「そのようなことはお訊きしていませんっ」
兄の言い訳をピシャリと遮ると、今まで（おそらく、意識的に）無視していた摩利を一度、ジロリと見て、エリカは修次に視線を戻した。
「全く、嘆かわしい……
千葉の麒麟児ともあろう兄上が、こんな女の為にお務めを疎かにされるなんて……」
「……エリカ、あたしは一応、学校ではお前の先輩になるんだがな。『こんな女』呼ばわりされる覚えはないぞ？」
それまで沈黙を守っていた、と言うより沈黙に耐えていた摩利が、遂に黙っていられなくなった、という感じで口を挟んだ。
だがエリカは、摩利の言葉を完全に無視した。
「そもそも兄上は、この女と関わり始めてから堕落しました。千刃（ちば）流剣術免許皆伝の剣士ともあろう者が、剣技を磨くことも忘れて小手先の魔法に現（うつつ）を抜かして……」
「エリカ！」
多分それは、修次にとって禁句だったのだろう。
それまでの気弱な態度が嘘のような、気迫のこもった叱責に、エリカはビクッと身体を震わせた。
「技を磨く為には常に新たな技術を取り入れ続ける必要がある。僕がそう考えて、そうしたのだ。
摩利は関係ない。
今回のことも、摩利が怪我をしたと聞いて、僕がいてもたってもいられなくなっただけだ。
摩利は来なくても良いと言ってくれたんだぞ。
それでなくとも先刻からの礼を失する言動の数々、千葉の娘として恥を知るのはお前の方だ」
「……」

唇を噛み締め、黙り込み、それでもエリカは修次から目を逸らさなかった。
「さあ、エリカ。摩利に謝るんだ」
「……お断りします」
「エリカ！」
「お断りします！
兄上が正式な任務を放棄してこの場におられることは紛れもない事実です！
それがこの女の所為であることも！」
しかし、またしても形勢は逆転、気味だった。
「私の考えは変わりません！
次兄上は、この女とつきあい始めて堕落しました！」
クルリと身を翻し、足早に、走り出さないギリギリの速さで、エリカは兄の前から立ち去った。

◇◆◇◆◇◆◇

「エリカちゃん、待って、エリカちゃん！」
ロビーからエレベータホールに入った所――ロビーが完全に見えなくなった所で、エリカはようやく美月の声に振り返った。
そして、あっ、という形に口を開けた。
「……達也くん。深雪も……もしかして、聞かれちゃった？」
その口調も表情も、いつものエリカだった。
だが達也には何となく、エリカが泣き出すのをこらえているように見えた。
「すまん……盗み聞きするつもりはなかったんだが」
「達也くん、今度奢りね」
「おいっ！？……まあ、いいか。あんまり高くないもので頼むぞ」
「商談成立、っと」
エリカはいつもの、気まぐれで飄々とした笑顔で笑って見せた。

彼女がいつも通りの態度をとって見せるなら、達也も変に気を遣って逆に気を遣わせるのは本意でなかった。
「エリカ、お昼は？」
「うん？　まだ早いじゃない……っと、そうか。うん、あたしはまだ食べないけど、ご一緒はしたいかな」
深雪の問い掛けに、エリカは半分否定、半分肯定の返事を返した。
「お兄様？」
「そうだね。
俺たちは部屋で済ませるつもりなんだが、こっちが食べながらで良かったら付き合わないか」
「うん、行く行く！　美月も来るでしょう？」
「はい、えっと、お邪魔します」
「……いや、別に邪魔じゃないんだが」
「ふぇっ？　そういう意味じゃありませんよ！」

◇◆◇◆◇◆◇

「もぅ……達也さん、からかうなんて酷いです」
雰囲気を変える為の出汁にされた美月は、ベッドに腰を下ろしてもまだご機嫌斜めだった。
まあ、彼女が本気で責めている訳ではないことくらい理解出来たので、達也は苦笑しながらサンドウィッチをパクついていた。
美月も達也も、そのままさっきのことはスルーする方向へ持って行くつもりだった。
「さてと……達也くんも深雪も美月も、あたしに何か聞きたいことがあるんじゃない？」
だが当の本人――エリカが、先程の一幕について、蒸し返してきた。
「渡辺先輩が交際されている方って、エリカのお兄様だったのね」
唯一、平気な顔でその話題に乗ってきたのは深雪だった。

「そっ。あのバカ兄貴、あんな女に誑かされちゃって、情けないやら腹立たしいやら……」
「世界的な剣術家でいらっしゃるのでしょう？
憎まれ口でも『バカ兄貴』なんて言うものじゃないわよ？」
「あれっ？
……ああ、そうか。達也くんだったら修次兄貴のことを知ってても不思議じゃないね」
「エ・リ・カ。
わたしたちの前だからといって、呼び方を変える必要はないのよ？
修次兄上なのでしょう？」
「あ～～っ、それ、忘れて！
あんなのあたしじゃないって！」
エリカはいきなり頭を抱えて、ベッドにダイブした。
彼女的には、ああいう「育ちの良い」言葉遣いは恥ずかしいのだろう。
……それより、男が使っている枕に俯せで突っ込む方を恥じらって欲しいと、達也は困惑気味に思った。
「まあまあ。
エリカは修次さんが大好きなのよね」
「……」
硬直したのはエリカだけではなかった。
深雪が投下した冷凍爆弾は、達也も美月も瞬時に凍り付かせてしまった。
「……違うっ！！」
ガバッと起き上がりながら、エリカが叫んだ。
枕から顔を離しながらの言葉だったので「ガウッ」としか聞こえなかったが、この場合の反応としてはそれでも相応しいように感じられた。
追い詰められて雄叫びを放つ怪獣のような分かり易い態度に、深雪がクスクスと笑いを溢している。

そして、更なる爆弾を投下。
「エリカって、ブラザー・コンプレックスだったのね」
「なっ……」
エリカは絶句した。
そして、臨界点越えの爆発を起こした。
「アンタにだけは言われたかないわよコノ超絶ブラコン娘！！」
――その直後に生じた出来事を、達也も美月も一切、口にすることはなかった。

2－（20）　精霊の眼（後書き）

推敲が思ったより早く終わりましたので、予定を一日繰り上げて第20話を投稿します。

ただ申し訳ございませんが、ご感想の御返事は明日以降にさせて下さい。

情けないことですが、今日はこれが精一杯です……

2－（21）　天才児の実力（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

2－（21）　天才児の実力

「……おい達也、顔色が悪いぜ？　大丈夫かよ？」
「何だか随分疲れてるようだけど……」
一般用観戦席でレオ、幹比古と落ち合った達也は、開口一番、口々にそう問われてしまった。
「少し、気疲れすることがあってな。なに、精神的な疲労というより情緒的な疲労だから、試合で気合が入れば大丈夫だ」
達也がなんでもない、という風に手を振る背後で、何事も無かったように深雪とエリカが腰を下した。
その後ろで美月が少しばかり挙動不審になっていたが、関心がこれから始まる試合の方へ行っているのか、レオも幹比古も気付かなかった。
「……悪いね。達也ばかり矢面に立たせて」
幹比古は何か、好意的な（好都合な？）誤解をしたようだ。
「いや、そんなことはない。大丈夫だから気にするな」
この「そんなことはない」は、本当にそんな事ではなかったという意味なのだが、敢えて曖昧な言い方をする辺り、達也もいい性格をしている。
「大丈夫ってんならいいけどよ。達也は今回、散々無茶してるんだから、これ以上の無理はするなよ？」
「分かっている」
何とも自分には勿体無い善良な友人だ、と達也は思った。
「そっちも含めて大丈夫だ」
そんな善人を心配させるのは彼としても本意ではないので、努めて力強く頷いて見せた。

もっとも、試合が始まってみれば、多少顔色が悪い程度のことはどうでもよくなる。

彼らの関心は――無論、達也も含めて――「岩場ステージ」で繰り広げられる三高と八高の試合に吸い寄せられた。

試合は予想以上の一方的な展開となっていた。

独り舞台になっていた、という表現の方が適切かもしれない。

カルスト地形を模した「岩場ステージ」は「平原ステージ」に次いで障碍物が少ないステージだ。

所々に遮蔽物となる大きな岩が突き出し、転がっているものの、高低差は少なく、視界を遮る木立は無い。

その岩と岩の間を三高陣地から悠然と歩いて進む一人の選手。

一条将輝は堂々とその姿を曝して「進軍」していた。

八高もそれを黙って見ている訳ではない。

将輝へ向けて、次々と魔法を繰り出す。

岩陰を伝って三高陣地へ進んでいたオフェンスの選手までが、その集中砲火に加わっていた。

だが。

将輝の歩みは、止まらない。

移動魔法で投げつけられた石や岩の欠片は、より強力な移動魔法で撃ち落とされた。

彼に直接仕掛けられた加重魔法や振動魔法は、身体の周囲一メートルに張り巡らせた「広域干渉」によって無効化された。

その「無駄な努力」を嘲笑うように、将輝の歩みは、速まらない。

「……『干渉装甲』か。移動型広域干渉は十文字家のお家芸だったはずだが」

レオも、幹比古も、その圧倒的な技量に絶句する中、達也は手放しで将輝の実力を褒めちぎっていた。

「あれだけ継続的に魔法を使いながら少しも息切れしないのは、単に演算領域の容量が大きいだけではないな。

余程『息継ぎ』が上手いんだろう。

ああなるともう、センスとしか言いようが無い」

息継ぎ、というのは同種の魔法を連続使用する場合の、一つの魔法が終了し、次の魔法を発動する、その切替を指している。

前の魔法と次の魔法の重複時間が少ない程、魔法師に掛かる負担は小さい。

この重複時間が短い魔法師のことを「息継ぎが上手い」と形容するのだ。

深雪も非常に「息継ぎが上手い」魔法師だが、達也の見たところ、将輝は深雪に匹敵するセンスを持っている。

途絶えることの無い強力な防御に、八高のオフェンス選手が攻撃を止めた。

身を隠すこともそこそこに、三高陣地へ走り出す。

将輝を撃退することを諦め、先に相手陣のモノリスを攻略することに活路を見出そうとしたのだろう。

だが残念ながら、その行動は迂闊だった。

パニック行動だったのかもしれない。

注意が前方へ向いて無防備になった背中を、将輝が見逃すはずも無く、

至近距離で生じた爆風によって、八高オフェンスは前のめりに吹き飛ばされた。

「収束系『偏倚解放（へんいかいほう）』か。単純に圧縮解放を使えばいいものを……結構派手好きなんだな」

「へんいかいほう、ですか？　その魔法は存じませんが」

「手間の割に効果が少ない、マイナーな魔法だからね。

円筒の一方から空気を詰め込んで蓋をして、もう一方を目標に向けて蓋を外す、というイメージかな。解放された面から高圧の空気が噴出して、普通に圧縮空気を破裂させるより威力を出せるのと、爆発に指向性を与えることが出来るというのがメリットだが、威力を高める為だけなら普通の空気圧縮で圧縮する空気の量を増やせば良いし、攻撃に指向性を持たせたいなら圧縮空気を直接ぶつければ

良い。

……いや、殺傷性ランクを下げる為に、敢えてどっちつかずの術式を使っているのか。

力があり過ぎるというのもこういう場合は一苦労だな」

皮肉な笑みを浮かべる達也。

深雪に「それはお兄様も同じなのでは？」という目を向けられたが、それには気付かなかったフリをした。

達也が蓋蓄を傾けている間も、将輝は着実に八高陣地へ近づいている。

このままではジリ貧と思ったのか、ディフェンスに残っていた八高の選手が二人掛かりで将輝へ挑み掛かった。

岩が砕かれ、その欠片が将輝へ襲い掛かる。

将輝の足下の地面が細かな火花を散らし始めたのは、放出系魔法による鉱物からの電子強制放出か。

前者は規模で、後者は改変難度で、いずれも上級、と言っても差し支えない魔法だった。

達也たちが八高に、一見あっさり勝利したのは、相手に実力を出させなかったからに過ぎない。

正面から魔法をぶつけ合っていたなら、もっと苦戦しただろう。

だが将輝は、この二人掛かりの攻撃を、真正面から本当にあっさりと無効化した。

石飛礫の散弾は将輝を中心に発生した球状の力場に撥ね飛ばされ、放電は未発のまま抑え込まれた。

空気塊の槌が八高選手に叩き込まれる。

接触と同時に解放された圧搾空気が、二人の戦闘力を容易く奪った。

試合終了の合図が鳴る。

吉祥寺も、もう一人の選手も、試合開始から試合終了まで、三高陣地から一歩も動かず、遂に何もしなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

「……予想以上ね、一条の『プリンス』は……」

ディスプレイから視線を外し、真由美は克人に話し掛けた。

いつもの相方である摩利は、ここにいない。

摩利は今、邪魔をすると馬に蹴られる類の取込中だ。

彼女は本来、ベッドで安静にしていなければならない重傷者なので、真由美も他の幹部たちも、固いことを言いはしなかった。

「何だか、十文字くんのスタイルに似ていた気がするんだけど」

自分のスタイルに似ている、と言われても、克人としては答え難いだろう。

果たして、彼が返事をする前に、鈴音が会話に加わった。

「おそらく、意識してのことでしょう。

一条家の戦闘スタイルは本来、中長距離からの先制飽和砲撃だったはずです。

現に予選リーグでは遠方からの先制攻撃でディフェンスを無力化しています。

根拠はありませんが……これは、一条選手の挑発ではないかと」

「挑発？」

首を傾げた真由美に、

「俺のスタイルを意識しているのかどうかは分からんが、これは司波に対する、正面から撃ちあってみろ、という挑発だろうな」

克人が答えた。

「はぁ……気持ちは分かるけど」

随分子供っぽいことを、と真由美の表情は語っていた。

達也の武器は機動力と洞察力、そこから導かれる意外性。

魔法力よりも戦闘技術にあるということは、ここまでの二試合で明らかだ。

その達也が、そんな見え透いた誘いに乗るはずが無い、と。

だが、克人はその無言のメッセージに、同調しなかった。

「司波はこの挑発に乗るだろう」
「えっ、達也くんが？」
「本来の距離では勝ち目が薄い。
これは、数少ない勝機だ」

◇◆◇◆◇◆◇

「参ったね、これは……」
一般客席から遠く離れた本部天幕で行われた克人の指摘は、当然達也の耳に届きはしなかった。が、克人が指摘したことは、達也にも十分理解できていた。
そして第三高校の、おそらくは吉祥寺真紅郎の本当の狙いが、敢えて隙を見せることで彼を真っ向勝負へ誘い出すことにある、ということも分かっていた。
更に性質（たち）が悪いことに、この誘いに乗ることが第一高校にとっても最も勝利の可能性が高い。
（大したものだよ、「カーディナル・ジョージ」……）
「まったくだぜ。何だよ、あの防御力は」
「結局、一条選手以外の手の内が全く見られなかったのも痛いね。これじゃあ、対策の立てようが無い」
達也のボヤキを、レオと幹比古は違う方向へ勘違いしてくれたようだ。
二人とも将輝の強さに呑まれている様だが、逃れようの無い蟻地獄の様な策略に呑み込まれていると分かってしまうよりはまだ、精神的な被害が少ないだろう。
「吉祥寺選手の方は大体予想出来る。もう一人の方は分からないが」
「えっ、そうなのかい？」
達也は二人が誤解した方向で、会話を収拾することにした。
「吉祥寺真紅郎が発見した『基本コード』は加重系統プラスコード。出場した競技はスピード・シューティング。

ならば得意魔法は作用点に直接加重を掛ける『不可視の弾丸（インビジブル・ブリット）』だろう」
「基本コード？」
「対象物の個体情報を改変するんじゃなくて、部分的に加重を掛けるなんて出来るのかい？」
「そうか……少し長い説明になるが、いいか？」
達也の念押しに、レオは躊躇いながら、幹比古は躊躇い無く、頷いた。
「魔法式の研究分野には『基本コード仮説』と呼ばれる理論がある。それなりに広く支持されている仮説で、『加速』『加重』『移動』『振動』『収束』『発散』『吸収』『放出』の四系統八種にそれぞれ対応したプラスとマイナス、合計十六種類の基本となる魔法式が存在していて、この十六種類を組み合わせることで全ての系統魔法を構築することができるという理論だ。
この基本となる魔法式が『基本コード』。
結論から言うと……全ての系統魔法を構築できる、という点でこの仮説は間違っているんだが、『基本コード』は実在する」
「……間違っているのに実在する？」
「……すまん、早くも混乱してきた」
「安心しろ、ちゃんと説明するから。
系統魔法には、どう組み合わせたって十六種類の『基本コード』だけでは構築できない魔法がある。だから基本コード仮説は誤りだ。だが、基本と呼ばれるだけの特徴を持つ魔法式は存在する。
系統魔法は、改変後の事象の状態を定義することで様々な作用力を発生させる。
改変を生じさせる為の作用力は魔法式の中に定義されているが、それは魔法が作用した結果を定義すること無しに発生しない。
だが基本コードは、作用力そのものを直接発生させることが出来る。
つまり基本コードとは、『加速』『加重』『移動』『振動』『収

束』『発散』『吸収』『放出』の作用力そのものを定義した魔法式のことなんだ。

だから、個体のエイドス全体に働きかけるのではなく、個体上の一点に直接力を及ぼすという魔法が可能になる。

現在発見されている基本コードは、加重系統プラスコードの一つだけ。

それを発見したのが三高の吉祥寺真紅郎、『カーディナル・ジョージ』だ」

最後の言葉に、幹比古が怯んだ表情を見せた。

「吉祥寺真紅郎、って、どっかで聞いた名前だと思ってたけど……『カーディナル・ジョージ』だったのか」

彼の顔色を見て、達也は「拙ったな」と思ったが、口にしてしまった以上は仕方が無い。

「そう。だから一条選手だけ警戒していれば良い、って訳じゃない。優れた研究者が優れた実行者であるとは限らないが、『基本コード』はそれを使えるというだけで厄介な代物だからな。

幸い、『不可視の弾丸（インビジブル・ブリット）』は作用点を視認しなければならないという欠点がある。

エイドスではなく対象物に直接作用させる為に生まれた皮肉な欠点だが、『不可視の弾丸』による攻撃は遮蔽物で防げるはずだ。

広域干渉でも防御可能だが、情報強化では防げないから注意しろよ」

「分かった。気をつけるよ」

「なあ……一つ、疑問があんだけど」

「何だ、レオ」

「試合にゃ関係ねえんだけどよ……達也、さっき『十六種類の基本コードだけでは構築できない魔法がある』って言ったよな？

てことは、達也は十六種類の基本コードを全部知ってるってことなんじゃねえか？」

態度や言動に誤魔化されてしまいそうになるが、レオは決して馬

鹿ではない。
知識はともかく、知力は寧ろ高いと言える。
達也はそれを知っていたはずだが、それでもこの鋭い指摘に驚かされてしまった。
「……吉祥寺選手の名誉の為に言っておくが、基本コードを発見したのは現時点で彼一人だけだ。
俺はただ、基本コード仮説では理論的に構築できない系統魔法を知っているというだけだよ」
「お兄様、そろそろ移動するお時間では？」
レオが口を開きかけたところで――更に質問を重ねようとしたところで、深雪が会話に割って入った。
「そうだな。
そろそろ次のステージが決まる頃だ。本部へ移動しようか」
立ち上がった達也の背中は、それ以上の追及を拒んでいた。

◇◆◇◆◇◆◇

第九高校との試合は「渓谷ステージ」で行われた。
「く」の字形に湾曲した人工の谷間。水が流れていると上流・下流で有利・不利が生じるので、実態は渓谷というより崖に囲まれた細長い「く」の字形の湖だ。いや、湖というほど水深は無いので（最も深いところで五十センチ前後）、細長い「く」の字形の「水溜り」か。
この試合は幹比古の独擅場だった。
左右が塞がった細長いフィールドを白い霧が覆った。
試合状況が全く分からなくなった観客からはブーイングが生じたが、それはすぐに静まった。
観客は魔法競技を観戦に来ているだけあって、これだけの面積に魔法を及ぼし維持することの難易度を、程度の差はあれ理解していた。

しかもその霧は、一高選手には薄く、九高選手には濃く纏わりついていた。

九高の選手は霧に邪魔をされて、一高のモノリスへ近づくことが出来ない。

何度も霧を消し去ろうとするが、また実際に何度も吹き飛ばしているが、白いヴェールは彼らの努力を嘲笑うように、すぐにその視界を奪う。

風を起こして霧を吹き払っても、代わりに流れ込んでくる空気までが霧に染まっていては意味がないし、気温を上げて飽和点を引き上げても「湖」からの蒸発を促進して徒に不快指数を増進させるだけだ。

霧を発生させている「結界」の古式魔法は、飽和水蒸気量に関係なく空気中の水蒸気を凝結させる魔法であり、気温を上げても供給される水蒸気が増えて霧を濃くするだけの結果になるし、「結界」の魔法は当然に「閉鎖」の概念を含むから、気流を起こしても霧に満たされた空気が循環する結果にしかならない。

元々、曖昧な対象に継続的な作用を及ぼし続けることは、現代魔法の苦手分野。

現代魔法でこの「霧の魔法」を打ち消す為には、幹比古の魔法作用エリア――「結界」を認識しない限り有効な対抗措置は取れないのだが、九高の新人は古式魔法について勉強不足のようだ。

この霧は分布が人為的に均一でない点を除けば、自然現象以上の効果は無い。

幻惑作用もなければ、衰弱効果もない。閉じ込める効果もない。

だが視界が効かないというだけで、人間の行動を制限するには充分なのだ。

崖に沿って恐る恐る進む九高オフェンスを尻目に、達也は霧に紛れて易々と九高陣地へ到達した。

意図的に彼の周囲だけ薄くなった霧は早足で進む程度なら十分な視界を与えていたし、仮に視界ゼロメートルであっても達也には何

の障碍にもならない。
観客から見られる心配のないこの状況なら、存在認識の視力を遠慮なく使うことが出来るからだ。
相手に気付かれることなく九高ディフェンダーの背後に回り、達也は「鍵」を撃ち込んだ。
コードを隠していた「蓋」が剥がれ落ちた轟音に、ディフェンダーは慌てて振り返ったが、達也は既に離脱している。
今回は達也が精霊を喚起する必要もない。
霧の結界を維持しているのは幹比古がコントロールしている精霊であり、この霧の中には至る所に幹比古の「眼」が潜んでいるのと同じ。
一高対九高の試合は、一度も戦闘を交えることなく、一高の勝利で幕を閉じた。

◇◆◇◆◇◆◇

決勝戦は三位決定戦の後に行われる。
モノリス・コードの試合時間はどんなに長くても三十分以上掛かることはないが、決勝開始時刻は余裕を持って今から二時間後、午後三時半と決定された。
ＣＡＤの調整も担当している達也は、二時間のインターバルを競技エリアで過ごすことにしたが、幹比古とレオは一旦競技エリアから出て寛ぐことにした。
――また兄妹の睦み合いを見せつけられてはたまらない、と思ったかどうかは定かでないが。
集合時間を試合開始一時間前に決めて、それぞれ思い思いの場所へ足を向ける。
レオは食堂で軽く腹ごしらえしてから部屋で休むと言っていた。
彼ほど健啖家でない幹比古は、ホテル最上階の展望室に来ていた。
富士裾野演習場に建てられたこのホテルの展望室は、富士山を間

近に仰ぎ見ることが出来る。
吉田家の「神霊魔法」は、出自由来の系統で分類すれば、地祇神道系（国津神を祀る神道系の意味）に属する。
神道系古式魔法の術者にとって、富士山は特別な意味を持っている。
富士山の祭神は天津神（の嫡孫）に嫁いだ国津神であり、富士信仰は天神地祇を問わない。
またそういう教義的な意味合いを抜きにしても、「霊峰富士」は魔法的な力の巨大な集積地である。
展望室のバルコニーに出れば、霊峰の気吹（いぶき）を直に浴びることも出来るだろう、そう考えて最上階へ上がってきた幹比古を、予想外の人物が出迎えた。
「あら、幹比古君、こんな所にどうしたの？」
麦藁帽子で日差しを遮り、バルコニーの手摺に肘をついて富士山を眺めていた姿勢から、顔だけを彼の方へ向けてエリカがそう話し掛けてきた。
「僕は富士山を見に……エリカの方こそ、独りでどうしたの？」
幹比古の言う様に、展望室――バルコニーも含めた最上階――には、エリカ以外の人影が無かった。
いや、今は幹比古が来たから二人きりか。
それも当然で、今日ここに集まった人々は、全員が九校戦目当てと言って過言ではない。
今はインターバルとはいえ、三位決定戦も間も無く始まることだし、わざわざホテルまで戻って来て、富士山以外見えるものも無い展望室にわざわざ上がって来るのは、幹比古の様に特別な目的を持つ者か、余程の変人かのどちらかだろう。
「あたしは、独りになりに、かな」
視線を景色に戻したエリカの横顔は何処か寂しげで、幹比古は軽い狼狽を覚えた。
だからと言って立ち去ってしまうことも出来ず、立ち尽くしてい

るのも不自然で、仕方なく――少なくとも彼が意識している限りでは「仕方なく」――幹比古はエリカの横に並んだ。
「幹比古君」
相変わらず、視線を日本最高峰に固定したまま、話しかけて来るエリカ。
「えっ、なに？」
――違和感。
「感じる？」
「えっ？」
「気吹を浴びに来たんでしょ？
ちゃんと感じてる？」
いつもと同じ言葉遣い、いつもと違う声音。
いつもどおりでいつもと違う口調。
手摺から身体を起こしたエリカの表情は、この四ヶ月、否、ここ数年で見たことのない真摯なものだった。
彼女が髪を短くする前、春から伸ばし始めた髪がもっと長かった頃。彼女が一時（ひととき）も刀を手放すことが無かった、ずっと、以前のこと……
「……幹比古君？」
「あっ、ごめん。えっと、そう、エリカの言うとおりだよ」
しどろもどろで答えながら、幹比古はようやく違和感の元に気がついた。
――エリカが彼のことを「幹比古」と呼んでいる――
「気吹を浴びに来たんだ」
「そうじゃなくて」
「えっ？」
「あたしが訊きたかったのはそこじゃなくて。
……霊峰の気吹を、ちゃんと感じられてる？」

思いがけず真剣な眼差しに気圧されながら、幹比古は姿勢を正し呼吸を調えた。
深く息を吐き出し、吸い込む。
リズムを保つことは重要だが、それ以上に大切なのはイメージだ。
呼気と共に器を作り、吸気と共に器に取り込む。
吸って、吐く、のではなく、吐いて、吸う。
二回、三回と「呼吸」を繰り返すうちに、幹比古の身体に「生気（イキ）」が充溢していく。それはサイオンやプシオンのような「粒子」ではなく、もっとエネルギーそのものに近い波動、「プラーナ（気息）」とも呼ばれている「力」。
霊峰の気吹を幹比古がキチンと受け止めている、それをその目で確かめて、エリカは彼女らしからぬ、控え目な笑みを浮かべた。
――それは少し、寂しそうな笑みだった。
「エリカ……？」
「何だ、やっぱり出来てるじゃない」
「……ごめん、何のことだか分からない」
相手のことを考えていない、自己完結型の省略が多い物言いはいつものことだが、今は、それを理解できない自分が間違っているように幹比古は感じていた。
「幹比古君、気づいてる？
貴方は以前と同じように、あの事故に遭う前の、『吉田家の神童』と呼ばれていた頃と同じように、魔法を使えてるんだよ」
「えっ？」
「ううん。以前と同じ、じゃなくて、それ以上、かな。
感覚の同調も霧の結界も気吹の取り込みも、それこそ息をするように自然に出来てる」
まさか、とは言わなかった。
何故そんなことが言える、とも幹比古は口にしなかった。
エリカが、「千葉の剣士」がどんな「眼」を持っているのか、彼も知らない訳ではなかった。

「良かったじゃない！」
いきなり「バンッ！」と背中を叩かれて、幹比古は半歩ほど蹈鞴を踏んだ。
「ミキがこの調子なら、三高だって恐るるに足らずね！
決勝、頑張んなさいよ」
「僕の名前は幹比古だ！」
突然いつもの調子を取り戻して、返事も待たずに去っていくエリカの背中へいつもの台詞を投げつけながら、幹比古はホッと胸を撫で下ろしていた。
自分が何故、何に安堵したのか、幹比古は意識していなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

妹と睦み合っているはずの（とチームメイトに勝手に思い込まれていた）達也は、二人と別れてすぐ、会場のゲートへ呼び出されていた。
「小野先生、ご苦労様です」
彼を呼び出したのは遥だった。
「コラッ、目上にご苦労様とは……分かってて言ってるのね？」
達也が人の悪い笑みを浮かべ、遥はガックリと肩を落とした。
「……私の立ち位置なんてこんなものなのね……ネタがばれたサブキャラなんて、こうして『その他大勢』に埋もれて行くだけなんだわ……」
「何をメタなこと仰っているんですか。ほとんど意味不明ですよ」
「いいの。どうせ私は意味不明な女なの」
「……そろそろ預かって来ている物を渡して頂けませんか。俺の方も、時間に余裕がある訳じゃないんで」
達也が手を差し出すと、遥はこれ見よがしに溜息をついた。
口には出さず表情で「ノリが悪いわね」と非難しながら、それでも時間が無いということは理解しているのか、引っ張ってきた電動

バッグ（電動アシストキャスター付スーツケース）を大人しく達也に渡した。
「まったく……少しは労わって欲しいわ。私はカウンセラーであって、使い走りじゃないのよ」
「先生に運搬を依頼したのは師匠であって俺じゃありませんよ。でも……そうですね。雑用がご不満なら、本来の仕事をお願いすることにしましょうか」
「いえ、無理に仕事が欲しい訳じゃないんだけど」
「税務申告が必要ない臨時収入……欲しくないですか？」
遥の目に、分かり易い動揺が走った。
……こんなに人が善い性質（「性格」ではない）で諜報員が務まるのだろうか、と達也は野次馬的にそれを眺めていた。
待ち時間は、それほど長くなかった。
「……仕方ないわね、不安を抱えた生徒の力になるのは私たちの務めだもの。担当外とか時間外とか言ってる場合じゃないわね」
なるほど、そういう名目で折り合いをつけたのか、と達也は思った。
しかし――
「残念ながらそちらの仕事ではなく、もう一つの方の仕事です」
「……何をさせる気？」
途端に強い警戒を示す遥。
こんなに分かり易くて大丈夫か？　と今度は結構本気で、達也は心配してしまった。
まあ、彼女がドジを踏んで捕まって「あんなこと」や「こんなこと」をされても、彼としては一向に構わないのだが。
「ノー・ヘッド・ドラゴン……無頭竜のアジトの所在を調べて下さい」
遥は慌てて左右を見回し、抱きつくようにして達也との間合いを詰めた。
「……何を企んでるの？

今回の件は『公安』も『内情』も既に動いているわ。
司波君が手出しする必要は無いのよ」
傍から見れば結構問題のある構図で遥が囁き掛ける。
深雪はもちろんだが、ほのかにも雫にも他の皆にも見られていなければいいが、と達也は思った。
「今のところ何もするつもりはありません。
ただ、反撃すべき時に、反撃する相手の所在が掴めないというのはそれだけで不安ですので。
……ところでこの体勢は、誤解を招くと思うんですが」
勢い良く遥の体が離れた。
年上のプライドか、誤魔化し笑いで恥じらいを隠そうとしている。
そろそろ真剣に、諜報の世界から足を洗うことを達也は勧めたくなって来た。
……だからと言って、自分の依頼を取り下げようなどとは思わないのだが。
「……保険、なのね？」
「そう取って頂いて構いませんよ」
探る視線に、即、頷く。
「……分かった。一日、頂戴」
「素晴らしい。一日ですか」
これは裏の無い、手放しの称賛。
遥はまんざらでも無さそうに、照れ笑いを浮かべた。

◇◆◇◆◇◆◇

電動バッグを引っ張ってテントに戻った達也は、残っていたスタッフ全員から向けられる興味津々の視線を全て無視してバッグの中身を取り出した。
「……コート？」
一際遠慮のない態度でわざわざ彼の傍に近寄って達也の手元を覗

き込んでいた真由美から、そんな質問が投げ掛けられた。
「いえ、マントです」
達也は黒い布地を掲げ上げて、広げて見せた。
それは彼の身長でも地面に引きずりそうな、洋風の長いマントだった。
「そっちも？」
「こちらはローブですよ」
黒いマントを机に置き、今度は灰色の布地を広げて見せる。こちらも裾を引きずりそうな、フード付のローブだった。
「一体……何に使うの、それ？」
テントの中を「？」マークが盛大に飛び交う中、独り深雪だけが訳知り顔で笑いを噛み殺していた。
「決勝戦で使います。いや、間に合って良かった」
「お兄様、ルール違反にはなりませんか？」
話に付いて行けない真由美たちを他所に、深雪は少し真面目な顔で達也にそう問い掛けた。
「大丈夫だとは思うが、試合前のデバイスチェックには提出するよ。ルールブックには魔法陣を織り込んだ衣類を着用してはならない、とは書かれていないけどね」
深雪に対する回答を聞いて、真由美が頭上に「？」を追加しながら達也に訊ねた。
「魔法陣を織り込む？」
「ええ。古式の術式媒体で、刻印魔法と同じ原理で作動します。このマントとローブには着用した者の魔法が掛かり易くなる効果を付与しています」
「補助効果か……それ自体に特定の術式が組み込まれているのでなければ問題ないかな……」
真由美の視線を受けて、鈴音が頷いた。
「ルール上の問題はありません。
ルールはそこまで想定していない、というのが正確なところです

が」
「まあ、ダメだと言われれば諦めますよ。これが無きゃ戦えない、って訳でもありませんし」
真由美は少し、眉を曇らせて達也に向き直った。
「ねえ、達也くん」
彼女の声には、不安よりも心配が色濃く混ざっていた。
「まだ試合中だからお祭り騒ぎは控えさせてるけど、決勝戦に進んでくれた時点で新人戦の優勝は決まっているのよ。あまり無理をしなくて良いんだからね」
「分かっています」
言われなくても、達也は半分以上、勝負を諦めていた。
――この時点では、まだ。

◇◆◇◆◇◆◇

五十里にマントとローブのチェックを依頼して（というのも、五十里家は刻印魔法の権威として知られており、五十里本人も興味を隠そうとしていなかったからだ）、達也は身体を解（ほぐ）しにテントの外へ出た。
代役を任命された時に真由美から与えられたミッションは、第一高校の新人戦優勝。
決勝戦まで進んだ時点で――つまり現時点で、ミッションは完遂したと達也は考えていた。
入念なストレッチは怪我をしないためのもの。
擦り傷や打撲程度ならともかく、骨を折ったり動脈を切ったりすれば、秘密にしなければならない彼の能力が自動的に発動してしまう。
意識的に止めることは出来るものの、それが間に合うかどうかは微妙だ。
彼の自己修復能力は損傷の度合いが酷ければ、意識が追いつく間

も無く一瞬で彼の肉体を修復してしまうのだから。
九校戦は映像を記録されている。
例え人の意識が捉えられない一瞬の出来事であろうと、映像記録を後から分析することは可能だ。
改めて自分にそう言い聞かせながら、ストレッチというよりヨガのような運動を続けている途中、深雪がテントから出て来たが、特に急ぎの用という気配もなかったので、そのまま一通り試合前の準備運動を終えた。
「お兄様、タオルをどうぞ」
よく冷えた濡れタオルが差し出された。
深雪が真夏の熱気の中に出て来てから短くない時間が経っていたが、冷蔵庫から取りだしたばかりのような冷え具合は……彼女の得意魔法を知っていれば不思議ではなかった。
こういう何気ない一つ一つも、本当に自分には過ぎた妹だと達也は思う。
世が世であれば、この妹の為なら命も惜しくないという男たちが群れをなしていることだろう。
いや、今の世の中でも、わずか一言で男に命を懸けさせることが、この妹には可能かもしれない。
真っ先に命を懸けるであろう自分のことは棚に上げて、妹の将来に薄ら寒い戦慄を達也は覚えた。
「お兄様、わたしの顔に何かついていますか？」
本当に自分の顔に何かつけていると思った訳ではないだろうが、自分を見詰める兄の名状し難い表情に、深雪としては他に訊きようがなかったのだろう。
――達也の方にも答えようが無く、言葉を濁すことしかできなかったが。
「お兄様……」
達也が誤魔化したことについて、深雪は追求して――来なかった。
「……いよいよ決勝戦ですね。

次の相手は、相当手強いと思われますが……？」
「……そうだね」
強がってみても仕方がない。
もしこれが試合ではなく実際の戦場で、お互いに何の制約もなくぶつかり合ったとしても、あの二人を同時に敵にして、否、相手が一条将輝だけであったとしても、「勝てる」と言い切るだけの自信は達也には無かった。
「力も技も制限された状態で……制限した側の人間であるわたしがこの様なことを申し上げるのは、筋違いでありご不快かもしれませんが……」
躊躇いがちに、俯き加減にそう言って、また実際そこで深雪の台詞は一旦途切れた。
しかしすぐに顔を上げて、はにかみながら、こう言った。
「……それでもわたしは、お兄様は誰にも負けないと信じています」
達也に返事の暇（いとま）を与えず、ツバメのように素早く軽やかに身を翻してテントの中へ戻っていった妹の後ろ姿を見送った姿勢で、達也は暫し立ちつくしていた。
（参ったね、本当に……）
深雪本人が言っていたように、達也の力を制限しているシステムに、彼女は重要な役割を果たしている。
彼が本当の力で本当の技術を使えない理由の一端は、間違いなく深雪にある。
しかし達也は――深雪のことを、自分勝手だとは思わなかった。
誰にも負けないと信じている、それは、誰にも負けて欲しくないという願望でもある。
そうした機微が完全に理解できるほど、達也も精神的に大人ではない。
だがそのことを達也は、感覚的に理解していた。
彼にそう願った相手が深雪だからこそ、理解できた、と言うべき

かもしれない。
そして達也は、深雪の願いを無視できない。
これは誰に命じられたとか誰に仕組まれたとかではなく、そういう風に出来ているとしか言えない彼の心理特性だ。
参った、とはそういうこと。
次の試合、どうやら負けられないらしい。
だが、言うは易く、行うは難し。
どう計算しても目処が立たない勝算に、達也はため息をついた。

2一（22） 最後の決め手（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

2一（22）　最後の決め手

三位決定戦が終わり、決勝戦の使用ステージが「草原ステージ」と発表された。

それを聞いた両校の反応は対照的だった。

三高の天幕では、歓声を上げる者もいた。

「お前の言うとおりになったな、ジョージ」

「ついてるね、将輝」

浮かれて声を上げるような真似は自制しているものの、二人とも笑顔を隠せずにいた。

「後はヤツが誘いに乗ってくるかどうか、だが……」

「彼は間違いなく乗ってくるよ。

遮蔽物が無い草原ステージでは、正面から一対一の撃ち合いに応じる以外、向こうにも勝機は無いからね」

「ヤツが『術式解体』という手札を持っているからこそ、そこに活路を求めるしかない、か……」

「その通りだよ、将輝。

彼の戦術は一見、奇を衒っているように見えて、実は凄く緻密な計算の上に成り立っている。

対抗手段が無いなら、分が悪いことを承知で奇策に走るかもしれない。

でも『術式解体』という対抗手段を持っているが故に、最も勝率が高い正面対決を選択するはずだ」

「後はお前が後衛と遊撃の二人を制圧するだけだな」

「後衛の方は問題ないと思う。硬化魔法の腕は中々のものだと思うけど、それ以外の魔法は上手く使えないようだからね。

遊撃の選手は……古式魔法を得意としているみたいだね。名前から見て多分、あの『吉田家』の術者じゃないかな。

何をやってくるか分からないという点は不気味だけど、古式魔法

と現代魔法なら、スピードの面で現代魔法に分があるからね。遮蔽物が無い草原ステージのメリットがここでも効いて来るよ」
「特にお前の場合は『基本コード』を使えるというアドバンテージがあるからな」
「残念だけど、新人戦の優勝は向こうに持って行かれちゃったから……せめて、モノリス・コードの優勝は勝ち取らないと」
「ああ、やってやるさ」
吉祥寺の言葉に、将輝が力強く頷いた。

◇◆◇◆◇◆◇

「障碍物が無い『草原ステージ』ですか……厳しい戦いになりましたね、お兄様」
深雪の言葉は、激励に来た面々の意見を代弁していた。
「いや、渓谷ステージや市街地ステージに比べればまだマシだ。贅沢を言えばキリが無い」
彼の言葉に、深雪だけでなくチームメイト――レオと幹比古も首を捻っていたので、達也は解説を加えることにした。
「一条家の『爆裂』は、液体を気体に変化させその膨張力を破壊力として利用する術式だ。
一条家の人間なら、水蒸気爆発を利用した攻撃はお手の物だろう。
一条選手にとって渓谷ステージは、大量の爆薬がフィールド全域に用意されているようなもの。
市街地ステージには実際に水が流れている水道管が張り巡らされている。
それに比べれば草原ステージは『爆薬』となる液体が無い。
いくら『プリンス』でも地下水を汲み上げて『爆薬』にはできないだろうからな。
無論、森林ステージか岩場ステージの方がやり易かったんだが……渓谷ステージという最悪のフィールドを免れただけで芳としなけ

ればならないだろう」
　一年生が「なるほど」という表情を浮かべたのと対照的に、上級生の顔色は曇ったままだった。
「……でも、遮蔽物の無いフィールドで砲撃戦が得意な魔法師と対戦しなければならない、っていう不利が無くなる訳じゃないわ」
「司波、策はあるのか？」
　真由美の指摘に続いて、服部が訊ねて来た。
　彼が達也に自分から話し掛けるのは極めて珍しいことだ。
　達也も意表をつかれた事を隠し切れず、回答が一拍遅れてしまった。
「本来の戦い方をされると正直、手も足も出なかったところですが……一条選手はどうやら俺のことを過剰に意識してくれているようですからね。
　接近戦に持ち込めば、何とか」
「？　格闘戦は禁止されてるぜ？」
「触らなければ良いんですよ。手はあります」
　桐原の疑問に、達也は少し、自信無さげに笑った。

◇◆◇◆◇◆◇

　新人戦、モノリス・コード決勝。
　選手の登場に、客席が大きく沸いた、と言いたいところだが、戸惑いにざわめく観客の方が圧倒的に多かった。
　野次馬的な好奇の目に曝されて、幹比古はフードを更に深く被り直した。
　一方、被り物の無いレオは、少しでも顔を隠そうとしているのか、マントの高い襟の陰で首を竦めていた。
「なあ……やっぱおかしくねえか、この格好」
「使い方は説明した通りだが」
　あからさまに方向性が違う回答は、「諦めろ」という勧告だった。

「……何で僕たちだけ……」
幹比古のボヤキは一人だけ仮装していない達也に対する恨み節。
「前衛の俺がそんな走り難い物を身に着けてどうする」
しかし幹比古の抗議も、作戦の名の下にスッパリと切って捨てられた。
「クソッ……今頃笑ってやがんだろうな……」
レオの台詞は「誰が」という部分が欠けていたが、あとの二人にとっても、敢えて特定する必要は無かった。

◇◆◇◆◇◆◇

「アハハハハハハ……お、可笑し～～
何アレ、何アレ！　アハハハハハハハハハハハ……」
三人の推測に違わず、エリカは客席で爆笑していた。
「エリカちゃん、ちょっと……」
美月が恥ずかしそうに何度もたしなめて、哄笑はようやく失笑のレベルに落ち着いた。
「……あ～、笑った笑った。だから達也くんのやる事からは、目が離せないのよね」
「……エリカちゃんの方が注目集めてたよ、今……」
楽しそうに嘯くエリカの隣で、美月が恥ずかしそうに縮こまっていた。
「ゴメンゴメン。チョッと、ツボに入っちゃって。
もうバカ騒ぎしないから、機嫌直して、美月？」
「もぅ……お願いだからね？」
周りの席から突き刺さっていた視線がフィールドの方へ戻ったのを肌で感じて（直接目で確認する勇気は無かった）、美月はようやく、顔を上げた。
「でも何だろうね、アレ」
草原ステージは遮蔽物が無いから、観客席から直接フィールド全

域が見渡せる。
それでも距離があり過ぎて細かい部分が観えないから、他のステージと同じように、大型ディスプレイが各選手の表情を映し出している。
一高陣地を映した画面の中の、幹比古とレオの姿を凝視するエリカ。
しばらくジーッと見詰めてから、「お手上げ」という感じで首を振った。
「ダメ。あたしじゃ何が目的か分からない。
達也くんのことだから、ハッタリなはずは無いんだけど」
「……SB……『精霊』が吉田くんのローブにいっぱい群がってる……」
「えっ？」
独り言に意外な答えを返されて横を向いたエリカは、メガネを外した美月の瞳が、不思議な色合いを帯びているのを見て、息を呑んだ。

◇◆◇◆◇◆◇

何やら時代錯誤か場違い感があるレオと幹比古の衣装にざわめいた観客が多かったが、嘲笑や冷笑の類はほとんど見られなかった。
観客の意識を捉えていたのは、あの「ローブ」や「マント」を一体何に使うのか、という好奇心。
しかし、対戦する相手は「好奇心」では済まされない。
「ただのハッタリじゃないのか？」
チームメイトの推測に、将輝と吉祥寺は揃って首を横に振った。
「ヤツはジョージのことを知っていた……あれは『不可視の弾丸』対策か？」
「確かに僕のあの魔法は貫通力が無いけど……布一枚で防がれるようなものじゃないし、彼がそんな甘い考えで対策を立ててくるとは

思えない」
「そういう風に思わせる作戦かもしれないぜ？」
「その可能性も無い訳じゃない、が……」
「……分からないな。まさかこの期に及んで隠し玉を用意していたなんて……」
唇を噛み締める吉祥寺。
智謀を自認するが故に、悔しさも一入（ひとしお）なのだろう。
「全くの無警戒というわけにはいかないが、分からないことをあれこれ考えても意味は無い。
力押しに多少のリスクは付き物だ」
観客にとって好奇心の元は、対戦相手にとって警戒心の元だった。

◇◆◇◆◇◆◇

選手たちや応援席からは知るすべが無かったが、スタンドがざわめいた理由は、もう一つあった。
本部席近くのスタンドがざわめいた理由。
それは、思いがけない来賓にあった。
「九島先生！　このようなところへ如何なされました」
いつもであれば、大会本部のＶＩＰルームでモニター観戦している九島老人が突如来賓席に姿を見せたのだ。
「たまにはこちらで見せてもらおうと思ってな」
直立不動で迎え入れる大会委員たちへ鷹揚に頷きを返し、九島烈は急遽用意された革張りの椅子に腰を下した。
「それはもちろん、我々にとって光栄なことと存じますが……」
何故、こんなに急に？、という言外の問いに、九島老人は気さくな答えを返した。
「なに、一人、面白そうな若者を見つけたのでな」

◇◆◇◆◇◆◇

試合開始直前の時間は、おそらく、選手の心の中に最も迷いが渦巻く時間だろう。
どれだけ自信があっても、どれだけ勝算があっても、実際に戦ってみるまで勝敗は分からない。
シーズンリーグ制で同じ相手と何度も戦うのではなく、同じ相手と一回しか戦わない競技会であれば特に、敵の実力が分からないことに対する不安が強くなる。
しかしその迷いは、試合開始の笛が鳴るまでのもの。
戦いの火蓋が切って落とされれば、迷いを持つことなど許されない。

試合開始の合図と共に、両陣営の間で砲撃が交わされた。
魔法による遠距離攻撃。
それを観客は大喜びで迎え、第一高校の応援席では意外感に言葉を失っていた。
両陣地の距離はおよそ六百メートル。
森林ステージや渓谷ステージに比べれば短い距離だが、突撃銃では厳しい間合いであり、狙撃銃の距離だ。
それをお互い、外見上は自動拳銃そのもののＣＡＤを突きつけ合い撃ち合いながら、相互に歩み寄って行っている。
達也は予選、準決勝と同じ二丁拳銃スタイル。
それに対して将輝は、準決勝の汎用型を特化型に持ち替えている。
右手のＣＡＤで相手の攻撃を撃ち落とし、左手のＣＡＤで攻撃を仕掛ける達也に対して、将輝は意識的な防御を捨てて攻撃に専念している。
その結果、
ただでさえ大きな攻撃力の差が、益々広がっていた。
将輝の「射撃」が一発一発に決定的な打撃力を秘めているのに対して、達也の「射撃」は牽制以上のものにはなっていない。

単に相手へ攻撃が届いているだけで、特に防御を意識しなくても魔法師が無意識に展開している情報強化の防壁で防がれてしまう程度の振動魔法だ。

手数も圧倒的に劣っている。

だが色々と裏技じみた手札を隠し持っているとはいえ、純粋な魔法技能では間違いなく劣っている達也が、相手の攻撃に曝されながら肉視が難しいこの距離で的確に攻撃を当てているというだけで、驚くべきことだった。

「何という胆力」

三年生の男子生徒が、唸り気味に呟いた。

「彼は本当に二科生なの？」

女子選手の一人が、チームメイトに訊ねている。

魔法そのものの威力ではなく、攻撃を受けているというプレッシャーの中で正確に魔法を行使している精神力に、上級生たちは驚きの声を上げていた。

だが――真由美や克人、鈴音、あずさ、服部……彼ら、彼女たちの顔色は優れない。

今のところは単なる挨拶であり、一歩近づくごとに、達也は防御に力を回すことを余儀なくされ、その分、攻撃の手数が減っていることが、彼らの目には明らかだった。

吉祥寺は三高の陣地内で、一高の選手やスタッフとは別の意味で驚いていた。

達也が行使している魔法は、振動系統。

これまでの三試合では、加重系統を特化型ＣＡＤにインストールしていたはずだ。

（僅か二時間足らずで起動式の構成を変えてきた……？）

吉祥寺は頭を振って雑念を追い出そうとした。

ＣＡＤの調整技術がどれほど優れていようと、調整の過程は試合に影響しない。

試合を左右するのは調整が終わった後の結果だけだ。
調整のスピードに感心している場合ではない。それは番狂わせを生む可能性がある「迷い」だ――
「打合せどおり、僕も行くよ」
「応、後は任せろ」
自分が何時の間にか、相手チームを格下と見下しているという事実に気付かず、吉祥寺は将輝の背中を迂回して一高陣地へ駆け出した。

達也は今、将輝の攻撃を撃ち落すのに神経を集中している。
それでも、三高陣地から吉祥寺が飛び出したのは見えていた。
それにつられるように――実際、吉祥寺が動いたのを見た結果――、達也はそれまでの慎重な歩みを疾走に切り替えた。
達也のダッシュにも慌てることなく、将輝は的確に圧縮空気弾の魔法を達也めがけて放っている。
ジグザグに回避行動を取りながら走る、ようなことはしない。
手で照準をつけているのではないのだから、その程度の回避行動に意味は無い。
達也は走りながら、空中に生じる魔法の気配に神経を張り巡らせ、サイオンの砲弾――「術式解体」をぶつけて将輝の攻撃を顕在化する前に潰しながら、三百メートルの距離を駆け抜けようとする。
だが――彼我の距離が近くなれば、照準も容易になる。いくら物理的な距離に直接左右されないといっても、物理的に近くなれば認識上も近く感じることが容易(たやす)くなる。
特に空気のような目に見えないものに狙いをつける場合は、対比物が近くにある程、照準はつけ易い。
この場合の対比物は、攻撃対象である達也。
残り五十メートルを切ったところで、遂に達也は、将輝の攻撃を捌き切れなくなってしまった。
撃ち落し損ねた圧縮空気弾が達也に襲い掛かる。

それを五感全てで察知し、五体に刻み込まれた体術でかわしながら、尚も将輝へ向けて進む。
真っ直ぐ進むことが出来なくなった今、数十メートルの距離が厚い壁となって達也の前に立ちはだかっていた。

◇◆◇◆◇◆◇

「到々誤魔化し切れなくなった様だな」
追い詰められた達也を見て、山中は寧ろ楽しそうに呟いた。
「不謹慎ですよ、先生。
魔法の発動兆候と透明の空気弾の両方を五感だけで把握し切るのは、いくら達也くんでも無理でしょう。
それにこの状況なら、『精霊の眼』でなくとも『第六感』で言い訳が利きます」
藤林の弁護に、山中は人の悪い笑みを浮かべた。
「そうかな？
確かに、そこらの有象無象の目は誤魔化せるだろうが……あちらの御仁の眼を誤魔化せるとは思えんが」
山中が視線で指し示した先は本部来賓席、そこには九島老人の興味深げに試合を見詰める姿があった。
藤林はそちらをチラッと見ただけで、すぐに視線を達也へ戻した。

◇◆◇◆◇◆◇

フィールドを迂回して一高モノリスの横手を目指した吉祥寺は、その途中、レオに行く手を遮られた。
ディフェンダーがここまで前進していることに戸惑いを覚えつつ、吉祥寺はレオに向かって『不可視の弾丸』を放った。
否、放とうとした。
「なっ！？」

その視線の先に広がる、黒い壁。
レオが脱ぎ捨てたマントが、翻り広がった姿そのままで固まって、レオの前に突き立ったのだ。
吉祥寺の横手から、風を切って金属片が襲い掛かる。
武装デバイスの空飛ぶ刃を、一瞬で発動した移動魔法によって大きく後方へジャンプすることで吉祥寺はかわした。
そこへ突風が襲い掛かる。
吉祥寺は加重系魔法で自分の身体にかかる慣性を減らし、風に逆らわず飛ばされることで風撃のダメージを緩和した。
（厄介な！）
心の中で舌打ちしながら、『不可視の弾丸』の照準を幹比古へ合わせる吉祥寺。
まず邪魔な援護射撃を潰そうという判断だ。
だが、灰色のローブに目の焦点を合わせた途端、遠近感が定まらなくなった。
ユラユラと揺らぐ陽炎が、ピントの狂った銀塩写真のように灰色の人影をぼやけさせている。
（幻術！？）
視線を目標に合わせなければならない『不可視の弾丸』を逆手に取られた、と覚った瞬間、吉祥寺は頭上から襲い掛かる『小通連』の刃に気付き、回避不能なタイミングに、目を閉じた。

「ガァッ！」
肺から空気を搾り出されたような苦鳴は、レオの口から放たれた。
必倒のタイミングでレオが振り下ろした刃は狙いを逸れて地面にめり込んでおり、レオの身体は横合いから叩きつけられた空気の爆発で吹き飛ばされ地面に横たわっていた。
「将輝！」
助かった、という謝辞を省略して、吉祥寺が救い手の名を呼んだ。
まんまと敵の策に落ちた吉祥寺を、達也に攻撃を続ける傍らの援

護射撃で将輝が助け出したのだ。
吉祥寺の指がＣＡＤのコンソールを走り、加重の系統魔法が発動した。
重力の方向を急に変えられ、幹比古は為す術も無く横へ「落ちた」。
倒れた幹比古へ、得意魔法への拘りを捨てた吉祥寺の、加重増大魔法が襲い掛かる。
地面に押し付けられた幹比古の口から、押し出された息が漏れた。
その光景を、達也も黙ってみていた訳ではない。
吉祥寺へ将輝の注意が逸れた一瞬で、達也は彼我の距離を五メートルまで詰めていた。
達也の体術を以ってすれば、一投足の間合い。
一投足を必要とする、間合い。
将輝の顔に、紛れも無い動揺が走った。
恐慌に似た、動揺。
それは、あるいは、実戦を経験した兵士が持つ、脅威に対する直感か。
ランクＣの限度を超えた十六連発の圧縮空気弾が、達也へ向けて殺到した。

対抗魔法・術式解体は、サイオンの圧縮弾で強引に魔法式を消去する技術。
強引であるが故に、極めて効率の悪い術式。
余り知られていないことだが、魔法式にも強度がある。
干渉力の強い魔法式とは、その構造を維持しようとする力が強いサイオン情報体でもあるのだ。
将輝ほどの術者が作り出す魔法式を、技術的に分解するのではなく力ずくで消去する為には、達也にとっても大量の、並みの魔法師では一日掛けても搾り出せない程のサイオンを圧縮する必要がある。
それが一瞬で、十六連発。

術式解体では間に合わない、と瞬時に判断しながら尚、達也は『分解』を選択しない。
情報構造体を『分解』する『術式解散』を隠したまま、『術式解体』で迎撃する。
その結果、それはある意味、必然か。
迎撃は十四発までしか間に合わず、達也は最後の二発の直撃を受けた。

自分の足元に沈む達也の姿を見て、将輝は「しまった」と臍を噛んだ。
自分が衝動的な危機感に駆られて、ルールを逸脱した出力で魔法を放ってしまったということを、彼は魔法発動直後に自覚していた。
一瞬のことだ。
もしかしたら、審判は気付かなかったかもしれない。
レッドフラッグは挙がっていない、が、自分が失格に該当する反則を犯してしまったと、彼自身が知っていた。
その自覚が、彼の時間を奪う。
それは、取り返しのつかない、一瞬の空白となった。

〔肋骨骨折　肝臓血管損傷　出血多量を予測〕
〔戦闘力低下　許容レベルを突破〕
〔自己修復術式：オートスタート〕
〔魔法式：ロード〕
〔コア・エイドス・データ：バックアップよりリード〕
〔修復：開始……完了〕
それは彼の意識より速く走り、彼が意識するより早く完了した。
無意識領域の処理速度は、意識領域の処理速度を大きく凌駕する。
自分が倒された、と彼が意識した時には既に、肉体の修復は完了していた。
手の届く距離に、立ち尽くした足元。

何故将輝がそのような隙だらけの状態で硬直しているのか、達也は知らない。
今は、知る必要が無い。
そんな余計なことを考える前に、彼の身体は跳ね上がっていた。
右足を踏み込み、不意を衝かれ強張った顔面目掛けて、右腕を突き出す。
反射的に傾けた首の横を、傾けた以上の距離で、達也の右手が奔り抜ける。
最初から当たらない軌道で放たれた右手の突きが将輝の耳元を通り過ぎた瞬間、
音響手榴弾に匹敵する破裂音が、達也の右手から放たれた。
その轟音に、スタンドが静まり返った。
戦闘中の吉祥寺ですら、振り返り、動きを止めた。
達也の右手は、親指と人差し指の指先を付け、親指と中指を交差させた形で突き出されている。
選手と審判と観客と応援団と、この場に集う全員が見つめる中で、将輝が地面に崩れ落ち、達也はガックリと膝をついた。

◇◆◇◆◇◆◇

「なに？　今のは一体何なの？」
すっかり狼狽しきった声と表情で、真由美は左右の席に訊ねた。
だが答えは返って来ない。
鈴音もあずさも、真由美の質問に答えられない。
「……指を鳴らして、その音を増幅したのだろう」
答えは鈴音の更に向こう側、克人からもたらされた。
「……そうですね。単純な、音波の増幅。
大音響による鼓膜の破裂と三半規管のダメージで、一条選手を戦闘不能に追い込んだのでしょう。
ルール上は問題ありません」

克人の言葉を、鈴音が引き継いだ。
「今の魔法は、音量の増幅度こそ大きいものの、術式としては振動系統単一の簡単なものです。
だから魔法の高速発動が苦手な司波君でも、あの一瞬で発動できたんでしょう」
「そんなことは最初から分かってるわ！
あの右手を見れば一目瞭然じゃない！」
だがその解説に対する真由美の反応は、八つ当たり気味のヒステリックなものだった。
「だから何で一条選手の攻撃で倒されたはずの達也くんが立ち上がってたの！？
達也くんは倒されたんじゃなかったの！？
迎撃は、『術式解体』は間に合わなかったはずよ！？
少なくとも二発は直撃を受けたはずよ！？
ルール違反の過剰攻撃で大怪我をしたはずの達也くんが、何故立ち上がって戦い続けたの！？」
「七草、落ち着け」
達也が大怪我をしたというショックで真っ青になっていた真由美を、克人がどっしりと落ち着いた声で宥めた。
「俺にもそう見えた、が、現実に司波は立ち上がり、怪我人には不可能な動きで敵を倒した。
こうして見る限り、自分が放った音響攻撃にダメージを受けているだけで、それ以上の怪我は無い」
「でも……」
「司波は古流の武術に長けているとか。
古流には肉体そのものの強度を高める技や、衝撃を体内で受け流す技もあると聞く。
おそらくは、その類だろう」
「……」
「俺たちが知っている知識だけが、世界の全てではない。

魔法だけが『奇跡』ではないのだ。
それよりまだ試合は終わっていない」
「……そうね。ごめんなさい、十文字くん。
リンちゃんもゴメンね」
真由美と鈴音が和解している内にも、戦況は新たな段階を迎えていた。

◇◆◇◆◇◆◇

「ほほぅ、彼の自己修復は、何時見ても凄いな！」
楽しそうに――それでも周囲の耳を気にして囁き声で――歓声を上げた山中に、藤林は半信半疑の視線を向けた。
「……本当に自己修復術式が働いたんですか？　私には術式発動のサイオン波動も見えませんでしたが」
「私にだって見えなかったさ。
老師だって気付かなかっただろうな。
何せ、彼の自己修復スピードは人間の認識速度を超えているからな。
いや、これだから彼は面白い」
楽しそう、を通り越して含み笑いを始めた山中に、藤林は呆れ顔で注意した。
「だからと言って彼を実験台にしても良いということにはなりませんからね？
彼はこの国に二人しかいない、世界にも五十人はいないと言われている貴重な戦力なんですから」
「多少の実験くらいで壊れるようなひ弱な男ではないと思うがね」
「壊れなければ良いというものではありません！」
ピシャリと窘められて、山中は首を竦めた。
「まあ、それはそうと……藤林の言うとおり、あれを使ったな」
「ええ、やはり規定内の低スペックＣＡＤでは、一条君の相手は厳

しかったのでしょう」
「振動系単一のフラッシュ・キャストか」
「左手に振動系をインストールしたＣＡＤを持っていたのは、このカモフラージュなのでしょう。
相変わらず彼は、用意周到です」
「あれで高校生だというのだから、世の中間違っとるよ。
しかし、フラッシュ・キャストか……敵として考えればあのスピードは脅威だな」
「本当に……洗脳技術の応用で記憶領域に起動式をイメージ記憶として刻み付け、ＣＡＤから起動式を読み出すのではなく記憶領域から起動式を読み出すことで、ＣＡＤの展開・読込み時間を省略する技術……
彼の場合は意識内の演算領域という特性からこの技術を更に発展させ、記憶領域に魔法式をイメージ記憶として蓄えることで魔法式構築の時間すら省略……これによって演算領域のスピード不足を完全に補ってしまうのですから」
「補って余りある、と言うべきだろうな。
ウチの隊に、今の術式を彼以上の速度で発動できる者がおるか？
同じ系統の技術を持つ柳が、辛うじて匹敵するくらいだと思うが」
「……確かに、他には思いつきませんね」
二人は最早、試合を見ていない。
膝をついたままの達也を、気遣うように見詰めているだけだった。

◇◆◇◆◇◆◇

吉祥寺は、パニックに陥りかけていた。
自分が目にしているものが、信じられなかった。
将輝が地面に倒れている。
相手選手、達也は膝をついているが、その目は光を失っていない。
つまり……

（将輝が、負けた……？）

それはありえない光景だった。

決して起こりえないはずの出来事だった。

チームとして負けることはあっても、将輝が倒される確率はゼロ、の、はずだった。

「吉祥寺、避けろっ！」

ディフェンスに残したはずのチームメイトの声を間近に聞いて、ハッと我を取り戻した吉祥寺は、反射的に『避雷針』の魔法を行使した。

電気抵抗を改変された丈の短い草が、放たれた電撃を吸い寄せ地面に流す。

吉祥寺は、加重魔法で押さえ込んでいたはずの敵選手が、荒い息に灰色のローブを揺らしながら立ち上がり彼を睨みつけているのに漸く気がついた。

幹比古には何が起こったのか分からなかった。

周囲の状況を視認する余裕が彼には無かった。

ただ、彼を地面に抑え込んでいた圧力が急に消え去って、急いで地面を転がり、距離をとって立ち上がる、反射的な避難行動を取っただけだった。

そこでようやく状況を理解した。

レオは、倒されている。

達也は、膝をついている。倒れてはいないが、戦闘続行は難しいコンディションに見える。

そしてその前に、一条将輝が倒れている。

（やったんだね、達也！）

達也なら何とかするに違いない、と思いつつ、その一方で「いくら達也でも」と考えていた幹比古は、彼がその目で確かめた現実に奮え立った。

幹比古自身のコンディションも十分とは言えない。

寧ろ最悪と言った方がいいかもしれない。
息をする度に胸が悲鳴を上げる。
折れていなくとも、罅（ひび）くらい入っているかもしれない。
長時間圧迫されていた所為で、軽い酸欠状態になっている。
倒された時に激しく打った背中が痛い。草が生えているくせに矢鱈と硬い地面だ、と幹比古は心の中で毒づいた。
しかし――ここでリタイヤすることは出来ない。
例えコンディションが最悪で、一対二になってしまったとしても。
否、例え、ではなく現実にその通りの状況なのだが。
それでも――負けられない。
達也は「クリムゾン・プリンス」を正面から倒したのだ。
ならば自分は、せめて「カーディナル・ジョージ」だけでも倒してみせる――そういう「意地」が、震える幹比古の脚を支えていた。
ＣＡＤを操作し、灰色のローブに魔力――サイオンを通す。
ローブに宿らせた「影」の精霊が彼の姿を滲ませたはずだ。
影、イコール闇、ではない。
物の輪郭は影によって見えている。
「影」という概念の独立（孤立）情報体である影の精霊が明暗の輪郭を狂わせることにより、相手の視覚認識を妨げ、正確な照準が取れないようにする。
元々の術式は彼の、吉田家のものだが、術式を補助するローブと、ソフトウェアを徹底的に効率化したＣＡＤで、視覚認識阻害の術式を発動するスキームを考えたのは達也だ。
彼が昔に近い――エリカは昔以上と言ってくれた――感触で魔法を使えるのも達也のお陰だ。
ボーイの真似事などという屈辱そのものの仕事に放り込まれた自分が、こうして戦いの場に立てているのも達也のお陰だ。
決勝戦まで勝ち抜けたのも、間違いなく、達也の作戦のお陰だ。
このままでは、何もかもが、達也のお陰、になってしまう。
幹比古はそう考えて、自ら唇を噛み切ることでふらつく足に活を

入れた。

――そんなことは、僕のプライドが許さない

――何としてでも、一矢を報いる

――自分を地べたに這い蹲らせた吉祥寺真紅郎を

――今度は僕が地面に引きずり倒してやる

あえて高慢に、驕慢に、傲慢に、幹比古は己に対して言い聞かせた。

達也は言った。

彼に、教えてくれた。

彼の力が足りないのではなく、術式に欠陥があるのだと。

ならば――

（達也、君の言葉を証明させてもらうよ！）

彼の身体を掠めて行く魔法は無視する。

影の魔法は、彼の姿を身体一つ分ずらして、敵の目に映し出しているはずだ。

自分の魔法の効力を信じて、幹比古はローブの内側で、両手操作の大型携帯端末形態ＣＡＤのコンソールに、長いコマンドを打ち込んだ。

そしてＣＡＤから離した右手を、足元の地面に叩きつけた！

通常の汎用型ＣＡＤは、二桁の数字と決定キー、合計三つのキーで起動式を展開する。

上位機種、特に携帯端末形態の高性能機種には、ショートカットキーを備えたものがあり、使用頻度の高い魔法を選んで一操作で魔法を発動できるようにしているものもある。

今、幹比古が操作したキーの数は十五回。

通常の汎用型ＣＡＤによる魔法発動手順の五倍。

それでも古式魔法の術式手順よりは遥かに所要時間が短い。

格納している起動式の数が同じである以上、幹比古のＣＡＤが余分にキーを叩かなければならないということはない。
幹比古は五つの魔法を一つの魔法の工程として纏め上げるのではなく、五つの魔法の連続発動を指定したのだ。
それは逐次展開と同じ発想の技法。
五つの魔法を含む一つの魔法式を纏めて構築するのではなく、一つの魔法を発動中に次の魔法式を構築する。
一つ一つの魔法の結果を確認しながら、対話式で術式を完成させる精霊（神霊）魔法では当然の手順だ。
それを一連の連続動作として、一々結果を確認せずに一気に処理を進める。
それが達也の、幹比古に示した解だった。

叩きつけた手の下で、地面が揺れた。
手で打ったから地面が揺れたのではなく、地面を振動させる魔法が発動したのは分かっている。
それでもその、如何にも「魔法遣い」然とした姿と、アクションと、その結果もたらされた現象が、「掌で叩いて地面を揺らした」という錯覚を吉祥寺に呼び起こした。
バランスを崩した吉祥寺の足元へ、幹比古の手元から地割れが走った。
地面を引き裂いているのではなく、土に圧力を掛けて押し広げているのだ、とこれも理屈では分かる。
だが何故か、そういう論理的な思考が現実味を失っていた。
吉祥寺は、加重軽減と移動の複合魔法で、空中へ逃れようとした。
だが彼の足は、地面を離れなかった。
草が彼の足首に絡みついていた。
――植物を動物のように操る魔法を、彼は知らない。
未知の魔法に、心が揺さぶられる。
これは単に、地面すれすれの気流を起こして草を絡みつかせただ

けなのだが、系統魔法しか知らない魔法師であれば、そのように「適当」な――角度を指定して風向きを変えて行くのではなく、「もつれさせる」という曖昧な結果をもたらすような――気流操作が可能とは思わないだろう。

地割れが彼の足の下に到達し、

草が彼の足を地割へ引きずりこんだ、ように吉祥寺は感じた。

全ては錯覚。

だがこの錯覚から逃れる為に、吉祥寺は全魔法力を跳躍の術式に注いだ。

――そんな必要は、全く無かったにも関らず。

絡まった草を引き千切り、必要以上に高く飛び上がる。

不気味な緑のアギトから脱出できた安堵感に満たされた吉祥寺の意識から、幹比古のことが一時的に、すっかり消え去っていた。

『地鳴り』『地割れ』『乱れ髪』『蟻地獄』。

それが幹比古の行使した、四つの術式。

そして、最後の一つ。

『雷童子』の雷撃が、吉祥寺を空中から撃ち落した。

「このヤロウ！」

地面に手をついたまま、撃墜の成果を確認した幹比古へ、三高最後の選手の魔法が襲い掛かった。

土を掘り起こし、土砂の塊を叩きつける移動系魔法『陸津波（くがつなみ）』。

この魔法の本来想定している形に比べれば随分と小規模な土砂の津波だ。本当は不得意な魔法なのかも知れないし、ルールを考慮して威力を落としているのかもしれない。

だがいずれにせよ、既に吉祥寺の攻撃によって小さくないダメージを受けている幹比古には、十分決め手になる打撃力を秘めている。

まだ彼の干渉下に留まっている精霊に命じて土砂を退けようか、と考えて――その短い時間で、幹比古は諦めた。

残念ながら、それだけの魔法力が残っていない。
精霊（神霊）魔法と言っても「精霊」自体が力を持っているのではない。精霊はあくまで情報体。事象改変の干渉力の媒体に過ぎないのだ。
結局、負けちゃったな……そう思いながら、押し寄せて来る土砂を、瞬きもせずに見ていた幹比古の視界が、急に、黒く遮られた。
まるで鉄の壁に跳ね返されたような重い音がして、土砂が元の動かざる地面に戻る。
幹比古は黒い壁が飛んできた方へ顔を向けた。
そこには、雄叫びを上げて腕を振り回すチームメイトの姿。
大きく弧を描いた武装デバイスは、三高新人戦代表選手、最後の一人を横殴りに撥ね飛ばした。

◇◆◇◆◇◆◇

「……勝った、わよね？」
「……勝ちました、ね」
独り言のような真由美の問い掛けに、独り言のような口調で鈴音が答えた。
それが、合図になった。
誰かが歓声を上げた。
一人の歓声に二人の歓声が呼応し、四人、八人と連鎖的に拡散し、歓声が、爆発した。
一高生の無秩序な叫び声が、渾然一体となり地響きと化してスタンドを揺るがす。
それは無邪気で、純粋過ぎる、感情の発露。
勝者を讃えると同時に、敗者を打ちのめす、裁きの槌音。
しかし、その無慈悲なお祭り騒ぎは、何故か、すぐに収まっていった。
第一高校応援席の、最前列。

両手で口を押さえ、ポロポロと嬉し涙を流しながら、フィールドを見詰める一人の少女の姿。
よろめきながら立ち上がり、彼女へ向けて手を振る兄を、深雪は声を失ったまま、ただ見詰めることしか出来ない。
まるで、そんな彼女を励ますように、彼女の周りから、徐々に拍手が広がっていった。
やがて拍手は第一高校の応援スタンドを超えて、敵味方の区別無く、激闘を終えた選手を分け隔て無く讃える拍手へと変わって、
――会場全てが、暖かな拍手に包まれた。

◇◆◇◆◇◆◇

思いがけない拍手のシャワーに、達也たちは照れ臭さを禁じ得なかった。
「……それにしても一番美味しいところを攫っていったな。狙ってたのか？」
偽悪的なこの台詞も、照れ隠しであることは、言われた方も言った方も聞いていた者にも明々白々だった。
「そりゃ、まさかだぜ。暫く本当に動けなかったんだよ。あんな衝撃は、二年前、大型二輪にはねられて以来だぜ」
「はっ？　大型二輪にはねられたって？」
幹比古が「冗談だよね？」という表情で問い返したが、レオは大真面目に頷いた。
「いや、あん時はマジでこたえたね。後ろにガキンチョがいてさ、避けるに避けられず、覚悟を決めてドンッ！　だったんだけどよ……流石に無傷とは行かず、肋骨三本、罅（ひび）入っちまってさ。まっ、今回はそれよりゃマシってえか、楽だったけどな」

「えっ、と……レオ？
念の為に訊いておきたいんだけど、さっきの圧縮空気弾は、硬化魔法で防いだんだよね……？」
「いやぁ、恥ずかしながら、攻撃に気を取られちまって……お察しのとおり、ガードが間に合わなかったんだよ。いや、面目ねえ」
「？？？
じゃあ、もしかして……一条選手の攻撃魔法を、生身で凌いだの？」
「凌げなかったぜ？　だから立ち上がるのに時間が掛かっちまった。んっ？　幹比古も、唇を切ってるじゃねえか。大丈夫か？」
「あっ……うん、大丈夫……だよ」
噛み合わない会話、それ以上に信じ難い告白に、幹比古は目を白黒させていたが、上機嫌のレオは相手の戸惑いに気付いてなかった。
「そういや、達也の方は大丈夫か？」
「んっ？　すまん、もう一回言ってくれ」
「達也は大丈夫か？　って言ったんだけど」
「ああ……鼓膜が片方破れててな。今、耳が良く聞こえんのだよ。
……幹比古、どうしたんだ？　何だかＵＭＡ（未確認生物）を発見したような顔をしているぞ」
「えっと、じゃあ達也はさっきまでの僕たちの話が……聞こえてなかったんだよね？」
「すまんな。今も唇を読んでようやく理解できている状態だ。
レオが大型二輪にはねられたことがある、ってとこまでは読み取れたんだがな」
「……その発言に疑問を感じなかったの？」
「疑問？　何に？」
達也の答えを聞いて、幹比古は絶望に捕らわれ天を仰いだ。
「幹比古、一体どうしたんだよ？　急に辛気くさい顔しやがって。
俺たちゃ、勝ったんだぜ。優勝だ、優勝」

「そうだね……」

急に疲れ切った表情を見せた幹比古に、無理もねえな、とレオは勝手に納得し、達也もまた、レオに同調した。

そんな二人を見て、幹比古は思う。

結局、最後に物を言ったのは、魔法力でも技術でもなく、頑丈な身体だったのか、と。

肩を組み、腕を振って、照れながらも歓声に応える二人を見て、僕は鍛え方が足りない、と幹比古はしみじみ思った。

21（23）　逆鱗（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

21（23） 逆鱗

新人戦優勝のパーティーは総合優勝のパーティーと合わせて行われることになった。

一つには代役としてモノリス・コードに出場し、競技優勝と新人戦優勝を決めた三人が決勝戦で肉体的に大きなダメージを受けていて、ドンチャン騒ぎができる状態ではないという事情もあったが、それよりも大きな理由は、総合優勝がかかった明日のミラージ・バットの準備でそれどころではなかったのである。

新人戦優勝により、一高と三高のポイントは更に差が開いていた。その差、百四十ポイント。

明日のミラージ・バットの成績次第で、最終日を待たずに一高の総合優勝が決まる。

選手とエンジニアはコスチューム（モノリス・コード選手は防護服）とＣＡＤの仕上げ調整に余念が無く、手の空いたメンバーも様々な形で彼らを手伝っていた。

右耳鼓膜破裂をわざと「修復」せずに医務室で通常の魔法治療を受けた達也は、その後、自己修復術式を発動して完治させた耳を医療用のイヤー・パフで隠して、深雪とマンツーマンで明日の準備に当たっていた。

チームのメンバー、特に上級生が、既に治っている右耳を、そうとは知らず気遣ってくれるのが、達也としても少し心苦しくはあったが、彼にも隠さなければならない事情がある。

真夏には暑苦しい覆いを耳に被せたまま我慢することを代償に、なけなしの良心には目を瞑らせることにした。――そんなことは代償になどならないと、分かってはいたが。

もっとも、「余念が無い」とは言っても、前日にじたばたしなければならない事はほとんど無い。

いや、全く無いと言った方が良いかもしれない。

昨晩の、いきなり二人分――自分の物も含めれば三人分――のCADを白紙の状態から仕上げなければならない様な慌ただしさは、滅多に起こらない異例の事態。

新人戦から本戦への鞍替えはあったものの、深雪がミラージ・バットに出場するのは予定されていたことであって、その為の準備は抜かり無く進めて来ている。

一日、予定外に別件で塞がってしまったからといって、それで大した影響を受ける訳でも無いのである。

「無理をせずに休んで、達也くん。

貴方は昨日から散々無理をしてるんだから」

「深雪さんも、もう休んで下さい。

貴女が頑張っていると、怪我人が何時までも無理を止めようとしませんので」

CADのフルチェックを手際よく終わらせた達也は、真由美や鈴音から、深雪込みで、半ば追い立てられる様にして本日の活動に終止符を打った。

◇◆◇◆◇◆◇

しかしその一方で、この同じ夜、一睡も出来ないほど追い詰められていた者たちもいた。

「……第一高校の優勝は最早確定的だ……」

「馬鹿な！　諦めると言うのか？

それは座して死を待つということだぞ！」

「このまま一高が優勝した場合、我々の負け分は一億ドルを超える。

無論、ステイツドルで、だ」

「これだけの損失、楽には死ねんぞ？

良くて生殺しの『ジェネレーター』、適性が無ければ『ブースター』として死んだ後まで組織に搾り取られることになる」

テーブルを囲んだ男たちは、おぞましい物を見る目で、部屋の四

隅にボンヤリと立ち尽くす四人の男を順番に窺い見た。
「……手段を選んでいる場合では無い」
「そうとも！　多少客に疑いを持たれたところで、証拠は残らんのだ。
この際、徹底的にやるべきだ」
「協力者に使いを出そう。
明日のミラージ・バットでは、一高選手の全員に途中で棄権してもらう。
――強制的にな」
狂気を孕んだ含み笑いが、同意の印に投げ交わされた。

◇◆◇◆◇◆◇

大会九日目は、前日までの好天から打って変わって、今にも雨が降り出しそうな分厚い雲に覆われた、薄暗い曇天だった。
もっとも、眩しい日差しの無い、夜明けを随分と過ぎても尚薄暗い空は、ミラージ・バットにとって滅多に無い好条件であり、この競技に出場する深雪たちにとっては寧ろ「好天」と言えた。
「ミラージ・バットにとっては試合日和、なんだろうけど……どうも、波乱の前触れに見えるな」
空を見上げて独り言の様に呟いた達也の言葉に、深雪は眉目を曇らせた。
「まだ何か起こるのでしょうか……？」
「狙いが分からないからな……起こるという確証もないし、起こらないという保証も無い。
まあ……深雪が心配する必要はないよ。何があろうとお前だけは、俺が守ってやるから」
達也の言葉に他意は全く無い。
達也としては、深雪だけを守れれば良いのだ。
本音を突き詰めれば、他の選手が犠牲になっても自己責任であり

自分の関知するところではないと達也は考えている。
だが――偶々、二人の会話を誰も見聞きしていなかったことを、達也は天に感謝すべきかもしれない。
もしこの場に第三者が居たなら……尚も空を見上げる達也の傍ら、彼の視界の外側で恥じらい俯きながらも至福の微笑みを浮かべて身を寄せる深雪の姿を見ていた者が居たなら、「悶え殺し」という世にも奇妙な罪状で、彼ら兄妹は告発されることになったかもしれなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

深雪の出番は第二試合に決まった。
本当は休息時間をたっぷり取れる第一試合が良かったのだが、そう何もかも都合良く運ぶはずはない、第三試合にならなかっただけ吉としよう、と達也は考え直した。
二人は第一試合を競技フィールド脇のスタッフ席で観戦することにした。
第一試合終了から第二試合開始まで四十五分のインターバルがあるとはいえ、一々客席からフィールドへ移動するのは時間が勿体ない。
他校の選手は、と見れば、やはりフィールド脇に、皆揃っていた。
「小早川先輩、随分気合いが入っているご様子ですね」
湖面に突き出た円柱の上で開始の合図を待つ先輩選手を、深雪はそう評した。
達也の目にもそう見えた。
小早川は気分屋だ、と摩利がこぼしていたが、もしかしたら自分の手で総合優勝を決められるかもしれない、となれば気を抜く方が難しい事だろう。
勝敗は相手のあることだが、この分なら大丈夫だろう、と達也は思った。

観客が、スタッフが、チームメイトが注目する中、始まりを告げるチャイムが鳴った。

◇◆◇◆◇◆◇

第一ピリオドは順位が目まぐるしく入れ替わる接戦となったが、小早川が僅かな差でトップに立った。

我知らず息を詰めていたエリカは、ホッと力を抜いて、隣席の美月に話し掛けようとして――いつもと違う友人の姿に目を瞠った。

「美月……メガネを外して大丈夫なの？」

霊子視覚過敏症の魔法師がオーラ・カット効果の施されたメガネを掛けているのは、活性化したプシオンの影響でその場を覆う激しい感情に巻き込まれるのを防ぐ為だ。

今のこの状況、大勢の観客が昂奮をぶつけ合っている中でそのメガネを外しては、精神に大きな負荷が掛かってしまうはずだ。

「正直……チョッと辛いかな」

膝の上に置くメガネに添えた美月の両手が、時折、微かに震えているのに、エリカは気付いた。

「でも、いつまでも自分の力から逃げてるだけじゃダメだと思うから」

「……美月は別に、逃げてる訳じゃないと思うけど」

彼女が魔法科高校に進学した理由をエリカは何度か聞いている。勿論、主な理由は、魔法の素質という希な才能を活かす為であり、具体的には魔法大学に進学し魔工師になる為だ。

だがそれと同時に、視えすぎている「眼」をコントロールする技術を学び身につけるという目的も持っている。

二科生に許されている範囲で最大限、その為の指導も受けている。

未熟であっても自分の「力」にキチンと向き合っているのだから逃げているのではないし、未熟な内は道具の助けを借りるのも寧ろ当然のことだとエリカは思う。

だから、だろう。
「無理したって良いことはないと思うけど。
一足飛びに技術が身に付くことは無い、とは言わないけど、身体を壊しちゃうことの方が多いんだから。
美月の場合は、もっと取り返しのつかないことになる可能性があるんだよ？」
少し厳しい言い方になってしまったのは。
「うん……でも、見なくちゃいけないときに、見えている物から目を逸らすのは、やっぱり間違っていると思うの……」
それでも美月は、メガネを膝の上に置いたままだった。
「渡辺先輩が怪我したときも、私がちゃんと見ていることが出来たら、少しは達也さんたちの役に立てたと思うから」
「……だから今回は、何か起こったときに備えて、見張っているつもり？」
「うん、あのね……深雪は大丈夫だと思うの。だって、深雪に何かされるのを達也さんが見逃すはずはないもの。
でも今日は、他の選手まで、手が回らないと思う。
昨日もあんな無理をしたばかりだし。
そしてもし」
「他の選手が犠牲になった場合、達也くんが知らん顔するはず無い、か。
まあそうだろうねぇ……冷たいように見えて、意外とお人好しだから」
「達也さんは仲間思いの凄く暖かい人だよ……！」
「ハイハイ、分かってるって」
（「仲間」じゃなきゃ、トコトン冷酷になれる人のような気もするけどね）
後半の本音は心の中だけに止め、エリカは手振りを併せて少しムキになっている美月を宥めた。
「エリカが柴田さんを心配するのは分かるけど、もし達也の考えて

いるとおり、妨害工作に精霊魔法が使われているなら、柴田さんの『眼』が一番頼りになるのも確かだ。
一応、霊子光の刺激を緩和する結界を僕らの周りに作っておいたから、後遺症が残るようなことにはならないと思う」
美月の向こう側の席から挿まれた幹比古の言葉に、エリカは意地の悪い笑みを浮かべた。
「フ～ン……？
ミキが美月を守ってあげるんだ？
じゃあ美月に何かあった時には、ミキが責任を取りなさいよ？
もちろん、男の子が女の子に対して取る責任だからね？」
「なっ、今は、そんなことを言ってるんじゃないだろ！」
顔を赤くして反論する幹比古は、愛称に対するいつもの抗議も忘れている有様。
美月はと言えば、顔を茹で上がらせて抗議すら出来ない状態だ。
「……お前ってホント、意地の悪い女だな」
そしてエリカはといえば、隣の席からもたらされた溜め息混じりの非難を、何処吹く風とばかり黙殺していた。

◇◆◇◆◇◆◇

無視されたレオと知らん顔をしたエリカの間でいつものにぎやかな掛け合いが続いている内に、第二ピリオド始まりのチャイムが鳴った。
二人は「物足りない」と表情で語り合いながらも、選手と他の観客の邪魔にならないよう口を閉ざした。
そして、第二ピリオドが始まって程なくして、それは起こった。

◇◆◇◆◇◆◇

緑色の光球に向けて、小早川と、もう一人、同時に跳び上がった。

優先圏内への到達は、残念ながら相手が僅かに早かった。
跳躍の勢いを止める魔法を、小早川が行使した。
彼女の身体が空中で静止する。
続けて、元の足場に戻る魔法を編み上げようとして、その足場が別の選手に使われているのに気付く。
彼女は慌てず、一番近い、空いている足場へ着地する為の魔法に魔法式を切り替えた。
重力を無視して、真っ直ぐ斜めに、ゆっくり空中を滑空する移動魔法。
だが、斜めに降りるはずの彼女の身体は――重力に引かれて、真っ直ぐ落ちて行った。
真下に感じる浮遊感（この場合、落下感と表現すべきか？）に、小早川の表情が引きつったのが、観客席からもハッキリ分かった。
驚愕。
恐慌。
恐怖。
彼女の身体を支えるはずの魔法が発動しない。
これまで彼女の人生を支えてきた魔法から示された、突然の裏切りに、藻掻（もが）くことすら忘れて湖面に落ちて行く。
水面とはいえ、十メートルの高さだ。
落ち方が悪ければ、致命傷ともなり得る。
そして小早川は、落下に備えた姿勢を取る素振りも見せていない。
だが幸いこれは、二重、三重に安全を考慮されたスポーツ競技だ。
選手が魔法のコントロールを失って落下するという事態には当然、対策が為されていた。
立ち合いの大会委員が減速の魔法を放った。
小早川が落ち始めてから、大会委員の魔法が彼女の身体を受け止めるまで、実際には一秒も掛かっていないだろう。
それでも、水面まで残すところの高度は半分近くしか残っていなかった。

それは、彼女の心を打ちのめすのに十分な時間、十分な道程（みちのり）だった。

◇◆◇◆◇◆◇

時計が止められ、担架で運ばれていく上級生を、達也は痛ましげな眼差しで見送った。

魔法を学ぶ少年少女が魔法を失う原因の内、最大を占める理由は、魔法の失敗による危険体験、それによってもたらされる魔法に対する不信感だ。

魔法は世界を偽る力。

魔法それ自体が、世界の理からはみ出した偽りの力。

それでも達也自身のように、魔法を「眼」で見ることが出来れば、偽りであっても確かにここにある力だと信じることも出来る。

だが、多くの魔法師（の卵や雛鳥）にとって、魔法は目に見えない、あやふやな力。

――自分が使っている魔法は、本当に自分の中からもたらされた力なのか？――

この疑問は、魔法を学ぶ過程で誰もが、と言っていい程、ほとんどの魔法師が一度は抱く疑問、否、疑念。

そして、発動するはずの魔法が効果を顕さず、魔法によって避けられたはずの危険に直面した時、この疑念が確信に変わる、ことがある。

――やはり、魔法など無いのだ――

という、確信に。

この確信に取り憑かれた魔法師は、二度と魔法を行使することが出来なくなる。

魔法は、それ程までに脆く危うい、精神の微妙なバランスの上に成り立っているのである。

（……小早川先輩はもう、ダメかもしれんな）

青ざめた深雪を励ますように、その肩を抱き寄せながら、達也は心の中でそう呟いた。

重力に囚われた瞬間、それを自覚した瞬間に小早川の表情を塗りつぶした、恐怖。

他人だ、と割り切っていても、貴重な才能が失われるのは、矢張り、寂しいことだった。

そんな彼の感傷を断ち切るように、胸ポケットの通信端末が振動した。

ピタリと身体を密着させていた深雪が物問いたげに見上げる前で、達也は折りたたみ式の音声通信用ユニットを開いて耳と口元に当てた。

『達也、幹比古だけど、今、話しても大丈夫かい？』

「……ああ、大丈夫だ」

音声通信ユニットの音波干渉消音機能が作動していることを作動ランプで確認して、達也はそれでも尚、声を潜めて応えた。

『今の事故のことなんだけど、残念ながら僕の方では、術の兆候を見分けられなかった』

「そうか……」

『ゴメン、期待してくれたのに、応えられなくて……』

「いや、捉えられなかったのは俺も同じだ」

『でも、柴田さんが、達也に話したいことがあるって』

「美月が？　もしかして、メガネを外していたのか？」

達也の口調に、演技ではない、驚きが混ざる。

だが、幹比古はそれに、直接は答えず、

『達也さん、美月です』

通話相手を交代することで答えにした。

「美月、何か視えたのか？」

大丈夫なのか、という言葉も達也の喉元で待機していた。

だがそれは、美月の心意気に失礼だと達也は思った。

彼女は自分の「視力」を、魔法に携わる者として、自分の意思で

行使したのだ。
ならばその成果を問うのが、同じく魔法の世界で生きる自分の返すべき言葉だ、と達也は思った。
『ええ、その……小早川先輩の右腕で……多分、ＣＡＤをはめている辺りで、ＳＢ、いえ、「精霊」がパチッと弾けたみたいに、その、視えました』
「そうか……視えたのか。
それで、その『精霊』は弾けて散ってしまったんだな？」
『えっと……ええ、そんな感じでした。こう、とても古い電化製品が、パチッと火花を散らして止まってしまう、みたいな……』
「そうか。
なるほど、分かった……そういうことか」
達也は朧気ながら、「敵」の仕掛けたカラクリが見えたような気がした。
『あの、達也さん……？』
彼が頷く雰囲気が、音声通話越しにも分かったのだろうか。
おずおずと、ではあったが、少し、期待の込められた声が、受話器から流れ出した。
「良くやったな、美月。
今の情報は、とても役に立った」
『ありがとうございます！』
美月が訊きたいことを、聞きたかったことを先取りして答えた達也の台詞に、声を弾ませた美月の声が返って来た。

◇◆◇◆◇◆◇

第一試合、第一高校の成績は、残念ながら途中棄権。
重苦しい雰囲気に包まれた一高テントを抜け出して、達也はＣＡＤチェックを行っている大会委員のテントへ赴いた。
深雪は選手控え室――テントの中でも一応は「部屋」だ――に残

して来た。
今までのやり方を見る限り、二試合連続で手を出してくるとは思わなかったし、選手に直接暴力的な手段を用いることは無いだろうが、試合前の選手は試合に集中すべきで、機器のチェック等という雑事に煩わされるべきではない、と達也が同行を押し止めたのだ。
それはここ数日で何度も繰り返した手続きであり、何事もなく進み、何事もなく終わるはずだった。
しかし、そんな彼の楽観的な見通しは、ＣＡＤを検査装置に掛けた瞬間、彼の脳裏から蒸発して消えた。
それは完全に、衝動的な行為だった。
異常を感知した、という認識が彼の意識に届いた時には、既に、彼の手は、
係の委員をテーブルの向こう側から引きずり出し、地面に叩きつけていた。
悲鳴が上がった。
続けて、怒号が――正確には怒号を上げながら警備担当の委員が――駆け寄って来た。
だが、そんなものは、彼の耳には届いても、彼の意思には届かない。
一切の手加減無く放射した殺気が、足音を止め、喧噪を静寂に塗り替える。
それは、彼に唯一残された「本気」の発露。
「……嘗められたものだな」
苦鳴が上がったのは、組み伏せた胸を抑える膝の圧力を高めた結果の、生理的反応か。
彼が叩きつけた係員は、苦痛に呻きながらも、達也の放つ鬼気に、歯の根が合わず、歯を鳴らすことも出来ず、口元と頬を痙攣させていた。
「深雪が身につける物に細工をされて、この俺が気付かないと思ったか？」

そんなことを言われても、彼の家族事情を知らない第三者に分かる訳がなかった。

だが同時に、何も分からないまま、誰もが理解せずには、いられなかった。

彼が漏らした不吉な含み笑いに。

一方的な暴行を受けているこの係員は、決して触れてはならぬ物に、竜の逆鱗に触れてしまったのだと。

達也の右手が、組み伏せた男の喉元へゆっくりと近づいて行く。

それを見ていた者たちは、目を逸らすことも出来ず、何故か同じことを思った。

同じ光景を想像した。

この少年の指は、容易く喉を突き破り、首をへし折り、血溜まりの中に羅刹の裁きを執り行うだろう……

「何事だね？」

だがその避け得ない破局は、穏やかな老人の声によって、回避された。

威圧感も厳しさもない、春風のようなその声が、その声に含まれた波動が、その場を蹂躙していた殺意を柔らかく呑み込み、中和した。

「――九島先生」

憑き物が落ちたように鬼気を収めて、達也は手を離し、膝をどけ、立ち上がって九島老人に一礼した。

「申し訳ありません。見苦しい姿をお見せしました」

「君は――第一高校の司波君だな。

昨日の試合は見事だった。

それで、一体何事かね？」

達也の鬼気が収まったのを肌で感じて、狼藉を働いた彼を取り押さえようという動きを見せた者もいたが、九島老人の邪魔をするのは僭越と考えた同僚に制止された。

「当校の選手が使用するＣＡＤに対する不正工作が行われましたの

で、その犯人を取り押さえ背後関係を尋問しようとしておりました」
「そうか」
その場にいた者は皆、彼の鬼気、彼の殺意に凍り付いていた者は誰もが、その言葉を嘘だと感じた。
尋問だけで、済ませたはずがない、と。
だが九島老人は、彼が放っていた鬼気については何も追求せず、達也の言葉に頷いた。
「不正工作が行われたＣＡＤというのはこれかね」
「そうです」
かつて「最高にして最巧」と謳われた老魔法師は、検査機械からＣＡＤを取り外して目の前に持って行き、繁々と見詰め、頷いた。
「……確かに、異物が紛れ込んでおるな。
これは、見覚えがある。
私が現役だった頃、広東軍の魔法師が使っておった電子金蚕（でんしきんさん）だ」
そう言って、地面から立ち上がれぬままの男へ冷ややかな視線を投げた。
ヒッ、と声を上げて、男が腰を抜かしたまま後退る。
「有線回線を通して電子機器に侵入し、高度技術兵器を無力化するＳＢ魔法。
プログラムそれ自体を改竄するのではなく、出力される電気信号に干渉してこれを改竄する性質を持つ為、ＯＳの種類やアンチウイルスプログラムの有無に関わらず、電子機器の動作を狂わせる遅延発動術式。
我が軍は電子金蚕の正体が判るまで、随分苦しめられたものだが……
君は電子金蚕のことを知っておったのか？」
「いえ」
九島老人の問い掛けに、達也は身振りを伴わず、「休め」の姿勢を保持したまま言葉だけで答えた。
「電子金蚕という言葉は初めて伺いました。

ですが、自分の組み上げたシステム領域に、ウイルスに似た何かが侵入したのはすぐ分かりました」

「そうか」

達也の言葉に、九島老人は楽しげな笑みを浮かべた。

しかし視線が告発を受けた検査係へ向けられた時には、その笑みは、歴戦の魔法師が敵を見下ろす際に浮かべる笑いに変わっていた。

「では君は、一体何処で電子金蚕の術式を手に入れたのだね……？」

悲鳴を上げ、四つん這いでその場を逃れようとする工作員は、達也を取り押さえようと集まっていた警備員に拘束された。

「さて、司波君。君もそろそろ競技場に戻った方がよかろう。

ＣＡＤは予備の物を使うと良い。このような事情だ、改めてチェックは必要ない。

そうだな、大会委員長？」

突如掛けられた声に、背後に付き従っていた老人――と言っても、九島老人より一回り以上若い――は、大急ぎで頷いた。

「運営委員の中に不正工作を行う者が紛れ込んでいたなど、かつて無い不祥事。

言い訳は後でじっくり聞かせてもらおうか」

今にも卒倒しそうな顔で、それでも何とか肯定の応えを返す大会委員長とその取り巻きたちから目を背け、九島老人は再び楽しげな眼差しを達也へ向けた。

「司波達也君、君にもいずれ、話を聞かせてもらいたい」

「ハッ、機会がございますれば――」

「フム、ではその『機会』を楽しみにしていようか」

これが達也と九島烈の、最初の直接遭遇だった。

◇◆◇◆◇◆◇

選手「控え室」のある天幕へ戻ってみると、自分に向けられる視

線が、そこに込められた感情が、微妙に、だが確実に変化していることを、達也は敏感に感じ取った。

――あるいは、「元に戻った」と言うべきかもしれない。

微妙であるのは、隠そうとして隠し切れていない為。

見る目を変えることに後ろめたさを覚えながら、そうせずにはいられない心の揺らぎ。

達也は決して鈍い人間ではない。

情緒に偏りがあるだけで、その偏っている部分では、寧ろ、極めて鋭敏であると言える。

感が鈍いのは、好意。

鋭にして敏であるのは、悪意。

今、彼に向けられている眼差しは、彼にとってお馴染みのもの。

得体の知れぬ異質な存在に対する戸惑いと恐れ、そして、忌避。

「お兄様……」

そして、その中でただ一人、彼を忌避していない少女は、眉と声を曇らせて彼を出迎えた。

「すまんな、心配掛けて」

そしてその、唯一つの眼差しだけが、彼の心に鈍い痛みをもたらす。

「そんなこと！

だってお兄様は、わたしの為に怒って下さったのでしょう？」

勢い良く首を振ったはずみに、結い上げている途中の髪が、少し解(ほつ)れた。

「早いな。もう事情を聞いたのか？」

零れ落ちた髪をすくって頭をそっと撫で上げた手に、深雪は恥じらい、俯き、それでもシッカリと、兄の問い掛けに答えた。

「いいえ。

ですが、お兄様が本気でお怒りになるのは、いつも……わたしの為、ですから……」

シッカリと答えながらも、徐々に涙声に変わっていく妹の頬に手

を添えて、達也はそっと、上を向かせた。
「……そうだな。
俺は、お前の為にだけ、本当に怒ることができる。
でもね、深雪。兄貴が妹の為に怒るのは当たり前なんだ。
そしてそれは、俺の心に唯一つ残された『当たり前』だ。
だから深雪、お前は哀しまなくても良いんだ」
達也は開いている右手でハンカチを取り出して、涙をたたえた妹の目元にそっとあてがった。
「それに……折角綺麗にメイクしたのに、涙で汚してしまっては勿体無いよ？
今日はお前の為の、晴れ舞台になるんだから」
「もう……お兄様ったら。
試合に出るのはわたしだけではありませんのに。
それは身贔屓というものですよ」
苦笑い気味ながら、それでも深雪の笑顔は誰よりも輝いていた。
少なくとも達也にはそう見えた。
妹が笑顔を取り戻したことに安堵と満足を覚え、頬に当てていた手をそのまま肩に移して、一緒に中へ入ろうと天幕の方へ顔を上げた達也は、彼を取り囲む視線が再び、そして今度は奇妙な、変化を遂げていることに気がついた。
息を潜め身を縮めて物陰からこっそりと窺い見る視線から、ウンザリしながら無視することも出来ずにいる生暖(なまあたた)かい眼差しへ。
「あら、達也くん」
こんな時でも、生徒会長は生徒たちの代弁者、と言わんばかりに、真由美が一際生温(なまぬる)い視線と薄ら寒い声で達也を迎えた。
「大会本部から『当校の生徒がいきなり暴れ出した』と言われたときには一体全体何事かと思ったのだけど……
とってもシスコンなお兄さんが、大事な大事な妹にちょっかいを掛けられそうになって怒り狂っていただけだったのね」
極めて不本意な言われよう、だったが、台風接近間近の如きじっ

とりと湿った生温い風が吹き付けてくる中、兵数の圧倒的劣勢を悟った達也は、戦略的撤退を選択した。

つまり、エンジニアに割り当てられた作業室へ、こそこそと逃げ込んだのである。

こうして達也は一高の中で、忌み嫌われ孤立する、という事態を免れたのであるが、それが彼の本意だったかどうかは……本人に訊いても、分からなかったに違いない。

2一（24） フェアリーダンス（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

2―（24）　フェアリーダンス

夜明け前からどんよりと曇った空は、二試合目の始まる九時半になっても一向に回復へ向かう気配は無かった。
「今日は良い天気だな……出来れば、夜までこのままの天気が続いて欲しいところだ」
「夕方から晴れるそうですよ」
「星明りも結構邪魔になるんだが……まあ、雨が降るよりマシだろうね」
予選を通過し夜の決勝へ進むことを完全に前提としている兄妹の会話を、少し離れた椅子で聞いていたあずさは、それを「暢気だ」とは感じなかった。
一般に、一年生と二年生以上の実力差は、二年生と三年生の実力差よりも大きい。
魔法の専門教育は、高校課程から本格化するものだからだ。
だから仮に新人戦がなくとも、本戦に一年生がエントリーするケースは僅かだろう。
普通なら、大会期間中にいきなり新人戦から本戦へコンバートされても、上位進出どころか予選通過も難しい。
だが――
（深雪さんにそんな常識は通用しないでしょうね……司波くんまでついているんだし）
あずさは気が弱いところを除けば、同年代の少年少女の中で間違いなくトップクラスにランクされる魔法師（の雛鳥）だ。
これだけ気の弱い性質で第一高校の生徒会役員に選ばれていること自体が、彼女の能力を逆説的に証明している。
そのあずさが見るところ、深雪には本気で優勝を狙える実力がある。
妹単独でもそれだけのずば抜けた力があるのに、それをあの兄が

全力でサポートするのだ。
例え優勝候補筆頭だった摩利が万全の状態で出場していたとしても、勝てないかもしれないとさえ思えてしまう。
心の中で、そんな、第三者的な論評を加えていたあずさだったが、実は彼女も第三試合を担当するエンジニアであり、今ここに居るのは少し早めにＣＡＤの最終システムチェックを行う為だった。
本戦のモノリス・コードとミラージ・バットは九校戦男女それぞれの最終競技とあって、どの学校もスタッフをフル稼働で貼り付けている。
第一高校では、選手一人にエンジニア一人体制で両競技に臨んでいた。
だからこの競技に限っていえば、司波兄妹はあずさにとってライバル。
同じエンジニアとして、達也があずさのライバル、と言った方がより正確かもしれない。
だが――あずさは始まる前から、勝ち負け以前に、競い合うという気持ちすら持てなくなっていた。
さっきの出来事。
大会本部から達也が係員に暴行を働いている、と一報されたときには驚くよりも「怖い」と思った。
意外感はなく、逆に「彼ならば」と心の何処かで納得していた。
まだそれほど長くも深くも無い付き合いだが、「彼は理由なく暴力を振るうような男の子じゃない」とあずさは思っている。だが同時に、理由があれば暴力に訴えることも躊躇わないだろう、とも思っている。
そして暴力に躊躇いを持たない心が、あずさには恐ろしかった。
魔法が軍事目的で開発され、今でも戦力・抑止力としての役割が魔法の用途の中で大きな比率を占めていることは、あずさも当然、弁えている。
だが軍事力にしろ警察力にしろ、それは行政システムに組み込ま

れた「暴力」だ。
その行使には、決定する者、命令する者、実行する者、監督する者、多種多数の人間が責任を分かち合う。
だが彼はきっと、自分一人で決定し、実行し、その責任を負う。
おそらくはそれが、相手の死――殺人という結果につながるものだとしても。
その冷たい鋼のような心のあり方が、恐ろしく感じられた。
驚きは、彼の口から詳しい経緯を聴くことでもたらされた。
ＣＡＤに不正な工作を加えていた現場を見つけ出し、取り押さえたという事情説明。
小早川を担当していた技術スタッフの、泣き出しそうに歪んだ表情が、あずさの瞼に焼き付いている。
悔しかったのだろう、とは、容易に想像出来る。容易に共感できる。
自分にはＣＡＤに細工されたことが分からなくて、それで選手が事故を起こして、その結果、特に優秀な同級生が一人、再起不能になってしまうかもしれないのだから。
達也が二科生であり「劣等生」であるというのは、紛れも無い事実だ。
彼の実技成績は、ギリギリで赤点を取っていないというレベルのもの。
入学直後の実技試験で赤点を取る生徒は毎年五人以下だから、彼の成績は「良くない」ではなく「悪い」と評価されても仕方の無いものだ。
だが現実は――テストという作られた状況下における「実力」ではなく、魔法師が現実に直面する諸状況への対応能力で見たならば、その評価は、まるで逆。
開発においても、分析においても、調整作業においても、
そして、戦闘においても。
彼の力量は「超」が付く位、一流だ。

魔法という能力だけを切り取って評価するのではなく、魔法が活用されているシーンで評価するならば、彼はトップクラスの「優等生」だと言える。

ならば――

（わたしたちの「成績」って……「一科生」って、なに？　「一科生」と「二科生」の区別に意味なんてあるの？）

この九校戦で、達也のことを間近で見ていて、あずさはそんなことを考えるようになっていた。

それは、迷い。

今まで当たり前のこととして、疑問を抱いたこともなかった価値観が、俄かにあやふやで頼りなく思えてしまう不安感。

あずさは自らを「ブルーム」と誇り、二科生を「ウィード」と見下すような、虚飾に侵されたエリート意識は持ち合わせていない。

少なくとも、意識していない。

だがそれでも、自分の魔法技能が優れたものであり、それ故に自分は優秀な魔法科高校生であるという「自負」に縁がないという訳ではない。

自分の魔法技能に対する自信は、未だ深い霧に閉ざされた魔法師としての、魔工師としての未来を切り拓く勇気を与えてくれる、大切なパートナー。

あずさ自身がそれを意識していなくても、魔法師としての自信が彼女の背中を押しているのは紛れも無い事実だった。

それは何も魔法に限ったことではなく、「未来」や「将来」に対して期待と同じくらい大きな不安を抱えている若者は、自分を支える「経験」や「実績」が不足している分、「自負」や「自信」に依存している部分があるものだ。

それがあずさにとっては、彼女のような「魔法科高校の優等生」にとっては、「魔法」に由来する、ということ。より正確には、「魔法の成績」が、自負を生み出し自信を作り出している。

しかし達也を見ている内に、その自負が、自信が、何だか根拠の

無いものに思えてきたのだ。
試験の成績は自分が一年生だった当時の方が間違いなく上なのに、実戦魔法師としても、魔工技師としても、魔法研究者としても、全く勝てる気がしない。自分の持つレアスキル、これだけは真由美にも摩利にも負けないと密かに思っている特殊な魔法でさえも、達也の前では意味を為さないように思えてしまう。
それでもまだ、自分はそれほど劣等感に悩まされずに済んでいる方だろう、とあずさは思っている。
彼女は達也が「彼」であると、最早九割以上、確信している。
「彼」が相手なら、敵わないのは当たり前だ。
「彼」を相手に、劣等感を覚える方がおこがましい。
あずさは自分をそう、納得させていた。
（だけどみんなは、まだ知らない……）
知らないから余計に、思うはずだ。
感じるはずだ。
彼と同じ一年生は、特に。
二科生に劣る一科生の自分たちは――自分たちの「成績」は何だったのか、と。
「あーちゃん、あんまり思い詰めない方がいいわよ？」
背後から不意に声を掛けられて、跳び上がる様にして振り返ると、真由美が苦笑を浮かべながらあずさを見ていた。
「アレはね、特別（とくべつ）」
後輩を「アレ」呼ばわりした声は、その語句に反して暖かかった。
「納得できない子もいるでしょうけど……高校生にもなったら、納得できなくても受け容れる、ってことも覚えなきゃ、ね。
二科生が魔法技能で一科生に劣っているのも事実なら、達也くんが私たちのレベルを超えてるのも事実なんだから」
「えっ、でも……」
意外な台詞を聞かされて、あずさは絶句してしまった。
確かに達也のレベルは自分より数段高いところにある、とあずさ

は思う。――いくら「彼」であるといっても、少し残念に感じてしまうのは否めないが。

だが真由美のレベルもまた卓越した水準にあり、達也にそうそう劣っているとは思えなかった。

「全部負けてるって訳じゃないけどね」

そんな戸惑いを読み取ったのか、真由美はもう一度苦笑いを浮かべた。

「総合的な魔法技能なら私の方が上だろうし、魔法の撃ち合いになっても距離を取れば私に分があると思うし。

でも、間違いなく負けてる面もある。

ＣＡＤ関係の技術はとてもじゃないけど敵わないし、悔しいことに魔法に関する知識もあっちが上」

上級生の面目丸潰れよね、と真由美は他人事のように付け加えた。

「誰にだって得意、不得意があるんだから、全部が全部相手より勝っていることなんて滅多に無いわ。

達也くんのレベルが上、っていうのは、魔法工学面の知識と技術ではとても敵わない、ってこと。

その代わり魔法実技の成績では私もあーちゃんも達也くんよりずっと上なんだから、悲観する必要なんて全く無いの。

魔法実技の試験の内容はちゃんと意味のあるものだし、試験の成績だけが人間の価値じゃないのと同じように、試験の成績も人間の価値の一つなんだから」

「……」

「ところが、ね……

得てして、『自分の方が上』って思い込むと、全部勝ってないと耐えられなくなっちゃうのよ。

実際には、一科生と二科生の違いなんて、実技の授業の都合上、実技テストの成績で分けてるだけに過ぎないんだってことを忘れてしまって」

あずさは、知らず知らず、目を大きく見開いていた。

真由美の言葉に、頭の中が真っ白になってしまいそうなショックを受けていた。

「やっぱり、制服がいけないのかしら……

最初は単に、生徒数を増やす際に、刺繍が間に合わなかったってだけなのにねぇ……」

「えっ、そうなんですか!?」

「あれっ？　知らなかった?」

初めて聞いた裏話に、さっきとはまた別の衝撃を受けて、あずさは絶句したまま、「そっかぁ、余り知られてないんだね……」と呟く真由美に、ただカクカクと首を縦に振った。

「昔は一高も一学年百人だったのは知ってる?

外国に伍していく為には魔法師の数を増やさなければならない、ってことで、まず一高の定員が増やされたんだけど、当時の政府は焦ってたんでしょうね。

新年度から増員すれば良かったものを、年度途中から追加募集を掛けちゃったの。

でも年度途中から、いきなり教師の数を増やすことは出来ない。

当時の魔法教育者の人材不足は、今以上に深刻だったから。

それで苦肉の策として考え出されたのが、途中編入の一年生は進級まで集中的に理論を教えて、実技は二年になってから、という二科生制度。

ところが、いざ二科生を入学させるという段になって、学校が制服の発注をミスっちゃったのよ。

その所為で二科生として編入した一年生はエンブレムが無い制服で我慢しなきゃならなかったんだけど、それが思わぬ勘違いを招いちゃってね……

二科生制度はあくまでも進級までの暫定措置で、二科生は定員増加によって追加募集された生徒に過ぎなかったんだけど、それが補欠と見做されるようになってしまった。

そして、無理な増員計画に見合う教師が結局は確保できずに、誤

解に過ぎなかった『補欠扱い』が追認されてしまったのが、今の二科生制度。

制服も、この泥縄な追認を取り繕うように、最初から計画通りだったかの如くずっと放置されてる、っていうのが真相よ。

考えてみれば、制服を二種類作るのも無駄なのよね……どうせ縫製まで一貫自動加工なんだから、一度に作っちゃえばサイズ違いでも同じデザインの方がコストも安いし」

開いた口が塞がらない。

それが、あずさの正直な感想だった。

校内に度々陰湿で深刻な対立を招いて来た「ブルーム」と「ウィード」の由来が、そんなにくだらないものだったとは。

この話、深雪にはとても聞かせられない、とあずさは思った。——何が起こるか、怖過ぎる。

「……この話、深雪さんには内緒ね？」

真由美も同じことを思ったらしい。

あずさは一も二もなく、頷いた。

◇◆◇◆◇◆◇

生徒会の先輩二人から揃って危険人物扱いされたと知らぬ深雪は、始まりを待つミラージ・バットのフィールドに上機嫌で立っていた。

九校戦開幕以来、兄の方から自分の為だけに時間を取ってくれるのは、自分だけに構ってくれるのは初めてだったからだ。

いつもであれば、家に帰れば実質二人暮らし。

いくらでも二人きりの時間を持てる。

だが九校戦の宿舎では、そうは行かない。

決して欲求不満を募らせている訳ではない（と本人は思っている）が、しばらくお預け状態に近かった所為で嬉しさも一入（ひとしお）だった。

関係者が控えるブースでは、兄が自分を見詰めている。

自分だけを見詰めてくれている。

何だか、魔法の力を借りなくても、空に浮かべそうな気分だった。
身体のラインが丸見えのコスチュームに纏わりつく煩悩剥き出しの視線も、今は気にならなかった。
特に意識することも無く、達也の眼差し以外の全ての視線をフィルタリングして、ゴミ箱へ放り込んでいるからだ。
観客はジャガイモと思え――ジャガイモは玉葱でもニンジンでも可――とは、あがり症の人間に対する効果の無いアドバイスとして知られるテンプレートだが（人間をジャガイモに置き換えることが出来る神経の太い人間は最初からあがったりしない）、今の深雪にとっては本当に、達也以外、ジャガイモ同然だった。
兄は男女を問わず姿勢の良い人間を好むと知っているから、立ち姿にも隙が無い。
抜群の美少女が見せる、管弦の音を待つ舞手のような佇まいは、客席の青少年に動悸と息切れを引き起こし、このままでは試合が始まる前から担架が呼び出されそうだ、という有様となっていた。
観客のボルテージに急かされた、という訳でもないだろうが、予定時刻より数秒早く、試合開始のチャイムが鳴り響いた。

深雪の身体が軽やかに舞い上がった。
ミラージ・バットの選手は皆、コスチュームを二種類用意している。
強い日差しの下でも翳（かす）むことの無い鮮やかな色合いの昼用コスチュームと、
照明に映える明るい色の夜用コスチューム。
どちらも選手同士の衝突を避ける為に定着している、経験からもたらされた不文律だ。
深雪が纏う基調色は濃いマゼンタ。
一歩間違えばとんでもなく下品な配色だが、深雪が着ると高貴な雰囲気になった。
白いうなじを覗かせるキチンと結い上げた髪も、艶かしさより気

品を強く印象付ける。
紫外線除けを兼ねる濃い目のメークも彼女の品位を損なうことは無い。
華奢な身体つきはまだまだ発展途上だが、真っ直ぐに伸びた細く長い手足と、対照的に優美な曲線を描く胸や腰は、動物的な肉感が無い代わりに咲き誇る花樹の様な色香を漂わせている。
そしてまさしく、花のような美貌。
誰にも劣らぬ勢いでターゲットへ向かって翔け上がっているのに、一人だけ、「ふわっ」という形容が相応しく見えてしまう。
観客の目はまたしても、深雪に釘付けだった。
これが演技の美しさを競う採点競技なら、文句無く一位だっただろう。
だが流石に本戦の、しかもメイン競技になると、九校戦は甘くなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

「深雪さんがリードされるなんて……」
第一ピリオド終了の合図とともに、詰めていた息を吐き出しながら「信じられない」という感想を声に込めて、美月が呟いた。
「トップに立った二高の選手……ＢＳ魔法師と迄は行かなくても、『跳躍』の術式にかなり特化した魔法特性を持っているように見えるな……」
「それだけじゃないわよ。
跳び上がる軌道を計算して、巧みに深雪のコースをブロックしてる。
『跳躍』のスペシャリストと言うより、『ミラージ・バット』のスペシャリストと言うべきじゃない？」
美月と驚きを共有しながら、幹比古とエリカがそれぞれに自分の考えを述べると、

「二高の選手は渡辺先輩と並んで優勝候補に挙げられていた選手だから……」
「あれだけ目立てば、マークされるのも仕方ない。
三年生の意地もあるだろうし」
今日は一般客席で応援しているほのかと雫が、異なる角度から賛同を示した。
「まっ、このままじゃ終わらんだろうけどな」
そして最後にレオが、悲観的な空気を吹き飛ばすように明るく言い放った。

◇◆◇◆◇◆◇

次のピリオドでは深雪が挽回し、第二ピリオド終了の段階でトップに立った。
だが、ポイント差は僅か。
深雪もまだまだ余力を残しているが、相手も第三ピリオドに備えてペースを調整していた節が窺われる。
勝敗の行方はまだ分からない。
いくら使用魔法のバリエーションが限定された条件下とはいえ、高校のレベルで深雪と対等に競い合える魔法師がいることに達也は驚きを覚えていた。
「この国も狭いようで広い……」
腰を下して息を調えている深雪の前で、達也が誰にとも無く呟く。
彼の視線は妹ではなく、二高のブースへ向けられている。
……と、不意に袖を強く引っ張られた。
眼を下へ向けると、椅子から立ち上がった深雪が、双眸に強い光を湛えて達也を見詰めていた。
「――お兄様、アレを使わせていただけませんか？」
その目が、声が、彼の袖を掴む指が、「負けたくない」という意志を伝えてきている。

綺麗なだけの、可愛いだけの「お人形さん」ではない、強い意志を宿したこの表情が、達也はとりわけ好きだった。
自然と唇がほころび、目が愛しげに細められた。
「……いいよ。
全てはお前の望むがままに」
本来は決勝戦用の秘密兵器。
だが、一切の計算も打算も忘れて、達也は頷いた。

◇◆◇◆◇◆◇

「あれっ？　深雪のホウキが変わってる」
最終ピリオドのフィールドに立った深雪の変化に、エリカが真っ先に気がついた
さっきまでいつもの携帯端末形態のＣＡＤを使っていた深雪が、右腕にブレスレット形態のＣＡＤを着けている。
「……でも、左手にもＣＡＤを持っているみたいだけど……」
目を凝らしていた幹比古の指摘に首を傾げた一同の中で、ほのかだけが一人、感慨深げに頷いていた。
「そう……深雪、早くもアレを使う気ね……」
「アレ？」
雫の問い掛けに、ほのかは憧れと悔しさが綯い交ぜになった表情で答えた。
「達也さんが深雪の為だけに準備した秘策。
深雪にしか使いこなせない達也さんの秘密兵器。
驚くわよ……きっと。今ここにいる人たち皆、一人残らず」
それは一体何か――雫がそう質問する前に、第三ピリオド開始のチャイムが鳴った。

◇◆◇◆◇◆◇

右腕に巻いたブレスレットは予備。
本命は左手に握る、携帯端末形態の特化型ＣＡＤ。
オンとオフのスイッチしかない単純なコンソールの、オンのスイッチに乗せていた指を、ピリオド開始の合図と共に、深雪は素早く押し込んだ。
展開される極小の起動式。
止まることなく、途切れることなく、繰り返される起動処理。
そして深雪の身体は、フワリと空へ舞い上がった。
二高の選手がその行く手を遮る。
左下から交差する軌道。
相手の方が上昇スピードが速い為、そのままでは深雪の方から当たりに行く形となってしまう。
深雪は自らの飛翔速度を加速することで、それを回避した。
客席がどよめいたのは、光球を打ち消した深雪が身体を反転させ、空中に静止した後だった。
ジャンプしている途中で更に加速する魔法力。
観客が驚き賞賛したのは、あくまでも魔法の常識の範囲内で示された力量に対してだった。
しかし、空中で一旦立ち止まった深雪が足場へ降りて行かずに、そのまま次のターゲットへ向かったのを目の当たりにして、歓声は絶句に変わった。
二つ、三つ、四つ……
十メートルの高度を往復しなければならない他の選手と、水平に移動するだけで済む深雪とでは、最初から競争にならなかった。
五つ目のポイントを連取したところで、凍り付いた観客の声帯は、徐々に融け始めていた。
「飛行魔法……？」
誰かが、そう呟いた。
今や選手ですらも、呆然と上空を見上げている。
囁き声に等しい呟きは、離陸・着地のステップの音も消えた、静

まりかえった競技場に、不思議なほど響いた。
スティックを振るう深雪の姿は、戦天使さながらに凛々しく、それでいて優美だった。
「トーラス・シルバーの……？」
囁きが連鎖し、
「そんなバカな……」
「先月発表されたばかりだぞ……」
波紋は徐々に広がって行く。
「だがあれは……」
「紛れもなく、飛行魔法……」
その場に居合わせた全員の目が、一人の例外もなく、空を舞う少女へ向けられていた。
湖の上空で繰り広げられる天女の舞。
バランスを取る為に広げられた腕が、姿勢を変える為に振り出された足が、風と手を取り合って踊っているように見える。
空を飛ぶという現代魔法の革新に、「不可能」とすら言われていた奇跡の実演に、この美しい少女はこの上なく相応しい……年齢を超え、性別を超え、敵味方すら超えて、人々は陶然となりながら空を舞う少女を見上げていた。
彼らは、彼女たちは、皆、現代魔法でもない、古式魔法でもない、感動という名の魔法に絡め取られていた。
試合終了の合図が鳴り、少女が地上に戻るまで、その魅了の呪文が解けることはなかった。

――予選第二試合、深雪は大差で決勝へ勝ち上がった。

◇◆◇◆◇◆◇

選手が退場を始めて、観客はようやく我を取り戻した。
選手退場に決められた順番はない。

競技終了時点でゲートに近い選手から順番に退場していく。
湖の中央に降りていた深雪は、四人中の三番目。
一高の応援席へ向かい膝を折って一礼すると、フワリと浮かび上がって氷の上をスケート靴で滑っている様ななめらかさでゲートへ向かった。
その優雅な所作に、客席から大きな拍手が沸き起こった。
通信端末を慌しく操作している姿も客席のあちこちで見られた。
興奮のあまり怒鳴りつけるような口調でマイクへ泡を飛ばしている者、上ずった口調で何度も同じ台詞を繰り返して回線の向こう側に呆れられている者、時折頭を掻き毟りながら仮想キーボードに指を躍らせる者、光学認識パネルへ一心不乱にペンデバイスを走らせる者……様々な人々が色々な形で、自分が味わった驚きをこの場に居ない誰かに伝えようとしていた。
その中に、奇妙な無表情でＨＭＤ（ヘッド・マウント・ディスプレイ）に映るメッセージに見入っている男の姿があったが、それを目に留めた者は、ほとんど居なかった。

◇◆◇◆◇◆◇

「十七号から連絡があった。
第二試合のターゲットが予選を通過した」
「……電子金蚕を見抜く相手だ。順当な結果なのだろうが……拙いな」
「それだけではない。ターゲットは飛行魔法を使ったらしい」
「バカな！？」
「これで力を使い果たしてくれたのなら万々歳だが……虫が良すぎるか」
「最早手段を選んでいる場合ではないと思うが、どうだろうか」
「賛成だ。百人ほど死ねば十分だろう。大会自体が中止になる」
「客に対する言い訳は何とでもなるからな」

「十七号だけで大丈夫か？」
「多少腕が立つ程度ならば『ジェネレーター』の敵ではない。
残念ながら武器は持ち込めなかったが、十七号は高速型だ。
リミッターを外して暴れさせれば、百や二百、素手で屠れる」
「異議はないな……？
では、リミッターを解除する」

◇◆◇◆◇◆◇

ようやく昂奮の潮が引き、観客が次の試合に備えて三々五々に席を立つ中、男もＨＭＤを外して、のっそりと立ち上がった。
目が露わになると、益々「無表情」という印象が強まる。
いや、これは無表情という名の表情ではなく、そもそも表情が欠落しているのではないか？
そんな風にさえ感じさせる、無機質な「表情」だった。
不意に、男の身体がびくっと震えた。
一瞬で発動された自己加速魔法。
周りにいた魔法師が魔法の気配に気付く前に、男は丁度すれ違った男性へ襲い掛かった。
鉤爪の如く曲げられた指を無防備な背中へ振り下ろす。
――そしてこの事件は、誰にも気付かれないままスタンドの外へと舞台を移した。

「ジェネレーター」十七号が現状を把握した時には、既に地面まで三メートルを切っていた。
殺戮の指令を受けて最初に襲い掛かった相手は、背中を向けていたにも関らず、彼の攻撃をかわして見せた。
例え正面から向き合っていても、人間の知覚能力では反応できないスピードだったのに、である。
魔法師は自己加速魔法により、筋力で可能な限界を超えたスピー

ドで動くことが出来る。
だが魔法で加速するのはあくまでも運動速度であり、知覚速度――感覚器の生化学反応速度、知覚神経の伝達速度、大脳の情報処理速度までスピードアップする訳ではない。
人体の知覚速度は運動速度よりかなり高く設定されており、それ故肉体的な限界を超えた速度で動いてもそれをコントロールできるのだが、それでも生物としての限界というものがある。
魔法による自己加速に魔法面からの限界はないが、知覚能力の面で制御可能な上限があるのだ。
故に、化学的に知覚速度を強化された彼のスピードに、普通の人間――魔法技能があっても肉体的には普通の人間――が対処できるはずはない。
それなのに実際は、振り下ろす腕の上腕を受け止められ、其処を支点として、自らが腕を振り下ろした勢いにより彼の身体は宙に浮かび上がっていた。
ちょうど鉄棒で前転するように頭から前に回って身体が上下逆さまに向いた瞬間、強烈な衝撃と共にスタンドのフェンスを越えて場外へと吹き飛ばされていた。
加速工程を故意に省略した移動魔法。
その衝撃により半ば意識を失い、気が付いてみれば放物線を描いて二十メートルの高さから地面に叩きつけられる寸前だ。
通常であれば恐怖に竦み、あるいはパニックに陥り、為す術もなく墜落する状況だが、この男は『ジェネレーター』だった。
脳外科手術と呪術的に精製された薬品の投与により意思と感情を奪い去り、思考活動を特定方向に統制することによって魔法発動を妨げる様々な精神作用――俗に言う「雑念」――が起こらないように調整された個体。
実戦の中で安定的に魔法を行使できるよう仕上げられた生体兵器。
魔法を発生（ジェネレーター）させる道具に改造された魔法師。
道具には、恐怖もパニックも縁がない。

十七号は冷静に――正確には無感情に、慣性中和の魔法を発動した。
この時点から減速しても急ブレーキによるダメージは避けられない。
それより慣性を低減させておく方が、激突のダメージを和らげることが出来るという計算を瞬時に行った結果だった。
呪薬の効果は意思、感情、知覚能力の調整だけでなく、身体機能の向上にも振り向けられている。
脚のバネ、腹筋と背筋に両腕まで使って、落下速度を全て吸収する。
「あの段階から間に合わせるとは大したものだ」
両手両足を地につけたまま声のした方へ顔を上げた十七号は、そこに、自分を投げ飛ばした男の姿を認めた。

「何者だ……？
……いや、答える必要はない。
どうせ答えられないだろうからな」
唇を歪め人を食った笑みを浮かべて、柳は獣のように両手両足を地面についた十七号を観察した。
「その身体能力、魔法だけではあるまい。
強化人間か？」
スタンド席のフェンスを飛び越え、中層ビルに匹敵する高さから投げ落とされたにも関わらず戦闘態勢を解こうとしない相手に、嘲りと感嘆をブレンドした口調で柳は問い掛けた。
「答える必要はない、と言ったのは柳君だよ。
それに、同じ高さから跳び降りて手もついていない君には、言われたくないんじゃないかな？」
四つ足の肉食獣そのものの動作で十七号が振り返った。
そこにはいつの間にか、退路を塞ぐように、真田が立っていた。
それでも逃げ出すつもりならば、十七号にはそれが可能だったか

もしれない。
単純な加速力なら「ジェネレーター」である十七号は、独立魔装大隊の二人に勝っていた。
だが十七号に与えられた指令は「観客の殺戮」。
意思も感情も持たない「ジェネレーター」にとって、組織の命令だけが行動を決定するインプットだ。
その命令に従い、十七号は「観客」だった柳へと、再度襲い掛かった。
柳は十七号が飛び掛かってくる前に、右手を前へ差し出していた。
明らかにスピードで勝っていながら、十七号はその手から逃れられない。
吸い寄せられるように、掌へ頭から突っ込んで行く。
柳と十七号が交錯する。
十七号は柳の身体に触れることなく撥ね返され、元居た場所へ叩きつけられた。
「答えを期待しての問いではない。独り言だ」
柳は何事もなかったように、真田へ言い返した。
「そういうことにしておこうか。
しかし、いつ見ても見事なものだね。
今のも『転』の応用かい？」
相手の運動ベクトルを先読みして、体術と魔法の連動により、それを誘導、増幅、あるいは反転させる。
それが柳の得意とする戦法であり、十七号を投げ飛ばし、撥ね返した技だった。
「応用、とは少し違う。
俺のは元々真似事に過ぎん。
本物の『転』ならば魔法は要らん」
「僕たちの存在意義に関わる台詞だね。
隊長に言いつけるよ？」
「……いい加減に下らんお喋りは止めて、そいつを捕らえるのに手

を貸せ」
「ふむ……では、そうしようか。
と言っても、既に藤林君が『被雷針』で確保済みだけど」
「……本当にお二方は仲が良いんですね」
何の前触れもなく、気配も音もなく藤林が姿を見せた。
後方スタッフ用のタイトスカートの軍服は、およそ荒事には不向きだ。
本来であれば格好の獲物であり、格好の突破口になるはず。
だが十七号は、ビクッ、ビクッ、と身体を痙攣させるだけで、とても抵抗できる状態ではなかった。
髪の毛のように細い針を何本も突き刺され、そこから電流を流し込まれた結果だ。
無論、針を飛ばしたのも電撃を放ったのも、藤林の魔法だった。
「藤林、お前、目は良かったはずだが」
「視力よりも感受性に問題があるのかな。
良いカウンセラーを紹介しようか？」
「ほら、お二人とも息がピッタリじゃないですか」
十七号を挟んで、柳と真田は顔を見合わせた。
二人は全く同じように、顔を顰めていた。

◇◆◇◆◇◆◇

裏で、そんな危険な一幕が行われていたとは知らず、達也は暢気にホテルの自室で少し早めの昼食を取っていた。
試合の後、深雪がシャワーを浴びている間に、大会委員が飛行魔法に使用したＣＡＤを検査させろと言ってきたが、彼には何も疚しいところはない。
一瞬、九島老人の名前を使って困らせてやろうか、という悪戯心が意識を過ぎったが、虎の威を借りて弱いもの虐めに興ずるのはみっともない、と思い直し、素直にＣＡＤを渡した。

それ以外、特に変な騒動には巻き込まれていない。
自分と妹を見る、随分と遠巻きな視線を多数感じたが、この手の輩は直接的な害がない限り放っておくのが一番だ。
委員にＣＡＤを預けたまま、達也はプライベートな空間へ引き揚げることにしたのだった。
もっとも、真田や柳が大量殺人を防ぐため人知れず活躍しているところだと知ったとしても、達也の行動は変わらなかっただろう。
身も蓋も無い言い方をすれば、何の面識もない観客が何十人殺されようと、達也にはどうでもいいことだからだ。
もっと言えば、同じ学校の先輩が犠牲になったことについても、達也は「残念だ」以上の感情を持っていない。
それだけであれば、積極的に動こうとは思わなかっただろう。
深雪が哀しそうな顔をするから、口や態度には出さないようにしているが。
無論、今現在進行形で。
改めて言うまでもないことかもしれないが、達也の目の前には甲斐甲斐しくテーブルの準備をする深雪が立っているのである。
「身の回りをいつもキチンと整理なさっているのはお兄様の美点だと思いますが、わたしとしてはもう少し散らかしておいていただく方がお世話のし甲斐があるような気もしますね」
今日の深雪は上機嫌だ。
今も、鼻歌を歌い出しそうな楽しそうな笑顔で、テーブルに布巾掛けをしている。
この一週間ほど、余り構ってやれなかった反動だろう。
「深雪、何か俺にして欲しいことはないか？」
だから食事を終えた後にそう訊ねたのは、単なる穴埋め程度の意識から出た言葉で、それ程深い意味は無かった。
「お兄様にして欲しいことですか？」
ところが、目を丸くし、顔を綻ばせて嬉しそうに考え込むという予想外に大きなリアクションを深雪が見せたものだから、達也も何

だか引っ込みがつかない気分になってしまった。
顎に指を当てたり小首を傾げたりと様々なゼスチャー付きであれこれ考えていた深雪が、何を思いついたか急に頬を染めて、上目遣いに達也の顔を窺った。
「……言ってごらん」
やや苦笑混じりではあったが、達也に優しく促されて、深雪は怖ず怖ずと切り出した。
「ランチが終わったら決勝まで少し休んでおくように、と先程ご指示を頂きましたが……」
「ああ、今すぐじゃなくても良いが、出来れば睡眠を取っておくべきだ。眠れなければ横になるだけでも良い。
ベッドに入りたくない、というのは無しだよ？
身体を休めるのは必要なことだからね」
「いえ、勿論お兄様のお言いつけのとおりに致しますが……その……」
「んっ？」
「その……よろしければ、隣にいて……いただけないかと……」
流石に恥ずかしかったのだろう。
深雪は顔を真っ赤にして俯いた。
「……甘えん坊だなぁ、深雪は」
「……いけませんか？　深雪はお兄様に甘えたいのです」
「……いいよ。子守歌は歌えないけどね」
深雪は上目遣いに達也を睨み、その胸を平手で叩いた。
彼女の白い肌は、黒髪の間から覗く耳までが、真っ赤に染まっていた。

兄妹とは言っても年頃の男女、流石に同じベッドを使わせることは憚られた。
今はシングルとして使っているが、元々この部屋はツイン。
幸いなことに場所を取っていた機材は、ほとんど会場へ持ち込ん

でいる。
壁に収納してあったベッドを出して、手早く使える状態にする。
ほぼ全面的に自動化されているので、ルームサービスを呼ぶ必要はなかった。（普通のホテルではないので、来てくれるかどうかも分からなかったが）
ベッドサイドに椅子を持ってきて枕元に座る。
こちら側を見て恥ずかしそうに微笑む深雪に笑みを返し、達也は妹の髪を優しく撫でた。
一分も掛からず、深雪は眠りの園へ旅立った。

◇◆◇◆◇◆◇

決勝戦は、午前中と打って変わって、晴天の夜空だった。
上弦の月が星の瞬きを圧倒している。
下から光球を見分けるには、余り良くないコンディションだ。
「体調はどうだ？」
「万全です、お兄様。
気力も充実していますし、最初から飛行魔法で行きたいと思うのですが」
「良いよ。思い切り飛んできなさい」
「はい！」
勢いよくフィールドへ飛び出していく深雪を、達也はサムズアップで見送った。

「深雪さん、随分と上機嫌でしたね」
サポート要員としてブース入りしているあずさが、湖上の足場に立つ深雪を見ながら達也に話し掛けてきた。
残念ながら、あずさの担当した選手は予選落ちとなった。
決勝戦進出は一高、二高、三高、五校、六校、九校から各一名ずつ。

複数名決勝に送り込めた学校はない。
女子最終競技ということもあり、各学校が意地を見せた形となっていた。
今この場には、付き添いで病院に詰めている摩利以外の、主立った女子メンバーが顔を揃えていた。
三高が一名しか決勝に送り込めなかった段階で、深雪が三位以内に入れば第一高校の総合優勝が決まる。
応援にも力が入ろうというものだった。
「機嫌良く試合に臨めるのは良いことだわ。
達也くんが上手にケアしてくれたみたいね」
反対側から真由美が笑顔で話し掛けてきた。
深い意味はないはずだが、何となくその笑みに含みがあるように見えるのは、達也の方に知られたくないことがある所為だろうか。
「そういえば深雪さんは『カプセル』を使わなかったようですが、十分に休憩は取れているのでしょうか？」
何気ない鈴音の問い掛けに、達也は思わず、表情を変えてしまいそうになった。
「五時間、睡眠を取らせましたので、十分だと思います」
「そうですか。随分ぐっすり眠れたようですね。
ホテルのベッドで寝ていたんですか？」
達也は言葉に詰まってしまった。
余りにもピンポイントな質問に、分かっていて言っているのか？と勘繰ってしまったほどだ。
「あっ、始まりますよ」
だが幸い、沈黙が不自然に思われる前に、皆の注意はフィールドへ向いた。
あずさの無邪気な性質が、今は正直、ありがたかった。

◇◆◇◆◇◆◇

淡い色のコスチュームが、照明と、湖面に揺らめく反射光に照らされてくっきりと浮かび上がって見える。
その中で、桜色のコスチュームを着た深雪が一際目を引いていたのは、予選で「飛行魔法」という離れ業を披露した為ばかりではなかった。
ゆらゆらと揺らめく光の中、少し注意を逸らした隙にフッと居なくなってしまいそうな儚さに、観客は目を離せなくなっていた。
ミラージ・バットの別名はフェアリー・ダンス。
少女を「妖精」に例えるのは使い古された定番のレトリックだが、今の深雪を「妖精のような」と形容しても陳腐と誹る者はいないだろう。
ざわめきが潮を引くように静まった。
競技委員がしつこくメッセージボードを振り回す必要もなかった。
人々が固唾を呑んで見守る中、ミラージ・バット決勝戦が始まった。

始まりの合図と共に、六人の少女が一斉に空へ飛び立った。
跳び上がった、のではない。
六人全員が、足場へ降りてこなかった。
「飛行魔法!?　他校も!?」
「流石は九校戦。僅か六、七時間で飛行魔法の起動式をものにして来ましたか」
あずさが裏返った声で叫び、達也が感嘆を口にした。
とは言うものの、実際には、達也はそれ程驚いていなかった。
おそらく、大会委員会から各校へ術式がリークされたのだろう。
不正疑惑の抗議に対する回答、というような形で。
ＣＡＤを預けっ放しにしていたから、その可能性は考慮に入れてあった。
「各校ともトーラス・シルバーが公開した術式をそのまま使っているようですね」

「……無茶だわ。あれはぶっつけ本番で使いこなせる術式じゃないのに。
選手の安全より勝ちを優先するなんて……」
鈴音が空を見上げ眉を顰めて言うと、真由美が苦々しげに呟いた。
「大丈夫でしょう。
あの術式をそのまま使っているなら、万一の場合でも『安全装置』が機能するはずです」
達也の声には「お手並み拝見」と言いたげな余裕があった。

空を舞う六人の少女。
それはまさしく、妖精のダンスだった。
観客は夜空を飛び交うその舞に、心を奪われ見とれていた。
だが徐々に落ち着きを取り戻した観客は、思いがけない試合経過に別の驚きを抱くことになった。
同じように空を飛んでいる。
飛行魔法の、魔法としてのレベルに大差はないように見える。
だが実際にポイントを重ねているのは一高の選手。
他校の選手はその動きに全くついて行けていない。
素早く、なめらかに、優雅に、
身を翻し、宙を滑り、上昇し、下降する、
その自由で可憐な舞に、ある者は付き従い、ある者は道を譲る。
いつの間にか舞い踊る妖精たちは、一人のプリマ・バレリーナと五人のコール・ド・バレエに役割が分かれていた。

他の選手が飛行魔法を使ったことに、深雪は少し驚いた。
否、少ししか驚いていなかった。
兄の作ったあの飛行魔法は、「誰にでも使える」術式であるところに真の価値があるということを、深雪は誰よりも理解していた。
それに、他校が飛行魔法を使ってくる可能性については、試合前に兄から注意を受けていた。

誰にでも使える、と、誰もが同じように使える、とでは意味が違う。

兄は、注意しながら笑っていた。

それはきっと、自分以上にこの術式を使いこなせる者はいないと信じているからだ、と深雪はその時思った。

その信頼に支えられて、深雪は自在に夜空を舞う。

一人、また一人と力尽きて落ちて行く他校の選手を見下ろして。

最初の一人が空中でグラリと体勢を崩した瞬間、客席から悲鳴が上がった。

だがその選手がゆっくりと降下していくのを見て、客席全体がホッと息をついた。

予選でも落下事故があったばかりだ。

観客よりも大会委員の方が胸を撫で下ろしたかもしれない。

これは飛行魔法に組み込まれた「安全装置」によるものだ。

術者から供給されるサイオンの補充効率が半減すると、起動式に予め組み込まれた「変数」が自動的に十分の一Ｇの軟着陸モードを指定する。

一高のブースでは、「変なアレンジはしていなかったようだ」と達也が胸を撫で下ろしていた。

奇しくも九校戦という注目を集める舞台で、飛行魔法の安全性が実証された形だ。

このツキは宣伝にフル活用しなければな、と人の悪い（あるいは、腹黒い）笑みを心の中で浮かべている視線の先では、また一人、妖精の舞台から脱落者が出ていた。

結局、第一ピリオドの脱落者は二人だった。

その二人はそのまま試合を棄権した。

そして第二ピリオドでも一人脱落。

最終ピリオドは、三人の争いとなった。

この時点で深雪が試合を棄権しない限り、一高の総合優勝が決定している。

一番確実な戦法は、足場の上にとどまって何もしないこと、だ。

だが一高のブースでは誰も、その「確実な」戦法を提案しなかった。

ここまでのポイントは、大差で一位。

無論、深雪が、である。

総合優勝は勿論大切だが、その為に個人優勝を犠牲にすべきだと考える者は、誰一人いなかったのだ。

声援と信頼を背に受けて、深雪は最終ピリオドの空に舞い上がった。

目を向けなくてもハッキリと分かる、自分を見守る兄の眼差し。

これがある限り、自分の翼が折れることは決してないと深雪は知っている。

その折れざる透明な羽を広げて、色とりどりの光と戯れる。

やがて、

湖上の足場に膝をつき、荒く息を吐く二人の選手。

夜空をソロの舞台に変えて、深雪は妖精の舞（フェアリーダンス）を舞い踊る。

大きく広げた腕の先で、最後の光球が姿を消す。

一拍の静寂。

一コマのストップモーション。

試合終了を告げるチャイムは、熱狂的な拍手にかき消された。

2一（25）　スナイパー（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

2－（25）　スナイパー

最終日を待たず総合優勝を決めた第一高校だったが、祝賀パーティは明日以降に繰り延べられた。（またぁ？　という声もあったが無視された）

明日は九校戦を締め括るモノリス・コードの決勝トーナメントが開催される。

第一高校チームは順当に予選一位でトーナメント進出を果たしており、選手もスタッフもパーティどころではなかったのだ。

とは言っても残り一競技であり、半数以上のメンバーが手空きの状態になっているのも事実。

ミラージ・バットの優勝により一高の総合優勝を決めた形となった深雪を中心に囲んで、プレ祝賀会的な意味合いのお茶会がミーティングルームで開催されていた。

仕切り役は真由美と鈴音、参加者は女性選手・スタッフが中心。もっとも男子生徒の姿が全く見られない訳ではなく、部屋の隅で一年生の男子生徒も怪我人を除いて居心地悪そうにカップを持っている（二、三年生の男子は明日の試合の準備に駆り出されている）。

この場に幹比古とレオだけでなくエリカと美月の姿まで見られるのは、真由美の、単なるお祝い以上の意図によるものだろう（エリカは固辞の姿勢だったが、深雪が強引に引っ張って来た）。

しかし、何故かこの場に、達也の姿が無かった。

「……んで、朝まで起こすなって？」

「ええ」

「無理もない」

「ずっと大活躍でいらしたものね……」

一年生女子が一人の男子生徒の噂話をしていたところへ（順に、エリカ、深雪、雫、ほのか）、二年生のカップルが近づいてきた。

「あれっ？　お兄さんはもう寝ちゃったの？」
花音と五十里の二人である。
「ええ、流石に疲れた、と申しまして」
「それは……そうだろうね。怪我もしていたんだし」
深雪の答えに、五十里が深く頷いた。
そして深雪の隣に目を遣って、軽く目を瞠った。
「んっ？　エリカくんじゃないか」
「啓先輩、明日の調整は終わってるの？」
「いや、チョッと一休み……って言うか、花音に引っ張ってこられたんだけど」
軽くからかうように問われて、五十里が苦笑いを浮かべる。隣で花音が少しムッとした表情になっているのは、単に今の物言いが気に入らなかったから、ではあるまい。ここにも何かしらの因縁があるようだった。
「……あら、エリカは五十里先輩のことを存じ上げているの？」
「家同士の付き合いでね」
しかしエリカは花音のむくれ顔に全く気付かず、と言うか、注意を払わず、深雪の方へ身体ごと顔を向けた。
「千葉家は五十里家に、とてもお世話になってるの」
「そんなことないよ」
「イエイエ、客観的な事実ですよ」
慌てて首を振った五十里の言葉を、エリカはおどけた口調で更に打ち消した。
「あたしのホウキも啓先輩のトコにお願いして作ってもらったものだし。
てかコレ、啓先輩が作ってくれたんじゃなかったっけ？」
そう言って、何処に持っていたのか伸縮警棒形態のＣＡＤを、エリカは手品のように取り出した。
「うん、まあ……『刻印』の部分はそうだけど」
「刻印型術式をご自分で組まれたんですか？

凄いんですね……」
「啓は天才だもの」
素直に感心した美月に、花音は不機嫌だったことも忘れて胸を張り、五十里は益々照れくさそうにもう一度「そんなことないよ」と呟いた。

◇◆◇◆◇◆◇

自分の不在が話題に上らなくなった頃、達也はホテルを抜け出して基地の士官が使っている駐車場に足を向けていた。
待ち合わせの相手は既に到着していた。
「女性を待たせるなんて、マナーがなってないわよ」
「すみません」
ＴＰＯを無視しているがそれなりに一理ある――女性云々ではなく、約束に遅れたことに関してだ――非難に対して、達也は素直に謝罪した。
一言の言い訳も無かったことに拍子抜けしたのか、遥もそれ以上の文句を言わず、自分が寄りかかっている車に乗るよう、達也に身振りで指示した。
言われたとおり助手席に乗り込んだ達也に続いて、遥が運転席に乗り込む。
自動車は中も外も暗いままだ。
モーターの始動スイッチには目もくれず、遥はドアポケットから携帯端末を取り出した。
それを見て、達也もブルゾンの内ポケットから端末を取り出した。
スタッフ用ユニフォームではなく、黒一色のタップリしたブルゾンだ。
その両脇下が僅かに膨らんでいたが、遥は気付かない振りをした。
「地図データだけで良いわよね？」
「構成員が分かっていれば、そのデータもいただけますか」

ため息をつく遥の端末へ向けて、達也は自分の方から先にデータを送信した。
ディスプレイを見て、遥は目を丸くした。
「足りませんか？」
「いえ、十分よ」
表情を消して、遥は自分の端末を操作した。
送られてきたデータにざっと目を通して、達也は一つ頷いた。
「ありがとうございました」
小さく頭を下げてドアの開閉ボタンに手を掛けた達也に、
「保険、なのよね？」
遥が硬い声で訊ねた。
「ええ、保険です」
短い答えが遥の耳に届いた時にはもう、達也は背中を向けていた。

遥の運転する電動クーペがゲートの向こう側へ消えたのを見届けて、達也は別の車へ歩み寄った。
窓を叩くまでも無く、助手席の扉が開く。
運転席には遥とほとんど同年代の女性が座っていた。
「今の女性（ひと）は？」
「公安のオペレーターです」
遥の素性をアッサリばらして、達也は藤林にニヤリと笑った。
「本人はカウンセラーが本職だと言い張っていますが」
クスッ、と藤林が笑いを溢した。
「パートタイムオペレーターというわけね」
「能力的には問題ないと思いますよ。
すれたプロよりも駆け出しのセミプロの方が、守秘義務をマニュアルの字面通りに守ってくれますので、内職を頼む時も安心です。
本当は副業を受けることそのものが職業倫理に反しているんですが、そこはまあ、地獄の沙汰も――というヤツですね」
黒い台詞を嘯いた達也に、藤林は目を細めた。――瞳は冷たく醒

めたままで。
「時々思うんだけど、キミって十歳くらい年齢詐称していない？」
「年齢ではなく経験の問題だと思いますが。
何しろ常日頃から、色々な経験を積ませてもらっていますので」
色々な、の部分にアクセントを置いて答えた達也から、藤林はさりげなく目を逸らした。
達也も特に返事を求めたりはしなかった。
彼は馴れた手つきで助手席からナビゲーション・システムを操作し、グローブボックスからデータケーブルを取り出すと、有線接続で遥から手に入れた地図データを転送した。
「……私もバイト代を貰おうかしら」
「時間外手当を請求すべきだと思います」
「ウチは労働基準法の適用対象外なのよ」
フレックスが勤務形態の主流になった現代でもしぶとく生き残っている法令をネタにした、ステレオタイプのコントを作り笑いも浮かべず達也と交わして、藤林はパームレストタイプの片手操作コントローラーを前に倒した。
現在最も普及している大衆電動車は、カタログに載っていない低騒音性を発揮して闇に紛れた。

◇◆◇◆◇◆◇

藤林に時間外勤務（？）を命じた当人は、時間外の来客を迎えていた。
「どうぞお入りください、閣下」
風間が従卒に任せず自ら案内した相手は九島老人だった。
老人の現役時代には、「十師族は表立って高位高官にならない」という原則が確立されていなかった。
この原則は九島自身が様々な軋轢に曝された経験から作られたようなものだからだ。

九島老人の退役時階級は少将。

風間の示した儀礼は、十師族の長老に捧げられる私的なものではなく、公的な秩序に則ったものだった。

風間はランクBのライセンスを持つ魔法師であり、十師族を頂点とする魔法界コミュニティのメンバーではある。

だが彼は「忍術使い」に分類される古式魔法の魔法師であり、現代魔法の象徴である十師族に対して、どちらかと言えば冷ややかな感情を持っている（無論一部隊の長として、部下に対する感情は別だ）。

従って――と言うべきかどうか――風間の態度は丁寧ではあるが「形式的」の範囲を超えるものではなかった。

「席を外せ」

「ハッ」

風間は飲み物を持ってきた従卒を部屋の外へ下がらせて、改めて九島老人へ目を向けた。

「本日はどのようなご用件でしょうか。

藤林でしたら使いに出してこちらにはおりませんが」

「孫に会うのにわざわざ上官を通す必要は感じんな……

なに、君が珍しく土浦から出て来ていると聞いたので、顔を見に来たのだ」

「光栄です」

光栄と言いながら少しも恭しさのない風間に、九島は軽く苦笑した。

「十師族嫌いは相変わらずのようだな」

「以前にもそれは誤解だと申し上げましたが」

「誤魔化す必要はないと以前にも言ったはずだが。

元々兵器として開発された我々と違って、君たち古式の魔法師は古の智恵を受け継いだだけのニンゲンだ。

我々の在り方に嫌悪感を抱いていても無理はない」

人間、という言葉を一音一音区切るように態とらしく発音した言

い方に、風間は思わず眉を顰めた。
「……自らを兵器と成す、という意味では古式の術者も同じです。我々とあなた方に、大した違いはない。自分が嫌悪感を抱くとすれば、自らを人間ではない、とする認識を子供や若者に強要する遣り口です」
「ふむ……だから彼を引き取ったのかね？」
聞きようによっては辛辣な風間の発言を、九島は余裕綽々たる口調で切り返した。
「……彼、とは？」
「司波達也君だよ。彼が三年前、君が四葉から引き抜いた、深夜の息子だろう？」
「……」
風間の沈黙は、言葉に詰まったと言うより、「ムッとした」という類のものだった。
「私が知っていても、何の不思議も無かろう？私は三年前の当時、師族会議議長の席にあり、今もなお国防軍魔法顧問の地位にあり、一時期とはいえ深夜と真夜は私の教え子だったのだから」
「……ならばご存知でしょう。四葉が達也の保有権を放棄してなどいないことを。アイツは今なお四葉のガーディアンであり、ガーディアンとしての務めに支障なきに限り司波達也は軍務に服すること、ガーディアンとして以外、四葉は司波達也に関して優先権を主張しないこと、それが我々と四葉の間で交わした約定です」
「惜しいとは思わぬか？」
「惜しい、とは？」
意味ありげに身を乗り出して訊ねた九島に、風間は素っ惚けた答えを返した。
九島老人は気を悪くした様子もなく、微かに笑った。
「昨日の試合は見事だった。

唯一の成功例とは聞いていたが、あれ程のものとは想像していなかった。

彼は将来、一条の息子と並んで我が国の貴重な戦力となるだろう。

あれ程の逸材を私的なボディガードとして一箇所に貼り付けておくのは勿体ないとは思わないか？」

「……閣下は四葉の弱体化を望んでおられるのですか？」

「君だから正直に言うがね。

十師族という枠組みには、互いに牽制しあうことで、魔法師の暴走を予防するという意味合いもある。

だがこのままでは、四葉は強くなり過ぎる。

司波達也君とその妹がこのまま成長し、遠くない将来、真夜が健在なまま司波深雪が四葉深雪となり司波達也がそのガーディアンとなったなら、四葉は十師族の一段上に君臨する存在となってしまうかもしれない。

現時点でさえ、他家にない特殊な技術と少数ながら強力な魔法師を揃えた四葉は、十師族の中でも突出した存在なのだ」

九島の言葉に、風間は唇を皮肉げに歪めた。

「あの家は閣下の仰る『兵器として開発された魔法師』の伝統を、最も忠実に守り続けている一族ですから、単純に戦闘力だけで見れば突出した存在になって行くのも当然かと思われます」

「それでは困るのだ。

風間少佐、君の言うとおりだよ。

元来は兵器として開発された存在であっても、今は違う。

ただ兵器として在るだけでは、人の世界からはじき出されてしまう」

「閣下。

閣下がこちらの事情をご存知であるように、自分も閣下のご事情をある程度存じ上げております。

閣下が達也のことを気に掛ける本当の理由についても承知しておるつもりです」

今度は九島が黙り込むことになった。
「その上で、一つの進言と一つの訂正をお許し頂きたい」
「……言ってみたまえ」
「達也を憐れむ必要は無いと存じます。
彼は哀れな実験動物などという、大人しい存在ではありません。
寧ろ憐れまれることこそが、彼にとって不本意ではないかと」
「それが、進言かね」
「ハッ。
そして訂正ですが……
将来、ではありません。
達也は現在において既に、我が軍の貴重な戦力です。
こう申しましては身贔屓に聞こえるかもしれませんが、達也と一条将輝では戦力としての格が違います。
一条将輝は拠点防衛において、単身で機甲連隊に匹敵する戦力となりましょう。
しかし達也は、単身で戦略誘導ミサイルに匹敵する戦力です。
彼の魔法は幾重にもセーフティロックが掛けられていて当然の戦略兵器だ。
その管理責任を彼一人に背負わせることの方が余程、酷というものでしょう」

◇◆◇◆◇◆◇

東へ向かう車の中で、達也がくしゃみを連発した、というような事実はなかった。
藤林が運転する電動車――正確に言えば、交通管制システムに誘導された藤林の車は、ハイウェイを東進し、真夜中になる前に横浜市内へ入った。
東に横浜港、北に（度重なる日中直接軍事衝突にも関わらず）二十一世紀末の現在においても尚、繁盛を続けている横浜中華街を臨

む高台に、二人を乗せた電動車は止まった。
「……敵国の工作員がウジャウジャいるって分かってるのに閉鎖も検問も行わないなんて、政治家は一体何を考えているのかしら」
中華街を見下ろしながら忌々しげに呟く藤林の隣で、達也は肩をすくめた。
「あの街は本国の圧政から逃れた華僑の、本国に対する主要抵抗拠点の一つ、というのが建前ですから」
「そんなの嘘に決まってるじゃない」
「建前ですから」
「限度というものがあります。こっちが勝ったといっても講和条約が締結されていない以上、我が国と中華連合は三年前から休戦状態にあるだけで、法的には交戦関係が継続中なのに。工作活動の拠点になってる、って誰もが分かっていながら、誰もメスを入れようとしないだなんて」
「もしかしたら、その『誰か』は結構な数に上るかもしれませんよ」
今にも舌打ちしそうな勢いの藤林に、達也は飄々とした口調で答えた。
そのつまらなさそうな回答に、藤林は目を丸くして達也を凝視した。
「……何か知ってるの？」
「いえ、単なる願望ですよ」
この話題はこれで終わり、とばかり、達也は背中を向けてそう答えた。
彼が踵を返した先には、この都市で最も高い建物がある。
値段的にも高いが、物理的に、最も高い建物。
今世紀半ばまで「港の見える丘公園」と呼ばれていたこの場所は、現在では横浜港とその沖合を一望できる三棟一体の超高層ビルが建てられている。
名前は「横浜ベイヒルズタワー」。

市民からは「ベイヒルズ」の略称で親しまれている、ホテル、ショッピングモール、民間オフィス、テレビ局の複合施設だ。魔法師の親睦団体、「日本魔法協会」の関東支部も東京ではなくこのビルに置かれている（本部は京都にある）。

もっともこのビル、純粋に民間施設というのがこれまた建前に過ぎないことは、市民ならずとも周知の事実。ここには東京湾を出入りする船舶を監視する目的で、国防海軍と海上警察が民間会社に偽装したオフィスを置いている。

魔法協会の支部がこのビルに置かれているのも、有事の際の防衛手段というのがもっぱらの噂だ。――そして達也も藤林も、それが「噂」ではなく完全な「事実」であることを知っていた。

「少尉、お願いします」

「本当に時間外手当を請求しようかしら」

既に時刻は真夜中近く。

警備員のいる通用口ではなく、内側からしか開かない非常口の脇に、藤林は小型の情報端末を押しつけた。

もう片方の手でＣＡＤを操作する。

外部からの入力端子もなく、無線入力の機能もないはずの開閉装置が、導電率の分布を改変された壁面を通して送り込まれたハッキングプログラムによって、二人を迎え入れるべく扉を開いた。

内部の監視装置も藤林のハッキングにより、二人に対してのみ無力化されていた。

◇◆◇◆◇◆◇

横浜グランドホテル――今世紀前半、香港資本によって中華街に建てられた高層ホテルで、ニューグランドホテルの前身である同じ名前のホテルとは何の関係もない――の最上階、の一つ上の階、客には知らされていない、存在しないはずの本当の最上階の一室では、慌しく引越しの準備が進められていた。

この部屋は、香港系犯罪シンジケート「無頭竜」の東日本総支部、謂わば東日本における活動の指令室として使われている部屋だった。

このホテルを経営している香港資本自体が、随分前に無頭竜によって乗っ取られていたから、犯罪活動の指令室、と表現する方が正確かもしれない。

引越しと言っても家具の運び出しがある訳ではなく、主な荷物はコンピュータシステムに記録されていない極秘帳簿の類だ。

厳重なセキュリティが施されたシステムにも登載できないほど秘密性が高い帳簿だから、部下に荷造りを任せるわけにも行かない。

高級ブランドスーツを身に纏った壮年（と言うよりも初老）の男たちが、シルクのハンカチで汗を拭きつつ、金銀宝石で煌びやかな指輪をはめた手で不器用に荷造りする姿は、第三者の目から見れば中々に滑稽なものだった。

無論、当人たちにとっては、笑い事ではない。

「おのれ……このままでは済まさんぞ」

一人が手を止め、歯軋りが聞こえてきそうな声で呪詛を漏らした。

「それにしても、ジェネレーターが戦果ゼロで取り抑えられるとはな……」

「想定外だ。まさか日帝軍の特殊部隊がしゃしゃり出て来るとは」

「お陰で我々は夜逃げの真似事だ」

「一度勝利したくらいで増長しおって……」

この場の誰もが心に秘めていた本音が表に出たことで、焦燥感に堰き止められていた愚痴の歯止めが利かなくなっていた。

「日帝軍に対する報復はいずれ必ず果たすとして、それ以上に優先すべきはあの餓鬼の始末だろう」

「我々の計算を悉く覆した生意気な子供か」

「司波達也と言ったか？　どんな素性の餓鬼だ？」

「それが……詳しい素性が分からんのだ。

調べがついたことといえば、氏名、住所、学校における所属と外見のみ。

係累はおろか家族構成も不明、親の職業も会社員という以外の詳細は不明。
日常的に必要となるデータ以外のパーソナルデータは一切判明しなかった」
「何だそれは？
この国は世界的に見てもパーソナルデータのＤＢ［データベース］化が進んだ国だ。
民間のデータベースを覗いてみるだけでも、それだけの情報しか取れないというのはおかしいだろう」
「データがロックされているのではなく、“司波達也”に関するデータは組織的に消去されていると見るべきだろう。
それ以外に考えられない」
無頭竜東日本総支部の幹部たちは、発言者（である同僚）の顔をまじまじと見詰め、次いで、互いに無言で顔を見合わせた。
「……ただの高校生ではないのか……？」
「あらゆる民間のデータベースを組織的に書き換えるとなれば、国家権力でも、相当高いレベルの権力が必要だ。
あるいは、国家の最高権力へ自由に介入できるだけの影響力が」
「一体、何者だ……？」
荷造りの手がすっかり止まっていた彼らの耳に、突如、くぐもった苦鳴が届いた。
部屋の隅にぼんやりと立ち尽くす四つの人影。
彼ら東日本総支部幹部の護身道具として貸し与えられたジェネレーター。
外部からの攻撃を遮断するため、四種類の術式を担当する魔法発生装置の内の一つ、外壁の情報強化を発動していたジェネレーターが、苦鳴の発生源だった。
その原因はすぐに分かった。
望まず、理解させられた。
南側の壁に大きな穴が開いていた。

突き破られたのではなく、切り裂かれたのでもなく、砕けたのでもなく、鉄骨と鉄筋と鋼管を残してコンクリートが砂とセメント粉末になって崩れたのだ。

苦鳴は、情報強化の魔法を破られた反動による苦痛によるもの。

だが苦しげな声が発せられたのは、ほんの一瞬だった。

幹部たちが苦鳴の原因に思い当たったのは、後追いの思考によるものだった。

無頭竜は単なる犯罪シンジケートではなく、魔法を悪用する犯罪組織。

幹部として取り立てられる為には、魔法師であることが条件になっている。

当然のこととして、東日本総支部の幹部たちも皆、魔法師だ。

魔法を使い、魔法を認識できる。

だから、今、何が起こっているのかも認識できる。

苦鳴を漏らしたジェネレーターの身体から、身体情報のエイドス・スキン――魔法師が無意識に展開している、他者の魔法から自分の身体を守る情報強化の防壁――が剥ぎ取られた。

否、イメージとしては、鎧が融け落ち蒸発した、と言う方が近い。

そして次の瞬間、ジェネレーターの全身に、実体でありながらまるで立体映像のようなノイズが走り、着ている服ごと輪郭が消えた。

それまでジェネレーターの身体が在った空中に、ポッと、薄い炎が生じた。

青と紫と橙が混じり合った炎は、スプリンクラーが作動する間も無く、フラッシュのように一瞬で消えた。

絨毯に落ちた、僅かな灰。

それだけを残して、ジェネレーターの身体は消え失せていた。

幹部たちは度肝を抜かれて叫ぶことも喚くことも出来ずにいた。

慄然とした表情で、互いに、交互に、顔を見合わせる。

と、そこへ不意に、電話が鳴った。

それは組織の中でしか使われていない、秘匿回線からの呼び出し

音だった。
幹部の一人が恐る恐る受話器を取った。
映像は無く、音声のみの通話であることがパネルに表示される。
『Ｈｅｌｌｏ，“Ｎｏ　Ｈｅａｄ　Ｄｒａｇｏｎ”東日本総支部の諸君』
スピーカーから聞こえて来たのは、若い男の――少年の声だった。

◇◆◇◆◇◆◇

達也と藤林は、横浜ベイヒルズ北翼タワーの屋上に来ていた。
ここにはテレビ局の放映アンテナと共に、無線通信の中継装置が設置されている。
その中継装置に、藤林は例の端末を押し当て、タッチパネルをあれこれ操作していた。
「……よし、ハッキング完了。無線通信は全てこちらにつながるように書き換えたわよ」
「流石は『電子の魔女（エレクトロン・ソーサリス）』。これぱかりは、術式をどう捏ね回しても真似できませんね」
「ありがとう。
そう簡単に真似されては堪（たま）らないけどね」
冗談めかした笑顔ながらも、藤林も本音のところ、満更でも無さそうだった。
「有線は切断済みでしたね？」
「そちらは真田大尉の方で措置済みよ」
達也は情報端末を左手に持った。
藤林から指示されたコードを打ち込んで、残りワンプッシュで音声通信が可能な状態にしてホールドする。
風除けのバイカーズシェードを、胸ポケットから取り出して目を覆う。
そして、左のショルダー・ホルスターからロングタイプのＣＡＤ

を抜き出した。
銀色の、拳銃形態特化型ＣＡＤ。
落下防止柵の手前に立ち、右手を斜めに伸ばす。
ＣＡＤの「銃口」が向く先は、遥か丘の下、横浜グランドホテル。
「……これが『ジェネレーター』ですか」
「ええ、間違いないわ。
捕獲したのは初めてだけど、特徴が情報部のレポートと完全に一致していたから」
ベイヒルズの屋上からグランドホテルの最上階まで、直線距離で優に１キロ超。
達也が構えているのは拳銃形態のＣＡＤで、照準スコープなど当然ついていない。
にも関らず、藤林は「見えるのか？」とは訊かなかった。
達也に視えているのは分かり切ったことだからだ。
藤林自身、達也とは視え方が違うが、室内に何人の魔法師がいてその内の何人がジェネレーターであるか、視えているのだから。
「自我を奪われた魔法発生装置。
兵器として開発された魔法師の成れの果て、か……」
「……」
「……言い過ぎですね、すみません」
藤林から無言で白い目を向けられて、達也は気まずげな声で謝った。
魔法師の全部が全部、兵器に甘んじている訳ではないので、確かに不適当な発言だろう。
しかし謝ったからといって、自分が共感を覚えたことまで否定するつもりは、達也には無かった。
ジェネレーターの在り方と、自分の在り方は似ていると、達也は思った。
故に、残された感情の範囲内で、最大限の嫌悪を覚えた。
有害であり、不快な存在。

この「装置」を破壊することに対して、達也の心には何の躊躇いも生じなかった。

シルバー・ホーン・カスタム、『トライデント』。

達也は、彼の魔法に最適化された愛機の、引き金を引いた。

分解の魔法が発動する。

コンクリートの外壁を原料の粉末に分解する術式。

媒体となっていた壁に物理的な穴が開いたことで、外部からの魔法干渉を妨害する「閉鎖」の概念にも穴が開く。

達也の「視界」に今までより鮮明に、室内の様子が映った。

発動中の魔法を強制的に破られてショックを受けているジェネレーター。

普通なら、魔法が破られたからといって、魔法師に此処までダメージが返ることは無い。

自分の意思で魔法を中断・中止できない為の弊害だろうか。

観測した事象を冷静に分析しながら、彼の攻撃意志――殺意は、止まらなかった。

一人のジェネレーターが生み出した五人の幹部を覆い守る広域干渉と、それとは別に三人のジェネレーターが自分を守る広域干渉のフィールドを識別。

トライデントの引き金を引く。

外壁の分解によってダメージを受けているジェネレーターの「広域干渉フィールド」、「エイドス・スキン」、「肉体」の情報を、変数として魔法式にインプットする。

三つの魔法工程が、刹那のタイムラグも無く、次々に発動した。

第一の工程が、標的を守っていた広域干渉を分解する。

第二の工程が、標的の肉体を守っていた情報強化を分解する。

そして第三の工程が、標的の肉体を元素レベルに分解した。

有機物としての存在すら認められず、生物としての痕跡すら残せず、蛋白質は水素と酸素と炭素と窒素と硫黄に、骨はリンと酸素とカルシウムとその他の微量元素に、血液も神経も蓄えられた栄養素

も排泄物でさえも全て、単一元素によって構成される分子あるいはイオンに分解された。
可燃性の高い元素のガスが解放された酸素と結びついて自然発火した。
その様は、あるいは、人体発火現象に見えたかもしれない。
だがその真相は、焼失ではなく、消失。
一つの魔法式に工程として組み込まれた分解の三連魔法が、魔法力で守られているはずの魔法師の肉体を、一切の抵抗を許さず消し去ったのだ。
「トライデント……本当に、身の毛も弥立(よだ)つとはこの事だわね……」
三連魔法の発動用にチューンナップされた特化型ＣＡＤ。
魔法大全において『トライデント』の名称は、別種の魔法に割り当てられている。
だが独立魔装大隊において『トライデント』とは、この無慈悲な三連分解魔法のことであり、その魔法に最適化されたＣＡＤのことでもあった。
藤林が思わず漏らした呟きに頓着せず、達也は待機状態にしていた情報端末の、音声通信を立ち上げた。
中継器のハッキングにより、専用回線の認証システムは意味を失っていた。
「Ｈｅｌｌｏ，“Ｎｏ　Ｈｅａｄ　Ｄｒａｇｏｎ”東日本総支部の諸君」
達也は不自然に陽気な口調で、そう話し掛けた。

◇◆◇◆◇◆◇

電話を取った幹部は、戸惑いを隠せぬ顔で同僚へと振り返った。
この回線は幹部同士の通信用であり、本部との通信用の専用回線だ。
支部長、あるいは総支部評議員クラスの幹部でなければ、組織の

構成員であっても使用できない、存在も知らない通話回線。
無頭竜には十代の幹部どころか二十代の幹部もいない。
「……何者だ？」
問い掛ける声が詰問調の居丈高なものにならなかったのは、たった今、目の当たりにした人体消失によって、心に恐怖を撃ち込まれた故か。
『富士では、世話になったな』
声は十代の少年のものだったが、口調は一人前の大人のものだった。
『ついては、その返礼に来た』
その台詞と共に、彼ら幹部を守っていた広域干渉のフィールドが、いきなり消失した。
電話に出ている男だけでなく、意思を持たぬ魔法装置以外の全員が、反射的に部屋の片隅を見た。
その視線の先で、薄い炎が燃え上がって、消えた。
続け様に生じた熱源にインパルス・スプリンクラーが反応し、高圧の霧が天井から吹き付けられた。
其処に立っていたはずのジェネレーターは、跡形も無く消えていた。
「何処だ!?　十四号、何処からだ!?」
幹部の一人が、ひっくり返った声で叫んだ。
魔法師であれば、現象改変の反動から、何に対して、何処から魔法が使われたのかを知覚することが出来る。
人体を分子レベルに分解してしまうような強い魔法がこれ程の至近距離で作用したなら、それが何処から放たれた魔法なのか、本来ならば分からないはずは無い。
正確な距離は掴めなくても、少なくともどちらの方向に術者がいるのか程度のことは分かるはずなのに――この幹部は、喚くことしか出来なくなっていた。
対して、動揺を知らない――動揺する心の機能を壊されているジ

ェネレーターは、同類が壊されても怯えてパニックに陥るようなことは無い。
十四号はのっそりとした動作で、壁に開いた穴を指差した。
その穴の向こう、この街で最も高い場所を。
別の幹部が慌てて狙撃銃を手に取った。
光学・デジタル複合スコープに目を当て、倍率を上げて行く。
横浜ベイヒルズ屋上、西に傾いた月の光に半身を浮かび上がらせて、一人の少年が立っていた。
倍率を最大に上げる。
バイカーズ・シェードに隠されて人相は分からなかったが、隠されていない唇が嘲る様に歪められたのは見えた。
男が悲鳴を上げて蹲(うずくま)った。
突然分解し弾け散ったスコープの部品で眼球を傷つけられたのだ。
しかし、片目を押さえ呻き声を漏らす同僚を気にかける余裕は、男たちには無かった。
「十四号、十六号、やれ！」
ジェネレーターに反撃を命じる声は、一人のものではなかった。
だが――
「不可能デス」
「届キマセン」
機械は、出来ることしかやらない。
どんな状況でも安定的に魔法を行使することを目的に改造されたジェネレーターには、死に物狂いで限界以上の力を振り絞るという機能が無い。
「口答えするな！　やれ！」
抑揚が全く無い口調で口々に応えた十四号と十六号に対して、目を押さえ膝をついたまま癇癪を破裂させる幹部。
応えは、電話口からもたらされた。
『やらせると思うか？』
十四号と十六号の身体にノイズが走る。

二人は仲間と、全く同じ運命を辿った。
『道具に命令するのではなく、自分でやってみたらどうだ?』
揶揄する声の前に、嘲笑が聞こえた。
だがそれに怒る気力は、男たちから奪い去られていた。
肉眼では人がいると見分けることも出来ない距離。
視認出来ない、認識できない相手に魔法を届かせる程の技量を、この場の誰も持ち合わせていない。
一人が有線電話に飛びついた。
別の男は携帯端末で必死に無線通話をつなごうとしている。
だが、有線電話は断線のシグナルを返すのみであり、
情報端末の音声通信ユニットは、
『無駄だ。今その部屋から通信できる相手は、俺だけだ』
最初の受話器と、同じ声を返すのみだった。
「バカな、無線通話まで……一体どうやって……」
『電波を収束した。どうやって、かは、お前たちが知る必要の無いことだ』
彼らには、その意味を理解する知識があった。
その知識は、絶望感を高める役割しか果たさなかったが。
『では、本番だ』
悪魔の宣告と共に、片目を押さえたままの男に、ノイズが走った。
男の顔が、真の絶望に歪んだ。
その表情は歪み続け――塵となって消えた。
三度の散水によって湿度が上がった室内では、最早発火現象は起こらない。
弔いの送り火すらなく消え失せた同僚に、男たちの顔は凍りついた。
一人が、出入り口へ突進した。
その背中にノイズが走り、輪郭が崩れ、散り失せた。
男たちは、無頭竜東日本総支部の幹部である残された三人は、自分たちの命が魔神の手に握られていることを悟った。

悟らずには、いられなかった。
「待て……待ってくれ！」
東日本総支部の支部長の地位にある男が、受話器を奪い取って叫んだ。
『何を待てというんだ？』
思わず叫んだ言葉だった。
見逃してくれる相手とは思っていなかった。
人をデータのように消し去る遣り口は、そんな情けのある人間のものではなかった。
だが予想に反して、応えが返って来た。
「わ、我々はこれ以上、九校戦に手出しをするつもりは無い」
『九校戦は明日で終わりだ』
「九校戦だけではない！
我々は明朝にも、この国を出て行く！
二度とこの国に戻って来ない！」
『お前たちが戻って来なくとも、別の人間が戻って来るのだろう？』
「我々無頭竜は日本から手を引く！
東日本だけでなく、西日本総支部も引き揚げさせる！」
『お前にそんな約束をする権限があるのか、ダグラス＝黄？』
名前を知られていたことに心臓が止まってしまいそうなショックを受けながら、黄は必死で言い募った。
「私はボスの側近だ！
ボスも私の言葉は無視できない！」
『何故そんなことが言える？』
「私はボスの命を救ったことがある！
命の借りは、救われた数だけ、望みを叶えることで返すのが我々の掟だ！」
『その「貸し」で命乞いするつもりだったのか』
二人分の視線が黄に突き刺さった。
裏切りに対する憎悪と殺意がそこには込められていた。

だが、黄にそれを気に掛ける余裕は無かった。
『その貸しは、自分の命を買い戻す為に必要なんじゃないのか？』
「違う！
そんなことをしなくても、ボスは私を切り捨てたりはしない！」
『お前にそれだけの影響力があると？』
「そうだ！」
『それを証明できるか？』
「それは……」
『Ｎｏ　Ｈｅａｄ　Ｄｒａｇｏｎ、頭の無い竜。
その名はお前たち自身が名乗り始めたものではなく、リーダーが部下の前にすら姿を見せぬことから敵対組織によって付けられたものらしいな。
部下を直々に粛正する時も、意識を奪って自分の部屋へ連れて来させる徹底ぶりだと聞く』
死の恐怖、消滅の恐怖とは別種類の戦慄が黄を襲った。
余りにも詳しく、自分たちのことが知られている。
自分たちは一体何に、手を出したというのだろうか。
『お前がそれだけの影響力を持つというなら、当然、首領の顔を見たことがあるはずだな？』
だが、考えている暇は無かった。
生き延びる為には、この悪魔の示した気まぐれに付け入るしかないのだ。
「私は拝謁を許されている」
『リーダーの名は何という？』
黄は口を閉ざした。
それは組織の最高機密。
長年にわたりすり込まれた恐怖と忠誠が、目の前の恐怖を凌駕した。
しかしそれは、僅かな時間のことだった。
「ジェームス！？」

また一人、仲間がこの世界から消し去られた。
人としての死をも許さぬ、消滅。
それは、彼らの首領の手により下される、死者に対する冒涜と同じくらいおぞましいものに思えた。
『今のがジェームス＝朱だったのか。
手配中の国際警察には気の毒なことをした』
「待て……」
『次はお前にしようか、ダグラス＝黄？』
「待ってくれ！
……ボスの名はリチャード＝孫だ」
『表の名は？』
「……孫公明」
『住まいは？』
香港の高級住宅街の住所、オフィスビルの名称、行きつけのクラブなど、訊かれるがままに黄は喋った。
「……私が知っていることはこれで全てだ」
『こちらの質問も丁度終わりだ。ご苦労だったな』
「では、信じてもらえるのか？」
『ああ、お前は紛れもなく、無頭竜首領、リチャード＝孫の側近のようだ』
打ちのめされ虚無感を漂わせていた黄の顔に、僅かな喜色が浮かんだ。
その、ほんの少し、取り戻した希望は、
「グレゴリー！」
最後の同僚と共に、完全に消え失せた。
「……何故だ！？
我々は、命までは奪わなかった。
我々は誰も殺さなかったではないか！」

◇◆◇◆◇◆◇

『……我々は誰も殺さなかったではないか！』
音声通信ユニットから、都合の良い理屈が聞こえてきた。
それは結果論に過ぎない。
彼らは大量殺人を目論み、それを柳、真田、藤林に阻止されただけだ。
そのことは達也も聞いていた。
だがそのことを、達也は指摘しなかった。
「そんなことは関係ない」
『なに……？』
「お前たちが何人殺そうが何人生かそうが、俺にはどうでもいいことだ」
気の乗らぬ腹芸にいい加減ウンザリしていた達也は、言葉を飾る気を失っていた。
必要な情報を全て聞き出した今となっては、その必要も無くなっていた。
「お前たちは、触れてはならないものに手を出した。
お前たちは俺の逆鱗に触れた。
ただそれだけが、お前たちの消え去る理由だ」
『……悪魔め！』
「その悪魔の力とやらを振るえるのはお前たちのお陰だよ、ダグラス＝黄。
力は意思によって引き出されるものだが、その力を更に高めるのは感情だからな。
お前たちが俺の持つ唯一つの感情を引き出してくれたお陰で、俺は久々にこの『悪魔の力』を解き放つことが出来た」
『悪魔の力だと……？
……この魔法、これはまさか、Ｄｅｍｏｎ　Ｒｉｇｈｔ［デーモン・ライト］！？』
それが黄の断末魔だった。

それきり、黄の声は途絶えた。
ダグラス＝黄という存在自体が、この世界から消えていた。

2一（26）　王者の風格（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

2一（26）　王者の風格

九校戦も最終日を迎えた。
今日行われる競技はモノリス・コードの一種類。
九時から決勝トーナメント第一試合、十時から第二試合。
午後一時より三位決定戦。
そして二時から決勝戦が行われる。
その後は三時半から表彰式と閉会式で、五時には競技場における九校戦が全て終了する。
競技場における、と但し書きが付くのは、七時からパーティが開かれるからだ。
開会前の懇親会と違って、閉会後のパーティは本当の意味で各学校の親睦の場となる。
このパーティで毎年少なからぬ遠距離恋愛カップルが誕生するくらいだ。
高校生同士の交流だけでなく、魔法界の有力者と面識を得られる機会でもあり、特に三年生はその両面でこのパーティを楽しみにしている者が多い。
だがトーナメントに勝ち上がった四校にとっては、それも全て、試合が終わってからのことだ。
各校とも既に、慌しい動きは無い。
為すべきことを全て為し、選手もスタッフも、静かに決戦の時を待っていた。
第一高校の天幕も例外ではなく、目を閉じて泰然と座す克人を中心に、ある者は緊張した面持ちで、ある者は逸る心を懸命に抑えながら、選手もスタッフも一試合目の呼び出しに備えていた。
克人、辰巳、服部の三選手、そして最終競技を担当する三人の技術スタッフ（その中には五十里の顔も見える）。
少し離れて真由美、摩利、鈴音、あずさといった、生徒会を中心

とする幹部の面々。
花音を始めとする二、三年生の選手。
テントに入り切らなかった者は、応援席で選手の登場を今か今かと待っている。
しかしそのどちらにも、達也の姿は無かった。

◇◆◇◆◇◆◇

「応援に行かなくてもいいの？」
「……始まるまでまだ少し時間がありますから」
藤林に問われ、達也は口の中の物を飲み込んでから、そう答えた。
昨晩の指示に従い、達也は朝食後、風間の部屋を訪れていた。
ところが部屋の主は早朝から何処かの誰か相手の密談に出かけており、戻りを待つ間、二度目の朝食を藤林からご馳走になっているところだった。
――彼も食べ盛りなので、サンドイッチがデザートに追加された程度では全く苦に感じないのである。
マナーに違反しない範囲で会話を挿みながら出された皿を丁度片付け終えたところで、風間が真田と柳を連れて戻って来た。
立ち上がって敬礼する達也と藤林へぞんざいに答礼し、手振りで腰を下すように指示する。
風間は達也の正面に、柳は藤林の隣に、真田は達也の隣に座った。
（山中が霞ヶ浦基地――駐屯地から格上げ済み――へ戻っていることは、藤林から既に聞いていた）
「昨夜はご苦労だったな」
挨拶もそこそこに、風間はそう切り出した。
「いえ、自分の方こそ、私事に皆さんの手を煩わせてしまい、申し訳ございませんでした」
「私事ではないさ。俺も襲われたのだから」
「それに昨夜は貴重な実戦データが取れたからね。

直線で約千二百メートル。
この距離で対人狙撃を成功させた長距離魔法のデータは滅多に取れない。
超長距離精密攻撃が本来のスタイルで、ＯＴＨ（ｏｖｅｒ　ｔｈｅ　ｈｏｒｉｚｏｎ）狙撃もこなす君にとっては物足りない距離かもしれないが、僕にとっては満足の行く観測結果だった」
立ち上がり頭を下げた達也に、柳と真田が慰めと労いの言葉を掛ける。
「そういう事だ。
また、昨夜の土産には、内情も公安も予想以上に満足していた。
お前は任務を果たしたのだから、多少自分の都合を交えたからといって、気にする必要はない」
それを受けて、風間がこう締め括った。
「……たかが犯罪シンジケートのトップの情報に、それ程の価値があったのですか？」
昨夜、わざわざ相手に電話を掛けて長々と嬲るような真似をしたのは、達也自身の意趣返しという側面もあったが、一義的には風間に指示されてのことだった。
「あれは、ただの犯罪集団ではないからな」
「……」
「達也君、君は『ソーサリー・ブースター』についてどの程度知っているかい？」
達也の無言の問い掛けに、真田が口を開いた。
「名前は聞いたことがあります。ここ数年で犯罪集団に広まっている画期的な魔法増幅装置とか。
正直、眉唾物だと思っていましたが……」
「ソーサリー・ブースターは実在するよ。ある意味では『画期的な魔法増幅装置』というのも間違いじゃない」
「そもそも、魔法の増幅などということが可能なのですか？」
こんな場面で真田が嘘をついたり信憑性の薄い噂話を持ち出した

りするとは思わないが、それでも達也は「胡散臭い」という印象を拭うことができなかった。

魔法も魔法式という「信号」を魔法師から対象物のエイドスへ出力するプロセスを含むから、増幅という概念と全く無縁なものとは言い切れない。

だが魔法式の出力プロセスは、イデアという単一情報プラットフォームの中における情報の移動であり、魔法式という信号が魔法師と対象物の間を物理的に移動する訳ではないのだ。

魔法師が構築した魔法式を、一体何処で増幅するというのか……まずそこが疑問だった。

「普通の意味での増幅じゃないよ。

そうだね……魔法式の設計図を提供するだけでなく、設計図を元にした魔法式の構築過程を補助する機能も持つＣＡＤ、と表現すればいいのかな？

魔法師が本来持っているキャパシティを超える規模の魔法式形成を可能にするんだ」

「それは……『ブースター』というより『増設メモリー』ですね」

「まあね」

達也の言い草が壷に嵌ったのか、真田は一頻り声を上げて笑った。

「……俗称が本質を表現していないなんて珍しいことじゃないよ。

で、無頭竜はソーサリー・ブースターの供給源なんだ。

この道具は製造原料に問題があってね。

真っ当な企業では、同じ物は製造できない。

国家でも、バレた時のリスクが高過ぎる。

ソーサリー・ブースターは事実上、無頭竜の独占供給状態なんだよ」

「ではそのソーサリー・ブースターを買い付けるために、リーダーの情報が必要だったのですか？」

「いいや。

ブースターの製造と供給を止めるために、ターゲットの情報が必

要だったんだ。
アレはこの世界に存在していい物じゃない。
僕なら絶対に使いたくないし、同じ隊の中で使わせたくもない。
――達也君なら、ＣＡＤの中枢部品である感応石の製造方法を知っているだろう？」
感応石とはサイオン波動を電気信号に変換し、電気信号をサイオン波動に変換する合成物のこと。
突然の話題転換に軽い戸惑いを覚えつつ、達也は頷きながら口を開いた。
「感応石は分子レベルから化学的に合成しネットワーク構造に発達させたニューロン（神経細胞）を結晶化して製造します。
ネットワーク構造の違いによって変換効率が決定される為、重要なのはニューロンの持つ物質的な特性ではなくネットワーク構造のパターンであるとも言われていますが、現在のところ人造ニューロン以外の素材から感応石の製造に成功した例は報告されていません」
達也の答えに、真田は満足げに頷いた。
「その通りだ。
ところがブースターの中枢部品は、人造ニューロン以外の素材から製造された感応石なんだ」
「それは一体……？」
「人間の脳だ」
真田の回答に、達也は絶句した。
「より正確には、魔法師の脳だ」
「……しかし、動物の脳細胞を使用した場合、脳内に残留するサイオン粒子の所為で使用者との感応が成立しないはずですが。
それは人間の脳細胞を使用した場合も同じだったはずです」
達也が絶句したのは、その非人道性が主な理由ではなかった。
彼はＣＡＤ開発の黎明期における動物実験の例も人体実験の例も知っていた。
そうした倫理も良心も信仰も何もかも無視した形振り構わぬ試行

錯誤の結果、ニューロンを化学的に合成するというノウハウが確立したのだ。
だが無頭竜はこの、魔法工学の常識を覆したという。
そのことに達也は驚いたのだった。
「通常の感応石と機能的に全く同じという訳ではないよ。
一つのブースターは、一つの特定魔法にしか使用できない。
そして使用できる魔法は個々のブースターによって異なっている。
と言っても、パターン化はある程度可能らしい。
製造時の残留思念によって、使用可能となる魔法の種類が変わるのだろう、と推測されている。
製造過程で同じ種類の強い感情を与えれば、同じ種類のブースターが出来上がるということだね」
「……例えば、脳を摘出する直前に大きな苦痛を与えるとか、大きな恐怖を与えるとか、ですか？」
「おそらくは」
「……蠱毒の原理ですね」
「同感だ。ブースターは蠱毒の技術基盤から発展したものだろう。
僕たちは魔法を武器とし魔法師を軍事システムに組み込むことを目的とする実験部隊だけど、魔法師を文字通りの部品にするつもりはない。
僕だって魔法師だし、少佐も、柳大尉も、藤林少尉も、下士官・兵卒を含めて部隊の構成員のほとんどが魔法師だ。
ジェネレーターまでならまだ許せる気もするけど、ブースターは製造も使用も絶対に認められない」
「そういう感情面を抜きにしても、魔法師のキャパシティを拡張するブースターは軍事的にも脅威だ。
ＮＡＩＡ（北米情報局）も同じ見解で、内情に協力を求めていたらしい。
壬生が随分感謝していたぞ、達也」
風間がそう付け加えて、この場での説明はお終いとなった。

◇◆◇◆◇◆◇

達也が応援席でキョロキョロと空席を探していると、前の方から氷の礫（つぶて）が飛んで来た。

慌てて受け止めた手を下した拍子に、深雪と目が合ってしまう。

気がつかなかった振りを諦めて、達也は大人しく最前列に近い席へ向かった。

「……随分と荒っぽい出迎えだったね」

「お兄様が気付かない振りなど為さるからですよ」

……達也に反論の言葉はなかった。

いや、気付かない振りをした理由なら、試合開始前ギリギリになって客席で目立つような真似をしたくなかったという歴とした理由があったのだが、妹を納得させるものでは到底ないということも明らかだったからだ。

ただ深雪の方に道理があるかというと、近くの席に座っている同級生、上級生の表情を見る限り、決してそんな事は無さそうだった。

――生温（なまぬる）～い同情の眼差しは、少しもありがたくなかったが。

「おっ、選手入場か」

「ちょうどのタイミングでしたね、達也さん」

達也の呟きに応えたのは、深雪ではなく反対側の隣に座ったほのかだった。澄ました笑顔で生温い視線を撃退するのに忙しかった深雪は、応え損なった代わりに少し達也の方へ詰めて座り直した。

決勝トーナメント第一試合は、第一高校対第九高校。奇しくも新人戦と同じ組合せとなった。

九高には雪辱戦の意識もあるのだろう。選手三人揃って、随分気合の入った顔をしている。

それに対して一高の三人は、いつも通りに三者三様だった。

泰然と構える克人、何処かとぼけた雰囲気を漂わせる辰巳、生真面目な表情で相手チームの挑発的な視線に応戦している服部。

全くいつもと変わらぬ姿は、頼もしさを覚えるものだった。
「俺たちとは安心感と言うか……格が違うよな」
「そんなことはありません！　わたしはお兄様の勝利に不安を覚えたりしませんでした」
「達也さんたちも立派でした！　とても堂々としていたと思います」
達也にしてみれば何気ない呟きだったのだが、すかさず返ってきた慰めだが激励だか判別し難い返事に、彼は些か面食らってしまった。
流石に試合開始前の空気を察して声を潜めてくれたので、注目を集めることはなかったが、毎回そうだという保証はない。
口は災いの元（？）と気を引き締め、頭の中から雑念を追い出して、達也は応援に集中することにした。
――雫から向けられている白けた眼差しが痛かった所為もある。

――そして、そんな寸劇には関係なく、試合は始まった。

◇◆◇◆◇◆◇

フィールドはカルスト地形を模した「岩場ステージ」。
始まりのブザーと共に、一高陣地から服部が飛び出した。
跳躍の魔法を所々交えて、脚力だけでは出せない速さで敵陣へ突き進む。
九高の動きは鈍かった。
むき出しにされた闘志では彼らの方が勝っていたが、実際に先手を取ったのは一高の方だ。
あの気合いの入りようならばおそらく、九高の方が先制攻撃を目論んでいたはず。
だが予想を越えた思い切りの良い突進に機先を制せられて、対応に迷いが生じているようだ。
突出したオフェンスに集中攻撃を加え、数の優位を確立するか。

迎撃はディフェンスに任せて、予定通り敵陣へ斬り込むか。
あるいはその停滞こそが狙いだったのか。
服部は道半ばで足を止めると、自陣でもたついている九高の三人目掛けて魔法を放った。
上昇気流と共に、白い霧が九高チームの頭上に生じた。
霧はたちどころに濃度を増し、自らの重さに耐えかねたかの如く、地上へ向かって崩れ落ちた。
ドライアイスの雹が降り注ぐ。
収束・発散・移動複合系魔法『ドライ・ブリザード』。
真由美がスピード・シューティングで使用した魔法の原型だ。
温度と速度のトレード・オフ関係が成り立っているこの魔法は、気温が高くなるほど弾速が増す。
魔法防御の外側、真上から降り注ぐドライアイスの弾丸は、岩陰に隠れて遣り過ごすことも出来ない。
ヘルメットを着けているので指先で摘まめる程度の礫で大怪我をすることはないが、何発も続けて命中すれば軽い脳震盪くらいは起こす。
それはそのまま、戦闘不能による敗退に直結するので、九高選手の一人が頭上に三人をカバーする魔力のシールド――落下速度をゼロにする仮想障壁――を展開した。
その選手が張ったシールドは、速度を一旦ゼロにするだけのもの。
空中に一瞬静止した後は、重力に従って地上に落下する。
服部が作り出したドライアイスは、周りの空気を冷却することにより水蒸気を凝結させ、細かな霧雨とともに地上へ、九高選手の上へ、石灰岩の上へと降り注ぎ、霧雨は融け出した二酸化炭素を吸収し、炭酸ガスを溶かし込んだ霧となって漂った。
岩に囲まれた地形により、九高陣地一帯から中々拡散しようとしない。
視界を妨げる程の濃さでは無いが、冷たく纏わり付く湿気は気になり出すとかなり不快なものだ。

シールドを張った選手とは別の選手が、気流を起こしてドライ・ブリザードの副産物を吹き払おうとした。

だがそれより速く、服部の次なる魔法が発動した。

土砂の粒子を細かく振動させることで生じた微弱な摩擦電流を、土砂の電気的性質を同時に改変することにより増量し地表に放出する術式。

八高の新人が同じ岩場ステージで使用した電子強制放出と同種の魔法だが、種類は同じでも威力と洗練度が桁違いだった。

九高の魔法防御の境界線をなぞるような三日月型に、幅五メートルにわたる地面が発光した。

細かな電光が無数に絡み合って明滅する様は、宛（さなが）ら、のたうち回り押し寄せる小蛇の大群だった。

砂混じりの地面も疎らに生えた草も無造作に転がる岩も、二酸化炭素が溶けて導電性が高まった霧にしっとりと濡れている。

魔法防御の外側にのたうつ電気の蛇は、魔法に関係なく地面を伝わり九高選手に襲い掛かった。

コンビネーション魔法、『這い寄る雷蛇（スリザリン・サンダース）』。

コンビネーション魔法とは、複数の魔法工程を一つの術式に纏め上げた魔法ではなく、複数の魔法がそれぞれに生み出す現象を組合わせて、個々の魔法の総和よりも大きな効果を生み出す魔法技術のことだ。

飛び抜けて強力な得意魔法も他の追随を許さぬ処理速度も他人に真似の出来ないマルチキャストも持たない代わりに、多種多様な魔法をどんな場合でも確実に繰り出す安定性が服部の持ち味であり強みでもある。

状況に応じて多彩な魔法を組み合わせ、相乗的に威力を高めるコンビネーション魔法は、服部の真骨頂が発揮される技術と言えた。

九高の三人の内、一人は空中へ跳び上がって電流から逃れた。

だがシールドを張った選手と霧を吹き飛ばす為の魔法を編纂して

いた選手は、跳躍の術式に切り替えるタイミングが一拍、遅れた。
電光が九高選手の足に絡み付く。
防護服（プロテクション・スーツ）とセットになったブーツ自体は絶縁加工が施されているが、スーツ本体の絶縁は簡易なもの（絶縁性能を高めると通気性が損なわれる）。
炭酸ガスを取り込んだ霧は、選手の身体にも付着し滴っている。
突風の魔法を準備していた選手は、咄嗟に変数を入れ換えて下向きの風を起こすことにより霧の滴を吹き払い電撃を弱めたが、シールドを張っていた選手は『スリザリン・サンダース』をまともに喰らった。
前のめりに倒れたチームメイトの隣で、もう一人の方も片膝をついた。
言うことをきかない足に見切りをつけ、そのままの体勢でＣＡＤに指を走らせる。
空中から苦鳴が聞こえた。
跳び上がって電撃を逃れた選手が、空中で見えないハンマーに殴られて、姿勢を乱したまま落下する。
単一系統の術式において卓越した出力（干渉強度）を誇る辰巳鋼太郎が繰り出した加速魔法。瞬間的に下方向へのＧを掛けて、敵選手を地上に叩き落としたのである。
しかし、構わず、九高選手の収束魔法が発動した。
仲間の撃墜に気を取られなかったのは、流石、決勝トーナメントに勝ち上がって来ただけのことはある、と言うべきか。
圧縮空気弾が服部目掛けて撃ち出される。
水中や宇宙空間などの特殊な環境を除き、どこにでも存在する空気は元々、戦闘用魔法の媒体としてポピュラーなものだ。
加えて、攻撃手段と殺傷性を制限するルールから、モノリス・コードでは圧縮空気弾や鎌鼬が多用される傾向にある。
服部の魔法防御領域の外側に生じた高圧の空気塊は――服部に届く前に、見えない壁に打ち当たって四散した。

服部が張り巡らせたものではない。
四百メートル後方から、克人が展開した『反射障壁（リフレクター）』。
固体、液体、気体を問わず、運動ベクトルを反転させる力場を作り出す、領域魔法。
一般に対物魔法に比べて領域魔法は難度が高いとされている。
それは、魔法の対象を特定する難しさの違いに由来する。
事象を改変する難度は、物体の属性を改変するのも空間の性質を改変するのも、それほど変わらない。
問題は、性質を書き換える領域と書き換えない領域の区別をどうやってつけるか。
壁や天井や柵などの目に見える仕切りで区切られている場合は簡単だ。
しかし例えば、野外の、何の仕切りもない解放空間で、特定の空間を切り出して定義するのはかなり難しい。
ただそれが攻撃魔法であれば、起動式に対象とする領域の広さを記述しておくことで、難度を引き下げることが出来る。
達也が考案し雫が使った『能動空中機雷』は作用領域の広さばかりでなく術者との相対座標も起動式に記述しておくことで魔法師の負担を大きく軽減しているし、服部が使った放電の魔法も作用する地面の広さ・深さ・面の形状が予め起動式に記述されていた。
攻撃魔法とは言えないが、真由美がアクセル・ボールの試合で使用した『ダブル・バウンド』も、作用領域が予め特定されていた。
だがどの程度の距離・範囲で飛んでくるか分からない相手の攻撃に合わせて対象領域を決定しなければならない防御魔法では、予め起動式に面積・容積・形状を書き込んでおくという手が使える場面は限られてくる。
自分一人の身を守る楯。
あるいはチーム全体をカバーする壁。
それを、自分を中心とした至近距離に相対座標で設定する。
普通はその程度がせいぜいだ。

だが克人は今、服部の身体という保護対象を目標にするだけで、何も目安となるものがない野外に、イメージ補整の為の補助器具を何も使わず、しかも四百メートルの距離から完全な「反射障壁」を作り出したのだ。

卓越した空間掌握能力。

十文字家の魔法師は、空間に対する天性の認識力を更に磨き上げることによって数々の領域防御魔法を駆使し、「鉄壁」の異名を取っているのだった。

服部が次の魔法を発動した。

彼は九高からの攻撃に対して、防御を一切取っていない。

敵の攻撃を克人が間違いなく防いでくれるという前提に立った魔法式の構築だった。

地面から砂が舞い上がる。

風が砂を巻き上げる。

服部の前方約十メートルから生じた砂埃は突き進むにつれて量と速度を増し、砂嵐の濁流と化して敵選手に襲い掛かる。

加速・収束複合魔法『砂塵流（リニア・サンド・ストーム）』。

最初に巻き上げた砂を核にして、移動の過程で密度を増して行くように構築された広域攻撃魔法。

収束性を高められた砂嵐が、九高選手を打ち倒した。

◇◆◇◆◇◆◇

「レベルの高い試合だったな……」

試合終了の合図をＢＧＭに、達也は感慨深げに唸っていた。

試合自体はほぼ一方的な展開だった。

レベルが高い、というのは、そこで使用された魔法と、その使用方法だ。

特に服部の見せた魔法の使い方は「深雪にも見習わせたい」と思わせる程、高度なものだった。（「見習いたい」でないのは、自分

では真似できないと判断したからである）

達也は服部のことを低く評価していた訳ではない。

試合で一度、勝っているとはいえ、あれは不意打ちによるもので出会い頭のようなものだ、と達也は客観的に認識していた。

魔法力そのものよりも魔法使用の技術力が高いということも、色々な拍子に魔法を使っているところを見て、予想していた。

だが今見せられた実力は、正直に言って、予想を超えていた。

（俺もまだまだ見る眼が無い……）

「次はいよいよ決勝戦ですね」

そんな、ある意味でショックを受けていた達也の内心にお構いなく、ほのかが無邪気に話し掛けてきた。

彼女にとっては、生徒会副会長を務める先輩の魔法技能が高いのは当たり前なのだろう。

その「当たり前」の無邪気さが、達也の頭をスッと冷やした。

見る眼が無いのは当たり前ではないか。

自分はまだ高校生だ。

昨夜の、独立魔装大隊特尉としての自分を引き摺っていた達也の精神は、この時ようやく、高校生としての司波達也に切り替わった。

「決勝戦は二時からだが、まだお昼には早いな……」

「少し冷たい物でもいただきませんか、お兄様？」

「賛成。アイスがいいな」

今日はスタッフとしての仕事もない。

今は犯罪シンジケートのことを気に掛ける必要もない。

たまにはただの高校生らしく、呑気に過ごしても良いだろう――

達也はそう思うことにした。

「さっきワゴンの屋台が出ていたから、そっちで食べようか？」

「ええ、是非！」

少年一人に美少女三人、それが他人の目にどう映るかということをすっかり失念して、達也は深雪たちをアイスクリームワゴンへ連れて行った。

◇◆◇◆◇◆◇

モノリス・コード決勝戦は「渓谷ステージ」に決まった。
運営委員から告げられた決定を伝える為に、真由美は選手控え室を訪れていた。
単なる伝言役、わざわざ生徒会長が務めることではない気もする。
事実、この決定を伝える為だけなら、真由美は自分で足を運んだりはしなかっただろう。
「十文字くん、いる？」
布で仕切られたテントであっても、遮音性は木造住宅、コンクリート建築と変わらない。
出入り口のインターホンに話し掛けるとすぐに「今行く」という返事があった。
少し間をおいて、克人が上半身タンクトップ、下半身プロテクション・スーツの姿で、扉代わりのカンバスを掻き分けて出て来た。
「こんな格好で済まんな」
「気にしないで。別に裸って訳じゃないんだし」
克人の身体から、微かにアルコール臭が漂って来た。
飲酒していた、訳ではない。
消臭剤に含まれている僅かなアルコール分の臭いだ。
少しの間は、真由美と顔を合わせるのに、汗の臭いを気にした結果だろう。
彼は特段フェミニストではないが、紛れもないジェントルマンだ。
しかもそうした気遣いを全くアピールしようとしないところが、克人らしい作法だと真由美は思った。
「それで？」
急ぎの用を棚に上げて埒もないことを考えていた真由美は、改めて問われ、ハッと我に返った。
「決勝戦のステージが決まったわ。

チョッといいかしら？」
決勝のことを伝えるだけなら、今この場で一言を口に乗せれば良いだけだ。
しかし克人は「何故」とも「何を」とも問わず、黙って真由美の背中に続いた。

真由美が克人を連れて来たのは、三日前に真由美が達也に相談を持ちかけた部屋だった。
三日前と同じように遮音障壁を形成して、真由美はテーブルの前に腰を下ろした克人の耳に唇を寄せた。
「父から暗号メールが来てたわ。
師族会議からの通達だって」
「ほう？」
「十文字くんには来ていないのね、その様子だと」
「ああ」
克人の答えは意外なものだったが、師族会議用の暗号解読には手間が掛かるので、短くない時間、一人になる必要がある。試合の合間とはいえ、リーダーが長時間席を外しては周囲の不審を招くと考えたのだろう、と真由美は解釈した。
彼ら二人と克人はモノリス・コードのチームメイトだ。
九校戦代表チームという観点からいえば、真由美と服部たちもチームメイトだ。
だがあの二人を含めた他の代表チームのメンバーと真由美は、立場が違う。
生徒会長だとかチームリーダーだとか、そんな立場の違いではなく、社会的に立場が違う。
真由美は、現十師族の直系だ。
そして克人は、更に立場が違う。
彼は真由美と同じ現十師族の直系で、真由美と違って十文字家の次期当主と定められている。

今回この九校戦に参加している高校生の中で言えば、将輝だけが克人と同じ立ち位置にいる。
「一昨日、一条くんが達也くんに倒されたでしょう」
「……それで？」
克人の問い掛けは「それが？」ではなく「それで？」だった。
いや、実はこの問い掛け自体、形式的なものだった。
「十師族はこの国の魔法師の頂点に立つ存在。
十師族の名前を背負う魔法師は、この国の魔法師の中で、最強の存在でなければならない」
真由美の声は、少し皮肉っぽかった。
彼女が語っているのは彼女自身の考えではなく、彼女の父親の、師族会議の「教義」だからだ。
彼女の思いは、また別なのだろう。
だが今必要なのは、彼女自身の哲学ではなく、師族会議の「教義」の方だった。
「例え高校生のお遊びであっても、十師族の力に疑いを残すような結果を放置しておくことは許されない、だそうよ」
「あの試合はお遊び、で片付けられるレベルではなかったがな」
台詞だけなら反論だが、口調は淡々としたものだった。
「つまり、十師族の強さを誇示するような試合を師族会議は求めている、ということだな？」
「ええ……こんな馬鹿馬鹿しいことを、十文字くんに押し付けたくはないんだけど」
「いや……これは寧ろ、十文字家次期当主の俺が一人で処理すべきことだ。
気を遣わせて済まなかったな」
「その程度のことは別にいいんだけど……」
気持ちの持って行き場所が無いのか、真由美は珍しく本気で、何の意味もない愚痴をこぼした。
「ホント、馬鹿馬鹿しいったら……

達也くんが傍流であっても十師族の血を引いているなら、こんな三流喜劇に巻き込まれることも無かったのに……」

克人は真由美の愚痴に対して、何もコメントしなかった。

「……任せておけ」

感情を面に出さず、そう応えたのみだった。

◇◆◇◆◇◆◇

モノリス・コード決勝戦は第一高校対第三高校。

色々な意味で因縁のある対決、言い換えれば「宿命の対決」だが、試合自体は準決勝以上に一方的な展開になった。

因果は巡る、と言えばいいのだろうか。

新人戦で、将輝が八高に対してやったことを、そっくりやり返される形となっていた。

選ばれたフィールドは「渓谷ステージ」。

先ほどから氷の礫を飛ばしたり、崖を砕いて岩を落としたり、沸騰させた水をぶつけたりと、地形を利用した攻撃が次々と克人へ向けて繰り出されている。

だがその全ては、克人が展開した魔法の障壁に撥ね返されていた。

質量体の運動ベクトルを逆転させる。

電磁波（光を含む）や音波を屈折させる。

分子の振動数を設定値に合わせる。

サイオンの侵入を阻止する。

あらゆる種類の攻撃が、その為に展開された幾重もの防壁に阻まれる。

克人の歩みを阻むものはない。

多重移動防壁魔法『ファランクス』。

この魔法の、十文字の術者の真価は、単に魔法防壁を維持し続けるのではなく、何種類もの防壁を途切れることなく更新し続ける持続力にある。

何列もの兵士が一塊になって整然と行進することにより、集団としての防御力を高めそれをそのまま攻撃力に転化する重装歩兵密集陣形。

最前列の兵士が倒れれば後列の兵士が入れ替わり、常に堅い防御を維持するこの古代の用兵を冠した魔法は、その名に恥じぬ防御力とプレッシャーを発揮する。

左右に狭いフィールドを、一歩一歩着実に敵陣へ進む克人。

三高選手はそれを無視することも回避することも出来ない。

少しでも攻撃を緩めたら、その直後、決定的な攻撃を返されてしまうのではないか……

一歩ごとに強まるプレッシャーが彼らにそんな強迫観念をもたらし、攻撃し続けることを彼らに強いる。

徹らない攻撃は攻撃側を消耗させると同時に、防御側も消耗させるはずだが、すっかり息が上がっている三高の三人に対して、克人は一向に疲れを見せない。

そして互いの距離が十メートルを切ったところで、遂に、克人の歩みが止まった。

彼の足は一歩一歩踏み出すことを止め、

勢いよく、地を蹴った。

巌のような身体が、水平に宙を飛ぶ。

自らに加速・移動魔法を掛け、敵選手目掛けてショルダー・タックルの体勢で突っ込んで行く。

内部への侵入を許さぬ、対物障壁を張ったまま。

突進の勢いで対物障壁に弾かれて、三高の選手が吹き飛んだ。

克人の巨体は一瞬の停滞もなく進路を変え、次の敵へと飛翔する。

魔法防御も運動量改変も、相手がそれ以上に強力な干渉力を発揮しているフィールドでは効力を持たない。

三人目の選手が為す術もなく撥ね飛ばされて、モノリス・コードの決勝戦は幕を閉じた。

一高の総合優勝に花を添える、完全な勝利だった。

◇◆◇◆◇◆◇

手を挙げて拍手に応える克人へ、周りと同じように拍手を送りながら、達也は言葉を無くしていた。

圧倒的という言葉では不十分だ。

凄まじい、としか言いようがない。

戦法自体は単純なものだ。

単なる力任せ、と言って良い。

だがあの魔法は――「単なる」力任せではない。

四系統八種、全ての系統種類を不規則な順番で切り替えながら絶え間なく紡ぎ出し続ける――恐ろしく「高度な」力任せだった。

「凄いですね……あれが十文字家の『ファランクス』ですか……」

深雪の口からも平凡な感想しか出てこない。

それだけ、今の試合に度肝を抜かれているということだった。

その気持ちは分かる。

だがその言葉には同調できなかった。

「違うな……あれは多分、本来の『ファランクス』じゃない」

十文字家の代名詞とも言える多重防壁魔法『ファランクス』。

だがこの魔法が人の目に触れる機会は意外に少ない。

普通は、同時に全系統全種類の防壁を展開する必要がないからだ。

別々の魔法師が同じ相手に同時に攻撃を仕掛けようとする場合、攻め手が多い程、攻撃魔法の種類が増える程、魔法の干渉が生じ易くなるのだからそれも当然のことだ。

達也もこの魔法を以前に目にしたことがある訳ではない。

今の試合で克人が展開した多重防壁は、確かに全系統全種類の魔法が含まれていた。

あれは確かに『ファランクス』だろう。

しかし達也は、その推測に頷くことが出来なかった。

「最後の攻撃……あれは、『ファランクス』本来の使い方ではない

ように思える」
それは論理的な推理というより、直感に近かった。
だが本物のファランクスは、もっと恐るべき魔法のように思えて仕方がなかった。
「お兄様が仰るのであれば、そうなのでしょう。
ならば益々……凄い力量ですね、十文字先輩は」
達也も全くの同感だった。
ただただ感心して拍手を続けていると、ふと、克人が自分の方を見た、ように達也は感じた。
拳を天に突き上げ、勝利を誇示する克人。
その眼が一瞬、達也の目線を捉え、そしてその一刹那、フッと笑った――ように、達也には見えた。
俺はお前より強い――克人の眼がそう告げたように、達也は感じた。
腕力に頼らず相手を従えることが王者の徳という。
だがそれは、突き詰めてしまえば政治的な詭弁でしかない。
戦う前から、力では敵わないと相手に知らしめ、刃向かうことを断念させる、その絶対的な抑止力こそが、真に必要とされる王者の資質。
歓声に応える克人の姿には、力の価値を知り力の価値を実践する、王者の風格があった。

2一（27） 終宴（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

2一（27）　終宴

二週間前（正確には十二日前）とは打って変わって、ホールは和やかな空気に包まれていた。

ノーサイドの精神は口で言うほど簡単に実践できるものでなく、若い彼らの心に勝ち負けの拘りが無いと言えば嘘になる。

だが今は、十日間にわたる激闘から解放されたばかりだ。

短くない期間緊張に曝され続けた反動から、生徒たちの多くは過度にフレンドリーな精神状態になっていた。

パーティのドレスコードは相変わらず各学校の制服。

再びサイズの合っていないブレザーを着込む羽目になった達也は、ダンスがあるならそれなりの格好をした方が良いんじゃないか？と、口に出したら自らの墓穴を掘ることになりそうなことを壁際で考えていた。

「人気者だね」

人の悪い笑顔で話し掛けてきたのは、予定よりも一日早く完治のお墨付きを貰った摩利だった。

「おかげさまで。

本当はのんびりさせてやりたいんですが」

仕方がありません、という台詞は口に出さず、二重・三重の人垣に囲まれている妹へ目を遣った。

他校の生徒、大会主催者、会場を提供した基地の高官、大会を後援している企業の幹部。

ここまでは仕方が無いとしても、メディアプロ（番組制作会社、CM製作会社、芸能プロダクション）の関係者と思しき人間まで纏わり付いているのは、「一体どういうことだ」とパーティの主催者を問い詰めたい気分にさせられる。

本当は煩く纏わり付く礼儀知らずを力ずくで蹴散らしてしまいたいところなのだが、鈴音があの怜悧な（冷ややかな？）眼差しで不

躾なアプローチからガードしてくれているので、達也は出しゃばるのを控えていた。
「妹さんのことではないよ」
素で返した達也の答えに、摩利は「堪え切れない」という表情で含み笑いを漏らした。
「人気者、というのはキミのことだ、達也くん」
摩利の指摘に、達也は「うんざりしている」とばかり顔を顰めた。
人垣が絶えることの無い深雪に比べれば大したこともないと言えるが、達也も先程から引っ切り無しに話し掛けられていた。
そのほとんどが、面識の無い大人だった。
見ず知らず、ではない。
父親の会社に出入りしている関係で、達也は高校生にしてはビジネスマンの顔を良く知っている方だ。
だがそれはあくまでも「高校生としては」のレベル。
彼は研究室の住人であり、経営や営業にタッチしている訳ではないから、同じ業界の一般的な会社員と比較して「少し詳しい」程度に過ぎない。
その達也でも顔を知っている、という相手が半分以上だった。
「今さっきのはローゼンの日本支社長だろう？」
一年生が声を掛けられるのは初めてじゃないのか？」
「過去の例は、俺には分かりません。
九校戦の会場に来たこと自体、今年が初めてですから」
「そうだったな」
ニヤニヤと人の悪い笑みを消そうとしない摩利に、達也はチョッとイラついた。
――ほとんど八つ当たりだが。
「……まっ、仕方が無いさ。
何故君が名前を売ることに消極的なのかは知らないが、石ころを宝石と偽っても見る者が見れば騙し遂(おお)せないのと同じで、宝石を石ころに見せようとしても必ず分かってしまうものだ」

「……」

「そう渋い顔をするな。

もうすぐダンスが始まる。

そうなればあとは、学生だけの時間だ。

あとチョッとの辛抱だよ」

ポンポン、と彼の肩を叩いて、摩利は飲み物の置いてあるテーブルへ歩み去った。

彼女は何故か上機嫌なようだ。

怪我をした後はずっと、無理をしていつも通りに振舞っている、という印象があったのだが、精神的にもすっかり回復しているように見える。

（恋人というのは効き目絶大なんだな……）

自分には理解できないと知りつつ、達也は心の中で独白せずにいられない。

あの分だとおそらくこの後、パーティを抜け出して修次氏と会うのだろうな、と達也は柄にも無くゴシップな想像を巡らせたりもした。

そうすることで、溜息をつきたくなる気分を逸らした。

確かにもうすぐ、大人たち相手の白々しい化かし合いは打ち切りの時間になる。

だがそれと同じくらい、気が重いのだ。彼にとって、ダンスというのは。

◇◆◇◆◇◆◇

しかし達也のような生徒は、本当に例外的な存在だ。

お偉方が退出して、会場は益々和やかで、浮ついた空気に包まれた。

管弦の音がソフトに流れ始めた。

わざわざ生演奏を用意した主催者の熱意に、少年たちはすぐ応え

た。
ここまで懸命に話術を駆使して親交を深めることに成功した少女の手を取って、ホールの中央に進む。
見ている分にはドレスでないのが残念だが、踊っている当人たちには関係の無いことのようだった。
深雪の許には予想通り、学校、学年関係なく、少年たちが群がっていた。
だがまだ誰も、その手を取ることに成功していない。
時間ギリギリまで来賓に囲まれていたので、そこまで話を進められていないのだろう。
深雪は達也と違って舞踏会（「ダンスパーティ」ではない！）のマナーもしっかり教え込まれているので、相手が礼儀を守っていればダンスを頑なに断ったりはしないはずだが（無論、誰とでも踊るという訳でもないが）、少年たちは勝手に気後れしているようだった。
人垣の奥から、達也の見知った顔が深雪の前に出た。
顔を知っている、というだけでなく、面識があると言って良い相手だ。
達也は壁際を離れ、人垣へ足を進めた。
彼は決して細身ではないが、群がる少年たちをすいすいと巧みにすり抜けて深雪の隣に立った。
「よっ、一条」
「むっ、司波達也」
気安い挨拶（？）を互いに交わす。
二人とも相手のことを友人とは考えていなかったが、また同時に、堅苦しい礼儀が必要な相手とも考えていなかった。
「耳は大丈夫か？」
「心配は要らんし、お前に心配される筋合いも無い」
「そりゃそうか」
一応、社交辞令（のつもり）を提示した達也に対して、将輝はお

よそ友好的とは言えない応えを返した。
まあ、九分九厘手中にしていた勝利を覆されて苦杯を嘗めた敗者にとっては、勝者からの気遣いなど愉快なものであるはずも無い。
将輝の対応も、ある意味当然の素っ気無さだったが……
……深雪が不快げな目を向けて来ているのに気付いて、将輝の心は狼狽に覆われた。
「えっ、あ、……あっ！？
司波！？」
突然、素っ頓狂な声で達也の苗字を小さく叫んだ将輝を、達也は「大丈夫か、コイツ？」という目で眺めた。
「もしかしてお前、彼女と兄妹か！？」
将輝の台詞は達也に言いようの無い脱力感を与えた。
「……今まで気付かなかったのか？　本当に？」
分かりそうなものだぞ？、と呆れ顔で問い掛けられて、将輝は絶句したまま立ち尽くした。
短く控え目な笑い声が聞こえた。
深雪が顔を背けて口元を押さえていた。
「……一条さんには、わたしとお兄様が兄妹に見えなかったのですね」
笑いを噛み殺し、将輝に話し掛けた深雪の声は、何故か嬉しそうだった。
「えっ、いえ、その……ハイ」
言い訳を断念して項垂れた将輝を、深雪はニコニコと笑みを浮かべて見ている。
何が気に入ったのか分からないが、一条は妹の目に適ったらしい、と達也は思った。
――目に適ったといっても、ダンスの相手として、というレベルでしかないが。
「いつまでも此処に固まっているのも邪魔だし、深雪、一条と踊ってきたらどうだ？」

達也の台詞に（正確には「一条と踊っ」の辺りで）、将輝はガバッと顔を上げた。
彼の目は期待に輝いていた。
深雪は一頻りクスクスと笑った後、将輝へ向けて「どうしますか？」という感じに小首を傾げて見せた。
「是非……一曲お相手願えませんか」
上擦りかけた声を精一杯抑えて、将輝は恭しく、深雪に向かって作法通りに一礼した。
「こちらこそ、よろしくお願い致します」
深雪も作法通りの一礼を返して、差し出された将輝の手を取った。
ポジションにつく直前、将輝は感謝と感激のこもった眼差しで達也に目礼した。
達也はそれを見て、「現金なヤツだ」と思った。

◇◆◇◆◇◆◇

将輝の見せた微笑ましいラブコメ（？）は達也にとって他人事だ（深雪が「その気」にならない限り、だが）。
だから気楽に対応できた。
だが自分が当事者となれば、最適、どころか、無難に対処するだけでも手に余る。
今、もじもじと上目遣いに自分を窺い見るほのかを前に、達也は己の未熟を痛感していた。
「お客様、こういう時は、男性の方からリード致しませんと」
ほのかだけでも手に余るのに、隣から茶々を入れられては逃げ出したくなっても仕方が無いだろう？　と、達也は誰とも知れぬ相手に愚痴をこぼしていた。――無論、口には出せないが。
「エリカ……何でウエイトレスなんだ？」
「最初からそういう条件で泊めて貰ってるんだし」
達也の苦情はサラリと流された。

レオと幹比古は、選手としてこのパーティにも参加の声を掛けられていた。エリカと美月もスタッフ扱いで一緒にどうか、と誘われていた。だが四人ともパーティの参加を断って、厨房係とホール係としてアルバイトに精を出している。

幹比古は今回、本人の希望通り（？）厨房にまわっているが、エリカは前回同様ヒラヒラのコスチュームでウエイトレスとしてホールを行ったり来たりしていた。

「……だったらこんな所で油を売っているべきじゃないと思うんだが」

「お客様に適切なアドバイスを致しますのもホール係の仕事でございますので」

またしても澄ました顔で返されて、達也は頭を抱えたくなった。

「ホール係の仕事」云々は別にして、エリカの主張に道理があることは達也にも分かっているのだ。

ほのかは達也に誘われるのを待っている。

それ位のことは、それこそ、言われなくても分かっている。

だが其処から先のノウハウが無い。

彼には「女性を誘う」という経験値が絶対的に不足していた。

「お客様？

そんなに難しくお考えになる必要はございませんが」

エリカも最初は面白がっているだけだったが、段々台詞に呆れ声が混じって来ていた。

このまま行けば、呆れ声は遠からず、苛立ちに変わるだろう。

それも一寸、いや、かなり情けないことのように達也には思われた。

「……ほのか」

「はいっ！」

達也は、覚悟を決めた。

「……踊らないか？」

その割には、言葉になるまで随分と時間が掛かった上に、自信無

さげな疑問形だったが。
「喜んで！」
それでもほのかにとっては、十分嬉しいことのようだった。

◇◆◇◆◇◆◇

その後、達也は雫、英美、真由美の相手までさせられるという重労働を経て、壁にぐったりもたれかかっていた。
特に真由美の相手はきつかった。
リズム感が独特なのである。
達也のダンスはお世辞にも上手いとは言えない。
ろくに練習していないのだから、当たり前なのだが。
しかし、女性の足を踏んだり他人にぶつかったりというミスはしない。
それどころか、ステップを間違えることも無い。
ダンス中に雫が「ダンスマシーンと踊ってるみたい」という、褒めてるとも貶しているとも取れる台詞を呟いたくらいだ。
記憶した動作を演奏に合わせて変速し、細かい部分を捨象して再現しているだけなので、達也のダンスは美しさとか優雅さとか気品とかは別にして、正確さだけは満点だ。
ところが真由美は、ある意味で達也と全く正反対。
演奏とステップが合っていないのだ。
音感が無い、というよりも「ため」に何か独創的なセンスを持っているらしく、一音一音は微妙に外しているのに、曲の流れとしてみると実に優雅なダンスを踊るのである。
お陰で達也は、演奏と真由美の動きと、二つのリズムをすり合わせながらステップを踏むという離れ業を余儀なくされた。
これが普通の人なら、何となくパートナーに合わせる、で何とかなるのだが、踊りを身体で覚えているのではなく動作を頭で再現しているだけに過ぎない達也には、そんな応用は荷が重過ぎるのだっ

た。
　疲労困憊の達也を置いて真由美が上機嫌で次のパートナーを探しに行った後も、実は、達也の前を意味ありげにウロウロしている女子生徒が結構いた。
　深雪とのダンスが終わった後、上級生のお姉さまの引っ張りダコになった将輝とは比べ物にならないが、モノリス・コードの活躍を見て達也に興味を持っていた少女は少なくなかったのである。
　だが彼の精根尽き果てた、という佇まいを見て、一様に同情の眼差しを投げて通り過ぎて行った。
　そんな彼にとって残念、かもしれない事実に気付く余裕も無く、そろそろ部屋に戻ろうか、と達也が考えた丁度その時、タイミングを見計らっていたように、達也の目の前にグラスが差し出された。
「あ……ありがとうございます」
　台詞が途中で途切れたのは、その相手が完全に予想外だったからだ。
「疲れているようだな」
「……はあ」
「試合のような訳には行かんか」
「それはまあ……仰るとおりです。
　僭越ながら、会頭はどちらも苦にならないように見受けられますが」
「慣れているからな」
　話し掛けてきた相手は克人だった。
　克人はノンアルコールビールのグラスをグッと呷った。
　何だか付き合わなければならないような気がして、達也は渡されたグラスを同じように飲み干した。
「司波、少し付き合え」
　通りかかったウエイトレス（エリカではなかった）に空のグラスを渡して、克人はそう告げるなり背を向けた。
　拒否権は無いという訳だ。

同じように空のグラスを渡して、達也は無言で克人の後に続いた。

◇◆◇◆◇◆◇

大会開幕直前の夜、武装した侵入者を捕らえた庭は、今夜、忍び寄る人影も気配もなく静まり返っていた。

完全な静寂ではない。

誰かが窓を開けたのだろう。

微かに、楽の音が聞こえている。

その僅かな音色が、静けさを一層深いものにしていた。

「よろしいのですか？　そろそろ祝賀会が始まる頃だと思いますが」

足を止めた克人の背中に、達也は控えめな問い掛けを投げた。

パーティーのあと、会場では第一高校貸切の優勝祝賀会が開かれる予定になっている。

これは総合優勝を勝ち取った学校に与えられる些細な特権だ。

一高チームの幹部であり主力選手である克人は、当然出席しなければならないはずだ。

「心配するな。直ぐに済む」

徐に振り返って、克人が答える。

大した用事ではない、ということだろうか？

ならば態々、パーティーの途中で彼を連れ出す必要は無いように思える。

それとも――短時間で決着する、という意味なのだろうか。

……どうやら後者、少なくとも克人はそのつもりのようだ。

「司波、お前は十師族の一員だな？」

唐突に斬り込まれて、達也は危うく、身構えてしまいそうになった。

比喩ではなく、戦闘態勢という意味で。

自分の素性を知られることは、今の段階ではタブーだった。

「いいえ。俺は十師族ではありません」

克人の眼差しには、偽りや韜晦を許さない眼力が込められていた。
達也が克人の断定にも等しい問いを否定できたのは、それが事実だったからだった。
彼は、十師族の一員ではない。
十師族の血を引いてはいても、その一員と認められていない。
それは紛れもない事実だった。
「――そうか」
暫く、達也をじっと見据えて、克人は無表情に頷いた。
克人が彼の答えに納得したかどうか、達也には分からなかった。
「ならば、師族会議において、十文字家代表補佐を務める魔法師として助言する。
司波、お前は十師族になるべきだ」
「……」
「そうだな……七草なんか、どうだ？」
「……どうだ、というのはもしかして、結婚相手にどうだ？　という意味ですか？」
「そうだ」
克人の魔法『ファランクス』は達也の対抗魔法『術式解散』にとって天敵のような魔法だ。
一枚の薄い防壁を分解したと思ったら、その下に次の防壁が出て来る。
その果てしない繰り返し。
決勝戦の観戦中、徹底的な消耗戦の予想図に達也は戦慄を覚えたのだが……今の、この予想が全くつかなかった台詞に、達也は新たな戦慄と一つの確信を抱いた。
――この先輩は間違いなく、自分にとって天敵だ。
――色々な、本当にイロイロな意味で。

「……七草会長のお相手には寧ろ、十文字会頭のお名前が挙がっているのではありませんか？」
「確かにそういう話もあるな」
「……七草会長はタイプでは無いんですか？」
「いや？　七草はあれで中々、可愛いところがある」
「……」
達也は最早、返す言葉を持たなかった。
「……ああ、もしかして司波は、歳を気にする方か？
フム……ならば七草の妹はどうだ？
最後に会ったのは二年前だが、二人とも将来が楽しみな美形だった」
「……自分は会頭や会長とは違って一介の高校生なので、結婚とか婚約とかそういう話はまだ……」
「そういうものか？」
克人は軽く、首を捻った。
「……だが、余りのんびり構えてはいられないぞ。
十師族の次期当主に正面からの一対一で勝利するということの意味は、お前が考えているよりずっと重い」
アンタに言われたかねぇよ！　と達也はツッコミたかった。
達也が将輝と対戦する羽目になったのは、克人に事実上強制されたからだというのに。
「……そろそろ戻るか。司波、余り遅くなるなよ」
信じられない、というより、信じたくなかったが――
（あの人……もしかして、天然だったのか……？）
威風堂々と歩み行く背中を見送りながら、恐ろしい人だ、と達也はしみじみ思った。

◇◆◇◆◇◆◇

「お兄様？」

夜の闇の中に呆然と立ちつくしていた達也は、妹の声にハッと我を取り戻した。
「どうされたのですか？　珍しいですね、わたしが近づいてくるのも分からないくらいボンヤリなさるなんて」
「いや……一寸意外なものを見てな……」
「意外なもの？」
「ああ、いや、大したことじゃない」
「？」
達也の台詞は辻褄が合っていなかったが、深雪は少し首を傾げただけで追求しては来なかった。
「……そろそろパーティが終わりますよ」
「祝賀会か……」
遠回しに促されて、達也は反射的に顔を顰めた。
「パス、って訳には行かないんだろうな……」
深雪は口元に手を当ててクスクスと笑った。
「諦めるしかないと思いますよ？
お部屋に戻られても、ほのかやエリカの襲撃を受けるだけだと思いますので」
「ほのかは分かるが……？」
「エリカは会長に捕獲されました」
おかしそうに笑いながら、会長の方が一枚上手ですね、と深雪は付け加えた。
「それに……」
なおも笑顔で、だが笑い声は収めて、少し真面目な眼をして、深雪が達也の瞳を覗き込んだ。
「わたしがお兄様を逃がしませんから」
達也は深々とため息を吐いた。
ふと、深雪が耳を傾ける仕草をした。
「……ラストの曲が始まりましたね」
「そうなのか？」

曲が変わったのは達也にも分かった。
だがこれがラストの曲なのかどうかは、知識がない。
「お兄様、ラストのダンスは、わたしと踊っていただけませんか？」
月と星の光の下、達也でも滅多に見たことのない様な、透き通った笑みを浮かべて、深雪は優雅に一礼した。
深雪の笑顔は、達也に抗うことを許さなかった。
「……じゃあ、曲が終わらない内に戻ろうか」
「いいえ、それでは時間が、勿体ないです」
深雪は自分から達也の手を取った。
「演奏でしたら、此処でも聞こえます。
この靴なら、芝生の上でも大丈夫です」
達也は何も言わず、深雪の背中に手を回した。
深雪は達也の肩に抱きつくように手を置いた。
二人の身体が触れ合った。
手を優しく包み込み、背中を深く抱き寄せ、達也はステップを踏み出した。
星空の下で、二人の身体がクルクル回る。
クルクル回る視界の中で、達也の顔だけが常に、深雪の正面にあった。
深雪の顔だけが常に、達也の正面にあった。
景色も、星も、月も、闇も、
全てが回る世界の中で、達也と深雪は、二人だけで向き合っていた。

2－（27）　終宴（後書き）

第二章はこれで終了となります。
次週は夏休み番外編をお送りする予定です。
少々あざとい話になると思いますが、大目に見ていただければ幸いです。

2一（28）　番外編〔夏の休日〕（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

2－（28）　番外編〔夏の休日〕

『海に行かない？』
――発端は雫のそんな一言だった。
「海って、海水浴？」
雫、ほのかと電話で井戸端会議を楽しんでいた深雪がそう訊ねると、
『うん』
雫から端的な肯定の返事があった。（現代のテレビ電話システムは標準仕様で十人まで同時通話が可能となっている）
『あっ、もしかして雫のお家の？』
『うん、そう』
「えっ、もしかしてプライベートビーチを持っているの？」
『うん、小笠原に……』
深雪の質問に、雫が再び頷く。
その表情は少し恥ずかしそうだ（慣れていない者には全くのポーカーフェイスに見えるだろうが）。
最近、小笠原の無人島に別荘を持つのが資産家の間で流行っており、口汚いことが知性の表現と勘違いしている無知な評論家から僻みを込めて「自然破壊の成金趣味」と誹られている。
別荘を建てられるような無人島は無人化した元有人島ばかりであり、人が住まなくなったことによって土地が荒れているのが実態だ。そこにゼロエミッションを実現している（エネルギー源に太陽光を利用しているからエネルギー面を含めれば完全なゼロエミッションではないが）高級別荘を建てることは、自然破壊どころか国土の有効利用であって、恥じる必要は全く無いのだが。
ただプライベートビーチ付きの別荘を持てるのは資産家と呼べる富裕層の中でもほんの一握りであり、北山家の実力が垣間見える話だった。

『……父さんが、「お友達をご招待しなさい」って。
どうやら深雪と達也さんに会いたいみたい』
気を取り直して（これまた、付き合いの浅い者には分からないだろうが）背景を説明した雫の言葉に、ほのかが少し引き気味に呟いた。
『今年は小父様がご一緒なんだ……』
『安心して。
顔を見せるのは最初だけ。
なんか、仕事が山積みで、数時間空けるだけで精一杯みたいだから』
ディスプレイの中で、ほのかの顔が安堵に緩んだ。
「わたしは構わないけど……何時にするの？」
『決めてない。達也さんの都合の良い時で、って思ってる』
表情で「お兄様のご都合を伺わないと」と付け加えた深雪に、雫は実に良く理解している答えを返した。

◇◆◇◆◇◆◇

「……ということなんですが」
達也がこの話を聞いたのは、次の日の朝食の後だった。
まず最初に、「夜中までそんな話で盛り上がっていたのか」と達也は思ったが、口にしたのは当然、別のことだ。
「メンバーは雫とほのかと俺たちだけかい？」
「エリカと美月と西城君と吉田君も誘いたい、と雫は言っていました。
ただ、わたしたちほど親しくないので、エリカたちはわたしから誘ってもらえないか、ということでしたが」
達也はコーヒーを口に含み、頭の中にスケジュール表を広げてみた。
「……来週の金、土、日は空いてるよ。

それ以降は一寸難しいな」

魔法科高校の夏休みは八月末まで。（理科高校や文科高校は八月中旬で夏休みが終わるところも多く、芸術科高校や体育科高校は九月の半ばまで夏休みというところが多い）

去年、一昨年の達也の夏休みは、独立魔装大隊の訓練と、研究所通いでほとんど丸々潰れた。（去年の夏はこれに加えて受験勉強――主に、深雪の家庭教師役――で埋まっていた）

今年は前半に九校戦があった所為で、余計タイトなスケジュールになっている。（発売が来月に迫った「飛行魔法専用デバイス」の開発がそれに輪を掛けていた）

彼にとって、夏休みは今年も「休み」では無かった。

「それでは来週の金曜日から日曜日にかけての二泊三日で。雫に連絡して参ります」

だからこそこういう機会は逃してはならないと、深雪は張り切っていた。

彼女としては、二人きりでないのが少し残念だったが、自分の欲求よりも兄のリフレッシュの方が当然優先されるのだった。

◇◆◇◆◇◆◇

雫の方はどうやら本当に達也の為に予定を空けていたらしく、深雪からの電話に二つ返事で頷いた。

ほのかには雫から日程を連絡し、エリカと美月には深雪から、レオと幹比古には達也から誘いを掛けたのだが、誰一人として都合の悪い者がいなかったのは、果たして本当に偶然なのかどうか、達也は眉に唾を付けてみたくなった（実際には、やらなかったが）。

そしてあれよあれよという間に旅行当日。（それまでに女性陣の買い物に付き合わせられて、デパートの水着売り場で注目を集めまくったというイベントもあったが、このイベントは達也が記憶の引き出しの奥にしまいこんで、その引き出しを溶接してしまったので

ここでは割愛する）

指定された集合場所は何故か、空港ではなく葉山のマリーナだった。

「わぁ……素敵なクルーザーねぇ」

今回は場違いでないショートパンツから、すらりと形の良い脚を惜しげもなく露出させたエリカが、目を輝かせて白い船体を見上げている。

「エリカのお家でもクルーザーくらい持ってない？」

微妙に照れた顔で（達也にも大分、雫の表情が解るようになってきた）問い掛けた雫に、エリカは苦笑いを浮かべて首を振った。

「船は持ってるけど、あれは『クルーザー』とは言えないよねぇ……ってか、言いたくない。

普段はスタビライザーをオフにしてるから乗り心地最悪だし」

「……もしかして、訓練の為？」

「そうよ」

「徹底してるのね……」

深雪が呆れ顔で呟く隣では、美月がどういう顔をしていいか分からない、とばかり曖昧な笑みを浮かべていた。

「フレミング推進機関か……このサイズでまさか核動力じゃないだろうから、光触媒水素プラント＋燃料電池かな？」

「念の為に水素吸蔵タンクも積んであるよ」

一方、男の子らしく（？）メカニック面に興味を引かれて、推進機関を具（つぶさ）に見ながら独り言を呟いた達也に、予想外の答えが返って来た（答えが返って来ること自体を予想していなかった）。

振り返るとそこに、「船長」がいた。

ギリシャ帽を目深に被り飾りボタンの付いたジャケットを着込み、ご丁寧にパイプまで咥えている。

ただ少し、恰幅が足りない気がする。

肥満は治療薬の普及によって二十年前に社会から駆逐されているが、船長のコスプレをするならもうチョッと肩幅が欲しいところだ。

達也が困惑顔のままそんなことを考えていると、「船長」の方から握手を求めてきた。――ちなみに左手は、クラシカルなパイプを如何にもな手つきで握っていた。（良く見るとパイプの中は空だった）

「司波達也君だね？

映像で見るより好い男だ。実に頼り甲斐のありそうな風貌をしている。

私は北山潮（きたやま・うしお）、雫の父親だ」

予想よりかなり気さくな人柄に戸惑いを禁じ得なかったが、達也は普通の高校生より遥かに社会経験が豊富だ。

戸惑いを面（おもて）に出すようなことはせず、そつのない挨拶を返した。

「初めまして、司波達也です。

ご高名はかねがね承っております。

この度は妹共々、よろしくお願い致します」

「こちらこそよろしく。

うん、雫の目は確かなようだ。

我が娘ながら、なかなかシッカリしてるじゃないか」

いきなり繰り出された親バカ発言に、達也は「これがあの『北方潮』か……」と心の中で溜息をついた。

名前を以前から聞いていた、というのは単なる社交辞令ではなかった。

企業の経営層がプライバシー防衛の目的で、本名ではなくビジネスネームを使用するのは、今では寧ろ普通のことだ。

彼の父親も本名の「司波龍郎（しば・たつろう）」ではなく「椎原辰郎（しいばら・たつろう）」の名前でＦＬＴ開発本部長の職についている。

雫から父親が会社を経営していると聞いた時にはピンと来なかったが、その後にビジネスネームを教えて貰って、そんな大物が出て来るとは、とその時はかなり驚いたものだ。

晩婚だった所為で（魔法師との結婚に関わる様々な障碍を乗り越えるのに歳月を要したのだ）、もう五十歳を超えているはずだが、

この気さくな、というより寧ろ剽軽な雰囲気は、四十歳前後にしか見えなかった。

「――深雪！」

目礼で断りを入れて、達也は妹を呼んだ。

小走りで駆けて来た深雪は、すぐに状況を察して、雫の父親に向かい淑やかに腰を折った。

「初めまして、司波深雪です。

この度はお招きいただきまして、ありがとうございます」

「ご丁寧にありがとう、レディ。

北山潮です。

貴女のように美しいお嬢さんを迎えられるとは、この船にとっても当家のあばら屋にとっても望外の栄誉と申せましょう」

胸に手を当てて芝居っ気たっぷりに一礼した潮に対し、深雪も付き合いよくニッコリ笑って洋風に膝を折って見せた。

「あら、小父様。私の時はそんなことは仰らなかったと思いますが？」

「お父さん、みっともないから鼻の下を伸ばさないで」

そこへいきなり、言葉の矢玉が飛んで来た。

「いやいや、私は鼻の下を伸ばしてなど……」

娘一人なら適当に誤魔化すことも出来ただろうが、小学生の頃から知っていてもう一人の娘のように可愛がっているほのかとのツープラトンは、敏腕実業家にも捌き切れなかったようだ。（ちなみに潮が来ると聞いてほのかが躊躇を見せたのは、本当に娘と勘違いしている節があるのか、毎回少なからぬお小遣いを渡されるのが心苦しい所為だったりする）

少し距離を置いてついて来たエリカたちへ大袈裟な身振りを交えて話し掛けたのは、明らかに話を逸らす為だった。

「――おお！　君たちも娘の新しいお友達だね？

歓迎するよ。楽しんでいってくれたまえ。

残念ながら私はもう行かなければならないが、自分の家と思って

寛いで下さい」
　取引先相手と娘相手では勝手が違うのだろう。言葉遣いが不統一な辺り、動揺が見え隠れしている。
　そそくさと大型乗用車に乗り込んだ雫の父親を見送りながら「船に乗らないならあの格好は何だったんだろう？」と、達也は誰にも聞こえないように呟いた。

◇◆◇◆◇◆◇

　別荘がある聟島列島まで約九百キロ。実際最高時速百ノットのフレミングシップでおよそ六時間の船旅である。
　何を好き好んで飛行機ではなくわざわざ船を使うのか（プロペラのＶＴＯＬは自家用機として今や珍しい物ではないしフレミング推進のクルーザーより寧ろ安い）、達也には今一つ理解出来なかったが、レオやエリカに言わせると、「これぞ旅の醍醐味」なのだそうである。
　目的は旅じゃなくて海水浴だろう、と思わずツッコミを入れそうになったが、「やはりこの二人は息が合う」と心の中で呟くにとどめた。
　まあ、連れて行ってもらう立場ではあるし、船酔いをする訳でもない。移動時間を考慮して朝六時などという早い時間に集まったのだ。さっさと出発できるよう、達也は船へ乗り込んだ。
　外から見ても大きかったが、甲板は外から見た以上に広かった。流石にプールがあるとかシアターがあるとかいうことは無かったが（「豪華客船」ではなく「クルーザー」なのだ！）、八人がデッキチェアを並べて更に釣り糸を垂れてもまだまだたっぷり余裕がある広さだった。――もっとも、空気抵抗を考慮して甲板全体が流線型の透明なドームで覆われているから、実際に釣り糸を垂れることは不可能だが。
「でも、低速航行時は側面を開くんですよ」

そう説明してくれたのはこのクルーザーの操舵手であり、行き先の別荘では彼らの身の回りの世話もしてくれるというマルチなハウスキーパー、黒沢女史だ。

彼女の外見は……ハウスキーパーというより、もっと適切な単語があるような気もするが。年齢もせいぜい二十台半ばにしか見えないし。

と言ってもほわほわ、っとしたイメージではなく、テキパキという擬態語が似合いそうなタイプだが、真夏の太陽が照りつける海の上、いくらドームで過剰な光線がカットされているとはいえ、あの格好は暑いのではないだろうか。いや、本人よりも見ている方が。

もっとも、サマージャケットとはいえ長袖の上着を今もシッカリ着込んでいる達也に、そんなことを考える資格は無いかもしれない。

船のデザインは船首上部に操舵室、その下にキャビン、操舵室の天井から透明なドームが伸び、後ろ半分が甲板となっている。

黒沢は全員乗船を確認してすぐ操舵室に引っ込み、間も無く船は岸を離れた。

◇◆◇◆◇◆◇

途中嵐にあうこともなく、波はそこそこ荒かったがスタビライザーと揺動吸収システムのお陰で揺れに苦しめられることも無く、船は無事、別荘のある媒島へ着いた。

この島の珊瑚礁は野生化した山羊が原因で前世紀後半に死滅の憂き目を見ている。

その後、人工的な珊瑚礁回復も図られたが、結局上手く行かず、赤土を浚渫した後の海岸は別荘を建てた民間資本により埠頭と砂浜に作り変えられた。所謂「知識人」に「自然破壊」と誹られる所以である。

しかし、ここが有人島だった当時は珊瑚礁破壊は起こっていないし、野生化した山羊を駆逐したのも人の手だ。

人間がいるから自然破壊が起こるのか、人間がいなくなったから自然破壊が起こったのか。

ついついそんな、皮肉な思考に沈んで行きそうになったが、現実に今、遊ぶ為にここへ来て埠頭と砂浜を使っている自分が偉そうに批評できることではないな、と達也は思い直した。

彼の独白からも分かるとおり、達也たち一行は到着もそこそこにビーチへ来ていた。

白い砂、眩い太陽。

しかしビーチは、それ以上に眩しかった。

「達也く〜ん、泳がないの〜〜？」

「お兄様ぁ〜〜、冷たくて気持ちいいですよ〜〜」

砂に刺したパラソルの日陰で、達也は曖昧な笑顔で手を振った。

――それにしても、眩しい。

何が眩しいかというと、波打ち際で戯れる少女たちの水着姿が、である。

まず目を惹くのが、派手な原色チェックのワンピースを着たエリカ。余計な飾りが無いシンプルなデザインは、彼女のスレンダーなプロポーションを更に引き立たせている。

その隣で手を振る深雪は、大きな花のデザインがプリントされたワンピース。日に日に女性らしさを増して行くプロポーションを派手な絵柄が視覚的に暈（ぼか）し、生々しさの希薄な、妖精的な魅力を強調している。

意外だったのが美月。

細かな水玉模様のセパレート。ビキニというほど露出は無いが、胸元の深いカットに豊かな胸が強調されて、いつもの大人しいイメージからは想像出来ない艶かしさだ。ただ、肩幅、腰幅が狭い所為か、ウエストの曲線が足りないのはご愛嬌と言うべきか。

同じくセパレートながら、ワンショルダーにパレオを巻いたアシ

ンメトリーなスタイルで大人っぽく決めているのがほのか。
単なる大きさではなく凹凸でいうなら、この中で一番プロポーションが良いかもしれない。
雫は逆に、フリルを多用した少女らしいワンピースだ。こんな時でも表情に乏しい大人びた顔立ちの雫が着ると、何やら倒錯的な、妖しい魅力があった。
（……いかん、洗脳されてしまいそうだ）
何に、と問われても今の達也には答えられなかっただろうが、とにかくそういう気分になって視線を横にずらした。
結構沖の方で、派手な水飛沫が上がっている。
レオと幹比古が競争（競泳）しているのだ。
達也の見るところ、レオは素ではしゃいでいるのだが、幹比古はかなり煮詰まって自棄になっていた。
……一人だけでも同士がいるのは心強い。
達也は水平線へ目を向け、抜けるような蒼穹にボウッと心を委ねた。
ふと、間近に人の気配を感じた。
そちらに目を遣り――声を出さなかった自分を、達也は褒めてやりたかった。
五人が、腰を屈めて彼の顔を覗き込んでいる。
普段ならともかく、今の格好でこの体勢は、些かならず拙かった。
「達也さん、考え事？」
「お兄様、折角海に来たのですから、泳ぎませんか？」
「そうですよ。パラソルの下にいるだけじゃ、勿体無いです」
両サイドに膝をついた深雪とほのかが、左右の腕を取って立ち上がらせようとする。
体格的に仕方の無いことだが、腕に胸を押し付けるような持ち方で。
「いつまでパーカー着てるの？
海なんだからさ、脱いじゃえ脱いじゃえ！」

「あっ、エリカちゃん、ダメだよ！」
そこへエリカが参戦した。
立ち上がってもまだ両腕を拘束されたままで抵抗できない達也のパーカーの、前ファスナーを遠慮なく引き下げる。
「わっ……」
そして真っ先に声を上げたのは、制止していたはずの美月だった。
――パーカーの下には、鍛え上げられた鋼の肉体が隠れていた。
筋肉の太さ自体は驚くほどではない。
成人の身体ほどのボリュームは無い。
だが、少年らしさを残しながらも、腹筋も胸筋もみっしりと重く硬く引き締まり、ルネサンス彫刻のような筋が刻まれている。
ただ彫刻と違って、幾つもの傷跡が皮膚に印されていた。
その傷跡を見て、エリカの顔色が変わる。
今までのふざけ半分から一転して、引き締まった顔つきでパーカーを一気に脱がせた。
両腕を掴まれたままでは、袖で引っ掛かって全部は脱げない。
半袖のパーカーは今までとは逆に、肩と上腕を剥き出しにし、前腕を隠した状態で止まった。
肩も腕も、可動性を損なわないように、太くなり過ぎない範囲で鍛え上げられている。
そしてやはり、数々の傷跡が残っている。
一番多いのが切り傷。
同じくらい多くの刺し傷。
所々に細かな火傷の痕。
不思議なことに骨折の痕は見当たらなかったが、それを差し引いても、尋常な育ち方で出来上がる肉体ではない。
普通に鍛錬しただけでは、こうはならない。
単に血の滲む様な鍛錬を積んだ、というだけでは、こういう風にはならない。
実際に斬られ、刺され、焼かれて、血を流しながら拷問のような、

あるいは拷問そのものの鍛錬を積んで、はじめて、こういう身体になる。

長兄の身体と次兄の身体の違いを記憶の淵から呼び出して、エリカはそう思った。

「達也くん……貴方、一体……」

「やれやれ。

そういう顔をされるから、脱ぎたくなかったんだがなぁ」

頭を掻きたいところだったが、未だ両腕を拘束されたままの達也は、口調だけで困惑を表現した。

エリカの当たり前な反応より、この傷跡を見てまだ手を抱きかかえたまま離さないほのかの方に、達也はより強い困惑を覚えていた。

「……海に来たのですからそれは無理ですよ、お兄様。

このメンバーならば見られても構わないと、そうお思いになったから、雫の誘いを受けたのでしょう？」

「そりゃそうだ」

確かに今更なことを指摘され、達也は苦笑するしかなかった。

彼が笑ったのに合わせて、エリカも照れ笑いを浮かべた。

「んーっ、今のはあたしが悪かった。

ゴメンね、達也くん。変なこと言っちゃってさ」

「いや、気にしてない。そっちも気にするな」

「オッケ～。じゃあ……行こっか！」

その瞬間、達也は自分の身体がフワッと浮かぶのを感じた。

完全に無警戒だったので、重量軽減の術式を掛けられていたのに気付かなかったのだ。

それでもＣＡＤを使っていれば達也に分からないはずは無かったが、どうやら深雪とほのかが両脇から抱きついたのは、口の中でブツブツと「呪文（スペル）」――ヘブライ語やサンスクリット語や古ノルマン語を使った伝統的な呪文ではなく、連想法で魔法式のパーツを無意識領域に呼び出す為のキーワード群――を呟いていた雫から達也の意識を逸らすという目的もあったらしい。

深雪とほのかが、胸に抱いていた彼の両腕を「せーの！」という感じで振り回した。
ややぎこちなく、雫の魔法の次工程が作用する。
海に向かって放り投げられた達也の身体は、軽く十メートル以上を飛んで派手な水飛沫を上げた。
「ブハッ！」
水深がもっと深ければ問題なかった。
だが精々腰の高さまでしかない水嵩では、衝撃の緩和には役に立たない。
落下のショックを和らげるため、達也は自ら海水の中で前転受身をする羽目になってしまった。
「こらーっ！　もっと状況を考えろぉ！」
中途半端に脱がされたパーカーの所為で、本当に頭から海水に突っ込まざるを得なかった達也は、抗議の声を張り上げた。
「きゃ～、ごめんなさい、おにいさまぁ～」
この台詞は深雪のものではない。
わざとらしく棒読みの、エリカの声だ。
「こっ、こっ、こっ……」
達也は激しい情動を生み出す精神領域を失っている。
だが本物の怒りではない、悪ふざけの範囲で逆上することは可能だ。
「こら待てエリカ！　こっちへ来い！」
背を向けて別荘の方に走り出したエリカの身体が空中に吊り上げられた。
「えっ！？　チョッと！？」
魔法式を丸ごと暗記している達也は、ＣＡＤ無しの条件で五工程までの魔法なら、この中の誰よりも上手く、速い。
「何であたしだけーっ！」
重量軽減、加速、減速の三工程の魔法が、エリカの身体を弾道飛行させた。

どぼん、と優しい水音がした。
達也が落ちた場所の、二倍の先で。
「安心しろ！　着水速度はほぼゼロだし、お前一人じゃないからな！」
その言葉を聞いて、女性陣が震え上がった。
蜘蛛の子を散らすように、慌てて思い思いの方向へ走り出そうとした、が、
「わわっ！？」
「キャーーッ！」
雫、ほのかの順番で、飛び込み台なしのダイビングが敢行された。
そして最後の一人。
「ムッ、やるな、深雪！」
「負けませんよ、お兄様！」
達也の魔法を、深雪が広域干渉で防ぐ。
深雪の広域干渉を、達也が術式解散で無効化する。
次の瞬間、深雪が広域干渉を再展開する。
見物人のことを忘れた、マル秘も極秘もへったくれもない白熱した兄妹喧嘩だった。
「もぉ～～、達也さん、酷いですよ……」
だがその均衡は、達也の背後で上がった、情けない抗議の声に崩された。
「ほのかっ！？」
ひっくり返った声で深雪が叫ぶ。
完全に慌てふためいている声だった。
「隙あり！」
達也の魔法が深雪の身体を捉えた。
飛んで行く妹の身体を、魔法の最終工程が優しく受け止めたのを確認して、達也は満足げに頷いた。
そして、気付いてしまった。
深雪が何に慌てて、何に我を忘れたのか。

元々本当に泳ぐことを考慮していないデザインだったのだろう。
ほのかの水着は、トップが捲れ上がっていた。
達也は新たな魔法を発動し、自分の身体を遥か沖へと、遠く遠く放り投げた。
ほのかは今更のように悲鳴を上げて、両手で胸を押さえ水の中にしゃがみこんでいた。

◇◆◇◆◇◆◇

「ヒック、ヒック、エグッ……」
「ゴメン、ほのか！　本当にゴメン！」
「大丈夫よ、ほのか！　ほら、その、ちょうど波の高さでほとんど見えなかったし！」
「そ、そうですよ！　ほとんど見えていませんでした！　本当です！」
砂浜にペタンと座り込んでしゃくり上げるほのかの前で、何度も土下座を繰り返す達也。
その両側では深雪と、そして唯一人罰ゲームを免れた美月が必死でほのかを慰めていた。
「えっと……あたしたちもふざけてたんだし……」
この騒動の発端を作った（達也に対する悪戯の首謀者という意味で）エリカが、バツ悪そうに方向性の違う慰めを口にする。
「ほのか……」
そして雫に耳元で何やら囁かれ、ほのかはようやく顔を上げた。
「……本当に悪かったって思ってますか……？」
「思ってる！　本当に、悪かった！」
再び砂浜に額を擦り付けた達也の後頭部を見下ろしながら、ほのかは「じゃあ……」と呟いた。
ガバッ、と顔を上げた達也へ涙の残った目を向けながら、ほのかはもう一度「じゃあ」、と言った。

「……今日一日、私の言うことを聞いて下さい」
「えっ……？」
「それで、許してあげます。
ダメですか……？」
達也は深雪と顔を見合わせた。
深雪は「仕方ないですね」という顔で苦笑している。
「えっと……それで良いのなら……」
言うことを聞け、と言われても、何十年も前に流行った「王様ゲーム」のような悪質な要求をしてくる少女でないことは分かっている。
達也が躊躇いがちに頷くと、「約束ですよ！」とほのかが満面の笑顔で頷いた。

◇◆◇◆◇◆◇

レオが長〜い（長距離かつ長時間の）競泳を終えて海から上がって来ると、バルコニーは丁度ティータイムだった。
テーブルの上には冷たい飲み物と彩り豊かなフルーツ。
給仕を務める黒沢はエプロンこそ付けているもののその下は流石に例の制服（コスチューム）ではなく、薄手のミニワンピースだった。
肩が剥き出しの丈の短いワンピースの上に、ワンピースそれ自体より大きな白いエプロン、そこから覗く細い手足。
ティーンの男の子なら目が釘付けになっても仕方が無い色気を漂わせていたが、今はもっとパワフルな水着姿が四つも並んでいる。
成熟度、という点では一歩譲るものの、ルックスそのものは抜群の美少女二人と水準以上の美少女二人。色とりどりの水着姿を前にして「色気より食い気」を実践できるレオにとっては、黒沢の放つ「大人の魅力」もそれ程手強い相手ではなかった。
ただ、全く無関心という訳でもない。
水着姿が四つ、と認識したところで、レオは「おやっ？」と首を

捻った。
「達也と……光井はどうしたんだ？」
「向こうで、ボートに、乗ってるよ」
答えはテーブルからではなく、背後から返って来た。
全身から疲労を滲ませ海水を滴らせた幹比古が、息も切れ切れに答えて指差した先では。
達也とほのかの二人が、手漕ぎボートで沖へ向かっていた。
「……どうなってんだ、ありゃ？」
「色々あったのよ、イロイロ」
レオの問い掛けに、エリカがそっぽを向きながら答える。
その表情は素っ気無いというより「決まりが悪い」が半分、「拗ねている」が半分で、そっぽを向かれたレオも気分を害するより「おや？」という好奇心が先に立った。
傍で見ていた幹比古も興味深げな表情を見せたが、彼の関心はすぐに海上の二人へ向いた。
麦藁帽子を被った達也の表情は、帽子の作り出す陰に隠れてよく見えない。
日傘を差し、背中を向けているほのかの表情は尚更のこと、こちらからでは分からない。
だがそれでも、浜辺から遠ざかる小さなボートから、和やかで浮き浮きした雰囲気が伝わってきている、と幹比古は感じた。
「……結構良い雰囲気じゃない？」
「こっ、コラッ、」
バカ、という台詞は言えなかった。
焦りまくったエリカの台詞は、向かいの席から伝わって来るヒンヤリとした空気に打った斬られた。
シャリシャリシャリ……という、真冬の深更にでも聞こえてきそうな不吉な音を、幹比古は隣に座る少女の手元から聞き取った。
「吉田君、良く冷えたオレンジは如何かしら？」

愛想良く話しかけられて、幹比古はカクカク頷きながら深雪から冷え過ぎたオレンジを受取った。
計ったようなタイミングで、黒沢からスプーンが差し出される。
幹比古は機械的に、シャーベット用のスプーンを手に取った。
深雪は新たなフルーツを手に取った。
再び、シャリシャリシャリ……という音が聞こえ、忽ち(たちま)の内に、マンゴーの生シャーベットが出来上がる。
冷ややかな目で見詰めていたフルーツから目線を外し、愛想の良い微笑みを浮かべて向かいの席へ差し出す。
「西城君も如何？」
「あ……どうも……」
流石のレオもそう答えるのが精一杯だ。
深雪は再度、フルーツの山に目を向けたが、八つ当たりに飽きたのか、詰まらなさそうに目線を外した。
「雫、悪いけどわたし、少し疲れてしまったみたい。お部屋で休ませてもらえないかしら？」
「良いよ、気にしないで。黒沢さん？」
「はい。深雪お嬢様、ご案内致します」
黒沢の後に続いて、深雪が別荘の中に姿を消した。
縮こまっていた美月のホッとした顔と、常と変わらぬ雫のポーカーフェイスが好対照だった。

◇◆◇◆◇◆◇

夕食はバーベキューだった。
八人は和気藹々とバーベキューコンロを囲み、テーブルとコンロを行ったり来たりしていた。
深雪も一休みして落ち着きを取り戻したのか、ほのかが甲斐甲斐

しく達也の世話を焼いている姿を目の前にして、エリカや雫と楽しげにお喋りしている。
美月は昼のティータイムが軽いトラウマになっていたのか、深雪たちと少し離れた席で、幹比古と遠慮がちな会話を交わしている。
レオは専ら食べる方に口を使っていた。黒沢はほとんどレオ専属の給仕係と化している。
無論、ハッキリとグループ分けがされている訳ではなく、時に、ほのかは深雪たちの輪に加わり、時に達也は、レオとフードファイトを繰り広げたりした。
ただ、何となく――いつもに比べて何となく、ぎこちない空気が彼らの間に流れていた。

◇◆◇◆◇◆◇

嵐の前の静けさ。
何が起こるか分からない、でも何かが起こりそうな気がする――そんな空気を破り、波乱の幕を開けたのは、意外な人物だった。
女の子五人で遊んでいた古典的なカードゲーム「ババチェラー」（ジジ抜きのこと。「ババ抜き」や「オールド・メイド」の名称は蔑視のニュアンスがあるとして現代では好まれない）が美月の負けで決着してすぐ、雫が深雪に「少し外に出ない？」と誘いをかけたのだ。
「……いいわよ」
戸惑いは一瞬のこと。
深雪はすぐに、ニコッと笑って頷いた。
「……えっと、お散歩ですか？　じゃあ、私も」
「美月はダメよ。罰ゲーム、あるんだから」
「えぇ！？　聞いてないよ！」
「敗者に罰ゲームは付き物なの。
じゃ、そういうことで、二人とも気をつけて」

空気が読めているのか読めていないのか微妙な美月を拘束し、エリカは二人の間に漂う張り詰めた空気に気付かぬふりで、深雪と雫に手を振った。
「……」
「これで、必至だ」
「ええっ、もう!?」
将棋の傍ら、女性陣のやり取りを盗み見ていた幹比古は、達也の無慈悲な一言に悲鳴を上げた。

◇◆◇◆◇◆◇

別荘を出て、波打ち際を左へ。
無言で歩む雫の後を、深雪が無言で続く。
そのまま、別荘の灯りが届かなくなる所まで進んで、雫はようやく振り返った。
雫はいつも以上に無表情、というより、緊張に顔が強張っている。
深雪は柔らかな笑みをたたえているが、その笑顔は、感情の読めないアルカイック・スマイルだった。
「つき合わせてゴメン」
「いいのよ。何か話があるのでしょう?」
そう深雪に促されても、すぐには話を切り出さなかった。
砂浜を洗う波の音を十、数えたところで、雫はようやく口を開いた。
「教えて欲しいんだ」
「何を?」
「深雪は達也さんのことをどう想ってる?」
歯に衣どころかオブラートにも包んでいない、質問の意図も理由も何の説明もない、端的過ぎる雫の問い掛けに、
「愛しているわ」
僅かな躊躇も動揺も無く、深雪は一言、答えた。

「……それは、男の人として、ということ？」
動揺は寧ろ、雫の側に見られた。それでも取り乱したりしなかったのは、彼女のパーソナリティの故か。
「いいえ」
深雪の答えには、一分の揺るぎも見られなかった。
彼女の表情には寧ろ余裕のようなものまで見られた。
「わたしはお兄様を誰よりも尊敬し、誰よりも愛している。
でもそれは、女として、ではないの。
わたしのお兄様に対するこの想いは、決して、恋愛感情ではないわ。
わたしとお兄様の間に、恋愛感情はあり得ない」
深雪は雫と視線を合わせて、ニッコリと笑った。
「雫が何故そんな質問をするのか、わたしにも分かっているつもりよ。
大丈夫。わたしに、ほのかの邪魔をするつもりは、無いから。
……ヤキモチは焼くけどね？
だから、安心して、って言っても無理かもしれないけど」
くすっ、と笑った深雪に、雫は泣きそうな表情を浮かべた。
「……何故」
「何が？」
「何故……そんな風に、割り切れるの？
だって深雪、こんなに達也さんのこと、好きなのに」
深雪は一歩、雫の方へ足を踏み出した。
雫の身体が強張った、が、後退りはしなかった。
深雪はそのまま雫の横を通り過ぎて、背中合わせの位置で止まった。
「……わたしたち兄妹の関係を他人に説明するのは難しいわ。
余りにも沢山の思惑が絡み合っているから。
わたしのお兄様に対する想いも、本当はそんなに単純なものじゃないのだけど……やっぱり、愛してる、って言葉が一番シックリ来

るわね」
「……本当の、兄妹じゃないの？」
振り向いた雫に、
「随分踏み込んだことまで訊くのね？」
振り向いた深雪が問い返した。
「……ゴメン……」
「ううん、責めてる訳じゃないのよ？」
首を横に振る深雪は、屈託の無い笑みを浮かべていた。
「いいわね……そんなに一所懸命になれる友達がいるなんて」
「……私は……深雪のことも、友達と思ってるよ」
「知ってるわ。
だから気になるのでしょう？
友達同士が、傷つけ合わないように」
優しい眼差しを向けられて、雫が恥ずかしそうに俯いた。
「……話を戻すけど……
わたしとお兄様は実の兄妹よ。
少なくとも記録上はそうなってるし、ＤＮＡ検査でも血縁関係を否定する結果が出たことは無いわね」
「でも……」
「言いたいことは分かるわ」
口ごもる雫の前、深雪は訳知り顔で頷いた。
「わたしがお兄様に向けている感情は、兄妹の範囲（レベル）を超えていると自分でも思うもの」
雫は困惑顔で黙り込んでしまった。
「わたしね……本当は、三年前に死んでいるの」
「えっ！？」
しかし流石に、この告白を前に、声を抑えることは出来なかった。
「死んでいるはずだった、って言うべきなのかな？
でもわたしはあの時、自分の命が消えていくのを確かに実感したから、『本当は死んでいた』でもきっと、間違いじゃない。

わたしが今、ここでこうしていられるのはお兄様のお陰なの。
わたしが泣いたり笑ったり出来るのも、こうして雫とお喋りできるのも、全部お兄様のお陰なの。
わたしの命はお兄様に頂いたもので、だからわたしの全てはお兄様のものなのよ」
「それって……」
どういう意味？、という言葉にならない質問に、答えは無かった。
「わたしのお兄様に対する想いは、恋愛感情じゃないわ。
恋愛って、相手を求めるものでしょう？
わたしのものになって、って求めるのが恋じゃない？
でも、わたしがお兄様に求めるものなんて、何も無いわ。
だって、わたしはもう、わたし自身をお兄様から貰っているのだもの。
わたしはこれ以上の何も、お兄様に求めない。
わたしの気持ちを受け取って貰うことさえ、求めはしない。
この想いを表現する言葉は……やっぱり、愛しています、以外に無いんじゃないかしら」
「……参った」
深雪の告白に、雫は白旗を揚げる以外、出来なかった。
「深雪って、本当に、大物」
「自分でも、歪んでいると思うんだけどね」
ただただ頭を振る雫に、深雪は悪戯っぽく片目を閉じた。

◇◆◇◆◇◆◇

別荘を出て波打ち際を右へ進んだところでは、ほのかが達也と向かい合っていた。
別荘の灯りは届かない。
夜の闇の向こう側で交わされる言葉も、波の音にかき消されてここまでは届かない。

「達也さん……」
何度も口を開け閉めして、ほのかはようやく、それだけを口にした。
「うん、なに？」
いつもより柔らかい口調、柔らかい言葉遣いで達也が問い返す。
「あの……その……
私、達也さんのこと好きです！」
逡巡の末に搾り出した台詞は、もしかしたら、闇の向こう側に届いたかもしれなかった。
しかし、そんなことに思いを致す余裕は、ほのかには無かった。
今、彼女にとって世界は、達也と自分の二人だけで形作られるものだった。
「――達也さんは私のこと、どう思ってますか！？」
達也と視線を合わせることが出来ず、瞼をギュッと閉じてしまったほのかに、答えは中々返らなかった。
「……ご迷惑、でしたか？」
恐る恐る目を開け、恐る恐る涙声で問い掛けたほのかに、達也は笑って首を振った。
「迷惑じゃないよ。
いつかは、そう言われるかもしれないと、思ってもいた。
予想より早かったけど」
達也と目を合わせて、哀しげな瞳をしている、とほのかは思った。
押し寄せてくるであろう悲しみに耐えるべく、ほのかはギュッと手を握った。
だが達也の答えは、ほのかにとって良い方の予想にも悪い方の予想にも当てはまらない、予想外のものだった。
「……ほのか、俺はね、精神に欠落を抱えた人間なんだ」
「……えっ？」
「子供の頃、魔法事故に遭ってね……精神の機能の一部を消されちゃったんだよ」

ほのかの顔がサッと蒼褪めた。
夜の闇の中でも分かるほど、蒼白に。
大きく目を見開き、のろのろと上げられた両手で口元を覆い、「そんな……」と呟きを漏らした。
「俺はその時、多分、恋愛という感情も無くしてしまっているんだ。閉ざされたのではないから、解き放つことも出来ない。壊されたのではないから、治す（直す）ことも出来ない。消し去られたものは、取り戻せない」
達也の語り口は、他人事のようだった。
「俺には恋愛という感情が分からない。人を好きになることは出来ても、恋をすることが出来ない。一応、知識だけはあるからね。自分の心を診断してみて、俺にはそれが欠けていると分かった。卑怯な言い方かもしれないけど、俺は、ほのかのことも好きだよ。だけどそれは、他の友達と同じように、なんだ。ほのかがどんなに一所懸命になってくれても、俺はきっと、ほのかのことを特別な女性だと想えない。それはきっと、ほのかにとって辛いことで――ほのかを傷つけてしまうことだから」
そう言って、達也は無力感の漂う笑みを浮かべた。
「今のうちに、嫌いになってくれるとありがたい」
達也は口を閉ざした。
ほのかも、何も言わない。
寄せては返す波の音だけが、夜の闇を満たした。
少しずつ波が近づいてきて、
遂に、二人の足元へ届こうか、というだけの時間が過ぎて、
ほのかが、顔を上げた。
「怒らないで下さいね？
私、達也さんって、深雪のことが好きなんだと思っていました。妹としてじゃなく、女の子として」

「……いや、それは誤解だって……」
「ええ、そうみたいですね。
達也さん、頭が良いですから……嘘をつくなら、もっと信憑性のある嘘をつくはずですから。
精神の機能を部分的に消去する魔法なんて聞いたこともありませんけど、だから余計に、信じられます。
でも、ということは、達也さんは、私以外の女の子を恋人にすることも無いんですよね？」
何だか思いがけない雲行きに戸惑いながらも、達也は「まあ、そうだけど……」と頷いた。
「……だったら、良いです」
「？」
「これからもずっと、達也さんには恋人がいないんでしょう？
だったら、私が達也さんのことを好きでいても、横恋慕にはなりませんよね？」
「それは……そうかもしれないけど……」
「じゃあ、問題ないです。
私はこれからも、達也さんのことを好きでいることにします！
他に好きな人が出来るまで、ですけど！」
明るく、乗り換え予告つきの宣言。
「まあ……ほのかがそれでいいのなら……」
達也は苦笑しながら頷いた。
わざわざ「他に好きな人が出来るまで」と付け加えたほのかの意図が分からぬほど、達也も鈍くは無かった。

◇◆◇◆◇◆◇

次の日も、朝から太陽が激しい自己主張を繰り広げていた。
早朝から、気温は三十度を超えていた。
ただでさえ汗ばむ暑気に覆われた砂浜で――

熱い熱い闘いが繰り広げられていた。
「お兄様、お背中を。日焼け止めを塗りますので」
「達也さん、ジュース、飲みませんか？」
とか、
「雫がジェットスキーを貸してくれるそうです。乗せていただけませんか？」
「少し沖に出るとダイビングスポットがあるそうですよ？」
とか、第三者には鬱陶しい熱気が発散されている。
「……深雪、昨日は相当、我慢してたのね……」
「……ほのかさん、何だか随分と吹っ切っちゃってる感じ……」
そんな、小笠原気団より熱い高気圧（好気圧？）に挟まれて、火傷しそうな熱風に晒されている達也は……
何だか昨日よりも、いつもよりも、リラックスして、楽しげに見えた。

2ー（28）　番外編〔夏の休日〕（後書き）

次週から第二章と第三章の間に位置するエピソードを『間章〔生徒会長選挙編〕』として全三話予定でお送りします。

その後に第三章となりますが、第三章の開幕には少しお時間を頂くことになると思います。

第三章のスケジュールについては、間章最終話の後書きでお知らせしたいと思います。

間章〔生徒会長選挙編〕1（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

間章〔生徒会長選挙編〕1

「私たちも今月で引退かぁ……」

夏休みの話題で盛り上がっていた生徒会室の空気が微妙に変わったのは、真由美のこの発言がきっかけだった。

相変わらず男女比率が著しく偏っている生徒会室のランチタイムは、新学期初日ということもあって「一夏の体験談」で盛り上がっていた。

最早男扱いされていないのか、それとも居ることさえ忘れられているのか――故意に、という可能性もあるが――異性には普通聞かせられないような話題もポンポン連発されて、些か居心地の悪い思いをしていた達也は、少し前から魔法書（風紀委員会室にあった珍しい紙媒体の書籍だ）へ目と意識を移していたので、どういう経緯でその話題が出たのかは聞き逃していた。

「そういえば、会長選挙は今月でしたね」

だがもしかすると――というか、多分確実に――彼にも関わって来る話題なので、聴覚が意識に働きかけたのである。

「ええ。

選挙は月末ですが、一応の体裁を整える必要がありますので、来週中には選挙公示をして諸々の準備に取り掛からなければなりませんね」

答えは鈴音から返って来た。

しかしこの先輩、十八禁とはいかないまでも十五禁には該当するであろう「女の子同士のお喋り」の最中までこの沈着冷静な表情が崩れないというのは、年頃の少女として一寸、どうだろうか？

という疑問を達也は抱いたが、再質問の内容は当然別だった。

「体裁だけなんですか？」

実質は無いんですか？　という趣旨の質問だが、鈴音は達也の意図を正確に理解した。

「立候補者が複数いれば、選挙は行われます。
とは言っても、生徒会長になろうという生徒は限られていますから、所詮は身内同士の争いですが」
「身内同士？」
「過去五年、生徒会長は主席入学だった生徒が務めています」
そう言えばこの部屋に呼び出された最初の日に、そんなことを聞かされた記憶がある。
「つまり、選挙をするまでも無く生徒会長は決まっていると？」
「そうとは限りません。過去五年、ということは、六年前は違っていたということです。
とは言っても、直前の生徒会役員でなかった生徒が生徒会長になった例はありませんし、今回もまた、選挙になったとしても、服部君と中条さんの一騎討ちでしょうから。
おそらく選挙前に、話し合いで立候補者は一本化されるでしょう」
なる程、それなら確かに「身内同士」だ、と達也は納得した。
納得できなかったのは、有力候補と名指しされた本人だった。
「わたしには生徒会長なんて無理です！
話し合いなんてしなくても、立候補するつもりはありません」
今の段階から涙目になっているようでは、確かに生徒会長は務まらないだろうな、と、これまた達也は納得した、が、
「そうすると、六年ぶりに主席入学以外の生徒会長の誕生となるな」
「次の会長は、はんぞーくんかぁ……」
口とは裏腹に、風紀委員長と生徒会長は納得していない様子だった。
確かに、個人的な好悪は別にして、ポリシー的にはあずさの方がこの二人には近いだろう。
だから彼女を次の会長に据えたい、と考えるのも分かる気はするのだが……
（……本人にヤル気が無いのでは、な……）
全く立候補者がいないのなら、あずさを説得するという必要性も

出てくるだろうが、服部が立候補するならそれが一番順当ではないか、と達也は考えた。

「去年の主席入学は中条先輩だったんですね」

しかし深雪の考えていたことは、達也と角度が違っていたようだ。多少意表を衝かれた感もあったが、妹の指摘に、達也は「なるほど」と思った。

深雪の指摘がきっかけで、自分も「去年の主席入学者は服部だろう」と、何となく思い込んでいたことに達也は気付かされた。

「そうなのよ。

今でも総合成績はほとんど差が無いのよね？」

深雪に頷き、あずさ本人に訊ねた真由美に、答えを返したのは鈴音だった。

「理論は五十里君が学年主席で中条さんが次席、服部君が三席。実技は服部君が学年主席で中条さんが僅差で次席。総合成績も服部君が主席、中条さんが僅差の次席でした」

わざわざ、学内掲示板に貼られた一学期の席次表を、会議用の大型ディスプレイに映し出して説明する意味は……特に無いんだろうな、と達也は思った。

朱に交われば……と言うが、真面目一方の生徒なら、そもそも最初からこの会長やこの委員長と対等に渡り合えるはずが無いのだ――というのが達也の鈴音に対する評価だったりする。

「実技の成績も中条先輩の方が千代田先輩より上なんですね？」

この表は深雪も既に見ているはずだが、九校戦を通じて親しくなった名前を改めて見ると、以前とは違う印象が生まれるのだろう。

「花音のヤツは大雑把だからな」

「せめて、豪快さが持ち味、と言ってあげるべきじゃない？」

身も蓋もない摩利の評価を、真由美が苦笑しながら修正した。

「逆に細やかさがあーちゃんの持ち味だから、九校戦のようなスポーツ系競技には向かないのよ」

「だが来年は中条も選手として出なければならないだろうな」

真由美のフォローには他人事のような顔をしていたあずさだったが、摩利が投げ込んだ爆弾にはビクッ、と身体を震わせて反応した。
「……話題を振ったあたしが言うのも何だが……来年の話だぞ、中条？」
今からビクビクしてどうする」
「そ……そうですよね、来年のことですよね……
来年は千代田さん以外にも、司波さんとか北山さんとか光井さんとか、有望な選手も一杯いますし……」
上滑り気味の笑い声を無理矢理交えながら応えたあずさを、摩利は呆れ顔で見返した。
「確かに今年の一年女子は有望なヤツが多かったが……学年次席が下級生に責任を押し付けてどうする」
「いえ、そんな、押し付けるだなんて、わたしはただ、適材適所といいますか、その……」
それなりに筋の通ったことを言っている気もするが、半眼で見据えられただけで反論も出来なくなるようでは、確かに生徒会長は辛いかもしれんな、と達也は改めて思った。

◇◆◇◆◇◆◇

六週間ぶりに足を踏み入れた風紀委員会本部は、珍しく賑わっていた。
「会議の予定はお聞きしておりませんが」
何故か出入り口の横に立っていた摩利に訊ねると、彼女は勿体振った仕草で頷いた。
「そうだろうな。
あたしも通知した記憶が無い」
「では、新学期初日のセレモニーでも？」
「発足式は年度初めしかやらないよ」
「特に委員会の行事という訳ではないんですね？」

「まあね」
摩利のこの回答に、達也は軽く一礼して、自分用のビデオレコーダーが収納されているロッカーへスタスタと歩み去った。――が、三歩進んだところで足を止めた。
後ろを振り返り、先程と同じ距離に立っている――つまり、歩調を合わせてついて来たということだ――摩利へ向き直った。
「……何でしょうか？」
「行事ではないが、風紀委員会にとって一大イベントであることに変わりは無いよ」
「はぁ……」
達也の気が抜けた返事に、摩利は「やれやれ」と言いたげな表情を浮かべた。
「……その世事に関心が薄いところは直したほうがいいぞ」
「主なニュースは目を通していますが」
「あたしが言っているのはもっと身近のことだよ」
そう言いながら首を振っているのは「処置無しだな……」という意思表示だろうか。少なくとも達也にはそう見えた。
結局、折れたのは摩利だった。
「風紀委員には任期が無い」
「知っています。選出元が入れ替わっても辞める必要が無いというのは、少し不思議な気もしますが」
「しがみついたからといって旨味のある地位じゃないしな。卒業生の分は毎年必ず入れ替わるのだし、卒業前に辞める委員も少なくない。
実は、前学期末付けで部活連選任枠の三年生が一人、辞任していてね。
今日はその補充が来るんだよ」
「歓迎会ですか？」
「いやいや、そんな団結力のある組織じゃないことくらい、もう君にも分かっているだろう？」

確かに風紀委員会は「団結」よりも「分裂」や「対立」の文字が似合う組織だ。
「ただ、女子が風紀委員に選ばれるのは珍しいのでね。暇人が見に来てるんだよ」
「委員長が選ばれた時も注目を浴びたのでしょうね」
達也の指摘に、摩利は不機嫌な顔で黙り込んでしまった。
どうやら、余り思い出したくない類の出来事だったようだ。
もしかして、後輩が不快な思いをしなくても済むように、出入り口で目を光らせていたのだろうか。
「……まあ、あたしのケースは置いておくとしてだ。
今回、新委員を迎えるに当たり、しばらく君に面倒を見て貰いたいんだが」
「……俺が、ですか？」
達也が改めてこう問い返したくなったのも、道理だろう。
雑用は下っ端の仕事だが、新任者のフォローは一番の下っ端に任せるような仕事では断じてない。
「君が、だ」
だが摩利は、百パーセント本気の顔だった。
「……来られる方が誰なのか、分かったような気もしますが……それでも、一番の下っ端に任せる仕事ではないと思いますが」
「いやいや、風紀委員会に君以上の適任者はいないよ」
風紀委員会、にアクセントが置かれた言い方に思わず納得してしまった時点で、達也の敗北は決まった。

新委員は達也の予想したとおりの人物だった。
「これで一通り顔合わせも終わったし……花音、今日のところは達也くんに同行して、巡回のイメージを掴んでくれ」
花音のような有名人に顔合わせが必要だとは思えなかったが、そこはお約束ということだろうか。
あちこちでやたらと盛り上がっていた着任の挨拶を終えて、その

間待たされていた達也の所に戻って来た摩利の台詞がこれだった。
相変わらず、達也に拒否権は無いようだ。
「えーっ！？　摩利さんが教えてくれるんじゃないんですか？」
本人を目の前に、もしかしなくても結構失礼な態度だが、達也は心の中で「もっと言ってやってくれ」と花音を応援していた。
「あたしじゃ参考にならんよ。
後ろめたいヤツは、あたしの姿を見るとコソコソ逃げてしまうからな。
その点、達也くんは委員会の中でも事件遭遇件数ナンバーワンだ。ついでに検挙数もナンバーワンだが」
「あっ、そうなんですか。なるほど」
ついで、なんですか？　と達也としては問い詰めたい気分だったが、すぐに諦めた。
徒労に終わることは目に見えていたからだ。

◇◆◇◆◇◆◇

「巡回ルートに決まりはありません。
校内を隈なく見て回る必要もありません。
俺は他の委員の巡回に同行したことはありませんが、特定のルートだけを回る委員の方が多いようですね」
「ふーん……司波君って順応性が高いのね」
「はい？」
「だって、入学早々、校内パトロールなんて大役を最初から一人でやってたんでしょ？
新勧週間の武勇伝はあたしも色々聞いてるわよ」
「まあ、あの時は色々と……」
何だか見当違いな感心をされているような気がしたが、敢えて反論するような真似はしない。――いきなり一人で巡回業務へ放り出されるのが普通であり、花音の扱いが過保護なのだ、等と本当のこ

とを言っても、誰一人幸せにはならない。
「俺の場合は実習室を重点的に見て回ることにしています。過去の巡回報告を見ても、教室で問題が起こったケースは僅かですから」
「教室はモニターされてるからね。小説みたいに怪シカランことなんて、やりたくてもできないだろうし」
「小説、ですか……」
一体どんな小説を読んでいるのか少なからず興味をそそられたが、「官能小説」等と告白されたらどんな顔をしていいか分からなくなるので、好奇心には蓋をすることにした。
「体育館やグラウンドには行かないの？　実習室より問題が起こりそうだけど」
「新入生勧誘期間のような特別なケースでない限り、そっちは原則として部活連の管轄です。
勿論、一旦私闘が発生すれば、風紀委員会の出番になりますが」
花音は部活連枠で委員会入りしたのだし、彼女自身も陸上部のレギュラー（専門は障碍物競争）なのだから、部活連の自治特権を知らないはずは無い。
「見て回るだけなら構わないでしょ？
何か問題が起こってから駆けつけたんじゃ手遅れだし」
それなのにこんなことを言い出したのは……なわばり荒らしをやる気満々なんだろうなぁ、と達也は思った。

◇◆◇◆◇◆◇

花音の強い要望により、今日の巡回は体育館を重点的に見て回ることになった。（自分がお供をする必要があるのだろうか、と達也は結構真剣に悩んだ）
校舎との位置関係で、最初に訪れたのは第一格闘技用体育館。
単なる偶然だが、今日は剣術部の練習日だった。

「……司波兄。お前って見る度に連れてる女が違うのな」
「人聞きの悪いことを言わんで下さい」
本気か冗談か判別がつきにくい口調で――何割かは間違いなく本気が混じっていたように達也は感じた――話し掛けて来たのは桐原だった。
「そうよ、桐原君。
そんなこと言ったら、千代田さんに失礼じゃない。
千代田さんは五十里君一筋なんだから」
「……まあ、それでも良いですけど……」
花音を身悶えさせ、達也に深い溜息をつかせた発言の主は紗耶香だった。
剣道部の紗耶香が剣術部の練習に参加している理由は、部活時間を利用したデートの為、ではない。
春の事件以来、魔法系競技のクラブと非魔法競技系のクラブの間で、もっと相互の交流を持つべきだという気運が高まった。特に元々同じ競技で、ルール上、魔法を許容しているか許容していないかの違いで分かれていたクラブは、自分たちの殻に閉じ籠もらずお互いの長所を積極的に取り入れていこう、という風潮が生まれた。
その先鞭をつけたのが剣道部と剣術部であり、紗耶香と桐原はそもそものきっかけ、そもそもの当事者として、イの一番で相互交流に参加しているのだった。
――だからと言って、練習中に二人が仲良くしていない、ということではないのだが。
閑話休題。
達也は、紗耶香の口添え〔？〕にも関わらず、まだ胡散臭げな目つきをしていた桐原に向かって事情を説明することにした。
「渡辺委員長から同行するように命じられたんですよ」
それでも良い、と言いながらもやはり、言い訳せずにはいられなかった。
自分から手を上げたならまだしも、仕事を押し付けられて汚名ま

で擦り付けられたのでは堪ったものではない。
「ほぉ～、じゃあ、あの噂は本当だったんだな」
桐原は予想外にあっさり信じてくれたが、意味ありげなオマケがついていた。
「噂ですか？」
「えっ、司波君は知らないの？」
「千代田を次の風紀委員長にしようと、渡辺委員長が根回ししてる、って噂なんだがな。
正直、あの人が根回しなんて面倒臭い真似をするか？　って思ってたんだがよ」
その噂は完全な事実であることを達也は知っていたが、この場面では沈黙を選択した。
「だから言ったじゃない。千代田さんだったら例外だって。
渡辺先輩は千代田さんを特に可愛がってるんだから」
彼が何も言わなくても、盛り上がりに欠けることはなかったが。
「へぇ？　あの人、見掛けだけじゃなく中身もタカラヅカな人だったのか。
まっ、確かに委員長と千代田だったら、絵になるよな」
少女歌劇は近代以降に発生した舞台芸能の中で最も伝統があるものと言える。だから「中身が宝塚」という評価は別段不名誉なものではないと達也は感じたのだが、花音の感性は異なる結論を出したようだ。
「ホ～、あたしだけならともかく、摩利さんまで百合扱いするなんて……
桐原君、いい度胸じゃない」
「チョッと待て！」
花音の背後から不動明王も斯くや、とオーラの炎が燃え上がった。
（正確には活性化したサイオン粒子の噴出）
「俺は『百合』だなんて言ってねえぞ！」
単純なパワーなら二年生ナンバーワンの呼び声も高い花音の怒気

に、桐原は大慌てで手と首を振った。
「問答無用」
ヤケに力強い花音の宣告に、達也は深く溜息をついて、右手を素早く、軽く、突き出した。
「ひゃんっ！」
調子外れな悲鳴と共に、サイオンの乱舞が収まった。
「な、何するのよっ！」
床にへたり込んだまま、赤い顔で達也を詰る花音の両目は、苦痛ではない原因で潤んでいた。
「……予想以上の効き目でしたね」
八雲譲りの点穴術。
背中にある「快感のツボ」――今朝教わったばかりだった――を突いた己の人差し指を、繁々と見ながら嘯くように答えて花音を益々赤面させた後、達也は表情を改めた。
「千代田先輩、風紀委員が自ら騒動を起こしてどうするんですか」
「うっ……だって……」
「だって、ではありません。いいですか、セクハラを受けた場合は後で懲罰委員会に訴追すればいいんです。
風紀委員の証言は原則として単独で証拠採用されるんですから」
「おいっ！？」
いきなりの風雲急を告げる展開に、慌てて桐原が口を挿もうとするが、達也も花音も目を向けさえしなかった。
「い・い・で・す・か？　こんな瞬間湯沸し機みたいな真似は、今後慎んで下さい」
「……分かったわよ」
拗ねた顔で目を背けた花音は、「……今の司波君のもセクハラなんじゃ……？」という紗耶香の呟きに気付かなかった。
「そう言えば生徒会長選挙も、もうすぐよね？」
ようやくカオスな状況が収まったところで、風紀委員長後任の話

から連想したのか、紗耶香が本日二度目（達也にとって、ということだ）の話題を切り出した。
「月末だろ？　もうすぐ、って言や、もうすぐだが」
「服部君と中条さんの一騎討ち、って言われてるね」
同じ二年生故か、一科だ二科だに拘りがない故か、花音もすぐ、フレンドリーに会話へ加わった。
「いや、服部は出ないぜ」
達也にとってこの話題は本日二度目、だが、今回、新事実が発覚した。
「えっ、そうなの？」
「ああ、服部のヤツは、部活連の方で次の会頭に推されてんだよ。本人もその気で、会長選挙には出ないって言ってたぜ」
「へぇ～、服部君がねぇ……
だけどまあ、順当かな。部活連の方は腕力（ウデヂカラ）が無いと務まらないもんね」
花音が納得、といった態で頷いている。
言われてみれば確かに、部活連は生徒会より荒っぽいイメージがある。
ただでさえ引き抜きとか場所取りとかで揉める要素が多いのだ。
今は克人が睨みを利かせているから大した騒動も起こらないが、並大抵では同じようには行かないだろう。
しかし――と、達也は思う。
これで次期生徒会長の最有力候補が、二人とも選挙に出ないことになった。
次の生徒会長は、誰になるのだろうか……

◇◆◇◆◇◆◇

パトロール終了後の帰り道。
生徒会が終わった深雪。

クラブが終わったレオ、エリカ、美月、雫。
実験室で自主トレを終えた幹比古。
図書室で（表向き）雫を待っていたほのか。
達也はいつものメンバーと久し振りに合流し、駅までの道の途中にある喫茶店でテーブルを囲んでいた。
そして、何時の間にかまたしても、生徒会長選挙の話題になった。
「う～ん……正直言って、チョッと頼りねえかなぁ」
レオはあずさに厳しい意見。
「でも実力はピカイチ」
「生徒会長は、優しい人の方がいいような気がします」
雫と美月は、あずさを支持する派のようだ。
「とにかく、服部先輩の可能性は完全に消えたんだよね？」
「ああ。本人から聞いたらしいから間違いないだろう。いくら会長でも、部活連の次期会頭に決まった人間を横取りできないだろうからな」
「そうねぇ……いくらあの人たちでも、十文字会頭には敵わないような気がするな」
「ではやはり、中条先輩が立候補するしかないのではありませんか？」
「でも本人はやりたくない、って言ってるんでしょ？
……そうだ、深雪が立候補しなさいよ！」
「チョッとエリカ、何を言い出すの？」
予想外の台詞に、深雪が目を丸くした。
だがエリカは意外と、自分の思い付きが気に入っているようだ。
「別に一年生が生徒会長になっちゃダメ、って規則がある訳じゃないんでしょ？
深雪はミラージの本戦でも優勝してるんだし、実力も知名度もバッチリだと思うけどな」
「無茶言わないで。
大体、高校生の『実力』は魔法力だけで測られるものではないわ

よ？」
「学力だったら達也くんがいるじゃん。
生徒会長になったら役員を自由に任命できるんだよ」
「そうですね。七草会長は、一科生縛りのルールを廃止するって仰ってましたし」
「美月まで……」
表面的には窘める台詞だが、深雪の声には揺らぎが感じられた。
「そーそー。
達也くんを風紀委員会から引き抜くことだって出来るんだよ……」
メフィストフェレス（の少女版）の様なエリカの囁きに、深雪は目に見えて動揺した。
「逆に達也が生徒会長になってもいいんじゃない？」
「おっ、そりゃ面白そうだな」
幼馴染に張り合ったわけでもないだろうが、今度は幹比古が突拍子も無いことを言い出した。
悪乗り気味に同調するレオを呆れ顔で見遣り、達也は「それゃ無理だ」と言い切った。
「確かに深雪だったら一定の支持を得られるかもしれんが、俺に票が集まるはず無いだろ」
「でも達也さんは、九校戦優勝の立役者」
「いや、雫、それはな……百歩譲って優勝に貢献があったとしても、競技には一つしか出てないんだから。
裏方の仕事なんて表から見たって分からないって」
「でも私は、達也さんが立候補したら絶対投票します！」
「わたしもです、お兄様。
お兄様が選挙に出られるなら、わたしは応援演説でもビラ配りでも何でも致します」
両隣で微妙に張り合ってる深雪とほのかの熱気に当てられたのか、達也は軽い頭痛を覚えた。

間章〔生徒会長選挙編〕2（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

間章〔生徒会長選挙編〕2

新学期が始まって一週間が過ぎた。

いよいよ生徒会長選挙が公示されるとあって、関心の薄かった一年生（特にE組からH組）の間でも、誰が立候補するか、誰が有力か、といった話題が聞かれるようになっていた。

教室でクラスメイトと朝の挨拶を交わし、自席の端末を立ち上げたところで、達也は、先に来ていた幹比古に声を掛けられた。

「おはよう、達也」

「おはよう。いつも早いな」

「ハハッ、そうだね。

最近ようやく、朝の勤行に加えてもらえるようになったから、本当はもう少しゆっくりしたいんだけど……習慣かな」

勤行は元々仏門修行を指す言葉だが、神仏混淆の影響か、神道系の幹比古の実家でも「勤行」という言葉を使っている。「朝の勤行」とは要するに、早朝の修行のことだ。

幹比古は「加えてもらえるようになった」と表現したが、「また参加することが出来るようになった」が正しいということを、幹比古本人やエリカから聞いた話の断片から達也は把握していた。

着実に力を取り戻し、更に向上させている友人が、嬉しくもあり羨ましくもある。以前、摩利から一科生に転籍、というジョークを振られたことがあったが、幹比古は本当に二科生から一科生への転籍第一号になるかもしれないな、と達也は思った。

「ところで達也、変な事を訊くヤツだ、と思われるかもしれないけど……」

「変な事なのか？」

そんな身も蓋もないことを、という呟きが外野から聞こえたが、律儀に反応していると話が前に進まなくなるということは二人とも学習済みだったので、黙殺で足並みを揃えた。

「僕はそんなに変じゃないと思ってるんだけどね。
達也が生徒会長に立候補する、って本当かい？」
「……何だって？」
「いや、だから、達也が生徒会長に立候補する、って噂が流れているんだよ」
「噂……？」
先週、達也が立候補しては、と言い出したのは幹比古だったはずだ。
「僕じゃないよ！」
達也には特に目つきを鋭くしたつもりも無かったが、幹比古は身振り交じりの大慌てで潔白を主張した。
「昨日の放課後、実習室で甘楽（つづら）先生に訊かれたんだ。
司波達也が生徒会長に立候補するというのは本当か？、って」
甘楽教諭は魔法幾何学が専門で魔法工学にも造詣が深く、今は二年生を教えている。
本職は魔法大学の講師だ。
学界では優秀な若手研究員として知られ、助教授の座も近い、と評価されていたが、考え方――だけならともかく言動にも少々自由過ぎるところがあって、懲罰人事的な意味合いで附属高校に飛ばされた、のだが……本人は気にするどころか却って「自由に研究できる」と喜んでいる困り者だった。
そういう気質の所為か、彼は二科生に対して特に面倒見のいい教師の一人であり、担当する学年が違うにも関らず、達也も何度か声を掛けられたことがあった。
「そんなデマが広まっているのか……？」
「あっ、やっぱりデマなんだ？」
拍子抜け、という顔をした幹比古に、達也は憮然とした表情で答えた。
「この前も言った通りだ。俺が立候補しても票が集まるとは思えないし、それ以前に立候補するつもりもない。

何故先生方の間でそんな噂が広がっているんだ？」

「さあ……？」

職員室の内情を幹比古が知っているはずもなく、案の定、彼には首を傾げることしか出来ない。

達也も答えを期待して訊いた訳ではなく、いうなれば愚痴の一種だ。

「先生だけじゃないぜ」

だが期待に反して、かなり嫌な方向の証言が耳を欹(そばだ)てていた傍聴人からもたらされた。

「部活中も、先輩たちがポツポツ噂してるな。

意外と皆、好意的だったぜ」

「あ、そういえばあたしも、昨日小耳に挟んだよ。一年の風紀委員が今度生徒会長選に出るって。

あれってどう考えても達也くんのことだよね？」

だよね？、と言われても達也としては頷きたくないが、諸々の情報を総合すると、そう考えざるを得ないだろう。

「私も……」

おいおい美月もか、と達也は机に突っ伏したくなった。

「昨日、カウンセリングの時に、チラッとそういう話題が出たような記憶があります」

が、噂話の相手を聞いて「前向きに対処してみよう」という気持ちが生じた。

具体的には、遥を問い詰めてみよう、という気持ちだ。それを「前向き」と表現して良いかどうかは、異論の残るところだと思われるが。

◇◆◇◆◇◆◇

達也の行動方針を「前向き」と表現することに対して、最も声を大にして異議を唱えたかったのは彼女だろう。

「まだ一時限目の途中よ」
カウンセラーにあるまじき態度だが、カウンセリングルームを訪れた達也に対して、遥は嫌そうに顔を顰めた。
どうやら、無頭竜の情報を騙し取った（！？）件で気分を害しているらしい。
――達也にしてみれば、買い取った情報の使い途まで拘束を受ける「契約」ではなかったのだが。
「一時限目の課題は終わらせました」
もっとも遥に嫌われたところで、達也はさしたる痛痒を感じない。お互いに秘密の一部を共有しているとはいえ、持っているカードは達也の方が強いのだから。
「……これだから優等生は」
「劣等生ですよ。実技試験は赤点ギリギリでしたから」
「……それ、君が言うと嫌味にしか聞こえないんだけど」
――お互い、遠慮が要らないくらい親密だ、という言い方も、もしかしたら出来るかもしれない。
「事実ですからね。
まあ、そんなことより、一つ悩んでいる事がありまして、相談に乗っていただきたいんです」
達也がそう切り出すと、遥は目を丸くして、条件反射なのか背筋をピンと伸ばした。
「何でも相談して頂戴」
中々立派なプロ意識だが、学習能力が少し不足している感もある。
達也の持ち込む「悩み事」がカウンセラーの守備範囲外であることを、遥はそろそろ学んでもいい頃だった。
「悩みというのは、月末の生徒会長選挙のことなんです」
「今回は立候補者の募集に難航しているらしいわね。
それで？　妹さんの出馬説得でも依頼されたの？」
「ああ、確かにそれも悩ましそうですね。
しかし本日相談に乗って頂きたいのは、別の『噂』に関してなん

です」
「噂？」
「ええ。
俺が生徒会長に立候補する、と職員室で噂になっているそうですが、何かお心当たりはありませんか？」
達也が真正面から遥の瞳を覗き込んでそう切り出すと、遥は一瞬、本当に一瞬だけ「しまった」という表情を見せた。
「昨日、柴田さんにその話をされたそうですね。
俺にも詳しいことを教えて頂きたいのですが」
どれほど短い時間であろうと、表情の変化を見逃すまいと凝視している目の前だ。
達也がそれを、見落とすはずも無かった。
「まさかとは思いますが、小野先生が率先して、噂をバラ撒いている、なんてことはありませんよね？」
遥の顔面筋が、目まぐるしく緊張と弛緩を繰り返した。
結局、表情として完成したのは、平凡な愛想笑いだったが。
「イヤねぇ、それこそ本当に『まさか』よ。
そんな無責任なコト、するはず無いじゃない」
唇の端が引き攣っている、ということもない。
彼女の表情作りは、顕著に進歩しているようだ。
「……一体どういう経緯でそんなデマが流れているんですか？」
「何だ……やっぱりデマなの。
まあ、そうよねぇ……司波君は矢面に立つより、黒幕・秘密工作タイプよね」
「否定はしません」
二人は顔を見合わせて、人の悪い笑みを交わした。
もしかしたら共通の師匠に影響されているのかもしれない。
だが、その程度の共通点は、馴れ合う理由にはならない。
「それで、一体どういう経緯で、俺が生徒会長に立候補するなんてデマが流れているんですか？」

「ゴメンなさい、私も良く知らないのよ」
「そうですか。
それでは知っている部分だけで結構です」
「……」
達也は至極当たり前、という顔で遥の答えを待っている。
此処でとぼけても何の益にもならない、と遥は悟った。
そもそも、訊かれていること自体は、とぼける必要の無いことなのだ。
「……誰が言い出したことなのかはハッキリしないんだけど……
一種の伝言ゲーム状態、と言えばいいのかな？
服部君が立候補しないらしい。
中条さんが立候補しないらしい。
生徒会は立候補者探しに困っているらしい。
司波さんなんか面白いんじゃない？
……という話が何時の間にか、
司波さんが立候補するらしい、
から、
司波君が立候補するらしい、
えっ、司波君って？
ほら、あの風紀委員の、
ああ、新人戦にも出てた？
ふ～ん、面白いんじゃない？
……という話に化けちゃっているのよ」
遥の話を聞いて、達也は椅子から滑り落ちてしまいそうなくらい、脱力してしまった。
「……そんないい加減な噂が、何故先生方の間で信じられているんでしょうか？」
まあ、噂というのは元来、無責任でいい加減なものなので、同級生や上級生が井戸端会議の肴にする程度ならば、達也もいちいち気にしない。いちいち気にしていては限がない、と弁えている。

しかし、職員室で、甘楽のように優秀な――少なくとも知的には優秀な――教師まで本気にしている節がある、というのは看過しかねる現象だった。

達也はまだ、誰かが意図的に情報を操作している可能性を捨てきれていなかった。

「本気にしてる人が多いのは、生徒より寧ろ先生の方ね。四月の顛末、生徒に対しては情報が統制されているけど、職員室は事実を知ってるから」

「……『ブランシュ』の件ですか？」

「そうよ。あの一件を司波君が中心になって解決した、ということを高く評価している先生も少なくないのよ」

不覚にも、予想外の話だった。

あの一件がそんなに目立っていたとは……自分の認識が甘かったと言わざるを得ない、と達也は思った。

「具体的にどうやったかは十文字君が握り潰しちゃったから分からないけど、力ずくでテロリストを追い払った、ということだけは分かってるから、その点も高く評価されているポイントね。

それで、魔法科高校の生徒会長というのは時に実力行使も求められる役職だから、それだけの制圧力を持っているなら一年生でも面白いんじゃないか、って考えている先生、結構いるわよ？」

……拙いことになっている、と達也は思った。

遥に謝辞を告げながら、何とかしなければ、と達也は考えた。

――カウンセリングルームを出て行く直前に、情報収集の手段については詮索しない、と付け加えることも忘れなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

しかし、実態の無い噂話に打てる手立てなど限られており、しかもそれは彼の一存で実行出来る類のものではなかった。

だから、事態を打開する足掛かりになる、という意味では、彼女

の来訪は歓迎すべきこと、なのかもしれなかった。
――そういう風に考えて自分を慰めてみても、今この時の煩わしさは少しも目減りしてくれなかったが。
一クラス二十五人というのは結構少人数だ。誰が何をしているのか、一目で把握できる程度には。
だから、と言うべきか、それまで彼と授業開始前の雑談をしていた四人以外の二十人が、一人の例外も無くこちらを窺い見ながらヒソヒソと噂話をしているのが嫌でも分かってしまう。
断片的に「やっぱり」とか「会長」とか「選挙」とかの単語が漏れ聞こえて来る。
居心地の悪いこと、この上なかった。
「達也くん、お願い。チョッと時間を貰いたいんだけど」
一年生の教室に堂々と入ってきて（と言っても、この時代、上級生はそんなことを余り気にしないものだが）、椅子に座ったまま向き直った彼の前で立ち止まるや否や、可愛らしく（！）目の前で両手を合わせて、真由美はそんなことを言い出した。
彼女の背後で鈴音が呆れた顔をしているのは、この際、横に置いておく。
達也はディスプレイの隅に表示されているデジタル時計にチラリと目を走らせた。
二時限目の開始迄、休み時間は残り五分だ。
二人が三年生の教室へ戻る時間を考えると、話をする時間は一分程度しかない。
「生徒会の公務ということにしておけば、減点されることは無いから」
無言の問い掛けを読み取って、手を合わせたまま真由美は答えた。
ただ、合わせた位置は微妙に下がって来ており、このままだと「合掌」が「乙女の祈り」に変化しそうな、嫌な兆候があった。
胸の前で両手を組んで、瞳を潤ませて、くらいの芸当は、真由美ならばやりかねない。

二時限目は一時限目に引き続き、端末を使った座学だ。二十分や三十分席を外したところで、達也には何の差し支えも無い。
達也は友人たちに目配せして席を立ち、真由美に向かって軽く会釈した。
真由美は入れ替わるように達也の机の前に立つと、生徒会長特権が書き込まれた自分のＩＤカードをリーダーに翳した。

◇◆◇◆◇◆◇

連行された先は生徒会室。
どうせ昼食時にはここに集まるのだが、と考えて、何故、今、ここに連れて来られたのかを、達也は理解した。
「授業中にすみません。
もう日が無いものですから」
鈴音に謝罪されて、達也は「いえ、構いません」と首を振った。
「ありがとう。そう言ってくれると助かるわ」
ふう～、と大袈裟に息をついて、真由美が本題を切り出した。
「実は、今度の生徒会選挙のことなんだけど……」
予想通りの用件。
達也の回答は、既に決まっている。
「深雪には、まだ早いと思います」
「深雪さんに……って、何故分かったの？」
目を丸くして「まさか、読心術？」とあたふたしている真由美に、達也は苦笑しながらタネを明かした。
「昼休みではなく、わざわざ授業中に連れ出したのは、深雪のいないところで相談をしたかったからでしょう？
ならば時期的に考えて、生徒会長選挙に深雪の立候補を、というお話だと考えました」
達也は別に、推理力を誇示する為に台詞を先取りしたのではない。
真由美一人ならばともかく、鈴音とのタッグが相手では、出鼻を

挫いておかないとこちらが説き伏せられてしまう、と恐れたのだ。
先制攻撃の狙いは今のところ的中している。
相手が――特に鈴音が態勢を立て直す前に、達也としては畳み掛けておかなければならない。
「一年生の生徒会長という例が世間的に皆無ということは無いでしょう。
ですが、深雪にはまだ早過ぎます。
アイツにはまだ、組織のトップは務まりません」
「……中学校時代は、生徒会長のような役職には就かなかったのですか？」
「俺が止めました」
「しっかりしている様に見えるけど……」
「深雪はまだ子供です。
俺が世話を焼き過ぎるという面もあるのかもしれませんが。
アイツはまだ、自分を上手くコントロール出来ていない。
せめて、魔法を暴走させるようなことが無くならなければ」
真由美も鈴音も色々と言いたい事がありそうな顔をしていたが――主に、「世話を焼き過ぎ」なのは「かもしれない」じゃなくて「事実」、と言いたかったのだが――魔法を暴走させるという欠点は、生徒会長として目を瞑っていられるものではない、という指摘に反論は出来なかった。
「――でも、困ったわね。
明日には選挙が公示されるのに、立候補者がいないなんて……」
「立候補の締め切り迄は、一週間あると思っていましたが？」
それまでに立候補者が現れればいいのではないか？　という達也の「そもそも論」に、真由美は暗い顔で首を振った。
「次期会長候補の絞り込みも生徒会の役目なのよ。
そうじゃないと、候補者が乱立して収拾がつかなくなるから」
「……候補者が大勢立つのは選挙のあり方として健全だと思いますが」

「例えそれが、魔法の撃ち合いに発展しても？
相手は生徒会長になろうという猛者ぞろいよ？」
確かにそんなことになったら、新入生勧誘週間以上の大騒動だろう。
「……幾ら何でもそれは……それこそ、生徒会長になろうという人たちですよ？」
しかし生徒会長になろうというのだから、ああいう騒ぎを起こさせないようにする側のはずだ。
「甘いわね、達也くん」
だが達也の常識論は、真由美によってバッサリ切り捨てられた。
「当校の生徒会長には大きな権限がありますし、卒業後も高く評価されますから。
現に四年前、『民主的で自由な選挙』を標榜した当時の生徒会は、重傷者が二桁に達した時点で『自由な選挙』の看板を下ろし、生徒会長が副会長を次期会長に強く推薦することでようやく事態を収拾した、という記録が残っています」
「……何処の発展途上国にあるんですか、この学校は」
「魔法という大きな力を持って完全な自制心を発揮できる程、高校生は大人じゃない、ってことよ。
だから、ね？　達也くんから見ればまだまだ子供なのかもしれないけど、深雪さんだってきっと大丈夫よ。
地位が人を育てる、って言葉もあるんだし」
そう来たか、と達也は思った。
伊達に一年、生徒会長は務めていないな、と思わせる中々の粘り腰だ。
しかし――
「深雪に拘らなくても、中条先輩が立候補すれば済む話だと思いますが？
順番から言っても実績から言っても、次の生徒会長は中条先輩の方が相応しいのでは？」

達也がこう指摘すると、真由美は苦い顔で黙り込んでしまった。
「……確かにその通りなのですが……」
鈴音も言葉が続かない様子だった。
そう、これは、言われなくても分かり切った事なのだ。
あずさがどうしても首を縦に振らないから、達也のところにこんな話が持込まれたのだということは、改めて説明するまでも無く明白だった。
だが達也の次の台詞は、真由美にも鈴音にも完全に予想外だった。
「――何なら、俺が中条先輩を説得しましょうか？」
「えっ？　……達也くんがあーちゃんを説得してくれるの？」
「ええ」
真由美は意外過ぎてどんな顔をしていいか分からない、という様子だったが、ジワジワと達也の言葉が意識へ浸透して行ったのか、不意に、ガッシリと彼の手を掴んだ。
「本当にやってくれるの？
だったら是非！
是非お願い！
ヤッパリ達也くんは頼りになるわ！」
彼の手を掴んだままブンブンと上下に振り回し始めた真由美に、達也と鈴音は顔を見合わせて苦笑いを浮かべた。

◇◆◇◆◇◆◇

その日のランチタイムは、小動物的な危険予知が働いたのか、あずさは生徒会室に来なかった。
この分では放課後も何かと理由をつけて休むかもしれない、と考えた達也は、五時限目終了直後、あずさの教室に乗り込むことにした。（魔法科高校の時制は午前三時限、午後ニ時限の五時限制）
教室の出入り口から中の様子を窺う。
あずさはそそくさと帰り支度をしているところだった。

彼女としては捕まる前に逃げ出す算段だったのだろうが、授業時間の最後まで端末の前から離れない生真面目さが災いしたようだ。

彼と一緒ならばルールの棚上げを厭わない――重大犯罪に手を染めることすら躊躇わないだろう――妹を引き連れて、達也は２－Ａの教室に踏み込んだ。

何だコイツ、という視線が、主に男子生徒から達也へ向けられたが、下級生が教室に入って来ただけで突っ掛かっていく様な幼稚なメンタリティの持ち主は流石にいなかった。――女子生徒から達也へ向けられた、ブランド物を品定めするような興味津々たる視線の圧力を前にして、直接的な行動に出ることは困難だった、という事情もあったようだが。

達也は可愛げ無く、両方の視線を黙殺して、真っ直ぐあずさの席へ向かった。

あずさは途中で達也が歩み寄ってくるのに気付いていたが、「逃げ出すのも変だし」と迷っている内に目の前へ立たれてしまった。おどおどした愛想笑いを浮かべながら、あずさが立ち上がった。その手にはしっかり鞄が握られていたが、足は動かなかった。

達也とあずさの身長差は約三十センチ。

普段は威圧感を与えないよう距離を置いて相対するし、近くで話をするときは腰を下すようにしているが、今は敢えて、間近で見下ろすようにポジションを取っている。

顔には爽やかな（？）笑みを浮かべているが、達也の目は、あずさの瞳を射竦めて逃さなかった。

「中条先輩」

達也の容姿は飛び抜けて整っている訳ではなく、声も聞き惚れるほどの美声ではない。

だが戦闘訓練で鍛えられた喉と肺活量のお陰か、徹りが良く深みのある声をしている。

若い女の子であれば、「渋い」とか「大人っぽい」とかいう感じ方をするかもしれない声だ。

「少しご相談したいことがあるんですが」
そして気の弱い少女であれば、抗い難い圧力を感じるかもしれない声だ。
「あの、わたし、今日はチョッと……」
「それほどお手間は取らせませんから」
それでも何とか逃げ道を探すあずさの退路を断ち切るように、少しばかり語調を強めて達也は言葉を重ねた。
思い掛けない強引さにあずさが目を白黒させる一方で、二人を見ていたあずさのクラスメイトたち（主に女子生徒）は目と目の会話からヒソヒソ話に移行していた。
断片的に漏れ聞こえてくる「意外と強引」とか「野生的」とか「チョッと良いかも」とかの台詞と共に、粘りけのある眼差しが投げ掛けられる。
兄に向けられた視線に意識的・無意識的な媚（こび）を感じて、深雪は急速に機嫌を傾けていた。
そして達也の背後から――つまり深雪から漂ってくる「不機嫌のオーラ」も、あずさには多大なプレッシャーになっていた。
「五分で結構ですから」
「……本当に、五分だけなら……」
キャッチセールスの常套文句じみた台詞に乗せられて、と言うより無理矢理頷かせられて、あずさは達也の背中に続いた。
手錠も引き縄も無く手を繋いでさえいなかったが、それはどう見ても「連行」されている構図だった。

◇◆◇◆◇◆◇

「手短に言います」
カフェの片隅の席で、腰を下すなり、達也はそう切り出した。
「中条先輩。会長選挙に立候補して下さい」
「やっぱりその話……会長からわたしを説得するよう、依頼された

んですか？」
「ええ」
最初は「あずさの説得」ではなく「深雪の説得」を依頼されたのだが、達也はその事をおくびにも出さなかった。
「……わたしには無理です。生徒会長なんて大役、務まりません」
膝の上に置いた両手をギュッと握り締め、俯いたまま首を横に振る。
あずさの態度は予想以上に頑なだった。
今にも泣き出しそうな気配がある。
追い詰め過ぎると、本当に泣き出してしまうかもしれない。否、「かもしれない」ではなく、その可能性が高い。
だがその程度で諦めるなら、達也も最初から説得を請け負ったりはしなかった。
「服部先輩は次期部活連会頭に推されているので、生徒会長選挙には立候補しないそうです。
中条先輩が立候補しなければ、生徒会によるコントロール無しの選挙になってしまいます」
「それでも良いじゃないですか。わたしより生徒会長に相応しい人は一杯います」
あずさの居直り気味な答えを受けて、達也は深々と溜息をついた。
「……」
「……」
沈黙が十秒も続かない内に、あずさはソワソワと落ち着かない素振りを見せ始めた。
チラリ、と達也に目を遣って、何の反応も得られない、と分かるや、今度はチラリと深雪の方を窺い見る。
深雪は感情の読めないアルカイックスマイルを浮かべてあずさを見詰めている。
その笑みに引き込まれていきそうな錯覚を覚えて、あずさは慌てて顔を逸らした。

達也の方へ。
そして、バッチリ目が合った。
あずさは「あうう」とでも言い出しそうな顔で硬直した。
達也はもう一度、溜息をついた。
「本当に、良いんですか？
――四年前の悲劇を再現することになっても」
悲劇だなんて大袈裟な、と傍で聞いていた深雪は思ったし、達也自身も大袈裟だと感じていた。
だがあずさは、と見ると、まともにショックを受けて顔を蒼褪めさせていた。
「当時は、重傷者が十名を超えたそうですね。詳しい記録は中条先輩の方が良くご存知だと思いますが」
可哀想に、あずさは動揺の余り唇が細かく震えていた。
しかし達也は、
「当時の映像記録も残っているんでしたっけ？
魔法による重傷……出来れば見たくない代物ですね」
更に追い討ちを掛けた。
生徒会書記の主な仕事は、生徒会の記録の管理。
それだけの大事件の記録であれば、整理する都合上、触りだけでも視聴しているはずだ。
案の定、あずさは唇だけでなく、身体ごとブルブル震え出した。
「歴史は繰り返すということでしょうか……」
「……わっ、わたしに、どうしろと……」
切羽詰った表情を浮かべるあずさに、カフェに着いてからずっと沈黙を守っていた深雪が、優しい声で答えた。
「中条先輩が生徒会長選挙に立候補されれば、そのような事態を招かずに済みますよ？
大丈夫です。先輩ならきっと上手くやれます」
あずさの眼差しが、大きく揺らいだ。
兄が脅し、妹が手を差し伸べる。

実に見事なコンビネーションだった。
「ああ、そう言えば」
それまでの深刻な――振りをした――表情を緩めて、如何にも「ふと思い出した」という顔で、達也が次の「飴」を持ち出した。
「再来週発売になるＦＬＴの飛行デバイスが、モニター用に二つ、手に入りまして……」
その言葉を聞くや否や、あずさの目が爛々と輝きだした。
蒼褪めていた顔に紅く血の気が差し、俯き加減だった身体をテーブルに乗り出して来た。
「……それって、もしかして、シルバー・モデルの飛行魔法特化型ＣＡＤですか？」
七月に発表されたばかりの飛行魔法を、最も効率的に起動できるという、あの、シルバー・モデルの最新作！？」
頷く達也の顔を、あずさは食い入る様に見詰めている。
彼女の眼差しは「欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい……」と訴えかけていた。
「まあ、モニター品ですから、シリアルナンバーが刻まれていない非売品ですが」
ゴクリ、とあずさの喉が動いた。
彼女の瞳は、熱病に浮かされているかの様に霞が掛かっていた。
「しかし、性能的には製品版と変わりませんので、生徒会長就任のお祝いにでも、と思っていたのですが」
「本当ですか！？」
あずさが歓声を上げて立ち上がった。
椅子が倒れて大きな音を立てたが、あずさは何事かと集まって来る視線をまるで気にしていなかった。
と言うより、気に掛ける精神的な余裕が無かった。
「ええ、中条先輩には深雪がお世話になっていますし、新生徒会長ご就任ともなれば、それ位のお祝いはしなければ、と考えていたのですが……」

「やりますっ！
誰が相手でも負けません！
わたし、絶対生徒会長に当選して見せます！」
まだ見ぬ対立候補の幻影を睨みつけて、あずさは力強く断言した。
そもそも立候補者がいない所為で自分がこうして脅し賺(すか)しの説得を受けていたということも、このまま行けば信任投票にしかならないということも、それ以前に自分が立候補を固辞していたということも、あずさの意識からすっかり飛び去っていた。
狂躁状態に陥ったあずさの前で、達也と深雪はこっそり頷き合った。

間章〔生徒会長選挙編〕3（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

間章〔生徒会長選挙編〕3

九月も月末週に入った。
まだまだ残暑の厳しい日も多いが、めっきり秋らしい風を感じる日も少しずつ増えている。
「だからと言って、校内の雰囲気が少しも熱くならないのもまた、どうかとは思いますが」
「何のこと？」
小首を傾げる真由美を、少しばかり目を細くして達也は見返した。
「会長選挙のことですよ」
いよいよ明日は生徒総会、そして生徒会長選挙が行われる。
真由美にとって、今日が生徒会長としてこの部屋で過ごす最後の日、の一日前、なのだが、少しも感傷的になっている様子は見られない。
それと同時に、次期生徒会長の座を争う熱い論戦やアピール合戦も見られなかった。
「……まあ、高校の生徒会長選挙なんて、そんなに盛り上がるものでもないのかもしれませんが……」
何の見返りもない、せいぜ内申書の点数が上がる程度の名誉職ならば、然して熱心になる必要はないだろう。
しかし、と言いつつも、盛り上がらない理由が別にあることを達也は知っていた。
立候補者が一人しかいない信任投票では、盛り上がりようがない。
しかも、信任されない可能性はゼロに等しい。
こうなった理由は、生徒会長の座に目の色を変える程の魅力はない、からでは、実はなかった。
魔法科高校の生徒会長も、社会的に見れば高校の生徒自治組織のトップに過ぎない。
権力も影響力も皆無に近い、名誉職。

その点は理科高校や文科高校の生徒会と本質的に変わらない。
しかし、その「名誉」のレベルが違った。
少し考えれば分かる、当然とのことだ。
魔法科高校は――国立魔法大学付属高校は、全国に九校しかないのだから。
国立の高校が九校しかないのではなく、魔法の高等教育を行える高校が九校しかない。
出来ない。
それ以上増やそうとしても、教師の数を確保できないのである。
一年度に九名しかいない、魔法科高校の生徒会長を務めた経歴を持つ魔法師。
その肩書きは、魔法師の道を進む限り、生涯ついて回ると言っても過言ではない。
非公式ながら、三等勲章に匹敵する名誉とさえ言われている。
無論、魔法師の世界でトップに立つ人々は二等勲章、一等勲章を手にすることも例外ではないのだが、高校生の段階でこれだけの終身名誉を得られるとなれば、本来ならば目の色が変わってしかるべきなのだ。
――そう、本来ならば。
実のところ、潜在的に生徒会長の座を望む生徒の数は少なくない、ではなくハッキリ言って、多い。
では何故、立候補者が一人しかいないのか。
そこには当然、人為的な力が働いていた。
達也は未だに、（一見）罪の無い笑顔で小首を傾げている現（明日まで）生徒会長へ目を遣った。
彼女は一体どういう顔で潜在的な対立候補に立候補を断念すべく「説得」して回ったのだろうか？
もしかしてこの笑顔で丸め込んだのだろうか。
それはそれで、まともに考え出すと怖い想像に思えた。
「ん～、今回は残念ながらあーちゃん一人になっちゃったからねぇ

……

でも一応信任投票前の立会演説はあるんだし、明日はそれなりに盛り上がると思うけど」

立候補者が一人では、正確に言えば「立会演説」ではないが、そんなつまらないツッコミをする趣味は、達也にも無かった。

視線を部屋の隅に転じると、昼食もそこそこに、あずさが真剣な顔で原稿と睨めっこしながらブツブツと小声で呟いている。

携帯端末のディスプレイではなく紙の原稿を出力して読み込んでいるあたり、確かに彼女は相当気合が入っているようだ。

ちなみに「賞品」の飛行デバイスは、彼女が立候補を届け出た時点で既に渡してある。

彼女のようなタイプは成功報酬で引っ張るよりも、報酬の先渡しでプレッシャーを与える方がテンションが長続きすると考えた結果だ。

そしてその目論見通り、あずさは変な義務感の虜になって、対立候補もいないのに「頑張らなきゃ、頑張らなきゃ」と自分に鞭打ってここまで来ている。

多分、演説が終わるまでこのテンションは維持されるだろう。

こちらの方は、心配無用であるようだった。

「どちらかと言えば、問題は生徒総会の方でしょう」

彼の心の声が聞こえた訳でもないだろうが、達也がまさに考えていたのと同じ事を鈴音が口にした。

鈴音は卓上端末のディスプレイを先程から眺めている。（彼女は本日、昼食抜きのようだ）

眼球が上下しているから、文書をスクロールして読んでいるのか、あるいは同じ文書を読み直してチェックしているのだろう。

「春の臨時集会であれだけ大見得を切ったからな。今更引っ込みはつかんだろう」

弁当箱を閉じながら、摩利がそう指摘すると、

「引っ込めるつもりなんて全く無いけどね」

同じく、後片付けをしながら真由美が答えた。
「もしかしたら暴走する方も出て来るのではないかと懸念していたのですが、杞憂だったようですね」
全員にお茶を配りながら、深雪が冗談めかした笑顔でそう言うと、今度は
「闇討ちか？　まあ我が校の生徒に、この女に挑むような身の程知らずはいないだろうさ」
摩利が合いの手を入れる。
「うわっ、失礼しちゃうわ。女の子相手に、酷いと思わない？」
達也に話を振った真由美の顔には、明らかに冗談だと分かる笑みが浮かんでいる。
自分相手に魔法戦を挑むような相手はいない、少なくともそのような実力者なら闇討ちなどという卑劣な真似はしないと、真由美も確信しているのだろう。
「そうですね……用心に越したことは無いと思いますよ」
しかし達也の回答は、彼女の想定と少し方向性が異なっていた。
「えっ？」
「会長は女の子、しかも美少女ですからね」
「そ、そう？」
真由美は年上の余裕を装って受け流そうとしたが、余り上手く行っているとは言えなかった。
目に動揺が表れている。
一方、深雪はムッとした顔をしながらも、何故兄がいきなりそんなことを言い出したのか、不審に思っているという側面の方が強く窺われた。
「急にどうしたんだ、そんなことを言って？」
不審に感じているのは深雪一人ではなかった。
よりストレートに疑問をぶつけたのは摩利だった。
「急でしたか？」
一部の生徒が会長の提案をつぶそうと根回ししていて、それがほ

とんど功を奏していないという事情を踏まえてのお話だと思っていたのですが」

「……確かにそういう噂も耳にしているが……」

摩利が困惑気味に回答したように、反対派は達也から見ても上手に立ち回っている。

彼が摩利よりも確度の高い情報を掴んでいるのは、某職員によるまともな手段でない情報収集のおかげだった。

「反対派にとっても、残された日は今日と明日しかありませんからね。

会長……

今日は、一人にならない方がいいでしょう」

「アハハ、やだな、達也くん。チョッと大袈裟じゃない？」

真由美は達也の発言を冗談として、軽く笑って済ませようとしたが、余り上手く行かなかった。

「何か掴んでいるのか……？」

冗談にしようとした真由美に乗ってこなかった達也へ、眉を顰めて摩利が訊ねた。

「残念ながら。

何か分かっているなら、寧ろ安心できるのですが」

「少し考え過ぎではありませんか？」

「ハハッ、そうですね」

鈴音に杞憂ではとの指摘を受け、達也も軽く笑って頷いた。

だが、それがポーズに過ぎないことは、誰の目にも明らかだった。

◇◆◇◆◇◆◇

「達也くん」

昼休みも残り僅かとなり、教室へ戻ろうとしていた達也は、生徒会室を出てすぐの廊下で摩利に呼び止められた。

達也と深雪が同時に振り向くと、どういう訳か摩利が軽く苦笑い

を浮かべた。
大方「仲の良い兄妹だ」とか考えたのだろうが、これこそ一々気にしていては限が無いことだ。
「何でしょうか？」
達也はさっさと用事を済ませるべく、摩利に続きを促した。
「少し相談したいことがあるんだ。本部へ来てくれないか」
彼女が「本部」と言う場合、訊き返すまでも無くそれは風紀委員会本部のことだ。
「今からですか？」
「手間は取らせない。ああ、そうだ。出来れば司波にも同席してもらえないだろうか」
達也と深雪は意外感に打たれて顔を見合わせた。
摩利が深雪に「用がある」とか「相談がある」とか言うのは、兄妹が記憶している限り初めてのことだった。
「深雪、時間は大丈夫か？」
「はい。四時限目は一般なので、多少遅れても問題はありません」
一般とは「一般科目」の略。数学や語学などの、魔法学・魔法実技以外の科目のことで、端末を使った個別学習で行われる。
ほぼ自習に等しいので、多少時間に遅れても、確かに問題は無い。
「お兄様はよろしいのですか？」
達也の方は「能力測定」と呼ばれる実技の小テストだ。
一科生の場合は教師が測定器を操作する（当然、アドバイスも行われる）が、二科生は生徒各自が勝手に測定器を操作して、時間内に合格点を出せば履修と認められる。
「――大丈夫です」
深雪に頷き、摩利に承諾の回答を返すと、摩利は「すまんな」と言って二人を追い越し、階段へと足を進めた。
委員会本部へ行くには、生徒会室を通った方が近いにも関らず。

◇◆◇◆◇◆◇

半年前に比べると別人の様に、ならぬ別室の様に整理整頓された部屋で、半年前には無かった応接セットに、摩利と兄妹は向かい合わせで腰を下ろした。（ちなみにこの応接セットは部屋が物で埋まっていた為に倉庫行きとなっていた訊問、もとい、事情聴取席だったりする）

「――さて、君達兄妹のことだ。多分、予想できてると思うが」

摩利の勿体を付けた前置きに、達也は「おやっ？」と思った。

微妙な緊張が彼女から伝わって来るのだ。

まさか、深雪がいるから、という理由でもあるまい。

生徒会室では毎日のように顔を合わせている間柄だ。言葉を交わす機会は何故か少ないとはいえ、上級生の摩利の方が今更緊張しなければならない理由は無い。

「……相談したいのは、真由美のことだ。

実はあたしも、さっき達也君が指摘したのと同じ懸念を抱いている」

「生徒会役員一科生限定の廃止案反対派の件ですか？」

摩利が緊張している理由が見えぬまま、達也は相槌を打った。

「そうだ。

……あたしも、反対派が大人し過ぎる、と思う。

春の集会では雰囲気に呑まれたのか、表立った反対者は見られなかったが、真由美の提案に心情的な反発を覚えているヤツは決して少なくない……はずだ。

同じ一校生同士、こういう事は考えたくないんだが、平和的な裏工作が上手く行かずに、暴力的な裏工作に走るヤツが出て来るんじゃないか、ということは十分警戒しなければならないと思う」

「あり得る話ですね」

そう考える事に躊躇も嫌悪も持たない達也は、暗い表情の摩利に向かい、あっさりと頷いた。

「真由美は――人が好いと言うかお嬢様育ちと言うか、そういう『人の悪意』に疎いところがある。窮鼠猫を噛む、という心情も、アイツには理解できないだろう」

ふむ、と達也は心中、頷いた。

摩利はどうやら、照れているのではないだろうか。

この二人の憎まれ口の応酬は仲が良い証拠、というのは傍から見ていれば明々白々だから、摩利が真由美の心配をするのは達也からしてみれば「当たり前」のことなのだが、摩利はそう思っていないらしい。

「さっきも……達也くんの警告を、余り真面目に受け取っていなかったようだしな……

真由美には『マルチスコープ』の特殊スキルがあるから、周囲を警戒していればアイツに闇討ちを喰らわせられるヤツなぞいないだろうが、あの能力はアクティブスキャンでパッシブな感知能力ではないから、警戒心が欠けていては宝の持ち腐れだ」

「……はあ」

さて、それで摩利は、自分たちに何をさせたいのだろう、と達也は思った。

「あっ、と……すまん。埒の無い話になっているな……

それで、だ。

君たち二人に頼みたいのは……今日は真由美と一緒に下校してもらえないだろうか」

「――会長を家まで送って行け、ということですか？」

「いや、別に家まで送らなくても――いや、出来れば、そうしてもらえるとありがたい。

学校にいる間は心配ない、と思う。教室では大勢の取り巻きに囲まれているし、生徒会室には市原も服部もいる。

一番気になるのは下校時なんだ。

あの女は何故か、学校の外で取り巻きを近づけようとしない」

「十師族の直系だからじゃないですか？」

達也が何気なく挿んだ相槌に、摩利は「今まで考えたことが無かった」と表情で語った。
「……そういうものなのか？」
「さあ？　俺は十師族じゃないんで、単なる想像ですけど」
「いや、それが当たりかもしれんな……」
……ともかく、真由美は大体一人で下校する。
事故に見せかけるにしても、校内より簡単だ。
こういう時期でなければ服部に声を掛けるんだが、アイツは生徒会が終わった後、部活連の方で色々と準備があるようだし……そういう事情で、達也くん、君に頼みたい。
最強の対抗魔法『術式解体』を持つ君なら、どんな闇討ちを仕掛けられても大丈夫だろう？」
「お任せ下さい。兄でしたら間違いありません」
深雪が妙に張り切った合いの手を入れた為に、「何故ご自分が一緒に下校しないんですか？」という意地の悪い達也の質問は不発に終わった。
その代わり、と言っては何だが、達也はニヤニヤと人の悪い笑みを浮かべて摩利を見詰めた。
「な、何だ？　何か言いたいことがあるのか」
「いえ、別に」
「他意は無いぞ。
今アイツに怪我をされると、色々と都合が悪いし、自分でもそれが分かっているクセに危なっかしいというか……
別にあたしは、アイツのことを心配しているとかではなくてだな」
言い訳に一所懸命な摩利を見て、「何というツンデレ」と達也が思った——かどうかは、定かでない。

◇◆◇◆◇◆◇

「——ご苦労様。これで明日の準備は万全ね？」

「はい。資料は全て整いました」
「会場のチェックも完了しています。
……会長、誠に心苦しいのですが……」
「ハイ、はんぞーくん、ご苦労様。
こっちはもう上がっても構わないわよ」
「すみません、会長……」
「いいって。
あーちゃんも明日に備えて、もう上がりにしなさい」
心苦しそうに、それ以上に心残りな感じで部活連棟へ向かう服部に続いて、慌しく荷物を纏めて慌しく「失礼します」と挨拶をしたたあずさが、生徒会室を後にした。
「深雪さんも、今日はもういいわよ」
二年生二人が帰っても（正確には、帰ったのはあずさだけだが）、何故か席を立とうとしない深雪にも、真由美は同じように声を掛けた、が、
「よろしければ、もう少しこちらで待たせて頂きたいのですが」
深雪からは珍しい答えが返ってきた。
「達也くん？」
「ええ。
電波の届かない所にいるみたいで、連絡がつかないものですから」
「電波の届かない所、って……」
「もしかしたら、地下資料庫ではありませんか？」
首を捻った真由美に鈴音が耳打ちすると（と言っても、深雪にも聞こえる程度の声量だったが）、真由美は「ああ」という顔で頷いた。
「あの秘境ね……一旦あそこに篭ったら、確かに連絡つかなくなるわよねぇ……
いいわよ。私はもう少し片付けてから帰るつもりだし。
あっ、リンちゃんはもう帰っちゃって。今日は外せない用事があるのでしょう？」

「……ええ。すみません、会長」
「大丈夫。その分、明日働いてもらうから」
真由美の、思いやりがあるのか無いのか、疑ってみたくなるような答えに微かな笑みを溢して、鈴音は無言で一礼した。
二人きりになった生徒会室で、深雪と真由美は黙々とデスクに向かう。
暫しの後、ちょうど真由美が大きく伸びをしたところで、関係者の（つまり入退室管理システムにＩＤカードが登録されている者の）入室を告げる電子音が鳴った。
深雪が立ち上がって目を向ける。
「待たせたね」
彼女の予想に違わず、入ってきたのは達也だった。
「いえ、そのようなことは」
嬉しそうに、小走りで駆け寄った深雪を見て、真由美は少し呆れ気味の笑みを浮かべた。
「今更だけど……本当に仲が良いのね、貴方たち」
「おや、会長。お一人ですか？」
「スルーされちゃったか……別に良いけど。
ええ、今日はもう、深雪さんと二人よ」
真由美も今更、達也のふてぶてしさにペースを乱したりはしない。いつもの調子でサラッと切り替えた。
「手伝いましょうか？」
「あら、珍しい」
しかし次の一言には、結構本気で驚いたようだ。
「雪でも降るんじゃないかしら」
「俺には無理ですが……妹には造作も無いことですよ。
深雪、会長が雪をご所望だそうだ」
「承りました。
それでは、如何ほどに致しましょうか、お兄様？」
「そうだなぁ……十センチも積もれば十分じゃないか？」

「待った！　スト～ップ！　雪なんて降らせなくて良いから！」
最初は冗談だと思って放置していた真由美だったが、二人の表情が余りにも大真面目なので「万が一」という焦慮に駆られて、大慌てで止めに入った。
「まったく……おちおち冗談も言えないわ」
「当然冗談だったんですが？」
にこりともニヤリとも笑わず釈明した達也へ、真由美は精一杯の不信感を込めた眼差しを向けた。が、全く効果が無いのを見て「やれやれ」とばかり肩を竦めた。
彼女も随分、達也のスタイルに慣れたようだ。――お互い様、ではあるが。
「冗談はさておき」
真由美がジロリと達也を睨め上げたが、達也は当然のようにスルーした。
「そろそろ暗くなってきますし、作業が残っているならお手伝いしますが」
カレンダーは既に秋分を過ぎている。「そろそろ暗くなる」というのは誇張でもなんでもなかった。
とりあえず（？）達也が善意で言っているらしいと理解して（もしかしたら「誤解して」かもしれないが）、真由美も表情を和らげた。
「ん……私も、もう帰ることにするからいいわ。気を遣ってくれてアリガトね」
「そうですか」
「では会長、駅までご一緒しませんか？」
達也があっさり引き下がった、と思ったら、今度は深雪のアプローチ。
珍しいこともあるものね、と思いながらも、真由美の顔は自然に綻んでいた。
「みんなと一緒じゃないの？」

「こんな時間ですからね。
『地下』の探索に時間が掛かることは最初から分かっていましたし、あいつらには先に帰ってもらいました」
「……そういえば資料庫で何を探していたの？」
「『賢者の石』に関する古式魔法の文献を探していました。データベース化された文献の中には目ぼしい物が無かったものですから」
「……随分マニアック、いえ、専門的な調べ物ね」
「才能の不足を道具で補えないか、と思いまして」
「そ、そう……？」
思い掛けなく深刻な動機に、真由美は怯んでしまった。
「……って、『術式解体』を使える魔法師が何言ってんだか。
あの魔法が使えるだけでも、警察とか国防軍とかあちこちから引っ張りダコでしょ」
だがすぐに憮然とした表情で頬を膨らませた。
達也が自分の魔法の才能に対して屈折した思いを抱えているのは確かだ、と真由美は知っている。だがそれは、一般的な「劣等感」とは少し趣を異にするもので、「劣等生」というレッテルによって色々と機会（チャンス）を制限される社会制度にうんざりしているだけだ、ということも知っている。
それをついつい忘れて、彼に当たり前の同情をしてしまった自分が、何だか手玉に取られたような気がして真由美は少しばかり腹立たしかった。
国際基準に基づく魔法師ランクは高位を望めないかもしれないが、社会的な（職業的な）需要を考えれば、特定分野に傑出した技能を持つ彼のような人材の方が引く手数多（あまた）なのだ。
「達也くんさ、あんまり自分のことを『劣等生』だって強調しない方が良いと思うよ。
キミは単なる成績優秀者なんて目じゃない実績を残しているんだから……
そんな調子だと、一科生からも二科生からも、両方から嫉妬され

ちゃうことにもなりかねないわよ」
「強調しているつもりは無いんですが……」
達也としては、自分から「劣等生」と名乗るような自虐趣味を持ち合わせているつもりも発揮しているつもりも全く無かった。今も調べ物の理由を（間接的に）訊かれたから答えただけだ。――もっとも、「賢者の石」について調べている本当の理由は「ブースター」絡みであって才能不足云々は真意を隠すためのもっともらしい偽りなのだが。
それはともかくとして、自分から「劣等生」だと強調しているつもりは、達也には無い。
だが、
「……いえ、気をつけます」
結局彼は、こう答えた。
真由美が心配してくれているのだ、と解らない達也ではなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

校門から駅へ、普段はレオやエリカたちと連れ立って帰る一本道を、真由美と兄妹の三人で歩く。
深雪が少し緊張気味なのは、まあ理解できるとして、真由美まで緊張気味なのは微笑ましいと言うべきだろうか。
鞄を身体の前に両手で持ち、目を伏せ気味にして黙りこくったまま歩く姿は「何処のお嬢様？」と訊きたくなる趣があった。――実際に真由美はお嬢様なのだが。
達也も自分から話題を提供するほうではない。特に「他愛も無いお喋り」は苦手分野だ。加えて今は、反対派の襲撃を警戒中。
三人はほとんど会話の無いまま、駅までの道程の七割を消化しようとしていた。
「……ねえ、達也くん」
「何でしょう」

そういう状態だったから、真由美にいきなり話し掛けられた時には、何事かと達也も少し身構えてしまった。
「本当は私が帰るのを、二人で待っていてくれたんじゃないの？」
しかし、身構えていても、この指摘には驚かされてしまった。
咄嗟に応えを返せない達也に頓着せず、独り言のように、真由美は言葉を続けた。
「摩利に何か言われたんじゃない？
反対派が襲ってくるかもしれないから、家まで送ってやってくれ、とか」
「……よくお分かりですね、会長」
正直に答えたのは、達也ではなく、深雪だった。
的のど真ん中を射抜いた推測に誤魔化し切れないと悟り、せめて「達也が白状したのではない」というアリバイ作り（？）で口を挟んだのだった。
「大丈夫よ」
真由美は深雪に向かって、クスリと笑って見せた。
「貴方達から真相を聞き出したなんて、摩利には言わないから」
何から何まですっかり見透かされて、深雪は恥ずかしげに俯いた。
「しかし何故、そんな事を？」
「家までついて来る必要は無い、って分かってもらう為よ。
あっ、勘違いしないでね。
迷惑、とかじゃないから」
達也は無言で頷いて、続きを促した。
「大方、私が一人で登下校しているのを無用心だ、って摩利は言ったんじゃない？
でも私がみんなと一緒に帰らないのは、もしもの時に巻き込まない為の用心なのよ」
「それは……今回に限らず、ということですか？」
「ええ。
自分で言うのもなんだけど、私って『お嬢様』だから営利目的と

か政治目的とかで狙われやすいのよね」
お嬢様、という言葉には自慢げな響きが欠片も無く、ただ自嘲的な色合いだけが込められていた。
「七草家は十師族結成当時から一度も枠外に落ちたことの無い名門ですから」
言外に「仕方がありません」と達也に言われ、真由美は苦い微笑を浮かべた。
「……まっ、そーゆーこと。
だから私は常に用心を怠らないよう教育されているし、何時でも魔法を発動できるように準備しているの」
左手を挙げ、袖をずらして顕わにした真由美のＣＡＤは、休止モードではなく待機モードになっていた。
「それにボディガードもついているし」
「えっ、そうなんですか？」
深雪がキョロキョロと左右を見回したが、彼女にはボディガードらしき人影を見つけられなかった。
「……駅で待たせているのよ。
通学路でボディガードを引き連れているのは、流石に恥ずかしいから」
「ああ、だから『家までついて来る必要は無い』なんですね……駅に着いたら、ボディガードが控えているから」
「そのとおり、よ」
「しかし何故、そんな事を教えてくれるんですか？」
詮の無い問いと分かっていたが、達也は好奇心を抑え切れなかった。
今の話が本当なら（嘘をつく理由は見当たらないが）、摩利も知らない個人的な事情であるはずだ。
「ウ～ン……達也くんと、深雪さんと、二人と一緒に帰りたかったから、かな？」
しかし、少しはにかんで答える真由美の表情を見て、達也は「拙

ったかな……」という予感を覚えた。
「わたしもですか？」
兄と予感を共有せず、小首を傾げた深雪に、真由美は「姉」のような笑みを向けた。
「ええ。
――去年の秋に生徒会長になって、最初の半年もそれなりに充実していたけど、この半年は私にとって本当に充実した時間だったから」
そして達也へ眼差しを移す。
「そして、それはきっと、二人のお陰だから」
「……過大評価だと思いますが」
達也が無表情に反論すると、真由美は余裕タップリの笑顔でクスッと笑った。
「最近分かって来たんだけど……
達也くんって、照れ屋さんよね」
能面のような硬い無表情で絶句した達也を見て、真由美は「堪え切れない」とばかりコロコロと笑い出した。
「そ、そーゆーところは歳相応なのかな？
時々十歳くらい年齢を誤魔化してるんじゃないかって感じることもあったんだけど」
真由美以外の知り合いにも、似たような年齢詐称疑惑を度々投げ掛けられている達也は、憮然とした顔で黙り込むことしか出来なかった。
涙が滲んでいた――笑い過ぎで、だ――目を人差し指で拭い、真由美は兄妹に晴々とした顔を向けた。
「……あーちゃんも、はんぞーくんも、とっても良い子達だけど、貴方達兄妹はきっと、私の高校時代一番の思い出になる素敵な後輩だから」
飛び切りの笑顔で微笑まれて、深雪も絶句してしまうことになった。

耳まで赤くなっているところが、兄とは異なっていたが。

◇◆◇◆◇◆◇

司波家は、と言っても父親は後妻の家に入り浸りだから（愛人ではなく正式に籍を入れているのだから一緒に暮らせば良さそうなものなのだが）、実質的に達也と深雪の、兄妹の家は、個人の住宅としてはかなり大きな方だ。

ただそれでも、御殿のような北山邸や七草邸（達也も深雪も、どちらもまだ実際に見たことは無い）に比べれば「個人住宅」のレベルでしかない。

もっとも、ただの個人住宅とも言えない。

地下には、大学の研究室レベルの魔法工学研究施設が埋まっている。（と表現すると何やら秘密基地っぽいが、単に一階と同じ床面積の地下室を丸々ラボに改造しただけだ）

その地下研究室からリビングに上がって来た達也は、珍しく疲れた様子で、ソファに深々と身体を埋めた。

親指と中指で両のこめかみを強く揉んで、一回、二回と頭を振る。

そのまま天井へ目を向けて、思考の制御を手放す。

湧き上がってきた雑念は、今日の夕方の記憶。

真由美を駅まで送って行って、彼女から紹介されたボディガードのこと。

真由美の護衛は、意外のことに男性だった。

年頃の女の子の護衛だから女性のボディガードに違いないと思い込んでいた達也は、正直、かなり驚いた。

確かに五十代も半ばを過ぎている老紳士なら、世間体を心配する必要は無いのかもしれないが。

その初老の紳士の印象は、ボディガードと言うよりは執事、執事と言うよりは「爺や」だった。

ただ背筋はピンと伸びており、身体も細身ながら引き締まってい

て、十分「現役」であることは一目見ただけで解った。
その特徴的な身のこなしは、礼儀正しさのオブラートに包まれていたが、軍務経験者、しかもかなりの長期間に亘って軍に籍を置き、制服組としてそれなりの地位にあったことを窺わせた。
ただ、それ自体は珍しいことでもない。
前世紀に劣らぬ戦乱の時代を経験した二十一世紀末、軍隊経験者だからといって差別するような愚か者は自分の方が社会から排除される。
元軍人の魔法師がその経験と技能を活かして良家のボディガードに収まったとしても、気になるような点は何処にも無い。
達也の意識に引っかかっているのは、そのボディガードの名前、正確には、苗字だった。
「お兄様、まだお休みにならないのですか？」
声を辿って目を向けると、リビングの入り口にピンクのパジャマを着た深雪が立っていた。
「深雪の方こそ、まだ起きていたのかい？
明日……いや、もう今日か。司会もしなければならないんだろ？」
深雪は今日の立会演説会の進行役を務めることになっている。これは例年、一年生の生徒会役員に与えられる仕事だ。
「少し喉が渇いてしまって……」
だから早く寝なさい、と言外に叱られた、と感じた深雪は、恐る恐る言い訳めいた台詞を口にして、上目遣いに達也の顔色を窺った。
「それじゃあ仕方ないね」
何処までも妹に甘い達也は、苦笑い気味に笑って頷いた。
途端にパアッと顔を輝かせて、小走りに近いスピードで、深雪が達也の隣にやって来た。
目で問いかける妹に、目で頷く兄。
深雪は嬉しそうに笑って、達也の隣に座った。
そろそろ朝晩は冷え込む時期だが、深雪のパジャマはまだ涼しげな夏用だ。半袖七分丈で、薄い生地は薄っすらと身体の線を浮かび

上がらせている。
夜更けに男と二人きりでいる格好ではなかったが、達也は敢えて何も言わなかった。
「何を考えていらしたのですか？」
じゃれ付くように顔を寄せて、深雪がそう訊ねて来た。
この無邪気な笑顔には些か不似合いな重さの話題だという自覚はあったが、少なからず疲れていた所為で、達也はつい、正直に答えてしまった。
「うん……七草先輩のボディガードのことなんだけど、一寸気になってね……」
達也がしまった、と思うより早く、深雪の顔からスッと笑みが消えた。
「名倉さん、というお名前でしたね」
真由美はあの老紳士を「名倉三郎」と紹介した。
「お兄様がお気になさるということは、もしや……『数字落ち（エクストラ）』なのですか……？」
一言で考えていたことを見抜かれてしまって、達也は苦笑いを浮かべた。
深雪がその可能性を考えていなかったのなら、気づかせなくてもよかったことだ。
だが気づいてしまった以上、曖昧なままにしておく訳には行かないだろう、と達也は思った。
「まさか、と思うんだけどね……十師族が、跡取りではないにしても直系の子供の護衛を任せる遣い手だ。
俺達のように仮の姓が与えられているのでないとしたら、『数字落ち』の可能性は否定できないと思う」
「四葉以外に仮の苗字を名乗らせるしきたりがある家は、無かったと思いますが……」
「それも分からない。
四葉のしきたりを他家が知らないのと同じように、他の九家、十

八家を含めれば二十七家に、四葉の知らない風習を持つ家があるかもしれない」

「しかし……それこそ叔母上ならともかく、何事にも体面を重んじる七草が、長女の護衛という本家にごく近いところで『数字落ち』を雇い入れるでしょうか？」

「体面を重んじる七草だからこそ、差別的な処遇をしないという建前論を重んじるのかもしれないよ」

「……なるほど……そういう考え方もあるのですね……」

数字落ち――エクストラ・ナンバーズ、略して「エクストラ」とも呼ばれる、「数字」を剥奪された魔法師の一族。

剥奪の理由は、時に反逆の罪、時に重大な任務失敗、時に「無能」の故。

かつて、魔法師が兵器であり実験体（サンプル）であった頃、「成功例」としてナンバーを与えられた魔法師が、「成功例」に相応しい成果を上げられなかった為に捺された烙印、それが「数字落ち」だ。

今では「数字落ち」という名称自体、公式に使用することは禁止されている。「数字落ち」であることを理由に差別的取扱いをすることは、魔法師のコミュニティにおいて重大な非違行為とされている。

しかし魔法科高校で二科生に対する差別がこれまで根絶されずに続いて来たように、それをもっと拡大、深刻化した形で、「数字落ち」に対する差別は隠然と魔法師の社会に居座り続けている。

達也たちの世代であれば、自分の家系が「数字落ち」であることを知らない者の方が、多分、多いだろう。親が隠してしまうからだ。

それ程根深く、彼らを「失敗作」「欠陥品」と見做す偏見は、魔法師の無意識に刷り込まれている。

だから、名倉が「七倉」から落ちた家系の出身であったとしたなら、その彼を娘のボディガードに採用した七草家当主の意図が達也は気になるのだった。

◇◆◇◆◇◆◇

時間はやや前後する。

日付が変わるまでまだ三時間ばかり残した時刻、掛け値無しに「大邸宅」と表現して差し支えの無い七草本宅の、庶民感覚から少しばかりかけ離れた豪華な浴室の豪華な浴槽にゆったりと身を沈めて、真由美はお湯の中の自分の身体を見下ろし軽く溜息をついた。

――貧弱なプロポーションだとは思わない。

――身長は結局、中学三年で止まってしまったが、妹たちも同じように小柄なので、これは遺伝的なものと諦めるしかない。

チャプン、と音を立てて、真由美は片腕と片脚をお湯の外に伸ばしてみた。

――背が低い割には手足が長いとブティックでもエステサロンでもよく言われる。

腕と脚を湯舟に戻して、そっと乳房に手を当てる。

――胸も身長の割りに大きいと言われるし、ウエストはどんな服でも苦労したことは無い。

――割とイケてる、と自分では思う。

――でも、「彼女」を前にすると、どんなに意識すまいと思っても、自信が揺らいでしまう。

――彼女に会うまで、あんな美少女は見たことが無かった。

――腕も脚も、不健康に見えないギリギリのバランスで、すんなりと長く細い。

――ウエストは折れそうに細く締まり、胸と腰周りは既に十分女らしい曲線を描いている。

――何より、ビックリするほど精確に、彼女の身体は左右が対称だ。
そもそも内臓の配置が左右非対称なのだから、人体が完全に左右対称になるなど、外見上もあり得ないのに。
――その所為か彼女は、生身の人間と思えない時もある。
――女の自分でも見惚れてしまうのだ。
――彼女を妹に持つ男の子は、他の女の子が色褪せて見えるのではないか、と思えてしまう。
――その、彼女の兄は。

真由美はまたしても、意識しないままに溜息をついた。

――彼は、本当に彼女と血のつながりがあるのかと疑ってしまうくらい、平凡な外見をしている。
――悪くは無い。
――だが精々、「まあまあね」程度。
――しかしその中身は、平凡には程遠い。
――優秀、と言うより、規格外。
――今の魔法師評価基準は、手間と時間をタップリ掛けて、世界から集められた学者が知恵を絞りあって作り上げたもの。
――彼の存在は、そのシステムに喧嘩を売っている。
――国際評価基準では、どんなに高く見積もってもCランク。
――それなのに、自分たちの前で積み上げる実績は、Aランク魔法師を凌駕するもの。
――職員室が頭を悩ますはずだ。
――何十年も続いた制度を根本的に組み替えて、「魔法科」と「魔法工学科」を新設しようというプランも、かなり現実味を帯びていると聞く。

真由美は苦笑いを浮かべて首を横に振った。

――それでも、彼の存在には対応しきれない。
――知能と知識が優れているだけならば、ここまで混乱させられることは無いのだから。
――高校一年生にして、使い手がほとんどいない最強の対抗魔法を使いこなし。
――クリティカルなはずの魔法を身に受けて、平然と戦闘を続行する。
――テロリストを潰したのも、事実上、彼一人の力だとも聞いている。
――「魔法力」と「魔法戦闘力」のアンバランス。
――いや、知識だけでも、単なるカリキュラム変更で対応できるかどうか。
――今日、名倉に引き会わせたのは、彼には黙っていたが、一種のテストだった。
――「ナクラ」という名前とその外見から、気付くかどうかのテスト。
――彼に名倉を紹介した時、一瞬、ほんの一瞬だけ、彼の目に動揺が走ったのを、全注意力を傾けていたお陰で見逃さなかった。
――彼は「ナクラ」の意味に気付いていた。
――その意味するところは、自分や十文字と同じくらい、現代魔法の「闇」に通じているということ。
――彼はただの魔法師ではない。
――名も無き家系の魔法師ではない。
――「シバ」達也。司波。シ波。四波。
――もしかしたら、彼もまた、「数字落ち」なのかもしれない……

のぼせかけた頭で、真由美はそう考えた。

間章〔生徒会長選挙編〕3（後書き）

お、終わらなかった……ｏｒｚ
申し訳ありません。
プロットのミスで間章全三話予定が全四話になってしまいました。
「生徒会長選挙編」は来週までお付き合い下さい。
また、頂戴したご感想は明日より順次お返事させていただきたいと思いますので、まことに勝手ですが少々お待ち下さい。

間章〔生徒会長選挙編〕４（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

間章〔生徒会長選挙編〕4

校内は朝から足が地についていない空気に覆われていた。
今日は午後の授業を全て潰して、生徒総会・立会演説会・投票が行われる。
クラス単位の集会さえほとんど無くなった現代の高校においては、十分に一大イベントだ。
それだけでなく今回の生徒総会は、生徒自治制度を大転換する提案が為される予定になっている。
賛成派、反対派の水面下の鬩ぎ合いは、実のところ夏休み前から始まっていた。
現生徒会長七草真由美の人気に加え、建前上反対のしにくい提案、新人戦モノリス・コードにおける二科生チームの活躍も影響したのか、数の上では賛成派が圧倒している。
だがそれでも尚、反対派であり続ける頑なさが、状況を察している人間には一層の危うさを感じさせ、それがますます学校を覆う雰囲気を落ち着きの無いものにしていた。

◇◆◇◆◇◆◇

「全員揃ったな？
配置の最終確認をするぞ」
午前の授業終了後、風紀委員全員が委員会本部に集められていた。
ローテーションを組んでバラバラに行動することの多い風紀委員が全員揃うことは滅多に無い。
生徒総会は風紀委員が一度に総動員される数少ない行事だった。
「委員会の持ち場は基本的に講堂内だ。
講堂の外はシステム監視になる。こちらは自治委員会がサポートする」

風紀委員は総勢九名。
この頭数で全校生徒五百六十名が集まる会場を警備しようというのだから、外部からの不審者に対処する余力は無い。また、それでなくても、外部から侵入した無頼漢の相手は、生徒の仕事ではなかった。
「大扉に私と千代田、通用口に辰巳と森崎……」
摩利の指示を聞きながら「いつに無く気合が入っているな」、と達也は思った。
一人称が「あたし」ではなく「私」になっている。風紀委員会という、いわば身内だけの会合では珍しいことだ。
「……演壇の上手が沢木、下手が司波、以上だ」
摩利を含めた全員が立ち上がり、確認の意を表す。
自分の持ち場は舞台袖。
もし、壇上の役員に襲い掛かろうという「跳ね上がり」が出た場合は、沢木と共に最終防衛線を務める、ということになるが……達也はほとんど心配していなかった。
昨日、真由美と一緒に下校してみて分かった。
真由美に襲い掛かるような無謀な人間は、第一高校の生徒にはいない。
と言うより、一高内で真由美に襲い掛かるのは無謀だと、上級生の、男子生徒ほど思い知っているはずだ……
「では早速配置に掛かれ。
司波、キミは少し残ってくれ」
二人きりになったところで、摩利はいつもの口調に戻った。
「早速だが達也くん、昨日はどうだった？」
何が訊きたいのか、改めて問い返す必要は無かった。
「三回、襲われ掛けました」
摩利の顔がキュッと引き締まった、が、
「俺が、ですけど」
次の言葉を聴いて、「はぁっ？」と言いたげな表情に変わった。

「いや、俺は少し、会長のことを甘く見ていたようです」
「……説明してもらっても構わないかね？」
「ファンクラブ、なんでしょうね、要するに」
しみじみと達也が告げた単語に、摩利は納得顔になった。
「つまり、勘違いされて嫉妬された、と？」
「深雪が一緒だったんですから、そんなシチュエーションじゃないことくらい、分かりそうなものですけど」
昨日のことを思い出すと、（精神的に）どっと疲れがぶり返して来る様な気がする。
「まあ、ＣＡＤを起動しただけで、それ以上の具体的な行動に出る思い切りは無かったようですが。
馬鹿な真似をして会長に嫌われたくも無かったでしょうし」
「なるほどな……」
「あの様な視線の十字砲火の中では、手出ししたくても出来ないでしょうね……
会長に一撃向けた時点で、袋叩きに遭うことは目に見えていますから」
いくら狂信者でも犬死は望まない。
自爆テロは敵（の協力者）を巻き添えに出来るから実行するのだ。
自分の居場所を教えるだけで防弾ガラスを撃ち抜けない、と分かっていながら狙撃を実行するスナイパーはいない。
心配していた自分が馬鹿みたいだ、という心情を共有した二人は、疲れの滲む笑みを交し合った。

◇◆◇◆◇◆◇

……という背景があって、達也のやる気はレベルゼロに近かった。
アリバイ作り、という以上の意味は無い生真面目な態度――の演技――で、演壇の下手、階段の脇に立つ。
考えてみれば、たかが高校の生徒会の選任資格の問題なのだ。「

生徒会長」という地位に大きな実利的意味があっても、「副会長」や「書記」の肩書きは卒業後に大した意味を持たない。第一高校の制度では、生徒会長がその気なら、副会長を二人選んだり書記を四人選んだりすることも可能なのだから、二科生が生徒会役員になれるかなれないかは面子の問題、プライドの問題でしかない。

しかも掛かっているのはかなり、ちっぽけなプライドだ。

（「俗世間」に毒され過ぎてるかな、俺は……）

理想の為に、金銭の為に、面子の為に、プライドの為に……人の命が割安で取引される世界にどっぷり浸かっている達也は、理性的な話し合いで価値観の相違を解消しようと大真面目に試みている目の前の「舞台」を、スクリーンを見ているような非現実感をもって眺めていた。

「……以上の理由を以て、私は生徒会役員の選任資格に関する制限の撤廃を提案します」

真由美の議案説明が終わったところで、三年生の列からサッと手が上がった。

見覚えの無い女子生徒が（つまり九校戦には参加していなかった、九校戦メンバーに選ばれるだけの実力が無かった生徒ということだ）質問席に立つ。

現代の集音マイクは日常会話を五十メートルの距離から拾い上げる性能を持つから、わざわざ質問席を設えること自体、形式、と言うか様式美に過ぎない。

そんな小道具、大道具の一つ一つが達也の視界からますます現実感を奪って行く。

「……建前としては……正論です……」

質問者、という名の反対派の言葉も途切れ途切れしか耳に入って来ない。

が、耳栓を使っている訳ではないので、厄介ごとを引き起こしそうな発言は無意識のフィルターを通って意識に届く。

「現実問題として、制度を変更する必要があるのですか？

つまり、生徒会役員に採用したい二科生がいるのですか？」
意図が見え透いた問い掛けに、達也は顔を顰めた。（質疑自体には部外者なので表情を隠す必要性を感じなかったのだ）
適当に誤魔化すのが吉、と達也は思ったのだが、真由美は何か考えがあるのか、それとも何も考えていないのか、真正面から質問に答えた。
「私は今日で生徒会長の座を退きます。よって私が新たな役員を任命することはありませんし、そのようなことは考えてもいません」
「しかし、次の生徒会長に意中の二科生を任命するよう働きかけることは出来るのでは？」
（「意中の」と来たか……）
随分表現が露骨になって来たな、と達也は感じた。
「私は院政を敷こうなどと思っていませんよ」
少しおどけた口調に、軽い笑い声が上がった。
「次の生徒会役員の任命は、次期生徒会長の専権事項です。一切介入するつもりはありません」
「ということは次の生徒会長に、傍で囲っておきたい二科生がいて、その意向を受けて今回、制度の変更を言い出した、ということですね？」
毒のこめられた言葉に講堂がざわめいた。「おいおい」と思ったのは達也だけではなかったようだ。
「お静かに願います」
凛とした声で注意を呼びかけたのは、進行を補佐する深雪だった。会長の真由美が質疑の当事者として立っている為、一時的に服部が進行役、深雪がその補佐役を務めているのである。（ちなみにこの学校の生徒総会には、中立を建前とする「議長」は置かれていない）
「……そのご質問に対する答えは『否（いいえ）』です。
今回この議案を提出したのは、私にとって今しか機会が無いからです。

対立の火種を後輩たちに残さないことが生徒会長の責務だと考えるからです」

達也は心の中で感嘆の声をあげた。

どうしてどうして、競技場の外でもこういう凛々しい顔が出来るらしい。

「実際に役員へ任命すべき二科生がいなければ、対立にはなりません」

一方、質問者――浅野、という名前だったはずだ――の方は意固地になってしまっているようだ、と達也は思った。

「候補者がいる、いないの問題ではありませんよ、浅野さん。制度は組織の考え方を示すものです。

二科生は生徒会役員になれないという制度は、本人の能力に関らず二科生を生徒会役員にしない、二科生には生徒会役員になる権利はないという生徒会の意思表明なんです。

そんな『選民思想』は誤っています」

随分思い切った表現を使ったな、と達也は感じたが、会場は大きな拍手に包まれていた。

それは必ずしも二科生の間からのみ起こったものではなかった。

「詭弁です！」

どんなに鈍感な人間でも、形勢不利を自覚せざるを得ない雰囲気が講堂を覆っている。

その中でまだ、と言うべきか、自然と、と言うべきか、浅野の口調はヒステリックなものになっていた。

「会長は、生徒会に入れたい二科生がいるから、資格制限を撤廃したいんでしょう！

本当の動機は依怙贔屓なんじゃないんですか！」

やけくそ気味に「そうだ！」という散発的な声が上がったが、たちまちブーイングの嵐に押し潰された。

嵐が引き起こした高波は質問者席にも押し寄せている。

「七草会長！

貴女の本当の目的は、そこにいる一年生を生徒会に入れることじゃないの!?」

それは多分、自暴自棄、破れかぶれの発言だった。

浅野の顔は引きつっていた。

だがその一言は、思い掛けないほど大きな効果を発揮した。

ブーイングの嵐がシンと静まる。

全校生徒の目が、真由美と達也の間を往復する。

真由美の顔が、微かに赤く染まっているのを見て「そんな顔をしては誤解を増幅するだけでしょう!」と達也は思ったが、不本意な注視に晒されている状態では、そんなツッコミも出来るはずはない。

事態を打開したのは、壇上から投げ掛けられた、冷ややかな一言だった。

「仰りたい事はそれだけですか?」

何時の間にか（多分、たった今だろうが）、深雪が立ち上がっていた。

冷たく見下ろす視線が、上級生の顔を貫いていた。

壇上の奥からでも、いや、奥深くからである為に尚更、その眼差しは女王のような有無を言わさぬ威厳をもって、ゴシップを捏造しようとした上級生の唇を縫いつけた。

（……）

暴走していないのは、真っ先に確認済だ。

何の魔法も発動していないにも関らず、身体の自由を奪う厳冬の冷気が壇上から放射されているのを、達也でさえも感じていた。

「唯今の発言には看過し難い個人的中傷が含まれていると判断します。

よって、議事進行係補佐の権限に基づき、退場を命じます。

不服があるなら、七草会長が特定の一年生に対して特別な感情を抱いているという発言の、根拠を示してください」

「それは……」

当然のことながら、浅野は口ごもった。

元々真由美が達也に特別な感情を持っているということからして憶測の域を出ないものだし、それが今回の提案の動機であるというのは中傷でしかないということくらい、彼女にも自覚があったのだ。

立ち尽くす浅野を、深雪は冷ややかに凝視している。

魔法ではなくその眼差しで、そこにこめられた軽蔑で、相手を、その心を凍りつかせようとしているかの如き視線だった。

そして現に、実際に、彼女の兄を中傷に巻き込もうとした扇動者は、指一本動かせない状態で立ち尽くしている。

権威、序列、階級……社会経験が無く、そういったものに縁遠い高校生にも、「威厳」という単語がどういう場合に使われるのか、それを明示しているような光景だった。

「――訂正します。退場の必要はありません。

但し、質問は打ち切らせて頂きます。

浅野先輩、席にお戻り下さい」

ようやく収拾に動いたのは、進行役代行の服部だった。

「ようやく」……それはつまり、彼もまた深雪の発するプレッシャーに呑まれていたということだった。

深雪が優雅に一礼して椅子に戻り、浅野は一言も言い返せないまま、ギクシャクと自分の席へ戻った。

◇◆◇◆◇◆◇

結局、反対派の妨害は不発に終わった。

あの後、気軽に野次も飛ばせない雰囲気が講堂を覆い、なし崩し的（あるいは尻すぼみ的）に電子投票へと持ち込まれ、生徒会役員資格制限撤廃議案は賛成多数で可決された。

そしていよいよ、あずさの選挙演説。

立候補者が一人しかいないから所信表明演説に近いが、形式的とはいえ信任投票が行われる（しかも電子投票ではなく投票用紙を使った投票だ）。ヤル気と緊張が入り混じった顔であずさは演台に向

かった。
ピョコンと一礼したところで、大きな拍手が起こった。
所々に口笛と歓声が混じっていたが、あずさが演説を始めるとすぐに止んだ。
芸能関係に疎い達也や深雪には分からなかったが、キュート&フェミニン系女性シンガーのステージに詰め掛けた男性ファンのノリに近い空気があった。
これまた達也には知る由もないことだが、理論・実技ともトップクラスの成績優秀者であるにも関らず、それを少しも鼻に掛けたところが無く、謙虚で人当たりの良いあずさは、その容姿も相俟って、真由美とは一味違う「親しみやすいアイドル」の地位を、校内で築き上げているのだった。
意外な（と言ってはあずさに失礼かもしれないが）能弁で「政見」と「政策」を発表する。基本は現生徒会のスタンスの継承であり、高校生らしく観念論に傾いている部分も多々観られたが、概ね無難に進んで行った。――時々、「しっかり～」とか「頑張れ～」とか妙な応援が入ったのは、まあ、ご愛嬌というべきだろうか。
波乱が起こったのは、次期生徒会役員に言及した時だった。
「――本日の決定を尊重し、次期生徒会役員には、一科生、二科生の枠に拘らず、有能な人材を登用していきたいと思います」
『そこの二科生のこと～？』
『あずさちゃんはゴツイ年下が好みなの～』
きっかけは、実に低レベルな野次だった。
頭から抑え付けられて不完全燃焼のまま燻っていた反対派の不満が最も低劣な形で噴出してしまった形だ。
おそらく彼らの潜在意識には、あずさならば反撃してくるよりスルーするだろう、という計算があった。
とんだ計算違いだったが。
確かに、あずさは野次に対して、何も言わなかった。

『誰だ、今のは！』『中条さんにふざけた真似を！』『言いたいことがあったら前に出てきなさい！』『卑怯者を吊るせ！』

……という具合に大騒ぎになって、何も言う暇が無かったからだ。

会場の真ん中あたりで小競り合いが生じていた。

野次を飛ばした反対派と、その近くにいたあずさのファンが掴み合いを演じていた。

「お静かに願います！　ご着席下さい！」

「静粛に願います！」

「落ち着いて下さい、みなさん！」

深雪や服部や真由美が何度も声を張り上げるが、逆上した生徒には聞こえていない。

掴み合いの輪はどんどん広がっていた。

野次もどんどん、聞くに堪えないものになっていった。

技も何も無い、団子状態の子供の喧嘩だが、割って入るだけでは押競饅頭に巻き込まれるだけだ。

怪我をさせても構わないなら簡単だが……と、収拾の困難に頭痛を感じながら、沢木や辰巳とアイコンタクトを交わして、達也は飛び込む覚悟を決めた。

が、決断は、遅きに失した。

達也とあずさの仲を邪推する、極めて下品な野次が反対派の口から放たれた瞬間、少女の叱声が騒擾を制した。

「静まりなさい！」

ハウリングが生じなかったのが不思議な大音声、というのは錯覚だった。

声の大きさではなく、声の強さが、取っ組み合っていた生徒の意識を圧倒した。

反射的に目を向けた生徒たちは、次の瞬間、反射的に目を閉じ、目を瞬かせながら再度壇上を見上げることになった。

舞台の上では、サイオン光の吹雪が荒れ狂っていた。

激しい怒りが、世界を侵食しようとしている。
現代魔法は、偽りの現象を表す情報体を組み上げ投射することで、世界を改変する。
組織化されていない意思が魔法として発動することはあり得ないはずだ。
それなのに、荒れ狂う感情が、その混沌に世界を引きずり込もうとしている。
常識を逸脱した干渉力の強さ。
このままでは、講堂が何時氷漬けになってしまうか分からない。
真由美が、服部が、鈴音が、そしてあずさが、一斉にその氷界の女王――深雪を制止しようとＣＡＤへ手を伸ばした。

だが、生徒会役員同士による魔法大戦、という最悪の事態は、幸いなことに、寸前で回避された。

何時の間にか壇上に立っていた男子生徒の背中が、少女の激情を生徒たちの視界から隠していた。
少女の両肩に左右から添えられた少年の両手が、世界を塗り替えようとしていた彼女の力を包み込み、抑え込んでしまったかのようにも見えた。
二人が何を話しているのか、あるいは言葉を交わさず瞳で語り合っているのか、壇の下からは分からない。
ただ、少年が少女から手を放し、舞台下へ戻るまで、一年生も二年生も三年生も、全校生徒の視線は見詰め合う（？）二人に釘付けだった。

◇◆◇◆◇◆◇

その後は、憑き物が落ちたように、会場は完全な秩序を取り戻した。

野次を飛ばす者も、コンサート気分の声援を送る者も現れなかった。

演説会は粛々と予定を消化し、生徒たちは飼い慣らされた羊の様に列を作って投票箱に票を投じた。

投票結果は、生徒会費で雇った第三者の手によって即日開票が行われ、翌日の朝に発表される。

その結果は――

「おめでとう、あーちゃん」

「中条、おめでとう」

「おめでとう、中条さん」

――生徒会室で飛び交った祝福の声を聞くまでも無く、あずさが生徒会長に当選した。

これにて一件落着――の、はずだったのだが。

「……司波さん。そんなに気にしなくても良いと思いますよ。所詮、無効票ですから」

「惜しかったな、達也くん」

兄妹は揃って、苦い顔つきで集計表を見詰めていた。

投票数、五百五十四票。

内、有効投票数、百七十三票。

得票数内訳……

「でも、こんな結果になるとはねぇ……」

「司波が二百二十票、中条が百七十三票、達也くんが百六十一票か……」

「……待って下さい。

勘違いしてわたしに投票した人たちが大勢いたのは認めざるを得ませんが……」

認めたくない、と言外に叫びながら、深雪が抑えた声で呟く。

抑え切れたのは、ここまでが限度だった。

「何故『女王様』や『女王陛下』がわたしの得票にカウントされて

いるのですか！？」
「投票用紙に『深雪女王様』とか『司波深雪女王陛下』とか書いてありますから……他に解釈のしようがありません」
申し訳なさそうな声で鈴音が宥めても、深雪が納得できるはずも無かった。
「何ですか、それは！？　わたしは変態的な性癖の持ち主だとでも思われているのですか！？」
「……いや、決してそんなつもりは無いと思うぞ。あの姿を見て、そんな度胸のあるヤツがいるとは思えんし……」
「じゃあ、『シバの女王』の駄洒落のつもりですか！」
「……司波さん、落ち着いて。それこそ、そんな気の利いた言葉遊びをあの場ですぐに思いつける生徒が、こんなに大勢いるとは思えない」
「投票用紙を貸して下さい！　誰が書いたのか、つきとめます！」
「そんな無茶な……第一、一体どうやって」
「お兄様ぁ……」
すがる様な眼差しと共に、珍しく半泣きで擦り寄って来た深雪を前にしては、自分の困惑は一時棚上げとするしかない。
「無理を言ってはいけないよ、深雪。無記名投票なんだから、誰が票を投じたのか、詮索するのはルール違反だよ」
ポンポン、と頭を撫でてて、小さな子供に対するように言い聞かせる。
「ですが……ですが……」
本格的に泣きじゃくり始めた妹を、持て余すことも無く達也は優しく抱き寄せた。
「大丈夫。お前は女王様なんかじゃないから。他の人にどう見えようと、俺にとっては、お前は可愛いお姫様だ

よ」
「お兄様……」
泣き声が徐々に収まり、同時に苛立ちと怒りが収まって行くのを見て、今度こそ魔法戦争(ハルマゲドン)か、と身構えていた一同はホッと胸を撫で下ろした。
が、すぐに、別の意味で胸を押さえる羽目になった。
泣き止んでも、深雪が達也の腕の中から離れる気配は無い。
寧ろ頭を、頬を、嬉々として兄の胸に擦(なす)り付けているような有様で、余りの甘ったるい雰囲気に一同は胸焼けを覚えていた。

◇◆◇◆◇◆◇

その日の昼休み、達也・深雪の兄妹は生徒会室に顔を見せなかった。
先輩の前で泣きじゃくっただけならともかく、抱きついて甘える姿を見られたのは流石に恥ずかしかったのでしょう、と少しも恥ずかしがっている様子の無い達也から予めメールがあったので、真由美たちも心配していなかった。
あずさは、同級生に祝福を受けていて欠席。
鈴音はいつも通り、用が無ければ姿を見せない。
そして今日は珍しく、克人が生徒会室へ来ていた。
「はい、どうぞ」
食事は済ませて来た、という克人に真由美がお茶を出す。
克人は無言で一礼して、湯飲みを口元へ運んだ。
「それで、今日はどうしたんだ、十文字」
部外者であるという点では同じであるクセに、しょっちゅう入り浸っている所為か自分の部屋のような顔をして問う摩利に、克人は「別に」と答えた。
「今日が七草にとって、事実上の引退日だからな。生徒会長としての最後の姿を見に来ただけだ」

「なるほど、真由美を労いに来たということか」
「あら、十文字くん、ありがとう」
「いや、どういたしまして」
ニンマリと笑いながら二人掛かりで繰り出した攻撃（口撃？）を、克人は素面で撃退した。
「……そっか、達也くん、誰かに似てると思ったら、こういうトコが十文字くんに似てるんだ」
「司波が？」
似ているか？　と視線で問われ、摩利が肩を竦めた。
表面的には同じでも、達也は意図的で克人は天然だ、と彼女は考えているのだが、口にしないだけの分別はあった。
「……司波といえば、昨日はどうなることかと思ったが……」
ボディランゲージだけでは誤魔化し切れないと思ったのか、摩利は唐突な話題転換を図った。
「そうねぇ……でも、私たちが心配する必要は無かったわね」
ただ気になる話題だったのか、真由美も克人もすぐに、話に乗ってきた。
「下からだと良く分からなかったが、あれはやはり、司波が妹を抑え込んだのか？」
「ええ。信じられない出力と制御能力だったわ」
克人の言うとおり、壇の下からでは良く分からなかったあの時の真相も、壇の上にいた真由美たちにはハッキリと見えていた。
おそらくは「術式解体」の応用。
瞬間的に展開したサイオンの網で無秩序に荒れ狂っていたサイオン粒子を包み込み、圧倒的なパワーで圧縮して深雪の身体の中へ注ぎ戻したのだ。
サイオンは肉体から生じるものではないが、肉体はサイオンを放出・吸収する媒体となる。ＣＡＤを使った起動式展開はその典型的事例だ。
達也は深雪がバラ撒いたサイオン粒子を、本人の意思に由らず、

深雪の「中」に押し込めたのである。
「いくら無系統魔法が得意だからといって、いくら肉親だからといって、他人のサイオンをあんなに簡単に操れるものなのかしら。
そりゃあ、深雪さんが自分のサイオンを全くコントロールしていない状態だった、という事情も加味しなければならないのだろうけど……」
「……それも、古式魔法の技術なのかな？　確か『仙術』がサイオンのコントロールに長けていたと思うが……」
「ただでさえ古式魔法の習得には時間が掛かる。仙術は特に時間が掛かる系統だと言われている」
摩利の推測を、「それだけでは説明がつかない」と克人が間接的に否定した。
「妹の力を見ても、やはり、遺伝的な素質を無視することはできんと思うが……」
「だがアイツは『自分は十師族ではない』と否定したんだろう？」
「ああ。
嘘を言っている様子は無かった」
「……もう、止めましょう、この話は。
血統を詮索するのは、良くないわ」
首を傾げていた摩利と克人に、真由美はいきなり打ち切りを提案した。
二人とも、彼女の態度の急変に不自然さを感じていたが、魔法師にとって遺伝的系統を詮索することは確かにマナー違反とされているので、殊更に反論はできなかった。
無論、真由美には、二人に明かしていない、内に秘めた考えがあった。
達也が「数字落ち」であるなら、それを詮索することはタブーだ、と彼女は勝手に思い込んでいるのだった。
こうして、達也も真由美も誰もそれと意図せずに、真由美は達也の身元隠蔽の協力者となった。

間章〔生徒会長選挙編〕４（後書き）

間章〔生徒会長選挙編〕はこれにて終了です。
次回から第三章になりますが、ここで充電期間を頂きたいと思います。
次回の更新は１１月１日を予定しています。少々長い休みになりますが、何卒ご理解いただけますようお願い致します。

3－（1）　呼出（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

3－（1）　呼出

二十四時間体制を実現する為の自動化が推し進められた港湾諸施設は、今ではほとんどが無人で運営されている。

夜間は船舶の入港、荷揚げ、積み込み、出港の作業が完全自動化され、監視の為に僅かな人員が置かれているのみだ。（通関は日中に纏めて行われる）

人手を減らした分、密入国者対策として、保税地域と市街地の遮断がより厳重に行われるよう各港湾の全域的再開発が行われ、船舶の乗組員の上陸も保税地域については禁止されている。

逆に港湾施設が完全自動化される深夜については、保税地域以外の接岸が禁止され、乗組員の上陸を必要とする船舶は有人運営が再開される朝まで沖合いで待機しなければならない。

今では真夜中ともなれば、貨物用の埠頭は完全に人通りが無くなる、はずだった。

だがこの夜、そろそろ日付も変わろうかという時刻、山下埠頭には息を潜めた大勢の気配があった。

『五号物揚場に接岸した小型貨物船より密入国者が上陸しました。総員、五号物揚場へ急行して下さい』

「やれやれ、やはりあそこか」

「ぼやいている場合じゃありませんよ、警部！」

「しかしね、稲垣君」

「つべこべ言わずに走る！」

「俺は君の上司なんだが」

「歳は自分の方が上です」

「やれやれ」

適当（テキトー）な感じでボヤキながらも、千葉寿和（ちば・としかず）警部は足の回転を速めた。

彼が警備についていた三号岸壁から五号物揚場まで七百メートル。
どんなに全力疾走しても二分は掛かる距離だが、千葉警部と稲垣巡査部長は軽口を交わしながら三十秒で現場に到着した。
生身の人間に出せる速度ではない。――普通ならば。
そしてこの二人は普通の人間ではなく、魔法師の刑事だった。
「人数不足だねぇ、やっぱり」
「仕方ないでしょう。
魔法犯に対処できるのは魔法師の刑事だけなんですから」
「本当は、そうでも、ないんだが、ね！」
気の抜けた会話を気合代わりにして、千葉は高々と跳び上がった。
その手には全長一メートル程の木刀。
反りの少ない、忍者刀を長くしたようなフォルムだが、長尺警棒ではなく紛れも無い木刀だった。
空中で木の葉の様に揺れながら、サイレンサーのついたサブマシンガンを三点バーストで乱射している人垣を跳び越える。
その幻惑的な空中機動が、援護射撃の照準を許さない。
人垣の向こうで遠隔攻撃魔法を放っている魔法師の三人組へ向けて、千葉はスパイラルを描いて襲い掛かる。
Gを無視した移動魔法で敵の魔法照準すらもすり抜け、千葉の木刀は三人組を次々に殴り倒した。
背後では稲垣がサブマシンガンの射手を拳銃で撃ち倒している。
挟撃の形で千葉も参戦し、十人を超える外国人を忽ち（たちま）の内に制圧する。
同じような小競り合いが数箇所で起きていたが、助っ人に赴くまでもなく片がついたか、つきつつあった。
「警部、船を抑えましょう！」
「え～っ、俺がぁ？」
「つべこべ言わない！」
どうやらこのコンビは、部下の方がはるかに勤労意欲に恵まれているようだ（と言うより、上司の勤労意欲が乏しすぎるように見え

る）。
　それでも流石に、密入国の現場を前にサボタージュを決め込む程ではなかった。
「分かった分かった。じゃあ、稲垣君。船を止めてくれ」
「……自分では、沈めることになるかもしれませんよ？」
「構わないよ。責任は課長が取るだろう」
「……責任は俺が取る、とは仰らないんですね……」
　ガックリと肩を落としながらも、リボルバーにケースレス弾を再装填する手つきに淀みはない。
　グリップ底部のスイッチを左手で押し込むと、バレル上部に取り付けられた照準補助機構の作動ランプが点った。
　武装一体型ＣＡＤ、リボルバー拳銃型武装デバイスのグリップに組み込んだ特化型ＣＡＤの本体が起動式を展開する。
　引き金を引くと同時に、魔法式が作動。
　移動・加重系複合魔法により軌道を固定し貫通力を増大させたメタルジャケット弾が、魔法式の設定した通りの軌跡を描き、離岸する小型船舶の船尾を貫いた。
　二度、三度と銃声が木霊する。
　船尾に生じていた気泡が勢いを失う。
　船の形状から予測しただけのブラインド射撃が、ものの見事にスクリューのギアボックスを撃ち抜いたのだ。
「お見事」
　暢気な賞賛を口にした千葉の手許でパチン、と留め金の外れる音がした。
　木刀と見えたのは、その実、仕込み杖だった。
　冷たく光る白刃を手に、惰性で漂い始めた船へ向けて、義経の八艘跳びも斯くやとばかり千葉警部が跳び移る。
　着艇と共に振り下ろした刃は、鉄板の船室扉を真っ二つに切り裂いた。

百家・千葉一門の秘剣「斬鉄」。
刀を鋼と鉄の塊ではなく、「刀」という単一概念の存在として定義し、魔法式で設定した斬撃線に沿って動かす移動系統魔法。
単一概念存在と定義された「刀」はあたかも単分子結晶の刃の様に、折れることも曲がることも欠けることもなく、斬撃線に沿ってあらゆる物体を切り裂く。
再度振り下ろした刃で進入路を確保し、千葉家総領・千葉寿和は単身、船の中へ斬り込んだ。

「お疲れ様です、警部」
「全く、骨折り損とはこの事だよ」
白み始めた空の下で、笑い出すのを堪えていることが丸分かりな部下を叱責するでもなく、千葉警部は他人事の様にぼやいた。
勇ましく斬り込んだ船の中は、物の見事に蛻(もぬ)けの殻だった。
密入国団は船底のハッチから脱出した直後と見えて、開け放たれたハッチは海水を吹き上げていた。
緩やかに沈没中だった船は、千葉が風通しを良くした所為で沈降速度を加速し、今では完全に水没してしまっている。
「水中へ逃れた賊の行方は、まだ掴めていないようです」
「ヤツらの行く先なんて分かり切っているんだがね」
危うく沈没の巻き添えを食うところだった青年は、年上の部下のもの言いたげな視線に、肩を竦めて応えた。

◇◆◇◆◇◆◇

新生徒会発足から一週間が過ぎた。
達也は食堂でAランチを前にしていた。
彼が昼食時に生徒会室を使っていたのは、真由美の（ある意味で）職権濫用によるものだ。

だから新生徒会の発足と共に、達也は食堂を利用するようになった。

彼が希望すれば新生徒会長も歓迎しただろうが、元々自分から望んで生徒会に「取り入った」訳でもない。混まないのは魅力だったが、変に勘繰られるよりは混雑の方がマシだったのだ。

そうすると自動的に深雪も食堂を使うようになる。達也と深雪と二人の共通の友人たちと、賑やかなランチタイムが十月に入ってからの日課となっていた。（今のところ深雪のファンが割り込んでくるという事態は生じていない）

今日のメンバーはデフォルトのフルライン――達也、深雪、エリカ、レオ、美月、幹比古、ほのか、雫という顔ぶれだった。

フルメンバー、と言っても、クラスが違うから同時に集まることはない。

十分ほど遅れて合流したA組の三人に対して、達也が「ご苦労様」と労いの言葉をかけた。

「すみません、達也さん。私の所為で遅くなっちゃって」

達也もエリカもレオも、誰も怒っていたり咎めていたりの表情は浮かべていなかったが、達也に声を掛けられて、ほのかが身体を小さくして謝った。

「気にすることは無いよ。最初は戸惑うことばかりだろうから」

「そーそー、気にすること無いって」

「まだ一週間だからな」

口々に慰めをかけられて、ほのかは恐縮した様子でそっと腰を下した。

「でも今日は本当に、ほのかの所為じゃないんですよ、お兄様。職員室からいきなり『一昨年の記録を出せ』と申し付かりまして、三時限目を途中で切り上げて生徒会室でデータベースを検索していたんです。雫にも手伝って貰って」

深雪が笑顔でフォローすると、ほのかは何故か、椅子の上でますます縮こまった。

「でも……深雪はすぐに見つけたのに、私の手際が悪かったから……」

「私の方が手間取ったよ。ほのかが亀なら私は蝸牛（かたつむり）」

いやいや、誰も亀なんて言ってないから、とツッコミかけたのは一人ではなかった。

「……深雪はあのシステムを四月から使っているからね。ほのかは生徒会役員になったばかりだし、雫は部外者だから……深雪とは経験が違う。仕方が無いよ」

だが実際には達也がこう口にして、ほのか（と雫）を慰めただけだった。

今の台詞で既にお分かりのことと思われるが、新生徒会発足に伴い、ほのかは役員に任命された。

新生徒会の顔ぶれは、会長・中条あずさ、副会長・司波深雪、書記・光井ほのか、会計・五十里啓、である。（一高の会計は権限の面で「監査役」に近く、会長と同学年から選ばれる慣例となっている）

――実は当初、あずさは達也に副会長就任を打診した。無論達也は断ったが、彼本人よりも強く抵抗したのが新・風紀委員長の花音だった。

彼女曰く、「司波君に抜けられると委員会の事務が回らない」。

花音はこの台詞をあずさと達也の二人がいる前で堂々と口にしたのだが、これを聞いた時、達也は呆れて「開いた口が塞がらない」心境だった。

彼は委員会の事務担当ではなく、実働部隊なのだ。

いや、それを言うなら風紀委員会は実働部隊のみで構成された組織なので、事務面は全員が分担して行うことになっている。

摩利から花音に渡された引継書にもそう書いてある。

達也が自分で打ち込んで書込プロテクトを掛けたのだから、間違いはない。

しかし、あずさは花音の主張に、大きく頷いていた。

達也は二人の二年生の「誤解」に、頭を抱えたかった。
そんな彼の心境を他所に、花音の言い分を認めながらも、あずさは強硬に達也の生徒会移籍を主張した。直接口にはしなかったが、達也がいなければ深雪を抑える自信が無い、だけど深雪を生徒会から外すことも出来ない、というのが本音のようだった。
達也は本格的に頭痛を感じた。
そんな、本人を無視した交渉の結果、今年度中は風紀委員会に残留し、新年度から生徒会へ移籍することで、あずさと花音は合意した。
達也の意向は、遂に問われなかった――
（……思い出したら頭痛がして来たぞ）
生徒会役員になったばかり、という自分の台詞で一週間前の出来事を連鎖的に思い出して、達也はその時の頭痛まで思い出していた。
ふと視線を感じて目を動かすと、深雪が少し心配そうな眼差しを彼へ向けていた。
妹の鋭さに舌を巻きながら、達也は何でもないと目で答えて箸を持つ手の動きを再開した。
遅れてきた三人も、自分が選んだメニューの攻略に掛かった。

◇◆◇◆◇◆◇

「司波、廿楽先生が呼んでたぞ。放課後準備室へ来いってさ」
食堂から戻った達也は、クラスメイトから声を掛けられた。
「廿楽先生が？」
返事が疑問形になってしまったのは、ちゃんと訳がある。
現代では、教師が生徒を呼びつける場合、メールシステムを使用するのが普通だ。
何よりその方が手間が掛からないし、噂話という形のプライバシー漏洩の予防にもつながる。
教師が予定外に生徒を呼び出すというのは、良い方向か悪い方向

か、どちらにしても普通ではないことだからだ。
「甘楽先生が」
だがそのクラスメイトは、達也の問いを鸚鵡返しに繰り返すことで肯定した。
そしてそれだけでは不親切と感じたのか、そうなった経緯を付け加えた。
「幾何準備室（魔法幾何学準備室）へ課題を出しに行ったら捕まっちゃってさ」
何故スキャナーで電送せず原稿を直接提出したのか、とか、課題の提出期限はどの科目も先週の土曜日じゃなかったか、とか、気になる点は幾つかあったが、この際必要ないことは棚上げすることにした。
「それで、幾何準備室へ行けばいいんだな？」
頷くクラスメイトに礼を言って、達也は自分の席へ向かった。
ネットワークにログオンし、メールシステムを確認する。
やはり、彼の見落としではない。
メールボックスに甘楽からの呼び出しは無かった。
教職員、それも大学の講師を務めていた人間が、「メールは苦手」ということはないはずだが……
「幹比古、一寸いいか」
ちょうど目の前を横切って行こうとしていた幹比古を、達也は呼び止めた。
「なに？」
午後の授業開始までまだ余裕がある。
幹比古は特に急いでいる素振りも無く立ち止まった。
「お前、甘楽先生とは親しかったよな？」
「うん、親しいと言うか……よくアドバイスを貰っているよ」
幹比古は選択科目で魔法幾何学と魔法薬学を取っている。（達也は魔法言語学と魔法構造学。選択科目は学年ごとに変える事が出来る）

放課後は魔法薬学の実習室で自習していることが多い幹比古だが、製図室で新しい呪符の設計図を書いていることも少なくない。

そんな時に、甘楽がふらりと現れて度々アドバイスを与えているのだ。――もっともこれは、教育熱心と言うよりも、正統派の陰陽道とは微妙に異なる吉田家の呪符に興味があるらしいのだが。

「あの先生、メカが苦手だったりするか？」

「えっ？、いや、そんなことはないはずだよ」

言葉に出さず表情で「何故そんなことを？」と問いながら、幹比古は達也の質問に首を振った。

「いや、大したことじゃないんだが……」

そう前置きして甘楽教諭から呼び出しを受けた経緯を達也が説明すると、幹比古は苦笑気味に空笑いを漏らした。

「あの先生、閃きの人だから……」

「そうなのか？」

「……そうなんだよ。

アドバイスしてくれるのはありがたいんだけど、急に自分の世界にこもっちゃうこともしょっちゅうで……」

「？」

「パッ、と閃くんだろうね。突然ノートを広げて、図形と数式を書き殴り始めるんだよ。

あの置き去り感は……何度経験しても慣れないなぁ……」

「ハハハ……」

達也も幹比古と似たような空笑いを漏らした。

どうやら甘楽教諭は、紙一重の方の天才肌らしい。

面倒臭いことにならなければいいが、と達也は少し、嫌な予感を覚えた。

◇◆◇◆◇◆◇

達也が訪れた時、魔法幾何学準備室に甘楽以外の教師はいなかっ

た。

多分、居心地が悪いのだろう、と達也は思った。

この学校に採用される教師は皆、優秀な人材ばかりだ。

当然、自分の能力にそれなりの自負を抱いている者ばかりだが、二十代で国立魔法大学の助教授の座にリーチを掛けていた英才に比べれば自信を無くしてしまうのも仕方が無い。自らの才に頼むところが大きい人間ほど、より大きな才能に触れることでストレスを感じてしまう傾向がある。

彼も身に覚えがあることだった。――魔法以外の才能で、だが。

達也の推測が当たっているかどうかは別にして、今この部屋に甘楽以外の教師がいないのは客観的な事実。

魔法幾何学準備室で彼を待っていたのは、甘楽と鈴音と五十里の三人だった。

「今月末に魔法協会主催で論文コンペがあるのは知っていますね？」

一通り前置きとなる挨拶を交わした後、甘楽が切り出した用件はそんな台詞から始まった。

「詳細は知りませんが」

保留付きの肯定を返すと、甘楽は一つ、頷いた。

「九校戦と違って論文コンペは地味ですから、一年生の君が詳しく知らなくても無理はありません。

人数面でも、合計五十二人の大選手団を編成する九校戦に対して、論文コンペは僅か三名のチームで参加するものですから」

こうして目の前で人数を対比されると驚きを禁じ得ないが、冷静に考えれば論文を作成してプレゼンテーションするだけの事に、大人数は必要ない。プレゼン用の小道具作成に人数が必要となる場合は校内から助っ人をかき集めれば済む話で、論文作成自体に関らせる必要は無いのである。人数が増えるとかえって、「船頭多くして……」という破目になってしまうものだ。

全校で三名という人数は予想外に少ないものだったが、まあ妥当なものだろう、と達也は考えた。

「さて、それでは本題です。
司波君、第一高校代表チームの一員として、論文コンペに参加して貰えませんか」
「……」
達也が咄嗟に反応できなかったのも、無理のないことだろう。
「……自分が、ですか？」
甘楽の発言に誤解の余地は無かったが、達也はそう訊き返さずにはいられなかった。
日本魔法協会主催「全国高校生魔法学論文コンペティション」。
全国高校生、といっても、正規の教育課程で魔法理論を教える高校は魔法大学付属高校の九校以外に無い。
この論文コンペも実質的には九校で競う催し物であり、九校戦が「武」の対抗戦であるとしたら、論文コンペはこれと双璧をなす「文」の九校間対抗戦と言える。
「君が、です」
やや芝居がかった丁寧な口調が彼のパーソナリティなのだろう。
甘楽はオーバーアクション気味に頷いてそう答えた。
「本来は市原君と五十里君と、それから３－Ｃの平河君に出場してもらう予定だったのですが……
平河君が最近、体調を崩しているようだと思っていたら、先週突然、退学届けを持って来たのですよ。
何とか退学は思い留まらせましたが、とてもコンペに出られるような状態ではありません。
そこで、君に白羽の矢が立ったという訳です」
達也も３－Ｃの平河という名前には覚えがあった。
確か、九校戦で不正工作の犠牲になった小早川の、ミラージ・バットのエンジニアを務めていた三年の女子生徒が平河小春（ひらかわ・こはる）という名前だったはずだ。
「しかし何故、一年生の自分を？
論文コンペの出場者は、校内の論文選考会で決定されたのではあ

りませんでしたか？」
六月初頭に論文コンペ出場者の募集が学内ネットに流れていたことを、達也はようやく思い出していた。
あの時期は常駐型重力制御魔法の開発最終局面で他の事に手を出している余裕は無かったし、目立つ真似をするつもりもなかった（九校戦であれほど人目に曝されるとは、あの当時思いもしなかった）ので、即時スルーしたまま忘れ去っていたのである。
「プレゼンの準備は共同作業ですから、君が適任なのですよ。詳しい話は市原君から聞いて下さい」
一方的にそう告げると、甘楽はそそくさと部屋を後にした。
達也は一言も「引き受ける」とは言っていないのだが、どうやら彼に拒否権は無いらしい。
（……あれは「閃きの人」と言うより、他人（ひと）の話を聞いていないだけではないのかな？）
しかし、ぼやいてみても、事態は一向に開けはしない。
説明を求めて、達也は鈴音の方へ向き直った。
「司波君を推薦したのは私です。他の代役は拒否させてもらいました」
（いや、拒否って……）
視線の問い掛けに応えて、鈴音はいきなり爆弾を炸裂させた。
「……しかし応募者の皆さんは、コンペに出場する為に少なからぬ時間を割いて労作を仕上げたはずです。
選考論文を提出してもいない俺が、いきなりメンバーに選ばれたのでは、納得出来ない人も少なくないと思いますが。
例えば市原先輩、五十里先輩、平河先輩の次点だった人の心中は如何なものでしょうか」
「関本君はダメです。彼は今回の作業に向いていません」
達也は特定の誰かを念頭に置いて話をするつもりはなかったのだが、鈴音はいきなり個人攻撃とも思われる台詞を繰り出した。
「関本、というと、風紀委員会に在籍している関本勲先輩のことで

すか？」
　達也が流してしまうと本物の個人攻撃に発展しそうだったので、敢えて人物を特定してみた。
　すると、
「ええ、まあ……彼と私では、方向性が違い過ぎます」
　流石に鈴音も拙いと思ったのか、達也の注文通りトーンを緩めた。
　そこに五十里のフォローが入った。
「先生も言ったように、論文の作成とプレゼンの準備は三人が共同で取り組むんだけど、三人がバラバラにアイデアを出し合っているだけじゃ論文の方向性も決まらないから、メインの執筆者一名とサブ二名の役割分担はどうしても必要になる。
　そして今回、当校のメイン執筆者は市原先輩なんだよ」
　五十里の解説に、達也は二つの意味で頷いた。
　確かにメインとサブの役割分担は必要だし、三年生理論トップの鈴音がメインを取るのも納得できる。
「つまり……市原先輩の論文のテーマに、俺が適しているということですか？」
　話の流れからしてそういう事なのだろうが、だったら何故、そんな判断が出来るのだろうか？
　達也は自分の名前で論文を発表したことなど無いのだが。
「私の論文のテーマは、『常駐型重力制御魔法を利用した重力式熱核融合炉の技術的可能性』です」
　鈴音の言葉に、達也は軽く目を瞠った。
「そう、司波君の研究テーマと同じです」
　高校生に「研究テーマ」という言葉は大袈裟にも思えるが、確かに常駐型重力制御魔法式熱核融合炉は達也の目指すゴールの一つだ。
　しかしそのことはまだ胸の内に秘めている段階で、ほとんど口にしたことは無いはず……
「……そうか。あの時、俺たちを監視していたのは市原先輩だったんですね」

「監視、というのは語感が良くないですね。関心を持って見ていた、ということにしておいて下さい」
見ていただけでなく盗聴もしていたでしょう、とは、達也は言わなかった。
壬生紗耶香の説得に当たったカフェで、達也は監視の視線を知覚しながらその正体を見極めようとはしなかった。
結果的に黙認してしまった以上、今更文句を言える筋合いではない。
「論文コンペの本番まで、残り三週間しかありません。今からこのテーマに噛み込む事が出来るのは、同じテーマに取り組んでいる司波君だけだと判断しました」
「俺が口先だけ……とは、思わなかったんですか？」
「その程度の人を見る目はあるつもりですよ」
随分高く買ってくれたものだ、と達也は内心だけでなく面（おもて）に出して苦笑した。
「分かりました。どうやら俺にとってもメリットのある話のようですし、協力させていただきます。
それで、俺は何をすれば良いんですか？」
「それではまず、論文コンペティションについて一通り説明したいと思いますが、五十里君、構いませんか？
貴方には改めて説明を受ける必要のないことばかりだと思いますが」
「構いません。よろしくお願いします、市原先輩」
軽く頭を下げた五十里に目礼を返し、鈴音は壁のオープンラックから三枚の携帯黒板を取り出して一枚ずつ二人に渡した。（一枚は自分用）
携帯黒板とは無線データ通信機能を備えた電子ペーパーで、参会者が片手に持って資料を読めるように大判レポート用紙サイズの薄板形状となっており、大画面のディスプレイを必要としない小規模なミーティングで使用される。画面は無論フルカラーだが、テキス

トのみ表示の場合は黒い背景色に白のハイコントラスト文字が一般的で、「黒板」の名称はこの配色に由来する。

鈴音は自分の情報端末を携帯黒板のホルダーにセットして、論文コンペの案内書を呼び出した。

達也は自分の手許に表示された案内書を見ながら、鈴音の声に耳を傾けた。

「まず開催日ですが、毎年十月の最終日曜日と決められています。開催地は京都と横浜で毎年交互に行われます。これは、日本魔法協会の本部が京都、副本部的な位置づけの関東支部が横浜にあるから、と言われています。

今年の会場は横浜国際会議場です。

参加資格は国立魔法大学付属高校から推薦を受けた者、または論文の予備選考を通過した高校生のグループとなっていますが、過去に非推薦枠からプレゼンに進出した例はありません。

規定上はオープン参加となっている全国高校生魔法学論文コンペティションが、魔法科高校論文コンペと呼ばれている所以です」

「学校から推薦を受けなかったグループがプレゼンへ進出した例は無いんですか？」

「……司波君。普通の高校生にとって、三十分間のプレゼンに堪える論文を書き上げることは、モノリスやミラージに出るよりずっと難しいものだと思うよ」

「五十里君の言う通りでしょうね。私たちの場合に当てはめてみても、生徒会と部活連の協力が無ければ、三人だけではとても準備が終わりません」

システムの仕様書を書き慣れている達也は心の中で「そうかなぁ？」と呟いたが、敢えて異を唱えはしなかった。

「テーマは原則として自由ですが、公序良俗に反しない内容であることが当然の条件になっています。

一昨年、大量破壊兵器に代替する魔法の開発をテーマにした生徒がいましたが、事前審査で撥ねられました」

「随分突き抜けてる人が居たんですね……」
この話は初耳だったと見えて、隣で五十里が目を瞠って呻いている。
その気持ちは良く分かる、と達也は思った。
同時に、実際に大量破壊魔法を開発した自分にその生徒を非難する資格など無いだろうな、とも思った。
「……あれっ？
事前審査で撥ねられたということは、当然その論文は非公開になったんですよね？
論文が公開されなかったのに、市原先輩は何故その論文のことを知っているんですか？」
何の気なしに放った達也の質問は、何故か、気まずい沈黙を招いた。
うっかり苦虫を噛み潰してしまったような顔で目を逸らす鈴音。
いえ、答えたくないことならば、と達也が言い掛けたところで、彼女はため息混じりに口を開いた。
「……その論文の執筆者は当校の三代前の生徒会長です」
（うぉっと……当校にもそんな猛者が居たのか……）
論文コンペの時期は生徒会の代替わりの後で、鈴音は一年生の後半から役員を務めていたということだから、その事件のことを知っていても不思議はない。
鈴音の顔色を窺うに、その元生徒会長には他にも色々「武勇伝」がありそうだ。
「……そんな前例もありますので、論文の完成稿と使用する機材、術式を含めたプレゼンの企画書を事前に魔法協会へ提出しなければなりません。
期限は再来週の日曜日。
提出先は魔法協会関東支部ですが、学校を通じての提出になります。
甘楽先生に内容をチェックしていただく時間を考えて、来週の水

曜日には出した方が良いでしょう」
　提出後にプレゼンの準備は進められるとしても、論文の作成自体は、残り、正味十日も無い訳だ。
　しかし何故、甘楽に見てもらうのだろうか？　この学校にはもっとベテランの、魔法教育用の教科書を何冊も手掛けているような教師もいるのだが。
　そんな口に出せない疑問（口に出すのは甘楽に対して失礼だろう）を抱いていると、五十里が察し良く答えてくれた。
「甘楽先生は今年の校内選考責任者なんだよ。
　論文コンペの準備は自分の専門外までフォローしなくちゃならない上に、魔法実験の準備とかで結構面倒なことが多いからね。
　大体、若い先生が押し付けられちゃうみたいだ」
「若いと言っても、甘楽先生は優秀な方です。
　通常の授業より遥かに深く踏み込んだレベルで先生の指導を受けられる私たちは、寧ろ幸運だと言えます」
　指導教官の個別指導を受ける資格の無い、二科生の自分にとっては特に、とは、達也は口にしなかった。
　二人ともそのこと――深いレベルどころか、通常の指導も受けられない生徒が全校生徒の半数を占めるということ――には気付かなかったようだし、気付かせる必要も無かった。
　その後、細かな注意点を列挙して鈴音の説明は終わった。

3－（1）　呼出（後書き）

第三章、開幕しました。
今回も毎週日曜日更新の予定です。
なお用語集は「外伝・魔法科高校の少年少女」〔ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ４５３９ｈ／〕へ移転しました。

3－（2）　招かれざる客（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

3－（2）　招かれざる客

現代の近距離公共交通システムは「カー・シェアリング」の考え方を発展させ、大量輸送機関から少人数小型輸送機関へシフトしている。

三十年前から始まったこの動きは大都市圏においてほぼ完成し、中小地方都市においても普及率は八割に達している。そして残りの二割は、そもそも公共交通機関が整備されていないマイカー都市だ。

通勤や通学の近距離輸送に関しては、連結電車や大型バス等の一度に大人数を運ぶ輸送機械はほとんど使用されておらず、中高生が同じ電車やバスを利用して一緒に登下校するという景色も絶えて久しい。

達也も本当の意味で一緒に登下校する相手は深雪だけだが、校門から駅までの徒歩十分は友人と一緒になることが多い。今日も遅くまで学校に残っていたにも関らず、校門を出る前からいつものメンバーが揃っていた。

そのまま駅まで直行する日が圧倒的に多いが、たまに途中の喫茶店やファーストフード店に寄り道する日もある。

学校から駅まではほぼ一本道、道なりでも一キロメートル未満だが、この短い通学路には学生向けの店がビッシリと軒を連ねている。飲食店だけでなく書店、文具店、服飾店も多く、特に魔法教育関係の品揃えは豊富で、第一高校の生徒・教職員だけでなく、わざわざ電車（キャビネット）を使ってやって来る遠方からの買い物客も少なくない。

その中でも割と本格的な店構えの喫茶店、彼らもそろそろ常連扱いを受ける程度には足繁く通っている店に、八人は腰を落ち着けていた。

「えっ？

達也、論文コンペの代表に選ばれたんだ？」

今日の寄り道は、甘楽の呼び出しが何だったのかを幹比古が訊ねたのがきっかけだった。
オーダーが届くのを待ち切れずに質問を再開した幹比古に、割とせっかちなんだな、と友人の新たな一面を発見した気分になりながら、達也は先程の一幕を説明した。
それに対する幹比古の反応が、この台詞だった。
深雪とほのかは生徒会室へ迎えに行った際、既に伝えてあるから別として、幹比古を含めた他の五人は目を真ん円にして驚きを表現していた。
「でも、論文コンペの代表って、全校で三人だけなんじゃないんですか？」
「まあね」
「まあね、って……達也くん、感動薄過ぎ」
絶句する美月と呆れ顔のエリカ。その隣でレオが楽しそうに笑っている。
「達也にしてみりゃ、その程度は当然、ってこったろ」
「一年生が論文コンペに出場するなんてほとんど無かったことだよ」
「皆無でも無いんだろ？
職員室だって、インデックスに新しい魔法を書き足すような天才を無視できるはずねえって」
雫の反論に笑顔のまま再反論したレオ。
「天才は止めろ」
それに対して、照れているのではなく、本気で嫌そうに達也が釘を突き刺した。
「達也さん、本当に天才と言われるのがお嫌いなんですね……」
「都合の良い言葉だから」
裏表無く不思議そうに問い掛けたほのかに、達也ではなく深雪が答えた。
達也は妹の回答に苦笑するだけで、そうだとも違うとも言わなかった。

「いや、やっぱり凄いよ！」
怪しくなりかけた雰囲気を気にしてか、漂い始めた暗雲を吹き飛ばす勢いで幹比古が力説した。
「あの大会の優勝論文は『スーパーネイチャー』で毎年採り上げられているし、二位以下でも注目論文が学会誌に掲載されることも珍しくないくらいだから」
スーパーネイチャーというのは、現代魔法学関係で最も権威が有るといわれているイギリスの学術雑誌のことだ。達也も購読しているが、高校生の論文コンペに関するコラム記事など気にしたことがなかったので、幹比古の台詞に「へぇ～」と思った。
「あっ、でも……もう余り日が無いんじゃなかったっけ？」
ハイテンションから一転、心配そうな表情で幹比古が問い掛けて来る。
この浮き沈みの激しさ、彼の方こそ何かあったんじゃないかと訝りつつ、達也はその問いに頷いた。
「学校への提出まで、正味九日だな」
「そんな！？　本当に、もうすぐじゃないですか！」
「大丈夫だよ。俺はあくまでサブだし、執筆自体は夏休み前から進められていたんだから」
笑いながら手を振った達也に、それもそうか、と一同は安堵の息を漏らした。
「しかし、随分急なお話であることに変わりはありません。何かトラブルがあったのでしょうか？」
「サブの上級生が体調を崩したらしい」
眉を顰めた深雪の問いに、達也は笑顔のままで簡潔に答えた。
先程は説明しなかったが、訊かれれば隠すことでもない。
「それはお気の毒ですが、それにしても急過ぎはしないでしょうか。確かにお兄様だからこそ、いきなり論文作成のチームに加われと言われてもすぐに対応出来るのですから、適切な人選とは思いますが」

「そうでもないさ。
市原先輩の選んだテーマが俺の全く知らない分野だったら、流石に遠慮させてもらったよ」
「へぇ、何について書くんだ？」
好奇心も露わに身を乗り出してきたレオに、「アンタが訊いて分かるの？」という冷たい眼差しを向けた少女がいたが、質問者も回答者もスッパリ無視した。
「常駐型重力制御魔法式熱核融合炉の技術的問題点とその解決策についてだ」
「……想像もつかねえよ」
もっとも質問者側はすぐに、ツッコミに対して間接的に回答する羽目になってしまったが。
「……随分壮大なテーマだね」
「達也さんが呼ばれたのですから、てっきりＣＡＤプログラミングに関する論文だと思っていました」
「あっ、私もそう思った」
「啓先輩もメンバーに入ってるからねぇ……あたしもそのテーマなら、優勝間違いなしってくらい、凄いのが出来ると思うんだけど」
どうやら友人たちは、達也の、というか、高校生の手に余るテーマではないかと懸念しているらしい。
達也もこの場は笑って誤魔化した。
和やかな笑みの中で、ただ深雪だけが、笑わなかった。
顔は笑みを作っていたが、瞳が笑っていなかった。
常駐型重力制御魔法式熱核融合炉の研究が持つ意味を知る彼女は、兄がこの上なく本気であることを知っていた。

◇◆◇◆◇◆◇

その日、帰宅した自宅の駐車場にシティコミューターが停まっているのを見て、兄妹は顔を見合わせた。

「――っ」

玄関に揃えられた、地味なデザインの見慣れないパンプスに、顔を強張らせ、息を呑み、立ち竦んだ深雪の肩を、達也は優しく抱き寄せた。

そのまま背中を押して上がり框（がまち）に足を掛けたところで、パタパタとスリッパを鳴らして小走りに近づいてくる足音が聞こえた。

「――お帰りなさい。相変わらず仲が良いのね」

からかい混じりに投げ掛けられたその言葉に、達也はスッと目を細め、ピクッ、と震えた妹の身体に、肩を抱く手を少し強めた。

「仲が良い、ですか。

叔母上のご不興（こうむ）を被りそうなお言葉ですね。

とりあえず、今のは聞かなかったことにしておきますよ」

冷たい眼差しに相応しい、冷却された声。

今度は出迎えた女性の小柄な体がビクッ、と震えた。

「こちらへお帰りになるのは久し振りですね、小百合さん」

「え、ええ、その、本社に近い方が、どうしても便利だから」

「そうでしょうね」

九ヶ月ぶりに帰宅した義理の母――兄妹の意識の中では「父親の後妻」――、司波小百合に対し、達也は素っ気無く頷いた。

帰宅したといっても、この家には彼女の部屋も寝具も無い。彼の父親と結婚して以来、彼女はＦＬＴ〔フォア・リーブス・テクノロジー〕本社から歩いて五分の場所にある高層マンションの最上層に近い部屋で、夫婦水入らずの結婚生活を営んでいる。達也の台詞は、再婚後に一度も住んだことも無いこの家が、住民登録上の住所になっているという皮肉に他ならなかった。

この程度の些細な嫌味に落ち着きを失っている父親の後妻を見て、深雪は逆に落ち着きと精神的な余裕を取り戻した。

兄に肩を抱かれたまま身体の向きを変えて、正面からしな垂れかかるように達也へ顔を寄せる。他人の視線を完全に無視した所作だ。

普段は、二人きりであっても、ここまで積極的な――はしたない、

とも言う――真似はしない。
深雪は敢えて、誰も見ていないかのように振舞っているのだった。
「すぐに夕食の支度を致しますので。
何か召し上がりたい物はありませんか？」
「お前の作るものなら何でも。
急がないから着替えておいで」
小百合の方へは目もくれず、自分だけに目を向けて答えた兄の言葉に、深雪はクスッと優越感を漂わせた笑みを漏らした。
「分かりました。着替えの方も、何かリクエストがお有りでしたら。
お兄様がお望みなら、深雪はどのような格好でも致しますよ」
「こらっ、調子に乗り過ぎだ」
軽く小突くフリをすると、首を竦めて深雪は軽やかに二階へ駆け上がった。

◇◆◇◆◇◆◇

「では、お話を伺いましょうか」
深雪の姿が見えなくなって、達也は所在無げに立っている小百合に声を掛けた。
さっさとリビングに入り、ソファに腰を下して、出入り口でモタモタしている小百合に再度、声を掛ける。
「急かすようで気が引けますが、妹が席を外している間に済ませてしまいたいので」
遠慮のない物言いにムッと顔を顰めながらも、小百合は勧められるまま達也の対面に座った。
「相変わらず貴方たちは私のことが気に入らないようね」
取り繕っても無駄だと感じたのだろう。腰を下すと同時に小百合の態度はざっくばらんなものに変わった。
達也の視線を気にする素振りも無く、ソファに背中を預けて脚を組む。

研究者気質なのか、飾り気も化粧気も少ないパンツスーツ姿なので、目のやり場に困るということは無かったが。

「深雪はね。

実の母が死んでから半年で再婚となれば、心の中にしこりを残しても仕方の無いことでしょう。

大人びて見えてもまだ十五歳の少女ですから」

「……貴方はどうなの？」

「その様な感傷には縁がありません。俺は、そういう風に出来ています」

「……まあ、いいわ。それが本音でも強がりでも、私にはどうしようもないことだから。

でも、私の言い分も言わせて貰うと、貴方たちにとっては半年でも、私にとっては十六年なのよ」

そういえば若作りに見えてこの人は親父と同じ歳だったな、と、達也は世の女性を敵に回すようなことを考えた。

彼女、司波小百合、旧姓古葉小百合は、司波龍郎が四葉深夜と結婚する前、司波龍郎と恋人同士の関係にあり、良質の遺伝子を求めた四葉の横車によって強引に別れさせられたという過去をもつ。その事を知っている達也にすれば、恨み言を口にしたくなる気持ちも分からないではない。

ただそれはあくまで、父親と母親と彼女の問題であって、彼ら兄妹の関知するところではなかった。

母親の生前から父親と彼女が愛人関係にあったとなれば尚更、同情の余地は無い。

「それで、本日はわざわざ、何のご用件ですか？」

無意識の内に本題の先送りを図っていた小百合は、達也の問い掛けにグッと息を詰まらせたが、何とか不自然にならない程度の間で会話を再開した。

「……じゃあ、単刀直入に言うわ。貴方にまた、本社の研究室を手伝って欲しいのよ。

出来れば、高校を中退して」
「それは不可能です。
深雪が一高に通っている間は俺も一高生でいないと、ガーディアンの任務が果たせなくなります」
遠慮のない要求に、遠慮のない拒絶。
「貴方が進学しなければ別のガーディアンが手配されたはずでしょう」
「何処の業界も魔法師は人手不足だ。
いくら四葉でも、そう簡単に代わりのガーディアンは見つかりません」
「自分ほど優秀な護衛はいない、って言いたい訳？」
「深雪の護衛に限って言えば、その通りです」
これは、過去何度も繰り返された遣り取りだった。
ふぅ、と小百合が漏らした大きな溜息は、あながち演技とも見えなかった。
「……貴方の様に優秀なスタッフを遊ばせておく余裕は、うちの会社には無いのだけど」
「遊んでいるつもりはありませんが？
今期も会社の利益に大きな貢献をしているはずですよ、俺は。
先日は、ＵＳＮＡ（北米合衆国。旧ＵＳＡがカナダとメキシコを吸収して出来た連邦国家）の海兵隊から飛行デバイスを大量受注しているでしょう。あれだけでも前期の利益の二十パーセントになるはずだ」
敢えて挑発的に放たれた達也の台詞に、小百合が悔しそうな表情を浮かべた。
達也の指摘には、反論の余地が無かった。
ＦＬＴは元々ＣＡＤの完成品メーカーとしてではなく魔法工学関係の部品メーカーとして知られていた会社であり、ＣＡＤ完成品メーカーとして世間に知られるようになったのは紛れも無くシルバー・モデルの功績、つまりは達也の功績だ。

特に今回の飛行デバイスは、ＦＬＴを特化型ＣＡＤの世界トップメーカーに押し上げると予想するアナリストもいる程の画期的な新製品。

元々は研究員として入社しながら、特に目立った成果を上げられずに管理部門へ異動した小百合からすれば嫉妬せずにはいられない実績だ。

だがそういう個人的感情を別にしても、彼女には「はい、そうですか」と引き下がれない理由があった。

「……じゃあせめて、このサンプルの解析だけでも手伝ってくれないかしら」

そう言って小百合は、ハンドバッグから大きめの宝石箱を取り出し、慎重な手つきで蓋を開けた。

中には赤味を帯びた半透明の玉が一つ。

「……瓊勾玉（にのまがたま）系統の聖遺物（レリック）ですね」

魔法研究に従事する者の間でレリック（聖遺物）とは、魔法的な性質を持つオーパーツを意味する。人工物とは断定できなくても、自然に組成されるとは考え難い物質もレリックと呼ばれており、例えばキャスト・ジャミングを引き起こす性質を持つアンティナイトはレリックに分類されている。

尚、本物の聖遺物――例えば八尺瓊勾玉（やさかにのまがたま）――には、研究者の手は届かない。

「何処で出土したんですか？」

「知らないわ」

「なるほど、国防軍絡みですか」

非外資系ではトップクラスの技術を持つメーカーとして、ＦＬＴは軍関係の仕事を受託することも多い。

「解析、と仰いましたが、まさか瓊勾玉の複製なんて請け負ったりはしていないでしょうね？」

小百合の表情が強張ったのを見て、達也は深々と溜息をついた。

「何故そんな無謀な真似を？　現代技術で人工的に合成することが

難しいから『レリック』なんですが」

オーパーツとは“Ｏｕｔ　Ｏｆ　Ｐｌａｃｅ　Ａｒｔｉｆａｃｔｓ”の略。直訳すれば「場違いな加工品」、即ち「出土した時代の科学水準を超えている加工が施されている物」の意味であり、現代の技術で再現できないという意味ではない。

しかしレリックは現代科学技術でも再現が困難だからこそ、「聖遺物」などと大袈裟な名称で呼ばれているのだ。

「……この仕事は国防軍からの強い要請によるものです。断ることは出来ないわ」

その経営判断は、理解できないでもなかった。

ＦＬＴに限らず、魔法産業に携わる企業は実質的に官公需企業であり、魔法産業は軍需産業と言って良い。

ＣＡＤを始めとする魔法工学製品を購入するのは実用レベルで魔法を使用する者、魔法師のみだが、その市場は他の工業製品に比較し極めて小さい。

魔法師の希少性を考えれば、これは当然のことだ。

現在国内で実際に魔法を職業としている魔法師の数と、魔法を学んでいる大学生・高校生の数の合計は、およそ三万人と言われている。

つまり全員が毎年ＣＡＤを買い換えたとしても、ＣＡＤの国内市場規模は年間三万台分しかない。（実際の買換えサイクルはもっと長い一方、一人の魔法師が五、六台のＣＡＤを所有していることも珍しくは無いのだが）

しかも、魔法を振興するという国策上、魔法の補助機器は安く購入できなければならない。

実際にＣＡＤの小売価格は、一般家庭の所得水準で子供に高校の入学祝として買い与えることが出来る程度に抑えられている。

独力では到底一つの産業として成り立たない規模と構造だ。

故に、魔法産業に対して、国家は手厚い助成措置を講じている。

例えばＣＡＤの購入価格の場合、その九割を国が補助している。

店頭で売られている価格は企業が売上単価として計上する価格の十分の一なのだ。
それ以外にも、委託研究の名目で、国は毎年多額の研究費を企業に支給している。
業界最大手のマクシミリアンやローゼンですら、それぞれの政府に逆らえない。それが魔法産業の抱えている宿命だった。
「瓊勾玉には魔法式を保存する機能のあることが最近の研究で分かってきました」
「まだ実証されてはいないはずですが」
「そうね、まだ仮説の段階です。しかし、軍を動かすには十分確度の高い観測結果が得られています。
出来ない、では済まされないのよ」
魔法式を保存する機能の持つ意味は、達也にも理解できている。
もし魔法式を保存するシステムが普及技術として実用化されれば、現代魔法に真の革命が起こる。
魔法の自動化も、半永続的な魔法装置も夢では無くなる。
「――魔法式の保存技術に軍が目をつけるのは、確かに当然のことでしょう。
しかし、今のＦＬＴの業績を考えれば、敢えて火中の栗を拾う必要はないと思いますが……」
「既に賽は投げられているわ」
「何の勝算もなく、ですか」
「勝算ならあります。
貴方の魔法があれば、解析は可能よ」
本音があからさま過ぎる小百合の物言いに、達也は失笑を漏らした。
要するに、彼の頭脳ではなく、彼の異能が目当てという訳だ。
今まで通りに。
「ならば、解析業務を開発第三課へ回すことですね。
あそこならば頻繁に顔を出しています。

そのくらい、ご存知でしょう」
「……」
頷けるはずもない達也の提案に、小百合は案の定、奥歯を噛み締める表情になった。
「それとも、そのサンプルをお預かりしましょうか？」
「結構よ！」
遂に癇癪を起こして、小百合は立ち上がった。
「よく分かったわ！　貴方の力を当てにしたのが間違いだったようね！」
ハンドバッグに宝石箱を押し込んで、小百合は勢い良くターンした。
足早に廊下を進む小百合を、達也は玄関まで見送った。
「貴重品をお持ちだ。駅まで送りましょうか？」
「必要ありません。コミューターで帰りますからっ」
「そうですか。お気をつけて」
継母の刺々しい返事にまるで気を悪くした様子を見せず、達也は慇懃に一礼した。

◇◆◇◆◇◆◇

「深雪」
達也が玄関から声を掛けると、シンプルな長袖のミニワンピースに着替えた深雪が、恐る恐る下りて来た。
「お兄様、あの、……子供じみた真似をして申し訳ございません」
目を合わせようとしない妹の頬を撫で、その頤（おとがい）へと指を滑らせて、達也は人差し指でクイッと上を向かせた。
癖のない髪がサラリと流れ、目元を赤く染めた瑞々しい美貌が露わになる。
「あ、あの……」
まるでキスでも迫られているような体勢に恥じらいながらも、深

雪は兄の眼差しから目を逸らさなかった。
頤に当てられていた指が、再び頬を這い上がる。
深雪はうっとりと、瞼を閉じた。
そして、
「にゃっ！？」
くぐもった、短い悲鳴を上げた。
「な、何をなさるのですか！」
「お仕置き」
一歩下がって真っ赤な顔で睨みつけてくる妹に（いきなり鼻を摘まれたのだから、まあ当然の反応だろう）、達也は笑いながら答えた。
「今回は、これでお終いだ」
「もう……お兄様の意地悪」
拗ねた顔でプイッとそっぽを向いた妹の可愛らしい仕草に、一頻り含み笑いを漏らした後、達也は声を改めた。
「少し出て来る。
しっかり戸締りをして留守番していてくれ」
「お兄様？」
ただ事ならぬ兄の声音に、自分も表情を引き締めて、深雪は短く問い掛けた。
「危機管理意識の足りない女性のフォローに行って来る」
達也が脱いだ制服のブレザーを受け取って、深雪は不快げに眉を顰めた。
「……どこまでお兄様のお手を煩わせれば気が済むのでしょうか、あの人たちは」
「生憎と、見て見ぬ振りは出来ないよ。それに、何も起きない可能性も半々だ」
「分かりました。
お兄様、お気をつけて」
玄関の収納ボックスからグラブとヘルメットを取り出し、コート

掛けのブルゾンを羽織り、足元を二輪用のブーツで固めて、手を揃えた丁寧なお辞儀で見送る深雪に、達也はしっかり頷いた。

◇◆◇◆◇◆◇

自動運転のコミューターの中で、小百合は地球の重力を二倍くらいに感じていた。

言葉にすれば、「やってしまった……」という後悔。

管理部門に移って折衝事にもすっかり慣れているはずなのに、いとも容易く逆上してしまった自分が情けなくて、落ち込まずにはいられなかった。

自分にとって義理の息子に当たるあの少年を前にすると、いつも、平常心を保つのが難しくなる。

その理由も、彼女は自覚していた。

恋敵の息子。

技術者としての才能と実績。

感情が全く読めない、得体の知れない眼差し。

あの少年に見詰められると、自分が人間ではなく、単なる観察対象、単なるモノに堕とされてしまった様な気になって来る。

それは彼を道具として扱っている自分たちの鏡像だ、ということまでは、彼女は理解出来ていない。

分かっているのは、何としてでも今回の仕事に彼を協力させなければならないということであり、自分が短気を起こした所為で、それが難しくなったということだった。

小百合は窓の外へ顔を向けたまま、大きく溜息をついた。

そしてふと目を上げて、妙に交通量が少ないと感じた。

さっきから対向車と全くすれ違っていないことに気がついた。

住宅街ではあるが、まだそれほど遅い時間ではない。

心を覆っていた苛立ちが、不安に替わった。

コミューターのパネルに交通情報を呼び出す。

管制センターのインフォメーションは、故障車を避けるため駅から今いるエリアへ向かう車を迂回路へ誘導している旨、告げていた。
とりあえず合理的な説明がついて、小百合はホッと胸を撫で下ろした。

◇◆◇◆◇◆◇

大型電動二輪で小百合のコミューターを追いかけながら、達也も交通量が少な過ぎると感じていた。
ヘルメットのレシーバーから流れて来る音声情報は、小百合の乗るコミューターのパネルに表示されたものと同じ内容を告げている。
だが達也はそこに、安心できる要素を全く見出せなかった。
故障車が道路を塞いでいるという情報自体は疑っていない。
交通管制システムに介入するのがどれほど難しいことなのかを、達也は、真田と藤林が二人掛かりでハッキングを仕掛けた現場に立ち会ったことがあるので良く知っていた。
しかし、達也たちの自宅から駅までの道、その全てにわたって対向車を無くしてしまう為に必要な全てのポイントで、何台もの故障車が同時に立ち往生しているという状況が偶然作り出されたものだと信じられる程、彼は楽観的ではいられなかった。
管制システムに載って走行している車の所在を突き止めることは、それ程難しくない。
特にコミューターは地域社会共有の交通機関として、システムのクラックによる乗り逃げ盗難を防止する為、常時識別信号を出している。
そしてその信号の見分け方は、特に秘密とされていない。
達也は家を出たときから、小百合の乗るコミューターの位置をトレースしていた。
そして遂に継母の乗るコミューターを視界内に捉えて、その背後をピタリと追走する、交通管制システムのコントロール下にない自

走車を発見した。

◇◆◇◆◇◆◇

コミューターのパネルに警告が点った。

背後から管制下にない自走車が接近していることを示すメッセージだ。

しかし小百合はそれを、特に気にしなかった。

ドライブを趣味にする人間は今の時代にも存在する。

技術畑の彼女は、そういうドライバーが自分の車に交通管制システムの干渉をオフに出来る改造を施したがるものだ、ということを知っていた。

非管制車の接近を一々気にしていては限がないのだ。

一応、シートに深く座り直して、小百合は耳障りなアラームを切った。

◇◆◇◆◇◆◇

非管制状態の黒い自走車が加速したのを見て、達也は一気にモーターの回転数を上げた。

加速では、達也のバイクが勝っている。

だが距離と相対速度の関係で、黒い自走車が小百合のコミューターに接触する方が早かった。

追い越したかと思ったらいきなり鼻先に割り込んできた自走車に、コミューターの衝突回避システムが作動する。

急停止するコミューターに、同じく急停止した自走車から男が二人、駆け寄った。

監視カメラが隙間無く設置されている街路上で、余りに大胆すぎる遣り口だ。

この手口だけで、犯人は密入国者だと検討がつく。市民や正規の

入国者なら、画像情報からすぐに素性がバレてしまうからだ。
達也はヘッドライトの光量を最大にして、コミューターの扉をこじ開けようとしている二人を照らした。
ライトをつけたままバイクを降り、男たちへと突進する。
彼らが眩しそうに手を翳した隙に、達也は懐からＣＡＤを抜き出していた。
一拍遅れて、男たちの一人が拳銃を構え、もう一人が拳を達也へ向けた。
バイクのライトを受けて、その指に鈍く光る、真鍮色の指輪。
その指輪から耳障りなサイオンの騒音が撒き散らされた。
キャスト・ジャミング。アンティナイトにより作り出される魔法妨害の波動。
一人が魔法防御を無効化し、もう一人が拳銃で仕留める。
少人数の魔法師相手には、教科書の様に有効な戦法だ。
普通の魔法師が相手ならば。
拳銃の銃口が達也へ向けられる。
狙いは心臓。咄嗟に回避行動をとっても完全には避けられない狙いであり、明確な殺意を表す照準だ。
しかし男は、引き金を引くことが出来なかった。
引き金を引く前に、拳銃がバラバラになって路上に散らばった。
立ち竦んだ射手は、何が起こったのかを理解する間も無く、ひっくり返った。
太腿を押さえ、路の上でのたうっている。
次の瞬間、指輪の男が肩を押さえてよろめいた。
声にならない悲鳴を上げ、脂汗を流して膝を突き、そのまま気を失って前のめりに倒れる。
極細の針で貫かれたような傷の中で、皮膚と筋肉と血管と神経と骨格の全てが崩壊する激痛に意識が耐えられなかったのだ。
分解魔法・雲散霧消（ミスト・ディスパージョン）による、人体の局所分解。

何処をどう刺し貫けば意識の耐久力を超えた痛みを人体に与えることが出来るか。
何処をどう撃ち抜けば四肢を意識の制御から遮断できるか。
自分の肉体と他人の肉体を使って、達也はそれを熟知していた。
倒れている二人を迂回して、黒い自走車へ接近する。
自走車へＣＡＤを向けたまま、引き金はまだ、引いていない。
圧縮ボンベ式の水素燃料車は、迂闊に攻撃すると大爆発を起こしてしまう。無論、燃焼緩和の安全装置が普通ならば組み込まれているが、安全装置を取り外した車両も自爆テロ用に出回っているのが世界の実情だ。
深雪がいれば爆発など恐れる必要は全く無いが、生憎彼女は留守番中。道路の右手はそれなりに幅のある川だが、左手には民家が立ち並んでいる。家屋や街路への被害を考えれば、強引な手はとれない、と判断したのだ。
しかしそれは、厳しい言い方をすれば、一種の油断だった。
不意に右斜め上より照射された殺意。
達也は半ば反射的に、回避行動を取った。
その行動には、一瞬の遅滞も停滞もなかった。
だがそれでも、超音速で飛来する凶弾をかわすことは出来なかった。
胸に焼け付くような痛みが走った。
銃弾が彼の左胸を貫き、
着弾の衝撃が彼の身体を撥ね飛ばした。

3－（3）　動機（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

3－（3）　動機

相手の狙いは極めて精確だった。
辛うじて急所を外すことには成功したが、肺を貫通している。
銃声が遅れて届いたところからみて、かなりの遠距離射撃だ。にも関らず、達也が回避行動を取らなければ、銃弾は彼の心臓を貫いていただろう。
控え目に言っても、凄腕のスナイパーだった。
達也は転倒した勢いを利用し自ら転がって、小百合の乗ったコミューターの陰に退避した。
撃たれた傷は、既に治っている。普通ならば致命の重傷も、彼の魔法にかかれば一瞬で消え去ってしまう。
だが、痛みを感じない訳ではない。
胸を穿たれ、背中を突き破られた激痛の余韻が達也に脂汗を流させる。
しかし今、幻痛に気を取られている余裕は無かった。
改めて、敵のポジションに当たりをつける。
銃弾の方向と角度、障碍物となる建物の配置から見て、狙撃ポイントは川向こうの商業ビル群。
現在位置からおよそ千メートル。
この距離で人体を容易く貫通し、背中に開いた穴も小さかったことを考えれば、使われた銃弾は尖頭被甲弾。
合成樹脂で作られているコミューターの車体は、遮蔽物としてそれほど役に立たないと考えるべきだ。
しかも厄介なことに、この狙撃手は魔法を使っていない。
相手が魔法を併用していれば、この程度の距離ならば場所を特定するのも難しくない。
だが相手が純粋な射撃技術のみしか使っていないとなると逆に、彼の情報体認識力（エレメンタル・サイト）を以ってしても発見が困難になる距離だ。

路上に倒れている二人組の身体がフワリと浮かび上がった。
黒い自走車の扉が開き、二人の身体を乱暴に吸い込んだ。
二人組を回収する移動魔法を無効化するのは簡単だったが、今は狙撃の脅威を取り除く方が先決だった。
自分を貫いた銃弾の情報体を探し出す。
情報体分析の能力をフル回転させて、銃弾に付随する情報を読み出して行く。
絡み付く体液。
人体の抵抗。
風の影響。
重力。
発射時のガス圧。
銃弾に加えられた諸々の変化が、圧縮された情報となって達也の中に流れ込む。
その中から、狙撃時点の座標の情報を選り分け、拾い出す。
それは、銃弾からその弾道へ、そしてその狙撃手へと、情報を、「世界」の記憶を、時を遡る作業。
現在から過去へ。
そして、
過去から現在へ。
銃弾が発射された時点の狙撃手の位置情報を基点に、イデアに刻まれた状態変化の記録を辿って、現在の座標を突き止める。
達也の心眼は、狙撃手のエイドスに照準を定めた。
相手もまた、こちらへ狙いを定めているのが分かる。
第二射が来なかったのは、弾丸を、防弾アーマーを撃ち抜く為の対人用貫通弾から、遮蔽物の背後の敵を撃ち抜く為の対物高速貫通弾へ切替えていた、タイムラグの所為だ。
狙撃手の物理的な情報を丸ごと掌握している達也には、そこまで見えていた。
幸運だった、と言わざるを得ない。

そう思いながら達也は、人体を丸ごと分解する魔法の、引き金を引いた。

◇◆◇◆◇◆◇

黒い自走車が逃走してからおよそ十分、危険は去ったと判断して、達也はコミューターの陰から立ち上がった。

車内を覗き込むと、小百合が気を失っていた。何時まで経ってもコミューターが再始動しないので、そんなことだろうと予想していたから、動揺は皆無だった。

彼女の身体は上下左右から飛び出したエアバッグによって、緩衝材に梱包されたような状態でシートに埋まっている。

事故から乗員の肉体を保護するシステムは完璧に作動していた。これなら大したショックも受けていないはずだ。

おそらく、精神的な衝撃による意識の断絶だろう。

彼女も端の方とはいえ四葉の一党に連なる人間だから、荒事に多少の耐性はあって然るべきだが、これでは一般市民と何も変わらないな、と達也は思った。（魔法師、そして十師族も「市民」だが、「一般」市民とは言えない）

再利用可能に改良されたエアバッグを収納し、完全自動運転モードで再始動する。

ゆっくりと走り出したコミュータの後ろを、達也は自分のバイクで追いかけた。

◇◆◇◆◇◆◇

小百合を駅まで送って行った後、達也は帰宅するなり、テレビフォンに向かった。

『……街路カメラの方は心配するな。既に処理を始めている』

「ありがとうございます、少佐」

電話先は独立魔装大隊司令部の秘匿回線。
十師族・四葉家の戦闘要員である身分、独立魔装大隊の特務士官である身分を隠さなければならない達也としては、街路カメラの映像から身元を突き止められることを最優先で回避しなければならない。
モニターに映った風間へ向けて、達也は背筋をピンと伸ばして一礼した。
『それにしても随分と思い切りの良い相手だな。都心ではないとはいえ、都内でいきなりライフルをぶっ放すとは』
「油断していたことは否めませんが、恐るべき技量でした」
『魔法は使っていなかったのだな？』
「間違いありません」
『フム……夜間、光学スコープのみで、千メートル級の狙撃を成功させるか』
弾道を誘導する魔法を使えば、必ず、事象改変の反作用が生じる。知覚系の魔法を使えば、必ず、知覚対象にサイオン波が届く。魔法が使われたなら、達也がそれに気付かないということはあり得ない。
『それだけの腕を持つスナイパーを調達できる組織は、世界でも限られてくる。敵の正体は、案外簡単に判るかもしれんぞ』
「よろしくお願いします」
攻撃は最大の防御、というのは、攻撃を受ける前に敵を無力化してしまえばこちらが攻撃に曝されることはない、という意味だ。既に矛を交えている以上、相手がこれ以上手を出してこない限りこちらからは手を出さない、という平和的な対処法は、達也にとって、あり得ない。
『んっ？　一寸待て……』
……今報告が入った。車の方は見つけたそうだ』
黒い自走車はナンバープレートこそ隠していたが、その程度のこ

とでは街中に張り巡らされた防犯目的の街路カメラを誤魔化すことはできない。
何時何処を通ったかが正確に分かっている以上、車体の特定は容易だ。
『こちらで処分しようと思うが、構わないな？』
「お手間をかけます」
風間の念押しに、達也はあっさり頷いた。
逃がした相手は自分の手で、等という無意味な拘りは、彼にとって縁の無いものだった。

◇◆◇◆◇◆◇

予想外の活劇に出演した所為で夕食はいつもより随分遅くなったが、深雪は嫌な顔一つ見せず、フリルの多用されたピンクのエプロン姿で甲斐甲斐しく達也の食膳を用意した。
「……そのエプロン……？」
「気付いて頂けましたか？」
思わず漏らした一言に、深雪は笑顔で振り向いた。
深雪が身に着ける物は、シンプルで大人っぽいデザインが多い。
少女趣味、という表現が適当かどうかは分からないが、ファンシーで可愛らしいイメージのそのエプロンは、達也が初めて見るものだった。
「さっき買っていたのは、それ？」
駅で別れる直前、深雪は美月とエリカに引っ張られてティーンズ向けの雑貨店に連れ込まれていた。
外のベンチで待っていた達也は、思ったより早く出て来た三人に一体何を買ったのか、と訊いてみたが、エリカが「内緒」と繰り返すだけで結局答えは得られなかった。
「美月がエプロンを買い換えるというので、一緒に買ってみたのですが……あの、おかしくありませんか？」

普段身に着けているものとは路線が違う所為か、少し不安げな目付きで深雪がそう訊ねた。
相槌を打つのは簡単だったが、達也は改めて、妹のファッションをじっくりと見てみた。
エプロンの丈がワンピースの丈とほとんど同じである所為か、まるでワンセットのエプロンドレスのようだ。
それも、ミニのエプロンドレス。
肩をグルッと回って背中でクロスする両サイドのフリルと、腰の後ろでリボンの形に結ばれた幅広の紐がキュートで、裾から覗く素足の太腿が艶かしい。
他人にはチョッと見せられない格好だな、と達也は思った。
「とても良く似合っているよ。
自分だけのガラスケースの中に、こっそり飾っておきたいくらいだ」
「……お兄様……それは些か、猟奇的だと思われますが」
台詞だけ聞けば呆れているような物言いだが、表情を見れば照れ隠しだということは一目瞭然だった。
しかしそこを突っ込んだりはせず、達也は笑って箸を取った。

兄妹二人きりの食卓は、大体いつも、深雪が話し掛けて達也がそれに答えるという展開になる。
今日もそれは変わらなかった。
「ところで、あの人の用件は何だったのですか？」
一通り今日のメニューについて語り合った（というほど大袈裟な話ではないが）後、「ところで」と前置きして深雪がそう訊ねて来た。
それは確実に来ると予想された質問だったので、達也の方も、答えを用意してあった。
「仕事を手伝え、というのはいつも通り」
ただそれは、もっともらしい嘘で誤魔化す、という意味ではない。

「なんだけど……今回は知らん顔も出来ないだろうな」
「……難しいお話なんですか？」
深雪の問い掛けには「断ることが難しいのか？」という意味と、「仕事自体が難しいのか？」という意味の、二つの意味が込められていた。
「断るのは……難しくない。小百合さんが短気を起こしてくれたからね」
達也がニヤリと笑って見せると、吊られたように深雪がクスッ、と笑みを溢した。
「だが、断る訳にも行かないだろうな……こうして、サンプルを預かってしまった以上は」
達也の目がテーブルの端へ向かった。
そこには小百合が持っていた大き目の宝石箱が置かれていた。
新たな襲撃者による強奪を恐れて、小百合が無理矢理、達也に預けたのだ。
一応、達也が直接、ＦＬＴのラボへ返しに行くことになっているが……
「サンプル……ですか？」
それは一体何か？　という無言の問い掛けに応えて、達也は宝石箱を開けた。
「瓊勾玉（にのまがたま）系統の聖遺物（レリック）だ」
覗き込む深雪に、その正体を教える。
深雪は両手で口元を抑え、目を見開いて達也を見た。
「……何故あの人はそんな物を……」
「軍の依頼だ。複製を注文されたらしい」
「そんな無茶な……」
レリックがどんな物で、それをコピーするというのがどんな無謀な試みなのか、達也ほどではないにしても深雪も理解していた。
「瓊勾玉には魔法式を保存する効果があるそうだ」
「……」

しかし次の達也の言葉で、深雪は絶句すると共に何故軍がそんな無茶な注文をしたのかを理解した。

魔法式が事象に付随する情報体・エイドスに干渉し、情報体を一時的に書き換え、魔法式に記述されているとおりの事象の改変を行う――これが、魔法だ。

魔法式は魔法を発動する為に最も重要な役割を果たす道具であり、ある意味で魔法そのものとも言える。

魔法式により事象を改変する為には魔法式をエイドスに投射しなければならないので、魔法式を保存するだけでは他の物質・現象に対して魔法を掛けることは出来ない。

一方、魔法式が保存されるのであれば、自身に掛けられた魔法の効果を永続させることが出来る、かもしれない。本来のエイドスに代わる付随情報体として魔法式を保存することが出来れば、それが可能だ。

つまり魔法式を保存できる物質は、魔法の効果を保存できる物質となり得るのだ。

理屈の上では、温度を書き換える魔法の魔法式を保存すれば数百度の高温、マイナス数十度の低温を何のエネルギー供給もなく維持し、運動速度を書き換える魔法式を保存すれば擬似的な永久機関を実現出来る。

「……万有引力を書き換える魔法式を保存することで、魔法師が継続的に魔法を掛け直す必要のない、プラズマ格納用の重力容器を制作することも、理論的には可能だ。

親父たちに協力するつもりはないが……俺にとっても興味深いサンプルだよ。残念なことにね」

「でしたらそのサンプルを使って複製方法を研究なされた上で、成果を隠匿されては如何ですか？」

わざと自嘲的な笑みを浮かべた達也を、深雪はおどけた口調で唆した。

「そうだな……」

達也はまんざらでもなさそうな表情で頷いた。

◇◆◇◆◇◆◇

家事にはなるべく手を掛ける、達也の世話を機械任せにしない、それが深雪のポリシーだが、食後の食器洗いまで手作業で行うほど拘ってはいない。

彼女もまだ学生で、やらなければならないことが山のようにあるので、ある程度の取捨選択は必要だった。

夕食で使ったお椀やお皿を全てＨＡＲ〔ホーム・オートメーション・ロボット〕に委ねて、深雪は勉強机に向かっていた。

魔法科高校とはいえ、魔法以外の勉強をしなくても良いということにはならない。

試験が無い分、日々の課題が重視される。

今、宿題に取り組んでいる科目は数学。

どちらかと言えば、苦手科目だ。

さっきからどうしても解けない問題があって、深雪は一旦、ディスプレイから目を離した。

対話型のインターフェイスが進歩した現代のコンピューターの処理能力を以てすれば、余程専門的に数学を扱う人間以外、自分で計算問題を解いたりする必要は無いはずなのだが、数学的思考は新しい魔法を組む際の助けになるから、という理由で兄から手を抜かないように命じられている。

深雪は「フウッ」とアンニュイなため息を吐いた。

こういう時は、万能な兄が羨ましく思えてくる。

お兄様に教えていただこうかしら……とぼんやり考え、慌てて、ブンブンと音がしそうな勢いで首を振った。

達也は早速、あのレリックの分析に取り掛かっているはずだ。

ただでさえ自分は達也の自由を束縛しているのだから、これ以上は出来る限り煩わせてはいけない、と深雪は思った。

達也が第一高校に進学したのは、深雪が一高に進学したからに他ならない。

そもそも達也の知識と知力があれば、高校に通う必要はないのだ。国立魔法大学に進学するためには魔法科高校卒業資格が必要、とは言っても、何事にも例外はあるのであって、例えば「基本コード」発見のような学術的に意義の高い成果を上げた者については魔法科高校卒業資格の有無に関わらず受験資格が与えられる（入学資格ではなく受験資格であるところがミソ）。

達也がその気になれば、すぐにでも受験資格を得られるだろうし、合格することも容易いに違いなかった。

兄の目指しているものが、結局、魔法大学のような高等研究機関にしかないことを知っている深雪は、高校生生活が彼にとって回り道でしかないことを理解していた。

達也がそうしなければならなかった理由は、彼が深雪のガーディアンだからである。

ガーディアンとは、四葉において、特定の要人を自分の命を犠牲にしてでも守る役目を負わされた者たちのこと。

その役割は、表面的には、ボディガードと変わらない。

では何故ボディガードではなくガーディアンと呼ぶかというと、一時的に雇い入れるボディガードと区別する為だ。

四葉のガーディアンは生まれたときから決められている役目ではないが、一旦選ばれたならば、その任期に終わりはない。二十四時間体制、週七日勤務は普通のボディガードも変わらないが、ガーディアンには辞める権利がない。護衛対象から解任されれば辞めることもできるが、これまで四葉のガーディアンは例外なく殉職でその生涯を閉じている。

達也がある程度自由に行動できるのは、離れていてもガードが可能だからだ。魔法は物理的距離に左右されない。二人の間にはテレパシーこそ通じていないが、達也は無意識領域の一部を使って深雪の周囲を常時、「事象に付随する情報体を認識する視力」で監視し

ている。いや、監視するように魔法を掛けられている、と言った方が正確か。

しかしいくら達也でも、眠ったまま魔法は使えない。

距離は関係ないが、生活サイクルを合わせる必要はある。

休日や長期休暇中は深雪の方で達也のサイクルに合わせることが出来るが、学校のある日は達也が深雪と同じサイクルで、つまり学校の時制に合わせたサイクルで行動しなければならない。それに、いくら魔法は物理的距離に左右されないと言っても、やはり近くにいる方が様々な脅威に対処しやすいのは確かだ。

しかし、それもこれも全て、深雪が達也に与えられたガーディアンの任を解かなかったから生じた事情。

深雪が達也を解任すれば、別の、おそらくは同性同年代のガーディアンが任命されたはずだ。いくら魔法師は人手不足といっても、深雪は四葉次期当主の最右翼なのだから。

もっとも、深雪が達也のガードを望んだのは、自分の我が侭ばかりではない。

ガーディアンの任務は四葉の中で最優先とされている。

深雪のガーディアンを務めている間は、別の、つまらない用事を言いつけられることはない。

汚れ役を押しつけられることもない。

父親も父親の後妻も、表だって強いことは言えない。

達也に自分たちの手伝いを強要は出来ない。

そうした事情を考慮した上で、同じ高校に進学して欲しいと望んだのだが――その根底には、兄離れできない自分の依存心があることを、深雪は自覚していた。

もう一度、「フウッ」と深雪はため息を漏らした。

ままならない自分の心と、ままならない宿題の進み具合に。

一々教えてもらわなくても、出来上がった答案だけ見せてもらえばいい、と深雪が思いついたのは、それから三十分後のことだった。

◇◆◇◆◇◆◇

翌日の放課後。

達也はプレゼン用の資料を揃える為、図書館へ向かった。

本音を言えばサンプル（瓊勾玉系レリック）の解析に専念したいところだったが、論文コンペの準備（の手伝い）も疎かには出来ない。

図書、と言っても、今ではほとんどがデジタル化されていて、紙の書籍は所蔵データの極一部。オンラインで閲覧出来れば態々館内に足を運ぶまでも無いのだが、達也たち論文チームが必要とするような文献は学内ネットワークにさえ解放しないという厳重な管理が行われている。

それに、本当に貴重な資料は敢えてデジタル化せずに、地下に保管されていたりする。

面倒だ、と感じる反面、探求心を刺激されてワクワクしてしまうのも否めない。

簡単に手に入らないものの方が、何となく価値がありそうな気がする、という錯覚は、達也も世間並みに持ち合わせているのだった。

しかし残り日数が余り無いので、手間の掛かる紙の文献を当たってみることは諦めなければならない。コンペティション、なのだから勝敗以上に期日を無視出来ない。ある程度の割り切りは不可欠だ。

空きブースを探して閲覧室を奥へと進んだ達也は、個室タイプの閲覧ブースから知り合いが出てきたのに出会した。

「あら、達也くん」

「七草先輩、『読書の秋』ですか？」

真由美と最後に会ったのは約一週間前、「久し振り」というほどではない。

達也は当たり障りの無い挨拶を返した、つもりだったが、真由美は不服そうに少し口を尖らせた。

「あのね、達也くん……私、三年生なんだけど」
「はぁ……存じております」
分かりきったことを然も重要事の様に言われて、達也は戸惑いを禁じ得ない。
「高校三年生といえば大学受験でしょう？　何で受験勉強って発想が出て来ないかなぁ……」
私って、そんなにお気楽そうに見える？」
真由美の説明は達也をますます困惑させることとなった。
「……七草先輩は、推薦が決まっているのではありませんか？」
成績優秀、生徒会長を務め、魔法競技アスリートとしても有名で、獲得した優勝トロフィーは数知れず。
これで推薦がつかなかったら、誰を推薦するというのだろうか。
しかし、真由美の回答は達也の予想の斜め上を行った。
「あれっ？　達也くんは知らないんだ？
私、推薦は辞退したの。
生徒会役員経験者は推薦を辞退するのが当校の不文律なのよ」
「……初耳です」
「魔法大学の推薦枠は魔法科高校毎に十人、って決まっているからね～
ウチは他校より受験する人が多いから、枠は有効に使おう、ってことになってるのよ」
「……つまり、ボーダーラインの生徒を優先的に推薦する、と？」
「それはチョッと言い過ぎだけど……まあ、そんなものかな」
「それは……」
ある意味、合理的かもしれないが、やはり何かが間違っているのではないだろうか。
達也はそう思ったが、何の疑いも抱いていない真由美の顔を見て、指摘するのを止めた。
言葉を濁した達也に「んっ？」とばかり真由美は小首を傾げたが、すぐに興味が他所へ向いたようだった。

「ところで達也くんは何しに来たの？」
ここにいるのが意外だと言いたげな口調が些か心外だった――達也は図書館の常連で、間違いなく真由美より頻繁に利用している――が、別に隠すことではない。
「論文コンペの資料を集めに来たんですよ」
「ああ、そういえばリンちゃんのお手伝いに指名されたんだったわね」
（……お手伝い、ね）
他人から見れば、まあそんなものだろう、と達也は思った。
同じチーム戦といっても、個々の活躍が目に見えるモノリス・コードのような競技と違い、論文の作成は各メンバーの貢献度が外から見えない。
プレゼンテーター以外は単なるアシスタントと思われても不思議は無い。
「……っと、こんな所で立ち話してちゃ他の人の邪魔だし、中に入ろっか」
そう言って真由美は、出てきたばかりのコンパートメントを指差した。
「使うでしょ？」
又貸しは本当はマナー違反だが、扉の前に列が出来ている訳でもない。
達也は遠慮なく頷いた。

三人入れば身動きも難しくなる一人用の閲覧室は、二人でもかなり窮屈に感じられた。真由美は女性としても小柄な方だが、達也は成人男性の平均を上回る体格をしている。特に大男という程ではないが、肩幅があるので座ると結構場所を食う。
端末の前に座った達也と予備のスツールに腰掛けた真由美は、肩を寄せ合うような格好になった。
狭い部屋の中で、美少女と二人きり。

しかし、こういうシチュエーションでも、達也は興奮も萎縮もしない。真由美はそのことを、過去の経験から学んでいた（彼女が自分のことを「美少女」と見做している件については、まあ、客観的な認識だから横に置くこととする）。

触れ合う肩を気にする様子も無く慣れた手つきで端末を操作する達也に、苛立ちも落胆も逆説的な警戒も無く、真由美は中断していた話を再開した。

「達也くんには急な話だったと思うけど、よろしくね？」

「……確かに急な話でしたね」

前置きも無く当然の様に、唐突に話し掛けられて、達也は少し戸惑ったようだが、頭の中で中断前の会話と繋ぐことに成功したようで「何が」とは訊き返さなかった。

「しかし七草先輩が気にすることではないのでは？」

相変わらず目をモニターに固定したまま、達也は余り関心無さそうに問いを返した。

「それはそうだけど。

でも今回のテーマはリンちゃんにとって、コンペに勝つだけ以上の意味を持ってるからね」

「そういえば、先輩のところに代役の話は来なかったんですか？」

「私じゃ手に負えないテーマだから。

それに私、複雑な工程を持続的に作用させる魔法は余り得意じゃないし」

質問と答えが少しかみ合っていないような気がしたが、真由美の得手、不得手を知悉している鈴音が予め候補から外した、という意味なのだろう、と達也は解釈することにした。

「リンちゃんには色々と助けてもらっているから、こんな時に手伝えないのは私自身、残念なんだけど……」

独り言なのか彼に話し掛けているのか、判り辛い口調でフェードアウトした真由美の台詞に、相槌の打ち様も見えず、結果的に達也は無言でデータの抽出作業に指を走らせた。

「……だから達也くんには今回、頑張って欲しいのよ。達也くんならリンちゃんのことを助けてあげられると思うから」
「……市原先輩は今回のテーマに、何か特別な思い入れがあるんですか？」
達也がそんなことを訊ねたのは好奇心からと言うより、単なる激励を超えた力の入り方がふと気になったからだった。
「ある意味、リンちゃんの夢を実現する為の第一歩だからね」
それだけでは具体的なことが何も分からない回答だったが、達也はそれ以上問い詰めるつもりは無かった。
鈴音がどんな夢を抱いていても、自分には余り関係無さそうだ、と思ったからだ。
しかし、そんな達也の思考を他所に、真由美は言葉を切らなかった。
「魔法師の地位向上。
それも、政治的圧力によってではなく、経済的必要性によって、魔法師の地位を変える。
魔法を経済活動に不可欠なファクターとすることで、魔法師は本当の意味で兵器として産み出された宿命から解放される。常駐型重力制御魔法式熱核融合炉はその為の有力な手段になる……って、リンちゃんはずっと言っているわ。
今回の論文作成はその為の具体的な第一歩なの」
達也は思わず振り向いていた。
見開いた目で凝視され、真由美がたじろぎを見せた。
「っ、なに？」
「……驚きました。市原先輩が全く同じ事を考えていたとは……」
「えっ？　達也くんも？」
目を丸くして上ずった声で問い返した真由美に、動揺を留めた表情で達也は頷いた。
経済的便益の提供による魔法師の地位向上は、実を言えば鈴音や達也のオリジナルではない。

支持者が少ないながらも、このアイデアが提唱されたのは、もう二十年以上前のことだ。

しかし未だに、実現の兆しすら見えない。

今でも、魔法師の主な用途は、軍事目的。

世界情勢が小康状態の現在は、実際に兵器として使用される事例は減少している。

しかし魔法師の開発――魔法の開発ではなく――は、軍事利用を目的とするものが依然として九割を占めていると言われている。

そしてそれは、現状では仕方の無いことだった。

民生に転用可能なほとんどの魔法は、機械技術で代替できる。

温度をコントロールする技術も、物体を加減速する技術も、魔法ほど劇的な効果は得られないとしても、社会活動に必要なレベルであれば非魔法技術で安定的に供給することが出来る。

わざわざ魔法で代替する必要はない。

高度に発達した自動機械を魔法師に置き換える必要は無い。

機械を操作し、プログラムするのに、魔法技能は必要無い。

現在の科学技術では実現不可能なテクノロジーが魔法により実用化され、それが社会に必要とされる、そんな状況が作り出されない限り、「魔法師の解放」は理想主義者の空想に過ぎない。

その一方で、常駐型重力制御魔法式熱核融合炉もまた、達也たちのオリジナルではない。

こちらは核融合炉の研究が行き詰った五十年前から、魔法によって実現できないかどうかが研究されている。

しかしこの研究も、現在では下火となっている。

太陽光エネルギーサイクルが人類のエネルギー需要を、今のところ余裕を持って賄っているからだ。

魔法師の地位向上と常駐型重力制御魔法式熱核融合炉の実現を結びつけて論じる者は、少なくともこの二十一世紀末においては、ほとんど見ることが出来ない。

「こんなマイナーな思想の持ち主が、こんなに身近にいるとは思い

ませんでした」
　驚いたというよりも寧ろ感心したように呟く達也に、真由美は何故か、ジトッとした目を向けた。
「……フ～ン、良かったわね。リンちゃんと気が合って」
　目付きだけでなく、声音までご機嫌斜めを主張している。
「いえ、別に気が合うとか合わないとかいう問題では無いと思いますが……市原先輩と俺では、方法論が全く違うようですし」
　何を拗ねてるんだろう、と思いながら、達也の回答もつられたように言い訳がましさを帯びていた。
「でも基本コンセプトは同じなんでしょ？　達也くんって、実はリンちゃんみたいなのがタイプなの？」
「はぁ？」
「こーんな美少女と肩寄せ合ってお話してるっていうのに、全然手を出す素振りも無いと思ったら。
　ゴメンねぇ、お姉さん、子供体型で」
　一体全体、この人は何を言い出したんだ？　というのが達也の偽らざる感想だった。
　大体、研究テーマが同じだからといって常にパートナーになる訳ではなく、寧ろライバル関係になる方が多いのだし、真由美は背が低いだけで決して子供体型ではない。寧ろグラマーで成熟した体型だと彼も思っている。
　解かなければならない誤解が多過ぎて、一体何処から手をつければいいのか、達也は迷った。
「……俺に露出性癖は無いんで、監視カメラの前で女性に手を出したりはしませんよ」
　達也も相当困惑していたのだろうか。
　迷った末に選んだファースト・アンサーは、余り適当なものではなかった。
「えっ……？」
　意味深なようでいて実は深く考えていない達也の回答に、真由美

はソワソワと視線を彷徨わせ始めた。
「えっと、じゃあ、カメラや人目がなかったら？　そうね、例えば、二人きりでホテルに部屋を取ったら？」
「先輩の据え膳なら、遠慮なくご馳走になります」
ガタガタッ、と音を立てて、赤面した真由美がスツールごと壁に密着し、狭い室内で精一杯、彼から距離をとったのを見て、達也はようやく自分の失言に気がついた。
思いつきの発言を繰り返した結果、あらぬ誤解を与えてしまったようだ。
しかし、これ以上言い訳しても更に墓穴を掘ってしまいそうな気がしたので、会話が途切れたのを幸いとばかり、達也は真由美から視線を外し、資料集めの作業に専念した。
達也の答えに身の危険を感じた——はずの真由美は、何故か、閲覧室を出て行こうとはしなかった。

3－（4）　忍び寄る影（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

3－（4）　忍び寄る影

学校に対する論文提出を三日後に控えた夜、自宅のワークステーションでデータ処理をしていた達也は、ホームサーバーがアタックを受けているのに気がついた。
複数経路からの同時アタックは、素人ハッカーの手並みではない。情報窃取を生業とするプロの仕事だ。
ならばおそらく、たまたまアドレスを発見したのではなく、この家のグローバルアドレスを狙い撃ちしたものだろう。
何度撃退されても、しつこくアタックを繰り返している。
相当な執念だった。
またアドレスを変更しなければならないな、と口に出さずにぼやき、ため息を吐きながら、達也は逆探知プログラムを立ち上げた。

◇◆◇◆◇◆◇

翌日の昼休み。
達也はカウンセリング・ルームを訪れていた。
話している相手は遥。
無論その内容は、思春期の悩みなどではない。
「……ですが、途中で接続を切られてしまいましてね。結局、攻撃元は掴めませんでした。」
嫌がっていることを隠そうともしていない――あるいは、殊更嫌がって見せている――表情はカウンセラーにあるまじきものだが、達也の用事がカウンセリングにないことを考えれば、そして過去の経緯を考慮すれば、遥を一概に責めることは出来ないだろう。
「……それで？　言っとくけど、私にはネットワークチェイスなんて出来ないわよ」
遥のふて腐れた声に達也は失笑しかけたが、これ以上ヘソを曲げ

られると困るので顔には出さなかった。
「分かっていますよ、先生の得意分野は。そこまでお手間を取らせるつもりはありません」
「じゃあ何？」
遥の顔に警戒の色が浮かんだ。
達也がこういう風に、殊更もっともらしいことを口にする時はかえって何か裏があるのではないかと、すぐさま疑ってみる程度には彼女も学習しているのだ。
「最近、魔法関係の秘密情報売買に手を出している組織について、ご存知の範囲だけでも教えて頂けないかと思いまして」
達也が「まあまあ」という感じの愛想笑いを浮かべているのを見て、遥は嫌そうに顔を顰めた。
「……あのね、司波君。私にも守秘義務があるんだってことは、分かってくれてるのよね？」
「無論です」
「……」
遥の唇が「い」の形を作って止まった。
多分「いけしゃあしゃあと……」と言いたかったんだろうな、と達也は思った。
何故なら、彼自身、そう思っていたからである。
だからといって、心は痛まないのだが。
「……先月末から今月の初めにかけて、横浜、横須賀で相次いで密入国事件が起こっているわ」
大きな溜め息が聞こえてきそうな口調で遥が話し始めた。
一度甘い誘いに乗ってしまうと中々縁を切れないもの。それは諜報に携わる者にとって情報提供者を作り上げるための初歩的なノウハウだった。
それを自分が仕掛けられるなんて……と、遥は内心、そう臍を噛んでいるに違いない。
「県警と湾岸警備が合同で捜査しているんだけど、目立った成果は

あがっていないようね。
それと時期を同じくして、魔法関係の記事を多く扱っている出版社を狙った窃盗事件が相次いで起こっている」
「無関係とは思えない、ということですか」
「その連中だと、決まった訳じゃないけどね。
司波君。
論文の提出はオンラインじゃなくて、ディスクに入れて持っていった方が良いと思うわ」
その最後のアドバイスだけは、投げやりな心情が混入していなかった。
改めて真意を確認しようとした達也から、遥はスッと目を逸らしてデスクに向かった。
これ以上は話せない、という意思表示。
達也も引き際は心得ていた。

◇◆◇◆◇◆◇

放課後の風紀委員会本部で、達也は五十里相手に、昨晩の不正アクセスの顛末を話していた。
「……それで、被害は無かったのかい？」
「それは大丈夫です」
心配そうに身を乗り出した五十里の身体を押し止める様に両手を前に翳して、達也は苦笑気味に首を振った。
制服を換えればそれだけで「背の高い中性的な美少女」に早変わり、の五十里に迫られるのは、それが物理的な距離としての意味しか持っていなくても、余り居心地のいいものではない。
無論、そんな内心を表には出せないので、不自然に仰け反らないよう、注意が必要だったが。
「それより、五十里先輩の御宅は大丈夫ですか？」
五十里は一瞬キョトン、とした後、眉と声を顰（潜）めた。

「……それってもしかして、クラッカーの狙いは……」
囁く声が妙に色っぽかった。
同性の友人が少ないのが悩み、と以前に聞いたことがあるが、これは嫌われているのではなく敬遠されているのだろうな……と、口に出す答えとは別に、達也は思った。
「クラッカーのコマンドを見ると、どうやら魔法理論に関する文書ファイルを狙っていたようです。
時期的に言って、コンペ絡みの可能性を否定出来ません」
時期的に、と言えば、本当はもう一つの要因の方が可能性が高いのだが、そこまで正直にはなれなかった。
それに、用心するに越したことは無いのだ。
達也の言葉に五十里は益々眉を顰め、その類の兆候が無かったかどうか考え込む素振りを見せた。
「……今のところ心当たりは無いけど……その話、市原先輩にもしておいた方が良くないかな」
「そうですね」
達也も元よりそのつもりだったので、五十里の提案に即、頷いた。
「啓、お待たせ～」
そこへ語尾に音符が踊っていそうな上機嫌な声が割って入った。
返事を待たずにドスンと音を立てて五十里の隣に座り、彼の腕を抱え込んでじゃれ付き始めたのは、言うまでも無く花音だった。
「達也くん、久し振りだね」
仕方が無いな、という苦笑交じりで達也に声をかけてきたのは、一緒に入ってきた摩利だ。
約十日ぶりの再会が「久し振り」に該当するかどうかは微妙なところだと思うが、先月まで学校がある日は毎日の様に顔を合わせていたことを考えれば、久し振りと感じるのも当然かもしれない。
「ええ、お久し振りです」
達也は立ち上がり、今まで自分が座っていた席を摩利に勧めた。
「おや、ありがとう」

摩利は席を譲り合ったりせずに、ニッコリ笑って腰を下した。
相変わらずハンサムな女性(ひと)だな、と思いながら「どういたしまして」と応え、自分は椅子を一つ運んで来て摩利の横に座った。
「それで達也くん、花音の仕事ぶりはどうだい？」
いきなり予想外の質問だった。
まあ、前委員長としては現委員長の仕事ぶりが気になるのも無理ないかもしれないが、彼が五十里と共に呼び出されたのはそんな話をする為ではないはずだった。
「摩利さん！？」
しかし花音の慌てぶりを見れば、質問の意図も分かろうというものだった。
実に微笑ましい先輩後輩関係ではないか。
「一緒に巡回するのは既に止めていますから、そちらの方は存じませんが……」
あんまり微笑ましかったので、達也も二人の関係に倣うことにした。
「整理整頓はキチンとやって頂いています。特に捨てるのがお上手ですね。時々思い切りが良すぎると感じることもありますが」
真面目くさった表情、抑揚の無い口調で達也が告げると、摩利と花音が揃って居心地悪そうに身動ぎした。
「……司波君はああ言ってくれてるけど、花音はもうチョッと自分で事務処理もしなきゃダメだよ？
僕を頼るだけならまだしも、そうでない時はほとんど司波君に押し付けてるじゃないか」
「……だって苦手なんだもん。そういうのって適材適所だと思うんだよ」
拗ねた口調と甘えた仕草がいつもの――五十里と一緒にいない時の――凛々しい姿と大きな落差(ギャップ)を作り出している。それを見て、達也と摩利は苦笑を漏らした。
「……さて、その話は又、別に機会を設けるとして……」

もうこの辺でいいか、という気分になった達也は、「本題に入りましょう」と摩利を促した。
「フム、そうしようか。
実は、論文コンペの警備の相談なんだが」
「警備？　もしかして風紀委員会が警備を担うのですか」
「そうだ」
学外で行われるイベントに、生徒による「警備」というのは奇妙に思えたが、違和感を表しているのは達也だけだ。おそらくこれは、毎年のことなのだろう。
「警備と言っても、会場の警備ではないよ。そっちは魔法協会がプロを手配する。
相談したいのは、チームメンバーの身辺警護とプレゼン用資料と機器の見張り番だ。
論文コンペには『魔法大学関係者を除き非公開』の貴重な資料が使われるからね。そのことは外部の者にも結構知られている。
その所為で時々、コンペの参加メンバーが産学スパイの標的になることがあるんだよ」
随分とタイムリーな話題に、達也は少し驚いてしまった。可能性があるとは思っていたが、正直なところ意外感を禁じ得ない。
「……例えば、ホームサーバーをクラックするとかですか？」
「……いや、所詮は高校生のレベルだからな……スパイと言っても、チンピラが小遣い稼ぎを企むくらいでネットワークに侵入なんて大それた真似をしでかした例は聞かないが……」
摩利の答えに、それはそうだろうな、と達也は思った。
現代において、ネットワークの不正侵入はそれだけで重罪だ。ネットワーク内の情報の窃取は強盗よりも重い刑罰が科せられている。データの改竄は殺人未遂と同レベルだ。
ネットワークのセキュリティが強化されたことも相俟って、ネット犯罪は職業犯罪者にとって、割に合わない商売になっているのである。

「むしろ警戒すべきは、置き引きや引ったくりだ。四年前には、会場へ向かう途中のプレゼンテーターが襲われて怪我をした例もある。
そこで各校では、コンペ開催の前後数週間、参加メンバーに護衛を付けるようになったんだよ。
当校でも無論、毎年護衛をつけている。
護衛のメンバーは風紀委員会と部活連執行部から選ばれているが、具体的に誰が誰をガードするかについては当人の意思が尊重される」
「啓はあたしが守ってあげるから」
ここで当然！　と言わんばかりに花音が口を挿んだ。
実に微笑ましい、と達也は思ったが、今回は苦笑も失笑も漏らさずに済ませた。
「……まあ、五十里も異論は無さそうだし、そっちは決まりだな。
当然、補佐は付けるが……花音、自分が馬になって蹴飛ばしたりするなよ？」
「ひどっ！　しませんよ、そんなこと。あたしはそこまで子供じゃありません」
ぷくっ、と頬を膨らませた顔を見ると、「子供じゃない」という発言は今一つ説得力に欠けたが、「子供じゃない」三人は暖かい目でスルーした。
「市原には、服部と桐原がガードにつくことが、既に決定している」
「部活連会頭自ら護衛ですか」
「市原に頭が上がらないんだろ、服部は」
達也の棒読み質問に、摩利が人の悪い笑顔で答えた。
「さて……問題は、君をどうするか、なんだが」
「必要ありませんよ」
人の悪い笑顔のままで訊ねた摩利に、達也は一瞬も迷わず即答した。
「まあ、そうだろうな」
そして摩利も、再考を促す素振りも無く頷いた。
「君に護衛を付けたって壁役にしかならんだろうし、寧ろ足手纏い

になる可能性の方が高いからな。
分かった。服部の方にはあたしから伝えておこう」
摩利の答えに、達也は今更ながら首を傾げた。
「ところで、何故渡辺先輩がそのようなことを？」
敢えて声に出さなかった部分を補うと、何故、現委員長の花音ではなく、引退した前委員長の摩利が風紀委員会と部活連の調整で骨を折っているのか、という問い掛けだった。
「……いや、何故ということはないが……」
言葉を濁した摩利に向けて、達也は軽く眉を上げて見せた。
過保護ですね、という彼のメッセージはキチンと伝わったらしく、摩利は決まり悪げにそっぽを向いた。

◇◆◇◆◇◆◇

第一高校の購買部の品揃えは「高校の売店」のレベルを大きく上回っている。
魔法科高校九校はどこも言えることだが、一般の商店で入手困難な魔法実習関係の機材を生徒が苦労せず手に入れられるように、必要に迫られて拡充されたのだ。
それでもやはり学校の売店であることに変わりはなく、校内でどうしても手に入らないものは外に買い出しに出なければならない。
そしてこれも九校に共通のことだが、魔法科高校にはその門前町とでも言うべき商店街が形成されており、校内の購買部で揃わない機材、消耗品、書籍、雑貨もここでほとんど買いそろえることが出来る。
一高前の商店街が特に充実しているのは既に触れたとおりだ。
達也と五十里は、購買部で偶々在庫切れを起こしていた３Ｄプロジェクター用の記録フィルムを購入する為、駅前の文具店へ向かっていた。
原稿の校内提出日が明日とあっては、購買部の入荷を待ってはい

られなかったのだ。
「わざわざ先輩たちについて来て貰わなくても大丈夫でしたが……」
既に半分以上の道程を消化しているにも関わらず達也がこう言ったのは、上級生の手を煩わせるのが申し訳ないという気持ちも確かにあったが、その一方で人目を憚らずベタベタしている花音に辟易しているという面もあった。
隣の芝生は青い、というのは、逆もまた真であるらしい。あるいは、誰しも他人のことは良く分かるということか。
いちゃついているのが花音だけで、五十里はどちらかと言えばそれを持て余し気味に見えるのでまだ救いがあるのだが。
ちなみに深雪は学校に残してきている。花音には五十里の護衛という大義名分があるが、深雪は達也が一時的に外出するからといって生徒会の仕事を放り出す理由がない。今頃は、花音が同行していることを知っているから余計に、苛々しながら端末を叩いていることだろう。
「いや、やっぱり悪いよ、司波君だけに任せちゃうのは。僕もサンプルを確認しておきたいし」
そして基本的に生真面目な五十里がこう答えるのも予定調和だった。
まあ達也も、今更二人を追い返せるとは思っていない。今の台詞は一種、愚痴の様なものなので、それ以上押し問答したりせず、メゾソプラノの不気味な含み笑いを聴覚からシャットアウトすることにした。
一旦無視すると決めてしまえば楽なもの。この辺りは達也のお得な部分だろう。
どうしても遅くなりがちな歩調でそれから五分を費やして、目的の店にたどり着いた。
そこでもさっさと買い物を済ませ、ついでに買いたい物があるという花音を五十里に預けて店の外で待つ。
ようやく独りになって清々しているところで、達也は自分を窺い

見る視線に気がついた。
尾行された覚えはない。高校生らしい（？）睦言に煩わされていても、周囲への警戒は怠っていなかった。
どちらかと言えば、先回りされていた感じだ。
この店は学校から駅への一本道の途中、寧ろ駅前と言っても良い所にある。
駅で張り込んでいたのだろうか。
どうしようか、と迷ったところに、買い物を終えた五十里と花音が出て来た。
「お待たせ……どうしたんだい？」
出て来るなり即、訊ねた五十里の感性に、達也は舌を巻いた。
そんなに分かり易い顔はしていなかった。
その証拠に、花音は「んっ？」という感じで小首を傾げている。
五十里は遅延発動術式や条件発動術式のような設置型魔法が得意ということだが、この観察力、本当は作用系よりも知覚系の方が向いているのかもしれない。
「いえ、どうも監視されているようなので、どうしようかと」
特に隠す必要は感じなかったので、達也は五十里の問いに正直に答えた。
だが、その答えを最後まで言い切ることは出来なかった。
「監視？　スパイなの！？」
どうしようかと、の次に「思いまして」を続けようとしたタイミングで、花音が割り込んできたのだ。
大声で。
それは曲者に対してわざわざ「逃げろ」と呼び掛けているようなもので、案の定、監視の視線が外れ、気配が遠離（とおざか）っていく。
しかし花音も、流石は摩利から後釜に選ばれるだけのことはある。
短く「どっち？」と訊いただけで、達也が目を向けた方へ迷う素振りも見せず駆け出した。
「花音、魔法は」

「分かってる！　あたしを信用しなさい、啓」
信用できないからこそ念を押したのだろうが、出遅れた五十里と一時的に花音の代理を務めなければならなくなった達也は、遠ざかる声を見送るしか出来なかった。

◇◆◇◆◇◆◇

花音は同世代トップクラスの魔法師であると同時に、陸上部のスプリンターでもある。
流石に非魔法師のトップアスリートと対等に競う脚力は持っていないが、一般的な高校生が相手なら、相手が男であっても、そうそう引けを取るものではない。
スカートを翻して疾走する花音は、すぐに、逃げて行く小柄な人影を視界に捉えた。
その少女は、彼女と同じ制服を着ていた。
その事に意外感を覚えながらも、案ずるより産むが易し、考え込むよりまず動くがモットーの花音だ。
追いかける脚は鈍らない。
たちまち距離を詰めて、あと十メートル、まで迫ったところで、逃走する少女が肩越しに振り返った。
マスクもサングラスもない、素顔。
僅かに覗いた横顔を記憶に焼き付けるべく、花音は少女の頭部を凝視した。
視点の固定、それは少女が企んだものではなく、偶然の賜物だった。
しかしそれは、意図の有無に関係なく、花音の警戒心に穴を開けた。
少女が後ろ手に放った小さなカプセルに花音が気づいたのは、少女が再び前を向き、カプセルが二人の中間に落ちようとしている時だった。

マズイ、と花音は思った。
反射的に脚を止め、目を閉じる。
両腕で顔面を庇おうとしたが、それは残念ながら間に合わなかった。
翳した腕の隙間から差し込む、瞼越しでも眼底を痛めつける、激しい閃光。
二人の追走劇を何事かと見ていた通行人からいくつもの悲鳴が上がった。
花音は庇い損ねた左目を閉じたまま、被害を免れた右目を開いた。
少女はスクーターに跨って逃走しようとしている。
花音の右手が左腕へ走った。
手首のやや下側に巻いたブレスレットにサイオン粒子が吸い込まれ、素早く入力されたキーに従い起動式を展開する。
しかし、その起動式は、花音がそれを取り込む前に、彼女の身体を舐める様に背後から回り込んだサイオンの銃弾によって破壊された。
「何をするの！」
「花音、ダメだ！」
タイミングは全く同時。
振り返った花音と走り寄る五十里の、叫んだ言葉が二人の中間で重なり合った。
五十里の後ろに、拳銃形態のＣＡＤを構えた姿勢で達也が立ち止まっていた。
恋人の叱責に驚いて振り返ったまま硬直した花音に、五十里が並ぶ。
走りながらＣＡＤを操作していた五十里は、魔法式の構築を終えている。
既に発進しているスクーターへ向かって、彼は放出系魔法「伸地迷路〔ロード・エクステンション〕」を発動した。
逃走を始めたばかりのスクーターの両輪が空回りを始める。

幾らモーターを回しても、前に進まない。
真っ直ぐ続いているのに、抜けられない路。直線の迷路。
その秘密は、タイヤの接地面と道路の電子の分布を操作することによりクーロン力を斥力に偏倚させ、摩擦力を近似的にゼロとすることにある。言葉にすればそれだけの魔法だが、実行するには恐ろしく複雑な魔法式を必要とするテクニカルな術式だ。
複合的に放たれた、ジャイロ力を増幅する魔法により倒れることも出来ず、僅かな初期加速もクーロン斥力により食い潰されて、少女の跨ったスクーターは立ち往生することになった。
最早逃れられない。
五十里も、花音も、達也でさえも、そう思った。
それは無理のない思考で、当然の判断だった。
常識的に考えて、この状態から抜け出すことは出来ない。
だが彼らは知らなかった。
この少女は、荒事について全くの素人だということを。
そして追い詰められた素人は往々にして、常識外れの行動を取るものだ。
破れかぶれ、と言ってしまえばそれまでだが、その破れかぶれが八方塞の局面を打開することは意外と多い。
少女は左のグリップ脇にある、プラスチックカバーに覆われたボタンを親指で押し込んだ。
普通のスクーターには、こんな場所にボタンはない。
そもそも非常ベルに採用されているようなカバー付のボタンは、一度きりの使用を想定したもので、そのボタンは、「一度きり」に相応しい「使い捨て」のギミックを作動させた。
突如、シートの後ろが爆発した。
座席後部のカバーが飛び散り、ニ連装のロケットエンジンが噴炎を吐き出し始めた。
弾き飛ばされたように、スクーターが急発進した。
それに跨る少女は、身体を仰け反らせながらもハンドルをしっか

り握り締めている。
達也は見る見る小さくなるその後姿を唖然として見送った。
ハンドルから手が離れなかったのは、そういう機能のついたグローブをはめていたからだ。その程度のことは考えていたらしい、と達也は思った。
しかし、液体燃料ロケットをシートの下に仕込むなど、正気の沙汰とは思えない。
あの燃焼時間から推定される燃料の量なら、万が一転倒した拍子に引火した場合、通行人を巻き込んで爆死確実だ。
ロケットに点火して、転ばずに真っ直ぐ走れたこと自体、奇跡のようなものだった。
普通なら発進時の急加速でハンドルが取られて転倒する。
偶々ジャイロ力を増幅する魔法が働いていなかったら、前輪の摩擦係数が限りなくゼロに近づいていなかったら、おそらくそうなっていただろう。
もしも五十里の魔法ではなく花音の魔法で止めていたら、スクーターは転倒し大惨事になっていたに違いなかった。
「……何考えてるの、あの子……」
「……お互いに運が良かった、と言うべきだろうね……」
どうやら二人の先輩も、達也と同じ事を考えているようだった。

◇◆◇◆◇◆◇

改造スクーターを乗り捨てた少女は、協力者が用意したボックスワゴンに転がり込んで大きく肩を上下させていた。
自分のすぐ後ろで炎が噴き出している、というのがこれ程恐ろしいものだとは想像していなかった。
スカートが、ブレザーの背中が、髪の毛が燃え上がっている幻覚が走っている最中、幾度となく襲い掛かって来た。
ボックスワゴンの運転者は無言のままだ。

彼女に対する慰めの言葉はない。
当然だ。
彼らは仲間ではなく、単なる協力者なのだから。
少女は自分の肩を自分の腕で抱き締めた。
そうやって耐える以外に、彼女に術は無かった。
スモークガラスで薄暗くなったワゴンのシートの上で、じっと蹲(うずくま)る少女。
やがて、恐怖が薄れてくるに連れて、ジワジワと後悔が湧き上がり、彼女の心を苛んだ。
追いかけられて反射的に逃げてしまったが、冷静に考えてみればそんな必要は全くなかったのだ。
自分はただ、あの男を見ていただけなのだから。
後ろめたさが冷静な思考を奪っていた、それを自覚して、自分が後ろめたさを抱いているという事実に少女は遣り切れない怒りを感じた。
自分がこういうことに向いていない、ということを少女は自覚していた。
彼女は自他共に認めるインドア派で、今までそれを改める必要を感じていなかった。
敬愛する姉も、そうだったから。
学究肌の姉が彼女の目標で、ただ姉ほど優秀でなかった彼女は、趣味の機械いじりを活かした技術者の道に進もうと思っていた。
その自分が何故、こんな怪しげな連中と行動を共にしているのだろう、と彼女は自問した。
答えはすぐに返って来た。
彼女の心の中から。
それは、あの男を許せないからだった。
成功の報酬になど、彼女は興味が無かった。
ただあの男の悔しそうな顔が見られれば、それで良かった。
少女は不意に笑い出した。

その点、今日は上手く出し抜けたようだ、と思い至ったからだ。
バックミラーを見ている余裕は無かったが、きっと、まんまと逃げおおせた自分を唖然とした顔で見送っていたに違いない……
少女の笑い声は陰気で自虐的で、狂気を孕んでいた。
笑い続ける程、少女は壊れて行く。
しかしこのワゴンの中に、彼女を止める者はいなかった。

3－（5）　錯綜（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

3ー（5）　錯綜

今日は論文と発表原稿とプレゼン用データを学校へ提出する日。
と言っても、鈴音も五十里も達也も直前までガリガリやる趣味はないので、提出用のデータディスクは昨日の内に仕上げている。
昼の休み時間にこうして集まっているのは、最後の見直し、それも内容ではなく主に提出要項に関わる形式点検を行う為だ。
三人で分担してチェックした後、遥の助言に従い鈴音が廿楽に直接手渡すことになっている。
「小野先生がオンラインで送るなって助言してくれたのは、昨日のことと関係あるのかな？」
自分の割当分を終わらせたところで、五十里がポツリと呟いた。
「そうかも知れませんね」
既に自分の作業を終わらせていた（一年生ということもあって最も分量が少なかった）達也が、鈴音の邪魔にならないよう小声で答えた。
「学内ネットを覗こうと思ったら、校内から侵入するのが一番簡単だからね」
「それでも簡単ではありませんけどね」
達也の指摘に、五十里は肩を竦めた。
と同時に、カチッと古風な打鍵音を立てて――鈴音愛用のクラシカルなメカニカルキーボードの音だ――鈴音が身体ごと振り向いた。
「それは本当に本校の生徒だったのですか」
チェック作業を終わらせて、提出物を揃えながら鈴音が会話に加わった。
「いえ、『多分』としか言えません」
「制服も、手に入れようと思えば、入手できないものではありませんから」
達也と五十里の答えを聞いて、鈴音は少し、考え込む仕草を見せ

た。
「……五十里君も千代田さんも生徒名簿を閲覧できるはずですが」
五十里は生徒会役員、花音は風紀委員長として、生徒名簿のデータベースを閲覧する権限が与えられている。無論、本当のプライバシーに関わるような立ち入った情報はブロックされているが、顔写真と全身写真をチェックするくらいは簡単に出来るはずだった。
「顔を見たのは花音だけですし……横顔をチラッと見ただけですから、モンタージュ作成までは。
一口に女子生徒といっても三百人近くいるわけですから……ある程度絞込みが出来なければ特定は無理です」
五十里は可能性を口にしているのではなかった。
今朝実際にやってみて、花音が音を上げてしまったのだった。
「それに昨日は、こちらが追いかけたから逃げただけ、とも言えますからね。
誰だか分かっても出来るのは精々監視を付けることくらいで、それだって問題無しとはしませんから」
達也の言っていることは鈴音にも五十里にも分かっていた。
何も悪いことをしていない生徒に――逃走の際に閃光弾を使用したことを問題視することも出来ない訳ではないが――監視を付けたりすれば、こちらが逆にストーカーということにもなりかねない。
今の段階では、受身で警戒している以外に手は無いのだった。

◇◆◇◆◇◆◇

達也が教室に戻ると、彼の席にエリカが座っていた。
「あっ、今日は早かったのね」
彼女は達也の姿にいち早く気付いて、すぐに立ち上がった。
図々しく居座ろうとしなかった代わりに、達也が腰を下した直後、彼の机の端に腰掛けたのは、プラスマイナスで微妙なところだ。
「何の話をしていたんだ？」

もっとも今日は、エリカの言う通りまだ少し時間がある。
すぐに端末へ向かうのではなく、横向きに座りなおして美月に話し掛けた。
相手が美月だったのは、彼女が何やら不安げな顔をしていたからだ。
「視線を感じるんだってさ」
だが答えを返したのはエリカだった。
「視線？」
改めて美月へ問いを向けると、彼女は躊躇いがちに頷いた。
「最近何だか、嫌な視線を感じるんです。
物陰からこっそり隙を窺っているような、気味の悪い視線で……」
「ストーカーか何か？」
とりあえず一番ありそうな例を挙げてみたが、美月はハッキリ、首を横に振った。
「いえ、私を狙っているんじゃなくて、もっとこう、大きな網を構えているような……」
曖昧な口調は、自分の言いたいことが上手く表現できないもどかしさ故なのだろうか。
達也の方では、彼女が言わんとするところを十分に理解出来ていたが。
「つまり狙いは俺たちの誰か、又は当校の何か、ということか」
「え、ええ……私の勘違い、かも知れないですけど」
自信なさげな態度は、性格的なものもあるし、確証も無いことだし、仕方がないかもしれない。
「いや、柴田さんの勘違いじゃないと思うよ」
だがまるで美月の自信欠如を補うように、歩み寄って来た幹比古が確信を込めて断言した。
「少し前から校内で精霊が不自然に騒いでいるのを見掛けるようになった。
誰かが、式を打っているんだと思う」

「シキって、式神とかってSB〔スピリチュアル・ビーイング〕のことか？」

レオの質問に幹比古が頷く。

「僕たちが使う術式とはタイプが違うみたいで、上手く捕まえられないんだけど、何処かの術者が探りを入れてきているのは間違いない」

「珍しくも無いんじゃないの？」

エリカの疑問にも一理ある。

高校とはいえ魔法大学へのアクセス端末を持ち自身も貴重な文献を数多く所蔵し、多くの有能な魔法師が教師として集う第一高校は、常日頃から魔法技術を狙う輩の標的となっている。

「探られること自体は確かに珍しくないだろうけど、こんなに頻繁に式が打ち込まれた兆候を見るのは、少なくとも僕が入学してから初めてだよ」

しかし幹比古はエリカの反論をやんわりと、だから余計に自信の感じられる口調で否定した。

「……幹比古、今、自分たちとは違う術式と言ったよな？」

「うん、そうだけど」

達也の声に深刻な懸念を感じ取った幹比古は、緊張した面持ちで達也の問いを肯定した。

「それは神道系とは違った術式ということか？

それとも、この国の古式魔法とは異なる術式ということなのか？」

自分が何気なく漏らした一言の意味を改めて突きつけられて、幹比古の表情が厳しく引き締められた。

「……我が国の術式じゃない、と思う」

「えっ、それって他国（よそ）のスパイってことか？」

「そういうことなんじゃない？」

目を丸くしたレオと軽く流したエリカの口調は対照的だが、心の中はそれほど差があるようには見えなかった。

「随分派手に動いているんだな」

「やりたい放題ね。警察は何してるのかしら」
達也の一言で、エリカの矛先は警察に向いた。
公権力の怠慢に憤っているというより、身内のだらしなさに苛立っているようなその声音に、達也と幹比古は「おやっ？」と思った。

◇◆◇◆◇◆◇

丁度その時、神奈川県警の――正確には警察省から神奈川県警に出向中の――千葉警部が派手なくしゃみを炸裂させた、というお約束は起きなかった。
「……どうしたんです、警部。急にキョロキョロしたりして」
コンビを組んで聞き込み捜査中の稲垣巡査部長が、上司の挙動に不審の目を向ける。
「いや、何だか急に悪寒が……」
「大丈夫ですか？　この忙しい時に、仮病になんか罹らないで下さいよ」
「いや、仮病に罹るって、キミね……」
千葉警部の声にも流石に非難の色が混じったが、稲垣は何処吹く風とばかりそっぽを向いた。
「……稲垣君はもう少し、階級秩序というものに留意する必要があるよ」
千葉の言葉に、稲垣は白い目を向けた。
その顔にはありありと「アンタが言うな」と書かれていたが、口に出したのは別の台詞だった。
「それより、聞き込み、続けますか？
これ以上歩いても目撃者が出るとは思えないんですが」
稲垣の指摘通り、連日の聞き込みにも関らず、密入国者に関する証言は全く得られていない。
部下と言うより相棒である稲垣の指摘に、千葉はシニカルな笑みを浮かべた。

「目撃者はいるさ。ただ喋らないだけで」
「警部、まさか……」
上司の飄々とした口調にキナ臭さを感じて、稲垣は目を鋭く細めた。
「おいおい、おっかないなぁ」
「怖いのは警部の方ですよ。何をする気なんです？」
「心配しなくても違法捜査はしないって。
ほら、蛇の道は蛇ってよく言うだろ。
だから蛇の穴蔵に入ってみようと思ってさ」
千葉の方針を聞いて、稲垣は嫌そうに顔を顰めた。
「……裏取引だって違法捜査ですよ」
「その程度は許容範囲だろ？　そんな事言ってられる場合じゃ無くなって来てるし」
「まあ……そうですが」
行儀良く有料パーキングに駐めた覆面パトに乗り込み、二人は外国人が多く住む高級住宅街へ向かった。

◇◆◇◆◇◆◇

千葉警部と稲垣巡査部長を乗せた覆面パトカーが向かった先は、山手の丘の中程にある喫茶店の駐車場だった。
水素エンジンを止めた千葉の方へ、稲垣は苦い顔を向けた。
「警部……時々休憩を入れるのが悪いとは言いませんが、『蛇の穴蔵』へ行くんじゃなかったんですか？」
いきなりサボリですか、という非難の目を向けてくる部下を、千葉警部は心外な、という顔で見返した。
「ここがその『蛇の穴蔵』だよ」
「えっ？」
車の外に出た上司を慌てて追いかけ、ドアをロックしている千葉に並んで、稲垣は改めて喫茶店へ目をやった。

落ち着いた感じの、ごく普通の店構えに見える。
山小屋風のデザインで窓には観音開きの鎧戸がついているが、今は全て開け放たれていて少しも秘密めいたところがない。
「まあ、蛇ってのはマスターに失礼だけど。
ここのマスターは凄く情報網が広いってだけで、犯罪歴は無いから」
「……我々に尻尾を掴ませない程の大物、ってことですか……？」
「大物っていうより、職人と言うべきだろうね」
千葉警部は軽く肩を竦めて見せると、「ロッテルバルト」と書かれた扉を開けた。

平日の昼間、ランチタイムも既に過ぎている時刻だが、人気の観光スポットが近いという立地もあってか、結構客が入っていた。
しかし、賑わって、はいない。
店の雰囲気かマスターのキャラクターか、客は皆、静かにカップを傾けていた。
観光客が多いというのは思い違いで、常連が多い、通好みの店なのかもしれない。
全体に年齢層が高い中で、独りだけ、カウンターに座った若い女性が目を引いた。
パッと見には、美人という印象は無い。
身に着けているものも平凡なブラウスとスカートだ。
しかし良く見れば、顔立ちは整っているしスタイルも良い。
わざと地味に見えるようなメイクをしていると、千葉には感じられた。
カウンターには彼女一人。テーブルの空きは二つ。
千葉は椅子を一つ空けて、カウンターに座った。
「マスター、ブレンドを二つ」
先に注文を済ませ、指で稲垣に隣へ座るように指示する。
そして、さり気なさを装ってその女性へ目を向け――

――それが彼の限界だった。

「……」

彼は何も言えないまま、視線を正面に戻した。

ヘタレ、と誹ることなかれ。

ただ目立たないようにしているという理由だけで職務質問も出来ないし、自分がしようとしていることはまるきりナンパではないか、と思い至ったのだ。

稲垣の向けてくる疑惑の眼差しが痛い。

マスターは渋い外見に相応しく無口で、ただ黙々とカップの準備をしている。

千葉はひたすら、コーヒーが出てくるのを待った。

不意に、クスクスと小さな笑い声が聞こえた。

目だけを動かして確かめてみると、予想に違わず、彼女が俯いて肩を震わせていた。

「……ごめんなさい。

いつ話しかけてくるかと思ったのに、前を向いて固まっているんですもの。

女は苦手ですか、千葉の御曹司？」

千葉警部が絶句したのは、自分の素性を言い当てられて驚いたからではなかった。

彼が千葉一門の総領だということは、特に秘密でも何でもない。

だが積極的に顔写真を公開してＰＲしている訳でもない。

顔なら、弟の方が売れているはずだ。

彼の顔を見ただけで、彼が千葉寿和だと分かるのは、犯罪者と警察関係者を除けば特定の世界に生きている人間に止まる。

即ち、実戦魔法に生きる者だ。

「貴女は……」

「はじめまして、千葉寿和警部。

私は、藤林響子と申します」

今度こそ、驚きの故に、千葉は絶句した。

古式魔法の名門、藤林家の令嬢……そして同時に、日本魔法界の長老である九島烈の孫娘が、彼の目の前で屈託の無い笑みを浮かべていた。

◇◆◇◆◇◆◇

達也たち八人が揃って一緒に校門を出るのは久し振りのことだった。

「達也さん、準備はもう終わったんですか？」

八人揃っては久し振りでも、生徒会で深雪と帰りが一緒になる、つまり達也とも毎日一緒に帰っているほのかが、そんなことを何故か真っ先に訊いて来た。

「一段落、というところかな。リハーサルとか発表に使う模型作りとかデモ用の術式の調整とか細々としたことは残ってるけど」

「大変そうねぇ……そう言えば、美月のところで模型作りを手伝ってるんだっけ」

生徒会にも部活連にも所属していないのに妙に事情通のエリカが、ポニーテールを揺らして美月の顔を覗き込んだ。

「あっ、うん、二年の先輩が。私は何もしていないけど……」

「模型作りは五十里先輩に任せっきりだから、自然と二年生が中心になるんだろうね」

「ふ～ん……じゃあ達也は何をしているんだ？」

美月をフォローした達也に、自然な流れとも言える質問をレオが投げ掛けた。

「俺はデモ用術式の調整だ」

「……普通、逆だと思う」

誰もが思い浮かべたツッコミを真っ先に入れたのは雫だった。

「そうかな？　物を作ることにかけては、俺より五十里先輩の方が数段上だと思うんだが」

「まあ……確かに啓先輩は『魔法使い』って言うより『錬金術師』

みたいなイメージあるし……適材適所かもね」
首を捻った達也に、苦笑交じりでエリカが同意を示した。
「錬金術師？　ＲＰＧ？」
「その喩えで行くと達也さんは何になるのかな？」
美月がふと呟いた疑問は、
「そりゃあもう、マッドサイエンティストでしょ」「エリカ、それ、ＲＰＧじゃないよ」「じゃあ、人里離れた山奥で秘術を伝授してくれる世捨て人の賢者」「賢者っつーには武闘派だけどな」「密かに世界征服を企む悪の魔法使い？」「そこは素直に魔王とか」「いやいや、一緒に魔王を倒した後で、実は俺様黒幕だぜ～と主人公の前に立ち塞がるラスボスなんて似合いそうじゃねえか」「みんな、なぜ勇者様という発想が無いの？」「いいんだ、ほのか。きっと悪役のイメージなんだろ、俺って」「お兄様、力こそ正義です」「うわっ、流石大魔王の妹」
……このように、大きな盛り上がりを招いた。

そんな風に学生らしく賑やかに騒ぎながら歩いていても、達也は警戒を忘れてはいなかった。
行きつけの店の看板が見えたところで達也は、尾けてくる気配へ顔を向けないように振り向いた。
「チョッと寄っていかないか？」
彼は寄り道をして尾行をやり過ごそうと考えたのだ。
「賛成！」
「達也は明日からまた忙しくなりそうだしな」
「そうだね、少しお茶でも飲んで行こうか」
達也の誘いに対するエリカとレオと幹比古の反応は、少し積極的過ぎる気もしたが、三人もそれぞれに思うところがあるのだろう。
達也は何も気付いていない風を装って馴染みの喫茶店に入った。

◇◆◇◆◇◆◇

残念ながら、いつもの四人掛け席二続きは空いていなかったので、八人はカウンターとカウンターに一番近いテーブルに分かれて席を取った。

カウンターに達也、深雪、ほのか、美月。（座っている順番は美月、深雪、達也、ほのか）

テーブルはカウンター側にエリカと雫、向かい側にレオと幹比古。

……第三者からしてみれば、達也は美少女を何人も侍らせるハーレム野郎に見えているに違いない。

「やあ、いらっしゃい。相変わらずモテモテだね、達也くん」

いや、第三者だけでなく、彼らの関係をそれなりに把握しているマスターも、カウンターの向こう側からそんな冷やかしを投げて来たくらいだ。

「マスターもその髭を剃ればモテモテですよ、きっと」

敢えてモテモテ、などという死語（？）をそのまま使って達也が反撃すると、

「そうですね……マスター、その髭は勿体無いです。老けて見えますよ」

美月が天然故の（？）遠慮無さで援護射撃を畳み掛けた。

「ふ、老けて……美月ちゃん、容赦ないね」

無精髭ではない、キチンと手入れされた灰色の顎鬚を撫でながらマスターが嘆いた。

灰色、といってもこのマスターが美月の言うように老けている訳ではない。

寧ろ若い。まだ三十になるかならないか程度だろう。

髪の色も髭の色も灰色なのは、遺伝による生まれつきの色だ。

マスターは北ドイツの血を四分の一、引いているのである。（店の名前も「アイネブリーゼ（ドイツ語で「微風」の意味）」で、親近感を覚えたレオが通い始めたのが常連になったきっかけだ）

といっても異民族の特徴が表れているのは体毛の色だけで、瞳の

色は黒、顔立ちは線の細い東洋系。
優男系のハンサムフェイスなのだが、マスターは自分の顔に何やらコンプレックスがある模様。
綺麗に形が整えられた口髭と顎鬚は、少しでも男らしく見えるように、らしかった。
この髭については余り似合っていない、というのが達也たちの感想なのだが、コーヒーの味はそれを補って余りあるものだった。
当然の様に、八人全員のオーダーはコーヒーだった。
「へぇ……魔法論文のコンペティションに出るんだ」
サイフォンの中でお湯が煮立っている内に、しばらく顔を見なかった理由を聞いたマスターは、お世辞ではなく感心しながら頷いた。
「今年は横浜で開催される番だよね？　僕の実家も横浜にあるんだよ。
会場はいつも通り国際会議場？　だったら実家のすぐ近くだ」
フラスコに溜まったコーヒーをカップに注ぐ合間にもマスターのお喋りは続く。
「横浜のどちらなんですか？」
ウェイトレスの代わりに四人分のコーヒーをテーブル席へと運ぶ為に立ち上がった美月が、マスターからトレーを受け取りながら訊ねた。
「山手の丘の中程にある『ロッテルバルト』って名前の喫茶店だよ」
「ご実家も喫茶店だったんですね」
「そうなんだ。時間があったら寄ってみてよ。親父と僕と、どっちのコーヒーが美味しいか、忌憚の無い意見を聞かせてくれると嬉しいな」
「マスター、商売上手」
美月と交替でトレーを戻しに来た雫がボソッとツッコみ、カウンターの両側で笑い声が上がった。

◇◆◇◆◇◆◇

達也のカップが残り三分の一となったところで、エリカがクイッ、とカップを傾け一気に中身を飲み干すと、音もなくソーサーに戻して（こういうところは逆の意味で育ちを隠しきれないのだろう）スッと立ち上がった。
「エリカちゃん？」
「お花摘みに行ってくる」
顔を上げた美月にそう答えて、軽やかな足取りで店の奥へ向かう。
「オッと」
その直後、今度はレオがポケットを押さえて立ち上がった。
「わりぃ、電話だわ」
そう言ってレオは表へ出て行った。
「……幹比古、何やってんだ？」
意外とお行儀が良いレオへ向けていた目を戻して、達也は幹比古が手許でノート（というより小さめのスケッチブック）を広げているのに気がついた。
「んっ、チョッと、忘れない内にメモっとこうと思って……」
そう言いながら幹比古は、筆ペンを動かす手を止めようとしない。
「……程々にしておけよ」
達也は鋭く目を細めて幹比古の背後――手許ではなく――を視た後、カウンターに背を向けたまま何事も無かったかのようにカップに口を付けた。

◇◆◇◆◇◆◇

「オジサン、あたしとイイコトして遊ばない？」
人の少ない裏通りとはいえ、まだ日も沈まない内からそんなことを言われて、男は手にしたテイクアウトのドリンクカップを危うく落としそうになった。
振り向いて見れば「美少女」と形容することに何の躊躇いも後ろ

暗さも抱える必要の無いポニーテールの少女が、両手を背中に回してニコニコと微笑んでいる。
しかしその顔を確認した途端、男は別の意味で焦りを覚えた。
「何を言ってるんだ。もっと自分を大切にしなさい」
「アレッ？　あたしは『イイコト』って言っただけなのに、一体どういう意味に取ったんだろ？」
罪の無さそうな笑顔で、チョコンと小首を傾げて見せる少女。
それは間違いなく、彼が尾行していた男の連れだ。
「大人をからかうんじゃない。寄り道してないで、さっさと帰りなさい」
心の裡では冷や汗が止まらなかったが、プロとしての面子にかけて、「子供の悪戯に気分を害して立ち去る大人」を演じ続ける。
「もう日も暮れる。こんな人通りの少ない所にいたら、通り魔に襲われないとも限らないぞ」
そう言って、男は少女に背を向けた。
しかし彼は、次の一歩を踏み出せなかった。
「……通り魔、ってのは、例えばこんなヤツのことか？」
振り向いた先には、両手に黒い手袋をはめた体格のいい少年が、拳を自分の掌に打ちつけながら笑っていた。
「知らないの？　通り魔っていうのはね、『通り』すがりの『魔』法使いのことなのよ」
少年に応える少女の楽しそうな声に、舌なめずりするような響きを感じて、男は再度振り返った。
少女の手には伸縮警棒が臨戦態勢で握られていた。
少女が、警棒を握る手を無造作に突き出した。
その瞬間、抗い難い圧力が少女から押し寄せて来た。
少しでも気を抜くと膝が震えてへたり込んでしまうかもしれない……男はその「圧力」の名前を知っていた。
これは、闘気だ。
殺気、即ち相手を殺すという結果を望む意志ではなく、純粋に、

ただ闘うという意志の波動。
「怖いねぇ……こういうトコだけは大した女だぜ」
背後から楽しそうな声が聞こえた。
背中を向けているから見て確かめることは出来ないが、背後の少年はきっと、歯を、牙を剥き出して笑っているに違いなかった。
「助けてくれ！　強盗だ！」
男は形振り構わず叫んだ。
彼にも、腕に覚えはある。
いくら手錬れであったとしても、十五、六の子供にむざむざやられるとは思わない。
しかし今現在遂行中の任務は、リスクを避けなければならない種類のものだし、彼らに敵対するのは作戦上拙かった。
「……うわ～、情けな……」
「いやいや、この素早い決断力は評価すべきじゃねーの？」
男のとった手段に、少女も少年も気を殺がれた様子だった。
しかし少女は警棒を下ろさず、少年は体を開いて拳を掲げた。
――そして、助けを求める男の叫びに、応えた者は皆無だった。
「あっ、言い忘れてたけどよ、助けを呼んでも無駄だぜ？
今は、誰もここには近づかない」
「っていうか、近づけないんだけどね。
あたしたちの『認識』を要（かなめ）にして作り上げた結界だから、あたしたちの意識を奪わない限り抜け出すことも出来ないよ？」
少女の言葉に、男は改めて、先程から通行人が全く途絶えていたことに気がついた。
気づかされた。
彼には、選択肢が一つしか残っていないということを。
男は今更の様にドリンクカップを投げ捨て、アップライトな構えを取った。

3－（6）　容疑者（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

3－（6）　容疑者

レオとエリカに挟まれた男は、腕を高く上げて頭部をガードする構えを見せた。
と、思いきや、クルリとレオの方へ体の向きを変え、左腕を直角に曲げて腹の高さまで下ろす。
「フーン……ヒットマン・スタイルってヤツか？
武器くらい持ってると思ったんだけどな……」
「バカ、出さないからって持ってないとは限らないのよ！」
すかさずエリカが飛ばしたアドバイス（？）に、男は舌打ちを漏らした。
それ以上、焦った様子は見せなかった。
見せる時間が無かった。
情けなく悲鳴を上げた中年男が、精悍なファイターと化してレオに急迫したのだ。
低い位置から腕をしならせ、鞭の様なパンチをレオに浴びせ掛ける。
顔の前から弾丸のような拳撃がレオ目掛けて打ち込まれる。
その滑らかで途切れることの無い連続攻撃は、この男が羊ではなく狼であることを雄弁に物語っている。
だが、レオもエリカもその事に意外感は抱かない。
エリカは修練によって身につけた洞察力で、レオは生まれ持った直感力で、この男の正体は狼、否、高度に訓練された狩猟犬だと見抜いていた。
驚嘆すべきはその速さ。
その威力。
そして何より、人間の身体能力を超える速度を発揮しながら、魔法を使用している形跡が皆無であるということ。

十秒に満たぬ時間で何十発というパンチが繰り出され、反撃を許す間もなくガードする両腕を左右に揺らす。
そして遂にレオのガードを潜り抜けた拳撃がその顔面を捉えた。
パン、というゴム風船が割れたような音がして、レオの身体が後方に弾け飛ぶ。
その戦果を確認する間も惜しんで、男はクルリと踵を返した。
振り返った時には既に、回転力を利用して、スローイングダガーをエリカへ向かって投げつけていた。
カンッ、と乾いた金属音がした。
エリカが警棒でダガーを払ったのだ。
内側から外側へ警棒が振られ、正面の防御に穴が開く。
すかさず左のパンチがエリカの顔面に伸び、
男の拳速を超えるスピードで翻った警棒を避けて、途中で引き戻された。
拳を引くだけでなく、男は身体ごと大きく後方に跳び退った。
その直後。
「ガッ！」
背中にカウンターのショルダータックルを喰らって、男は俯せに路面へ激突した。
「……おー痛て。
コイツ、ただの人間じゃないな。
機械仕掛けって感触でもないし……ケミカル強化か？」
背後から体当たりをかましたレオが、殴られた顎を撫でながら路上へ油断の無い視線を向けて呟くと、
「……そう言うアンタも普通じゃないわね。今の、まともに殴られてたでしょ」
呻きながら手をついて身体を起こそうとする男よりも、味方であるはずのレオの方に警戒心を向けてエリカが応えた。
「そりゃ、少なくとも四分の一は研究所がルーツの魔法師だからな。
自分の遺伝子が百パーセント天然モノだって強弁するつもりはねえ

よ」
エリカの鋭い眼差しに苦笑で応えながら、レオは四つんばいになった男の胴体を容赦なく蹴り上げた。
「グホッ！」
「大人しくしてなよ。命まで取ろうってんじゃないんだ。オレたちはただ、話を聞きたいだけなのさ」
堅気とは思えない荒っぽさに呆れ顔のエリカを横目に、レオは片足を路面から持ち上げた。
その意思表示は明らかだ。
「……待て……分かった、降参だ……元々私は……君たちの敵じゃない……こんなことで踏み潰されたのでは……割に合わない……」
「よく言うぜ。
アンタの攻撃、オレとコイツじゃなかったら死んでるぜ？」
「それは君も……同じだろう……」
返事の所々で咳き込みながら、男が身体を起こした。
「私のように肉体を強化していなければ、今の蹴りで内臓が破裂しているぞ」
ようやくダメージが薄れてきたのか、路上に座り込んだままではあったが、男の語り口が滑らかになってきた。
「強化されてると思わなきゃ、あんな真似はしねえよ」
レオの口調には、悪びれというものが皆無だった。
「それより敵じゃないってんなら、手短に説明頼むぜ。いつまでも結界を張らせとく訳にはいかねーからな」
「いいだろう。人目を引くのは、私も本意ではない」
男は観念したように大きく息を吐いた。
「じゃあまずは自己紹介をして貰おうか。どうせオレたちの名前は知ってんだろ」
「ジロー・マーシャルだ」
レオの質問にイエスともノーとも答えず、ただ本名か偽名か分か

らない名前だけを男は告げた。
「詳しい身分は言えないが、いかなる国の政府機関にも所属していない、とだけ言っておく」
「つまりイリーガルってことね」
エリカの断定に、男はこれまた、イエスともノーとも答えなかった。
「……それで？　どうせ本当は何処の誰だか、訊いても喋らないんだろうから、何が目的でどういう状況になっているのか聞かせろよ」
「私の仕事は、魔法科高校生徒を経由して先端魔法技術が東側に盗み出されないよう監視し、軍事的な脅威となり得る高度技術が東側へ漏洩した場合はこれに対処することだ」
ウンザリした顔でレオが促すと、ジローと名乗った男は事務的な口調でこう告げた。
東側、というのは前々回の大戦後に使われた用語で、ＵＳＮＡの諜報関係者と軍事関係者が今でも好んで使用している、という程度のことはレオもエリカも知っていた。
しかしその事が即、この男がＵＳＮＡの関係者だという証拠にはならない。所属を韜晦する為に、わざとローカルな用語を使っているのかもしれないのだ。
「アンタの雇い主は少なくとも、この国の関係者じゃないんだろ？　何でわざわざそんな手間暇掛けるんだよ？」
信用できない、という感想を言外に込めながらレオが問うと、男は「ヤレヤレ……」という感じに首を振った。
「この国の平和ボケは治ったと思っていたが、ティーンエイジャーにまでそれを求めるのは酷か……
世界の軍事バランスは、一国の問題ではない。
この国の実用技術が東側に渡ることで、西側の優位が損なわれることにもなりかねないのだ。
これまで魔法式そのものの改良に重点を置いていた新ソ連、現代魔法の開発より前近代の魔法の復元に力を注いできた中華連合も、

ここに来てエレクトロニクスを利用した魔法工学技術の軍事利用へと急速に傾斜してきている。
この国だけではなく、ＵＳＮＡでも西ヨーロッパ諸国でも魔法工学技術をターゲットにしたスパイが急増しているのだ」
「平和ボケって、何十年の話をしてるのよ」
上からの目線が気に入らないのか、エリカがそう毒づいたが、男の言っていること自体に反論はしなかった。
「そういう訳で、私は君達の敵ではないし、私と君達の間に利害の対立もない」
男は道路から立ち上がると、大袈裟に埃を払う仕草をした。
嫌みなくらい――実際、嫌みも三十パーセントくらいはあったかもしれない――丁寧にズボンの裾を手で払っていた男が再度身体を起こした時。
その手には、掌に隠れる程の拳銃が握られていて、銃口はしっかりとエリカに固定されていた。
「っ！」
「てめぇ！」
「さっきこれを使わなかったのが、敵ではない証拠だ」
「……単に銃の使用が拙かっただけでしょう。色々と手掛かりが残るから」
男はニヤリと笑った。
「それもある。
さて、必要なことは話したと思うが？
では、これにて退散させていただこう。
結界を解くよう、お仲間に言っては貰えないか？」
口調と態度は軽くても、構えに隙はない。
術を使ってその様子を見ていたのだろう。
エリカとレオの二人が何も答えないうちに、幹比古の張った結界は解除された。
「――ではこれにて失礼。

ああそうだ。最後に一つ、助言をさせて貰おうか。
身の回りに気をつけるよう、お仲間に伝えておいてくれ給え。
学校の中だからといって、安心はしないように、と」
そう言って、男はジャケットの内側から小さな缶を取りだした。
蓋に付いたボタンを押し込み、三人が作る三角形の、ちょうど真ん中に放り投げる。
エリカとレオが、同時に後方へ跳び退った。
小さな爆発音と共に、白い濃密な煙が一気に広がる。
目を閉じ口元を抑えていた二人がどうやら毒ではないようだと判断して目を開けた時には、ジロー・マーシャルと名乗った男の姿は影も形もなくなっていた。

◇◆◇◆◇◆◇

待ち合わせをしていた学食でエリカが難しい顔をしているのを見て、深雪は少し、意外に思った。
「エリカ、まだ昨日のことを気にしているの？」
ＵＳＮＡ情報部の非合法工作員（イリーガル）らしき男に最後の最後で出し抜かれたことを、その後駅に着いても、エリカはとても悔しがっていた。口には出さなかったが、態度で丸判りだったのだ。
いつも悪ふざけの笑顔で本音を隠している様なところのある彼女には珍しいストレートさだったのだが、それを翌日まで引きずっているというのは更に珍しかった。
深雪の問い掛けに対するエリカの回答は、半分肯定で半分否定だった。
「まんまと逃げられたことを気にしているんじゃないよ」
まんまと、などという修辞を付けるところに素直じゃない本心が透けて見えるが、確かにそれだけではないようだ。
「アイツが言ってたことが気になってさ……
学校の中だからといって安心は出来ない、って、まさか生徒に…

…」

四月の一件に深く関わっていなかった幹比古やほのかには分からなかったようだが、達也と深雪には何がエリカの心に引っ掛かっているのかすぐに思い当たった。

あの時は紗耶香が、テロリストの仮面を被った外国の工作員に利用されていた。

紗耶香はその事を、今でも完全には吹っ切れていない。

「ああいう後味の悪いことを繰り返すのは俺も御免被りたいけどな……」

それを知り、それを理解している達也は、エリカの気持ちを斟酌してか、心にもない台詞を吐いた。

「しかし、まだ何もされていないのに探し出して取っ捕まえるわけにも行かないだろう？」

「それはそうなんだけど……」

拗ねの入った口調は心から納得している訳ではない、という意思表示だろうが、取り敢えず探偵の真似事は断念させることが出来たようだ、と達也は思った。

それにしてもエリカに「お人好し」の属性は無いはずなのだが、親しい友人が絡むと、それが直接的な関連でなくても「話は別」となるらしい。

「でもよ、受け身一方ってえのは分が悪いんじゃないか？

直接殴りかかってくるならどうにでもなるんだろうけど、空き巣とか覗き見とかはな……」

「そればっかり気にしてる訳にもいかないからね……」

レオや幹比古の懸念に、達也は笑って首を振った。

「データを端末に入れて持ち歩いているんじゃないんだから、物理的な盗難に遭うことは無いって。

そもそも校内で置き引きとか引ったくりとかそんな心配をするのはおかしいだろう？

まあ、盗撮って手口はゼロとは言えないが、それは別に、今回の

コンペ絡みに限ったことじゃない。
校内でデータを盗もうとするなら、セキュリティの低いディレクトリに放置されたデータを漁るのが一番手っ取り早いだろうけど、そこまでボケてるつもりはないな。
不審人物の怪しげな情報に撹乱されてるんじゃないか？」
「そっか……」
達也の説明で、幹比古は一応納得したようだった。
だがエリカとレオは、まだ何か言いたいことがあるけれども反論できないのでとりあえず黙っている、という風に、達也には見えた。

◇◆◇◆◇◆◇

九校戦代表チーム五十二名に対し、論文コンペは三名。
比較するのが最初から無意味に思えるほど規模が違う。
にも関らず、論文コンペは九校戦に匹敵する重要行事と見做されている。
それは一つには、この催し物が実質的に魔法科高校九校間で優劣を競う場であるからだ。
特に九校戦で成績が振るわなかった学校は、その雪辱戦という意識で盛り上がる。
そしてもう一つには、チームメンバーに選ばれた三名だけでなく、多くの生徒が直接関わることが出来るという性質にその理由が求められる。
非魔法科高校を対象とした弁論大会や研究発表会と「全国高校生魔法学論文コンペティション」の最大の違いは、発表内容の実演がプレゼンテーションに含まれるという点にある。
つまり論文の発表には、魔法装置を作って壇上で魔法を実演することが含まれる。
発表用の模型といっても、張りぼてでは評価されない。
実際に作動するか、実際の動作をシミュレートするものでなけれ

ばならない――それが、魔法科高校の論文コンペだ。
その為の魔法装置の設計から術式補助システムの製作、それを制御する為のソフト、搭載する為のボディ、ターゲットが必要な場合はその作成、テスト要員とその補助要員、安全を確保する為のシールド生成要員……コンペ直前の時期ともなれば、技術系クラブ、美術系クラブはもちろんのこと、純理論系のクラブや実技の成績上位者も本番の成功へ向けて総動員される。
プレゼンテーション準備に関与する人数は、九校戦より寧ろ多いくらいなのだ。
本番が次の次の日曜日に迫り、校内では放課後だけでなく本来授業に割り当てられている時間も「自主制作」「自主演習」の名目で侃侃諤諤（カンカンガクガク）、ならぬカンカン（工作機械の音）ガタガタ（魔法行使に伴う騒音）の大騒ぎに満たされていた。
「あっ、いたいた」
その喧騒の中心に、エリカの探す人影はあった。
「おーい、達也くーん」
大声で手を振るエリカの隣では、レオが身体ごと明後日を向いていた。
全力で他人の振り、というところだろうか。
「エリカちゃん、邪魔しちゃダメだよ……」
レオほど図太くなれない美月は、効果が無いと知りつつ友人の袖を引っ張らずにはいられなかった。
――予想通り、効果は無かったが。
悠然と歩み寄るエリカを、手を止めて待っていた達也は「仕方ないな」とばかりに苦笑いを浮かべていただけだが、実験を中断されて苦虫を噛み潰している者も当然いた。
「千葉……お前、チョッとは空気を読めよ」
護衛役として立ち会っている桐原も苦虫を噛み潰している一人だった。
「あれっ、さーやも見学？」

しかしエリカが答えた、というか、話し掛けた相手は、桐原の隣に立っている紗耶香だった。
「お前な」
「エリちゃん……」
脱力する桐原と苦笑する紗耶香。まあ逆上しないだけ、桐原も人間が練れてきたということだろうか。
「エリカは見学という訳じゃ無さそうだな。何か用か？」
ただ桐原ではなく他の上級生も堪忍袋の尾を切らしそうになっているのを見て、達也が機先を制すように話し掛けた。
「美月がお手伝いに呼ばれたから、その付き添い」
声の調子で釘を刺されたことを察して、エリカは無駄口を叩かず簡潔に答えた。
なる程、と思って目を転じると、美月は美術部の先輩の前でペコペコ頭を下げていた。
「エリカ、こちらへいらっしゃい」
その隙に、というのも変だが、深雪が横から手を伸ばしてエリカを見物人の輪の中へ連れて行く。
紗耶香も桐原から離れてエリカの隣へ行き、一時的な中断を強いられた魔法装置の作動実験は五十里の合図で再開された。
「あれ、何の実験してるの？」
台座と四本の腕で支えられた直径百二十センチ程度の透明な球体は、一見すると巨大な電球に見える。
「プレゼン用の常温プラズマ発生装置よ」
「常温？　熱核融合ですよね？」
レオと同じく赤の他人を貫いていた幹比古が、意外な言葉に他人の振りを忘れて訊ねた。（なお幹比古は、深雪を相手にする時、未だに丁寧語が抜けない）
エリカも理科の知識をひっくり返してみたらしく、一拍遅れて頭上に疑問符を浮かべている。
「熱核融合というのは反応のタイプであって、超高温であることは

必ずしも必要ではないみたい」

「……」

「……ごめんなさい、吉田君。わたしも詳しいことは理解していないから、後でお兄様に訊いてみる方がいいと思うわ」

幹比古が不得要領な顔をしているのを見て深雪がそう付け加えると、幹比古は「滅相も無い」と言わんばかりにブンブンと首を振った。

そんな幹比古へジトッとした目付きをチラチラと向けながら、エリカは紗耶香とヒソヒソ話をしていたが、深雪がニッコリ笑いかけると（但し目は笑っていなかった）慌てて口を噤んだ。

レオは最初から、好奇心に目を輝かせて無言で実験装置を見詰めている。

意図せず静粛が保たれた中で、五十里が鈴音へ合図を送った。

達也がモニターしている据え置き型の大型ＣＡＤへ、鈴音がサイオンを注ぎ込む。

身に着けて携行する小型のＣＡＤより遥かに高速な術式補助機能が作動し、工程が幾重にも積み重なった複雑な魔法式が発動した。

高圧の重水素ガスがプラズマ化し、分離した電子が発光ガラスに衝突して光を放つ。

「……やっぱり電球？」

エリカが漏らした失礼な呟きは、幸いなことに（？）、実験成功の歓声にかき消された。

エリカの周りでも、成功して当然とばかり静かに微笑んでいる深雪は別にして、レオは胸の前で拳を握り締め幹比古は腕組みしてウンウンと頷き紗耶香は跳び上がって手を叩いている。

ガラス容器の発光は十秒間にわたり持続した。

光が消えると同時に、興奮の潮も引く。

これは単に、大道具が一つ出来上がったというに過ぎないのであって、組み上げなければならない物はまだまだ残っているのだ。

実験に集まっていた助っ人がバラバラと持ち場へ戻って行く、そ

の一角を紗耶香がジッと見ているのにエリカは気づいた。
「さーや、どうしたの？」
「あの子……」
返って来たのは返事ではなく独り言だった。
「って、どうしたの！？」
「おい、壬生！？」
いきなり駆け出した紗耶香を追って、エリカと桐原がスタートを切った。
一歩遅れてレオが続く。
目を丸くしてその様を見送っていた深雪は、紗耶香が御下げ髪の女子生徒を追いかけているのに気がついた。

◇◆◇◆◇◆◇

「待ちなさいっ！」
すぐ後ろで呼び止める声を聞いて、足の速さでは敵わないと観念したのか、女子生徒は芝生の敷き詰められた中庭で立ち止まった。
「何ですか？」
振り向いて、硬い声で反問する。
それは聴きようによっては、ふてぶてしい口調だった。
「貴女、一年生ね？」
一高の制服には、学年による差異は無い。
紗耶香の問い掛けは、顔立ちや身体つきから推測したものだった。
「……そうです。先輩は二年の壬生先輩ですよね？」
「ええ。二年E組の壬生紗耶香。貴女と同じ二科生よ」
制服の違いは、エンブレムの有無。
一科生と二科生の違いを示すもののみだ。
「……一年G組、平河千秋です」
上級生から言外に自己紹介を要求されて、女子生徒は渋々名乗った。

背後で立ち止まる足音が聞こえた。
エリカたちが追いついてきたのだ。
今の自己紹介も聞こえているだろう。
現に、背後で「平河？」という桐原の呟きが聞こえた。
その苗字に紗耶香は心当たりがなかったが、桐原は聞き覚えのある姓なのだろう。
もっとも、紗耶香がこの一年生を放っておけなかったのは苗字の所為でも名前の所為でもないから、聞いたことが無くても一向に構わなかった。
そんな事を気にしている余裕は、紗耶香には無かった。
「平河さん、貴女が持っているそのデバイス……無線式のパスワードブレーカーでしょう」
紗耶香の指摘に平河千秋は顔を青ざめさせて、手に持つ携帯端末を慌てて背中に隠した。
「隠しても分かるわ。
あたしも同じ機種を使ったことがあるから」
紗耶香の言葉に、千秋が目を大きく見開いた。
パスワードブレーカーはパスワードを盗み出すマルウェアをハード化したもので、名称に反してパスワード認証に限らず様々な認証システムを自動的に無効化し情報ファイルを盗み出す機械だ。
その用途は犯罪目的以外にあり得ない。
つまり、この機械を使ったことがあるということは……
「……そうよ。あたしもスパイの手先になったことがある。
だから忠告するわ。
今すぐ手を切りなさい。
付き合っている時間が長ければ長い程、後で苦しむことになる」
「……あたしがどれだけ苦しんだって、先輩には関係のないことです」
顔を背け、ぶっきらぼうな口調で言い放つ。
明らかな、拒絶。

だがそれは、千秋にとってみれば逆効果でしかなく、紗耶香を怯ませることなど出来なかった。
「放っておけるわけ無いでしょう！
半年が過ぎた今でも、あたしは時々身体の震えが止まらなくなるわ。
自分でも気が付かないうちに、唇を噛み切っていたことも、爪を掌に食い込ませていたこともある。
貴女がどんな連中と付き合っているのか知らないけど、これだけは断言できる。
相手は貴女のことなんて、これっぽっちも考えていないわ。
ただ利用して、使い捨てるだけよ」
「そんな事は分かっています！」
捨て鉢な声と憎々しげに睨み返す瞳に、紗耶香は息を呑んだ。
「マフィアやテロリストが利用する相手のことを考えていないなんて当然じゃないですか。
先輩はそんなことも分からずに手を組んでいたんですか？
失礼とは思いますけど、先輩は随分子供だったんですね」
揶揄する乾いた口調に、この一年生は自分とは違うと、紗耶香は理解させられた。
紗耶香には達成したい目的があって、でもその為に何をしたら良いのか分からなくて、そこに付け込まれた。
確かに自分は、どうしようもない子供だった。
だがこの一年生が自分より大人だとも、紗耶香には思えなかった。
この一年生からは、そういう自分の未来につながる展望、言うなれば「希望」が感じられない。
今の彼女はただ、他人の声を頑なに拒んでいるだけだ。
「自棄になったって、何も手に入らないし、何も残らないのよ！？」
それでも紗耶香は、言わずにいられない。
時には無理矢理にでも誰かが止めてあげなくてはならないこともあると、彼女は自身の経験から確信していた。

「先輩には分かりませんよ。
あたしは別に、何かが欲しくてアイツらと手を組んだんじゃないんですから」
しかし返ってくるのは、当然のことながら、強い拒絶。
彼女が説得に応じるはずがないということも、紗耶香には薄々分かっていた。自分も、そうだったのだから。
説得は、後回しで良い。ここで逃がしたら、この子はもう「こちら側」へ戻って来れない。それを思えば、多少手荒になっても仕方が無い。
――紗耶香はそう心を決めた。
「桐原君」
「ああ」
紗耶香の意図を、桐原はすぐに理解した。
生憎二人とも得物を持って来ていないが、不安は感じなかった。
この一年生には武術・格闘術の心得が無い。その程度のことを見て取る眼力は、二人とも備えている。
二人掛りなら、取り押さえることは容易なはずだ。
紗耶香と桐原の判断に、誤りは無かった。
相手が武器を持っていなかったのなら。
紗耶香と桐原が同時に踏み込んだ瞬間、それに同調するようにして、千秋が小さなカプセルを投げた。
「伏せて！」
いち早くそれに気づいたエリカが叫ぶ。
咄嗟に二人は、目の前に腕を翳した。
激しい閃光が腕の隙間から瞼を通して眼底を焼く。
その光の中で視力を保っていられる者がいたならば、千秋の瞼が黒く塗られていることに気づいただろう。

マスカラとアイシャドウに偽装した遮光塗料で閃光弾によるダメージを防いでいるのだ。
千秋が右手を紗耶香へ向けた。
袖口からバネ仕掛けの投げ矢が飛び出す。
閃光の遮断に成功していたエリカが、細長い紡錘形の投げ矢を何処からか折り取って来た木の枝で打ち落した。
割れて飛び散った胴体から薄っすらと紫がかった煙が広がる。
エリカは咄嗟に得物を手放し、紗耶香を突き飛ばし、ブレザーの袖で自分の口元を押さえた。
閃光弾のダメージから回復し切っていない桐原が、拡散してほとんど透明になった煙をまともに吸い込んだ。
ふらり、と身体を揺らしたかと思うと、ガックリと膝を突く。
（神経ガス！？）
口を開けぬまま、エリカは心の中で舌打ちを漏らした。
相手は予想以上に周到だ。
ＣＡＤの携行が許されない校内では、自己加速魔法も満足に使えない。
人数で勝っていても、武器有りと武器無しでは勝負にならない……
しかし、そんな理屈（セオリー）に縛られない男が、ここにはいた。
芝生に伏せていた（エリカの警告を文字通りに実行した結果だ）レオが、千秋に向かって猛然と突進したのである。
その迫力に、千秋が「ヒッ！」と悲鳴を漏らした。
右手を慌ててレオへ向ける。
仕掛け矢が連装式になっていたのか、それとも別の飛び道具も仕込まれていたのか。
この場でそれを確認することは出来なかった。
千秋の視界から突如、レオの姿が消えたからだ。
立ち竦んだ千秋は次の瞬間、強烈な衝撃を下半身に受け、為す術も無く押し倒され、後頭部を打って気を失った。
「……やり過ぎたかな」

千秋に正面からの両手タックルを決めたレオは、身体を起こしながら振り返り訊ねた。
「そうね。
……それより、さっさと立ち上がりなさい。それじゃあまるで、強姦しようとしているみたいに見えるわよ」
「バッ……！　そんなんじゃねえよ！」
「ハイハイ、分かってるって」
呆れ顔で見下ろしながら、エリカの瞳は真剣そのものだった。
それは、プロのギャンブラーがダービーに臨んでサラブレッドの仕上がりを推し量るような、そんな目付きだった。

3－（7）　護衛の資格（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

3－（7）　護衛の資格

騒ぎを聞いて（風紀委員長として）保健室に駆けつけた花音は、ベッドの上で意識を失ったままの一年生と、保険医の治療を受けている二年生カップルを見て溜息を吐いた。

「アンタたち、やり過ぎよ……」

紗耶香から経緯を聞いて、花音はもう一度溜息を漏らす。

常日頃より暴走特急気味の花音に「やり過ぎ」呼ばわりを受けるのは桐原も紗耶香も不本意だっただろうが、相手が頭を打って気を失ったままという芳しくない状態とあっては、反論の言葉が見つからなかった。

「それで一体、彼女は何をやったの？

今聞いた話では、単に非合法な電子機器を持っていただけで、違法行為も校則違反も実際には行っていなかったということになると思うんだけど」

これもまた、反論のしようが無い指摘だった。

元が生真面目な紗耶香や、弁が立つとはいえない桐原には。

だが今ここにいるのは、この程度で畏れ入る人間ばかりではなかった。

「非合法なハッキングツールを持っているだけで、捕まえるには十分だと思いますけど？」

挑発気味の口調で嘯いたエリカを、花音は鋭く睨みつけた。

「……やり過ぎが問題だって言ってるの。

罪と罰はバランスが取れたものでなければならないのよ」

「べっつに～、罰を与えようと思って捕まえたんじゃありませんよ。

汚い大人に利用されている学友を保護しようとしただけです」

「保護する相手を気絶させるの、貴女は。彼女、頭を打ってるのよ」

「隠し武器まで持ち出して抵抗されては仕方ないですねぇ。

人助けだからって自分が怪我に甘んじなきゃならない理由はありませんから」

睨み合う花音とエリカ。

一触即発の空気に紗耶香はオロオロしていたが、おそらくこの場で止めに入るべき最右翼の立場にいる保険医が、仲裁に入る素振りすら無いのを見て、手も口も出せずにいた。

「そんじゃ、千代田委員長。後はよろしく」

口を挿んだのは壁際に立っていたレオだった。

「行こうぜ」

「チョッと、いきなり何？」

クイッ、と首で退室を促されたエリカが、矛先を変えてレオに食って掛かった。

しかし今度は、睨み合いにはならなかった。

レオは一瞬だけ面倒臭そうな顔をして、フイッと背中を向けた。

「こっから先は風紀委員会の仕事だろ。

オメーはどうだか知らんけど、達也や美月や幹比古に火の粉が飛ばなきゃそれで良いんだよ、俺は」

「待ちなさい！」

背中を向けたまま言い捨てて出て行くレオを追いかけて、エリカも保健室を後にした。

◇◆◇◆◇◆◇

騒々しい一年生（そして少なくとも一方は癇に障る一年生）の声が聞こえなくなって、花音は少し落ち着きを取り戻した。

「それで先生、この子の容態は正直なところどうなんです？」

花音の問い掛けに、保健医の安宿怜美〔あすか・さとみ〕はおっとりとした笑顔を向けた。

「心配要らないわ。

脳にも骨にも異常は見られないから。

何もしなくても自然に目を覚ますわよ」
安宿は生体放射を視覚的に捉えて肉体の異常個所を把握することの出来る医療系の特化型能力者だ。視るだけでそこらの病院にある精密検査機器より正確な診断を下す能力がある。
彼女が大丈夫だと言うなら、一先ず安心出来るというものだ。
「じゃあお手数ですけど、この子が目を覚ましたらご連絡いただけますか」
「良いわよ。
あっ、でもこの子に逃げられても、文句は言わないでね？
私は戦闘能力皆無なんだから」
ホンワカと笑いながら告げる安宿に、花音は笑顔で頷いた。
「先生が怪我人を逃がすはず無いじゃないですか」
花音は治療を終えた紗耶香と桐原を引き連れて、保健室を辞した。

◇◆◇◆◇◆◇

花音は風紀委員長であると同時に、今は五十里の護衛役でもある。
論文コンペを睨んだ護衛は一人のガード対象に複数人のガードがつく体制であり五十里のガードにはもう一人二年生の男子生徒がついているが、花音はこの役目を他人任せにするつもりは全く無かった。
話を聴かなければならない一年生が目を覚ますのも待たずに実験が行われている校庭へ戻ったのはその為だ。
そしてその先ではまたしても、あの癇に障る下級生――要するにエリカのことだ――がトラブルを起こしていた。
頭痛を覚えながらも見て見ぬ振りは出来ず、花音は手近な風紀委員を捉まえて事情を訊ねた。
「チョッと司波くん、これ、一体何事なの？」
達也は確かに花音が委員長を務める風紀委員会のメンバーだが、それ以上に今は論文コンペ代表メンバーの一人として実験の進行に

関わっている身だ。
　現在はガードされる側であり、キーボードを叩いている横から話し掛けるなど、護衛役としては、担当が別であっても本来以ての外なのだが、花音には余りそういう意識は無いようだった。
　案の定、達也の背後で深雪が柳眉を吊り上げていたが、達也は特に機嫌を害した様子も無く、画面のスクロールを止めて振り向いた。
「エリカとレオがウロウロしているのが、関本先輩にはお気に召さなかったようですね」
　そう言われて再度状況を確認してみれば、迷惑そうな視線を集めているのは確かにエリカではなく関本の方だ。
　花音はうんざりした顔で、言い争っている二人へ近づいた。
「……関本さん、一体どうしたんですか？」
　風紀委員に任期は無い。自分から辞めると言い出さない限り、卒業するまで風紀委員のままだ。
　生徒会の代替わりを機に摩利や辰巳は委員を辞めたが、関本は委員会に籍を置き続けている。
　今現在、三年生の風紀委員は彼一人だった。
「千代田……いや、大したことじゃない。
　風紀委員でも部活連で選ばれた訳でもないのにウロチョロされては護衛の邪魔になると注意していたところだ」
　およそ彼女の柄ではないのだが、花音は頭を抱えたくなった。
　何故この先輩は、わざわざ波風を立てたがるのか、というのが彼女の偽らざる心境だった。
「……来年、再来年の為にも、一年生が実験を見学するのを止める理由はありません。
　それがガードの邪魔になれば、護衛役のあたしたちが注意します。
　関本さんは今回、護衛の仕事に立候補されなかったんですから、あたしたちに任せて貰えませんか」
　花音の言葉に関本がスッと目を細めたが、彼に反論する暇を与えず、花音はエリカの方へ向き直った。

「貴女たちも今日は帰ってくれない？
さっき起こした騒ぎだって、見方を変えれば四対一の暴力行為になるのよ」
有耶無耶の内に事態を収拾しようとする花音の台詞を聞いて、エリカは冷笑を浮かべた。
自分でも姑息な手口だと感じていた花音は、それを見て頭に血を上らせた。
しかしここで自分が逆上しては状況が悪化するばかり。
花音が奥歯を食いしばっている前で、エリカはアッサリと背を向けた。
「あたし、そろそろ帰るね。
達也くん、深雪、また明日」
「……オレも帰ることにするわ。じゃあな、達也」
二人の一年生がアッサリ引き下がったのを見て、花音はホッと息を吐いた。
情報端末が振動で着信を告げたのはその時だった。
メッセージを確認した花音は、まだ何か言いたそうな関本を放置して、今来たばかりの道を保健室へと引き返した。
「あっ、花音、待って」
その後を五十里が慌てて追いかけたが、彼の持ち場放棄を咎めた者はいなかった。

五十里が閉じ損ねた情報端末のディスプレイへ、関本が興味深げな目を向けた。
と、横から手が伸びて、端末の電源が落とされた。
「市原」
「関本君はこういう実用的なテーマに興味がないと思っていましたが」
ムッとした表情で振り向いた関本に、鈴音は体温がまるで感じられないポーカーフェイスで応えた。

「……基本コードのような基礎理論や術式そのものの改良を重視すべきだという意見は変わらないが、応用技術に興味が無い訳じゃない」

「基礎理論を軽視しているつもりはありませんが。

実用化に伴うリスクを軽減する為には、理論の為の理論を研究するより寧ろ厳密な基礎理論の検証が必要ですから」

「検証と研究は違う。研究は創造だ。検証だけでは、前進は無い」

「人間の役に立たない理論に価値はありません。実用化されてこその理論です」

冷静に、但しどちらも頑なな態度で口論する二人の様子を、達也がモニター越しに盗み見ていたが、少なくとも関本は、それに気づいていなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

校門を出たレオは、エリカの後を黙々とついて行った。

と言っても、一緒に下校しているという意識は、彼には無い。

校門から駅までは一本道。

単に、追い越していく程、急ぎの用事は無いというだけだった。

それはエリカも同じなはずだ、とレオは思っていた。

単に足を進める方向が同じなだけで、偶々(たまたま)歩調が合っているだけだと。

「レオ」

だからいきなり名前を呼ばれた時、意外感に思わず足を止めてしまった。

エリカもまた、足を止めていた。

「アンタ、今日、時間ある？」

質問の意味が咄嗟に理解できず、レオは立ち尽くしたまま絶句してしまう。

エリカがクルリと振り返った。

スカートがフワリと翻ったが、レオの目はエリカの瞳に釘付けだった。
甘さなど微塵も無い、
悪ふざけの欠片も無い、
今にも斬りつけてきそうな、鋼色の気迫に染まった眼差しだった。
「どう？」
再度、短く、エリカが問う。
それで、レオの呪縛が解けた。
「……特に予定は無いぜ」
「だったら付き合いなさい」
再びクルリと踵を返し、エリカはスタスタと歩き始めた。
同じ速さ、無言のままで、レオはその後に続いた。
見掛けの上では、さっき迄と同じ。
だがその意味合いは、百八十度変わっていた。

◇◆◇◆◇◆◇

花音が保健室に入ると、安宿がおっとりした声で出迎えた。
その手に押さえ付けられ、もがいている千秋の姿を見ると、「おっとりした」という印象は霧散するのだが。
「先生……『戦闘力は皆無』じゃなかったんですか？」
分かっていながらついついそう訊ねてしまうのも、これが初めてではなかった。
「やあねぇ、これは『看護』よ。『戦闘』じゃないわよ？」
「……」「……」
思わず目付きが据わってしまったのは花音一人ではなかったが、敢えてツッコミを入れなかったのもまた、彼女一人ではなかった。
「えーと……その子から話を聴きたいんで、取り敢えず放して、じゃなかった、座らせてあげてくれませんか」
「良いわよ」

咄嗟に言い換えた機転を褒めるように、ニコニコと笑みを深めて安宿は千秋を抱き起こした。

――あのまま言葉を続けていたらどうなっていたか、花音は薄ら寒さを感じた。

それを振り払う為か、花音は小さく頭を振って、起き上がった千秋へ視線を移した。

「一昨日は大丈夫だった？」

花音に問われて、千秋はハッと目を見開き、慌てて顔を隠すように俯いた。駅前で自分を追いかけてきた相手が花音だと、今更ながら気づいたようだ。

「一昨日といい今日といい、無茶するわね。

一歩間違えば自分が大怪我してるわよ」

花音の口調に問い詰める色合いはない。

寧ろ、優しい声だ。

「でも、このままエスカレートするのを黙って見てる訳にもいかないの。

まだ何もしていない今だからこそ、あたしは貴女を止めなくちゃならない」

これは花音にとっても精一杯の背伸びだ。

風紀委員長、という地位を与えられたからこそ、下級生を更生させようという義務感が生まれた。そうでなければ、彼女本来の気質からして、さっさと忘れていたことだろう

「さっき壬生さんに、何かが欲しい訳じゃない、って言ったらしいわね。

じゃあ何でデータを盗み出そうなんて考えたの？」

だが本人にとっては背伸びであっても、それを向けられた相手にとってはそれなりに感じ入るものを与えたようだった。

「……データを盗み出すことが目的じゃありません。あたしの目的は、プレゼン用の魔法装置作動プログラムを書き換えて使えなくすることです。

パスワードブレーカーはその為に借りたものです」
「当校のプレゼンを失敗させたかったの？」
本心では、花音の腸（はらわた）は一瞬で煮えくり返っていた。
よりによって五十里の晴れ舞台――花音の主観的には――を邪魔しようとしていたというのだから。
今日の彼女は、本当によく我慢していた。
「違います！　失敗すれば良いなんてそんなことは考えていませんでした！
……悔しいけど、あの男はその程度のことなんてきっとリカバリーしてしまう。
アイツはそれだけの腕を持ってる。
でも本番直前にプログラムがダメになったら、少しくらい慌てるに違いないって思った。
何日も徹夜してダウンしちゃえばいい気味だって思った。
あたしは、アイツの困った顔が見たかったの！
だって、アイツばっかりいい目を見るなんて許せないんだもの……！」
千秋はベッドの上で嗚咽を漏らし始めた。
花音は途方に暮れた顔で五十里へ振り向いた。
ベッドから離れて話を聴いていた五十里は、花音に一つ頷いて、ベッド脇のスツールに座った。
「平河千秋くん……君は、平河小春先輩の妹さんだね？」
俯き、嗚咽に震えていた千秋の肩が、別の意味でビクッと震えた。
「お姉さんがああなっちゃったのは、司波君の所為だって思ってる？」
「……だってそうじゃないですか……」
低く響いてきた声は、呪詛だった。
「アイツには小早川先輩の事故を防げたのにそうしなかった。
アイツは小早川先輩を見殺しにして、その所為で姉さんは責任を感じて……！」

五十里が千秋の肩にそっと手を置き、千秋はその手を勢いよく払い除けた。
五十里は払い除けられた手を見詰めながら、苦々しさの混入した声で再び話し掛けた。
「もしあの事故について、司波君に責任があるというなら、僕も同罪だ。僕はあの仕掛けに気付かなかったんだから。
僕も含めた技術スタッフ全員が同罪だよ。司波君だけの責任じゃない」
「笑わせないで下さい……」
言葉だけでなく、千秋は顔を伏せたまま嘲笑していた。
カッとなって立ち上がった花音を、五十里が手で制した。
「姉さんにも分からなかったんですよ。五十里先輩に分かるわけ無いじゃないですか。
アイツだからあの仕掛けに気付くことが出来たんです。
それなのにアイツは、自分には、妹には関係ないからって手を出さなかったんじゃないですか！
あんなに何でも出来るクセに自分からは何もしようとしない……きっとそうして、無能な他人を嗤ってるんだわ。
本当は魔法だって自由に使えるクセに、わざと手を抜いて二科生になって、一科生も二科生も手当たり次第に他人のプライドを踏み躙って嘲笑ってるに違いないのよ、あの男は！」
「ハイハイ、そこまで」
深い憎悪と妄念にまみれた糾弾に花音と五十里の二人が言葉を失う中、緊張感皆無の声が千秋の演説を遮った。
「ドクターストップよ。
千代田さん、続きは明日にしてちょうだい」
「安宿先生……」
「彼女の身柄は一晩、大学附属の病院で預かります。
親御さんには私の方から連絡しておくから、二人とも準備に戻りなさいな。

もう日にちが無いのでしょう？」
安宿の申し出に、花音は何か反論したそうだったが、五十里に制止され、そのまま保健室を後にした。

◇◆◇◆◇◆◇

二人乗りのキャビネットの中、
レオの隣にはエリカが座っている。
狭い車内に同級生の女の子と二人きり。
色気より食い気ならぬ、花より喧嘩のレオであっても、全く意識しないという訳には行かなかった。
相手がエリカと分かっていても、何となく居心地が悪い。
いや、相手がエリカだから、余計に居心地が悪いのかもしれない。
客観的に見て、エリカは滅多にいない美少女だ。
スタイルが良い所為か武術を嗜んでいる所為か、窓枠に肘をついて外を眺めているというラフな姿勢でさえも格好良く見える。
しかも、何やら甘い匂いまで漂って来ている、様な気がする。
隣り合わせではあからさまに目を向けるわけにも行かず、かといって無視することも出来ず、どうしてもチラリ、チラリと目が吸い寄せられてしまう。
レオは目的地も聞かぬ内から誘いに乗ったことに、早くも後悔を覚え始めていた。
居心地の悪さを増幅する沈黙は、彼にとって幸いなことに、長く続かなかった。
「……簡単過ぎると思わない？」
「何がだよ」
唐突な問い掛けにも、何とか普通の声で答えることに成功して、レオは密かに胸を撫で下ろした。
「昨日、正体不明の外国人に、スパイが潜入してるって警告を受けて、

今日、スパイ道具を持った生徒が見つかった。
それも、『見つけて下さい』と言わんばかりのお粗末な成り行きで」
「お粗末って……結構苦労した内だと思うぜ、アレは」
「バカ。苦労したのは捕まえるのに、でしょ。
ハッキングツールをむき出しで手に持ってるなんて、普通じゃ考えられない不用心じゃない」
「所詮は素人ってことだろ」
「ウン……」
あっさり決めつけたレオの言葉に、生返事で頷きながらも、エリカは納得し切れていない様子だった。
「どうしたんだよ」
エリカのいつになく歯切れの悪い態度に、レオはようやく、冗談や軽口で済まされないものを彼女が感じているのだと覚った。
「これで終わりじゃない……あの子は、当て馬かもしれない」
「こっちの油断を誘うための囮で、本命は別にいるってか？」
今この時、沈黙は肯定だった。
「……で、俺に用事ってのは、本命を炙り出す探偵の真似事か？」
「まさか」
呆れ声で斬り捨てたエリカにいつもの彼女を感じて、レオは怒るよりも安心してしまった。
どうも狭い空間に二人きりという状況が、レオの精神を失調させているようだ。
「アンタに頭脳労働なんて期待してないわよ」
「なんだとコラ」
流石にこの暴言は見過ごせなかったが。
「あたしもアンタも頭脳労働なんて柄じゃないでしょ。
そんなのはそれこそ達也くんに任せときゃいいの」
しかし、自分まで「頭脳労働に向かない」と開き直られては、反論は難しかった。

「そんな似合わない真似をするより、あたしたちにもっと相応しい役回りがあるでしょ」
これで「ピン！」と来る辺り、この二人は思考回路が似ているのだろう。――本人はどちらも強硬に否定するだろうが。
「用心棒か」
「守るより反撃がメインだけどね」
「怖い女だな……達也を囮にしようってか？」
「達也くんなら殺したって死にゃしないわよ」
「ハッ、確かにな」
狭いキャビネットの中で人の悪い笑い声が低く響いた。
達也に聞かれたら絶交を言い渡されそうな遣り取りだが、幸い（？）ここに当人はいない。
――その笑い声は、唐突に途切れた。
「でもその為には、足りないものがある」
一転、エリカは表情を引き締めて、そう切り出した。
「足りないもの？」
どうやら真面目な話らしいと察して、レオは大人しく耳を傾けた。
「レオ、アンタの歩兵としての潜在能力は一級品よ。
短銃やナイフを併用した戦闘なら、服部先輩や桐原先輩より素質は上だと思う」
唐突で思い掛けない高評価に、レオは寧ろ呆気に取られた。
「素質という点ではミキも相当なものだけど、有視界戦闘ならアンタの方が勝ってるでしょうね」
ただ、思考停止に陥ったのは、ほんの数秒のことだった。
「……で？
素質は、ってことは、今の能力に問題ありって言いたいんだろ」
レオの鋭い切り返しに、エリカは特に驚いた様子もなく頷いた。
「足りないものがある、って言ったでしょ？
アンタには、決め手が無い」
「決め手？」

「決め技、殺し技と言ってもいいわ。
相手を確実に仕留める技。
相手に大きな脅威を感じさせる技。実際に使わなくても、それを持ってるってだけで優位に立てる技。
アンタには、それが無い」
「……オメエにはあるのか？」
「ええ。
専用のホウキが必要だけど、それを手にすれば確実に相手を叩き潰すことの出来る秘剣が、あたしにはある」
「へぇ……」
「アンタは、相手を確実に殺せる技を持っていないでしょ？
達也くんの作った『小通連』は使い方とチューニング次第で大きな殺傷力を持つ武器だけど、それでも決め手とするには斬れ味が足りない」
キャビネットが低速レーンへ移った。
目的地が近づいているということだ。
「……確かにな。
オレは、相手を殺すことを前提とした技術は持っていない」
四月の一件でも、レオは後詰めに回されて、ブランシュのメンバーと実際に戦ってはいない。桐原やエリカの様に、人間の肉を斬り裂き骨を砕く暴力を実体験していない。
「それを身につける覚悟がある？」
エリカの眼差しが、レオの瞳を射抜いた。
「自分の手を人の血で汚す覚悟がある？
今度の敵は、多分そういう相手よ」
「愚問だぜ」
レオは、エリカの眼差しから僅かも目を逸らすことなく、簡潔に、明快に答えた。
キャビネットがスピードを落とし、駅のプラットホームに滑り込んで、止った。

ドアを開けてエリカがホームに降りる。
続いて外に出たレオの鼻に、潮の匂いが届いた。
神奈川との境近く、かなり海に近い所らしいと、駅名を確かめる前に、レオは思った。
「だったら、あたしが教えてあげる。
秘剣・薄羽蜻蛉（うすばかげろう）……アンタにピッタリの技をね」
逆光の中、振り返った肩越しに、エリカはそう告げた。

◇◆◇◆◇◆◇

すっかり日も落ちて街灯に照らされた駅までの帰り道。
今日はレオとエリカがいない代わりに花音と五十里が一緒だった。
「……なるほど、そういう動機でしたか」
余り気が進まない様子の花音から、分かった範囲で事情を聞いて、達也は納得顔で頷いた。
「何ですかそれって！　単なる逆恨みじゃないですか！」
「って言うより八つ当たり？」
憤慨するほのかの隣で、理解に苦しむとばかり雫が首を捻っている。
二人にとって今の話は、正気の沙汰と思えなかった。
「八つ当たりせずにいられなかったんだろうね……」
「きっと、お姉さんのことが大好きなんでしょうね……
平河さんがやろうとしたことを認めるわけには行きませんけど、気持ちだけなら、少しは解る気がします」
対照的に、同情混じりの言葉を漏らしたのは幹比古と美月の二人だった。
一科生と二科生で見事に割れた感想を達也は興味深く思ったが、もちろん面白がっている素振りを見せたりはしなかった。
「ですがそれなら、放っておいても問題なさそうですね」
達也が口にしたのは、それをどう思うか、ではなく、これからど

うするか、ということ。
達也の意見に、花音と五十里が揃って首を傾げた。
「狙われているのはキミなんだけど？」
花音が心配してというより呆れ気味に問い掛けた。
達也は何故か申し訳なさそうな表情で頭を振った
「そう……俺を狙った嫌がらせに巻き込んでしまった形ですね。
しかしご迷惑はお掛けしませんよ。
ブルートフォースのパスワードブレーカーで破られるほど柔なセキュリティは組んでいませんから」
「いや、装置の方はシステム的なセキュリティだけじゃなくて、ロボ研にも協力して貰って監視しているから、心配要らないと僕も思うんだけど……
クラックが通用しないって分かったら、もっとエスカレートしないとも限らないんじゃないかな。
平河先輩のことが原因なら、先輩から説得して貰って考え直させるのが一番だと思うんだけど……」
眉間に皺を寄せて――そういう表情まで悩ましい（艶めかしい？）から質（たち）が悪い――五十里が最も効果的と思われる解決策を提示したが、達也はやはり、首を横に振った。
「平河先輩をこの件に関わらせるのは止めましょう。
姉妹とはいえ、関係も責任も無いんですから」
平河（姉）は、少なくとも妹の暴走の原因になったという意味で無関係ではない。
だがそれを「関係ない」と言い切った達也の台詞に、五十里は感心している様子だった。
「へぇ～、優しいトコもあるのね」
からかっているのではなく、花音は素で驚いている。
それを見てムッとしている深雪をさり気なく上級生の視界から隠しながら、達也は先の二回よりも大きく首を振った。
「余計面倒になりそうな気がするからですよ。

それに、最近周りをチョロチョロしているのは、平河姉妹の妹の方だけじゃありませんから」

その台詞にハッと顔を強張らせて、花音と五十里と幹比古が左右に目を走らせた。

不審な人影は発見できなかったが、微かな場の揺らぎ――意図しないサイオンの波紋――を、五十里と幹比古は感じ取った。

「……やっぱり護衛を付けようか？」

空間に広がる揺らぎではなく、五十里の顔に浮かんだ揺らぎによって、達也の指摘が思い込みでないことを確認した花音がそう問い掛けたが、

「いえ。

七草先輩クラスの知覚能力がなければ、あれの尻尾を掴むのは難しいでしょうから」

暗に、任せられる役者がいないと指摘して、達也は四度（よたび）、首を振った。

3－（7）　護衛の資格（後書き）

色々と思うところがありまして、更新を不定期に変更します。
勝手を言いまして申し訳ございません。

3－（8）　武者修行（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

3－（8）　武者修行

昼食時の学生食堂。
その様相は魔法科高校だからといって、文科高校や理科高校と変わるものではなく、中学校ともそれほど差異は無い。（上流階級子女の教育を目的とした教養一貫校ならば趣も異なるかもしれない）
無秩序なざわめきが重なり合って一つの喧噪を作り出している。
しかしそのカオス空間の一部が、突如として一つの秩序を帯びた。
一瞬、シンと静まり返り、それが指向性を持つさざめきに変わる。
広い学生食堂の、ほんの一エリアとはいえ、場の雰囲気を変えてしまう影響力――あるいは支配力――を振るったのは、最近ますますその美貌に磨きが掛かった（迫力が増した、と言う者も少なくない）深雪だった。
すれ違い行き過ぎる人々の注視を例外なく浴びながら、表面上は全く気にした様子を見せずに、深雪は真っ直ぐ迷い無く、達也の待つテーブルへ向かった。
「お兄様、お待たせしました」
律儀にお辞儀する深雪に、達也は笑って手を振った。
達也たちが席取りをして、深雪たちが後から合流する、というのは、実を言えば決まったパターンではない。この逆も普通に見られるのであって、大体六・四くらいの割合だ。
しかし、深雪が達也の居る所に来ない、というパターンはほとんど無い。
「あっ、深雪さん。来てたんですか」
「今来たところよ、美月」
そこへ、食べる物を取りに行っていた美月と幹比古がやって来た。
「じゃあ、行ってくる」
腰を下ろした美月たちと入れ替わりに達也は立ち上がり、「行こ

うか」と目で促す。
三人の美少女を引き連れて配膳台へ向かう達也に、先程まで深雪が浴びていた眼差しとは全く種類の異なる視線が突き刺さった。

配膳台から戻って来た四人（達也、深雪、ほのか、雫）を迎えたのは、美月と幹比古の二人だけだった。
「エリカと西城君はまだ履修中なんですか？」
姿の見えない二人について、ほのかが何気ない口調で訊ねた。
それほど本気で気にしている訳でもなかった。
彼らの場合、昼食時はいつも全員が揃っている、というものでもなく、例えばここ数日は達也が舞台装置作り（正確にはそのプログラム調整）に忙しくて学食には顔を見せないという状態が続いていた。（深雪は当然の様に達也にくっついていた）
ある意味時間にルーズな現代の授業システムで、生徒によって終わりの時間がバラバラになるというのは寧ろ普通に見られること。
ほのかの質問は「今日はいい天気ですね」に近い、単なる会話のきっかけを探るものだった――のだが。
「ああ、あの二人、今日は多分休みだよ」
達也の回答に、ほのかの目がキラリ、と光った。
「えっ、二人一緒にですか？」
「二人揃って」
達也はほのかが何を誤解（？）したのか、彼女の期待に満ちた眼差しを見てすぐに理解した。
その上で、人の悪い笑みを浮かべながら、あえて少し言い回しを変え、勿体ぶって頷いた。
「意外……でもないかな？」
雫が小首を傾げ、独り言じみた呟きを漏らす。
口調は淡々としたものだが、目付きは興味津々だ。
「えっ、そうなんですか！？」
「美月、貴女がわたしたちに訊いてどうするの」

目を丸くして尋ねる美月に、深雪が苦笑しながら反論した。
美月は二人のクラスメイトで深雪たちはそうではないのだから、深雪の言い分は当然だった。
「あうっ、そうですね……」
困惑した美月は助け船を求めて目線を泳がせ、
「っと……」「……」「……」「……」
「えっ？　いや、特にそんな素振りは無かったと思うけど……」
女子四人の目が申し合わせたように幹比古へと集まり、幹比古は慌て気味に答えを返した。
「そういえば、昨日は二人で帰っていたな」
そこへ達也が再度燃料を投下。
わっ、とか、きゃっ、とかはしゃいでいる友人たちを横目に、深雪は少し生暖かい目を兄へ向けた。
もしかしてストレスが溜まっているんですか？　と視線で問われて、達也はさり気なくそっぽを向いた。

「でもエリカちゃんとレオ君、本当にどうして休んだんでしょう？」
「そうだよね。あの二人に限って、急病ってこともないだろうし……」
全員のトレーから食べるものが片付き食後のお茶に移ったところで、一旦は沈静化したに見えた「二人が一緒に休んでいる」疑惑が再燃した。
「それは言い過ぎだ、と言いたいところだが……同感だな。昨日まで、体調を崩している様子は特に見られなかったし」
幹比古と達也は揃って「病欠ではない」という結論の模様。
「もちろん、偶然という可能性もあるわけですけど……」
「偶然じゃない、という可能性もあるよ」
「それはそうだけど……」
可能性を可能性で返されて、ほのかは話し掛ける相手を達也から雫へ変えた。

「そもそも『偶然じゃない』というイベントが起こり得る仲なのかしら、あの二人？」
「起こっても不思議じゃないと思う、けど……」
「えっ、あのっ、私もそう思います」
雫に「どう思う？」と目を向けられた美月は、慌てながら同意を示した。
「でも、仮に二人が今一緒にいるとして……一体何をしているのかしら？」
小首を傾げながら深雪が呟く、と、美月と幹比古が時間差で顔を赤らめた。
「……二人とも、何を想像したの？」
「い、いえ、その、何でもありません」
「そっ、そうなの！　何でもないの！」
「……まあいいけど」
お揃いで分かりやすい反応を示した二人にやれやれとため息を吐いて、深雪は兄へ目を向けた。
「そうだね……仮定の上に想像を重ねた、何の根拠もない意見だけど……案外、レオがエリカにしごかれてるんじゃないかな」
これは冗談だよ、と念押しするようにウインクして見せた達也に、
「フフッ、ありそうですね、それ」
と、深雪は顔をほころばせた。

◇◆◇◆◇◆◇

達也のスキルに「千里眼」は含まれていない。
しかし、それと似たことは出来る。
魔法が物理的距離によって直接的には左右されないのと同様に、イデア（情報体次元）を認識する知覚力にも物理的距離は直接の障碍とならない。
情報の海の中で対象を特定できれば、どれだけ物理的に離れてい

ても「視る」ことが出来る。
例えば高々倍率の天体望遠鏡で月を見て、月面着陸船（の残存物）を識別できれば、その月面着陸船の状態を把握することが可能だ。
（実際にはそんな高解像度の光学望遠鏡など存在しないが）
しかし今この時は、エリカたちのやっていることをこっそり覗き見していた訳ではなく、全くの偶然だった。

「こらっ！　また皺が寄ってる！」
エリカが叱り付けた相手は、彼女の足元で頭を押さえて蹲っていた。
「～～ってぇな……
何度も言ってんだろ！
手を出すより先に口を出せ！　何の為の言葉だよ！」
「アンタが口で言っても分からないからじゃない」
「殴ったら分かるとでも思ってんのかよ……」
レオの抗議は尻すぼみに勢いを失い、そのままフェードアウトした。
今は教わっている立場で強くは出られない、という事情も無論あったが、それ以上に何度繰り返しても上手く出来ない自分に不甲斐無さを感じていたのだった。
「まあ……それもそうね。一休みしよっか」
だがエリカはレオのことを不甲斐無いとは思っていなかった。
新しい技を習得することの難しさは、多分、彼女の方が良く知っている。
「はい」
「お、おう」
板張りの床に胡坐をかいたレオへ、冷え過ぎていないコップを差し出し、エリカはその前に正座した。
「マントの時は上手く出来たのにね……
やっぱり、勝手が違う？」

この台詞、エリカに他意は無かったが、レオは嫌そうに顔を顰めた。

「……九校戦のアレか？」

戦果はともかく、レオにとっては外見的に忘れたい記憶であるようだ。

しかし、教わっている技に関係があることも明白なので、忘れたふりは出来ない。

「あん時は、アイロン掛けたみたいに真っ平に伸ばしてた訳じゃねえよ。

多少細かい皺があっても盾としての役割に支障は無かったからな。生地自体にも、展伸を補助する術式が組み込まれていたし」

エリカは正座したまま、顎に指を当てて首を傾げた。

「フーン……

補助術式はこっちにも組み込まれてるはずなんだけど……やっぱし、達也くんに相談してみるのが早いかな……」

「いや、止めとけ」

エリカの漏らした独り言に、レオは首を振った。

「今回、達也の手を煩わすのは本末転倒だぜ。

術式が組まれてる、ってんなら、オレがそれを発動させれば良いだけの事だ」

「……オトコノコだね」

エリカが「フフッ」と含み笑いを溢した。

その笑顔が妙に艶っぽくて、レオは噛み付くことも出来ず目を逸らした。

◇◆◇◆◇◆◇

今日は土曜日、だが、学校は休みではない。

魔法科高校は週休二日制を採用していない。

今日もしっかり（実習込みで）授業があるというのに、達也は今

朝も八雲の寺を訪れていた。
しかも今日は、深雪も同行している。
実は八雲から「遠当て」用の練武場を改装したので試してみないか、と誘われたのである。
魔法射撃を実弾で練習できる場所は少ない。
特に学校の練習場を使えない（学校で「雲散霧消」を披露する訳にはいかないからだ）達也にとっては、わざわざ土浦まで行かなくても、身近な所で射撃の練習が出来るのはありがたいことだった。
深雪は兄と違って能力を隠さなければならないという事情は無いのだが、クラブに所属している生徒程には練習場を自由に使えない。
それに元々、彼女の得意とする魔法は、点の標的を狙撃するより面（エリア）を塗り替える性質のものが多い。その所為で普段から射撃練習に余り時間を割かないので、「これは良い機会だ」と達也が引っ張ってきたのだ。
寺の射撃練習場は、本堂の地下に広がっていた。
「――きゃっ！　このっ！」
流石に、と言うべきか、忍術使いの秘密修行場は、学校の施設とは一味違っていた。
持ち前の負けん気を発揮している深雪が、こめかみから汗を滴らせ、息を荒げている。
何度か転んだはずみで、アップに纏めていた髪が所々解（ほつ）れていた。
正方形の広いフロア。
その壁四面のうち三面と天井に開いた無数の穴から次々と標的が現れる。（四面全てでないのは、敵の真ん中に孤立するというシチュエーションが寧ろ非現実的な想定で、実戦ではそうなる前に逃げるべきだ、という理由らしい）
しかもターゲットは同時に何十と出現し、一秒で隠れる設定になっている。
それだけならまだ狙いをつけるのに忙しいだけだが、撃ち漏らした的の数に応じて模擬弾が降って来るから始末に悪いのだ。

ムザムザと模擬弾を喰らう深雪ではなく撃ち込まれた弾は全て魔法でブロックしているが、射撃と防御を同時にこなして足元が疎かになり転倒する、というパターンをさっきから何度か繰り返していた。

「はいっ、止め！」

八雲の合図と共に訓練装置が停止し、深雪は思わずへたりこんでしまった。

「お疲れ様」

「あ、お兄様……申し訳ありません」

達也にタオルを差し出されて、深雪は恐縮しながら手を伸ばした。

達也はそのままタオルを手渡す代わりに、反対側の手で妹の手を掴み、その華奢な身体を軽く引っ張り上げた。

「あっ……

ありがとうございます」

「怪我は無いようだね」

薄手のトレーニングシャツと膝上のスパッツに包まれた妹の肢体をざっと見回して、達也は息を弾ませている深雪に笑い掛けた。

深雪の顔が赤く上気しているのは、激しい運動の所為ばかりではなかったが、果たして達也はそれに気づいただろうか？

その答えが示されることはなかった。

妹の「大丈夫です」という返事に短く頷いただけで、達也はフロアの中央へ進んだ。

素っ気ない態度だが、深雪に不満の色は無い。

遊びに来ているのではないのだ。

達也が深雪の事を過剰に気に掛けるようなら、彼女が自ら兄を窘めただろう。

無論、そんな事は起こらないのだが。

達也はスタスタと歩きながら愛用のＣＡＤを胸の前に掲げた。

肘を曲げたままの、待機ポジション。

深雪がフロアから退くや否や、何の合図も無しにいきなり訓練メ

ニューがスタートした。
三面の壁にボール状のターゲットが出現する。
その全てが同時に砂と化す。
達也は正面に右手を突き出した射撃姿勢だ。
引き金を引いたのは――ＣＡＤのスイッチを押したのは一度だけ。
それで十二の標的が分解魔法に撃ち抜かれた。
一息つく間も無く、今度は壁と天井を使ってターゲットが示される。
その数は二十四。
達也は正面の一つに照準を合わせることすらせず、ＣＡＤを固定したまま引き金を引いた。
落ちてくる合成樹脂の粉末を避けて身を翻す。
ターンしながら右手を真上に突き上げ
引き金を引き絞る。
崩れ去る球体の隙間を埋めるように、次々と小球面が顔を見せる。
引き金が引かれる頻度が、二連続、三連続へと増えて行く。
しかし標的のストックが尽きるまで、遂にペナルティの模擬弾が発射されることは無かった。

「お兄様、すごいです！」
装置が止まり、ＣＡＤを下ろした達也へ、深雪が飛び付くように駆け寄った。
「やれやれ、完全クリアとはねぇ……
これでもまだ難度が足りないか」
その後ろから、八雲が呆れ顔で歩み寄る。
達也は深雪に笑顔で応えてから、少し苦い顔になって八雲へ向き直った。
「俺の得意分野ですからね、これは……
それでも結構ギリギリでしたが。
人の意識の隙間を突くような、あの性格の悪いアルゴリズムは誰

が組んだんですか？」
「制御式は風間君に貰ったんだが」
「なるほど、真田さんですか……」
人当たりの良い笑顔の裏側に独立魔装大隊でも一、二を競う腹黒い素顔を持つ技術士官の顔を思い浮かべて、達也は低く呻った。
それを見て「してやったり」とばかり表情を緩めた八雲の姿を隠すように、深雪が二人の間に割り込む。
「それにしてもお兄様、いつの間に同時照準を三十六まで増やされたのですか？」
しかしそれは兄を気遣って、というだけでなく、寧ろ自分の昂奮をぶつけたいという欲求の方が大きな比重を占めての行為だった。
「三ヶ月前は二十四が上限だったと思いますが」
深雪が言っているのは、同時に狙いをつけて同時に魔法を行使できる対象の数のことだ。
特化型ＣＡＤは銃の形をしているが、銃口から魔法が飛び出して行く訳ではない。汎用型には銃口に似たものすらついていない。
系統魔法の正体は事象が有する情報の書き換えであり、魔力の弾丸で対象を撃つものではないから、対象を特定さえ出来れば同時に複数の事象に対して同じ効果を及ぼすことが出来る。
ただその為には、同時に複数の座標を定義するという並列思考が要求される。
自然界には似た事象でも全く同じものは存在しないので、標的となる事象同士の細かな差異も認識できなければならない。
対象数が一桁までなら訓練次第で大抵誰にでも習得可能な技術だが、それ以上になると魔法とはまた別種の才能がものを言う世界で、対象を一つ増やすだけでもかなり難しいとされている。
深雪が目をキラキラ輝かせているのも、あながちブラコンのフィルターが掛かっている所為とばかりは言えなかった。
しかし達也は、笑いながら首を左右に振った。
「いや、今回は相手が撃ち返してこない、って言うか、撃ち返すの

を待ってくれる設定だったからね。
待った無しの実戦なら、今でも二十四が精々だよ」
「ご謙遜なさらないで下さい。
それを言うなら、わたしなんか撃ち返すのを待ってくれる設定の訓練でも同時に十六しか照準できません。
やっぱり、お兄様はすごいんです」
「こらこら、煽てたって何も出ないぞ。
お前は俺より広いエリアに魔法を作用させられるんだし、常駐で俺に心を配りながらそれだけ出来るんだから、制御面だって本当は俺より上だろう？」
「それを仰るんだったら、お兄様だって本当は、わたしよりもずっと強く、ずっと深い階層まで干渉することが可能ではありませんか」
謎かけのような二人の会話に、八雲が苦笑しながら割って入った。
「コラコラ二人とも、壁に耳あり、だよ？」
二人はしまった、という表情で顔を見合わせ、似たような照れ笑いを浮かべた。

◇◆◇◆◇◆◇

論文コンペ本番まで、あと一週間と一日。
プレゼンテーションのバックアップは全校一丸という表現が誇張でない体制となっていた。
デモ用の装置を作る者、舞台上の演出をプランする者、客席の効果的な応援を指導する者、移動手段や弁当の類を手配する者……
九校戦では出番の無かったインドア派の生徒たちもその才を存分に発揮している。
一方、体育会系の生徒たちも、自分たちの役割を着実に果たす為、準備に余念が無かった。
普通に考えれば準備など必要ないはずの大物が率先して、万が一のトラブルに備えた訓練に汗を流していた。

学校に隣接する丘を改造して作られた野外演習場。
魔法科高校は軍や警察の予備校ではないが、その方面へ進む者も多い為、屋内屋外、多様な用途に応じたこの様な施設が充実している。
その人工的な森林の中で、幹比古は息を殺して訓練相手の上級生を窺い見ていた。
彼は木陰に身を潜め、相手は林間に開けた空き地にその姿を曝している。
堂々と、という形容そのままの姿が、目を向けられている訳でもないのに、幹比古にプレッシャーを与える。
彼が相手をしているのは、部活連前会頭・十文字克人。
今回の論文コンペでは、九校が共同で組織する会場自警団の第一高校代表にして会場自警団総代表を務めることになっている。
他校の代表と会合を持つ傍ら、こうして自ら訓練の先頭に立つことで、警備要員に抜擢された生徒たちの士気を高めているのだった。
幹比古がその練習相手に選ばれたのは、九校戦の活躍を見留められたからだ。
もっとも、克人の相手を務めているのは幹比古一人ではない。
開始当初は十対一だった。
それが開始三十分で既に七名もリタイアしている。
幹比古の方から何度か遠隔攻撃を仕掛けただけで、一度も攻撃を受けていないにも関らず、彼は汗びっしょりになっていた。
それも、冷や汗で。
（……早まったかな）
練習相手の話が来た時には、危うく小躍りするところだった。
一年生の、しかも二科生、何の魔法競技系クラブにも属していないとあれば、十文字家次期当主の練習相手など、こちらから頼んでも本来ならば実現は難しいところだ。
幹比古は話を持って来た沢木に、一も二もなく頷いた、というか

勢い良く一礼した。
到底敵う相手ではないと分かっていたから、精一杯闘って良い勉強をさせてもらう、というつもりだった。
だが――
（落ち着け、僕。これは模擬戦なんだ）
克人はちゃんと手加減をしている。リタイアした七人も大きな怪我は負っていない。
しかしそれでも、それにも関らず、このプレッシャーは本物だ。
気がつかないうちに幹比古の息が荒くなっていた。
息を吸い息を吐くその音量が、何時の間にか可聴域まで上昇した。
すぐに気づいて、慌てて息を止める。
音が漏れたのはほんの二息、三息のはずだ。
室内でも一メートルも離れれば聞こえなくなる程度のボリュームだったはずだ。
それなのに、克人の視線は、幹比古が隠れている木の方へ正確に向けられた。
新たな冷や汗が背中を伝う。
息を呑んだまま止まってしまった呼吸を無理矢理再開させて、幹比古は聴覚と触覚に精神を集中した。
魔法的な探査を行う度胸は無かった。
隠れ場所がばれていると分かっていても、こちらから居場所を曝す度胸が持てない。
顔を覗かせるなど以ての外だ。
耳を澄ませて空気の流れをキャッチする。
片膝を突いたそのズボンの生地を通して、地面を伝わる微かな振動を感じ取る。
それだけでは足りなかった。
目は気流の乱れがもたらす僅かな屈折の変化を読み取り、
鼻と舌は空気に紛れた化学物質の比率の変化を嗅ぎ分け味わう。
幹比古は五感を総動員して、第六感がもたらす曖昧な情報を確か

なデータへと再構築していく。
克人は一歩一歩、急ぐでもなく警戒し過ぎるでもなく着実な足取りで、幹比古の方へと近づいている。
（……三、二、一、今だ！）
心の中でカウントを取って、幹比古は右手を地面に押し付けた。
地中を通した導火線（ライン）を伝って、サイオンが呪陣へ送り込まれる。
この木の陰に隠れる前に設置した条件発動型魔法が、トリガーとなる術者のサイオン波動を受けてその効果を表した。
克人を取り囲むように四つの土柱が噴き上がる。
その柱は正確に東南、西南、西北、東北、即ち地、人、天、鬼の四門を頂点とする正方形に配置されていた。
次の瞬間、克人の立つ地面が擂鉢状に勢い良く陥没した。
古式魔法「土遁陥穽」。
自分が土煙に紛れ、地中に隠れる術ではなく、敵に土砂を浴びせ穴に落とし、目くらましと足止めをして逃走の時間を確保する術式だ。
レベルが低い相手ならそのまま動きを封じて捕まえることも出来るが、十文字克人を相手にして時間稼ぎ以上の成果を得られると楽観する程、幹比古は己の技量に自惚れていない。
発動した術の成果を確かめる間も惜しんで、幹比古はその場から全力で逃げ出した。
その判断は、的確だった。
土煙が晴れた後には、円形に押し潰された穴と、円環上に降り積もった土砂と、土埃一つ浴びていない克人の姿がある。
彼の防壁魔法は、土を媒体とした攻撃を完全にシャットアウトしていた。
とは言うものの、視界を塞がれまんまと逃げられてしまったのも事実。
克人はニヤリと笑って、防壁の反発力で僅かに浮き上がっていた空中から、地上へ足を踏み出した。

魔法による模擬戦時には、事故防止と事故発生時の救護活動を目的として、屋内・屋外を問わずモニター要員がつくことになっている。

「へぇ……」

そのモニター画面を見ながら、摩利が感嘆を漏らした。

一年生でありながらここまで生き残っているというだけで、幹比古の技量は賞賛に値する。

彼の技能が一科生・二科生という枠に関係なく優秀なものだということは、九校戦でも確認できている。

しかしこうして、実際に戦っているところを改めて目の当たりにすると、その特異な魔法技術以上に運用の巧みが際立っている。

「達也くんとはまた違った種類の『上手さ』があるわね。

今年の一年生は面白い子が多いわ」

真由美にそう話し掛けられて、摩利は皮肉げに唇を吊り上げた。

「どちらかというと二科生の方に見所のあるヤツが多いのは皮肉な話だな」

その言葉に、真由美は窘めるような苦笑いを浮かべた。

「それは違うわよ、摩利。

総合力で勝っている子は、やっぱり一科生の方が多いわ。

今年は個性的な能力を持つ子が目立っているから、そういう印象を受けるだけよ」

真由美の指摘に思い当たる節があったのだろう。

摩利は「なるほど」と頷いて、再びモニターへ目を戻した。

「……しかしコイツが他の一年生に比べて『使える』ヤツであることは間違いない。

良い意味で類が友を呼んだかな」

「九校戦を経験して吉田君は急激に伸びた、って先生方も仰ってたわね。

こういう良い影響はどんどん広がって欲しいんだけど……」

「アイツは余り、リーダーシップを取るというタイプじゃないからなぁ」

「どちらかって言うと、敵を作りまくるタイプだものね」

摩利と真由美が二人して苦笑している隣では、行き止まりに追い詰められた幹比古が必死の抵抗を繰り広げる姿を、看視システムのモニターが映し出していた。

3－（9）　加速する事態（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

3－（9）　加速する事態

今日は日曜日、なのだが、達也は学校へ行かなければならない。補習、ではない。

本番まであと一週間、当然その準備があるのだった。

しかし彼は今、学校へ向かうのとはまるで方向が違う道を、愛車の大型電動二輪で走っていた。（わざわざ「電動」と付けるのは、内燃機関の二輪車、四輪車も現役で走っているからだ）

彼の腰には妹の細い手がしっかりと回され、彼の背中には妹の柔らかな胸がピッタリと貼り付いている。

デート、ではなかった。

単なるツーリング、でもない。

二人の目的地はフォア・リーブス・テクノロジーＣＡＤ開発第三課のラボ。小百合の襲撃事件の後、なし崩しで預かっていたレリックのサンプルを、いつまでも自宅に置きっ放しでは流石に拙かろう、ということで返却に向かっているところだった。

本社のラボに向かわないのは兄妹の意地みたいなもので、「本社へ返しに来い」「本社には行かない」の押し問答が繰り返された所為で――押し問答といってもメールの遣り取りだが――返却が延び延びになっていたのである。

公共交通機関を使わなかったのは再度の襲撃を警戒したからだった。

ラボまでの所要時間は、フルにとばしておよそ一時間。（公共交通機関を使うと大きく遠回りをすることになる）

肉体的に鍛えている達也や普通に慣性制御を使える深雪にとって、本来ならば途中で休憩をとる程の距離ではないのだが、都市部を出たところで、達也は早朝営業の喫茶店にバイクを止めた。

訝しむ深雪を促して店内に入り、窓際の席に腰を落ち着け、飲み

物だけを注文して（朝食は家で摂ったばかりだ）、達也はようやく妹の疑問に答えた。
「尾行がついている」
テーブルに両肘を突き、組み合わせた手の陰に口元を隠して、達也は小さな声でそう告げた。
「えっ！？」
深雪は危ういところでボリュームのコントロールに成功した。
「気がつきませんでした……車ですか？　それともわたしたちと同じバイクですか？」
上半身を乗り出して、ヒソヒソと兄へ囁きかける。
ウエイトレスが頬を赤らめ視線をこちらに固定したまま顔を背けた。つまり見ないフリをしているのだが、その理由を詮索している余裕は、深雪には無かった。（というか、そもそもそういう不審な振る舞いがあったことにも気づいていなかった）
「カラスだ」
簡潔な達也の答えに、深雪は「はっ？」と目を見開き、僅かなタイムラグでその意味を覚った。
「……使い魔、ですか……？」
「ああ。それも、化成体だ」
動物、鳥類に偽装した監視システムには鳥・動物型のロボットによるもの、鳥・動物に機械を埋め込んだもの、鳥・動物に古式魔法を掛けたもの、そして鳥型・動物型の化成体を利用したものがある。
化成体とは、霊的エネルギーを実体化させたもの。
実体化といってもそれは見かけ上だけのことで、サイオン粒子の塊を土台に、光の反射をコントロールする幻影魔法で姿を作り、物質に干渉する加重魔法・加速魔法・移動魔法、またはそれと同じ効果をもたらす力場で肉体を持っているよう見せ掛けるものだ。
化成体の作成は一見、無駄な作業の様にも思われるが、術の作用媒体を作り出し可視化、可触化することで、術式の動作を変更するコマンドがイメージしやすいという利点がある。

「……国内の術者ではありませんね。一体、何処の魔法師でしょう？」

化成体を使用する魔法は、古式魔法に限定される。「化成体」という名称は、現代魔法の研究者が古式魔法を分析する際につけたものだ。

そして深雪の言うとおり、この国の古式魔法では、目に見える使い魔を使用することは、今では余り好まれない。古式魔法の術者が用いる使い魔も実体性を有しないものが主流、と言うかほとんど全てだ。

コーヒーとミルクティーを運んで来たウエイトレスが去るのを待って、達也は口を開いた。

その待っている時間が深雪を無言で見詰める形となった為、店員の誤解は益々膨れ上がったのだが、彼はそれに気づくほど敏感でもなければそれを気にするほど繊細でもなかった。

「正体までは判らないな。幹比古なら判別できたかもしれないが」

達也は二人分のカップを脇にどけて、深雪の手を握った。

声にならないどよめきが伝わって来て、ようやく自分たちがどんな目で見られているのか気づいたが、ここで恥ずかしがって手を引っ込めるのは負けのような気がするし、そもそも手を握ったのは必要あってのことだ。

誤解されても仕方の無い表情を浮かべている妹に、達也は努めて真面目な表情で――野次馬に対しては完全に逆効果なのだが――囁きかけた。

「このままラボまで連れて行くのもよろしくない」

「……」

「深雪？」

「えっ、あっ、はい、そうですね」

尚も目を潤ませてボンヤリしている妹に、達也は何だか頭を抱えたくなったが、その衝動は気力で捻じ伏せた。

「化成体の座標はここだ」

魔法を発動する際、魔法師は改変対象の座標を変数として魔法演算領域に送り込む。

この変数は個々の魔法師が心の中で形成するイメージを記号化したものなので、通常、魔法師間で共有することは出来ないが、達也と深雪は四葉家の特殊な魔法技術（秘術と言っても良い）によって、サイオン信号化されたイメージを身体的な接触により遣り取り出来る仕様になっている。

「深雪、お前が撃ち落せ」

短い命令。

これには流石に、深雪の表情も引き締まったものへと戻った。

「……分かりました」

短い逡巡の後、深雪は兄の言葉に頷いた。

元より達也の命令に背く選択肢を深雪は持ち合わせていない。

それでも躊躇いを覚えたのは、魔法狙撃が兄の得意分野であり、自分が兄ほど上手く狙撃できないという自覚があるからだった。

「この状況で俺の力を知られたくない。

エミュレーターではＣＡＤを準備している間に逃げられてしまう。

深雪、お前が頼りだ」

「はい！」

深雪の顔に軽い興奮が満ちた。

兄に頼られて、張り切らずにいられるはずが無かった。

深雪は腕をそっと引き、両手をテーブルの下に隠して――その仕草が少女の恥ずかしがっている姿に見えて格好のカモフラージュになっていたのは、兄妹にとり皮肉なことだろう――密かに素早く、ＣＡＤを取り出し操作した。

彼女の魔法発動にタイムラグは存在しない。

達也の「視力」は、使い魔の身体が瞬時に凍り付き、同時にその仮初めの身体を維持していた術式が凍結して、化成体を構成するサイオン粒子が散り散りに拡散していく様を捉えていた。

「どうも中途半端だな……」
「えっ、何がですか？」
達也の呟きに、タンデムシートの深雪が問い返した。
彼女の姿勢は相変わらず、兄の腰に手を回してしっかりしがみつき、胸と顔を背中に押し当てたスタイルだ。
喫茶店で尾行の使い魔を見事に潰して、兄から好きなだけ褒めて貰った深雪はウキウキ気分で、近距離無線からデコードされた声も嬉しそうに弾んでいた。
今の状況に照らし、客観的に見れば不謹慎な態度だが、今この場にそれを咎める者はいなかった。
「尾行があれ一つだけということがだよ。
今日だけじゃない。
家に仕掛けられたハッキングも一回限りだし、学校でも今のところ見つけてくれと言わんばかりに周りをチョロチョロしただけ。
どうも、本気で何かを盗み出そうというには、遣り口が中途半端な気がする」
「お兄様のガードが堅いからではないのですか？」
深雪の回答は何時ものブラコンフィルターが自動的に作用した、強い思い込みに基づく反射的なものだった。
しかし何気なく返された深雪の答えが、今回の一連の事件の、本質の一端を捉えているように達也は感じた。

◇◆◇◆◇◆◇

この朝、ＦＬＴ本社の技術者から「キャプテン・シルバーとその一味」という蔑みだかやっかみだか判断がつきにくい通称で呼ばれている開発第三課のラボは、いつもと違う喧騒に包まれていた。
「――グズグズ悩む前にさっさと回線を切れっ！
バックアップだ？　そんなもん、出来てるとこまでで十分だろが！」

「十番台、切断完了しました。再接続に入ります」
「阿呆！　侵入が続いてるのに勝手に再接続するヤツがあるか！」
「よしっ、侵入経路、確定したぞ！」
「カウンタープログラムを起動します！」
飛び交う怒号をオペレーションルームの入り口で聞いていて、何が起こっているのか達也は大体把握した。
「あっ、御曹司！」
一分程そこに立っていて、ようやく牛山が彼ら兄妹に気づいた。
他所ならいざ知らずこの場所で、達也が十秒以上放置されたのは初めてだ。
つまりそれくらい、非常事態な訳である。
「スンマセン！　おいでになってることに気付きませんで……
おいっ！　御曹司がいらっしゃったのを知らせなかった間抜けは何処のどいつだ！」
今までで一番大きな怒鳴り声を牛山は上げた。
細身の身体に似合わぬ、割れ鐘のような大音声だ。
その声に、室内で端末と格闘していた所員の半分が竦み上がった。
その様を見て、達也の顔色が変わった。
「手を止めては駄目だ！　モニターを続行！」
「は、ハイ！」
牛山の声に劣らぬ迫力の叱咤を達也が放ち、それに応ずる声が返った。
再び必死の形相で端末との格闘を再開した所員たちに安堵して達也が視線を戻すと、何故か牛山が恐縮していた。
「ハッキングですか？」
牛山の意識内でどういう思いが飛び交ったのか、正確なところは分からないが、それを話題にするのは達也にとって、それ以上に牛山にとって、愉快なことでは無いような気がした。
達也が前置きを一切省いたのは、それを回避する為だった。
「はぁ、まあ……」

牛山の返事は大層歯切れが悪かったが、達也の出しゃばりに腹を立てているという風でもない。
一体どうしたのかと考えていると、然程待つことなく、牛山が説明を始めた。
「ハッキングはハッキングなんでしょうが……どうも様子が変でして。
侵入技術自体はかなりのものなんですが、何を知りたいのかがさっぱりなんでさあ。
特に対象を絞り込んでいる様子が無くてですね、全くの手当たり次第、っつう感じなんですよ」
「本物の興味本位（ハッカー）ということでしょうか」
「個人の仕業とは思えませんね。
侵入の手口は、かなりの人数を組織的に運用しなきゃあ出来ないものです。
相手が国家組織って言われても違和感はありませんな」
「組織的に、手当たり次第、ですか……」
達也の中で、思考の歯車がカチッと噛み合った。
「不正アクセス、停止しました！」
「油断すんなよ！　今日は一日、今の監視体制を維持する！
……っと、失礼しました。
それで、今日は一体どんなご用件なんです？」
達也はサンプル返却の件を、経緯を含めて説明しながら、最近身の回りで起こっている一連の情報盗難未遂事件を意識の別領域で整理していた。

◇◆◇◆◇◆◇

日曜日ではあるが、学校へ行く以上、私服のままという訳にも行かない。
普通科高校（文科高校と理科高校を合わせた総称）の中には私服

登校も可、という所もあるが、それは普通科高校の中ですら少数派だ。

魔法科高校は授業の有無に関わらず、登校時には制服着用。

達也たち兄妹は着替えの為に一旦、家へ戻った。

と、自宅の電話にメッセージが入っていた。

非転送設定のメッセージだ。

携帯端末への転送を制限する設定は、他人に覗き見されるリスクを防止する為のもの。

つまりこの設定がされているということは、送り主がそのメッセージを守秘性が高いものと考えているということを意味している。

「お兄様、どうなさいました？」

一足遅れて着替えを終えた深雪が、電話機の前で立ち止まっている達也へ歩み寄って来た。

そのままディスプレイを覗き込む。

「伝言ですか？

どなたからです……って、平河先輩！？」

深雪は当然、未遂に終わった妨害工作事件の顛末を知っている。

その話を聞いた時、平河姉妹に一切同情的な素振りを見せなかったのが印象的だった。

「折り返し電話が欲しいそうだ」

メッセージの内容で答えると、深雪が何か言ってくる前に達也は返信ボタンを押した。

コールは一回で、つながった。

『もしもし、司波君？

ごめんなさい、わざわざ電話して貰って……』

平河小春は九校戦代表チームの中でも、達也に対して最初から友好的な方だった。

対立を好まず常に自分以外の人間に気を遣っている、あずさとは種類の異なる「気の弱さ」が目立つ少女だ。

しかしその気の弱さは、見る目が変われば「優しさ」や「包容力」

と評価されるもの。
寧ろそういう見方をする者の方が多いかもしれない。
「いえ、こちらこそ遅くなりまして。少し家を空けていたものですから」
現在時刻は、普通に学校に通うにはやや遅い時間だ。
休日だから家にいても不思議はないが、平河は達也の電話をずっと待っていたのだろう。
ワンコールで応答があったことも、それを裏付けていた。
映像はオフにしてある。
テレビ電話が普及したと言っても、それは技術上の変化。
無頓着に家の中を他人の視線に曝す程、部屋着姿を誰にでも躊躇いなく見せる程、人の情緒は変化していない。
専用の電話室を作っている家もあるが、リビングに電話を置いている家庭は相手先番号通知で映像のオン・オフを切り替えるのが多数派だ。
暗い画面に平河の顔は映っていない。
『ううん、あたしの方が電話してってお願いしたんだから……』
だがその声を聞くだけで、彼女が暗い顔で俯いているのが分かった。
『この前は、その……妹が迷惑掛けてごめんなさい』
いや、暗い顔、ではなく、蒼い顔、かもしれない。
「未遂です。結局何もされていませんので、気にしないで下さい。俺も気にしていません」
これは相手のことを気遣った台詞ではない。
達也の、全くの本心だった。
『でも、色々と騒がせちゃったし……
ただでさえ司波君にはいきなり代役なんて迷惑掛けてるのに……
あたしが不甲斐ないばかりに、あの子がとんでもない考え違いをして。
大事な時期に気持ちを乱すような真似をしただけで、もう未遂な

んて言えないわ。
あたしには謝ることしか出来ないけど……本当にごめんなさい』
繋がっていないカメラの向こう側で、深々と頭を下げているに違いない。
そんなイメージが自然と浮かぶ声だった。
しかし達也の本音は「謝って貰ってもなぁ……」というものだった。
彼は謝罪など望んでいなかったし、グダグダと自虐の言葉を聞かされても寧ろ鬱陶しいだけだった。
彼は千秋のしたこと、正確には「しようとした」ことなど、本心から気にしていない。
何とも、思っていない。
「分かりました。平河先輩に免じて、全て水に流します」
だからこの電話を早く終わらせたい一心で、心にもない慰め（？）をかけた。
『……ありがとう。司波君ならそう言ってくれると思っていたわ』
この台詞が達也の本音を見抜いた上でのものなら、大したものだ。
しかしおそらくは、都合のいい、大きな誤解に基づくものだろう。
「いえ……それでは」
『あっ、待って』
平河の気が済んだとみて電話を切ろうとした達也だったが、少し早計だったようだ。
「何でしょうか」
彼は色んな意味で暇ではない。
暇が無い、と言った方が適切かもしれない。
達也は声に不機嫌が滲み出ないよう、注意しなければならなかった。
『えっと、こんなことでお詫びになるとは思わないし』
またか、と達也は思った。
無限ループに付き合わさせられるのは心底勘弁して欲しかった。

『司波君の役に立つかどうかも分からないんだけど』
しかし幸い、今回は杞憂だった。
『千秋が窃盗団とコンタクトしていたログを見つけたの。あの子のプライベートデータも含まれてるんだけど……司波君に預けます。
司波君の自由にして下さい。
えっと、忙しい中、本当にごめんなさい。話を聞いてくれてありがとう。それじゃ』
電話がプツッと切れた。
達也の応えを待たずに。
「いくら姉妹の間でも、ハッキングは犯罪ですよ……」
隔離ボックスに振り分けたログファイルのアイコンを見ながら、達也は平河に言うつもりだった台詞を呟いた。
「お兄様、どうなさいました？」
達也の独り言を聞き付けたのだろう。
少し心配そうな顔で、深雪が戻って来た。
「さて、どうしようか」
微妙に噛み合っていない答えを返しながら、達也は平河の意図について考えを巡らせた。
彼女はお詫びの代わりに、と言った。
直接そう言った訳ではないが、あの言い方は他に解釈のしようが無い。
しかし本音が別にあることも、ほとんど確実だ。
平河が妹の通信ログをハッキングしたのは、妹を悪の道に引きずり込んだ輩を何とかしたかったのだろう。
しかし、彼女の手には負えなかった。
そこで達也に情報をリークすることで、自分の代わりに報復して欲しかったのだ、と達也は推理を纏めた。
（悪知恵が働くと言うべきか……）
女の狡さ、というフレーズを思い浮かべるには、人生経験が不足

していた。
しかし同時に、そういう「狡さ」を忌避する程、彼は純粋でもなかった。
「……まあいいさ。使える物は使わせて貰おう」
不得要領な表情を浮かべながら彼を見ている深雪をそのままに、達也は別の番号をプッシュした。
既に放棄されたであろうアクセスポイントのログファイルだけを手掛かりに、ネットワークの中で狐を狩り出す自信は彼にも無かった。
だが、それが可能な人物の心当たりはあった。

◇◆◇◆◇◆◇

二人が学校に到着するのと同時に、雨が降り出した。
二十一世紀末になっても、天気予報の的中率は九十パーセントに至っていない。
まあ、百パーセント的中する天気予報の実現は、天候制御技術が完成するか、地球環境が死に絶えて天候の変動が完全に無くなるかのどちらかしか無い訳だから、的中率八十パーセント以上というのは満足すべき値なのかもしれない。
残念ながら、雨に降られた身としては、気休めにしかならないが。
幸い濡れたのはほんの少しだ。
そして深雪は校内でＣＡＤの常時携行を許された生徒会役員。（常時携行を許されているのは達也も、だが）
濡れた服は深雪の魔法で、たちどころに、何の痕跡も残さず乾いた。
しかし――
「この雨では、野外作業は無理ですね……」
「こればっかりは、仕方ないね」
眉目を曇らせた深雪に、達也は肩を竦めて見せた。

ここまで準備は順調に進んでいる。
屋内での作業となれば少々手狭感はあるが、それでも間に合わなくなるということはないはずだ。
もっとも彼自身に限って言えば、今日は最初からロボ研のガレージでデバック作業の予定だ。
「じゃあ、行ってくる」
「はい。頑張ってください、お兄様」
生徒会室で仕事が待っている深雪は、名残惜しそうに達也と別れた。

◇◆◇◆◇◆◇

ロボ研は「ロボット研究部」の略だ。
ガレージは彼らが大小様々のロボットや機械式パワードスーツを製作したりテストしたりする小さな実験棟。
そこには機体制御用の大型計算機も据え付けられており、（論文コンペ）準備期間中は起動式のデバック、術式シミュレーションに提供されている。
プレゼンの中心になるプラズマ核融合のデモ機は、計算機に接続済みだ。
そしてこのセッティングを手伝ってくれたロボ研の部員は、既に別の機械の組み立てで出払っている。
（少し遅すぎたかな……？）
今、ガレージにいる人間は達也一人。
いくら始業時間の無い休日だからといって、これでは重役出勤過ぎるか、と達也は苦笑いを浮かべた。
「お帰りなさいませ」
ガレージにいる「人間」は彼一人だが、彼の入室から一拍遅れて、彼を出迎えた「人影」があった。
黒を基調とした膝下十センチのバルーンスリーブワンピースにフ

リルのついた白いエプロン。
白のストッキングに黒のローファー。
頭にはこれまたフリルのついたホワイトブリム（頭飾り）。
（良い趣味してるよ、全く……）
「１－Ｅ、司波達也」
苦笑を浮かべたまま、達也は短く名乗った。
出迎えた「少女」が半秒ほど直立姿勢で動きを止め、その後、深々と腰を折った。
動きを止めたのは声紋認証に要した時間。
顔認証と声紋認証により、達也はようやくこの部屋のセキュリティをパスしたことになる。
「コーヒーをご用意・いたします」
少しぎこちない口調と少しぎこちない動作。
だがその「ずれ」は、注意して観察しなければ気にならない程度。
彼女の名前は「３Ｈタイプ９４（３Ｈパーソナルユース九十四年型）」。
ロボ研では型番を縮めて「ピクシー」と呼ばれている。
ロボット研究部に所属するＨｕｍａｎｏｉｄ　Ｈｏｍｅ　Ｈｅｌｐｅｒ、３Ｈと呼ばれる人型家事手伝いロボット。
それがこの「少女」の正体だった。
どうも、当代のロボ研三年生にＨＡＲの大手メーカーの関係者がいるらしく、ＡＩ改良目的のモニター用に貸し出されているのだ。
通常３Ｈの外見は二十代後半の女性に設定されているが、この個体は校内で違和感を少なくするという目的から十代後半の外見に設定されている。
確かに、一高の制服を着せて教室に紛れ込ませても、黙って座っている限り「無表情な女子生徒」で通りそうだ。その上に「クールビューティーな」という形容詞を付けることも可だろう。
――その拘りも、メイド服を着せている時点で台無しだが。
この「メイドロボ」の出迎えには達也も流石に驚きを禁じ得なか

ったが、最近では慣れたものだった。
コンソールデスクの前に座り、端末を立ち上げたところで、サイドテーブルにコトリ、と小さな音を立ててコーヒーカップが置かれた。
（マニュピレーターの制御ソフトに改良の余地があるな……）
チラッとそんなことを考えながら、達也はカップに手を伸ばした。
一口含んで、まあまあだな、と頷く。
最新の３Ｈであるピクシーには自動カスタマイズ機能があり、顔認証システムで識別したユーザーの嗜好を五十人分まで学習することができる。
達也が何も言わない内に、彼の好みに合わせたコーヒーが出てきたのはこの機能によるものだ。
「ピクシー、サスペンドモードで待機」
背後に控える３Ｈに達也はそう命じた。
ロボットと分かっていても、ここまで人間そっくりに作られている物が背後に立っていると落ち着かないからだ。
「かしこまりました」
こういう定型文句の発声はスムーズだ。
Ｐ９４は機械であることを感じさせない滑らかな動作で一礼して、入り口脇の椅子へ向かった。
腰を下ろし、背筋をピンと伸ばす。
そして、そのまま微動だにしなくなった。
３Ｈの動力はダイレクトメタノール燃料電池。
メタノールを自律的に補給する――具体的には口から飲む――機能があるので、ユーザーが燃料切れを意識する必要は余り無い。
だが、燃料を無駄に使う必要も全く無いのであり、立っているだけでも電力を消耗するので（二本の足で立つということはそれだけ高度な運動なのだ）、用が無い時はこうして座らせておくのだ。
達也はぐるっと首を回して（特に意味はない）、キーボードに指を置いた。

軽快な打鍵音が奏でられる。
達也は左手をキーボードから離し、真珠色のパネルに置いた。
これは、デモ機に組み込まれた大型ＣＡＤと術者が交信する為のインターフェイス。
このパネルを通じて術者は起動式の形成に必要なサイオンを送り込み、起動式を組込ＣＡＤから受け取る。
右手のキー入力でＣＡＤをワンステップずつ作動させ、左手で一工程ずつ形成された起動式を受け取り、魔法式に変換して送り出す（但し魔法式の送信は、物理的接触を通じて行うものではない）。
彼が行っているのは魔法式の動作シュミレーション。
通常の手順は、ワンステップごとに分解された魔法式を全て未発の段階で解除し、事象改変の反動の兆候を観測して意図したとおりの効果が得られているかどうかを検証する。
彼も表面上はその手順をなぞっていたが、実際には魔法式の動作状況を直接観察しながらチェックを進めていた。
彼の魔法開発効率が異常に高いのはこの裏技のお陰であり、魔法開発者としてはズルをしているとも言える――が、そんなことを気にするほど彼は正直者ではなかった。
肉眼でディスプレイを見詰め、心眼で情報体次元を見詰める。
そのまま、およそ一時間が経過した。
ふと、彼は身体に不調を感じた。
突然睡魔が襲ってきたのだ。
（根を詰めすぎたかな……）
外で一休みするか、と考えて、達也は立ち上がろうとした、が――
手足が重い。
身体が覚醒しない。
それなりの訓練を受けた者なら、肉体的な睡眠欲求を意思の力でコントロールすることは可能だ。
何日も徹夜続き、というような状況なら話は別だが、彼にはそんな不規則な生活をした覚えがなかった。

脳裏を危険信号が貫いた。
自分の体調は明らかに、不自然に、異常だ。

〔身体機能　異常低下〕

眠る、という状態そのものは、戦闘能力を損なうものではない。
だが自分の意思で覚醒できない、強制的な睡眠は、戦闘を阻害する要因。

〔自己修復術式：半自動（セミオート）スタート〕

自己修復能力が、修復の必要を認め、

〔魔法式：ロード〕
〔コア・エイドス・データ：バックアップよりリード〕

活動を開始する。

〔修復：開始……完了〕

彼の身体は、瞬時に「眠気に囚われる前の状態」に戻った。
しかしまだ、問題は解決していない。
ラボに向かう途中の喫茶店以降、今日は飲み食いしていないから、薬物を盛られたとしたらガスしかない。
空調システムに細工をされたのだろう。
実際に「視て」、毒性が低く持続時間も短い代わりに即効性が強い睡眠ガスが、この部屋の空気中に混入していることを確認した。
しかし、そこから先が手詰まりだった。
彼の「分解」でガスを無害化することは簡単だ。
しかし校内の至るところで魔法を観測する機器が稼働している今

の状況で、この広いガレージの室内空間全部を対象とする「分解」を発動すれば、秘密にしなければならない彼の魔法がばれてしまうこと請け合いである。

深雪やほのかや雫なら、有害ガスだけを選別して室外に排出することも可能だろうが、彼には少しばかりハードルが高い技術だった。

とにかく、息を止めているにも限界がある。

今、彼に出来るのは、この場から逃げ出すことだけだ。

デモ機はこのままでも問題ない。

計算機をロックして、達也は出入り口へと振り返った。

だが――その前に、華奢な人影が立ち塞がっていた。

３－（９）　加速する事態（後書き）

ピクシーはＰＣゲームによく出て来る人型少女ロボットではなく、株式会社ココロさんのアクトロイドにインスパイアされました。

動作面は産業技術総合研究所のＨＲＰ－４Ｃが随分人間に近いところまで再現していると聞きます。本当に「メイド・ロボ」が実現する日も遠くないかもしれませんね。

3ー（10）　狐を狩る者（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

3ｌ（１０）　狐を狩る者

目の前に立った人影が達也の口許へ手を伸ばした。
それほど素早い動作ではない。
故に、その人影が何モノなのか、見極める余裕があった。
“彼女”の手は、達也の顔面に届く手前で止まった。
「空調システムに・異常が・発生しました。
マスクを・お使い下さい」
３Ｈ〔Ｈｕｍａｎｏｉｄ　Ｈｏｍｅ　Ｈｅｌｐｅｒ〕タイプＰ９４・ピクシーの名を持つ少女型のロボットが、簡易防毒マスクを差し出しているのだった。
一見、伝統的な不織布の使い捨て防塵マスクだが、二酸化炭素分子より大きな分子を通さない（当然、酸素分子は通す）ゲル状フィルターを挟んだ高機能素材だ。粘着シールで縁を顔にピッタリくっつければ、フィルターが目詰まりして呼吸が難しくなるまでほぼ完全に有毒ガスを遮断する。
こんな物までよく持ってるな、と思いながら達也が素直にマスクをつけると、今度は目を閉じるよう言ってきた。
「角膜が・汚染される・虞があります。
手を引いて・外へ・誘導します」
言語ソフトに改良すべき面があったが、言いたいことは過不足無く分かる。
どうやら最新型３Ｈであるｐ９４には災害時対応までプログラムされているらしい。それとも、ロボ研が「育成」した成果だろうか。
睡眠ガスが目を傷つける種類のものではないことを達也は知っている。
にも関わらず、彼は言われた通り目を閉じた。
しかし、外へは向かわなかった。
「ピクシー、強制換気装置を作動。

避難時の二次災害を警戒し、俺はここに留まる。
監視モードで待機。
救助の為の入室に備え、排除行動は禁止する」
続け様に下された達也の命令を、Ｐ９４は受け入れた。
「二次災害回避を・合理的と・認めます。
強制換気装置を・作動します」
空調システムとは別系統で設置されている災害時対応の強制換気システムが作動を始めた。
３Ｈの本分はホームオートメーションの音声対話型インターフェイス。
小型燃料電池を動力源とする二足直立のフレームは、力仕事に向いていない。
人型という制約から搭載できるセンサーにも限りがあり、余り高度な精密作業も出来ない。
単体で稼働する人間以上の労働力ではなく、人がストレス無くホームオートメーションを使用できるように作られた、音声を認識し人と同じように動くことができる、人と同じ外見を有するＨＡＲの遠隔制御端末。
それが３Ｈの開発コンセプトで、ＨＡＲの手が届かない細かな部分のフォローが出来るようにと後付けされたスタンドアローンの家事機能は、本来付け足しに過ぎない。
ただその付け足しの部分がなまじ優秀な為に、ＨＡＲのインターフェイスという本来の役割を忘れてしまいがちになるのだ。
他人事ではない。
達也も、今の今まで忘れていたのだから。
（便利過ぎるというのも善し悪しだな……）
負け惜しみか照れ隠しとしか思えない台詞を心の中で呟きながら、達也は睡眠ガスが排出されるのを待った。
３Ｈの機能を考えれば、空調システムの復旧も同時に行われているはずだ。

達也は端末の前に座り直し、目を閉じたまま身体の力を抜いた。

◇◆◇◆◇◆◇

待ち人はすぐにやって来た。

ガスが取り除かれた後も、目を閉じたまま神経を凝らしじっと座っていた達也は、誰かが足音を忍ばせて入ってきたのに即、気が付いた。

予めＰ９４に入室チェックを行わないよう命じておいたのは、誰かがこっそり忍び込むことが出来るお膳立てだったのだから、達也としては来て貰わなければ期待外れだ。

「司波？」

聞き覚えのある上級生の声。

達也が眠っているかどうか確かめ、仮に起きていたら言い訳が出来るように、という配慮なのだろうが、彼がこのタイミングでこの部屋へ入ってきたこと自体が不自然なことなので、このアリバイ作りは中途半端と言えるだろう。

達也は無論、狸寝入りを決め込んだ。

「司波、眠っているのか？」

もう一度彼に声を掛け、応えがないことに満足したのか、侵入者は足音を忍ばせるのを止めてデモ機の脇へ移動した。

端末に見向きもしなかったのは、ロックが掛かっているのを見て早々に諦めたのか、それとも最初から直接データを吸い出すつもりだったのか。

達也が薄目で見ているとも知らず、監視モードのピクシーに映像を記録されているとも知らず、侵入者はサブモニター用のコネクタからハッキングツールを使って起動式のデータを吸い上げようと悪戦苦闘していた。

「関本さん、何をしているんですか」

そこへ不意に、出入り口から掛けられた声に、侵入者がビクッと

身体を震わせ慌てて振り返った。
（あらら……）
達也が心の中でこう漏らしたのは、愉快な独り相撲が早くも幕引きとなったことを惜しんだからだが、当事者たち――中断させた方とさせられた方――は、そんな人の悪い娯楽など全く知ったことではなかっただろう。
「千代田、どうしてここに！？」
「どうして？
あたしがここに来たのは保安システムから空調システムの異常警報を受け取ったからですが、関本さんこそ、どうしてここへ来たんですか？
手に持っているそれは、何です？」
「バカな……警報は切ってあったはずだ……」
余程動揺しているのか、それとも極端に予想外の出来事に弱いのか、不用意過ぎる一言を漏らした関本を、花音は鋭く睨み付けた。
「そうですね。警報は自動ではなく手動で届きましたから」
警報を送ったのは達也ではなくピクシーだ。
機械が自分の判断で行ったことだから、これも「自動」の一種だが、それは花音の知るところではない。
それよりも――
「しかし、聞き捨てのならないことを言いましたね、今」
関本がうっかり自白した内容の方が、大切だった。
「警報を切った、とは、どういうことです？」
犯罪者が常に理性的で合理的な行動を取る、ということはない。
寧ろ犯罪行為中は過度の緊張から、普通ならあり得ない凡ミスをしでかしてしまうものだ。
だから何時間も何日も後から、事後的にしか動くことの出来ない捜査当局が犯人を特定できる手掛かりを得たり出来る訳だが、今、関本はまさに、犯罪者が陥る心理的陥穽に足を取られ無様に転倒しようとしていた。

「関本さん、この状況で黙っているというのは、自分が犯人だと自白しているようなものですよ」
花音の口調は十分に抑制が効いたもので、それが余計に、彼女の本気を感じさせる。
花音は見せ付けるように左腕を胸の前へ掲げた。
稼働状態にあるＣＡＤ。
起動式を即座に展開できるだけのサイオンが、既にチャージされている。
試合でもなく、訓練でもなく、悪ふざけでもない、百家本流・千代田一族直系の、本気の臨戦態勢――
「ハハッ、千代田、冗談がきついな。
僕が犯人？　一体何の犯人だって言うんだ？」
大袈裟な空笑いで、追求を誤魔化そうとする関本だが、大勢の同調者が背後に控えているならともかく、一対一でその様な手が通用するはずも無かった。
「エアコンに細工して睡眠ガスを流した犯人です。
産学スパイの現行犯でもありますね」
「失礼だぞ、千代田！
僕は事故によるデータ滅失を恐れてバックアップをとっていただけだ」
「ハッキングツールでバックアップですか？
あり得ないでしょう、そんなこと。
そうよね、司波君」
愕然と振り返った関本の視線の先では、両目を開いた達也の苦笑いがあった。
どうやら花音は、達也の狸寝入りを一目で見破ったようだ。
「バカな、ガスが効いていないのか……」
「彼は睡眠ガス程度で無力化されてくれるような、かわいいタマじゃありませんよ」
買い被りというには非好意的な花音の口調に、達也の苦笑は一層

その色を濃くした。
「可愛げが無いのは事実ですからねぇ……他も概ね、委員長の仰るとおりですよ。
デモ機から直接バックアップをとるなんてあり得ません。
そんな必要もありませんしね」
デモ機の組み込みＣＡＤは起動式を記録し、展開するだけだ。内部で起動式を編集する機能は無い。
起動式の手直しは常に接続された電算機上で処理され、電算機内にバックアップがストックされる。
「関本さん、あんまりバカにしないで欲しいですね。
いくらあたしが技術に疎くても、そのくらいは知ってるんですよ」
不機嫌な顔で睨みつける花音を前に、関本は「くっ」と奥歯を噛み締めた。
それは反論（あるいは逃げ口上）が尽きた印（しるし）であり、窮鼠が歯を剥く徴（しるし）でもあった。
「関本勲、ＣＡＤを外して、床に置きなさい」
花音の口調が変わった。
犯罪者に対する投降勧告。
それに対する関本の答えは、
「千代田っ！」
起動式の展開だった。
関本も二年生後半からとはいえ、風紀委員に選ばれていた猛者だ。
魔法の発動手順に淀みは無く、起動式の取り込みから魔法式の構築までそのスピードは九校戦代表選手と比べても遜色が無い。
しかし――
「……カッコつけ過ぎなんですよ、関本さんは」
関本の魔法は不発のまま、床を媒体とした花音の振動系魔法に意識を刈り取られていた。
魔法の発動に、魔法の名称を唱える必要は無い。
それと同じで、標的の名前を叫ぶ必要など全く無い。

現代魔法による戦闘は一瞬の勝負。
ただでさえＣＡＤの準備で花音が先んじていたのだ。
相手の名前を叫ぶ、等という無駄な動作を挿んで、関本が花音の先を取れるはずが無かった。

花音の呼び出しにより、風紀委員会と部活連から応援が駆けつけ、関本を生徒指導室（別名「取調室」）へ連行した。
その間、達也は一切、手出しも口出しもしなかった。
花音たち全員の退出を見送って、達也は待機状態のＰ９４に声をかけた。
「ピクシー、監視モード解除。
監視命令時点から現在までの映像記録をメモリーキューブに記録した後、廃棄しろ」
「承知しました。
映像ファイルを・メモリーキューブに・移動します。
……移動完了。
マスターファイルを・完全削除・します」
花音にもその存在を知らせなかった証拠映像が記録されたメモリーキューブを上着のポケットにしまって、達也は再度、少女型ロボットに待機を命じた。

◇◆◇◆◇◆◇

達也は帰宅してすぐ、テレビフォンに向かった。
呼び出し先は、本日二度目の番号だ。
『もしもし』
二世紀にわたり生き残ってきた定型文句が、若い女性（少女ではない）の声で紡ぎ出された。
映像だけでなく音声の品質向上も顕著だが、微妙な曇りから移動体通信端末で電話を受けていることが分かる。

「司波です」
『あら、一日に二度も電話をくれるなんて珍しいわね』
明るい声で返された返事と共に、大手企業の若手女性秘書然とした、柔らかく微笑みながらも隙のないマスクが映し出された。
いつもはわざと地味に目立たない格好をしている彼女だが、こうして普通にメークし普通に着飾ると、平均以上に華のあるルックスをしていることが分かる。
「すみません、デートでしたか」
『フフッ』
夜の繁華街に相応しく着飾った藤林が、その装いに相応しい科(しな)を作って微笑んだ。
『残念ながら、仕事(し・ご・と)よ。
でもこんな時に限って、ナンパ君たちにモテちゃうのよねぇ。
いいオトコはいなかったから構わないんだけど。
あ～あ……どっかに達也クンみたいな格好(カッコ)良いオトコのコがいないかしらね』
何やらいつもと口調が違うのは、アルコールが入っているからに違いない。
無論、（カメラ越しであっても）面と向かって「飲んでますね」などと野暮ったいことを言う程、達也も命知らずではない。
「そうですか。
実はご相談したいことがあったんですが、明日にした方が良いですか？」
相手の冗談（と達也は確信している）を完全にスルーした台詞に、藤林はカメラの向こう側で、科を忘れた楽しそうな笑みを浮かべた。
『クールねぇ……まあ、それでこそ「最も自由なる者」の名を冠するに相応しいのでしょうけど』
「俺が『最も自由』だなんて皮肉が効き過ぎていますけどね……ところで」
『心配ご無用。ちょうど車の中だから』

情報漏洩の懸念を示そうとした達也に、先回りして藤林が答えた。
『だから、込み入った話でも大丈夫よ』
そして達也に、用件を話すよう促した。
「ありがとうございます」
遥あたりならマイペースを貫くことができる達也も、藤林を相手にしているとどうしても相手のリズムに引き込まれてしまう。
役者の違いに表情で白旗を挙げて見せて、達也は本題に入ることにした。
「実は今日、学校で強盗に遭いまして」
『強盗？　今朝相談してもらった件よね？　遂に実力行使？』
「ええ、睡眠ガスを使われました」
ディスプレイに映る藤林は、「あらあら」という感じに目を丸くしている。
「幸い、未遂に終わったんですが」
『ゴメンね。私たちが無理を押し付けてるから……』
「軍だけに義務付けられている訳ではありませんから」
藤林が申し訳なさそうな顔で頭を下げたのは、軍機指定により達也が魔法の使用を制限され、その為にしなくてもいい苦労を押し付けられていることに対する謝罪だ。
それは全くの事実であり、達也の言っていることの方が口実なのだが（四葉に手段を選ぶような良識は無い）、これは事有る毎に繰り返された、会話を円滑に進める為のセレモニーのような遣り取りだった。
謝った方も謝られた方も、全く本心ではないのである。
「その際に盗難未遂の現場を映像に記録しました」
『へぇ……どうやって？』
情報を盗み出そうと企てるなら、防犯カメラを切っておくくらい基本中の基本。また、それが出来なければ、最初から屋内で犯行に及ぼう等としないだろう。
「独立稼働が可能なロボットに記録させました」

『あっ、３Ｈね。そういう趣味があったんだ』
「違います。場所がロボット研究部の部室で、３Ｈはそこの備品です」
３Ｈはその精巧すぎる外見から、一部の特殊嗜好者ご用達という偏見も持たれている。
それを知っているから達也は「独立稼働が可能なロボット」と言葉を濁したのだが、藤林には通用しなかった。
「その映像を」
誤魔化したことでかえって痛くも無い腹を探られる気配を感じた達也は、強引に話の流れを本題に繋げた。
「お預けしますので、調べてもらえませんか」
『何が映っているのかしら』
ここで素直に応じるところが、藤林の性格の良さだろう。
当たり前の対応と言えば当たり前なのだが、良い悪いは相対的なもの。これを「性格が良い」と言わざるを得ないのが達也を取り巻く人間関係だ。
「窃盗未遂犯と、彼が使ったツールです。ハッキングを仕掛けられたＣＡＤのログも添付しておきます」
『なるほど。それで達也くんは、そろそろ狐を仕留めろと私に言っているのね』
「そんな偉そうな言い方をするつもりはありませんが、内容はその通りです」
『気にしなくていいわ』
少しも気にしている素振りの無い達也に、藤林はわざと力をこめた口調でそう応えた。
本当に良い性格である。
『隊長からもそろそろ片をつけるように言われているし、猟犬（ハウンド）も頭数が揃ったところだから。
一両日中には捕まえるから、吉報を待っててね』
気負いも見せず、藤林はそう予告した。

達也は一言礼を述べ、それ以外に余計な台詞を口にせず、データを藤林の端末へ送った。

◇◆◇◆◇◆◇

自分の車で達也との電話を終えた藤林は、車外に追い出していた千葉警部を助手席へ招き入れた。

「すみません、千葉さん。プライベートな電話だったものですから」

「いえ、構いませんよ」

千葉警部の装いも、藤林に合わせた高級感のあるカジュアルスーツだ。警察官が安月給というのは今も昔も変わらない哀しむべき事実だが、彼の場合は実家絡みの警察公認副収入があるので懐は豊かなのである。

「それで、プライベートな情報提供者はどんなネタをくれたんですか？」

何処と無くいい加減で軽薄な雰囲気を崩さず、カクテルグラスを片手にしているような口調で訊ねた警部に、藤林は達也に向けたものと同種の、楽しそうな笑みを浮かべた。

話が早い相手は大歓迎だ。血の巡りが悪い相手にイライラしてしまう藤林にとって、千葉寿和の油断ならない機転は好ましいものだった。

「狐に利用された哀れな鼠と、鼠に貸し与えられた尻尾のスケッチです」

「……協力者とハッキングツールの映像ですか？」

流石に戸惑った表情で千葉警部が訊ねると、「よく出来ました」と言わんばかりの笑顔で藤林が頷いた。

「警部、狐狩りの最初の手順が何か、ご存知ですか？」

そして、冗談というには真剣な目つきで助手席に向けて問い掛ける。

「いえ……生憎、銃はからっきしで……ハンティングも機会が無く

て」

話題の転換について行けず、スムーズな受け答えが出来なかった若い警部に、身分を隠したままのエリート少尉は笑みを消した真面目な顔で自らの問いの答えを告げた。

「狐狩りは、まず巣穴を見つけるところから始まります。逃げ帰る巣穴を潰して、茂みに潜んだ狐を猟犬で追い立てるのです」

「……我々にアジトを探せと？」

「協力者となった高校生の映像をお渡しします。街路カメラからその者の立ち回り先を調査して下さい。一般には手に入らないハードウェアを持っていたからには、必ず生身の接触があったはずです」

捜査令状も無く街路カメラの映像をそのような目的に使用するのは、言うまでも無く違法捜査だ。

相手が未成年とあれば、そう簡単に令状が取れるはずも無い。だが、千葉警部が指摘したのは、別の問題点だった。

「立ち回り先と言っても、いったいどの程度の期間を調べれば良いのですか？

人ひとりの行動範囲は、一ヶ月、二ヶ月となれば無数といっても過言ではありません。

その中から、怪しそうな相手を抽出するのは……」

「捜索地点は都内三十二箇所です。その内、過去一ヶ月間に協力者が立ち寄った場所をピックアップして下さい」

藤林の答えに、警部の顎が落ちた。

「……三十二箇所……

もうそこまで絞り込めていたんですか……」

「警部がご存じない、別の協力者のデータも有りましたから。

ここから先が大変、と思っていたところなんですが、ちょうど都合よく、新たな手掛かりが入手できました」

警部の瞳に、非難めいた色が浮かんだ。

「……別の協力者ですか？　何故そのことを」
「それは勿論、その協力者が女の子だからです」
澄ました口調の回答に、千葉警部は唖然とした。
「未来ある女の子を、警察のブラックリストに載せるなんて出来ませんから」
「……男だったら良いんですか？」
「自己責任です」
言い切った藤林の台詞に、警部は絶句した。
「私は父権主義なんですよ。殿方が女子（おなご）より偉くなるのは当たり前だと思っています。
その分、殿方は己を強く律し、己が全ての行動に責任を持って頂きませんとね」
急に古めかしい表現を使って何だか都合の良いことを言い出した藤林を、千葉警部は短くない時間、マジマジと見詰めた。

◇◆◇◆◇◆◇

明けて、月曜日。
深雪が電車（キャビネット）から出てくるのを待っていた達也は、停車したばかりの二つ後ろの車両にクラスメイトが同乗しているのを見つけた。
彼の視線に気づいたのだろう。
並んで座っている男女は、揃って「あっ」という形に口を開いている。
「お兄様、何か面白いものでも？」
上品な挙措でキャビネットから降りて来た深雪が、兄の表情を見てそう訊ね、兄の視線を辿って「まあ！」とばかり片手を口に当てた。
兄妹の視線の先、二つ後ろのキャビネットのフロントガラスの向こう側で、エリカとレオが、ぎこちない愛想笑いを浮かべていた。

駅から学校まで。
今日の通学路は四人連れだ。
朝は八人全員が揃う方が珍しいのだが、それでも四人というのは少ない方だろう。
それも当然と言えば当然だった。
「……なあ、何で今朝はこんなに早いんだ？」
不機嫌な声で、レオが訊ねる。
しかし、機嫌を害しているのは一方的にレオの都合であり、達也は八つ当たりと分かっていて畏れ入るような小心者ではない。
「いよいよ今週一週間だからな。朝から色々と予定が入っているんだ」
現在の時刻は、いつもより一時間以上早い。
「レオの方こそ、どうしてなんだ？」
達也には、次の日曜日に論文コンペを控えているという理由がある。
客観的に見て、達也よりもレオの方が、今ここに居ておかしな時間だと言える。
「エリカも今朝は随分早起きね？」
答えに詰まったレオに達也が追い討ちを掛けるより早く、今度は深雪がエリカに言葉の矢を射掛けた。
「……あたしは大抵、早起きだけど」
他意なんてありません、と爽やかに微笑んでいる深雪に、忌々しげな表情で短く答えを返すと、エリカは校舎へ向かう足を速めた。
「そう？　じゃあ今朝は西城君が早起きだったのかしら」
しかし、独り言のように呟かれた台詞に、エリカの足がピタリと止まった。こんなことを言われてそのまま立ち去るのは、彼女には耐えられなかったのだ。
「チョッと深雪！　まるであたしが毎朝コイツを起こしに行ってるみたいな言い方、止めてくれない！」
「そうだぜ！　どっちかっつうと、俺の方が起きる時間は早かった

んだ！」
だがエリカの反撃は、レオの薮蛇で台無しになってしまった。
「……」
「……」
「……」
無言で睨み合うエリカ、達也、深雪（正確には、睨んでいるのはエリカだけで、達也と深雪は揃ってポーカーフェイスだった）。
「……えっ？　ナニこの雰囲気？」
レオは一人だけ、（自分で引き起こした）状況が理解出来ていないようだ。
「……何で黙ってるのよ」
エリカの口調は強気だが、顔は赤らみ、表情は涙目になりかけている。
「……まあ……早起きは三文の得だよな」
ここで追い討ちを掛けられる程、達也も鬼畜ではなかった。
あるいは、話を逸らすことしかできない程度には、不器用だった。
兄の隣で困惑の笑みを浮かべている深雪と、尚も首を傾げているレオの姿は、ある意味で好対照だった。

◇◆◇◆◇◆◇

始業時間が近づいて達也が教室に戻ると、ヘソを曲げたエリカを美月が懸命に宥めているという一幕の真っ最中だった。
「あっ、達也」
すがりつく様に声を掛けてきたのは幹比古だ。
レオは後ろ向きに座ったいつものスタイルで、苦虫を噛み潰している。
美月が地雷を踏んで、幹比古が火を煽ったのだろう。
達也にはそれが、手に取るように分かった。
「エリカ、いい加減に機嫌を直せって」

そう言いながら達也は、そっぽを向いたエリカの頬に、手に持ったボトル缶を軽く触れさせた。
「あつっ！？」
鳩に豆鉄砲よろしく、エリカが跳び上がる。
「なにするのよ！」
「ほら」
いつもより五割増しくらい攻撃的になっているエリカの手の中に、達也はココアの缶を滑り込ませた。
「あつっ」
お手玉しながら同じ言葉（というか声）を異なる声音で発して、エリカは戸惑った目を達也に向ける。
「甘いものを飲むと気持ちが落ち着くそうだぞ？」
「……フン。こんなものじゃ誤魔化されないんだからね」
そう言いながらキャップを切って口をつけたエリカの頬が少し緩んでいるのを見て、達也は可笑しそうに目を細めた。
「……何よ」
それを見咎めたエリカが詰め寄る。
だがその語調は、まだまだ拗ねを含むものの、随分緩和されたものになっていた。
「新しい魔法を教える為に、千葉一門総掛かりでレオをしごいていたんだろ？
別に下衆な勘繰りはしちゃいないから、機嫌を直せよ」
これは単に、エリカのご機嫌をとるための台詞だったが、達也が期待した以上の効果があった。
達也に向けられたエリカの目の色が、純粋な驚きに塗り変わっていた。
「……もしかして達也くんって千里眼？」
「いや、遠隔視（クレアボヤンス）のスキルは無いが。
レオの気力が消耗していて、その反面、魔力が活性化しているようだったから」

ここで達也が魔力と言っているのは、魔法を発動する為のサイオン活性と事象改変干渉力を合わせたもののことだ。

サイオンの活性度は魔法式の構築速度、構築精度、構築規模に影響するが、それだけでは事象を改変することは出来ない。事象に付随する情報を上書きする力と合わせて、はじめて魔法として形を成す。

「いや、気力とか魔力とか、そんな当たり前みたいに言われても……ううん、今更か」

魔法師はサイオンを感じ取る感覚を有しているといっても、干渉力まで判別するには、それなりに熟練が必要となる。しかし、そろそろ達也の非常識ぶりに驚くのもエリカは飽きてきていた。――飽きた、で済まされるのもエリカならではだろうが。

「ところで達也、昨日は大変だったんだって？」

嵐がようやく通り過ぎた、と見て取ったのだろう。幹比古が幾分ホッとした表情で話し掛けて来た。

「昨日？　ああ……随分と耳が早いな」

達也が少し間を取ったのは、とぼけた訳でももったいぶった訳でもない。

平河千秋のことも関本勲のことも、彼にとっては既に解決済みの事件だったので、「大変」という言葉とすぐに結びつかなかったのである。

藤林が「一両日中に決着」と請け負った以上、今日明日にも情報窃盗団が一網打尽になるのは、達也にとって既定事項、と言うより未来に起こる事実だ。

エレクトロン・ソーサリス――「電子の魔女」。

この二つ名は、電子、電波に干渉する魔法に長けている魔法師という意味の他に、情報ネットワークを手玉に取る悪魔的なハッカーの称号でもある。

彼女自身は、現実世界の事象改変より寧ろ情報ネットワークの改竄の方が得意だ、と言っている。

達也が時の流れに上書きされた過去の事象に付随していた情報を読み取ることが出来るように、藤林響子は上書きされ消去された磁気・光学ストレージのデータを再構築する特殊スキルを持っている。しかも達也と違って、時間制限無しだ。その代わり、物理的にストレージが除去されると遡及不能になるという限界はあるが、グローバルネットワークを構成する機器の、特定の情報を記録したストレージの全てが、一斉に廃棄されるということはあり得ない。

つまり彼女は電子情報ネットに一旦痕跡が刻まれたなら、事実上それを何処までも追いかけることが出来るということだ。

達也はネットワーク・チェイスのノウハウを藤林に教わっているが、この分野では彼女に生涯敵わないだろうと感じている。

彼女に匹敵するような電網追跡者（フォックス・ハンター）は、世界に片手の指の数ほどもいないだろう、というのが達也の評価だった。

「まあ、二人も捕まったことだし、もう心配いらないと思うぞ」

だから達也は、幹比古にこう答えた。

3－（11）　集い来る者たち（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

3－（11）　集い来る者たち

藤林から電話があったのは「全国高校生魔法学論文コンペティション」本番を二日後に控えた金曜日の夜のことだった。
『……というわけで、スパイの実働部隊はこの三日間でほぼ全てを拘束しました』
事務的な口調で良く整理された説明を終えた藤林が、ディスプレイの向こう側で表情を和らげた。
『達也君からの情報は凄く役に立ったわ。ありがとう』
「いえ、俺の方からお願いしたことですし」
『形の上ではそうだけど、被害に遭っていたのは魔法科高校とＦＬＴだけじゃなくて、超理電子とか九十九魔学のような他の専業メーカーや、トウホウ技産のような非専業まで今回の産学スパイ組織には悩まされていたところだったから。
諜報も防諜も私たちの管轄じゃないけど、うちの部隊の性質上、魔法技術を標的にしたスパイに知らん顔も出来ないし、貴方から連絡が無くても近々出動する予定だったのよ。
それが少し早まっただけだから、私としては本当に助かったわ』
「そうですか。
それにしても本当に手当たり次第だったんですね」
『恥ずかしい話だけど、軍の経理データが漏れていたのね。
それで軍から魔法研究の委託費支払いがあった先が、片っ端から狙われたという経緯みたい』
なるほど、と達也は頷いた。
道理で聖遺物（レリック）を狙って来たにしては淡泊だった訳だ。
何を委託されているのかも何を研究しているのかも分からないまま、本当に手当たり次第だったらしい。
随分コストパフォーマンスの悪い手口に見えるが、情報というものは玉石混淆。本当に役に立つ情報というのは、知財ＤＢを検索し

ても千に一つヒットすれば良い方だ。
スパイも、同じようなものなのかもしれない。
『拘束したメンバーは東洋系多国籍だったけど、もしかしたらあの街の尻尾を掴むことが出来るかもしれないわ』
「嬉しそうですね」
『隠しても仕方ないわね。
私は小心者だから、敵が自分の庭先に潜んでいる、かもしれない、というのが、我慢できないのよ。
その時はまた力を貸して貰うかもしれないから、よろしくね』
「任務とあれば、否やはありませんよ。
わざわざご連絡ありがとうございました」
『どういたしまして。
日曜日、頑張ってね。応援してるから』
フレンドリーな激励で、藤林少尉の電話は切れた。

「藤林さんのお話は何だったのですか？」
電話を終えてリビングへ戻ってきた達也に、すっかり冷めてしまったお茶を淹れ直して、深雪がそう訊ねて来た。（達也は藤林からの電話を自室で受けていた）
四葉家の人間に対する程では無いにしても、深雪は独立魔装大隊のメンバーを余り好ましく思っていない。独立魔装大隊の幹部たちはギブアンドテイクの関係であることを差し引いても達也の有力な味方であり、達也にとって得難い便宜を得られる先だと分かってはいるのだが、「兄を利用している」という印象を深雪はどうしても拭い去れないのだ。
ただその中で例外的に、深雪は藤林に対して好意的だ。
実際に顔を合わせた回数はまだ二桁まで行っていないはずだが、波長が合う、というヤツかもしれない。
「俺たちの周りで起こっていたスパイ事件の背後組織を片付けた、という連絡だよ」

達也は藤林に聞いた話を深雪に掻い摘んで聞かせた。
「報道機関が狙われていたのはどうしてですか？」
小野先生のお話では、出版社が何件も被害に遭っていた、ということだったと記憶しておりますが」
軍の経理データを元に狙われていた、という部分に深雪は疑問を感じたようだ。
「そっちはそっちで、ターゲットを探していたんだと思う。
複数の命令系統が同時に作動して、本当は相互に関連性の薄い事件が立て続けに起こった為に、それぞれが一連の密接な関連性を持つ出来事のように錯覚してしまった、というのが真相じゃないかな」
「なるほど……」
「人間は物事を自分の知る範囲内で合理的に解釈しようとしてしまう、らしい。
本来因果関係を持たない事象でも、それが連続して起こると、そこに因果関係をこじつけてしまう……迷信やジンクスの類を俺たちは『古くさい』とバカにするけど、自分たちが日々『迷信』や『ジンクス』を作っているかもしれないんだ、ということは、意識して注意しなければならないだろうね。
因果をねじ曲げる魔法師だからこそ、因果関係を正確に把握するよう常に心掛けておかなければならない」
途中から「我ながら説教臭いことを言ってるな」と心の中で苦笑いしていた達也だったが、深雪が真剣な眼差しで何度も頷くものだから、最後まで引くに引けなくなったのだった。

◇◆◇◆◇◆◇

土曜日の授業は、どのクラスも自習状態だった。
元々実習以外は自習のようなものであり、二科生は実習も半分自習みたいなものなので、いつもと変わらないといえば、それ程変わらない。

とは言っても、普段の授業中はこれほど騒がしくない。
実習で時々爆発音が轟いたりするから「いつもなら静まり返っている校内」と言うと誇大広告になってしまうが、いつもは騒ぎが起こるにしても、もう少し秩序立っている。
無秩序なざわめきは、いよいよ明日に迫った論文コンペ本番へ向けての最終チェックの音だった。
しかしその中で、当事者であるはずの達也は、教室の端末で黙々と課題を進めていた。

達也が明日の準備とは関係のない課題に取り組んでいるのは、準備をサボっている訳でも代表を馘首（クビ）になった訳でもない（高校生の本分を考えるなら、課題をそっちのけで準備作業をする方が「サボっている」と言うべきなのだが）。
彼の分担で今日出来る作業と言えば、本番と同じ段取りのリハーサルをして術式の作動状況を確認し不具合があれば直す、というものだけなのだが（それ以外のチェック作業はやり尽くしていた）、肝心の鈴音が学校に出て来ていないのでリハーサルが出来ないのである。
昨日の時点で「午後から登校する」との連絡を受けているので焦ったり戸惑ったりすることは無かったが、論文コンペの準備に関しては手持ち無沙汰となってしまったのだった。
一時限目が終わり、軽く伸びをしていると、前から声を掛けられた。
彼の前の席で椅子の背もたれに両肘を突いて後ろ向きに座ったレオではなく、その隣に立って彼の名前を呼んだエリカに達也は目を向けた。
「達也くん、明日は何時頃会場入りするの？」
エリカは努めてさり気なさを装っているが、隣で聞き耳を立てているレオのお陰で台無しだ。
この二人、共謀して一体何をやらかすつもりだろう……？　と達

也は訝しく思ったが、別に隠す必要のあることではない。
「八時に現地集合、九時に開幕だ。
持ち時間は一チーム三十分、インターバルは十分、午前四チームで昼食休憩が十一時半から十二時半まで。
午後五チームでプレゼンの終了時間が午後三時四十分。
その後、審査と表彰があって終了予定時間は午後六時の予定だな」
「……えっと、それで当校の出番は何時からなの？」
回答を予想した以上の情報を一度に与えられてエリカは目を白黒させていたが、何とか自分の頭の中を整理し終えたようだ。
煙に巻くのに失敗し、達也は素直に答えるよう方針転換した。
「一高は最後から二番目、午後二時半からだよ」
「それって随分時間が余るんじゃない？」
「まあね。
だからメイン発表者の市原先輩は午後から会場入りすることになっている。
俺と五十里先輩は、機器の見張り番とトラブルがあった際の応急処置に備えて早く行くんだ」
「ふ～ん……とにかく現地集合なんだ。
デモ機はどうするの？」
「生徒会が運送業者を手配しているよ。服部先輩が同乗してくれることになっている」
「服部先輩って、市原先輩の護衛役じゃなかったっけ？」
「当日は七草先輩と渡辺先輩が市原先輩を迎えに行くって言ってたな。
ところで、どうしてそんなことを？」
何気なく切り返した達也の質問に、エリカはたじろぎ、口ごもった。
ハッキリしないエリカを横目でチラリと見て、それまで黙って聞いていたレオが口を開いた。
「あのよ、その見張り番、オレたちにも手伝わせてくれねえ？」

不満げに顔を顰めながら、エリカが何も言わなかったところを見ると、申し出た内容自体は二人の間で打ち合わせ済みだったようだ。
「それは構わないが……何故そんな面倒なことをわざわざ自分からやりたがるんだ？」
当然の疑問とも言える達也の問い掛けに、レオは決まり悪げな笑みを浮かべた。
「いや、まあ、なんだ……折角特訓したのに出る幕の無いまま終わっちまうのは、何となく悔しいから……だな」
レオの顔を見て、エリカの顔を見たが、レオは自嘲気味の笑顔で達也を見返し、エリカは達也と視線を合わせようとしなかった。
「学校まで休んでコイツをしごいたのに、何時の間にか事件は解決してました、なんてバカみたいじゃない？」
目を合わせないまま、不機嫌な声でエリカが補足する。
達也の錯覚で無ければ、その機嫌の悪さは彼女の照れ隠しだった。
「どんな動機にせよ、人手は多い方が助かるよ。
それに、もう何も起こらない、と決まった訳でもないしな」
「えっ？　事件は解決したんじゃなかったのかい？」
いきなり、聞き耳を立てていたとしか思えないタイミングで幹比古が乱入してきた。
盗み聞きについては特に指摘せず――それを指摘すると大慌てして大騒ぎになりそうな友人がもう一名隣の席にいるからだ――達也は訊かれたことに答えた。
「事件が起こるのは一度に一つ、なんて決まりは無いぞ？」
真面目に答えたのは、これが大事なことだったからだ。
「論文コンペが狙われるのは毎年のことだそうだ。
当日の帰り道に狙われた例もあるらしい。
だったら本番前に起こった事件が解決したからと言って、本番に別の事件が起こらないとは限らないだろう？」
「そうか……そうだね。
だったら僕にも見張り番の手伝いをさせてくれないかな」

言われた事を深く咀嚼するように頷き、気合の入った顔で申し出た幹比古に、達也は笑顔で頷いた。

「ああ、頼りにしてるよ」

一つの事件が解決したからといって、油断してはならない、というのは正しい心掛けだ。

しかし結果的に言えば、この時の達也は間違っていた。

◇◆◇◆◇◆◇

論文コンペ本番前日の学校を休み、リハーサルを午後に繰り下げて、鈴音は病院を訪れていた。

同行者は同級生の女子生徒が一人、下級生の男子生徒が一人。

男子生徒は服部、そして女子生徒は平河小春だった。

三人が前にする個室の扉には、ネームプレートが出ていない。

国立魔法大学付属病院十三階個室は、訳有りの学生・生徒を隔離または拘束するのに使われている病室だ。

この１３１３号室に収容された「患者」も、その例に漏れない。

「平河さん？」

ドアの前で固まっていた小春を、鈴音がそっと促した。

小春はギュッと握り締めた拳で、小さく二回、ノックした。

「どうぞ」

おっとりとしたアルトの声が室内からノックに答えた。

服部が一礼してドアから離れ、鈴音に目で後押しされた小春がノブを回す。

「失礼します」

声を出せなかった小春に代わり、鈴音がベッドサイドの女性に声を掛けた。

「あら？

市原さん、本番は明日でしょう？

大丈夫なの？」

国立魔法大学付属第一高校保健医の安宿怜美（あすか）は、思い掛けない鈴音の来訪に目を丸くした。
「準備は既に終わっています。凝り過ぎるのも良くないので、今日はリハーサルを一回流すだけにする予定です」
「そう……？とにかく座ってくれる？」
安宿は座っていた椅子を移動して、ベッドサイドの席を二人に勧めた。
ベッドの上には、上体を起こし俯いた姿勢でジッと座っている少女が一人。
「はい」
鈴音は小春の肩を押して安宿の隣に座らせ、自分はさらにその隣に座った。
「……千秋」
やっとのことで、という風情で、小春が声を絞り出し、妹の名を呼んだ。
千秋は姉の呼び掛けに応えず、ベッドの上で俯いたままだった。
「千秋……どうしちゃったの？お姉ちゃんの声が聞こえないの？」
段々と悲壮感を帯びて行く姉の声にも、妹は身動ぎ一つ、しようとしない。
「先生、平河千秋さんは精神に疾患を生じているのですか？」
それを傍（はた）で聴きながら、無情とも思える鈴音の問い掛け。
「いいえ。心的外傷性意思疎通障碍やそれに類する症状は見られないわ。もっとも、『精神』を直接診察できない以上、健康だと断言することも出来ないけど」
「こちらの声が聞こえていれば十分です」
安宿の答えを聞いて、鈴音は立ち上がった。

ベッドを回り込んで、窓際に、ベッドに背中を向けて立つ。
そしてそのまま千秋へ目を向けずに語り掛けた。
「平河千秋さん、貴女のやり方では、司波君の気を引くことは出来ません」
姉の声に無反応を貫いていた千秋の肩が、鈴音の言葉を聞いてピクリと震えた。
「好意は無論のこと、敵意も悪意も引き出すことは出来ません。今の貴女は、彼にとって、その他大勢の一人でしかありません」
「それがどうしたって言うんですか！」
鈴音は千秋から言葉と感情を引き出すことに成功した。
――それが百パーセント、ネガティブな感情だったとしても、それは第一歩だった。
「あたしがアイツにとってその他大勢に過ぎないことなんて、自分でも分かってます。
先輩に一々指摘してもらわなくても結構です！」
紗耶香に対しても花音に対しても、拒絶しか見せなかった千秋は、鈴音に対しても同じスタンスを取り続けた。
ただ鈴音の反応は、その二人とは違った。
「貴女の司波君に対する評価は、ある意味で的を射ていると思いますよ」
鈴音は千秋の絶叫がまるで聞こえていないかの如く、背中を向けたまま淡々と語り続ける。
「確かに彼は、尊大な人間です。
その他大勢がいくら泣こうが喚こうが、おそらく彼は気に掛けません。同情どころか、嘲笑う手間すら掛けないでしょう。
嫌がらせを受けても、五月蠅げに払い除けるだけです。
虻蚊に集られるのと同じなのでしょうね」
千秋は悔しげに唇を噛み締めた。
鈴音が四月の新入部員勧誘週間を念頭に置いていることは、何となく理解できた。

あの時は嫌がらせを受けても打つ手が無いのだと思われていたが、今ならそれが勘違いだと分かる。

あの男は魔法で闇討ちを仕掛けてきた相手を、捕まえようと思えば捕まえることが出来た。

それをしなかったのは、単に興味が無かっただけだ。

実際に魔法を撃ち込まれても虻蚊程度にしか感じないのなら、手を出すことも出来なかった自分は虫けら以下ではないか……

こみ上げてくる悔し涙を堪えるためには、掌に爪が食い込む程に、拳を握り締めなければならなかった。

千秋のそんな姿に目もくれず――あるいは気づかぬ振りをして――相変わらず背中を向けたままで鈴音は言葉を続けた。

「千秋さん、知っていますか？

一学期定期考査の筆記試験で、司波君は二位以下をまるで寄せ付けない高得点をマークしました。

とりわけ魔法工学は、驚くべきことに満点でしたね」

「……それがどうしたんですか」

「そして魔法工学の筆記試験における一年生二位が、貴女です」

鈴音が身体ごと振り返った。

千秋を見下ろす感情に乏しいクールな表情の中で、瞳だけが優しく微笑んでいた。

「百点満点中九十二点。

普通ならトップでもおかしくない高得点です」

「……だから何です」

「残念ながら、他の分野で司波君を脅かすことは無理でしょう。

ですが魔法工学の分野に限って言えば、千秋さんは司波君を追い抜くことも可能だと思いますよ」

千秋が勢いよく顔を上げた。

大きく見開かれた目は、「信じられない」と語りながらも「もしかしたら」という希望を宿していた。

「約三週間、一緒に作業してみて分かりましたが、司波君はソフト

ウェアに比べてハードウェアを余り得意としていないようです。
無論、ハードに関するスキルも一般的な高校生の水準を大きく上回ってはいるのですが、かけ離れた、という程ではない様に思われます。
一年生の内は魔法工学もソフトが中心ですが、二年生に上がればハードの比重が増えてきます。
千秋さんはハードウェアの方が得意なのだそうですね？」
鈴音が言わんとするところはつまり、二年生になって授業の中でハードの占める比重が増えれば、逆転のチャンスがあるということ――千秋はそう理解した。
都合の良すぎる考え、という声が意識を過ぎったが、彼女はそれを無視した。
千秋の顔から自暴自棄の色が消え、一途な想いが瞳に点り始めたのを見て、鈴音はフッと表情を緩めた。
「悔しいという気持ちを持ち続ける事が出来るのであれば、きっと何時か、成し遂げることが出来ると思いますよ」
何を、とは、鈴音は言わなかった。
千秋も問わなかった。
具体的な何かである必要は無かった。
漠然とした「何か」でよかった。
「明日、会場に来て下さい。
きっと、得るものがあるはずです」
病室を去る鈴音の背中も、千秋の目には入らなかった。
何かを成し遂げることが出来るかもしれない――それは「可能性」という名の麻薬。
時に衰弱死へ向かう精神を蘇らせることも可能な薬物の注入で、千秋の心に劇的な化学変化が始まっていた。

◇◆◇◆◇◆◇

「あの……市原先輩？　ご気分が優れないのでしたら……」
病室から出て来た鈴音の、余りの顔色の悪さに、服部の声には狼狽が混じっていた。
「いえ、心配には及びません。ちょっとした自己嫌悪ですから」
鈴音は決して多弁な方ではない。
弁論は得意だが、基本的に必要の無いことは口にしない。
真由美といる時が彼女としては饒舌な方なのであり、普段は寧ろ寡黙といえる。
そのことを知っている服部は、「自己嫌悪」というフレーズが気になりはしたものの、それ以上に問いを重ねることなく黙って彼女の後ろに続いた。
鈴音にしてみれば、こういう空気が読める性格だからこそ、服部に同行を許したのだ。
そして予想したとおり、こうして話し掛けられたくない精神状態に至ってしまった。
（全く……詐欺師の才能がありますね、私は）
クールなポーカーフェイスの裏側で、鈴音は自嘲の台詞を量産していた。
彼女の目的は、千秋を立ち直らせること、ではなかった。
妹の変調に悩んでいる小春に力を貸すというのも建前だった。
千秋の才能を惜しんだ、というのが彼女の本音だった。
それも、本人の為にではなく、母校の為にだ。
市原家は番号落ち（エクストラ）の家系。
今ではエクストラ・ナンバーズに対する忌避も蔑視も（表向き）見られないが、それも精々この二十年のこと。
彼女の親の世代は、まだまだ偏見が根強い中で青少年期を過ごしている。鈴音の父親は魔法師のコミュニティで厳しい孤立を味わっているし、市原家が元々「一花（いちはな）」のエクストラだということは今も彼女に隠し続けている。
しかし鈴音は、子供心にその影を感じ取って育った。その所為か

彼女は、魔法師の社会に対する帰属意識を余り持てずにいた。
彼女が初めて帰属意識を持ったのが、今の学校、魔法大学付属第一高校に対してだ。
だから彼女はそのきっかけをくれた真由美に対し恩義に近いものを感じているし、誰にも負けないくらい強い愛校心を持っている。
夏の九校戦で鈴音たち一高幹部は、下級生に魔工技師系の人材が乏しいという危機感を抱いていた。
一年男子の成績不振の原因は精神的なものばかりでなく、ここにも一因がある、というのが鈴音たちの一致した見解だった。
あずさ、五十里、達也という傑出（タレント）した人材は存在する。
しかし、層が薄い。
この三人を除くと、技能のレベルがガクッと下がってしまう。
下級生、特に一年生の魔工技師系人材の発掘は、卒業までの半年間で彼女たちに課せられた急務と認識された。
教師が個人指導を行っている一科生ならともかく、教師の目が届かない二科生の中から優秀な人材を見出すことは、生徒会や部活連にしか出来ないことだ。
その中で今回、鈴音の目に留まったのが、平河千秋だった。
非合法ツールを持ってウロウロしていた一年生が、調べてみれば魔法工学に限って高得点をマークしており、ハードウェアの修理・改造スキルを高レベルで保持していることも分かった。
彼女にはその才能を母校の為に役立てて貰わなくてはならない。
その為には司波達也に対するライバル心を植え付け掻き立てることが最も効率的だ、というのが鈴音の出した結論だった。
（まあ、誰が不幸になるわけでもありませんし）
……この台詞で自分の葛藤にけりを付けた鈴音は、やはり「クール」という単語に相応しい少女なのだろう。

◇◆◇◆◇◆◇

今年は会場が横浜だから一高代表チームは当日の朝現地集合ということになっているが、会場が京都だった去年は前日から一泊している。

それと同じ理由で首都圏から離れた学校の代表チームは、本番前日または前々日に横浜入りして一泊することになる。

それは「カーディナル・ジョージ」こと吉祥寺真紅郎を擁することで今年の優勝候補筆頭に挙げられている第三高校も同様だった。

第三高校代表チームの出番はラスト。現代の交通システムの速度と居住性を以ってすれば、金沢から横浜まで、当日の朝出発でも十分に間に合うのだが、途中でトラブルが絶対に起こらないという保証は無い。故に代表チーム全員が学校を前日午後一番で出発し、横浜で一泊する予定になっている。

「ジョージ、そろそろ時間だぞ」

「もう？　分かった、すぐ行くよ」

論文コンペの為に集めた資料をプレゼンテーションとは無関係に読み耽っていた吉祥寺は、呼びに来た将輝にそう応えて、手に持つ電子書架（ブック・プレーヤー）のスイッチを切った。

（持ち出し、許可してくれないかな……）

横浜まで三時間。

ボーっとして過ごすには、少し長い時間だ。

吉祥寺は読みかけの文献を納めた電子書架を未練がましく眺めた。

しかしここに収められたデータは、利用を国立魔法大学関連施設内に限定された禁帯出文献。

持ち出しを申請したところで却下されるのは確実だ。

一つため息をつき、吉祥寺は未練を断ち切った（と言うほど大袈裟なものではないが）。

プレーヤーをラックに戻し、足元に置いた旅行鞄を手に立ち上がる。

横浜の会場には、舞台装置を一緒に積んだ大型バスで移動する予定だ。

正確には貨物用ターミナルまでバスで行き、長距離高速列車にバスごと乗り込んで（バスを丸ごと収容するコンテナが今では普通に使われている）、最高時速六百キロで横浜へ向かうのだが、いずれにせよ乗り換え無しで目的地まで一直線だ（直通という意味で）。

普通、とは言い難いものの、彼もミドルティーンの高校生。他の乗客に気兼ねする必要の無い道中は、友人と無駄話でもしていれば退屈する暇など無いだろう、と思い直すことにした。

横浜ではおそらく、あの男と再会する。

いや、再び相見える、と表現した方が気分的には正解か。

密かにライバル視している一高の一年生を肴にしながら、ついでにその男の妹を出汁に親友をからかって時間を潰すのも楽しいだろうな、と吉祥寺は人の悪い笑みを浮かべた。

◇◆◇◆◇◆◇

横浜港を望む高層ビル複合施設「横浜ベイヒルズタワー」。

その最上階に近いバーラウンジで、一組のカップルが夜景を肴にルビー色の液体が湛えられたグラスを傾けていた。

「今年の新酒はなかなか良い出来ですね」

「私はお酒の味が余り分からなくて。せっかく良いワインをご馳走していただいているのに申し訳ないですわ」

いつもの地味メイクではなく、ばっちりドレスアップしている藤林が艶やかに微笑むと、千葉警部は焦ったように空いている手を振った。

「いえ、このワインはここのプライベートワイナリーが解禁日なんて関係なく出来上がる都度、店に出しているものですから……そんなに高価なものでは……」

「あら、出来立てをいただけるなんて素敵じゃありません？」

グラスに鼻を近づけ、目を伏せてクルリとワインを回し、上目遣いの眼差しを向ける藤林に、千葉警部は引きつり気味の愛想笑いを

浮かべた。
「……ええと、気に入って頂けたのなら幸いです。藤林さんのお陰で、今回のヤマも何とか目処が立ちましたし、今日は本官からのせめてものお礼のつもりですから」
「お互い様ですよ、警部さん。私も彼らを放置しておく訳には行かなかったのですから」
「それは藤林家としてですか？　それとも……」
……いえ、失礼しました」
少しもアルコールに酔っていない、醒めた視線を向けられて、千葉警部は藤林との約束を思い出した。
彼女が情報を提供し捜査に協力する交換条件の第一項。
それは「彼女の素性と目的を詮索しないこと」だ。
素性を詮索しないという条件は、彼女に関して言えばおかしなものだ。
彼女が古式魔法の名門・藤林家の娘であり、十師族の長老・九島烈の孫娘であることは最初から分かっていることだからだ。
しかしその上で尚、「素性を詮索しない」という条件が付けられたということが逆に、おいそれとは明かせない背景を彼女は有しているのだ、と物語っている。
「ところで、警部さん。
今日誘っていただいたのは、『お礼』だけなんですか？」
「えっ！？」
危うくグラスの中身を溢しそうになった千葉家総領の姿に、不意打ちを仕掛けた藤林家令嬢はクスリと笑みを溢した。
「もし警部さんがよろしければ、今晩だけではなく明日も付き合っていただきたいのですけど」
「え、あ、は、ハイ！　本官でよろしければ、喜んで！」
千葉寿和は異性に全く縁がない人生を歩んで来た、わけではない。
千葉の道場には女性の門下生もいるし、学生時代は妹から「和兄上は不真面目でだらしない」と散々詰（なじ）られる程度には遊び回ってい

た。
女性に慣れていない、あるいは女性が苦手、と言うよりは、藤林が特別なのかもしれない。
「ありがとうございます。
それでは、朝の八時半に桜木町の駅でよろしいでしょうか」
「……朝？」
婉然と微笑む藤林の前で、千葉警部の顔が呆けた。
「明日は国際会議場で全国高校生魔法学論文コンペティションが開催されるんですが、ご存知ありませんか？」
「いえ、存じておりますが……」
「それに知り合いの男の子が出場するので、応援に行きたいんですよ」
「はぁ……」
流石に口には出さないが、千葉警部の顔には「話が違う」と書かれていた。
それを読み取るくらい藤林には造作もないことだったが、彼女の笑顔は小揺るぎもしない。
「そうそう、できれば部下の方々にもお声を掛けておいて下さいね。
ＣＡＤだけでなく、武装デバイスや実弾銃もご用意いただけると助かります」
「藤林さん、それは……」
いじけた表情が一転、冷水を浴びせられたように引き締まる。
「もちろん、何も起こらなければ良いのですけど」
千葉警部の問いにそう答えて、藤林は静かにワイングラスを傾けた。

3－（12）　集い来た者たち（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

3－（12）　集い来た者たち

全国高校生魔法学論文コンペティション開催日当日。
途中特段のトラブルもなく、達也と深雪は予定通り会場に着いた。
道路が空いていたのか、舞台装置を乗せたトレーラーは既に機材を下ろした後だ。
五十里も先に到着している。
紗耶香を連れた桐原の姿も見える。
時間通りであるにも関わらず、どうやら彼ら兄妹が最後のようだ。
「……お兄様、そろそろ何とかした方がよろしいのではないでしょうか」
現実逃避気味に第三者視点になっていた達也の意識が、当事者の立場に引き戻される。
「俺が何とかしなきゃならないのかな……？」
苦い顔で問い返した達也に、深雪は「残念ですが」と頷いた。
肩を落として視線を戻したその先では、エリカと花音が険悪な表情で睨み合っていた。

「どうしたんですか？」
エリカと花音、両方と親交を持つ者は、この場で達也だけではない。
親密度を度外視すれば深雪も一応双方と親しくしているし、五十里は親密度の面でも達也以上だろう。
だが花音は深雪の仲裁に耳を貸さないだろうし、五十里は本人の意思に関わらず中立ではいられない。
達也はため息を堪えて睨み合う二人の間に割って入った。
「あっ、達也くん、おはよー」
達也が声を掛けるとすぐに、エリカが軽い挨拶を返した。
対峙している相手をそっちのけで。

その様を前に、花音の眼差しが一層険悪なものと化す。
これだけで達也は、どういう状況かを大体把握した。
把握したからといって、どちらにも肩入れ出来ないのが辛いところだが。
「――司波君。この聞き分けの無いお嬢さんに、貴方から何か言ってやってくれない？」
（おやおや……貴方からも、じゃなくて、貴方から、ね……）
花音が自分で意識しているかどうかは定かでないが、彼女の台詞はこの場の処理を達也に丸投げする気が満々だった。
「はぁ……」
だが達也は「まあ良いか」という気分だった。
花音の意図がどのようなものであるにせよ、この場で双方の言い分を聴くよりは彼が一人で仕切った方が、多少強引でも手っ取り早いに違いないからだ。
「俺に一任していただけるなら、任されましょう」
何を、が付いていないその申し出は、白紙委任状の要求だった。
それをすぐに理解した花音は、嫌そうに顔を顰めた。
しかし隣を見て、五十里が異を唱えていないことを確かめて、彼女は不承不承、という感じで頷いた。

◇◆◇◆◇◆◇

達也はエリカとレオを引き連れて、ロビーの隅に置かれたソファーに腰を下ろした。（彼の隣には当然のように深雪が座った）
「……まあ、事情は大体想像できるよ」
決まり悪そうにしている二人を前にして、達也はそう切り出した。
「エリカも真っ正直に正面からぶつかることはないだろうに」
「……ごめんなさい。結局、達也くんの手を煩わせちゃって……」
エリカの珍しく殊勝な態度に、達也は「あれっ？」と思ったが、彼女のマイペースな振る舞いは他人の心の機微が読めないからでは

なく、確信犯（正確には「故意犯」）でやっていることなので、手伝おうと思って足を運んだ相手に余計な手間を掛けさせれば、気まずくもなるのである。

このあたり、達也の洞察力も未々と言える。人間の心は魔法ほど単純に測りきれないようだ。

彼の口調が意図したものより優しくなったのは、この意外感の故だろう。

「――別に警備、って張り切らなくても、客席から応援してくれれば良いよ。

何か事件が起こったら、その時は事態収拾に協力しても文句は言われないだろうし」

達也が「協力」に不自然なアクセントを置いてそう言うと、エリカはしおらしい佇まいから打って変わって、意味ありげな、如何にも「悪巧みしてます」と言わんばかりの笑みを浮かべた。

「そっか、協力、ね」

「始まるまで暇だったら楽屋に遊びに来れば良い。友達なんだから遠慮は要らない。

そうだろ？」

今度は「遊びに」と「友達」が強調された達也の提案に、エリカとレオは顔を見合せ、声を立てず楽しげに笑った。

◇◆◇◆◇◆◇

開幕時間の間近になると、どの学校の控え室も賑やかになっていた。

順番がラストに近い学校は何時間も待つことになるが、論文コンペに参加するような生徒は、演壇に立つ代表だけでなく裏方仕事で会場までついて来るようなサポーターも含めて、他校の発表にも強い関心を持っているのが普通だ。

ロビーでは他校生と談笑している生徒の姿が結構見受けられる。

そして所属を超えて言葉を交わしているのは、何も生徒だけではなかった。

遥が論文コンペの会場に足を運んだのは、第一高校の職員としての仕事ではなく、公安の情報員としての仕事絡みだった。

四月の事件で、公安は達也に興味を向けている。

正確には、公安の中で遥の所属部署が、達也の正体に興味を持っていた。

しかし彼の身辺を探ろうとすると、上の方から圧力が掛かってきた、らしい。

遥が直接圧力を受けた訳ではなく、任務を言い渡された際に上司の愚痴を聞かされて知ったことだ。

それがかえって課長の興味を深め、かといって正規の情報員を動かすことも出来ず、遥に調査任務が回ってきたという次第だった。

無論、遥は抵抗した。

四月の時点で、自分の手に負える相手ではないと精一杯訴えたのだが、当然、聞き入れては貰えなかった。

彼女が達也に苦手意識を持ちながらも関わることを止められないのは、そういう背景もあったりするのだ。

彼女に課せられた任務は達也の正体の調査、だが、デジタルデータは既に専門家が当たって「手掛かり無し」という結果が得られている。

元々彼女にその方面のスキルは無い。

かといって、カウンセリング中に探りを入れるという、彼女がそもそも当てにされていた方面も進展は無い。調査対象がカウンセリングを受けに来ないのだから進展しないのも当然だ。

よって現時点で彼女に採れるのは、交友関係、特に学外の交友関係に目を光らせておくという消極的な手法だけだった。

彼女の調査対象は現在、一高に割り当てられた準備室で機材番をしている。

控え室の中まで入っていく口実が無い訳ではないが、前に述べたとおり遥は達也を苦手としている。

私情と義務感の板挟みに悩み、その結果、遥は缶コーヒー片手にロビーから控え室の出入り口を見張るという消極的な対応を採用していた。（なお余談だが、現在プルタブ式の缶は姿を消し、全てリユース前提のボトル缶になっている）

ただ幸いなことに、無駄働きにはならなかった。

彼女が監視を始めたほとんど直後、控え室に女性の来客があった。

年格好は明らかに高校生ではない。大学生でもないだろう。

多分、彼女と同年代。

顔と記憶を照合。学校関係者に該当は無い。

しかし、彼女の顔には見覚えがあった。

「……やっぱり」

公安御用達の盗み撮り用カメラで撮った映像を端末に読ませ、画像検索を掛けて自分の記憶が正しかったことを遥は確認した。

「エレクトロン・ソーサリス……」

遥の学生時代、彼女はヒーロー、いや、ヒロインの一人だった。

九校戦、二高優勝の立役者――電子の魔女。

高校受験で早々に魔法師の夢を絶たれた遥にとって、嫉妬と憧れを持って仰ぎ見ていた少女。

魔法大学に進学後、防衛省に入省したと噂に聞いたが、その彼女が何故母校の二高ではなく一高の控え室を訪ねるのか。

不自然過ぎる、ということはない。

日曜日だから平服でいるのもおかしくないし、もしかしたら青田刈りに来ているのかもしれない。

今現在控え室にいるのは司波兄妹だけだと知らないのかもしれないし、深雪の方が目当てなのかもしれない。

だが遥の直感は、彼女が達也の素性を手繰り寄せる手掛かりになる、と告げていた。

◇◆◇◆◇◆◇

部屋の外でそんな風にピリピリしている見張りがいるとも知らず――いや、もしかしたら知った上でのことかもしれないが――兄妹は訪ねて来た藤林と和やかに談笑していた。

「深雪さん、お久し振りね。直接お会いするのは半年以上振りかしら」

「ええ。二月にお目に掛かって以来です。ご無沙汰しておりました」

「九校戦は観に行っていたのよ。達也くんと一緒に部屋へ来てくれれば良かったのに」

そう言いながら藤林は「何で連れてこなかったの？」と達也を軽く睨んだ。

もっとも、その程度で畏れ入る達也ではないが。

「深雪と一緒だと目立ってしまったでしょうから」

人目に触れるのは拙かったでしょう、と目で追加する。

深雪は少し気恥ずかしげに、藤林は仕方ないわね、という顔で笑った。

――どうやらハッキリ言葉にしなければ疑問には答えて貰えないらしい。

「ところで藤林さん」

少尉、とは呼ばない。ここは普通の公共（的）施設なのだ。

盗聴・盗撮機の有無はチェック済みだが完全に安心は出来ない。

「一高の控え室に来て大丈夫なんですか？」

事情を知らない者には意味不明な台詞だし、事情を中途半端に知っている者には誤った解釈へ誘導する言い方だ。

藤林の学生時代しか知らない者なら、「二高のＯＧがライバル校の控え室で仲良くお喋りしていて良いのか」という意味に捉えるだろう。

「大丈夫よ」

無論、当人たちには誤解の余地など無かった。

「こういう時に肩書きが一杯あると便利ね。
防衛省技術本部兵器開発部所属の技術士官である私が、九校戦で高度な技術を披露した君の許を訪れても不自然じゃないからね」
「藤林家の人間としても然り、ですか？」
「そうゆうこと。
だから達也くんも、『藤林少尉』でも『藤林さん』でも『藤林のお姉さま』でも何れでもいいのよ？」
「いえ、お姉さま、という呼び方は無かったと思いますが」
意外とお茶目な藤林のジョークに、達也は半ば本気で笑った。――と言っても苦笑いの類いだ。
「さて、前置きはこのくらいにして……
良いニュースと悪いニュース、両方持って来たんだけど、どっちを先に聞きたい？」
また何処かで聞いたような展開だな、と達也は思ったが、定番というのは繰り返されるからこそ定番なのだろう、と思い直した。
「では良いニュースから」
「……そこは『悪いニュースから』というのがパターンじゃないの？」
「そうでしたっけ？」
藤林のツッコミに真顔でボケる達也。
実際にはそんなパターンなど存在しないので、ボケにボケで返したボケボケの遣り取りでしかないのだが。
「……まあいいわ。
じゃあ、良いニュースからね。
例のムーバルスーツ、完成したわよ。
午後にはこちらに持って来るって真田大尉から伝言」
「そうですか……流石ですね。
しかし別に今日こちらへ持って来なくても……」
「一刻も早く自慢したいんじゃない？
基幹部品はそっちに完全依存の形になっちゃったから、せめて完

成品は、って頑張っていたもの。
昨日なんて『これでメンツが保てる』なんて情けないこと言ってたし」
「情けなくなんてないですよ。実際問題、こちらでは実戦に堪える物を作れなかったんですから」
「その言葉、大尉に言ってあげてね。安心すると思うから」
ウインクして見せた藤林に、達也はまたしても苦笑を返した。
「じゃあ今度は……悪い方のニュース。
例の件、どうもこのままじゃ終わらないみたい」
「何か問題が？」
引き締まった、というより、それを通り越して厳しい顔つきになった達也を、深雪が横から不安げに見上げている。
藤林も今回は、笑って済ませることも出来ないようだ。
「詳しいことはこれを見て」
そう言って達也にデータカードを渡す。
無線電送すら憚られる内容らしい。
「私の方でもいくつか保険を掛けておいたけど……もしかしたらきな臭いことになるかもしれない」
「分かりました。
俺達の方も準備だけはしておきます」
頷き会う兄と妹。
それを見て眉目を曇らせた藤林だったが、制止する言葉は出なかった。
「何も起きないのが一番だけど……もしもの時は、お願いします」
どんなに心苦しく思っても、彼らは貴重で強力な戦力であり、彼女の立場で「手を出すな」とは言えないのだった。

◇◆◇◆◇◆◇

時刻は八時四十五分。

そろそろ客席が埋まり掛けている頃だ。
藤林の持って来たデータに達也が目を通しているところへ、五十里が花音を連れて入って来た。
「司波君、交代しようか」
見張り番はプレゼンテーション毎に交代で行う。
順番は打ち合わせ済みだ
五十里は二番目のプレゼンに興味があるらしく、最初の発表の時間は自分が機材を見ていると提案した。
控え室にもモニターがあるので順番に拘る必要は無いと達也は考えていたから、五十里の提案したタイムテーブルで番をすることになったのだった。
「お願いします」
その一言で引き継ぎを済ませて、達也は深雪を伴い客席へ向かった。

――のだが。
二人はロビーで足止めを受けた。
「司波さん！」
名前を呼ばれたのは深雪の方。
名前を呼ぶ声は若い男、と言うより少年のもの。
兄妹にとって、二ヶ月ぶりに見る（会う、ではなく）顔だった。
「一条さん」
深雪に声を掛けてきたのは一条将輝だった。
左腕には「警備」と書かれた腕章。どうやら克人をヘッドとする共同会場自警団の一員として会場を見回っている途中で深雪を見つけた、という経緯のようだった。
「お久し振りです、司波さん。後夜祭のダンスパーティ以来ですね」
「……ええ、こちらこそご無沙汰致しております」
不自然になるかならないか位の短い間があったのは、将輝にとって深雪はダンスパーティで踊った相手、深雪にとって将輝は兄と新

人戦で戦ったライバル、という認識の齟齬によるものだった。
それを隠す、あるいは誤魔化す為に、殊更丁寧に一礼する深雪。
「あっ、いえ、こちらこそ……」
その完璧な作法に、達也と違いその手の上流階級（セレブ）な付き合いにも慣れているはずの将輝が棒立ちになった。隣にいた少年（おそらく将輝とチームを組んでいる自警団のメンバー）まで魂を抜かれたように硬直したのはご愛敬だが、深雪の企みは見事に成功したようだ。
「会場の見回りですか？」
見れば分かることを今更のようにニッコリ笑って訊ねる深雪。
「ハ、ハイ、そうです」
たったそれだけのことでどもってしまうのは少し情けなくないか？　と達也は感じたが、相手が深雪では仕方ないかもしれないな、と思い直した。
誰よりも身近にいて、しかも精神に改造を受けている自分ですら、時々見とれてしまうことがあるのだ。赤の他人でしかも手を伸ばせば高嶺の花に届くかもしれない立ち位置にいるこの男が、深雪を過剰に意識してしまうのは寧ろ当然かもしれない。
そんな兄の思いを他所に、妹は益々調子を上げ絶好調に近づいていた。
「一条さんが目を光らせて下さっているのであれば、わたしたちも一層安心できます。よろしくお願いしますね」
確かに、警備のメンバーに「クリムゾン・プリンス」がいるのは心強い。達也でもそう思うのだから、これはもう、客観的な評価だ。
――しかし、少し煽り過ぎではないだろうか？
「ハイッ！　必ずやご期待に添えるよう全力を尽くします！」
今日一日、将輝が最後まで保つかどうか、他人事ながら達也は懸念を覚えた。
「十三束君も頑張って下さい」
「あ……ありがとうございます」
放置状態からいきなり声を掛けられて、将輝のパートナーの少年

も、しどろもどろになりながら、同級生相手には些(いささ)か堅すぎる返事を返した。

◇◆◇◆◇◆◇

警備と張り切らなくても良い、と言われてその場は頷いたエリカだが、観客に徹するつもりはさらさら無い。

達也たちが控え室に向かうのと入れ違いでやって来た幹比古と合流し、少し遅れて到着するという連絡があった美月を待って、四人で席を探している最中も、エリカは「見やすい席」より「不審な人物」の方へ神経を多く割いていた。

その甲斐あって、と言うべきか。

エリカは客席の後ろ隅に座る、見覚えのある人影に気がついた。

見覚えがある、と言うより、忘れたくても忘れられない、と言った方が正確か。

何せ、以前は毎日見ていた顔だし、時間が合わなくなった今でも二日おき位には顔を合わせている。

相手の方でもエリカに気付いたようだ。

いや、もしかしたら相手の方が少し早かったかもしれない。

相手の力量を考えれば不思議なことではないのだが、エリカにとっては少々癪に障ることだった。

「あれっ？　エリカ、あそこにいるのは……」

どうやら幹比古も気付いたようだ。

彼も面識のある相手だから、これまた不思議なことではない。

「エリカちゃん、お知り合い？」

「単なるナンパ野郎よ。どうせ女と待ち合わせでもしているんでしょ」

だから余計に、声を掛けようとか相席しようとか、そんな話になる前に、エリカは他人のフリをすることを選んだ。

寿和とエリカの仲が余り良くない（と言うより、エリカが一方的

に嫌っている）ことを知っている幹比古は、藪をつついて蛇を出してはたまらないとばかり、もの問いたげなレオの視線から目を逸らした。

◇◆◇◆◇◆◇

「深雪、十三束鋼のことを知っていたんだ？」

「ええ、隣のクラスですから、顔と名前くらいは。お兄様こそ、彼のことをご存知だったんですか？」

空いている席に腰を下ろして兄妹が話題にしたのは、久し振りに再会した将輝のことではなく、お互い余り言葉を交わしたこともない十三束鋼のことだった。

――片思いというのは、得てしてこんなものだろう。

「十三束は沢木先輩のクラブの後輩だからね。それでなくても十三束家の『レンジ・ゼロ』は有名だ」

百家最強の一角を占める十三束家。

その中に生まれた異端の魔法師のことは、達也程の事情通でなくても知る者は多かった。

「何の話？」

そこに割り込んできたのは、先に客席へ向かったはずのエリカだった。

「エリカ、一人か？　レオはどうしたんだ？」

先程まで一緒にいたのだから、達也の質問は当然のものといえる。

しかしエリカは、不機嫌も露に顔を顰めた。

「……達也くん。この際だからハッキリさせておきたいんだけど」

エリカも第三者が大勢いる中で喚き散らすような非常識な真似はしなかったが、低く潜めた声でも十分な迫力があった。

「アイツとあたしをワンセットにするのは止めてもらえない？　あたしはアイツに技と得物を与えただけで、それ以上の関係なんて全く何も無いんだから」

「そんな意図は無かったんだが……」
達也は間違っても「正直者」ではないが、今に限っていえば、完全に本音だった。
敢えて意味ありげな言い方もしていない。
それなのにここまで過敏な反応を返すのは、裏を返せばそれだけ意識しているということにならないだろうか、と達也は思ったが、それを口に出すほど意地が悪くもなかった。
「ところで他の連中は？」
九校戦の壮行会以来、１－Ｅのクラスメイトには妙なノリが染み付いたようで、今回も「皆（みんな）で応援に行くぞ～！」みたいな勢いで会場に集まるようなことを言っていた気がする。
「クラスのみんなだったら、まだじゃない？
午後の順番だってことは分かってるんだし。
あっ、でも美月とミキは来てるよ。
もっと前の方に座ってる。
二人で仲良く」
達也の隣に腰を落ち着け、ニンマリと笑うエリカ。
噂されるのは嫌いでも、噂するのは好きだ、という訳だ。
こういうところはエリカも普通の女の子だな、と達也は思った。

◇◆◇◆◇◆◇

プレゼン開始の時間になって、潮が引くようにロビーから人影が消えた。
魔法技術そのものには余り関心の無い遥は、どうせ退屈するくらいなら喫茶室で居眠りでもしていようか、と考えていた。
そしてそれを実行に移そうとしたその時、
「小野先生」
最寄りのゲートからロビーへ入って来た知り合いに声を掛けられた。

「安宿（あすか）先生」
カウンセラーとして一高生徒の精神面のケアを担当する遥は、保険医として生徒の肉体面をケアする安宿と、「プライベートでも友人」とまでは行かなくても結構親しく話をする間柄だった。
「小野先生も論文発表を聞きに来られたんですか？　余り関心がないようなことを仰っていた気がしますけど」
口調次第では嫌みにも辛辣にも聞こえる台詞だが、安宿のおっとりした語り口で言われると、自分でも「そんなこと言ったかなぁ？」という気持ちになってくるから不思議だ。
自分より余程カウンセラーに向いている、と遥は安宿のお得なパーソナリティを少しばかり羨ましく思った。
「いえ、少し気になることがあって……それより安宿先生こそ、どうされたんです？」
その子の付き添いですか？」
遥の言うように、安宿は一人ではなかった。
制服こそ着ていないが、如何にも高校生といった雰囲気の少女を横に連れている。
何となく見た覚えがある顔だったが、少なくとも遥の担当する生徒ではない。
「ええ。平河さんに今日の発表会を見てみたい、と言われまして。彼女、実は病み上がりで体調が万全じゃないもので、こうして付き添ってるんですよ」
それだけ聞けば異例のＶＩＰ待遇だが、平河という苗字で遥はピンと来た。
今回立て続けに起こった情報窃取未遂事件に遥はタッチしていないが、公安の所属部署に報告書を上げなければならない関係でアウトラインは把握していた。
同じ高校生の活躍を見せて刺激を与え、目標を持たせることで更正を図るという対処法は、心理学の側から見ても合理的だ。
「そうですか。ご苦労様です」

遥は素直に、安宿へ労いの言葉を掛けた。

◇◆◇◆◇◆◇

少し寄り道はあったが、遥は予定通り喫茶室でだらけていた。
コーヒー一杯で二十分というのは、店にとって余り良い客とは言えまい。
このまま時間を潰して済めば今日は楽な仕事だった、と言えたところだが、流石にそこまで世の中は甘くなかった。
寧ろ、世間の風（？）は彼女に厳しかった。
「少しよろしいかしら？」
突然掛けられた声に、遥の心臓は一瞬停止した。
それを補うように、彼女の心臓はフル回転を始めていた。
――言うまでもなくどちらも錯覚だが、それ程彼女は驚き、鼓動も呼吸も乱れていた。
遥に声を掛けたのは、藤林だった。
「え……え、どうぞ」
「ありがとう」
品の良い仕草で腰を下ろし、すぐにやって来たウエイトレスへ穏やかな声で紅茶を注文する。
藤林の落ち着いた佇まいとは対照的に、遥は焦りの色を隠せずにいた。
それも、無理はない。
自分が監視していたはずの相手から、不意をついて声を掛けられたのだから。
相手の意図が全く予測できない所為で、遥は自分から口火を切ることも出来ず、ウエイトレスが運んできた紅茶に藤林が唇をつけてホウッ、と息を吐き出すまで、ただ向かいの席を見詰めることしかできなかった。
「……そんなに見詰められると流石に気恥ずかしいんですけど」

そう指摘されるまで、自分が相手のことを凝視していたのだと気付かない程、遥は動転していた。
「す、すみません」
羞恥心が動揺を益々増幅した、が、次の藤林の一言で、遥の心はスッと冷却された。
「いえ、『ミズ・ファントム』に関心を持って貰えるのは光栄なことだと思いますので」
「……私如き者のことを『エレクトロン・ソーサリス』がご存知とは思いませんでした。こちらこそ光栄に思いますわ」
いつもより余所余所しい口調になってしまったが、その程度の変調は致し方のないところだろう。
藤林が口にした異称――「ミズ・ファントム」は藤林の二つ名である「エレクトロン・ソーサリス」のように広く知られたものではない。非合法の諜報活動に手を染めている者の間だけで囁かれる、正体不明の女スパイに対するコードネームだ。
自分がミズ・ファントムだと特定されたという一事のみで、遥にとっては決死の覚悟を決めるに足る。
それだけの重さがある秘密をサラリと口にした、それが逆に、彼女の「用件」の深刻さを思い至らせる。
「それで、どのようなお話なのでしょうか」
動揺の代わりに覚悟が浮き出た遥の表情を見て、藤林が満足げに微笑んだ。
「これ以上申し上げなくてもお分かり頂けたのではございません？」
「……すみません、私は貴女のように優秀ではなかったものですから」
実は、藤林の言うように、遥には相手の要求が正確に予測出来ていた。
ただそれを自分から口にするのは、「分かった」と頷くに――白旗を揚げるに等しかった。
「ご謙遜ですね。

大学も研修所も優秀な成績でご卒業されていますのに。
九重先生も高く評価していらっしゃいましたよ」
遥は心の中で舌打ちした。
藤林家は古式魔法の名家。ならば同じ古式魔法の権威である九重八雲と親交があっても不思議はない。
一方、遥が藤林に目をつけたのは、今日、ついさっきのことだ。
用意したカードで、完全に上手を行かれている。
「……何も無理なお願いをするつもりはないんです」
これは、藤林の譲歩ではない。
自分の方が優位に立っていることを誇示する心理作戦だ。
「ただ、お互いの領分を守りましょう、と提案しているだけなんですよ」
具体的なことは何一つ言わず、しかし誤解の余地のない要求を突きつけてくる。
遥は自分が完全に追い詰められている、と認めざるを得なかった。
「……仰っている意味が良く分かりませんが」
「ハッキリ申し上げてもよろしいのですか？」
奥歯を噛み締めた遥を、藤林は涼しい顔で見ている。
この女狐！　と睨み付けてみても、今の遥では負け犬の遠吠えにしかならない。
「大丈夫ですよ。
貴女にお咎めが来ることはありませんから」
その意味するところは、既に上へ手が回っていると言うこと。
軽やかに立ち上がった藤林の手には、遥の分の伝票まで握られていた。
テーブルでも会計が可能なのに、わざわざレジで支払うというのがまた嫌味だ。
遥と藤林の第一回戦は、遥の完敗で終わった。
（……でも、収穫がなかった訳じゃないんだからね！）
少なくとも、司波達也と藤林響子の間には秘密にしなければなら

ない関係があるということ。
それだけはハッキリした。
遥は自分が意固地になっていると自覚しながらも、心の中で雪辱を誓った。

3－（13）　嵐の予兆（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

3－（13）　嵐の予兆

本日の主役である鈴音が会場に到着したのは、予定より一時間早い十一時過ぎだった。

四番目の発表校がプレゼンテーションを開始した直後。達也は控え室で鈴音、真由美、摩利の三人を出迎えた。

「早く来ちゃった」

貴女(あんた)いったい何歳(いくつ)だよ？　と訊いてみたくなる真由美の第一声に、何と応えたものか、達也は考え込んでしまった。

「どうしたの？」

「いえ……予定を繰り上げたのは、何か理由があったんですか？」

摩利も鈴音も平気な顔をしているのに、自分だけ疲れていては負けだろう、と我が身に活を入れた達也は、取り敢えずどうでもいい質問から態勢を立て直すことにした。（なお深雪は、完全に三猿を決め込んでいる）

遅刻されるのは大問題だが、早く来る分には全く支障がない。

機材置き場として提供されている控え室は十分な広さを持っていたし、達也たち兄妹以外にもこの期に及んで回路を弄り回している職人肌の上級生が何人もゴソゴソとやっている状況だ。女子生徒が三人増えたくらいで邪魔に感じたりはしない。

「予定より早く尋問が終わったものでね」

しかし、どうでもよかったはずの質問は、聞き流すことの出来ない答えで報われることになった。

「尋問ですか？　わざわざ今日？」

誰の尋問かは聞かなくても分かっている。

彼は関本を捕まえた現場にいたのだし、一度、事情聴取にも立ち会っている。

しかし、一度だけだ。

達也が立ち会ったのが一度だけ、なのではなく、生徒会、風紀委

員会の手で関本を尋問できたのが一度だけなのである。
　生徒が生徒を牢屋に入れられるはずも無く、だからと言って魔法絡みである以上、学生の単なる非行と片付けることも許されず、関本の身柄は保護司預かりの観察処分となっていた。そうと決まれば、司法権を持たない高校生に事情聴取を強制することなど、本来は出来ない。
　だが保護司と言っても、相手が魔法の素質を持つ未成年の場合は師族会議に人選が委任される。重大な問題を起こした未成年の魔法師は、事実上十師族の管理下に置かれることになる。
　関本の保護司に選ばれたのは、七草家の息がかかった魔法師だった。
　このコネを使って、関本から事件の背景を直接聞き出そうと摩利が画策していたのを、達也は知っていた。
「本当は昨日までに済ませたかったんだがね……」
「なかなか根回しが終わらなくて……師族会議の正式議題に出来れば簡単だったんだけど」
　要するに、七草派と四葉派の間で色々駆け引きがあって、一週間も掛かってしまったということか……このあたりは魔法師も非魔法師も変わらないな、
　と、それを聞いて達也は思った。本当は、色々な意味で、他人事の様に論評できる立場ではないのだが。
「しかし何故今日に？　それならば明日でも良かったような気がしますが」
「君らしくない楽観論だな」
　達也は当たり前の疑問を呈したつもりだったが、何故か真面目に窘められてしまった。
「関本や平河の妹の狙いは、論文コンペの資料だ。ならばコンペ当日の今日、背後組織が新たな行動を起こす可能性は決して小さくない」
「はぁ。可能性としては有りでしょうね」

その程度のことは達也も予想している。しかし今朝背後組織に関する情報を掴んだからといって、追加の対抗措置をとるには時間が足りない。緊急対応は予め緊急事態に備えて配備された部隊で賄うしかないのであって、声を掛ければすぐに兵隊が動員出来るなんて、絶対王政期の常備軍でも無理な話なのだ。

会場警備に関していえば、克人を筆頭にして出来る限りの緊急時即応体制が組まれている。関本が具体的な襲撃計画を知らされてでもいない限り、今日彼を尋問する優先度は決して高くない。

しかし、それを指摘するのは達也の仕事ではなかった。

「そうだ。確かに可能性だが、無視は出来ない。情報は多ければ多いほど良い」

今日の場合、活用できない情報よりも鈴音のコンディションの方が優先順位は高いのだが、それも既に事が終わってしまった今、わざわざ指摘することではなかった。

「なるほど。

それで何か分かりましたか？」

「ああ。

関本はマインドコントロールを受けていた形跡がある」

「……本格的ですね」

ただ、実質的な有用性は別にして、この情報には達也も驚きを禁じ得なかった。

「メンタルチェックには引っ掛からなかったんですか？」

春の紗耶香の一件以来、一高の生徒には定期的なメンタルチェックが義務付けられている。

将来、治安・国防の主軸を担う魔法師が、洗脳されて外国の手先になっていました、では洒落にならない。あの事件は学校上層部、更にその背後にいる政府機関にとって、「生徒のプライバシー」という言葉を棚上げする程度には性質（たち）の悪い悪夢だったのだ。

また新たなマインドコントロールの被害者が発見されたとなれば、その措置も過剰でなかったということになるが、逆に何の為のメン

タルチェックだ、という気持ちにもなる。
「メンタルチェックは毎月月初。関本はその後、コントロールを受けた可能性が高い」
「凄腕ですね……薬物ですか？」
「そこまでは分からんよ。
あたしも真由美も、その方面の専門家じゃないからな」
「MCの可能性がある、ってことも保護司の方に教えてもらったことだからね」
「その方は何と？」
「意識のかなり深い階層で刷り込みを受けている可能性が高いそうよ。
もしかしたら本物の『邪眼』かもしれない、って」
「先天的な系統外魔法の遣い手ですか……」
新ソ連が開発した光波振動系魔法の「邪眼」と違い、先天的に精神干渉の系統外魔法を身につけている魔法師の中には、人格を丸ごと書き換える能力の持ち主もいると言われている。
そういう「本物の邪眼」の持ち主であれば、短期間で本人も周りも気づかない行動原理の改竄を行うことが可能かもしれない。
「まあ、いくら強力な精神干渉魔法であっても、被術者に掛けられる下地が無ければそう上手く行くものじゃないらしいんだけどね」
このあたりは催眠術と同じだ。
人間の意思は、脆弱なようで意外に強固なもの。指向性の定かでない感情や衝動に干渉するならともかく、確固たる行動原理に干渉するとなれば魔法――精神による精神への働き掛けだけでは難しい。
「関本は元々、国家が魔法を秘密裏に管理するという体制に不満を唱えていた。世界中で魔法式と起動式に関する知識が共有されてこそ、魔法にも真の進歩があるという、所謂オープンソース主義者だな」
「学問的には間違っていないけど、国と国との対立が厳然と存在する現実を見れば正しいとも言えないわね」

「間違っている、と言うべきでしょう」
「……厳しいわね、達也くん」
「……とにかく、関本はそういう理想主義的なところを突かれたようだな。
魔法後進国に優れた研究成果を伝道するのが魔法先進国の義務だ、と強く思い込んでいる」
「後進国というのは、具体的に何処です？」
「それは訊き出せなかった。
本人にも分かっていないようだ」
「……つまり、意識にロックが掛かっていると」
なるほど、それでマインドコントロールと分かったのか、と達也は推察した。
「そういう訳で、事態は予想以上に深刻だ」
「想像以上に性質の悪い相手だった、と言うべきかも。
リンちゃんには引き続き私たちがついているから、会場に目を光らせておいて、って、はんぞーくんには伝えてあるわ。
達也くんも本当に、気をつけてね」
「気をつけます」
藤林のアドバイスで気を抜くつもりなど欠片も無くなっていた達也だったが、折角の好意、素直に頷いておいた。

達也たちが穏やかならぬ会話を交わしている間、鈴音は平静な態度をまるで崩さず原稿を読み直していた。

◇◆◇◆◇◆◇

真由美から仕事内容の変更指示を受けた服部は、その事と、合わせて聞かされた尋問結果について報告する為に、桐原を伴って克人の元を訪れていた。（なお紗耶香はエリカと一緒に食事へ行かせてある）

「了解した。服部と桐原は二人一組で会場外周の監視に回ってくれ」
「分かりました！」
ちょうど食事中だった克人は二人にも同席するように指示し、簡単に摘める様に作らせたサンドイッチを齧りながら服部の報告に最後まで耳を傾けた後、一瞬の迷いも見せず新たな任務を授けた。
いつもならばそれで終わりだ。
克人が下級生に意見を求めることは滅多に無い。
「服部、桐原。現在の状況について、違和感を覚えた点は無いか」
だが今日はその、滅多にない例外が克人の口から発せられた。
「違和感、ですか？」
桐原が服部に顔を向け、服部が少し迷って口を開いた。
「……横浜という都市の性格を考慮しても、外国人の数が少し多過ぎる気がします」
横浜育ちで土地勘があるという訳でもないが、何事にも真面目な服部は、今日の警備に備えて先週、先々週と会場近辺を下見に来ている。
その時に比べて今日は、明らかに外国人の姿が増えていると服部は感じていた。
「服部もそう思うか」
「はい。十文字先輩もそう御考えですか？」
「うむ。
桐原はどうだ」
「申し訳ありません。外国人の件については、気がついておりませんでした。
ただ……」
「遠慮は要らん」
「はっ。
ただ、会場内よりも街中の空気が、妙に殺気立っているように思われます」
「ふむ……確かに」

頷いたきり、考え込んでいた時間は十秒に満たなかったが、服部と桐原の二人には克人が十分以上も黙り込んでいたように感じられた。

それほど重い沈黙だった。

「服部、桐原。

午後の見回りから、防弾チョッキを着用しろ」

二人は大きく目を見開いて、克人の顔を凝視した。

余り礼儀に適った態度とは言えないが、克人は気に留めた様子も無く、近距離無線のハンドセットを手に取った。

彼の口から、二人に対するものと同じ指示が、共同自警団の全員に伝えられた。

◇◆◇◆◇◆◇

午後のプレゼンテーションは十二時半から予定通り始まった。

一高の出番は二時半。午後の部が始まれば二時間しかない。

午前中は交替で見張りに残っていた達也と五十里も、細かな手順の最終打ち合わせに入っていた。

お互い、付き添いは一人ずつ。

達也には深雪、五十里には花音。

午前中ゴソゴソやっていた「職人さん」達の姿も今は無い。

真由美と摩利も、鈴音の邪魔をしないようドアの側(そば)へ移動していた。

そこへ、控え目なノックの音。

真由美がそっと扉を開けると、そこには彼女より更に背が低い、彼女の後任の少女が立っていた。

「あら、あーちゃん。

席を外して良いの？」

真由美が小声でこう訊ねたのは、あずさが審査員に任命されているからだ。

全国高校生魔法学論文コンペティションには、会場審査員という制度はない。

発表毎に客席が大きく入れ替わるのだから、そもそも観客に審査をさせるというのは無理なのである。

その代わり、という訳でもないだろうが、実質魔法科高校九校の対抗戦という性格を持つ論文コンペでは、各校から一人ずつ生徒審査員を出して自分の学校以外の発表に点数を付けることになっている。

この審査員には、各校とも慣例的に生徒会長を出す。

一高もこの慣例に従い、あずさが朝から審査員を務めているのである。

「午後の一組目が早めに終わったんで、皆さんの様子を見に来たんです」

「応援に来てくれたんですか。ありがとうございます、中条さん」

「あっ、いえ、……すみません、鈴音さん。お邪魔ではありませんでしたか」

小声で話していたにも関わらず、部屋の奥から鈴音に声を掛けられて、あずさは小柄な身体を一層小さくした。（無論、雰囲気的な意味で）

「今のところ何処が有望なの？」

五十里も顔を向けて会話に加わる。あずさが入って来た直後に打ち合わせは中断していたので、五十里が達也を蔑ろにした、という訳ではない。――もしそんなことになれば、控え室内にブリザードが吹き荒れたかもしれないところだ。

「やっぱり、四高ですね。今年も随分凝った仕掛けを作って来ました」

あずさの評価に、五十里が軽く首を傾げた。

「少し奇を衒いすぎていた気もするけど？」

四高の発表順位は午前の二番目。

五十里が注目していた学校というのは、実は四高のことだった。

「でもやっぱり、あれだけ複雑な魔法の組合せを破綻無く一つのシステムに纏め上げるというのは凄いですよ。
……っと、すみません、そろそろ次の発表が始まるので。
皆さん、頑張ってください」
最後の最後で何をしに来たのか忘れなかったあたりは、あずさも生徒会長が身に付いてきた、のかもしれなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

客席にはいつものメンバーが一塊に座っていた。
ランチタイムから合流したほのかと雫も、得物を持ち込んでヤる気満々のエリカとレオも、客席で大人しく達也たちの出番を待っている。
「幹比古……どうよ？」
だが全員が大人しく、ただ待っていた訳ではなかった。
「今のところ、異常なし」
小声で囁き掛けられた幹比古は、探査用に放った精霊の感覚に同調して得られた情報をレオに答えた。
「美月？」
「まだ変なものは見えないよ」
エリカの短い問い掛けに、美月は首を横に振った。
美月は外していたメガネを一旦掛け直した。
彼らは客席にいながら、来るかどうかも定かでない「敵」の襲来に備えていた。

◇◆◇◆◇◆◇

藤林に釘を刺されて公安の仕事が続行不可能となった遥は、そのまま帰っても良いけどこのまま帰るのは尻尾を巻いて逃げるみたいで癪、という心境で、ロビーの片隅に座り何となく人の流れを観察

していた。
「小野先生」
そこへ、背中から掛けられた声。
「甘楽先生？」
振り返った先には、一高代表チームの引率教師（であるはず）の甘楽が、手持ち無沙汰という風情で立っていた。
「こんなところでどうしたんですか？」
「いえ、特にどうということは……ただ一休みしているだけですが、甘楽先生こそこんな所にいらしてよろしいんですか？」
遥の問い掛けに、甘楽は複雑な笑みを浮かべた。
「小生の出る幕はありませんよ。今回の代表チームは優秀です」
この人、自分のことを「小生」って言うんだ……と、そんなことを考えながら、「優秀」のくだりで遥は無意識に頷いていた。
「それに……何だか嫌な予感がするのですよ」
何だか、と言いながらあやふやなところが無い口調に、遥は緊張を覚えた。
甘楽はこの若さにして魔法大学助教授の地位に手を掛けた魔法研究者であり魔法師だ。
彼の専攻は魔法幾何学、その中でも多面体理論と呼ばれる分野の研究で知られている。
マクロ現象を三角錐や四角柱などの単純な多面体の集合として捉え、仮想多面体の運動で現象の変動を把握し、仮想多面体の運動を操作する魔法式を組むことで事象を改変するという現代魔法の理論的アプローチの一つ。
事象の部分的改変が困難という現代魔法の欠点を克服することを出発点とした多面体理論は、寧ろ未来予測の技術として重視されるようになっている。
世界を単純な立体の集合として捉える認識システムは、無限の相互作用が織り成す世界を、相互に作用する単純な多面体に抽象化して術者に示す。抽象化されモデル化された世界認識は、限られた情

報から未来の事象をシミュレートすることを容易にする。
多面体理論の若き権威である廿楽の「予感」は、ある程度の確度を持つ「予報」であるかもしれないのだ……
「……最悪の事態にはならないような予感もあるのですけどね」
取り繕うように付け足された一言が、気休めで無ければ良いと、遥は切に願った。

◇◆◇◆◇◆◇

そして、時刻は午後二時半。
第一高校代表チームのプレゼンテーションは、予定通りに始まった。
鈴音の、抑制が効いた濁りの無いアルトが、国際会議場の音響設備から淀みなく流れ出す。
五十里は彼女の隣でデモンストレーション機器を操作し、達也は舞台袖でＣＡＤのモニターと起動式の切替を行う。
「……核融合発電の実用化に何が必要となるか。この点については、前世紀より明らかにされています」
鈴音が巨大なガラス球の隣に立った。
達也が放出系魔法の起動式を指定した。
鈴音がＣＡＤのアクセスパネルに手を置いた瞬間、ガラス球に封入された重水素ガスがプラズマ化し、ガラスの内側に塗られた塗料に反応して煌びやかな閃光を放つ。
その派手な演出に、客席が小さく沸いた。
「一つは、燃料となる重水素をプラズマ化し、反応に必要な時間、その状態を保つこと。
この問題は放出系魔法によって既に解決されています」
ただこの光景は過去に何度も実演されたものであり、目新しさの点ではアピール力の乏しいものだった。
「核融合発電を阻む主たる問題は、プラズマ化された原子核の電気（クーロン）

的斥力に逆らって融合反応が起こる時間、原子核同士を接触させることにあります」

閃光を放っていた球体が沈黙し、巨大なスクリーンが舞台中央に降りて来る。

「非魔法技術により核融合を実用化しようとした先人たちは、強い圧力を加えることによって電気的斥力に打ち勝とうと試みてきました」

スクリーンに今世紀前半まで繰り返された実験の映像とそのシミュレーション動画が分割表示された。

「しかし、超高温による気体圧力の増大も、表面物質の気化を利用した爆縮の圧力も、安定的な核融合反応を実現するには至りませんでした。

そこには様々な理由があります。

例えば格納容器の耐久性の問題、例えば燃料の補充の問題。

核融合の維持自体には成功しても、生み出されたエネルギーが大き過ぎて実用化が出来ないという例もありました。

しかし全ての問題は、取り出そうとするエネルギーに対して融合可能距離における電気的斥力が大き過ぎるという点に収束します」

スクリーンが上がる。

その後ろには、巨大な円筒形の電磁石が二つ、それぞれ四本のロープで向かい合わせに吊るされた、一見原始的な実験機器が置かれていた。

五十里が一方の円筒を引き上げ、手を放す。

勢い良くスイングした電磁石が衝突する前に、対面の電磁石は反対側へ振り上がった。

「改めて説明するまでもないことですが、電気的斥力は相互の距離が接近すると、幾何級数的に増大します。強い同極のクーロン力を持つ物体は、接近することでその斥力を増大させ、衝突することはありません」

鈴音は無音でスイングを繰り返す実験機器の側に立ち、耳を保護

するヘッドセットを被って、支柱に設えられたアクセスパネルに手を置いた。

その途端、メガサイズのシンバルが連続で打ち鳴らされているかのような轟音が、会場に木霊した。

鈴音が手を下すと、二つの電磁石は再び無音の弾き合いに戻った。

「しかし、電気的斥力は魔法によって低減することが可能です。

今回私たちは、限定された空間内における見かけ上のクーロン力を十万分の一に低下させる魔法式の開発に成功しました」

鈴音は特に声を張り上げた訳ではない。

だが彼女の言葉に、会場は大きくどよめいた。

そのどよめきを突くようにして、メインのデモ機が舞台下から舞台中央へせり上がって来た。

それは言うなれば、透明の素材で作られた巨大なピストンエンジン。

透明な巨大円筒に、鏡面加工されたピストンが下から差し込まれ、そのピストンはクランクとはずみ車につながっている。

円筒の上部には二つのバルブ。

そこから伸びた透明の管が、水を湛えた水槽の中を突っ切っている。

「……円筒内に充填した重水素ガスを放出系魔法によってプラズマ化し、重力制御魔法とクーロン力制御魔法を同時に発動します。

クーロン力制御魔法によって斥力の低下した重水素のプラズマは重力制御魔法によって円筒中央に集められ、核融合反応が発生します。

この装置で核融合反応に必要な時間は０．１秒。

皆さんご存知の通り、核融合反応が自律的に継続することはありません。

外部から反応を生じさせる作用を加えなければ、すぐに反応は停止してしまいます。

当校の重力制御核融合機関は、この性質を積極的に利用します。

核融合反応停止後、重水素ガスを振動系魔法で容器が耐えられる温度まで冷却します。この時に回収した熱量は、重力制御とクーロン力制御のエネルギーに充当されます。

重力制御魔法によって発生した重力場に引き寄せられたピストンは慣性で上昇を続け、適温に冷却された重水素ガスを熱交換用の水槽へ送り込みます……」

鈴音の解説が続く中、五十里が実験機のアクセスパネルに手を置いた。

プラズマ化、クーロン力制御、重力制御、冷却、エネルギー回収、プラズマ化、クーロン力制御、重力制御……という、何十回とループする魔法を、五十里は安定的に発動する。

「……現時点では、この実験機を動かし続ける為に高ランクの魔法師が必要ですが、エネルギー回収効率の向上と設置型魔法による代替で、いずれは点火に魔法師を必要とするだけの、常駐型重力制御魔法式核融合炉が実現できると確信します」

鈴音がこう締め括ると同時に、会場は割れんばかりの拍手に包まれた。

◇◆◇◆◇◆◇

論文コンペの発表時間は三十分、交代時間は十分。

その十分間で前の組はデモ装置を片付け、次の組は舞台のセッティングを終わらせなければならない。

発表より寧ろこの入れ替えの際に、各校の代表とサポーターは非常に忙しい思いをすることになる。

達也が発表に使ったコンソールを片付けている最中、次のチームのコントローラー（つまり達也と同じ役目をするアシスタント）がコンソールのセッティングにやって来た。

「やってくれたね。

見事だった、と言わせて貰うよ」

最初達也は、それが自分に話し掛けている台詞だと分からなかった。
無駄話をする時間など無いはずだからだ。
だが声の方向からどうやら自分が話し掛けられた、と判断して顔を上げると、吉祥寺真紅郎が不敵な笑みを浮かべて立っていた。
「ありがとう、と言うべきかな？」
「いや、別にお礼を期待した訳じゃないよ」
パタン、とケースに蓋をして卓上シンセサイザーとほぼ同じ大きさのコンソールを抱え上げると、吉祥寺がわざわざ同じ場所にコンソールのケースを置いた。
舞台の両脇にコネクターが設けられているので普通は左右を交互に使うのだが、達也と同じサイドで無ければならない理由が何かあるのだろうか。
「重力制御術式は飛行魔法にも使われている一般的な術式の応用、クーロン力制御術式は先代のシリウス、故ウィリアム＝シリウスが開発した分子結合力中和術式のアレンジ版。
それよりあのループ・キャストの洗練度に驚かされたよ」
「ご慧眼、畏れ入るな。流石はカーディナル・ジョージだ」
達也と会話しながらも、吉祥寺の手はスムーズにセッティングを進めている。
舞台の上に残っている一高生は既に達也だけだ。
彼も舞台から撤収しようと、縦長のケースをぶら下げて舞台裏へ歩き出した。
「でも、僕たちも負けないよ。
いや、今度こそ君に勝つ」
その背中に投げつけられた声。
稚気と評するべきだろうが、悪い気はしない。
何か気の利いた台詞でも返してやろうか、と達也が足を止め振り返ったその時。
轟音と振動が、会場を揺るがした。

3一（14）　嵐の襲来（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

3―（14）　嵐の襲来

現地時間、西暦二〇九五年十月三十日午後三時。
後世において人類史の転換点と評される「灼熱のハロウィン」。
その発端となった「横浜事変」は、この時刻に発生したと記録されている。

◇◆◇◆◇◆◇

一高の発表が終わり、ロビーで藤林と世間話をしていた――朝から一緒で、最早世間話くらいしか話題が残っていなかったのだ――千葉警部は、ピクッと眉を動かしてお喋りを中断した。
懐の通信専用端末（情報処理機能がほとんど搭載されていない代わりに強力な通信機能が備わった警察の装備）が振動で着信を伝えていた。
藤林に断りを入れ、背中を向けて通信に出る。
「千葉だ。稲垣か？
なにっ！？
……分かった。すぐそちらへ向かう」
千葉警部が身体の向きを戻すと、藤林もちょうど電話を終えたところのようだった。
「本官は現場に向かわなければなりません」
「私はここに残ります」
お互い、相手の受けた連絡が自分の受けたものと同じ内容だと、確認もしない内から確信して話を進めていたが、齟齬は生じていなかった。
「すみません！　何かあったら連絡して下さい！」
頷く藤林にそれ以上言葉を掛ける暇（いとま）もなく、千葉警部は自分の車

へ向かい飛ぶように走った。
魔法を併用した全力疾走。
――彼の足は、ある面から見れば、速過ぎた。

◇◆◇◆◇◆◇

「状況は！？」
通信を受けて三分後。
既に現場へ向け急行中の車の中で、車載のフリーハンド通信機に向かい、怒鳴りつけるような口調で千葉警部は追加情報を求めた。
『管制ビルに突っ込んだ自爆車両は炎上中。
追加の特攻はありません』
警部より幾分落ち着いた口調の報告がスピーカーから返って来る。
しかし単発だからといって、安心出来る内容ではなかった。
ターゲットになっているのは出入港管制ビル。
強固な構造材が爆発の熱と衝撃を撥ね返しビル自体に被害は無かったが、公務員であっても非戦闘員の職員を、テロが実行された中で働かせ続けることは出来ない。管制ビルの職員が退避中の時間、港湾警備隊への管制引継ぎが完了するまでの間、入港する船舶の監視に深刻な穴が生まれることになる。
（文民（シビリアン）に拘り過ぎだ！）
防衛軍や警察等の、制服組の勢力拡大（オーバープレゼンス）を嫌った政治家の抵抗で港湾管理、空港管理には一般の公務員が当てられているが、島国の港管理はそのまま国境警備なのだ。防衛軍に任せるのが嫌なら、せめて武装警察を当てるべきだと千葉警部を含め、千葉家は前々から主張していた。
今回、懸念的中とならなければ良いが、と警部は考えていたが、意識の醒めた部分で、それが儚い願望でしかないと理解していた。
『停泊中の貨物船よりロケット弾が発射されました！
歩兵用ランチャーを使用した模様です！』

危うく操作を誤りかけたハンドルを慌てて切り返し、千葉はマイクに怒鳴った。
「船籍は！？」
『登録はオーストラリア船籍の貨物船！
ですがこれは、形状から見て、機動部隊の揚陸艦と思われます！』
登録は偽装という訳だ。
入管も沿岸防衛も何をやっているんだ！　と喚き散らしたい気持ちをグッと抑え、千葉警部は通信先を切り換えた。
「……親父か？　寿和だ。
現在横浜山下埠頭にて国籍不明の偽装戦闘艦が侵攻中。
国防軍に出動要請を頼む。
それから、雷丸（イカヅチマル）と大蛇丸（オロチマル）を至急届けさせてくれ。
……大蛇丸をどうするって？　エリカに使わせるに決まってるじゃないか！」

◇◆◇◆◇◆◇

時計の針は午後三時七分を指していた。
突如会場内に届いた爆音と振動。
それは独立魔装大隊の訓練中、何度も耳にし体験したもの。
その経験から、情報体次元（イデア）にアクセスしなくても、それが正面出入口で生じたものだと達也には分かった。
「深雪！」
ぶら下げていた荷物から手を離し、達也は彼にとって最も優先すべき者の名前を呼んだ。
「お兄様！」
応えをステージ下に聞き、達也は二歩で――最初の一歩でステージの端まで跳び、次の一歩で勢いを調節して――妹の傍へ降り立った。
二列目の関係者席にいたとはいえ、すぐに達也の元へ駆けつけよ

うとした深雪の反応も素早いものだった。
「お兄様、これは一体」
ぎこちない口調でそう訊ねる深雪。
軽く惑乱気味ではあったが、パニックには至っていないようだ。
「正面出入口付近で擲弾（グレネード）が爆発したのだろう」
一方の達也には、戸惑いも焦りも見られない。
深雪と即座に合流できた今の状況は、彼にとって悪いものではなかった。
「グレネード！？　先輩方は大丈夫でしょうか」
「正面は協会が手配した正規の警備員が担当していたはずだ。
実戦魔法師も警備に加わっている。
通常の犯罪組織レベルなら問題ないはずだが……」
達也はそう答えながらも、悪い予感がしていた。
先程、藤林から渡されたデータカード。
そこには外国の国家機関関与の可能性が記されていた。
まるでその悪い予感を裏付けるように、今度は複数の銃声が聞こえた。
（フルオートじゃない……対魔法師用のハイパワーライフルか！）
実戦魔法師の魔法には、銃器を無効化するものがある。
例えば十文字家の多重障壁魔法は、その典型・最高峰の一つに挙げられる。
二十一世紀末になっても歩兵の主武装（メイン・ウェポン）は銃器。故に銃弾を防ぐ魔法は地上戦において大きなアドバンテージをもたらすことになる。
だが攻撃と防御は常にいたちごっこを演じて発展していくものであり、強力な防御手段に対してより強力な攻撃手段が開発されるものだ。
魔法もまた例外ではなく、魔法もまた万能ではない。
魔法の干渉力より運動体の慣性力が強ければ、魔法は失敗して減速も軌道変更も座標固定も全く効果を生じなくなる。
物理的な楯ならば貫かれても威力を弱めることが出来るが、魔法

は事象改変に失敗すれば最初から何もしなかったのと結果は同じ。
魔法師の防御魔法を無効化する高い慣性力を生み出す高速銃弾。
それが対魔法師用ハイパワーライフルの設計思想だ。
だが実戦レベルにある魔法師の干渉力を無効化する弾速を得る為には、通常の銃器製造技術より二段階も三段階も上の高度技術が必要となる。
小国の正規軍程度では手に入らない武器だ。
私的な――国家の支援を受けていないという意味で――犯罪組織やテロリストのレベルで、手に入れられるものではない。
達也は迷った。
このホールは、籠城に向いているとは言えない。
本来であれば、深雪を連れて控え室に避難すべきだ。
だが客席にはまだ、エリカや美月が残っている。
彼が責任を有する相手は深雪だけだが、彼も義務感だけで行動している訳ではない。
別に守ってやらなくても大抵のことなら自力で切り抜ける力量があるはずだが、だからといって知らん顔をするには抵抗があった。
しかし、幸いにしてか不幸にしてか、それ程長く悩む必要はなかった。
荒々しい靴音と共に、アサルトライフルを構えた集団が客席に雪崩れ込んで来たのだ。
（だらしない……！）
もしかしたら、とは思っていたが、それにしても突破されるのが早過ぎる。
悲鳴が幾重にも木霊する中、達也は心の中で忌々しげに舌打ちした。
最も素早い反応を見せたのはステージ上の三高生徒だった。
プレゼンのテーマが対人攻撃に転用可能なものだったのか、舞台上に携行していたＣＡＤを操作し、侵入者に魔法を発動しようとする。

銃声が、轟いた。
三高の魔法が効果を現すより早く、銃弾がステージの後壁に食い込んだ。
その弾の威力から見て、彼らが手にしているのは達也の予想通りハイパワーライフル。
「おとなしくしろっ」
その怒声は、何処か辿々(たどたど)しさを感じさせた。
外国人であるとしても、（密）入国したのはつい最近のことだろう。
いずれにせよ、この連中が単なるチンピラでないことは確実だ。
現代魔法はＣＡＤによる高速化で銃器と対等のスピードを手に入れた、と言っても、それはあくまで「対等」であり「魔法師の力量次第」なのであって、相手が既に銃を構えている状態では無闇に抵抗しないのがセオリーだ。
「デバイスを外して床に置け」
侵入者は魔法師相手の戦闘に慣れている様子だった。
もしかしたら彼らも魔法師なのかもしれない。
ごく一部の強力な魔法師だけが、魔法だけで戦うというスタイルをとっているのであって、魔法師であっても銃を使う兵士は、寧ろ一般的な存在だ。
ステージの上では吉祥寺を含めた三高の生徒たち――その中に将輝の姿はなかった――が、口惜しそうな顔でＣＡＤを床に置いている。
勇敢と無謀は別物だ。
三高生はそのことをキチンと教えられているらしい。
彼らの対応を感心しながら見ていた達也だったが、生憎すぐに、他人事では済まなくなった。
通路に立っていたのが偶々(たまたま)彼ら兄妹だけだった所為で、目についたのだろう。
「おい、オマエもだ」

侵入者の一人が銃口を向けたまま慎重な足取りで近寄って来る。
今の言葉が達也に掛けられたのは間違いない。と言うか、誤解のしようがない。
（ここまでかな……）
達也は近づいてくるテロリストだかゲリラ兵だかを見ながら、心の中でそう呟いた。
「早くしろっ」
苛立ちの混ざった怒声を浴びせられても、達也は動かない。
抵抗を放棄したからと言って身の安全が保証されると考えるには、彼は少々捻くれ過ぎた教育を受けて育っている。
達也は無言で、近づいてくる男を眺めた。
いや、彼の視線は「観察していた」と表現した方が適切だった。
彼の瞳には、恐怖も不安もない。
ただ男の全身を、手に持つ突撃銃（アサルトライフル）、突きつけられたその銃口を含めて、観察している。
自分に向けられた冷ややかな眼差しに、苛立ちと、そうと意識はしていなかっただろうが、正体不明の恐れを感じて、達也と相対するその男は、引き金に置いていた人差し指に力を入れた。
「おい、待て！」
仲間の制止は聞こえていなかっただろう。
銃声が轟き、悲鳴が続いた。
三メートルの至近距離から明確な殺意を以て放たれた弾丸は、避けようの無い悲劇を連想させるに十分だった。
だから余計に、人々の受けた衝撃は大きかった。
胸の前で何かを掴み取ったように握り込まれた右手。
達也に生じた変化は、ただそれだけだった。
彼の身体からは一滴の血も流れていない。
そして放たれたはずの銃弾は、壁にも床にも天井にも、どこにもその痕跡を残していない。
男は引きつった顔で二発目、三発目の銃弾を放った。

その都度、コマ落としのように達也の右手が位置を変えた。
その手の動きが速すぎて、第三者には彼が何をしているのか見えていない。
気がついたときには右手の位置が変わっており、その手は変わらず、何かを掴み取っているかの如く握り込まれている。
「……弾を、掴み取ったのか……？」
誰かが呆然と呟いた。
「……一体、どうやって……？」
誰かが呆然と、そう応じた。
「化け物め！」
その男が銃を投げ捨てたのは、パニックによるものだ。
魔法で銃弾を防ぎ止めるならともかく、手で掴み取るという非常識に直面して、銃が役に立たないと錯覚した結果だ。
それでも戦意を失わず、大型の戦闘ナイフ（コンバット・ナイフ）を抜き放ち達也に斬りかかってきたことが、この男が高いレベルで訓練された兵士であると物語っている。
しかしそれは、更なる驚愕を呼ぶ行為だった。
襲い掛かってきた男に向けて逆に間合いを詰めた達也は、握り込んでいた手を開き手刀の形に変えて、ナイフを持つ腕に打ち込んだ。
達也の手刀は、何の抵抗も受けず男の腕を斬り落とした。
「ぎゃっ」
男の口から悲鳴が迸る――逆り掛けた。
だが声が悲鳴に変わる前に、達也の左拳が男の鳩尾にめり込んだ。
右腕の断面から一際勢いよく鮮血が溢れ、達也の服を汚す。
それが男に出来た唯一の反撃（？）だった。
足下に崩れ落ちた男に一瞥もくれず、達也は軽く後ろ向きに跳んで、再び深雪を背中に庇った。
予想外の、想像もつかない光景に、観客も侵入者も等しく固まっ

た。
動きを止めただけでなく、思考までも止まっていた。
ただ一人の例外を除いて。
「お兄様、血糊を落としますので、少しそのままでお願いします」
静まり返ったホールに、深雪の小さな声は隅までとおった。
動揺の欠片もない声。
台詞を「埃を落とします」に変えても、何の違和感もない声音。
その声を合図にして、止まっていた時間が動き出した。
「取り押さえろ！」
舞台の両袖から自警団のメンバーが一斉に魔法を放った。
回避の反応を見せた侵入者もいたが、九校から選抜された手練の魔法に、一人残らず抵抗を封じられた。

◇◆◇◆◇◆◇

深雪の発動した魔法によって、達也の手と身体を汚していた血は綺麗に拭い取られた。（正確には皮膚と衣服から分離され水分が蒸発し固形分が飛散した）
命の遣り取りをしたばかりだというのに、達也は眉一つ動かす様子がない。
いや、「眉一つ動かさない」という表現は、この場合不正確か。
彼の顔に動揺も興奮も見られなかったのは確かだが、血だまりの中に倒れ伏す男を見て眉を顰めたのだから。
その僅かな表情の変化を見て取って、深雪が新たな魔法を発動した。
切り落とされた右手と残された右腕の断面が凍結し、血だまりが乾燥して赤黒い粉に変わる。
達也が振り返ると、深雪はニッコリ微笑んだ。
出来過ぎの妹に、達也も無意識に笑みを浮かべた。
深雪の瞳に、何故か（というのは達也の主観だ）動揺が走る。

しかしその事を深くは考えず、達也は正面入り口に向けて歩き出した。
そのすぐ後ろに深雪が続く。
片腕となった男の横をすり抜ける時にも、兄妹は完全に無関心だった。
そこへ、
「達也くん！」「達也！」
同時に彼を呼ぶ、少女と少年の声。
声が揃ってしまったことに、普段なら二人とも顔を顰めただろうが、今は流石にそんな余裕もないようだ。
エリカとレオに続いて、幹比古、美月、ほのか、雫も達也と深雪を囲むように集まった。
「手は！？　お怪我はありませんか！？」
真っ先に駆け寄って来たのはエリカとレオだが、二人を押し退けるようにして顔を出したほのかが、焦った口調でそう訊いてきた。
そう見えるように意識した演技だったので、ほのかが何を案じているのかすぐに分からない、ということは無い。
実際には掌で掴み取ったのでは無論なく、銃弾の本体と運動ベクトルを「分解」して銃撃を無力化しただけだが、そんなこととは当然知らない友人に向かって、達也は「大丈夫」と言うように、右手を掲げ上げて二回、三回と閉じたり開いたりして見せた。
それを見てほのかや美月は大きく胸を撫で下ろしていたが、幹比古や雫は「一体どうやって？」という眼差しを向けている。
だが達也は、訊かれていないことまで答えるつもりは無い（訊かれたことなら何でも答える、という訳でもないが）。彼が答えたのは、この質問に対してだった。
「それにしても随分と大事になってるけど……これからどうするの？」
嬉しそうだな、というツッコミが喉元まで出掛かったが、時間の浪費につながる可能性が大であった為、

「逃げ出すにしても追い出すにしても、まずは正面入り口の敵を片付けないとな」
当面の方針を伝えるに止めた。
「待ってろ、なんて言わないよね？」
目を輝かせたエリカに「やっぱり嬉しそうだな」と余程指摘してやりたかったが、実際には諦念を滲ませ首を振っただけだった。
「別行動して突撃されるよりマシか」
それは本当に「マシ」というレベルの消極的な同意でしかなかった。
だから、エリカやほのかばかりか、美月や雫まで喜色を顕したのを見て、達也は「勘弁してくれ……」と思わずにいられなかった。
とはいえ、今はとにかく緊急事態。落ち込んでる暇などありはしない。
達也は先頭に立って、足早に出入り口へ向かった。
「待って……チョッと待て、司波達也！」
だが彼らを、混乱を隠せず、そして何処か必死な声が呼び止めた。
「一体何だ、吉祥寺真紅郎」
愛想の欠片もない声で達也が訊き返す。
しかし、不機嫌丸出しの口調に怯んだ様子もなく、おそらく怯むだけの精神的な余裕が無く、吉祥寺は達也の問い掛けに質問で応じた。
「今のは『分子ディバイダー』じゃないのか！？
分子間結合分割魔法は、アメリカ軍魔法師部隊前隊長（スターズ）・ウィリアム＝シリウス少佐が編み出した秘術。分子間結合力を弱める中和術式と違って、分割術式の方はアメリカ軍の機密術式のはずだ！
それを何故使える！？　何故知ってるんだ！？」
「そんなことを言っている場合か」
目を剥き出しに糾弾の語調で繰り出される詰問を、達也は呆れ声で斬り捨てた。
ちなみに達也が使った魔法は「分子ディバイダー」と呼ばれるU

ＳＮＡ軍の機密魔法ではない。
無論のこと、某架空拳法のように素手で人体を斬り裂いた訳でもない。
銃弾を分解したのと同じように、右手を基点として相対距離ゼロで分解魔法を発動しただけだ。
しかし彼の立場として、そんなことを説明できるはずがないし、今の状況として、そんなことを説明している場合でもない。
「七草先輩、中条先輩も、この場を早く離れた方が良いですよ。そいつらの最終的な目的が何であれ、第一の目的は優れた魔法技能を持つ生徒の殺傷または拉致でしょうから」
様子を見に来たのだろう、ちょうど舞台袖から顔を出した真由美と、審査員として最前列に座っていたあずさにそう忠告を残して、達也はその場を後にした。

◇◆◇◆◇◆◇

達也たちの姿が扉の向こう側へ消えた直後、一際激しい爆発音が会場を揺るがした。
無秩序な叫び声と怒鳴り声が混沌と絡み合い、悲鳴とも怒号ともつかぬ唸りとなって、更に人々の神経を削る。
ただそのカオスも、あずさのいる最前列の審査員席までは波及していない。
まだ、届いていない。
しかし、このままでは間違いなく多数の負傷者が発生するパニックへと発展する騒動を前に、あずさはどうしたらいいのか、何をしたらいいのか分からず座ったまま硬直していた。
「あーちゃん、あーちゃん……中条あずさ生徒会長！」
そのあずさを、壇上から叱咤する声。
あずさは慌てて立ち上がり、ステージを振り仰いだ。
舞台の袖にいた真由美が、更にステージの前へ進み出て、あずさ

に視線と言葉を向けていた。
「このままだと本物のパニックになるわ。怪我人も大勢出ることになる。
だから貴女の力で、みんなを鎮めて」
「えっ！？」
真由美の言葉に、あずさの目が大きく見開かれた。
意味が分からなかった、のではない。
「でも、あれは……」
精神に干渉する魔法は、魔法の中でも特に厳しく規制されている。
未成年の判断で軽々しく使用できるものではない。
「貴女の力は、こういう時の為のものでしょう？
私の力でも摩利の力でも鈴音の力でもない、あずさ、今は貴女の力が必要なのよ」
しかし、真由美は軽い気持ちで指図しているのではない。
「リンちゃん」ではなく「鈴音」、「あーちゃん」ではなく「あずさ」。
形式を整える為に「市原さん」や「中条さん」と呼ばれることは普通にあったが、真由美が彼女のことを名前で呼んだのは、過去に片手の指で数えられる程のこと。
それだけで真由美が本気だということ、本気で彼女に情動干渉魔法「梓弓」の使用を求めているのだと、あずさには分かった。
「大丈夫。責任は私が取るから。
七草の名前は伊達じゃないのよ」
コミカルなウインクは、あずさをリラックスさせる為のもの。
その程度は理解できる付き合いだ。
しかし、その言葉に嘘も無いだろう。
真由美一人に責任を押し付けるつもりも無かったが、そこまで言われて知らん顔は出来ない。
あずさは力強く頷くと、身体を反転させ、所々で押し合い圧し合いに発展している客席を視界に収めた。

首に掛けたチェーンを手繰り、襟元から小学生の手に隠れる程の大きさのロケットを引っ張り出す。留め具を外してチェーンから引き抜いたそれを、あずさは左手で握り込んだ。

すーっと息を吸い込み、ロケットへサイオンを注ぎ込む。

このロケットはＣＡＤの基幹部品のみを組み込んだ、唯一つの魔法の為の術式補助デバイス。

一種類の起動式を記録し、一種類の起動式を出力する、ただそれだけの機能しか持たないが故に、ボタンもディスプレイも起動式の切り替えに必要な一切のシステムを省略し小型化した魔法の杖。

ただ一人の為の杖が唯一つの魔法の為の呪文を紡ぎ出し、

あずさだけが使える情動干渉魔法「梓弓」が発動した。

――澄んだ弦（つる）の音（ね）が、最前列から最後列まで、会場を走り抜けた。

それは幻聴。

空気ではなく、無意識の海を伝わった音。

思念子（サイオン）ではなく霊子（プシオン）を振るわせた波動。

澄み切った響きは、淀み濁った水しかない沼地で一滴（ひとしずく）の雨に出会った旅人が次の雨粒を待って足を止め呆然と空を見上げる様に、次の響きを人々に渇望させ、意識を唯それだけに縫い止めた。

最初の響きが完全に消えてしまったその時、次の響きが人々の無意識を振るわせる。

人々は更に強く、次の響きを待つ。

そうして何時しか人々は考えることを止め、ただ己の内側に耳を傾けていた。

時間にすれば、僅かに三秒。

それだけで、パニックは忘我に変わった。

「――私は第一高校前生徒会長、七草真由美です」

考えることを止めていた観客たちの意識は、スピーカーで増幅さ

れた真由美の声に余すところ無く吸い寄せられた。
「現在、この街は侵略を受けています」
全聴衆の意識を掌握した上で放たれた次の一言によって、呆然が、愕然に替わった。
「港に停泊中の偽装戦闘艦艇からロケット砲による攻撃が行われ、これに呼応して市中に潜伏していたゲリラ兵が蜂起した模様です」
俄には信じ難い話だった。
あずさも真由美から告げられたのでなければ、寧ろ信じなかっただろう。
だが、本人の言うとおり、「七草」の名は伊達ではない。
彼女はいち早く事実を知り得る立場にあり、いい加減な憶測を口に出来る立場ではない。
どんなに信じ難い話であっても、これは事実なのだ。
「先程捕縛した暴漢も侵略軍の仲間でしょう。
先程から聞こえている爆発音も、この会場に集まった魔法師と魔法技術を目当てとした襲撃の可能性が高いと思われます」
一旦、言葉を切って、真由美は観客席を見渡した。
聴衆は息を呑んで彼女の言葉を待っている。
「皆さんご存じのとおり、この会場は地下通路で駅のシェルターに繋がっています。
シェルターには十分な収容力があるはずです。
しかし、地下シェルターは災害と空襲に備えたものです。
陸上兵力に対しては、必ずしも万全のものではありません。
侵略軍は魔法師の部隊も投入していると推測されます。
魔法の攻撃に対して、シェルターがどの程度持ちこたえられるか、楽観は出来ません」
今、会場にいる人々のほとんどが、真由美のことを知っている。
そのルックスと、競技実績が、彼女の名前の意味を人々に知らしめている。
だからこそ彼女の語る悲観的な展望を「子供の言うこと」と笑い

飛ばせる者は、誰一人としていなかった。
「だからといって、砲火の飛び交う街中から脱出を図るのはもっと危険かもしれません。
しかし、最も危険なことは、この場に留まり続けることです」
しん、と会場が静まり返る。
真由美は無駄に間を取って時間を無駄にする愚は犯さなかった。
「各校の代表はすぐに生徒を集めて行動を開始してください！
シェルターに避難するにしろ、この場を脱出するにしろ、一刻も無駄に出来ない状況です！」
さっきとは異なる喧騒が会場に波及した。
呼び合う声は、先程と異なり、一定の秩序を帯びていた。
「九校関係者以外の方々は、申し訳ございませんが、各々ご自身の判断で避難なさって下さい。
残念ですが、私たちには皆さんの安全に責任を負うだけの力がありません」
その薄情とも見える発言に、反発や糾弾の声は起こらなかった。
この場に集う観客は、何らかの形で魔法に関わりのある者ばかり。
普通よりも「非日常」に近い者ばかりだった。
「シェルターに避難されるなら、すぐに地下通路へ。
脱出をお考えなら、沿岸防衛隊が瑞穂埠頭に輸送船を向かわせているという報告を受けています」
真由美は一礼し、マイクを切って、再びあずさに語りかけた。
「あーちゃん、みんなのことは任せたわよ」
「えっ？　会長、じゃなくて、真由美さん？」
目を丸くして問い返すあずさに、真由美は笑いながら頷いた。
「分かってるじゃない。
あーちゃん、今の一高生徒会長は、貴女よ。
大丈夫、貴女なら出来るわ。
だって貴女は、この私が直々に鍛えてあげたんだもの」
真由美はパチッとウインクすると、身体を翻して鈴音たちのいる

控え室へ駆け戻って行った。

3－（15）　解放（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

3－（15）　解放

正面出入口の前は、突撃銃（アサルトライフル）と魔法の撃ち合いの真っ直中だった。
達也の予想したとおり、ゲリラ兵を迎撃しているのは協会が手配したプロの魔法師。
だが既に正面ゲートの突破を許してしまっていることからも分かるとおり、戦況は芳しくない。
元々ゲリラ側が数に勝っているが、本来ならば通常装備の歩兵など寄せ付けぬはずの実戦魔法師が何人も負傷し、斃れている。
「止まれ！　対魔法師用のハイパワーライフルだ！」
彼を追い越して飛び出そうとしたエリカを大声で呼び止め、
「ぐぇっ！」
レオの襟首を掴んで引きずり戻す。
「……達也、容赦ないね」
「でも、お陰で命拾い」
こんな時でもいつものペースを忘れない友人たちに心強ささえ感じる。
こんな時なので、苦笑いは浮かぶ前に消して、達也は妹に目を向けた。
「深雪、銃を黙らせてくれ」
達也の言葉に、友人たちが一斉に「えっ？」という表情を浮かべた。
「かしこまりました。
ですがお兄様、この人数を一度に、となると……」
深雪の返答は、何故か、場違いな羞じらいを含んでいるように見えた。
何を恥ずかしがっているのか、と新たな謎に首を捻った一同だが、
「分かっている」

次の達也の行動で、今回の疑問はすぐに解消した。
達也が差し出した左手に、そっと右手の指を絡める深雪。
その羞恥の表情は、どの角度から眺めても妹が兄に対して見せるものではない。
しかしそれを誰かが咎める前に、深雪の顔は引き締まった、魔法師のものとなった。
左手には、それと気付かせぬ自然な動作で、ＣＡＤが握られている。
達也が右手を水平に挙げ、隠れているドアの横からゲリラ兵たちを指差した。
次の瞬間、深雪の魔法が発動する。

それは、火を凍り付かせる魔法。

凍結の概念拡張魔法「凍火」は、燃焼を妨害する魔法だ。
この魔法には、対象物の保有する熱量を一定レベル以下に抑制する効果がある。
銃は、突き詰めていえば、弾薬――発射薬の燃焼により生じるガス圧で弾丸を飛ばしている。
発射薬を燃焼させる雷管の爆発（爆轟）も、燃焼の一形態。
そして燃焼という現象は必ず熱量の増大を伴うものであり、熱量の増大を禁じられた可燃物は、燃えることが出来ない。
故に「凍火」を掛けられた火器は、銃であろうと大砲であろうと火薬、爆薬を使用している限り、沈黙を強いられることになる。
三十二丁のアサルトライフルを標的とした「凍火」のニ連射。
その効果を確かめもせず、達也は隠れていた扉の影から飛び出した。
あっという間にゲリラの陣地へ飛び込み、魔法を宿した両手の手

振動減速系概念拡張魔法「凍火（フリーズ・フレイム）」

刀を振るう。
素手で人体を斬り裂くショッキングな光景は、それが魔法によるものと見ただけでは分からなかったが為、余計に、銃で仲間が斃されるより遥かに大きな衝撃をゲリラに与えた。
銃が使えなくなったことに狼狽しながらも、最初は果敢にコンバットナイフで応戦していたゲリラだったが、五人が斬り斃された時点で、すっかり腰が引けてしまっている。
彼らは不気味な怪物を見る目を、達也に向けていた。
遠隔射撃魔法ではなく、敢えてリスクの有るゼロ距離魔法を使ったのは、友人たちに自分が使う魔法の正体を覚らせないという目的もさることながら、それ以上に相手の動揺を誘うことを目論んだものだ。
悪鬼羅刹扱いは、達也の注文通りだった。
戦意を挫かれ集中力を欠いた状態となった不正規兵の横手から、目にも留まらぬ速度で銀色の疾風が駆け抜けた。
疾風の線上で血飛沫が舞い、ゲリラ兵が斃れる。
小太刀、いや、長さから見て脇差しというべきだろうか。
銀色の正体は、その短い刃だった。
いつもの警棒を鍔の無い脇差し形態の武装一体型ＣＡＤに換えたエリカが、自己加速魔法で駆け抜けながら正確に頸動脈を斬り裂いていったのだ。
彼女もまた、達也と同じく、敵の命を奪うことに躊躇を持っていなかった。
「達也、エリカ！」
後方から届いた幹比古の声に、二人はサッと左右へ散った。
吹いて来たのは、本物の疾風。
風の中に潜むカマイタチが、ゲリラの皮膚を無惨に引き裂いて駆け抜けていった。
残りの敵兵力を警備の魔法師に任せ、達也とエリカは一旦仲間の

所まで戻った。
「出る幕がなかったぜ……」
何やらいじけているレオの背中を叩いて励まし（その結果レオは苦悶の表情で蹲っている）、幹比古にサムズアップを見せて、少し怯えた目を向けて来るほのかと美月に小さく笑い掛けた。
「ほのか達には少し刺激が強かったかな」
「――いえ、大丈夫です」
ほのかが気丈に頷いて見せたのは、やはり恋心の成せる業だろうか。
理由が何にせよ、気持ちをしっかり持っていてくれるのはありがたかった。
怖がるのも忌避するのも、この場を切り抜けてからにして欲しいというのが、掛け値無い達也の本音だった。
「美月？」
「あっ……私も大丈夫です」
深雪が優しく一言掛けただけで、美月も強張った顔に笑みを浮かべて見せた。
彼女も頭の良い娘だ。
今が日常の時ではないと、ちゃんと解っているのだろう。
「それにしてもエリカ、良くそんな得物を持って来れたな？鞄に入る長さじゃないだろう？」
とは言っても、人殺しの光景はすぐに慣れるものではないし、そのショックはすぐに薄れるものでもない。
敢えて関係のない話を振ったのは、二人に気持ちを落ち着かせる時間を与えるという目的あってのことだった。
「うん、このままじゃ無理だよ？」
そしていつも以上に砕けた口調で応えたエリカは、ちゃんと達也の意図を察することが出来ていたのだろう。
「でもこうすると……ねっ？」
「ほぅ、これはまた……」

しかし達也の口から漏れた感嘆は、演技ではなかった。
何となく目を引き付けられていたほのかや美月も、深雪や雫や幹比古も、目を丸くしている。
確かに、目を丸くするだけの価値があるギミックだ。
エリカが柄尻のスイッチを操作すると、鋭く研ぎ澄まされた薄い刀身が、楕円形の断面を持つ短い棍棒へみるみる縮んでいったのだ。
「凄いでしょ？　来年から警察に納入予定の形状記憶棍刀よ」
「そう言えば千葉家は白兵戦用の武器も作っていたっけな……」
「どっちかって言うと、それが収入のメインなんだけどね」
笑いを誘うようなコミカルな会話ではなかったが、軽い口調で言葉を交わす二人の姿に、ほのかたちも落ち着きを取り戻した様子だった。
「……それで、これからどうすんだ？」
レオも空気を読んでいたのだろう。
待ちかねた、と言わんばかりの口調で、達也に次の指示を求めた。
「情報が欲しいな。
エリカも言ってたが、予想外に大規模で深刻な事態が進行しているようだ。
行き当たりばったりでは泥沼にはまり込むかもしれない」
――協会へ行けば必要な情報は手に入る。
魔法協会本部・支部には十師族専用の秘密回線が通っていて、達也も四葉家用の回線にアクセス権限を付与されている。その秘密回線を使えば国防会議の極秘情報ですら入手可能だ。
達也一人なら、市街戦の真っ只中であろうと、魔法協会関東支部のあるベイヒルズタワーまで十分も掛からないだろう。毎朝続けている高速ランニングは伊達ではない。
だがローラーブレードも飛行デバイスも無しでは、深雪が達也のペースについて行けない。
レオ、エリカ、幹比古ならあるいはついてこれるかもしれないが、ほのか、雫、美月は見るからに無理だ。

「ＶＩＰ会議室を使ったら？」
知らず知らず眉間に皺を寄せていた達也に、出て来たばかりの建物を指し示しながら雫がそう提案した。
「ＶＩＰ会議室？」
しかしそのような施設の存在を達也は知らなかった。
ＶＩＰ応接室なら知っているが、まさかそんな単純な言い間違いではあるまい。それに達也が思い浮かべた部屋はあくまで応接室で、情報端末は通常の通信回線につながっているだけだ。
「うん。あそこは閣僚級の政治家や経済団体トップレベルの会合に使われる部屋だから、大抵の情報にアクセスできるはず」
「そんな部屋が？」
「一般には開放されていない会議室だから」
「……良く知ってるね、そんなこと」
エリカがこの時ばかりは純粋に感心した態でそう言うと、雫は少し恥ずかしそうで少し得意げに応えた。
「暗証キーもアクセスコードも知ってるよ」
「凄いんですね……」
「小父様、雫を溺愛してるから」
ほのかが付け加えた一言に、達也はなる程、と頷いた。
あの父親なら、そのくらいのことはやりそうだ。
そして「北方潮」が使う部屋なら、警察や沿岸防衛隊の通信も傍受可能だろう。
「雫、案内してくれ」
達也の言葉に、彼女にしては珍しいオーバーアクションで、雫が大きく頷いた。

◇◆◇◆◇◆◇

ＶＩＰ会議室で雫のアクセスコードを使って警察の指揮回線を傍受した達也は、予想を超えて悪化している状況に顔を顰めた。

「何これ！」
「酷ぇな、こりゃ」
「こんなに大勢……一体どうやって」
友人たちはもっと派手な反応を見せていたので、彼の顰め面は目立たなかったが。
「お兄様……」
しかし目立たないと言っても、深雪が気づかないはずはない。
彼の心に生じた波紋は、妹の動揺に直結するのだ。彼ら兄妹の心は、つなげられているのだから。
不安に瞳を揺らす妹の頭をポンポンと撫でて、達也は友人たちに向き直った。
「改めて言わなくても分かっているだろうけど、どうも、簡単には脱出できそうにない。
少なくとも陸路は無理だろうな。何より、交通機関が動いていない」
「ってことは、海か？」
レオの質問に、達也は首を横に振った。
「それも望み薄だな。出動した船では、全員を収容できないだろう」
「じゃあシェルターに避難する？」
幹比古の提案に、達也は頷いた、が、その顔からはいまひとつ自信が窺えなかった。
「それが現実的だろうなぁ。
ここも頑丈に作られているとはいえ、建物自体を爆破されてはどうにもならない」
「じゃ、地下通路だね」
エリカが今にも駆け出しそうな顔で促したが、達也はそれに「待った」を掛けた。
「いや、地下は止めた方が良い。上を行こう」
「えっ、何で？　……っと、そうか」
理由を説明する前に納得の様子を見せたエリカに、「流石は実戦

魔法の名門だな」と達也は口に出さず感心した。
ただ、彼の「待った」はそれだけではなかった。
「それと、少し時間を貰えないか？」
「それは構いませんが……何故ですか？」
一刻を争うと誰の目にも明らかな状況で猶予を言い出した達也に、ほのかが首を傾げて理由を訊ねた。それでも「イエス」が前提になっているところが、彼女の達也に対する感情のあり方を物語っている。
「デモ機のデータを処分しておきたい」
「あっ、そうだね。それが敵の目的かもしれないし」
幹比古のフォローに、全員が頷いた。

◇◆◇◆◇◆◇

「司波、吉田」
エレベーターホールからステージ裏へと回る通路で、先頭を行く達也と幹比古に、ずっしりと腹に響くような声が掛けられた。
こんな重みのある声を出せる高校生を、達也も幹比古も一人しか知らない。
「十文字先輩」
振り向いた先から、服部と沢木を従えた十文字克人が歩み寄って来た。
「他の者も一緒か。
お前たちは先に避難したのではなかったのか？」
それは「さっさと避難しろ」という言外の指示。
「念の為、デモ機のデータが盗まれないよう消去に向かうところです。
彼女たちは、その、バラバラに行動するよりも良いかと思いまして」
非公開の会議室で事実上のハッキングを行ったという事実を隠し、

ぞろぞろと引き連れた同伴者を何と説明するか迷って、達也はそんな理由を捏造した。（但し前半は捏造ではない）
「しかし他の生徒は既に地下通路へ向かったぞ」
これは服部の台詞だ。
「地下通路では拙いのか？」
そして眉を顰めた達也の表情の変化を鋭く見て取り、沢木がそう訊いて来た。
「拙いという程の事は……ただ地下通路は直通ではありませんから、他のグループと鉢合わせる可能性があります。場合によっては」
「遭遇戦の可能性があるということか！？」
達也の台詞が終わるのを待たず、服部が勢い込んで質問した。
いや、形の上では質問でも、実際には彼自身がそう答えを出したのだった。
「地下通路では行動の自由が狭まります。逃げることも隠れることも出来ず、正面衝突を強いられる可能性も。
そう考えて自分は地上を行くつもりだったんですが」
克人の決断は迅速だった。
「服部、沢木、すぐに中条の後を追え」
「ハッ」
「分かりました」
勢い良く駆け出した二人を見送り、克人は達也を見下ろした。
その視線には、軽い非難の色が混じっていた。
「司波、お前は智謀の割りに、フットワークが軽過ぎるようだな」
克人が言いたいことは、無論、達也にも分かった。
だからと言って納得したか、というと、そんなことも無かったが。
とにかく、反論はしなかった。
「まあいい。急ぐぞ」
「分かりました」
今度は克人に達也が続く形となった。
達也がやろうとしていることの意味を認め、その手助けを克人が

しようとしていることも、まるで言葉が足りていない遣り取りの中で、達也は理解していた。

◇◆◇◆◇◆◇

「何をしてるんですか！？」

デモ機が放置されたステージ裏へ戻って来て、達也は開口一番、自分のことを完全に棚にあげた発言をしてしまった。

「データの消去です」

答えが分かりきった質問をそれ以外に無い答えで鈴音に返され、達也は絶句を余儀なくされた。

「七草たちは避難しなかったのか」

「リンちゃんや五十里くんが頑張っているのに、私たちだけ先に逃げ出す訳には行かないでしょう？」

達也の言いたかったことは克人が代弁してくれたが、これまた当然の様に返されて、それ以上は何も言えなくなってしまう。

「ここは僕たちがやっておくから、司波君は控え室に残っている機器の方を頼めるかな」

「もし可能なら、他校が残した機材も壊してちょうだい」

「こっちが終わったらあたしたちも控え室に向かう。そこで今後の方針を決めよう」

五十里、花音、摩利から立て続けの依頼（指示？）を受けて、達也と克人は揃って踵を返した。

達也が深雪を伴い他校の控え室を回って戻って来た時には（他のメンバーを連れて行かなかったのは、情報を記録したパターンを分解してストレージを空にしてしまう魔法を見られたくなかったからだ）、鈴音たちもステージの作業を終わらせて控え室に来ていた。

「お帰り、早かったね」

「首尾は？」

「残っていた機器は全てデータを破壊しておきました」
「へぇ……どうやって？」
予想していたけど驚きを隠せない。
そんな表情で訊いて来た花音に、達也は短く答えた。
「秘密です」
「花音、他の魔法師が秘密にしている術式のことは、訊いちゃいけないって。
マナー違反だよ？」
他ならぬ五十里の言葉だ。
花音は不承不承、であることをあからさまな態度に見せながら、それでも大人しく引き下がった。
「さて、これからどうするか、だが」
そう口火を切った後、摩利は真由美へ目を向けた。
「沿岸防衛隊の輸送船はあと十分ほどで到着するそうよ。
でも避難に集まった人数に対して、収容力（キャパ）が十分とは言えないみたい」
真由美が告げた情報は、達也たちが上の階で確認してきた情報と内容が一致していた。つまり、全員が避難できないのは間違いない、ということだ。
「シェルターに向かった中条さんたちの方は、残念ながら司波君の懸念が的中したようです。
途中でゲリラに遭遇し、足止めを受けています。
ただ敵の数も少ないらしく、もうすぐ駆逐できる、と中条さんから連絡がありました」
真由美の後を、鈴音がそう引き継いだ。
「状況は聞いてもらったとおりだ。
シェルターの方はどの程度余裕があるのか分からないが、船の方は生憎と乗れそうにない。
こうなればシェルターに向かうしかない、とあたしは思うんだが、皆はどう思う？」

真由美、摩利、鈴音。
五十里、花音、紗耶香。
達也、深雪、エリカ、レオ、幹比古、美月、ほのか、雫。
この場に残っているのは、この十四人。
克人は鈴音の護衛に残っていた桐原を連れて、逃げ遅れた者がいないかどうかの確認を再開していた。
三年生の三人は、口を閉ざしている。
下級生の意見を聞いてから発言するつもりなのだろう。
とは言っても、彼らの意思が摩利の意見に集約されているのは明らかだった。
「……あたしも、摩利さんの意見に賛成です」
花音たち二年生も、他に選択の余地はないと考えている様子だった。
一年生の目は、達也に向けられている。
回答を求める摩利の視線を受けて、彼の目は……全く違う方へ向いていた。
抜く手も見せず、銀色のＣＡＤを構え、
壁に向かって、達也はそのまま引き金を引いた。

◇◆◇◆◇◆◇

この場に第三者が大勢いる、ということを、達也は一瞬たりとも忘れてはいなかった。
しかし、秘密を守りながら事態に対処するには、時間が不足していた。
気づいたのは偶然に近い。
八雲に鍛えられた直感が彼にそれを教えたのかもしれない。八雲は達也に繰り返し、「精霊の眼」だけに頼り過ぎるな、と諭していた。その教えが今、活きたというところだろうか。
強烈な危機感に曝されて「視野」を壁の向こうへ拡張した達也は、

突っ込んで来る大運動量の物体の情報を読み取った。
克人がいれば、状況も違っただろう。
兵士が飛び込んで来たのなら、真由美や摩利に任せても良かっただろう。
しかし装甲板で鎧った大型トラックの突入に対処できるのは、この場で達也の魔法だけだった。
高さ四メートル、幅三メートル、総重量三十トン。
道路規格の向上により一層の大型化が許され装甲板の重量を更に加えた大型トラックを丸ごと照準に収めて、達也は分解魔法「雲散霧消（ミスト・ディスパージョン）」を発動した。

一瞬で、塵となって消えるトラック。

消えてしまった運転席から放り出され、地面を転がって壁面に激突するドライバー。

慣性に従い会議場の壁面を叩いた金属と樹脂の粉だけが、大型輸送機械の存在していた名残だ。
壁の内側には、何のダメージも無い。
だが、今、何が起こったか、誰も気づかなかった、で済む程、世の中は甘くなかった。
「……今の、なに……？」
恐る恐る訊いて来た真由美に、達也は舌打ちしたい気分だった。
懸念したとおり、真由美は今の光景を見ていたらしい。
彼の視線を辿り、知覚系魔法「マルチ・スコープ」で壁の向こうを覗いたのだろう。
ただ、幸いなことに――といっても問題の先送りでしかなかったが――その質問に答える必要は無かった。
視界を拡張したままにしていた真由美が、別の意味で蒼褪めた。
やはり視野を拡大したままにしていた達也も、その原因を把握し

ていた。
どうやらこの会場に残っている自分たちは、侵略側から危険兵力と認識されてしまったらしい、と達也は思った。
会場内の捕縛と、正面出入口前の戦闘と、今の撃退で、確保から殲滅へと戦闘目標が変わったと見える。
意識の一部で他人事の様な冷静な思考を展開している傍らで、意識の別の部分は降り注ぐ携行ミサイルの雨を迎撃する魔法を編み上げていた。
しかし今回は、達也が手を出す必要はなかった。
彼らがいる部屋に面した外壁に、幾重にも重なった魔法の防壁が形成された。
ミサイルはその壁に着弾する前に、横合いから撃ち込まれたソニック・ブームにより悉く空中で爆発した。
「お待たせ」
急に外から掛けられた声に、達也と真由美は、それぞれの視点を肉眼に戻した。
タイミングを見計らっていたように――まさかそんな性格の悪いことは無いと信じたいところだが――控え室に入って来た一人の女性。
「えっ？　えっ？　もしかして、響子さん？」
「お久し振りね、真由美さん」
唐突に姿を見せた藤林は、旧知の真由美に向かって笑顔で挨拶した。

◇◆◇◆◇◆◇

克人がミサイルの雨に遭遇したのは、その場所に強大な魔法の気配を感知したからだった。
魔法師は事象改変の反作用で魔法の行使を知覚する。
その魔法には、反作用がほとんどなかった。

しかし、それにも関らず、「世界」が大きな改変を受けたと克人には分かっていた。

五感によらず「意味」を読み取るのは、達也の専売特許ではない。空間の性質を改変する魔法を使う克人は、空間の変動に鋭敏な認識力を持つ。

万有引力の分布＝質量の分布は、空間の最も基本的な性質の一つ。克人は質量分布の変動を知覚することによって、物体の移動や変化を把握することが出来る。

克人はその感覚で、大きな質量を持つ物体、船やビルほどではないにしても、人間に比べて巨大と言って差し支えの無い質量が、一瞬で拡散したのを捉えた。

これ程大規模でこれ程スムーズな事象改変は、克人にもチョッと覚えが無い。

脅威に感じるよりも寧ろ好奇心に駆られて、克人は質量が拡散した場所へと跳んだ。

その巨体からは想像し辛いかもしれないが、彼は高速移動の魔法も得意としている。桐原を置き去りにして空中を滑るように跳躍し、コーナーを運動ベクトルの改変でクリアしながら控え室に面した外壁へと到着した。

運が良かったのか、悪かったのか。

真由美や摩利にとっては、運が良かったと言えるだろう。

克人本人がどう思うかは、訊いて見なければ分からない。

その場所に到達した途端、克人は携行ミサイルの歓迎を受けた。

克人の反応は、条件反射の域に近かった。

気体も通さぬ対物障壁と二万度の高熱にも対応可能な耐熱障壁の多重防壁を瞬時に構築する。

何故か空中で爆発したミサイルの熱波は、克人が展開した障壁に阻まれ外壁に焦げ痕一つ残さなかった。

克人はミサイルを爆破した衝撃波の飛来元へ振り向いた。

オープントップの軍用車両に立ち、ミサイルランチャー、のよう

な物、を構えた国防陸軍の大尉。
「スーパー・ソニック・ランチャー……101の方ですか？」
近寄ってきた軍用車両に、克人はそう呼び掛けた。（違和感があるかもしれないが、彼もまだ高校生なので、大人には敬語を使うのである）
ハイブリッドシステムを使っているらしく、ほとんど無音で接近した車から降りた大尉が、シールを貼り付けたような笑顔で克人に敬礼した。
「国防陸軍第101旅団独立魔装大隊大尉、真田繁留（しげる）であります。我らのことをご存知とは、流石は十文字家ご当主、畏れ入りました」
克人の眉がピクリと動いた。
それだけで済ませたのは、十八歳の少年としては破格の精神力と言えるだろう。
「失礼。お互い、無用な口は慎むべきでありましょうな」
「……こちらこそ失礼しました」
「重ねて畏れ入ります。
それでは十文字家次期当主殿、参りましょうか」
真田はそう言って、会議場の中へ向かう。
一体自分に何の用があるのか、克人には全く分からなかったが、自分たち十文字家の伏せた家内事情を知るこの軍人から、今は目を離せないと考えた。
二人は（縦に）並んで、最寄の出入り口から会議場内へ入って行った。

◇◆◇◆◇◆◇

藤林は一人ではなかった。
野戦用の軍服（スカートにパンプスではなく細身のスラックスにショートブーツ）を纏った彼女の後ろから、同じく国防陸軍の軍服

に身を固め、少佐の階級章をつけた壮年の男性が入って来た。
その少佐は困惑して立ち竦む達也の前に、手を後ろに組んで立った。
「特尉、情報統制は一時的に解除されています」
その隣に立って、藤林が達也へそう言葉を掛ける。
達也の顔から困惑が消え、姿勢を正して、目の前の男に敬礼で応じた。
その姿を深雪以外の全員が、ちょうど部屋に入って来た克人も含め、驚きを隠せず見詰めている。
達也の敬礼に敬礼で答えた軍人は、克人の姿に目を止めて、そちらへ足を向けた。
「国防陸軍少佐、風間玄信です。訳あって所属についてはご勘弁願いたい」
「貴官があの風間少佐でいらっしゃいましたか。
師族会議十文字家代表代理、十文字克人です」
風間の自己紹介に対して、克人も魔法師の世界における公的な肩書きで名乗った。
風間は小さく一礼して、克人と達也が同時に視界に入るよう身体の向きを変えた。
「藤林、現在の状況をご説明して差し上げろ」
「はい。
現在、保土ヶ谷駐留部隊が侵略軍と交戦中。また、鶴見と藤沢より各一個大隊が当地に急行中。鶴見の大隊は残り約五分で到着見込みです。
魔法協会関東支部も独自に義勇軍を編成し、自衛行動に入っています」
「ご苦労。
さて、特尉。
現下の特殊な状況を鑑み、別任務で保土ヶ谷に出動中だった我が隊にも防衛に加わるよう、先程命令が下った。

国防軍特務規則に基づき、貴官にも出動を命じる」
真由美と摩利が揃って口を開きかけたが、風間は視線一つで彼女たちの口を封じた。
「国防軍は皆さんに対し、特尉の地位について守秘義務を要求する。本件は国家機密保護法に基づく措置であるとご理解されたい」
厳しい単語、重々しい口調よりも、その視線の力で、真由美も摩利も花音も抵抗を断念した。
「特尉、君の考案したムーバル・スーツをトレーラーに準備してあります。
急ぎましょう」
真田に声に頷き、達也は困ったような照れたような微妙な顔つきで友人たちへ振り向いた。
「すまん。聞いてのとおりだ。
皆は先輩たちと一緒に避難してくれ」
「特尉、皆さんには私と私の部隊がお供します」
友人たちに頭を下げた達也に、藤林が口を添えた。
少人数とはいえこの状況で友人たちの為に精鋭を割いてくれるという彼女の、そして少佐の精一杯の厚意に、達也は素直に感謝した。
「少尉、よろしくお願いします」
「了解です。
特尉も頑張って下さいね」
藤林に一礼し、達也は風間の後に続いた。

「お兄様、お待ち下さい」

しかし、その背中を、思い詰めた顔をした深雪が呼び止めた。
目で問い掛ける達也に、風間は頷きを返して先行した。
深雪は達也の目の前に立つと、手を、その頬に差し伸べた。
引き止めることが目的ではない。
彼の立場も責務も、深雪は達也本人と同じくらい良く知っている。

深雪が最も恐れていること、それは達也の足手纏いになることだ。
今から深雪が為そうとしている事。
彼女にその権限はない。
だが深雪は、彼女の独断で、自分の全責任において、それを為そうと決心していた。
妹の瞳に、達也はその決意を見て取った。
自分を見上げる妹の眼差しに、戸惑いと、理解と、感謝の綯い交ぜとなった表情で頷き、達也は深雪の前に片膝をついた。
姫君に跪く、騎士のように。
深雪はその頬に手を添え、瞼を閉ざした兄の顔を、上へ、自分の方へと向ける。

そのまま腰を屈め、

兄の額に、

接吻(くちづけ)る。

妹の唇が離れ、頬に添えられた手が離れ、
再び達也は頭(こうべ)を垂れる

変化は、唐突に、訪れた。

眼を灼くほどに激しい光の粒子が、達也の身体から沸き立った。
光子ではない、物理以外の光を纏う、魔法の源となる粒子。
眼(まなこ)を開き、立ち上がる達也。
異常に活性化したサイオンが、彼を取り巻き吹き荒れる。
それは宛(さなが)ら、暴風を纏い雷光を従える、嵐の覇王。
激し過ぎる輝きはすぐに収まったが、膨大なサイオンは尚も彼の周りで静かに渦巻いている。

誰もがよろめくように達也から一歩、二歩と遠ざかる中、深雪は笑顔でスカートをつまみ、兄に向けて膝を折った。

「ご存分に」

「征ってくる」

万感を込めた妹の眼差しに見送られ、達也は戦場となった横浜の街へ出陣した。

3一（15） 解放（後書き）

本年最後の更新です。
来年は10日までオフラインとなりますので、ご感想のお返事もそれ以降になります。なにとぞご了解願います。

3－（16）　裏切れぬもの（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

3－（16）　裏切れぬもの

地下道をシェルターへ避難する第一高校生徒・職員（プラス若干名の部外者）の集団と、地下道に入り込んだ武装ゲリラの遭遇戦は終息を迎えようとしていた。

彼らは総勢六十名に達する。

会場が襲撃を受けたのが一高の発表の直後だった為、応援の生徒数がピークを迎えていた。

この不運な巡り合わせを心の中で嘆きながら、あずさは生徒会長として、何とか表面上だけでも平静を保っていた。

通路の先で反響する轟音は、銃声と衝撃波の応酬。

最前線に立つ沢木が、ハンドガンで応戦するゲリラを殴り倒している音だ。

アサルトライフルやサブマシンガンなどの主武装（メイン・ウェポン）は皆で協力して無力化済み。

あずさも銃口に空気塊を固定する魔法で暴発を引き起こし、二丁のライフルを射手ごと無力化した。

その結果が、彼女の目の前にある。

地下道と言っても前近代の抜け穴ではない。

照明は煌々と灯っている。

血に塗れて地下の路上に転がる不正規兵（ゲリラ）。

その悲惨な光景に、本当はしゃがみこんで目を塞ぎたかった。

しかし、生徒の代表を任せられた義務感から、あずさは恐怖を必死で抑え込んだ。

彼女には魔法戦闘の技能も集団戦指揮のノウハウも乏しい。

彼女が口出ししなくても、部活連と風紀委員会から選抜された自警団メンバーが主体となってゲリラの接近を許さなかった。

あずさは、こみ上げてくる吐き気を堪え、駆けつけた服部と沢木

がゲリラを蹴散らしてゆく光景を見ていた。
彼女には見ていることしか出来なかったが、目を逸らさず、彼らの働きを見届けることが自分の義務だと感じていた。
相手が少人数ということもあり、幸いこちらに死傷者は出なかった。
しかし、魔法師は不死身ではない。
切られれば血を流し、撃たれれば死ぬこともある。
魔法による防御も万能ではない。銃弾の運動エネルギーが魔法の事象改変力よりも高かったならば、魔法の防壁も撃ち抜かれてしまう。
そのリスクを冒し我が身を盾にして、彼女のような戦闘向きでない生徒を守る為に戦ってくれている仲間の姿から目を逸らすのは、人として許されない裏切りだと感じていた。
あずさは、散発的に飛び出してくるゲリラを殴り倒し、蹴り倒して進む沢木と、その背後から魔法による援護射撃を繰り出す服部の後姿を、じっと見ていた。

物陰から飛び出してきたゲリラを、沢木は有無を言わさず殴り倒した。
相手は不正規兵、その姿格好は一般市民と区別がつかない。
アサルトライフルのような大型銃器を構えていればすぐ見分けがつくが、ハンドガンやコンバットナイフを隠して近づくゲリラを、地上から避難してきた一般市民と判別するのは困難だ。
だから沢木は、見分けることを放棄した。
守りを固め、攻撃してくるものを殴り倒す。
こんな乱暴な戦術を取れるのは、彼の強固で高度なディフェンスがあってこそだ。
収束・移動系複合魔法「空気甲冑〔エア・アーマー〕」
自分の体表面より三センチから五センチの相対座標に圧縮空気の層を築き、相対速度ゼロで静止させる魔法。

人体の曲面に沿って形成された空気層は、進入角が浅くなるよう身体を捌くことによって、高速低質量の銃弾を逸らしてしまうことができる。

銃口の向きから弾道を瞬時に割り出し、必要な回避動作を行う。魔法だけではなく、体術だけではなく、両者が融合したスピードと技術が、撃たれてから反撃するという命知らずの戦法を可能としている。

新たな敵が、大型ナイフで切りかかって来た。

沢木は多重魔法（マルチ・キャスト）により自分自身に加速魔法を発動する。

拳速を音の速さまで加速。

空気の層を纏った拳が音の壁を叩きつける。

轟音と共に吹き飛ぶゲリラ。

過剰に見える攻撃力は、新たな敵に対する牽制も込められている。幾度も繰り返された恫喝は、一向に効果を表していない、ように見える。

だが人の体力が有限であるのと同じく、人間の気力もまた有限だ。仲間の影から斬りかかろうとしていた不正規兵を巻き込み二人まとめて地下通路の壁に叩きつけた沢木の一撃は、ゲリラの戦意を遂に圧し折った。

逃げて行く人の気配へ向けて帯電した蒸気塊を投げつける性格の悪い同級生を横目に、沢木は身に纏っていた鎧を解除した。

◇◆◇◆◇◆◇

藤林の部隊はオフロード車両ニ台に藤林を含めて八人の、分隊規模にも及ばない小集団だったが、全員が相当な手練（てだれ）であると思わせる雰囲気を纏っていた。

「真由美さん、残念ですけど……全員は乗れません」

一人一人の兵士が放つ歴戦の雰囲気に圧倒されていた真由美に、藤林が申し訳無さそうな表情で告げた。

「えっ、いえ、最初から徒歩で避難するつもりでしたから……」
「そうですか。しかしそれでは、余り長距離は進めません。何処へ避難しますか？」
克人ではなく真由美に話し掛けたのは彼女が顔見知りだったからだろうが、真由美としては克人と相談して欲しいところだった。こういうシチュエーションなら、自分より克人の方が間違いなく場慣れしているからだ。
「保土ヶ谷の部隊は野毛山を本陣とし、小隊単位でゲリラの掃討に当たっています。
山下埠頭の偽装艦に今のところ動きは見られませんが、じきに機動部隊を上陸させて来るでしょう。
そうなれば海岸地区は戦火の真っ只中に置かれることになりますから、やはり内陸へ避難した方が良いでしょうね」
「えっと……予定どおり、駅のシェルターに避難した方が良いと思うんだけど」
迷いが拭えぬ口調で、真由美は克人へ目を向けた。
「そうだな。それが良いだろう」
克人が即座に頷き、真由美はホッとした表情を浮かべる。
それを見て藤林は面白そうに唇の両端を吊り上げたが、その慎ましい笑みに気付いた者は、真由美本人を含めて、いなかった。
「では前と後ろを車で固めますから、ついて来て下さい。
ゆっくり走りますから大丈夫ですよ」
そう言って、片方の車両へ向かう藤林。真由美、摩利とその後に続く。
「藤林少尉殿」
しかし克人は、歩き出す代わりに、藤林を背後から呼び止めた。
「何でしょうか？」
藤林は全くのタイムラグ無しで、クルリと振り返った。
それは、呼び止められるのを予期していた素早さにも見えた。
「まことに勝手ではありますが、車を一台、貸していただけません

か」
無茶だ、とそれを聞いていた一高生は思った。
車は二台しかないのだ。しかもそれは、単に人を運ぶだけでなく、武器弾薬を運ぶ為の物でもある。
「何処へ行かれるのですか？」
今は別行動が許される状況ではない。
だが藤林は克人の願いを頭から断ったりせず、何に使うのか、その理由を訊ねた。
「魔法協会支部へ。
私は、代理とはいえ師族会議の一員として、魔法協会の職員に対する責任を果たさなければならない」
ずしっ、と腹の底に響くような声音だった。
彼の声には、薄っぺらな若造のヒロイズムとは一線を画す、使命有る者の覚悟がこもっていた。
「わかりました」
それに対する藤林の答えは、実にアッサリしたものだった。
「楯岡軍曹、音羽伍長。
十文字さんを魔法協会関東支部まで護衛なさい」
かえって克人の方が戸惑いを隠せぬ中、二人の部下を指名し、車両一台を貸し与える。
そしてもう一台の車に乗りこみ、荷台に立って真由美たちへ呼び掛けた。
「さあ、行きましょう。
無駄に出来る時間はありませんよ」

◇◆◇◆◇◆◇

第三高校の代表団と応援団は、来る時に使ったバスで避難することに方針を決めていた。
「何でこんな離れた所に……」

「そういう街の造りなんだから仕方ないでしょ」
バスは国際会議場から離れた、大型車両専用の駐車場に待機している。
その事に文句をつける将輝を、吉祥寺は割りと真面目に叱り付けた。
閉会後に一泊せず、そのまま帰る予定で運転手を待機させていただけでも幸いなのだ。
離れているといっても避難の船が着く埠頭より駐車場の方が近いのだし、こんなことで文句を言ったらバチが当たると吉祥寺は考えていた。
不安があるとすれば駐車場が会場よりも南側、つまり偽装戦闘艦が接岸している埠頭に近いということだが、尚武の気風が強い三高生は、「卑劣な侵略者など蹴散らしてしまえ」と、かえって気勢を上げていた。
ステージ上で武装（？）解除を余儀なくされたことが、余計に火をつけてしまったようだ。
その楽観的過ぎる姿勢こそが、吉祥寺には、より不安でならなかった。
尚武の第三高校、と言っても、実際に戦闘の経験があるのは将輝を始めとする一握りの生徒のみ。
彼自身「実戦」と呼べる経験は無いし、引率の教師も今回は学級肌の者ばかりだ。
世の中、当たって欲しくない予感ばかりが的中する。
前世紀の中葉、楽しくも無い法則を発見した某大尉の諦念は、きっとこんなものだったのではないか、と吉祥寺は思った。（実際に法則として流行したのは前世紀後期だが）
駐車場にたどり着き、彼らの大型バスを視界に納めた直後。
――バスは、ロケット砲の直撃を受けた。

着弾地点は幸いなことに――不幸中の幸い、でしかないが――最後尾付近だったので、運転手は傷ややけどを負う前に慌てて車外に転がり出て来た。
車体も実は、耐熱対衝撃の、軍事車両の装甲板と同じ材質を使った特注品で、ガラスは割れ表面は焦げているものの、穴が開くのは免れている。
だが、タイヤがダメになっていた。
熱と破片で見事に裂けている。
「このヤロウ！」
吉祥寺の隣で、将輝が沸騰した。
落ち着くように注意しようとして、吉祥寺は考えを変えた。
タイヤを交換する為には、その間、敵を近づけないようにしなければならない。
彼は友人を好きに暴れさせることに決めた。
吉祥寺は将輝の隣を離れ、引率教師の所へ行った。
「先生」
「吉祥寺、どうした」
今にも震え出しそうな声だが、強がれる分だけ立派だろう。
彼も親友の強さにここまで強い確信が無かったら、きっと似たようなものだったにちがいない。
「敵は将輝に任せて、僕たちはタイヤの交換の準備をしましょう」
「しかし、準備と言っても……」
「ここは大型車両や特殊車両用の専用駐車場です。
簡単な整備の為の設備もありますから、タイヤの予備も置いてあると思います」
「そ、そうか！
よし、手の空いた者は吉祥寺と一緒に、交換用のタイヤを探してきてくれ！」
手の空いた者、というのは将輝以外にも交戦状態に突入した者が結構いたからである。

三高の生徒たちは、撃退と脱出準備と、手分けして対処を始めた。

◇◆◇◆◇◆◇

あずさに率いられた（という表現は少し実態と乖離しているかもしれないが）一高生徒・教職員＋αの集団は他校に遅れて地下シェルターの入り口に到着した。

遅れた理由は他校に比べて人数が多かった所為だ。

総勢六十人。平時であれば、大した数ではない。

だが全員を取りこぼしが無いよう一箇所に集めるには手間の掛かる人数であり、襲い掛かる敵を警戒し、撃退しながら進むには、武器になると同時に重荷となる人数だ。

災害時であれば外から自由に入れる扉も、敵性兵力が跳梁跋扈している状況ではそうも行かない。

既に多数の避難者がいる内部から、鍵を開けてもらわなければならない。

扉が開くまでの間、入り口前の地下広場（広場状に開けた地下通路）で、服部と沢木により脱落者がいないかどうかの点呼が行われていた。

教職員は、大人の役目を果たしている。

安宿は怪我人の様子を見て回り、遥は不安を隠しきれない生徒に声をかけ、廿楽は最後尾で十三束を伴って警戒に当たっていた。

だから、という訳でもないだろうが――

最初に異変に気づいたのは、廿楽だった。

「皆さん、頭を庇って伏せて下さい！」

地下通路の天井に、異音が響く。

コンクリートの軋む音がする。

照明が消えて、闇の帳（とばり）が下りる。

天井と壁にひびが入る。

その全てが、息をつく間も無く起こった。

悲鳴を上げた者もいた。
ただしゃがみ込んだ者もいた。
落ちて来る鉄とコンクリートと土砂を支えようと魔法を編み掛けた者もいた。
しかし、それがどんな力によるものにせよ、地下通路の崩壊は避けられなかった。

その時あずさは、シェルター入り口の有線端末で扉を速く開けるよう交渉していた。
甘楽の警告に思わず振り返った彼女は、目の前で起こっている破局（カタストロフィ）から目を逸らせなかった。
目を瞑ることもできなかった。
天井が崩れ、壁が剥がれ落ちる。
彼女自身は、崩落に巻き込まれる心配はない。
扉の外とはいえ、強固な合金で覆われたシェルターの通路内にいるのだから。
だが、他の生徒たちは……
「……え？」
しかし、土埃が収まって、シェルター入り口に続く通路に点された明かりで地下通路崩壊の結果が明らかになった時、彼女の目から涙は零れず、その代わり口から予想外の光景を驚く声が漏れた。
一高の生徒は、生き埋めになっていなかった。
コンクリートの破片が、アーチを作っていた。
一体どんな偶然が働いたのか、コンクリート破片の大きな塊が円弧状に噛み合ってお互いの重量を支え、その下に人が中腰で立てる程度の空間を作っていたのだ。
いや、こんな物が偶然に出来上がるはずが無い……あずさはそう思った。
こんな現象が何の作意も無く起こるなど、限りなくゼロに近い確率だ。

（……そうか、ポリヒドラ・ハンドル！　甘楽先生の魔法で……！）

彼女が心の中で叫んだ「ポリヒドラ・ハンドル」とは立体映像描画の命令文のことではなく、構造物を三角錐や四角柱等の単純な多面体（ポリヒドラン）の集合体に抽象化し、その構成要素である仮想単純立体を操作（ハンドル）することで大規模構造物の変化をコントロールする魔法のことだ。

現代魔法は一つの事物を部分的に変化させることを苦手としている。

地下通路の崩落という現象を止めようとするなら、通常の現代魔法術式では地下通路全体をその対象とする必要がある。

だがポリヒドラ・ハンドルは一つの事物を多数の構成材料の集合体として認識することで、その一部を変化させることにより全体に影響を及ぼす。

無論その為には、一つの構造物を多数の小さな材料に分解する分析力が必要になるが、それが可能な魔法師は、ありえない偶然が作り出す奇跡を意図的に演出することが出来るようになる。

――今の様に。

おそらく、何らかの理由により過大な荷重が掛かり地下通路の崩壊が避けられないと覚った甘楽は、土砂の圧力を利用してアーチが形成されるよう、落下する破片の運動をビリヤード状にコントロールしたのだろう。

しかしこのアーチは、所詮、瓦礫で作られた物。

自然石の強度は無い。

「皆さん、速くこちらへ！」

地面に伏せていた生徒と教職員と第三者に大声で呼びかけてから、あずさは早く扉を開けるよう、シェルターの中へ必死に訴えた。

「っ――、……？」

安宿が怪我人の診察の為に側を離れ、六十人の集団の中で独りぼっちとなった千秋は、悲鳴を上げることもできずただしゃがみ込んでいた一人だった。

確かに、天井は崩れた。
壁も、所々壊れたはずだ。
それなのに何故、自分は生き埋めになっていないのか。
千秋は恐る恐る目を開けて、その目に飛び込んできた光景に絶句した。
鉄筋とコンクリートの瓦礫がジグソーパズルの様に複雑に重なり合って、小さなトンネルを作っている。
ありえない偶然に、千秋は呆然とへたり込んだ。
と、そこへ、
「何してんの！？
速く逃げなきゃ！」
叱咤の声が浴びせられ、誰かが彼女の手をとった。
驚きにビクッ、と身体が震え、反射的にその手を振り払おうとする。
だがその手は、千秋に痛みを感じさせないよう柔らかく、それでいて決して離れぬよう力強く彼女の手を握っていた。
「急いで！」
千秋から反射的に示された拒絶など気にした様子も無く、その手は闇の中、彼女を引っ張って行く。
背後に人の声も気配も無い。
呆然としていた間に、彼女はどうやら、一番最後になってしまっていたらしい。
前方から弱い光が差し込んでいるのは、既に瓦礫のトンネルを抜けた人がライトを向けてくれているのだろう。
千秋はこの時、何も考えていなかった。
ただ手を引かれるままに、中腰の苦しい姿勢で、それでも足を止めずに走り続けた。
差し込むライトが眩しさを増し、トンネルの出口が見えた。
ギシッ、と不吉な音が耳に届いた。
瓦礫の一部が重みに耐え切れず、崩れていく。

スローモーションで展開される、破局の映像。
千秋の手を引く少年が、その手を引いて彼女の身体を抱き寄せ、空いている右手で自分の右腰を叩いた。
ガクン、と千秋は身体が引き抜かれるような衝撃を覚えた。
自分を抱く手の先に、その胸に、思わず全力でしがみつく。
それが急加速による慣性だと千秋が気づいたのは、崩れ落ちた瓦礫を抜けてシェルターの通路へたどり着いてからだった。

十三束が逃げ遅れていた女子生徒を無事救出したのを見て、あずさは胸を撫で下ろした。
しかしその女子生徒の顔を見て、落ち着きを取り戻した彼女の心臓は再び大きく跳ね乱れた。
（平河先輩の妹さん……）
あずさは同じ九校戦エンジニアチームの一員として、平河小春と親交があった。
穏やかな人柄の平河姉はあずさにとって付き合いやすい先輩であり、同じ技術系を得意とする話の合う先輩でもある。
その妹が代表チームの妨害工作未遂を働いたと聞いて、あずさは最初、耳を疑った。妹の方と直接の面識は無かったが、時々話を聞いていた限りでは、そんなことをする少女とは思えなかった。だから、余計にショックを受けた。
抱きついていた少年から慌てて離れ、恥ずかしそうに俯きながらもチラチラと相手の顔をのぞき見ている姿は、本当に普通の下級生に見える。
出来ればこのまま、悪い夢から醒めて欲しい……誰にとも無く、あずさはそう願った。

間一髪で生き埋めを免れた千秋は、頑丈な合金の屋根の下でホッと息をついた。
そしてようやく、自分の体勢を自覚する余裕を取り戻した。

「！」

自分的には記録的な反応速度？　と良い塩梅に混乱した頭で千秋は考えた。

良い塩梅、というのは、混乱していなければ錯乱していただろうから。

とにかく手足をフルスピードで動かして、彼女は抱きついていた少年から離れた。

恥ずかしくて顔を上げられないが、同時に、相手がどんな顔をしているのか気になって仕方が無い。

その結果、彼女は俯いたままチラチラと相手の顔を窺い見る、という結構不審な挙動に陥っていたのだが、相手の少年は特に気にしていないようだった。

「大丈夫？　だったら、早く中に入ろう」

自分を気遣う声。

千秋はこの時、こういう声を随分久しく聞いていない、と感じていた。

利用し、利用される「協力関係」の中では、相手を気遣うことも気遣われることも無かった。

目的を果たせず捕まった後は、何を言われても責められているようにしか感じられなかった。

だがこの少年は、ただ当たり前に彼女のことを心配して声を掛けてくれた……何故か、そう感じることが出来た。

「あっ、待って」

先に扉をくぐろうとしている――それだって彼女の方へ目を向けて、先導しているのだ――少年の上着を、千秋は思わず掴んでいた。

「あの……ありがとう……」

今はそれが、彼女の精一杯だった。

「んっ？　どういたしまして」

それをこの少年が（千秋はこの時点でまだ、十三束の名前を知らない）自然に受け容れてくれたことが、自分でも不思議なほど千秋

は嬉しかった。

◇◆◇◆◇◆◇

藤林の部下に先導されて、地下シェルターが設置されている駅前広場にたどり着いた真由美たち一行は、その場の惨状に言葉を失った。

広場が大きく陥没していた。

その上を闊歩する、巨大な金属塊。

「直立戦車……一体、何処から！？」

藤林にとっても予想外の敵だったのか、呻くような声が唇から漏れる。

複合装甲板で全身を覆った人型の移動砲塔。

太く短い二本の脚に無限軌道のローラースケートを履かせているようなフォルムの下部構造と、一人乗りの小型自走車に様々な種類の火器がセットされた長い両腕と首のない頭部をつけた上部構造。

全高約三メートル半、肩高約三メートル、横幅約一メートル半、長さ約二メートル半の縦長の機体は、市街地において効率的に歩兵を掃討することを目的に元は東欧で開発された兵器だ。

それが二機。

弾薬フル搭載、兵員搭乗時の総重量が約八トン。二機で合計重量は十六トンになるとはいえ、それだけで舗装され補強された路面が陥没するものではない。

地下シェルター、または地下通路へ向けて、直立戦車から何らかの攻撃が加えられたことは確実だ。

「このっ！」

「花音、『地雷原』は拙いよ！」

茫然自失から回復した直後、一瞬で沸騰した花音が魔法を発動しようとするが、五十里が腕を掴んでそれを押し止める。

地下がどういう状態になっているか分からないのだ。この状況で

地面を振動させる魔法は惨劇を拡大することになる可能性が高い。
「そんなもの使わないわよ！」
五十里の制止を振り切って、魔法を発動しようとする花音。
彼女が見据えた標的は、
――穴だらけになって、白く凍りついていた。
「あっ……」
「真由美さんも深雪さんも流石ね。
手を出す暇も無かったわ」
呆然と立ち尽くす花音の横で藤林が苦笑気味に称賛すると、真由美は少し照れながら、深雪は微かな笑みを浮かべて、共に一礼を返した。
「……地下道を行った皆は大丈夫みたいです。誰かが生き埋めになっている形跡はありません」
そう告げたのは幹比古だ。
目を閉じたまま、心の一部を何処か別の場所に置いて来た様な表情は、まさしく、五感の一部を精霊に委ねて地下を探っているのだろう。
「そうですか。
吉田家の方がそう仰るなら確かでしょうね。
ご苦労様です」
「いえ、大したことでは」
藤林に労われて、幹比古は大急ぎで閉じていた目を開き早口で答えた。
こういう初心な反応をからかったり冷やかしたりするのが好きなメンバーがこの場には揃っていたが、
「――それで、これからどうするんですか？」
実際に飛び出したのは、エリカのこの台詞だった。
藤林がその挑戦的な口調に少しも動じたところが無かったのは、やはり大人の余裕と言うべきだろうか。
「こんなところまで直立戦車が入り込んで来ているのですから、事

態は思ったより急展開しているようですね。
私としては、野毛山の陣内に避難することをお勧めしますが」
「しかしそれでは、敵軍の攻撃目標になるのではありませんか？」
「摩利、今攻めて来ている相手は、戦闘員と非戦闘員の区別なんてつけていないわ。
軍と別行動したって危険は少しも減らない。寧ろ危ないと思う」
摩利が唱えた原則論は、真由美にやんわりと否定された。
「では七草先輩は、野毛山に向かうべきだと？」
当然とも思える五十里の問い掛け。
だが真由美は首を横に振った。
「私は逃げ遅れた市民の為に、輸送ヘリを呼ぶつもりです」
そういって彼女は、駅の方へ視線を向けた。
そこでは、シェルターの入り口を潰されて途方に暮れた市民の姿が、徐々にその数を増やしつつあった。
「まずアレを片付けて発着場所を確保し、ここでヘリの到着を待ちたいと思います。
摩利、貴女はみんなを連れて藤林さんについて行って」
「何を言う！？
お前一人でここに残るつもりか！？」
予想外の言い種に、摩利は当然、食って掛かった。
だが、真由美の回答も、断固たるものだった。
「これは十師族に名を連ねる者としての義務なのよ、摩利。
私たちは十師族の名の下で、様々な便宜を享受している。
この国には貴族なんかの特権階級はいないことになっているけど、実際には、私たち十師族は時として法の束縛すら受けず自由に振舞うことを許されているわ。
その特権の対価として、私たちはこういう時に、自分たちの力を役立てなきゃならない」
「――だったら僕もこの場に残りますよ」
真由美の言葉に込められた決意――あるいは覚悟に呑まれてしま

った摩利に代わって、五十里がそう応えた。
「僕も数字を持つ百家の一員として、政府から色々な便宜を受けていますから」
「啓が残るならあたしも！
あたしだって百家の一員よ」
「じゃあ、あたしもだね。
これでも一応、千葉の娘だから」
「わたしも残ります。
お兄様が戦っていらっしゃるのに、わたしが何もしないわけには参りませんから」
「わ、私だって！」
「会社のヘリを遣すよう、私も父に連絡します」
「俺は十師族でも百家でもありませんが……下級生の女の子が残るって言ってんのに、尻尾を巻いて逃げ出すなんて真似は出来ませんぜ」
「俺もです。腕っ節には自信があります」
「あたしも残ります。
あたしにはエリちゃんや桐原くんや皆さんほどの力は無いけど、少しでも罪滅ぼしがしたいから」
「吉田家は百家じゃありませんが……色々と優遇してもらっているという点では同じです」
「あの、私じゃ何のお力にもなれないかもしれませんが、皆さんの『眼』になるくらいのことなら……」
「……下級生が全員残ると言っているのに、あたしたちだけ避難する訳には行かないよな？」
「そうですね。それに真由美さんだけでは不安でしたし。真由美さんは意外と抜けているところがありますから」
「あのねぇ」
鈴音の台詞に抗議の声を上げた後（本当に「声をあげた」だけだった）、

「それにしても……みんな、バカね……」
演技ではなく、本気で「嘆かわしい」とため息をついた真由美は、その美貌を諦めに染めて、藤林に向き直った。
「お聞きの通りです。
本当に、ウチの子たちは聞き分けがなくて……折角のご厚意を、申し訳ありません」
深々と頭を下げる真由美と、その後ろで決まり悪げに目を逸らしている集団を見て、表情だけは真面目なままで、藤林は明らかに面白がっていた。
「いえ、頼もしいですね。
それでは部下を置いていきますので」
「いえ、それには及びませんよ」
その声は、一高生の側からのものではなく、藤林の背後からのものだった。
「警部さん」
「和兄貴!?」
同じ人物を指す異なる呼び掛け。
千葉警部は自分を「警部さん」と呼んだ藤林に身体を向けた。
「軍の仕事は外敵を排除することであり、市民の保護は警察の仕事です。
我々がここに残ります。
藤林さん……っと、藤林少尉は本隊と合流して下さい」
「了解しました。
千葉警部、後はよろしくお願いします」
タイミングの良すぎる登場と、リハーサルしてきたような台詞。
しかしその事については何も触れず、藤林はピシッと敬礼して颯爽と去って行った。
「う～ん……良い女だねぇ」
「あ、無理無理。和兄貴の手に負える女性じゃないって」
しみじみと呟いた独り言に、妹から容赦のないツッコミを受けて、

千葉警部はまさに「ぎゃふん」という気分で絶句してしまった。

3－（17）　アカい花（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

3－（17）　アカい花

大型特殊車輌専用の駐車場で不正規兵を相手取る三高の生徒は、その過半数が戦闘不能に陥っていた。

――吐き気を抑え切れずに。

「一条、少しは手加減しろ！」

「先輩こそ、下がっていてください」

その元凶たる将輝は、幾ら非難を浴びてもまるで聞く耳を持たなかった。

赤味を帯びた拳銃形態の特化型ＣＡＤが国籍不明のゲリラに向けられ、

紅の花が咲いて、散った。

うっ、と口元を押さえる声が、またしても将輝の耳に届いた。

彼が一人の敵を屠るたびに、敵も味方もどんどん戦意を低下させて行く。

（この程度でびびるなら、最初から戦場に立とうなんて考えるなよ）

どんな目で見られても、どんな言葉を掛けられても、将輝は心の中でそう嘯いて涼しい顔で無視している。

彼の主張は正しい。文句のつけようがない正論だ。

だが――人体が破裂して鮮血（正確には赤血球）を撒き散らす光景に、平然としていられる兵士が一体どれだけいるものだろうか。

一条家の秘術、「爆裂」。

対象物内部の液体を瞬時に気化する魔法。

それを人体に行使した場合、血漿が気化し、その圧力で筋肉と皮膚が弾け飛び、血液内の固形成分である赤血球が真紅と深紅の花を咲かせることになる。

彼の同級生と上級生は、一握りの例外を除いて、初めて「クリムゾン」の真の意味を知った。

◇◆◇◆◇◆◇

「……で？　何で和兄貴がここにいるわけ？」

駅前広場の片隅では、千葉家兄妹の心温まる、とは言えない団欒（？）が繰り広げられていた。（少なくとも兄の方は楽しんでいたから、団欒と言っても半分は間違っていない）

何故「片隅」かというと、直立戦車の残骸を片付け、引きずり出したパイロットを訊問し、ヘリが着陸できるように路面を整える作業に、エリカも寿和も向いていないからだった。――現役警部の寿和が「訊問に向いていない」というのもどうかと思うが。

とにかく、そういう訳でこの二人、あぶれてしまっていたのだ。

（二人の名誉の為に付け加えておくと、桐原と紗耶香もあぶれていた）

しかし、少なくとも寿和は、この場で役立たず扱いされたことを気にした様子もなく――役立たず扱いしたのは稲垣だ――、喧嘩腰で突っかかってくる妹との会話を楽しんでいるようだった。

「何で、とは心外な。

心優しい兄が、愛する妹の手助けをしたいと思って、何の不思議もないだろう？」

「心優しい！？

どの面下げてそんな空々しい台詞を……」

「こらこら、エリカ。女の子が『どのツラ』なんて下品な言葉を使っちゃいけないよ」

「アンタが！　今更！　このあたしに！　お嬢様らしく振舞えなんて言えた義理！？」

「やれやれ、哀しいなぁ……俺はこんなに妹のことを愛しているのに」

流石に白々しさが極まったのか、激していたエリカの感情がスッと冷却された。

一転して冷ややかな眼を向けてくる妹に、寿和はつまらなさそう

に、ため息をついた。
「手助けに来た、というのは本当だ」
シラけた顔と投げ遣りな口調でそう告げて、その言葉を鼻で笑った妹に、寿和は意地の悪い笑みを向けた。
「そんな態度で良いのか、エリカ」
「何よ」
エリカが少し怯んだ表情を見せた。
相手が絶対的な強者であった子供の頃――今よりもずっと小さかった子供の頃の苦手意識は、そう簡単に拭い去れるものではない。
「俺はお前に良い物を持って来てやったんだぞ」
「良い物？　いらないわよ、別に」
それでもエリカの強がりは――意地は、折れなかった。千葉寿和はエリカにとって、二番目に屈服することの出来ない相手だった。
それは寿和にとって、望ましいもの、小さな頃の妹に望んだものだった。
「そう言うな。今日のお前には必要な物だ」
寿和にとって「小さなエリカ」は、ついつい意地悪をしたくなる可愛い妹だった。だがここにいるのは、あの頃より強くなろうとしている、もっと可愛い妹だ。「今日のところはここまでにしといてやるよ」などと悪役か負け犬の風味が漂うことを考えながら、もたれ掛かっていたワゴン車から、緩やかなカーブを描く長大な得物を取り出した。
そのシルエットを見て、エリカが目を見張り絶句する。
細長い袋を取り去って、寿和はその大太刀をエリカに差し出した。
全長百八十センチのサイズはエリカの身長を大きく上回る。
刃渡りだけで百四十センチ。
太刀にしては不自然なほど反りが少ないその刀身は――
「……大蛇丸（オロチマル）……？」
……何故ここに……？」
「何故？　愚問だぞ、エリカ。

大蛇丸は『山津波』を生み出すための刀で、『山津波』を使えるのはお前だけだ。
親父にも修次にも『山津波』は使えない。
型をなぞる事は出来ても、『使える』と言えるのはお前一人。
故に大蛇丸は、お前の為の刀だ」
差し出された大太刀を受け取るエリカの手は震えていた。
身体ごとよろめきそうになる重量をしっかりと握り締めることで、その震えはようやく止まった。
千葉家が作り出した最強の武具。
雷丸と共に、刀剣型武装デバイスの最高傑作と千葉家が自負する秘密兵器。
例えほんの一時のことであったとしても、この刀を自由に振るうことが許されるとは、エリカは思っていなかった。
「嬉しそうだな」
兄の声にハッと顔を上げる。
兄に抱いている反発心を忘れるほど、エリカは大蛇丸に心を奪われていた。
何故なら、この刀は――
「自分の分身たる愛刀を手にして、それほど嬉しかったか、エリカ？
フッ……やはりな。親父がどう思おうと、修次が何を考えていようと、エリカ、お前は千葉の娘だよ」
「……フン！　今回は礼を言っとくわ」
「だから女の子がそんな下品な……」
寿和の台詞を最後まで聞かず、エリカはクルリと背中を向けた。
大蛇丸を手にスタスタと遠ざかっていくエリカ。
妹の分かりやすい態度に、寿和は楽しそうな笑みを浮かべた。

「何か分かった？」
パイロットを引きずり出した直立戦車のコックピットに上半身を突っ込んでいた五十里は、背後から掛けられた声に身体を引き抜い

て振り向き、頭(かぶり)を振った。
「ダメですね。
僕もこの手の兵器はそれほど詳しい訳じゃありませんが、中古市場に出回っている旧型機だと思います。
国籍を特定できるような物は見つかりませんでした」
「兵器に中古市場なんてあるの？」
ビックリした顔で質問した真由美に、五十里は笑って頷いた。
「戦闘機にだって中古市場はありますよ。
局地戦なら大戦期の兵器だって今でも現役です」
フ～ン、と感心している真由美に五十里が微笑ましい気持ちになっていると、何やら横手から不穏な空気を感じた。
今更、目を向けなくても、誰の気配かすぐに分かる。
表情を改めて、五十里は改めて真由美に目を向けた。
「やはり、パイロットから詳しい事情を聴取する以外にないと思います」
「でも、素直に話すでしょうか？」
「そこは摩利の腕に期待しましょう」
花音のもっともな疑問に、真由美が肩を竦めた。
「じゃあ僕は整地作業の手伝いにいってきます」
ペコリと頭を下げた五十里と、彼にピタッとくっついている花音の背中を見送って、真由美は尋問を担当している摩利たちの方へ向かった。

縛り上げられた二人のパイロットは、顔に軽い凍傷を負っている以外、特に怪我は無かった。
その内の片方を稲垣が、片方を摩利が訊問している。
「どう？」
真由美は摩利の方へ近寄って、簡単に状況を訊ねた。
「ダンマリだ。
こんな事と分かっていたら、もっと強い香水を持って来てたんだ

がな……」

思うように上がらない成果に、摩利は少し苛立っているようだ。

「仕方ないわよ。薬物を使わない、が関本くんから話を聞く時の条件だったんだもの」

対人戦闘のスペシャリストと自他共に認める摩利は、魔法や刀剣だけでなく、小型銃器、更には化学兵器の扱いにも長けている。

気流を操作して揮発性の薬物を敵だけに経鼻投与するのも彼女の得意技の一つ。

向精神作用のある香水を相手にだけ嗅がせるという悪女（というか犯罪そのもの）の技も隠し持っている。

今もその手の薬物を縛り上げた相手にこっそり使ってみたのだが、残念ながら効果は見られなかった。

「拷問でもするか」

「チョッと、それはいくらなんでも」

摩利が物騒な台詞を呟き、真由美が慌ててそれを止める。

「大丈夫だ。一切傷痕を残さず苦痛だけを与える自信がある」

「そういうことを言ってるんじゃないの！

……摩利、貴女少し休んだら？」

「……そうだな、そうさせてもらおうか」

煮詰まっている、という自覚が多少はあったのだろう。

摩利は手を振って、ベンチで地図を広げている鈴音の方へ歩いて行った。

鈴音が座っているベンチの前の地面（当然舗装されている）には、縦三メートル横四メートルに拡大された高精細地図が映し出されていた。

鈴音が端末に呼び出した地図を、ほのかが光を屈折させて投影しているのである。

彼女たちが今いる、桜木町から山下町までの海岸通り地区の詳細地図。

そこへ新たに、船と人の群れと街並みが投影された。
「ほう、凄いじゃないか」
「あっ、渡辺先輩」
路面に投影された映像がぼやけて崩れ、すぐに鮮明な画像を取り戻す。
街並みの映像が回転し、地図とピッタリ重なり合う。
鈴音の指がフルオープンにしたノート型端末のキーボード上を忙しく踊り、パチッ、と最後にエンターキーを叩いて鈴音は顔を上げた。
「何か分かりましたか」
「残念ながら、まったくだ」
鈴音の問い掛けに苦い顔で首を振り、すぐに興味津々の表情を取り戻す。
「こっちは成果がありそうだな」
「ええ。光井さんのお蔭で、現状における敵の兵力と動向がおおよそ把握できました……光井さん、もう良いですよ」
鈴音の称賛に、ほのかがはにかんだ笑みを浮かべて頷く。
同時に、路面の地図が消えた。
「光を制御する魔法にしても、これだけ精密にコントロール出来るのは珍しいんじゃないか？」
「そうですね。低高度偵察機並みの鮮明な映像を、光の屈折だけで実現出来るという話は記憶にありません。
これはもう、通常の光屈折魔法とは別種の魔法と考えた方が良いでしょう」
淡々とした鈴音の称賛に、ほのかは顔を赤くしていた。
「そんな……達也さんや深雪に比べれば、私の魔法なんて大したものじゃ……」
「謙遜する必要はないぞ、光井。
確かにあの二人の魔法は強力だが、時として情報は攻撃力以上に戦況を左右するんだ」

「そうですよ、光井さん。
こうして状況を俯瞰的に把握出来るというのは大きな意味を持っています。
無人偵察機も成層圏カメラとの通信手段も持たない私たちにとって、貴女にしか出来ないこの魔法は、極めて有益なものです」
「ありがとうございます！」
赤面しながら勢い良く一礼するほのかを、二人の三年生は微笑ましげに見ていた。
図太い（？）下級生ばかり目に付く中で、このように初々しい反応は新鮮に感じられたのだ。

◇◆◇◆◇◆◇

国際会議場から魔法協会支部が入っている横浜ベイヒルズタワーへ向かうには海岸寄りの道を使う方が近いが、内陸寄りの道を使ってもそれほど遠回りになる訳ではない。
敵の主力は国籍不明戦闘艦が吐き出している上陸部隊。市中に潜伏していた兵力も、海岸沿いで活発に活動している状況だ。
しかし克人は、「迂回しますか？」という質問に首を振った。
縦、ではなく、横に。
そして今、克人を乗せた軍用車輛は砲火の飛び交う海寄りの道路をベイヒルズへ最短距離で向かっていた。
ベイヒルズに近づくにつれて――正確には山下埠頭へ近づくにつれて――敵は重武装化していく。侵攻軍の機動兵器（具体的には直立戦車）を見掛ける頻度も少しずつ上がって来ていた。
「敵の兵力が集中している、と言うより、敵兵力の展開が進行しているのでしょう」
助手席に乗る楯岡軍曹が克人にそう説明した。
克人はそれに、無言の頷きを返す。
言葉を返さなかったのは下士官と見下しているから、ではなく、

魔法により多く集中力を割いている為だった。
その直後、進行方向上の脇道から、多連装ミサイルランチャーを担いだ小集団が路上に現れた。
私服兵ではない。国籍を明らかにする標章は身につけていないが、デザインが統一された野戦服を身に着けている。
敵上陸部隊と見て間違いない。
その分隊から、克人の乗る車輌目掛けて、対戦車ミサイルと思しき四発の携行ミサイルが発射された。
至近と言っても良い距離だ。
いくら初速の遅いミサイルといえど、オフロード用の車輌で躱すことの出来る状況ではない。
だがハンドルを握る音羽伍長に動揺はなく、楯岡軍曹は助手席の風防越しにオートライフルを構えていた。
ミサイルは、車輌前方五メートルの空中に着弾した。
半球状に車を覆う障壁を舐める爆炎。
その中から撃ち出された銃弾が敵兵を薙ぎ払う。
外からの攻撃は通さず、
内からの攻撃は妨げない。
指向性を有する透明な防壁は、言うまでもなく、克人の領域魔法だ。
自分を中心とした半球面状の薄い空間を、一定量以上の熱量と酸素分子より大きな物質の侵入を許さない性質へと改変する。
高速で移動する車輌の上でも、克人の防壁魔法に揺るぎは無い。
藤林の部下は、この短い行程の中で既に「鉄壁」の称号が意味するものを実感するに至っていた。

◇◆◇◆◇◆◇

独立魔装大隊は独立した作戦単位として「大隊」と位置づけられているが、人数面では二個中隊の規模しかない。

今回、元々は本来の任務――つまり魔法技術を利用した兵器の運用テスト――の為に出動していた人数は、その内の五十人。大型装甲トレーラー二台にその人数分の新装備が搭載されていた。

「――どうかな、特尉」

「流石です。脱帽しました」

ハンガーに掛かったプロテクター付ライダースーツのような外観のツナギを前に、真田は何度も得意げに頷いた。

「サイズは合っているはずだから、早速着替えてみてくれ給え」

真田に促されて達也が着ている物を全て脱ぎ捨てる。

トレーラーの中には女性士卒の目もあったが、お互い気にする様子はなかった。

独立魔装大隊の兵士は皆、ある意味において実験動物であり、全身検査も珍しくない。男性士卒が女性士卒に全裸を見られるだけでなく、その逆も間々(ままま)起こることなのだ。羞恥心で立ち竦んでしまうようではやって行けない職場だ。

達也は手早く専用のアンダーを着込み、テキパキと黒いツナギ――ムーバル・スーツを身に着けた。

ごついベルトを腰に巻き、スーツのジョイントにカチリと接続。

両腰のホルスターに自前のＣＡＤを差し、最後にフルフェイスのヘルメットを被った。

「問題無いようだね」

『ええ、誤差は許容範囲です』

達也の声は、トレーラーの室内スピーカーから聞こえた。通信機が自動でオンになっていたことに気付いた達也は、ヘルメットを操作して口元を覆うマスクを外した。

「防弾、耐熱、緩衝、対ＢＣ兵器は固(もと)より、簡単なパワーアシスト機能も設計通り付けておいたよ。

そして無論のこと、飛行ユニットはベルトに仕込んである。

緩衝機構と組み合わせて射撃時の反動相殺としても機能するように作ってあるから、空中での射撃も可能だ」

「お見事としか言いようがありません。自分が設計した以上の性能ですね」
「いや、僕も良い仕事をさせて貰ったよ」
真田が達也に握手を求め、二人がガッチリ手を握り交わしているところへ、二人の兵士を引き連れた風間がやって来た。
「真田、そろそろ気は済んだか」
無言で敬礼を返す部下をジロリと睨み、風間は達也へと視線を転じた。
「では早速だが特尉、この二人を連れて、柳の部隊と合流してくれ。柳の隊は瑞穂埠頭へ通じる橋の手前で敵部隊の足止めをしている」
「柳大尉の現在位置はバイザーに表示可能だよ」
「了解しました」
マスクを付け直してから、顎の内側にあるポインタを指で操作して柳隊との相対位置を確認し、達也はトレーラーの外へ向かった。
タラップを使わずにトレーラーから飛び降りた達也は、その勢いが消えぬ内にベルトのバックルを叩いた。
それは、飛行魔法用ＣＡＤのスイッチ。
軽く地面を蹴って、達也はそのまま空へ駆け上がった。

◇◆◇◆◇◆◇

山下埠頭に機動部隊を上陸させた国籍不明の侵攻軍は、部隊を二つに分けていた。
一つは魔法協会のあるベイヒルズへ向かい直線的に進軍。
もう一つは海岸沿いに北へ進攻。
北へ向かった部隊は、三高により足止めされている不正規兵と合流することなく寧ろこれを迂回し、海路の脱出を図る民間人を追いかけるような動きをしていた。
その動向は、独立魔装大隊の知るところだった。
機動性を重視した六台の装輪式装甲戦闘車輌による進攻部隊。

走りながら二列縦隊に隊列を組み直して、橋へ殺到する装甲車の群れを前に、柳大尉はヘルメットの陰でニヤリと笑った。

彼は典型的な対人戦闘魔法師だ。

得意とする技術は、相手の運動ベクトルを先読みして、体術と魔法の連動により、それを誘導、増幅、あるいは反転させる白兵戦技。

この様な機甲部隊が相手では、出来ることはほとんど無かった――独立魔装大隊に配属されるまでは。

独立魔装大隊は隊長が古式魔法の使い手である為か、１０１旅団の中でも古式の魔法師の割合が多い部隊だが、柳はその中でも典型的な古式の術者だった。

斬り合い、殴り合いの中で魔法を行使する為の工夫として、身体の動作、「型」そのもので結印を代用する技術を受け継いだ柳は、ＣＡＤの操作さえも隙につながるタイムロスとして敬遠していた。

だがそんな彼も、引き金を引くだけで数十トンもの重量物をひっくり返してしまう大規模な魔法を編み上げる特化型ＣＡＤの実用性は認めざるを得なかった。

この規模の魔法を結印やその代替儀式で発動しようと思ったら、最低でも五秒は掛かるだろう。

それは敵を目前にして、許される時間ではない。

（気に喰わんな）

心の中でそう呟きながらも、彼の唇は笑みに歪んだままだ。

マスクの奥に獰猛な笑みを刻んだまま、柳は遮蔽物の陰から装甲車の隊列正面へ躍り出た。

全身黒尽くめのアーマースーツ。

それが、唯一人。

予想外の敵に戸惑いを覚えたのか、装甲車の砲塔は火を噴かなかった。

あるいは、たかが一兵、その巨大な車輪で踏み潰すつもりだったのかもしれない。

装甲車とアーマースーツでは防御力に差がありすぎる。

柳も敵の砲口の前に長居するつもりなど更々無かった。
銃剣付のライフル――の外見をしたＣＡＤの引き金を引き、魔法の発動を確認して再び遮蔽物の陰へ飛び込む。
真っ直ぐに土埃が上がり、路面に直線が刻まれた、様に見えた。
その直線に触れた装甲車の車輪が、浮き上がる。
地面を揺るがす轟音の連鎖が、発動した魔法の結果を柳に告げた。
僚車を巻き込んで横転している装甲車の列。
よく見れば、東側を進んでいた車輌が西側の車輌にのしかかるようにして転倒しているのが分かる。
加重系魔法「千畳返し」。
地球の重力を南北の線上で瞬間的に遮断することにより、対象物は地球の遠心力によって東側が持ち上げられ西へ転がることになる。
装甲車の底面部、「腹」に向かって空から銃弾が降り注ぐ。
柳の魔法が発動すると同時に空へ上がった隊員による銃撃だ。
ライフル形態の武装一体型ＣＡＤから放たれる銃弾は、貫通力向上の効果を付与され、地雷に備えた装甲車の底面装甲を容易に貫く。
燃料タンクを撃ち抜かれ炎上した車体が下側から撥ね飛んだ。
押し潰されたかに見えた西側の装甲車が、無傷の姿を現す。
どうやら侵攻軍の装甲車には「反発」の魔法を得意とする魔法師が防御要員として乗り込んでいるようだ。
十トンを超える重量物を撥ね除ける強度の障壁は、通常火器による砲撃のほとんどを無効化するに違いなかった。
かなり強力な魔法師。あるいは魔法を増幅するシステムを積んでいるのだろうか。
再び空から銃弾が降り注いだ。
銃撃を強化する魔法と、銃砲弾を弾き返す魔法の干渉力が喰い合って、双方の魔法が効力を失う。
徹甲弾が装甲に喰い込む、が、貫通するには至らない。
装甲車の機銃砲塔が上を向き、空中に大口径機銃弾を散撒（ばらま）いた。
二人の隊員が姿勢を崩し、地上へ落下する。

一人は脚、一人は腹部に被弾したようだ。
スーツの防弾効果のお陰で、身体が千切れる重傷には至っていない。
遮蔽の陰からそこまで見て取った柳は、再び敵の前に飛び出し、続けざまに三度、引き金を引いた。
柳の「千畳返し」は地球の重力を遮断する魔法。
対象物の付随情報に干渉するものではない。
敵が車体に掛けた防御魔法に関わりなく、重力遮断の魔法は発動した。
勢いよく横転する敵の装甲車。
転倒の衝撃で装甲車を守る魔法障壁が途切れたのか、
空中から放たれた銃弾は装甲車の底面装甲を貫き、残る装甲車三台も紅蓮の炎に包まれた。

達也が柳と合流した時、最初の戦闘は既に終結していた。
柳は負傷者の治療に立ち会っているところだった。
「特尉、丁度良かった」
達也が声を掛けるより早く、柳が彼の姿を認めて呼び寄せる。
柳の前でサッと敬礼した後、達也はスーツを脱がされて横たわる負傷者を覗き込んだ。
「弾は抜いた。後は頼めるか」
ヘルメットを脱いだ柳の顔に表情らしきものは浮かんでいなかったが、瞳の色が心の裡を隠し切れていない。
「了解です」
キッパリとした返事で、柳の罪悪感を不要なものと否定して、達也は左腰から銀色のＣＡＤを抜いた。

◇◆◇◆◇◆◇

ほのかの魔法により敵兵力の俯瞰映像を入手した鈴音は、侵攻軍

の兵力が思ったよりも少ないことに気付いていた。
「――それにしては戦線が派手に広がっているような気がするが？」
「現在、戦線、と呼べるものは存在しません」
摩利の疑問に、鈴音は遠慮の無い回答を返した。
「内陸部の戦闘は点で行われています。
潜入したゲリラ兵により交通と通信を混乱させ、上陸部隊が直線的に目標の制圧に当たる……これが侵攻軍の基本戦術だと思います」
「リンちゃんがそう言うなら、その通りなんだろうけど……
じゃあ、敵の目標って何かしら？」
首を傾げた真由美に、鈴音も少し、考え込む素振りを見せた。
「……一つは魔法協会支部。これは確実でしょう。
もう一つは海路で脱出を試みる市民を狙っているように見えますが、これは多分、人質を欲しているのではないかと」
「人質？」
「市民を殺傷すること自体が目的とは思えません。もしそうなら、揚陸艦ではなくミサイル艦で侵入してきたと思います。
人質交換か、身代金か……最終目的は分かりませんが」
「ならば、いきなり砲弾やミサイルが浴びせられる危険性は少ないということだな」
「おそらくは。
しかし人質が目的なら、ここも標的になる可能性が高いと思います」
そう言って鈴音は、背後を、改札前のホールに集まった市民の集団を見た。
「さっきの藤林さんの話からすると、鶴見の援軍は既に到着しているはずだわ。
ルートを考えれば、瑞穂埠頭に集まった市民を保護して、余った兵力で掃討戦という手順になるはず」
「そうですね。私もそう思います」
「敵の目的が人質なら、守りの薄いこちらへ流れてくる、か……

あたしは――そうだな、花音の方の加勢に行ってくる」
「そうね……人数が少ないといっても、あちらには深雪さんがいるから」
「ああ、アイツの冷凍魔法は戦術級と言っても差し支えない」
真由美と摩利は、顔を見合わせて苦笑を浮かべた。
おそらく、「兄妹揃って……」とでも考えたのだろう。
「……でも、摩利、無理はしないでね。
貴女は機械化部隊と相性が悪いんだから」
「分かっているさ」
小走りに駆けて行く摩利の背中を見て、近くに控えていたほのかが真由美に怖ず怖ずと話し掛けた。
「あの、私も迎撃に回るべきでしょうか？
フロントは無理でも、バックアップなら出来ると思いますし」
多分、勇気を振り絞ったほのかの申し出に、真由美は笑顔で首を左右に振った。
「光井さんはヘリが来た時に手伝って貰わないと行けないから。
それに深雪さんや花音ちゃんの役目は、迎撃じゃなくて警戒よ。
私たちはプロの実戦魔法師じゃないんだから、我が身を危険に曝してまで戦う必要はないし、戦うべきじゃないわ。寧ろ逃げることを考えるべきよ」
真由美は悪戯っぽく語尾を上げてそう諭した。
だが深雪やエリカは、決して逃げたりしないだろう、とほのかは半ば以上、確信している。
不安に揺れる眼差しを雫に向けると、親友も同じ色を瞳に宿していた。
「――来ました！」
丁度その時、メガネを外して海側をじっと見ていた美月が、そう声を上げた。

3－（18）　秘剣競演（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

3－（18）　秘剣競演

「――来た」

最初に敵の接近に気付いたのは、幹比古だった。

風に乗せて散撒いた呪符が、敵の映像を送って来たのだ。

「直立戦車……さっきとは違う。随分、人間的な動きだ」

「人間的？」

幹比古の言葉に、何故か鼓膜保護用のヘッドフォンを付けているエリカが首を傾げる。（今は会話に支障がないよう耳からずらして付けている）

直立戦車は狭い路地に入り込めるよう、移動砲塔を上に伸ばし、階段や瓦礫を通り抜け易いよう無限軌道に短い脚部を付けただけで、戦闘用ロボットとして開発されたものではない。

現在の軍事技術体系に、少なくともエリカが知る限りでは、人間の動作を再現する戦闘用ロボットは存在しない。

「もうすぐ見える……そこ！」

しかし今は、常識との乖離に考え込んでいる暇は無い。

幹比古の声と共に、ビルの陰から直立戦車が姿を見せる。

無限軌道を備えた短い脚部。

前後に長い胴体部。

そこまでは通常の直立戦車と同じ。

だが、右手にチェーンソー、左手に火薬式の杭打ち機を取り付けた腕は、通常の直立戦車ではあり得ないもの。

災害現場で使われる障害物除去用の重機を人型にすれば、このようなフォルムになるだろうか。

加えて、右肩に榴弾砲、左肩に重機関銃。

「戦闘用ロボット！？」

自分の妄想が現実になったような錯覚に、エリカが思わず声を上

げてしまう。
その隣では深雪が、氷の眼差しを禍々しいフォルムの機動兵器に向けていた。
直立戦車（？）が視界に入ると同時に、深雪は魔法を発動していた。
正しく、問答無用。（もっとも、問答無用とは本来こういう意味ではないが）
三輌の機体が足を止めた。
無限軌道が凍り付き、停止したのだ。
前のめりに倒れなかったのは、バランス制御システムの優秀さを示すものか。
しかし凍り付いたのは足だけではない。
深雪の魔法は、それ程ちゃちなものではなかった。
この凍結が魔法による攻撃だということは、少なくとも直立戦車を操縦する程の軍事知識を持つ者ならばすぐに分かるはずだ。
そして自分たちの前に、長い髪を風になびかせ堂々と立ちはだかる少女が、その魔法を行使しているのだということも、理屈ではなく理解できたはずである。
それなのに、機銃も榴弾砲も、火を、噴かない。
単なる凍結魔法ではなく、「凍火」の同時行使――深雪の魔法は、行動の束縛と共に、熱量の増加も禁止しているのである。
火器が封じられた、と見るや、レオが飛び出した。
この反応の速さ、勝機に対する嗅覚の鋭さは、正に野性的と称して差し支えないだろう。
手にする得物は、双頭ハンマーに似た短いスティック。
全長約五十センチ、グリップがおよそ三十センチ。
ハンマーヘッドから突き出た先端はグリップよりかなり幅広で、長さも約十センチ。縦横の比率は、寧ろラテン十字の十字架（クルス）に近いかもしれない。
そのハンマーヘッドの部分がモーターの駆動音を立て、スティッ

クの先端から黒いフィルムが吐き出される。
薄い、薄い、黒く透き通ったフィルム。
モーター音が止まった直後、そのフィルムは真っ直ぐな二メートルの刃に変わった。
完全な平面、横からでは存在を確認できない極薄の刃。
これこそが千葉一門の秘剣「薄羽蜻蛉」。
硬化魔法により完全平面状に固定された、カーボンナノチューブ製シートの刀身。
薄羽蜻蛉とは、術の名前であり、同時にこの特殊な武装デバイスの名前だ。
レオが右手の薄羽蜻蛉を一閃した。
カーボンナノチューブを織って作られた厚さ五ナノメートルの極薄シートは、どんな刀剣よりも、どんな剃刀よりも鋭い刃となって、凍り付いた装甲板を易々と切断する。
前面装甲が斜めに斬り裂かれる。
斬った、とも分からぬ程、僅かな細い線。
そこから赤い雫が滴り落ちる。
素早く跳び退ったレオを追いかけるように、直立戦車の機体が路面に倒れた。

スタートを切る反応はレオに一歩後れを取ったが、獲物を仕留めたのはエリカの方が早かったかもしれない。
パッとヘッドフォンの位置を直すと、左腕で抱くように立てていた大蛇丸の柄を掴み、鯉口を切る。
鞘から柄へ左手を移動させると同時に、鞘は峰側を蝶番にパカッと開いて、長大な刀身が露わになった。
手の内をそのままに、鍔のすぐ下にあるボタンを、エリカは右手の人差し指で押し込んだ。
全長百八十センチの得物を肩に担ぐように持ち上げる。
この時には既に、魔法が発動していた。

重さ十キロの大太刀が軽々と振りかざされた。
直後、エリカの姿が消えた。
少なくとも、隣にいた深雪には消えたように見えた。
破砕音が轟く。
旧式のスクラップ工場で聞こえるような、金属が潰れて裂ける音だ。
大太刀を地面まで振り下ろした姿勢のエリカ。
鈍い断面で前面装甲を唐竹割に断ち切られ、叩きつけられた様に倒れている直立戦車。
刀身を濡らす赤い液体は、間違いなく、操縦者の鮮血だ。
加重系・慣性制御魔法「山津波」。
自分と得物に掛かる慣性を極小化して敵に高速接近し、インパクトの瞬間、消していた慣性を上乗せして得物の慣性を増幅し対象物に叩きつける秘剣。
この偽りの慣性質量は助走が長ければ長いほど増大し、最大で十トンに及ぶ。
慣性を消して得たスピード、プラス、慣性を増幅して得た重さ。
最大威力の山津波は、十トンの巨大なギロチンの刃を空高くから落とすようなものだ。
その威力に耐えられる装甲は、現時点でおそらく存在しない。
慣性消去から慣性増幅へ切り替えるタイミングの見切り。
慣性を消した不安定な状態で駆け抜ける足捌きと、刃筋をぶれさせない操刀技術。
何より、無慣性状態のスピードに負けない知覚速度と運動神経。
それが山津波の必要条件。
エリカの先天的な「速さ」に加え、ただこの技を修める為に費やすことを強いられた日々があって、はじめて可能となる剣技。
エリカが次の獲物に目を向ける。
レオは既に、次の獲物に肉薄していた。
山津波の発動。

刹那の後、破砕された直立戦車の前で、薄羽蜻蛉を解除したレオが両耳を抑えて蹲っていた。

二つに分かれた「警戒」チーム――実態は「迎撃」チーム――のもう一方も、直立戦車相手の戦闘に突入していた。

ここでは五十里が、予め地下三メートルの地層に振動を遮断する壁を作って、地面を媒体とする花音の魔法を使用可能としていた。

そして五十里が地下に張った「陣」は、地上にも索敵という作用を及ぼしている。

固体表面・内部にサイオンの糸を通して魔法発動を補助する効果を持つパターン、即ち魔法陣を編み上げる。

刻印魔法の権威、五十里家の英才・五十里啓が得意とするこの技術は、幹比古が使う古式魔法の呪法陣と不思議なほど似通っている。

結局の所、現代魔法も古式魔法も「魔法」であることに変わりはない、ということだろう。

ならば二人が同じ役割を担っていたのも、ある意味当然か。

「来たよ」

五十里の声に、花音が起動式を展開する。

五十里がカバーしているといっても、地下がどういう状態かハッキリ分かっていない以上、あまり強力な振動魔法は使えない。

異形の直立戦車が二輌、その姿を見せた。

兵器の種類に余り詳しくない花音は、その形状を見ても驚かなかった。

余計な思惟に囚われることなく、予定通りの魔法を繰り出した。

舗装された路面が細かく砕けて砂になり、

細かく振動する地面から、水が滲み出て水たまりを作る。

直立戦車の全高が、頭一つ分、低くなった。

足が地面に沈んだのだ。

無限軌道は砂地や湿地も平地同様に走行する為のもの。

だが砂と化し、液状化した路面は、小型のキャタピラを苦も無く

呑み込んだ。
千代田家の魔法、「地雷原」のバリエーションの一つ、「振動地雷」。
その効果は今、この場で展開されている通り。
地面を液状化し、敵の足を止める魔法。
唸りを上げて泥水を掻き出す無限軌道は、すぐに砂を噛んで停止した。
いつの間にか水分が抜け、液状化した路面は直立戦車の足をくわえ込んだまま凝固していた。
花音が地面の液状化に続いて、水分子を振動させ蒸発させたのだ。
振動地雷の魔法はこの捕獲までが一連のプロセス。
旧世紀の物とは多少組成が変わっているとはいえ、舗装材の基本素材はコンクリート、とは言うものの、水和反応が再現された訳ではないので単に水を含んでいた砂が固まったのと同じ状態だ。
従って捕獲といっても本当に一時的な拘束に過ぎないが、敵の眼前で移動できなくなるということは、それが一時的なものであれ致命的な意味を持つ。
立ち往生した直立戦車の左右に、寿和と桐原が姿を見せた。
空中から襲い掛かる寿和。
直立戦車の操縦者はそのスピードに反応できない。
隼（ハヤブサ）も斯くや、の勢いで舞い降り、その勢いのまま操縦席を深々と斬り裂く。
秘剣・斬鉄。
刀を「刀」という単一概念の存在として定義し、魔法式で設定した斬撃線に沿って動かす移動系統魔法。
但し、得物がこの「雷丸」以外であれば。
雷丸を以て「斬鉄」を発動した場合、刀だけでなく剣士も魔法の対象に含まれる。
刀が単一概念で定義されると共に、「刀を振るう剣士」が集合概念として定義され、僅かなブレもない高速の襲撃、高速の斬撃が可

能となる。
刀を振り下ろすとき、自分の身体がどう動いているか。何千、何万、何十万回という素振りと型稽古により全身に斬撃動作をすり込ませてはじめて可能となる技。
千葉家の長男は弟にその才は劣る、と評価されていた。
事実、修次は天才であり、寿和は天才ではないと、寿和本人が思っている。
だが天才でないが故に、人知れず愚直に型稽古を繰り返した結果、彼は雷丸による斬鉄、「迅雷斬鉄」を会得した。
型を極めた技であるが故、「迅雷斬鉄」を使う時、彼は型どおりにしか動けない。故にその稽古を他人に見せる訳に行かなかった。
そのことで彼を怠け者と誤解していた者は多かったが、実は、果てしない努力の末に彼はこの秘剣を手にしたのである。
コンソールを両断された直立戦車は、完全に沈黙した。

地を蹴って接近する桐原に向かって、直立戦車の上半身がクルリと回転した。
刀の間合いまで、後一歩。
機銃の銃口が桐原に向けられた、が、銃撃が放たれることはなかった。
桐原の背後から飛来した小太刀が、機銃に突き刺さり直立戦車の肩からもぎ取ったのである。
桐原の斜め後方に立つ紗耶香が、もう一本、小太刀を投げた。
榴弾砲が同じようにもぎ取られる。
投剣術。
学校では剣道を修めていた紗耶香だが、彼女の父親は剣術で実戦に臨んだ魔法師だ。
家では剣術の技も手解きを受けていた。
その中で彼女が最も得意とする技がこの投剣術。
手裏剣やスローイングダガーではなく、小太刀、脇差しを投げ付

ける技。
打ち合いでは、女性故にどうしても腕力に劣る。例えば桐原の得意とする高周波ブレードも、刀を振るのは腕力だ。魔法で太刀行きを制御するのは、彼女の魔法技術では難しい。
だが投剣術なら、投げる動作に合わせて魔法を発動すれば腕力は関係ない。
そう考えて修練を積み、工夫を重ねてものにした魔法だ。
投げた直後の隙が大きすぎる為、素早い相手には使えないが、今回のように大きく動きが鈍い的なら最大限の効果を発揮する。
火器が無力化されたのを見て、桐原は最後の一歩を踏み込んだ。
頭上から振り下ろされる巨大なチェーンソー。
しかし、その軌道は見切っている。
身体を自然にスライドさせながら、桐原の刀は直立戦車の左脚を両断する。
高周波ブレード。
彼の最も得意とする魔法は、地雷や対戦車ライフルを想定した装甲板を易々と斬り裂いた。
のしかかるように倒れ込んでくる車体。
桐原は後退しながら杭打ち機を根本から切り落とし、側面に回って操縦席に刀身を突き込んだ。
手に伝わる、肉を貫く感触。
桐原は僅かに顔を歪めて刃を引き、大きく跳び退って転倒した直立戦車から距離を取った。
彼の見せた表情は、笑（嗤）い顔では、決してなかった。
そして、出番のなかった摩利は、誰にも見えないよう、こっそり肩を竦めていた。

◇◆◇◆◇◆◇

将輝や吉祥寺は知る由もないことだが、侵攻軍の陣容にそれ程の厚みは無い。

大型貨物船に偽装した揚陸艦（と言うより陸上兵力輸送艦）が一隻と、事前に潜伏させた不正規兵が敵の総兵力である。広範囲に兵力を展開し継続的な占領拠点を築くことが目的の侵攻ではなかった。

「もう終わりか……？」

それを知らない将輝が、攻撃が途絶えた敵軍にこう訝しんだのも、決して彼が好戦的だからというばかりではない。

「これで終わりかどうかなんて、僕たちに分かるはずが無いよ。情報を手に入れる手段がないんだから」

将輝の独り言は、背後から歩み寄って来た吉祥寺によって応答を得た。

彼の周りには、吉祥寺しかいない。

左右に仲間の姿は無く、前には血塗れの死体しかない。

「だから脱出するなら今の内だ」

赤味を帯びた光沢を放つ拳銃形態のＣＡＤを懐にしまいながら振り向いた将輝に、吉祥寺は真面目な顔でこう続けた。

「タイヤの修理は終わっているから、将輝も早くバスに戻って」

そう言われて背後を見回すと、敵の迎撃に当たっていた生徒たちもほとんどがバスの近くに集まっていた。

「行こう。可能な限りすぐに出発した方が良い」

促す吉祥寺。

だが将輝は、首を横に振った。

「将輝？」

「俺はこのまま、協会支部に向かう」

「無茶だよ！」

将輝の言葉に、吉祥寺は目を見開いて反対した。

「第一、何の為に！？」

詰め寄る親友に、妙に冷めた表情で将輝は答えた。

「援軍に加わる為だ。

この状況を協会の魔法師が座視しているはずがない。義勇軍を組織して防衛戦に参加しているに決まっている」
「だからって！」
「俺は『一条』だからな」
あっさり紡がれた言葉に、吉祥寺は息を呑んだ。
「……もしかして、さっきのこと、気にしてる？
みんなだって悪気があったんじゃないんだ。
ただ慣れていなかっただけで、別に将輝のことを」
「そんな事、気にしちゃいないさ」
吉祥寺の言葉を遮って、将輝は頭を振った。
「俺だって初めて戦場に出た時は、吐きそうになったからな」
苦笑いを浮かべて、「実際には吐かなかったが」と付け加える将輝。
吉祥寺はその顔に、確かに、孤独を認めた、ような気がした。
「まして今回は、満足な装備も頼りになる上官も与えられず、何の心構えも無しに戦場へ放り込まれたんだ。
初陣の条件としては、悪過ぎる」
「そうだよ！
だから皆、心にもない態度を」
「だから違うって」
必死に言い訳をする――と、将輝は感じてしまった――吉祥寺を、将輝は再度、遮った。
「詳しいことは言えないが、十師族には魔法協会に対する責任が有る。
知らん顔で逃げ出す訳には行かないんだよ。一条の、長男としては」
将輝は吉祥寺の肩をポンと叩き、バスと反対の方向へ足を向けた。

◇◆◇◆◇◆◇

装甲車の残骸をあさっていた達也は、中から一辺三十センチ程度の立方体の箱を取りだした。（ちなみに火を消したのは達也ではない）

「これですか？」

箱をカメラに向けて訊ねると、

『そう、それだ。アナライザーを向けて……

ふむ、間違いないようだね』

カメラが取り付けられたディスプレイから答えが返って来た。

『それがソーサリー・ブースターだよ』

「ただの箱に見えますが」

『接続も操作も百パーセント呪術的な回路で行われるから、機械的な端子は存在しないんだ』

取っ手が付いている以外平坦な箱の表面を見て訝しげに眉を顰めた達也に、ディスプレイの中の真田はそう説明した。

「装甲車の対物防御魔法はブースターで増幅されていたということか？」

『そのとおり。推測に過ぎないけど、間違いないだろうね』

質問の形を取った柳の推測に、真田も同意を示した。

「これで敵の正体がハッキリしたわけだ。

まあ、最初からそれ以外の可能性は無かったが」

『証拠というには弱いけど、僕たちは警官でも判事でもないからね。もっとも、分かったからと言って対応が変わるわけでもないけど』

ディスプレイのこちら側と向こう側で黒い笑みを交わす二人の大尉。

こうはなりたくないよな、と手遅れ気味のことを考えながら、達也は次の指示を仰いだ。

「では、中華連合の偽装戦闘艦を撃沈しますか？」

『港内で撃沈するのは拙い。港湾機能に対する影響が大き過ぎる』

無論その程度のことは彼にも分かっている。撃沈というのはあくまで冗談に過ぎなかったのだが、思ったより真面目な回答が返って

きて、少し申し訳ない気分になる達也だった。
「では乗り込んで制圧しますか？」
真田を押しのけてフレーム・インした風間に、柳がそう訊ねた。
何だかこの少人数で敵艦に攻撃を掛けることが既定事項になっている気がする、と達也は思った。
今更ながら彼は、この知人たち――今は上官たち――が、冗談の通じない、と言うか普通なら冗談で済む無茶を日常的に押し通している人種だということを思い出していた。
『それは後回しだ。
駅前の広場で民間人が避難民脱出用のヘリを手配している。
現在地の監視を鶴見の部隊に引き継いだ後、駅へ向かい、脱出を援護せよ』
「了解しました」
柳の隣で同じように敬礼しながら、勇気のある民間人がいたものだ、と達也は感心した。
自分が脱出するついでとはいえ、逃げ遅れた市民を一緒に連れて行こうというスタンスは賞賛に値する、と考えたのだが、
『尚、ヘリを呼んだ民間人の氏名は七草真由美、及び、北山雫だ。
両人から要請があった場合は、助力を惜しまぬよう全員に徹底してくれ』
聞き覚えがタップリある名前が耳から入ってきて、達也は思わず咳き込みそうになった。

◇◆◇◆◇◆◇

ほぼ同時刻、敵の正体について、別の場所でも同じ推定に至っていた。
エリカが叩き潰した残骸、は原形を留めていなかったので、レオが操縦席を斬り裂いた以外はほぼ無傷の車体の前に、深雪、エリカ、レオ、幹比古の四人は集まっていた。

幹比古が他の三人を呼び集めたのである。
「この直立戦車だけど、機械的なコントロールだけで動いていたんじゃないと思うんだ」
「つまり、何らかの術を併用していたということですか？」
「ええ、そうです」
深雪が男子生徒に丁寧語を使うのは特別なことではない（いつものことでもなく、相手が同じでもシチュエーションによって使い分けているのだが）。
それに合わせているのかどうなのか、幹比古の方でも深雪が相手だとざっくばらんな口調にはどうしてもなれないようだ（幹比古の方はシチュエーションに関わらずいつも、である）。
「この三輌は、手足の動きが奇妙に人間的でした。
胴体部が操縦席で占められている直立戦車は、人間と構造が違い過ぎます。人間の動作をそっくり真似しようとしてもそんなことは出来ませんし、過度に人間の真似をさせようとすればかえって動力のロスにつながるはずです」
「それなのにコイツらは、『過度に』人間の動作を再現しようとしていた、ってことか？」
レオの問い掛けに、幹比古は迷いのない様子で頷いた。
「ピストンや歯車やワイヤーで伝えられた動力だけじゃなく、手足を直接、人間の身体の動きを真似て動かす力が働いていたとしか思えないんだ」
「つまり、魔法で？　一体どんな魔法なの？」
「多分、剪紙成兵術の応用だ」
「せんしせいへいじゅつ？」
「陰陽道系の、人形使役の術式ですか？
もとは道家の術だとか」
深雪の言葉に、幹比古は感心を隠し切れない顔で頷いた。
「そうです。
紙を人の形に剪み切り、雑霊を宿して兵と成す術、それが剪紙成

兵術だよ」
　後半はエリカに対する解説だ。
「要するに、相手は中華連合ってこと？」
　だがエリカは術のシステムに関する解説をサラッと流し、敵の正体へと切り込んだ。
「そいつは結論を急ぎ過ぎじゃねえか？
　陰陽道系の術ってことは、売国奴の可能性だって考えられるぜ」
「いや、十中八九、エリカの言うとおりだと思う」
　レオが彼に似合わぬ（？）慎重論を唱えたが、幹比古は頭を振ってエリカの意見を支持した。
「奇妙に聞こえるかもしれないけど、古式魔法の術式にも流行があってね……伝統を重んじる中にも、時代時代に流行る技、廃れる技があるんだ。
　ここ十年以上、国内の古式魔法どの系統でも、実体を持つ式神は使われなくなっている。
　剪紙成兵術はこの国で、廃れてしまった術なんだ。
　直立戦車の腕で鋸や杭打ち機を扱わせる為の魔法なら、もっと効率的なものがいくらでもある。例えば僕なら、杭や鋸自体に術を掛ける。
　無駄が多いと分かっていて態々廃れた技術を持ち出す程、僕たち古式の術者は頑迷じゃないよ」
「別に、誰の頭が固いなんて思っちゃいねえって」
　少しムキになっている――意識しすぎている感のある幹比古に対して、レオはやや辟易した表情で手と首を振った。
「要するに、直立戦車を操っていたのは中華連合の魔法師だってこったろ？
　理解したし、納得したぜ」
「あ、いや、まあ……そういうことだよ」
　幹比古も自分の口調に八つ当たりの気があったと自覚したのか、恥ずかしそうに口ごもる。

だがすぐに表情を引き締めて、他の三人には思い掛けないことを言い出した。

◇◆◇◆◇◆◇

「えっ？　柴田さんに来て欲しい？」

音声通信端末のスピーカーから聞こえてきたリクエストに、真由美は思わず大声で訊き返してしまっていた。

「……そう。まあ、一理あるとは思いますけど……ええ、分かりました。でも一応、本人の意思を確認してから……そうですね、直接説明して貰った方が良いでしょう。

柴田さん」

真由美は端末を顔から離し、美月の方へ差し出した。

「あの、何でしょうか……？」

「深雪さんたちのところへ、柴田さんに来て欲しいそうです。直接理由を説明するとのことですから、それを聞いた上で決めて下さい」

真由美と美月はあまり接点がない。

やや事務的な口調で差し出された音声端末を、美月が怖ず怖ずと、いや、寧ろビクビクと受け取ったのもやむを得ないところだった。

『あっ、柴田さん？』

「吉田くん？」

通話の相手が幹比古だと分かって、美月は幾分ホッとした表情を浮かべた。

エリカだと何時爆弾が降って来るか分からないし、深雪と話していると今でも時々理由（わけ）も無く緊張してしまうことがある。

だからといって、幹比古だと何故安心するのか――その理由を、美月は自覚していない。

『柴田さんの力を貸して欲しいんだ』

一方の幹比古は、やや焦っているような口調だった。――いや、昂奮しているのかもしれない。

「えっ、力って？」
『敵は剪紙成兵術という古式魔法の術式で機甲兵器を動かしている。僕が使う魔法とは性質が違うから、僕には敵の術式を上手く捉えられない。
でも柴田さんの「眼」なら、魔法を継続的に行使している敵の動向を僕よりも早く捉えることが出来るはずだし、敵の魔法の核となっている部分を見つけ出すことも出来るはずなんだ。
核が見つかれば、僕の魔法で敵の剪紙成兵術を無力化できる。
だから柴田さんに、こっちへ来て欲しいんだ。
もちろん、そこにいるより危険だけど、絶対に怪我はさせないから』
「――っ！」
絶句した美月の顔は赤く茹だっていた。
他意など無いことは、無論、彼女にだって分かっている。
しかし――
『良かったわね、美月。吉田くんが守ってくれるそうよ？』
『――っ！』
「――っ！！」
通信に割り込んできた深雪の発言に、電波を通して互いに言葉を失っている気配が伝わった。
相手の顔の色まで思い描くことが出来る、そんなむず痒い沈黙に時間が停止する。
『……もちろん、吉田くんだけじゃなくて、わたしたちも精一杯カバーするわ』
止まっていた時間は、深雪の白々しいフォローで動き出した。
通信を傍受していた真由美は、「深雪さんってやっぱりSだったのね……」と心の中で呟いた。
『そ、そう！　僕たち全員でディフェンスの方はカバーするから！』
色々な意味で必死に訴えかける幹比古の言葉に、美月はコクリと頷いた。

「分かりました。今からそちらに向かいます」
通信端末を顔の横から下ろして「ふぅ……」と大きく息をついた美月は、端末を真由美に返してペコリと頭を下げると、幹比古たちの陣取る「前線」へ小走りで駆けて行った。

3一（19）　飛天夜叉（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

3－（19）　飛天夜叉

現地時間午後四時。
戦況は早くも反転の兆しを見せていた。
元々侵攻軍側も長時間の戦闘は予定していなかったのだろう。
侵入艦艇は大型貨物船に偽装した一隻のみで、事前に潜伏させた戦闘員との連携もそれほど密なものではなかった。
それでも警察力のみが相手なら主要施設の占拠、多数の市民拉致が可能な兵力だったが、いち早く組織された魔法協会による義勇軍の抵抗が侵攻軍にとって大きな誤算となっていた。
無論、防衛軍の対応が迅速だったということもある。
動員から一時間足らずで大隊規模の援軍を投入し、避難する市民の盾となった。
遠からず敵は撤退し、治安回復の為の掃討戦に移行。市民を脱出させる必要も認められないところまで、状況は改善している。
しかし、渦中に身を置く少年少女たちは、それを知る由もなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

「黒沢さん？　……うん、そう。……ううん、ありがとう」
雫が通信ユニットを耳元から離すのと、ヘリのローター音が聞こえて来たのは、ほぼ同時だった。
「七草先輩。会社（ウチ）のヘリがもうすぐ到着するそうです」
雫がこう報告すると、難しい顔をして情報端末を見詰めていた真由美が顔を上げて作り笑いを浮かべた。
「分かりました。北山さんは女性、子供連れの家族を優先的に収容して脱出して下さい。

稲垣さんは同じヘリに乗って北山さんのサポートをお願いします。
それと稲垣さん、先に避難する人とそうでない人の誘導をお願いできますか。
私と市原でお手伝いしますので。
光井さんは周囲の警戒に当たってください」
テキパキと指示を出して、こっそりため息をつく。
避難を後回しにされる市民は、当然不満を持つだろう。
ただでさえ子供にイニシアティブを握られていることに対して、感情的な反発を覚えている者が少なくない状況だ。
当面はヘリに乗れなくなることを恐れてか、暴れだすような素振りを見せる者はいないが、後続のヘリが遅れる程に緊張は高まって行くに違いなかった。
本当は二機同時に到着するのが理想的だったのだが、だからといって、先着したヘリにしばらく上空で待機して欲しい、等と告げられるはずもない。
（何をグズグズしているのよ、もう！）
まず自分自身の苛立ちを抑えることに、真由美は苦労しなければならなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

海岸沿いに北上するルートを鶴見からの増援部隊に押さえられて、侵攻軍は内陸へ進路を変えていた。
――ヘリの到着を待つ、駅前広場の方へ。

十字路を曲がろうとした装輪式装甲車がグリップを失って横滑りにスピンする。
車体に掛けられた反発術式に打ち勝って作用した五十里の「伸地迷路〔ロード・エクステンション〕」によって、装甲車は車輪を空回りさせながら街灯を薙ぎ倒して停止した。

「花音！」
「任せて！」
迎撃ポイントを押し上げた結果、地下に避難した生徒への影響を考慮する必要が無くなった花音は、千代田家の代名詞「地雷原」を発動した。
装甲車を直下から突き上げた激しい震動は、各車輪に取り付けられたアブゾーバーを嘲笑うように車体へ伝わり内部で各所に震動破断を引き起こす。装甲車は装甲に傷がないまま内側から壊れ、操縦者は脳と三半規管を揺さぶられて行動不能に陥った。
大型機銃の弾が二人の隠れるビルの壁を削る。
後続の装甲車から放たれた銃撃だ。
悲鳴を上げる花音を胸の中に庇いながら、五十里が壁面に沿ってベクトル逆転の力場を築く。
反射された銃弾に曝され装甲車が沈黙した隙を狙って、向かい側に隠れた摩利が酸素濃度低下の魔法を発動する。
しかし対ＢＣ兵器仕様になっているのか、気密された車内は空気組成が改変し難い状態になっており、彼女の魔法は不発に終わる。
摩利は舌打ちして酸素濃度情報に対する干渉を解除し、擲弾銃（グレネード・ランチャー）の砲口から加熱した空気を送り込んだ。
ちょうど発射寸前でランチャーにセットされていた擲弾が、隣の機銃を巻き込んで爆発する。
攻撃力を失った装甲車に、桐原が上から攻撃を掛けた。
貫かれる装甲。
高周波ブレードが運転席に突き刺さる。
後部ハッチが開き、拳銃を手にした兵士が姿を見せた。
小太刀が飛来する。
胸を貫いた小太刀の柄に手を掛け、自分の刀で喉を切り裂いてとどめを刺す桐原。
そのまま小太刀を抜いて跳び退り、遮蔽物の陰へ転がり込む。
「壬生、大丈夫か？」

紗耶香が投げた小太刀を本人に返しながら、気遣わしげに桐原は訊ねた。
「大丈夫。刀を抜いたからには、覚悟の上よ」
紗耶香は蒼い顔で、それでも気丈に答えた。
またしても、地面が大きく揺れた。
今度は後続の直立戦車に対する花音の魔法発動だ。
素早く後退してダメージを軽減する敵機。
後列から榴弾が撃ち込まれ、遮蔽物の陰へ退避を余儀なくされる。
厚みを増した敵の陣容に、花音たちは釘付けとなっていた。

深雪の干渉力は、敵の魔法の存在を許さない。
例えそれが、ブースターで増幅されたものであっても。
凍りついた装甲車へ、「薄羽蜻蛉」が襲い掛かる。
ハンマーヘッド型の巻取り機に収納されたカーボンナノチューブ製の極薄シートの長さは二十メートル。
つまりレオは、最長二十メートルの伸縮自在な刃を手にしていることになる。
それでも長くなれば長くなる程、シートを刃として硬化する魔法の難度は増して行くはずだが、レオは十メートルの刃を難なく形成して装甲車を水平に斬り裂いた。
「右から来ます！　核の位置は同じ！」
美月が側面から回り込む敵の直立戦車を先回りして捉え、幹比古が破呪の術式を行使する。
敵機がガクッと見えない壁にぶつかった様な挙動を見せ、両腕がダラリと下げられる。
そこへ、目にも留まらぬ速さで、エリカが斬り込んだ。
山津波。
大蛇丸の長大な刀身が、二倍の身長を持つ機械兵を叩き潰す。
深雪と幹比古の援護射撃で、レオとエリカのコンビは敵の戦闘車両を次々と撃破した。

「美月」
一段落ついてホッとしているところへ不意に名を呼ばれて振り向いた美月に、深雪は別働部隊の動向を訊ねた。
「千代田先輩たちの方はどんな状況か視える？」
深雪は摩利が援軍に出向いていることを知らない。
「えっと……場所は変わっていないみたいです。現在も交戦中」
上級生組の迎撃位置は彼女たちより少し前。
駅の方へ進むルートの、二つの要を押さえる配置だ。
「どうしたの、深雪？　今更、考え込んじゃって」
美月の言葉に眉を寄せた深雪へ、大蛇丸を肩に担いだエリカがその理由を訊ねた。
「変だと思わない？
何故、敵はわざわざ、わたしたちが待ち構えている所へやって来るのかしら？」
深雪の答えに、エリカも眉を寄せる。
「駅の方へ行くには私たちの居る所を通らなきゃならないからじゃないんですか？」
上級生組と一年生組が陣取っている場所は、鈴音が地図を見て割り出した場所だ。
しかし美月の答えは、深雪を納得させるものではなかった。
「それは、幅の広い道を通るなら、という条件付よ、美月。
敵だって通信機くらい持っているだろうし、こちらは十人しかいないのだから、わたしたちが居ない所をすり抜けていく事だって出来るはずなのに」
「……足止めかも」
エリカの言葉に、美月がハッとした顔を見せた。
「来たよ！」
しかし、幹比古の告げた新たな敵の襲来に、彼女たちの推理は中断を余儀なくされた。

◇◆◇◆◇◆◇

黒沢が操縦するダブルローターの輸送ヘリ（なんとこのハウスキーパーは、クルーザーだけでなくヘリまで操縦出来るらしい）が上空に姿を見せ、着陸しようと高度を落としている最中、それは起こった。

突如として飛来した黒い雲。

空気中から湧いて出た、としか言いようのない唐突な登場を見せたのは、季節はずれの蝗の大群だった。

たかが蝗と言っても、エンジンの吸気口に飛び込まれては厄介なことになる。

それに、こんな不自然な出現の仕方をしたモノが、自然の生物とは思えない。

ヘリの出迎えに来ていた雫は、咄嗟の判断でポーチからＣＡＤを取り出した。

小型拳銃そっくりの、銀色のＣＡＤ。

九校戦が終わった直後に購入した、シルバーモデルのセカンドマシン。

そこにインストールされている起動式は、ループ・キャストの「フォノン・メーザー」。

空に向けて引き金を引く。

音の熱線が、蝗の群れを薙いだ。

「数が、多い……っ！」

焼け死ぬのではなく、燃え尽きたように消えて行く蝗の群れ。だがそれは、黒い雲を成す大群のほんの一部だ。

次々とフォノン・メーザーを発動し、ヘリに近づく蝗を撃ち払っているものの、回り込んだ群れがヘリへ迫る。

ほのかもそれに気づいていたが、彼女の魔法はこういう敵の迎撃に向いていない。雫の魔法と相克を起こすのを恐れて手が出せない。

蝗の群れがヘリに取り付く、と見えた、その時。

滅びの風が、吹いた。

黒雲を成す大群が、幻の様に輪郭を崩し、色を薄れさせ、消え去った。

空を仰ぐ雫とほのか。

異変に気づくのが遅れた真由美と鈴音も、同じように空へ目を向ける。

そこには黒尽くめの人影が、銀色のＣＡＤを構えて浮いていた。

「達也さん……？」

そう呟いたのは、雫か、ほのかか。

同じ黒尽くめのスーツに身を包んだ集団が飛来し、ヘリを守るように陣を組む。

輸送ヘリは再び降下を開始した。

◇◆◇◆◇◆◇

「化成体による攻撃を撃退。ヘリの降下を護衛します」

『護衛は他の者に任せ、特尉は術者を探索、これを排除せよ』

「了解」

柳の指示を受け、達也は使い魔を作り出した術者を探し出すべく「眼」を凝らした。

迎撃に当たり、彼は蝗の各個体を分解したのではない。

彼の分解魔法が照準に定めたのは、蝗の化成体を作り出していた魔法式。

仮初めの身体を構成していた術式を分解されて、蝗を象（かたど）っていた化成体はサイオンの粒子に還った。

そのプロセスで、彼は魔法式の出所を掴んでいる。

この距離、この経過時間であれば、飛行魔法を維持したままでもトレースは十分可能だ。

（あそこか）
このままでも排除は可能だが、魔法は直接視認した方が掛け易い。
達也は逃走する術者の頭上へ移動した。

◇◆◇◆◇◆◇

銀色の大型拳銃――の形をしたＣＡＤ――を手にした黒尽くめの兵士は、流星の様な速度でビルの向こうへ飛んで行った。
ライフルを構えたその仲間が、空中で円陣を形成するその内側で、ヘリは広場へ着陸した。
黒一色で顔も見えないその姿は、ある種の禍々しさを醸し出している。
だが、ほのかも雫も、真由美も鈴音も、不安には思わなかった。
「何者ですかね、彼らは」
稲垣が気味悪そうに訊ねて来ても、
「味方です」
真由美は微笑んで、短く、そう答えるのみだ。
達也の仲間であり、藤林の仲間でもある、国防軍の一部隊。
それ以上のことは真由美も知らなかったが、それだけで十分だった。
ヘリに市民が乗り込んでいる間も、彼らは空中で警戒を続けている。
もう、十分以上、飛び続けている。
それでいて、消耗はまるで感じられない。
全員がハイレベルな魔法師であることは確実だ。
噂には聞いたことがある。
国防陸軍が、特定分野に突出しているクセの強い魔法師を集めて作った実験部隊。
個々の魔法師のランクを見れば大したことがないように思われるが、ひとたび実戦に臨んだならば強大な打撃力を発揮する実戦魔法

師集団。
考えてみれば、それは、彼にピッタリ合致する条件だ。
「頼もしい援軍ですよ」
搭乗の完了しつつあるヘリを見ながら、真由美はそう付け加えた。

雫と稲垣を乗せたヘリが無事に飛び立ち、地上からの狙撃が届かない十分な高度に達したのを見届けてから、周囲を警戒していた独立魔装大隊の飛行歩兵隊は周囲のビルに散らばった。
残された市民には、安堵感が漂っている。
正体の判らない薄気味悪さは残るものの、国防軍が周囲の警戒に当たっているのだ。
子供に任せ切りの状態よりは、余程安心出来る、と彼らが感じたとしても、それを非難は出来ないだろう。
「ようやく来たわね……」
援軍のお蔭でパニックの心配は無くなったものの、脱出を切望する市民のプレッシャーから一刻も早く逃れたいと思っていた真由美にとって、ヘリの到来を告げるローター音は待ちかねたものだった。
「ようやく」というのは、完全に、嘘偽りのない感想だっただろう。
到着したのは軍用の双発ヘリ。
雫が手配したヘリより一回り大きい。
これなら残った市民も全員が問題なく搭乗できるはずだ。
それに、やって来たヘリは一機だけではなかった。
もう一機、戦闘ヘリが随従していた。
『真由美お嬢様、ご無事でいらっしゃいますか』
コール音に応えて通信ユニットを耳に当てると、そこから名倉の声が聞こえて来た。
「問題ありません。名倉さんは、どちらに？」
『私（わたくし）は戦闘ヘリの方に搭乗しております。
お嬢様もこちらの機体で脱出するように、と旦那様より仰せつかっております』

「――分かりました」
真由美は「残ります」と言い掛けて、それを断念した。
近接戦闘では残念ながら、名倉の方が一枚上手だ。だからといって、救援に来たヘリを撃つ訳にも行かない。色々な意味で、抵抗は意味が無かった。
「とにかく、市民の収容を急ぎましょう」
通信を終わり、鈴音に声を掛ける。
それに応えて、鈴音が振り返った。
その時、だった。
「動くな！」
背後から鈴音の首に腕を巻き、もう片方の手でナイフを突きつける若い男。
ビルの上からライフルが向けられたが、別の男が前に出て、手榴弾を持った手を前に突き出す。
「……なる程、この為の布石だったのですか」
静かに呟いたのは、ナイフを突きつけられている当の鈴音だった。
「頭の回転が速いな」
その落ち着いた様に違和感を覚えながらも、避難の市民に偽装したゲリラは鈴音の言葉を首肯した。
「機動部隊で戦力を前方に引き付け、更に脱出を待って人数を減らせるだけ減らした後、ターゲットを確保。
中々考えられた作戦です」
「最初から脱出を許すつもりでは無かった。脱出されても支障の無い作戦を組んでいただけだ」
まるで危機感を覚えていないかの如き鈴音のお喋りに、男はつられているようだった。
「私を狙ったのは、エネルギー供給の安定化の為ですか？」
「それだけではない。
本作戦に先立ち、大勢の仲間が拘束されている。お前にはその解放の人質になって貰う」

「私一人では大した材料になりませんよ」
「そうでもあるまい。
――動くなと言った！」
後ろ手にこっそりＣＡＤを操作しようとした真由美を鋭く一瞥して、男がナイフを煌かせた。
真由美は諦めて、両手を挙げた。
「お前が人質になれば、七草家が放ってはおかない。
娘の友人を人質に取られる事の方が、娘を人質に取られるより効果があるだろうからな」
「確かに。
真由美さんは甘い人ですからね」
何故自分が非難の目で見られなければならないのだろう、と理不尽を覚えながら、真由美は手出しできずにいた。
おそらく、こういうところが「甘い」と言われるのだろうが、少なくとも人質に取られている本人に非難されることでは無いのではないか。
「その後は、私を本国へ拉致する手筈ですか」
「そうだ」
「しかしそれでは、人質交換にはならないのでは？」
「それは……お前、何をした？」
男はようやく、自分が喋り過ぎていることに気づいた。
いや、そもそもこんな敵の真っ只中で、いくら人質をとっているとしても、悠長な会話を続けていた自分が信じられなかった。
「作戦は悪くなかったのですけどね」
鈴音が顔の前のナイフを手でスッと除け、首に巻かれた腕を簡単に解いた。
「ターゲットが良くありませんでした」
手榴弾を持つ男の前に回りこんで、その手からゆっくりと手榴弾を引き剥がす。
「私はＣＡＤを使った魔法こそ平凡ですが、無媒体で行使する魔法

なら真由美さんや十文字君より上なのですよ。
随意筋を司る運動中枢を麻痺させました。
貴方たちの身体は、しばらく自由に動きません」
その言葉の通り、脂汗を流し、いくら身動ぎしても、男の手も足も、意味のある動きをしようとはしなかった。
「人体に直接干渉する魔法。
かつては禁止されていた種類の魔法です。その性質上、人体実験が不可欠ですから、禁止されていたのはその面からなのでしょうけど。
難点は効力を表すまで時間が掛かることですが、貴方がお喋りな方で助かりました。
ああ、言っておきますが、貴方が口を滑らせたのは、魔法とは無関係ですよ。
単に貴方が軽率だというだけのことです」
そう言いながら、鈴音は冷たい笑みを浮かべた。

◇◆◇◆◇◆◇

魔法協会支部方面の敵の進攻は、激しさを増していた。
攻勢が限界に近づいていることを悟った侵攻軍が、決戦に出た結果だ。
克人は協会支部で次々と舞い込む報告に耳を傾けていた。
国防軍は桜木町・関内方面から反撃に出ており、石川町・中華街方面は魔法協会が主体となって組織した義勇軍で辛うじて持ちこたえている状況だ。
「――予備の戦闘服はありますか」
克人の問い掛けに、女性職員が目を見開いて叫んだ。
「まさか、ご自分で出られるおつもりですか!?
ダメです、そんな！」
「予備の戦闘服は、あるのですね」

しかし、念を押すように繰り返された克人の問い掛けに、気圧されながらその職員は頷いた。
「しかし、十文字家のご総領を……」
「案内して下さい」
渋る相手の台詞を断ち切る克人。
女性職員はギクシャクと立ち上がった。

◇◆◇◆◇◆◇

もう一人の十師族直系は、中華街の手前で義勇軍に加わっていた。
身に着けたプロテクターは、負傷者から譲り受けたものだ。
遮蔽物に身を潜め、赤味を帯びた光沢のＣＡＤを左手で握り締めて、将輝は肩で息をしていた。
爆裂の連発による消耗。
それに加えて、敵の攻撃が機甲兵器から魔法によるものに切り替えられたことで、疲労の蓄積速度が倍化していた。
幽鬼が隊列を組んで迫って来る。
将輝は左手に持ち替えた特化型ＣＡＤではなく、左腕にはめた汎用型ＣＡＤを操作した。
干渉力の放射。
一体の木人形を残して、幽鬼の群れが幻と消える。
大きく横に広がった隊列を包み込む形で発動しなければならない広域干渉は、将輝のスタミナを大きく削って行く。
彼の「爆裂」は対象内部の液体を気化させる魔法。
対象物内部に液体が存在しなければ効力を発揮しない。
敵の対応は素早かった。
直立戦車の一隊を「爆裂」によって潰されたと見るや、偽りの幽鬼で部隊を編成して戦場に投入して来た。
古式魔法で作り出した実体の無い幻影に、「爆裂」は意味を成さない。

実体は無くとも、幻影体は攻撃力を持っていた。
催眠術、と同じ理屈なのだろう。
幻影に斬られた者は、赤い痣の線を浮かび上がらせて絶命する。
魔法師はその身に纏う情報強化で偽りの斬撃を無効化することが出来るが、魔法師でない義勇兵はそうも行かない。
市民兵に混じって戦う将輝は、得意魔法を封じられた状態で幻影の攻撃をしのぎながら、敵の魔法師が何処にいるのか、必死に探し続けていた。

◇◆◇◆◇◆◇

輸送ヘリに、市民の搭乗が完了した。
「リンちゃん、頼んだわよ」
「真由美さんも余り無理をしないようにして下さい」
飛び立つヘリ。
黒い兵士がヘリを追いかけて空へ上がり、その周囲を固める。
ヘリが安全高度まで上昇したのを確認して、飛行兵は海岸の方へ飛び去った。
「私たちも行きましょう。
深雪さんたちと摩利たちを拾って、ここから脱出します」
「――承知致しました」
真由美の指示に名倉は何事か言いたそうだったが、結局恭しく頷いて副操縦席へ戻った。
真由美とほのかを乗せて飛び立つ戦闘ヘリ。
その途中で真由美は、ビルの屋上に立ち彼女を見送る一人の兵士に気づいた。
その右手には、銀色の特化型ＣＡＤ。
ほのかは逆サイドを見ていて、気付いていない。
真由美はヘリの中で、その兵士に向かってこっそり「あかんべぇ」と舌を出した。

◇◆◇◆◇◆◇

達也はスモークバイザーの奥で、真由美の「あかんべぇ」をバッチリ目撃していた。

（……愉快な人だ）

達也としては、それ以外に表現のしようが無い。

（それにしても市原先輩が「一花」だったとはな……）

鈴音が使った魔法は、一花が番号を剥奪されてエクストラになった原因となったもの。

あの魔法は一花家の先天的な素質に大きく依存するものだったはずだ。

人体に直接干渉する魔法はその当時禁止されていただけでなく、今でも医療目的以外の使用には厳重な制限が課せられている。

鈴音がそうした諸々の事情を弁えているかどうかは微妙なところだが、彼女が一花の血を引く者であることは、ほぼ確実だ。

もっとも、と達也は考える。

（それを言うなら、俺の魔法は番号剥奪どころの騒ぎではないが）

苦笑するまでもなく淡々と心の中でそう呟いて、達也はヘルメットの通話スイッチを入れた。

「七草真由美嬢はヘリに搭乗し、低空飛行で海岸方面へ向かいました。

途中で同級生・下級生を拾った後、この場を離脱する模様です」

『了解した。

護衛対象の戦闘領域離脱を確認後、隊へ合流せよ』

「了解です」

いよいよか、と通信を切って達也は思った。

柳は口にしなかったが、反転攻勢に出るつもりだというのは、聞かなくとも分かることだった。

その為にはまず、真由美たちを無事に脱出させなければならない。

屋上の端に立っていた達也は、ＣＡＤを下へ向けて、引き金を無造作に引いた。
建物の角でポッと火が上がり、すぐに消える。
ミサイルランチャーが路面に落下するのが見えたが、気にも留めなかった。
今の携行兵器は、その程度で暴発するようなちゃちな作りではないからだ。
同じ事を五回、繰り返す。
ヘリを狙っている者が辺りにいなくなったのを確認して、達也は後ろを振り返った。
そこには、抜き身の刀を持つ男が一人。
ただぶら下げているだけに見えて、隙のない「無形の構え」を取っている。
「――何者だ？」
訊ねたのは、その男の方だった。
ここまで登って来たにしては――尋常な方法ではなく、ビルの壁を交互に蹴ってビルとビルの間を駆け登るという異常な方法で上がって来たにしては、芸の無い質問だった。
「国防陸軍第１０１旅団、独立魔装大隊特務士官、大黒竜也」
「なに？」
その男――千葉寿和警部は、達也があっさり答えるとは思っていなかったのだろう。
聞いたこともない部隊名よりその事に虚を突かれて、寿和の構えに隙が生まれる。
達也は軽く、屋上を蹴った。
寿和の方へ跳んだ、のではなく、ビルの外へ飛んだ。
達也の左手がベルトのバックルを叩く。
その身体が重力の支配から解き放たれる。
右手のＣＡＤで寿和を牽制したまま、達也は拳銃の弾が届かない高度へ一気に上昇した。

3一（20）　秘術線乱（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

3－（20）　秘術線乱

魔法協会の組織した義勇軍はジリジリと後退を余儀なくされていた。

敵の上陸部隊は、明らかにこちらが主力だった。

北上した部隊は装甲車と直立戦車の混合部隊で、どちらかと言えば装甲車の方が主戦力の地位を占めていたが、協会支部攻略軍の方は白兵戦仕様の特殊な直立戦車を主力とし、多数の魔法師が同行している点が特徴だった。

犬に似た獣が炎の塊となって爆ぜる。「禍斗」と呼ばれる魔物を真似た化成体を形成する古式魔法。

そうかと思うと、一本足の鶴に似た鳥が火の粉をまき散らして消える。「畢方」と呼ばれる魔物を真似た化成体を形成する古式魔法だ。

大陸系の古式魔法が義勇軍に襲い掛かる。

相手は最早「国籍不明」軍ではない。

素性を隠蔽する意図を放棄したのか、特徴のある術式と対魔法防御の施された直立戦車が義勇軍の陣地を蹂躙する。

協会の魔法師も速度、即ち手数に勝る現代魔法で対抗していたが、数の力には抗えなくなっていた。

「クッ、撤退だ！」

「後退して防衛ラインを立て直す！」

戦意は失っていない、ように聞こえる。だが威勢とは裏腹に、言っていることは守りに入った者のそれだ。

「後退するな！」

その時、義勇兵たちの怯懦を一喝する声が轟いた。

火をまき散らしていた鳥形の化成体が地面に叩きつけられ、押し潰されて消える。
それはまるで、巨大なハンマーを打ち下ろされたかの如き光景だった。
「奮い立て、魔法を手にする者たちよ。
卑劣な侵略者から祖国を守るのだ！」
火を吐く犬が、炎の翼を持つ鳥が、その他、様々な幻獣を象った古式魔法の使い魔が次々と叩き潰された。
義勇軍の先頭に、大柄な人影が歩み出る。
古の鎧武者のようなその姿は、ごついプロテクターとヘルメットを身に着けた克人だった。
克人は右手を挙げて、下ろした。
それほど勢いがあったわけではない。
だが、右手が振り下ろされると同時に、敵の直立戦車が一台潰れた。
その意味するところは、誰の目にも明らかだった。
もう一度、同じ事が繰り返され、
魔法に対する防御を固めていたはずの機甲兵器は、紙の玩具同然に叩き潰された。
声が上がった。
それは、劣勢に立たされていた義勇兵たちの、鬨の声だった。

克人は心の中で、気恥ずかしさを感じる心に蓋をし、鍵を掛けた。
絶対的な正義を信じるほど、彼も幼くはない。
方便と割り切ってしまえるほど、彼も大人ではない。
だが彼は自分の役割を弁えていた。
敵が我を取り戻すまで、それほど時間は掛からなかった。
彼が何をしたのか、それはまだ分かっていないだろう。
だが自軍に仕掛けられた魔法攻撃の主が克人だということは、目端の利かない人間にも分かったはずだ。

直立戦車の機銃が克人に向けられ、無限軌道が唸りを上げる。
単体ではなく、三機で隊列を組んで仕掛けて来たのは、この敵が装備頼りの無能な兵士でないことを物語っている。
しかし結果的に、その三機は一発の銃弾を放つこともなく、一メートルも進むことが出来なかった。
右の掌を突き出す。
克人が取った対応は、ただそれだけだった。
それだけで、直立戦車はスクラップになった。
多重障壁魔法「ファランクス」。
この魔法は、敵の攻撃を防ぎ止めるだけのものではない。
その真価は寧ろ、敵を押し潰す、この攻撃にこそある。
ファランクスの術式は、何枚もの障壁を次々と構築し、前面の障壁が効果を失ったら次の障壁を前に押し出し最後尾に新たな障壁を追加するというものだ。
防壁は常に一定の領域で移動し続けている。
その壁を自分の前に固定するのではなく、敵に何十枚も高速で叩きつける。
これがファランクスを使った真の攻撃方法。
対物非透過という単一の性質に絞り込んだ攻撃用の障壁は、他者の魔法が飛び交う中であっても展開が可能だ。
魔法で作られた障壁は、物質を対象とするものでありながら、その干渉力を以って他の魔法の存在を許さない。
射程距離が短く、実体または具現化した現象にしか通用しないという欠点はあるものの、面で敵を攻撃し、かつ対物・対魔法防御を兼ねているこの魔法は、近距離の対集団戦において絶大な威力を発揮する。
防御においては複数の性質をもつ複数の防壁を同時展開。
攻撃においては単一の性質を持つ多数の障壁を連続射出。
ファランクスはその名の通り、攻防一体の魔法なのである。
炎と雷が克人に襲い掛かった。

プロセスを現象として具現化しなければ即効性のある事象改変を行えない古式魔法の攻撃は、克人に取って対処し易い相手だ。
空中に築かれた耐熱、耐電の防壁が克人とその周囲にいる義勇兵を守る。
前に立つ護衛の兵士ごと、敵の魔法師を吹き飛ばす。
たった一人の参戦によって、戦況は逆転した。

◇◆◇◆◇◆◇

幻影の攻撃に手を焼いていた将輝は、発想を変えた。
敵の魔法師を探すのを止めて、敵を纏めて鏖殺（おうさつ）する方向へ方針を転換した。
今までは市民を巻き添えにすることを恐れて、単体の敵を攻撃する魔法のみ使用していたが、このまま事態を長引かせては余計に市民の被害が広がると考えたのだ。
――キレた、という側面も否定できないが。
将輝はスリー・マン・セル（三人一組）で散開する敵の、人数が最も集中している辺りを狙って方形の処刑場を設定した。
一辺十五メートル。念の為、高さは二メートルに留めておく。（今のところ、敵が建物内に侵入した形跡は無かった）
左腕にはめたＣＡＤを操作し、魔法を発動。
障碍物に関係なく、遮蔽物を呑み込む形で事象を改変する力が作用する。
最初の変化は緩やかなものだった。
敵兵は身体が熱を持ったという程度にしか感じなかったはずだ。
だがそれはすぐにひりつく熱さに変わり、地面を転がりまわる激痛に変化し、三十秒後には眼球を白く濁らせた死体に変わった。
液体分子の振動による加熱魔法「叫喚地獄」。
一条の魔法師が得意とするのは液体を気化する発散系魔法だが、無論、それ以外の魔法が使えないという訳ではない。

実のところ将輝は、親友には悪いと思っているが、「基本コード仮説」に懐疑的だ。

四系統八種の魔法はシームレスにつながっているもの、本質的に一つのものではないかと、頭ではなく感覚で思っている。

系統による魔法の区分は便宜的なものに過ぎないと実感している。

「叫喚地獄」は「爆裂」の劣化版と言える。

体液を一瞬で気化させる「爆裂」に対して、時間を掛けて（と言っても三十秒から一分だが）体液を加熱する「叫喚地獄」。

威力を劣化させた代わりに、対象を「物」から「領域」に拡大した魔法。

地獄の大釜を召喚した――言うまでも無く比喩的な意味で、だ――方形のエリアの中から、激しい動揺が伝わって来た。

叫喚地獄もまた、対象物内部、人体に直接干渉する魔法。故に、情報強化を纏う魔法師には効き難い。

逆に言えば、あの処刑場で生き残っているということは、魔法師であるということだ。

（見つけた！）

敵はまだまだ残っていたが、将輝はこの魔法師が幻影魔法の使い手だと直感した。

建物の陰から飛び出し、空白地帯となった「処刑場」跡へ一気に突っ込む。

彼へ向けられた銃は、味方の援護射撃により沈黙した。

再び右手に持ち替えた拳銃形態のＣＡＤを逃走する敵魔法師の背中へ向け、

相手が振り向くのを待たずに引き金を引いた。

紅い花が咲く。

敵の魔法師は、降伏する暇（いとま）もなく将輝に討たれた。

◇◆◇◆◇◆◇

小規模な落雷が街路に乱舞し、敵の銃撃が止んだ。
深雪たちのグループと敵の遭遇は散発的なものとなり、直立戦車や装甲車の新手は姿を見せなくなっていた。
幹比古の雷撃魔法で敵歩兵を纏めて無力化した五人は、ビルの陰に集まった。
「七草先輩がヘリで迎えに来てくれるそうよ。
市民の脱出用とは別に、わたしたちが脱出する為のヘリも用意してくれたみたいね」
「流石は七草、太っ腹ね」
「太っ腹とは少し違うような……きっと、先輩を確実に脱出させる為じゃないかな」
「だとしても、ありがたいことだぜ」
「そうですね。お蔭で私たちも脱出の目処がついたんですから」
そんなお喋りをする余裕が出来たのも、敵の攻撃が沈静化しているからだろう。
「あっ、来たんじゃない？」
エリカが指摘するまでもなく、ローターの音は全員に聞こえていた。
元々歩いたって十分掛からない場所に陣取っているのだ。
ヘリなら離陸と下降に掛かる時間以外は無視できる距離。
しかし、姿はいつまで経っても見えてこない。
風切り音は真上から聞こえてくるのに、影も形も無い。
着信のバイブレーション。深雪は通話ユニットを耳に当てた。
『深雪さん？　悪いけど、狭くて着陸できないの。
ロープを下ろすから、それに掴まってくれる？』
返事をする間も無く、何も無かった頭上からロープが五本、下りて来た。
良く見れば、ロープの端で陽炎が揺らめいている。
「……透明化、いえ、光学迷彩と言うべきかしら。
器用ね、ほのか」

そう呟きながら、深雪はロープを掴み、末端のステップに片足を置いた。
準備完了の意味で軽く引っ張ると、ロープはスルスルと巻き上がって行く。
他の四人は、慌ててそれに随った。

ヘリに乗り込んでみれば、ほのかが何をしているのか深雪以外の目にも明らかだった。
半球面のスクリーンに空の映像を屈折投影させているほのかは、魔法の制御で口を開く余裕も無い。
空ではなくもっと変化の激しい景色が背景ならば、移動しながら光学迷彩を維持することは出来ないに違いなかった。
「それでも、待ち伏せにはもってこいの魔法だね」
「本当に。こんな複雑な処理を持続させるなんて、チョッと真似できそうにないわ」
「深雪さんでもですか？」
友人たちのそんな声も、ろくに耳に入っていないようだ。
「もうすぐ到着です。でも、辛かったら解除して構いませんよ」
「大丈夫です」
そう励ます真由美の声に応えを返すのが、ほのかの精一杯だった。

◇◆◇◆◇◆◇

しかし、摩利たちを速やかに回収することは、残念ながら出来なかった。
最後の悪足掻き、と言ってしまって良いものかどうか。
空から状況を俯瞰している真由美たちには、戦闘の中心が中華街の周辺に移り、この辺りには敵がほとんどいなくなっていることが分かっている。
しかし、摩利たち五人はライフルとミサイルランチャーを主兵装

とする魔法師混じりの歩兵部隊から、猛攻撃を受けていた。寿和が一人で後背の敵に当たっていることを知らされていない真由美たちは、一人足りないことに動揺を覚えながらも、すぐに五人の援護に当たった。

いや、「真由美たち」という表現は不正確かもしれない。

ヘリの上から援護の魔法を放ったのは、真由美一人だったのだから。

敵兵の身体に雹が降り注いだ。

氷の粒ではなくドライアイスの弾丸が、自然現象ではありえない超音速で襲い掛かり防護服を貫く。

ドライアイスを弾丸とした「魔弾の射手」。

敵兵の頭上、背後、側面、様々な場所から様々な角度で撃ち込まれる弾丸の十字砲火を受けた敵兵は、その魔法が何処から放たれているかを見極めることも出来ず、次々と薙ぎ倒されていく。

空中から地上への攻撃、しかもこちらの姿は見えていないという優位も手伝って、真由美の魔法は五分も掛からずにその場を制圧した。

『お待たせ、摩利。ロープを下ろすから上がって来て』

「ああ、頼む」

圧倒的な火力――と言って良いのか迷うところだが――で敵兵力を簡単に征圧した真由美に釈然としないものを感じながら、摩利は二年生に声を掛けた。

五十里と花音、桐原と紗耶香がペアになって歩いて来る。

彼らが周囲の警戒を欠いてしまったことを、責めるのは難しいだろう。

つい今しがた迄、激戦の渦中にあったのだ。

それに光学迷彩を解除したヘリが、頭上から守ってくれているという安堵感もあった。

だが、ゲリラの真骨頂は、こういう状況における不意討ちにある。

「危ない！」
そう叫んだのは、摩利だった。
その声に応えて真っ先に動いたのは桐原だった。
紗耶香を突き飛ばし、刀を振る。
咄嗟に発動した高周波ブレードは胸を狙った銃弾を奇跡的に弾き飛ばしたが、カバー出来たのは上半身だけだった。
脚に、銃弾が突き刺さる。
右脚が、太腿の下から千切れ飛んだ。
「桐原君！」
「啓！」
別の場所では、五十里が花音を押し倒し、その上に覆い被さっていた。
背中一面から流れ出す血。
榴弾の破片が突き刺さった傷――おそらくは、致命傷だ。
「啓！　啓！！」
「桐原君！　しっかりして！！」
泣き縋る二人の少女。
摩利が奇襲を掛けた不正規兵に魔法を発動しようとした。
だが、彼女の魔法は圧倒的な干渉力がその場を覆ったことによって、不発に終わる。
慌てて隣へ――その発生源へ目を向ける。
そこでは、ヘリから飛び降りた深雪が重力をまるで感じさせない動作でスッと着地し、恐ろしい無表情で右手を前に掲げていた。

深雪は逆上していた。
彼女にとって、五十里も桐原も単なる知り合いに過ぎない。
だが、卑劣な騙し討ちに知り合いが傷つけられたというだけで、彼女を激怒させるには十分だった。
逆上しながらも、頭の芯は冷たく冴えていた。
反射的に飛び降りたように見えて、自分の身に掛かる重力を完全

に掌握していた。
ＣＡＤは必要なかった。
解き放たれた魔法領域は、ただ思うだけで彼女の得意魔法＝特異魔法を編み上げる。
深雪が封じていたのは、達也の力だけではない。
達也の力を封じる為に、深雪は自分の魔法制御の力の半分を、常に兄へ向けていた。
深雪が魔法を暴走させるのは、兄の魔法を押さえ込んでいた副作用だった。
今、達也の能力を解き放ったことで、深雪自身の能力も解き放たれていた。
四葉には一族としての二つ名が無い。
それは一人一人が特殊な力を持っており、一つのカテゴリーに収める事が出来ないからだが、「魔法は遺伝する」という原則から外れるものでもない。
深雪の母親は、他人の精神構造に干渉するという唯一無二の系統外魔法を保有していた。
ならばその娘である深雪にも、精神に干渉する魔法が遺伝していて不思議は無い。
また、精神に干渉する魔法を有しているからこそ、達也の魔法を押さえ込む役目も果たせるのだ。
そう――彼女の冷凍魔法は、彼女が本来、先天的に備える魔法が、物理世界に干渉するものへ形を変えた派生形態だった。

右手を前に差し出す。

それだけで、世界が凍りついた。

深雪を中心として世界が凍りついた、ように見えた。
路面も壁面も、氷に覆われてはいない。

凍りついたのは、認識の世界。
その波動に触れた摩利も花音も紗耶香も、重傷を負った桐原にも五十里にも変化は無い。
だが彼らに銃を向け、手榴弾を投げつけようとした敵の兵士は、正規兵も不正規兵も硬直したまま動かなくなった。
凍結したのではなく、静止した。
身体が凍りついたのではなく、精神（こころ）が凍りついた。

系統外・精神干渉魔法「コキュートス」。

凍りついた精神が、蘇ることは無い。
凍りついた精神は、死を認識できない。肉体に死を命じることも出来ない。
凍りついた精神に縛られた身体は死ぬことも出来ず、最後に命じられた姿勢のまま彫像と化して転がった。

◇◆◇◆◇◆◇

深雪が何をしたのか、説明できる者はいなかった。
だが全員が、世界の凍りつく幻影を見た。
全員が直感的に、深雪が何をしたのか悟っていた。
言葉には出来なくとも、精神（こころ）を失う恐怖を覚えていた。
深雪は隣を、そして上を見て、俯き、寂しげな微笑みを浮かべた。
だがすぐに顔を上げて、大声で叫び、手を振った。
「お兄様！」
その視線の先を、桐原と五十里以外の全員が見た。
そこには着地姿勢を取った黒尽くめの兵士の姿があった。
深雪のすぐ隣に降り立ち、バイザーを上げマスクを下げる。
達也は厳しい顔つきで、五十里の傍へ駆け寄った。
「お兄様、お願いします！」

その隣で、深雪が達也の右手にすがりついた。
達也は頷き、左腰からＣＡＤを抜いた。
「何するの！？」
五十里に向けられた銀色のＣＡＤ。
止める時間は無かった。
花音にできたのは、そう叫ぶことだけだった。
引き金が、引かれた。
花音は反射的に、目を瞑った。

〔エイドス変更履歴の遡及を開始〕
達也の表情に変化は無い。
〔……復元時点を確認〕
本当に、一瞬のことだ。
だがその一瞬に、兄が想像を絶する苦痛を味わっているということを、深雪は知っていた。
無意識に深雪が目を背ける。
だが魔法を行使する生体ロボットと化した達也の目に、余分な情報は映らない。
〔復元開始〕
達也が自由に使えるもう一つの魔法、「再成」が発動する。
エイドスの変更履歴を遡り、負傷する直前の情報体を復元し、複写する。
複写した情報体を魔法式として、エイドスに貼り付ける。
怪我をした状態を記録している情報体を、怪我をする前の情報で上書きする。

事象には情報が伴い、
情報が事象を改変する。

魔法の基本原理に従い、怪我をした肉体の状態改変が始まる。
怪我をしなかった状態へ、復元する。
怪我を治すのではなく、怪我を負った事実を無かったことにする。
世界の持つ修正力が、五十里の肉体に加えられた改変に辻褄を合わせるべく作用する。

榴弾の破片は、五十里の身体に「食い込まなかった」ことになった。

五十里の身体から破片が消えた。
分解されたのではなく、何時の間にか彼の周りに散らばり落ちていた。

ボウッ、と五十里の身体が霞んだように見えた。
次の瞬間、彼の身体には傷一つ残っていなかった。
それどころか、服を塗らしていた血の跡まで消えていた。
〔復元完了〕
五十里の肉体は、榴弾で傷を負わずに時間が経過した状態で、世界に定着した。

達也は五十里に掛けた「再成」の結果を確認する間も惜しんで、桐原へＣＡＤを向け引き金を引いた。
視覚効果は、こちらの方が劇的だったと言えるだろう。
千切れていた脚が太腿に引き寄せられ、接触した、と見るや、桐原の身体がボウッ、と霞んだ。
次の瞬間、そこには、五体満足の少年が横たわっていた。

達也は左腰にＣＡＤを戻すと、無言で深雪の身体を抱き寄せた。
「あっ……！」
目を丸くしている深雪の背中に手を回し、耳元で一言囁いて、達

也は身体を離した。
一歩距離をとり、マスクを上げ、バイザーを下ろす。
全身黒尽くめの姿に戻った達也はバックルを叩き、空へ舞い上がった。
深雪はその姿を呆然と見送っていた。
彼女の耳には、「よくやった」という兄の言葉が繰り返し再生されていた。

半信半疑という面持ちで、五十里が自分の身体を見下ろしている。
呆然と恋人の姿を見詰めていた花音が、いきなり五十里に抱きついて泣き出した。
その向こうでは、桐原が首を傾げながらジャンプと片足立ちを繰り返し、それを紗耶香が泣き笑いで見ている。
深雪は背後に「タン」という足音を聞いて振り返った。
そこには、自分の身長よりも長大な大太刀を手にヘリから跳び降りてきたエリカの姿があった。
「お疲れ。
凄かったね、あの魔法」
いつも通りに話しかけて来たエリカに、深雪は控え目な微笑みを返した。
――それは、怖がっている様にも見える笑顔だった。
「……お兄様の前では、死神すらも道を譲るでしょう。でもあの魔法は……」
「んっ？　いや、達也くんの魔法も、もちろん凄かったけどさ。
あたしが言ってるのは、深雪の魔法のこと。
あんな風に敵だけを狙い打ちに出来るなんて凄いじゃない。
流石は深雪ね」
エリカの表情には演技も強がりも無かった。
ただ純粋な、深雪の技量に対する称賛だけがあった。
そこに、恐怖は無かった。

だから、
「――ありがとう」
深雪は自然に、いつも通りの口調で応えることができた。

3一（21）　摩醯首羅（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

3－（21）　摩醯首羅

魔法協会支部のある丘の北側で攻勢を押し返された侵攻軍は、兵力を南側に迂回させて最後の攻撃を試みた。

人質の確保は既に断念している。

長期の占領が可能な兵力でもない。

このままでは何の成果もなく撤退ということになってしまう。せめて協会支部に蓄積された現代魔法技術に関するデータを奪取し、その上で魔法師を一人でも多く殺害してこの国の戦力を殺いでおこう、というのが侵攻軍の決断だった。

撤退のタイミングは、見極めが非常に難しい。

優勢に立っている中で撤退を決断することも難しいが、決定的な敗北を被っていない状態で何一つ戦果が得られていない状態も中々未練を断ち切れないものだ。

敵の攻勢を釘付けにしてその後背を衝く。

一見ダイナミズムに溢れる用兵であり、迂回部隊を率いる指揮官もそう考えて昂揚していた。

装甲車と直立戦車のみの別働隊は、今のところ、敵と遭遇していない。

防衛側に機動力は無い、という推測に基づく作戦であり、その読みは的中したようだ、と装甲車の中で指揮官は思った。

ちょうど、その時だった。

装甲車の後部ハッチから上半身を出して警戒に当たっていた兵士は、頭上を過ぎる黒い影に顔を上げた。

その兵士は、黒い影の正体を見極めることが出来なかった。

空中から放たれた弾丸が、兵士の頭を貫いた。

侵攻軍車両の間で慌てて通信が交わされ、機銃が空に向けられる。

その対応を嘲笑うように空から急降下した黒い部隊――独立魔装

大隊の飛行兵部隊は、道路沿いのビルの屋上に降り立ち上方側面より一斉射撃を浴びせた。
貫通力を増幅したライフル弾が豪雨となって降り注ぎ、魔法防御を飽和して直立戦車のコクピットを貫く。
爆発力を集中した擲弾が装甲車の車輪を吹き飛ばす。
高温の金属粉末を吹き付け燃料に火をつける。
侵攻軍も無抵抗ではなかった。
榴弾を打ち込み、ビルを瓦礫に変える。
重機関砲で壁面を削り、銃口を覗かせている飛行兵を吹き飛ばす。
だが黒い部隊の火勢は、少しも衰えなかった。
炎に巻かれた瓦礫の中から、壁を削られたビルの上から、一層激しい銃撃が繰り出される。
侵攻軍の兵士たちは、装甲車と直立戦車の中で、不死身の怪物を相手にしているような怖気(おぞけ)に捕らわれていた。
彼らはすぐに、そのカラクリを己が目にする機会を得た。
足元を崩されて、一人の飛行兵が路上に落ちる。
直立戦車の機銃がその身体に穴を穿つ。
漆黒の戦闘服がもつ防弾性のお蔭か、即死ではなかった、が、間違いなく致命傷だった。
ところが、その隣に舞い降りた、両手に銀色のＣＡＤを持つ黒い魔人が左手をその兵士に向けた途端、
兵士の傷が、消えた。
右手は彼らに狙いを定めた直立戦車に向いている。
装甲に鎧われた機体にノイズが走り、
全高三メートル半の金属塊が、塵となって消えた。
『……摩醯首羅！』
悲鳴が、電波に乗って広がった。
恐怖に急かされた逃走と、恐怖に駆り立てられた突撃と、相反する波がぶつかり合って、侵攻軍の隊列から秩序が失せた。
パニックは、彼らの全滅によって終結した。

◇◆◇◆◇◆◇

偽装揚陸艦の艦橋、即ち侵攻軍の司令部は、悲壮で深刻な空気に覆われていた。

「別働隊が全滅……？」

侵攻軍総指揮官に睨みつけられた参謀は竦み上がりながらも、己が職務を全うした。

「報告より推測いたしますに、飛行魔法を使った空挺部隊による強襲に、善戦空しく全滅と相成った模様であります」

「……」

「……それと、これは未確認の情報でありますが……」

「何だ」

「別働隊の交信の中に『摩醯首羅』の声が」

「摩醯首羅だと！？」

艦橋にいた半数の人間が目を剥いた。

「別働隊には、三年前の戦闘に参加した者がおりました」

「……」

「……何のことでありますか？」

残り半数の一人だった副官が、総指揮官ではなくその報告をもたらした参謀に問い掛ける。

「――性質の悪い戯言だ！」

だが、その問いに答えたのは指揮官本人だった。

三年前、沖縄で彼らに敗北をもたらした正体不明の魔人。

捕虜交換で帰還した兵士の間で、誰からともなく囁かれた畏称。

中華連合軍の上層部は、その存在を否定している。

その名を口にすることを兵士たちに禁じている。

葬り去ったはずの悪夢。

だが、いくら口で否定しようとも、悪夢は現実と化して彼らに牙を向けていた。

◇◆◇◆◇◆◇

独立魔装大隊の飛行兵部隊はその機動力を活かし、魔法協会義勇兵と交戦している敵陣の後背に襲い掛かった。

前線に投入されている兵数は四十名、一個小隊の規模に過ぎない。だが戦場の常識を覆す兵員移動のスピードは、その兵力を二倍にも三倍にも引上げている。

しかも、兵力の消耗を考慮する必要が無い。

彼らが身に着けている漆黒の戦闘服――ムーバル・スーツは、高い防弾性能を誇る。

また隊員は全員が戦闘面においてハイレベルの魔法技能を有しており、魔法的な干渉に対する防御も堅固だ。

それでも、敵の攻撃を全く受け付けないというわけには行かない。個人が身に着けられる装備にはどうしても重量面で限界があり、戦車や戦闘艦艇の装甲に比べて見劣りしてしまうのは避けられない。故に、銃弾を浴びることもある。

爆発で負傷することもある。

胸や腹に風穴が開くことだってある。

しかし彼らは、即死で無い限り、止まらない。

すぐに復活するのだ。

銃撃に血を流し倒れた兵士は、次の瞬間、何事も無かったように立ち上がる。

その身体に傷痕は無く、スーツに血の跡は無い。

それどころか、スーツ自体にも穴が無い。

銀色のＣＡＤを両手に構えた大柄な兵士が、左手を向け引き金を引くたびに、負傷した兵士が蘇る。

死から解き放たれた兵士が、修羅となって突き進む。

侵攻軍の兵士は、自分たちの目にしているものが信じられなかっ

た。
確かに致命傷を与えたはずなのに、その事実が無かったことになる。
彼らは、白昼夢に迷い込んだのではないか、と感じていた。
しかもこれは、とびきりの悪夢だ。
現実感を侵食されながらも、目の前の光景から、因果関係を悟る。
あの左手の銀色の銃が、漆黒の兵士を蘇らせている――何をどうしているのかは分からないが、それだけは直感的に理解して、銀色の銃を持つ兵士に砲口を向ける。
だが、砲撃が届くことは無い。
銃弾も榴弾も、空中で霧散する。
その右手を向けられた物は全て、塵となって消える。

――Ｄｉｖｉｎｅ　Ｌｅｆｔ――

その左手を差し伸べられた兵士は死の縁から蘇り、

――Ｄｅｍｏｎ　Ｒｉｇｈｔ――

その右手が指し示すものは人も機械も消え失せる。

三年前、香港出身の兵士が上層部の緘口令を逃れる為に使った英語のフレーズが、侵攻軍兵士の間に細波（さざなみ）となって広がり、

――Ｍａｈｅｓｖａｒａ（摩醯首羅）！――

大波と化して、彼らの戦意を呑み込み押し流した。

◇◆◇◆◇◆◇

敵の攻勢が不自然なタイミングで止まった。
克人の感覚的な予測では、敵が敗走に転じるのはもう少し先のことだった。
だが予想より早いからといって、これを見逃す克人ではなかった。
「敵は怯んだぞ！」
彼は魔法協会が主体となって編成したこの義勇軍の中で、最も若い階層に属している。
それにも関わらず克人は自然と、この場の指揮権を掌握していた。
彼の外見から彼の実年齢を見抜いた慧眼の主も、いなかった訳ではない。
しかし彼の持つ、指導者としての資質に異を唱えた者は誰一人いなかった。
無論、その魔法力がこの場の誰よりも優れた、圧倒的なものであるという要素も大きく影響しているだろう。
彼の参戦がなければ、ジリジリと押し込まれて敗走していたのは自分たちの方だ、と理解していない者はほとんどいなかった。
だが、力だけでは無かった。
力は寧ろ、副次的な要因だった。
この場で杖を手に取った（魔法師が戦闘に参加することを、「銃を手に取る」という慣用的な表現に倣い「杖を手に取る」と表現する）者たちが克人を大将と認めたのは、彼の叱咤が彼らの怯懦を吹き飛ばしたからだった。
なるほど、戦（いくさ）に勝つには補給も重要だ。兵の錬度を上げることも大切だ。効率的に兵力を運用する作戦も、それをサポートする輸送・通信手段も欠かせないかもしれない。
だが全てが出尽くした後、最後の最後でものを言うのは士気だ。
兵士の闘争心は、時に全ての不利を覆して勝利をもたらす。
少なくとも地上戦においては未だ、士気は勝利の無視し得ぬファクターであり続けている。
そして、兵士の闘争心を引き出すことが出来る、というのは稀少

な才能、将の器なのである。
「一気に押し戻せ！」
克人の下知に従い、魔法が一斉に放たれた。
相克による無効化が起こらぬよう、加重系魔法に統一された魔法の一斉砲撃。
この攻撃は、既に逃げ腰になっていた侵攻軍にとって、決定打となった。
機甲兵器に搭乗していなかった歩兵と魔法兵の大半が薙ぎ倒された。
既に残り少なくなっていた直立戦車の半数が転倒した。
攻撃を凌いだ装甲車と直立戦車、そして少数の歩兵・魔法兵からなる残存兵力は敗走を開始した。
転倒した直立戦車を上からのファランクスで続けざまに叩き潰して、克人は手を大きく前へ振り下ろした。
「進め！」
態勢を立て直す余裕を与えない追撃命令。
義勇兵の士気は、最高潮に達した。

◇◆◇◆◇◆◇

独立魔装大隊の攻撃により敵が背後から切り崩されているということを、克人と同様に将輝も知らない。
だが風向きが変わったことも、克人とほぼ同じタイミングで掴んでいた。
義勇兵のリーダー的なポジションに収まっているのも克人と同じだが、将輝は積極的に指揮を執ろうとはせず、寧ろ最前列に出て彼らを庇うスタンスだった。
彼は今、中華街の北門（玄武門）の前に独りで立っていた。
この街は戦後の再開発の結果、ビルが壁の役目を果たして、東西南北の四門からしか出入りできなくなっている。無秩序な再開発、

ではなく、計画的に行ったことだと思われる。
閉じ込める為か、閉じ籠もる為か。
おそらくは、後者だろう。
平時であれば大きく開け放たれ観光客の出入りが絶えない四方の門が、今は固く閉ざされている。
それ自体にケチを付けるつもりは、将輝にはなかった。
他所の国で暮らしていくのに自分たちだけで固まって、しかもそこを要塞化（というのは少し大袈裟だが）するというのは、感情的には気に喰わない。
だが彼が今、閉ざされた北門の前に立っているのは、反感を叩きつける為ではなかった。
「門を開けろ！
さもなくば、侵略者に内通していたものと見做す」
将輝が言葉通りの臨戦態勢でこの場に立っているのは、敵がここから中華街の中へ逃げ込んだからだ。
いつ向こう側から銃弾が飛んでくるか、分からない。
飛んでくるのはもしかしたら榴弾や魔法かもしれない。
彼の防御力を超えた威力の爆弾や術式が降って来ないとも限らない。
だから彼は、神経を張り詰めて、魔法を即時発動できる態勢で、独りこの場に立っているのである。
口とは裏腹に、将輝は強行突破を決意していた。
開けろ、とは言ってみたものの、あっさり進入を許すつもりなら、わざわざ出口の限られたこの街に逃げ込んだりはしないだろう。
街の人間が敵軍に内通していなかったとしても、門の開閉は真っ先に敵兵が掌握しているはずだ。
武器を持たぬ街の住民が、それに抵抗できるとは思えなかった。
だから、彼の呼び掛けのすぐ後に、門が軋みを上げて開いて行く光景に、将輝は肩すかしを喰らった気分込みで呆気にとられた。
出て来たのは、将輝よりも七、八歳年長の青年を先頭とする一団

だった。

彼らは、拘束した侵攻軍兵士を連れていた。

「周公瑾と申します」

青年はそう名乗った。

「……周公瑾？」

「本名ですよ」

周青年もこういう反応には慣れているのだろう。

首を捻った将輝に、青年はひっそり笑った。

「失礼した。一条将輝だ」

流石に年長者の自己紹介を放置するのは拙いと考えたのか、将輝が慌て気味に、しかし立場を考え、謙らずに名乗った。

それに対して、周青年はあくまで低姿勢に一礼し、身体をずらして背後の捕虜（厳密に言えば捕虜ではなく被捕縛者）を将輝に差し出した。

「私たちは侵略者と関係していません。

寧ろ、私たちも被害者です。

そのことをご理解いただく為に、協力させていただきました」

青年は誠実そのものの表情で潔白を訴えた。

そこには、少なくとも外見上は、一片の曇りもない。

だが、将輝はそれを、信じられなかった。

白々しい、と訳もなく感じた。

侵攻軍を門の中に招き入れた事についても、油断させて捕らえる為だった、と周青年は主張するに決まっている。

また、その主張は筋の通った、説得力のあるものだ。

しかし、そもそも武装した兵士を、どうやって捕らえたのか。

油断ならない。

それが周青年に対して、将輝が抱いた印象だ。

しかし、だからといって、将輝に民間人を取り調べる権限はない。

それに、表面的に見れば、彼らの協力によりこの方面の戦闘はこれで終結した、と言えるのだ。
将輝は周青年に礼を述べ、他の義勇兵と協力して捕虜を引き取った。
それが彼を最前線から引き離す結果になったと、将輝は気付かなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

達也は柳たちと共に、敵の喉元へ迫っていた。
克人も掌握した義勇兵と共に侵攻軍を激しく追い立てていたが、彼らは基本的に徒歩、達也たちとは機動力が違う。
兵士単体で飛行可能という、飛行デバイスによってもたらされた兵力運用の革新を最大限に発揮して、敵を後背・側面から切り崩す。
元々、独立魔装大隊は、最新の魔法技術を軍事に活用する実験部隊。
ムーバル・スーツによる高機動戦闘は、その本領を発揮したものと言える。
近代以降の、攻撃兵器が防御兵器を上回っている状態は、現代においても尚続いている。
重戦車の装甲が歩兵用の携行ミサイルに破られてしまうような技術体系の下では、陸上兵力も散開陣形とならざるを得ない。
相手が散開している状態ならば、機動力と打撃力で、一つ部隊を各個撃破するという形に持ち込むことができる。
部隊ごとの各個撃破ではなく、部隊内の散開した兵力ユニットを各個撃破する。
ムーバル・スーツの機動性と武装デバイスの打撃力があって初めて可能になる戦術で、独立魔装大隊は侵攻軍を駆逐していった。
貫通力を増幅したライフル。
燃焼ガスの拡散方向を限定した燃料気化爆弾搭載の携行ミサイル。

高温に熱した金属粉末を電磁力で撃ち出すパウダー・レールガン。
材質的な問題、構造的な問題から、非魔法技術のみでは実現の難しい兵器の数々が、その威力を存分に振るっている。
無論、魔法そのものも活躍していた。
中でも目に付くのはやはり、柳大尉の「千畳返し」。
そして達也の「雲散霧消」。
何トンもある金属の塊がゴロゴロと転倒する様は実に壮観だ。
だが、どれほど派手でも柳の「千畳返し」は支援用の魔法であり、それ単体で敵にとどめを刺すものではない。
それに対して、「雲散霧消」は地味で静かな魔法と言える。
音も光も無い。
火薬・燃料の爆発に巻き込まれるリスクを避ける為に分解のレベルを上げているので、容燃性物質の燃焼炎も生じない。
ただ消え去るだけだ。
塵となり、蒸気となり、拡散して、それで終わり。
それだけで、敵機も敵兵も、その存在が終わる。
死体すら残すことが出来ない無残な魔法は、それを目にした敵の戦意を根こそぎ奪って行く。

接触から十五分。

それが敵の限界だった。

兵力の損耗と、それ以上に士気の喪失に耐え切れず、侵攻軍は潰走を始めた。

◇◆◇◆◇◆◇

沿岸部から内陸へ脱出するヘリの中は、沈黙に包まれていた。
何となく、口を開くのが憚られる雰囲気が漂っていた。

だが、その不自然な沈黙に耐え続けることもまた、彼らには出来なかった。
「……自分の身に起こったことだというのに……まだ信じられないよ」
最初にポツリと呟いたのは、五十里だった。
「……一体、何が起こったんだ？
何をどうすりゃ、こんなことが可能なんだ？」
誰にとも無く当惑の台詞を口にしたのは、もう一人の当事者である桐原だった。
「いっそ、全部幻覚だった、って言われた方がまだ納得できるぜ」
「でも、幻覚じゃない。
僕が死に掛けたのも、君の脚が千切れたのも、紛れも無い事実だ」
再び沈黙が訪れた。
深刻な、深刻だった事実を改めて突きつけられて、先程より空気の重量が増していた。
「……司波、これだけは教えてくれ」
遂に、と言うべきか。
この中で唯一、真相を知っている人物である深雪に、摩利が問い掛けた。
「何でしょうか？」
応える口調は冷静なものだった。
ただ、表情の硬さは隠し切れていない。
いや、もしかすると、隠すつもりも無いのかもしれない。
深雪はわざと、水晶のように硬質な表情を作っているのかもしれなかった。
「達也くんの魔法は、どの程度効果が持続するんだ？」
魔法による治療は一時的なもの。それが治癒魔法の原則だ。
効果が持続する内に何度も掛け直し、何度も世界を欺き、それでようやく、偽りの治癒を世界に定着させることが出来る。
持続時間が短ければ、すぐにでも新たな治癒魔法を施さなければ

ならない。
「永続的なものです」
しかし、返って来た答えは予想外のものだった。
「通常の治癒魔法の様に、継続的な施術は必要ありません」
深雪の回答は、摩利の意図を百パーセント理解した上で、五十里と桐原に聴かせる事も意識したものだった。
「運動の制限もありません。完全に、いつも通りの生活が可能です」
「……そんな事が可能なのか？」
その答えに、摩利は納得出来ない様子だった。
「信じられませんか？」
「信用していない訳じゃないけど」
納得していないのは摩利だけではなかった。
「啓を救ってくれたことには感謝してるけど……一度で完治する治癒魔法なんて聞いたこと無いわ。
そんなの、治癒魔法の基本システムに反してる。
本当に治ったの？
だったらあれは、治癒魔法じゃないの？
司波君は一体何をやったの！？」
「花音ちゃん、落ち着いて」
言葉を重ねている内に興奮してしまった花音を、真由美が宥めた。
「深雪さん、気を悪くしないでね？
花音ちゃんは五十里くんのことが心配なだけなんだから」
「分かっています。気にしていません」
真由美のフォローに、深雪は控え目な微笑みで応じた。
「しかし、何をやったのかは気になる。治癒魔法で無いとしたら、一体何を……」
「摩利！　他人の術式を詮索するのは、マナー違反よ！」
ようやく少し雰囲気が和らいだ、と思ったところにそれをぶち壊すことを言い出した摩利へ、真由美から厳しい叱責が飛んだ。
「ありがとうございます、七草先輩。ですが、構いません」

だが、深雪は真由美の気遣いに感謝を示しながらも、それを不要と言った。

「気になさるのは当然だと思います。皆さんに打ち明けるだけなら、お兄様も許して下さるでしょう」

それは、他言無用という意味だ。

もし秘密を守れないならば、この話はここ迄、ということ。

「他言はしない」

「誰にも言わないわ」

打てば響くタイミングで、摩利と花音がそう応えた。

他のメンバーも次々と誓約の言葉を返した。

「今から聴くことの一切を秘密とします。それは名倉さんたちも同様です」

そして最後に、真由美がこう告げた。

「いえ、そこまで大袈裟なことではありませんが……」

深雪は珍しく、苦笑気味に笑った。

真由美が何を約束しようと、結局、七草家の耳には入るだろう。

だがそれでも構わないと深雪は判断した。

何を出来るか、が分かってしまった以上、どうやったのかを隠していても余り意味は無いからだ。

どうせ、誰にも真似など出来ないのだから。

「お兄様が使った魔法は、治癒魔法ではありません」

深雪は端正な姿勢で静かに語り始めた。

それは、聴いている方の背筋も、思わずピンと伸びてしまうような佇まいだった。

「魔法の名称は『再成』。

エイドスの変更履歴を最大で二十四時間遡り、外的な要因により損傷を受ける前のエイドスをフルコピーし、それを魔法式として現在のエイドスを上書きする魔法です。

上書きされた対象は、上書きされた情報に従い、損傷を受ける前の状態に復元されます。

ところで、魔法の効果が何故一時的なものでしかないのか、皆さんはご存知ですか？」

そう問い掛けた深雪は、答えを待たずに言葉を続けた。

「魔法の効果が永続しないのは、エイドスの復元力が作用するからです。

エイドスの復元力とは、外から書き換えられる前の、過去の自分に戻ろうとする力。

ですが、『再成』でフルコピーされたエイドスも、過去の自分自身を表す情報体に他なりません。

自分自身の情報でエイドスを上書きされた対象は、損傷を受けた状態に復元するのではなく、損傷を受けることなく時間が経過した状態でこの世界に定着します。

全て、無かったことになるのです」

摩利は、花音と顔を見合わせた。

真由美は目を何度も瞬(しばたた)かせていた。

五十里は全身を硬直させ、桐原は狐に抓まれた様な顔をしていた。

表現方法に様々な違いはあれど、表れている感情は同じだった。

「……じゃあ達也は、どんな傷でも一度で治してしまう、ということですか？

信じられません、いくら達也でも、そんな……」

その思いをハッキリ口にしたのは幹比古だった。

「一度で、ではありませんよ、吉田君」

それを深雪は、笑って否定する。

「一瞬で、です。

それに、対象は生物に限りません。

人体だろうと機械だろうと、お兄様は一瞬で復元してしまうことが可能です」

あんぐりと口を開けた状態で固まってしまった幹比古を見て、深雪は可笑しそうに、だが同時に、寂しそうに笑った。

「この魔法の所為で、お兄様は他の魔法を自由に使うことが出来ま

せん。
魔法領域をこの神の如き魔法に占有されている所為で、他の魔法を使う余裕が無いのです」
神の如き、という形容を、大袈裟だと思った者は一人もいなかった。
誇張でも何でもなく、それは「奇跡」だった。
「……それで達也くんは、あんなにアンバランスなのね」
「ああ……それほど高度な魔法が待機していては、他の魔法が阻害されても確かに不思議は無い……」
深雪は真実の半分しか語っていない。
残りの半分を打ち明けるつもりは無かった。
ただ都合の良い誤解をしてくれた先輩たちの言葉に、寂しげな微笑みを浮かべるだけだった。
「……でもそれって凄いじゃない。
二十四時間以内に受けた傷なら、どんな重傷でも無かったことになるんでしょう？」
「そうだね。
災害現場でも野戦病院でも、その需要は計り知れない。
何千、何万という人の命を救うことができる」
「そうよ！
それに比べたら、他の魔法が使えないなんて些細なことだわ。
こんな凄い力を何故秘密にしてるの？
だって、大勢の命を救うことができるんだよ。
命を奪うことで得た名声じゃなくて、命を救うことで得た名声なんて、本物のヒーローじゃん！」
「そうですね……ありとあらゆる負傷を、無かったことにする。
そんな魔法が、何の代償も無く使えるとお考えですか？」
興奮する花音と対照的に、深雪は極めて冷静で、表情に乏しかった。
冷たく冴えた眼差しが花音を貫く。

それを見て初めて、花音も、摩利も、真由美も、深雪が荒れ狂う激情を己が裡で氷付けにすることで、無理矢理平静を保っているのだと悟った。

彼女は、嘆き哀しんでいた。

彼女は、怒り狂っていた。

「エイドスの変更履歴を遡ってエイドスをフルコピーする。その為には、エイドスに記録された情報を全て読み取っていく必要があります」

深雪の声は、変わらず冷静で、事務的ですらあった。

だが、真由美も摩利も花音も五十里も、その声を聞いていた全員が、背筋にゾクッと寒気を覚えた。

「そこには当然、負傷した者が味わった苦痛も含まれます」

誰かが、息を呑む音がした。

「知識として苦痛を読み出すのではありません。苦痛という感覚が、ダイレクトな情報となって自分の中に流れ込んで来るのです。

肉体を介した情報でなく、精神に直接、刻み込まれるのです」

ゴホッ、ゴホッと誰かが咳き込んだ。

それは意識的な咳払いなどではなく、上手く呼吸が出来なくなったが為の生理的な反応だった。

「しかもそれが、一瞬に凝縮されてやって来ます。

例えば……今回、五十里先輩が負傷されてからお兄様が魔法を使われるまで、およそ三十秒の時間が経過していました。

それに対して、お兄様がエイドスの変更履歴を読み出すのに掛けられた時間はおよそゼロコンマ二秒。

この刹那の時間に、お兄様は五十里先輩が味わわれた痛みを百五十倍に凝縮した苦痛を体験されているのです」

「百五十倍……」

五十里の口から呻き声が漏れた。

それがどんなものか、正直なところ彼には想像も出来ない。

だが、もしそんな痛みに曝されて、自分は正気を保てるだろうか、と五十里は思った。

「負傷していた時間が長ければ、それだけ痛みは凝縮されます。一時間前の負傷を取り消す為には、本人の一万倍以上の苦痛に耐えることを余儀なくされます。お兄様は他人の傷を治すたびに、そのような代償を支払っているのですよ？それでもまだ、他人の為にその御力を使うべきだと仰るのですか？」

彼女は静かに怒り狂っていた。

何よりも、自分自身に対して。

兄に「再成」の行使を願ってしまった、身勝手な自分自身に対して。

◇◆◇◆◇◆◇

独立魔装大隊は、遂に敵の本陣である偽装揚陸艦を目視に捉えた。

二十輌の装輪式大型装甲車、六十機（輌）の直立戦車、八百人の戦闘員。その中には魔法師も多数含まれていた。

占領維持には足りなくても、一局面の打撃力としては不足の無い戦力が、今や装甲車、直立戦車の残存数ゼロ、兵士の損耗率七十パーセントという壊滅状態に陥っていた。

潰走する彼らを追い立てる、その先頭に立つのは、僅か四十名の飛行兵部隊。

横浜事変は、最終局面に入っていた。

3一（22）　マテリアル・バースト（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

3一（22）　マテリアル・バースト

すっかり義勇軍の指揮官に納まった克人の下へ、魔法協会支部経由の報告が入った。
「敵戦闘艦が離岸した模様です！」
その報告に、克人は軽く眉を上げて意外感を示した。
「敵兵の撤退は完了していないはずだが」
最早、彼らの目の前に交戦中の敵の姿は無い。
先程まで矛を交えていた敵は、一部の足止め要員を残して逃げて行った。
足止め部隊も、生き残りは全て降伏している。
しかし敵残存兵力の全てを艦内に収容したにしては、早過ぎる。
海岸沿いのエリアでは、敵兵力がまだ残っているはずだった。
「敵は残存兵力の収容を諦めた模様です。
掃討戦に移りますか？」
まだ若い、おそらく克人とそう変わらない年齢の伝令は、期待に目を輝かせて克人に問うた。
苦戦を続け、多くの仲間を犠牲にした直後だ。
復讐心に心を滾らせたとしても無理はない。
だが、だからこそ、克人は首を横に振った。
「それは我々の為すべき事ではない。
不要なリスクを冒すことはせず、後は国防軍に任せるとしよう」
「――分かりました！」
心から納得している訳ではないのだろう。
だが彼らに勝利をもたらしたこの若い魔法師に背くつもりも無いようだった。
その青年の口から、義勇軍全体に戦闘停止が触れられた。

◇◆◇◆◇◆◇

北からは鶴見の大隊、南からはようやく到着した藤沢の部隊。
西からは保土ヶ谷の駐留部隊とこれに合流した藤沢の支隊。
三方からの圧力に耐え切れず、敵は上陸部隊の収容を途中で切り上げて撤退に掛かった。
敵艦が慌てて出港しようとしているのを、柳は当初、見逃すつもりはなかった。
「逃げ遅れた敵兵は後詰の部隊に任せて、我々は直接敵艦を攻撃、これを撃沈する！」
ムーバル・スーツの空中機動力を使えば残存兵力の頭を飛び越えて敵艦に乗り込み、内部から制圧するという作戦も可能だったが、柳はそんなリスクと手間を負担するつもりは無かった。
どうせトカゲの尻尾切りよろしく、現場の暴走で片付けられてしまうことが目に見えている捕虜など、邪魔なだけだ。
後腐れなく海の藻屑に変えてしまえ、というのが柳の判断であり、それに異を唱える者は、達也を含めて、いなかった。
指向性気化爆弾のミサイルランチャーを抱えた兵士を中心に、貫通力増幅ライフルを手に持つ兵士を護衛に配して隊列が組まれる。
だが彼らが今まさに飛び立とうとしたその時、制止の声が届いた。
『柳大尉、敵艦に対する直接攻撃はお控え下さい』
「藤林、どういうことだ」
通信機で割って入ったのは、藤林だった。
『敵艦はヒドラジン燃料電池を使用しています。
東京湾内で撃沈するのは水産物に対する影響が大き過ぎます』
柳は小さく舌打ちした。
何故そんなことが分かる、とは言わない。
電子線の放射・反射を捉えて対象物を走査する術式は藤林の得意魔法の一つだ。
一キロ以上の距離を置いて、微弱な脳波パターンの違いから通常の魔法師と「ジェネレーター」を見分けることも出来る藤林にとっ

て、放射線隔壁も無い容器に大量蓄積された燃料の分子構造を特定することは、それほど難しくない。
「ではどうする」
『退け、柳』
「隊長？」
いきなり通信の相手が変わって、柳は訝しげな声を上げた。
相手が変わったことにではなく、その命令に対して。
『勘違いするな。作戦が終了したという意味ではない。敵残存兵力の掃討は鶴見と藤沢の部隊に任せ、一旦帰投しろ』
「了解です」
話を聞いている間に考えが纏まったのか、今度の返答は迅速で躊躇いの無いものだった。
ムーバル・スーツによって実現した飛行兵は、敵の本陣を強襲したり敵の背面から奇襲をかけたりする作戦には向いているが、掃討戦の様に数と時間を必要とする類の作戦には向いていない。
それに、いくら精鋭揃いでシステムを効率化していると言っても、長時間の魔法使用による疲労は確実に蓄積されているはずだ。
柳は部下に対し、移動本部への帰投を命じた。

◇◆◇◆◇◆◇

帰投した柳に指揮権を委ね、風間少佐は真田大尉、藤林少尉、そして達也を連れてベイヒルズタワーの屋上に来ていた。
掃討戦はほぼ完了している。
所々で散発的な閃光と銃声が生じているが、それも今晩中に落ち着くだろう。
通路が崩れて地下に埋まってしまった形のシェルターも、明日には臨時のトンネルが開通する予定だ。
避難している人々は、地上に作られた臨時の避難所より寧ろ快適な環境で過ごしている。

現在の時刻は、午後六時。
黄昏時――逢魔が時。
「敵艦は相模灘を時速三十ノットで南下中」
藤林少尉が携帯用の小型モニターを見ながら、風間にそう告げた。
「房総半島と大島のほぼ中間地点です。撃沈しても問題ないと思われます」
藤林の言葉に頷いた風間は、真田へと顔を向けた。
「サード・アイの封印を解除」
「了解」
風間からカードキーを受け取ると、不謹慎なほど嬉しそうな顔で、真田が傍らの大きなケースの鍵を開いた。
霞ヶ浦の本部から、大急ぎで持って来させたケースだ。
カードキーと静脈認証キーと暗証ワードと声紋照合の複合キー。
「色即是空、空即是色」
『パスワード・認証しました』
音声の応答は本来必要の無い真田の趣味だが、厳重な封印は遊びではなかった。
中に納まっていたのは大型ライフル――の形状をした、特化型ＣＡＤ。
真田はそのＣＡＤ「サード・アイ」を、ムーバル・スーツを着てヘルメットを被ったままの達也に手渡した。
達也はそのストック部からコードを引き出して、右手首のジョイントに差し込んだ。
ジョイントから続くケーブルはスーツの中を通って、ヘルメットにつながっている。
「大黒特尉」
風間が達也をコードネームで呼んだ。
「マテリアル・バーストを以って、敵艦を撃沈せよ」
「了解」
達也の声には、緊張が混じっていた。

実戦に使用するのは三年ぶりだが、「マテリアル・バースト」自体を失敗するという虞は持っていない。
緊張は、武者震いに近い感覚だった。
達也は南を向いて、ストックを肩に当てた。
「成層圏監視カメラとのリンクを確立」
隣でノート型のモニターを見ていた真田が、風間にそう告げた。
達也に告げる必要は無いことだった。
達也のバイザーには、リンクした映像――敵艦の赤外線映像が映っているのだから。
日本列島をグルリと取り囲む形で空中に浮いた成層圏プラットフォームに搭載された国境監視カメラが、サード・アイのアンテナを通じて映像を送り込んでいるのだ。
藤林がモニターしている映像と同じ画面で対象を特定した達也は、情報の側面から敵艦表面の状態を探った。
船体に付着する無数の水滴。
その中から、ヒドラジン燃料タンクの直上、甲板に付着した水滴を選び出す。
監視カメラの分解能では見分けることのできない一滴の海水に、サード・アイの遠距離精密照準補助システムの助けを受け、情報体知覚の視力によって照準を合わせる。
「マテリアル・バースト、発動」
達也はそう呟いて、引き金を引いた。

相模灘を南下中の敵艦内には安堵感が漂っていた。
「やはり日本軍は攻撃してきませんでしたね」
「フン……奴らにそんな度胸があるものか」
「ヒドラジンの流出を恐れたのでは？」
「同じことだ。
今更環境保護などという偽善に囚われているから、みすみす敵の撤退を許すことになる」

敗走、という言葉を使わない心理は、何処の国の軍人でも同じと思われる。

彼らは自分たちが人工衛星からか成層圏プラットフォームからか、何らかの監視手段で追跡されていることを確信していたが、最早攻撃を受けるとは思っていない。

それを油断とは言えないだろう。

その気があるなら、とうに仕掛けてきているのがセオリーだ。

少なくとも艦艇か航空機による追跡を行っているはずだ。

「……憶えておれよ。この屈辱は倍にして返してやる」

帰還を既定の事実とし、報復を誓う気の早い士官も一人や二人ではなかった。

もうすぐ、大島の東を通過する、というその時。

不意に、警報が鳴った。

サイオン波の揺らぎに対する警報。ＣＡＤの照準補助システムにロックオンされた警報だ。

「何事」

何事だ、と艦長は叫びたかったのだろう。

それも当然のことで、少なくとも十キロ四方に敵の影も形も無い。

だがその短い台詞を、偽装揚陸艦の艦長は言い切ることが出来なかった。

甲板上に生じた灼熱の光球。

それが、空気を加熱して衝撃波を発生させ、甲板を熔かして金属蒸気の噴流を発生させ、ヒドラジンを含めた全ての可燃物を一瞬で完全燃焼させ、巨大な炎の塊と化して艦を呑み込んだ。

マテリアル・バーストの生み出した灼熱の地獄は、成層圏監視カメラを通じてベイヒルズタワーの屋上でも確認された。

究極の分解魔法、「マテリアル・バースト（質量爆散）」。

それは、質量をエネルギーに分解する魔法。

対消滅反応ではない。

質量を直接エネルギーに分解する故に、対消滅反応の際に生じるニュートリノ発生によるエネルギーロスも無い。
アインシュタイン公式の通りに、質量を光速定数の二乗の倍率でエネルギーに変換する。
水一滴、五十ミリグラムの質量分解によって発生する熱量は、TNT換算1キロトン。
それだけの熱量が、瞬時に、水一滴の空間で発生したのだった。
「……敵艦と同じ座標で爆発を確認。同時に発生した水蒸気爆発により状況を確認できませんが、撃沈したものと推定されます」
「撃沈しました。津波の心配は？」
モニターを見ていた藤林の報告を、達也は修正した上でそう訊ねた。
「大丈夫です。津波の心配はありません」
「約八十キロの距離で五十立方ミリメートルの水滴を精密照準……『サード・アイ』は所定の性能を発揮しました」
真田が風間に対し、得意げに報告する。
風間は真田へ無言で頷いて、達也に労いの言葉を掛けた。
「ご苦労だった」
「ハッ」
敬礼で応えた達也に頷き、風間は作戦終了を宣言した。

◇◆◇◆◇◆◇

自宅に帰り、深雪は一人きりの夜を過ごしていた。
一人きりは、珍しいことではなかった。
独立魔装大隊の演習で、達也はちょくちょく家を空ける。
そんな時はいつも達也からマメに連絡があるし、今日も電話を貰っている。
それに、彼女と兄は、遠く離れていても、いつもつながっていた。
抽象的な意味でも観念的な意味でもなく、兄の力が常に彼女の周

囲を見張り、彼女を脅威から守っているのだ。
それは、今も同じ。
彼女の側から兄に対する干渉は切れても、兄の側から彼女に対する守護が途切れることは無い。
達也はいつも、深雪のことを、無意識に、見守っている。
それがとても申し訳なくて、それでも彼女には嬉しかった。
突然、電話の呼び出しメロディーが奏でられた。
いつもは奏でられることの無い旋律。
――運命は斯く扉を叩く――
そのフレーズの通り、このメロディーは常に、彼女たち兄妹の運命を左右するものだった。
急いで立ち上がり、軽く身だしなみを整え、カメラの前に立って、深雪は通話回線を開いた。
「ご無沙汰致しております、叔母様」
『夜分、すみませんね、深雪さん』
「いえ、滅相もございません」
深々とお辞儀をしていた頭を上げると、画面の中で、ほとんど黒に近い色合いのロングドレスを身に纏った上品な女性がにこやかに微笑んでいた。
実年齢は四十歳を超えているはずだが、外見は三十前にしか見えない。
画面越しだけでなく、実際に対面して目の前で見てもそうなのだ。
深雪に良く似た面差しの、美女という名を欲しいままにして来たことであろう女性。
彼女こそは、深雪たち兄妹の母親の、双子の妹。
四葉家、現当主。
世界最強の魔法師の一人。
四葉真夜、その人だった。
『そうですか……？
それにしても、今日は大変な目に遭いましたね』

「ご心配をお掛け致しました」
短く応えて、カメラの前で優雅に腰を折る。
姪のその姿に、真夜はおっとりと頷いた。
『貴女の無事な顔を見て安心しました。
まあ、貴女には達也さんがついているから心配は要らないと思っていましたけど……そう言えば、達也さんは今、どちらへ？』
ふと思い出したように、本当についでのように、真夜が問う。
だが深雪は騙されなかった。
この質問が叔母の本命であると、彼女には明らかだった。
「畏れ入ります。
兄は事後処理のため、まだ帰宅しておりませんが」
『まあ！　達也さんったら、可愛い妹を放って、何処で油を売っているのでしょう？』
困ったわ、と言わんばかりに頬へ手を当て、浮世離れした仕草で当惑を表現する真夜。
「お心を煩わせ、まことに申し訳ありません。
わたしも兄の行動を逐一把握してはおりませんが……」
それに対して、深雪はあくまで礼儀正しく、恭しい態度を崩さなかった。
「ですが叔母様、ご懸念には及びません。
兄の力は、常にわたしを守護しておりますので」
『ああ、そうだったわね。
深雪さん、貴女の方から鎖を解くことは出来ても、達也さんの方から誓約を破棄することは出来ないのですものね』
ニコニコと微笑みながら、真夜が言う。
その笑顔の裏側で、深雪が真夜の許可無く達也の枷を外した事実を指摘してみせる。
「ええ、仰るとおりですわ、叔母様。
兄は何処へ行こうと、自分の一存でガーディアンの務めを放棄することなどありません」

それでも、深雪の慇懃な態度に綻びは生じなかった。
『それを聞いて安心しました。
そうそう、今度の日曜日にでも二人揃って屋敷にいらっしゃいな。
久し振りに、貴女たちに直接、会いたいわ』
「恐縮です。
兄が戻りましたらそのように申し伝えます」
『楽しみにしているわ。
じゃあ、お休みなさい、深雪さん』
「お休みなさい、叔母様」
画面がブラックアウトし、通信が完全に切れたことを確認して、深雪は大きく息を吐き崩れ落ちるようにソファへ腰を下ろした。
叔母の相手はいつも、彼女に多大なプレッシャーをもたらす。
しかもどういう訳か、兄がいない時に限って――おそらく、達也の不在を知っていて狙っているのだろう――電話を掛けてくる。
叔母のことだ。
きっと、彼女の知らないことまで分かっているに違いない。
それでも深雪は、真夜を前に迂闊なことを漏らす訳には行かなかった。
彼女が不用意な発言をすればそれは、兄の行動を縛る結果になる。
カーテンを開けて、兄がいる、西の空へ目を向ける。
兄は今度の一件に、完全なケリをつけるため、風間に同行して対馬へ向かったはずだ。
少なくとも深雪はそう連絡を受けているし、達也が深雪に嘘を吐くはずもなかった。
それが必要なことだと、分かっている。
達也が必要とされている、それは深雪にとって、本人以上に嬉しいことだった。
でも今日は、
今晩は、
本心では、

達也に、傍にいて欲しかった。
今、この家には深雪しかいない。
刈り取った命の重さに耐えるには、独りは辛く、寂しかった。
（お兄様……）
心の中で兄を呼び、自分をそっと抱きしめる。
自分の中に残る、兄の魔力の残滓を感じて、深雪は一層強く自分の身体を抱き締めた。

◇◆◇◆◇◆◇

十月三十一日。
今日はハロウィン、だが、キリスト教徒でない達也に、特別な感慨はなかった。
彼は今、対馬要塞に来ていた。
今から三十五年前、第三次世界大戦、またの名を二十年世界群発戦争の後期、この島は中華連合高麗自治区軍の攻撃を受け、住民の七割が殺された。
相手国を無用に刺激しない為、という理由で、国境の島にも関わらず最低限の守備隊しか置かなかった、その結果だった。
高麗軍にも言い分はあった。
また、当時はそういう時代だった。
だが島民の七割が犠牲になり、脱出した二割の住民も重傷軽傷、どこかしら傷を負い、残り一割の住民が捕虜として拉致され、島が占領されたという事実は変わらない。
対馬を奪還した後、日本政府はこの島を要塞化した。
大規模な軍港と堅固な防壁、最新鋭の対空対艦兵装を備えた最前線の基地。
それが、対馬要塞だ。
『特尉、作戦室に来てくれ』
コール音の後、左耳につけた通信ユニットからそんな指示が伝え

られた。
達也は屋上から、要塞の中へ戻った。
彼が見詰めていた海の向こうには、朝鮮半島が影となって浮かんでいた。

「来たか」
入室と共に敬礼した達也にぞんざいな答礼を返し、風間は彼に座るよう指示した。
達也は作戦室の隅の椅子に腰を下ろした。
達也が最後、ではなかった。
僅かに遅れて、柳と山中が顔を見せる。
見覚えのない士官は、この要塞のスタッフだろう、と達也は思った。

「予想通り、」
全員が揃った、と見るや、何の前置きもなく風間が喋り出した。
達也たちは慣れていたが、要塞のスタッフは戸惑いを隠せぬ様子だった。

「敵海軍が出撃準備に入っている。
この映像を見てくれ」
壁一面を使った大型ディスプレイに、衛星から撮ったと思しき写真が表示された。
そこには十隻近くの大型艦船とその倍に上る駆逐艦・水雷艇の艦隊が出港準備に取り掛かっている様子が写っている。

「今から五分前の写真だ。
このまま推移すれば、敵は遅くとも二時間後に出港するだろう。
動員規模から見て一時的な攻撃ではなく、北部九州、山陰、北陸のいずれかの地域を占領する意図があると思われる」

「本格的に戦争を始めるつもりでしょうか」
風間の言葉に、若い少尉から質問が飛んだ。
年齢的に見て、最近この要塞に配属されたのだろう。

「彼らは三年前からずっと戦争中のつもりなのだろうな」
皮肉に答えたのは風間ではなく柳。
質問をした少尉は、羞恥に顔を赤らめて引き下がった。
「申し訳ない。どうも我が隊の者は礼儀に疎いようだ」
一旦相手の面子を立て、
「だが結論は、柳大尉が述べたとおりだ。
我が国と中華連合の間では、講和条約どころか休戦協定も結ばれていない」
風間が再度釘を刺す。
会議室の雰囲気が一気に引き締まった。
「既に動員を完了している敵艦隊に対し、残念ながら我が海軍は昨日より動員を開始したところだ。
現状では敵の海上兵力に、陸と空の兵力で対抗するしかない」
空気が重量を増した。
「苦戦は免れないだろう」
発言を求める者は、誰もいなかった。
「そこで、この現状を打開する為、我が独立魔装大隊は戦略魔法兵器を投入する。
本件は既に統合幕僚会議の認可を受けている作戦である」
要塞のスタッフが期待と疑念の混ざった視線を風間へ向けた。
「ついては、第一観測室を我が隊で借り受けたい。
また、攻撃が成功した場合、それと同時に……」
風間の説明は続いている。
だが達也はそれ以上、耳を傾ける必要を感じなかった。
要塞に関する資料は来る途中に目を通している。
第一観測室は低高度衛星を使って敵沿岸部を監視する施設の一つ。
そこで何が行われるのか、彼に何をやらせるのか、それだけで達也には理解出来た。
達也は昨日と同じムーバル・スーツを身に着け、ヘルメットを被

り、「サード・アイ」を手に、第一観測室の全天スクリーンの真ん中に立った。
　このスクリーンは衛星の映像を三次元処理して、任意の角度から敵陣の様子を観察することが出来るようにしたものだ。
　今は達也の希望により、水平距離百メートル、海面上三十メートルの高さから見下ろした映像を映し出している。
「大黒特尉、準備は良いですか？」
　真田に問われて、
「準備完了。
　衛星とのリンクも良好です」
　達也はスタンバイ完了の答えを返す。
「マテリアル・バースト、発動準備」
　風間の声に、達也は「サード・アイ」を構えた。
　鎮海軍港。
　巨済島要塞の向こう側に集結した中華連合艦隊。
　その中央の戦艦、おそらくは旗艦に翻る戦闘旗。
　その旗に照準を合わせる。
　三次元処理された衛星映像を手掛かりに、情報体へアクセスする。
　戦闘旗の重量は、およそ一キロ。
「準備完了」
　囁くような、小さな呟き。
　だが静まり返った室内では、それで十分だった。
「マテリアル・バースト、発動」
「マテリアル・バースト、発動します」
　風間の命令を復唱し、達也はサード・アイの引き金を引いた。
　対馬要塞の中から、海峡を越えて、鎮海軍港へ。
　達也の魔法は、約一キロの質量をエネルギーに変えた。
　アインシュタイン公式に基づくその熱量は、ＴＮＴ換算二十メガトン。
　スクリーンがブラックアウトした。

過剰な光量に、衛星の安全装置が作動したのだ。
だから彼らは、そこに生じた地獄の、爪痕しか見ることが出来なかった。

鎮海軍港の奥に停泊する旗艦の上に、突如、太陽が生まれた。
それ以外に表現のしようがない熱量であり、それを後世に伝えることが出来た者は誰一人いなかった。
計測不能の高熱は、船体の金属を蒸発させて重金属の蒸気を散撒(ばらま)いた。
急激に膨張した空気は、音速を超えた。
熱線と衝撃波と金属蒸気の噴流に、艦隊も港湾施設も消滅した。
近くのものは、人も物も、蒸発した。
少し離れた人や物は、爆発し、焼失した。
海面は高熱に炙られ、水蒸気爆発を起こした。
竜巻と津波が生じて、対岸の巨済島要塞を呑み込んだ。
巨済島が堤防の役目を果たさなかったならば、対馬や北部九州沿岸も津波の被害を免れなかっただろう。
破壊は鎮海軍港に止まらなかった。
衝撃波は周りの軍事施設に及んだ。
不幸中の幸いだったのは、鎮海軍港周辺に民間人の居住する都市が存在しなかったことだろうか。
灼熱の暴虐が収まった時、そこには何も残っていなかった。

衛星からの映像が回復して、対馬要塞のスタッフは一人の例外もなく、息を呑んだ。
若い士官の中には、トイレに駆け込んで胃の中の物を戻した者もいた。
無様、と笑うことは出来ないだろう。
独立魔装大隊の面々でさえ、蒼褪めた顔の色を隠せなかったのだから。

彼らは、戦略級魔法の、真の意味を初めてその目で確かめたのだ。
「敵の状況は？」
風間に問われ、藤林が慌ててモニターを確認する。
「敵艦隊は全滅……いえ、消滅しました。
攻勢を掛けますか？」
確かに今なら、占領は容易だろう。
だが風間は、首を縦に振らなかった。
「不要だ。
以後の予定を省略し、作戦行動を終了する」
「全員、帰投準備に入れ！」
風間の命令を受けて、柳が撤収を命じた。
達也はサード・アイを床に下ろし、ヘルメットを取った。
その顔には、一欠片の動揺も、存在しなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

灼熱のハロウィン。

後生の歴史家は、この日のことを、そう呼ぶ。
それは軍事史の転換点であり、歴史の転換点とも見做されている。
それは、機械兵器とＡＢＣ兵器に対する、魔法の優越を決定づけた事件。
魔法こそが勝敗を決する力だと、明らかにした出来事。
それは魔法師という種族の、栄光と苦難の歴史の、真の始まりの日でもあった。

3ー（22）　マテリアル・バースト（後書き）

第三章はこれにて閉幕です。
第四章「追憶編」の開幕は今のところ未定ですが、3月には再開できる見込みです。

4－（1）　在りし日の兄妹（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

4－（1）　在りし日の兄妹

大き目の武家屋敷調伝統家屋。
それが門の外から見た四葉本家の印象だった。
一般家屋と比較すれば、確かに広い。
お屋敷、と表現しても違和感が無い。
だが七草家や一条家の大邸宅を見たことがある者ならば、質素でこじんまりとした佇まい、と寧ろ驚くだろう。
四葉は屋敷の広さなど気にしない。
徹底した秘密主義を貫く四葉家は外部から大勢の客を招くようなことが無いのだから、大邸宅など邪魔なだけだと思っているのかもしれない。
母親の実家であるにも関らず他人事の様にそう考えて、深雪は兄と共に、重厚な作りの門へ足を踏み入れた。

あの日――後世に「灼熱のハロウィン」として知られる日から、一週間。
兄妹が「開発」という言葉から取り残されたような山村に足を運んだのは、叔母の招き――という名の出頭命令――によるものだった。
外の構えからは想像できないモダン、かつ広々とした応接室に通され、そこで待つように伝えられる。
プライベートに使用される小さな応接間ではなく、「謁見室」と通称される大応接室に通されたということは、今日の呼び出しが叔母の私的なものではなく、四葉家当主としてのもの、ということだ。
――まあ、最初から分かりきっていたことだが。
それにしても、と深雪は思う。
この部屋に、兄と共に呼び出されたのは三年振りとなる。
今まで何だかんだと理由をつけて兄と直接会おうとしなかった叔

母が、自分が同席しているとはいえ、三年振りに兄と顔を合わせる。
果たして、それが良いことなのか悪いことなのか、深雪には判断がつかない。
「――心配するな。俺たちは、三年前の俺たちじゃない」
不安が、顔に出ていたのだろう。
上目遣いに、窺い見るように向けた眼差しに、達也が力強く頷いた。
ソファに座った深雪の横に、立ったままで。
三年前も、この姿勢だった。
三年前は、深雪の後ろに立っていた。
そう……三年前とは、違う。
達也はおそらく、三年前とは実力が違うと言っているのだろう。
確かに三年前とは比べ物にならないくらい、二人は力をつけている。
特に達也は、世界最強の魔法師の一人と言われている叔母、「極東の魔王」、「夜の女王」と呼ばれる四葉真夜に匹敵する戦闘力を有するに至っている。魔法の相性を考慮すれば、一対一なら間違いなく、達也が勝利する。
しかし、叔母との力関係以上に、三年前とは変わったものがある、と深雪は思った。
――それは、兄と、自分の関係。
――兄に向ける、自分の心。
ソファに深く座り直した深雪の意識は、三年の時を遡っていた……

◇◆◇◆◇◆◇

――西暦二〇三〇年前後より始まった地球の急激な寒冷化により、世界の食糧事情は大幅に悪化した。

二〇二〇年代より進められていた農業生産の太陽光工場化（プラント）により先進国が被った影響は限定的なものに抑えられたが、急激な経済成長により人口爆発を加速させていた新興工業国が受けた打撃は深甚なものだった。

最も深刻な事態に直面したのは、寒冷化と砂漠化が同時に進行した華北地域だった。

華北の住民たちは民族的な伝統に従いこの難局を乗り切ろうとした。

ある歴史学者が「平和的浸透」と呼んだ越境殖民――つまりは不法入植である。

だが、不法入国を受けたロシアは、それを許容しなかった。

例え無人の荒野であろうと、軒を貸して母屋を取られる結果となる不法入植を徹底的に排除した。

実力を以って、流血を厭わず。

中国は人道の名の下にロシアを非難し、ロシアは国際法の名の下に中国を非難した。

両国の対立は、両国にとどまらなかった。

人道の名の下に国境を越え、国際法の名の下にこれを排斥する。

世界中に、火種がばら撒かれた。

その背景にあるのは、寒冷化による食糧不足。

それを補う為の、エネルギー資源争奪戦。

火種が大火となるには、ほんの些細なきっかけがあれば十分だった。

西暦二〇四五年、第三次世界大戦――二十年世界群発戦争の勃発。

二〇四五年から二〇六五年にかけて、世界中で大規模な国境紛争が続いた戦乱の時代。

傍観者でいられた国が唯の一つも無い、真の意味での世界大戦。

大戦終了時に世界の人口は二〇四五年時点の三分の一、三十億人まで減少した。

ロシアはウクライナ、ベラルーシを再吸収して新ソ連に、中国は

ビルマ北部、ベトナム北部、ラオス、モンゴル、朝鮮半島を征服して中華連合に、インドとイランは中央アジア諸国を飲み込んでインド・ペルシア連邦を形成し、ＵＳＡはカナダ、メキシコを吸収してＵＳＮＡに、それぞれ拡大。対照的にＥＵ諸国は統合に失敗し、ＥＵ自体が東西に分裂、アフリカでは諸国の半分が国家ごと消滅、南アメリカはブラジルを除き地方政府レベルの小国分立状態に陥っている。

世界にこのような激変をもたらした二十年戦争が熱核戦争にならなかったのは、偏（ひとえ）に魔法師の世界的な団結によるものだった。

西暦二〇四六年、「国際魔法協会」の設立。

その目的は、放射能により地球環境を回復不能なまでに汚染する兵器の使用を実力で阻止すること。

核兵器の使用を阻止するという目的に限り、魔法師はその属する国家の軛（くびき）を離れ、紛争に実力で介入することが許される。

最前線で殺し合いを演じていた魔法師も、核兵器使用の兆候が観測された時点で闘争を中止し、自国・他国を問わず核の使用阻止に協力する。

熱核兵器の使用阻止が、世界中の魔法師にとって最優先される義務と定められた。

この協定、「国際魔法協会憲章」の対象となるのは放射能により環境を汚染する兵器であり、厳密に言えば純粋な核融合爆弾はその対象にならないが、大戦時の技術水準では核融合爆弾を起爆させる為に小型の核分裂爆弾が必須だった為、熱核兵器の全面阻止という結果につながった。

こうして、二十年に及ぶ戦乱の時代、熱核兵器が使用されることは一度も無かった。

国際魔法協会はこの功績を認められ、国際的な平和機関として大戦後の世界でも名誉ある地位を占めている――

シートベルト着用のアナウンスが聞こえたのを機に、わたしは『

読本・現代史』とタイトルがつけられた魔法師向けの教材ファイルを閉じた。中学生になったばかりのわたしには少し難しい内容だったけど、この位の方が退屈しないで良い。

現代の航空機は情報端末の電波如きで航行に支障を来たす程お粗末な代物ではないのだが、離着陸時に情報端末をオフにするのは伝統的なマナーだから仕方が無い。

シールドの内側に投影された、南の島のリアルタイム映像。

その鮮やかな緑と輝く海を見ていると、世界の寒冷化などフィクションの中の出来事に思えてくる。

しかし、それは紛れも無い事実。

わたしたちが生まれる前に世界の気候は温暖化へ向かったが、寒冷化の様々な名残をわたしたちの身近なところに見ることが出来る。

例えば、ドレスコード。

素肌を露出しない、という服装マナーは、寒冷化が深刻化した時代の名残に他ならない。

まあ、わたしは肩や胸元を剥き出しにするドレスは趣味じゃないし――そもそもまだ似合わないし――、裾を引きずるほど長いスカートを強要される訳でもないし、着物は好きだし、プライベートでは全く拘束を受けないマナーなので実害は無いのだけど。

つまらないことを考えている内に、飛行機は那覇空港に接近した。ほとんど振動を感じることの無い着陸。

昔の飛行機は着陸時につんのめるような慣性を感じさせていたらしいが、お客様を運ぶ乗り物としては失格だと思う。その点、今の着陸は完璧だった。

形式的な意味以上の何も無いシートベルトを外して、わたしはカプセルシートのシールドを開いた。

下のエコノミー席では、肘がぶつかり合うほど狭い座席に何列にも押し込められるそうだが、見ず知らずの人とそんな至近距離で一時間も同席するなんて、わたしなら耐えられない。

お母様がシートから出てくるのを待って、一緒に乗降口へ向かう。

夏休みを利用した、プライベートな家族旅行。
家族旅行は本来、プライベートなものだと思うのだけど、我が家の場合は家族旅行でもプライベートじゃないケースがほとんどなので、ガラにも無くウキウキしてしまう。
お母様と二人きり、ではなく、兄も一緒というのが玉に瑕なのだけど。

◇　◇　◇　◇

到着ロビーの会員制ティーラウンジを出ると、預かり手荷物を取りに行っていた兄が待っていた。
兄一人別行動だったのは、別に嫌がらせではない。
エグゼクティブクラスの乗客は優先的に飛行機から降ろされる。荷物も優先的に返却されるとはいえ、やはり少しは待たなければならない。荷物が出て来る時間を考えれば、エコノミー席の兄に取りに行って貰う方が時間が無駄にならない。
兄一人をエコノミー席に座らせたのもちゃんと理由がある。
エグゼクティブクラスには通常のキャビン・アテンダントの他に、荒事専門の警備用乗務員が目を光らせている。ハイジャックや自爆テロなどの犯罪が発生するとすれば、警備が緩いエコノミークラスの方だ。兄がエコノミーに席を与えられたのは、万が一の事態に対応する為なのだ。
とはいうものの――家族の普通のあり方から外れていることは間違いない。
お母様の隣を歩きながら肩越しにチラッと振り返ると、当たり前のようにわたしたちの荷物を両手にぶら下げた兄が、不満そうな顔一つせず黙々とついて来ていた。
いつも通りに。
わたしは別に、この兄が嫌いではない。
ただ、苦手なだけだ。

一体何を考えているのか分からない。
何故、家族でありながら使用人同然の――使用人そのものの――扱いを受けて平気なのだろうか。
そういう役目を与えられているのだということは知っている。
我が家が特殊なのだということも分かっている。
しかし、兄はわたしと同じ中学一年生なのだ。
四月生まれの兄に対して、わたしは三月生まれ。
年子のわたしたちが同じ学年になっているのは二人の生まれ月がもたらした偶然だけれども、それでも、今年の三月までわたしと同じ小学生だったことに変わりはない。
それなのに何故、妹に顎で使われて平気でいられるのか――
兄とわたしの目が、合った。
何度も振り返っていたわたしの視線が気になったのだろう。
「……何ですか？」
わたしがチラチラ見ていたから、兄もわたしの方へ目を向けたのだ、と理性では分かっている。
だけどわたしの口からは、不機嫌な声しか出て来なかった。
「何でもありません」
女主人に仕える執事のような丁寧な口調で兄が応えた。
プラスの意味でもマイナスの意味でも、そこに兄が妹に向ける感情は、肉親の情は無かった。
「でしたらジロジロ見ないでください。不愉快です！」
理不尽だ、とは分かっている。
兄を使用人扱いしているのはわたし達の方であって、兄がそれを望んだわけではない。
それなのにわたしは、兄に苛立ちをぶつけることしか出来なかった。
「失礼しました」
兄は立ち止まり、わたしに向かって頭を下げた。
そして、さっき迄より少し離れて、わたし達の後をついて来る。

何故、と思う。
今のは、わたしの我が侭なのに。
――やはりわたしは、この兄が苦手だ。

◇　◇　◇　◇

今回わたし達が滞在するのは、恩納瀬良垣に買ったばかりの別荘だ。
わたしはホテルでも良かったのだが、お母様は人の多いところが苦手だから、という理由で父が急遽手配したものだった。
相変わらずあの人は、愛情をお金で購(あがな)えると考えているらしい。
……そのお金も、お母様を娶って手に入れたものなのだけど。
若い頃は人並み外れた――魔法師としても規格外のサイオン保有量から、その潜在能力を高く評価されていた魔法師だったらしいけど……今の魔法技術体系においてはサイオン保有量と魔法技能の優劣に直接的な関係はない。潜在能力を結局、顕在化させることの出来なかった父は、魔法師として身を立てる道を諦め、お母様の実家が作った会社の役員に収まっている。
そんな経緯があるから、お母様に対して引け目を感じる気持ちは分かるのだけど、娘としてはもう少し父親らしい姿を見せて貰いたいところだ。
……わたしは軽く頭を振って、つまらない思考を頭の中から追い出した。
せっかくバカンスに来ているというのに、不愉快な想いに囚われているなんて愚かしいことだと気がついたからだ。

「いらっしゃいませ、奥様。
深雪さんも達也君も良く来たわね」
別荘でわたし達を出迎えてくれたのは、一足先に来て掃除や買い物を済ませておいてくれた桜井さんだった。

桜井穂波さんは、お母様のガーディアンだ。
五年前まで、彼女は警視庁のSPだった。退職するときは随分と強く引き留められたらしいけど、彼女がお母様のガーディアンになるのは警視庁に就職する前から決まっていたことで、警視庁に入ったのは護衛業務のノウハウを学ぶ為だった。
彼女は遺伝子操作により魔法資質を強化された調整体魔法師「桜」シリーズの第一世代。二十年戦争末期に研究所で作られ、生まれる前から四葉に買われた魔法師だ。
しかしそんな生い立ちを少しも感じさせない明るくさっぱりした女性で、ガーディアンの本分である護衛業務以外にも、お母様の身の回りの細々としたお世話をしてくれる。本人曰く、家政婦の方が性に合っているのだそうだ。
本来護衛対象から離れることのないガーディアンが一足先に別荘へ来ていたのは、現地の情報収集の為であり、兄がわたしとお母様の傍にいたからなのだが、だったら桜井さんと兄の役目を逆にして欲しかった。――兄に生活環境を整えさせるのは無理だから、仕方のないことなのだけど。
「さあ、どうぞお入り下さい。
麦茶を冷やしておりますよ。それともお茶を淹れましょうか？」
「ありがとう。せっかくだから麦茶をいただくわ」
「はい、畏まりました。
深雪さん、達也君も麦茶でよろしいですか？」
「はい、ありがとうございます」
「お手数をお掛けします」
唯一つ桜井さんに不満があるとすれば、兄をお母様の息子として――わたしの兄として扱うことだろうか。
言ってしまえば、当たり前のことだ。
だけどわたしには……その当たり前のことが、出来ない。
そんな自分が、この時、訳も無く歯痒かった。

◇　◇　◇　◇

「お母様、少し歩いてきます」
着いたばかりで泳ぎに行くのも慌しい気がしたし、かといって別荘に閉じこもっているのも勿体無かったので、散歩に行くことにした。
徒歩だと万座毛は少し遠過ぎて無理だけど、ビーチ沿いの遊歩道をノンビリ歩くだけでも気持ちが良いに違いない。
「深雪さん、達也を連れてお行きなさい」
しかしお母様の返事を聞いて、折角のお散歩が最初から台無しになった気がした。
一人でも大丈夫です、と本当は主張したかったけれども、余計な心配は掛けたくない。
「――わかりました」
声が尖らないようにするのが精一杯。
つばの広い麦藁帽子を目深に被り、振り返りもせず、わたしは傾いた日差しの下へ歩み出た。

サマードレスの裾を揺らす海風が、思ったとおり、心地良い。
桜井さんに手伝ってもらって足の指先から瞼まで隙間無く日焼け止めを塗っているので、日差しを気にせず腕や脚で風を感じることが出来る。
褐色のクリームで覆われた肌は、地元の女の子と比べても違和感が無い、と思う。
そのお蔭で、なのか、すれ違うたびにジロジロ見られないのも気分が良かった。
日に焼けるということを知らないわたしの肌は、自慢じゃないけどビーチやこういう所では悪目立ちしてしまう。
――いや、本当に自慢じゃないのだ。
小学校の友達とプールに行った時、「雪女みたい」と言われて激

しくショックを受けた記憶は、未だ消し去ることが出来ない。何気の無い台詞で決して虐めとか陰口とかじゃなかったから余計にショックを受けた。

色素が足りないわけではないはずだ。髪の色は重過ぎるほど真っ黒なのだから。

血統的なものだろうか？

過去五世代、わたしの家系にコーカソイドの血は混じっていないはずなのだけど……まあ、それ以前は分からないから超隔世遺伝という可能性も無いわけじゃないのだけれど。

でも、お母様も夏は多少日焼けするし、兄は褐色というか赤銅色というか、元の肌色が分からないくらい見事に日に焼けているのだから、家系的なものとも言い切れない気がする。

「――っ」

意識的に考えないようにしていたことを意識に乗せてしまって、わたしは意識的に視線を前へ固定し、後ろを見ないように、過剰に意識した。……一体何を「意識」しているのか、自分でも混乱しそうだ。

耳を済ませても、足音は聞こえない。

気配も無い。（もっともわたしには最初から、気配を読むなんて芸当は出来ないのだけれど）

しかし振り返れば間違いなく、少し離れて、兄がついて来ているはずだ。

兄はわたしのガーディアンなのだから。

何故「ボディガード」ではなく、わざわざ「ガーディアン」などという大袈裟な呼び方をするのか、わたしにはいまひとつ納得できない。しかし、四葉の「ガーディアン」と単なる「ボディガード」がどう違うのか、それは分かっている、と思う。

ボディガードは「仕事」で、ガーディアンは「役目」。

ボディガードは護衛対象を命懸けで護る代わりに、金銭的な報酬を得る。警察のＳＰのように職務として護衛を行う例もあるけど、

そういう人たちも職務に応じた俸給を得ているから、広い意味で金銭的な対価を得る為に護衛を生業としていると言って間違いじゃないと思う。

それに対してガーディアンには、金銭的な報酬がない。衣食住は四葉に与えられ、金銭の必要があればその都度、四葉から支給される。但しそれは報酬ではなく、護衛の力を維持する為のコストだ。

極論すれば、ボディガードは食べる為に護り、ガーディアンは護る為に食べる。

ガーディアンに私生活はない。彼ら、彼女たちの全ては、マスターあるいはミストレスと呼ばれる護衛対象に捧げられている。

わたしは、わたしたちは、それを当然のものと考える一族だ。当然と考えることが出来なければ、ドロップアウトするしかないのが、わたしたち「四葉」だ。

――ミストレス、なんて恥ずかしい呼び方をされるくらいなら、放り出された方がマシな気もするけど。（幸いなことに「マスター」や「ミストレス」の呼称は、「ガーディアン」ほど公然と使用されていない）

兄がわたしのガーディアンになったのは、わたしが六歳の時。わたしの初めてのガーディアンは兄で、多分それは、これからずっと変わらない。

兄は四葉当主の姉の息子ではなく、次期四葉当主候補の守護者として、わたしが当主になったならその影として、一生を終えることになる。

わたしが、ガーディアンの任を解かない限りは。

そう、ガーディアンは唯一、護衛対象に解任された場合に限り、その義務を免れ一人の人間として生きることが許される。

――わたしは兄が苦手だ

――わたしは兄が嫌いではない

では何故、わたしは兄をこの酷い境遇に縛り付けているのだろうか？

答えは出ない。

このことを考えようとすると、どういう訳かわたしの頭は働かなくなってしまう。

足元に視線をシッカリと固定したまま、わたしは足を速めた。

◇　◇　◇　◇

俯いたまま早足で歩いていたわたしは、突然腕を掴まれ、後ろへ倒れこみそうになった。

その直後、前からドシンという衝撃を受け、兄の胸の中へ倒れこんでしまう。

兄に文句は無かった。

今のは、前を見ていなかったわたしが悪い。――反射的に声を荒げそうになったのは、誰に告げる予定も無い秘密だ。

問題は、わたしの身体が兄に引き止められた後、前からの衝撃を受けたということ。

わたしがぶつかったのではなく、明らかに、わたしがぶつかられたのだ。

これは怒っても良い場面だろう。

わたしは怒りを込めた眼差しを上に向けた、が、それだけでは分厚い肉の壁しか見えなかった。

目線を更に上げる。

そこには軍服をだらしなく着崩した、黒い肌の大男がいた。

――レフト・ブラッド（取り残された血統）。

二十年戦争の激化により、沖縄に駐留していたアメリカ軍（当時はまだＵＳＡ）がハワイへ引き上げた際、取り残された子供たち。

その大半は親に捨てられたのではなく父親が戦死した為だけど、彼

らの多くは米軍基地を引き継いだ国防軍の施設に引き取られて育ち、そのまま軍人になった、そうだ。

彼らは勇猛な兵士として国境防衛の一端を立派に担い、その子供たちも軍人になった者が多い。しかし当の子供たち、つまり第二世代は素行が良くない者も多いから気をつけるべし、というのが沖縄観光に関するプライベート・サイトに共通して掲載されている注意書きだ。

大男の後ろには、同じように軍服を着崩した同じくらいの体格の青年が二人、ニヤニヤと気持ちの悪い笑みを浮かべている。

反射的な怒りは、生理的な恐怖に席を譲っていた。

いざとなったら魔法を使う、という当然の対処法すら思いつかないほど心が竦んでいた。

――視界が、兄の背中に塞がれるまでは。

少年の、華奢な背中。

それでもわたしより、広い背中。

わたしはいつの間にか、兄の背後に庇われていた。

「あぁ？　ガキに用は無いぜ？」

こちらを見下しきった嘲笑で、大男が兄の顔を覗き込む。

兄は、何も答えない。

「ビビッて声も出せねえのか？」

「ハッ、チキン野郎が。カッコつけてんじゃねえよ！」

後ろの二人が兄に対して嗤い、凄む。

怒りが心の中に蘇った。

さっきよりずっと、明瞭な形で。

わたしは、ＣＡＤを持って来るべきだった、と悔やんだ。

補助具無しでは、加減が上手くできない。こんな相手でも、大怪我をさせてしまうのは、色々な意味で拙い。

ＣＡＤが手許にあれば、こんなヤツらに好き勝手を言わせたりしないのに！

一体何に対して熱くなっているのか自分でも分からないまま、わ

たしは兄の前に立ちふさがる大男を「キッ」と睨みつけた。
大男の目がわたしを見て、スウッと細められた。
唇が動いた。
それが笑う為だったのか、喋る為だったのか、確かめる術は無い。
「お互いに来た道を引き返すのが、この場におけるベストの選択だ」
およそ少年らしさの無い落ち着いた口調の、まるきり子供らしくない台詞が大男の表情を強張らせたからだ。
「――なんだと？」
低い、低い、囁くような問い掛け。
「聞こえていたはずだが？」
感情の欠落した、独り言のような反問。
男の両眼に、凶悪な光が宿った。
「地面に頭を擦り付けて許しを乞いな。今ならまだ青痣くらいで許してやる」
「土下座しろ、という意味なら、頭を、ではなく、額を、と言うべきだ」
その、直後。
何の合図も前触れも無く、男が兄に殴りかかった。
兄は同年代の中で大柄な方と言っても、所詮、中学一年生の身体。
目の前の男とは文字通り、大人と小人（こども）。
わたしは反射的に、目を瞑った。
パシッ、という音がした。
兄が殴られれば後ろにいる自分は巻き添えになる、と今更の様に思いついて、そうならなかったことを不思議に思った。
恐る恐る目を開ける。
最初に目に入ったのは、信じられない、という表情に固まった大男。
この男が何故そんな顔をしているのか、悩む必要は無かった。
中途半端に伸ばされた男の右腕。
その拳を、兄が両手で受け止めている。

片手と両手、ではあったが、二人の間にはそんなことなど関係なくなる体重差があるはずだ。
大男の体重は、もしかしたら兄の倍以上。
それなのに兄は、ウエイトの乗った男のパンチを、一歩どころか半歩も下がらず、受け流したのではなく正面から受け止めている。
魔法を使った？
いいえ、そんな兆候は無かった。
学力とか体力とか運動技能とかならともかく、魔法なら兄よりわたしの方が上だ。
兄が魔法を使って、わたしが気づかないはずは無い。
「面白い……単なる悪ふざけのつもりだったんだが……」
大男はニヤリと笑うと、腕を引いて左右の拳を胸の前に構えた。
ボクシング？
空手？
格闘技や武道には丸切り素人なわたしには見分けがつかない。だけど遊び半分だった相手が本気になった、ということだけは何となく分かった。
「いいのか？　ここから先は、洒落じゃ済まないぞ」
普通にやったら、敵うはずが無い。
普通なら、逃げるべきだ。
なのに何故、兄はこんな挑発的な言い方をするのだろう。
いえ、兄の思惑なんてどうでも良い。
わたしだけでも、逃げるべきだ。
――わたしの頭はそう考えているのに、わたしの身体は兄の背中から離れようとしない。
「ガキにしちゃ、随分と気合の入った台詞を吐くもんだ、な！」
そこから先を、わたしは目で追うことが出来なかった。
わたしに分かったのは結果だけで、そこから何が起こったのかを推測するだけ。

前へ踏み出した男の左足。

その左足と右足の間にねじ込むような形で、兄が左足を踏み込んでいる。

肩口に引かれた男の右手は、まさにパンチを繰り出そうとしているところ。

その胸板の中央に、兄の左拳が添えられている。

少し隙間が空いているのは、これから打ち込むところではなく、打ち込んだ反動で跳ね返ったからに違いない。

ドン、と太鼓でも叩いたような音が、きっと、兄の拳の音。

兄が踏み出した足を引くと、示し合わせたように大男の身体が沈みこみ、痛そうな音を立てて路面に両膝をついた。

兄は、蹲ったまま苦しそうに咳き込む大男を見下ろし、背後の二人へおもむろに目を向けた。

男たちは、立ち竦んだまま、動かない。

兄は男たちに背を向けた。

「帰りましょう」

兄が、わたしの腕に手を添える。

呟いたその言葉が自分に向けられたものだと、わたしはそれで、ようやく気がついた。

◇　◇　◇

「深雪さん、何かあったんですかっ？」

打ち切りとなった散歩から戻ると、桜井さんが顔色を変えて小走

りに駆け寄ってきた。
そんなに酷い顔はしていないと思うけど、少し蒼褪めているという自覚はあるので、誤魔化すことは最初から諦めていた。
「チョッと、絡まれそうになって……」
「まぁ……！」
それだけで桜井さんは大体の事情を覚ったようだ。
さり気なくこちらを観察しているのは、衣服に乱れが無いか、チェックしているのだろう。
「大丈夫です」
少し無理をしたけど、自然な笑顔を作れたと思う。
わたしが笑顔を向けると、桜井さんもホッとしたような笑みを返してくれた。
でも、わたしの作り笑いは長続きしなかった。
兄が助けてくれましたから――その台詞が、わたしの口から旅立つことは無かった。
そう言おうと思って目を向けたのに、兄は素知らぬ顔で、相も変らぬ無表情で、桜井さんに軽く会釈して、それなのにわたしの方は見向きもせずに、奥の部屋へ引っ込んで行った。
「――シャワーで汗を流してきますので」
そんなに汗はかいていないけど、わたしはこの場から逃げるように、そう告げた。

4－（1）　在りし日の兄妹（後書き）

私自身がトインビーの著作で確認した訳ではありませんので、「平和的浸透」は俗説の域を出ないことをお断りしておきます。

4－（2）　再従姉弟（はとこ）（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

4－（2）　再従姉弟（はとこ）

「おや」

中庭に面した窓から外を見ていた達也がふと漏らした声で、深雪の意識は過去から現在へ復帰した。

「お兄様？」

「黒羽の姉弟（きょうだい）だ」

眼差しで問い掛けてくる妹に、達也は僅かに驚きを滲ませる表情で答えた。

「亜夜子さんと文弥くんですか？」

達也は驚きを滲ませる程度で済ませたが、深雪はそうもいかなかったようだ。

慌てて腰を浮かせ、中途半端な体勢でしばし固まって、思い直したように腰を下した。

「ちょうど帰るところのようだ」

黒羽姉弟が出て来た離れには、彼女たちの祖母、達也たち兄妹の祖父（故人）の妹、現当主の真夜にとって叔母に当たる人物が住んでいる。

黒羽文弥は四葉の次期当主候補ナンバーツーだ。祖母のところへご機嫌伺いに来ても不思議は無い。

深雪も、彼女たちがここに来ていること自体に驚いた訳ではなかった。

「……偶然でしょうか？」

「俺たちがここにいることを知っていて、素通りする二人じゃないと思うがね」

確かにそうだ、と深雪は思った。

「縁が濃いのか薄いのか、あの二人とはニアミスを起こす巡り合わせのようだな」

完全に鉢合わせるのでもなく、完全にすれ違うのでもなく。
兄と同じ事を考えていた深雪は、一晩だけの接近遭遇となったあの日のことを思い出していた……

◇◆◇◆◇◆◇

バカンスに来ているといっても、世間のしがらみと縁を切ってしまうことは出来ない。
わたしはまだ中学生になったばかりだけど、招かれて断れない相手がいないわけじゃない。
親戚筋ばかりで、そんなに数が多くない、というのは不幸中の幸いだけど……その少ない相手が同じ時期に同じ場所に来ているなんて全くの予想外だった。
招待主は黒羽貢さん。お母様の従弟に当たる方だ。
「深雪さん、用意は出来ましたか？」
姿見の前でグズグズしていたわたしを、桜井さんが呼びに来た。
「なんだ、もう済ませていらっしゃるじゃないですか」
カクテルドレスに着替えて、髪留めとネックレスをつけて、ハンドバックを手にした私を見て、桜井さんは苦笑気味の笑みをこぼした。
「そんな不機嫌そうなお顔をなさっては、折角のお召し物が台無しですよ？」
わたしはそんなに判りやすい顔をしているのだろうか？
「……わかりますか？」
「私には、ね」
そう言って、桜井さんは少し得意げにウインクして見せた。
……って、他の人に覚られるような顔はしていないということ？
「もう……からかわないで下さい」
思わずぷくっ、と頬を膨らませて、慌てて表情を取り繕った。
クスッ、と桜井さんが笑みをこぼしたのを見て、顔が熱くなるの

を感じた。
もう中学生なんだから、こういう子供っぽい真似はやめようと思っていたのに。
「ゴメンナサイ……でも」
三十歳とは思えない――せいぜい二十歳過ぎにしか見えない――可愛い笑顔でひとしきりクスクスとやった後、桜井さんは急に表情を改めた。
わたしも自然と気持ちが引き締まる。
「私以上に鋭い『目』を持つ人だって、世の中には大勢いますから。私は深雪さんのことを良く知っていますから嫌がっていることも判りますけど、もしかしたら一目見ただけで表情を読むことが出来る人も来ているかもしれません。
深雪さんは普通の中学生じゃないんですから、隙につながるようなところは無くすべきだと思いますよ」
的のど真ん中を射たアドバイスで、反論しようという気持ちも起こらなかった。
「……どうしたらいいでしょう？」
「どんなに上手く隠したつもりでも、気持ちというものは目の色や表情の端々に表れてしまうものですからね」
……それって、どうしようもないということ？
「必要なのは、自分の気持ちを上手に騙せるようになること、でしょうか。
建前というのは、まず自分自身を納得させる為のものなんですよ」
わたしの不満を読み取ったのか、桜井さんは宥めるような、言い含めるような口調で続けた。

◇　◇　◇

とは言うものの、建前で自分の心を覆い隠してしまうには、わたしはまだまだ子供なわけで。

パーティー会場に近づくにつれて、気分が沈みこんでいくのを止められなかった。

悪い人ではないのだ、黒羽の叔父様は。（正確には「叔父」ではないけれど）

ただ、奥様を早くに亡くされているからなのかどうなのか、親バカ振りがチョッと……というか、正直かなり鬱陶しい。

まったく、子供を相手に自分の子供を自慢するなんて、どういうつもりなのだろう？　いえ、わたしがどう感じるかなんて、きっと考えていないのだろうけど、そういうのは大人同士でやって欲しい。

ハァ、と口からため息が零れる。

思わず、ではなく意識的に。

今の内にため息を吐き出しておかないと、本番で我慢できないような気がしたから。

既に、ホテルの敷地内。

無駄に派手な――わたしの主観的に、だけど――エントランスがもう見えている。

無人運転のコミューターが停止した。

キビキビした動作で兄がコミューターを降りて、ドアを押さえ、わたしが降りるのを待っている。

わたしは表情を引き締めて、退屈で憂鬱な戦場へ足を踏み出した。

ロビーには強面（こわもて）のおじさん、お兄さんたちと、凛々しいお姉さま方が居た。

全員、目立たないようにしているつもりなのだろうけど、生まれた時からこういう人たちと付き合ってきたわたしの目を誤魔化すには力量不足。

他人事ながら、もっと修行したほうが良いですよ、と言いたくなってしまう。

もっとも、かく言う私も今晩、連れているのは、兄だけではなかった。

全国区の警備会社から女性のボディガードが二名、臨時に付いている。
パーティーなんかだと男性では同伴できない場所も多いし、さっきのこともあるからだ。
いつもは桜井さんがいてくれるからこんな心配はしなくていいのだけど、今はお母様の側にいてもらっている。
お母様は少し身体が弱く、今も別荘でお休みになっている。
それは仕方の無いことだけど、お蔭でわたしは、一人で叔父様の相手をしなければならなくなった。
気が重い。
父は最初から当てにならないとしても、本当ならこういう付き合いは、妹のわたしではなく、兄であるこの人がこなすべきことのはずなのに。
わたしは一歩先を進む兄の背中を、恨めしげに見詰めた。

◇　◇　◇　◇

「叔父様、本日はお招き、ありがとうございます」
予想通り個人のパーティーには大き過ぎる会場で、予想通りの豪華なテーブルを背景に、予想した通り高価なスーツを身にまとって出迎えてくれた叔父様に、わたしは型通りの挨拶を送った。
こういうことに独創性を求めても意味は無い。
「良く来てくれたね、深雪ちゃん。お母様は大丈夫かい？」
叔父様は、大層フレンドリーな言葉を返してくれた。
わたしのことを未だに「ちゃん」付けで呼ぶのはこの人くらいだ。
そして、兄の存在を空気の様に黙殺しているのも、いつもの通り。
兄も黙って私の後ろに立っているだけだから、どっちもどっちではあるのだが。
「お気遣い、畏れ入ります。
少し疲れが出ているだけだと思いますのが、本日は大事を取らせ

ていただきました」
「それを聞いて私も一安心だよ。
おっと、こんな所で立ち話もなんだな。
ささ、奥へどうぞ。
亜夜子も文弥も、深雪ちゃん会うのを楽しみにしていたんだよ」
当然と言えば当然のことだけど、やはりあの二人が来ているのね……
あれほど強く自分に言い聞かせたのに、わたしの口はため息を吐きたがっていた。

叔父様に背中を押されて、わたしは奥のテーブルに連れて行かれた。
兄は入り口で置き去りのまま。
ボディガードは壁際で控えているのが慣わし、ということだ。
自分も同じ仕打ちをしているのに、他人が兄を使用人扱いすると無性に気に障るのは……多分わたしが、身勝手なのだろう。
それはともかく、わたしはこうして、当面のところ孤立無援で、黒羽親子の相手をしなければならなくなった。
「亜夜子さん、文弥くん、二人ともお元気？」
わたしから声を掛けると、文弥くんは嬉しそうに、亜夜子さんは待ち構えていたような、それぞれにいつもの笑顔で迎えてくれた。
「深雪姉さま！　お久し振りです」
「お姉さまもお変わりないようで」
亜夜子さんと文弥くんはわたしより一学年下の小学六年生。
わたしたち兄妹と違って、本物の双子だ。
一学年下と言ってもわたしが三月生まれ、二人は六月生まれだから歳は同じ。
だからなのかどうなのか、昔から亜夜子さんはわたしに対してあからさまにライバル心を向けて来て……これもこの一家との付き合いが鬱陶しい理由の一つだ。

後継者候補は亜夜子さんじゃなくて文弥くんの方なのだから、競争意識を持たれても……というのがわたしの偽らざる本音だったりする。

文弥くんは素直に慕ってくれるから可愛いのだけど、男の子としては、少し可愛すぎる気もする。兄と比べるとどうしても……いえ、あの人は例外か。

今日も可愛らしすぎる二人の衣装を見て、わたしは表情筋の動きを抑えるのに苦労しなければならなかった。

文弥くん、いくら冷房が効いているといっても、今の季節にアスコットタイは暑くないかしら？　カジュアル風にアレンジされているとはいってもメスジャケットにカマーバンドまでつけてるし……プライベート・パーティーなんだから、そんなに気合を入れる必要はないと思う。

一方、亜夜子さんは……まあ、いつも通りと言えばいつも通りだ。リボンとフリルと飾りボタンをふんだんに使ったワンピースに膝上のソックスとリボンがあしらわれたローファー。綺麗に巻かれた髪を飾る、フリルで縁取られたヘアバンド。

別に、他人の趣味にケチをつけるつもりは無いけれど、夏のリゾートにはチョッと不似合いなファッションではないだろうか。

本人も親御さんも喜んで着て（着せて）いるのだから、本当に、余計なお世話だと思うけど。

わたしがそんなことを現実逃避気味に考えている間にも、叔父様の自慢話は続いている。亜夜子さんがピアノコンクールで入賞したとか、文弥くんが乗馬の先生に褒められたとか、そんなどうでもいいことに適当な相槌を打ちながら、時間が過ぎ去るのを待つ。

これは一体、何の罰ゲームなのだろうか、といつも思うけど、幸いなことに毎回、そう長い時間の忍耐を強いられることはない。今日もそろそろ、文弥くんがソワソワし始めた。

「ところで深雪姉さま……達也兄さまはどちらに？」

ほら来た。

文弥くんはとても良い子でわたしのことを亜夜子さんと同じ様に、つまり実の姉の様に慕ってくれているけど、それ以上に兄のことを慕っている、と言うか、尊敬している節がある。

いえ、憧れている、と言った方が適当かしら？

それもまあ、理解できなくもない。

一般的な意味で――魔法協会が定めた基準に則って判断する限りは、という意味で――魔法の才能に恵まれなかった兄だけど、あの人にはそれを補って余りある頭脳と肉体と特殊技能がある。

成績は、優秀という言葉が生温く感じる程。

スポーツは万能、と言うか、元々の身体能力が反則的に優れている。

外見だって悪くない。ルックスはともかく、スタイルは少年らしいしなやかさの内に獅子や虎に通じる力強さを秘めている。

そして、全ての魔法師の天敵ともなれる、あの人だけの切り札。

男の子が憧れるヒーローは、きっと兄のような人なのだろう……

……あらっ？　何故わたしが、兄のことを褒め称えているの？

「あそこに控えさせているわ」

突然心の中に湧いた黒い雲を覚られないように、かなりの気合を入れて作った笑顔でわたしは壁際を指し示した。

あっ、文弥くんの頬が赤くなっている。

どうやら誤魔化せたようだ。

「……えっと、どちらでしょうか？」

わたしから目を逸らすのと兄を探すのと半分半分で目を彷徨わせる文弥くんの隣で、亜夜子さんも無関心を装いながらチラチラと壁際に目を遣っている。

彼女の判りやすい態度が可笑しくて、つい口元が綻（ほころ）んでしまったけど、亜夜子さんはそれが文弥くんに向けられたものだと思ったようだ。関心の無いフリを貫く彼女の隣で、わたしは文弥くんに兄の立っている場所を指し示した。

兄は、わたしたちの方を見ていた。

「達也兄さま！」
文弥くんはパッと顔を輝かせて、兄の許へ小走りに駆け寄った。
「もう、仕方ないわね」
文句を言いながらも、亜夜子さんは足早に文弥くんを追いかけて行く。如何にも、走り出すのを我慢している、という風情。
そんな二人を見て、叔父様が苦虫を噛み潰していらっしゃるのも、毎回のことだ。
叔父様がゆっくりと、亜夜子さんとは対照的な歩調で歩き出したので、わたしもその後に続いた。
文弥くんが兄に、何事か一所懸命話し掛けている。
兄は何度か小さく頷き、唇の端を小さく吊り上げて、僅かに歯を見せて――笑った？
あの人が？
嘲笑でも苦笑でもなく、あんなに普通に？
何故……？
わたしには、あんな笑顔を向けてくれたことは無いのに……！
「こらこら、文弥、亜夜子。達也くんの仕事の邪魔をしてはいけないよ」
愛想笑いを維持する為に、爪が掌に食い込むほど手を強く握り締めなければならなかったわたしの前で、叔父様は本音をまるで窺わせない完璧な作り笑いを自然に浮かべていた。
「ご苦労様。しっかりお勤めを果たしているようだね」
「畏れ入ります」
叔父様に向き直った兄は、いつもの兄だった。
さっきまで浮かべていた笑みが嘘のような無表情。
「あら、お父さま。少しくらい、よろしいのではありません？
深雪お姉さまはわたくしたちがお招きしたお客様。
ゲストの身辺に危害が及ばぬよう手配するのはホストの義務ですもの。
ここにいらっしゃる限り、達也さんのお手を煩わせることは無い

と思いますけど」

「姉さまの言うとおりですよ。

黒羽のガーディアンズは一人のお客様の身の安全も保証できないほど無能ではありません。

そうでしょう、父さん？」

あらっ？　文弥くん、叔父様のことを「父さま」と呼ばなくなったのね……

そんなどうでも良いことが気になって、そのお蔭で気持ちが逸れてくれた。

しかし、ガーディアン「ズ」、か……黒羽家が護衛体制を強化したという噂は本当だったのね。

何か、危ないことでも始めたのだろうか？

「それはそうだが……」

わたしの思いとは無関係に、叔父様は困惑顔で言葉を濁した。

わたしもそうだけど、多分、亜夜子さんも文弥くんも叔父様の本音は分かっている。

叔父様は自分の子供たちが、特に文弥くんが兄に好意を向けているのが気に入らないのだ。

文弥くんは四葉の次期当主を狙う候補者。

兄は、同じく四葉の次期当主候補であるわたしの、単なる護衛役。

ガーディアンという特別な呼び方をされてみたところで、所詮は使用人、悪く言えば使い捨ての道具に過ぎないのだ。

道具、と割り切ることが出来なければ、四葉の後継者とはなり得ない。

もっとも、兄はわたしの護衛役なのであって、文弥くんと兄の関係は再従兄弟（はとこ）同士でしかないのだから、文弥くんが兄のことを慕っていても本当は何の問題も無い。それは亜夜子さんも同じで、亜夜子さんが兄に好意を持っていても、それがどんな種類の好意であっても、特に問題は無い。真夜叔母様は、そんなことを気にしたりなさらないだろう。

極端な言い方をすれば、叔父様が外聞を気にしているだけなのだ。
叔父様は兄を使用人、使い捨ての道具としか見ておらず、そういう意味で黒羽貢という人は骨の髄まで「四葉」なのだろう。だから、自分の子供たちが道具に感情移入しているのがみっともない、と感じているに違いない。
それが「四葉」として当然のあり方だ。
わたしが「四葉深雪」になる為には、わたしも叔父様と同じ心掛けを持たなければならない。
兄である前に、ガーディアン。
あの人はわたしの護衛役。いざとなれば、自分の命と引き換えにわたしを護ることを義務付けられた盾。
道具であるあの人がわたしに愛情を持たないのは当たり前のことで、わたしもあの人に情愛を抱くべきじゃない。
自分にそう、言い聞かせる。
呪文の様に、繰り返し。
兄は、わたしの護衛役。
私を護る盾。
それが兄に与えられた役目で、わたしは真夜叔母様の跡を継がなければならなくて、だから兄はわたしのお兄様ではなくて――
キリッ、と頭の芯が痛んだ。
一瞬、自分が何処にいるのか分からなくなった、気がした。
もちろんそれは錯覚で、わたしは黒羽の叔父様のパーティーに招かれていて、わたしの前では叔父様が難しい顔をなさっている。
……何か大切なことを考えていたような気もするけど……多分、気の所為だろう。
「……文弥、余りお父上を困らせるものじゃないよ」
意外なことに、叔父様に助け舟を出したのは兄だった。
文弥くんのことを「文弥」と呼んで。
まるで実の弟に対するように、親愛のこもった口調で。
頭の奥で、微かな疼痛を感じた。

不快感に思わず顔を顰めそうになる。
ダメだ。
ここでわたしが不機嫌そうな表情を見せたりすれば、叔父様と兄の対応に不満を持っていると誤解されかねない。
……誤解、なのかしら……？
ダメダメ、そんなことを考えては！
ええと、こういう時はどうすれば良いんだっけ？
出かける前に桜井さんが教えてくれたはずだ。
そう、必要なのは、自分の気持ちを上手に騙せるようになること――

「黒羽さん、会場の中はお任せしてよろしいですか？
自分は少し、外を見回ってきますので」
「おお、そうかい？
それは立派な心掛けだ」
兄の申出に、叔父様は大袈裟に驚いて見せて、殊更に兄を称賛した。
「分かった。深雪ちゃんのことは任せておき給え。
この場は責任を持ってお預かりしよう」
それは、リップサービスの称賛ならいくらでも出て来るだろう。
態の良い厄介払いの口実を、当の本人が言い出してくれたのだから。
実に都合の良い建前を。

『建前というのは、まず自分自身を納得させる為のものなんですよ』

――兄は自分に与えられた役割を忠実に果たそうとしている。

「そんな！　僕たち、明日には静岡に帰るんですよ！」
「文弥、少し落ち着きなさい……達也さん、文弥が言ったとおりの事情ですので、早めにお戻りくださいね？」

「分かった。一通り見て回ったら戻ることにするよ。
では黒羽さん、少し外させていただきます」

――だからわたしも、わたしに与えられた役割を精一杯演じなければならない。

文弥くんの抗議と亜夜子さんのお願いと、優しい口調で応える兄の声を聞きながら、わたしは自分にそう言い聞かせた。

4－（3）　他人家族（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

4－（3）　他人家族

――　フフッ　――

突然深雪が漏らした笑い声に、達也は訝しげな目を妹へ向けた。
「……すみません、お兄様。少し、昔のことを思い出しまして」
「楽しかったことかい？」
笑みを浮かべたままの表情で答える深雪に、達也もつられて微笑んだ。
「いいえ……
昔のわたしが、余りに愚かだったので、それが可笑しくて」
達也が笑みを消し、思わず瞬きを繰り返してしまうほど自虐的な台詞だった、が、言葉の内容に反して口調にも表情にもネガティブな要素は見当たらなかった。
「そう言えばお兄様は、亜夜子さんと文弥くんには昔から優しかったんですよね……
わたし、結構ショックだったんですよ？」
そう言われて、深雪がいったい何時の事を思い出しているのか見当がついて、達也は苦笑を漏らした。
「まあ……昔は俺も子供だったということで勘弁してくれ」
「滅相もありません。
愚かな子供だったのはわたしの方です」
二人とも、世間から見ればまだ「子供」と呼ばれる年齢だ。
兄妹自身も、自分たちが大人だとは思っていない。
それでも二人は、三年前の自分たちを今よりも「子供」と言い切ってしまうことに違和感や躊躇いを覚えなかった。
「わたしはお兄様の妹でありながら、お兄様のことを何一つ解っていませんでした。
いえ……理解しようとしませんでした」

何事か反論しようとした達也だったが、儚い笑みを浮かべて首を振った妹に、何も言えなくなってしまう。
反論すべきことでもなければ、反論する必要のあることでもない。どちらが悪い訳でも、どちらに責任がある訳でも無いということは、達也にも深雪にも分かっていた。
深雪に昔話を続ける気が無いのなら、達也が蒸し返す話でもない。
達也は視線を窓の外へ戻した。
ボウッと外を見ているようで、彼の五感は如何なる兆候も見落とさないようフル稼働している。
五感を超えた彼の超感覚は、情報体次元に何時でもアクセス可能な状態でスタンバイしている。
全ては、深雪を護る為に。
深雪に害を為そうとする存在あらば、先んじてこれを排除する為に。
それは、今も昔も変わっていない。
ただ昔はそれに、気づかなかっただけだ。
ただ昔はそれを、気づかせないだけだった。

◇◆◇◆◇◆◇

昨日の晩は結構遅くなってしまった。
沖縄に着いた初日だというのに、随分とハードな一日だった。
それなのに、まだお日様も昇りきらない時間に目を覚ましてしまったのは、習慣としか言いようがない。……こういうのも一種の貧乏性なのだろうか？
カーテンを開けて、ついでに窓を開けて空気を入れ替えることにする。この部屋は裏庭に面した二階だから、パジャマのままでも外から見られる心配は無い。……本当は、それでもまず身だしなみを整えるのが、レディのたしなみなのだろうけど。
わたしは潮の香りがする微風を胸いっぱいに吸い込んで、大きく

伸びをした。
ふと目を下に向けると、兄がトレーニングをしていた。
腰を落とし右足を踏み出し右手を突き出し左手を突き出す。
腰を落としたまま左足を踏み出し突き出したままの左手を更に伸ばしたかと思うと、その手を素早く引いて交差するように右手を突き出す。
右足を左足に引き寄せながら身体をターンさせ、右手を内側から外側へ、左手を外側から内側へ、右手を上に、左手を下に、力強く開く。
多分、わたしの知らない、空手か拳法の型なのだろう。
両手に小さな、一キロくらいのハンドウェイトを持って、一つ一つの動作を丁寧に決めていく。
それが、一流の舞台役者、あるいは一流の舞踏家の、決めポーズのように鮮やかだった。
裏庭の半分をクルリと一周する円を描いて、兄は動きを止め、身体の力を抜いて大きく息を吐いた。わたしはそこで、ハッと自分を取り戻した。
――不覚にも、見とれてしまっていた。
慌ててカーテンを引き、窓際から離れる。
カーテンレールが結構大きな音を立てたけど、庭までは聞こえなかった……と思う。
壁に背中を預けて、そのままズルズルと床にへたり込む。
顔が熱い。
ドキドキと激しいビートを奏でる心臓は、胸を手で押さえても中々落ち着きを取り戻してくれない。
兄は一度も顔を上げなかった。
窓辺に立つわたしの姿を見ていないはずだ。
それなのにわたしは、兄に見とれていた自分を、兄に気づかれてしまったような気がしてならなかった。

◇　◇　◇　◇

朝食はいつもどおり、桜井さんが用意してくれた。
一応この別荘もＨＡＲで管理されていて自動調理器も備わっているけど、他ならぬ桜井さん自身が「自動機械で調理されたものは味気ない」という人だから、特に事情がない限り我が家の食事は彼女の手作りだ。
最近はわたしも手伝うようにしているけど、腕の方は正直なところ「まだまだ」と自分でも思う。
「今日のご予定は決めていらっしゃいますか？」
食後の紅茶を頂いているところで、桜井さんがそう訊ねた。
形の上ではお母様に対してだけど、わたしの予定も訊かれているのは一々確かめる必要のないことだ。
「暑さが和らいだら、船で沖へ出るのも良いですね」
お母様は少し考える素振りをなさって、そう答えた。
「ではクルーザーを？」
「そうね……余り大きくないセーリングヨットが良いわ」
「分かりました。四時に出港ということでよろしいですか？」
「ええ、それでお願い」
慣れたもので、桜井さんはやや具体性に欠けるお母様の言葉からその意図するところを汲み取って、スルスルっと段取りを組み上げた。
これでわたしも、四時以降の予定が決まったことになる。
お母様はそれまで別荘の中で過ごされるおつもりなのだろうけど、さて、わたしはどうしようか？
「深雪さん、特にご予定が無いのでしたら、ビーチに出られては如何です？
寝転んでいるだけでもリフレッシュ出来ると思いますよ」
考え込んでいたわたしに、桜井さんがそうアドバイスしてくれた。
「……そうですね。午前中はビーチでのんびりすることにします」

「では、お支度を手伝いましょう。
うふふ、水着になるのでしたら隅々まで日焼け止めを塗っておきませんとね」
……えっ？　「うふふ」って……
「……いえ、大丈夫です。自分で出来ますから」
「いえいえ、遠慮なさらずに。
南国の日差しは強烈ですからね。
塗り残しがあっては大変です。
水着の下までしっかり処置して置きませんと。うふふふふ……」
「えっ、と、桜井さん？」
あのっ、何だか怖いんですけどっ！
「さあ、お支度しましょうね」
桜井さんに手首を掴まれた。
痛みを感じるほど強く握られているわけじゃないのに、どうやったって振り解けない。
そのまま二階に引っ張って行かれる途中で、兄が笑い出すのを堪えて顔を背けたのを、わたしは見た、気がした。
……そんな人間的な反応を、あの人がするはずも無いのに。

◇　◇　◇　◇

桜井さんの手で、本当に身体の隅々まで日焼け止めクリームを塗りこまれたわたしは、ぐったりした身体に鞭打って別荘最寄のビーチに来ている。
……何故こんなことで疲れなきゃならないのかしら？　と理不尽な思いを抱きながら。
とにかく無性に楽な体勢になりたかったわたしは、前開きのチェニックを脱いで、兄の用意したパラソルの下の、兄が敷いたシートの上に、うつ伏せに身体を横たえた。
身に着けている水着は、ビキニとまでは言わないまでも、かなり

露出が多いセパレート。わたしが選んだのではなく、桜井さんに無理矢理着せられたものだ。

そんな、自分で言うのもなんだけど、あられもないわたしの姿を見ても、兄は眉一つ動かさない。

膝上丈の海パンにパーカーを羽織ったまま、わたしの隣に腰を下して水平線へ目を向けている。

浅く膝を抱えた姿勢で、ボンヤリと。

横目で覗き見るわたしの視線に気づいた風も無く、じっと彼方を見詰めている。

退屈では、ないのだろうか？

健康な、運動も得意な中学一年生の男の子が、海を目の前にして、ただ座っているだけで。

これが普通？　という疑問に駆られて、肘を突いて身体を起こし、他のパラソルの下をこっそり観察してみた。

あそこは……家族連れね。お父さんとお母さんと、小学校一、二年生くらいの女の子かしら。

と思ったら、女の子より少し年上の男の子が波打ち際から走って来た。

男の子はお父さんの手を引っ張って海の中へ連れて行こうとしている。

その隣のパラソルは空だった。荷物が二人分置いてある。……パーカーが二着だから二人分よね？

多分二人とも海に入っているのだろう。

その向こうは……わわっ！

わたしは慌てて身体ごと顔を伏せた。

チラッと覗き見て、もう一度慌てて顔を伏せる羽目になった。

そこでは高校生くらいの――大学生じゃないと思う――男の人が、女の人の身体にオイルを塗っていた。

かなり、際どい所まで。って言うか、あれって、完全に触っていない？

つ、つつしみというものを知らないのかしら？
公衆の面前であんな恥知らずな真似をするのは止めて欲しいわ。
でも、男の人って、ああいうことが好きなのかしら？
耳年増と笑われるかもしれないけど――というか、桜井さん辺りには間違いなく笑われると思うけど、男の人は女の子の身体に触りたがるものだともの本で（「本」と言っても紙媒体じゃないけど）読んだことがある。学校の友達の又聞きで「進んだ」同級生がデートのたびにボーイフレンドから身体を求められて困っている、という話も聞いたことがある。その時は女の子を何だと思っているの、と憤慨したけれど。フリーセックスなんて悪しき風習は半世紀も昔に終わっているのよ！　そもそも相手はまだ十二歳よ！
……いけない、いけない。落ち着かなきゃ。真夏の沖縄のビーチに雪を降らせるわけにはいかないわ。
でも……この人は、そういうことを思わないのかしら？　そういう気持ちにならないのかしら？
わたしは首だけ動かして、兄の顔を窺い見た。
兄は、わたしを見ていた。
目が、合った。
硬直して視線を逸らせなくなったわたしとは対照的に、兄は二、三秒で目を外して、再び水平線に顔を向けた。
何とか身体の自由を回復したわたしは、兄を怒鳴りつけることも出来ず、熱くなった顔を腕で隠した。
余程結い上げた髪を解いてカーテンの代わりにしようかとも思ったけれど、後々面倒臭いことになるのは目に見えている。
うつ伏せのまま、頬の熱が引くのを待つしかなかった。
視界を閉ざすと、良い具合に茹で上がった頭は考えなくても良いことばかり考えてしまう。
この人は、一体いつからわたしのことを見ていたのだろう？
わたしの、何処を見ていたのだろうか？
背中？　脚？　それとも……

この人もそういうことに興味があるのだろうか？　わたしの身体に触りたい、とか、思うのだろうか……？

血のつながった兄を相手に考えることではない、とは、分かっている。

でもわたしと兄は。

同じ家に住んでいても、普段、家の中で顔を合わせることはほとんど無い。

兄とわたしが一緒にいるのは、登下校を含めた、外出している時間だけ。一日中一緒にいるのは、今回のように、旅行の間だけのことなのだ。

ずっと小さな頃から、一緒にお風呂に入る、どころか、遊んで貰った記憶すらない。

兄はわたしにとって、家族と言うより、一つ年上の知り合いの男の子、に近い。それがわたしの実感だった。

それは多分、兄にとっても同じで。

わたしはきっと、兄にとって、同じ中学一年生の、一つ年下の女の子……

不意に、砂が軋む小さな音がした。

兄が立ち上がったのだと、何となく分かった。

わたしは、顔を上げることができなかった。

目を腕に、ギュッと押し付ける。

手に、脚に、背中に力が入って、身体が強張った、のが分かる。

硬直した身体の内側で、心臓だけが激しいステップを踏んでいる。

兄がわたしの身体の上に身を乗り出した、ような気がした。

息ができない。

頭がぼうっとする。

酸欠には早すぎる、と意味も無く冷静な思考が脳裏を過ぎる。

手足に意味のある命令を下せずにいるわたしの身体に、

ふわり、と薄い布が掛けられた。

――えっ？

それは、わたしが脱いだチュニックだった。
適当に畳まれていたチュニックが広げられて、わたしの身体に掛けられていた。
肩から太ももまで、薄い布に覆われた感触がする。
何だか急に、安心感を覚えた。
無意味な緊張が消えて、その反動で気が緩みすぎたのかもしれない。
その時のわたしはそんな自己分析の余裕も無く、ウトウトと心地の良い眠気に引き込まれていった。

◇　◇　◇　◇

結果として、桜井さんには感謝しなくちゃならない。
いくらパラソルの下とはいえ、あんな炎天下に長時間寝ていたのだ。
爪の根元まで日焼け止めでしっかりガードしていなければ、むき出しだった脚は今頃ひどいことになっていたに違いない。
わたしが余りの暑さに睡眠不足の解消を中断した時、兄はやっぱり、わたしの隣で水平線を見ていた。
「……どのくらい眠っていました？」
「およそ二時間です」
わたしの問い掛けには、何の前触れも無かった。
それなのに兄の回答は、間髪を入れず返って来た。
「そうですか」
何か引っ掛かりを感じたが、起きたばかりのわたしの頭は、曖昧な違和感の正体について深く考えることは出来なかった。
身体を起こすと、チュニックがシートの上に滑り落ちた。
海風が砂を飛ばしたのか、シートの上で寝ていたのに、手足が少しザラザラする。
「水に入ってきます」

わたしは短くそう告げて、返事を待たずサンダルを引っ掛けた。
シートの周りには、砂浜を抉った様な足跡が無数に刻まれていた。
所々平に均(なら)されているのは、人の背中が落ちた跡っぽい。
ビーチボールで遊んででもいたのかしらね……？
周りのパラソルは全て引き揚げられているし。
我ながら随分熟睡していたみたい、と暢気なことを考えながら、
わたしは波打ち際へ向かった。

◇　◇　◇　◇

遅めのお昼ご飯を食べた後、しばらく部屋で読書をしていたわたしだが、二時間もすると飽きてしまった。
本を読むのは嫌いじゃないけど、今日は何となくそんな気分じゃなかった。
お母様に魔法の練習を見てもらおう。
そう思って、わたしはお母様の部屋へ向かった。
わたしの部屋は二階の一番奥。
お母様の部屋は階段を挟んで、二階の反対側の奥。
わたしの部屋から一つ空き部屋を挟んで、階段の横に兄の部屋がある。
その前を通り過ぎたとき、中から声が聞こえた。
思わず足が止まる。
この別荘は至極普通のリゾート用だから、自宅の様に完全な防音仕様になんてなっていないけれど、普通の話し声が廊下まで聞こえてくるようなちゃちな作りでもない。
余程の大声でなければ、扉の外まで声が漏れて来ないはずだ。
それに、今の声は、桜井さん？
わたしは思わず扉に耳を当てていた。
『こんな酷い痣を治療もせずに放っておくなんて！』
桜井さんが、多分、兄を叱り付けている。

……痣？

『大したことはありません。骨に異常はありませんから』

『骨折していなければ良いというものではないでしょう！　痛くないの！？』

『痛みはあります。しかし、自分がへまをしたペナルティですから』

痛み？

ペナルティ？

いったい何を言っているの？

『ハァ……まったくいつもいつも……達也君の意識を矯正するのはもう諦めましたけど……

せめて治癒魔法をかけておきますから、服を脱いでください』

いつも？

『必要ありません。戦闘行為に支障があるようなら、勝手に治ります』

『……達也君、ガーディアンにだって日常生活はあるんですよ。私たちは戦闘機械じゃないんですから……

大体、さっきのことだって、深雪さんを起こして逃げればよかったんですよ。

ガード対象の意思と自由を最大限に尊重すると言ったって、お昼寝の邪魔をしたくないという理由で他人の喧嘩に巻き込まれる必要なんて無かったんです』

……えっ？　わたし？

『反省します』

『本当に、反省してくださいよ？　逃げるのも立派な戦法なんですから。

達也君はもう少し融通を利かせることを覚えてください』

ため息の音は聞こえなかったけど、桜井さんが肩を落としてため息を吐き、踵を返したような気がした。

わたしは慌てて、それでも足音を忍ばせて、自分の部屋へ戻った。

◇　◇　◇　◇

桜井さんが手配したクルーザーは六人乗りの電動モーター付き帆走船だった。

わたしたち四人と、舵を取る人とその補助をする人で、ちょうど定員だ。

対面式に設(しつら)えられた甲板の長椅子に腰掛けて出航を待つ。わたしの真向かいにお母様、船首側の隣に兄が座っている。

帆を広げる様子を見学するふりをして、わたしは兄の横顔を窺い見た。

兄は熱心に操帆手順を見詰めていて、わたしの視線には気づいていない。

わたしは、さっき盗み聞きしてしまったことが、ずっと気になっていた。

兄はわたしの護衛役。

わたしを護る為に怪我をするのは、当然にあり得ることだ。

でもわたしはこれまで、兄が怪我をしているのを余り見た記憶が無い。

昨日の様に直接トラブルを目にすることも滅多に無かった。

兄の怪我と言えば、訓練によるものばかりだった。

だからわたしは、四葉の後継者候補と言っても、こんな子供に手出しするような卑劣な人間は流石に少ないのだろう、と思っていた。

そういうのは小説の中の話で、現実には例外的な事態なのだろうと。

文弥くんの所は、四葉の事情というより叔父様のお仕事の都合。

わたしに付けられた「ガーディアン」は、四葉の後継者候補の地位に伴う象徴的なもの。

だから兄のような子供にガーディアンの役目が回ってくるのであり、兄がガーディアンに任命されているのは魔法の才が乏しい兄に四葉の中で居場所を確保する為だ、と自分の中で思っていた節があ

る。そうして、後ろめたさを紛らせていた感がある。
でもさっきの二人の会話は、怪我をすることが日常的な出来事として語られていた気がする。
「深雪さん、何か気がかりなことでも？」
「え、いえ、何でもありません」
不意に向かい側から声を掛けられて、わたしは慌てて顔の向きを戻した。
いけない、いけない。
お母様に心配を掛けてしまった。
「セーリングは久し振りなものですから……」
「ああ、そういえばそうね」
帆を広げる作業を見学しているふりをしていたのが幸いしたようだ。
でも、ずっと誤魔化せるとは思えないし、考え事は後回しにしよう。
タイミングよく、出航の合図があった。
モーターを使っていないというのに、想像以上のスピードで桟橋が離れていく。
わたしは流れ去る景色に意識のフォーカスを当てた。

◇　◇　◇　◇

西風を受けて、クルーザーは北北西、伊江島の方角へと進路を取った。
夏の沖縄は南東の風が吹くと思っていたから船長さんにそう訊ねてみたら、東の海上に低気圧が近づいているとのことだった。
台風に成長するほどの勢力は無いから安心して良い、と言われた。
そこまで意識していたわけじゃなかったから、かえって心配になってしまったけど……何日も航海するわけじゃないから、たぶん杞憂なのだろう。

伊江島の方角といっても、船に乗ること自体が目的だから途中で引き返す予定だ。今の風速だと、片道だけで日が暮れてしまう。

セーリングは思ったよりずっと快適だった。

もやもやした気持ちが風にさらわれて飛んで行ったような気がする。

こんなことなら、もっと早い時間から、もっと遠くまで行っても良かった。

わたしは目を閉じて、帆を抜ける風をしばらく肌で感じていた。

このまま終われば、今日は気持ちよく眠れるはずだった。

――はずだった、というのは、このまま終わらないことが分かってしまったからだ。

肌を刺す緊張感に、わたしは目を開けた。

桜井さんが厳しい表情で沖の方を見詰めて、いえ、睨み付けている。

助手の人が必死の形相で無線機に訴えかけている言葉は――潜水艦？

モーターが唸りを上げ帆が巻き上がっていく。

大きく梶を切ったクルーザーが傾いて、わたしは長椅子の手摺を掴んだ。

「お嬢様、前へ」

そんな場合ではないと知りつつ、兄から「お嬢様」と呼び掛けられたことが、いつになくショックだった。

いつものことなのに、その他人行儀な呼び方が哀しかった。

その所為で余計に、わたしの態度は突っ慳貪なものとなってしまった。

「分かっています！」

全く必要も意味もない高圧的な台詞に、兄は逆らわず席を譲った。

そして、泡立つ海面を観察する。

兄の背中に庇われたわたしに兄の顔は見えないけれど、この人がどんな眼をしているのか、手に取るように分かる。

睨み付ける、でもなく、見詰める、でもない。
一切の感情が伺えない、あの、虚空の瞳。
桜井さんもお母様を庇って船尾側に立っている。
お母様はとても強力な魔法師だけど、最近はその魔法の出力に身体がついて行かなくなって来ている。魔法と肉体の相互作用はまだまだ未解明の部分が多いけれど、強力な魔法の行使はその出力に応じて体力を削ることが経験則的に分かっている。
お母様に魔法を使わせてはならない。
わたしはその事に思い至って、慌ててポーチからＣＡＤを取り出した。
桜井さんはとっくにＣＡＤをスタンバイさせている。
そして兄は――
――手ぶらのまま、立っているだけだった。
沸き立つ泡の中から、二本の黒い影が、こちらへ向かって来るのが見えた。
イルカ？　な訳はない！
わたしは直感的に、その正体を覚った。
魚雷！？　何の警告も無しに！？
硬直したわたしの前で、兄が不可解な仕草を見せた。
右手を海中の、迫り来る黒い影へ向けて差し伸べたのだ。
ＣＡＤも持たず、そんな真似に何の意味があるというの？
貴方は一応でも、魔法師でしょう！？
わたしは八つ当たり気味に、心の中でそう罵っていた。
そしてわたしは、お母様のガーディアンである桜井さんが、役に立たない兄やわたしの代わりにきっと何とかしてくれるはず、と現実逃避の代わりに決めつけていた。
しかし、わたしの期待は裏切られた。

桜井さんが魔法を発動するより早く、兄から瞬間的で強力な魔法が放たれた。
あまりに一瞬のことで、魔法が発動した兆候だとすぐには分からなかったほどだった。
魚雷が二本とも、海の底へ沈んで行く。
沈みながら黒い影が広がりを増しているのは、魚雷がバラバラに分解されたから？

この人がやったの……？

何の補助具も無しに……？

相手の魔法を無効化する以外、目立った魔法技能を持たないはずの、この人が……？

心の中で疑問と否定の言葉をいくら並べてみても、魔法師としてのわたしはこの現象が間違いなく兄の魔法による事象改変、構造情報への干渉による構造体の分解という極めて高度な術式の所産と理解していた。

もしかしてわたしは、この兄のことを何も知らない？

兄のことを、まったく分かっていない？

桜井さんが水面下に魔法を叩き込んでいる傍らで、わたしは兄の背中を見詰めたまま、長椅子の上で居竦まっていた。

4－（4）　違和感（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

4－（4）　違和感

窓の外を見ていた達也が、急に、出入り口の方へ振り返った。
この屋敷、外見は伝統的な日本家屋だが、中は無節操なまでに和洋折衷だ。
和洋混在、と表現する方が適切かもしれない。
この応接室――「謁見室」の造りは、八十パーセントくらい西洋風だった。
壁紙や飾り棚に何処となく和風の雰囲気が漂っているが、それ以外は窓も照明も調度品も全て洋風。
出入り口も外開きの木の扉だ。
その扉が達也の視線の先で「コンコンコンコン」と音を立てた。
深雪がソファに座ったまま「どうぞ」と応えると、「失礼します」という声と共に扉が開いて、着物の上にエプロンをつけた「女中さん」が姿を見せた。
……「メイドさん」よりはこの屋敷のイメージに合っている、とは思うが、「時代錯誤」という印象は拭い去れない。
その「女中さん」は深々とお辞儀をしてから、身体を横にずらした。
彼女の後ろには、スーツ姿の男性が立っていた。
その男性は、達也が良く知っている顔だった。
深雪が片手で口元を押さえた。「あっ」という形に開かれた口を隠す為にだ。
達也ほどではないが、深雪も一応、その男性の素性は知っている。
男が部屋の中に入ると、女中はもう一度お辞儀をして、事情説明もなく扉を閉めた。彼女は単なる案内役だったようだ。
「久しいな、達也。先週会ったばかりだが」
矛盾した挨拶を淡々と告げたのは、独立魔装大隊隊長の風間玄信だった。

「少佐……何故、いえ、叔母に呼ばれたのですか？」
達也は理由を問い掛けて、途中で「質問」を「確認」に差し替えた。
風間の方から四葉本家を訪問する理由など無いのだから、四葉が独立魔装大隊の隊長を呼び出したのは明らかだった。
「そうだ。貴官が同席するとは聞いていなかったが」
「……申し訳ありません」
謝罪を口にしたのは、風間の入室と同時に立ち上がっていた深雪だった。
風間の台詞は単に事実を述べただけのもので、彼はそのようなことで気分を害するほど狭量な男ではない。
それを知っている達也は肩を竦めるだけで済ませたが、深雪は身内の不手際をスルー出来なかったようだ。
「気にする必要は無い」
風間と深雪はそれほど接点を持たない。
達也抜きでは一度も顔を合わせたことが無いはずだ。
だから風間も、第三者が同席している場では、深雪に対してこれ程ざっくばらんな話し方はしない。しかし同席者が達也だけの場合は、どうしても「達也の妹」という認識になってしまうようだ。
ただ、会った回数が少ないといっても、知り合った時期は達也と同じだ。
風間との付き合いは、三年前のあの事件から続いている――

◇◆◇◆◇◆◇

国防軍の沿岸警備隊が駆けつけた時には、不審潜水艦は姿をくらませた後だった。
桜井さんは領海内に侵入されて気づかないなんて言語道断の不祥事、と憤っていたけど、わたしは正直なところ余り関心を持てなかった。

責任を追及するよりも、少し休みたかった。
肉体的な疲れよりも、精神的な疲れの方が大きい。
警備隊の責任者から事情を聴きたいと言われたけれど、後で別荘に来てもらうことにした。
わたしは今、自室で横になっている。
時間を掛けてシャワーを浴びたけど、頭の中はすっきりしないままだ。
梅雨時の雲の様に頭の中に居座っているもやもやは、兄が見せたあの魔法。
わたしの感覚に間違いが無ければ、対象物の構造情報を直接改変することによる対象物の分解。
でも、わたしの記憶に間違いが無ければ、構造情報に対する直接干渉は魔法として最高の難度にランクされるもののはずだ。
わたしには真似できないし、お母様や叔母様にも多分無理だろう。
それをあの人は、ＣＡＤも使わずに……
あの人は、魔法の才能が乏しかったから、後継者候補から外されたのではないの？
魔法が思うように使えないから、わたしの護衛になったのではないの？
わたしはずっと、そう聞かされて来たし、無系統対抗魔法「術式解散（グラム・ディスパージョン）」以外で、あの人がレベルの高い魔法を使ったのを見たことは無かった。
現代魔法の主流である系統魔法を上手く使えないから、高い身体能力と固有技能とも言える対抗魔法を活用することで、四葉の中に居場所を作った――それが、兄をわたしのガーディアンにした理由だったはずだ。
分からない。
知らない。
家族なのに、兄妹なのに、わたしは何も理解していない。
理解していないということさえ、わたしは今日まで知らなかった。

愕然とした。
考えてみれば、中学生になって本格的に家を離れるのは、今回の旅行が初めてだ。
本当の意味で、兄が独りでわたしの護衛についたのは、昨日が初めてではなかっただろうか？
わたしが六歳、兄が七歳。
それが、兄が護衛役に、わたしが護衛対象になった年齢（とし）。
あれから六年、兄はわたしの護衛を務めている。
でも小学生の子供に、誘拐や暴行の虞がある護衛対象を任せ切りにするはずも無く。
そうか、だからわたしは、あの人の真価を、あの人の本当の力を知らないんだ……
じゃあ、誰に訊いたらあの人の本当の姿が分かるんだろう？　誰が本当のあの人を知っているんだろう？
お母様？　桜井さん？　それとも叔母様？
思考の迷路から脱出する糸口を見つけた、と思ったちょうどその時、ドアがノックされた。
不意を衝かれたわたしは慌ててベッドから起き上がり、手櫛で髪を整えながら用件を訊ねた。
「お休みのところすみません。防衛軍の方が、お話を伺いたいとのことですが……」
「わたしに、ですか？」
ドアを開けると同時に、わたしは問い返した。
余り礼儀正しい態度じゃないけど、分かっていながらそういう振る舞いをしてしまう程に、わたしは驚いていた。
「ええ……私と達也君で訊きたいことには答えると言ったんですけど……」
桜井さんは凄く申し訳無さそうな顔をしているけど、別に彼女が悪い訳じゃないし……そんなに恐縮されると、こちらが心苦しくなってしまう。

「分かりました。リビングですか？」
桜井さんが頷くのを見て、着替えてからすぐに行く旨を告げた。

◇　◇　◇　◇

事情聴取に来た軍人さんは、風間玄信大尉と名乗った。
一通り自己紹介を済ませると、大尉さんは早速本題に入った。
「……では、潜水艦を発見したのは偶然だったんですね？」
「発見したのは副長さんですから、どのような経緯で発見に至ったかはあちらに訊いて下さい」
「何か、船籍の特定につながるような特徴に気がつきませんでしたか」
「相手は潜航中だったんですよ。船籍の特定なんて素人には無理です。
例え浮上していたとしても、潜水艦の特徴なんて分かりません」
質疑応答は大尉と桜井さんの間で行われていた。
お母様は桜井さんに全て任せているご様子だったし、わたしはあの時冷静さを失っていて、口を挿みたくてもお話出来ることは無かった。
「魚雷を撃たれたそうですね？　攻撃された原因に何か心当たりは？」
「そんなものありません！」
桜井さんはかなりイラついているようだ。
彼女は最初から国防軍の対応に不満を持っていたし、今の「何か余計なことでもしたんだろう」と言わんばかりの質問にはわたしも少しカチンと来たから、桜井さんが怒りを覚えても無理はない。
「――君は何か気づかなかったか」
桜井さんに睨まれた大尉さんは、兄に問いを向けた。
それは、特に深い意味の無い行為だったのかもしれない。
刺々しくなった雰囲気を和らげる為に、目先を変えただけかもし

れない。
「目撃者を残さぬ為に、拉致しようとしたのではないかと考えます」
しかし兄の回答は、違和感を覚えるほどハッキリしたものだった。
「拉致？」
大尉さんも意外感を露わにして、同時に面白そうな目をして、兄に説明を促した。
「クルーザーに発射された魚雷は、発泡魚雷でした」
「ほう……」
はっぽう魚雷？　……発泡魚雷、かしら？
泡を作り出す魚雷、という意味よね……？
「発泡魚雷？　何ですか、それ？」
わたしが首を捻っていると、代わりに桜井さんが兄に訊ねてくれた。
大尉さんに訊かなかったのは、彼女もまだ気持ちが治まっていないからだと思う。
「化学反応で大量の泡を長時間作り出す薬品を弾頭に仕込んだ魚雷です。
泡に満たされた水域ではスクリューが役に立たなくなります。重心の高い帆船ならば転覆する可能性も高い。
そうして相手を足止めし、事故を装って乗組員を捕獲することを目的とした兵器です」
「何故そう思う？」
大尉さんは兄のことを、とても興味深げに見ている。
わたしは、こんなことを知っている兄に、ただ驚いていた。
「クルーザーの通信が妨害されていましたから。
事故を偽装する為には、通信妨害の併用が必須です」
そして、あの状況で通信が不調だったことまでしっかり見ていたことに、もっと驚いた。
「……兵装を断定する根拠としては、些か弱いと思うが」
「無論、それだけで判断した訳ではありません」

「他にも根拠があると？」
「はい」
「それは？」
「回答を拒否します」
「……」
何の躊躇いも無く、あっさり告げられた黙秘の表明に、大尉さんは言葉を失っていた。
いえ、絶句したのはわたしと桜井さんも同様だったけど。
「根拠が必要ですか？」
「……いや、不要だ」
更に畳み掛けていく兄を、大尉さんは少し、持て余しているように見えた。
「大尉さん、そろそろよろしいのではなくて？
私(わたくし)たちに、大尉さんのお役に立てるお話は、出来ないと思いますよ」
自己紹介をしたきりでずっと沈黙を守っていらしたお母様が、いきなり、退屈そうな声でそう仰った。
退屈そうで、それでいて抗い難い声。
そこに込められた拒絶の意思に、大尉さんはすぐ気づいてくれた。
「そうですな。
ご協力、感謝します」
大尉さんは徐(おもむろ)に立ち上がり、敬礼しながらそう言った。

大尉さんたちのお見送りは、わたしと兄が出た。
表の通りに車が止めてあって、体格の良い兵隊さんが二人、背筋を伸ばして立っている。
その内の一人が、兄の顔を見て目を見張った。
わたしもその顔に見覚えがあった。
「なるほど」
兵隊さんの驚愕の表情を見て、風間大尉はすぐ、訳知り顔で頷い

た。
「ジョーを殴り倒した少年というのは君だったか」
大尉さんの言葉に、わたしは反射的に身構えた。
しかし、大尉さんの顔が楽しげに笑っているのを見て、身体の力が抜けた。
兄の身体は、何の反応も示さなかった。
「その若さで裏当てを修得しているとは驚くべき天分だな」
足の爪先から頭の天辺まで繁々と観察されても、兄は嫌がる素振りすら見せない。
でも「裏当て」って何だろう？
とても高度な技術みたいな言い方だけど……
「桧垣上等兵！」
怒鳴りつけるような大声で名前を呼ばれて、昨日の不良兵士がビクッと身体を震わせた。
強い視線を向けられ、慌てて大尉さんの前に走って来た。
敬礼して、それから直立不動で固まった上等兵に、大尉さんはジロリと一瞥をくれる。
そして、兄へと向き直り、頭を下げた。
「昨日は部下が失礼をした。
謝罪を申し上げたい」
意外な光景に、わたしは何を言えばいいのか分からなくなっていた。
腕を後ろに組んで、足を開いて、頭を軽く下げただけの、世間的な作法から見れば随分とぞんざいな挙措だけど、大尉のような厳つい軍人さんが、兄のような子供に潔く謝罪するなんて意外過ぎた。
「桧垣ジョセフ上等兵であります！　昨日は大変、失礼を致しました！」
大尉さんの言葉に続いて、桧垣上等兵が昨日とは打って変わった鯱ばった態度で口上を述べ、大尉さんと違って深々と腰を折った。
元々そんなに悪い人じゃないみたいだ。

そしてそれ以上に、大尉さんのことを恐れているように見えた。
「――謝罪を受け容れます」
一呼吸置いて、兄が答えた。
「ありがとうございます！」
わたしにも異論は無い。
そもそも最初から口を挿むつもりは無かった。
桧垣上等兵を従えてオープントップの大型車へ向かった風間大尉が、三歩も歩かない内に足を止め、振り返った。
「司波達也君、だったか？
自分は現在、恩納基地で空挺魔法師部隊の教官を兼務している。
都合がついたら是非、基地を訪ねてくれ。
きっと、興味を持ってもらえると思う」
風間大尉はそう言い残して、兄の返事を聞かず、車に乗り込んだ。

◇　◇　◇　◇

バカンス三日目は、朝から荒れ模様だった。
空はどんより曇って、強い風が吹いている。
東の海上から熱帯性低気圧が接近しているらしかった。
ここまで来て台風に成長することは無い、との事だったけど、台風の一歩手前、くらいの低気圧らしい。
今日はマリンスポーツを避けた方が良いと、どのチャンネルでも言っていたけど、この天気の中をわざわざビーチへ出ようとは思わない。沖に出るなど論外だ。
ここには二週間の滞在を予定しているのだから、一日や二日、無理をする必要はない。
「今日のご予定はどうなさいますか？」
お母様に焼きたてのパンを渡しながら、桜井さんがそう訊ねた。
「こんな日にショッピングもチョッと、ねぇ……」
チョコンと首を傾げて独り言の様に呟くお母様。こんな仕草をす

ると、まるで少女のように清楚で可愛らしい。今更だけど、本当にお若い。
「どうしようかしら？」
逆に質問されて、桜井さんも食事の手を止め首を傾げた。
彼女も大概若く見える人だけど、お母様と比べると桜井さんの方が「お姉さん」に見えるわね……実年齢はお母様の方が上なんだけど。
「そうですね……琉球舞踊の観覧なんて如何でしょうか？」
桜井さんはそう言って、壁に掛かったディスプレイのスイッチを入れた。
手許のコントローラーをチョコチョコ操作して、琉球舞踊公演の案内を呼び出す。
「衣装を着けて体験も出来るみたいですよ」
「面白そうね。深雪さんはどう思いますか？」
「わたしも面白そうだと思います」
「ではお車の手配をしておきます。
ただ、一つ問題が……」
わたしとお母様が頷き合うのを見て、桜井さんは少し、顔を曇らせた。
「この公演は女性限定なんです」
あっ、本当だ。動画映像の下の案内にそう書いてある。
じゃあ、兄は……
「そう……」
お母様は小さく千切ったパンを口に運んでモグモグと召し上がった。
「……達也、貴方、今日は一日自由にして良いわ」
「はい」
「確か昨日の大尉さんから基地に誘われていたわよね？
良い機会だから見学して来なさい。
もしかしたら訓練に参加させてもらえるかもしれないし」

「分かりました」
自由に、と言いながら、お母様は思いつきのままに、兄にそう命じた。
兄は不満も不平も見せず、それを無表情に受け容れた。
いつもどおりに。
「あの、お母様！」
何故そんなことを言い出したのか、自分でも分からない。
「わたしも、に、兄さん、と、一緒に行っても良いですか？」
わたしの唇と舌と声帯は、勝手にそんなことを口走っていた。
――兄さん、と発音するのに噛んでしまったのは、普段心の中で「兄」とか「あの人」としか呼んでいないからに違いない。別に、緊張した訳ではない……はずだ。
「深雪さん？」
自分でも唐突な発言と思う。予想されたことだけど、お母様から訝しげな目を向けられてしまった。
ううっ、居心地が悪い……！
「あっ、えっと、わたしも軍の魔法師がどんな訓練をしているのか興味がありますし、その、ミストレスとして自分のガーディアンの実力は把握しておかねばと思いますので……」
「そう……感心ね」
ミストレス、と口にするのに、凄く抵抗があった。
それはともかく、わたしの苦し紛れな言い訳を、お母様は信じて下さったご様子。
なんとなく、罪悪感……
でも、嘘をついているつもりはないのだ。
――嘘とか出任せとか以前に、自分の本心が解っていないのだから。
「達也、聞いての通りです。基地の見学には、深雪さんが同行します」
「はい」

「ついては、一つ注意しておきます。
人前では、深雪さんに敬語を使ってはなりません。
深雪さんのことは『お嬢様』ではなく『深雪』と呼びなさい。
深雪さんが四葉の次期当主だと覚られる可能性のある言動は禁止します」
「……分かりました」
今度は、兄が頷くまで少し間があった。
戸惑いを覚えているのは兄だけではない。
わたしも絶讃当惑中だ。「候補」が抜けていたことについて、ではなく、兄から「深雪」と呼ばれた場面を想像して。
「呉々も勘違いしてはなりませんよ。
これはあくまで、第三者の目を欺く為の演技です。
深雪さんと貴方の関係に何らの変更もありません」
小さな違和感を誘うお母様のお言葉に、兄は短く「肝に命じます」とだけ答えた。

◇　◇　◇　◇

「防衛陸軍兵器開発部の真田です」
基地で出迎えてくれた軍人さんはそう名乗った。
階級は中尉さんだそうだ。
それを聞いて、兄が驚いた顔を見せていた。
何故だろう……他人の前の方が、この人は表情が豊かな気がする。
「どうしましたか？」
「いえ……まさか士官の方にご案内いただけるとは思っておりませんでしたので。
それにここは空軍基地だと聞いておりましたから」
真田さんは兄の言葉を聞いて口元を綻ばせた。少し態度に、親密度が増した感じだ。
「軍のことに詳しいんですね、君は」

「格闘技の先生が元陸軍の方なんです」
「ああ、なるほど……
空軍の基地に陸軍の技術士官がいるのは、本官の専門が少々特殊で人材が不足しているからですよ。
案内を下士官に任せなかったのは……君に期待しているから、ですね」
そう言って真田中尉は人好きのする笑みを浮かべた。
それ程ハンサムな人じゃないけど、相手に警戒感を与えない愛嬌がある顔立ちだと思う。
ただ、兄は何故か、その笑顔を見て身構えた、様に見えた。

◇　◇　◇　◇

真田さんに案内された先は、天井の高い体育館だった。
体育館、というのは、あくまでもわたしが知っている物の中で一番印象が近いというだけで、本当は別の呼び方があるのかもしれないけど。
そのビルの五階建てくらいありそうな高さの天井から、何本もロープがぶら下がっていて、兵隊さんたちが大勢、ロープを登っては天井近くから飛び降りる、を繰り返している。
パラシュートなんて背負っていない。そもそもこの程度の高さでパラシュートが役に立つかどうか怪しいものだけど、普通なら骨折くらい当たり前の高さだと思う。
加速系魔法・減速術式か……
およそ、五十人前後。
ロープを登り降りしている兵隊さんたちは、全員、魔法師だ。
レベルはそれ程でもないようだけど、この基地にいる魔法師がこれで全部ということはないだろう。一地方基地にそれだけの数の魔法師を揃えているなんて……流石は国境最前線ということかしら
例の不良兵士、ええと、桧垣上等兵の姿も見える。

あの人、魔法師だったのね……

風間大尉はわたしたちのことを待っていた。それは、真田さんを迎えに出した時点でわたしたちが来ていることは分かっているのだろうけど、訓練の監督を部下に任せてわたしたちの到着を待ち受けていたなんて思わなかった。

いえ――待ち受けていたのは「わたしたち」じゃなくて、兄を、か。

「早速来てくれたとは、軍に興味を持って貰っていると解釈してもいいのかな？」

風間大尉は厳つい顔に不器用な笑みを浮かべて、兄にそう話し掛けた。

「興味はあります。ただ、軍人になるかどうかは決めていません」

「まあ、そうでしょうな。まだ中学生でしたか？」

昨日とは異なる言葉遣いは、なにがしかの下心――と言っては酷かもしれないけど――を感じさせた。

「中学生になったばかりです」

「十二、いや、十三歳ですかな？　それにしては落ち着いている」

「十三歳です」

兄は大尉さんの質問に、無難な受け答えをして見せた。

正直、意外感を禁じ得なかったが、すぐにそれがわたしの思い込みによる誤解に過ぎないと思い至る。

学校での兄は優等生なのだ。小学校でもそうだし、入ったばかりの中学校でも、魔法と関係のない部分ではずっと優等生だった。

社交的とはお世辞にも言えないけど、同級生や後輩から色々な場面で頼りにされているし、先生方にも一目置かれている。

もし魔法とは関係のない家に生まれていたなら。

四葉家当主の甥でなかったら、お母様の息子でなかったら、わたしの兄で、なかったら。

……考えても意味はない、か。

それは、もしわたしが「四葉」深夜の血を引いていなかったら、

という仮定に等しい。
わたしが気持ちを切り替えている内に、いつの間にか、ロープ登りの訓練に参加してみないか、という話になっていた。
もちろんわたしは関係なくて、兄が、だ。
「いえ、僕は魔法がそれほど得意じゃありませんから」
僕、という一人称を聞いて、背中がむず痒くなった。お母様から普通に見えるよう、注意を受けたからかしら？
似合ってないんですけど……
いえ、そんなことよりも！
「あの、兄さんが」
またしても、「兄さん」と口にするのに、強い違和感を覚えた。
どうして？
この人がわたしの兄であるのは、紛れもない事実なのに。
「魔法師だと、何故判ったんですか？」
でもこんなところで詰まったりしては、不自然極まりない。
それより、こっちの方が重要だった。
兄は普段、ＣＡＤを身につけていない。
呪符とか金剛杵とかの伝統的な補助具も、当然持っていない。
お母様とわたしは携帯端末型のＣＡＤを愛用していて、一目見て魔法師だと分かる格好をしていたのは桜井さんだけのはずだ。
もしかして、わたしたちの素性を調べている……？
「……何となく、ですかな」
風間大尉はわたしから質問を受けるとは思っていなかったみたいで、少し意外そうな顔をしてから、真面目くさった表情で余り真剣味の感じられない答えを返してくれた。
何となく、って、何それ？
はぐらかすつもり！？
「別に、韜晦しているつもりはないのですが」
っ！？
まるで心を読まれたようなタイミングに、わたしは顔を強張らせ

てしまう。
「何百人も魔法師を見ていると、雰囲気で分かるようになるのですよ。
魔法師か、そうでないか。
強い魔法師か、弱い魔法師か」
いけない、と思いつつ、動揺が顔に出るのを抑えられない。
「ところで何故そのようなことを気に掛けるのですかな？」
拙い……！
過敏な反応をして、不審を持たれてしまった。
お母様から、四葉とのつながりを覚られないよう言われていたのに。
「すみません、僕が魔法の才に乏しいことを、妹は気遣ってくれていて……普段から少々神経質になっているんです」
――焦るばかりでどうしたらいいか分からなくなっているわたしの盾になってくれたのは、兄だった。
「そうですか。いや、良い妹さんだ」
「ありがとうございます。自慢の妹です」
「ははっ、仲が良くて羨ましい」
わたしにとっては痛烈な皮肉にしか聞こえない台詞だった。
でも多分、兄にそんな意図はない。
単にわたしが困っていたから、助けてくれただけ。
そんなことも分からないほど、捻くれてはいないつもりだ。
でも何故、そんな風に気遣ってくれたのだろう？
わたしが答えに窮しても、ガーディアンの役目とは関係がないのに。
四葉の秘密主義を守ったって、兄には何の利益もないのに。
叱られるのはわたしだけなのに。
何故、普通の兄妹のように、兄が妹を庇うように、わたしのことを庇ってくれたんだろう……？

4－（5）　疑念（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

4－（5）　疑念

「それにしても、聞きしに勝る秘密主義だな」
達也と会話する中で、前後の脈絡なく唐突に呟いた風間の台詞が、深雪の意識に引っ掛かった。
「分かりますか？」
「俺を誰だと思っている」
達也は苦笑いを浮かべながら軽く一礼して、風間に対し謝罪の意を表した。
「敷地の中に招き入れられるまで分からなかったが……最前線の野戦病院ほどではないにしても、これほど濃密な死の臭いが漂う場所は滅多にないぞ」
風間の歯に衣を着せぬ評価に、深雪が思わず眉を顰めた。
おそらくは無意識であろう妹の表情の変化を、達也は「無理もない」と思った。
「悪名高き第四研の跡地ですからね、ここは」
「死（四）の魔法技能師開発第四研究所か……地上の建物を見ただけでは到底分からんな」
現代魔法の勃興期、先進各国と同様、日本に設けられた魔法師開発の研究機関。第一から第十まで置かれた研究所の内、今も稼働しているのはその半数。
残る半数は魔法師の人権が回復するに連れて、研究内容が非人道的との理由から次々と閉鎖された。
中でも人道、人命を無視した研究が行われていたと噂されたのが魔法師開発第四研究所、通称「第四研」だ。
第四研は研究内容の機密性が特に高いという理由でその所在すらも明らかにされぬまま、ただ閉鎖されたということのみが発表された。

旧第四研の中枢は、この四葉本家の屋敷の地下にある。
第四研で開発された魔法師こそが、唯一「四」の番号を与えられた四葉だった。
苗字に四の字を持つ魔法師は四葉以外にも「四方（よも）」や「四方堂（しほうどう）」、「四月一日（わたぬき）」などが知られているが、彼らは十師族、師補十八家とは無関係。第四研とは無縁に偶然「四」の字を姓に持つだけであり、第四研由来の魔法師は四葉だけである。
「研究施設は全て地下にありますから。
この屋敷だけでなく、この村の家屋は全て第四研の研究施設の擬装用なんですよ」
「そうらしいな。俺も三年前に初めて知った時には驚いた」
「まあ、地上に作られた武道場は今でも、魔法師の性能試験に使われていますから……少佐が嗅ぎ付けられた死臭は、淘汰された魔法師の死体のものではないかと」
「そうやって、文字通り死と隣り合わせで鍛え上げられたのが、四葉のガーディアンということか。
なる程、軍に入隊してから少しばかり鍛えた程度では、子供にも敵わぬ訳だ」
初めてそれを知った時、深雪は実際に両手で耳を塞いでしまった。
今は、その事実を正面から受け止めることができる。
しかし今でも、胸を突き刺す痛みは無くならない。
この痛みに慣れることはできない。
この痛みに慣れてしまう日が決して来ないことを、深雪は願っていた。

◇◆◇◆◇◆◇

わたしたちが見学を始めてから、程なくしてロープ登りの訓練が終わった。
ロープ登りが終了すると、今度は組手。

格闘技に興味がある人には面白いかもしれないけど、空手と拳法の区別もつかないわたしは正直なところ、すぐに退屈してしまった。

このまま見ているだけでは、兄の実力を確認することも出来ない。

わたしだけ先に失礼させていただこうかな……いえ、ダメね。兄がわたしから離れるはずもないし、そうすると何を見に来たのかということになってしまう。それは幾らなんでも、失礼すぎる……せめて、あの人が組手をするところが見られれば良いのだけど……

そんなわたしの、心の声が聞こえた、わけは無いけれど。

「司波君、見ているだけではつまらないだろう？

組手に参加してみないか？」

風間大尉に誘いを掛けられ、あの人はわたしの方をチラリと見た。

「そうですね、せっかくですからお願いします」

今の……退屈していたことを、完全に見透かされた？

カーッ、と顔に血が上る。

意地悪、意地悪、意地悪っ！

何でこんな、気がつかなくても良いところばかり気づくのよ！

――あの人は失笑の欠片すら浮かべておらず、こんなものは子供っぽい八つ当たりに過ぎない、と理性の戒める声がする。

でもわたしの感情は、あの人を糾弾し続けている。

に、兄さんなんて、滅茶苦茶にやられてしまえばいいのよ！

心の中で叫んだだけなのに、わたしは「兄さん」という呼び方に対する違和感を消し去れなかった。

もっと別に、あの人に相応しい呼び方が、本当はある、とでも言うかのように。

それは一体……？

わたしは、自分の心が、良く分からなくなっていた。

◇　◇　◇　◇

兄の相手に呼ばれたのは、二十代後半から三十代前半と思しき中肉中背の軍曹さんだった。

「司波君、遠慮は要らないぞ。渡久地軍曹は学生時代、ボクシングで国体に出た実力者だ」

魔法抜きでも全国レベルの実力者、ということだろうか？

ステップを踏まず足先を滑らせて、小刻みに距離を詰める動作は、ボクシングというより空手の試合に近い気がするけど、沖縄のボクシングはこういうスタイルなのかしら？　それともこれが空軍流？

そんな素人考えに気を取られている内に、組手はあっさり終わってしまった。

フッと訪れた意識の間隙。その一瞬にスルスルと間合いを詰めた兄が、右手を突き出した。

これは結果から導き出した想像だ。

実際にわたしが見たのは、いつの間にか渡久地軍曹の懐に飛び込んで、右手を鳩尾に突き刺している兄の姿。

軍曹は声も無く崩れ落ち、両膝をついて何とかそれ以上倒れるのを免れている。

「渡久地！」

見物していた軍人さんが慌てて駆け寄って、脂汗を流す軍曹に応急処置（と思う）を始めた。

兄は最初の位置まで下がって軽く一礼した。

その姿は倒した相手に対して敬意を示しているようにも、自分の勝利を誇示しているようにも見えた。

「これはこれは……」

風間大尉がわたしの隣で感心したように呟く。真田中尉は目を丸くして絶句している。

「南風原（はえばら）伍長！」

「ハッ！」

大尉の声に、二十代半ばくらいの軍人さんが威勢良く進み出た。

さっきの軍曹さんより痩せているけど、ひ弱な印象はまるきり無くて、炎と鎚と水と砥石で余分なものを削ぎ落とし不純物を取り除いたかの如き、鍛造されたシャープな刃物のようなイメージがある人だ。こうして指名されたことから考えても、さっきの軍曹さんより腕は上。

「手加減など考えるな。全力で行け！」

「ハッ！」

答えると同時、南風原伍長が兄に襲い掛かる。

そんな、無茶よっ！

正面から本気で闘って、手練（てだれ）の軍人に十三歳の少年が敵うはずがないじゃない！

わたしの口から「止めて！」という叫びが漏れそうになった。

でもそれは、実際の言葉にはならなかった。

ホゥ、と感嘆のため息があちこちから聞こえる。

あの人は伍長さんの猛攻を危なげなく躱している。

霞んで見えるほどのスピードで繰り出されるパンチを、キックを、それ以上のスピードで。

紙一重、ではなく余裕を持って。

「実戦的ですね、彼は。

相手が暗器を持っている可能性を想定した間合いの取り方です」

「そうだな」

大尉と中尉の会話は半分も意味が分からなかったけど、兄が互角以上にやり合っているということだけは素人目にも分かった。

だって、伍長の表情には余裕がない。

攻め立てながら、焦っている。

あっ！

あの人が反撃に出た。

でも、伍長さんも流石だわ。

今度は兄のパンチを右、左、右、左と外側に弾いて捌き、無防備になったところへ、カウンター！？

思わず目を閉じそうになったけど、心の何処かに「そんな必要はない」と冷静に囁く自分がいた。
あの人がこの程度のことでやられてしまうはずはない、と。
伍長の右手が兄を捉える、と見えた瞬間、
兄の身体は、伍長さんの脇をすり抜けていた。
あの人の右手が、南風原伍長の右袖の、肘の上辺りを掴んでいる。
伍長さんに引っ張られる形で兄の身体が止まり、南風原伍長の身体が回転して兄に脇腹を見せる。
そこへ、音もなく踏み込んだ兄の、右肘が突き刺さった。
ぐぁっ、と呻き声を上げて二歩、三歩とよろめく伍長さん。
大尉さんから「そこまで！」と終了の合図が掛かった。

◇　◇　◇　◇

手当を受けた南風原伍長とあの人が握手を交わし、その周りに人垣が出来ている。
手荒い称賛が浴びせられる中に、大尉さんが割り込んで行く。
わたしはポッカリ空いた人垣の隙間を、大尉さんの後に続いた。
「南風原伍長にまで勝利するとは大したものです。彼はこの隊でも指折りの実力者なのですよ？」
この台詞は真田中尉。
「まさかここまでの腕とは思わなかった。何か、特殊な訓練でも受けているのですかな？」
風間大尉は、見定めるような目つきで兄を見ている。
「いえ、特殊なことは何も。強いて言うなら母の実家に道場がありまして、そこで稽古を付けて貰いました」
「ほぅ……」
完全に納得しているようには見えないが、取り敢えず、これ以上の詮索はしない、という顔つきで大尉さんが頷く。
「しかしこのままでは恩納空挺隊の面目は丸潰れですな……もう一

手、お付き合い願えませんか」
詮索をしない代わりに、大尉さんは随分勝手なことを言い出した。兄を組手に誘ったのは大尉の方だ。それなのに、部下が兄にやられると「面目が立たない」と言い出す。
そんな身勝手な言い分に、こちらが付き合わなければならない理由が、一体何処にあるというの？
わたしは風間大尉の申し出をやんわり断ろうとした。
兄はわたしの護衛だもの、わたしが断ったって良いはず。そう、思って。
「自分にやらせて下さい！」
でも、一歩遅かった。
わたしの声を遮って、聞き覚えのある声が轟いた。
聞き覚えがある、と言ってもそれは、つい最近聞いたばかりだからで、耳に馴染んだという意味ではない。
「桧垣上等兵――報復のつもりなら、認めることは出来ないぞ」
「報復ではありません、雪辱であります！」
どう違うというの？　同じじゃない！
悪い人じゃない、と感じたのは、わたしの勘違いだったのね。
「ふむ……司波君、本人はああ言っているが、付き合って貰えないだろうか？
桧垣上等兵は若いながら、南風原に劣らぬ猛者だ」
こんな理不尽な申し出は断るべきだわ。こちらには何のメリットも無いのだし。
「お相手します」
そんなわたしの思いを他所に、あの人は大尉の申し出に頷いてしまっていた。
桧垣上等兵は腰を落とし両手を前に掲げて窺い見るような格好であの人に相対している。
腰を落とした姿勢でも、上等兵の視点は兄より高い位置にある。

熊に襲われようとしている少年――そんなことを、連想させる構図。

見ているだけで、プレッシャーに押し潰されそうになる。

でもあの人は、右に左に弧を描いてゆっくり移動しながら隙を窺う相手のことを、右足を軸に左足を滑らせて身体の向きを変えるだけで、無表情に見ている。

息をすることも憚られる緊迫感は、それほど長く、続かなかった。

桧垣上等兵の身体が、一回り膨れ上がった、ように見えた。

次の瞬間、上等兵の巨体が一個の砲弾と化して兄に襲い掛かった。

速い……！

大きく跳び退って兄は突進を躱したが、流石に体勢が崩れている。

そこへ間髪入れず、上等兵が再び襲い掛かる。

あの人は自ら床を転がって、何とかタックルを躱し、距離を取った。

わたしは桧垣上等兵のスピードに度肝を抜かれていた。

だけどこれでも十師族・四葉の次期当主候補、驚いて他のことが見えなくなるほど柔じゃない。

「魔法を使うなんて、卑怯じゃないんですか！？」

わたしは風間大尉に食って掛かった。

ＣＡＤのスイッチを入れる動作はわたしにも分からなかった。上手く擬装されていた。

でも魔法を使った事実まで見逃したりはしない。

今の上等兵のスピードは、自己加速魔法に後押しされたものだ！

わたしの抗議に、風間大尉が首だけで振り返った。

答えは、大尉が未だ視線の半分を向けている方向からやって来た。

「止せ、深雪！」

兄のその言葉に、わたしは二重のショックを受けた。

兄が、わたしに、命令した。

兄が、わたしを、「深雪」と呼んだ。

「組手に魔法を使わないという取り決めは、最初から存在しない」

キッパリと兄はそう言い切る。

わたしに敬語を使わなかったこと、わたしを深雪と呼び捨てたこと、それはお母様の言葉に従った結果であったとしても、わたしを窘めたのは兄自身の意思。

兄が、自分の意思で、わたしの甘い考えを叱責した。

わたしはそのことに、怒りや反発を感じる代わりに、痺れるような、疼くような、奇妙な感触を心の裡に生じさせていた。

「桧垣、気を引き締めて行け！」

何も言えなくなってしまったわたしの横から、風間大尉の叱咤が飛んだ。

今更のように、わたしは気づいた。

兄の纏う空気の色が、変わっている。

照明が少し暗くなったような気がした。

もちろん、錯覚に決まっている。

見ている者に視野狭窄を起こさせるようなプレッシャーを、兄が放っているのだ。

兄が構えを変えた。

右の掌を相手に向けて、真っ直ぐに右腕を伸ばす。

左手を右肘の内側に添えるように掲げる。

これは、兄の、無系統魔法の構え……？

桧垣上等兵の全身の筋肉が、再度膨れ上がった。

今度こそ、兄の両脚を刈り取るべく、ダイブする――その時。

兄の右手から、サイオンの奔流が迸った。

サイオンの波動が桧垣上等兵の身体を通り抜け、突進がガクッと減速した。

やっぱり……！　グラム・デモリッション！

吹き荒れるサイオン粒子の嵐は、肉体に対して作用していた自己

加速の魔法式を力ずくで打ち壊すと同時に、精神と肉体の連結を揺るがす。
神経を伝わる電気信号で身体を制御するのではなく、精神で直接肉体を制御することに長けた達人ほど、外部から自分に由来しないサイオンを打ち込まれた際のダメージは大きい。
桧垣上等兵は、まるで、タックルのやり方を忘れてしまったよう。ただ無防備に突っ込む上等兵の身体を、兄が体を開きながら上から撫でるように叩く。
その巨体は、クルッと一回転して、冗談みたいに吹っ飛んでいった。

大の字になって天井へ目を向けている上等兵の傍らへ、兄が歩み寄った。
桧垣上等兵は胸を大きく上下させるだけで、立ち上がる気配もない。
兄が無表情に右手を差し出した。
桧垣上等兵は一瞬、逡巡を見せた後、ニヤリと笑ってその手を取った。
その手を桧垣上等兵がグッと引く。
まさか、罠!?
だけどそれは、わたしの考え過ぎだった。
体重差の所為で流石に踏ん張った兄をグラウンドに引きずり込むこともなく、桧垣上等兵は兄の手を借りて立ち上がった。
「――負けたぜ。完敗だ。
一昨日のアレが、俺の油断の所為なんかじゃないということが良く分かったよ」
そんなに大きな声で話していたわけではないけれど、桧垣上等兵の声は何故か良く聞き取れた。
「改めて自己紹介させて貰うぜ。
俺は国防空軍沖縄・先島防空隊、恩納空挺隊所属、桧垣ジョセフ

上等兵だ。
名前を聞かせて貰えないか」
「司波達也です」
「オーケー、達也。俺のことはジョーと呼んでくれ。
沖縄にはまだ暫くいるんだろう？
退屈したら声を掛けてくれよ。こう見えても俺はこの辺じゃ色々顔が利くんだ。」
「そこまでだ、ジョー。今は勤務中だぞ」
風間大尉が笑いながら声を掛け、感電したような反応で桧垣上等兵が姿勢を正した。
ふーん……愛称で呼ぶ部下なんだ。信頼されているのかしら……？
コロコロ変わる印象に、どういう人間か掴み辛くなってきた。
もっとも、深くお付き合いする相手でもないんだし、それどころかおそらくもう会うことのない相手なんだから、どういう人間かなんてどうでも良いと言えばどうでも良いのだけど。
「無理を言って申し訳ない。
お陰で部下の蟠り（わだかま）も取れたようだ。
少しあちらで、お茶にでも付き合っていただけませんかな？
今の『遠当て』のことなども、よろしければお伺いしたいのだが」
遠当てというのは、兄の無系統魔法のことだろう。
油断ならない、という印象は益々強まったけれど、この流れでお断りするのは難しかった。

◇　◇　◇　◇

「ではやはり、あのサイオン波動は術式解体ですか」
「それだけではありますまい？
大陸流の古式魔法、『点断』の効果も合わせ持っていたようにお見受けしたが」
お茶にでも、と言いながら、出された物はコーヒーだった。

こちらは兄とわたし。
あちらは風間大尉と真田中尉。
合計四人のコーヒーブレイク。
何だか、奇妙な気分だった。
風間大尉が話し掛ける相手は兄。
真田中尉が話し掛ける相手も兄。
わたしはあの人の妹として、思い出したように相槌を求められるだけ。
ここでは兄が主役で、わたしはその付属品。
「――見たところ司波君は、ＣＡＤを携行していないようですが」
司波、という名を呼ばれた時、それは兄を指しており、わたしは「司波君の妹」。
「補助具は何を使っているんですか？」
こんなことは初めての経験だった。
それが不思議と、不愉快ではない。
「特化型のＣＡＤを使っていますが、なかなかフィーリングに合う物が無くて……僕はＣＡＤを使った魔法の使い分けが苦手ですから」
「ほう、そうですか。
あれだけサイオンの操作に慣れていれば、ＣＡＤも難なく扱えそうだが」
話題は兄が使った無系統魔法から、兄のＣＡＤへと移っていた。
「司波君、よかったら僕が開発したＣＡＤを試してみませんか」
「真田中尉はＣＡＤをお作りになっているんですか？」
「僕の仕事はＣＡＤを含めた魔法装備全般の開発です。
ストレージをカートリッジ化した特化型ＣＡＤの試作品があるんですよ」
兄が目を輝かせている、気がする。
普通の人と比べれば随分と控え目な表現だけど、この人がこれ程ハッキリ好奇心を示すのは珍しいのではないだろうか。
少なくともわたしは、余り記憶にない。

「試してみたいです」
これ程ハッキリ自分の願望を述べるところも、初めて見たのではないだろうか。

◇　◇　◇　◇

案内された先は、基地の中とは思えない、清潔で整頓された研究室。
軍の基地なんて汚れて散らかっているか、物が無くて殺風景な物だとばかり思っていたわたしはきっと、意外感を隠し切れていなかったのだろう。風間大尉と真田中尉が微笑ましげにわたしのことを見たのは、きっとそんな理由だと思う。
兄は感心したように、あるいは感動したように、部屋の中を見回している。
今日はこの人の、意外なところばかり見せられている気がする。
どんなことにも無関心で無感情かと思っていたら、この人にもちゃんと、感情があるし好奇心もあるんだ……

――じゃあ、わたしのことは、どう思っているんだろう？

ふと、心の中に浮かんだ疑問。
自動的に紡ぎ出される答え。
わたしは懸命に、ガタガタと震え出しそうになる自分の身体を押さえ込んだ。
「……深雪、気分が悪いのか？」
「――いえ、それほどでも。少し疲れたのかもしれません。腰を下ろしていれば、大丈夫だと思います。あちらの椅子をお借りしてよろしいですか？」
大尉さんに断って、壁際の椅子に座らせて貰った。
兄の側から離れることが出来て、少しホッとした。

兄は大型拳銃形態のＣＡＤを手にとって、真田中尉から説明を受けている。
兄の姿を見ていると、さっきの疑念が再び頭をもたげ、膨れ上がり、重くのし掛かってくる。
振り払っても振り払っても、どうしても意識の中から消し去ることが出来ない。

兄は、わたしのことを、どう思っているのだろう……？

愛されている、という自信はない。

好意を持たれている、はずはない。

憎まれている、かもしれない。

わたしがいなければ、わたしさえいなければ、兄は優秀な学生として、一流のアスリートとして、すぐにでも一人前として通用する軍の魔法師として、生きていくことが出来るのだから。
だからといって、今、兄から目を逸らすのは、兄の手を離してしまうようで、手を振り解かれてしまうようで、もっと怖かった。
「――この武装デバイスは加速系と移動系の複合術式が組み込まれていて、七・六二ミリ弾で最大射程二十キロを実現――」
「――凄いですね。しかし、実際の用途としては――」
大型ライフル形態のＣＡＤを手にして楽しそうに話す兄の声が、途切れ途切れに聞こえてくる。
同じ部屋の中、わたしは目を閉ざすことも耳を塞ぐことも出来ず、まとわりついて離れない暗雲に無言で耐えていた。
この時間が早く終わればいい、と心の裡で考えながら。
そんな身勝手な自分を覚られないよう、一所懸命ポーカーフェイスを装いながら。

4－（6）　バカンスの終わり（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

4－（6）　バカンスの終わり

ドアをノックする音で深雪は我に返った。
「四葉のガーディアンは決して特別なんかじゃありませんよ。自分の天狗の鼻も、あの後すぐに柳さんの手でへし折られましたし、師匠には未だに勝てません」
達也と風間は深雪が覚えている話の続きをしている。
「お前は最初から天狗になってなどいなかったと思うが。それに、未だ師匠に勝てないのは、俺も同じだ」
どうやら深雪が我を失っていたのはほんの短い時間だったらしい。それにしては随分いろんな事を思い出した気がする、と深雪は思った。
再度ドアが、今度は少し強めに叩かれた。
深雪が入室を許可すると、「失礼します」という声と共に若い執事が入って来た。
若い、というより、まだ少年だ。
達也とそれほど年も変わらないように見える。
それでいながら、苛立った様子を微塵も窺わせなかったのは流石に訓練が行き届いていると言うべきか。
「申し訳ございません」
少年はいきなり、謝罪を始めた。
「前（さき）のお客様のご用事が些か長引いておりまして……もう少しお待ちいただけないでしょうか、との伝言を奥様より承っております」
奥様、とは四葉真夜のことだ。
彼女は一度も結婚したことが無い。だから「奥様」という呼び方は本来正しくないのだが、慣例的な呼称に目くじらを立てる趣味は、風間も深雪も、そして達也も、持ち合わせてはいない。
「本官は構いません」
深雪と達也から目で問い掛けられて、風間が少年に向かい答えた。

「ありがとうございます」
少年は達也たちの意向を確かめようとはしなかった。
達也はともかく、深雪の都合を聞こうともしなかったのは、彼女が身内であると、少なくとも四葉家では考えているからだろう。
それは間違いではない。
達也は自分のことを四葉家の人間とは砂粒ほども思っていないが、深雪はそうも行かなかった。
司波龍郎の長女であることを拒否できても、司波深夜の娘であることを深雪は拒むことが出来ない。
故に彼女は、自分に対して、自分が四葉真夜の姪であることを、否定することも出来ないのだった。

◇◆◇◆◇◆◇

初日から波乱含みだった沖縄のバカンスも、昨日は平穏を取り戻した。今日も今のところ無事に過ぎている。
退屈な夏休みというのも考え物だけど、トラブルで気疲れするお休みも御免被りたい。
わたしたちは沖縄到着四日目からようやく、南国の休日を満喫出来るようになったという訳だ。
ただ、その「わたしたち」に兄が含まれるかどうかは疑問だった。
現在の時刻は午後一時。
お昼寝代わりにただ今、部屋で読書中。
桜井さんが見つけてきてくれた珍しい紙の魔法書を、机に広げてボンヤリ眺めているところだ。
――いいのよ、ボンヤリで。どうせ完全になんて理解できないんだから。
わざわざ紙の書籍にする魔法の解説書は専門性の高いものばかりで、魔法科高校生でも中々手に負えないのに、中学一年生のわたしが一度読むだけで理解できるなんて考える方が自惚れというもの。

あの人なら、もしかしたら理解できるのかもしれないけど。
その人、つまり兄は、自分の部屋に持ち込んだワークステーションにＣＡＤをつないで熱心にキーボードを叩いている最中、と思われる。
ＣＡＤは一昨日、真田という中尉さんに貰った二丁拳銃。
最初は「貸す」という話だったはずなのに、いつの間にか「あげる」になっていたのは、「それで良いのか国防軍」と小一時間ばかり問い詰めたい気もする。
……先行投資、という思惑が分からない訳じゃないけれど。生憎と、この投資は全損になるのが確定している。だって、あの人はわたしの「守護者」だもの、軍人になんてならない。
くれるという物をお断りする理由も無いけど、所詮は試作品。将来を見越した見学者へのお土産以上の意味は無いはずだった。
ところがあの人は、このお土産が甚く気に入ったらしい。
一昨日、昨日、今日と、暇さえあればＣＡＤのシステムを弄っている。――ＣＡＤのチューニングが出来るなんて、今までそんな素振りも見せなかったくせに。その所為で、休んでいる暇など無いことだろう。
飽きないのかしら？
ＣＡＤを弄るのって、そんなに面白いものだろうか？
まあ、チューニングと言っても、どうせスイッチの割り当てを変える程度だろうけど……

◇　◇　◇

気がつけばわたしは、あの人の部屋の前に立っていた。
えっと、何しに来たんだっけ？
わたしは、何がしたいんだろうか。
戸惑う心を他所に、わたしの右手は扉をノックする為に持ち上げられて、

戸惑う心に従って、わたしの右手は扉をノックする寸前で停止している。
何だか自分が観客のいない道化を演じているような気がしてきた。
それも、三流の道化役者だ。
わたしはため息を吐いて手を下した。
そのまま踵（きびす）を返そうとした、けれど、それは少し遅すぎた。
外開きのドアが、カチャリ、と、そっと開かれた。
ドアの外にいる人間に配慮した開け方で、お蔭でわたしはドアに鼻をぶつけるようなベタなコントを演じなくてすんだけど、素知らぬ顔で逃げ出す程の余裕は無かった。
「何か御用ですか？」
兄はまるで、わたしが立っていたのを分かっていたような顔で――実際に分かっていたのだろうけど――顔を見せるなりわたしにそう訊いた。
「あっ、あの、えっと……」
「はい」
兄はしどろもどろになったわたしの回答を、辛抱強く待っている。
待っているということを感じさせないポーカーフェイスで、ただわたしのことを見ている。
兄の冷静な眼差しが、わたしの当惑を加速する。
「あのっ、お邪魔してもいいですか！？」
このままではパニックになってしまう、という危機感に駆られたわたしは、そうなる前に勢いで押し切ってしまうことにした。
あの人は流石に目を丸くしていたけれど、それ以上の動揺は見せず、ドアを押さえてわたしを室内へ招き入れた。
相変わらずのシンプルな、と言うより物が無い部屋。
ガランとした室内で、静かに稼働中のワークステーションが声高に存在感を主張している。
「それで、どのような御用でしょうか？」

兄の問い掛けに、わたしは答えることができなかった。
その時わたしの意識は、むき出しのコードでワークステーションに接続された半分解状態のＣＡＤと、ディスプレイを埋め尽くす数式とアルファベットの羅列に釘付けとなっていた。
これではまるで、ＣＡＤの開発ラボみたいじゃない……
正直、度肝を抜かれていた。
でも、次の兄の一言で、わたしの意識は急速に引き戻された。
「お嬢様？」
「お嬢様なんて呼ばないでくださいっ！」
怒鳴りつけたわたしに、兄がビックリして固まった。
この人の絶句する姿なんて、本当に珍しい、けど、無理もないと思う。
自分でもビックリしていたから。
だって、
今のわたしの声は、まるで、悲鳴みたいだった。
今にも、泣き出しそうな声だった。
「あ……」
「……」
「あの、えっと……そうです！　普段から慣れておかないと、思わぬところでボロを出してしまわないとも限らないでしょう？」
兄の表情が「驚愕」から「不審」に変わった。
正気を疑うような訝しげな眼差しに、挫けてしまいそうになったけど、わたしは気力を振り絞って下手な言い訳を押し通した。
「だからわたしのことは、み、深雪と呼んでください！」
でも、そこまでが限界だった。
やっとの思いでそれだけを言い終えて、わたしはギュッと目を閉じてしまった。
叱られるのを畏れる、小さな子供の様に、瞼を閉じ手を握り俯いてしまう。
何を恐れているのか分からぬまま、それこそ小さな子供が無条件

に、親の勘気を怖れる様に。
「……分かったよ、深雪。これで良い？」
兄の答えは、優しかった。
いつもの、大人のような堅苦しい喋り方じゃなくて、友達同士みたいな砕けた言葉遣い。
多分兄が、わたし以外の、学校の友人や下級生と話をするときの言葉と口調。
兄は、わたしに優しく話し掛けながら、優しい眼差しでわたしを見詰めている。
「……それで結構です」
わたしは今度こそ本当に、泣きそうになった。
涙を堪えるだけで精一杯だった。
「すみません、部屋に戻ります」
その我慢も長続きしそうに無かったから、わたしは兄の前から逃げ出した。
自分の部屋に逃げ込んで、枕に顔を押し付けた。
だって、分かってしまったから。
あの優しさでさえも、演技でしかない、と。
普通の兄妹の間で、兄が当たり前に妹へ向けるであろう短い台詞でさえも、冷たい計算の結果としてアウトプットされたものだと。
理由も無く分かってしまった。
だってわたしは、あの人の妹だから。
こんな時だけ通じ合う兄妹のつながりを恨めしく思いながら、わたしは声を押し殺して、泣いた。

◇　◇　◇

その後の二日間は、いつも通りの日々だった。
わたしの後にはいつもあの人が付き従っていて、わたしはあの人を振り回してばかりだった。

わたしは兄に、優しくなろうと思った。――いえ、思っている。
わたしが兄に優しくできれば、何かが変えられると思ったから。
でも、染みついた習慣は中々是正されるものじゃないと、思い知らされるだけだった。
昨日、一昨日と、わたしは相変わらず、あの人を我が侭で振り回してばかりいた。
……つい一週間前までは、こんなこと、気にもならなかったのに。
わたしは一体、どうしてしまったのだろう。
自分の心が分からない。自分が何を望んでいるのか分からない。
こんなモヤモヤした気持ちのまま、今日も過ごさなければならないかと思うと、少し憂鬱になってくる。
でも、幸いにして――というのは不謹慎すぎるけど、そんなことを悩む必要は無くなったみたい。
そんなことで悩んでいる場合では無くなった。
ちょうど朝食を終えた時、全ての情報機器が、緊急警報を告げた。

警報の発令元は国防軍。
つまり、外国の攻撃ということ。
わたしは食い入るようにテレビの画面を見詰めた。

西方海域より侵攻。
宣戦布告は無し。
潜水ミサイル艦を主兵力とする潜水艦隊による奇襲。
現在は半浮上状態で慶良間諸島を攻撃中。

耳慣れない単語が羅列された情報の洪水でパニックになりそうだ。
「便宜を図っていただけるよう真夜様にご依頼します！」
焦りを隠せない口調で桜井さんが提案し、
「ええ、お願い」
頷くお母様の声も、流石に緊張気味だった。

無理もない、と思う。
だって、何の前触れもなくいきなり自分が戦争に巻き込まれるなんて、まさか思わないもの。
テレビのキャスターがさっきから「冷静に行動して下さい」と連呼しているけど、当の本人が気の毒になるくらい動揺している。
当然よ。この状況で「動揺するな」と言う方がおかしい。
わたしが本物のパニックに捕らわれていないのは、単に現実感が無いだけだ。他人事のようだけど、一種の現実逃避で自分を保っているのだと思う。
でも……この人は？
データ通信が流している、テレビより詳細な情報を小型ターミナルから無言で読み取る兄の姿は、動揺や緊張や焦りといった人間的な情動を何処かに置き忘れてしまったよう。
落ち着いた佇まいで黙考するその姿は、精巧なアンドロイドと言われても納得できる気がする。
兄もわたしと同じように、実感を持てないでいるのだろうか？
それとも本当に、何も感じて、いないのだろうか？
わたしがじっと見詰める先で、兄が「おやっ？」という顔をした。
何だろう？　と思って見ていると、兄はサマージャケットの懐から通信端末を取り出した。
「はい、司波です……いえ、こちらこそ先日はありがとうございました……基地へ、ですか？」
兄の応答から、相手は先日の国防軍の大尉さんたちだろうな、と推測がついた。
しかし、基地は文字通り戦争中の状態だろうに、一体何の用事だろう？
「ありがたいお申出ですが……いえ……はい、それでは母と相談してみます……はい、後ほど」
通信を終えた時、兄を見ていたのはわたしだけではなかった。
ソファに座ったまま顔だけを向けているお母様に向かって、兄は

立ち上がり、一礼した。
「奥様」
実の母親に向かって、あの人はそう呼びかける。
こんな時なのに、心臓を締め付けられたような痛みを覚える。
以前には、一週間前には感じなかった痛み。
「恩納空軍基地の風間大尉より、基地内のシェルターに避難してはどうか、とのお申出をいただきました」
「えっ！？」
思わず声を上げて、わたしは反射的に口を押さえた。
たった二回、実質は一度会っただけなのに、何故……？
立て続けに意外なことが起こって、感情が飽和しそうになった、けど、吃驚するタネはそれで終わりじゃなかった。
「奥様」
桜井さんがお母様に、音声通信ユニット、コードレスの、所謂「受話器」を差し出した。
「真夜様からお電話です」
今度は「えっ」という声も出ない。
叔母様からお電話？
お母様に？
それは、お母様と叔母様は双子の姉妹なのだし、電話が掛かってきてもおかしなことなど、表面的にはないのだけど……お母様と叔母様の仲が余りよろしくないのは、四葉の中では公然の秘密。
いがみ合ったりはしないけど、一種の冷戦状態が続いている。
だからさっきも、お母様がご自分で連絡なさらなかったのに……
別の意味で緊張してしまったわたしの目の前で、お母様は億劫そうに受話器を耳に当てた。
「もしもし、真夜？　……ええ、私（わたくし）よ。
……そう。貴女が手を回してくれたのね……でも、かえって危険ではなくて？
……そうね……分かりました。ありがとう」

お母様が通話を超えた受話器を桜井さんに差し出す。
「奥様。真夜様は、何と？」
桜井さんは受話器を受け取りながら、当然とも思える質問を口にした。
「国防軍のシェルターに匿って貰える様、話を通したそうよ」
「では、先ほど達也君が受けた電話は」
「そういうことでしょうね」
「しかし、かえって危なくはありませんか？」
「私もそう言ったのだけど」
……何故だろう？　民間のシェルターより軍のシェルターの方が頑丈で安全なのではないかしら？
「明確な敵対状態にすらなかったのに、いきなり奇襲をかけてくるような相手に、ルールの遵守は期待できないそうよ」
「それは……そうかもしれませんが……」
（兄を含めた）三人の表情を窺ってみると、理解出来ていないのはわたしだけみたいだ。
だからといって一々説明して貰うのも気が引けるし……ひとまず、疑問は棚上げしておこう。
「大した労力じゃないとはいえ骨を折ってもらったんだし、真夜の言う通りにしてみましょう。
達也」
「はい」
それまで、ずっと立ったままで放置されていたにも関らず、兄は打てば響くような反応を見せた。
……本人が不服そうな顔をしていないのだから、わたしが気に掛けるのはきっと、お門違いなのだろう。
「大尉さんにお申出を受けます、と連絡して。
それから、お迎えをお願いして頂戴」
「畏まりました」
面倒なことを全部、兄に押し付けているように見えるのも、きっ

と、わたしの考え過ぎなのだろう。

◇　◇　◇　◇

予想はしていたけれど。

基地から迎えに来てくれた軍人さんは、例の桧垣ジョセフ上等兵だった。

「達也、待たせたな！」

「ジョー、態々（わざわざ）ありがとうございます。」

「止せよ、他人行儀な挨拶は」

桧垣上等兵は、すっかり友人に向ける笑顔を浮かべている。

兄の方は多少遠慮がちだったけど、それでも十分打ち解けた表情だった。

わたしたち家族に向ける態度より、知り合ったばかりの上等兵に向ける態度の方が、どう見ても親しげだ。

お母様が眉を顰めたのは、彼の粗野な態度がお気に召さなかったから、に違いない。

まさか、身内よりも他人に打ち解けている兄の態度が気に障った、という訳じゃないわよね？

お母様の不快げな表情に気づいたからか、桜井さんの苛立たしげな佇まいに気づいたからか、桧垣上等兵は馴れ馴れしげな態度をひとまずしまい込んで、軍人らしい鯱張った挙措でわたしたちに敬礼した。

「風間大尉の命令により、皆さんをお迎えに上がりました！」

「ご苦労様。案内をお願いします」

「ハッ」

必要以上に張り切った声で口上を述べた上等兵に、少し辟易した顔で桜井さんが応えた。

桧垣上等兵にそれを気にした様子は全くなかった。

……本音を言えば、少しくらい気にして欲しかったのだけど、今

は基地に連れて行って貰う方が先だということくらい、わたしにも理解できた。

道路は避難する市民で溢れかえり、立ち往生した車のクラクションと人々の怒号で混沌の坩堝と化している――という光景は見られなかった。

島中がひっそりと息を潜め、道を行き交うのは暗い色調の軍用車輌ばかり。

敵襲警報中と言うよりも、戒厳令発令中みたいな雰囲気だ。

と言っても、わたしはどちらも映像記録でしか見たことはないから、本当のところは分からない。

国防軍の連絡車輌に乗ったわたしたちは、検問に止められることもなく、敵の攻撃に曝されることもなく、無事に基地へ到着した。

完全な奇襲だったにも関わらず、海軍と空軍はよく水際で敵を食い止めているようだ。

もっとも本島以外の状況は、国防軍の発表を信じる以外に知る術は無いのだけれど。

意外だったのは、基地に避難している民間人がわたしたちだけじゃなかったこと。

百人まではいないにしても、それに近い人数が逃げ込んでいるように見える。

この部屋にも、わたしたち以外に五人の民間人が地下シェルターへの案内を待っている。

余計なお世話とは思うけど、敵が攻めて来ているというのに、基地の中へこんなに大勢、無関係で役に立たない人間を招き入れて大丈夫なのかしら？

もしかしたら、わたしたちも――わたしも、戦わなければならなくなるかもしれない。

今日まで実戦と呼べる経験をしたことは無いけれど、戦闘魔法の技能は大人の魔法師にも劣らないというお墨付きを貰っている。

桜井さんのお墨付きだから、信頼性は十分にあるはずだ。
それでも不安を消し去る助けにはならず、わたしはそっと、隣の席を窺い見た。
隣の椅子には、兄が腰を下ろしている。
いつもなら私の後か脇に立っているのだけれど、今は目立たないように隣り合わせに座っていた。
兄の懐には、二丁拳銃ならぬ二機のＣＡＤが何時でも使用できる状態で隠されている。
この人も「実戦」と呼べるものは経験していないはずだけど、わたしと違って、殺し合いなら何度も経験している。
人を殺した回数も、一度や二度じゃない。
その場面をわたしが自分の眼で確かめた訳じゃないけれど、こんなことでわたしに嘘を吹き込むメリットはないから、間違いなく事実だろう。
その経験を裏付けるように、兄は落ち着き払っていた。
キョロキョロと目を動かすことも、ソワソワと身体を揺らすこともない。
兄を見ていると、少しだけ、不安が和らいだような気がする。
もう一度……そう思って、チラッと兄の横顔を窺い見た。
何故か、バッチリ、目が合ってしまった。
え？　えっ？　なに？　なんで？
「大丈夫だよ、深雪」
……っ！
三日前に約束したとおりに、あの人はわたしのことを「深雪」と呼んだ。
あの時とは違う、優しいふりじゃない、優しい声で。
「俺がついている」
……それ、反則……！

どんな顔をしていいのか分からない。
自分が今、どんな顔をしているのか分からない。
ええい！　こんなのは吊り橋効果よ！　ホラーハウスよ！　ストックホルムシンドローム……はチョッと違うか、とにかく、気の迷いよ！
よりにもよってこんな時に、実の妹をナンパするなんて不謹慎過ぎる！
本人にそんな気は全くない、というのが余計、癪に障るじゃない！
わたしは兄を睨み付けた。
すると兄が、いきなり椅子から立ち上がった。
えっ？　わたし、そんな怖い顔してた？
――でも事態は、わたしのそんな平和なボケを許さない、急展開を迎えようとしていた。わたしはすぐに、それを思い知ることになった。

4－（7）　譲れないもの（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

4－（7）　譲れないもの

いきなり立ち上がったのは兄だけじゃなかった。
一呼吸遅れて、桜井さんも椅子を蹴っていた。
わたしたちと同席している見も知らない人たちが、吃驚（びっくり）した顔で、少しおどおどした目つきで、あの人と桜井さんを見詰めている。
「達也君、これは……」
「桜井さんにも聞こえましたか」
「じゃあ、やっぱり銃声……！」
「それも拳銃ではなく、フルオートの、おそらくアサルトライフルです」
……えっ？　じゃあ、敵が攻めて来たっていうこと？
どうして？
ここは国防軍の基地の中じゃないの？
「状況は分かる？」
「いえ、ここからでは……この部屋の壁には、魔法を阻害する効果があるようです」
「そうね……どうやら、古式の結界術式が施されているようだわ。この部屋だけじゃなくて、この建物全体が魔法的な探査を阻害する術式に覆われているみたいね」
「部屋の中で魔法を使う分には問題ないようですが」
兄の言葉に、桜井さんが同意を示した。
わたしには、分からなかったのに……
「おい、き、君たちは魔法師なのか」
不意に、少し離れて座っていた男の人が兄と桜井さんに声を掛けてきた。
仕立ての良い服を着た、見るからに社会的地位のありそうな壮年の男性だ。
一塊になって座っているのは家族だろうか。

「そうですが？」
いきなり話し掛けられた訝しさの混じった声で、桜井さんが答える。するとその男の人は尊大な態度で、多分、大部分虚勢だと思うけど、こう続けた。
「だったら、何が起こっているのか見て来給え」
……何それ？
まるきり使用人扱いの物言いじゃない。
感じワル……！
「……私たちは基地関係者ではありませんが」
桜井さんもムッとした口調で言い返した。
必要とあればいくらでも猫を被れるはずだけど、縁もゆかりも、ついでに利害関係もない相手に、そんな義理は無い、と思ったのだろう。
しかし、桜井さんの当然の主張は、この男性には通じなかった。
「それがどうしたというのだ。君たちは魔法師なのだろう」
「ですから私たちは」
この男の人は、桜井さんの言葉を聞こうともしていなかった。
「ならば人間に奉仕するのは当然の義務ではないか」
……っ！？
まさか、まだ、こんなことを平気で口にする人がいるなんて……
それも、魔法師に面と向かって……！
「本気で仰っているんですか？」
桜井さんの声も殺気立っている。目つきはもっときついものになっているはずだ。
流石にその男性も怯んだようだけど、彼の暴言は止まらなかった。
「そ、そもそも魔法師は、人間に奉仕するために作られた“もの”だろう。だったら軍属かどうかなんて、関係ないはずだ」
怒りとショックが強すぎて、言葉にならなかった。
この男性が言ったことは、口にしてはならないことだった。
だけど間違いなく事実の一端であり、魔法師でない人々が今でも

少なからず思っていることだった。
「なるほど、我々は作られた存在かもしれませんが、」
わたしの代わりに反論してくれたのは、それまで桜井さんに男性の相手を任せていた兄だった。
怒りも動揺も感じられない、シニカルで、嘲りを隠さぬ口調で。
「貴方に奉仕する義務などありませんね」
「なっ――！」
「魔法師は人類社会の公益と秩序に奉仕する存在なのであって、見も知らぬ一個人から奉仕を求められる謂われはありません」
人類社会の公益と秩序に奉仕する、というのは『国際魔法協会憲章』の一節で、魔法師以外にも良く知られているフレーズだ。当然、この男性も知っていたのだろう。
「こっ、子供の癖に生意気な！」
だからこその、この反応。
その男性は、赤い顔でブルブル震えながら兄を怒鳴りつけた。
わたしが見上げた兄の瞳は、侮蔑と憐れみに染まっていた。
「まったく……いい大人が、子供の前で恥ずかしくないんですか？」
同じ「子供」という言葉を使っていても、意味するところは全く違う。
名前も知らない男の人は、ハッとなって家族の方へと振り返った。
彼の家族が彼のことを見上げていた。
彼の子供たちは、子供らしい潔癖性を以て、軽蔑の眼差しで彼を見ていた。
動揺する男性の背中へ、兄が追い打ちを掛ける。
「それと、この国では、魔法師の出自の八割以上が血統交配と潜在能力開発型です。
部分的な処置を含めたとしても、生物学的に『作られた』魔法師は全体の二割にもなりません」
「達也」
この場を収拾したのは、お母様だった。もっとも、お母様にはそ

のような意図など、おそらく無かったと思うけど。
お母様に呼ばれて、兄はワナワナと震える男の人の背中から視線を外した。
「何でしょうか」
「外の様子を見て来て」
いつものように、お母様は冷淡とも聞こえる端的な指示を出した。
しかし兄は珍しく、それに難色を示した。
「……しかし状況が分からぬ以上、この場に危害が及ぶ可能性を無視できません。
今の自分の技能では、離れた場所から深雪を護ることは」
「深雪？」
兄の反論を、お母様は冷たい声で遮った。
冷たい眼差しのまま、目をスッと細める。
「達也、身分を弁えなさい？」
口調だけは優しく、ゾクッと背筋が震えるような声音に、わたしは心の中で異を唱えることも出来ない。
「――失礼しました」
兄は一言謝罪して、それ以上、反論しなかった。
「……達也君、この場は私が引き受けます」
ギスギスした空気を取りなすように、桜井さんが横から口を挿んだ。
お母様は興味を失ったお顔で、あの人から目線を外した。
「分かりました。
様子を見て来ます」
兄はお母様の横顔に一礼して、部屋を出て行った。
怯えた目を向けている、あの男性の家族には、兄もお母様も、一瞥もくれなかった。

◇　◇　◇

外から爆竹を鳴らしたような音が聞こえる。
もちろん、お祭りをやっているとかそういうことではあり得なくて。
銃撃の音は、今やわたしの耳でも聞き取れるようになっていた。
そして、近づいて来たのは、銃声だけじゃなかった。
この部屋にいくつもの足音が近づいて、扉の前で止まった。
桜井さんがわたしとお母様の前に立った。
ＣＡＤのブレスレットには、起動式を展開するのに十分なサイオンがチャージされている。こういう風に即時作動が可能な状態を長時間維持するのは難しいのだけど、桜井さんのテクニックは流石だった。
わたしからはその背中しか見えないけれど、多分彼女は、鋭くドアを睨み付けていることだろう。
「失礼します！　空挺第二中隊の金城一等兵であります！」
警戒を保ちつつも、桜井さんの緊張が少し弛んだのが分かる。わたしもドアの外から掛けられた声を聞いてホッとしていた。
どうやら基地の兵隊さんが迎えに来てくれたみたいだ。
開かれたドアの向こうにいたのは、四人の若い兵隊さんだった。
全員が「レフト・ブラッド」の二世のようだけど、特に気にはならない。この基地は、そういう土地柄なのだろう。
熱を帯びたマシンガン（としか、わたしには見分けが付かない）を抱えているのは、敵と銃火を交えながら駆けつけてくれたからだろうか。
「皆さんを地下シェルターにご案内します。ついてきて下さい」
予想通りの台詞だったけど、わたしは躊躇わずにいられなかった。
今この部屋を出て行ったら、兄とはぐれてしまう。
「すみません、連れが一人、外の様子を見に行っておりまして」
わたしがその事を言う前に、桜井さんが金城一等兵にそう告げてくれた。
案の定、一等兵は顔を顰めて難色を示した。

「しかし既に敵の一部が基地の奥深くに侵入しております。ここに居るのは危険です」
これもある程度、予想通りの答え。
「では、あちらの方々だけ先にお連れ下さいな」
しかし、お母様のご発言は、まるで予想外の、意外なものだった。
「息子を見捨てて行く訳には参りませんので」
わたしは桜井さんと、無言で目を見合わせた。
考えてみれば当然の言い分ではあるが、どうしても違和感が拭い去れない。
「しかし……」
「キミ、金城君と言ったか。
あちらはああ仰っているのだ、私たちだけでも先に案内し給え」
こちらの様子を窺っていたあの男性に詰め寄られて、四人の兵隊さんたちは険しい表情で顔を見合わせ小声で相談し始めた。
「……達也君でしたら、風間大尉に頼めば合流するのも難しくないと思いますが？」
その隙に、桜井さんが小声でお母様に、こう訊ねていた。
「別に、達也のことを心配しているのではないわ。あれは建前よ」
声を潜めて返された、お母様の回答はこれだった。
わたしはガクガクと震えだした膝に、必死で力を込めた。
お母様は何故、実の息子であるあの人に対して、ここまで冷淡になれるの……？
「では？」
「勘よ」
「勘、ですか？」
「ええ。この人たちを信用すべきではないという直感ね」
たちまち、桜井さんが最高度の緊張を取り戻した。
わたしも、膝の震えを忘れた。
他の人ならいざ知らず、かつて「忘却（レテ）の川の支配者（ミストレス）」の異名で畏怖されたお母様の「直感」だ。

お母様の得意魔法は知覚系や予知ではなく、精神干渉の魔法だけど、「精神」に関わる魔法の使い手は「アカシック・レコード」と密接にリンクしているという仮説もあるくらい、高い直感的洞察力を有している傾向がある。……わたしのような例外もいるけれど。

四人が相談を終えたのは、ちょうどその時だった。

「申し訳ありませんが、やはりこの部屋に皆さんを残しておく訳には参りません。

お連れの方は責任を持って我々がご案内しますので、ご一緒について来て下さい」

言葉遣いはさっきと変わらない。

だけど、脅しつけるような態度になっている、と感じるのは、わたしの先入観の所為？

「ディック！」

新たな登場人物が、この一幕に急展開をもたらした。

金城一等兵が、声の主、桧垣上等兵に対していきなり発砲したのだ。

廊下側の壁に窓は無いから当たったかどうかは見えないけれど、確かに今の声は桧垣上等兵のもので、金城一等兵は声のした方へ向けてマシンガンを発射した。

悲鳴を上げたのは、あの男性の家族。

金城一等兵の仲間が、室内へ銃口を向ける。

桜井さんが起動式を展開した、けど、頭の中でガラスを引っ掻いたような「騒音」が魔法式の構築を妨害する。

これは、サイオン波？　キャスト・ジャミング！？

耳を押さえて目を向けると、四人の内の一人が真鍮色の指輪をはめていた。

こちらでは、お母様が胸を抑えて蹲っている！

拙い……！

お母様は元々鋭敏過ぎるサイオン感受性を持っている。それに加え、お若い時分の無理が祟って、サイオン波に対する抵抗力が最近、

頓(とみ)に低下している。
　キャスト・ジャミングのサイオン波が、お身体にまで悪影響を与えているんだわ。
　キャスト・ジャミングを、止めなきゃ！
「ディック！　アル！　マーク！　ベン！　何故だ！？」
　耳を押さえた掌の向こう側から、桧垣上等兵の怒鳴り声が聞こえる。
　よかった、弾は当たっていなかったのね……
「何故、軍を裏切った！」
「ジョー、お前こそ何故、日本に義理立てする！」
　一発ずつ発砲する合間に――マシンガンでも一発ずつ撃てるのね、などと、わたしはどうでもいい感想を抱いた――金城一等兵が怒鳴り返す。
「狂ったか、ディック！　日本は俺達の祖国じゃないか！」
「日本が俺達をどう扱った！
　こうして軍に志願して、日本の為に働いても、結局俺達は『レフト・ブラッド』じゃないか！
　俺達は、いつまで経っても余所者扱いだ！」
「違う！　ディック、それはお前の思い込みだ！
　俺達の片親は紛れもなく余所者だったんだ。何代も前からここで暮らしている連中にすれば、少しくらい余所者扱いされて当たり前だ！
　それでも軍は！　部隊は！　上官も同僚も皆、俺達を戦友として遇してくれる！　仲間として受け容れてくれている！」
「ジョー、それはお前が魔法師だからだ！
　お前には魔法師としての利用価値があるから、軍の連中はお前に良い顔を見せる！」
「ディック、お前がそんなことを言うのかっ！？
　レフト・ブラッドだから余所者扱いされる、と憤るお前が、俺が魔法師だから、俺はお前たちと別の存在だと言うのか！？　俺は仲

間でないと言うのか、ディック！」
銃撃の音が途切れた。
そして、キャスト・ジャミングのサイオン波が弱まった。
チャンスだわ……！
この不安定さから見て、アンティナイトを使用しているのは魔法演算領域を持たない非魔法師。
少しくらいサイオンの保有量が多いからって、それを制御することも出来ない一般人の使うキャスト・ジャミングで、このわたしを、四葉の次期当主候補を、何時までも止められると思ったら大間違いよ！
ＣＡＤは使わない。起動する時間が勿体ない。
ならば、使用する魔法はあれしかない。
わたしがお母様から受け継いだ精神干渉魔法。
お母様の魔法、精神構造干渉とは違うけれど、お母様と同じ、相手の精神に作用する魔法。
それは、相手の精神を凍りつかせる魔法。
無関係の人を巻き込まないように、アンティナイトをはめた、アイツだけを狙って――
わたしは、精神凍結魔法「コキュートス」を発動した。
キャスト・ジャミングが止む。
相手が「静止」したのが分かる。
人間を「止めて」しまったのは、これが三人目。
殺した訳ではないけれど、融けることのない凍結は、再び動き出すことのない静止は、死と同じ。
わたしは罪悪感に耐える為、奥歯をギュッと噛み締めた。
その所為で、貴重な時間が無為に流れた。
それは、わたしの甘さ。
だからこれは、当然の報い。

相手は一人じゃなかったのに。
銃口はこちらへ向けられていたのに。
相手が引き金を引くのと、桜井さんの魔法が発動したのは、同時だった。
桜井さんの編み上げた魔法式は効果を現す前に霧散した。
マシンガンの一掃射が、わたしと、お母様と、桜井さんの身体に穴を穿った。

撃たれた所が、
痛いよりも、
熱い。
身体が、
寒い。

流れ出す血と一緒に、命が流れ出して行くのが分かる。
わたし、死んじゃうんだ……
死ぬ時はもっと色々な後悔とか執着とか感じるものだと思っていたけど、意外に何も考えないものね。
唯一つ心残りがあるとすれば、あの人に、もっときちんと謝りたかった。
わたしがいなければ、あの人はもっと普通でいられたはず。
自由でいられたはず。
ゴメンなさい、兄さん。
本当にゴメンなさい、お兄さ……

「深雪っ！」

空耳だと思った。
兄のことを考えていたから、自分に都合の良い兄の声を頭の中で作り上げてしまったのだと、そう思った。

だって、兄が剥き出しの感情で、こんなに必死な声で、わたしの名を呼ぶはずがないと。
わたしを、引き留めるはずがない、と。
苦労して開いた眼(まなこ)の先には、雲に覆われた空、消えてしまった壁、いなくなった反乱兵、そして、左手をわたしに向けて差し伸べる兄の姿。

圧倒的な「何か」が、兄の左手から放たれた。

それは、未練がましく死にかけの身体を覆う、わたしの情報強化の防壁を易々と突き抜けて、わたしの身体に流れ込んだ。
兄の「心」が、わたしの身体を包み込んだ。
だって、それ以外に表現のしようがない。
わたしの身体の、全てを読み取って、全てを作りかえる。
「わたし」が、作り直されて行く。
兄の意志で、兄の力で。
それは、魔法と言うには、あまりに強大で、あまりに精緻で、大胆で、繊細で。
ううん、きっと、これこそが「魔法」。
これこそが真に、魔法の名に値するもの。
死神が舌打ちをして遠離(とおざか)って行くのが見えた。
あっ、あっかんべぇ、をしている。
想像と違って、随分お茶目なのね、死神って。
そんな幻覚に、わたしは思わず、クスッと笑い声を溢してしまった。
血の味が喉に迫り上がってくるようなことは、全くなかった。
「深雪、大丈夫か!?」
クリアになった視界一杯に、心配そうな兄の顔。
この人の顔に、こんな生の感情表現を見るのは初めてだった。
「お兄様……」

その言葉は、何故かすんなり、わたしの唇を通過した。
噛むこともなければ、引っかかりを感じることもなかった。
「良かった……！」
わたしは、動揺しても良かった。
もっと慌てふためいても良かった。
だって兄が、わたしの身体をきつく、しっかりと、抱き締めているのだから。
でもわたしは、これが当たり前なのだと、「お兄様」の腕の中がわたしの居るべき場所なのだと、
そんな、図々しいかもしれないことを感じていた。
だからわたしは、兄が抱擁を解いた時、反射的に、兄のジャケットの裾を掴んでしまった。
兄は丸く見開かれた目でわたしを見返して、目を細めて、わたしの頭をクシャッ、と撫でた。
「あっ……」
思わず漏れた声を、どう解釈したのか。
兄は少し決まり悪げな笑みを浮かべ、照れくさそうに顔を逸らし――
表情を引き締めた。
無表情、と言っても感情が欠落しているそれではなく、精神を集中しきっているが故の無表情。
その横顔は、何かを必死に思い出しているかのよう。
兄の視線の先には、今にも命の灯火が消えそうになっている、お母様と桜井さん。
「お兄様っ！」
わたしの呼び掛けには答えず、多分、そんな余裕も無いくらいに精神を集中したまま、兄は左手でＣＡＤを抜いた。
信じられないくらい大量のサイオンが兄の体内で活性化しているのが分かる。
膨大なデータを格納することが可能なサイオン情報体の器が、兄

によって組み立てられている。

兄の指が、ＣＡＤの引き金を引いた。

お母様の身体が、兄の左手に吸い込まれた、ように見えた。

無論それは、錯覚だ。

何をどうやったのかは分からないが、何が起こったのかは分かる。

自分がされたことだからこそ、正確に推測することが出来る。

兄は、お母様の身体を構成する全ての情報を自分の魔法演算領域に複写して、それを加工した情報体でお母様の身体情報を上書きしたのだ。

銃で撃たれた傷が消えた。

服を濡らし床に飛び散った血の跡が消えた。

前のめりに倒れたお母様の身体を、わたしは慌てて駆け寄り抱き起こした。

少し苦しげな、だけれども、確かな呼吸。

撃たれる前と同じ……いえ、これは、撃たれたことが、無かったことになっている？

兄は左手のＣＡＤを桜井さんに向けた。

お母様の時とは比べものにならないくらい、速やかでスムーズにサイオン情報体の準備が完了する。

明らかに、慣れてきている……？

たった三度の経験で、兄はこの、他者の人体を完全復元するという超高等魔法を完成させつつある！

畏怖に震えると同時に、わたしの心はそれを当たり前のことと見做していた。

だって、この人は、わたしのお兄様だもの。

誇らしさで胸がいっぱいになった。

何も知らなかった自分の愚かしさは、もう気にならなくなっていた。

◇　◇　◇　◇

桜井さんは「信じられない」という面持ちで、自分の身体を見下ろしている。

お母様はまだ意識が戻らないけど、呼吸は安定している。これは気を失っているのではなく眠っているだけだから心配は要らない、と駆けつけた軍医の方に言われて、わたしは胸を撫で下ろした。

「すまない。叛逆者を出してしまったことは、完全にこちらの落ち度だ。

何をしても罪滅ぼしにはならないだろうが、望むことがあれば何なりと言ってくれ。

国防軍として、出来うる限りの便宜を図らせて貰う」

そしてお兄様は、わたしの隣で、風間大尉と向かい合っていた。頭を下げる風間大尉に、「頭を上げてください」とお兄様が告げる。

お兄様があの場面にギリギリで駆けつけることが出来たのは、風間大尉と真田中尉が力を貸してくれたお陰らしい。またあの反乱兵の人たちは、わたしたちを攫って人質にするつもりだったみたいで（あの男の人は軍需企業の重役さんだったそうだ）、結果的に見れば、桧垣上等兵が駆けつけたお陰でそういう境遇に陥るのも免れたことになる。

でも、お兄様のあの魔法がなければ、お母様も桜井さんも、そしてわたしも、間違いなく死んでいたのだ。

おいそれと不問に付すことは、心情的に出来なかった。

「ではまず、正確な状況を教えてください」

もっとも、わたしから何かを要求するつもりはなかった。

申し訳ないけれども、桜井さんにも口出しを許すつもりはなかっ

た。
　例えお母様が目を覚まされていたとしても、この場では沈黙を守っていただくつもりだった。
　これは、お兄様だけの権利なのだから。
「敵を水際で食い止めているというのは、嘘ですね？」
「そうだ。名護市北西の海岸に、敵の潜水揚陸部隊が既に上陸を果たしている」
　……じゃあ、あの時の潜水艦は、その下調べだったということ？
「慶良間諸島近海も、敵に制海権を握られている。
　那覇から名護に掛けて、敵と内通したゲリラの活動で所々において、兵員移動が妨害を受けた」
　……っ！　想像以上に酷い状態だわ。
「だが案ずるには及ばない。
　ゲリラについては、元々それ程の数ではなかった。
　既に八割方制圧を完了している。
　軍内部の叛逆者も、間もなく片付くだろう」
「上陸地点の確保という目的を既に果たしているのですから、最早用済みなのでしょう。
　使い捨てのコマをいくら失ったところで、敵にとっては痛くも痒くもないと思いますが」
　お兄様の淡々とした指摘に、風間大尉の顔が苦虫を噛み潰したように歪んだ。
「では次に、母と妹と桜井さんを安全な場所に保護してください。
　出来れば、シェルターよりも安全度の高い場所に」
「……防空指令室に保護しよう。あそこの装甲は、シェルターの二倍の強度を持つ」
　……呆れた。民間人が避難するシェルターよりも、軍人が立てこもる指令室の方が守りが堅いなんて。
　でも、軍の基地なんて、そんなものなのかもしれない。
「では最後に、アーマースーツと歩兵装備一式を貸してください。

貸す、といっても、消耗品はお返しできませんが」
「……何故だ？」
この要求には、わたしもそう思った。
何故なのですか、お兄様。
それに先程、保護対象にご自分を含めなかったのは、何故なのですか？
わたしはお兄様の真意を知ろうとして、その双眸を覗き込んで、息を呑んだ。

お兄様の瞳の中で、
激怒と言うのも生温い、
蒼白の業火が荒れ狂っていた。

「彼らは、深雪を手に掛けました。
その報いを受けさせなければなりません」
その声を聞いた全員が血の気を失う中で、一人、変わらぬ顔色を保っていた風間大尉は、流石に剛胆と言うべきなのだろう。
「一人で行くつもりか？」
「自分が為そうとしていることは、軍事行動ではありません。
個人的な報復です」
「それでも別に構わないのだがな。
感情と無縁の戦闘など、人間ならばありえない。
復讐心を以て戦うとしても、それが制御されていれば問題はない」
お兄様と風間大尉の視線が交差した。
いえ、二人は睨み合っていた。
「非戦闘員や投降者の虐殺など認める訳には行かないが、そんなつもりはないのだろう？」
「投降の暇（いとま）など、与えるつもりはありません」
「ならば良し。固（もと）より今回の我々の任務は侵攻軍の撃退、若しくは殲滅。

敵に降伏を勧告する必要もない。
司波達也君。
君を、我々の戦列に加えよう」
「軍の指揮に従うつもりはありません。
自分が護るべきものと、あなた方が護るべきものは、違うのですから。
ですが、侵攻軍という敵が同じで、殲滅という目的が同じであるなら、肩を並べて戦いましょう」
「よろしい。
真田、アーマースーツと白兵戦装備をお貸ししろ！
空挺隊は十分後に出撃する！」
「桜井さん、母と妹を頼みます」
お兄様は立ちつくす桜井さんにそう告げ、彼女の返事を待たず、真田中尉の後に続いた。
その時、わたしの方を見て微かに微笑んだのは、決して、わたしの錯覚ではなかった。

4－（8）　魔神が生まれた日（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

4－（8）　魔神が生まれた日

「あの、よろしいのですか？」
お兄様の背中を見送ったわたしに、桜井さんが躊躇いがちに、そう話しかけて来た。
「何がでしょうか？」
どうも、わたしの思考力は居眠り中（サボタージュ）なのか脱走中（エスケープ）なのか、さっきから思うように働いてくれない。
「いくら達也君の腕が立つといっても、戦争に行くなんて……それも、最前列に飛び込んでいくなんて、危険過ぎはしないでしょうか」
「っ！」
囁くような桜井さんの声は、耳元で大音量の目覚まし時計を鳴らされたように、わたしには聞こえた。
そうよ！　何をわたしは、平然と見送っているの？　お兄様が戦争の真っ只中に飛び込んで行こうとされているのに！
「深雪さん！？」
走り出したわたしの背中を、桜井さんの声が叩いた。
追いかけて来たのは声だけだ。
お母様を放っておく訳には行かないから。
ごめんなさい。
わたしは心の中で彼女に謝った。
お母様を任せきりにしてしまうのは心苦しかったけど、今はそれより、お兄様を止めなければ！
わたしはその一心で足を動かした。
幸い、お兄様はまだそんなに遠くまで行ってはおらず、わたしは道に迷うことも無くお兄様に追いついた。
「お兄様！」
もしかしたら、振り向いてくれないかもしれない。そんな虞（おそれ）が意識を過ぎったけど、それはいくら何でも杞憂だった。

お兄様は先行する真田中尉に何か小さく一声かけて、足を止め振り向いた。
中尉さんは少し進んだところで立ち止まっている。多分、わたしたちに気を遣ってくれたのだと思う。
「深雪、どうした？」
当たり前の口調で、ごく自然に「深雪」と呼ばれたことに、何だかジーンとこみ上げてくるものがあったけど、今は浸っている場合じゃない。
「お兄様、あの、」
行かないでください、と言い掛けて、わたしはいきなり、意識してはならないことを意識してしまった。
これではまるで、「ラブロマンス映画（小説または漫画でも可）」にありがちな、恋人を引き止めるヒロインの台詞みたいだ、と。
それも「禁断の兄妹愛」ものの。
「深雪？」
それこそいきなり、絶句してしまったわたしを、お兄様は訝しげに見ている。
多分わたしの頬は、熟したリンゴみたいになっていることだろう。
「……い、行かないでください」
それでも、言わない訳にはいかない。引き止めない訳にはいかない。
「敵の軍隊と戦うなんて、危ないことはしないでください。お兄様がそんな危険を冒す必要は無いと思います」
言えた……！
わたしは、「これで大丈夫」という達成感に包まれていた。
お兄様がわたしの言葉に首を振るなんて――首を横に振るなんて、わたしは全く予想していなかった。
「確かに、必要は無い。
俺は、必要だから行くんじゃなくて、そうしたいから戦いに行くんだよ、深雪」

だから、お兄様のこの回答は、ショックだった。
拒否されたこともショックだったし、まるで人殺しを望んでいるみたいな言い方もショックだった。
だけど、わたしの身体はお兄様から遠ざかろうとはせずに、わたしの手はお兄様の服を掴んでいた。
上着を掴んだわたしの手を、お兄様は不器用な笑みで見下ろして、わたしの手に自分の手を重ねた。
「さっきも言ったとおり俺は、お前を傷つけられた報復に行くんだ。お前の為じゃなくて、自分の感情の為に。そうしなければ、俺の気が済まないから。俺にとって、本当に大切だと思えるものは、深雪、お前だけだから」
そう言ってお兄様はわたしの手をそっと外し、「我侭な兄貴でごめんな」と笑った。
わたしは多分、顔中が、完熟トマトの様に真っ赤になっていただろう。
でもすぐに、お兄様の言葉に違和感を覚えて、眉を顰めた。
「大切だと、思える……？」
お兄様は今、「大切なもの」じゃなくて、「大切だと思えるもの」と仰ったわよね？
単なる言い回しの違いだけで、特に意味は無いのかもしれないけど……何故か、気になる。
無意識に口を吐いて出た、質問にもなっていないわたしの呟きに、お兄様は「参ったな」と言いたげな苦笑を浮かべた。
その表情は、笑っていながら、泣いているようだった。
涙なんて浮かべていないし、そもそもお兄様の泣き顔なんてわたしは一度も見たことは無いけど、わたしは理由も無く、これがお兄様にとって悲しい話題なのだと思った。
「……っ、申し訳ありません！」
だから、わたしは謝った。わたしがお兄様を悲しませるなんて、

もうこれ以上、あってはならなかったのに……そう思って、勢い良く頭を下げた。
わたしの長い髪をかき分けて、わたしの頬に、華奢な少年の手が滑り込んできた。
華奢だけどそれでも、わたしの手よりずっと大きくて、しっかりしている、お兄様の手が。
お兄様の手の動きに合わせて、わたしは顔を上げた。
無理矢理な力は無かったけど、逆らうことなど出来なかった。
「いや……お前もそろそろ、知っておいても良い頃だ。
知らずに済むなら、ずっと知らないままにしておいてやりたかったけど……お前が母さんの娘で、あの人の姪である限り、そういう訳にも行かないんだろうな……」
お兄様の言葉はわたしに向けられたものだったけど、わたしに話しかけているものではなく、ご自分に言い聞かせているもののように思われた。
「お兄様？」
「今は時間が無いし、俺から話して聞かせるべきことでもないと思う。
だから深雪、母さんから教えて貰いなさい。
今、お前が疑問に思ったことの、答えを」
「お母様に……？」
「深雪、心配するな。
俺が本当に大切だと思えるものはお前だけだ。だから俺は、これからもお前のことを護り続けるし、その為に無傷で帰って来る。
大丈夫。俺を本当の意味で傷つけられるものなど存在しない」
お兄様はわたしの頬に置いた手を頭に移して、わたしの頭をクシャクシャ、と撫でた。
少し乱暴にかき乱された髪に手を遣るわたしに笑いかけて、お兄様は小走りに真田中尉の方へ駆けていった。
そのまま、今度こそ、お兄様は戦場へと出向いて行った。

◇　◇　◇　◇

防空指令室、と言われても、それが何処にあるのかなんて、わたしは当然知らない訳で。

外壁も内壁も無くなってしまったあの部屋に戻る以外、わたしには選択肢がなかった。

そういえば、あの部屋の壁、何故消えてしまったのかしら？

桜井さんとお兄様のお話では魔法を阻害する結界術式が組み込まれていたということだから、魔法で破壊された可能性は低いと思うけど、あんなに綺麗な断面は逆に魔法じゃないと難しい気もする。

置いていかれることはない、とは思いつつ、やっぱり少し不安になって、わたしは小走りでさっきまで居た部屋へ戻った。

あっ……

「お待たせして申し訳ございません」

出迎えてくれたお母様に、わたしはまず、謝った。

いくら体力の回復に必要だからといって、まさか担架で運んでなど行けないのだし、何らかの覚醒措置がとられるのは考えてみれば当然だった。

わたしは勝手な判断でお母様を放置した形になったことと、その結果お母様たちを待たせてしまうことになったことに対して、お怒りを免れる為ではなく、本当に申し訳なく感じて頭を下げた。

「謝る必要はありませんよ、深雪さん。

勝手な真似をした達也を連れ戻しに行ってくれたのでしょう？」

にこやかに答えるお母様。

うっ……かなりお怒りになってる……

「それで、達也は何処へ？　姿が見えないようだけど」

「あの、それが……お兄様は軍と協力して敵の撃退に当たられると」

「お兄様？」

訝しげにお母様が眉を顰めた。

反射的に「拙かったかな」と考えたけど、言い直そうとは思わなかった。
お母様にも咎められなかった。
咎める代わりに、「はぁ……」とため息を吐かれた。
「そんな勝手な真似をするなんて……やはり、不良品ね」
突き放すような、ではなく、突き放した、台詞。
諦め、ではなく、見切り。
それが誰のことかなんて、訊くまでもない。
義憤に駆られるよりも、ゾッとした。
自分の母親が、実の子供に対して、ここまで淡泊になれるということに。
「まあ、いいわ。
今回はそれなりに働いてくれたことだし、好きにさせましょう……お待たせしました。ご案内くださいな」
お母様は案内の為に待っていた兵隊さんに声をかけた。

――「それなり」なんかじゃない。
――わたしが生きているのも、お母様が助かったのも、お兄様のお蔭。

なのにわたしは、「それなりに」という評価に、異を唱えることも出来なかった。

◇　◇　◇

防空司令室は装甲扉を五枚、通り抜けた先にあった。
窓がない、どころか直接外に面している壁もない、学校の教室四個分くらいのフロアで、中は三十人前後のオペレーターが三列に並んだコンソールに向かって座っている小ホールと、壁からホールの大型スクリーンに向かって突き出した八つの中二階個室からなって

いた。
わたしたちは前面がガラス張り（透明な樹脂かもしれない）になった個室の一つに通された。
「盗聴器や監視カメラの類は見当たりません。どうやら、高級士官や防衛省幹部の視察用の部屋みたいですね」
部屋の中を調べていた桜井さんがお母様にそう告げた。
どうやって調べているのは知らないけれど、彼女の調査結果は信頼できる。
この部屋で内緒の話をしても大丈夫ということね。
「それから前面のガラスは、ただのガラスじゃありませんね。警視庁にも同じものがありました。
この指令室でモニターしている任意の映像を映し出すことが出来るものです」
そう言って桜井さんは、卓上モニターを見ながらコンソールを操作し始めた。
「お母様、一つ、お教えいただきたいことがあるのですが」
その間に、わたしは思い切って、さっきのことをお母様に訊ねてみることにした。
「お兄様が先程、本当に大切だと“思える”ものはわたしだけだ、と仰ったのですが……何故『大切なもの』ではなく、『大切だと思えるもの』なのか、理由をお訊きしたところ、お母様に教えていただくように、と……」
「そう。達也がそんなことを」
わたしの質問を、眉を顰めながら聞いていたお母様が、つまらなさそうにそう呟いた。
「そろそろ教えてあげても良い頃かしらね」
そして、お兄様と同じようなことを仰った。そこに何か、重大な秘密を感じて、わたしは緊張に身を強張らせた。
「でも、その前に……深雪さん、達也のことを『お兄様』と呼ぶのはお止めなさい。

他人の耳目がある場所では仕方のない部分もあるから構わないけど、四葉の者だけしかいない場で達也を兄として扱うべきではないわ。

貴女は真夜の跡を継いで四葉の当主になるのだから、あのような出来損ないを兄と慕い依存しているなどと見られるのは、貴女にとって大きなマイナス点となりかねない」

「そんな言い方……！」

わたしは思わず、遠慮を忘れて、お母様に食って掛かっていた。

緊張して、真剣に耳を傾けていた分、いくらお母様でも聞き流すことが出来なかった。

「実の子に対して、出来損ないなんて！」

「私（わたくし）も残念だとは思うのだけど、事実だから仕方がないわ」

「そんなことありません！　お兄様はそのお力で、わたしを助けてくださいました！」

「さっきのこと？　そうね、あの程度のことはやって見せてくれないと……あの子は、あれしか出来ないのだから」

わたしの精一杯の反論に、お母様は今まで聞いたこともないくらいの、冷淡な声で答えた。

それは、すっかり諦めきっているような、冷淡さだった。

「達也が貴女に話して聞かせるべきだと言ったのなら、私は別に構いません。

そうね、何から話してあげましょうか……」

お母様が思案されている最中、不意に、壁一杯の窓は映し出す風景を変えた。

オペレーターが忙しく立ち回る指令室が、空から地上を見下ろす映像へ。

そこに映っていたのは、空から降下したばかりのお兄様だった。

わたしはそれを映し出してくれたのであろう、桜井さんに目を向けた。

桜井さんは無言でわたしたちを――わたしとお母様を見ていた。

彼女に口を挿むつもりが無いのは、訊いてみるまでもなく明らかだった。

彼女が、わたしの知らない多くのことを知っている、ということも。

――お母様は、お兄様の姿を映し出したスクリーンを、見ようともしなかった。

「達也は、魔法師としては、欠陥品として生まれました。

あの子をそういう風にしか産んであげられなかったことには責任を感じないでもないけど、達也が魔法師としてどうにもならない欠陥を抱えているという事実は事実。

達也は生まれつき、二種類の“魔法”しか使えません。

情報体を分解すること、情報体を再構成すること。この二つの概念の範疇でなら、様々な技術を編み出したり使い分けたりすることが出来るみたいですけど、達也に出来るのは何処まで行ってもこの二つだけで、魔法師の本領たる情報体を改変することは出来ないのですよ。

魔法とは、情報体を改変し、事象を改変する技術。それがどんな些細な変化であっても、何かを別のものに変えるのが魔法。でも達也にはそれが出来ない。あの子に出来るのは、情報体をバラバラに分解することと、情報体を元の形に作り直すことだけ。それは、本来の意味の魔法ではないわ。情報体を別のものに変化させるという、本当の意味での魔法を使う才能を持たずに生まれたあの子は、魔法師として紛れもなく欠陥品です。

まあ、その再構成の力で私たちは助かったのだけど、あの力は厳密に言えば“魔法”ではありません」

反論の言葉は、思いつかなかった。

ただ、わたしは思った。

あれが魔法でないのなら、あの力は、何と呼ぶべきなのだろう。

あれが「魔法」以外の名で呼ばれるべきものならば、それは「奇跡」に他ならないのではないのだろうか？

「でも、わたしたち四葉は十師族に名を連ねる魔法師で、魔法師でなければ四葉の人間ではいられない。
魔法が使えないあの子は、四葉の人間としては生きられない。
だから私たちは、私と真夜は、七年前、あの子にとある手術を施すことにしました。
――もっとも、あの実験の動機はそれだけでも無かったのだけど……」
実験？
その単語は、わたしの耳の中で、不吉に響いた。
「人造魔法師計画。魔法師ではない人間の意識領域に、人工の魔法演算領域を植え付けて魔法師の能力を与えるプロジェクト。
その精神改造手術を達也に行った結果、あの子の感情に欠落が生じてしまったのです。
いえ、感情と言うより衝動と言った方が適切かしら。
強い怒り、深い悲しみ、激しい嫉妬、怨恨、憎悪、過剰な食欲、行き過ぎた性欲、盲目の恋愛感情。そういう『我を忘れる』ような衝動を、一つだけの例外を除いて失ってしまった代わりに、達也は魔法を操る力を得ました。
ただ残念ながら、人工魔法演算領域の性能は先天的な魔法演算領域の性能に著しく劣っていて、結局ガーディアンとしてしか使い物になりませんでしたが」
まさか、と思った。
そんなはずはない、と思った。
「その『手術』を……お母様が為さったのですか？」
そう思いながら、問い返さずにはいられなかった。
「窓」には、体格に勝る大人たちに囲まれたお兄様が、敵の上陸部隊と接触した様子が映っていた。
「私以外には出来ないでしょう？」
否定して欲しい、というわたしの願いは、叶わなかった。
分かっていたことだ。

魔法演算領域は、大脳にそのような器官があるわけでは決してなく、つまるところ精神の機能の一つ。
人工の魔法演算領域を付加するということは、精神の構造を改変するということ。
それは、お母様だけの魔法、『精神構造干渉』を使わなければ不可能なこと……
「……何故、そんなことを」
「理由は既に説明しました。
それより、貴女が知りたがっていたことに答えましょう」

――ああ、そうなのですか……

わたしにも、解ってしまった。
気づいてしまった。
その実験で感情の一部を失ってしまったのが、お兄様だけではないということに。
それが魔法の副作用か、それとも罪悪感やもっと別の精神作用によって引き起こされたものなのかは分からないけれど、

わたしは初めて、「魔法」に恐怖を覚えた。
人の心をこんな風に、残酷に変えてしまう「魔法」に。

スクリーンの中では、お兄様が大型拳銃そっくりのＣＡＤを敵兵に向けている。
お兄様の視線の先で、敵兵が次々に塵と化して行く。
「達也が失わなかった一つだけの例外……それが、答えです。
あの子の中に残った唯一つの衝動は、兄妹愛。
妹を、つまり貴女を愛し、護ろうとする感情。
それだけがあの子に残された、本物の感情なのですよ」
両手で口を押さえたのは、無意識の動作だった。

あるいは、条件反射だったのかもしれない。
そんな必要、本当は無かったのだけど。
悲鳴なんて出て来ないくらい、衝撃を受けていたから。
「達也は自分のことを良く知っていますから。『大切だと思える』というのは、そういう意味でしょう。
私のことは、ただ『母親』と認識しているだけで、そこに当然付随すべき親子の愛情は存在しません。達也の心が大切だと思うことが出来るのは、深雪さん、貴女だけです。
さっきのことだって、私を助けたのはついでに過ぎません。あるいは、私が死ぬと貴女が悲しむと判断したのかもしれませんね」
「お母様はそうなることを……意図的に選ばれたのですか？」
自分が訊ねているのに、他人が喋っているように聞こえる。
わたしではないわたしが、わたしの身体を動かし、わたしに質問させているような感覚さえ、ある。
「そこまでハッキリと意図したわけではありませんけどね。
ただ、キャパシティの関係で、残せる衝動が一つだけであるなら、それは貴女に向ける愛情であるべきだとは、考えていましたよ。
私よりも貴女の方が、達也と共に在る時間は長いのですから」
「それをお、いえ、あの人に、お話になったのですか」
「もちろん、説明しましたよ。
あの子はあれで、常識に拘っているところがありますからね。
親に愛情を抱けない、なんて、つまらないことで悩む必要はありませんから」
そう仰ったとき、
微かに、
子供に愛情を抱けない、お母様の苦悩が、垣間見えた気がした。
「まだ何か、訊きたいことはありますか」
「いいえ……ありがとうございました」
聞かなければ良かった、と感じている自分がいる。
聞いておいて良かった、と考える自分もいる。

直視するには辛い過去、辛い事実、だけどわたしが目を背けてはならない現在と未来。

スクリーンの中には、無人の荒野を進むが如く一定の足取りで進むお兄様が映っている。

銃弾も砲撃もお兄様には届いていない。

お兄様に砲塔を向けた戦車――みたいな物――が、中の搭乗員ごと消え失せた。

変わらぬ足取りで征く、お兄様。

でもお兄様と同行している兵隊さんはそういうわけにも行かなくて。

お兄様に遅れないよう、遮蔽物の陰から陰へ、飛び移るように走りながら銃や魔法を撃っている。

あっ！

兵隊さんが、一人撃たれた。

上空のカメラを通してみる戦場は、まるで映画の中の出来事みたいで。

わたしがそれほどショックも受けずに見詰めているスクリーンの中で、お兄様が左手に握ったＣＡＤをその兵隊さんに向けていた。

いつの間に？

そう首を捻る時間は、ほとんど無かった。

次の瞬間には、その兵隊さんは、何事もなかったようにスクリーンの中を駆けていた。

敵の砲塔が火を噴く。

お兄様には当たらない。

お兄様が右手を向ける。

敵の姿が消える。まるで、ＳＦＸみたいだ。

味方の兵士が倒れる。

お兄様が左手を向ける。

それだけで、倒れていた兵士が何事もなかったように立ち上がる。

スクリーンに流れている映像は、他の人よりも、一般人だけでなく大多数の魔法師よりも、魔法というものに深く馴染んでいるわたしから見ても、現実感に乏しくて本当に映画みたいだった。

でもそれは、無責任な傍観者の感想。

お兄様と共に戦っている軍人さんにとっては望外の幸運。怪我をしても、致命傷であってもすぐ治るという夢のような状況。

そしてお兄様と向かい合っている敵軍にとっては予想外の凶事。

倒したはずの敵が起き上がり、自分たちだけが死体も残せず消し去られていくという悪夢。

魔神と化して、お兄様は戦場を闊歩する。

ただ、わたしが撃たれたことの、報復の為に。

それが七年前から、お兄様が六歳の時から定められていたことだというのなら。

わたしは、お兄様に、どう報いればいいのだろうか。

何をお返しできるというのだろうか。

今のわたしはこの命すら、お兄様から頂いたものだというのに。

4－（8）　魔神が生まれた日（後書き）

いつも拙作をお読みいただきありがとうございます。
またご感想を頂いている方々には重ねてお礼を申し上げると共に、お詫び申し上げます。
現在作者は、私事多忙につき、本編を更新するだけで手一杯の状況です。
時間的な切迫と、それ以上に精神的な余裕の欠如の為、ご感想のお返事が当分出来そうにありません。
本編を更新する余裕があるなら返信しろ、とのお考えもある意味当然かと存じますが、何卒ご寛恕願います。

4－（9）　戦後処理（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

4－（9）　戦後処理

対馬要塞で別れてから一週間。

当日、一足先に帰還していた達也は、あの戦闘が結局どういう形で決着したのか、一般に公開されている以上の詳細を知らない。

ここで風間と再会したのを好機と、色々な質問をぶつけてみたが、どうやら風間にも不明の部分が多いようだ。

風間と情報を交換し――と言っても達也の側から提供できる情報は「噂話」の域を出ないものであったが――推理を出し合っていた達也が、不意に身体ごと、ドアへ向いた。

深雪の背筋に緊張が走った。

兄の様子から、覚ったのだ。

遂に――

「失礼致します」

形式的なノックの後、返事を待たずドアが開かれた。

恭しく一礼したのは年嵩の執事。先程の少年とは格が違う、見るからに高い地位を有する初老の男性だ。

ただ、彼の口からそれ以上の口上は無かった。

ただドアを開けるだけの簡単な仕事であれば、この老人の役目ではないはず、にも関わらず。

だがそのことを、達也も深雪も、そして風間も不審には思わなかった。

寧ろこの役目は、この老人でなければ務まらないだろう、と揃って同じことを考えていた。

「お待たせいたしました」

老人の背後には、この屋敷の主の姿があった。

「本当に申し訳ございません。前のお客様が中々お帰りにならなく

て……

お約束の時間を過ぎているとはいえ、追い立てるような真似も出来ませんし……」

「どうか、お気になさらず。

お忙しくていらっしゃるのは、存じ上げております」

真夜の謝罪に風間がそう返して、二人はようやく腰を下ろした。

「深雪さんもお掛けになって」

促す声に、深雪もゆっくりと腰を下ろす。

しかし、達也に声は掛からない。

ソファに座った深雪の隣に立ったまま。

それは真夜の隣に控える執事と、鏡に映したように対称的な姿だった。

三人の前に白磁のティーカップが置かれる。

三人とは言うまでもなく、真夜、風間、深雪。

真夜は二人に紅茶を勧め、自身もカップに口を付けた後、「早速ですけど」と切り出した。

「本日おいで頂きましたのは、先日の横浜事変に端を発する一連の軍事行動について、お知らせしたいことがありましたからですの」

「本官にですか？」

軍の戦闘行為について、軍人の風間に対し部外者の真夜が、質問ではなく伝達することがあると言う。

風間が訊き返したのも当然だろう。

「ええ、それと達也さんと深雪さんにも」

そう言って、真夜が意味ありげな笑みを浮かべた。

にも、と言っているが、本当に聞かせたい相手は達也たちなのだな、と穿って見なくても分かる表情だった。

「国際魔法協会は、一週間前、鎮海軍港を消滅させた爆発が憲章に抵触する『放射能汚染兵器』によるものではないとの見解を纏めました」

放射能汚染兵器とは「放射能により地球環境を汚染する兵器」の

略称で、放射能汚染を引き起こす兵器の使用を阻止することを目的に掲げる国際魔法協会、及び同協会に加入している各国の魔法協会で主に使用される用語だ。兵器、と表現されているが、そこには放射能汚染を引き起こす魔法の術式も含まれている。魔法協会以外では余り馴染みのない言葉だが、古式とはいえ魔法師である風間には当然通用する。

「これに伴い、協会に提出されていた懲罰動議は棄却されました」

深雪の顔が一層の緊張に強張り、すぐに安堵のため息を漏らした。

「懲罰動議が出されていたとは知りませんでした」

起伏に乏しい声で、風間がそう嘯く。深雪はともかく、風間がその可能性に思い至らなかったはずは無いのだが、それを指摘する声は上がらなかった。

「落ち着いていらっしゃるのね？

懲罰部隊が派遣されることは無いと確信していらっしゃったかのご様子」

その代わり、より直接的な質問が真夜から発せられた。

魔法師は国家の財産、国家の兵器であり、国家に属するもの。民間の魔法師であっても、国益に反する行動は許されない。この点、世界的に、魔法師の人権は非魔法師に比べ著しい制限を受けている。

そしてそれ故に、国際魔法協会は独自の戦力を持たない。国際魔法協会所属の魔法師は、戦力と呼べる程の規模ではない。

しかしその代わりに、国際魔法協会は各国に協力を呼び掛けることで、実行部隊となる多国籍チームを編成することが出来る。今回の「謎の大爆撃」に対して懲罰部隊を編成することになれば、日本の国力低下を望む国々がそれぞれの抱える強力な魔法師を送り込んでいたことだろう。それは軍事に携わる者として、無視できない懸念であるはずだった。

「放射能汚染が観測されないのは分かっていたことですから」

貴女もご存知のはずだ、とは、風間は言わない。口にする必要の

ないことであり、口にしたところで流されてしまうことが分かり切っていた。
案の定、真夜はあっさり、話題を変えた。
「では、消滅した敵艦隊の搭乗員に『震天将軍』が含まれていて、戦死が確実視されていることはご存知ですか？」
「劉雲徳が？」
風間のポーカーフェイスが崩れていた。
問い返す風間は、演技ではなく、目を瞠っていた。
「ええ、それぞれの国の政府によって国際的に公にされた十三人の戦略級魔法師の一人である、劉雲徳その人が、です。
中華連合は随分と厳重な情報管制を敷いているようですけれど」
戦略級魔法師のプライバシーなんてあって無いようなものですものね、と真夜は笑う。
彼女の言うとおり、一個人で戦略兵器に匹敵する力を持つ戦略級魔法師は列強の関心の的であり、それ以上に各国魔法師の関心の的でもある。アンティナイトの様な特殊なギミックでも使わない限り、魔法には魔法師を以て対抗するしかないのが現状である以上、戦略級魔法を阻止することが軍に所属する魔法師の重要任務となるからだ。
列強が国威発揚の目的でその存在を公開している十三人の戦略級魔法師、いわゆる『十三使徒』の中で、その動向を秘匿することに成功しているのは、ＵＳＮＡのアンジー・シリウスだけと言われている。
日本も無論、例外ではなく、十三使徒の動向に関する諜報活動は、氏名――正確には愛称とコードネーム――と未成年であるということのみ判明していてそれ以外は素顔も定かでないアンジー・シリウスに関する情報収集も含めて、十師族が大きく力を割いている分野だった。
「これで、『十三使徒』は『十二使徒』となった訳ですが」
国際軍事バランスの大変動要因を、真夜は簡単に一文で纏めて見

せた。
そして更に、風間も知らなかった機密情報を開陳する。
「政府は、これに乗じて中華連合から大きな譲歩を引き出したいと考えているようですよ。
参謀長より五輪家に出動要請があり、五輪家はこれを受けました。
佐世保に集結した艦隊に澪さんが同行しています」
「あの方が軍艦に乗船されているのですか？」
それまで立場を弁え聞き役に徹していた深雪が、思わず声を上げてしまう。
「ええ」
しかし真夜は、それを咎めなかった。つまりそれは、我を忘れてもおかしくない、驚くべきニュースということだった。
五輪澪（いつわ・みお）は、日本政府が対外的に公表している唯一の戦略級魔法師、つまり『十三使徒』の一人。
現在確認されている限り、達也を除けば日本人で唯一人の、戦略級魔法の使い手。
謂わば、日本軍の切り札的な存在だ。
彼女の魔法「深淵（アビス）」は特に水上攻撃力に優れており、一撃で一個艦隊を破壊する理論上の能力を以て戦略級魔法と認定されているのだが、地下水を対象として「アビス」を発動することで、多数の建物を一気に倒壊させることも可能となる。
「……しかし、お身体に障りがあるのではないでしょうか……？」
「それを承知の決断なのでしょうね。参謀部も、五輪家も。
それ程の奇貨と考えているのでしょう」
五輪澪はその強大な魔法の能力と対照的に、肉体面はかなり虚弱である。
ミドルティーンの頃まではそれ程でもなかったそうだが、二十歳を過ぎた頃から体力の消耗を抑える為、動力付の車椅子を常用している。（脚に異常は無い）
大学を卒業後は、五輪家の屋敷からほとんど外出することはない

とも伝えられている。
五輪家は現在、十師族の一角を占めている一族だが、その地位は澪という戦略級魔法師を抱えている事実に支えられている側面が強い。
その彼女を比較的短距離の移動とはいえ何日も戦闘艦艇に乗せるというのは、確かにある種の賭と言える。
「こちらが劉雲徳の動向を掴んでいたように、あちらも澪さんが出陣したことを掴んでいるでしょう。
また、これは未確定の情報ですが、本日、ベゾブラゾフ博士がウラジオストク入りしたとの報せも受け取っております」
その名を聞いて、再び風間の表情が動いた。
「――『イグナイター』イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフが、ですか？」
「ええ、そのベゾブラゾフです。
各国の軍首脳部は朝鮮半島南端における戦果を目の当たりにして、大規模魔法の有効性を再評価しているようですね」
声こそ漏らしていないが、驚いているのは達也も同じだ。
イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフはソビエト科学アカデミーに所属する科学者だが、同時に、新ソ連が擁する戦略級魔法師でもある。
澪と同じ『十三使徒』の一人。
これまで各国は戦略級魔法を示威にのみ使い実戦に動員することはなかったのに、今回の戦いにはこれで、達也を含めて四人の戦略級魔法師が動員されたことになる。
「中華連合も同様の情報を掴んでいるでしょうから――」
「近日中に講和が成立する可能性が高いと？」
「私どもはそのように予想しております」
言葉を切って、真夜は笑顔で風間を見詰めた。
四十を過ぎているにも関わらず、三十路前のような、瑞々しくかつ艶のある笑顔。

しかし風間にそのような色香が通用するはずもなく、彼は無言で次の言葉を待っていた。
「……三年前からの因縁は、これで決着が付くでしょう」
話を再開した真夜の顔に、当てが外れたとでも言いたげな少々不満げな色が窺われたのは、達也の錯覚とばかりも言い切れないだろう。
「ただ、今回の鎮海軍港消滅は多数の国から注目を集めています。あの攻撃が戦略級魔法によるものと当たりを付け、術者の正体に探りを入れてきている国も一つや二つではないようです。中華連合の派遣艦隊が全滅した三年前の沖縄海戦との共通性に思い至り、これを手掛かりにしようと考えるグループも出て来るでしょう。
しかし、達也さんの正体を知られることは、私どもとして極めて好ましくない事態です」
「重々、承知しております」
風間が頷くのを見て、真夜は演技とは分からぬくらい自然に顔を綻ばせた。
いや、今のは本心から満足して、笑ったのかもしれない。
「ご理解いただけて嬉しく思います。
それでは念の為に、しばらく達也さんとの接触は控えていただきたいのですが」

◇◆◇◆◇◆◇

風間との交渉は、真夜にとり、即ち四葉にとって満足の行く形で纏まった。
手玉に取られた、というのは言い過ぎだろうが、今回の中華連合を相手とした戦闘に達也をこれ以上使わないという約束が成立したのは、紛れもなく真夜のペースによるものだった。
もっとも、この口約束を遵守するつもりがあるのか、この口約束

を全面的に信じているのか、という点には括弧付きで疑問符が付くのだが。

そして今、応接室では、真夜と達也が一対一で対峙している。用が終わった風間が帰ったのは当然として――彼も忙しい身だ――深雪まで席を外すことになったのは、真夜の強い指示によるものだった。

そうして、自分のお付きにまで席を外させたにも関わらず、真夜は中々話を切り出さなかった。

飲み干した紅茶のカップを物足りなげに見詰めるに至り、達也は真夜の対面へ無言で腰を下ろした。

無言で、つまり、断りを入れることもせず。

身体を背もたれに預け言葉を待つ姿は、緊張や畏怖とは縁遠いものだった。

その姿を一瞥し、真夜はカップをソーサーに戻した。

「貴方とこうして向かい合うのは三年ぶりね」

その声や表情に、不遜を咎める色合いは無い。

「こうしてお声を掛けていただくのは初めてです、叔母上」

「そうだったかしら」

恭しさの代わりにシニカルな、ある意味いつも通りの雰囲気を纏う達也に対し、真夜も先程までに比べて随分砕けた口調になっていた。

「そう言えば、二人だけでお話しするのはこれが初めてでしたか」

「はい」

だからといって、「親しげな」という形容は当たらないだろう。

それにしては、二人の眼（まなこ）に宿る光が強過ぎた。

「それで、お話しとは何でしょうか」

「そんなに慌てないで。お茶でも如何？」

「自分にお茶など出しては、取り巻きの方々に煩いことを言われませんか」

率直すぎる達也の発言に、真夜がプッと吹き出した。

「正直は必ずしも美徳とは限らないのよ」
「相手の為を思う諫言は、得てして耳に痛いものです」
打てば響くような切り返し。
真夜はそれに立腹した様子もなく、寧ろ感心して頷いている。
「遠慮のない相手というのも、偶(たま)には良いものね」
「ご不快でしたか」
「貴方と私は甥、叔母の関係だもの。気にする必要はないわ」
本心か韜晦か分かり辛い口調で返した後、真夜はテーブルの呼び鈴を手に取った。
小さなハンドベルの音が外に漏れる程、この部屋の壁も扉も薄くはない。
それなのに一分と掛からずドアがノックされたのは、何かの方法でこの部屋がモニターされているということに他ならないが、達也は慌てて立ち上がるような真似はしなかった。
「お呼びでございますか」
現れたのは、先程の初老の執事。
達也が主の対面にゆったり腰掛けている姿を見ても、彼は眉一つ動かさなかった。
「葉山さん、私にお茶のお代わりを。それから達也さんにも同じものをお持ちして」
「畏まりました」
これが青木あたりであれば、血相を変えて達也を怒鳴りつけたことだろう。真夜の目の前であることも忘れて。
だが理由はどうあれ、形はどうあれ、主の会話を「盗み聞き」することを許されている腹心が、そういう小物じみた真似をするはずがない。
達也が慌てなかったのは、そういう読みもあってのことだ。
それ以外にも、「取り繕っても無駄だろう」という判断もあったのだが。
達也が真夜に従順でないことくらい、少し見る眼があれば分かり

切ったことなのだから。
お茶を待つ間、真夜は口を開かなかった。
達也も、急かそうとはしなかった。
お茶でも如何、とは、話はお茶でも飲みながら、という意味だ。
その程度のことも分からぬほど鈍くはないし、その程度も待てぬほど子供でもない。
葉山執事が持ってきたカップに口を付けて、真夜はようやくその気になったようだった。
「今回はご活躍だったわね、達也さん」
この口調で、この言葉を額面通りに解釈する者など、まずいないと思われる。
「いえ、そのようなことは」
達也も褒められているとは思わなかった。
「でも四葉にとっては、困ったことをしてくれたものだわ」
「申し訳ありません」
案の定、芝居じみた溜め息と共に愚痴をこぼした叔母に対して、達也は形式的な謝罪を示した。
土下座とかテーブルに額をこすりつけるとか、そんな殊勝さは欠片も無かった。
「……まあ、貴方が命令に従っただけというのは判っています。あそこまでする必要があったのか、本当は風間少佐に問い詰めてみたかったのだけど。
過ぎたことは仕方ないわね」
「畏れ入ります」
今度は少し、心がこもった謝罪だった。
良い悪いは別にして、達也も些かやり過ぎだったと考えているのかもしれない。
――実際は「些か」どころではない過剰破壊だったのだが。
「それより問題は、今後のことです」
「何か具体的な不都合が生じているのですか」

達也の問い掛けに、真夜は即答しなかった。
瞼を閉じ、紅茶を一口飲んで、おもむろに目を上げた。
正面から、達也の瞳を覗き込む。
達也はその眼差しを受け止める――ことはせず、叔母と同じ動作で、ティーカップに口を付けた。
「スターズが動いているわ」
目を合わせぬまま浴びせ掛けられた言葉は、達也の動きを一瞬、停止させるだけの威力を持っていた。
「それはアメリカ自体が動き出している、という意味でしょうか」
ここに至りようやく、真夜と達也、二人の眼差しは正面からぶつかり合った。
背負うものは比べ物にならない。
四葉という強大な組織を背にしている真夜と、深雪以外に護るべき者を持たない達也。
しかし達也の眼光は、真夜の視線の重圧に、少しも負けていなかった。
「今はまだ、スターズが独自に調査を開始した段階よ。
でも彼らは既に、あの爆発が質量をエネルギーに変換する魔法によって引き起こされたものということまで掴んでいるわ。
術者の正体についても、かなりのところまで絞り込んでいます。
――具体的には、貴方と深雪さんを容疑者の一人として特定するまでに」
真夜がもたらした情報に、達也は一往復半、頭(かぶり)を振った。
「……凄い情報収集力ですね」
「伊達に世界最強の魔法部隊を名乗っていないということでしょうね」
「いえ、自分が申し上げているのは叔母上の手の者のことです」
応えは返ってこなかった。
真夜は、虚を衝かれた表情で黙り込んでいる。
達也は特に面白そうな顔も見せず、沈黙の隙間を埋めるように口

を開いた。
「世界最強の魔法部隊を自認する、ＵＳＮＡ軍スターズの諜報活動成果を、ほぼリアルタイムで探り出すとは。スパイでも潜り込ませているのですか？」
「……教えられないわ。生憎だけど」
「ごもっともです」
何とか真夜が捻り出した応答に、達也は真面目くさった顔で頷いた。
一瞬、忌々しげな表情を浮かべた真夜だったが、すぐに笑顔を取り戻したのは流石と言うべきだろう。
「……とにかく、身の周りには気をつけなさい。スターズは今まで貴方が相手にしてきた連中の様に甘い相手ではないわよ。アメリカの覇権を揺るがすと判断すれば、実力で排除に掛かってくる可能性もあります」
「それが四葉に飛び火する可能性が出て来れば、別のところから刺客が送り込まれるということですね。肝に銘じます」
見詰め合う叔母と甥。
二人の顔には、最早、一筋の笑みも無い。
「そこまで解っているなら話が早いわ」
「俺ならばこの場でこの回答にたどり着くと考えたから、深雪に席を外させたのでしょう？」
達也の言葉遣いが少し変わった。
彼の質問に、真夜は答えなかった。
再び交差した視線の中に、その答えはあった。
「達也、学校を辞めなさい」
真夜が告げたのは、答えではなく命令だった。
「学校を辞めて、どうしろと？」
「しばらくここで謹慎していなさい。深雪さんのガーディアンには別の者を差し向けます」

「ガーディアンの選定は、護衛対象の専決事項だと思っておりましたが」
「何事にも例外は付き物よ」
「まあ、そうですが……お断りします」
もしこの場に同席者がいたなら、急激な室温の低下に身震いしただろう。
ただそれは、物理的な温度の低下ではなく、張り詰めた緊張感によるものだった。
「このタイミングで俺が突然退学したら、中華連合艦隊を殲滅した魔法師は自分ですと自白しているようなものだと思いますが」
「理由は何とでもつきます」
「そうでしょうか」
真夜と、達也の顔から、表情が消えた。
「私の命に、従わぬと？」
「俺に命令できるのは、深雪だけです」
最高潮に高まる緊張感。
時が止まってしまったかの如き緊迫感の中で、

世界が「夜」に塗り潰された。

闇に、ではない。
闇に浮かぶ、燦然と輝く星々の群れ。
応接室の天井が、月の無い、星の夜空に変わっていた。
星が、光の線となって流れ、
――血臭が、室内に漂う。

そして次の瞬間、

音も無く、

室内を満たす「夜」は砕け散った。

部屋の中には変わらず、見詰め合う叔母と甥。

ただ二人の間に満ちていた緊迫感は、「夜」の崩壊と共に消え去っている。

「――随分と手加減していただいたようですね」

「当然でしょう？

貴方は私の可愛い甥なのですから」

達也の呟きに真夜は笑顔で答えた。

二人のどちらにも傷はなく、室内に血の臭いは残っていない。

「まあ、それを差し引いても上出来です。

だから今回は、貴方の我侭を叶えてあげることにします」

「ありがとうございます」

「いいのよ。私の魔法を破ったことに対する、チョッとしたご褒美なのだから」

達也は無言で立ち上がった。

そのまま軽く一礼する達也に、真夜はヒラヒラと手を振った。

応接間を後にする達也。

彼を呼び止める声は、何処からも掛からなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

達也が去った応接室で、真夜は独り物思いに耽っていたが、やがて一つ、大きく、息を吐いて、テーブルの呼び鈴を手に取った。

「――お呼びでございますか」

「場所を変えます。

サンルームにお茶の用意をして、深雪さんたちをご案内しなさい」

すぐに姿を見せた葉山執事に、真夜はそう言い付けた。

「畏まりました」

葉山は一礼し、主と目を合わせぬまま使用済みのカップを手早く

片付ける。
そのまま真夜の指示を実行すべく、部屋を辞去しようとしたところで、
「ちょっと待って」
当の真夜が、彼を呼び止めた。
「葉山さん、何か私に訊きたいことがあるのではなくて？」
主に視線を向けられて、葉山は恭しく一礼した。
「畏れ入ります。
それでは、お言葉に甘えまして……」
葉山は先代の四葉当主に引き続いて真夜に仕えている四葉家中の重鎮。初老に見えるが、実年齢は七十歳を超えている。
他の者が畏れ多いと言い出せないようなことでも、彼ならば口にすることが許されるという雰囲気が、この屋敷にはある。
「達也殿をあのままにして、本当によろしいのですか？」
また葉山は、他の者の様に達也のことを「贋物」と軽んじたりはしない。彼自身の魔法技能のレベルは大したものではないが、数多くの魔法師を見てきた経験が、達也に高い評価を与えていた。
――警戒すべき、魔法師と。
「構わないわ。
ああ、葉山さんが何を懸念しているのか、十分に理解しているつもりよ？
確かにあの子は、何時でも四葉を裏切るでしょうね」
「……畏れ入ります」
「それにさっきも確かめたとおり、私の魔法はあの子の異能に対して相性が悪い。本気で戦えば、高い確率で私が負ける。
私があの子に殺されてしまう可能性も小さいとは言えないでしょう。
でも達也は、四葉を裏切ることは出来ても、深雪を裏切ることは出来ないわ。
そして深雪が四葉に敵対することは決して無い」

「しかし、深雪様は達也殿に深く依存されているご様子。達也殿が当家に叛旗を翻した時、その意に反するとは思えませぬが」

眉間に深い憂慮を刻み、反論する葉山。

しかし真夜が、それに動じた様子は、全く無かった。

「大丈夫よ。

洗脳なんてしなくても、人の精神の方向性を決定付けるのはそんなに難しいことじゃないの。

それくらい、葉山さんには説明するまでも無いでしょう？

深雪は己に課せられた責任から決して逃れられない。姉さんに、その様に育てられているから。

そして達也には、深雪を苦しめるような真似は、絶対に出来ない」

「……しかし、その為には」

「ええ。

他の候補者の子たちには悪いけど、次の当主は深雪で決まりね。

達也を、あの怪物を、敵に回さない為に」

「その為には、深雪様に何としても当主の座を受けていただかなければなりませんな」

「心配無用よ、葉山さん。

その為の策も、ちゃんと考えてあるから」

真夜はそう言って、余裕タップリに微笑んだ。

葉山は深く、最上級の敬意を以て一礼し、今度こそ応接室を後にした。

4－（10） カタストロフ ～ &

4－（10）　カタストロフ　～　&

彼の背後に続く防衛軍の兵士は、今や引き金を引くことも忘れて、現実感に乏しいその光景に見入っていた。

同僚が次々と消え去っているにも関らず、現実感を持てずにいるのは侵攻軍の兵士も同じだった。

流血、惨死体によって引き起こされるはずの本能的な恐怖が刺激されないから、侵攻軍は得体の知れない不安に蝕まれながらも中々降伏しようとしない。

それは、達也にとって望むところだった。

侵攻軍にハイレベルの魔法師が従軍していれば、ここまで一方的な展開にはならなかっただろう。

むざむざ侵攻を許した日本側だけでなく、まんまと奇襲を成功させた（かに見えた）侵攻軍の側にも、この点、油断があったと言える。

――だからと言って、達也が手心を加える理由にはならないが。

彼の精神は現在、一種の狂乱状態にある。

破壊と殺戮に対して、一切の箍（たが）が外れている。

殺人に対して、まるで禁忌を覚えていない。

歩くように、壊し、殺す。

否、消し去る。

彼も、動揺を知らない訳ではなかった。当然だが、いかなる衝撃にも揺さぶられない不動心には、程遠い。

妹が殺されかけた光景を見て、彼は深いショックを受けていた。

彼の魔法は、如何なる致命傷であろうと一瞬で、無かったことに出来る。

だが彼の「再成」を以てしても、死者を蘇らせることはできない。

生死は不可逆に連続しているものであり、「死」は「生」の内在的変化。死体に「再成」をかけても傷の無い死体が出来上がるだけで、死者が生き返ったりはしない。

例え心臓が止まっていても脳死に至っていても、あるいは首が千切れていても、その直後であるならば蘇生は可能だ。

即死の致命傷であっても、肉体を再建し血液を循環させることで蘇生する可能性が完全にゼロで無い限り、彼の「再成」は死者を生に呼び戻すことが出来る。

だが、死が定着してしまった後では、どうすることも出来ない。

もし、間に合わなかったら……その恐怖は、彼をパニックに陥れるに十分なものだった。自分自身の死を含めて、他の事であるならば事実上「真の恐怖」という感情を持ち合わせない――正しくは奪い取られている――達也にとって、深雪を失うという恐怖は、他の恐怖を知らないが故に余計、彼の心を強く、深く、大きく揺さぶった。どんなに落ち着いて見えても、彼は今、その反動により激昂していた。

他の感情が機能しないが故に、冷静に、効率的に、一切の躊躇いを捨てて報復を行う。

それは謂わば、理性的な狂乱。

唯一つの目的にコントロールされた狂気。

相手が降伏しないことで、彼の狂気は貪欲に敵の命を呑み込んでいた。

潰走する侵攻軍の戦線は崩壊状態と表現して差し支えのない状態にあったが、侵攻軍の指揮系統まで崩壊してしまっている訳ではない。

侵攻軍の指揮官は、最早橋頭堡を維持できないと判断し、海上への撤退を命じた。

我先に上陸舟艇へと乗り込む侵攻部隊の兵士たち。

一歩、一歩、着実に歩み寄って来る魔神の手から逃れる為に。

そこに、死神が大鎌を振り上げて待っているとも知らずに。

逃げ出すのに忙しく反撃が止んだ侵攻部隊を前に、達也の足も止まった。

急に自分たちの役目を思い出したのか、恩納空挺隊が斉射陣形を作り上げる。

だが「撃て！」の命令が下されるより早く、達也から景色を歪める「力」が放たれた。
視界、つまり光波に余波を及ぼすような強い干渉力を放つ魔法師がいない訳ではない。
本当に優秀な魔法師は意図した事象改変以外に「世界」を乱すような力は使わないものだが、パワーに比して熟練度に劣る若手の優秀な魔法師は、時々そのような意図せざる事象改変を引き起こす。
しかしこの場において生じたのは、全くの、物理的な副次作用だった。
小型の強襲上陸艇が、中に呑み込んだ兵員ごと塵となって消えたのだ。
景色が歪んで見えたのは、上陸艇の一部がガスとなって拡散した所為で空中に密度の異なる気体層が形成され、光の屈折現象が発生したことによるもの。
次の艇で逃走しようと先を争って乗船していた敵兵が、揃って動きを止めた。
水を叩く音は、手にした武器を海に投げ捨てた音。
水音と地面を叩く音は、連鎖的に広がった。
白い旗が揚がる。
達也の背後で、射撃命令の代わりに、射撃姿勢待機の命令が下された。
達也はそれを見て、右手を白旗の旗手に向けた。
「バカ、止めろ！」
声と共に、隣から手が伸びてきた。
達也はその手を逃れるべく、腕を下げて身体を捻った。
だが、避けたはずの右腕は伸びてきた左手にしっかり掴まれた。
「敵に戦闘継続の意思はない！」
そんなことは言われなくても分かっていた。
彼を制止した相手もフルフェイスのヘルメットを被っていてその容貌は見えなかったが、聞いたことの無い声だった。

少なくとも、風間大尉や真田中尉ではない。
もっとも、風間に止められたところで、達也に敵の殲滅を中止する意思は無かった。
敵が投降するというなら、継戦意思の放棄が確認される前に皆殺しとするまでのこと。
幸いまだ、敵の中には武器を手放していない者が残っている。
「止めろというのだ！」
しかし達也は、ＣＡＤの引き金を引くことが出来なかった。
突如視界が回転し、分解対象の座標を見失った。
背中に強い衝撃。
投げられたのだ、と覚った。
すぐさま起き上がろうとして、既に自分が押さえ込まれていることを認識した。
「これ以上は虐殺だ。そんな真似は許さんぞ」
ヘルメットの鼻先に拳銃が突きつけられている。
「落ち着け、特尉。柳も銃を引っ込めろ」
この声には聞き憶えがあった。「特尉」という呼称も記憶にある。民間人を実戦に加える訳には行かないと、出動にあたり便宜的に与えられた地位だ。他ならぬこの声の主、風間大尉から。
「特尉、出動の際の条件は覚えているな？」
もちろんこれも、記憶していた。
沸騰していた頭が、少し冷えた。
戦う意思はそのままに、破壊と殺戮への欲求が収まった。
「了解です」
達也がそう答え、ＣＡＤの引き金から指を外したのを見て、柳は手と膝を使った押さえ込みを解いた。

◆　◆　◆

上陸部隊の投降により、直接武装解除に当たる風間の部隊だけで

なく、迎撃に出動していた他の部隊の間にも安堵感が広がったのは、仕方の無い側面があるにしても些か気が早過ぎた。

「指令部より伝達！」

風間の許へ通信兵が駆け寄った。ヘルメットを脱いだその顔は、強張っていた。

「敵艦隊別働隊と思われる艦影が粟国島北方より接近中！高速巡洋艦二隻、駆逐艦四隻！至急海岸付近より退避せよとのことです！」

「通信機を貸せ」

「はっ！」

通信兵の声は、必要以上に大きかった。

武装解除に当たっていた隊員も固唾を呑んで彼らの隊長を見詰めている。その隙に逃亡を企てる敵兵がいなかったのは、達也にとって、実は残念なことだった。（彼が殺気を隠そうともしていなかったから、反攻を企てる敵兵がいなかったのかもしれない）

「風間です。

……二十分ですか。捕虜は如何致しましょう？

……了解しました」

風間は顔から通信機を離すと、一つ、息を吸い込んだ。

「予想時間二十分後に、当地点は敵艦砲の有効射程内に入る！総員、捕虜を連行し、内陸部へ退避せよ！」

達也は耳を疑った。

移動用の車両も無く、味方よりも数の多い捕虜を抱えて、僅か二十分で一体どれだけの距離を逃げられるというのか。

ヘルメットを脱いだ風間の顔に、苦渋や懊悩は窺われない。断固とした命令者の威厳が鉄の仮面を作っている。

だが、彼が捕虜連行の命令を苦々しく思っているのは、他心通など使えなくても明白だった。

「特尉、君は先に基地へ帰投したまえ」

短い指示のその声が、殊更無感情だったのが彼の推測を裏付けて

いる。
少なくとも達也は、そう思った。
帰投、という表現を使っているが、これは逃げろという意味だ。
「敵巡洋艦の正確な位置は分かりますか？」
達也は風間の指示に頷く代わりに、ヘルメットを被ったまま、そう質問した。
「それは分かるが……真田！」
何故だ、とは、風間は問わなかった。
その代わり、戦術情報ターミナルを背負った部下の名を呼んだ。
「海上レーダーとリンクしました。
特尉のバイザーに転送しますか？」
「その前に」
真田の風間に対する質問を、達也が途中で遮った。
「先日見せていただいた射程伸張術式組込型の武装デバイスは持って来ていますか？」
真田がバイザーをあげて、風間と顔を見合わせた。
風間が頷き、真田は達也へ視線を戻す。
「ここにはありませんが、ヘリに積んだままにしてありますから五分もあれば」
「至急持って来ていただけませんか」
届きますが、という真田の台詞をぶった切って、達也は少年らしい性急さでそうリクエストした。
そして達也は風間へと顔を向け、顔を隠したままのヘルメットから有線通信用のラインを引っ張り出し、差し出した。
風間は眉を顰めただけで、何も言わずにヘルメットを被り直し、同じようにラインを引き出してコネクターの端子を噛み合わせた。
『敵艦を破壊する手段があります』
部下の見ている前で持ち掛けられた内緒話は、思い掛けない爆弾発言で始まった。
『ただ、部隊の皆さんに見られたくありません。

真田中尉のデバイスを置いて、この場から移動していただけないでしょうか』

風間から達也の表情は見えない。

有線通信越しでは、声音も上手く伝わって来ない。

判断の材料となるのは、口調と、僅かな付き合いから読み取った為人（ひととなり）のみ。

『……いいだろう。但し、俺と真田は立ち合わせて貰う』

『……分かりました』

撤退する部隊の指揮はどうするんだ？　と達也は思ったが、すぐに、それは自分の考えることではないと思い直した。

撤退の指示を出し、先程自分を投げ飛ばした柳という名の士官に指揮権を移譲する傍らで、達也は武装デバイスの到着だけを待っていた。

◆　◆　◆

迎撃部隊の慌しい撤退風景は、防空指令室のモニターでも見ることが出来た。

無論、その映像を窓一杯に映し出している深雪たち親子にも。

部隊が捕虜を引き連れて移動を開始する中、三人の人影がその場から動く気配を見せない。それを見て、深雪が息を呑んだ。

その内の一人が、彼女の兄だったからだ。

顔はスモークバイザーに隠れているが、背格好だけで見間違うことは無い。

ギュッと奥歯を噛み締めたその横顔を見て、本当は彼女が何を言いたいのか、桜井には手に取るように分かった。

それを、可哀想だと思った。

まだ十二歳でしかないのに、言いたいことを口に出来ない。

兄を助けに行って、という、我侭ですらない人として当たり前の想いすら言葉に出来ない。

何故達也があの場に残っているのか、それは桜井には分からない。
しかし、推測ならば出来る。
おそらく彼は、接近する敵の艦隊を何とかする手段を持ち合わせているのだ。
普通ならばありえないことだが、特定分野に突出した性能を見せる四葉の、直系の魔法師であるなら考えられないではない。
普通の魔法は使えなくても、彼は現に、人体をまるごと修復するという非常識な魔法を――深夜によればあれは魔法ではないそうだが――他ならぬ桜井自身に使って見せたのだから。
だが彼が、「魔法師」としては低い能力しか持ち合わせていないのも、紛れも無い事実。
実戦魔法師として平均的な技能を持つ者なら普通に使いこなせる対物障壁も、満足に使いこなせない。
さっきは銃弾・砲弾を個別にか総体的にか、とにかく全て識別して消し去るという、人間の限界に喧嘩を売るような離れ業で敵の攻撃を無効化していただけだ。どうやってかは分からないし、それはそれで凄いと思うが、もし達也が何十キロも離れた地点から敵艦隊を無力化する魔法――もしそれが可能なら戦略級魔法に相当する――を行使しようとしているのなら、さっきと同じ方法で身を守ることは出来なくなるだろう。
「奥様、お願いがあります」
そう思い至った時、自分でも意識しない内に、その言葉は滑り出た。
「なにかしら」
突然のことだったにも関らず、深夜の声には少しも不自然なところが無かった。
まるで桜井の「お願い」の内容まで、既に知っているような口調だった。
「達也君を迎えに行きたいのですが」
スクリーンに釘付けになっていた深雪が勢い良く振り返った。

彼女の桜井を見る目は、大きく見開かれていた。
「それは、今、あそこに、迎えに行きたいということ？」
深夜の声には、やはり、意外感が無い。
彼女の固有魔法は精神干渉であって読心能力は無いはずだ。
もしかして奥様も……という、脳裏を過ぎった都合の良い考えを、桜井は意識から振り払った。
「はい」
「穂波」
深夜が桜井のことを名前で呼んだ。それは随分、久し振りのことだった。
「貴女は私の護衛なのだけど？」
その貴女が私の側を離れるの？　と言外に問う。
深夜としては当然の問い掛けであり、桜井としては答えられない問い掛けだった。
「……す」「まあ、いいわ」
すみません、と、桜井が口にしようとした、どちらとも取れる謝罪に言葉を被せて、深夜が鷹揚に頷いた。
「敵艦を放置しては、この基地も安全かどうか分からないものね。達也はアレをやるつもりのようだから、その手伝いに行ってらっしゃい」
「あれ？」
この質問は反射的なものだった。
どうやら深夜は、達也が何をやろうとしているのか知っているようだ。
改めて考えてみれば、母親なのだから当たり前なのかもしれないが。
「どうするのかは知らないけど、何か考えがあるのでしょう。あの子は、目端は利く方だから」
どうでも良さそうな言い方だった。
それでも、母親が息子を自慢しているのだ、と桜井は思った。

「ありがとうございます」
そうであって欲しい、と思いながら、桜井は丁寧に頭を下げた。

◆　◆　◆

二十年にわたる先の大戦期間中に、戦闘艦のメインウェポンは艦載ミサイルからフレミングランチャーに換わった。（当初はレールガンという呼び方をされていたが、大型化に伴い名称が変更された）
現代の艦砲射撃はフレミングランチャーから爆弾を連続射出するスタイルだ。火薬砲より連射性が圧倒的に優れている上、推進剤と推進機関の重量を運ぶ必要が無いから爆薬類の積載量をミサイルより大きく出来る。（なお射程距離は火薬砲と変わらないか、寧ろこれに劣る。フレミングランチャーは連射性を重視した兵器だからであり、連射性を維持しつつ射程を延ばすと、反動が艦体に与える悪影響を無視出来なくなるからだ）
最新鋭戦闘艦の対地攻撃力は百年前の十倍以上と言われている。フレミングランチャーの有効射程内に侵入されれば、単艦でも街は火の海となる。
市街地攻撃だけでなく、ランチャーの連射性は陣地攻撃にも有効だ。二隻の巡洋艦から集中砲撃を浴びれば、並以下の魔法師ではひとたまりも無い。
時間との勝負であることは達也にも分かっている。彼は手許に届いた射程伸張術式付き武装デバイス、特化型ＣＡＤを組み込んだ大型狙撃銃のマガジンを引き抜いて、更にその中から弾丸を手早く取り出した。
弾丸を一つずつ、合掌するようなポーズで両手に持ち、再びマガジンに込め直す。
見ている風間たちには、何をしているのかさっぱりだ。強大な魔法が作用していることだけは辛うじて感じ取れるが、どんな術式が動いているのか、推測することも出来ない。

多分、風間たちでなくても分からなかっただろう。予備知識無しで達也が今何をやっているのか見抜く魔法師がいたなら、そちらの方が驚異的だ。

達也がやっているのは、銃弾を一旦元素に分解し、それを元通りに再構成するという作業。

五発の銃弾を全て込め直し終えるまで、二分の時間が掛かっている。

「敵艦有効射程距離内到達予想時間、残り十分」

武装デバイスの準備を終えた達也に、真田が猶予時間を告げた。

「敵艦はほぼ真西の方角三十キロを航行中……届くのかい？」

「試してみるしかありません」

真田の問い掛けに達也はそう答えて、武装デバイスを仰角四十五度に構えた。

風の影響は度外視して、とにかく距離を稼ごうという構え。

その体勢で魔法式を展開する。

銃口の先にパイプ状の仮想領域が展開される。

通り抜ける物体の速度を加速する仮想領域魔法。

仮想領域の作成に時間が掛かっているものの、構築された仮想領域のサイズに、真田は満足して頷いた。

加速効果を持つ仮想領域の長さが長ければ長い程、射程伸張の効果は上がる。この長さならあるいは、射程三十キロに届くかもしれない。

だが、達也が展開している魔法は、それで終わりではなかった。

物体加速の魔法領域のその先に、もう一つの仮想領域が発生した。

「なんと……！？」

物体加速仮想領域の作用工程は三つ。

その領域内に侵入した物体の見かけ上の慣性質量を引き下げる。

速度を引き上げる。

見かけ上の慣性質量を元に戻す。

この慣性質量の操作と速度の操作の倍率が、魔法師の入力する変

数となっている。
今、達也が追加した仮想領域の性質も、基本的にはこれと同じ。
だが、慣性質量操作の倍率がプラスに指定され、速度の倍率が等倍に、慣性質量の復元が無効化されていた。
つまり、達也が追加した仮想領域は、真田が設計した加速の為の仮想領域魔法を、慣性質量増大の仮想領域魔法にアレンジしたもの。
それを即興で成し遂げたということだ。
「信じられんことをする少年だな……」
真田の呟きは、狙撃銃の発射音にかき消された。
見えるはずのない超音速の弾丸を、目で追いかけるようにして沖を見詰める達也。
やがて彼は、落胆したように首を振った。
「……ダメですね。二十キロしか届きませんでした」
どうやって弾道を追ったのか。
淡々とした声音だが、やはり、ガッカリしているのだろう。あるいは自分のことを、不甲斐無いと感じているのか。
「敵艦が二十キロメートル以内に接近するのを待つしかありません」
その発言を聞いて、真田の顔色が変わった。
「しかしそれでは、こちらも敵の射程内に入ってしまう！」
巡洋艦に搭載されるフレミングランチャーの有効射程距離は十五キロから二十キロ。ランチャーの射程距離は艦が許容する反動、つまり艦の形状とサイズに制限されるから、メーカーの違いを問わず、艦種からほぼ正確に予測できる。
二十キロメートル以内というのは、その射程内だ。
「分かっています。
お二人は基地に戻ってください。
ここは自分だけで十分です」
「バカなことを言うな！　君も戻るんだ」
ここは敵が橋頭堡に選んだ地点であり、最後に敵と交戦した地点でもある。

敵がここを攻撃してくるのは、ほぼ確実。
敵艦の射程外から攻撃できるならともかく、撃ち合いになったらこちらの生存は絶望的だ。
「しかし、敵艦を撃破しなければ基地が危ない」
同時に、そこにいる家族も。
「だったらせめて、この場から移動しよう」
達也が何に拘っているのか、何を護ろうとしているのか、理解出来ない二人ではない。
「ダメです。今から射撃ポイントを探している時間はありません」
しかし真田の提案は、彼自身にも分かっている理由によって、却下された。
「我々では代行できないのか？」
黙って二人の会話を聞いていた風間が、沈んだ声で達也に訊ねた。
「無理です」
返って来たのは、予想通りの、それ以外にはない答え。
「では、我々もここに残るとしよう」
予想外だったのは、この答え。
達也にとって、風間の即答は思いもよらないものだった。
「……自分が失敗すれば、お二人も巻き添えですが」
「百パーセント成功する作戦などあり得んし、戦死の危険性が全く無い戦場もあり得ない。
勝敗が兵家の常ならば、生死は兵士の常だ」
何の力みも無く、風間はそう語った。
葉隠の有名な一節に通ずるその台詞は、説得を断念させるに十分な威力を有していた。

沖合いに、水柱が立った。
敵の艦砲射撃の、試し撃ち。
最早、達也も、風間も、真田も、何も言わない。
敵の正確なポジションは、バイザーに表示されている。

風向も、風速も、射撃に影響を与える諸元が数字の羅列で示されている。
達也は武装デバイスを構えた。
弾道射撃の、ある意味、盲撃(めくらう)ちの構え。
銃弾の飛行時間（と落下時間）を考慮すれば、相手は既に射程内だ。

達也は仮想領域魔法を発動し、

続けて四回、引き金を引いた。

四回の射撃はその都度、僅かに銃口を動かして、風の影響による照準誤差を補うように撃っている。
もっとも最初から照準など有って無いような弾道射撃。
どんなに偶然が味方しても、精々敵艦の側に落ちるくらいだろう。
――そして、最初からそれで、構わないのだ。
達也は四発の銃弾の動きを頭の中で追う。
正確には、意識領域、無意識領域を通して、情報の次元に視える銃弾の情報を追いかける。
彼自身の手で、彼だけの魔法で、分解し再構成した銃弾。
その構造情報はどれだけ離れても、見失うことはない。
達也は四発の銃弾のうち一発が、敵艦隊の中央に落下していく「情報」を捉えた。

達也は銃弾の行方を追うだけで精一杯だった。
風間と真田は、何らかの大規模な魔法を行おうとしている達也の邪魔をしないように距離を取っていた。
だから、当然予想された、そして予想していたその事態に、二人の魔法を以って対処する以外の選択肢は無かった。
敵は既に、試射を済ませている。

ならば次に来るのは、弾道を修正した砲撃だ。
達也の射撃より低い弾道で撃ち込まれた爆弾は、達也の銃弾が届くより早く、彼らに襲い掛かった。
古式魔法の術者である風間は、対物干渉力がそれ程高くない。（寧ろ低い）
本質が魔法師ではなく魔工師である真田は、対物干渉力自体は高くてもスピード面で追いつかない。
このままでは達也が敵艦隊を撃破する前に、こちらが限界に達してしまう――
「援護します！」
雨と降り注ぐ爆弾の中に、バイクで割り込んで来た人影があった。
女性用のアーマースーツに身を固めたライダーは、バイクを乗り捨てるや否や、そう叫んで全身からサイオン光を迸らせた。
敵艦隊を殲滅する魔法に精神を集中していた達也は、その声を聞いて心の片隅で驚き、安堵していた。
驚きは、桜井が母親の側を離れたことに対して。
安堵は、彼女の庇護の下で自分の術式に専念できる事に対して。
調整体魔法師「桜」シリーズ。
その特性は、強力な対物・耐熱防御魔法。
伝え聞く十文字家の「ファランクス」の様な、高度にテクニカルな魔法は使えないが、一つ一つの対物・耐熱魔法の単純な防御力は国内魔法師中トップクラス。
穂波はその中でも頭一つ飛び抜けた性能を少女の頃から発揮していた。
それ故に、ただ一人の精神構造干渉魔法の使い手である、貴重な魔法師の護衛役として選ばれたのだ。
直撃コースの砲弾が、海の上に叩き落された。
陸に届く砲撃は無くなった。
運動量を相殺する魔法が数百メートル先で次々に発動しているのだ。

その様子を肉眼で見ながら、達也は銃弾が敵艦隊のすぐ上空に到達したのを心眼で識った。
達也は右手を前に突き出し、西を指差し、その掌を力強く開いた。
銃弾が、エネルギーに分解された。
質量分解魔法「マテリアル・バースト」が、初めて実戦に用いられた瞬間だった。

水平線の向こうに、閃光が生じた。
空を覆う雲が白く光を反射する。
日没時間には程遠いのに、西の水平線が眩く輝いた。
爆音が轟いた。遠雷と聞き間違える者は、この場にはいない。
誘爆する間も無く、全ての燃料と爆薬が一斉に爆ぜた音だ。
砲撃が途絶えた。
不気味な鳴動が伝わる。
「津波だ！　退避！」
風間が叫び、いきなり力なく崩れ落ちた桜井を慌てて抱きかかえ、走り出した。
バイクに跨った真田が、飛ぶ様に駆ける風間の隣に並ぶ。
タンデムシートには達也が跨っていた。
風間が桜井を抱えたままジャンプした。
曲芸じみた身のこなしでハンドルの上に立つ。いや、これは曲芸以上だろう。
軍用バイクはその大馬力に物を言わせて、明らかに定員オーバーの重量を乗せながら力強く疾走した。

◆　◆　◆

水平線の向こう側に生じた嵐が収まり、津波が引いていくのを脇

目に、達也は高台の地面に膝をついていた。
彼の前には、力なく横たわる桜井の姿。
ヘルメットを脱いだ達也の顔は、紛れも無い哀しみを湛えていた。
「……いいのよ、達也君。これは、寿命なんだから」
無力感に苛まれ救えぬ命を前に、失っていたはずの感情に苦しむ達也に向けて、桜井は力なく、濁りの無い微笑みを向けていた。
「貴方の所為じゃないわ。
私たち調整体は、いつ寿命が尽きてもおかしくないの」
それは違う、と達也は言いたかった。
確かに調整体魔法師の寿命は一般人に比べて不安定だが、彼女が衰弱しているのは明らかに、短時間で大きな魔法を連続行使した負荷によるものだ。
いくら「桜」シリーズといえど、艦砲連続斉射を防ぎ切るのは、負担が大き過ぎたのだ。
しかし、達也がそれを口にすることを、桜井は望んでいない。
彼はそう思って、歯を食いしばった。
「本当に、貴方の所為じゃ無いの。
私は生まれる前から盾となる役目を負わされて、今日その役目を果たし終えたの」
だが桜井には、達也の考えていることなどお見通しだったようだ。
「それを私は、誰かに命じられてじゃなく、自分の意思で果たしたのよ」
達也は「再成」を行使しようとして、すぐに無駄だと覚った。
物質の時間を巻き戻すことは出来ても、命の時計を逆回転させることは、彼の力では不可能だった。
「止めてちょうだい？」
それを勘違いしたのか、桜井は甘えるような声と微笑みで、達也にそう囁いた。
「今まで生き方を選ぶ自由なんて一つも無かった私が、自分の死に場所を、自分で選ぶことが出来た。

こんなチャンスを逃す気はないわ。
私は人に作られた道具としてじゃなく、人間として死ぬことが出来るの」
彼女が心の中にこんな暗闇を抱えていたなど、達也は夢想だにしなかった。
だが自分でも意外なほど、驚きは無かった。
「だから、このまま死なせて？」
桜井の言葉に、達也は無言で頷いた。
桜井は安心した顔で、瞼を閉じた。
そのまま、呼吸が止まる。
傍らに立つ真田が経文を唱えている。
達也の肩に、風間の手が置かれた。
肩に手を乗せたまま、達也は立ち上がった。
彼の目から涙は零れない。
達也の心から、不思議なくらい、哀しいという感情が消えていた。
桜井穂波の「遺言」を聞いて、彼は、哀しむ必要は無いと納得していた。

――哀しみを納得で消すことが出来る、それが異常なのだと、この時の達也には解らなかった。

◇◆エピローグ◆◇

今日は随分、三年前を思い出させる出来事が多かったから、だろう。
達也は久し振りに桜井穂波のことを思い出していた。
後悔を伴う思い出だ。
今ならばと、達也も、考えないでもない。
だが、後悔しか出来ないということも解っているし、納得している。

それにもし、彼女の犠牲が無ければ達也は、独立魔装大隊に加わって魔法戦技に磨きをかけようなどと考えなかったかもしれない。
今回は誰も犠牲にせずに済んだ。
自分の三年間は無駄ではなかったと、達也は自分を慰めることが出来た。
そして三年前、彼の盾となって散った彼女に、胸の中で黙祷を捧げた。
――だから余計に、驚きが大きかったのだろう。
お茶菓子を持ってきた少女の顔を見て、達也は危うく、声を上げそうになった。
「……如何なされましたか？」
「いえ、何でもありません」
当の少女から問い掛けられたのは深雪だった。
彼女の驚きようは、達也よりも激しいものだった。
それも、無理はない。
給仕服を着た少女の顔は、桜井穂波に瓜二つだった。

少女が同僚と退出して、程なく、真夜がサンルームに姿を見せた。
葉山は同行していない。
この席は、プライベートということだろう。
達也が席に着くことを許されているのも、同じ理由だった。
「どうしたの、深雪さん？
何か、驚いているようだけど」
腰を下すなり、真夜は心配そうな表情で深雪に問い掛けた。
達也と相対していた時とは別人の様な、「いつもの」四葉真夜の顔だ。
「いえ……叔母様、今の女の子は？」
「ああ、水波（みなみ）ちゃん？」
深雪の質問を聞いて、真夜はなるほど、とばかり頷いた。
「名前は桜井水波。

桜シリーズの第二世代で、貴方たちのお母さんのガーディアンを務めていた桜井穂波さんの、遺伝子上の姪に当たる子よ」

第二世代、というのは、調整体魔法師の親から生まれた者のことだ。

そして遺伝子上の姪、と表現したのは、穂波と同一の遺伝情報を持つ第一世代の個体を母親としているということだろう。

顔立ちがそっくりなのも道理だった。

「彼女もかなりの使い手よ。潜在的な能力は、七草の双子に匹敵すると思うわ。

いずれ時期が来たら、深雪さんのガーディアンに、と思って鍛えているところなの。

大人になれば、女性の護衛がどうしても必要になるシチュエーションがありますから」

真夜の建前に、深雪は一応、納得したようだった。

確かに、女性である深雪の護衛が男性の達也だけでは、不都合が生じるシーンはある。

しかし先程、真夜の本音を知らされた達也は、いずれ訪れるかもしれない決裂と衝突の時に、一層の覚悟を固めていた。「彼女」と同じ顔をした少女を道具にしようというのなら、尚のこと、相容れることは出来なかった。

――決裂も衝突もあり得ないのだと、今の彼には知る由もなかった。

4－（10）　カタストロフ　～　&

とある幕間劇～お嬢様の華麗な（？）休日～（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

とある幕間劇～お嬢様の華麗な（？）休日～

西暦二〇九五年十一月二日。
国内は戦勝気分の浮かれたムードに包まれていた。
国防軍が秘密兵器――とだけ発表されていて、その正体は明かされていない――により中華連合艦隊を基地ごと殲滅した、と報道されたのが一昨日の夜のこと。
北京がワシントンに講和の仲介を打診した、というスクープがお茶の間に流れたのは昨日の深夜だ。
余りに速過ぎる展開にスクープの信憑性を疑う意見もあったが、そういう冷静な判断力を保っていたのは国民のごく一部だった。
多くの国民が俄か軍事評論家になり。
普段は政治に無関心な少年たちが学校で声高に外交と現実的国際政治力学（リアルポリティクス）を語り合う。少女たちの呆れたような、迷惑そうな視線も、今回ばかりは抑止力になっていない。
それは何も、学校の中だけの話ではなかった。
画面の中で無責任にはしゃいでいる芸能人にため息をついて、七草真由美はテレビのスイッチを切った。

時刻は現在午前十時。
今日は平日であるからして、いつもであれば学校に居る時間だ。
しかし、横浜事変の当事者だった魔法科高校各校は昨日に引き続き休校となっており、第一高校も例外ではない。
年明けに受験を控えた身としては、学科はともかく今の時期に実習が休みになるのは心中複雑なものがあるはずだが、現場に居ただけの当事者ではなく正真正銘の当事者だった真由美は「良い休養」と割り切っていた。
――残念ながら、リラックスした気分にはなれなかったのだが。
『お嬢様、お寛ぎのところ失礼致します』

テレビを消したのが分かったのだろうか？
タイミングよくインターホンから聞こえていた家政婦の声に、偶然と知りつつ、真由美はそんなことを考えた。
「今開けます」
答えて椅子から立ち上がる。
本当はＨＡＲ〔ホーム・オートメーション・ロボット〕の音声認識インターフェイスに開錠を命じれば良いのだが、真由美は何となくそうせず、自分で歩いてドアを開けた。
ドアの向こうにいたのは彼女の身の周りを担当している家政婦だ。
今尚幅広く支持されているサブカルチャーに染まった人間ならば、最初が「メ」で最後が「ド」の単語に「さん」をつけて呼ぶであろう制服を着ている。
まあ、スカート丈は脹脛（ふくらはぎ）の長さだし襟は首下まで覆っているし背中が大きく開いているということもない、実用的な制服だが。
それにこの家では、この種の制服を着た家政婦の存在など少しも珍しくは無い。
真由美は特に違和感を覚えることも無く、二十代半ばの家政婦に問い掛けた。
「何でしょうか」
「旦那様がお呼びです」
それを聞いて、真由美は微かに顔を顰めた。
またか、と思ったのだ。
昨日も根掘り葉掘り事情を訊かれたばかりだというのに……そう心の中で愚痴っていた真由美は、次の一言に首を傾げた。
「応接間でお待ちになっていらっしゃいます」
首を傾げたといっても、それもまた心の中に秘めた仕草だったが。
――応接間？
――書斎じゃなくて？
それが、真由美の抱いた疑問だった。
「お客様なの？」

「そのようです」
長い付き合い、と言える程ではないが、ほぼ専属で世話を焼いてもらっている相手だ。今の短いやり取りで、彼女が客の素性を知らないということは分かった。
「すぐに着替えて参ります、と伝えてください」
「お召し変えを、お手伝い致しましょうか？」
一拍、考え込んで、すぐにピンと来た。
今時のファッション事情を考えれば、一人で着られないドレスに袖を通す機会などそうそうあるはずも無い。
「大丈夫よ。ちゃんとフォーマルな格好をして行きますから」
つまりは、そういうことを命じられているのだろう。
案の定、真由美の答えに家政婦は、恭しくお辞儀をして引き下がった。

◇◆◇◆◇◆◇

柔らかな生地で仕立てられたワンピースの踝丈（くるぶし）のスカートを、太腿（ふともも）の辺りで軽く持ち上げてレースで縁取られた裾を整え、真由美は応接間の扉をノックした。
「入りなさい」
部屋の中から聞こえて来た、ように聞こえる声は、扉の化粧板に内蔵された平面スピーカーが再生した父親の声だ。
肉声とほとんど聞き分けられない精度で再現されたその声は、家族だから分かる余所（よそ）行きのものだった。
どうやら今日のお客様は、余りざっくばらんに話せない相手のようだ。
「失礼します」
いつもの二割増しで淑女の仮面を装着し、トーンを下げた声で常套句を述べて、真由美はしずしずと入室した。
目を伏せたまま来客の顔を窺い見る。

父親の向かいに腰を下した男女は、どちらも彼女が見知った顔だった。

それも、余り歓迎したくない類の知り合いだ。決して、嫌いという訳ではないのだが。

しかしそんな内心はおくびにも見せず、真由美はにこやかな笑顔で父親の隣に立つと、二人の客に向けて優雅に一礼した。

「いらっしゃいませ、洋史（ひろふみ）さん。澪（みお）さんはお久し振りですね」

彼女が声を掛ける前に、青年の方は立ち上がっていた。

だが、少女の様な外見の女性は、座ったままだ。

そして、その事に眉を顰める者はいない。

表情を取り繕っているというのではなく、真由美も、父親の弘一（こういち）も、失礼だとは考えていない。

何故なら彼女、五輪澪（いつわ・みお）が腰掛けているのはソファではなく車椅子だからだ。

しかし彼女の弟、五輪洋史（いつわ・ひろふみ）は、失礼とは考えぬまでも後ろめたさを覚えているようで、答礼の口調は少し歯切れの悪いものだった。

「おじゃましています、真由美さん」

「どうぞ、お掛けになって下さい。澪さんもそのままでご遠慮なく」

「ありがとうございます、真由美さん。

こちらこそご無沙汰しています」

寧ろ本人の澪の方が開き直っている感じで、真由美の言葉にニッコリとあどけない笑みを返す。

洋史が腰を下すのに合わせてソファに浅く腰掛けながら、この人は本当に自分より年上なのだろうか、と顔を合わせるたびに抱く疑問を真由美は今回も思い浮かべていた。

五輪澪が今年で二十六歳になった、というのは嘘偽りの無い事実である。

しかしこうして本人を視野に入れると、その事実を疑いたくなってしまう。

身長は真由美より一、二センチ低い程度だが、真由美と比べると

身体つきがまるで違う。

一言で表現すれば、未成熟。「女らしさ」が余りに乏しい。

実を言えば、彼女は足が動かない訳ではない。

極端な虚弱体質の為、長時間の歩行に身体が耐えられないのだ。

車椅子を使うようになったのは二十歳を過ぎた頃からのことだが、昔から身体が弱く十分な運動が出来ない為、食が細くその所為で栄養が不足するという悪循環、彼女の未成熟な体型はその結果だ。

胸の膨らみも服の上から見た限りほとんど（全く）無く――真由美は言うに及ばず、あずさでもそれなりに胸はある――腰回りも少女の様に細い。サイズだけ見れば、ローティーンの少女に近い。

顔立ちも体型に合わせたように幼い。

何となく、「女性」に成り切れていない印象があった。

しかし、幼い外見はともかく、大学卒業後は外出もままならず大学院もほとんどオンラインで済ませていた（もちろん特例である）という澪が、今日は一体何の用なのだろうか。

まさか洋史さんについて来たということは無いと思うけど、と真由美は内心で首を捻っていた。

「今日はお別れのご挨拶に参りましたの」

澪がそう切り出したのは、真由美の眼差しに宿っていた疑念を正確に汲み取って先回りしたのだろう。

「本宅にお帰りになられるのですか？」

見透かされた動揺を押し隠して――動揺する必要など全く無かったのだが――真由美はそう問い返した。

五輪家の本宅は愛媛県にあるのだが、澪は大学に通学する必要上で東京に出て来てから、そのまま東京の別宅で生活していた。

彼女の大学院卒業と入れ替わるようにして弟の洋史が進学してきた為、そのまま一緒に暮らしていたのである。

「本宅にも戻るんですけど、その前に」

澪が言葉を切って形式的な、内心を隠す為の笑みを浮かべ、洋史は僅かな表情の変化ではあったが、不機嫌そうに眉を顰めた。

「出征することになりました」
「しゅっせい、って……戦争に行かれるんですか！？」
シュッセイという音を脳内で漢字変換して、真由美は思わず大声を上げてしまった。
「――失礼しました。しかし、何故……」
自分の無作法を急いで詫びて、真由美は澪と父親に戸惑いの視線を向けた。
「公式発表は来週になるが、これは正式な決定だ」
答えは父親から返って来た。
「澪さんたちは一旦佐世保基地に向かい、そこから海軍に同行して海路、西に向かう。行き先は私たちにも明かされていないが、目的は中華連合に講和条約締結を促す示威行動だ。
言うまでもないだろうが、正式に発表があるまで他言は無用だ」
「ええ、心得ております」
念を押す父親に、真由美は即、頷いた。
もっとも、納得できたのは他言無用についてだけだったが。
軍が澪を担ぎ出した理由は分かる。
彼女は公式に認められている限り世界に十三人しかいない、隠れている、あるいは隠されている人数を合わせても五十人に満たないと言われている戦略級魔法師の一人。
日本政府が公式に認定している、日本でただ一人の戦略級魔法の使い手。
彼女の戦略級魔法「深淵（アビス）」の本領は海上兵力の迎撃にあるが、地上拠点攻撃用としても十分な破壊力を有している。彼女が同行しているというだけで、敵に多大なプレッシャーを与えることが出来るだろう。
しかしそういう理由付けも、今回は合理性に乏しいような気がしていた。
――横浜沿岸部に対する侵攻に端を発し、朝鮮半島南端に大破壊をもたらした今回の軍事行動は、十月三十一日の段階で事実上終結し

ている。
　領土割譲に準じる成果を求めるのでもない限り、こちらからの逆侵攻は、戦略的に見れば最早不必要なのだ。
　そこまで徹底的にやる覚悟も無く健康面で不安が大きい澪を何週間も同行させるのは、メリットよりもデメリットの方が大きいと言わざるを得ない――
　言葉で説明できるほど明確に意識している訳ではないが、真由美が概ね、このような違和感を覚えていたのである。
「僕も姉に同行します」
　似たような不満を抱いているのだろうが、政府が決定し、五輪家当主が受諾した以上、洋史にこれを覆すことは出来ない。
　彼は五輪家の次期当主と定められた身だが、今はまだ「次期」でしかなく、この段階で彼一人が異を唱えたところで事態は変わらない。
　それならばせめて自分がついて行って姉の手助けをしよう、という決意が洋史の顔に表れていた。
「本当は」
　悲壮感を漂わせ始めた弟の気分を変えようと考えたのか、澪の口調が冗談めかしたものに一転した。
「真由美さんが弟のお嫁さんになってくださる姿を見たかったんですけど」
　雰囲気を変える効果は十分にあった。
　但し、意図したものとは逆方向に。
　この台詞は、直前の話題に続けてしまうと、俗に言う「死亡フラグ」の様で冗談として笑えなかった。
「姉さん……」
「ごめんなさい……」
　深刻の度合いが増した空気の中、沈痛な声音で注意されて、澪はしゅんと萎れてしまう。
「ま、まあ、その話は、洋史君が戻って来てから改めて」

ホストとしての義務感からか、弘一が早口でそうフォローすると、澪が弱々しいながら笑顔を取り戻し、洋史と真由美は表情の選択に窮した結果の無表情となった。

洋史と会ったのが「お久し振り」で無かった理由、澪が洋史について来たのではないかと真由美がチラッと考えた理由がこれだった。

洋史は真由美の婚約者候補の一人なのだ。洋史は五輪家の総領だから、真由美が洋史の婚約者候補、と言うべきかもしれないが。

同じ十師族直系で、年の近い男女、男の方が跡取りで女の方は跡目を継ぐ兄がいる長女、という好条件である。

実を言えば克人も同じ条件で、弘一は洋史か克人のどちらかに真由美を嫁がせたい、と考えていた。（将輝は年下ということで除外されていた）

無論本人の意思もあるし、他にも無碍に出来ないお見合い話が舞い込んで来るので、婚約、という段階には至っていないが、洋史と真由美は五輪・七草両家のセッティングで何度も食事をしたり観劇したりの間柄なのである。

――大人たちの思惑に反して当人は二人ともその気が無く、その所為で揃ってポーカーフェイスになってしまっている訳だが。

ただ、いつまでも「無言の行」では、雰囲気が悪くなるばかりだ、ということは真由美も弁えていた。

「ところで、いつご出立に？」

そう水を向けてみると、ホッとした雰囲気を隠し切れずに漏らしながら――こういう脇の甘いところが真由美には不満だった――洋史が答えた。

「今週末に佐世保へ向かいます。

出航は来週の金曜日と聞いています」

真由美の方はと言えば、不満に思ったことなど一厘一毛も覚らせない。

「それはまた、急なお話ですね……どうかお気をつけください。無事のお戻りをお待ちしております」

非の打ちどころが無い猫の覆面で武装して、真由美は座ったまま深く腰を折った。
「ありがとうございます」
真由美は視線を自分のつま先に向けたまま、これでお役御免だろう、と考えていた。
「実は、出征に先立ち、真由美さんにもお力添えをいただきたく……」
だから洋史がこう言い出したのを聞いて、顔を上げるスピードを調節するのに少し苦労しなければならなかった。
「私に、ですか？」
言外に、「私に出来ることなんてありませんよ」という意思を込めながら、わざと少し子供っぽく首を傾げてみる。
彼女の巌（いわお）の様な同級生なら気にも留めないだろうし、大人びた（生意気な、とも言う）下級生なら見透かして白けた眼差しを向けてくるような演技だが、洋史は動揺を隠し切れず目を泳がせていた。
「いえ、お力添えと言うより、お知恵を貸していただきたくて」
しかし澪には通用しなかった。やはり同性には効果が薄いのか、あるいは子供っぽく見えても流石は「お姉さん」ということなのか。
「真由美さんも仰ったように、何しろ急なお話ですから、下調べをする時間も不十分で」
「そう、ですね。解ります」
心底困った、という風情で頬に手を当てる澪に（こういう仕草は確かに大人の女性を感じさせるものだ、が、子供が背伸びをしているような印象が強く色気よりも微笑ましさをもたらしていた）、真由美は警戒感を押し隠して頷いた。
「魔法には魔法を以って対抗する。
魔法師には魔法師で。
それはきっと、共通だと思うんです」
共通、というのは、日本も中華連合も、国を問わず共通、という意味だろう。

そう解釈して、真由美は次の言葉を待った。
「姉が同行することは、あちらも十分、承知でしょう」
洋史の台詞に、真由美は首肯して同意を表す。
そもそも日本側に秘匿の意図は無く、尉官以上の氏名を連ねた参戦士官名簿に澪も洋史も交戦資格保有者として登載される予定なのだから。
抑止力はその存在が相手に伝わってこそのもの。
本当の意味での秘密兵器は、相手の譲歩を引き出す交渉材料とはなり得ない。
「姉の深淵（アビス）に海上兵力では分が悪い、ということは理解しているはずですから、あちらは空軍兵力と魔法の組合せを迎撃部隊の主力に据えるだろう、というのが我々の予想です」
移動系・戦略級魔法「深淵」は、半径数十メートルから数キロメートルにわたり、水面を球面状に陥没させる魔法。海上で「深淵」の発動領域に呑み込まれた艦艇は、急勾配の水面を滑り落ち、あるいは落下し、転覆し、魔法解除に伴う水平面復帰が引き起こす巨大な波に海の藻屑と化す。半径一キロの「深淵」は最大で深さ一キロの半球面を作り出し、海中の潜水艦を容易に巻き込む。
彼我の距離が近過ぎると、押し退けられた水が魔法を解除する前に押し寄せて、こちらもダメージを被ってしまうという欠点はあるものの、数十キロレベルの射程を持つ澪の戦略級魔法は海上・海中兵力にとって天敵と言えるものだ。
しかし同時に、澪の「深淵」は航空兵力に対して全くの無力である。
連続水面にしか発動できず、陸上拠点の攻撃に使用する為には予め十分な地下水を注入しておく必要があるなど、使用に際しての制約も多い。
洋史が口にした敵軍の布陣は、他の選択肢が無いものだった。
「航空兵力の方は国防軍にお任せするとして、魔法師対策は僕たちで考えなければならない問題です」

これも、異論の唱えようが無い事実。
形式はともかく実質は、政府に所属していようと軍に所属していようと民間に所属していようと、日本国内の魔法師は現代魔法師も古式魔法師も十師族を頂点とする魔法師のコミュニティに所属し、その自治に従っている。
国防軍所属の魔法師も当然同行するだろうが、彼らもまた「僕たち」の範疇に含まれるのだ。
「真由美さんは横浜で敵の魔法と敵を撃退した味方の魔法を見ていますよね？
敵が使う魔法の傾向と、敵に対して有効な魔法についてご存知のことを教えていただきたいんです」
実に難しく、厄介な質問だった。
情報提供の必要性は疑いようも無く、断ることは出来ないし断ることでもない。
しかし、である。
「……敵の魔法を見た、といっても、私はずっと後ろの方に居ましたし、実際に矛を交えたのはヘリの上からの狙撃、一度だけですから……」
実際には直立戦車の破壊と合わせて二回だが、真由美は嘘をついた訳ではなく、単に、印象に残っていないだけだった。
「ですが、最後まで一般人の脱出に尽力されていたとか」
一般人とは、非魔法師のこと。
魔法師を特別な存在と見做（みな）し、非魔法師を無力な存在と断ずる偏見は、双方にとって不幸なだけだと真由美は常々感じているが、今はそれを指摘する場面ではない。
「最後まで、というのは誤解があるのですが……ヘリを待っていた間も、敵を食い止めてくれたのは同級生や下級生ですし」
「では、その方々を紹介していただけませんか。実際に中華連合の魔法師と交戦した一高生を」
そう言われて真っ先に思い浮かべたのは、大人びた、生意気な、

だけど頼りになる下級生のこと。
大型トラックを塵に変え、眩いサイオンの輝きを纏い、奇跡に等しい治癒の技を揮った一年生。
しかし、直後、ほぼ同時に蘇った「国家機密」の一言が、彼女の舌を麻痺させた。
「真由美さん？」
口ごもってしまった真由美を、訝しげな目で見詰める澪。
不審を表しているのは澪だけではなかった。
洋史はともかく、父親に疑念を持たれたことに真由美は焦りを覚えた。
「あ、いえ……そうですね、十文字家をお訪ねになれば、詳しいお話を聴けると思います」
「克人君、ですか……」
洋史は決して性格が悪いという訳ではなく、寧ろ好青年だが、普通の意味で良い人すぎる、と以前より真由美は感じていた。
洋史が二歳年下の少年に対して競争心と劣等感を抱いているのは知っていたし、無理もないことだと理解もしているが、今の文脈で嫉妬を見せるのは（年下の少女に見抜かれるのは）、余り褒められたものではない。
「あと、お役に立てそうなのは、百家の渡辺摩利、五十里啓、千代田花音、といったところでしょうか。
皆には私の方から連絡しておきますが」
「お願いします」
まあ、相手の欠点ばかりあげつらっても、こちらが愉快ではない気分になるばかりだ。
真由美は事務的に名前を挙げて、面談のセッティングを約束した。

◇◆◇◆◇◆◇

あの後、その場ですぐに摩利、啓、花音へ電話を掛け（克人は不

在だった）、全員のアポイントメントを取ってから、真由美は父親と共に五輪家の姉弟を送り出した。

真由美の本音は、ここで一息つきたいところだったが、父親の表情を窺うに、解放されるのはもう少し先になりそうだ。

「真由美、少し話をしたいんだが、構わないかい？」

案の定、エントランスポーチ（「ポーチ」と言うより「車寄せ」と表現した方が相応しいサイズだ）からホールに戻って来たところで、弘一が真由美を呼び止めた。

「書斎で話そう」

返事を待たず、さっさと歩き出す。

弘一は前世紀後半のエリートビジネスマンを彷彿とさせる外見をしている。どちらかと言えば線が細い身体つきで、威厳より人当たりの良さを感じさせる顔つきをしており口調もそれに応じて柔らかだが、家族に有無を言わさぬ家長主義的なところは七草弘一も十師族当主の例に漏れない。

そして、無意味に反抗的な態度を取るのは真由美のスタイルではない。

普段着ではまず身に着けない、裾の長い窮屈なワンピース姿のまま、真由美は父親の背中に続いた。

書斎にはクラシックな本棚と重厚なデスクと、背もたれの高い革張りの椅子が一脚、置かれているだけだ

弘一はさっさと椅子に腰掛け、必然的に真由美は立ったまま父親の言葉を聞くことになる。

これはいつものことなので、真由美も今更、気にはしない。

「さっき真由美があげた名前の中に、一年生がいなかったようだが」

弘一は二メートル程の距離を置いて立つ娘に、前置きも無くそう切り出した。

「千葉家のお嬢さんや吉田家の次男も中々活躍したと聞いているが？」

真由美は心の中で「狸親父」と呟いた。
弘一の容姿は狸というよりは狐、狐というよりは狼なのだが、自分の父親に関する限り、外見は中身を表していないと真由美は確信している。
「何分まだ一年生ですから、洋史さんや澪さんに上手く説明できないのでは、と思いまして」
(どうせ名倉さんから詳しい報告を受けているんでしょ)
なるほど、と呟いている父親を見ながら、真由美はそんなことを考えていた。
大体、昨日も同じような切り口で散々「訊問」を受けたばかりだというのに、しつこいところは狸というより猟犬ね、と心の中で毒づく。
「しかし、一年生とは思えない奮闘振りだったそうじゃないか。特に彼女、今年の九校戦でも大活躍した――」
「深雪さんですか？」
「そうそう、確か、司波深雪くんだったね」
薄い色のついた伊達眼鏡のフレームが、キラッと光を放った、様な気がした。
この眼鏡は右目の義眼を隠す為の物だが、何か特殊なギミックが仕込まれているのではないか、と真由美は疑いを持つことがある。
「とても優秀な女の子だそうだね。
今年の主席入学で生徒会副会長、順当に行けば来年には真由美と同じ生徒会長か」
「ええ、とっても優秀な子ですよ。それに、とても綺麗(きれい)な子です」
「ほう、真由美の目から見てもそう思うのかい？」
「女の子の目で見ても、という意味ですか？
そうですね、深雪さんの美しさは性別を超えていると思います」
弘一の唇が少し綻(ほころ)んだ。
眼鏡の奥の左目に、色欲の濁りが見られない。
その事が余計に、真由美の警戒心を刺激した。

「それはそれは……『インフェルノ』や『ニブルヘイム』といった高難度魔法を使いこなすばかりでなく、非常に強力で特殊な系統外魔法まで使えるということだし……一度会ってみたいものだ。

我が家にご招待できないかな？」

「さあ……それは、訊いてみなければ」

「そうだね、都合を訊いてみてくれないか。

そう言えば確か、深雪さんにはお兄さんがいただろう？

九校戦の時には真由美も力になってもらったと言ってたじゃないか。

良い機会だから、お礼も兼ねて一緒にご招待したら良い」

人当たりの良い笑顔が心の裡を読ませない。

色のついたレンズが瞳の中の思惑を読み取らせない。

だがそこは生まれた時からの付き合いだ。

十八歳にもなれば、見透かされてばかりの一方的な関係でもなくなる。

（これが狙いなのね……！）

確かに真由美は、ヘリの中で名倉に秘密を守ることを約束させた。

達也の特殊な魔法に関するエピソードは、父親の耳に入っていない、はずだ。

しかし、全く何も伝わっていないとも思っていない。

楽観していない。

海千山千の名倉は守秘義務に反しないやり方で雇い主に対して隠された事実を示唆しているだろうし、百戦錬磨の父はそこから得られる限りの情報を発掘しているはずだ。

父は彼を――司波達也を疑っている。

それも、自分が知らない、思い至らない「何か」について。

真由美の中にはそれを知りたいという気持ちも燻っていたが、秘密に触れる忌避感の方が今はまだ強かった。

秘密に触れて、今の人間関係が壊れてしまうことを無意識に怖れていた。

「それも、訊いてみないと……」
そう答えを返すのが、今の彼女には精一杯だった。

◇◆◇◆◇◆◇

真由美を下がらせた書斎で、しばらくデスクに向かっていた七草家当主は、ドアをノックする小さな音に顔を上げた。
「入れ」
書斎の扉は応接間の扉と違って、スピーカーを仕込んでいない。呟くような小さな声が、分厚い扉と壁を通して廊下に届いたとは、常識的に考えれば、思えない。
だがノックが繰り返されることは無く、書斎の扉は音も無く開いた。
入ってきたのは、白髪をキレイに撫で付けた初老の執事、名倉だった。
「調べはついたか」
断片的に過ぎる問い掛けだったが、名倉は主の許へ歩み寄ると、恭しく、無言でメモリーカードを差し出した。
弘一は、データがマイクロメートルレベルの微細パターンで印刷された紙のカードをスキャナにセットし、デスクに広げたディスプレイに解読された文書を呼び出した。
「１０１旅団独立魔装大隊か……厄介だな。確か、四葉が熱心にアプローチしている部隊だったか」
「度々接触しているようですが、その目的は不明です」
「我々が軍に接触する目的は一つしかないと思うが？」
ここで弘一が「我々」と言っているのは、七草家に止まらず、十師族に止まらず、国内の魔法師、全般のことだ。
この国の魔法師は、地位を求めない。
国家に裏付けられた「公式の」権力を手にすることを、十師族により禁じられている。

その代わり、政府や軍や警察や財界といった、様々な意味で権力を持つ者に魔法のスキルを提供することで自らの存続する基盤を得る。

使い捨ての道具ではなく使われ続ける道具となり、不可欠の道具となることで、主を操る僕と成り上がる。

その為には「使われ続ける」こと、「必要とされること」が必要であり、継続的な協力関係が必要だ。

それを得るには、力量だけでは不十分。

鋭利な剣は、その刃が反転して自らに向かう恐怖をも齎すもの。

継続的な協力関係は、裏切らないという信頼関係が有ってこそのものだ。

魔法師が軍に接触しているならば、それは信頼を獲得し、維持すること、協力関係を構築し、より堅固なものとすることを目的としている、と考えるのが、そのような事情に通じている彼らの常識だ。

しかし、名倉は主人の言葉に頷かなかった。

「独立魔装大隊は旅団長・佐伯少将が、十師族から独立した魔法戦力を備えることを目的に創設したもの。

隊長の風間少佐は九島退役少将、ひいては十師族に批判的な人物として知られております。

いかに異端の四葉といえど、彼の部隊を取り込むのは難しいのではないかと」

名倉の言葉に、弘一は眉を顰めた。

「……初めて聞いたな」

「これまで独立魔装大隊が七草家の利害に触れることはございませんでした故」

では何故そんなことを知っているのだ、という質問を弘一は口元で引っ込めた。

今回調べた、と釈明されればそれまでだし、自分に長く仕えている相手であっても、弘一は名倉を七草の身内とは考えていない。それはきっと、相手も同じなのだろう。

「……ならば何故、四葉は独立魔装大隊に接触している？」
訊ねたのは別の事柄。
そして質問した直後、弘一は自分でその答えを得ていた。
「旦那様のお考えのとおりかと」
名倉に読心のスキルは無い。
弘一にもそんなスキルは無い。
だが確かめてみるまでも無く、名倉が自分と同じ推定に至っていることを弘一は確信していた。
弘一はスキャナから抜き取ったカードを右手の人差し指と中指で挟んで、そのまま軽く手を振った。
放り投げられた紙のカードが、空中でポッと光を放って一瞬で燃え尽きる。
灰がゴミ箱に収まる前に、名倉は一礼して背を向けた。

◇◆◇◆◇◆◇

七草の屋敷の広大な敷地の端に、細長い直方体を基調とした建物がある。
シンプルでありながら無骨ではないその建物は、七草家の私設射撃練習場だった。
七草家の、といっても、事実上、真由美の為に作られた施設だ。
五年前、真由美が全国レベルの大会で初めてトロフィーを獲った時、その記念にと建てられた物。
朝から気疲れを溜め込んだ真由美は、昼食後すぐこのシューティングレンジにこもって、もう三時間が過ぎていた。
細長い杖にグリップをつけたような形状の特化型ＣＡＤを構え、ひたすらターゲットを撃つ。
撃ち抜く。
破壊する。
実銃を使っているのではなく魔法による射撃だから反動で手を痛

めるということはないだろうが、精神的な疲労は寧ろ激しいはずだ。
だが散々鬱屈をため込んでいた真由美には、その疲労すら心地良かった。
ペース配分も考えずにひたすら撃ちまくっていると、気がついた時にはターゲットのストックが尽きていた。（正確には、ターゲットがいつまで待っても出て来ないのを不審に思って、ようやくストック切れのメッセージに気がついたのである）
時計に目をやって今更ながら時間の経過に驚き、ＣＡＤをラックに立てかけて後片付けに取り掛かる。
――取り掛かろうと、した。
「お姉ちゃん、ただいま！」
しかし、情報端末を兼ねたゴーグルを外したところで不意に後ろから抱きつかれて、取り掛かる前から予定変更を余儀なくされてしまった。
「香澄ちゃん、いきなり飛びついたりしては、お姉さまのご迷惑よ」
「チェッ、泉美はホント、口うるさいんだから」
「香澄ちゃんがはしたないからです」
迷惑というか、単によろけただけなのだが、すぐに離れてくれたのは（引き剥がしてくれたのは）正直ありがたかった。
「香澄ちゃん、泉美ちゃん、おかえりなさい」
双子がいつもの口げんか――じゃれ合い、とも言う――をしている間に体勢を立て直して、真由美は改めて妹たちを迎えた。
「ただいまです、お姉さま」
手を揃えて丁寧に一礼した少女が、双子の中で妹の方の七草泉美（いずみ）。肩に掛かるストレートボブの、フェミニンな少女だ。
最初に抱きついてきたのが真由美の妹で泉美の双子の姉、七草香澄（かすみ）。ショートカットの、泉美とは対照的にボーイッシュな少女である。
この二人は一卵性双生児だが、ファッションや雰囲気が正反対な為、普通にしていれば見間違えることはまず無い。

「何の練習をしてたの？　実体弾の移動魔法じゃないよね。仮想領域魔法？」

「仮想領域伸展型の貫通魔法でしょうか？　お姉さま、最近よくこのタイプの魔法を練習されてますわよね？」

ただ魔法に対する感性の鋭さは共通している。

真由美はどちらかと言えば魔法行使にあたり理論より感性を優先する方だが、この双子も同じく感性を重視するタイプ。発動された術式を見抜く直感的な洞察力は、もしかしたら真由美より優れているかもしれない。

今も、ターゲットに残された「弾痕」から、使用された魔法を正確に見抜いてみせた。

真由美はこの妹たちを可愛がり過ぎなくらい可愛がっており、二人も真由美に良く懐いている。

しかし最近はそういう年頃なのか、少し生意気なところが目に付くようになっていた。

「それにしてもお姉さま、随分と撃ちまくられましたわね」

ターゲットの残数がゼロになっているのを目敏く見留め、泉美が少し呆れたような声を出すと、

「さては、洋史さんが来たんだね？」

香澄がにんまりと笑ってそう言った。

「お姉ちゃん、洋史さんが来ると決まって機嫌悪くなるもんね」

動揺を覚られないよう咄嗟に表情を消したが、隠し切れたとは真由美も思っていない。

この二人はとにかく、勘が鋭いのだ。

それとも、自分が分かり易すぎなのだろうか？　と、真由美は少しブルーになった。

「ボクは洋史さん、そんなに悪い人じゃないと思うけどなぁ」

「悪い人じゃありませんけど、それだけです。

あんな頼りない男（ひと）はお姉さまに相応しくありません」

「泉美は採点が辛すぎだよ。

じゃあ、どんな人だったらいいのさ。
例えば克人さんとか？」
「チョッと香澄ちゃん、十文字くんと私は別に」
「そうですね、器量に不足はありませんけど、乙女心にご理解がないと申しましょうか、そこが些か残念なところですわね」
何故か――と真由美は本気で思っている――克人の名前が出て来て、真由美は慌てて妹たちの「誤解」を解こうとしたのだが、泉美も香澄も聞いていなかった。
「ですわね、って、ボク相手にキャラ作ってどうするのさ……
それはともかく、男の人にオトメ心が理解できないのは当たり前だと思うけど？
ボクたちだって男の人が何を考えているのかなんて分からないんだからさ」
「甘いっ！　甘すぎですわ、香澄ちゃん！
乙女が男心を理解するのは恋人同士になった後で十分なんです！
乙女のハートを射止める為には、まず乙女心を理解していただかなくては」
「乙女のハートって……いいけど。
じゃあ要するに、器量以外の何があれば良いわけ？」
「やはり愛……は、いきなりハードルが高過ぎですから、熱い恋心でしょうか」
「生まれた時から一緒だけど、泉美がこんな少女趣味（ロマンチスト）だとは知らなかったよ。
お堅いだけかと思ってた」
「今『ロマンチスト』におかしな字を当てていたような気がするのですけど……まあ、いいです。
それに、わたくしがロマンチストなのではなく、香澄ちゃんが気にし無さ過ぎなだけです」
「ハイハイ、どうせボクは女の子らしくないですよ。
で、結局、お姉ちゃんに恋してればいいの？

服部さんとか？」
「香澄ちゃん！　貴女が何故はんぞーくんのことを知ってるの！？」
いつの間にか（と言うか最初から）置いてきぼりにされていた真由美も、流石に黙っていられなかった。
真由美には、妹たちに服部を紹介した記憶がまるで無かった。
「お姉さまにまとわりつく悪い虫のことでしたら、知っていて当然です」
「泉美ちゃん、まさか貴女たち、覗き見なんてしてないでしょうね！？
て言うか、私が誰とお付き合いするとか、もういいから！」
「やだなぁ、お姉ちゃん。ボクたちだって学校があるんだから、自分で覗き見になんて行けるわけ無いでしょ」
（他の人を使ってだったらやるの！？）
心の中の悲鳴は、もちろん他人には聞こえない。
いや、もしかしたらこの双子には何らかの形で聞こえていたかもしれないが、そんな素振りはまるで見せない。
「それにわたくしたちはお姉さまのことを心配しているのですよ？お姉さまったらこんなにお美しいのに、十八歳にもなって恋人の一人もいらっしゃらないなんて……
もうすぐ高校も卒業ですのに」
「それは出来ないんじゃなく私の立場として……」
作らないだけで、と言いかけて、それが随分と言い訳がましく聞こえることに気づいた。
しかも結構「情けない」あるいは「惨（みじ）めな」類の言い訳だ。
「だ、大体、男の子とお付き合いしたことがないのは貴女たちも同じじゃないの」
で、急遽話題を変えてみたのだが、これもかなり情けない台詞であることに真由美は気づかなかった。
――妹たちからカウンターを喰らうまでは。
「そこはほら、ボクたち、まだ十五歳だし」

「告白なら今日もお二人ほど。丁重にお断りいたしましたが。
なかなか、これは、という方には巡り会えないものですね」
「お堅いんだよ、泉美は。
とりあえず付き合ってみりゃいいじゃん」
「香澄ちゃんは危なっかし過ぎます。
香澄ちゃんのボーイフレンドの皆さんが全員、香澄ちゃんのことを『ただのお友達』だと思っている訳でも無いでしょうに……
そういうお気楽な心得だと、いつか痛い目に遭いますよ」
自分の情けなさを自覚して、妹たちの会話をＢＧＭに、真由美は地味に落ち込んでいた。

◇◆◇◆◇◆◇

十一月四日。
ようやく授業が再開した日の昼休み。
「会長、じゃなくて、真由美さん。
何だか、随分お疲れみたいですけど」
事後処理の手伝いにと生徒会室を訪れた真由美は、あずさから心配そうな目を向けられていた。
「ん、まあね。
でも大丈夫よ」
「来週まで休まれていた方が良かったのでは……」
今日は金曜日。
土曜日も授業があるとはいえ、事実上の自由登校になっている三年生は、今日明日と自宅学習にしている生徒も少なくない。
「自分で思っている以上に疲れがたまっている、ってこともありますし」
「そうね。だから学校に出て来たの」
真由美の回答に、あずさはキョトンとした顔で首を傾げている。
まあ、家にいると余計に疲れるから学校に出て来た、なんて他人

には中々理解できないものだろう。
説明するのも何だか恥ずかしいことのような気がする。
だから真由美は、あずさの疑問には答えず、片手を口に当て「ふわぁ」と小さくあくびをした。
両手をテーブルの上に重ねる。
頬をその上に乗せる。
突然テーブルに突っ伏して居眠りを始めた真由美に、あずさが目を丸くしている気配がしたが、
真由美は気にせず、すやすやと寝息を立て始めた。

とある幕間劇～お嬢様の華麗な（？）休日～（後書き）

この番外編は第五章公開時に「魔法科高校の少年少女」の方へ移動する予定でしたが、構成について再検討中ですので当面このままにさせていただきます。

5－（1）　交換留学（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

5－（1）　交換留学

北アメリカ合衆国（アメリカ合衆国の北ではなく、北アメリカ大陸を版図とする合衆国）テキサス州ダラス郊外、ダラス国立加速器研究所。全長三十キロメートルの線形粒子加速器で今、余剰次元理論に基づく極小ブラックホール生成・蒸発実験が行われようとしていた。

準備は二年前に完了していながら、そのリスクが読み切れない事を理由に中々ゴーサインが出なかったこの実験の背中を押したのは、先月末に極東で起こった事件だった。

朝鮮半島南端において軍事都市と艦隊を一瞬で消滅させた大爆発。それは単なる事件ではなく、「大」事件と言っても過言ではない。破壊の規模の故ではなく、推定される破壊の手段の故に。

国防総省の科学者チームは、喧々諤々の議論の結果、この爆発を質量のエネルギー変換によるものと結論付けた。三年前には一部の学者による仮説に過ぎなかったものが、今回は科学者たちの一致した見解となった。

爆発時にニュートリノの発生が観測されなかったことから対消滅反応によるものではない、という但し書きを付けて。科学者たちは今回ようやく対消滅反応によるものではない質量・エネルギー変換の実在を認める気になったという訳だ。

その意味するところは、科学技術によるものであれ魔法技術によるものであれ、自分たちが知らない方法で高エネルギー爆発を引き起こす技術を実用化した者がいるということに他ならない。

この帰結は、ＵＳＮＡ首脳部に焦りをもたらした。

仮にそれが魔法によるものであるなら、同じことが出来ないのは仕方が無い。

体系化が進んでいるといっても、魔法はやはり属人的なものだからだ。

だが一体どういう仕組みで引き起こされたものなのかさえ分からないとなれば、対抗策の検討すら出来ない。一度（ひとたび）その牙が自分に向けられれば、為すがままに蹂躙されるしかない。

それは、悪夢と言ってもよかった。

質量・エネルギー変換システムの手掛かりだけでも掴めないか…それが極小ブラックホール生成・蒸発実験の実行を後押しする鍵となった。

ブラックホールの蒸発による質量・エネルギー変換――ホーキング輻射においても、ニュートリノの発生は予想されている。

しかし、対消滅反応時のニュートリノ発生は観測済みの事実であり、ホーキング輻射に伴うニュートリノ発生は観測未済の仮説である。

可能性は、ゼロではない。

そんな儚い根拠で危険な実験にゴーサインを出す程、この時のＵＳＮＡ首脳部は精神的に追い詰められていた。

追い詰められて、狂っていたのだ。

正気であれば、冒す必要の無く、冒すことも無かったリスク。

その報いが彼らに、否、世界に襲い掛かろうとしていた。

誰にも気づかれぬまま、ひっそりと、忍び寄っていた。

◇◆◇◆◇◆◇

西暦二〇九五年も残すところ一ヶ月となった。

思えば、目まぐるしい一年だった。

四月にテロリスト、八月に国際犯罪シンジケート、十月には外国の侵略と戦ったのだ。

激動、というにも程がある。

だが、達也にはまだ、今年一年をしみじみと振り返る余裕は無い。

まだ一ヶ月ある、何事も終わってみなければ分からない、という処世訓的な意味ではなく、もっと差し迫って現実的に。

「……ぐぁーっ！　訳分かんねぇ！」
「五月蠅い！　叫ぶな！　鬱陶しい！」
「レ、レオくんもエリカちゃんも、落ち着いて……」
学生（あるいは生徒）にとって忌まわしき天敵。
避けられぬ障碍。
乗り越えなければならない壁。
定期試験がやって来るのだ。

いつものメンバーが集まっているのは雫の家――と言うか、屋敷である。
達也、深雪、エリカ、レオ、美月、幹比古、ほのか、雫、一人も欠けることなく顔を揃えたのは、定期試験に備えた勉強会の為だった。
まあ勉強会と言っても、筆記試験に限って言えばこのメンバーのほとんどが成績優秀者。
唯一の例外と言えるレオも、単に平凡というだけで赤点を心配する必要は無い。（赤点を心配しなければならないのは寧ろ実技の方だ）
時々奇声が上がるものの、概ね和やかなお茶会の雰囲気だった。
この、雫の爆弾発言までは。
「えっ？　雫、もう一回言ってくれない？」
「実はアメリカに留学することになった」
慌てて訊き返したほのかに、一言一句変わらぬ台詞を全く同じ口調で雫は答えた。
「留学なんて出来たの？」
エリカの発言は雫の（語）学力を疑ってのものではない。
この時代、ハイレベルの魔法師は、遺伝子の流出＝軍事資源の流出を避ける為に、政府によって海外渡航を非公式かつ実質的に制限（禁止）されている。
ＵＳＮＡは表面上同盟国だが、西太平洋地域における潜在的競合

国。
　そのアメリカへ留学など、普通に考えれば、認められるものではない。
「ん、何でか、許可が下りた。お父さんが言うには、交換留学だから、らしいけど」
「交換留学だったら何故ＯＫが出るんでしょう？」
「さあ？」
　美月の質問はもっともなものであり、一緒になって首を傾げている雫を責めるのは酷というものだろう。
　交換留学だから構わない、というロジックは、達也にもさっぱり理解できなかった。
「期間は？　いつ出発するんだ？」
　無理に理解しようとしても、情報がまるで足りていない。
　達也は無駄な思考を放棄して、当面の事を考えることにした。
「年が明けてすぐに。期間は、三ヶ月」
「三ヶ月なんだ……ビックリさせないでよ」
　雫の答えを聞いて、ほのかが胸を撫で下ろした。
　どうやら彼女は、もっと長期間の留学だと考えていたようだ。
　達也の「常識」では、三ヶ月でも長過ぎる（政府がよく認めたな、という意味で）くらいだったのだが。
　しかし、それもまたどうでもいい事であり。
「じゃあ送別会をしなきゃな」
　達也は「当面の事」を友人たちに提案した。

◇◆◇◆◇◆◇

　十二月は「師走」の語源のとおり、慌しく過ぎていった。（但し師走の「師」は魔法師の「師」ではない。言うまでもないことだが、

念の為。また万葉以前は師走という字が見られないことを以って広く流布されている師走の語源を否定する向きもあるようだが、それは「しはす」の語源が「師馳せ」ではないという意味であって、「師走」の語源を否定するものではない。閑話休題）

定期試験の結果はまたしても、筆記試験で達也が圧倒的なトップを取り一科生（の男子）を盛大に口惜しがらせたのだが、ここでは横に置く。

十二月二十四日、土曜日。今日は二学期最後の日であり、クリスマスイブである。

三度目の世界大戦を経た今も、日本人は相変わらず宗教に対して無頓着だ。それはきっと無宗教という意味ではなく、潜在意識下において一神教の絶対神すらも神々の一柱として認識しているということなのだろう。だから正月もクリスマスも、さして変わらぬ感覚で祝う。

街はクリスマス一色。

クリスマス商戦一色、と言い換えた方が、もしかしたら正確かもしれないが、そんな風に斜に構えて一人あぶれている方が余程、愚かしいというもの。誰にも相手をしてもらえないというならともかく、可愛い（！）女の子に囲まれていながら天邪鬼を気取って、楽しんでいる友人たちに水を差すのは単なるバカのやることだ。（もちろん、一般的には男性に当てはまることで、女の子であれば「カッコイイ男の子に囲まれて」と言うべきかもしれない）

そう……例え「送別会」のはずなのに、日にちをわざわざ十二月二十四日に持って来て、目の前には大きな生クリームのホールケーキが置かれていて、ケーキの上には「Ｍｅｒｒｙ　Ｘｍａｓ」と書かれたホワイトチョコレートの板が飾られていても、それを「おかしい」などと言ってはならないのである。……そもそもこの店の流儀に従えば「Ｘｍａｓ」ではなく「Ｗｅｉｈｎａｃｈｔｅｎ」のはずだが、これもまあ、ご愛嬌というべきか。

「お兄様、何か、気掛かりなことでも？」

制服なのに、艶やかにドレスアップしているような華やかさを振り撒く妹に、達也は何でもないよ、と首を振った。

そう、何でもないこと、でなければならない。主賓に不快感を与えるようなことがあってはならない。今日の彼は、もてなす側なのだから。

「飲み物は行き渡った？

じゃあ、いささか送別会の趣旨とは異なるけど、折角ケーキも用意してもらったことだし、乾杯はこのフレーズで行こうか……

メリー・クリスマス」

「メリー・クリスマス！」

落ち着いた声で乾杯の音頭をとった達也に、はっちゃけた歓声で応えて、友人たちはグラスを高く突き上げた。

喫茶店「アイネ・ブリーゼ」の入り口には「本日貸切」の札が掛かっていた。

◇◆◇◆◇◆◇

太平洋を隔てた北米大陸中部では、まだクリスマスイブのイブの夜。そろそろ日付が二十四日に変わろうとしているところだ。

クリスマスを単なるイベントの一つと捉えている者が大多数を占める日本と比べて、二十年の長きに渡る戦争を経た後でも、あるいは戦争を経た後だからこそ、アメリカ人たちは、戦後新たに「アメリカ人」になった人々も含めて、遥かに真摯に、敬虔に、あるいは熱心に、クリスマスを迎える。人々は明日のクリスマスイブに備えて、早目に、ぐっすりと眠っている――はずだった。

どんなことにも例外は付き物、と切り捨ててしまえばそれまでだが、クリスマスイブの前日深夜、ダラスの街角に暗躍する人影が在った。

ビルの屋上から屋上へ、跳び移って行く人の影。

空を飛んで不審者を包囲する複数の人物。まだ普及が始まったばかりの飛行魔法特化型ＣＡＤ（飛行デバイス）を使用しているところを見ると、警察、あるいは軍の魔法師か。

「止まりなさい、アルフレッド・フォーマルハウト中尉！最早逃げ切れないのは分かっているはずです！」

そして、逃走者の正面に立ち塞がる小柄な人影。

投降を呼びかける、甲高い少女の声。

その小さな身体に何を見たのか、逃走者はピタリと足を止めた。

「……一体どうしたんですか、フレディ。一等星のコードを与えられた貴方が、なぜ隊を脱走したりしたんですか？」

居丈高な語調から一転、その声に相応しいとも言える、不安と戸惑いを含んだ少し子供っぽい口調で少女が訊ねた。

「……」

しかし、答えは返らない。

「この街で起きている連続焼殺事件も、貴方のバイロキネシスによるもの、と言う者がいます。

まさか、そんなことはしていませんよね？」

「……」

「フレディ、答えて下さい！」

答えは、言葉以外で返って来た。

少女が咄嗟に、飛び退った。

肩に巻いていたストールを残して。

大きく広がり少女の身体を隠したストールが、何の火種も無く燃え上がり、燃え尽きる。

バイロキネシス――発火念力。

体系化された現代魔法ではなく、かつて超能力と呼ばれた属人的異能力。

少女がブラックオリーブ（紫黒色）の制服の上にストールを纏っていたのは、そして男を包囲する者たちが全員、思い思いにケープやマントといった脱ぎやすい防寒具を身に着けているのは、本来の

用途、寒さを防ぐ為ではなく、視線をキーとして発動するこの男の能力から身を守る為だった。

ストールの炎が消えると同時に、男の周りから一切の光が消えた。対象を中心とする一定の相対距離で光の進行方向を逆転させることで、外界から光が入らない、完全な闇の中に閉じ込める領域魔法「ミラー・ケージ」。

視線を発動キーとする異能を封じ込める為の防御術式。

「フォーマルハウト中尉、連邦軍刑法特別条項に基づくスターズ総隊長の権限により、貴方を処断します！」

悲鳴の様な、宣告。

別の魔法で闇の檻から動けないよう拘束されたフォーマルハウト中尉に対して、スターズ総隊長アンジー・シリウス少佐はサイレンサーのついた自動拳銃を向けた。

強力な情報強化により一切の魔法干渉が無効化された銃弾は、無明結界の中に捕らわれたフォーマルハウト中尉の心臓を一発で貫いた。

◇◆◇◆◇◆◇

送別会、と言っても春になれば再会できると分かっている旅立ち、しかも自分たちには普通なら認められない海外留学となれば、寂しさより興味が勝るのも仕方の無いことかもしれない。

「ねっ、留学先はアメリカの何処？」

「バークレー」

エリカの質問に対する雫の答えは愛想のない地名の一単語だったが、これは雫が不愉快に感じているからではなく、彼女の個性だ。

「ボストンじゃないのね」

日本人魔法師の間には、アメリカの現代魔法研究の中心地はボストンという認識が根強くある。深雪のこの発言も、そういう背景に発するものだった。

「東海岸は雰囲気が良くないらしくて」
「ああ、『人間主義者』が騒いでるんだっけ。最近そういうニュースを良く見るよね」
雫の回答に幹比古が同調する。
「魔女狩りの次は『魔法師狩り』かよ。歴史は繰り返すって言うけど、バカげた話だよな」
レオが冷めた声で吐き捨てると、宥めるような口調で達也がフォローした。
「全くの繰り返しって訳でも無いんじゃないか。十七世紀の魔女狩りの背後にどんな意図があったのかは分からないが、ここ最近の『魔法師狩り』は新白人主義と根が同じみたいだからな。
だがまあ確かに、東海岸は避けた方がいいかもしれない」
フォローにもなっていないフォローだったが。
「それは存じませんでした」
「活動団体のメンバーリストを眺めていると結構高い確率で同じ名前が見つかるからね。
メンバーリスト自体、表で出回っている物じゃないから知らなくても無理はないよ」
「達也くんの話の方がよっぽど犯罪くさいんですけど……暗い話はヤメヤメ」
わざとおどけて首を振ったエリカに、達也と深雪は苦笑いを浮かべて頷いた。
確かに少し、場にそぐわないキナ臭い話だったと自覚したのである。
「代わりに来る子の事は分かっているの？」
雰囲気を変える責任を感じたのか、深雪の話題転換は少し唐突なものだった。
「代わり？」
「交換留学なのよね？」

案の定、すぐにはピンと来なかったようだが、深雪に重ねて訊ねられ、雫は「ああ」という表情を浮かべた。――相変わらず、分かり難い表情の変化だったが。
「同い年の女の子らしいよ」
「それ以上のことは分からないか」
「うん」
それだけ？　という顔が並ぶ中で、達也が笑いながら訊ねると、雫は当然とばかり頷いた。
「……そうですよね。
自分の代わりにどんな子が来るのか、いくら気になっても教えてくれる相手がいませんものね」
美月がそう呟いて、この話題はそれきりになった。

今日送別会を開いていることからして既に分かっていることだが、ここに集まっている八人が八人とも、他にクリスマス・イブの予定が無い。寂しさに身を寄せ合い友情を一層深める、というマゾヒスティックな誘惑に惹かれないでもなかったが（と言っても全員ではないが）、制服のままで夜更けまで騒ぐ訳にも行かない。
「いつまでも粘っているとマスターに悪いし」
無邪気、を装った邪気だらけの台詞でマスターを沈没させて（誰が言ったのかは敢えて明らかにしない）、八人は銘々（めいめい）に家路を辿った。
ほのかが雫と同じ電車（キャビネット）に乗ったのは、雫の家に泊まるからだろう。魔法科高校では珍しくもない話だが、ほのかも両親と縁が薄いようだ。
エリカ、レオ、美月、幹比古は一人ずつ別々の車両に乗り込んだ。少しくらいハプニングが起こる可能性を期待しないでもなかったが、自分が期待に背いて相手に期待するのは虫が良いというものだろう。
それが、誰とは言わないが。
そして達也と深雪は、番狂わせを期待しようもなく予想を裏切る

はずもなく、二人乗りのキャビネットに仲良く隣り合わせで家に帰った。キャビネットの中は建前上プライバシー空間、とは言うものの、「壁に耳あり」という諺を達也は忘れたことがない。込み入った話をする時はいつも、固有名詞をぼかしている。それは深雪も弁えており、物問いたげな雰囲気を漂わせながら、実際に話題を振って来たのは自宅の敷居をまたいで居間に落ち着いた後だった。

「今回の雫の留学、わたしにはどうにも奇妙な話に思えるのですが」

お互い部屋着に着替え、深雪が二人分のコーヒーを用意してソファに並んで腰掛けてから、深雪がそう切り出した。

「腑に落ちない？」

「ええ……そうですね。納得できないところがある、というのが正直なところです」

コーヒーカップから口を離した達也に無言で促されて、深雪は躊躇いがちに自らが思う疑問点を並べた。

「まず雫ほどの魔法資質を持ちながら留学が認められた、という点が不自然です。

先程までは魔法を学ぶ者としての留学ではなく、大実業家の娘としての留学かと納得しておりましたが、それならば代わりに留学してくる相手のことを知らないというのはおかしな話です。

考えてみれば、この時期にいきなり留学の話が持ち上がるというのも、裏があるような気がしてなりません。

何だかまるで……」

「マテリアル・バーストに関して、俺たちに探りを入れる為の裏工作の様な気がする？」

言い淀んだ台詞がそっくり兄の口から語られるのを聞いて、深雪は目を丸くすると共に、何処か安堵したような笑みを浮かべた。

「そうですか……お兄様も、そうお考えなのですね？」

「叔母上の忠告もあるからね」

達也に指摘されて、深雪は「あっ！」という表情で小さく開いた口に片手を当てた。

達也と真夜の一対一の会談の内容は、深雪にもその日の内に教えてある。
「では、スターズが……？」
「こうなると、少佐たちとの接触を禁じられているのが痛いな」
達也は事前の許可なく戦略級魔法を使用した罰として、当分の間、独立魔装大隊とのコンタクトを真夜に禁じられている。
大人しく言う事を聞くつもりなどサラサラないが、リスクに見合うリターンがない限り、敢えて言いつけに背くつもりもなかった。
「叔母様にお訊ねしても……教えては下さらないでしょうね」
「そもそも留学の話が実現しようとしている時点で、叔母上がこの事態を黙認しているのは明白だよ」
四葉は現十師族で七草と主導的地位を争う地位にある。
優秀な魔法資質を持つ魔法科高校生の留学という例外措置を知らないはずがない。
「ただ逆に言えば、俺たちのデメリットになるばかりの話ではない、ということだと思うよ。
探りを入れに来るだけの相手を、叔母上が許すはずもないからね。多分、向こうでも何かトラブルが起こっているんだろう。
俺たちにその尻尾を掴め、と叔母上は言いたいんじゃないかな」
達也の表情は苦笑いというより諦めの笑い顔に近かった。
「まだそうと決まったわけでもありませんし……先走りすぎても良いことはないかと」
「そうだな、深雪。お前の言うとおりだ」
口ではそう言いながら、慰めた方も慰められた方も、それが気休めでしかないことを確信していた。

◇◆◇◆◇◆◇

スターズ専用機のクラスターファンＶＴＯＬで基地に帰投し、統合参謀本部に暗号通信で報告を済ませた後（スターズは軍令上統合

参謀本部直属の組織）、アンジー・シリウス少佐は制服のまま自室のベッドにゴロリと寝転がった。
そのまま寝返りを打ち、うつ伏せに、顔を枕に押し付ける。
処刑任務は、何回経験しても慣れない。
最初の頃の様に任務終了後、吐いてしまうことは無くなったものの、それは心の痛みに身体が慣れたに過ぎない。
心の痛みは、寧ろ大きくなっていた。
二重の意味で同胞である隊員を、この手で処刑する。
それが総隊長、シリウスのコードを与えられた者の任務だと聞いた時は、実感が無かった。
名誉に舞い上がって、解っていなかったのだ。
同胞を殺す、ということの意味を。
もう一度寝返りを打って、片腕で目を光から庇う。
彼女はまだ、部屋の照明を落としてすらいなかった。
不意に、呼び鈴の音が聞こえた。
シリウス少佐は口元に苦笑いを浮かべた。
どうやら今夜も、お節介な部下が様子を見に来たらしい。
スターズは十二の部隊から成り、形式上各隊長を総隊長が統括している。
彼女の部下は自分の部隊の面倒を見なければならない隊長だ。彼女にお節介を焼いている暇など無いはずなのに――
「どうぞ」
ベッドから起き上がり、リモコンで鍵を開けて、シリウス少佐はドアホンのマイクに向かい短く答えた。
「失礼しますよ、総隊長」
入って来たのは予想どおりの人物。
アメリカ軍魔法師部隊・スターズのナンバー・ツーで、彼女が不在の際は総隊長を代行兼務する第一隊の隊長、ベンジャミン・カノープス少佐だった。
スターズは地位と階級がリンクしていない、軍組織としては変則

的な編制になっている。流石に隊長の地位が総隊長の地位より高いということは今まで無かったが、総隊長と隊長の階級が同じというのは珍しくない。

現在も十二人の隊長の内、六人が大尉で残りの六人が総隊長と同階級の少佐だ。

もっともシリウス少佐は、自分よりずっと年長のカノープスと同じ階級であることを、逆に気に病んでいるところがあった。

「差入れです」

ベンジャミン・カノープス少佐は如何にも高級士官という外見の、叩き上げの兵士とも民間のビジネスマンとも異なる、剛健でありながらスマートな雰囲気を身に纏う四十前後の男性だ。

「ベン、ありがとうございます」

サイドテーブルに置かれた、湯気を上げるハニー・ミルク。

自分の父親の様な年齢の部下が示す気遣いを、シリウス少佐は素直に受け取った。

作戦行動中に使用する軍の備品のタンブラーではなく、魔法瓶から市販のお洒落なマグカップに注がれた蜂蜜入りホットミルクに、そっと口をつける。

暖かさと甘味が、心の痛みを癒してくれるような気がした。

「総隊長、もう準備は終わっているんですか？」

カノープス少佐は、部屋の隅に積み上げられた個人用のパッケージコンテナを見て、そう訊ねた。

「ええ、大体は」

「流石に手際が良いですね」

「これでも女の子ですから」

自分の娘の様な年頃の上官の答えに、実際に彼女より二歳年下の娘を持つカノープス少佐は肩を竦めた。

「女の子だからというのは、余り関係ないような気がしますが……日本の血ですかね？」

「日本人だから几帳面というのは昔の話だと思いますよ」

自身に流れる四分の一の血を言われて、今度はシリウス少佐が肩を竦める番だった。
別に嫌がっている訳ではない。
人種を気にするような人間は、少なくともこのスターズではやって行けない。
「まあ、それはともかく……しばらく因果な任務のことは忘れて、のんびり羽を伸ばして下さい」
「休暇じゃなくて特別任務なんですけど……」
お気楽なカノープス少佐の唆しに、シリウス少佐は唇を尖らせた。
その表情は、年相応な少女のものだった。
「寧ろ憂鬱です。何故私が不慣れな潜入捜査など……年齢の制約があるにせよ、それでも、専門の訓練を受けている者がたくさんいるでしょうに」
「まあまあ」
ため息をつく上官を宥めるような仕草で、カノープス少佐は両手を二度前後して見せた。
「それだけターゲットが一筋縄じゃ行かない相手だと参謀本部は考えているんでしょう。
だから余計に、楽しまなければ損だと思いますよ」
「はぁ……そうですね。ベンの言うとおりかもしれません」
大きくため息をついて、シリウス少佐はマグカップをサイドテーブルに戻し、カノープス少佐の正面に立ち上がった。
「ベン、留守中のことはよろしくお願いします。
本来私が負うべき責務を貴方に背負わせるのは心苦しいのですが、私の代わりをお願いできるのは貴方しかいませんので」
「お任せ下さい、総隊長。
まだ少し早いですが、いってらっしゃい」
慈しみのこもった笑顔で敬礼するカノープス少佐に、少女は感謝の笑顔で答礼した。

5－（2）　遣って来た少女（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

5―（2）　遣って来た少女

西暦二〇九六年の元旦を、達也と深雪はいつもどおり二人で迎えた。

大晦日やお正月だからと言って父親面して帰って来られても、正直言って疎ましいし鬱陶しい。これはお互い様で、どちらも不愉快な気分にしかなれないのなら、元愛人宅（今ではセカンドハウス）で好きにしてもらった方が双方の精神衛生の為だ。

正月だからといって自堕落な朝寝はせず、登校時間と然程変わらぬ朝早くに玄関で待っていた達也に、「お待たせしました」という声が掛かった。

とは言っても、声が掛かる前から達也はその晴れ姿を目に納めていたのだが。

紅基調の生地に白と薄紅で図案化した牡丹を描いた振袖を身にまとい、深雪が淑やかに階段を下りてくる。

白粉（おしろい）など必要の無い白皙（はくせき）の面（おもて）に、ただ一箇所、色鮮やかな紅を差した唇。

結い上げた髪に揺れる枝垂れかんざしが少し子どもっぽい感じだが、それがかえって大人びた美貌の中で年相応の可愛らしさを醸（かも）し出すチャームポイントになっていた。

目を惹くのは生来の美貌ばかりではない。

昔ながらの女性和装は胸を圧迫するので、最近は立体縫製の着物も作られているが、深雪は伝統的な振袖で、折れそうに細い腰とボリュームを増した胸のラインを表現しつつ、襟元は慎ましく隠すという、着こなしの妙を見せている。

世界一可憐な（達也の主観で）妹の艶姿（あですがた）に、彼は兄として誇らしさを感じていた。

「うん、とても綺麗だ」

履物に足を置いた妹を視界の正面に据えて、臆面も無く称賛する

達也。
深雪の頬がたちまち朱に染まる。
「もう、お兄様ったら……からかわないでください」
恥じらいながらも視線を外さず、上目遣いに抗議する様は、免疫の無い男なら悶え死にそうな破壊力があった。
「からかってなどいないんだが……じゃあ、行こうか」
それをあっさり受け止める達也は、流石、伊達に深雪の兄を十六年（正確には十五年九ヶ月）も務めていないと言うべきだろう。

◇◆◇◆◇◆◇

門の前には無人運転のコミューターが停まっていた。
ただ、無人運転ではあっても、無人ではない。
四人乗りコミューターの後部座席には一人の成人男性と一人の成人女性が座っていた。
「明けましておめでとうございます、師匠」
「明けましておめでとうございます、九重先生。本年もよろしくお願い致します」
手短に挨拶した達也と丁寧に腰を折った深雪に、八雲はシートに座ったまま嬉しそうな笑顔で応えた。
「いやぁ、今日はまた一段と艶やかだねぇ。吉祥天もかくやの麗しさだ。
今日の深雪くんを目にしたならば、須弥山の天女も羞恥に身を隠してしまうかもしれないね」
ある意味、実に八雲らしい反応だった。
「先生……もっと他に言うべきことがお有りなのでは？」
ツッコミは隣に座る女性から入った。
台詞を取られた形となった達也は、八雲がツッコミに応える前に、その女性に向かって軽く頭を下げた。
「小野先生、明けましておめでとうございます。

しかしよろしいのですか。師匠と一緒のところを見られて？」
「おめでとう、司波君。新年早々、嫌なことを言うのね」
達也は割りと本気で心配したつもりだったが、どうやら遥には嫌味に取られてしまったようだ。
日頃の行いに色々と思い当たる節がある達也は、誤解されても仕方が無いかもな、と心の中で肩を竦めた。
「先生と会ったのは偶然よ。今日、私は貴方たちの引率に来たの」
「なるほど、そういう設定ですか。高校生に引率というのは、些か苦しいと思いますが……」
しかしそれなら、『先生』という敬称は拙いのでは？」
達也の指摘に遥は後ろのシートで顔を顰めた。
確かに今時、高校生にもなって、日のある内に初詣に行くくらいで、大人の付き添いを要するということは無い。
言い訳にするなら「引率」ではなく、本当に単なる「同行」だろう。
それに、偶然会った相手に、しかも相手が教職者でもないのに、「先生」という敬称は奇妙に思われてしまう危険性がある。
「それは道々考えることとして、そろそろ参りませんか？」
深雪がそう提案したのは、達也がコミューターのドアを開いた後だった。
考え込む遥を放置して、乗車する深雪に手を貸し、ドアを閉めて反対側の、有人運転車ならドライバーが座るシートに乗り込む。
達也がドアをロックしたのと同時に、コミューターは駅へ向かって発進した。

同行の名目を棚上げし八雲の呼び名を「和尚（かしょう）様」に落ち着けて、ようやく顰め面から解放された遥は、深雪の着付け、特に髪が気になったようだ。
「司波さん、その振袖は自分で？」
ちなみに遥はスーツ姿。それなりにお洒落なセミフォーマルだが、

やはり振袖には見劣りする。遥も未婚者だから、その気になれば振袖をチョイスすることも出来たのだが。

「着付けですか？　ええ、そうです」

事も無げに返された深雪の回答に、遥は少しショックを受けた様子だった。

「その髪も？」

「はい。今日はプライベートですから、美容院でお願いするまでもないと思いまして」

そう言いながら、深雪は恥ずかしそうに髪に手を当てた。

自分でセットしたという髪は、流石に複雑な形に結い上げることは出来なかったようで、アップにして留めただけになっている。

しかし少しもちぐはぐになっている部分や解(ほつ)れている部分が無く、左右のバランス良く仕上がっている結い髪は、十五歳の少女が自分一人で整えたものとは俄かに信じ難い出来だった。

「はぁ……司波さんってこんなことまで完璧少女なのね」

「慣れているだけですよ」

自分よりずっと大人びた（あるいは色っぽい）、十代とは思えない艶(なまめ)かしい笑顔で遠回しの慰めを受けて、遥は何だか泣きたい気分になった。

◇◆◇◆◇◆◇

コミューターから電車(キャビネット)に乗り換え（駅で大層な注目を浴びた）、四人乗りのキャビネットを降りて待ち合わせ場所まで徒歩五分（ここでも大層な注目を浴びた）。

「わっ、深雪さん、キレイですねぇ！」

そして待ち合わせ場所に着いた達也と深雪を出迎えた第一声が、これだった。

うっとりした目を深雪に向けている美月は隣の達也が目に入っていないようだ。

「明けましておめでとうございます、達也さん。良くお似合いです。少し、意外ですけど」
深雪と同じ振袖姿のほのかは、クラスメイトの艶姿に圧倒されたのか、やや怯んだ様子だったが、地味ながら普段とは雰囲気の違う達也を見て良い具合に意識が逸れたのか、すぐにお正月らしい笑顔を取り戻していた。
「明けましておめでとう。ほのかも良く似合っているよ」
実際にほのかの振袖姿は良く似合っていたので、お世辞を口にしているという意識は達也には無かった。
嬉しそうに笑顔を向けるほのかに笑みを返して、達也は自分の衣装を見下ろした。
「でも意外、ってことは、やっぱり少し違和感があるのかな？」
「そんなこたぁないんじゃねえの？
達也、良く似合っているぜ。何処の若頭かって貫禄だ」
「俺はヤクザかよ」
本気なのかからかっているのか判別のつきにくい口調で合いの手を入れてきたレオは、制服とほとんど変わらないジャケット姿だ。
初詣の待ち合わせをしていたのは、美月、ほのか、レオの三人。エリカと幹比古は大勢の門人を抱える家の手伝いで抜け出せず、雫はいよいよ留学が間近に迫ったということもあり、父親の仕事関係でやはり抜けて来れなかった。
「別に、ヤクザには見えないけど、羽織袴がそこまで様になる高校生は珍しい、ってことだけは確かだと思うわ」
「ヤクザ者というより、与力か同心のイメージだね」
一歩遅れてついて来た遥と八雲が言うように、今日の達也の格好は羽織袴に雪駄の純和風だった。そしてほのかとレオが言うとおり、この格好が実にはまっていた。いっそ、腰に大小と、ついでに十手を差していないのが寂しく感じるほどだ。
「あれっ、遥ちゃん。
明けましてオメデトーございます」

「明けましておめでとうございます、小野先生。
……達也さん、こちらの方は？」
砕けた年賀を遥に述べたレオに続いて型通りの口上を述べた後、ほのかは八雲に目を向けながら遠慮がちに、達也に訊ねた。
「九重寺住職、八雲和尚。
俺たちにはもしかしたら、忍術使い・九重八雲師の方が通りが良いかな？
俺の体術の先生だ」
達也の紹介を聞いて、ほのかと美月が目を丸くした。ほのかは八雲の名前を知っているだろうと思っていたが、美月が八雲のことを知っていたのは達也にとって予想外だった。
「なるほど、だから日枝神社にしようって話になったんだな」
そして思わぬ方向に知識を示したレオに、達也はビックリしてしまった。
それは決して、レオを見くびっていた訳ではない。
「だからって？」
遥が全く理解できていないことから見ても、およそ一般的な知識ではないのだから。
「んっ？　和尚ってことは、天台宗の坊さんなんだろ？
山王信仰と台密は切っても切れない関係じゃんか」
何故そんなことを訊くんだ？、と言わんばかりの顔で簡潔に語ったレオの説明に、遥の頭上に浮かぶ疑問符はかえってその数を増していた。
「君、若いのに良く知ってるねぇ。
西城レオンハルトくん、だよね？」
そんな遥を置いてきぼりにして、八雲が楽しそうに、レオに話しかける。
「あれっ？　オレのこと、知ってんですか？」
初対面の相手に対するものとしては至極真っ当な問い掛けをレオは口にした。

いささか使い古されている感は否めないが。
「九校戦の記録映像を見せてもらったからね」
対する八雲の返答も、何の捻りもない真っ当なものだったが、レオはそれを聞いて反射的にか、顔を顰めた。
おそらくあの、時代と場所を間違えたようなマント姿を思い出したのだろう。どうやらあれは彼にとって、忘れたい記憶であるようだった。
ひとまずお互いの紹介を終わらせて、同級生五人と坊主頭の男性（ただし袈裟は着ていない。着物は普通の男物だ）と若い女性の七人連れはゾロゾロと本殿へ向けて歩き出した。（遥には幸いなことに、同行の経緯を聞かれることは無かった）
参道の両側にズラッと露店が並んでいる光景は百年前とほとんど変わっていない。だがこれも、世界的な食糧危機が深刻化した時代には姿を消していた風景だ。当時のことを知っている年配の人々には感慨深い景色だが、生憎と達也たちはその様な感傷に縁が無い。
食べ歩きをするにしても参拝を済ませてからだ。（達也にも深雪にもそのつもりは無かったが）
長い階段を上って神門をくぐり、拝殿前の中庭に入ったところで、達也は不意に、視線を感じた。
不躾にジロジロ見る視線ではなく、チラチラと窺い見るような視線。
中々上手くカモフラージュしているが……
「司波君、心当たりは？」
「初めて見る顔ですね」
「外人さんには達也くんの格好が珍しいのかねぇ？」
遥と八雲の目を誤魔化せるものではない。まあ、エレメンタル・サイトを使っていない状態の達也が気づいたのだから、遥はともかく八雲が気づくのは当然とも言えるのだが。
八雲が「外人さん」と言った様に、その相手は典型的な金髪碧眼、そして、若い女性だった。

ただ今の時代、だからといって外国籍だと決まった訳ではないし、面立ちに何処と無く、日本人的な印象が有る。

年の頃は達也たちと同じくらいか。コーカソイドとモンゴロイドの人種的な差異を考えれば達也たちより年下と見ることも出来るが、どうやら日本人の血がそれ程薄くも無く混じっている所から判断して、ずっと年下ということは無いだろう、と達也は考えた。

「お兄様、何をご覧になられているのですか？」

達也がその少女を観察したのは一秒に満たない時間だったが、深雪が気づくにはそれで十分だった。

兄の視線の残影を辿り、「まあっ！」と言わんばかりに、まなじりを吊り上げる。

「……綺麗な子ですね」

内心で何を考えているのか丸分かりな平坦な声で深雪が呟いた。

その女の子は確かに、深雪が「綺麗」と称賛しても嫌味にならない美少女だった。

色鮮やかな髪と瞳。ある意味、深雪と対照的な美貌だ。

しかし達也は決してそんなつもりで少女を観察していたのではない。

彼は助け舟を求めて八雲に視線を投げ――ニヤニヤと年甲斐の無い笑みを刻む口元を見て、自力で何とかするしかないと悟った。

「お前ほどでは無いけどな」

「……いつもいつも、その手で誤魔化せるとは思わないで下さい」

字面だけ見れば手強い反撃だが、頬を朱に染め目を泳がせながら浮ついた声で言われても余り怖さは無い。

「誤魔化してなどいないさ。俺は本心からそう思っているし、そういうつもりで彼女を見ていた訳でもない」

「もうっ、お兄様ったら！」

プイ、と顔を背けようとして、深雪は達也の台詞に看過できない含みがあることに気づいた。

「……彼女に何かご不審でも？」

深雪がさっきとは異なる、強い意思のこもった視線を少女に向けた。
それを察知したのかどうか、少女は何事も無かったような顔で歩き始めた。
達也たちの方へ。
そのまま何も言わずにすれ違い、長い階段へ歩み去る。
すれ違いざま、意味ありげな視線を投げて来たように見えたのは、決して達也の錯覚ではなかったはずだ。

◇◆◇◆◇◆◇

短いながらも色々なことがあった冬休みも終わり、今日から三学期。
その「色々なこと」の中には、空港へ雫の見送りに行って、思い掛けない「涙の別れ」に巻き込まれ（主演：ほのか・雫、助演：深雪・美月）途方に暮れたという、（腕力が通用しないという意味で）とてもハードな体験もあったが、これもいつかは「良い思い出」に変わるはずだ。――そう信じ込まなければくじけてしまいそうだった。
A組には今日から雫の代わりにそのまま留学生が来るはずだが、とりあえず達也には他人事だった。深雪と同じクラスになる以上、全く無関係とは行かないだろうが、自分の方から関わりに行く意思も無い。
授業の方はと言えば、三学期の初日から、いきなりフルタイムのカリキュラム。
その一時限目の終わりに、A組の留学生は早くも噂になっていたが、達也は積極的にアンテナを張るでもなく右から左に聞き流していた。
しかしそういう超然としたスタンスはやはり少数派で、二時限目の後の休み時間には、物見高い友人によって彼も噂話の渦の中に巻

き込まれていた。
「何かすっごい美少女なんだって」
興奮気味に、あるいは興奮したふりでしきりに話し掛けてくるエリカを、達也はとうとうあしらいきれなくなっていた。
「キレーな金髪でさ、上級生まで見に来てるらしいよ」
「エリカは見に行かないのか」
取り敢えず、これだけ熱心に語っているにも関わらず、全てが伝聞形、というのが気になったので訊ねてみる。
「あんな人だかりに入って行けないって」
「オメーでも遠慮ってモンを知ってたんだな」
混ぜ返すと同時に、レオはサッと頭上に手を翳した。
次の瞬間、音程を外した蛙のような声を発し、喉を押さえて前のめりに身体を折った。
（やられるって分かってんなら余計なことを言わなきゃ良いだろうに）
丸めたノートで喉に突きを喰らって悶絶するレオを達也が呆れ顔で見下ろす一方、実行犯のエリカは何食わぬ顔で話を続けている。
「あたしは女だからね～
いくら美少女って言われても、押し合い圧し合いの窮屈な思いしてまで見に行きたいとも思わないのよね」
わざわざ見に行くつもりになどなれないという点は全くの同感だったが、好奇心を全面的に助平心へリンクする見解に対しては弁護の必要を感じた。――誰を弁護するのか、と訊かれたとしても、達也には答えらなれなかっただろうけれど。
「転校生すら想定していない魔法科高校だからな。
そこに留学生が入ってくるとなれば好奇心も湧くだろう。
ここ十年以上無かったことじゃないか？」
「以前のことは知らないけど、今回留学生が来たのは当校だけじゃないみたいだよ」
そこに口を挿んできたのは、ちょうど幾何準備室から戻って来た

幹比古だった。
「第二、第三、第四高校でも短期留学生の受け入れがあったそうだよ。大学の方にも共同研究の名目で何人か来てるらしい。ウチの門人が話してた」
「あっ、大学の方の話はあたしも聞いた。この前の横浜の件で飛行魔法の軍事的有用性が飛び切りのものだって分かって、焦って探りを入れに来たんじゃないかって噂してたな」
古式魔法と現代魔法、分野は違えどそれぞれ大勢の門人を抱える吉田家と千葉家は、入ってくる情報量が個人のレベルとはやはり桁違いだ。今の話からすると、ＵＳＮＡは予想を超えて大がかりに人員を投入している。十一月の時点ではスターズが単独で動いているという話だったが、どうやら事態はもう一段深刻化しているようだ、と達也は考えた。
「じゃあＡ組の留学生もスパイってことか？」
「あんたねぇ……」
悶絶から復活したレオの身も蓋もない問い掛けに、エリカばかりか美月と幹比古も苦い顔をしている。
「レオくん、そういうことは思っていても言わない方が良いのでは……」
「僕たちも同級生として付き合って行かなきゃならないんだから……」
美月と幹比古のダブルスにタジタジとなりながらも、レオは何とか反論を試みた。
「いや、付き合うって、そいつＡ組だろ？接点無いんじゃねーの？」
「バカね、Ａ組には深雪がいるじゃないの。何年ぶりになるのか分からない留学生と生徒会副会長よ。留学生が学校に慣れるまで、どういう形にせよ深雪が面倒を見なきゃ行かなくなるでしょうし、深雪と関わり合いが出来ればあたし

たちも無関係じゃ済まないわよ」
レオの反論は、その場でエリカに一刀両断されてしまったが。
積極的に関わりたくないと考えている達也も、内心で「そうだろうなぁ」とため息をついた。

◇◆◇◆◇◆◇

その「関わり」は、思っていたよりも早く出来た。
いや、予想していた可能性の中で、一番早いものが容赦なく実現した、と言うべきか。
お昼ご飯の待ち合わせをしていた学食。
やって来たのは深雪とほのかと、もう一人、金髪碧眼の少女。
その少女を見て、驚くまでは行かなかったものの、達也は「おやっ？」と思った。
髪の色や瞳の色は聞いていたし、美少女だという話も散々聞かされていた（そもそも美少女なら見慣れている）。
彼が意外感を覚えたのはそんなことではなく、彼女が日枝神社で会った――というか見掛けた、あの少女だったからだ。
「ご同席させて貰って、良いかしら」
少女の口から流れ出たのは流暢な日本語。ややアクセントを強調する話し方は仕方ないとして、流石に日本へ留学してくる――あるいは、留学生を装って潜入するだけのことはある。
「もちろん、どうぞ」
彼女の目線は達也へ向いている。特に身構える必要性も感じず、達也はざっくばらんに応えた。
「リーナ、まずお皿を取って来ましょう」
「お皿……ああ、食べる物、という意味ね。分かったわ」
既に達也たちは自分の分を取ってきている。
深雪に促されて、三人は配膳のカウンターへ向かった。
その行く先に起こるざわめきは、いつもより尚、大きい気がする。

他の生徒が気圧されたように道を譲る姿もいつも以上か。
「あの二人が並ぶと迫力あるねぇ～」
同じように美少女ではあっても見る者を圧倒するというタイプではないエリカが、その光景に感嘆を漏らした。
「随分打ち解けているんですね……」
今日会ったばかりなのに、と美月は言いたいのだろう。
「なあ、達也……彼女、どっかで見たような気がすんだけど」
「うわっ、古い手口」
レオの漏らした呟きに、すかさずエリカの茶々が入ったが、レオが少女の美貌にそれほど気を惹かれていないということは分かった上での茶々だったのか、単に言ってみただけなのは明らかだった。
「……そう言えばそうですね」
「あれっ、柴田さんも？　芸能人とかモデルさんってことは……無いよね？」
美月が相槌を打つのを見て、幹比古がありがちな推測を口にする。
無論、事実は別にあることを達也は知っていた。
ただ、この場で友人たちの疑問を解消してやるべきかどうか少し迷っている内に、本人が深雪たちと共に戻ってきた。
「お待たせしました、お兄様」
当然のように、達也の隣に腰を下ろす深雪。
「達也さん、ご紹介しますね」
これまた当然のような顔で達也の正面にトレイを置いたほのかが、隣に座った少女の方を向いてそう言った。
「アンジェリーナ＝クドウ＝シールズさん。
もうお聞きのこととは思いますけど、今日からA組のクラスメイトになった留学生の方です」
ほのかの紹介を聞いて、達也――ではなく、他の三人が困惑の表情を浮かべた。
「ホノカ、こちらの方だけでなく、他の皆さんにも紹介して欲しいのだけど？」

その心情を代弁したのは当の留学生だ。
「え、あっ、ご、ごめんなさい！」
「……まあ、ほのかだしね」
「ほのかさんですしね」
エリカと美月に、揶揄ではなく、本心からしみじみと呟かれて、ほのかは赤面し、絶句した。
「じゃあ改めて。
アメリカから来たアンジェリーナ＝クドウ＝シールズさんよ」
深雪が二度目になる紹介をすると、留学生は金髪を軽やかに揺らして椅子に座ったまま一礼した。
「リーナと呼んで下さいね」
そう言って目を細め、華やかな笑みを浮かべた。
その深い蒼の瞳は、氷の青、氷の青ではなく、蒼穹の空を思わせるスカイブルー。
頭の両脇にリボンで纏めた波打つ黄金の髪は、解けば背の半ばを超えるだろう。もしかしたら深雪よりも長いかもしれない。
高校一年生にしては大人びた顔つきにそのコケティッシュな髪型は少し不釣り合いな気がしたが、それが逆にシャープな美貌の印象を和らげ、親しみやすさを演出しているような気もした。
深雪から改めてその名を聞かされ、ゴージャスな笑顔に見とれつつも（特に男子生徒二人）「おやっ？」という表情を浮かべている友人たちの先陣を切って、達也が会釈を返した。
「E組の司波達也です。深雪と区別がつかないでしょうから『達也』で良いですよ」
「ありがとう。ワタシのことも『リーナ』でお願いします。それから、敬語は無しにしてくれると嬉しいのですけど」
「分かった。そうさせてもらうよ、リーナ」
「よろしくね、タツヤ」
そういう習慣なのか、リーナがテーブル越しに手を伸ばしてきたので、達也はその手を押し戴くように、下からそっと握った。

ただの握手ではなく貴婦人に接吻の礼を取るような仕草が予想外だったのだろうか。
「タツヤってもしかして、ミユキのお兄さん？」
スカイブルーの瞳に動揺を浮かべつつ、表情だけは何食わぬ顔でリーナが訊ねる。
ポーカーフェイスは余り得意ではないらしい、と思いつつ、達也は失笑にならないよう気をつけた笑顔で頷いた。
――さっき深雪が達也に「お兄様」と呼び掛けたことについては、敢えて指摘しなかった。
「あたしは千葉エリカ。エリカで良いよ、リーナ」
こういう時に物怖じしないのは、間違いなくエリカの長所である。
「私は柴田美月です。美月と呼んでください」
「オレは西城レオンハルト。レオ、で良いぜ。
がさつ者なモンで、こういう口の利き方だけど、気にしないでくれ」
「吉田幹比古です。僕のことも『幹比古』で良いよ」
彼女に勇気づけられる格好で、美月、レオ、幹比古が次々と自己紹介を口にする。
「エリカ、ミヅキ、レオ、ミキヒコね。よろしく」
それを聞き返すこともなく、リーナは一度で覚えていた。初歩的だが、相手から好感を引き出す為の第一歩を彼女はキチンとこなしていた。
ただ、「幹比古」の発音が「ミキ・ヒコ」に聞こえたのは、純和風の名前がアメリカ人の彼女には、やはり難しかったからだろうか。
「言い難いでしょ？
ミキヒコじゃなくても、ミキで良いんじゃない」
これを本人が言ったのなら大した気配りだが、他人が、特にエリカが口にすると、親切心ばかりとは思われない。
少なくとも幹比古本人はそう感じたようで、いつもの反論を口にしようとした。

「あら、そう？　じゃあお言葉に甘えて、ミキ、で良いかしら？」
だが一足先に「良かった」と言わんばかりの笑顔でそう言われて、幹比古はその愛称を受け容れることを余儀なくされた。

食堂のメニューからわざわざ蕎麦を選択したリーナは、危なげない手つきで箸を操りつつ、時々掛けられる質問に嫌な顔一つせず答えていた。
このメンバーに不躾な質問をするような人間が混じっていなかった、ということも良かったのだろう。
そろそろ全員食べ終わろうか、という頃になって、E組メンバーが疑問に思っていたことを代表する形で達也が訊ねた。
「ところでリーナって、もしかして九島閣下のご血縁かい？」
老師、という呼び名は日本の魔法師の間でのみ通用する言い方だ。また、達也は個人的に、この単語が好きでは無かった。
なので公的に通用する「閣下」、退役将官であることに由来する敬称で、リーナに訊ねた。
「確か、閣下の弟さんが渡米されて、そのまま家庭を築かれていたと記憶しているんだが」
まだ魔法師同士の国際結婚が奨励されていた時代のことである。
当時、世界「最巧」の魔法師の評価を受けていた九島烈の弟が渡米してアメリカ人の魔法師と家庭を持ったのは、少なくとも日本の魔法師の間では結構な話題になった出来事だった。
「あら、良く知ってるわね、タツヤ。
随分昔のことなのに」
どうやら達也の推測は当たりだったようだ。
そして、アメリカ人の魔法師にとって、九島烈の弟がアメリカの地に骨を埋めたのは、どうやら「随分昔のこと」で済まされる事柄らしい、ということも合わせて分かった。
「ワタシの母方の祖父が九島将軍の弟よ」
将軍の発音が“ＳＨＯＧＵＮ”に聞こえたのは、決して達也の耳

の所為ではない。
　長く日本の魔法師の指導的立場にあった九島烈は、欧米の魔法師から今でもそう呼ばれることがある。いくらクォーターで、いくら日本語が流暢とは言っても、やはり彼女はアメリカの魔法師なのだろう。
「そういう縁もあって、今回の交換留学の話がワタシのところに来たみたい」
「じゃあリーナも自分から希望した訳じゃないんだ？」
　何気なく差し挿まれたエリカの疑問。
　それにリーナが動揺と緊張で反応したのも、多分、達也の錯覚ではなかった。

5－（2）　遣って来た少女（後書き）

※和尚〔かしょう〕様という呼び方は正確に言えば天台宗だけのものではないようですから、レオと八雲の会話は厳密に言えば不正確です。

5－（3）　好敵手（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

5―（3）　好敵手

夜の闇を這いずり回るのは、何も後ろ暗いところのある者たちばかりではない。

そうしたアウトローに市民生活が脅かされずに済んでいるのは――少なくとも破壊されずに済んでいるのは、混沌と戦う秩序の使徒が同じ闇の中を駆けずり回っているからだ。

もっとも、「秩序の使徒」の全員が勤勉であるとは限らない、のではあるが。

「よくもまあ、次から次へと厄介事が……」

「……」

「厄年は去年で終わったんじゃなかったのか？」

「……」

「大体何が起こってるんだ？　これならまだ、密入国とか外国の侵略とかの方が分かり易いぞ」

「……それを調べるのが我々の仕事でしょうが。

事件が起こってくれるお陰で我々は失業せずに済んどるんですから、つべこべ文句を言わない！」

尚も未練がましく「本当は事件なんて起こらない方が……」とかブツブツ呟いている上司に本格的な諫言、というより小言をくれてやろうと息を吸い込んだちょうどその時――

「ハイ、こちら稲垣」

耳に引っ掛けていたレシーバーから聞こえて来たコールに、緊張を押し殺した声で稲垣は応えた。

「……了解しました。すぐに現場へ向かいます」

通信機のスイッチを切って、何が起こったか察しているだろうにまだだらけたままの上司に、稲垣はキツイ視線を向けた。

「警部、五人目です。

死因は過去のガイシャと同じ、失血死。首筋に穴が二つ、穿たれ

ているところも同じです」
稲垣巡査部長の報告を聞いて、千葉寿和警部は天を仰ぐポーズを取った。
「一ヶ月で五人の変死体か。やれやれ……こりゃあ、マスコミを抑えるのも限界だぞ」
被害者のことも加害者のことも口にせず、億劫そうにため息をつく、その顔の中で、両の瞳だけが鋭い狩人の眼光を宿していた。

◇◆◇◆◇◆◇

アンジェリーナ・シールズは、第一高校にセンセーショナルなデビューを飾った。
まずその容姿で、留学初日から全校生徒で知らぬ者はいないという存在（アイドル）になった。
それまで、学校一の美少女の座は深雪のものだった。これは上級生、女子生徒を含めて衆目の一致するところだった。
だがリーナの編入により「女王」は「双璧」となった。
二人が行動を共にする機会が多いから余計に、「司波深雪に劣らぬ美貌」が強く印象付けられることになった。
陽光に煌く黄金の髪。サファイアより蒼く輝く瞳。
夜空より深き漆黒の髪。黒真珠より黒く澄んだ瞳。
同じように美しく、対照的な美を持つリーナと深雪は、並び立つことによって一層、輝いて見えた。
その美しさだけでも話題になるには十分だったが――
「ミユキ、行くわよ」
「いつでもどうぞ。カウントはリーナに任せるわ」
向かい合う二人の距離は三メートル。
その真ん中で、直径三十センチの金属球が細いポールの上に載っている。
実習室には同じ器具がずらりと並んでいるのだが、クラスメイト

の全員が手を止めて深雪とリーナの二人を見ていた。
いや、クラスメイトだけではない。
中二階の回廊状見学席には、自由登校になった三年生がずらりと並んでいる。
その中には、真由美と摩利の姿もあった。
「……司波に匹敵する魔力、本当だと思うか？」
「ある意味、アメリカを代表して日本に来た訳だから、ありえないことじゃないと思うけど。
でも、俄かには信じ難いわね。同じ年代で深雪さんと拮抗する魔法技能だなんて」
「同感だな。百聞は一見にしかずと言うが、この目で見なければ信じられん」
「だからこうして確かめに来てるんだけどね」
実習の内容は同時にＣＡＤを操作して中間地点に置かれた金属球を先に支配する、という魔法実習の中でもシンプル且つゲーム性の高いものだ。
シンプルだからこそ、二人の単純な力量差が露わになる。
先月から始まったこの実習で、深雪はこれまで同級生をまるで寄せ付けなかった。これではお互いに実習の意味が無いと教官が認めざるを得ない程に、深雪とクラスメイトの魔法力には差があった。
その話を聞きつけた新旧生徒会役員（プラス風紀委員長）が交互に深雪の相手を買って出たが、誰一人敵わなかった、というのは今や一高の公然の秘密となっている。
だがその深雪を相手に、留学生が互角の勝負を演じているというのだ。
苦も無く一蹴されて上級生の面目が丸潰れとなった（深雪は勝ち誇ったりせず、逆に随分恐縮していたが）真由美と摩利が見学に来るのも当然だった。
「スリー、ツー、ワン」
実習用のＣＡＤは据え置き型・パネルインターフェイス。

リーナが「ワン」のカウントを口にすると同時に、二人は揃ってパネルの上に手を翳した。
「ゴー！」
最後の合図は、二人で声を揃えて。
深雪の指がパネルに触れ、リーナの掌がパネルに叩きつけられる。
静と動、二人の色彩をそのまま反映する起動動作だった。
しかし対照的なのは身体面のみ。
眩いサイオンの光輝が、対象となった金属球の座標に重なり合って、爆ぜた。
肉眼に見える光ではないが故に、瞼を閉じても効果は無い。
外部からの魔法的な干渉を抑制する技能が未熟な見学者が、こめかみを押さえたり首を振ったりしている。
輝きは一瞬で消えていた。
金属球は、リーナへ向かってコロコロと転がっている。
「あーっ、また負けた！」
「フフッ、これで二つ勝ち越しよ、リーナ」
盛大に口惜しがるリーナと、何処かホッとした感じの笑みを浮かべる深雪。
二人の様子を見て解るように、今の勝負――と言っても試合ではないが――は深雪の勝ちだった。
しかし深雪の口調を聞いても「二つ勝ち越し」という台詞を聞いても、圧勝という印象はない。
なにより――
「……まったくの互角だったわね」
「術式の発動は寧ろ、留学生が僅かに速かったように見えたぞ」
「ええ。でも干渉力で深雪さんが勝っていて、魔法が完成する前に制御を奪い取ったのね。
スピードを優先するかパワーを優先するか……単純に力量で勝っているというより、今回は作戦勝ちってところじゃないかしら」
真由美の目から見ても摩利の目から見ても、二人の魔法力は、少

なくとも基礎単一系の単純な魔法力は、互角だった。
時間内に同じ実習が、あと四回繰り返されて、スコアはニ対二のタイだった。

◇◆◇◆◇◆◇

お昼時、いつもの学生食堂。
今日はいつものメンバーから雫がいない代わりにリーナが同じテーブルについているが、これは毎日という訳ではない。
編入から一週間、リーナにはあちらこちらからお誘いがあり、その都度違う相手と食事をしていた。
広く交流を深める、留学生としては模範的な態度だと言えるだろう。
達也たちと一緒にお昼を食べるのは、実に初日以来のことだ。
「大人気ね、リーナ」
「ありがとう。皆さん良くしてくれて嬉しいわ」
エリカの裏も表も無い単純な褒め言葉に、意味無く照れたり謙遜したりすることなく、あっけらかんと応えるリーナ。
その態度は個性であれ民族性であれ、達也たち（除くエリカ）には確かに目新しく映った。
「でもリーナって予想以上に凄かったんだね。
そりゃあ選ばれて留学してくるくらいだから、相当な実力者とは思っていたけど、まさか深雪さんと互角に競う程とは思わなかった」
「驚いているのは寧ろワタシの方よ」
幹比古の称賛にリーナは目を丸くしてオーバーアクション気味に驚きを表現する。
――余談だが、幹比古はどうやら深雪よりリーナの方が話し易いみたいで、深雪に対しては未だに「ですます」調なのに、リーナに対しては砕けた言葉遣いをするようになっていた。

「これでもワタシ、アメリカのハイスクールレベルでは負け知らずだったんだけど。
ミユキにはどうしても勝ち越せないし、ホノカにも総合力なら負けないけど精密制御じゃ負けてるし、さすがは魔法技術大国・日本よね」
「リーナ、実習は実習で、試合じゃないわ。
あんまり勝ち負けなんて考えない方が良いと思うけど」
「競い合うことは大切よ。
例え実習でも、せっかくゲーム性の高いカリキュラムなんだから、勝ち負けには拘った方が上達すると思うわ」
やんわりと窘める深雪に、衝突を恐れずリーナは正面から反論した。
これが彼女の流儀なのだろう。
こういうところも少し新鮮に感じる部分だ。
「やっている最中は競争心を持つのも大事だと思うよ。
でも、終わった後まで引きずる必要は無いんじゃないか？
実習はあくまで練習で、評価に結びつく実技試験とは違うんだから」
だから達也も、遠慮なく意見してみることにした。
「……そうね。タツヤの言うとおりかもしれない。
ワタシ、少し熱くなり過ぎていたかも」
「熱くなるのは悪いことじゃないさ。
深雪も新たなライバル登場でヤル気を増しているみたいだし。
その点、リーナには感謝してるよ」
達也の言葉に最初は素直に頷いたリーナだったが、今はキョトンとした顔で見返している。
「出たよ、達也君の兄バカ発言」
その隣でエリカが「やれやれ」と言わんばかりに、わざとらしくため息をついた。
「あ、ああ、なるほど……タツヤとミユキって仲が良いのね」

台詞とは裏腹に、リーナの視線の温度が急降下したように達也は感じた。
「そう言えばリーナ、大したことじゃないんだが……」
この流れは拙いような気がしたので、話題転換を試みる。
「何かしら」
向けられる視線は冷たい。
だが本心から蔑んでいる訳ではなく、多分にエリカの冗談に付き合っているような演技臭さがある。
それが希望的観測でないという保証は無かったが、この程度のことで怯んで口を閉ざしてしまう繊細さには縁の無い達也だった。
「アンジェリーナの愛称は普通、『アンジー』だと思うんだが、俺の記憶違いかな？」
動揺するような質問ではないはずだ。
少なくとも、同席していたエリカも美月もほのかも、そう思った。
しかし、リーナの顔には間違いなく狼狽の影が過ぎっていた。
「いえ、記憶違いじゃないわよ。
でも、『リーナ』って略すのも珍しいって程じゃないの。
エレメンタリー、っと、小学校の同じクラスに『アンジェラ』って子がいて、その子が『アンジー』って呼ばれていたものだから」
「それでリーナは『アンジー』じゃなくて『リーナ』って呼ばれるようになったのか」
納得、という風に達也は頷く。
リーナの動揺に気づいたことは、欠片も匂わせずに。

◇◆◇◆◇◆◇

第一高校には寮が無い。
全国に九つしかない魔法科高校の立地条件から必然的に、遠方から進学してくる生徒もいる。
そこを考えれば寮があっても不思議はないような気もするが、そ

もそも今の時代、学生寮を教育の場として重視している（つまり二十四時間教育ということ）全寮制の特殊な学校以外で、学生寮という施設を見ることは無い。

ＨＡＲ〔ホーム・オートメーション・ロボット〕が一般家庭に普及し日用品の買い物もオンライン注文・戸別配送で済ませられる現代、学生の一人暮らしでも不自由は全く無いから、寮という施設の需要も無いのである。

ということで、自宅から通えない生徒は学校近くに部屋を借りて一人暮らしをすることになる。

留学生のリーナもその例に漏れず。

学校から電車（キャビネット）で二駅の、現代の交通事情を考えればすぐ近くといえる場所にマンションを借りて住んでいる。

但し、彼女の場合は一人暮らしではない。

「お帰りなさい、リーナ」

彼女がマンションのドアを開けると、中から待ち構えていたように若い女性が出て来た。

「ミア、先に帰っていたんですか」

若いといってもリーナより五、六歳年上の外見だ。実際の歳はもっと上だが、リーナは正確な年齢を教わっていない。

彼女の名前はミカエラ・ホンゴウ。

リーナと同じ日系アメリカ人だが、リーナと違い外見はほとんど日本人と区別が付かない。

少し肌の色が浅黒いか？　という程度で、それでも日本国内で特に珍しいという程ではなかった。

「もう夜ですよ？」

色々と寄り道していたリーナは、返された言葉に小さく苦笑した。

「何か分かりましたか」

制服から部屋着に着替え、ティーカップが用意されたダイニングテーブルに座って、向かいの席からティーポットでミルクティーを注いでいるミカエラにリーナは訊ねた。

「今のところはまだ何も」
「そうですか。
そんなにすぐ結果が出るようなものでもないのでしょうね」
彼女はリーナたちより一足先に日本に送り込まれた諜報員の一人だった。
とは言っても、本職のスパイではない。
彼女の本職は放出系魔法を研究する国防総省所属の魔法研究者であり、十一月にダラスで行われたブラックホール実験にも参加していた才媛だ。
結果が芳しくなかったダラスの実験に代わる「対消滅ではない質量のエネルギー変換」の糸口を求めて、今回の任務に志願した技術スタッフの一人。
多くの魔法研究者がそうであるように彼女自身も魔法師であり、今月から共同研究の名目で来日した偽学生とは別口で、先月の初めからマクシミリアン・デバイス日本支社のセールス・エンジニア「本郷未亜」として魔法大学に潜り込んでいる。
戦闘員でも情報員でもない彼女はあくまでサポートスタッフだが、今月まとめて、ある意味で正面から乗り込んだメンバーに隠れて、裏で本来の諜報活動に従事する「本隊」の一人でもあった。
「リーナの方は何か分かりましたか？」
年末にリーナが来日した当初、彼女と相対したミアは、傍目（はため）からも分かるくらい緊張していた。
研究者と戦闘者の違いがあるとはいえ、リーナはミドルティーンにしてＵＳＮＡの魔法師のトップに立つ「シリウス」だ。
その相手と寝食を共にするのだから、ミアの心中も察して余りがあるというもの。
だが素性の露見を避ける為と、それ以上に自分の精神衛生上の理由で、リーナは三日掛かりで「少佐」を「リーナ」に改めさせることに成功した。
来日から二週間が経った今では、かなりフレンドリーに会話を成

立させることが出来るようになっている。
……まだまだ遠慮が見える、と言うか「畏れ入っている」面が見え隠れするのは仕方の無いことだとリーナも納得していた。
「ターゲットと親しくなった、とは思いますけど……」
リーナはため息をついて、脱力感の漂う笑みを漏らした。
「肝心なことはまだ何も。
それより先にコッチの正体がばれちゃいそうです」
「……何かあったんですか？」
「タツヤに『アンジェリーナの愛称はアンジーじゃないか』って訊かれました。
ドキドキしましたよ」
「偶然ではないんですか？」
「分かりません。サッパリです。
やはりワタシは、こういう仕事に向いていないようです」
もう一度、大きくため息をつくリーナのカップに、ミアはミルクティーのおかわりを注いだ。
「ありがとうございます……
魔法の実力で言えば警戒すべき相手はミユキだと思いますけど、本当の意味で警戒しなきゃならないのはタツヤの方かもしれません」
そこでリーナは、「アラッ？」と言わんばかりに目を見開いた。
「ミア、服が染みになっていますよ？」
えっ？　と声を上げて、ミアがリーナの視線を辿る。
「そこの、袖口のところです……紅茶が跳ねたんでしょうか」
「あっ、ここですか……一応染み抜きはしたんですけど、きれいに取れてなかったみたいです」
ミアの着ている飾り気のないブラウスの袖口に、少し見ただけでは分からない程度の薄い茶色の斑（まだら）があった。
「プロに任せた方がいいんじゃありませんか？」
「そうですね……もう一度自分でやってみて、取れなかったらクリーニングに出すことにします」

「ミアも忙しいんですから、無理しなくて良いんですよ。
ハウスキーパーの一人や二人、余裕で雇えるくらいに予算はタップリとってあるんですから」
「可愛い格好のメイドさんでも雇いましょうか？」
「ミア、まさかそんな趣味があったんですか……？」
真剣な目つきでミアを見詰めるリーナ。
無言で目を合わせていた二人は、申し合わせたように、同時に「プッ」と吹き出した。

◇◆◇◆◇◆◇

飾り気のない検査用のベッドから起き上がった下着姿の妹にガウンを手渡す。検査中の、アンドロイドの様なポーカーフェイスを解除した達也の顔には微かな、けれども深雪の目から逃れることは出来ない、憂慮が浮かんでいた。
「……何か至らぬところがございましたか？
お兄様、どうぞ遠慮なさらず仰ってください。
お兄様の仰ることでしたら、深雪はどんなことでも致しますので」
だからといってこの反応は、過剰と言うか、過激だと思うのだが。
案の定、達也は何とも言い難い、表情の選択に困り果てた感じの乾いた笑みを浮かべた。
「いや、至らぬところがあったとすれば、今回は俺の方だよ。
魔法式構築規模の上限が、予想を超えてレベルアップしている。
その所為でＣＡＤの処理能力がお前の魔法力について行けていない。
余裕を持たせた設定にしていたつもりだったけど……読みが甘かったな」
「すみません……」
「何を謝るんだ？　逆に誇るべきことなのに」
しゅんと俯いてしまった妹の髪をクシャッ、と撫でて、顔を上げた深雪に達也は優しく笑い掛けた。

深雪は兄につられて、あるいは兄に応えて笑みを浮かべた、ところまでは良いとして――

（……ここは頬を染めるところじゃないぞ……）

沈黙に危うさを感じて――主にガウンの合わせ目からのぞく胸元とか――、達也は早口気味に言葉を続けた。

「リーナが同じクラスに編入してきたことが、良い刺激になっているみたいだな」

リーナの名前が出た途端、上気していた深雪の瞳からスッ、と霞が晴れた。

「そうですね……生意気な台詞かもしれませんが、彼女ほど手応えのある相手は今までいませんでした」

しかし、気分を害した訳ではなかった。

深雪は達也の口から他の女の子の名前が出るたびに感情を尖らせるような聞き分けのない少女ではないから、当然と言えば当然のことだ。

寧ろ、頭が良い方向に冷めたようだった。

今の深雪の瞳には、静かな闘志が漲（みなぎ）っていた。

「ところでお兄様、お昼のご質問はやはり、リーナが『シリウス』だとお考えなのですか？」

「お見通しかい？　本当に、深雪には隠し事なんて出来ないな」

笑いながら両手を挙げて見せた達也に、深雪も悪戯っぽく笑いながら人差し指を突きつけるポーズをとった。

「それはもう。

深雪は誰よりも、お兄様のことを見ておりますから」

達也が殊更、声を上げて笑ったのは、深雪の台詞を冗談だと思ったからか、冗談にしてしまおうと思ったからか。

兄につきあって笑いながら、達也の本心を知りたい、と深雪は思った。

地下室（地下施設、と表現すべきかもしれない）は空調が効いて

いるとはいえ、いつまでも下着にガウンだけの格好でいるのはお互いに落ち着かない。
深雪を部屋着に着替えさせてから、二人はリビングに場所を移した。
スラリと細い深雪の脚を包むのは、黒のレギンス、でもタイツでもなく、長いソックス。
フワリと裾が広がった、とても短いスカートとソックスに挟まれて、深雪の白い肌が見え隠れしている。
真っ直ぐ立った状態でこれならば、座ったり前かがみになったりすると、かなり拙いのではないだろうか？
――何が「拙い」のかを意識しないまま、達也はそう考えた。
そんな兄の心中を知らず――本当に知らなかったのかどうかは、確かめようがない――深雪は兄の前にコーヒーカップを置くと、達也の隣ではなく、今日に限って、正面のソファに座った。
そのまま脚を組む、ような蓮っ葉な真似はしない。
キチンと膝を揃えて、斜めに脚を流す。
スカートの中がのぞいているより、余程、色っぽい姿勢だった。
深雪の意図が分からなかった（表面的な意図は分かっても、その裏にある真意が分からなかった）達也は、これ以上気にしないことに決めた。
気にしない、と決めた途端、視線の揺らぎが消えた。
テーブルを挟んで、深雪が少し不満げな表情を垣間見せたが、それを含めて、達也は深雪を、ただ、見詰めて、口を開いた。
「さっきの話だけど、高い確率で、リーナは『アンジー・シリウス』だと思う。
分からないのは、向こうに『シリウス』の正体を何が何でも隠そうとする姿勢が見られないこと。寧ろ、こちらに正体を気づかせようとしているようにも見える。
そして――」
「何故、ＵＳＮＡは切り札とも言えるシリウスを投入して来たのか、

ということですね」
深雪も既に意識を切り換えている模様。達也の話に真面目な口調で応じていた。
「そのとおりだ。
一週間観察した限りにおいて、リーナの能力は諜報向きのものとは思えない。
多分、本命は別に動いているんだろうけど、隠れ蓑に使うには」
「シリウスは大物すぎる……」
「リーナがシリウスと仮定して……スパイ任務はついで、だな。
本来の任務は別にある」
「ＵＳＮＡがシリウスを国外に投入する程の任務……一体、何でしょう？」
「分からないな……だけど、今の段階で気にする必要はないと思うよ」
達也の口調から急に緊張感が消えて、深雪は肩透かしにあったような気分を感じていた。
「折角アメリカが深雪の為にライバルを提供してくれたんだ。
深雪」
「はい、お兄様」
だがすぐに、達也が言おうとしている事に気づいて、深雪は改まった口調で応えた。
「リーナとは全力で競い合うんだ。
昼はああ言ったけど、勝ち負けに拘るくらいでちょうど良い。
それがお前を、今以上の高みに押し上げてくれる」
「はい」
「それはリーナにとっても同じだろうけど、気にする必要はないぞ。
こんなチャンスは滅多にない」
「はい。
それに、深雪にはお兄様がいます。
お兄様がついていて下さる限り、相手がシリウスであろうと恐れ

はしません」

達也が言っているのは競争相手として、という意味で、闘争相手として、という意味ではない。

深雪の台詞は、いささか的外れの感が無いでもない。

だが深雪の寄せる、ひび一つ無い信頼に、達也は躊躇無く頷いた。

5－（4）　吸血鬼（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

5－（4）　吸血鬼

渋谷・二十三時。

土曜日の深夜、路上に車の姿はなく、若者の姿で溢れていた。

車の姿が見えないのは、交通システムと勤務慣習の変化によるもの。

自動運転・個別輸送の電車（キャビネット）は二十四時間止まることがなく、渋谷の様な大都会であれば、共用車両（コミューター）を使うまでもなく、地下に張り巡らされた動力歩道（ムーブ・パス）に乗ればすぐに駅へたどり着く。

それに在宅勤務のインフラが整備された現代では、深夜まで事務所にしがみついている必要が全く無い。そんな急を要する仕事があるなら、最初から出勤せずに自宅で処理して専用回線で会社に提出する。今の事務所は商談の場であって事務処理の場ではないのだ。堅気の商売をやっていれば、わざわざ深夜に商談をしなければならないことなど無い。

もっとも、渋谷以外の街でもこの時間帯、同じ光景が見られるかというと、そうでもない。

渋谷、新宿、池袋、六本木……戦前（第三次世界大戦前、という意味）、若者向けの繁華街として栄えた街の中で、今でも深夜に若者がうろつき、集まる景色が見られるのは、この渋谷だけだ。

二十年に及ぶ混沌の時代、時期をずらして、新宿、池袋、六本木は外国人による破壊活動と、それに怒った若者の外国人排斥活動によって荒廃を極め、所々に虫食いの様な廃墟が生じた。その復興の過程で徹底した治安回復策が取られ、これらの街はかなり窮屈な繁華街として再建された。

渋谷はその例外だった。

戦前から荒廃の度を深め、若者同士の抗争が激化し、いち早く外国人の排斥が完了したため逆に、他の街の様な徹底した破壊を免れ

ることになった。ただそれが故に、夜の無法状態が今でも放置されているのだから、どちらが良かったのか一概には言えない。

これが昼も夜も無法地帯というなら、戦前に比べ無秩序に対して非寛容となった政府や自治体による「再開発」が進められただろう。今の行政当局は、不動産に関する私権の制限について、かなり乱暴になっている。

しかし渋谷は、昼と夜で全く違う顔を持つ。

昼は堅気の会社員が忙しく行きかうビジネス街。

夜はアウトロー気取りの若者が徘徊する歓楽街。

一斉に手を入れることが出来ないが故に、当局も中々再開発へ踏み切れずにいる。

そして今夜も、新年早々、多くの若者が路上に集まり、思い思いに騒ぎ、笑い、いちゃつき、殴り合っている。

その中に、彫の深い顔立ち、がっしりした体つきの少年の姿があった。

◇◆◇◆◇◆◇

レオには一つ、悪い趣味があった。

いや、趣味というより癖だろうか。

彷徨癖。

歩くでも、走るでも、叫ぶでもなく、

夜を、彷徨う。

深夜が近づくにつれて、当ても無くフラフラと歩き回りたくなるのだ。

レオはそれを、自身の遺伝子に刻まれた本能によるものと考えている。

彼は、世界で最初に遺伝子操作による魔法師調整技術を実用化したドイツで、その最初期に開発された「ブルク・フォルゲ〔ルーク・シリーズ〕」の第三世代。（「ブルク」は「キャッスル」の意味で

あるが、趣旨としてはチェスのコマ「ルーク」に由来する名称である）

純粋に戦闘目的で開発された調整体。

当時、魔法師の弱点と考えられていた近接戦闘能力の底上げの為、魔法能力の強化ではなく、遺伝子に身体能力の強化を施されたブルク・フォルゲは、調整体魔法師と言うより「魔法を使える超人兵士」「人間を超える身体能力と、魔法技能を併用する強化人間」として産み出された。

その調整手段にキメラ化処置こそ含まれていなかったものの、遺伝子改造にあたり人間より遥かに頑強な大型哺乳類を参考にしたのは想像に難くない。

肉体のリミッターを外側から外すのではなく――その手の措置は高確率で魔法技能を損なうということが当時既に知られていた――肉体の性能そのものを引き上げる。

その無理な遺伝子改造の結果か、

ブルク・フォルゲ第一世代の多くは幼少期に死亡し、成長した後も大半が発狂して、死んだ。

その数少ない生き残りの一人が、レオの祖父だった。

レオは恐怖を抱えている。

彼という人間を外側から眺めている限り、到底そうは見えないが、彼は精神の奥に恐怖を抱えながら生きている。

いつか自分も、狂ってしまうのではないかと。

人ならざる因子が人の因子を喰らって、心が壊れてしまうのではないかと。

彼が自分の衝動に忠実であろうとしているのは、衝動を解放することで、心が軋み、壊れる瞬間を先延ばしに出来るのではないか、と考えているからだ。自由に生きた祖父が天寿を全うしたという実例を知っているからだ。

だから彼は、「夜を彷徨う」という衝動に逆らいはしない。

心の赴くまま、月の下を、星の下を、漆黒の雲の下を、ぶらぶら

と歩く。
ある夜は都心、ある夜は繁華街、ある夜は郊外、ある夜は人里離れた山の中。
場所は決まっていない。気まぐれに、その日の気分で道を選ぶ。
彼が今日、渋谷にやって来たのは、だから、全くの偶然だった。

◇◆◇◆◇◆◇

「あれっ？
エリカの兄貴の警部さん？」
すれ違った相手がたまたま知り合いだった、ただそれだけだが、レオはその青年に声を掛けた。
――これもまた単なる気まぐれであり、知り合いと見ればいつもいつも声を掛けている訳ではない。
ざわめきの波が押し寄せた。
レオの声は、決して大きなものではなかった。
すれ違った相手を呼び止める、その必要を満たす程度。
それなのに道の両端から、決して好意的とは言えない視線が集まった。
「君、チョッと、一緒に来てくれ」
今にも舌打ちしそうな顔で応えたのは、「エリカの兄貴」の隣を歩いていた男だ。青年と呼ぶのが少し苦しくなってきた年代のその男の顔も、レオは覚えていた。顔だけでなく、名前も。
「稲垣さん、だっけ？
やぶからぼうに、何ですか？」
なんスか、とも聞こえる乱暴な質問には答えず、稲垣はレオの手首を掴んだ。
振り払うのは簡単だったが、レオは大人しく稲垣について（引っ張られて）行った。

連れ込まれた先は路地奥の小さな酒場。
看板には「Ｂａｒ」と書かれていたが、横文字にする必要性をレオがまるで感じない店構えだった。
「マスター、上を借りるよ」
カウンターの向こう側でグラスを磨いていた（ただし、着ている物は色の褪(あ)せたトレーナーだ）店の主人に声を掛け、返事を待たずに突き当たりの階段を上がる。
連れ込まれた先は、四人も入れば窮屈な、狭い部屋だった。出入り口が宇宙船のハッチの様な気密構造の分厚い扉になっているのが、古ぼけた内装と酷く不釣合いだ。
「オレ、未成年なんだけど」
気密ハンドルを両手で回し、扉をしっかりロックした稲垣が口を開く寸前、レオがとぼけた口調で機先を制した。
苦虫を噛み潰した顔の稲垣の隣で、寿和が面白そうに――楽しそう、という意味ではなく、興味深げに、という意味で――笑った。
「西城君、だったね。
よく俺たちのことが分かったなぁ。ちゃんと気配は消していたはずなんだけど」
それだけで、レオは寿和の言わんとしている事を理解した。
「あ、あ～……もしかして、捜査の邪魔しちまった？」
その察しの良さは、寿和にとって意外なものだったようだ。
「へぇ……腕っ節だけじゃないんだね……
まあ、単なる脳筋にエリカが肩入れするはずも無いか」
反射的に顔を顰めたレオだったが、好意か悪意かはともかく、技を教えてもらったり得物を貸してもらったり色々と「肩入れ」されている自覚はあったので、口に出して反論はしなかった。
「警部さんの家(トコ)さ、娘の育て方を間違えてんじゃない？」
反撃は、せいぜい憎まれ口を叩く程度だ。
「違いない」
苦笑する寿和。だがその軽い口調と裏腹に、細めた目の奥の光が

根深いものを感じさせる。
踏み込むことに危うさを感じて、レオは口をつぐんだ。
「捜査については気にしなくて良いよ。
気配を消していたのは無意味なトラブルを避ける為で、尾行とかしていた訳じゃないからね。
深夜のココは、警察が何かと目の仇にされる場所だから」
「目の仇ね……確かにそんなだよなぁ」
何を連想したのか、深く頷くレオ。
その仕草は彼が、この街の若者より警察の側にシンパシィを感じていると告げている。
好意を向けられれば態度が和らぐ、それは対人関係の基本パターンの一つだ。（異性間では必ずしもこの限りではないが）
稲垣がレオに向けている眼光も、幾分かフレンドリーなものに変化した。
「警部、ちょうど良いじゃないですか。彼に訊いてみたらどうですか」
それだけでは当然、何のことだかレオには分からなかったが、説明を急かすようなことはしなかった。
寿和が頷き彼に向き直るのを、レオは悠然と待ち構えていた。
「西城君、キミ、ココにはよく来るのかい？」
「よく、って程じゃないけど、たまに来ますよ。大晦日もここでフラフラしてたかな」
「二週間前か……じゃあ、都内の繁華街で妙な事件が起こっているのを知っているかい？」
報道規制をかけている事件の内容をばらそうとしている寿和を、稲垣は止めなかった。
どうせ明日には「スクープ」されることを、稲垣は知っていた。
「妙な事件？　そんなもん、毎日起こってると思うけど。
ところで警部さんって、横浜の方が担当じゃなかったっけ？
何で都内の事件を調べてんだ？」

「俺たちは警察省の所属でね。日本全国をあちこちに異動さ。って訳で、今は都内の連続変死事件を捜査中だ」
軽く、サラッと流れ出た台詞。
しかし、レオがその口調に惑わされることは無かった。
「変死、って……猟奇殺人か？　連続で？」
眉を顰めてレオが問う。
寿和は表情に出さず、レオの評価を上方修正した。
「その通り。
どうせ明日になれば分かることだし……」
そう言って寿和は稲垣に目配せした。
稲垣は頷いて、スーツの内ポケットから携帯端末を取り出した。
折り畳み型の端末を開いてスクリーンに画像ファイルを呼び出す。
スライド形式に切り替わって行くその写真に、レオは「ゴクリ」と息を呑んだ。
「一番新しい犠牲者が三日前、道玄坂上の公園で発見された。死亡推定時刻は午前一時から二時の間だ」
「こんな都心の真ん中でか！？」
都心の真ん中というのも変な表現だとレオは思ったが、自分の心情を適切に表す言葉をそれ以外に考え付かなかった。
怪異は人里離れた山の奥で起こるのが相場ではないのだろうか。
「昼間は都心かもしれんが、夜は何が起こっても不思議は無いよ。この街ではね」
しかし、寿和から苦い顔で言い返されて、そうだった、と頷かざるを得なかった。
今の渋谷の異常な二面性については、レオも身を以って知っていることだった。
「そこで訊きたいことなんだけど、妙なヤツに心当たりは無いか？
噂に聞いたってだけでも構わないんだが」
「夜中にこの街をうろついてるのは妙なヤツばかりだよ。
具体的に、どんなヤツのことを知りたいんだ？」

「具体的と言えるかどうかは分からないが、人を殺すのに態々吸血鬼の真似事をするような異常なヤツだ」
それを聞いて、レオは顎に手を当てた。
「……真似事ってのは分かってるんだな？」
レオが訊ねているのは、犯人が本物の吸血鬼ではないと断定する理由。
それに対して、「本物の吸血鬼なんている訳が無い」とは、寿和は答えなかった。
「首の傷痕がキレイ過ぎるからな」
「キレイ過ぎる？」
「ああ、雑菌がね、普通より寧ろ少ないんだよ。野犬なんかに噛まれると、傷口が雑菌で凄いことになるんだ」
「……殺菌効果を持つ唾液を出しているのかもしれないぜ？」
「生物由来の分泌物の痕跡は見つかっていない。まあ、殺菌成分を持つ全く未知の揮発性体液を分泌する相手だ、という可能性もゼロではないが」
「現実的じゃねえな」
「そういうことだ」
オカルト的な――つまり、現実的でない存在を相手に現実的かどうかを問うのは、一見無意味なことの様にも見える。
だが被害を受けているのは、人間という極めつけに現実的な存在だ。
まず、現実的な手段によって犠牲者となるに至った可能性を、考えるべきだった。
「つまり、首に穴を開けて吸引機かなんかで血を抜き取っているヤツがいるって訳だ」
「そういうこと……西城君、キミ、刑事にならないか？」
いきなり過ぎる話題転換。流石に、レオは驚きを隠せなかった。
「いったい何なんだよ、急に……」
「優秀な人材は倍率が高いからな。特に魔法師は警察でも人手不足

だ」
「オレが優秀ぅ？」
「進路は決まっているのかい？　警察に興味は？」
「いや、まだだけど……一応、機動隊は希望に挙げてるけどよ……」
「機動隊なんてもったいない。キミは刑事に向いてるよ。何て言うかな、捜査勘がある！」
目を白黒させているレオを、熱心に口説き始めた寿和の脇腹を、稲垣が肘で小突いた。
「警部、その話はまたにしては？」
「んっ？　ああ、そうだな……
失敬失敬、思わず話が逸れてしまったようだ」
寿和は自分自身に呆れた、と言わんばかりの苦笑いを浮かべた。
それは多分に、照れ笑いの成分も含んでいたが。
「それで、心当たりは？」
改めて訊かれる前からレオは両腕を組んで唸っていたが、やがて諦め顔で腕組みを解いた。
「ワリィ、今んとこ、思いつかねぇや」
礼儀って何それ？　と言わんばかりの乱暴な、と言うより乱雑な口調だったが、不思議と嫌な感じはしなかった。
「ダチからネタ、仕入れときますよ」
「えっ、いや、それはいいよ。
そういうのは警察の仕事だし、嗅ぎ回って目を付けられないとも限らないし」
「でも警部さん、夜の渋谷だぜ？
大人の、それも警察の人が色々訊き出すのは難しいと思うけどな」
「……いや、それはそうかもしれないが……」
「危険なことに鼻を突っ込むつもりも無いって。
こう見えても嗅覚には自信ありだ」
「そうかい？　じゃあ」
「警部！？」

慌てて声を上げた稲垣を手振りで制し、寿和は懐から名刺を取り出した。
「じゃあ何か分かったらここにメールくれよ。キーの手入力は最初だけで、二回目からは自動的に更新されるから」
「厳重なこったな。んじゃ、何か分かったら知らせるよ」
そう言って立ち上がり、レオは稲垣が両手で回さなければならなかった気密ロックのハンドルを軽々と片手で回して階段を下りて行った。

◇◆◇◆◇◆◇

週明けの教室は、猟奇殺人の話題で持ち切りだった。
日曜日の朝、国内二位のニュースサイトにスクープ記事が配信されてから、報道各社は連続猟奇殺人事件の記事でお祭り騒ぎとなった。
その様子は狂騒的というか箍(たが)が外れたというか、購読者が鼻白む程のはしゃぎぶりだ。
しかしそれだけに、このニュースが世の中に広まるのは速かった。
――ただし、そのほとんどは殊更にオカルト的な面を強調した、センセーションを煽るものだった。
「おはよ～
ねっ、ねっ、達也くん、昨日のニュース見た?」
しかし、煽られていると判っていて敢えてそれに便乗するのが、達也たちの年頃なのかもしれない。
案の定、こういうことには決して踊らされず、真っ先に踊りそうな友人が、イの一番に声を掛けてきた。
「ニュースって、『吸血鬼』の?」
分かり切ったことでも一応確かめてみるのが礼儀というものだろ

う。
　そしてエリカは思った通りに、楽しそうに頷いた。
「あれってさ、やっぱり単独犯とは思えないよね？　プロの組織的犯罪なのかな？
　あたしは臓器売買ならぬ『血液売買』組織の犯行って説に一票なんだけど」
　達也が椅子に座る前に、彼の机に浅く腰掛け身体を捻って顔を近づけてくる。
　この時、達也は「どうでも良いが、身体、柔らかいな」と、本当にどうでも良いことを考えつつ、それなりに真面目くさった表情を作って首を横に振った。
「いや、それだと死体も出て来ないはずだろ？
　殺してしまったら使い捨てだし、死んでしまったら他にも売れるものがあるだろうし」
　現代の医療技術でも、完全な臓器再生にはまだ程遠い。
　内臓の機能不全・欠損に対する最も有効な治療は未だに臓器移植で、だから今のような会話も成立する余地がある。
「ふ～ん、なるほど……じゃあ達也くんは、営利目的じゃ無いって意見なのね？」
「そもそも営利目的の殺人ってのが……無いとは言わないが、今回は違うだろうな」
「じゃあテレビで言っているように、異常者による快楽殺人なんでしょうか？」
　隣の席から眉を曇らせて、と言うより少しビクビクした表情で、美月が会話に入って来た。
「異常者には間違いないだろうし、多少はそういう嗜好もあるんだろうけど」
　そう言って達也は、軽く肩を竦めるような仕草を見せた。（ような、であって、実際にはそこまでハッキリしたアクションではなかった）

「でも美月。それだけじゃ、何の特定にもなっていないぞ」
達也の指摘に美月は「あっ……」と口を開けて、慌ててそれを手で隠した。
「じゃあ達也は、あくまで人間による犯行で、オカルト的な事件じゃないって意見なんだね？」
「お前はどうだ、幹比古。
妖怪とか魔物とか、そんな存在が関わっていると思うか？」
幹比古の質問を、内容の同じ質問で切り返す。
幹比古は「う～ん……」と唸って、一往復、首を横に振った。
「分からないな……何となく、ただの人間の仕業とは思えないんだけど……」
達也はニヤリと、人の悪い笑みを浮かべた。
「オカルト的と言えば、つい百年前まで魔法はオカルトの最たるものだったんだけどな」
意表をつかれた顔で幹比古が動きを止めた。
エリカがずいっ、と身を乗り出してきた。
「達也くんはこれが、魔法師絡みの犯罪だと思ってるの？」
「そこまでハッキリ思っている訳じゃないさ。街頭カメラと一緒に設置されているサイオン・レーダーは何の反応も捉えていないっていうしな。
でも上級者ならレーダーを誤魔化すことも出来るし、精神干渉系の系統外が使える術者なら都会の真ん中で誰にも気づかれずに犯行に及ぶことも可能だ」
「いやですね。人間主義みたいな風潮が強くならないと良いんですけど」
暗い声で美月が呟く。
現代の「人間主義」とは、平たく言えば、魔法師排斥運動の一種だ。
魔法は人間に許された力ではない、というキリスト教亜種（異端、の方が適切か？）のカルト思想を骨子として、魔法の使用を禁止し

ようとする運動。「人間は人間に許された力だけで生きよう」という主張、というか建前から、「人間主義」と名付けられており、アメリカ東海岸を中心に近年勢力を拡大している一派だ。

それが「魔法を使用しない」というだけなら別に害のあるものではないが、人間主義者の過激分子は魔法師の存在そのものを否定する暴力行動に出ることから、ＵＳＮＡでも犯罪予備軍として当局の監視を受けている。

「そう言えば、そんなことをテレビで喚いてたお調子者がいたな～」

「はよッス、何の話だ？」

割り込んできたのは、相変わらず達也の前の席の――席替えを言い出す「担任教師」がそもそもいないから当たり前だが――レオだった。

「今日は随分遅かったな？」

片手を上げて短縮（圧縮？）された挨拶に応え、達也はレオにそう訊ねた。

外見の印象からすれば意外かもしれないが、レオがこんなに始業間際に余裕無く滑り込むのは珍しい。

「あー、チョッと野暮用で夜更かししちまって……それより、何の話してたんだ？」

「例の『吸血鬼事件』のことですよ」

美月の答えにレオは顔を顰めた。

彼の口から「またか……」という小さな呟きが漏れたように聞こえたが、ちょうどその時、端末に一時限目開始のメッセージが表示され、確かめる間もなく朝の井戸端会議はお開きとなった。

◇◆◇◆◇◆◇

学食に現れた深雪の隣に、金髪の同行者の姿は無かった。

別に約束しているのでもないのだから、その事について疑問や物足りなさを感じたりはしない。

だからこの質問は、気になったと言うより単純に思いついてのものだった。
「今日はリーナと一緒じゃないんだな」
だが妹の回答は達也の予想外のものだった。
「今日、彼女は欠席です、お兄様。
急遽、お家の関係で所用が出来たとか」
「ふぅん……？」
留学早々に欠席？　と達也は思ったが、彼女以外に魔法師の留学生を知っている訳でもないのだから、それが異常なこととは言い切れない。そもそも彼女の素性が思っているとおりのものなら、学校よりも優先しなければならないことが数多くあるはずだ。
エリカや美月は気に掛ける素振りを見せていたが――もっとも、美月は「心配」でエリカは「好奇心」という違いがあったが――それ以上、深雪に訊ねても答えが得られる道理がないのは分かっている。そのままいつも通りに、一人欠けた（欠けているのはリーナではなく雫だ）七人でテーブルを囲んだ。
「そう言えばさ、雫、元気でやってるかな？」
エリカの目は、ほのかに向けられている。
「ええ、元気でやってるみたい。
授業もそんなに難しくないって言ってたわ」
それを当然とばかり、ほのかはすぐに答えた。
現代の通信インフラにとって、太平洋の向こう側はそれ程大した距離ではなかった。
「先生を交えたディスカッション形式の授業がまだ残っているのには驚いた、って言ってたけど」
このエピソードには全員が驚きと興味の入り雑じった表情を見せた。
魔法を学ぶ生徒の留学が事実上途絶えているから、外国でどんな授業をしているのか、ほとんど情報が入って来ないのである。
「じゃあリーナも、色々戸惑っているんじゃないでしょうか」

「そうでもないみたいよ」
美月の懸念を、深雪は笑って否定した。
事実、リーナにはアメリカと日本の授業形態の違いに戸惑っている様子がない。
まるで、最初から日本の魔法科高校にしか通ったことが無いみたい、と深雪はこっそり人の悪い笑みを浮かべた。
コケティッシュな小悪魔の笑みは、幸いなことに誰の目にも留まらなかった。
友人たちの意識は、ほのかからもたらされた次の爆弾発言、ならぬ爆弾ニュースに釘付けとなっていた。
「昨日もチョッと話したんだけど、『吸血鬼事件』のニュースには雫もビックリしてたわ。
なんかね、アメリカでも似たような事件が起こってるんだって」
「ええっ！　ホントなの、それ？」
「私も雫に同じ質問しちゃったわよ。
雫のいる西海岸じゃなくて、中南部のダラスを中心とした地域で起こってるらしいんだけど」
「初耳だな……」
最近は叔母から受けた警告のこともあって、ＵＳＮＡ関係のニュースをまめにチェックしていた達也が、意外そうに、かつ感心した口調でそう呟いた。
「向こうでも報道規制は結構あることなんだそうです。
雫もニュースじゃなくて、留学先の情報通の生徒に聞いたと言っていました」
達也の関心を引いたのが嬉しかったのか、ほのかがはにかんだ笑顔で説明する。
頷く達也の眼には、興味本位と言うには強すぎる光が宿っていた。

◇◆◇◆◇◆◇

達也たちが留学していった友人の話題で盛り上がっていた頃、留学して来た金髪碧眼の高校生はＵＳＮＡ大使館でミーティングの最中だった。

「つまりフレディ、いえ、フォーマルハウト中尉の大脳皮質には、普通の人間には決して見られないニューロン構造が形成されていたということですか？」

会議はランチタイムに食い込んでいたが、リーナを含めて中断を主張する者はいなかった。

「普通の人間、と言うと誤解を招くかもしれません」

答えたのは、白衣こそ着ていないものの、いかにも科学者然とした外見の男性だった。

「解剖の結果、アルフレッド・フォーマルハウトの大脳には、魔法師を含めて、これまで人間の大脳皮質には観察例が無いニューロン構造が発見されました。

具体的には、前頭前皮質に小規模な脳梁に似た組織が形成されていたのです」

曖昧な表情を浮かべている参加者が多いのを見て（もちろんリーナもその一人だ）、科学者はもう一度、今度は少し講義調に説明を始めた。

「人間の大脳が右半球と左半球に分かれているのはご存知ですね？」

参加者全員が頷いたのを見て、言葉を続ける。

「それで、左右の半球は大脳の中心近くで脳梁によってつながっています。

逆に言えば、普通人間の大脳は中心部近くにしか左右をつなぐ組織が無いわけです」

「前頭前皮質は大脳の表面部分……そこには本来、脳の左右をつなぐ組織は無い？」

「そのとおり。

つまり、人間には無いはずのものが、フォーマルハウト中尉の大脳にはあったということですね」

リーナは今日、何故、自分がここに呼び出されなければならなかったのか、ようやく納得した。

確かにこれは、通信回線越しに話せることではない。

「それは一体どういう機能を果たすものなのだ？

前頭前皮質というのは、思考力や判断力と密接な関係のある部位だという話を聞いたことがあるが……

そこに新たな脳細胞が形成されているということは、思考力が影響されていたのか？」

「我々ＵＳＮＡの魔法研究者の間では、大脳は独立の思考器官ではなく、真の思考主体であるプシオン情報体、いわゆる『精神』から送られてくる情報を受信し、肉体の情報を精神に送信する通信器官である、という仮説が支持されています」

向かい側に座っていた高級武官から出された質問に、科学者は愛想笑いを浮かべながら首を横に振った。

「この仮説に従うならば、フォーマルハウト中尉の大脳に形成された新たなニューロン構造は、従来ダウンロードされることの無かった未知の精神機能とリンクするものである、と考えられます」

参列者の顔にまたしても、途方に暮れた表情が浮かぶ。

その中でじっと考え込んでいたリーナが、発言を求めて手を挙げた。

「少佐、何か？」

科学者に発言を促されても、すぐには言葉が発せられない。

リーナがその質問を、男の目を惹きつけずにはおかない紅唇から紡ぎ出したのは、三秒が経過した後だった。

「……ドクター、その未知の精神機能が、外部から意識に干渉する未知の魔法という可能性はありますか」

科学者の返答は間髪を入れぬものだった。

「フォーマルハウト中尉が操られていた、という可能性をシリウス少佐は言われているのだと思いますが、残念ながらその可能性はありません。

仮説ではありますが、精神と肉体は一対一で対応するものと考えて間違いありません。

他者の精神に干渉することは出来ても、それが大脳の組織構造にまで影響を与えることは無いでしょう。他者の精神の構造そのものを作り変える魔法でもなければ」

精神の構造そのものを作り変える魔法、というフレーズから、リーナは一人の魔法師の伝説を思い出した。

しかし、その魔法師は既に死んでいる。

二十年に及ぶ入院生活の末に、結婚もせず子供も作らぬまま、この世を去ったはずだ。

リーナは軽く頭を振って、自分の思考をリセットした。

5－（5）　忍び寄る脅威（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

5－（5）　忍び寄る脅威

第一高校の三大自治組織と言えば、生徒会、部活連、風紀委員会の三つが挙げられる。

このうち風紀委員会は制度上、生徒会の下部組織になっているが、委員の選定に生徒会以外の意思が関与すること、独立性の高い権限を持っていることから生徒会と並び称されている。

一方、部活連は生徒会から独立した組織だ。名目上は各クラブの部長・副部長をメンバーとする非公式な連絡会であり、生徒会の規則に部活連という組織は無い。

しかし実質の上では、部活連が生徒の自治組織中で最大の規模を有しており、それに応じて使用可能な施設も多い。

建前上はサバイバル部――この名称は前世紀、まだ魔法が一般人にとって絵空事でしかなかった時代の名残であり、活動内容から言えば野外戦闘演習部とでも呼ぶべきである――の第二部室として貸与されているこの部屋も、実際には部活連の会議室として使用されている。

この日、高校生が使うには不釣合いな、厳重すぎる機密保持設備が勝手に追加された「サバイバル部第二部室」は、高校生が醸し出すには重過ぎる緊張感に覆われていた。

まだ午後の授業が行われている時間だが、三年生は既に自由登校となっている。

一、二年生が教室や実習室に拘束されているのを尻目に、二人の三年生男女が他に誰もいない部室でコッソリ会っていた。

しかし、そこに甘やかな雰囲気は一切無かった。

この二人は両親からいずれ結婚、と考えられているにも関らず。

（と言っても数あるカップリング候補の一つでしかないが）

それも当然で、この密会は、「密会」ではあっても「逢引」ではない。

克人と真由美は、それぞれ十文字家と七草家を代表してこの場に来ているのだった。

「何で私たちがわざわざこんな所で、とは思うけどね」

「すまんな。こうするのが一番目立たない方法だと判断した。今、四葉を刺激する結果となる事は、十文字家として避けたい」

「ウチと四葉は先々月から現在進行形で冷戦状態だものね。まったく、あの狸親父が、余計なことをするから」

忌々しげな真由美の呟きに、克人が失笑を漏らした。

「七草でもそんな言い方をするんだな」

「あら、ごめんあそばせ？　はしたなかったかしら？」

芝居っ気タップリに真由美が科を作ると、克人の失笑は苦笑に変わった。

「お前の相手をしていると、男扱いされていないのではないか、と時々考えることがあるぞ」

「それはゴ・カ・イ、よ？　十文字くんは私の知り合いの中でピカイチに男らしいわ。

ただねぇ」

「今更男女の仲には成れんか」

「入試の時から、三年来のライバルですもの」

一頻り、声を潜めて笑い合った後、二人は同時に表情を改めた。

笑い会っている間も二人の間には重苦しい緊張感が漂っていたから、雰囲気が改まった、とは言えないが。

「十文字くん。父からの、いえ、七草家当主、七草弘一からのメッセージをお伝えします。

七草家は十文字家との共闘を望みます」

「穏やかではないな。『協調』ではなく、いきなり『共闘』か」

言葉を切り、視線で説明を求める克人。

もちろん真由美も、相手が事情を理解できるだけの説明をするつ

もりだった。
「吸血鬼事件のことは、どの程度知ってる？」
「報道されている以上のことは知らん。
当家は七草家ほど手駒が多くない」
克人の謙遜とも取れる台詞に、真由美の口元が少し緩んだ。
「十文字家は一騎当千がモットーだものね。
で、数だけは多い七草家で判っている限りでは」
思わせぶりに言葉を切る真由美。
そして、克人から催促される前に、こう続けた。
「吸血鬼事件の犠牲者は報道のちょうど三倍。
昨日の時点で十五人の犠牲者が確認されています。
二日に一人の割合ね」
如何な克人といえど、これには驚かずにいられない。
「……それは、この東京近辺のみでか？」
「東京都内、それも都心部に集中してるわ」
克人がじっと考え込む素振りを見せた。
真由美は彼が口を開くまで無言で待った。
「警察が把握していない被害者を七草家が把握している。
しかも被害が発生しているのは、限られた狭い地域だ。
……被害に遭っているのは、七草の関係者か？」
「半分正解。
警察が把握していない被害者は全員、ウチと協力関係にある魔法師よ。
そうじゃない被害者も、魔法師あるいは魔法の資質を持っていた人だと判明しているわ。例えば、魔法大学の学生とかね」
「つまり」
克人の表情が凄味を帯びた。
「犯人は、魔法師を狙っているということか」
「……十文字くん、チョッと怖いんだけど」
だがその表情は、女子高校生には刺激が強すぎたようだ。演技か、

本音かは別にして。
「むっ……すまん」
そして例えそれが演技であったとしても、克人を凹ませるには十分な効果を持っていた。
「連続殺人事件の犯人、それが単独犯か複数犯かは分からないけど、とにかくこの『吸血鬼』が魔法師を標的としているのは確実じゃないかしら」
そこはかとなく哀愁を漂わせ始めた克人に対するフォローも無しに平然と話題を戻して見せた真由美の本性は、やはり「小悪魔」に違いなかった。
「時系列的に言うと、まず魔法大学の学生と職員に被害が出て、その調査をさせていたウチの関係者が返り討ちにあって、その間にも被害が拡大している、という状況なんだけど」
「確かに、放ってはおけんな」
尚も表情の端々に真由美から受けたダメージを残しつつ、克人は深く頷いた。
「しかしそのような事情ならば、四葉とも協力すべきだと思うが」
克人のもっともな提案に、今度は真由美が顔を顰める番だった。
「ホントはそうすべきだと私も思うんだけど……不文律（ルール）を破ったのはコッチだもの。
父の方から頭を下げないと関係修復は無理だと思うわ」
「だがお父上には四葉に謝罪する意思は無い、か……弘一殿と真夜殿のこれまでの確執を考えれば分からぬでもないが……しかし、四葉がここまで態度を硬化させるのは珍しい」
四葉は良く言えば自主独立路線、悪く言えば唯我独尊路線で（唯我独尊は本来、決して悪い意味ではないが）、他の家が何をしようと気にしないというスタンスを通して来た。取り憑かれたように自らの性能アップに邁進し、ただその魔法力のみによって十師族のトップに七草と並び立っている、十師族の中においてすら異端と言える一族だ。

克人も一体裏で何をやっているのか不気味に思うことがあるのだが、しかしそれでも師族会議を分裂させるような明確な対決姿勢を示すことは彼の知る限り無かった。真由美には言えないが、対立の種を作り出すのは大体において七草の方だ。

一体何があったのだろうか？　という思いが、顔に出ていたのだろう。

「私も詳しくは知らないんだけど……」

真由美が渋々、という感じで口を開いた。

「四葉がアプローチしていた国防軍の某部隊に、あの狸親父がコッソリ割り込みを掛けたらしいのよ。それがバレちゃって……」

「……なるほど」

それなら四葉の強硬姿勢も頷けるというもの。

今にも歯軋りを始めそうな顔をしている真由美に、克人はそう相槌を打つことしか出来なかった。

多分、心の中で父親に対する罵詈雑言を九十九ほど並べ立てたのだろう。

短くない時間が経過してようやく平静な表情を取り戻した真由美が、改めて克人の方へ向き直った。

「それで、如何でしょう。十文字家は七草家と共闘していただけますか？」

口調まで改めて訊ねる真由美に、克人は即、頷いた。

「協力しよう」

「いつもの事とはいえ……随分と即答ね」

迷った素振りも無い克人の回答に、真由美が呆れ声で呟いた。

「さっきも言った。話を聞いた以上、十文字家としても放置しておける事態ではない」

無論、そんなことで揺らぐ克人ではなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

達也の放課後はバリエーション豊かである。
基本パターンこそ二種類、学校の図書館にこもるか、風紀委員として校内を巡回しているか、だが、後者のパターンにおいては本当に色々なことが起こる。
それこそ、誰かの陰謀じゃないか？　と疑いたくなる程に。
今日はそれを、一際強く感じた。
風紀委員には校内でＣＡＤを常時携行できる特権が与えられているが、達也は委員会の仕事中を除きこの権利を使っていない。
元々ＣＡＤは系統魔法を短時間で発動する為の道具であり、他の魔法、系統外魔法や無系統魔法、分類の性質は違うが古式魔法にも使えるとはいえ、特に無系統魔法は、サイオンを放出するだけの単純なものならＣＡＤが無くてもそれ程の不自由は無い。
九校戦で術式解体（グラム・デモリッション）が使えることを自ら暴露してしまった達也は、二学期以降、授業外では主に無系統魔法を利用している。隠さなければならない裏技のフラッシュ・キャストを使わなくてもそれで十分に用が足りていたので、ＣＡＤを携行する必要が実質的に無かったのだ。
巡回の際に委員会備品のＣＡＤを身に着けているのは、示威的な意味合いが強い。
とはいえ牽制効果は馬鹿にならないので、達也は校内巡回前に委員会本部へ立ち寄って、両腕にＣＡＤを巻く。それを習慣としていた。
今日もいつも通り、授業時間の終了後（授業の終了後、ではないところが二科生たる所以だ）風紀委員会本部に足を運んだ達也は、そこにリーナの姿を発見した。
遠目にも彼女の豪華な金髪は見間違えようが無い。
思わずＵターンしたくなった衝動を堪えて、達也は努めていつも通りの声を出した。
「お早うございます」
この朝昼晩を無視した挨拶にもすっかり慣れた。

そのまま人だかり――と言っても見たところ五人しかいないが――の傍らを通り抜け、手早く準備を終えようとして、
「あっ、司波くん、チョッと」
あえなく花音に捕まってしまった。
失望が顔に出なかったのは日頃の修練（？）の賜物だ。
「何でしょうか」
我ながら熱意の無い声だったが、こういう所に全く頓着しないのが花音の美点であり欠点だ。
「こちら、シールズさんのことは知っているわよね？」
質問形式の断定。
もちろん、達也に頷く以外の選択肢は無い。
「シールズさんから風紀委員会の活動を見学したいって言われているの。
日本の魔法科高校の生徒自治を見てみたいんですって。
司波くん、今日当番でしょ？
彼女を連れて行ってくれない？」
面倒な、と達也は思った。
面倒臭い、ではなく、面倒。
リーナの意図は分からないが、高確率で厄介ごとが起こりそうな気がする。
それはもう、リーナを囲んでいる男子生徒（全員上級生だ）の面白く無さそうな目つきを見るだけで明らかである。
風紀委員会だから嫉妬の目を向けられないようなもので、校内をリーナの二人で練り歩いたりしたら一体どんな針の筵になるやら、見当がつきそうで、つかない。
しかしリーナの申出自体も達也が指名されることにも十分な合理性がある。
「分かりました」
諦めて受け容れるしか、手は無かった。

まだ二週間目だから意外でも何でもないことだが、リーナと二人きりになるのは初めてのことだ。

生徒が行き交う校舎内だから厳密に言えば二人きりではないが、気まずさは人気（ひとけ）があろうとなかろうと変わらない。

一応、達也の為に弁護をしておくと、リーナが飛び切りの美少女だから気まずかったのではない。

探りを入れる気配を、リーナが隠し切れていないのだ。チラチラと達也を窺い見る視線を、本人は誤魔化しているつもりでも、達也から見れば全く誤魔化し切れていない。

だからといって達也の方から「お前はスパイだろう」などと切り出せるはずもなく、もやもやとしたストレスが火山灰の様に降り積もって行く一方だった。

「リーナの通っていた学校では、こういう制度って無かったのか？」

何時までもダンマリを決め込むことも出来ない（と言っても、まだ委員会本部を出てから十メートル程度しか歩いていない）。この沈黙の重さは何なんだよ、と思いながら、達也は珍しく自分の方から話題を提供するというサービス精神を発揮した。

冷静に考えれば、結構意地の悪い質問だったが。

「えっ？　ええっと……」

意地が悪いと気がついたのは、リーナが見るからに焦っていたからだ。

伝え聞く「シリウス」は、代々完全な前線（フォワード）タイプの実戦魔法師という話だが、少なくともリーナは諜報活動の訓練を全く受けていないんだろうなぁ、と達也は少し生暖かい気分で思った。

「……一年生の内はそういう事に疎くても仕方が無いか」

リーナを見ていて気の毒になったので、達也は軽くフォローしてみた。彼女の正体を暴く必要はないし、開き直られては薮蛇だ。

「え……ええ、そうなのよ。

それで、一年の頃からこういう活動に参加させているこの学校のノウハウをもっと良く知りたくて」

ややアクシデントに弱い傾向はあるが、頭は良いのだろう、と達也が思うのはこういう所だ。
後付でもキチンと辻褄を合わせて来る。
こういう機転（詭弁？）はウチの妹より上かもしれないな、と達也は思った。

◇◆◇◆◇◆◇

案の定、突き刺さる視線が痛かったが、留学生に恥ずかしいところは見せられないと自重したのか、実力行使に及ぶ生徒はいなかった。
そのままリーナを連れて主に実習室、実験室を回る。解説を交えての巡回は、改めて校内施設の案内をしているみたいな格好になった。
実験室が並ぶ特殊棟の端、特殊棟から裏庭に降りる昇降口で、リーナが足を止めた。
「疲れたのか？　戻ろうか？」
無論、そんなことで立ち止まったのでないことは分かっていた。
会話の呼び水として言ってみただけだ。
「いいえ、大丈夫よ」
そこで言い難そうに言葉を切る。
「なに？」
達也に続きを促され、リーナは逡巡を押し切った。
「タツヤはａｌｔｅｒｎａｔｅ――二科生なのよね？」
「そうだけど？」
正面からこの台詞を言われたのは久し振りだ。
またか、と思うより寧ろ新鮮さを感じつつ、質問の意図を訊き返す。
「Ａ組のみんなと制服が違うから何故かなって思ってたら、ミユキが不機嫌そうな声で教えてくれたわ」

その時のことを思い出したのか、リーナがクスッと笑った。如何にも深雪らしいエピソードで、達也も苦笑いするしかない。

「でも、さっきカノンに聞いたら、タツヤは一高でもトップクラスの実力者だって言ってた」

達也にはリーナの発音が「かのん」ではなく「キャノン」に聞こえたが、ｃａｎｎｏｎ（大砲）ではなくｃａｎｏｎ（典礼聖歌）の方だろう、と勝手に解釈してスルーした。――流石に「大砲」では花音が可哀想だと思ったのだ。

そんな余計なことを考えていたので、リーナが何を言いたいのか理解するのが遅れた。

「タツヤ、なぜ劣等生のフリなんてしてるの？

劣等生のフリをしていて、なぜ簡単に実力を見せちゃうの？

タツヤのやってることって凄くチグハグで、どうしてそんなことをするのか分からないわ」

最後まで聞いて、リーナの言いたいことがやっと分かった。

「千代田先輩にどう聞いたのかは知らないけど、劣等生のフリなんてしてないよ、俺は。本当に劣等生なんだ。」

幸い質問の意図を丁寧に説明してくれたお蔭で、答えを組み立てるのも手間取らなかったが、そうでなければボロを出していたかもしれない。

余計なことを考えるのは控えよう、と達也は思った。

「実技試験の評価項目は速度、規模、強度の三つ。国際基準に合わせた基準を使っている。

でも、実戦の勝敗はこの三つの優劣だけで決まる訳じゃない。そもそも実戦では、肉体の能力も勝敗を分ける重要な要素だからね。

実技試験では劣等生だけど、喧嘩は強い、ってだけだ」

いつも使っている言い訳だが、紛れも無い事実でもある。

これで丸く治められる、あるいは、言い逃れられることを達也は疑っていなかった。

「……試験の実力と実戦の実力は別物だ、という意見にはワタシも

賛成よ」
だからリーナのこの台詞は、完全に予想外だった。
何が言いたいのだろうか。
「ワタシも、学校の秀才じゃなくて、実戦で役に立つ魔法師になりたいと思っているの」
リーナからキナ臭いオーラがユラリと立ち上る。
「穏やかじゃないな」
達也の瞳から温もりが――熱が、消えた。
「判るのね。凄いわ」
氷の、というより鋼の眼差しを前にして、リーナが鮮やかな笑みを浮かべた。
花の笑み、ではなく、研ぎ澄まされた刃の美しさを持つ笑みを。
リーナの手が跳ね上がった。
襲い来る掌底を、達也が掴み取った。
最小の動作で鋭く突き出されたリーナの右手、その手首を達也が掴み取っていた。
顎を目指した掌底突きが、喉の前で止められている。
リーナは掴まれた右手を指鉄砲の形に、人差し指を突き出した。
達也の顔に突きつけられる、形の良い爪。
達也はリーナの右手を外側に捻り上げた。
リーナが顔を顰め、突き出した指先に集まったサイオンの光が撃ち出される前に霧散した。
「物騒だな」
「避けられると思ってた」
「説明はして貰えるんだろうな」
「その前に放してくれない？
けっこう痛いんだけど。
それにこの体勢は、チョッと恥ずかしいし」
手を外側に捻り上げた関係で、達也とリーナの身体の間隔はかなり詰まっている。

見ようによっては、達也がリーナを襲っている――無理矢理キスを迫っているようにも見える体勢だ。
達也は言われてすぐにリーナの手を放した。
但し、彼の顔には羞恥の欠片も浮かんでいない。
「痛いなぁ、もう。痣に……は、なってないわね。凄い絶妙の力加減？」
右手首をさすっていた左手で袖を捲り上げて、リーナは驚きを露わにする。
「人の顔に穴を開けようとしたんだ。少しくらい痛い思いをして当然だと思うが？」
「単なるサイオン粒子の塊に物理的な殺傷力なんて無いわ。精々、銃で撃たれたみたいな幻痛を感じる程度よ」
「乱暴な扱いを受けるには十分な理由じゃないか？」
愛想笑いを向けられても、達也の表情は弛まない。
リーナはため息をついて両手を上げた。
「分かった、分かりました。ご無礼をお許しください、タツヤさま」
態度を改め丁寧に一礼したリーナが顔を上げると、それまで厳しく引き締まっていた達也の唇の端が、奇妙に歪んでいた。
「……まだご不満ですか？」
「……いや、もういい。それから普通に喋ってくれ。リーナに、そんな風に、上品に振る舞われると薄気味悪い」
どうやら達也が口の端を歪めていたのは、似合わないと思われた所為らしい。
「チョッと！　言うに事欠いて『薄気味悪い』って何よ！女の子に対して余りにも失礼じゃないの！」
当然の反応ではあろうが、リーナは激怒した。
「リーナが薄気味悪いなんて言ってない。上品ぶられても似合わないからやめてくれと言っている」

「ワタシの何処が上品じゃないと言うのよ！」
ただ、リーナの反応は少し過敏にも見える。もしかして、心当たりがあるのだろうか？
「キャラが違うだろ」
キャラで通じるかどうか一抹の不安はあったが、これだけ日本語に堪能であれば問題なかろうと、達也は言い直す手間を省いた。
そして、幸か不幸か、問題なく通じた。
「そんなことないわよ！
これでも大統領のお茶会に招かれたことだってあるんだから！」
勢いに任せて、自分がどれだけハイソか主張するリーナ。
「ほぅ……」
それを聞いて、達也はニヤリと笑った。その笑みから、ヒヤリとする冷気が漂い出す。
リーナは反射的に手で口を押さえた。
彼女には達也の浮かべた表情が、メフィストフェレスの笑みに見えていた。
「大統領の、ね……」
銃もナイフも無しに人を殺せる魔法師を忌避する権力者は多い。
日本はこの垣根が寧ろ低い方で、国によっては定期的に解毒剤を必要とする遅効性の毒物を自ら服用した魔法師でなければ、一定レベル以上の権力者に近寄らせないというところもある。
ＵＳＮＡで大統領に直接面会可能な魔法師は、確か……
「はめたのね……？」
上目遣いで悔しそうに達也を睨み付けるリーナ。
しかし、これはリーナの穿ち過ぎだ。
「人聞きが悪いな。
今の話の流れは全くの偶然だ。
どちらかと言えば、リーナの自爆だろ？
先に仕掛けてきたのはリーナの方なんだから」
ぐうの音も出ないとはこの事だった。

リーナに出来るのは、悔しそうに達也を睨み続けることだけだった。

「それで？

何故あんな事をしたのか、事情を説明しては貰えないのか？」

「……タツヤの腕を知りたかっただけよ。

敢えて言うなら、ステイツに来ないかなって思ったの」

「俺が、アメリカに？」

「実力が有るのにそれが評価されないんだったら、評価されて活躍できる環境が欲しいんじゃないかと思って。

魔法師のランク付けはステイツでも国際基準が主流だけど、そうじゃないところもある。

ステイツは自由の国であり、それ以上に多様性の国よ。

たった一つの物差しに合わないからって、それだけで補欠扱いされることは無いわ。タツヤは、タツヤに相応しい評価を得られるはず」

「興味深い話だな」

思いがけない招待に、達也の態度が少し、和らいだ様に見えた。

「だったら」

手応えあり、と勢い込むリーナ。

「それが額面通りの事実なら」

だが、達也の皮肉な口調に、出鼻を挫かれてしまう。

「リーナ、その主流派じゃない物差しを使っているのは一体どこだ？

例えば、アーリントンか？」

かつて士官学校だったアーリントンは、今ではＵＳＮＡ軍に対する魔法師・魔工師の一大供給拠点となっている。

「それは……」

「評価基準というやつはね、用途に適したものを選び出す為のものなんだよ、リーナ」

ただ達也の口調は皮肉ではあっても、そこに身を震わせるヒヤリとした隔意はない。

「そういう意味では、日本の国防大学にもそれ程の違いはない。懐の深さ、という違いはあるだろうけどね」
どちらかと言えば、友人をからかっているような趣があった。
「まあ、いいか」
「えっ……？」
そして唐突に、本当にどうでもいいような気の抜けた声で達也が呟いた。
急な変化について行けないリーナは、声と表情で戸惑いを表すことしかできない。
「リーナは俺の腕試しがしたかった。
そういうことだな？」
「え、ええ……」
「こういう事はこれっきりにしてくれよ？
ただでさえこの手のトラブルには辟易しているんだ」
そろそろ戻ろうか？　と彼女を促す達也の顔は、全くいつもどおりの表情だった。
少なくともリーナには、普段の彼との見分けが付かなかった。
「訊かないの？」
達也が今の一幕を無かったことにしようとしているのは理解できる。
その方がリーナにとっては当然、都合が良い。
だが何故そんなことをするのか、達也の意図が分からない。
せっかく達也が不問にしてくれようとしているのに、それを台無しにしてしまうかもしれない、そう知りつつ、リーナは問い返さずにはいられなかった。
「何を？」
「何をって……例えばワタシの正体だとか、確かめなくていいの？」
「構わないよ。
世の中、知らない方が良いことだってあるからね」
それが韜晦なのか本心なのか、リーナには分からなかった。

この司波達也という人間は、リーナにとって余りにも不可解だった。

「……アナタって嫌な人ね」

上目遣いに睨みながらリーナが呟いた言葉に、達也は肩を竦めて背を向けた。

その背中について行きながら、「イヤ」という自分の言葉が決して単純な意味ではないことを、彼女は自覚していた。

この時点で、達也はリーナの正体を、ほとんど正確に把握していた。

その意図も自身に関係する限りで、ほぼ百パーセント理解していた。

しかし彼は、無論のこと、全知全能ではない。

千里眼にも程遠い。

後に彼は、この時もっとしっかり問い詰めておけば良かったと、悔恨の情に駆られることになる。

次の日の朝、達也たちの許に凶報が舞い込んだ。

レオが「吸血鬼」に襲われて、病院に運び込まれたという知らせである。

5－（6）　宣戦受領（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

5－（6）　宣戦受領

千葉エリカの朝は早い。

いや、エリカの朝“も”早い、と言うべきかもしれないが。何せ彼女の親しいボーイフレンドは、達也もレオも幹比古も揃って早起きだからだ。

それはともかく、彼女は日の出前から鍛錬に汗を流すことを日課としている。

十歳の頃までは、父親に逆らえず、言われるがままに。

自分が何なのかを思い知らされた十四歳のあの時までは、誰よりも千葉の剣士らしくあろうとして。

去年の三月までは、ただ惰性で。

でも、去年の四月、彼と会ってからは、自ら望んで。

自分の意志で、強くなりたくて。

朝の鍛錬で、剣は握らない。

エリカの素質に目をつけた彼女の父親は、彼女を秘剣・山津波の使い手とすべく、否、山津波の使い手とする為だけに育てた。

彼女に叩き込まれた技は、疾風と化して斬り込み雷光と化して断ち切る、疾風迅雷、速さの剣。

その為、彼女に課せられた修行の中で、脚力の強化、走り込みはとりわけ重視されていた。

目標を見失った惰性の日々、等閑（なおざり）になりがちだったロードワークは、自分の意志で「今よりも強くなる」と決めた日から、一日も欠かしたことはない。

今朝もエリカは、目覚まし時計が鳴ると同時に、ベッドの上で身体を起こした。

体質的に言えば、エリカは余り朝に強い方ではない。身体は反応しても、意識はすぐに覚醒しない。それでも何千回という反復によってすり込まれた習慣は、彼女の足をベッドの外へ向けた。

欠伸を噛み殺しながら、足取りだけは危なげなく、部屋に隣接する彼女専用のバスルームに向かう。

バスルームといってもシャワーブースとシャンプードレッサーが並んでいるだけだが、個人の部屋にこれだけの物が備わっているのはエリカが資産家の娘だからであって、決して一般家庭に普及している物ではない。

千葉家の当主は少なくとも、子供を物で差別するような吝嗇家ではなかった。

真冬に湯沸かし器も点けず、凍り付くような冷水で顔を洗って（正確には十回ほど濡らして）、ようやく意識を覚醒させたエリカは、トレーニングウェアに着替えようとクローゼットの前に立って、視界の端でメールの着信ランプが点灯しているのを認めた。

今はまだ日の出前、正確な時間を言えば、朝の五時半だ。

昨日寝たのは二十三時半で、その時には未読メールは残っていなかったから、このメールは真夜中に届いたことになる。

何か、彼女自身にも説明できない予感が働いたのか、エリカはそのメールを後回しせずに開いた。

シンプルであるが故に、今でも廃れず使われているテキストメール。そのタイトルが目に入って、エリカは眉を顰めた。

本文を読み終えて、エリカはギリギリという歯軋りが副音声で聞こえてきそうな声で、呟いた。

「あのバカ兄貴……バカに何やらせてるのよ……」

パジャマを乱暴に脱ぎ捨て、アンダーウェアを取り替える。

エリカはクローゼットの中から、トレーニングウェアの代わりにセーターとスカートを取り出した。

◇◆◇◆◇◆◇

達也の許へ凶報が届いたのは、登校前、家を出る直前だった。

家の電話ではなく、携帯端末に送り込まれたプレーンテキストの

メッセージ。
普通は速報性を最優先した災害予報の配信くらいにしか使われないメッセージ形式が、不吉な切迫感を漂わせている。
もっとも、そんな曖昧な切迫感など、メッセージを読んでしまえばすぐに上書きされて消えていく程度の代物に過ぎない。
メールの差出人はエリカだった。
「お兄様、良くない知らせなのですか？」
兄の感情の揺らぎを鋭敏に感じ取った深雪が、心配そうな眼差しで達也を見上げている。
妹を不安の種から遠ざける、という思考はこの時、達也の中に存在していなかった。
「レオが吸血鬼に襲われて、病院に運び込まれたとエリカから連絡があった」
「……冗談では、無いんですよね？」
マスコミには劇場化効果がある。
例え隣の町で起こっていることでも、マスコミで大々的に――大袈裟に、と言い換えても良い――報道されると、自分たちとは縁の無い、虚構の世界の出来事の様に錯覚してしまう。
ましてや「吸血鬼」などという突拍子も無い存在による犯罪に、現実感を持てないのは仕方が無いことかもしれない。
しかし――
「事実だ」
どんなに突拍子も無く見えても、事実から目を逸らすのはマイナスにしかならない。脅威は正面から向き合ってこそ、予め対策も練ることが出来る。
「中野の警察病院で治療を受けているようだ。
不幸中の幸い、命には別状がないということだから、見舞うのは放課後にしよう」
「――はい」
深雪にとって西城レオンハルトは兄を介した友人でしかない。

達也が放課後で良いと言うなら、深雪がそれに反対する理由は無かった。
例え、心の中でどう思っていたとしても。

◇◆◇◆◇◆◇

その日、エリカは学校を休んだ。
その事は達也にも美月にも幹比古にも、ついでに学校の事務局にも連絡してあるので皆知っているはずだ。
しかし、エリカが看病の名目で看視しているレオの病室に（とは言っても、エリカが座っているのは病室前の廊下に置かれた長椅子だが）、上級生が訪ねて来るなど誰も知らなかっただろう。
自由登校だから時間は問題にならない。
しかし前生徒会長と前部活連会頭が、特に生徒会にも部活連にも関わっていなかった一生徒の見舞いに来ると予測できるはずも無い。
現生徒会長、現部活連会頭が見舞いに来るという方がまだ予想の範疇だ。
克人は入り口の脇に座るエリカをチラッと見て、すぐに関心が失せた顔でドアに向き直った。
真由美は愛想笑いの見本の様な笑顔でエリカに会釈し、やはりすぐにドアへ向き直った。
病室（個室）のドアをノックする真由美を、エリカは止めなかった。
彼女はレオを看護している訳ではなく、看視している――正確に言えばレオを看視しているのではなく、レオを訪ねて来る「招かれざる客」を見張っている――だけなのだから、止める理由が無い。
エリカは立ち上がって、二人の先輩に声もかけず、その背後を通り抜けて歩み去った。

エリカが向かった先は、病院の事務室（の一つ）。

そこには、彼女の兄とその腹心の姿があった。
ノックも無しに入って来たエリカから、寿和は気まずげに、微妙に視線を逸らした。
その頬が少し赤く腫れている。否、ほとんど腫れが引いている兄の顔を見て、もう少し強く殴ってやればよかった、とエリカは後悔した。（なお彼女が使ったのは平手ではなく裏拳だ）
何せ、この「バカ兄貴」が無抵抗に殴られてくれる機会など滅多に無いのだ。
幼い頃から積もりに積もった恨みを少しでも晴らすことが出来るなら、どんな些細なチャンスでも逃すべきではなかったのに。
「……えっと、お嬢さん。何か物騒なことを考えてませんか……？」
昏い喜びを伴う思考を中断されたエリカが、尖った視線を稲垣に向けた。
気圧され、目を泳がせる稲垣。
父親からは冷遇されているエリカだが、門下生に彼女のシンパは多い。
明るい性格とコケティッシュな美少女ぶり、そして何より、秘剣・山津波の唯一の使い手という事実。実戦の中で、山津波を使いこなしたという実績。
彼女は当主の娘という血筋ではなく、剣の腕と彼女自身の魅力で、千葉一門のアイドル的な地位を掴み取っている。
彼女に睨まれると、門下生の間で色々と居心地の悪い思いを味わうことになるかもしれない。
またそれ以前に、稲垣の腕ではエリカに対抗し得ない。稽古の相手に指名でもされようものなら、いいように小突き回されてしまうだろう。元々の才能に加えてこの半年で急激に腕を上げたエリカに、千葉一門で対抗しうる剣客は現在既に、当主と二人の兄だけだと言われている。エリカは実質的に免許皆伝の腕前で、まだ皆伝が与えられていないのは、剣に関する限り凡庸な腕と才能しか持たない彼女の姉に配慮した結果だ、というのは、門下生の間で公然と囁かれ

ている噂だった。
「兄貴」
エリカに呼ばれて、寿和が渋々目を向ける。随分と男前な言葉遣いだが、不機嫌を隠そうともしない今のエリカにはピッタリはまっていた。
「今、アイツのところに七草の直系と十文字の直系が訪ねて来たんだけど？」
何の用事か知ってるわよね？　と声には出さず視線で威嚇するように問い掛ける。
稲垣はエリカの苛烈な眼差しに硬直の度を強めたが、寿和の方は流石にそこまで妹に畏れ入るつもりは無いようだった。
「上からのお達しでね。詮索するな、と」
芝居がかった仕草で両手を上に向け、肩を竦める。
半ば予想された答えに、エリカは舌打ちを漏らした。
「霞ヶ関ならともかく、桜田門はコッチのフィールドでしょ」
「俺たちは霞ヶ関の所属なんでね」
「使えないわね」
忌々しげに呟いたエリカだが、それ以上の八つ当たりをしないだけの理性は残していた。
「盗聴器は？」
「部屋に入ると同時に壊されちまったよ。
妖精姫のマルチスコープがここまで高性能とは予想外だったなぁ」
妖精姫とは真由美のニックネーム「エルフィン・スナイパー」から派生した呼び方で、射撃系の魔法競技者を中心に使われている愛称だ。妖精＝小さいというイメージがあるので真由美にピッタリだという声がある一方で、同じ理由で本人に対して使われることは無い。
「ますます使えないわね……それで、部屋の外に仕掛けたやつはどうなのよ？」
「そっちは音波遮断で無効化されました。十文字の障壁魔法です」

事務的な稲垣の答えに、最早エリカは「使えない」とさえ言わなかった。
「じゃあ推測で良いわ。心当たり、あるんでしょ」
エリカに睨みつけられて、寿和は再度、肩を竦めた。
「本当に推測でしかないぞ？
どうやら七草は被害者を隠匿しているようだな」
「……死体を隠してる、ってこと？」
予想以上のきな臭い「推測」に、エリカが驚きを隠せず問い返した。
死体隠しは証拠隠滅の一種、自分で殺して死体を処理（遺棄・損壊）するのとは意味が違うとはいえ、法に反していないとは言い切れない。
いくら十師族が超法規的な特権を持っているとはいっても、大量殺人という明らかな犯罪行為で警察の邪魔をするような真似をするとは……
そこまで考えて、エリカはその裏に潜む意味に気づいた。
「つまり、今回の『吸血鬼』事件は、魔法師絡みの事件ってことね？」
「多分ね。
被害者か加害者かは分からないが」
「被害者？
魔法師による犯罪なら警察に任せず自分たちで秘密裏に処理しようとするのも分かるけど、魔法師が被害者になってるなら警察に隠す必要ないんじゃない？」
喧嘩腰な妹の台詞に、寿和はニヤリと笑った。
「さて、そこなんだよな。今回の事件が、一筋縄じゃ行かないような気がするのは」

◇◆◇◆◇◆◇

放課後。

達也はいつものメンバーを引き連れて、中野の警察病院へレオの見舞いに訪れた。

受付で病室を訊いてエレベーターへ向かう。と、その少し手前で横合いから名前を呼ばれた。

「みんな、来たんだ」

「エリカ、まだいたのか」

一通りの事情は朝のメールに書かれていたので知っている。エリカの長兄が吸血鬼事件を担当していて、レオはその捜査に協力中、事件に巻き込まれる格好になったと。その責任を取らせる為に（責任を取って、ではなく）、エリカは学校を休んでレオが運び込まれた病院へ行く、とメッセージには書かれていた。

しかしその連絡があったのは登校前で、今は日も暮れようかという夕方だ。「まだ」という表現も妥当なものだろう。

「ずっとここにいた訳じゃないよ。一旦家に戻って、一時間くらい前にまた来たトコ。

達也くんたちが来るだろうと思ってね」

ゾロゾロと一緒にエレベーターへ乗り込みながらエリカが達也の疑問に答える。

その声にも表情にも、嘘をついているような不自然さは無かった。余りにも自然すぎて、かえって嘘くさかった、というのは、多分エリカ本人だけが気づいていなかった。

「エリカちゃん、レオくんは無事なの……？」

エレベーターの中で隣り合わせになった美月が、小声でエリカに訊ねた。

もうすぐ自分の目で確認できる、とはいえ、不安なのだろう。

こういう感情は人によって、容易に理性を凌駕する。

「大丈夫よ、美月。メールでも連絡したでしょ？　命に別状は無いわ」

ただ、人によって似合う、似合わないが分かれる態度でもある。
ホッと胸を撫で下ろす美月を、エリカは温かい目で見下ろしていたが（背はエリカの方が少し高い）、同じ事をむさくるしい男がやったら冷たくあしらわれていたこと、疑いない。
口には出さないものの同じような懸念を抱えていたのは美月だけではなかったようで、幾分硬さの取れた雰囲気の中、エリカが病室をノックした。
「はい、どうぞ」
中から聞こえてきたのは、若い女性の声だった。
「カヤさん、お邪魔するね」
戸惑いを隠せない友人たちを尻目に、エリカはドアを開けてスタスタと中に入って行く。
こういう時に立ち直りが早いのは、やはり達也だ。
入り口に掛けられたカーテンでエリカの背中が見えなくなる前に、病室の中へ進む。
深雪が間髪入れずその後へ続き、それを見たほのかが小走りで追いかけ、美月と幹比古が顔を見合わせて病室に入り、ドアを閉めた。
それなりに広い、つまりそれなりにグレードの高い個室で彼らを出迎えたのは、退屈丸出しの顔でベッドの上に身体を起こしているレオと、その傍らに折り畳み椅子を広げて腰掛けている灰色（アッシュブロンド）の髪の若い女性だった。
年齢は彼らより四、五歳ほど上だろうか。
アイネブリーゼのマスターに似た髪の色は、同じ民族の血を思わせる。
そして彼女の顔立ちは、もう少し彫を深くして性別を反転させればレオとそっくりになる、と想像させる程度に血のつながりを感じさせた。
「こちら西城花耶（カヤ）さん。レオのお姉さんよ」
疑問が言葉となるより早く、エリカがその女性を紹介する。
彼女の正体は達也たちが思ったとおりのものだった。

花耶は立ち上がり、達也たちに向かって丁寧に頭を下げた。
優雅とも洗練されたとも言えないが、学生とは一線を画す折り目正しい仕草で。
全員と一通り挨拶を交わした後、花耶は花瓶を持って病室を出て行った。
水を替えてきますね、とのことだったが、遠慮して席を外したのは問うまでも無く明らかだ。
「優しそうなお姉さんですね」
花耶の後姿が消えたドアへ目を向けたままで、美月が呟くように口にしたこの発言は、社交辞令というより彼女の本音に違いなかった。
達也もそう感じたし、他の者の顔にも異存は窺われない。
ただ、レオが見せた少し苦い表情は、それなりに家庭の事情があるのだろうと思わせるものだった。
「酷い目に遭ったな」
だから達也は、それ以上踏み込まなかった。
元々レオの家庭事情は、彼に関係の無いことなのだから。
「みっともないとこ、見せちまったな」
照れくさそうにレオが笑う。そこには、先程の苦い顔の痕跡は無い。
「見たところ、怪我も無いようだが」
達也の目は、レオの首に向いている。
レオは笑顔の種類を変えて、首横を手で撫でた。
「そう簡単にやられてたまるかよ。
オレだって無抵抗だったわけじゃないぜ」
「じゃあ何処をやられたんだ？」
不敵に笑ったレオに、達也は当然の質問を投げ掛けた。
その途端、レオの笑みが消えた。
「それが良く分からねぇんだよな……」
だからと言って、落ち込んだ、という訳でもない。

負け惜しみでなく、心底納得いかない、という表情で首を捻っている。
「殴り合っている最中に、急に身体の力が抜けちまってさ。最後の根性で一発、良いのを入れたら逃げてったけど、こっちも立ってられなくなって道路に寝転がっている所をエリカの兄貴の警部さんに見つけて貰ったんだよ」
「毒を喰らった、って訳でもないんだよな？」
「ああ。身体中何処調べても、切り傷も刺し傷も無かったし、血液検査でもシロだったぜ」
確かに、不思議な話だった。
達也が一緒になって首を捻っている横から、幹比古が口を挿んで来た。
「相手の姿は見たのかい？」
「見た、って言えば見たけどな。フード付きコートに覆面、コートの下はハードタイプのボディアーマーで人相も身体つきも分からんかったよ。ただ……」
「ただ？」
「女だった、ような気がするんだよな」
「……女性の腕力でレオと対等に殴りあったのかい？」
「あり得ないことじゃないでしょ」
目を丸くした幹比古に、エリカが反論する。
「薬を使えば小学生の女の子だって大の男を絞め殺せるんだから」
「それもそうだね……でも……」
「でも？」
「最初からただの人間じゃなかった、って可能性もある」
「何か心当たりがあるのか？」
達也にそう水を向けられた幹比古は、何事か心に決した表情でレオに向き直った。

「レオ」
「お、おう」
余りに気合の入った目つきは、レオが気圧されてしまうほど。
「君の幽体を調べさせてもらって良いかな？」
「ゆうたい？」
幽体という言葉がピンと来なかったようで、レオは単語を発音の羅列に逆変換して鸚鵡返しに訊ねた。
それもある程度仕方の無いことで、「霊体」ならともかく「幽体」は現代魔法で余り使用されることの無い単語であり、レオが特に愚鈍という訳ではない。
「幽体というのは精神と肉体をつなぐ霊質で作られた、肉体と同じ形状の情報体のことだよ」
幹比古は指先で空中に「幽体」と大きく書いた。
「幽体は精気、つまり生命力の塊。
人の血肉を喰らう魔物は、血や肉を通じて精気を取り込み己が糧としている、と考えられているんだ」
「つまり吸血鬼は血を吸うけど、本当に必要としているのは一緒に吸い取っている精気だってこと？」
エリカの問いに、幹比古は緊張した表情で頷いた。
「吸血鬼は血を吸い、食人鬼は肉を喰らう。
でも元々が物質的な生物でない彼らは、本来精気さえ取り込めば良いはずだ。
僕たち古式の術者が伝えている伝承が真実であるならば」
「その発想に立てば、精気だけを吸い取るヴァンパイアがいてもおかしくない、か」
幹比古の言葉を受けて、達也が呟く。
その小さな呟きに、幹比古はもう一度、頷いた。
「僕は今回の吸血鬼事件が、単に異常なだけの人間による、単なる猟奇犯罪とはどうしても思えないんだ。
何故、と問われても説明できない。

僕の直感、としか言いようがない。
でも――」
「良いぜ、幹比古」
もどかしそうに、自分の感じているものを何とか説明しようとしている幹比古を、レオがそう遮った。
その短い台詞の意味を理解するのに、幹比古は一秒を要した。
「……良いのかい？」
「ああ。ってえか、コッチからお願いするぜ。
原因が分からねぇと治しようがないからな」
幹比古は更に顔を引き締めて、足元に置いていた鞄へ手を伸ばした。

◇◆◇◆◇◆◇

紙に墨で書かれた由緒正しい札と、達也でさえ初めて見るような伝統呪法具を駆使してレオの状態（ステータス）を確認し終えた幹比古は、驚きを隠そうともしなかった。
多分、隠す、ということすら思い至らなかったのだろう。
「何と言うか……達也も大概凄いと思ったけど、レオ、君って本当に人間かい……？」
「おいおい、随分とご挨拶だな」
冗談ならともかく、しみじみと呟かれては、流石にレオも笑い飛ばせないようだった。
レオは明らかに気分を害している。
しかし、そんなことも気にならない、と言うか、気がつかない程、幹比古は驚いていた。
「いや、だってさ……よく起きていられるね？
これだけ精気を喰われていたら、並の術者なら昏倒して意識不明のままだよ」
「喰われた？」

そんなことまで分かるのか？　という顔で問い掛けてきた達也に、幹比古は満更でも無さそうな笑みで頷いた。
「幽体は肉体と同じ形状を取るからね。容れ物の大きさが決まっているから、元々どのくらい精気が詰まっていてそれがどれだけ減っているかというのも、おおよそ見当がつくんだよ。
今のレオには、普通の人なら起きていられない、それどころか意識も保てない程度の精気しか残っていない。この状態で身体を起こして話が出来るなんて、余程肉体の性能が高いんだろうね」
幹比古にとっては何気なく口から出た言葉だった。だが「性能が高い」という表現は、性能アップの為の改造を受けた遺伝子を受け継ぐレオの心を抉るものだった。
「まあな。オレの身体は特別製だぜ」
それでもレオは笑って見せる。
悪意が無いことの分かっている相手に、八つ当たりするような無様は晒したくなかった。
「で、結局オレの力が抜けたのは、その精気ってヤツを覆面女に喰われたから、って理解すりゃ良いのか？」
レオは波立つ心の揺らぎを抑え込んで、そう訊ねた。
「ああ、ほぼ間違いないと思う。
レオが遭遇した相手は、パラサイトだ」
そして幹比古の回答は、彼がそうするだけの価値が十分にあるものだった。
「パラサイト（寄生虫）？　そのままの意味じゃないよね？」
首を傾げたエリカに向かって、幹比古は講義口調で語り始めた。
「ｐａｒａｎｏｒｍａｌ　ｐａｒａｓｉｔｅ（超常的な寄生物）、略してパラサイト。
魔法の存在と威力が明らかになって、国際的な連携が図られたのは現代魔法だけじゃない。古式魔法も従来の殻にこもり停滞するこ

とは許されず、国際化は避けられないものだった。
古式魔法を伝える者たちによる国際会議がイギリスを中心として何度も開催され、その中で用語や概念の共通化、精緻化が図られたんだ。
パラサイトも、そうして定義された名称の一つ。
妖魔、悪霊、ジン、デーモン、それぞれの国で、それぞれの概念で呼ばれていたモノたちの内、人に寄生して人を人間以外の存在に作り変える魔性のことをこう呼ぶんだよ。
国際化したって言っても古式魔法の秘密主義は相変わらずだから、基本的に現代魔法の魔法師である皆が知らなくても当然だと思うけど」
「妖魔とか悪霊とかが実在するなんて……」
幹比古の説明を聞いて、ほのかが怯えたように呟く。
その肩に、達也の手が置かれた。
「魔法だって実在するとは思われていなかった。でも、俺たちは魔法を使っている。
未知の存在だからといって、無闇に怯える必要は無い」
達也は天然でこういう振る舞いに及んでいるのではない。
彼は自分がほのかに対して大きな影響力を持っていることを、ある程度まで認識している。
だから達也は、彼の手の感触にビクッと身体を震わせたほのかから、盲目的な不安が拭い去られたのを確認すると、すぐにその手を引っ込めた。
ほのかが名残惜しそうな素振りを見せたのも、気づいていて、気づかないフリを通した。
「それが吸血鬼の正体か」
そうして、幹比古に目を向ける。
怖れ過ぎるのはマイナスだが、無知が脅威を増大させることも、彼は同時に弁えていた。
「そう思う。

でも……」
「でも？」
「……殴り合っている最中に、触れるだけで精気を吸い取れるなら、血を吸う必要なんて無いはずだ。
何故、このパラサイトは血を抜き取るなんて余分な手間を掛けているんだろう……？」
幹比古の疑問に、達也も答えを持ち合わせていなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

面会時間が終了して、五人は病室を後にした。
五人というのは、達也、深雪、幹比古、ほのか、美月。
エリカは兄の寿和に話があると言って残った。
その言葉を額面通りに受け取った者は五人の中に一人もいなかったが、それを口に出して指摘した者もまた、一人もいなかった。
「そうだ――幹比古」
「うん？」
急に名前を呼ばれて、美月とお喋りしていた幹比古は訝しげに達也へ顔を向けた。
達也の両脇には深雪とほのか。
腕を組んでこそいないものの、身体の距離はそれと変わらない。
モテ男なんて滅んでしまえ、と幹比古がこの時に思った、かどうかは定かでない。
幹比古がどう思っていても、達也がそれを気にしたとも思えないが。
「さっき訊き忘れていたことがあるんだが」
正確に言えば、盗聴器を気にして敢えて訊かなかったこと、なのだが、今の達也の口調からそういう剣呑な裏事情を読み取ることは幹比古でなくても難しかっただろう。
「何だい？」

「妖魔とか悪霊とかパラサイトとかいうヤツらは、頻繁に出現するモノなのか？」
何も飲み食いしていないにも関わらず、幹比古は咽せかけた。
達也の口調が何気ないものだったので、幹比古も軽い気持ちで聞いていたら、とんでもなく深刻な問い掛けだったからだ。
「……いや、滅多に出現するモノじゃないよ。
昔話なんかにはいつも何処かに隠れていて悪いことをしているみたいに書かれているけど、大抵は魔性を装う人間の術者の仕業だ。
例えば有名な大江山の酒呑童子だって、正体は西域から流れて来た呪術師だった、っていうのが僕たちの間では定説になってるし。
術者が本物の魔性に出会う確率は、そうだね……十世代に一世代くらいじゃないかな。それだってほとんどの場合は偶然この世界に迷い込んだ個体を見つけるという程度で、本物の魔性が人間に害を為し、それを術者が退治するというような緊急事態が起こる頻度なんて、世界的に見ても何百年に一回ってレベルだよ。
何せ、日本で最後に本物の魔性を退治した記録は、九百年前の安倍泰成による妖狐退治だから」
「だが、今回の吸血鬼事件は、その『本物の魔性』の仕業なのだろう」
「そう思う」
「偶然だと思うか？」
「偶然、という可能性がゼロとは言わないけど……」
幹比古の答えは、酷く慎重なものだった。
「歴史が現代に近づくにつれて、間違いなく魔性の観測例は減少している。
今回の事件が、何の原因も無く起こったものだとは、僕には思えない」
幹比古の答えに、達也は一言、「そうか」と呟いた。

◇◆◇◆◇◆◇

達也たちが帰り、代わりに花耶が戻って来たのを確認して、レオは力尽きたようにベッドへ倒れた。
部屋にはまだエリカがいたが、意地を張るのはもう限界だった。
「……まあ、あたしは本当のことを知ってるからね。もう強がる必要はないんじゃない？アンタはよく頑張ったわよ」
「……素直に……褒められたと……取っとくぜ……」
「褒めたのよ、素直に」
苦しげに目を閉じているレオを見て、エリカは優しげな笑みを浮かべた。
「あの、エリカさん……弟は本当に大丈夫なんでしょうか」
しかし、そのやりとりを見ていた花耶は、とても笑える気分では無いようだった。
肉親としては当然の心配だろう。
だが、花耶に答えたエリカの声は、実に素っ気ないものだった。
「大丈夫です。
千葉家が知る限り、最高の名医に治療させています。
魔法師でないお姉さんにはお分かりになり難いかもしれませんけど、気力の枯渇は体力の回復以上に時間を掛けないと元に戻らないものなんです。
他に必要な治療は全て行いました。後は、時間だけが特効薬で、時間を掛ければ治ります」
魔法師でないお姉さん、のくだりで花耶が小さく身体を震わせたのにエリカも気づいていたが、労るような言葉は彼女の口から出て来なかった。
「じゃあ、あたしは兄の所へ行ってますんで。
何かご用がお有りでしたら看護師にでも兄の部下にでもあたしにでも、誰にでも遠慮無く仰ってください」
エリカは花耶に形だけの一礼をして、病室を出て行った。

そんなエリカの態度に、レオは文句をつけようとしなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

「お嬢さん、もう少し手加減した方が良いんじゃないですか？」
レオの個室を盗聴している例の部屋に入った途端、稲垣からエリカにそんな声が掛けられた。
何に対して、が抜けている曖昧な言い方だが、エリカには何のことだか解っていた。
解っていてエリカは、その台詞を鼻で笑い飛ばした。
「別に魔法師を好きになれなんて要求するつもりはないわ。
親だろうと兄弟だろうと、怖いものは怖いでしょうからね。
だったらこちらも、そういう認識で付き合うだけよ。
それより……聞いてたんでしょ、さっきの話」
最後のワンフレーズは寿和に対する言葉。
背もたれに大きく寄りかかって、首の後ろで組んだ両手で自分の頭を支えていたエリカの長兄は、乱暴な仕草で頭からヘッドホンをむしり取って身体を起こした。
「中々興味深い話だったな。
で、吉田の次男坊の推理が当たっているとして、エリカ、お前、どうする？」
「当たり外れは関係ないでしょ、この場合」
何をつまらないことを、と言いたげな蔑みの眼差しで、エリカは椅子に座ったままの寿和を見下ろした。
「例え一時（いっとき）のことでも、アイツは千葉の門を跨いだ、ウチの門人よ。
それもあたしが直々に技を手解きしたんだから、あたしの最初の弟子と言うことも出来る。
弟子をやられて、黙っていられるはずが無いでしょ」
「色気の無い理由だな」
「無くて結構。

そんなもの無くても、ぶちのめす理由に不足はないからね。
吸血鬼とやらが男か女か知らないけど、宣戦を布告して来たのは向こう側。
こっちは受けて立つだけよ」
それが本音か照れ隠しか、兄である寿和にも分からない。
確実に分かっているのは、エリカが完全に本気だということだけだった。

5－（6）　宣戦受領（後書き）

私事ですが、今月配転となりました。
異動先は全くの畑違いで恒常的に人手不足。
ぶっちゃけ、とばされたんですね。
という訳で、今までのペースで更新するのは難しくなると思います。

5－（7）　仮面の魔法師（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

5－（7）　仮面の魔法師

突き出される拳と拳。
目まぐるしく入れ替わる身体、目まぐるしく入れ替わる攻守。
達也は八雲と毎朝恒例の組み手を行っているところだった。
単なる打撃の応酬ではない。
真っ直ぐ突き出されるだけでなく、上下左右から襲い掛かる拳、手刀、掌。それを躱し、掴み取り、捻り上げようと絡み付く手を紙一重で振り払う。
達也と八雲。
今や両者の技量は、拮抗していた。
二人が同時に右手を突き出す。
互いの突きが相抜けとなり、二人の身体が背中合わせとなる。
達也は軸足を蹴り足に変えて、その場から一歩、踏み出した。
来ると予想した肘の回し打ちは襲って来なかった。
振り返る。
八雲も達也と同じように、距離を取っていた。
自分と同じ攻撃を予測し、同じ回避行動を取り、結果的に必要以上の間合いを空ける結果となったことに苦笑い――
――する余裕などあるはずもなく。
達也は八雲へ向かい足を踏み出す。
体術は互角。
体力は達也が上。
駆け引きは未だ遠く及ばない。
ならば駆け引きを弄する暇を与えず攻め続けることだけが、達也が八雲に勝利する手立て。
必要以上に間合いを開けたこの状態は、達也にとって本来避けるべき不利な態勢だ。

間合いの内に踏み込み、拳を突き出そうとしたその瞬間、達也は八雲の存在に揺らぎを感知した。

このところ繰り返し苦杯を嘗めているパターンに、焦りを抑え込んで情報体を分解する対抗魔法を発動する。

八雲の身体がユラリと揺らぐ。

術式解散が幻術を無効化した、確かな手応え。

達也は五感をフル稼働させて、八雲の実体を探した。

右か、左か。

如何な八雲といえど、背後に回り込む余裕は無かったはずだ。

達也の判断は間違っていなかった。

達也の推測は間違っていた。

八雲は、正面にいた。

達也が狙い定めた、三十センチ後ろに。

決断に要した時間は一刹那。

一旦止めた拳を打ち出す。

そのままでは届かない間合いだが、八雲が打撃動作に入っているこの状況ならば、相打ちに持ち込めるという判断だった。

しかし、八雲の身体は、その拳について行かなかった。

体を残した手打ちに誘い込まれた達也の身体は、八雲の投げに宙を舞った。

「いやぁ、焦った焦った」

地面に叩きつけた後も関節を決めたままだった手をようやく放して八雲が口にしたその台詞は、あながち韜晦という訳でも無さそうだった。

片腕を取られていた所為で満足な受け身を取れなかった達也は、慣性を中和することで辛うじて骨折だけは避けたものの、衝撃を完全に殺すには至らず、正常な呼吸を取り戻すまでに何度も咳込まなければならなかった。

「……師匠、今のは？」

「いや、まさか『纏衣（まとい）の逃げ水』が破られるとは思わなかったよ」
その驚きは本物だった。
体を残したあのフェイントは、意図したものではなく、咄嗟に出たもの。
術が破られることを、八雲は想定していなかった。
「『纏衣の逃げ水』、というんですか、あの術は……師匠、あれは、いつもの幻術ではありませんよね？」
「やっぱり分かっちゃうのか」
やれやれと言わんばかりに嘆息する八雲だったが、唇の端が楽しげに歪んでいるのを隠し切れていない。――多分、隠すつもりも無いのだろうが。
「その、視ただけで術式を読み取ってしまう異能は、相手にとって脅威そのものだけど、それを逆手に取る手段が無い訳じゃない」
「今の幻術がそれだと？」
「纏衣は本来、この世のものならざるモノの目を誤魔化す為の術なんだけどね。
どういう仕組みかは……そうだね、自分で考えてみてごらん。君ならすぐに解るはずだ」
勿体をつけるな、とは、達也は言わなかった。
術式の種明かしを要求するのはマナー違反だ、という心構えも無論あったが、それよりも気になることが八雲の台詞に含まれていたからである。
「師匠」
「うん？
どうしたんだい、そんな真面目な顔……は、いつものことか。そんな怖い声で」
いつも真面目な顔、というのは褒められたか貶されたか微妙なところで、どちらとも判断がつかなかった達也は結局取り合わない――反応しないことにした。
なんとなく八雲が物足りなさそうな顔をしていたので、それで正

解だったのだろう。
「今、この世のものならざるモノの目と仰いましたが」
「ああ、なるほど」
問い掛けの台詞を最後まで紡ぐ必要はなかった。
間髪を入れぬ回答は、まるで達也の質問を予期していたかのようだった。
「僕たちが相手にするのは、人間ばかりじゃないよ。この世のものならざるモノの相手は、それほど珍しいことじゃない」
文脈から予想したとおりの答えだが、予備知識に反する答えでもある。
「しかし、俺の友人の古式の術者は、本物の魔性に遭遇するのは極めて稀なことだと言っていましたが……」
どちらが信じられるとか信じられないとかではなく、自分が納得出来る答えを達也は欲した。
「達也くんの友人というと、吉田家の次男か。まあ、彼の言ってることも間違いじゃないけど……君にしては、切り込みが浅いね」
八雲はそこで一旦、言葉を切った。
もっとよく考えてみろ、と言われた達也はその言葉のとおり思考の海に意識を沈め、程なくして一つの解答に行き着いた。
「幹比古の言ったことは、間違ってはいない。かといって、完全に正しくもない。そういうことですね？」
本物の妖魔・化生と遭遇、つまり偶然出会うことは極めて稀であっても、偶然でなければ、何者かの作為の下でならば決して珍しくない、ということですか？」
「辛うじて及第点かな」
その言葉の通り、八雲の表情は満足には程遠かった。
「うーん……達也くん程の知恵者でも記号化と先入観の罠を避けるのは難しいということか」
期待した分、採点が辛くなったらしい。

それにしても、面と向かって「知恵者」というのは、恥ずかしい（照れる、ではない）から止めて欲しいと達也は思った。
間違っても褒められている場面ではないのに随分な余裕である。
しかし、そんな達也の余裕は、八雲の次の言葉に吹き飛んでしまう。
「君自身、一度や二度はこの世のものならざるモノたちと接触した経験があるはずだよ。
君たち現代魔法師がＳＢ魔法と呼ぶ魔法は、一体何を媒体としてのものだい？」
達也の口から「あっ」という声が零れ出た。
「分かったようだね。
現代魔法師がスピリチュアル・ビーイングと呼ぶモノ、つまり精霊も、立派に『この世のものならざるモノ』だ。
ああ、知性の有無とか意思の有無とかは二の次だよ。
細菌には知性も意思もないけれど、人の身体に入り込み肉体の機能に干渉して健康を害する。ウイルスに至っては不完全な増殖能力しか持たない。それでも、例え学問的には厳密な『生物』に該当しないとしても、人の肉体を蝕む『生き物』であることに異論はないはずだ」
「スピリチュアル・ビーイング――現象から切り離された孤立情報体に過ぎない『精霊』も、『この世のものならざるモノ』に違いはない、と？」
「正確には、肉を持つ生き物ならざるモノ、と言うべきかもしれないけどね。それに、精霊に意思がないなんて誰が確認したんだい？」
「……誰も確認していませんね。その逆のことを言っている人間に心当たりはありますが」
そして、その友人がスピリチュアル・ビーイングを遠隔操作した現場に居合わせた経験が、達也にはある。与えられたコマンドに対して自律的な処理を見せる精霊の動作は、魔法式の中にアルゴリズムが全て組み込まれていると考えるより精霊自体に意思があると考

えた方が、寧ろ合理的なようにも思えてきた。
「師匠、もう一つ質問してもよろしいでしょうか」
「言ってごらん」
「現代魔法学においては、精霊は自然現象に伴ってイデアに記述された情報体が、実体から遊離して生まれた孤立情報体であり、元になった現象の情報を記録している為に、魔法式で方向性を定義することにより、その情報から現象を再現する事が出来る、これが精霊魔法だと解釈されています」
「大体それで合ってると思うよ。そういう理屈を考え出すことにかけては、現代魔法が一枚も二枚も上手だ」
「では、人の幽体に寄生して人間を変質させるパラサイトは、一体何に由来する情報体なのでしょうか」
幹比古の話を聞いて、パラサイトとは人間の情報構造に干渉する情報体ではないか、と達也は考えていた。八雲が細菌やウイルスを例えに使ったのも、それを裏付けているように思えた。
「パラサイトか……イギリス風の表現だね。
彼らが何に由来する情報生命体なのか、残念ながら僕も知らない。人の精神に干渉するのだから、精神現象に由来するものだとは思うけれどもね」
「精神に由来する情報生命体ですか……」
「僕は、人型の妖魔も動物型の妖怪も、情報生命体である妖霊がこの世の生物を変質させたモノじゃないかと考えている。
そして、物理現象に由来する精霊がこの世界と背中合わせの影絵の世界を漂っているように、精神現象に由来する妖霊は精神世界と背中合わせの写し絵の世界からやって来るんじゃないかと思うんだ。
遭遇例が少ないのは存在しないからではなく、僕たちがまだ、精神を観察する術を十分に持たないからじゃないのかな。
ロンドンに集まった連中からすれば異端の思想なんだろうけど、それが僕の偽らざる自説だよ」
流石、古式魔法の大家の称号は伊達ではない。

達也は久し振りに、そう思った。

◇◆◇◆◇◆◇

あれから二日。

レオはまだベッドの上だ。

普通の人間なら意識不明の重態なのだから、三日や四日で退院できなくてもそれが当たり前というもの。

もう退院、ということにでもなれば寧ろ、無理をしたのか見放されたのか、逆に心配になるところだ。

少なくとも達也はそう考えていた。

しかし、そう考えない人間もいるのはある意味、当然な訳であり。

「レオくん、大丈夫でしょうか……」

美月は、そう考えないタイプの典型だった。

「大丈夫だろ。

打ち身以外に目立った怪我もなかったし、骨が折れたり内臓を痛めたりということも無いって言ってたじゃないか。

まさか、エリカが嘘を吐いているなんて疑っているんじゃないだろ？」

ちなみに達也は、この場にいないエリカが嘘を吐いていたと疑っている。

「そういう訳じゃありませんけど……」

まあ、美月の性格上、心の中でどう思っていても、友人を嘘つき呼ばわりは出来ないだろう。

例えこの場にいなくても、いや、寧ろ本人がいないところで陰口、の方を忌避するに違いない。

ちなみにエリカが今この場に――つまり、始業前の教室に――いないのは、レオの看病に泊まり込んでいるから、ではなく、単にまだ登校していないからに過ぎない。

昨日は、遅刻ギリギリに駆け込んで来た。

今日も多分、同じだ。
「そういえば、今朝は幹比古もまだだな」
特に思惑があっての発言ではなかった。
エリカがまだ来ていない理由を考えて、幹比古もまだ来ていないな、と意識しただけだった。
ただそれだけの一言に、美月の顔が一瞬、強張ったように見えた。
達也は、微笑ましさに弛みそうになる頬を引き締めて、何と声を掛ければ良いのか、いっそ何も言わない方が良いのか、迷った。
彼は、美月が心配しているようなことは無い、と確信していたが、それを伝えるべきなのかどうか、判断が付かなかった。
「おはよ～」
「お早う、達也、柴田さん……」
達也がまごまごしている内に、幹比古が疲れの残る顔で、エリカがアンニュイな雰囲気を纏って、教室に入ってきた。
二人が席に着いた直後、授業開始のメッセージ画面が立ち上がった。

◇◆◇◆◇◆◇

その日の昼休み、達也たちの行動はいつもと少し違っていた。
エリカは食堂にも行かず、自分の机に突っ伏している。耳を澄ますと、小さな寝息が聞こえた。
端末を使った座学で居眠りなど出来ないから、ではあろうが、相当眠かったらしい。
幹比古は「頭がズキズキする」と言って、お昼を食べ終わるとすぐ、保健室へ向かった。
彼はどうやら、眠くなると意識がぼやけるのではなく頭痛がするタイプらしい。
単なる疲労だろうから、幹比古のことは付き添いの美月に一任した。

そして、達也は、というと。
「雫、いきなりごめんね」
『うん、どうしたの』
「えっと、達也さんがね、雫にどうしても訊きたいことがあるって」
ほのかに頼んで、雫に電話を掛けてもらっていた。
「すまないな、夜遅くに。メールにしようかとも思ったんだが、直接話さないと要領を得ないだろうから」
現代の通信システムは、小さな携帯情報端末の上でも、実視と遜色ないクリアな映像を再現する。
自分の携帯端末の画面越し、同時通話の機能を使って再会した雫の顔は、まだ十日も経っていないのに記憶にあるより少し大人びて見えた。
『大丈夫、まだ八時だよ』
画面の中の少女が、僅かに目を細めて笑った。
相変わらず分かり難い表情だが、彼らにはその笑みが、随分嬉しそうなものだと分かった。
ムッとした表情で各々の端末を覗き込むほのかと深雪。
だが生憎と、達也は雫を、雫は達也をメインフレームに表示している。携帯端末の小さな画面を更に小さく分割したサブフレームでは、メインフレームと違って細かな表情の変化を読み取ることは難しい。
『それで、なに?』
「ああ、ほのかに聞いたんだが、そっちでも吸血鬼が暴れているそうだな。
詳しい話を知っていたら教えて欲しかったんだ」
画面の中で、雫がコテッと首を傾げた。
「……雫?」
『……ああ、あのこと。
じゃあ、日本では本当に吸血鬼が出たの?』
「日本では?」

『アメリカでは今のところまだ、都市伝説扱い。少なくとも、メディアは報道していない』

伝説やフィクションの中の存在とは別物であっても、吸血鬼あるいは吸精鬼と呼ぶべきモノは確実に存在する。

実在するものが噂になっている以上、事件は間違いなく起こっているはずだ。

つまりＵＳＮＡでは、この件が未だに報道管制の下に置かれているということだ。

もしかしたら、思ったより遥かに根が深い事件なのかもしれない。

「単なる噂でも構わない。出来るだけ、詳しい話を知りたいんだが」

『何かあったの？』

雫が画面の中で身を乗り出していた。

たった一人異国にいる少女に、友人が被害者となった事実を告げるべきか告げざるべきか、達也は迷った。

「レオが吸血鬼らしきモノの被害に遭った」

だがすぐに、告げるべきだ、と判断した。

もっとも、何故そうしたのか、達也本人にも説明は出来ない。

それは、直感的な判断だった。

あるいは何か、予感があったのかもしれない。

「幸い、命に別状はない」

『そんな……』

ただ、徒に不安を与える結果となるのは、やはり本意ではなかった。

雫がショックを受け過ぎないよう、達也はフォローを忘れなかったが、残念ながらあまり効果が無かったようだ。

「いや、大丈夫だから、そんな顔をしないでくれないかな。レオは自力で犯人を撃退したんだ。ただその際に、相手の異能でダメージを受けて、今は病院で大事を取っている」

達也の「気休め」も、決して上手とは言えない。
入院している、などと、気の弱い相手ならますます不安を煽り立てるようなものだ。
『本当に大丈夫？　良かった……』
しかし幸い、雫は悲観的な思惟に溺れる性質（たち）ではなかった。
しっかりと頷く達也を見て、ホッと胸を撫で下ろしている。
こういうコミュニケーションは、テレビ電話ならでは、と言える。
『そっか、だから達也さんは、こっちで何が起こってるのか、知りたいんだ』
疑問形ではなく断定形で訊ねる雫に、達也はもう一度肯定を返す。
「ただ、どうしても、って訳じゃないからな」
その上で、忘れずに釘を刺した。
「本当に分かる範囲で良いんだ」
『でも、アメリカに手掛かりがあると思ってる。違う？』
「手掛かりというか、正直に言えば、吸血鬼事件の犯人はアメリカから来たと思っている」
息を呑んだのは雫だけではない。
この推理は、ほのかにも、深雪にも告げていなかった。
「だから余計に、危険な真似は慎んで欲しいんだ、雫。
呉々も、危ない橋は渡るなよ。そっちの情報が必須という訳じゃないんだから」
『……うん、無理はしない。
だから、期待しないで待ってて』
「念の為に訊くが、期待しないのは情報の方だよな？
危ない真似をしないことに関しては、信じて良いんだよな？」
『もちろんだよ』
雫はバカでも怖いもの知らずでもないが、改めて念押ししても尚、何となく不安だった。

◇◆◇◆◇◆◇

都内で被害者を出し続けている吸血鬼事件に対して組織的な対応を取っている勢力は、エリカの知る限りで三つあった。

一つ目は、警視庁を主力とし、警察省の広域特捜チーム（通称「日本版ＦＢＩ」）と、同じく警察省配下の公安が加わった警察当局。

二つ目は、七草家が音頭を取り十文字家が続く形で組織された、十師族の捜査チーム。彼らは内情（内閣府情報管理局）のバックアップを受け警察とも部分的に連携している半官半民の勢力だ。但しこの場合、常と異なり「民」の方が上の力関係だが。

そして三つ目が、古式魔法の名門・吉田家の協力を得て千葉家が組織した私的な報復部隊。つまりは、エリカたち自身である。

「やっぱり先輩たちに協力した方が良かったんじゃないかな……？」

千葉家から吉田家に対する非公式な、けれども正式な要請によって、急遽協力者に任じられた幹比古は、昨日から通算でちょうど十回目になる疑問を投げ掛けた。

相手は言うまでもなく、この一件に関する彼のパートナー、エリカだ。

「街路カメラをはじめとした防犯システムを使えるようになるだけで、随分効率が上がると思うんだけど」

「関係ない。監視システムをフルに使える警察が尻尾を掴めないでいるのよ」

「人手に頼るにしても、連携が無いよりあった方が良いと思うけど」

「だからこうして協力をお願いしてるじゃない」

「いや、僕たちだけじゃなくて……」

足を速めて前に出たエリカに、幹比古はそれ以上の忠告を止めた。小走りでエリカの背中を追いかけ、その隣に並ぶ。

「闇雲に歩き回っているだけじゃ、埒が明かないと思うんだけどなぁ……」

これは独り言であり愚痴だった。

エリカに聞こえる声量ではなかったし、例え聞こえていても無視

されただろう。
何故なら、まさにこれこそが、幹比古がエリカに同行している理由なのだから。
吉田家は神道系の古式魔法を伝える一族。
陰陽道系の家系ほどではないが、占術の造詣も深い。元々、技術に関する宗派間の垣根が低いのがこの国の伝統だ。神道系といいながら呪符を媒体に使っていることからもその節操の無さが分かろうというもの。
寿和から科学的捜査が行き詰まっていることを聞いていた千葉家の総帥（つまり、寿和やエリカの父親）は、古式魔法師が得意とするこの技能を利用することに決め、古式の一門で最も親密にしている吉田家の当主に協力を依頼したのだった。
千葉家の総帥は「魔法技能を除けば単なる俗物」と自認する程の「神秘オンチ」だから、もしかしたら「オカルトにはオカルトで」と考えたのかもしれない。
そういう訳で、幹比古は道案内ならぬ「道占い」役として、エリカに同行しているのだった。
「ミキ、どっち？」
十字路で足を止め、エリカが振り向いて訊ねる。
もう少しこまめに訊いて欲しいなぁ、と内心ため息をつきつつ、幹比古は手に持つ一メートル弱、正確には三尺の杖を歩道に突き立てた。ちなみに「ミキ」という呼び方については、リーナにデフォルト設定された時点で、もう諦めている。
細かな文字が墨でビッシリと書かれた、杖と言うより真っ直ぐなだけの細い木の棒。その断面は、ほぼ真円。
その頭を押さえて直立させ、そっと手を放す。
突き立てたといっても、下は舗装された路面。単なる木の棒が突き刺さるはずもない。
それなのに、幹比古の杖は何の支えもなく、路面に立った。
幹比古は後ろ歩きで三歩離れ、クルリと身体を反転させた。

彼が背を向けた直後、杖は見えざる支えを失ってパタリと倒れた。
そのまま乾いた音を立てて路面を転がる。
杖は、十字路の右を指していた。
「コッチね……」
エリカは杖の指した方へ足を向けた。
連れを待つ、どころか、振り返りもしない。
幹比古は苦笑いを浮かべ、杖を拾ってエリカの後を追いかけた。
追いつく直前、ふと思い出したように、内ポケットから情報端末を取り出した。
通信機能の設定は、シグナルモード。識別信号を発信して自分の位置をグループ登録された端末に通知するモードになっていることを確認して、懐に戻す。
幹比古の顔から苦笑いが消えていた。
標的に近づいていることを、彼は予感していた。
エリカの一歩後ろで歩調を緩め、同じ距離を保ちながらもう一度端末を取り出す。
呼び出したのはシグナル通知先のグループリスト。
そこへ、アドレス帳から新たな通知先を一つ加えて、幹比古は今度こそ端末を仕舞い込み、エリカの隣に並んだ。

それから二回、行き先を占い、十分ほど歩いたところで、二人は走り去る小さな足音を聞いた。
ラバーソール（と言っても今時、天然ゴムではあり得ない）特有の、舗装面を擦り付ける、逃げる足音と追いかける足音。
おそらくは、一人の逃亡者と、一人の追跡者。
二人は顔を見合わせた。
直後、何の合図も交わさず、二人は同時に走り出した。
エリカは闘争の気配を、幹比古は精霊のざわめきを。
異なる感覚で、同じ直感を得て。
――見つけた、と。

エリカが僅かに先行し、幹比古がその後に続く。
走りながら、エリカは肩に掛けていた細長いケースから、鞘に収まっていない剥き出しの刀を取り出した。
刃が付いていない代わりに術式刻印が刀身の全面に刻まれた、五十里家謹製の武装デバイス。街中では目立ち過ぎる大蛇丸の代用品として五十里啓からエリカに贈られた物で、大蛇丸ほどではないにしても、慣性制御術式を補助する機能がある。（ちなみに、名前は付いていない。日本刀は包丁と同じで研げば磨り減っていく消耗品だから、常用しないことを前提とした儀式刀でもない限り、品質保証の意味合いで「誰の作」を表す銘はあっても、個々の刀に名前を付けたりしない。この習慣を受け継いでいる日本の剣術家は、自分の武装デバイスに一々名前を付けないのが普通だ）
一方の幹比古は、杖の端を二握り分ほど余らせて右手で持ち、左手を斜めに振り下ろした。
袖口から飛び出した扇子のような物を、左手で掴み取る。
薄く細長い金属の短冊を扇形の骨組みでつないだ鉄扇もどきは、一つ一つの短冊が、呪文と呪陣を刻んだ一枚の呪符。短冊と一体成形された金属の骨が、術者のサイオンを伝えるライン。扇の要から伸びるコードは袖の下に隠れた、詠唱を代替する起動式を展開するための演算ユニットにつながっている。
これもまた、ＣＡＤの一種。
古式魔法の、呪符と詠唱という二段構えの発動プロセスを、ＣＡＤを使って再現する為、達也のアドバイスを元に幹比古がアイデアを纏め、吉田家出入りの技術者に作らせた新型の古式魔法用術式補助具だった。
二人は臨戦態勢を整えて、足音を追いかけた。
時々リズムが大きく乱れるのは、立ち止まって交戦しているからだろう。
そうでなくても、足はエリカたちの方が速かった。
中層ビルが建ち並ぶ裏道を抜け、防災用（正確には、災害時の被

害緩衝用）の小さな公園で、二人は遂に標的の姿を捉えた。
交錯する二つの人影。
一方はフード付きのコートに顔と身体を隠し、もう一方は目の周りを覆う仮面で顔を隠している。
どちらも女、に見えた。
「ミキはコートの方を。あたしは仮面を抑える！」
レオの証言に照らし合わせれば、怪しいのはフード付きコートの方だ。
だがこんな夜中に仮面を付けて顔を隠した人間が、怪しくないはずはない。
何より女の持つ大型ナイフと、それを振るう女の腕が、遠目に見ただけでもエリカの警戒心を強く刺激した。
自己加速は使わず、刀身の強度を上げる刻印魔法だけを使って、仮面の女に斬りかかるエリカ。
魔法で加速せずとも、達人と呼ばれる一握りの人々を除いては、生身の身体能力だけでは躱すことの困難な速さがあった。
女のナイフ捌きは一流のものだったが、達人と呼べる程ではない。
故に、エリカの一撃を受け止めることは出来ても、躱すことなど出来ないはずだった。
ただの人間であったなら。
閃光が瞬いた。
エリカの刀は空を切り、標的は三メートル先に移動していた。
閃光は物理的な光ではなく、魔法の発動に伴うサイオンの輝き。
それが知覚出来たから、エリカは自分の斬撃が躱されたことに驚かなかった。
驚きがあったとすれば、その魔法のスピード。
斬りかかる直前まで攻撃を覚らせなかった自信がエリカにはあった。
つまりこの相手は、彼女が刀を振りかぶってから振り下ろすまでの一刹那に、魔法の選択から発動までをやってのけたのだ。

仮面の魔法師が移動した先は、街灯のすぐ下だった。
それが本人にとって意図せざるものだったのか、あるいは見られても構わないと思っていたのかは定かでないし、定かにする必要も無いことだった。
エリカの目に、意識に、強く刻みつけられたもの。
それは、仮面で隠し切れない女の美貌でもなく、分厚い服に包まれていても分かる均整の取れた肢体でもなく、
街灯の明かりに浮かび上がる、女の色。
黒と見まがう程に濃い、深紅の髪と、
仮面から覗く、金色の瞳。
人間とは思えない、禍々しい色彩だった。

5－（8）　仮装の魔法（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

5－（8）　仮装の魔法

引き込まれそうな金色の瞳。
条件反射に等しくなるまで叩き込まれた剣の心得が、その吸引力を断ち切った。
目を逸らさぬまま視野を広げ、仮面の魔法師の全身を視界に収める。
エリカは予備動作を極限まで省いて、女に向かい疾走した。
動作補助の魔法は使わない。
この相手に魔法の補助は逆効果、かえって動きを読まれるだけだと直感してのことだ。
魔法を使わず、「魔法のような」体捌きと足捌きでエリカは女に肉薄する。
仮面の向こう側から、動揺の気配が零れ落ちた。
構わず、エリカは刀を振り上げた。
魔法の煌めき。
自己加速ではなく、自己移動の魔法。
この一瞬に魔法式を解析する能力は、エリカには無い。
その代わりエリカには、剣士として鍛え抜いた目がある。
相手の予備動作ではなく、動き始めた一瞬で、移動方向を認識し、太刀筋を修正する。
逆袈裟斬りに振り抜いた刀は、運動方向を真下に変えた女の、深紅の髪を掠めた。
慣性制御術式を発動し、刀身を切り返す。
しゃがんだ体勢のまま、仮面の女は水平に跳躍した。
踏み出した足を急停止。
そのすぐ先に、ナイフが突き立った。
エリカが立ち止まった隙に、仮面の女は片膝立ちの状態から立ち上がった。

深紅の髪が大きく揺れた。
刃の付いていないエリカの刀が、その速度だけで髪を纏めていた紐を切ったのだ。
胸まで届く、乱れ髪。
風になびくカーリーヘアは、女の姿を一層禍々しく見せていた。
（肌の色が黒かったら、まさしくカーリーよね……）
そんなことをチラッと考えながら、エリカは油断無く対峙する相手の挙動を窺う。
格好こそふざけているが、腕の方は間違いなく一流、魔法の技量に関して言えば、今、垣間見ただけで超一流と断言できる。
ここまでは先手を取れているが、守勢に追い込まれれば、手の内が分からないだけに勝率は絶望的なものになる、とエリカの勝負勘が告げている。
機を見逃すのは、致命的だ。
ただ、彼女にとってありがたいことに、仮面の女は焦りを抱えている。
こうしてエリカとギリギリのせめぎ合いを演じながらも、最終的な目的意識はコートを纏った「吸血鬼」へ向いている。
この女は単独行動で、エリカは幹比古とコンビを組んでいる。
そこに付け入る隙がある、とエリカは計算していた。
睨み合う、仮面の女と、少女剣士。
エリカの背後で、雷鳴が弾けた。
金色の瞳が、エリカから逸れた。
エリカは瞬時に、斬り込んだ。

◇◆◇◆◇◆◇

背後で風を斬り裂く音が聞こえた。
幹比古はエリカの腕を良く知っている。
彼に剣の心得はないが、古式魔法と古武術は切っても切り離せな

い、とまでは言わなくともそれに近い関係にある。
エリカの腕は千葉一門において当主と二人の兄に次ぐと言われているが、これは誇張でも何でもない。
純粋な剣技だけで見るならば、既に父親の腕を凌ぎ、天才の呼び声高い次兄に迫っているかもしれない。
そのエリカが、斬撃を受け止められたのではなく、躱されたのだ。
それだけで、エリカが対峙している相手が、容易ならざる実力者と分かる。
だが――
（……簡単に行かないのはコッチも同じだ）
助太刀は、不可能だった。
向かい合うフードの下は、聞いていたとおりの仮面。目の周りだけでなく顔全体を覆う、白一色のマスク。
武器は持っていない。
隠している様子もない。
それでも十分、脅威だった。
レオの身体には、打ち身以外、目立った外傷は無かった。
火傷も無ければ切り傷も無い。
つまりレオが戦った相手は、火も電気も刃も使わないということだ、と幹比古は考えた。
武器を使うなら鈍器。
使わないならば殴打。
攻撃手段は、少なくとも今のところは、事前に予測したとおりだった。
ただ、一つ見落としがあった。
レオはこと、硬化魔法に限って言えば一流の使い手。
一言唱えるだけで（彼のＣＡＤは音声入力式だ）、何の変哲もないジャケットを、鉄の硬度を持つ鎧に変える。
その、レオの身体に、痣をつけた。
その事実は、この敵の持つ、桁違いのスピードとパワーを示して

いる。
女吸血鬼――幹比古はこの敵のことを便宜上、そう認識していた――の拳が、幹比古に向けられた。
その手を包む厚手の手袋は、相手に外傷を与えない代わりに、かえって打撃を内臓に浸透させることだろう。
幹比古は予め開いていた鉄扇（もどきのＣＡＤ）の、骨の一本を指で押さえた。
（『綿帽子』）
声に出さず念じた術が、思念スイッチではなく、指先から流れたサイオンによって起動し、発動する。
風を穿つ鬼の剛拳。
コート越しにも分かる細腕からは想像できない威力を秘めている打撃は、音速に届こうかという速さも持っていた。
幹比古も荒行を通じて常人より遥かに高い身体能力を有しているが、間合いの内に踏み込まれた亜音速の打突を躱すスピードは持ち合わせていない。
圧縮された風の塊が、実体の打撃に先んじて幹比古に襲い掛かり、幹比古の身体は、風に押されてフワリと流れた。
気流に従い拳の軌道を避け、気流に引かれて拳の後ろ、腕に近づく。
現代魔法ならば重力遮断と慣性中和、プラス相対姿勢安定の複合魔法で処理されるであろう事象改変を、「風に乗る」という概念で統合した古式の魔法。
相手の側面を取った幹比古は、術の効果が切れ地面を踏みしめると同時に、振り上げた右手の棒を相手の伸ばされた右腕、肘関節目掛けて打ち付けた。
関節を砕くつもりで振り下ろした棒は、乾いた音を立てて真っ二

つに折れた。
痺れを伝える手は半ば意図せず、半ば意識して、折れた杖を手放した。
（「防壁」？　それとも「衰弱化」？）
幹比古は思いきり後方へジャンプすることで横薙ぎの手刀を躱しながら、隠しポケットから投げナイフを引き抜いた。
投擲用に申し訳程度の柄が付いた、細い小振りのナイフを、目の前を通過した相手の腕に投げつける。
だが、ナイフはコートに穴を空けるだけで、それ以上食い込まず、弾き返された。
（「防壁」か！）
こちらの投擲に合わせて魔法を発動した様子は無かった。それはつまり、物質を弾き返す効果を有する力場を常時身に纏っているということだ。
細い腕に不似合いなパンチやチョップの威力も、この防壁の効果に違いないと幹比古は分析した。
（ならば）
指を使い、一旦閉じていた鉄扇の、一番端を開く。
最も使い易い所に配置した、最も使用頻度の高い呪符。
質量もエネルギーも同時に防ぎ止める障壁は、少なくとも幹比古の知る限り、魔法技術では構築不可能だ。
多重障壁を展開しているという可能性もゼロではないが、試してみる価値はある。
（『雷童子』）
雷童子――平易な表現に直せば、「雷小僧（かみなりこぞう）」。
狭い空間に小規模な落雷を再現する魔法。
雷雲を発生させ本物の雷を模倣する天候操作魔法「招雷」の劣化縮小版だが、電流量は劣っていても電圧は遜色ない。
絶縁破壊の破裂音が轟き、空中に設定された起点からもう一つの電極に設定された吸血鬼の頭頂に向かって、放電が走る。

魔法が発動した時点で、命中は既定の事実。秒速二十万キロの電撃が女吸血鬼の頭部に襲い掛かった。

絹を裂く、と表現するには、獣じみた悲鳴が上がる。

だがそれはすぐ、声に相応しい雄叫びに変わった。

標的の体内に浸透して消え去るはずの閃光が、頭を抱えるように置かれた女吸血鬼の両手に移った。

指先でパチパチと音を立てる電子の火花。

それは、幹比古が作り出した雷を超える電気量を宿していた。

（放出系魔法！）

電子を物体から抽出する術式は、現代魔法四系統八種の内、放出系魔法の基本技術。

電子の分布という現象に直結する情報をピンポイントに書き換えるが故に、放出系魔法は古式魔法における雷系統の術式より、一般に高出力の電撃を生み出すことが出来る。

地面に身を投げ出し転がって逃げる幹比古を掠めて、電光が走った。

現代魔法の放出系術式は、古式魔法の雷魔法に比べて、威力に勝る代わりに操作性に劣る。そのお陰で一撃目は回避できた。

だがこの至近距離、文字通り電光のスピードで撃ち出される攻撃をいつまでも躱せるとは幹比古自身、思っていない。

相手の攻撃手段を一種類と無意識に決めつけていた己の思慮不足に臍（ほぞ）を噛みつつ、防御の為の術式を組み立てる。

絶縁破壊が起こらないだけの濃密な空気の層による防壁を作り出す魔法を、幹比古は呼び出した。

しかし相手は既に魔法を行使している状態。どういう仕組みか分からないが、起動式も無く魔法を発動し、その効果が薄れる気配もない。

あるいは、本物の魔性なのか。

間に合わない――

望まざる覚悟を決めた幹比古だったが、望まざる未来はやって来

なかった。

一陣の風が燭台の炎を吹き消すが如く

撃ち込まれたサイオン情報体が、吸血鬼の手から電光をかき消した。

◇◆◇◆◇◆◇

エリカが振り下ろした刃は、仮面の女が翳（かざ）した左腕に阻まれた。

鈍い音共に伝わってきた感触は、骨が折れた手応えでもなく、肉が裂けた手応えでもない。

おそらくは、軽量合金と緩衝素材を貼り合わせた防具――籠手で受け止めたのだ。

相手を斬り殺す意志までは込めていなかったにしても、手加減をしたつもりは、エリカには無かった。

相手の右手に拳銃が握られている。

この相手は仮面こそふざけているものの、魔法師としてだけでなく、戦闘員としても高度に訓練されている。

警戒信号が意識を貫き、肉体に一層の力を振り絞れと命じる。

鍔迫り合いの要領で籠手に沈んだ――と言うより食い込んだ刀を引き戻す。

銃を持ち上げる腕より速く、

相手の左へ回り込む。

銃口がエリカへ向く直前、

エリカの刀が銃身を叩いた。

サイレンサーで抑えられた、くぐもった銃声。

仮面の女の左手が、エリカの顔に向かって伸びた。

親指と中指が輪を作る。

開かれた指先に踊る、小さな雷球。

エリカは自己加速の術式を発動した。
肉体が認識を追い越して動く。
後退して雷球を避けたエリカは、銃口が上がり切らない内に仮面の魔法師目掛け突進した。
もらった、とエリカは思った。
そう思ったのは、間合いの内に踏み込み刀を振り下ろしている最中で、
足下から突き上げる衝撃波に宙を舞ったのは、そう思った直後のことだった。

衝撃に意識を手放しそうになったのは、一瞬のこと。
すぐさま身体を起こす。
追撃は来なかった。
仮面の魔法師は左手で右肩を押さえ、幹比古と吸血鬼の戦っている方へ目を向けていた。
正確には、その更に向こう。
バイクに跨ったまま、銀色のＣＡＤを吸血鬼に向けた少年へ。
少年の顔はヘルメットに覆われたままだ。
（達也くん……？）
にも関わらず、霞んだ意識のまま戦闘態勢を維持していたエリカの目は、街灯の下にクラスメイトの姿を認めた。

◇◆◇◆◇◆◇

エリカ、幹比古、吸血鬼。
間に挟む敵と味方を視界に収めながらも、達也の目は金色の瞳に吸い寄せられるように、仮面の魔法師へと向いていた。
仮面の魔法師が左手を達也へ向けた。
その指がまるで印を組むように動き、一瞬も置かず、魔法発動の兆しが生じた。

しかしその兆候は、世界を書き換える前に霧散した。
金色の瞳に動揺が走った。
異なる魔法式が三度形成され、三度、霧散する。
あっ、という声が聞こえた。
声を発したのは幹比古。
理由は、問う迄も無かった。
吸血鬼が逃げ出したのだ。
シールドに隠れた達也の視線が、仮面の魔法師から逸れた。
それは、ほんの一瞬のこと。
その一瞬を、仮面の魔法師は見逃さなかった。
その一手は、魔法ではなかった。
目を逸らしていても、魔法ならば、達也の「視力」は見逃さなかっただろう。
あるいはそれに、仮面の魔法師は気づいていたのか。
ダラリと垂れ下がった右手に握られた拳銃が、銃口を下に向けたまま、銃弾を吐き出した。
射手本人の足下で火花が散り、それは瞬時に、閃光に変わった。
くぐもった銃声が五回続き、仮面の魔法師の姿を閃光が覆い隠した。
達也は魔法の照準を仮面の魔法師本人へ向けた。
相手の足を狙って、部分分解の魔法を発動――しようとした。
だが。
相手の身体情報に、手応えがなかった。
実体を反映しているはずの情報体は、表面だけで、中身が無かった。
色彩と輪郭が記録されているだけで、材質や質量や構造に関する情報が抜け落ちていた。
達也は魔法を中断して、手を下ろした。
閃光が消えた公園に、仮面の魔法師の姿はなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

「二人とも、無事か？」

追跡を断念した（実は最初から余り、その気が無かった）達也は、ヘルメットを脱ぎ、バイクを降りて、二人の様子を確かめた。

幹比古の方は、特に怪我をしている様子もない。

エリカの方はというと……

「……あんまりジロジロ見られると恥ずかしいんですけど」

「ああ、悪い」

顔を赤くして明後日を向いている幹比古に倣って、達也は顔を背けた。

素肌が見えていた訳ではない。皮膚を保護するアンダーウェアに、破損は見られなかった。

ただ、アウターのボトムから胸の下あたりまで所々裂けて、身体のラインが見え隠れしている。

まるで、過激なパンクファッションのようだ。

そういうファッションとして見れば決して露出が激しいとは言えないが、同じ水着姿でも、海やプールでなら恥ずかしくなくとも街中で着るのは恥ずかしいのと同じ理屈かもしれない。

「……ねぇ、何か羽織るものを貸してくれない？」

気が利かないわねぇ、と言いたげな声に、幹比古が慌ててハーフコートを脱ぎ、エリカに投げ渡した。（達也はブルゾンの下にショルダーホルスターを隠しているので脱ぐ訳にはいかなかった）

「ありがと。もう良いわよ」

別に裸だったのでもないし（それどころかセミヌードですらなかった）、「大袈裟な」というのが達也の偽らざる感想だったが、これも一種の様式美なのかもしれない。それに、羞恥心が無い（あるいは乏しい）よりは、数段好ましいのも確かだった。

「エリカ、怪我はないか？」

外から見て分かる範囲では確認していたが、一応、本人に訊ねて

みる。
「念の為に鎧下を着けてて良かった。そうじゃなかったら、エライ目に遭ってたとこよ」
鎧下とはまたアナクロな表現だが、本来の「鎧下」とはまるで別物であることを、達也は幸運にというか偶々というか、知っていた。
鎧の下に着る衝撃の緩和と皮膚を保護する為の厚手の衣類ではなく、防弾・防刃の鎧として機能する多機能合成ゴムのアンダーウェア、それがエリカの言う「鎧下」だ。
分厚いボディアーマーと違い動きを阻害することもないし、服の下に着けることが出来るので余計な警戒を招かないというメリットがある。その代わり、素材の性質上、身体にピッタリと張り付くデザインになるので体型を隠したい人間には好まれない。どうせ上からアウターを着るので、普通なら気にする意味はないのだが、今回は本人にではなく、同行者にとって目の毒となってしまったようだ。
「爆風の中にカマイタチが混じっていたようだな」
「そうみたい。まったく……あの仮面め。今度会ったら服を弁償させてやる」
「相手は鎖骨を痛めていたみたいだけど」
「それはそれ、これはこれよ」
爆風に吹き飛ばされた一瞬、エリカもやられる一方ではなく、一太刀を報いていた。
当たりは浅かったが、エリカの刀は仮面の魔法師の右肩を捉えていたのだ。
達也はその現場を目撃していなかったが、仮面の魔法師の様子と、エリカの服の傷み具合から、何が起こったのかを正確に推理していた。
「ところで達也くん、どうしてここに？」
ふと思いついて、ではなく、さっきからこれを聞きたくてウズウズしていたことは、顔を見ていれば分かることだ。
何と答えを返すか、達也もいくつか回答案を考えていたが、結局、

正直に答えることにした。
――その方が面白そうだったからだ。
「どうしてって、幹比古に連絡をもらったからだが」
幹比古の顔に動揺が走り、「裏切り者」という目が達也に向けられた。
「ふ～ん」
だが、いかにも機嫌の悪そうな声に、幹比古はぎこちなく、エリカの方へ視線を移した。
「それで、危ういところに助っ人が間に合った、って訳ね。ミキ、ファインプレーじゃない」
台詞の上では褒められているし、実際の経緯を考えても褒められるべき判断なはずだ。
それなのに幹比古は「あ」とか「いや」とか断片的な声で応えることしかできなかった。
耳から入ってくる音声は、どう聞いても褒められていると思えないものだった。
「ところで、何時、連絡したの？　あたし、聞いた覚えが無いんだけど」
「……」
聞いた覚えがないのも当然で、エリカには全く伝えていない。達也にトレーサーシグナルを流したのは幹比古の完全な独断である。しかも、達也にも他の情報を一切与えずに、だ。
改めて自問してみても、自分がどういうつもりだったのか、幹比古は答えを見つけられなかった。
エリカに冷たい眼差しを向けられて、幹比古のこめかみに冷たい汗が浮いた。
すっかり「蛇に睨まれた蛙」状態だ。
どうやら自力脱出も難しそうだし、「そろそろ良いか」と達也は思った。
「二人とも、取り込み中みたいだけど、移動しなくて良いのか？」

横から掛けられた声に、エリカは二度、瞬きして、辛うじて無事だった情報端末を取り出した。
「人が集まってきてるぞ？」
この達也の指摘に、幹比古も慌てて自分の情報端末を取り出す。
エリカは時間を確認した。
吸血鬼・仮面の魔法師と接触してから、もうすぐ五分。そろそろ他のチームがやって来てもおかしくない。
幹比古はトレーサーのモニターを呼び出した。
味方の捜索隊を示す光点がランダムな折れ線を描きながら接近して来ているのは、他の捜索チームと鉢合わせしないように動いているからだ、と推測するのは容易なことだった。
「師族会議には断り無しなんだろ？」
七草家が組織した捜索チームに加わらなかったからといって、ペナルティが発生するような決定は今回、なされていない。
しかし、七草家、十文字家の捜索チームを無視する形で戦闘に突入した点については、出来れば、シラを切りたい類の事実だった。
特に前生徒会長に見つかったりすると、色々と、本当に面倒くさいことになりそうな気がする、とエリカも幹比古も考えていた。
二人が考えている間にも、達也は逃走に掛かっていた。
「エリカ、乗っていくか？」
再びバイクに跨った達也が訊ねると、
「うん、お願い」
エリカは弾んだ足取りでタンデムシートに跳び乗って達也の腰にしがみついた。
「達也、僕はっ？」
「悪いな、定員オーバーだ」
焦る幹比古にそう答え、達也はモーターのスイッチを入れる。
「ノーヘルは罰金だぞ！」
悔し紛れ（あるいは負け惜しみ）の叫びを背中に受けて、達也のバイクは走り去った。（なお、ヘルメット着用義務違反に対する罰

金刑は、二十一世紀末現在、存在しない。その代わり、同乗者が事故で死傷した場合、危険運転致死傷罪が適用される）

コートを取られた上に置き去りにされた幹比古は、暫し、呆然と立ち尽くした。

◇◆◇◆◇◆◇

「はっ？　叔母様に、ですか？」

胸ポケットから取り出した携帯情報端末を一瞥するなり慌てて出て行った兄が、戻って来るなり言いつけた用件の中身を、深雪は思わず聞き返していた。

そして、聞き返してしまった後に、失礼な真似をしたと恥じ入る。

もっとも別に、達也は反問を受けて当然だと思っていたし、そうでなくてもこの程度のことで妹に不快感を抱くはずも無かった。

「叔母上に相談したいことがあってね」

だから電話を掛けてくれないか、と達也はもう一度深雪に頼んだ。

四葉家に仕えている者たちの多くは、達也が真夜の甥である、ということを知っている。

同時に、四葉家にとって、達也が道具に過ぎないことも知っている。――兵器であることを知る者は少ないが。

故に達也が、真夜に電話を掛けたとしても、取り次ぎの途中で切られてしまうのがオチなのだ。

かといって直通の番号など、達也ばかりか深雪も知らされていない。

四葉の情報管理は、官邸よりも数段レベルが高い、と事情を知る者たちは口を揃えて言うが、それは決して過大評価ではなかった。

「お兄様のお言いつけとあれば……少し、お待ちいただけますか」

「ああ……俺も着替えてくるか」

血のつながりがあるとはいえ、普段着では電話も掛けられない、映像をカットするなどとんでもない、兄妹にとって、叔母（とその

取り巻き）はそういう存在だった。

「夜分遅く、申し訳ございません」

『良いのよ。それより深雪さんから電話してくれるなんて、珍しいわね』

相変わらず、年齢不詳の美貌に真意不明の笑顔を貼り付けて、真夜はテレビ電話（ヴィジホン）の画面に登場した。

その隣には、スリーピースを一分の隙もなく着こなした葉山が控えている。

叔母と姪の電話に執事を同席させるのは少し非常識じゃないかな、と達也は考えたが、深雪の傍らにはダークスーツに着替えた達也が立っているのだから、これはお互い様と言うべきだろう。

一通り、和やかさの裏に緊張を隠した定番の遣り取りを交わした後、深雪が殊更事務的な口調で――多分、言い出し難かったのだ――達也に相談したいことがある旨を伝えた。

『達也さんが？　それはまた、本当に珍しいわね』

面白がっていることを隠そうともしない笑顔で、真夜は達也の発言を許可した。

「叔母上、実はお訊ねしたいことが一つと、お許し願いたいことが一つ、あるのですが」

『遠慮は要りませんよ』

機嫌良く、真夜が頷く。

少なくとも、見掛け上は。

「では、お言葉に甘えまして……叔母上、九島家の対抗魔法『仮装行列（パレード）』がどのような仕組みの魔法なのか、お教え頂けませんか」

達也の隣で、深雪が呆気にとられた顔で絶句していた。

画面の向こうで、葉山が眉を片方だけ上げるという器用な真似を見せていた。

真夜が堪えきれない、という顔で笑い声を漏らした。

『あらまあ……達也さん、「パレード」は九島家の秘術ですよ。そ

の秘密を私(わたくし)が知っていると思っているのですか？』

尚も笑い声を漏らしながら、質問の形を借りた拒絶の回答を真夜は返す。

「叔母上には、九島閣下の教えを受けられていた時期がお有りです。魔法式は知らなくとも、概要はご存知なのではありませんか？」

それが「教えられない」という意味だと分かっていながら、質問の形だったことを逆用して、達也は食い下がった。

「対抗魔法『パレード』は、情報強化の応用で自己のエイドスの外見に関する部分を複写・加工し、異なる外見の、いわば仮面・仮装のエイドスと言うべきものを魔法式として自分自身に投射し一時的に外見を変えると共に、魔法的な干渉の照準を仮装情報体にすり替えることで自身の本体に対する魔法の作用を防止する術式なのではありませんか」

ただ食い下がるだけでなく、自分自身の推理も付け加えて。

『……「変身」の魔法は実現不可能ということくらい、貴方なら良く知っていると思いましたけど？』

真夜は達也の仮説に、直接的な回答を示さなかった。

それだけで自分の推理が正しかったかどうかの答えとしては十分だったが、達也はまだ、満足する訳には行かなかった。

「見かけを変えるだけなら、『変身』でなくとも光波干渉系で可能です。

問題は、光波干渉系では俺の『眼』を誤魔化すことなど出来ない、という点にあります」

「お兄様、それは」

驚きを露わにして達也のこの台詞に応えたのは深雪だった。

「まさか、お兄様が正体を見抜けない相手など……」

「それだけじゃない。雲散霧消(ミスト・ディスパージョン)の照準を外された」

顔を蒼くして、声を失う深雪。

彼女の受けたショックは画面の向こうにも伝わったようで、真夜が一瞬、眉間に皺を寄せた。

すぐに笑顔を回復したが、はぐらかす様な雰囲気は消えていた。
『ミスト・ディスパージョンが通用しなくても、トライデントなら問題ないでしょう』
「パレードは二重展開できないのですか？」
アドバイスらしきものを告げた真夜だったが、更なる質問には答えなかった。
真夜が答えたのは別の、口にされていない問い掛けに対する回答だった。
『パレードは老師より老師の弟さんの方がお上手だというお話しを聞いた記憶があります』
「ありがとうございます。
叔母上、どうも今回の一件は、我々の手に余るようです。
そこで、援軍を頼みたいと思うのですが」
『それが許しを請う方の用件なのですね？』
ディスプレイ越しに、叔母と甥の視線が交わった。
『……良いでしょう。確かに、予想を超える規模で事態が推移しているようです。
風間少佐との接触を許可します』
達也は一礼して、画面の外に引き下がった。

5－（8）　仮装の魔法（後書き）

【豆知識】

鉄扇には、鉄を閉じた扇子の形に成形した鋳物と、扇の骨組みを鉄に換えたものがあります。幹比古の術式補助具を「鉄扇」と言っているのは、後者の意味合いです。

5－（9）　敵の敵（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

5－（9）　敵の敵

いつもの朝、いつもの通学路。
深雪と二人で駅を出て、友人たちと合流し、学校へ向かう。
年明けから一人、今週の途中からもう一人メンバーが欠けてしまっているが、それ以外は春から続く、いつもの登校風景だ。
しかし今朝は、いつもと異なるイベントが達也を待っていた。
友人たちと合流する前、改札口の手前で、彼を呼び止める上級生の声。
呼び止められる前から、彼女の姿には気づいていた。
この時間帯、この駅の利用者は、第一高校の生徒と関係者がほとんどだ。
昔の大量輸送形態の電車と違い、今の駅では一度に大勢の乗客がゾロゾロと降りて来て混雑するという光景は余り見られない。
それでも始業時間に合わせ次から次へと通り過ぎる生徒の邪魔にならないように、兄妹は真由美が立っている壁際へ歩いて行った。
チラチラと彼らを見る生徒は少なくなかったが、特に気にしている様子は無かった。
前生徒会長と現副会長が立ち話をしていても不思議はないし、現副会長の兄が前生徒会長のお気に入り――ゴシップ的な意味を含む――であるということも、一高生の間で広く共有されている認識だった。
もっとも現実には、彼らが期待するような会話は無かった。そのまま一緒に登校することもなく、達也たち二人は先に改札を抜けた。
真由美の用件は唯一つ、「放課後、サバイバル部の第二部室に来て」だった。

◇◆◇◆◇◆◇

呼び出された先には、真由美と、克人が待っていた。
「独りか？」
そう訊いて来た克人だけでなく、真由美も意外感を漂わせている。
実を言えば深雪は達也に同行すると強硬に主張したのだが、宥めすかして何とか丸め込んだのである。――ケーキバイキングに財布込みで付き合うくらい、安いものだ。
いずれにしても、見てのとおりで、見れば分かることだ。
長々と前口上に時間を浪費することも無く、真由美は早速、本題に入った。
「達也くん、昨日の晩、外出しなかった？」
真由美の質問は、達也がいくつか想定していた予想問答の筆頭にあった。
「外出しましたよ」
それが何か？　とは言わない。
「バイクで？」
「ええ」
相手を騙したい時に、人は饒舌になるものだ。
今の達也には、多弁を弄する動機が無かった。
「……何処に行っていたか、教えてもらって良いかしら」
一方、真由美の方は、どう話を持っていったら良いか困っている様子だった。
腹の探り合いをするには、腹黒さと経験が足りていないようだ。
隣に控える克人は、そもそもそういうことが向いているようには思えない。
「件（くだん）の吸血鬼と交戦中の吉田に呼ばれて、その場で吸血鬼とそれを追っていたであろう正体不明の魔法師とやり合いました」
このままでは長引きそうだな、と感じた達也は、自分から話を前へ進めることにした。
目を白黒させている真由美に、感情の読めない眼差しを向ける。
多分、もっと経験豊富な大人、例えば真由美の父親でも、そこから

内心を読み取ることは困難だっただろう。
何を考えているのか分からない。
その思いが真由美の心に不安を煽り、心理的防御を揺るがせる。
「何時からだ？」
その真由美に助け船を出した、のかどうかは分からないが、克人がいきなり問いを挿んできた。
「昨日は呼ばれたから駆けつけただけです。俺は、吸血鬼の捜索に加わっていません」
誰が、とか、何が、とか、色々と省略された問い掛けに、訊かれていないことまで補足して達也は答えた。
克人と真由美がどう思っているかに関係なく、達也には、今この場で腹の探り合いをする意思はなかった。
「お二人とも、１－Ｅの西城が襲われたのはご存知ですね？」
万が一にも、二人が知らないということはあり得ない。
これは質問ではなく確認の言葉。返ってきた答えは当然、肯定だった。
「一体何が起こっているのか、知りたいと思っているのは俺だけじゃありません。
犯人を見つけて、引き渡して、それで終わりでは到底安心出来ません。単独犯なのか複数犯なのか、属人的な犯罪なのか伝染性の有るものなのか、それすら分からないままで幕引きなど、許容出来るものじゃないでしょう。
先輩のところでどの程度まで事態を把握していて、どう決着をつけるつもりのなのか、それを教えていただけない限り協力も出来ませんが」
先手を取られて、逆に肝が据わったのだろう。
真由美は一つ溜め息をついて、作り笑いを消した。
「達也くんが協力を約束してくれたら、私たちが掴んでいる情報を教えるわ」
「協力しましょう」

間髪を入れぬ答え。
その真意を理解しかねて、真由美は相手の顔色を窺い見る目つきになった。
「……それは私たちの捜索隊に加わってくれる、ということ？」
「そう理解していただいて結構です」
「何故、急に？」
師族会議の通達を見なかった訳ではあるまい」
これは克人の台詞だ。
七草家と十文字家が「吸血鬼狩り」のチームを共同で組織するに当たって、師族会議から十師族、師補十八家、百家の各当主に対して協力要請の通達が出ている。「数字付き」の直系でもない限り、本来ならば高校生が目に出来る文書ではないが、達也が何らかの手段でこの師族会議通達を読んでいることを、克人は当然のこととして語っていた。
「百家の人間でもない自分が出る幕ではないと思いましたので」
そして達也も、通達に目を通したこと自体を隠したりはしなかった。マル秘指定されていない師族会議通達を入手するのは、実のところ、それほど難しいことではない。
「直接依頼されれば話は別ですが」
白々しさの漂う回答だが、建前としては完璧とは言えなくとも文句のつけようが無く、ココがおかしいと指摘できる箇所はない。故に、真由美も克人も、内心はともかく形の上では頷かざるを得なかった。
経験の多寡以前に、元々の性格の悪さが達也と真由美、達也と克人では違うのだろう。
「……でも、いいの？
さっきは、協力する前に情報を開示することが条件だって言ってたと思うんだけど」
「どちらかが折れなければ話が先に進まないでしょう。
なに、騙されたと判断すればこちらも掌を返すだけです」

正直すぎる――ように見えて、実際は裏の裏までありそうな台詞に、真由美は乾いた笑い声を漏らした。
彼女の方から持ちかけた密談ではあったが、既に「さっさと終わらせたい」という気持ちになっていた。
「了解（りょ～かい）。
じゃあ、今の段階で分かっていること全部、説明するわね。
ただその前に、一言だけ、いいかしら」
「何でしょう」
「達也くん、性格悪過ぎよ」
「……」

真由美がもたらした情報の内、達也にとって目新しいものは三つあった。
一つは被害の規模。これは達也の予測を大きく上回るものだったが、それ程の重要性は感じなかった。
二つ目は、この事件が単独犯の仕業とは思えないということ。協力者がいるだろうということは達也も考えていたが、吸血鬼自体が複数存在する可能性は予想外だった。
そして三つ目は、真由美たちの捜索を妨害する第三勢力の存在。最初達也は、妨害勢力と言われてエリカたちのことを連想したが、詳しく話を聞いていく内に、全く別個の勢力だと分かった。
二つ目と三つ目の情報は、流石に達也を悩ませた。
あの仮面の魔法師は、おそらく、捜索妨害勢力に属している。
その正体も、ほぼ推測出来ている。
しかし、何故そんな事をしているのか、動機が分からない。
分かってしまえば簡単な構図、のような気がしてならないのだが、それが余計に、もどかしかった。
「お二人は吸血鬼を捕まえて、どうするつもりなのですか」
思考の袋小路に迷い込む愚を避けて、達也は意識を切り替えた。
協力する、と表向きだけでも約束した以上、最終目標の確認を怠

る事は出来ない。
「訊問して、正体と目的を突き止める。その後は……」
「処分することになるだろう」
真由美が言い淀んだ部分を、克人が補完した。
まあ……女子高校生の口から気安く「処分する」等というフレーズは達也も聞きたくなかったので、甘い、とは思わなかった。
それに達也にとっても、人道主義に固執されるより共感できる決着だった。実利的にも、感情的にも。
「――了解です。
それで、俺は何をすれば？」
「じゃあ、私たちに同行してくれないかしら。
出来れば今晩から――」
「いや、司波は独自に動いてくれ。
手掛かりを掴んだら報告して欲しい」
自分の指示を覆した克人の顔を、真由美は無言で見詰めた。
彼女の眼差しに不快感は無かったが、不審な思いはありありと浮かび上がっていた。
「分かりました」
達也としては、正直なところ、真由美の言うとおりにする方が楽だった。
もっとも、「協力する」という約束を真面目に守るつもりもなかったので、克人の言葉にも躊躇いなく頷くことが出来た。
達也は自分の方の持ち札は明かさず、訊きたい事を聞くだけ聞いて、二人の前から退いた。

◇◆◇◆◇◆◇

達也の足音が聞こえなくなったところで（この部室の周囲にはスパイ対策の隠しマイクが仕掛けられている）、真由美が閉じていた口を開いた。

「十文字くん、どうして達也くんに別行動させるの？」
責めている口調ではなかったが、腑に落ちない、という口振りではあった。
「その方が効率が良いと考えたからだ」
答える克人の声に、自信の欠如は感じられなかった。
「でも今のままじゃ、千葉家の方に与するかもしれないわよ」
エリカたちが通達に逆らう形で別行動しているのは、真由美の方でも把握していた。
十師族はリーダーではあっても支配者ではないので、そう簡単に強制は出来ないし、ペナルティも与えられない。
だが国外勢力の影が見え隠れしている情勢で、勝手に突っ走られるのは不都合であり迷惑だ。
千葉エリカと吉田幹比古のコンビは仕方ないとしても、せめて達也と深雪の兄妹は目の届くところに置いておきたかった、というのが真由美の本音だった。
「こちらが本当の事を言わなければ、そうなっていた可能性もあるだろうが」
しかし克人は、真由美の懸念に「心配要らない」とばかり首を振った。
「我々が誠意を見せている間は、司波も我々を裏切りはせん。アイツは、そういう男だ」
「……徹底したギブ・アンド・テイク？
微妙な信頼ね」
「武士の忠義ですらも、元を辿れば『御恩』と『奉公』、つまりはギブ・アンド・テイクだろう。
盲目的な服従よりも余程信頼できる、と俺は思うのだがな」
「……絶対的な忠誠心の根底にあるのは『依存』だしね。
そんなもの、達也くんには期待できないし、第一、似合わないか」
頷く克人に、納得した、という顔で真由美も頷きを返した。

◇◆◇◆◇◆◇

何か決定的なピースが足りない、ということを認識できるレベルまでピースを集める事が出来たのは、今の段階でいえば、満足すべき成果だろう。これまでに入手した情報を頭の中で反復検討しながら、達也は深雪を待たせている生徒会室へ急いだ。

まだ外は明るい。

それも当たり前の事で、今日は土曜日だ。放課後といっても、お昼を過ぎたばかり。

達也が急いでいる理由は、帰る時間が遅くなったからではなく、昼食の時間が遅くなったから、だった。

深雪が達也を待たずに食事を済ませるということはあり得ない。先に食事を済ませておくように言い含めて（命令して？）おけば話は別だが、今日はそれほど遅くならないと思っていたので特に指示はしていない。

事実、それほど長い時間待たせているわけではないのだが、妹を待たせている、と思うと達也の方でも気が急くのだった。

――似た者同士、と言うべきだろうか。

体力に物を言わせて階段を段とばしで一気に駆け上がり、生徒会室の前に立つ。

と、まるで待ち構えていたように、生徒会室のドアが開いた。

目に飛び込んで来たのは金色の輝き。

達也が脇に避けるのと、リーナがドアの陰に隠れたのは、ほとんど同時だった。

ドアを挿んで相手の出方を窺う形になったわけだが、そんな自分の有様が我ながら滑稽で、達也は唇を小さく吊り上げながら、立ち塞がる者（？）のいなくなった出入口から中に入る。

レディファーストは敢えて無視して、

レディ本人は無視せずに。

「やあ、リーナ。調子はどうだ？」

すれ違いざま顔を向けて、少女の右肩をポンと掌で軽く叩く。
「ハイ、タツヤ。上々よ。ありがとう」
いきなり身体を触られたリーナだったが、「セクハラ」とは言わなかった。眉間の皺一つも寄せず、にこやかに答え、お返しとばかり達也の肩をポンポンと二回叩いて出て行った。

達也の姿を見て嬉しそうに立ち上がった深雪とほのかを手振りで抑え、達也は会議用、なのかどうか今一つ理解できないテーブル（の前の椅子）に腰を下ろした。――まさか、生徒会役員がお昼ご飯や夜食を食べたり御茶をする為に購入された物、だとは余り考えたくなかった。
あずさと五十里の姿はない。居たとしても達也が見咎められることはないのだが、居ない方がやはり、気は楽だった。上級生が居ると緊張する、ではなく、気を遣わなくてはならないからだ。特にあずさは、チョッとした事（と達也本人は思っている）で、すぐに怯えた顔を見せるので。
真由美の呼び出しは全くの予定外だった。だから、特にお弁当の用意などはしていない。もっとも、ここでいきなり「こんな事もあろうかと」なんて言われたら、きっと、感心するよりも怖くなるに違いない。
学食はまだ営業しているが、土曜日は仕込みの量を抑えているのか人気メニューの売り切れが早い。今時、メニューに売り切れが出る、ということからして、物好きにも（！）レトルトを使っていないという証明なのだろう。これもこの学校の学食が「安くて美味い」秘密の一つなのだろうが、今は選択の幅が狭まっているという確度の高い予測の方が大きな意味を持っていた。
この時間から、売り切れが並んでいることの予想される食堂に行くのも少なからず面倒だ。
という訳で、今日は久し振りにダイニングサーバーのお世話になることにした。

ほのかが調理パネルを操作し、深雪が飲み物を用意する。
達也の役目は、座ったまま大人しく給仕されることだった。
……客観的に見れば「羨ましいヤツ」なのだろうが、そんな生産性の無い思考は意識に上る前にカットする。
「そういえば、リーナは何の用だったんだ？」
その代わりに、意識に載せた思考はこれだった。
「留学期間中、リーナを臨時生徒会役員にしてはどうか、と学校側から提案があったんです」
コーヒーカップを達也の前に置いた深雪が、覗き込むように身体を傾げて達也の問いに答えた。
真っ直ぐな黒髪が、達也の目の前を、滝のように流れ落ちる。
手櫛で軽く背中に流す仕草に目を奪われながらも、達也の思考は耳から取り込んだ情報を処理していた。
「ああ、そういえばこの前、所属するクラブが決まらなくてトラブルの兆しが、とか言ってたな」
「ええ……勧誘合戦が水面下で結構激しくなっているみたいで……今回の件は、どうやら服部会頭の発案みたいなんです」
そう答えたのは、湯気を立てるお皿の載ったトレーを運んで来たほのかだ。
そのままUターンしたほのかと、テーブルを回り込んだ深雪が、それぞれ自分のトレーを持って来て、ランチの開始となる。
「この一学期間で留学は終わりなんだから、競技会に出てもらうことも出来ないだろうに」
「もっと別の種類の下心があるみたいですよ」
少し意地の悪い笑みを深雪が浮かべると、
「リーナの写真集を作って売り捌こうなんてバカなことを考えていた人たちもいるみたいですし」
顔を顰めて、ほのかが溜め息をついた。
「写真部なんて、この学校にあったっけ？」
クラブの種類的にはあっても不思議はないのだが、達也の記憶に

該当は無かった。
「美術部の写真チームですよ。リーナを軽体操部に入れて、それを写真に撮ろうなんて頭の悪いことを考えていたらしいです」
軽体操というのは重力や慣性を低下させて演技する魔法師ならではの体操競技で、床運動だとトランポリンを使わずにトランポリンの演技をする、みたいなものになる。深雪やほのかが出場したミラージ・バットは軽体操の発展形の一つだ。
「なるほどね……確かに、絵になりそうではあるな」
「おにいさま？」
「売り物にするってのはどうかと思うが」
「……」
深雪に疑わしげな目を向けられて、達也は反対側に目線を逸らした。
しかしそちらでも、同じような眼差しに遭遇する。
「……いや、今のは言い方が悪かったな。すまん」
もう一度、妹の方へ目を戻して、達也は白旗を掲げることにした。
熱い視線で「睨めっこ」をすれば先に音を上げるのは少女たちの方である可能性が高かったが、こんなつまらないことに二人の想いを利用するのは、大層格好の悪いことのように思われたのだ。
一方、深雪としては、達也にその種の不埒な邪心が無いことを知っているだけに、こういう風に下手に出られると決まりの悪い想いを禁じ得ず、視線を俯かせた。
「と、とにかく、ですね。似たような話があちこちであって、リーナ本人だけじゃなく勧誘に無関係な部員にも火の粉が飛びそうな状況になって来たんで、ええと……」
思い込みの激しい面はあるものの、基本的に繊細な性質の（小心者、とも言う）ほのかが、妙な雰囲気に焦りを見せる。
「それで、生徒会役員に、ということか」
「ええ、生徒会役員就任後は特定のクラブに所属しないのが不文律、生徒会役員に選ばれた生徒は休部若しくは退部が慣例ですから」

幸い全くの空回りにはならず、兄妹の間に漂った微妙な空気はすぐに一掃された。
それを見てほのかもホッと胸を撫で下ろす。二人が喧嘩している隙に、などと考える腹黒さとは、残念ながら（？）無縁な少女なのである。
「それで、リーナの意思はどうなんだ？」
「余り気乗りしていない様子でした」
「放課後、時間が取られるのを嫌がっている感じでしたね。あれだけ熱心に勧誘されて、まだクラブを決めてないのも、それが理由なのかもと思いました」
深雪とほのかの答えに、達也は「そうだろうな」という表情で頷いた。

◇◆◇◆◇◆◇

夕食後、達也はリビングのソファに座って壁面の大型スクリーンを眺めていた。
彼の隣には深雪がしなだれかかるように密着して座っている。
三分割されたスクリーンの、メインセクションには成層圏監視カメラが映した東京都心部のリアルタイム映像とその上を移動する三種類の光点、サブセクションの上半分にはメインセクションに対応する道路地図とその上を動く光点、下半分にはテキストデータが三十秒間隔でスクロール表示されている。
成層圏プラットフォームの監視カメラが使えるのは真田のお陰だ。
七草家・十文字家連合のトレーサーシグナルをモニター出来るのは、認証コードを真由美から聞き出しておいたから、ではなく、稀代のハッカー・藤林響子の仕事である。
千葉家捜索隊のシグナルを割り出したのも同じく藤林。
妨害勢力のものと思しき光点は、成層圏プラットフォームに搭載されたウルトラマルチバンドの傍受用無線機が捕捉した電波を、独

立魔装大隊のスパコンで分析してその結果を流して貰っているものだ。

魔法の実験部隊は、同時に最先端テクノロジーの実験部隊でもあるらしい、ということはこれまでの付き合いで薄々分かっていたことだったが（そうでなければムーバル・スーツなど作れない）、達也は今回改めて、彼らの規格外な実力を思い知らされた気がしていた。

残念ながら「吸血鬼」の動きまでは分析出来なかったが、吸血鬼を探す三つの勢力の移動経路を見ていれば、絞り込みは可能だった。

「お兄様、行かれるのですか？」

立ち上がった達也を、ソファの上から切なげな眼差しで見上げて、深雪が訊ねた。

「良い子だから、大人しく待っていてくれ」

達也の掌が、深雪の頬を撫でる。

その手を上から押さえて、深雪は自分の頬に強く押し付けた。

まるで、達也の体温を確かめるように。

「今日は、お帰りをお待ちしております」

「ああ。近いうちに、間違いなく、お前の力が必要になる。その時は――」

「はい。その時は、一緒に――約束ですよ、お兄様」

「……まあ、横浜の時ほど危険なことにはならないと思うけどな」

達也が少しおどけてそう言うと、深雪も笑顔で達也の手を解放した。

◇◆◇◆◇◆◇

愛用のＣＡＤ以外にも色々と装備を調えて争いの中へ赴く達也を、深雪は玄関で見送った。

兄の気配が感じられなくなるまで、深雪は閉ざされたドアをじっと見詰めていた。

そして、兄の気配が遠ざかり彼女の感覚では明瞭な座標を捉えられなくなって、キビキビとした動作で振り返った。
その顔に、切なさの残滓は無い。
キュッと引き締まった表情の中で、大きな瞳が強い光を放っている。
深雪はリビングに戻り、光の落とされた大型スクリーンのスイッチを入れた。
メカ音痴、とまでは行かなくても、得意不得意で分ければ、彼女は間違いなく、その手の物が不得意な人間である。
だが、記憶力には恵まれている。
精神を改造された副作用で記憶能力を自在にコントロールできる達也ほどではないにしても、傍で見ていた操作手順をその通り再現する程度のことに不自由は無かった。
ついさっきまで兄と二人で見ていた画面を呼び出す。
彼女にとってはテキストデータのスクロールスピードが少し速すぎたが、設定を変更するスキルは無いのでそのままで我慢。
動き回る光点から、兄の立ち回り先を必死に推理する。
大人しく待っていろ、とは言われたが、今回に限って、ただ大人しく待っているつもりは無かった。
例え兄の命令に背く結果になったとしても、その所為で叱責されることになったとしても、兄が傷つくのを何もしないで見ているよりはマシだった。
確かに今回は、大規模な武力衝突が起こっているわけではない。
その意味では、横浜の時より危険は少ないといえるだろう。
だが、規模は小さくても。
武力行使に大きな制限が掛かる状況であったとしても。
相手は、おそらく、あのスターズなのだ。
――とは言っても、彼女に出来ることは余り無い。
個人としては、十五歳にして既に、この国でも最高レベルの力を有している。いや、世界でも最高レベルかもしれない。

だが彼女の力は、予知や千里眼の類ではない。
四葉の力を動かす資格は未だ無い。
達也のように、個人的に築き上げたネットワークも持っていない。
藤林のようなハッキングのスキルも無い。
スクリーンに目を向けたまま、深雪は胸を押さえていた。
無意識の所作だった。
胸の中央、心臓の上。
服が邪魔をして鼓動を感じることは出来なかったが、その代わり別のものを感じることが出来た。
胸の奥、心臓の辺りに、
達也とのつながりを深雪は感じていた。
それは忌まわしい、兄に付けられた枷。
再設定されたリミッター。
鎖と錠は彼女自身。
鍵を持つのも彼女自身。
自分を縛る代わりに兄を縛る、呪いにも似た秘術。
だがそれは、確かなつながりとなって彼女と兄を結んでいた。

――わたしにも見えれば良いのに――

と、深雪は思う。
達也には、どれだけ離れていようと、深雪のことが分かるらしい。
存在の情報そのものを解析する達也の「視覚」は、深雪が何処にいてどんな状態なのか、情報という形で識ることが出来ると聞いている。
それは、言い換えれば、プライバシーが全く無いということだが、深雪はそれを少しも嫌だと思わなかった。
深雪には、兄に対して秘密にしなければならないことなど、一つも無いのだから。
寧ろ自分から口に出来ない胸に秘めた想いまで、その力で読み取

って欲しいとすら思っていた。達也の視力は、精神の次元にまでは及ばないと知っていても、そう思ってしまうのだ。

一方、深雪には、遠く離れた相手を「視る」力が無い。

その代わり、精神干渉系統の魔法を生まれながらに備えた深雪は「精神」の「所在」を感知する「触覚」を持っている。達也に課せられたリミッターを解放することにより同時に自身の異能を解放したならば、深雪は世界に漂う「霊魂」の一つ一つに、その気になれば「触れてみる」ことが出来る、かもしれない。やってみたことが無いので、「かもしれない」としか言えないが。

しかし、遠く離れた相手の「存在」を感じ取ることは出来ない。兄の様に、情報の次元において本来存在しない物理的な距離を、深雪は「無いもの」として透過することが出来ない。

それはある意味まさしく、視覚と触覚の違い。

そこにあると知らされたモノに手を伸ばすことは出来ても、何処にあるか分からないものを見つけることは出来ないのだ。

胸の奥に兄を感じて、だから余計にもどかしい想いを抱えて、深雪は懸命に推理する。

説明のつかない不吉な予感に駆り立てられて、兄の許に駆けつけたいと願って。

そうしてどのくらい、画面を見詰めていただろうか。

不意に、来客を告げるチャイムが鳴った。

ハッとして、時計を見る。

よし、追い返そう、と深雪は思った。

つまりは、居留守を使わなくても非難されない、他家(よそ)を訪問するには遅すぎる時間だったのだ。

ドアホンのモニターを見る。

来訪者の姿を認めて、深雪はすぐさま予定を変更した。

頭の中で着替えをチョイスしながら、それに要する時間を計算する。

「少し、お待ちいただけますか、先生」

来客は、八雲だった。

◇◆◇◆◇◆◇

吸血鬼と仮面の魔法師の戦闘を、達也は木陰から観察していた。
この公園に着いたのは、交戦が始まる三分前。捕捉地点の予測的中を確認した時は思わず口元を緩めてしまったが、今は息を潜め気配を殺して、介入の機を窺っている。
真由美の情報によれば、吸血鬼は複数、これを追う狩人も複数ということだったが、今、目の前で戦っているのは、確かに、昨日の二人だった。
彼はあくまで、集団の動きを見て最初に戦闘が発生する地点を予測しただけで、個体を特定した訳ではないのだが。
（……偶然、だよな？）
戦慄が背筋を這い登って、思わず気配を漏らしそうになる。
何とか寸前で踏み止まって、達也は心の中でぼやいた。
――これが運命だというなら、嫌すぎる、と。
改めて戦闘の様子を覗き見る。
押しているのは、明らかに仮面の魔法師の方だった。
吸血鬼と思しきフードの方は、逃げ出す機会を窺っている。
そして、その逃げ道を塞ぐ包囲網は、まだ不完全だ。
（四人、か。予想通りとはいえ、少ない）
三つの勢力――七草と協力体制にない警察も含めれば四つの勢力――が複雑に牽制し合う中で、四方向から四人の魔法師がこの場に迫って来ている。街路監視機器が使えないアウェーだろうに、よくも別の勢力に気づかれず四人も集めた、と言うべきなのだろうが、立体的に広がるこの街で、逃走経路を全て潰すには手が足りないと言わざるを得ない。
だからこそ、「隠れんぼ」ではなく「鬼ごっこ」になっているのだろうが……

（敵の敵は、所詮、他人。敵の敵というだけで味方とは限らない、か）

吸血鬼を追う全ての勢力が手を結べば、各勢力これだけの数を出しているのだから追い込むのは簡単なはずだが、思惑の違いからそうも行かないのだろう。彼自身からして、真由美ともエリカとも目的が完全に一致している訳ではないのだから。

しかし今はとりあえず、吸血鬼の方が敵だ。

（さて、どう出るか）

仮面の反応を何通りか予想しつつ、腰の後ろから、ＣＡＤではなく、銃を抜く。

ナイフを避けて大きく跳んだ吸血鬼に銃を向け、大雑把に腹を狙って、達也は無造作に引き金を引いた。

5－（10）　華麗なる決闘（前）（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

5－（10）　華麗なる決闘（前）

拳銃の平均的な有効射程距離は五十メートル、実戦闘時の有効レンジは二十メートル以内と言われている。

このあたりの事情は前世紀から変わっていない。何故なら、拳銃とはそういうニーズで作られた武器だからだ。

達也が隠れている木陰とコート姿の仮称・吸血鬼の距離は約十メートル。

必要最低限を超過する訓練時間を消化しているとはいえ、日常的に拳銃の練習をしている訳ではない達也には、細かな照準は難しい距離だ。

手にする銃は、使用する弾丸の特殊性から中折れ式の単発銃。事実上、やり直しの効かない一発勝負。

本当は肌の露出している箇所を狙うのが望ましいのだが、出来ないことは諦めるしかない。

それに、そもそも相手はフード付きコートに厚手のスラックス、顔は顎まで覆う仮面と肌を露出した部分が皆無と言って良いスタイルだ。悩む必要もない。

達也は吸血鬼の腹を狙って拳銃の引き金を引いた。

サプレッサーにより発射音のほとんどを吸収された低速重量弾が、狙い通りにコートの腹部を捉える。九ミリ弾の二倍の重量を持つ弾が、速度の不足を補って吸血鬼を後ろ倒しに転倒させた。

仮面の魔法師が、達也の方へ顔を向けた。

金色の瞳が、射抜かんばかりの苛烈な眼光で達也を見ている。

そこにあるのは、誤解の余地無き敵意。

彼女がナイフを捨てたのと、達也が銃を手放したのは同時だった。

女の手が腰に回り、達也の手が懐へ伸びる。

抜き終えたのは達也が先。

だがＣＡＤの引き金を引く彼の指は、途中で停止した。

相手の手に握られた中型の自動拳銃。
その銃身部分に魔法式が形成されているのを達也の視力は捉えた。
達也の分解魔法に匹敵する発動速度。
握るだけで起動式が展開される単一用途の武装デバイスは、スイッチを操作する手間を要さない分で、先手を取っていた。
発動した魔法は情報強化。
銃身（バレル）を通過する銃弾の諸属性を強化する魔法。
達也はＣＡＤのセレクターを操作し、情報体分解の魔法から実体分解の魔法に起動式を切替えた。
照準は、仮面の魔法師が握る銃のチャンバー部分。
そこから発射される弾丸。
魔法行使時の高密度情報処理がもたらす時間遅延感覚の中で、仮面の魔法師が自動拳銃のトリガーを引き絞るのを見ながら、達也はＣＡＤの引き金を引いた。
達也と仮面の魔法師の距離はおよそ十五メートル。
向こうの銃弾もサプレッサーによる減音効果を重視した亜音速弾とはいえ、着弾までの時間はゼロコンマゼロ五秒以下。
それは、一瞬とほぼ同義。
だが、彼女の情報強化が作用した時間はもっと短い。
一瞬で弾速を含めた属性情報が強化された弾丸は、その飛翔の途上、一瞬で微塵に分解された。
動揺が仮面の奥から漏れ出した。
確かに自信を持つだけのことはある、と達也は思った。
普通に「停止」や「ベクトル改変」では、今の弾丸は防げなかっただろう。
克人程の技量があれば話は別だが、並みの魔法師では不可能だ。
十師族の実戦部隊クラスでも難しいかもしれない。
斯（か）く言う達也も、「分解」が「情報強化」に対して相性の良い魔法だから対処できたのであって、そうでなければ特に対策もとっていない初見で防ぐのは困難だったに違いない。

しかしそれは、仮定の話。
現実には今、仮面の魔法師は、達也の前に隠し切れない隙を曝している。
彼が魔法を撃ったのは、意識が隙を認めたのと同時だった。
最初に放ち損ねた魔法が、今度こそ仮面の魔法師を狙い撃つ。
彼の視界に映る、「色」と「形」と「音」と「熱」と「位置」を記述した情報体。
相手の本体ではなく、偽装の魔法それ自体に照準を合わせて放たれた対抗魔法「術式解散（グラム・ディスバージョン）」。
魔法式（マギ・グラム）そのものを分解する魔法により、着ぐるみに似た中身の無い外装が散り散りに剥ぎ取られる。
――次の瞬間
――魔物が、天使に、生まれ変わった。

◇◆◇◆◇◆◇

夜景が星になって流れて行く。
都心のハイウェイを滑るように走る電動四輪（モーター・セダン）の内部は、外の景色が立体映像に見える程、音も振動も伝わって来ない。
「……先生」
その静かなキャビンの後部座席で、深雪は遠慮勝ちに口を開いた。
問い掛ける相手は、隣に座る忍術使い・九重八雲。
「んっ、何だい？」
八雲は閉ざしていた目を開いて、深雪に顔を向けた。
「今回は何故……お力を、お貸し下さるのですか？
俗世間には関らないことを戒めにされている、と記憶しておりますが」
自戒、あるいは持戒。
意味は違うが結果は似ている。

そして八雲が自らに課した戒めは、自戒であり持戒でもある。
「今回はチョッとばかり事情があってねぇ」
八雲の口調はいつも通り飄々としていて、その内心を窺い見ることは、深雪には難しかった。
「出家して俗世のしがらみを捨てた僕だけど、忍の技は捨てなかった。
僕一人の問題じゃないからね」
捨てられなかった、ではなく、「捨てなかった」。
そこに、力みや悲壮感の類は無く、それが完全に当たり前のこととして八雲の中にある……そんな風に、深雪には見えた。
「技を受け継ぐ者としての義務とか責任とかいうヤツもね……これもまた、俗事の極みかもしれないけど、仏門ですら権威と伝統から無縁じゃいられないんだから、許容範囲じゃないかな？」
ないかな？　と問われても、深雪には答えようが無い。
深雪がどうというより、十五歳の少女に訊く事ではないだろう。
「はぁ……」
曖昧に相槌を打つのが精一杯であり妥当なところだ。
運転席の八雲の弟子から眉を顰めたような気配が伝わって来たが、これは気の所為かもしれなかった。
「実は風間くんから、達也くんの敵が九島の『仮装行列』を使っている可能性があると聞いてね。
それが本当なら、術者に釘を刺しておかなきゃならないんだよ。
九島に『仮装行列』の元になった術、『纏衣』を教えた先代の代わりにね」
まったく面倒臭いことだよ、と八雲がぼやく。
しかし、その不謹慎な発言は、深雪の耳に届かなかった。
「九島家の秘術『パレード』の原型を、先生のお師匠様が……？」
達也ならば「なる程、そういうこともあるだろうな」と考え、すんなりと飲み込んだかもしれない。
だが深雪には、訊き返さずにいられない事実だった。

「あれっ？　知らなかったのかい。
第九研の設立目的は、合理化し再体系化した古式魔法を現代魔法として実装した魔法師の開発だ。
その目的の為に、第九研には古式の術者が大勢集められた。その中に先代もいたんだよ」
もちろん、深雪は知らなかった。
と言うより、現代魔法の暗部として封印された魔法技能師開発研究所のことを、女子高校生が知っていると考える方が間違っている。
例え深雪が、最も悪名高き第四研の成果を受け継ぐ立場にあるとしても、他の研究所で何が行われていたかを知っているはずが無い。
「……ではもしかして、先生のご苗字は」
深雪はハッと目を瞠って、蒼褪めた顔でそう訊ねた。
「いや、それは考え過ぎ」
深雪が何を疑ったのか、すぐに分かったのだろう。
苦笑しながら八雲はパタパタと手を振った。
「九重の姓は先代から受け継いだものだよ」
車内の空気が少し和らぐ。
だが一旦上昇した温度は、すぐに急降下することになった。
「まあ、そういう経緯で、先代が九島に教えた『纏衣』の術式を、九島が改造して出来たのが『仮装行列』の魔法。
その中には、僕たちにとって本来門外不出の秘伝が含まれている。
だから、達也くんと事を構えている魔法師が『仮装行列』を使っているなら、これ以上外に広まらないよう釘を刺しておかなきゃならない。
もし言うことを聞いてもらえなかったら、遺憾ながら、ね」
八雲の口調も表情も、相変わらず飄々としたままだ。
だが深雪は、背筋に寒気が走るのを感じた。
それは深雪だけの錯覚ではなかったはずだ。
何故なら、ハンドルを握る八雲の弟子も、肩を強張らせていたからだ。

◇◆◇◆◇◆◇

魔物（デーモン）が天使（エンジェル）に――

そんな陳腐な感想を達也の心に呼び起こす程の、鮮やかな変化が生じていた。

深淵の闇を思わせる深紅の髪は、弱々しい街灯の光の下ですら煌く黄金に。

禍々しい金色の瞳は、澄み渡った蒼穹の色に。

頬の線は柔らかく、身体つきは華奢に。

身長すらも、僅かに縮んで見える。いや、今までが高く見えていたのか。

その美貌は、小さな仮面程度で隠せるものではなかった。

なる程、体格すら違って見えるなら、今まで世界中の目を晦（くら）まし得ていたのも納得出来る。

様々な前提条件が積み上がっていなかったなら、達也にも多分、分からなかっただろう。

思考とは別に、手と無意識領域は動いていた。

鮮やかな金髪碧眼の少女の手から、立て続けに五発の銃弾が放たれ、その全ては達也に届くことなく塵と消えた。

そして通算七発目の銃弾が放たれる直前、少女の手にする拳銃からスライドが飛び、バレルが抜け落ちる。

銃撃が強制停止させられたこと、それ以上に使用中のデバイスが“魔法で”破壊されるというあり得ない事態に、仮面の少女の動きが止まる。

「止せ、リーナ！

俺は君と敵対するつもりは無いっ」

その空白を狙って、達也は状況の転換を図った。

今日の彼の目的は、吸血鬼を拘束すること。拘束して、その正体を突き止めることだ。

だからわざわざ、弾着と同時に針が飛び出すなどという複雑なギミック付きの麻酔弾と、それを撃つ為の中折れ単発銃を苦労して手に入れたのだ。

仮面の魔法師＝リーナとの戦闘は、彼にとって必要の無い、余計なもの。

だからこの台詞は、その幕を引く為のものだったのだが……

これは悪手――逆効果だった。

仮面の奥の蒼い瞳に、キツイ光が宿った。

スライドとバレルの外れた拳銃（一体型ＣＡＤ）を腰のホルスターに戻すと、その右手には、銃の代わりに小振りのスローイングダガーが握られていた。

ＵＳＮＡの魔法師は武装一体型ＣＡＤを好んで使うというのが定説だ。

このダガーもただの短剣ではなく、何らかの武装デバイスかもしれない。

ショートブーツがソフトコートの地面を蹴った。

そのスピードは到底、少女のものではなかったが、常人の限界を超えるものでもない。

達也はポケットから鉛の玉を取り出し、指で弾く。

風を切る鉛玉は、リーナの右手へ向けて飛翔し――そのまま貫通した。

血飛沫は散らなかった。

肉体を撃ち抜いたのではなく、幻影を通り抜けたのだ。

リーナがそのまま腕を振る。

ダガーは、達也の肉眼が知覚した位置より一メートルほどずれた所から飛んで来た。

横に跳んでかわしながら、その軌道をたどる。

その先で、幻影が再びスローイングダガーを構えていた。

彼の肉眼は小さな仮面をつけた少女の姿を知覚し、彼の心眼は空っぽの立体映像を認識している。

（厄介なっ！）

声に出さず、達也は毒づいた。

知識として知っているのと、実際に体験してみるのとでは、やはり勝手が違う。

パレードの術式が作り出す情報体に記述されている要素は「色」、「形」、「音」、「熱」、そして「位置」。

八雲の幻術「纏衣」と同じだ。

本体とそっくり同じ色と形と音と熱を本体からずれた位置に映し出す「纏衣」に対して、リーナの「パレード」は本体と異なる色、異なる形を映し出すことに重点が置かれていた。

しかし、位置を偽装する機能が省かれているわけではない。

今、リーナは色と形の偽装に回していた演算力を位置の偽装に振り分け、達也に自分の本体の座標を掴ませないようにしている。

そして座標を特定できなければ、魔法を掛けることはできない。

視覚情報を基にして座標を特定した魔法が、相手を見失うことで無効化してしまうのと同じだ。

単なる幻影と違うのは、情報の次元における座標すらも偽装してしまっているという点にある。

魔法を掛けるためには、対象物のエイドスに魔法式を投射しなければならない。

例えばコンピュータにおいて、ファイルを操作するには、ファイルが格納されているディレクトリのパスを指定して実行コマンドに乗せなければならないが、毎回パスを確認するのは手間なのでショートカットが多用される。

ショートカットを本体の無いダミーファイルにパスを繋げた偽物にすり替えられると、いつもと同じ手順を踏んでもファイル操作は実行されずエラーになる。

魔法の発動プロセスにこれを当てはめると、多くの場合、視覚情報がショートカットアイコンになり、そこに聴覚情報や感熱触覚情報が組み合わせられたりする。視覚情報を幻影で狂わされるとその

ままでは魔法は発動しなくなるが、本体と幻影が重なり合っている場合は、座標の情報から本体のエイドスにたどり着くことが出来る場合がほとんどだ。この場合、発動に遅延は生ずるものの、魔法はちゃんと作用する。

幻影が本体と別の場所に投射されていても、幻影と本体の関連付けをキーとして本体のエイドスを探し出すことは、これまた可能。

しかし座標が偽装され情報の次元に本体のダミーが用意されているとなると、五感の情報をショートカットとして放たれた魔法式は、ダミーの方に作用して、その結果「何も起こらない」ということになってしまう。

これが対抗魔法「パレード」のシステム。

故に「パレード」を破る為には、

幻影を破壊し、新たな幻影が形成される前に本体を見つけ出して攻撃するか、

五感に頼らず情報（イデア）の次元における本体の座標を割り出して攻撃するか。

前者は今のところ上手く行っていない。

ただでさえリーナは、魔法の発動が速い。発動速度は、深雪を凌駕するほどだ。

その彼女が、この魔法は特に練習しているのだろう。再発動のスピードが化け物じみている。（彼女がシリウスなら、化け物じみているのはこの魔法のスピードだけではないだろうが）

後者の方法も、達也には可能だ。

だが、物理的な攻撃を受けながら、知覚の大部分を物質の次元から情報の次元に移すのは、一種の賭けと言える。

（――仕方ない）

五本目のダガーをかわしたところで（一体何本隠し持っているのだろうか？）、達也は決意した。

新たな幻影が形成される前に本体を見つけ出して攻撃するのでもなく、
情報の次元で直接相手のエイドスを探し出すのでもない、
第三の方法を。
彼は上着のポケットから片手に収まるサイズの円筒形の缶を取り出した。
それを軽く放り投げる。
それを見たリーナから、激しい動揺が伝わって来た。
「ジ」
ジーザス、とでも言いたかったのだろうか。しかしリーナのその台詞は、最後まで聞こえなかった。
（定率減速）
物体の運動速度を一定割合で減速する領域魔法をフラッシュ・キャストで発動する。
仮想魔法領域が作り出す弱い障壁では、投擲榴散弾（散弾を撒き散らす手榴弾）を完全に無力化することは不可能だ。速度をゼロにする停止魔法では、散弾の運動エネルギーに負けて事象改変に失敗してしまう可能性があった。
それ故の定率減速。
それでも、百分の一とか千分の一とか、そういう大規模な改変は手に余る。
自分で用意した武器のスペックと、仮想魔法領域の干渉力を天秤に掛けて、確実に魔法が成功するギリギリのレベルで魔法を放つ。
定率減速で、弾体を止めることは出来ない。固（もと）より、そういう魔法ではないのだ。
半身になって片膝をついた肩に、脇腹に、太腿に、頭部をかばった腕に、細かな散弾が襲い掛かる。
簡易防弾機能を持たせた人工皮革の布地を貫通した物はほとんど無かったが、それでも脚と腕に十個以上は浅く喰い込んでいる。
（自己修復強制停止）

自動的に作動しようとした自己修復を意志の力で止め、達也は咄嗟に障壁を展開して榴散弾を完全に防いだリーナ目掛けて飛び掛った。

リーナが新たに形成しようとした対物障壁は分解魔法で無効化する。完全に不意を衝かれて、流石のリーナもそれ以上の抵抗は出来なかった。

「……無茶をするわね、タツヤ」

地面に仰向けに押し倒されたリーナと、その上に圧し掛かる達也。組み伏せられた下から、呆れ声で話しかけられた。

仮面に隠れていない唇が笑みを浮かべて余裕を示していたが、虚勢と見抜くのは難しくなかった。

「何処にいるか分からないなら、指向性の無い攻撃で炙り出すのが定石だろ？」

「それ、無差別攻撃って言うのよ」

「そうも言うかな。

残念なことに、俺には広域魔法を操る技量が無いからね。

まあ、リーナなら間違いなく防御できると確信していたから、ということで勘弁してくれ」

「それで自分が怪我してたら、元も子もないと思うけど」

「こうでもしなきゃ、君を捕まえられなかったからね」

「ワタシを捕まえたかったの？

愛を囁くならもっとロマンチックに迫って欲しいんだけど」

仮面の奥の蒼い瞳を覗き込んで、達也はニヤッと笑った。

リーナの両手を頭の上で重ねさせて、開いた掌を片手で押さえつける。

空いた手を仮面に近づけると、リーナの肩がビクッと震えた。

厚手の手袋に包まれた左手の指が動きかけたが、達也はそれを、力を掛けて押し開いた。

「……痛いわ、タツヤ」

「生憎、そのＣＡＤのカラクリは知っているんだよ。

さて……」

達也の手が、マスクに掛かる。

リーナが目を閉じて、顔を背けた。

正体はとうに割れているというのに、素顔を曝すのが嫌なのだろうか。

理解できない心理だったが、服を剥ぎ取ろうというのではないのだから、達也に止める理由は無い。

「アクティベイト　『ダンシング・ブレイズ』！」

彼の手がマスクに触れたと同時に、顔を背けていたリーナが叫んだ。

（音声認識の武装デバイスか……起動式ではなく遅延発動術式をアクティブ化するデバイスとは面白い）

高速で殺到するダガーを感知しながら、達也は心の中でそう独り言ちた。

投擲した五本のダガーがリーナの声に呼び戻され、達也へ襲い掛かる。

二本はマスクに伸びる右腕、一本は右肩、一本は左腕、一本は脚。

全て、急所を外している。

そういえばさっきから、リーナの攻撃は全て無力化の為のものであり、殺害する為のものではなかった……

そんな事を考えている時には既に、ダガーは彼の身体に届いていた。

そして彼の身体に（正確には服に）触れた途端、細かな砂と化して飛び散った。

「腐食……いえ、分解……？」

逸らしていた目を達也に向け、呆然とリーナが呟く。

それに構わず、達也は仮面を剥がしにかかった。

リーナは激しく顔を振って抵抗するが、達也の手は振り解けない。

「後悔するわよ、タツヤ！」

「捕獲に成功したはずのターゲットに逃げられた時点で、たっぷり

後悔しているよ」

リーナとどたばたやっている間に、仮称・吸血鬼にはまんまと逃げられてしまっている。保険は掛けてあるにしても、徒労感は否めない。

彼女も吸血鬼を追いかけていたはずなのに、その相手の逃亡を手助けするとはどういうつもりだ、という思いが達也にはあった。

潤んだ瞳で睨みつけられても、必死な声で警告されても、達也が躊躇を感じる理由にはならない。

耳に被さるレシーバーの留め金を左右順番に外す。やはりこの仮面は、情報端末を兼ねた物だったようだ。

意外に固い材質のマスクをそっと取り去る。

美少女には慣れている達也でさえ、ため息が漏れそうになる美貌が露わになった。

リーナが唇を噛み締めて、達也をキッと睨みつける。

次の瞬間、その唇から絹を引き裂く悲鳴が放たれた。

唐突すぎる展開に、達也の目が点になる。

リーナの両手を拘束する腕の力を緩めなかったのは、性格の悪い風間の部下に散々仕込まれた成果だった。

「誰か、誰か助けてっ！」

まさしく強姦魔から助けを求める少女の叫び。

迫真の演技を白けた目で見詰める強姦魔、ではなく達也。

その時まるで、リーナの悲鳴を合図として待っていたかのように、駆けつけて来る足音が聞こえた。

紺色の制服の上に白い反射塗料でラインを入れた紺色の防弾チョッキをつけた人影が、四方から一人ずつの計四人、近づいてくる。

制帽の正面に輝く徽章は、桜の代紋。

達也はリーナの左腕を掴んで引きずり起こしながら、その左手から強引に手袋を剥ぎ取った。コードがブツブツと千切れる感触と共に、リーナの白い手が露わになる。

「両手を挙げて後ろを向け！」

正面から駆け寄ってきた警官――の姿をした男が、拳銃を突きつけながら叫ぶ。
達也はリーナの後ろに回り、そのまま男へ向けて突き飛ばした。
悲鳴を上げて男の胸に飛び込むリーナ。
彼女を抱きとめた制服の男。
達也はリーナの頭上を跳び越し、その男の肩に着地した。
サッカーボールを蹴り飛ばすようなキックで男の顔を打ち抜く。
声も無く後方へ倒れる男の肩を蹴って、達也は偽警官の包囲網から抜け出した。
「……本物の警官だったらどうするつもりよ」
信じられない、という口調でリーナが問う。
しかし、
「そろそろ茶番は止めてもらいたい、アンジー・シリウス」
達也の返答に、空気が音を立てて固まった。
「君に協力している以上、本物であろうと偽者であろうと同じこと。百年前ならいざ知らず、現代のこの国の刑法において、外患誘致罪は武力行使が実現しなくても成立する。
警官の扮装程度で怖気づくと思っているなら大間違いだ。
我々日本の魔法師の覚悟を甘く見ないで貰おうか」
蹴り倒された一人を除く三人の偽警官が、リーナの顔を、彼らの総隊長、アンジェリーナ・シリウスの表情を窺っている。
リーナは一つため息をつくと、膝を軽く折って丁寧に一礼した。
「これは失礼を致しました。
確かに見くびっていましたね。聞くと見るとでは大違いです。
同じ魔法師として、謝罪します」
そして、足を揃え背筋をピンと伸ばし、右手を額の横に持って行く。
軍帽は無くとも、誤解の余地無き、軍人の敬礼。
さっきは一人の魔法師として、ここからはＵＳＮＡ軍魔法師部隊の総隊長として。

そういう意思表示なのだろう、と達也は理解した。
「ワタシはＵＳＮＡ軍魔法師部隊・スターズ総隊長、アンジェリーナ・シリウス少佐。
アンジー・シリウスというのは先程の変装時に使う名前なので、今まで通りリーナと呼んでください。
さて」
それまで礼儀という名のオブラートで包み隠されていた殺意が、剥き出しになって達也に襲い掛かった。
「ワタシの素顔と正体を知った以上、タツヤ、スターズは貴方を抹殺しなければなりません。
仮面のままであれば幾らでも誤魔化しようはあったのに、残念です」
「後悔する、というのは、そういう意味か」
達也は吹き付ける殺意の中、不敵に笑って見せた。
「せめて騙されて捕まってくれれば、殺さずに済ますことも出来たのですが」
「それは悪かったな。折角の心遣いを無にしてしまったということか」
「いえ、貴方を抹殺するというのは、ワタシたちの身勝手な都合によるものですから、謝る必要はありません。
抵抗しても良いですよ」
偽警官の一人から渡された、コンバットナイフを右手に、中型拳銃を左手に。
刀剣形態武装デバイスと、拳銃形態特化型ＣＡＤ。
達也も懐からＣＡＤを抜いた。
「本当に残念ですよ、タツヤ。
貴方のことは、けっこう気に入っていたんですけどね」
左手を伸ばし、ＣＡＤを達也に向けるリーナ。
右手を伸ばし、ＣＡＤをリーナに向ける達也。
達也の左右と後ろを、リーナの部下が取り囲む。

「……さようなら、タツヤ」
「そんなことはさせないわよ、リーナ！」
その時突然、凛とした声が真冬の凍てつく空気を震わせた。
蒼穹の瞳に驚愕を浮かべ、声のした方へ振り向くリーナ。
隙を曝した上官を庇う為か、リーナの部下は三方から同時に達也へ襲い掛かった。
大振りのコンバットナイフで達也に斬りつける。
その刃の延長線上に形成された、「分子ディバイダー」の仮想領域。
達也がＣＡＤの引き金を引く。
分子間結合力を反転させる仮想領域が、術者の意思に反して消え失せる。
単なる刃と化したコンバットナイフをかい潜り、達也は包囲網を脱した。
彼とすれ違ったリーナの部下が、腹を抑えて転がった。
その手の隙間から、血がどくどくと流れ出している。
血に塗れた左手を一振り。
血飛沫が偽警官に向けて飛ぶ。
一人の足が止まり、一人がそのまま突っ込んでくる。
達也の右手はリーナに向いていた。
リーナの左手は、彼女の邪魔を宣言した相手――深雪に向いていた。
リーナの展開した起動式が、達也の「術式解散」に砕け散る。
達也に襲い掛かる男の前に、踏み込む者を全て凍り付かせる冷気の壁が立ちはだかった。
急停止する男の足。
その背後に忍び寄る影。
声も無く、男が昏倒する。
残る一人は、既に地に伏していた。

◇◆◇◆◇◆◇

「いやぁ、達也くん、危ないところだったね」
スターズの隊員二人を一瞬で無力化した八雲が、いつも通りの飄々とした顔で近づいてくる。
その姿に、ここまで「いつも通り」を保つことは出来ないな、と達也は己の未熟を実感した。
「白々しいですよ、師匠。隠れて出番を待っていたくせに」
感心したままでは癪だったので、皮肉の一つも投げてみる。
その台詞に、リーナが目を剥いた。
今、彼女の前にはＣＡＤを構えた臨戦態勢の深雪。
達也の右手は、真っ直ぐリーナに向いたまま。
八雲の視線は達也に向けられているが、その視界の中にしっかりとリーナの姿を納めている。
今や包囲されているのは、リーナの方だった。
「まあ良いじゃないか。君も色々と訊きたいことがあったみたいだし」
「えっ、そうだったのですか、お兄様？」
狼狽した表情で深雪が振り向いた。
リーナから目を離す格好となってしまったが、達也と八雲が同時に圧力を高めた為、リーナは身動きできなかった。
深雪もすぐ自分の失態に気づいたのか、慌ててリーナに視線を戻した。
「情報を引き出す為にわざと囲ませていらしたのですね……そんなお考えとは露知らず、出しゃばった真似をしてしまいました。
お許し下さい、お兄様」
目をリーナに向けたまま、申し訳なさ一杯の声で達也に許しを請う。
「いや、危なかったのは確かなんだから、お前の判断は間違っていないよ。

だから謝る必要は無い。寧ろお礼を言わなきゃな。
深雪、ありがとう」
「お兄様……もったいないお言葉です……」
ポーッとのぼせた表情で深雪が呟く。
まあ、深雪が達也に謝罪してこういう展開になるのはお約束みたいなもの、あるいは一種の儀式か、様式美。
それでもリーナから目を逸らしていないところを見ると、辛うじて最低限の理性は残しているようだ。
「それに、訊きたいことは、これから訊けば良いだけだしな」
それは深雪に向けた言葉であると同時に、リーナに聞かせる為の台詞でもあった。
一音一音区切るようにハッキリ発音された口調から、達也の言葉が自分にも向けられていることを、リーナは理解させられた。
「……力づくで訊問するつもり？」
「訊問というのは大概、力づくなものだと思うが？」
歯軋りの伴奏でも付いていそうな声で問うリーナに、達也は間接的な肯定を返した。
「一対三なんてずるいじゃない！　アンフェアよ！」
「アンフェアって……貴女たち、最初、何人でお兄様を取り囲んでいたのよ」
口惜しさ全開の非難に、深雪が呆気に取られた声でツッコんだ。
「まあ、そう言うな」
呆れが怒りに変化する前に、達也が妹を宥める。
“フェア”という言葉は自分が有利な立場にある時に有利な条件を維持する為に使われる建前、“アンフェア”という言葉は自分が不利な状況にある時に相手から譲歩を引き出す方便だ。
腕力で勝てそうに無いなら口先で争いを回避するというのは、戦術的に間違っていない。
本気にしたら負けだよ、深雪」
「なるほど、そういうものなのですね」

余りに身も蓋もない内容だったが、少なくとも深雪を落ち着かせる効果はあったようだ。
「建前ですってっ？　方便ですってっ？」
同時に、リーナを沸騰させる効果もあったようだが。
ちなみに、八雲は声を押し殺して笑っている。
「本音と建前を使い分けて恥じない貴方たち日本人に言われたくないわ！」
「君だって四分の一は日本人じゃないか」
「……っ」
「君が使っていた『パレード』は日本で開発された術式で、君が『パレード』を使えるのは九島の血を、つまり日本人の血を引いているからだろ？
それにダブルスタンダードはホワイト・エスタブリッシュメントのお家芸、本音と建前を使い分けない民族なんて聞いたことが無いな」
白い肌を真っ赤に染めて達也を無言で睨みつけるリーナ。
だが「睨みつける」の前に「無言で」がセットになっている辺り、グウの音も出ない、といったところか。
そんなリーナの視線を（意地の悪い）笑顔で受け止めている内に、殺伐とした空気がすっかり薄れてしまったことに気づいて、達也は苦笑を漏らした。
「……何が可笑しいの？」
「お約束のセリフをありがとう。
いや、このまま訊問したところで、リーナは意固地になって口を割らないだろうと思ってね」
「そこはせめて『意地』と言って！」
意固地と意地の違いが分かるとは、本当に日本語が堪能だな、と達也は感心した。――実にどうでもいいことだが。
「そろそろ他のグループも駆けつけてきそうだし……」
「チョッと！　ワタシの言ってること、聞いてるっ？」

どうでもいいことはスルーが一番だ。
「リーナ、“フェア”に取引と行こう。
一対三がずるいというなら、一対一で勝負しようじゃないか。
君が勝ったら今日のところは見逃すことにする。
その代わり、俺が勝ったら訊かれた事に正直に答える。
これでどうだ？」
リーナが勝っても彼女の正体は知られたまま、達也が勝てば何もかも全て喋らなければならない。
勝負それ自体は一対一でも、その結果は少しも釣り合っていない取引だった。
「……いいわ」「待って下さい！」
リーナが苦慮した挙句に条件を呑むのと、深雪が異議の言葉を挿んだのは同時だった。
達也とリーナの目が、深雪に向く。
深雪は怯んだ色も無く、ハッキリした口調で言葉を継いだ。
「お兄様、リーナとの勝負は、わたしにお任せくださいませんか」
「ミユキ、貴女、何を……」
「リーナ、覚えておきなさい。
わたしは、お兄様を傷つけようとする者を、決して許さない。
わたしは貴女のことをライバルで友人だと思っているけれど、貴女がお兄様を殺そうとしたことは、例えそれが口先だけのものだったとしても、断じて許せることではないわ。
貴女には、わたしの手で、その罪を思い知らせてあげる」
深雪の瞳は、百パーセント本気の光を宿していた。
その深過ぎる執着を、リーナは笑って誤魔化そうとしたが、引き攣った笑いにしかならなかった。
「安心なさい。
殺しはしないから」
それは、自分の勝利を確信した宣言だった。
「フーン……ミユキ、貴女、ワタシに勝てると思ってるの？

シリウスの名を与えられた、このワタシに！」
それを聞いて、リーナの胸に負けん気の炎が燃え上がった。
睨み合う、二人の美姫。
「分かった。深雪、お前に任せる。
リーナも、それで良いな？」
「ありがとうございます、お兄様」
「承知よ。
もしワタシが負けたら、何でも話してあげる。
そんなことはあり得ないけどね！」
合意は成った。
今、二人の類稀な美少女による、華麗なる決闘の幕が切って落とされようとしていた。

5－（10）　華麗なる決闘（前）（後書き）

9月10日、フラッシュキャストのシーンを改訂。
描写の辻褄が合っていない気がしましたので、大幅に書き換えました。

5－（11）　華麗なる決闘（後）（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

5－（11）　華麗なる決闘（後）

深雪が冷却魔法、凍結魔法を得意としているのは自他共に認めるところ。

しかしその本質は振動停止であり運動停止であって、雪の精霊とか氷の魔物とかを使役している訳ではない。当然、少年少女向けファンタジーにありがちな設定のように、精霊の加護を受けているから寒さを感じない、などということは無い。

つまり、何が言いたいのかというと。

寒いものは寒いのである。

この真冬の夜中にバイクのタンデムシートに乗っていて、寒くないはずはないのだ。

だから――

（くっついてもおかしくないわよね……寒いんだから）

達也の腰にギュッとしがみつき、頬を背中に押し当て、隙間が無いほど胸を密着させて、深雪は心の中で呪文のように言い訳を繰り返していた。

――今更言い訳が必要なのか？　というツッコミは禁句とさせていただく。

八雲はすぐ後ろを追いかけてくる一つ目のヘッドライトをチラッと振り返り見て、誰が見ても「人が悪い」と評するだろう笑みを浮かべた。

彼の位置からは達也の影になってタンデムシートの深雪の姿は全く見えないのだが、どういう姿勢でどういう状態でどういう表情でいるのか、手に取るように分かる。彼ら兄妹の互いに向ける感情は、八雲にとって実に興味深いものだった。

唇を吊り上げた直後、八雲は隣から緊張の高まりを感じた。

どうやら彼の笑みを変な方向に誤解したようだ。
「そんなに気を張る必要はないよ。
さっきの約束を守ってもらえれば、君に危害を加えるつもりは無いから」
「……今のワタシの立場で、それを信じろと言うんですか」
視線を正面に固定したまま、リーナが硬い声を返した。いや、「硬い」というより「強張った」と言うべきか。
「そう感じるのも無理はないだろうねぇ」
八雲と彼の弟子に挟まれてモーターセダンの後部座席に深く腰掛けた姿は、彼女の立場を知る者が見れば護送に他ならないだろう。
両隣に座る男の実力を思い知らされたばかりのリーナにとっては、尚更その感が強かった。
一瞬でスターズの精鋭二人を昏倒させた八雲。
彼女たちに一切、勘付かせることなく、いつの間にか背後に立っていた黒装束の――忍者。
ハンドルを握る男も、その背中に全く隙が無い。
三対一でも倒せない相手とは思わないが、無傷で切り抜ける自信もリーナには無かった。
「だけど信じてもらって大丈夫だよ」
彼女の緊張を感じ取っているだろうに、それが敵意と警戒に由来することも察しているだろうに、八雲の口調は至極ノンビリしたものだ。
リーナにとっては、それが余計に、不気味だった。
「君と達也くんの間にある対立に興味は無い。
僕に興味があるのは、秘伝を正しく伝えることだけだ。
だからさっき言ったとおり、僕が君に求めるのは、九島に伝えられた術を他に明かさないことだけだよ。
伝えられる資格の無い者に伝わるのは、正しく伝えたことにならないからね」
「……国益にも興味は無いと？」

「無いよ」
「世界の平和にも？　人類社会の未来にも？」
「興味無いね。僕は世捨て人だから」
「魔法師でしょう、貴方も！」
八雲の言っていることは、リーナの価値観からすればあり得ないことで、あってはならないことだった。
だから余計に、信じられなかった。
「僕は『忍び』だ。
魔法師ではないよ」
そんな彼女に、八雲は穏やかな声で返事をする。
断固とした、否定の回答を。
「……忍術使いだって魔法師の一種でしょう？」
「魔法が使えるからといって、魔法師にならなきゃいけないという訳じゃないよ」
言葉の意味は分かる。
理解できる。
だが、八雲の言っていることが、リーナには納得できなかった。
「魔法師になったからといって、国家に奉仕する義務が自動的に発生する訳でもないのと同じさ」
納得できなかったが、反論することも何故か、できなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

リーナを乗せたセダンは、何処かの河川敷で停車した。
何処か、というのはリーナに土地勘が無いからで、走った時間から考えれば都内か、その隣接県のはずだが、メガロポリス東京の近郊でこんな場所があるのかとリーナは驚いていた。
灯りが全く見えない。
セダンがヘッドライトを消し、後続のバイクもライトを消すと、真っ暗と言って良いステージが出現した。

月は無く、星明りだけが頼りの暗闇を、達也と深雪が歩み寄って来る。

ふと、リーナは言い知れぬ不安に襲われた。

ＣＡＤは取り上げられていないが、発信機と通信端末は彼女の手許に無い。ボディチェックもされていないのに所持品の全てを言い当てられて、大人しく引き渡す以外に無かった。

後で返す、とは言われているが、今現在、彼女には自分の居場所を知らせる手段が無い。

監視衛星が自分の居場所をフォローしているはずだが、彼女をこの場に運んで来たのは幻影魔法に定評がある忍術使いのチームだ。軍事用監視衛星の高解像度カメラを欺くことも、可能かもしれない。

もしかしたら自分はこのまま、何処とも知れない場所に監禁されるか、最悪、暗殺される可能性もあるのではないか……

リーナは懐のＣＡＤを、服の上からギュッと握った。

もしもの時は、切り札を使ってでも……

「何を考えているのか大体見当はつくけど、約束は守るから安心してくれ」

声を上げないのが精一杯だった。

急に話し掛けられて、ビクッ、と身体が震えるのは抑えられなかった。

星明りでも何とか表情の判別が付く距離まで近づいていた達也が、噴き出すのを堪えて、堪えきれず、声に出さずに笑っていた。

「事情を聞かせてもらうだけだ。

訊きたいことを聞いたら、駅まで送っていくよ」

相手にしてみれば、とても、癪に障る笑顔だった。

「話してあげるのはワタシに勝てたらよ」

自然、リーナの声が尖る。

「無論だ。それも含めて、約束は守る」

小揺るぎもしない鉄面皮にますます苛立ちが募ったが、ここで逆上してはドツボにはまるだけだとリーナにも分かっている。

グッと奥歯を噛み締めて、鋭い視線を達也の背後に向けた。
闘志の漲る瞳が、リーナを見返している。
深雪も既に、ヤル気満々だった。
「さてと……リーナは不満かもしれんが、審判は師匠に務めてもらう。審判といっても勝ち負けの判定をするだけで、勝負を仕切ったり途中で手出ししたりはしないけどな」
「ここにいるのは敵ばっかりだと最初から分かっているから、不満なんて無いわ」
「潔くて結構だ」
憎まれ口も、サラッと流す。
フラストレーションが昂じ過ぎて、急に気持ちが落ち着いた、ようにリーナは感じた。
「じゃあ、不肖ながらこの九重八雲が、審判役を務めさせてもらうよ。
勝敗の条件は、どちらかが降参するか、戦闘不能になること。
殺すのは無しだよ。遺恨を残してしまうからね」
「わかりました。それで十分です」
「その前に終わらせるわ」
静かに頷く深雪と、威勢よく了承の意を示すリーナ。
その態度は対照的ながらも、自分の勝ちを疑っていない点は共通していた。
まさに、一触即発。
「では、始めようか」
「師匠、少し待って下さい」
だが、そこにあえて水を差す、空気の読めない男がいた。
八雲とリーナから向けられる白けた眼差しを百パーセント無視して、達也は妹の許へ歩み寄った。
深雪の正面、二歩の位置に来て、
まだ、足を止めない。
「あの、お兄様？」

兄の意図が読めず戸惑う深雪に答えを返さず、
正面、あと一歩。
依然として足を止めない。
そして達也は、手を伸ばせば深雪を抱き寄せられる距離で足を止めて、
――深雪を抱き寄せた。
「あああのあのあの」
腰に深く手を回され、赤面を通り越してパニックに陥る深雪。
さっきまで自分の方から抱きついていたくせに、というのは多分、第三者の感想で、本人にとっては自分から抱きつくのと突然抱き寄せられるのとは全くの別物なのだろう。
もう一方の手が、頭の後ろに添えられた。
最早、深雪は、声を出すこともできない。
妹の髪に指を潜り込ませ、
抵抗を忘れた顔を口元に引き寄せて、
達也は、深雪の額に、キスをした。
彼が抱擁を解くと、目を見開いた深雪の顔が現れた。
そこに恥じらいは無く、ただ驚きだけがあった。
「これは……どうして……」
「この前見せてもらって、不完全ながらも遣り方を覚えた。
一時的な効果しかないが、制御力を返す。
思う存分やりなさい」
「……はい！」

◇◆◇◆◇◆◇

「お待たせしました、師匠」
達也が声を掛けた八雲の隣では、リーナが食べ過ぎて胸焼けを起こしているような顔をしていた。
「リーナも待たせたな……調子が悪いなら、少し時間を置いても良いが？」
「張本人が何言ってるのよ……いえ、結構です」
すっ呆けている（とリーナには見えている）達也に精一杯の嫌味な声で返答して、リーナは深雪に向き直った。
深雪は達也の後ろについて来て、いない。
近接戦闘をするつもりは無いようだった。
これまでの観察結果と照らし合わせて、彼女は体術を得意としない典型的な魔法師なのだろう、とリーナは判断した。
叛逆魔法師の処刑人である「シリウス」にとっては、最も与し易いタイプだ。
（一撃で終わらせる！）
まだ開始の合図は無いが、そんなものを待つつもりはリーナには無かった。
合図をしてから、などという取り決めはしていない。
自己加速で間合いを詰めて、情報強化で相手の魔法を無効化して、格闘術で無力化する。
深雪の敗北に達也たちが気を取られている間に、高速移動の魔法でこの場を逃げ延びる。
それがリーナのプランだった。
だが――
「っ！」
声にならない悲鳴をリーナは漏らした。
彼女が魔法を行使するより一瞬早く、霰混（あられ）じりの突風が襲い掛かって来たのだ。
咄嗟に大きく横に跳び、細く絞り込まれた冷気の奔流を回避する。
顔を上げると、今度は横殴りにブリザードが吹き付けてくる。

空気の密度を操作して、真空の壁を盾とすることで、リーナは何とかこの攻撃をしのいだ。
「この程度では通用しないか」
独り言が夜の風に乗って流れて来る。
リーナはギリッと奥歯を噛み締めた。
魔法の発動速度なら、リーナは深雪に勝っている。
それなのに先手を取られたということは、深雪の方が先に仕掛けたということ。
しかも今のニ連発は、威力を落として速度を優先した術式だった。
二重の意味で、リーナは屈辱を感じた。
相手の甘さを衝くつもりが、逆に油断を衝かれた。
威力を落とした攻撃でも倒せると思われて、事実、危うくやられるところだった。
（だけど今度はコッチの番よ！）
一拍、間が空いたのは、威力を上げた術式で確実に仕留める為だろう。
だけどそれが命取りだ、とリーナは思った。
そう思いながら、情報強化と自己加速の魔法を並列実行する。
重力と慣性の同時低減を織り込んだ自己加速術式で深雪の側面へ突進するリーナ。
彼女の右手は、ジャケットから毟り取った飾りボタンが握り込まれている。
拳銃は取り上げられていたが、ハイスクールの少女を無力化するだけならこれで十分だ。
そして残り五メートルまで接近したところで、直感の命令に従いリーナは急停止した。
突如吹き荒れた身体を引っ張る強風に逆らい、足を踏みしめる。
自分自身に静止の魔法を掛けて引きずり込む力に対抗する。
その位置で、手に握るボタンに移動魔法を多重発動。
加速の過程を無視して時速3百キロの速度を与えられたボタンは、

一メートルも進まずに失速して地に落ちた。

目にも留まらぬ速さで突進してくるリーナを、深雪の感覚は捉えていた。

達也の様に情報の次元から直接データを引き出すことは出来なくとも、魔法による事象改変の痕跡を知覚することは出来る。それは魔法師ならレベルの差はあれ誰にでも出来ることで、魔法師に出来ることなら深雪には最高レベルで実践可能だ。

自己加速魔法は自分自身に対して事象改変を行う魔法。

従って事象改変の痕跡をリアルタイムに追うことで、術者の位置を掴むことができる。自己加速魔法の欠陥を衝くその技術を、深雪は達也から教えられていた。

ここまでは作戦通り。

わざわざ「この程度では通用しないか」、なんて思わせぶりな独り言で挑発した甲斐が有ったというもの。

本命は、次の、この魔法だ。

（「減速領域（ディーセラレイション・ゾーン）」）

術式自体は割とありふれたもの。

日本でも外国でも広く使われている、対象領域内の物体の運動を減速する魔法。

だが深雪がこの魔法を使ったならば、減速対象は気体分子に及ぶ。

気体分子の運動速度と気体の圧力は正比例の関係にある。

正確に言えば（と言っても近似的にだが）閉鎖空間内の気体の圧力は気体分子の運動速度の二乗に比例する。

分子運動を強制減速された領域内の気圧は下がり、圧力勾配に従って周囲の空間から空気を取り込む。

急速に、強力に。

空気だけでなく、人も物も巻き込んで。

そして吸い込まれた者が魔法に打ち消すだけの対抗力を持たなければ、運動速度を奪われ領域内に囚われる。

吸い込まれた者が減速領域の魔法を無効化する程の対抗力を持つならば、強制減速させられていた気体分子が運動速度を取り戻し、分子の量に相応しい圧力で膨張、つまり爆発する。

本来、弾体を停止させるだけの魔法力がない場合に、次善の手段として飛び道具の威力を減じる機能しか持たないこの魔法が、深雪の強大な魔法力に掛かれば二段構えの対魔法師用の対人魔法となるのだ。

しかしリーナは、気流の吸引力に逆らって踏み止まって見せた。

移動魔法で撃ち出したのは、飾りボタンだろうか。

初速を与えられただけの樹脂の塊が深雪の減速領域を突破できるはずもないが、この粗末な飛び道具を撃ち落としたことにより、彼女がどんな魔法を行使しているのか、リーナに覚られてしまったに違いなかった。

（だったら！）

攻め手は常に二手、三手先まで用意しておけ、とは日頃から達也に繰り返し言い聞かせられている言葉だ。

減速領域に引き込んで仕留める作戦が失敗したなら、領域の外で仕留めるまでのこと！

深雪は二重に構築した内側の障壁を維持したまま、外側の領域を解除した。

偽りの低速を強いられていた気体分子が、本来の運動速度を取り戻す。

狭い領域に押し込められていた空気がその圧力を解放し、爆風となってリーナに襲い掛かる。

大規模な事象改変の気配が突然消失した。

リーナは訓練と本能に従って、地面に伏せ、対物障壁を自分の上に被せた。

シールドの上を爆風が吹き荒れる。

高速気流による揚力でシールドごと身体を持って行かれそうにな

るのを慣性増大魔法の多重発動で何とか持ちこたえ、腹這い姿勢のまま顔を上げて反撃の機を窺う――否、隙を窺う。

ノンビリと（？）機会を待つつもりなど、リーナには無かった。

ここまで、悉く深雪に先手を取られている。

相手はただの高校生で、自分は世界最強部隊の総隊長。

そんなプライドも無論あったが、それ以上に、このままではジリ貧だという認識がリーナの精神を圧迫していた。

とにかく、少しでも反撃しなければ、押し切られてしまう。

余程強固な防御魔法を持っている場合は例外として、魔法戦においても、守るより攻める方が強い。それがセオリーだ。

風圧が弱まったのをリーナは感じた。

魔法の解除により発生した爆風だから、圧縮状態の空気が全て解放されれば風は止むのが道理。

リーナの右手にはコンバットナイフが握られている。

拳銃は没収されたが、「分子ディバイダー」発動用のこのナイフは取り上げられなかった。

先代のシリウスが開発し、スターズの切り札となっている魔法用の、武装デバイス。

仮想領域を伸展することにより成立するこの魔法は、相手魔法師を凌駕する干渉力が必要だ。

それも、ギリギリ勝っている程度ではダメで、ワンランク上でなければならない。

だが少なくとも、

（ミユキの注意を引き付けることくらい出来るはず！）

伏せたまま左手で、深雪に見えないようダガーをばら撒く。

慣性増大を解除。

自分に可能な全速で身体を起こし、

（「分子ディバイダー」）

片膝立ちで、右手のナイフを横薙ぎに振り抜く。

仮想領域が伸びるのと、ほとんど同時。

今までに経験したことの無い、圧倒的な干渉力が自分と深雪の間に放たれたのをリーナは感じた。
形成されつつあった仮想領域が、空間を圧する干渉力に塗り潰される。
防がれるのは分かっていたことだ。
計算通り、と言っても良い。
「ダンシング・ブレイズ！」
分子ディバイダーが無効化されるのを確認する前に、リーナは次の魔法を放った。
コッソリとばら撒いたダガーが浮き上がり、目にも留まらぬスピードで飛び去った。
地面すれすれで弧を描き、深雪に支配された空間を回避。
（この暗闇の中、側面と背後から同時に襲い掛かる四本の刃、防げるものなら防いでみなさい！）
魔法を帯びた物体が高速で迫って来るのを感じて、深雪は発動途中の攻撃用術式をキャンセルし、全周防御用の魔法に切替えた。
対象を個々に認識して防御するより格段に難度の高い、方向性を指定して防御する障壁魔法より更に難度の高い全方位無差別防御魔法だが、今の深雪なら問題なく使用できる。
リーナの――シリウスの魔法力が注ぎ込まれた攻撃でも、止められる。
しかしいつもの、制御力を達也の封印に割いた状態では、この攻撃を防ぐのは難しかっただろう。
いや、そもそもこんな緻密な術式のコントロールは、出来なかったかもしれない。
自分だけでリーナに勝負を挑んでいたら、自分は負けていた……
そう考えて、深雪は心の中で感謝の祈りを捧げた。
（お兄様が見ていてくださるから……わたしは負けない。負けられない！）

技巧と工夫を凝らした奇襲攻撃が力ずくで潰されたのを見て、リーナの心に戦慄と闘志が同時に湧き上がった。
そして突如脳裏に蘇る、先程見せられた、胸焼けのする甘ったるい光景。
戦いを舐めているとしか思えない振る舞い。
だがあの時、確かに、達也が深雪に何事かを囁いていた。
考えてみれば「ダンシング・ブレイズ」は既に、達也によって破られた術だ。
達也は同時に襲い掛かる五本のダガーを、同時に分解して見せた。
彼女の知る分子間力中和の術式ではなかったが、結果から見て何らかの方法で分子結合を解いたのだろう。
だが重要なのは、その点ではない。
同時に複数の方向から襲い掛かる飛翔体に対し、同時に対処したという点だ。
自分の攻撃を防いだのは、深雪だけの力ではない、とリーナは思った。
(そう……手は出さないけど口は出す、ってことね。上等じゃない!)

深雪は思った。
絶対に負けられない、と。

リーナは思った。
全力で叩き潰す、と。

そして二人は、同時に叫んだ。

「ミユキ!」「リーナ!」
「勝負よ!」

◇◆◇◆◇◆◇

空間が凍りついた。
空間が沸騰した。
二人の魔法力が世界を塗り替え、二つの世界が激突した。
晶光煌く、氷雪の世界。
電光瞬く、炎雷の世界。
空気が凍りつく極寒の地獄、「ニブルヘイム」。
空気が燃え上がる灼熱の地獄、「ムスペルスヘイム」。
片や、気体分子の振動を減速し、水蒸気や二酸化炭素を凍結させるだけでなく、窒素までも液化させる領域魔法。
片や、気体分子をプラズマに分解し、更に陽イオンと電子を強制的に分離することで高エネルギーの電磁場を作り出す領域魔法。
冷気が熱プラズマを気体に戻し、熱プラズマが凍結した空気を元に戻す。
ぶつかり合う二人の力は、地上にオーロラの帳（とばり）を下ろした。
揺らめき、重なり合う、極光の舞。
それは実に幻想的な光景だった。
ともすれば、死と隣り合わせであることを忘れてしまう程に。
達也はＣＡＤの引き金に指を掛けたまま、その光景を慎重に見計っていた。
もしどちらかが術の制御を失ったら、すぐに術式そのものを消してしまえるように。
二人の術式を同時に無効化するのは相当の困難が予想されたが、彼は分解と再成に特化した魔法師だ。
その程度の無茶は、押し通して見せるつもりだった。
極光の舞う中、永劫に続くかに見えた氷雪と炎雷のぶつかり合いは、一分も経たない内に、その帰趨が明らかになった。
冷気が拡大し、プラズマが縮小していた。

元々深雪は、広い領域に大規模な事象改変を起こす魔法を得意とする魔法師。

一方リーナは、個別の物体や現象に力を集中し、激甚な事象改変を起こす魔法を得意とする魔法師。

この衝突は、最初から深雪に有利な土俵で行われていた。

それに加えて、リーナは対吸血鬼、対達也に続く三連戦。

自覚症状は無くとも、疲労は蓄積されていた。

そこに、相手に有利な、自分に不利な、勝負形態。

深雪とリーナの勝負は、二人の魔法力の差ではなく、冷静な判断力を保っていたかどうかの差で決着しつつあった。

「くっ……！」

本人にもそれが分かったのだろう。

リーナが口惜しそうな声を漏らした。

そして背中に手を回す。

再び抜き放たれた武装デバイス。

しかし、この状況でマルチキャストは、彼女がどれだけ優秀な魔法師であったとしても、自殺行為。

「そこまでだ、二人とも！」

叫びながら、達也はＣＡＤの引き金を引いた。

彼の「術式解散（グラム・ディスパージョン）」は、深雪の「ニブルヘイム」とリーナの「ムスペルスヘイム」を同時に消し飛ばした。

◇◆◇◆◇◆◇

冷気と炎雷が急激に交じり合い、火傷と凍傷を同時に引き起こす風が吹き荒れる。

達也は来るべき激痛に備えたが、灼熱と極寒の牙を持つ嵐は彼の眼前で不可視の壁に遮られた。

「お兄様！　何て無茶をなさるんですか！」

蒼褪めた顔で、深雪が駆け寄ってくる。

リーナは呆然と、こちらを見ている。
二人にとって、余波に過ぎない熱波と冷波から身を守ることなど、疲労に関係なく朝飯前なのだろう。
自分の才能について割り切っている達也だが、こういう時は“普通の”魔法の才能が羨ましくなる。
「いやはや……達也くん、これ、どうするんだい？」
そしてこちらはどうやって身を守ったのかさえ分からないが、とにかく無傷の八雲がわざとらしい呆れ声を掛けてきた。
――いや、背後に引き連れた弟子が泥だらけになっているところから見て、地中に潜ってやり過ごしたのだろう。土遁の術、というヤツだ。
「師匠……どうする、とは？」
どうやって冷気と高熱から逃れたのかは分かったが、質問の意味が分からなかった。
素直に、というより反射的に問い返した達也に、今度は本気の度合いが強い呆れ顔を八雲は見せた。
「いや、だってね……勝敗の条件はどちらかが降参するか、戦闘不能になるか、と決めていたじゃないか。
元々君が言い出した勝負なのに、それを横からぶち壊してどうするんだい？」
返す言葉が無い、とはこの事だった。
あの場面は、ああしなければ「殺しは無し」の条件に反してしまう状況だったので、介入したことそのものに後悔は無い。
だがこの勝負は、場を収める為の口実作りだったのだ。
実のところ、リーナの扱いは非常に厄介だ。
正規の軍人であるリーナは、捕虜としての権利を保証される立場にある。
身分を隠したままならそれを気にする必要は無かったのだが、達也はリーナから「スターズ総隊長」「ＵＳＮＡ軍少佐」の名乗りを受けているし、そもそもその前段階で達也の方からそれを認めてい

るのだから、捕虜となる権利を無視することは出来ない。
法的な交戦状態になくても、実質的に軍事行動中ならば捕虜となる権利があるのだ。
またそれ以前に、民間人の達也たちに軍人であるリーナを捕虜とすることはできない。
独立魔装大隊とのつながりを示せば捕虜とすることは可能だが、生憎とこの程度のことで機密となっている関係を明かせるはずも無い。
正当な権利も無くリーナを訊問したり拘束したりすれば、ＵＳＮＡに政治的な口実を与えるだけとなる。
処刑など以ての外だ。
無論、リーナの側にも民間人に対する攻撃という負い目が生じるのだが、残念ながら魔法師は民間人として保護される権利を大きく制限されている。
国際公法上の正当性では、達也たちに分が悪かった。
だからと言って、何もせずに放免など、今後のことも考えれば出来るはずもない。
事態をどう収拾するのか……頭が痛くなってきた、様な気がする達也だった。
「ワタシの負けで良いわ」
しかし、悩み続ける必要は無かった。
救いの手は、意外な所から差し伸べられた。
「あのままだったら、確実にワタシが押し切られていた。
あそこで別の魔法にキャパシティを割いていたなら、ワタシはミユキの魔法に飲み込まれて命を落としていたかもしれない。少なくとも、数ヶ月の病院暮らしは免れなかったでしょうね。
だから、ワタシの負けよ、ミユキ。
タツヤ、ワタシはみっともない悪あがきをするつもりは無いわ」
だが、これで一安心、と胸を撫で下ろすのは、早計だった。
「約束よ。訊かれたことには何でも答える。

但し……」

「但し、何だい？」

「但し、答えは“イエス”か“ノー”よ。それで答えられない質問には答えないから。

アナタが勝負に水を差してワタシとミユキが合意した条件を変えちゃったんだから、ワタシの方からもこの程度の条件変更は言わせて貰うわよ、タツヤ」

達也が思ったより、リーナは強かだったようだ。

敗者とは到底思えないステキな笑顔を浮かべるリーナに、達也は頷くしかなかった。

5一（12）　呉越同舟（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

5－（12）　呉越同舟

高エネルギープラズマとダイヤモンドダストが乱舞した夜の、明くる朝。

日曜日にも関らず、達也は学校に来ていた。

その隣には当然のように、深雪が寄り添っている。

日曜日だからといって学校が閉まっている訳ではないのは、今も昔も変わらない。

主としてクラブ活動に勤しむ生徒の為に、その他、特に図書館や実験室や演習室の使用許可を受けた生徒の為に、日曜日も学校の門は開いている（もちろん部外者が入り込めないよう認証システムが働いている）。

二人は特別に許可を受けた口だ。

と言っても、向かう先は図書館でも実験室でもない。

二人が足を運んだのは生徒会室。

「まだ、どなたもいらしてませんね」

深雪の言うとおり、生徒会室は無人だった。

妹の呟きを聞いて、何が可笑しかったのか達也は声に出さず笑いを漏らした。

「呼び出した人物が最後に登場するのはフィクションのお約束だが、現実にはそういう訳にも行かないだろうな」

メタなツッコミが入りそうなセリフを、冗談っぽく口にする。

深雪が「そうですね」と言って小さく笑ったのは、義理というかお付き合いというか、多分そんなものだったに違いない。

まあ……達也自身も、つまらない冗談だったという自覚はある。

彼が笑ったのは、これまで呼び出される一方だったのが今日は自分が呼び出す側になっている、という事実が可笑しかったからで、フィクション云々は実の所どうでも良いことだった。（ちなみにこれは達也の勘違いで、例えば生徒会長選挙の時は達也があずさを事

実上、呼び出していた）

その反面、彼が招いたからといって、特に準備することはない。

それに、さほど待つ必要も無かった。

「お早う、達也くん、深雪」

待ち人の片方は、すぐと言って良いタイミングで現れた。

「あら、エリカ。吉田くんと一緒に来たの？」

「偶然よ！

……そこはかとない悪意を感じるのはあたしの気の所為？」

「気の所為よ」

女子高校生同士の気が置けない（？）会話の一方で、

「待たせちゃったかな？」

「いや、こっちも来たばかりだ。悪いな、日曜に」

男子高校生同士はお決まりの社交辞令を交換していた。

「何かあたしとミキの扱いが違う……

まあ、いいや。それで今日はどうしたの？

休みの日に達也くんがあたしたちを呼び出すなんて珍しいじゃない」

確かに珍しいことだった。

時々は高校生らしく一緒に遊んだりもしているので休日に会うのが珍しくはないが、そういう時、達也は常に誘われる側だった。

珍しいといえば、エリカの視線が落ち着き無く彷徨っているのは壁一面に情報機器が埋め込まれている生徒会室の内装が珍しいからだろう。

その様子を見て、彼女がこの部屋に入るのは初めてだったかもしれないな、と達也は思った。

「もう少し待ってくれ。

話はメンバーが揃ってからにしたい」

「他に誰か来るのかい？」

「ああ、そろそろ来るはずなんだが」

達也がそう言うのを待ち構えていたように、ドアがノックされる

音が聞こえた。
彼女はおそらく、在校生の中で最もこの部屋に馴染んでいる生徒会室の主みたいな存在だから、ノック抜きで入って来ても不思議は無いような気もしたが、意外と（？）律儀で常識人だった、ということだろう。
――インターホンがあるのにノックとはこれ如何に？　という気がしないでもなかったが、達也の方もインターホンを使わずに自分でドアを開けたのだから、どっちもどっちではある。
「お呼びだてしてすみません」
何故わざわざ出迎えを、という疑問を抱いたとしても、ドアが開いた直後に氷解したことだろう。
ラストに登場したのは、真由美と克人の二人だった。
「吉田に、千葉？　お前たちも司波に呼ばれたのか？」
単純に驚いたというだけでない動揺を浮かべた真由美に代わって、克人が素朴な疑問を呈する。
「あっ、はい」
やはり咄嗟に言葉を失ったエリカに代わり、幹比古がごく短い答えを返す。
「では、始めましょうか」
その答えに被せるようにして、達也が着席を促した。

「……最初に、説明してもらえる？
どうして、あたしたちが七草先輩たちと一緒に呼ばれたのか」
「同感ね。私も、まずそこから説明して欲しいわ」
対人感情には鏡の様な性質がある。
好意は好意を呼び、悪意は悪意で返され、敵意は敵意を呼ぶ。
そんな感情の反射動作を利害計算でコントロールするのが大人の分別というヤツなのだが、一致させる利害が見えなければ「分別」を働かせられないのも「大人らしさ」の一面だ。
真由美の態度は、典型的な感情の反射動作だった。

彼女自身にはエリカに対して含むところは無い、というか、エリカのことを大して意識もしていなかったはずなのに、エリカの見せる敵意に引きずられている。

自分より二つも年上なのだからもう少し理性的に振舞って欲しいものだ、と達也は思った。

「我々が追いかけている吸血鬼の捕獲について、お知らせしたいことがありましたので」

もっとも、対立したままでも達也は構わないのだ。

達也は無駄な仲裁を口にせず、さっさと用件を済ませることにした。

「聞かせてもらおう」

真っ先に反応したのは克人だった。

克人以外、反応しなかった、と言う方が正確かもしれない。

「昨晩、三時間おきに特定の電波パターンを発信する合成分子機械の発信機を吸血鬼に撃ち込みました」

本当は麻酔が効かなかった場合の保険として麻酔弾の中に混入していたのだが、とんだ計算違いの結果、保険に頼らなければならなくなったという訳だ。とは言っても、彼一人では役に立たない保険なのだが。

「発信機の寿命は最長で三日間。電波の出力は微弱ですが、街路カメラに併設した傍受アンテナなら受信可能です」

今度は、全員が反応した。

反応せずにいられなかった、と言うべきか。

「チョッと待って、達也くん。昨晩？　何処で？」

「どうやって見つけたのよ？」

「合成分子機械って、何処からそんな物を……」

訊きたくなるのももっともな質問ばかりだ、と達也も思ったが、経緯とか背景とかを説明する予定はなかった。

「これが電波の周波数とパターンです」

そう言って、四人の前に一枚ずつ、カードを滑らせる。

「先輩のチームもエリカのチームも傍受アンテナを利用できるはずですね？」
「……これで居場所を突き止めろ、ってこと？」
「……何故、これを私たちに？」
私たち、というのは、七草・十文字のチームと、千葉一門のチームの両方に、という意味で、それを誤解するほど達也は鈍くなかった。
だからといって、どうしろこうしろと指図するつもりもなかった。
構わず次の情報を開陳する。
ただ、分かったことを伝えるのが、この場に四人を集めた目的だった。
「我々が追いかけている『吸血鬼』の正体ですが、ＵＳＮＡ軍から脱走した魔法師のようです」
四人の顔に、「まさか」という表情と「なるほど」という表情が同時に浮かんだ。
彼女たちの探索を妨害していた未知の勢力。
あの単体・組織両面におけるレベルの高さは、単なる非合法組織に持ち得るものではないと真由美もエリカも感じていた。
その正体が脱走兵を追うＵＳＮＡの魔法師部隊だったというなら、実に納得の出来る話だ。
「それも単独ではありませんね。
少なくとも二人以上、もしかしたら十人前後になるかもしれません」
「スターズから十人も脱走者が出たの？」
「いや、エリカ。ＵＳＮＡ軍に所属していたからといって、スターズに所属していたとは限らないんだぞ」
「えっ、そうなの？」
「七草……スターズはＵＳＮＡ軍に所属する魔法師の中から特に魔法戦闘力に優れた者が選抜されて出来ている部隊だ。
当然、ＵＳＮＡ軍の中にはスターズに所属していない魔法師もい

る」
エリカの誤解を達也が、真由美の誤解を克人が正した。
意外と息の合ったところ（？）を見せた美少女二人だったが、それを指摘するとまたヘソを曲げそうだ。
余計なことは口にしないが吉だろう。
「――例え相手がスターズのメンバーでなくても、戦闘訓練を受け、その上に吸血鬼としての異能を身につけた相手です。甘い相手じゃないでしょうね」
しかし余計なことではなくても、耳に痛い言葉はいくらでもある。
「……どうしろって言うのよ」
ふて腐れた声で質問したのはエリカだった。
「どうしろと言うつもりはないが」
だが、「えっ？」という表情を浮かべたのは彼女だけではなかった。
「友人が痛い目に遭わされたんだから、放っておくつもりは無い。だけど自分の手で思い知らせてやることに拘るつもりも無いな。公安や警視庁で対処するなら余計な手出しをするつもりは無いし、師族会議が責任を持って処分するというならそれに文句は無い。
もちろん、千葉家が単独で討伐しても一向に構わない」
既に立ち上がっていた達也は、そう言ってテーブルを離れた。
「ご足労いただいて申し訳ありませんでした。
物が物ですので、直接お渡しした方が良いと思いまして」
「いや、構わない。
ご苦労だったな」
何か言いたげに口を開きかけた真由美の機先を制して、克人が労いの言葉を掛けた。
「折角こうして顔を合わせたのだから、我々は少し話をしてから帰ることにしよう」
「そうですか。
それでは、戸締まりをお任せしても良いですか」

「任された」
達也は克人に一礼し、深雪に目配せしてこの場を去った。
幹比古が縋り付くような眼差しを向けて来ていたのは、自分の気の所為として処理した。

◇◆◇◆◇◆◇

達也が学校を後にした頃、リーナはようやくベッドから這い出していた。
（ミアは……「仕事」か。日曜日だっていうのに、勤勉ね）
同居人がいないことに疑問を持ち、時計を見て、リーナは一人頷いた。
そういえばここ二、三日、ミアと顔を合わせていないな、とリーナは思った。
最近マクシミリアン・デバイスの仕事が忙しいようで、夕食の時間になっても帰って来ない。朝もリーナが起きる前に部屋を出ている。セールス・エンジニアはあくまでも偽装であるはずなのだが、大学の担当者に気に入られてしまって、と最後に顔を合わせた時にこぼしていた。
夜中になるとリーナの方が出かけているので、見事にすれ違っているという訳だ。
冷たい水で顔を洗っても居座り続ける眠気を抱えて、フラッとやって来たダイニングで、窒素パックされたサンドイッチをテーブルの上に発見、即座に攻略に掛かる。
ミアの作ったアメリカンクラブハウスは時間的にも量的にも、ブランチにちょうど良かった。
生憎と同居人の様な料理スキルの無いリーナは、ＨＡＲに用意させたコーヒーで口の中に残ったパンくずを胃に流し込んだ。
彼女は本来、紅茶党ミルクティー派なのだが、自分で美味く淹れられない以上、拘るのは無駄だと自分に言い聞かせて、強過ぎる苦

味に顔を顰めるだけで我慢する。（それだってＨＡＲの調節次第なのだが）

ようやく頭がスッキリしてきたところでようやく、リーナはメッセージランプが点灯しているのに気づいた。

機密保持の為、あえてホームネットワークに繋いでいない電子秘書。

その画面を立ち上げて、ミアの報告書に目を通してリーナは、途中で「えっ？」と声を出してしまった。

そこに書かれた月曜日のスケジュール。

「第一高校へ、ＣＡＤ調整用測定器納入に同行」

スターズ総隊長としては「よくやった」と評価しなければならない段取りなのだが、高校生をやっているところを身内（というか部下というか、とにかくそのようなもの）に見られるのは、自分の中に正体不明の抵抗感があった。

これは言うならば、授業参観を嫌がる子供の心理なのだが、学校生活の経験がまともに無いリーナには初体験の感情だ。

再び重量感を増した頭を抱えて、リーナはため息をついた。

昨晩の疲労が、ぶり返して来た気がした。

随分久し振りに喫した敗北を思い出して、気分が改めて落ち込んで来る。

（……決めた！　今日は、安息日！）

自分自身に宣言して、リーナは寝室へ戻った。

真面目な信者なら目くじらを立てそうな思考と行動だったが、幸いここには今、彼女しかいなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

「ティア！」

喧騒の中、背後から呼びかける声に、雫は振り向いた。

アメリカ西海岸は現在、土曜日の宵の口。

雫は下宿先で開かれているホームパーティの会場にいた。
「レイ」
大袈裟なアクションで手を振る男性（と言うより「男の子」）の姿を認めて、雫は小さく手を挙げた。
彼の名はレイモンド・Ｓ・クラーク。
留学先の男子生徒の中で、雫に最初に声を掛けた人物であり、以来ずっと、何かにつけて雫の側に寄って来る白人（おそらく、西海岸には今時珍しい生粋のアングロサクソン）の同級生だ。
多分、モーションを掛けて来ているんだろうな、とは雫も感じていたが、意外に距離感を保つのが上手で押し付けがましさが無い為、雫も特に悪い感情は持っていなかった。
ちなみに「ティア」という愛称もレイモンドが言い出したものだ。
自己紹介の時「雫」の意味を問われて、“ｔｅａｒｄｒｏｐ”や“ｄｅｗｄｒｏｐ”の意味だ、と説明したら、「ティア」という愛称を付けられてしまったのだ。
そんなに泣き虫に見える？　と同じクラスの女子生徒に聞いたら、「真珠」のイメージにピッタリだから、という返事が返って来てそれ以上の抗議は出来なかった。
――照れくさくて。
ティア、という響きは嫌なものではなかったのでそのまま放置していたら、いつの間にか「ティア」で定着してしまったという次第だった。
それはさておき。
「ステキなドレスだね、ティア。
いつもよりもっとチャーミングだ」
「そう？」
満面の笑顔で臆面の無いセリフを吐いたレイに対して、雫は無愛想に、ではなく、素で不思議そうに小首を傾げた。
長めのマッシュレイヤーにした黒髪がフワリと揺れる。
眼差しの温度が更に上昇したレイに構わず、雫は自分の衣装に視

線を落とした。
床すれすれまであるスカート丈。
剥き出しの背中と肩と二の腕。
肘まで覆う長手袋。
ＵＳＮＡは部分的に文化退行を起こしている、と聞いてはいたが、ここまでクラシックに回帰しているとは雫の予想外だった。コルセットで身体を締め上げないと着れないドレスもパーティ会場で普通に見られるくらいだ。幸い雫のドレスは、その手の物ではなかったが。
「レイも似合ってるよ」
店員の勧めるままに買ってみたものの、自分のドレスの何処が良いのかいまいちピンと来ない雫だったが、褒められた礼儀として社交辞令を返してみる。
レイモンドのタキシードスタイルは彼女の感覚からすれば古臭かった（同国人的には、大袈裟だった）ものの、彼の貴公子然としたルックスに似合ってはいたので、お世辞を口にすることに抵抗は無かった。
「ありがとう！　ティアにそう言って貰えるなんて光栄だよ」
それに、これだけ喜んでもらえるなら雫としても悪い気はしない。
レイモンドのストレートな感情表現は、何となく弟を連想させるものだった。
人種的に、青年期においてアーリアンはモンゴロイドより大人っぽく見えるというのが定説だったはずだが、レイモンドは同い年にも関らず、雫の目には幼く見える。
（……ううん。レイが幼いんじゃなくて、達也さんが大人っぽいんだ）
頭の中でそう思い直して、雫は改めてレイモンドに目を向けた。
「一人？」
「ティア以外の女性をエスコートするつもりは無いよ」
ちなみに今日のパーティは、エスコートする相手がいなければ参

加できない種類のものではない。
「女の子のことじゃないよ」
とりあえず、自分が感じた疑問に沿って雫は考え違いを指摘した。
レイモンドは、面白いくらい狼狽した。
「えっ？　ええと、そうだね、一人と言えば一人……かな？」
私に訊かないで欲しい、と雫は思ったが、口にはしなかった。
レイモンドの背後で頻(しき)りに手を動かしている男たち（雫には分からなかったが、彼らはレイモンドを嗾(けしか)けているのだった）を見つけて、彼の嘘が判明したからだ。
だからといって、それを責める気持ちは起きなかったが。
「えっと……ティア、この前、頼まれた件なんだけど」
旗色が悪いと見たのか、レイモンドはあからさまな話題転換を図った。
「レイ」
それは雫にとっても望むところだったが、彼女が思うに、こんな所でする話ではなかった。
「場所を変えよう」
強い口調で名前を呼ばれ、口をつぐんだレイモンドは、雫の提案にコクコクと頷いた。

ホームパーティといっても、そこは北山家が令嬢のステイ先に選ぶ家のこと。
そんじょそこらのホテルを使ったパーティより、余程豪華なものだった。
会場は屋内だけでなく、庭も開放されていたが、流石にこの時期、庭に出ている人影は疎(まば)らだった。
雫はドレスの上に毛織のストールを羽織って冬の星空の下へ歩み出した。
彼女の背丈は日本人女性としてそれほど小柄という訳ではないが、アメリカ基準だと明らかに「小柄な女性」の範疇に入る。アメリカ

ン・サイズのストールは腰の上の辺りまでカバーしている、が、それでも真冬の寒気を防ぐには心許無い。
　雫はハンドバッグの中に隠したＣＡＤを操作して、自分の周りに暖気のフィールドを作り出した。
　ついでにレイも、その効力範囲内に入れる。暖気のフィールドは、音を遮断する効果も有していた。
「ありがとう、ティア。……魔法というのは、こんなに便利なものだったんだね」
「この程度、珍しくは無いはず」
　追従口にしては、少し驚き過ぎだ、と雫は感じたのだが、レイモンドはとんでもないとばかり大きく首を振った。
「ティアはまだこの国に来たばかりで気づいていないかもしれないけど、僕たちにとっての魔法は、こんな風に『役に立つ』ものじゃないよ。
　日常的に魔法を応用する場面なんて、この国ではほとんど目にしない。
　魔法は力を誇示する為のものであり、知識を誇示する為のものであり、地位を誇示する為のものなんだ」
「出し惜しみする、ってこと？」
「ハハハハ……まあ、そうだね」
　雫の率直な感想に、レイモンドは腰を折って笑った。
　ただその笑いは、少しばかり屈折したものだった。
「ステイツの魔法研究は、軍事利用を除けば、基礎研究ばかりが重視される。
　民生利用とか日常生活への応用とかは、下等なことと見做されているんだ。大金が稼げる、と分かればその限りじゃないけど。
　そんなだから……いや、ゴメン。こんな話じゃなかったね」
　悩みなんて無さそうに見えても、色々と思うところがあるのだろう。
　雫は無言で続きを待った。

「じゃあ、本題だ」
顔を上げたレイモンドの表情は、別人の様に鋭く引き締まっていた。
「まず、『吸血鬼』が発生しているのは、事実だったよ」
ほのかに話した「情報通の生徒」。
達也に約束した情報源。
それがこの、レイモンドだった。
「原因は不明だけど、無関係とは思えない情報が手に入った」
「話して」
「もちろん。
高度に情報封鎖されている事だけど、十一月にダラスで、余剰次元理論に基づく極小ブラックホール生成・蒸発実験が行われた」
「余剰次元理論？」
「ゴメン、詳しいことは僕にも理解できない」
「ううん、それで？」
達也さんに訊けば詳しいことが分かるかな？　と考えながら、雫は続きを促した。
「実験の詳細については不明だけど、その実験の直後から、『吸血鬼』の発生が観測されている」
雫は五秒ほど考え込んで、口を開いた。
「その実験と吸血鬼の発生には因果関係があると、レイは考えているんだね？」
「さっき、原因不明と言ったけど」
そこで一旦、自分の思考を整理する為に、レイモンドは言葉を切った。
「僕はこのブラックホール実験が、吸血鬼を呼び出したと確信している」
レイモンドが何処から情報を仕入れて、何を根拠に判断しているのか、雫は知らない。
だがこの短い付き合いの中で、彼が隠された真実に到達する特異

な力の持ち主であることを雫は知っていた。
それが個人の力であるのか、組織の力であるのかは、雫にとって重要ではない。
「……そう。ありがとう」
重要なのは、彼の情報が信用できるということだった。
「どういたしまして。
他ならぬティアの頼みだからね。
僕でお役に立てることがあれば、いつでも相談してよ」
第三者の目から見れば、レイモンドのアプローチはかなり露骨なものだった。
しかし雫本人は、と言えば、「物珍しいのは今の内」くらいにしか考えていなかった。
この鈍さが先天的なものか、最近の友人関係で伝染したものか、それは誰にも分からない。

◇◆◇◆◇◆◇

達也にとっては珍しくオフの日曜日、ではあったが、制服のままではどこかに遊びに行くという訳にはいかない。
達也と深雪は、何処にも寄り道せず一旦家に帰ることにした。
今日はバイクではなく、電車を使っている。
いつも通り二人乗りのキャビネットに並んで座り、飛び去る街の風景を眺めている兄の横顔を、深雪は切なく見詰めていた。
今回の一件で、達也は何事か、悩んでいる。
悩んでいるというより、自分を責めているように見える。
それは普段、過ぎ去った“ＩＦ”を思い悩まない達也には、珍しいことだった。
自分に話して欲しいと、深雪は思った。
自分が大して役に立てるとは思っていなかったし、ましてや兄の悩みを解決できるなどとは微塵も考えていない。

だけどそれでも、話を聞く位のことは出来る。
悩みを分け持つことは出来なくても、共有するくらいなら出来るはず。
深雪はそう思った。
そうしたい、と願いながら、兄の横顔を見詰め続けた。
「甘いな、俺は……」
その願いが通じたのだろうか？
達也がポツリと、呟いた。
「お兄様？」
焦りを抑えて、願いを押し込めて、何も気づいていないフリで、さり気なく、深雪は達也に問い掛けた。
言葉に出さず、言葉にせず、何を悩んでいるのか、と。
「自分には無関係だと思っていた結果が、このざまだ。
何もかもが後手後手で、手掛かりは幾らでもあるのに、肝心なことが分かっていない」
抽象的な言い方だったが、深雪には達也の言う「手掛かり」が何を指しているのか、直感的に解った。
「それは……リーナのことでしょうか？」
心の裡をズバリと言い当てられて、達也は目を丸くした。
「参ったな……深雪には本当に、隠し事が出来ない」
そんなことはありません！　という喉元まで出掛かった叫びを、深雪は懸命に押さえ込んだ。
達也が何を考えているのか、深雪には分からないことだらけだった。
だがそれは、兄に苛立ちをぶつけるのではなく、自分の努力で理解すべきなのだと、深雪は自分に言い聞かせた。
「リーナが何か企んでいたのは、最初から分かっていることだったんだ。
それを訊問する機会だってあった。
無理矢理機会を作ることも出来た。

それなのに俺は、自分の生活に波風を立てたくなかったが為に見逃して、結果的に対処が遅れた。

いや……分かっては、いるんだ。

俺がすぐに手を打ったからといって、被害を防げたとは限らない。事態はもっと悪化したかもしれない。

でもなぁ……友人が犠牲になった、という事実を目の前にすると、無駄だと知りつつ考えずにはいられないんだよ」

達也の告白を聞いて、深雪は笑みが浮かんでくるのを抑えられなかった。

それは、兄が内心を打ち明けてくれたことに対してではなく、兄が話してくれたことに対してだった。

「お兄様……お優しく、なられましたね」

「深雪？　いきなり何だい、それは？」

「いえ……お兄様は元々お優しかったのでしたね。

ただそれが、見え難かっただけで」

「すまん、分かるように説明してくれ」

すっかり困惑顔の達也に、深雪は最早、満面の笑みを隠そうとはしなかった。

「お兄様にもご理解できないことがお有りだったのですね。

如何にお兄様といえど、ご自分のことは解らないものなのですか？」

「買いかぶりだし、当然だよ。

解らないことは山ほどあるし、自分の顔は鏡でしか見えない。左右ひっくり返った映し絵から想像するしかないんだ」

「そこで強がりを仰らないのは、流石、お兄様です。

つまりですね」

深雪はそこで、思わせ振りに言葉を切った。

妹の思う壺だ、と分かっていても、達也は耳をそばだてずにいられなかった。

「お兄様はご友人である西城君を傷つけられたのが許せないのです。

仮初めとはいえ友人となったリーナに手荒な真似をしたくないとお考えなのです。

お兄様、深雪は嬉しいです。

お兄様がわたし以外の者にも、情けを掛けて下さることが。

お兄様はご自分でお考えになられているよりずっと、人間らしい感情をお持ちなのです」

達也は正面を向いて座り直し、目を閉じた。

そんな分かり易い照れ隠しをする兄が、深雪は可笑しかった。

そんな姿を自分に見せてくれることが、すごく、嬉しかった。

5－（13）　来訪者の正体（前）（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

今回のエピソードにはかなり趣味的な似非科学が含まれております。
そちらのご趣味が無い方は、該当箇所を読み飛ばしていただければ幸いです。
一応伏線にはなっていますが、読んでいなくても重大な支障はないと思われますので。

5－（13）　来訪者の正体（前）

「吉田くん、東京タワー公園にシグナルを確認したわ。
現在、飯倉交差点方向へ移動中よ」
『了解。こちらの現在位置は桜田通り虎ノ門交差点付近です。飯倉交差点に急行します』
「十分以内にお願い」
『分かっています。二分で到着見込みです』
通信が切れる。
今度は間に合いそうだ、と分かって、真由美はホッと息を吐いた。

午前中の話し合いの結果、真由美が情報管制を担当し、克人とエリカが実働部隊を率いて動くという体制に落ち着いた。
内輪揉めは有害無益、ということくらい、どちらにも解っていることだった。
ただどちらも自分から歩み寄ろうとせず、それぞれ勝手にやっていた為に結果として味方同士足を引っ張り合う形となっていたのである。
そういう意味では、騙し討ちの形で強制的に話し合いの場を設けた達也に感謝しなければならない。
実に、癪に障ることではあるが。
……思い出したら、何だかまた、腹が立ってきた。
（見てなさい。バレンタインには思いっ切り苦いチョコを食べさせてあげるんだから）
達也が目を白黒させている姿を想像して溜飲を下げ、真由美はモニターに注意を戻した。
達也がもたらした手掛かりは確かに有益なものだったが、使い勝手は余り良くなかった。

と言うか、悪かった。
確かに、傍受用アンテナで電波パターンを捉えることは出来た。
だが高度に交通システムが発達した都市で三時間もあれば、相当の距離を移動できるのである。
一回の電波発信時間は、十分間。
この間に、標的を捕捉しなければならない。
今回、街路カメラと併設された傍受システムを使って初めて分かったことだが、「吸血鬼」は街路カメラでトレースできない。
伝説、あるいはフィクションの設定のように、カメラに映らないということはなかった。
だが、伝説・フィクションは全くの間違いでもなかった。
どれだけピントを調節しても、吸血鬼の姿はボンヤリとしか映らないのだ。
特に、首から上が酷い。
人相が全く判別できない。街路カメラのトレースシステムは顔認識システムを基礎としているものだから、人相が判別できない時には役に立たないのだ。
通信障害などは起こっていないから、多分、光学系機器を狂わせる魔法を使っているのだろう、というのが七草家のスタッフの推測だった。
三時間前と六時間前は、それで逃げられている。
だが今回は、予測が上手く的中したようだ。
真由美は包囲の網を絞るべく、汐留地区を捜索中の克人に回線をつないだ。

◇◆◇◆◇◆◇

週明けの教室で、達也はここ数日お馴染みとなった光景に出くわした。
エリカが机に突っ伏している。

今日は、朝早くに登校したのは良いものの、そこで力尽きてしまったようだ。
（いや、もしかして徹夜か？）
「……ええと、起こしてあげた方が良いんでしょうか？」
駅で合流した美月が声を潜めて訊ねてきた。
この熟睡振りからして、普通に話しても起きることはないだろう。
それは美月にも、見ただけで分かったはずだが、それでもついつい声を潜めてしまうのが美月の美月たる所以に違いない。
「寝かせといてやろう」
対する達也の回答は、実にあっさりしたものだった。
割り切っていた、と言った方が正確かもしれない。
今、無理に起こしても、少なくとも午前中一杯、まともに頭が働きそうもないのは一目見ただけで明らかだったし、実のところ達也も他人（ひと）のことに構っていられないという、余裕に乏しい精神状態だったのだ。

◇◆◇◆◇◆◇

時間は半日ほど遡る

達也と深雪が夕食を食べ終わってすぐ、と言って良いタイミングで、電話のベルが鳴った。
電話が掛かってきておかしな時刻ではない。
電話を受ける方にとっては。
だがアメリカ西海岸は真夜中も日付が変わった刻限だ。
何が起こったんだ、と達也が身構えても不思議はない。
「もしもし、雫？　何かあったのか？」
画面に映ったのは予想に違わず、予想外の姿の、雫だった。
雫は寝間着姿だった。
ファッション性重視のネグリジェに、ガウンも着ていない。

普段ならば如何な達也といえど焦ったに違いない。
幸いなことに、今は心配の方が彼の心を大きく占めていたので無様に慌てることはなかったが。
「雫っ？　貴女、なんて格好しているのよ！」
寧ろ、横から画面を覗き込んだ深雪の方が顔を赤らめている――そんなしどけない姿だった。
『あっ、深雪、こんばんわ』
「挨拶なんていいから！　せめてガウンくらい羽織って！」
『……いいけど？』
不思議そうな顔で、それでも言われたとおり、雫はモゾモゾとガウンを羽織った。
『夜遅くにごめんなさい』
そして、改めて、という感じでペコリと頭を下げる。
「こっちは別に遅くもないが……もしかして、飲んでるのか？」
雫の口調は眠気によるものとは微妙に異なる感じで呂律が怪しくなっていた。
『何を？』
そりゃあ、と言い掛けて、達也はその台詞をキャンセルした。
古来よりこの手のセリフには意味が無いと気付いたからである。
「いや、それよりどうしたんだ？」
少々思考力が低下しているようだが、脈絡もなくただ電話を掛けてきたという訳でもあるまい。
ここは速やかに話を聞くべきだ、と達也は判断した。
『んっ、出来るだけ早く、知らせた方が良いと思って』
何を？　と訊かなかった察しの良さは、褒められても良いだろう。
「もう分かったのか？　凄いな」
『もっと褒めて』
平坦な口調でねだられて、達也は急激な脱力感を味わった。
（……誰だ、雫に飲ませたヤツは）
雫は明らかに酔っていた。どうやらその所為で、軽い幼児退行を

起こしているようだ。
「いや、本当に凄いな、雫は。
それで、何が分かったんだ？」
わざわざ真夜中（向こうの現地時間で）に電話をくれた相手を、急かすような真似は本意で無かったが、ここは早めに切り上げた方がお互いの為だろう。
酔ってるといっても、記憶を無くす程の深酒ではないようだから。
『吸血鬼の発生原因なんだけど』
だが、思った以上にセンセーショナルなニュースだった。達也と深雪が揃って身を乗り出す。
『余剰……なんだっけ、余剰なんとかの黒い穴の実験みたいだよ』
「はぁ？　黒い穴？　雫、それ、何のこと？」
しかしその後に、予想外のちんぷんかんぷんな台詞が続いた所為で、深雪の頭上には大量の疑問符が舞い踊っていた。
そう――深雪の、頭上には。
『知らない。私も達也さんに訊こうと思ってた』
「余剰次元理論に基づくマイクロブラックホール生成・消滅実験、じゃないか？」
低い、強張った声で、達也が確認する。
『そう、それ』
声の調子が変わったのを、雫は気にしなかった（気にする状態ではなかった）ようだが、深雪は恐々と兄の表情を窺っていた。
「あれをやったのか……よりにもよって」
いつもと変わらぬ落ち着いた声。否、いつも以上に冷静な口調。
それが彼に許容された怒りと苛立ちのレベルを越えてしまったが故のものだと、他の誰に分からなくとも深雪には解っていた。
『それ、なに？』
その時点で、深雪は電話を切ろうとしていた。「もう遅いから」とか適当な理由をつけて、会話を切り上げるつもりだった。これ以上、達也の気分を害したくなかった。

だがその前に、雫が短い質問をして、
「詳しく説明するのは大変だから、簡単に言うと」
達也が、それに答えてしまっていた。
「ごく小さなブラックホールを人工的に作り出して、そこからエネルギーを取り出そうという実験だ。
生成されたブラックホールが蒸発する過程で、質量が熱エネルギーに変換されることが予想されているからな。
それを確認したかったんだろう」
話の腰を折るのに失敗して、深雪は仕方なく兄の解説に耳を傾けていたが、質量をエネルギーに換えるというフレーズに心臓の鼓動を乱した。
叔母から受けていた警告が、改めて胸中に蘇る。
『それが余剰次元理論？　異次元からエネルギーを取り出すの？』
無論、雫がそんな深雪の懸念を知るはずもなく、画面の中で酔っているにしてはアカデミック、っぽい、質問をしていた。
「いや、エネルギーを取り出すプロセス自体に、余剰次元理論は関係ないよ。
余剰次元理論というのは、この世界にはより高次の世界が重なっていて、物理的な力では重力だけが次元の壁を越えられる、つまり重力はその力の大部分が別次元に漏れている為に、この次元では本来のものよりずっと小さな力しか観測できないという仮説だ。
でも素粒子スケールの極小距離では別次元に漏れ出す前にこの次元の物体同士で作用するから、普通のスケールで観測するより遥かに強く引き合うことになる。だから余剰次元理論を考慮しない場合に比べて、桁違いに小さなエネルギーでマイクロブラックホールの生成は可能だ、というのが余剰次元理論に基づくマイクロブラックホール生成実験の理論的な土台となる」
『……深雪、解った？』
「残念ながら、あまり理解できなかったわ」
ユラユラと頭を左右に揺らしながら訊ねる雫に、苦笑しながら深

雪は首を振った。
「ですがお兄様、今のお話の何処がそれほど問題なのでしょうか……？」
そして兄の顔を間近に見上げながら、気遣わしげに問い掛ける。
達也は妹の顔を見下ろし、画面の中の雫に目を遣って、躊躇いがちに、一見、無関係な事を語り始めた。
「魔法による事象改変に、エネルギーの供給は必要ない。物理的なエネルギーが供給されている形跡も無い。この物質次元に物理的エネルギーへ変換可能な非物理的エネルギーが存在しないことも確実視されている。
だが移動系魔法や加速系魔法だと、魔法発動の前後で明らかなエネルギー量の変動が事後的に観測される。
このとおり、魔法はエネルギー保存の法則に縛られない。魔法によって、エネルギー保存の法則は否定されているように見える」
「現代魔法の第一パラドックスと呼ばれている命題ですね」
『その命題は命題自体が不完全という結論だったはず』
「そう、雫の言うとおり、エネルギー保存の法則が破綻しているように見えるのは見掛けの上だけのことだ。
そもそもエネルギー保存の法則は演繹的な法則であり、これに反する現象はあり得ない。
魔法もまた物理的な結果をもたらすものである以上、少なくともその限りにおいて、エネルギー保存の法則が成り立っているはずなんだ。
エネルギー保存の法則とは、閉じた系の中でのエネルギーの総量は常に一定である、というもの。
エネルギー総量の変動が観測されたとすれば、それは観測の誤りか、または、その系が閉じていないということを意味している」
「魔法が観測されるこの世界は閉じた系ではない……先程の余剰次元理論とつながっているように思われます」
『そうか！　魔法に必要なエネルギーは、異次元から供給されてい

る？』

「俺はそう考えている。

そして仮に余剰次元理論が正しいとするならば、物理的な力の中で重力だけが次元の壁を越えて作用することに何らかの意味があるはずだとも考えている。

ここから先は何の根拠もない、空想に近い仮説だが……」

達也の逡巡を、深雪と雫は無言で見守った。

「別次元に作用している重力は、そうすることで次元の壁を支えているんじゃないだろうか。

魔法は、その壁を崩さずに、異次元からエネルギーを取り出しているんじゃないだろうか。

確かに魔法はエネルギー供給を必要としない現象だけど、エネルギー収支と無関係って訳じゃない。

観測可能な範囲に限っても、エネルギーの総収支がゼロに近い魔法の方が発動に失敗し難い傾向がある。

多分、魔法式には事象改変の結果として生じるエネルギーの不足を逆算して、その不足分を異次元から引っ張ってくるプロセスが含まれているんだ。物理的なエネルギーが供給されている形跡が観測されない点については、異次元のエネルギーが非物理的な性質を持つ、言うならば魔法的エネルギーで、それを魔法式が事後的に物理的エネルギーに変換していると考えれば辻褄が合う。

次元の壁の向こうには魔法的なエネルギーに満ちた次元があって、そのエネルギーが物理次元に漏れ出してこないよう、重力によって支えられた次元の壁がせき止めているけれども、魔法はこの壁を越えてエネルギーの総収支がちょうどゼロになるように、不足分を物理次元に引き込んでいる――これが、現代魔法の第一パラドックスを解決しているシステムだと俺は考えている。

ところが、余剰次元理論に基づいて計算されたエネルギーでマイクロブラックホールを生成すると、次元の壁を越えて作用していた重力がブラックホールの生成に消費されてしまうことになる。

そうすると、ブラックホール生成のその一瞬、次元の壁が揺らいでしまうということになりはしないだろうか」

「次元の壁が揺らぐと……どうなるのでしょう？」

『魔法式でコントロールされない魔法的なエネルギーが漏れて来る……？』

画面を挟んで、深雪と雫が顔を見合わせた。

高解像度のカメラとディスプレイは、互いの瞳の中に同じ虞（おそれ）が宿っているのを映し出していた。

「仮に、魔法的なエネルギーで満ちた次元を魔界と呼ぶことにしよう。

エネルギーは自然発生的に構造化し、情報体を形成する。そうでなきゃ、宇宙はとうに均質化して何もない世界になっているだろうからね。

魔界のエネルギーも同じように構造化するに違いない。

そして次元の壁が揺らいだ瞬間、魔界で形成された魔法的エネルギーの情報体がこの世界に侵入する可能性はゼロじゃない、と思う」

二人の抱いた虞は、達也が苛立ち、憤った理由と同じものだった。

◇◆◇◆◇◆◇

幹比古が教室に顔を見せたのは、二時限目が終わった後だった。

「もう良いのか？」

遅刻ではない。

今日もまた、保健室のお世話になっていたのだった。

「達也……恨むよ」

一応、心配して声を掛けたのだが、返ってきたのはドロドロとした恨み言だった。

「おいおい、穏やかじゃないな」

冗談だと信じたいところだが、それにしては気持ちがこもっている。

聞き耳を立てていた美月が怯えて縮こまったくらいだ。
「恨み言くらい好きに言わせてよ。あの後、僕がどれだけ胃の痛い思いをしたことか……」
そう言いながら手で腹をさすっているのは、その時の痛みを思い出したからだろう。
「七草先輩はニコニコ、ニコニコ笑うだけで何も言わないし、エリカも不機嫌丸出しで黙っちゃうし……僕一人で喋り続けなきゃならなかったんだよ。
あの空回り感は針の莚（むしろ）そのものだよ……」
「十文字先輩は何も仰らなかったのか？」
「あの人がそんな細かい事に口出しすると思う？」
なるほど、納得である。
真由美もエリカも克人も、実に「らしい」行動だ。
「えっと……何だかよく分かりませんけど、大変だったんですね」
美月に嘘偽り無い同情の言葉を掛けられて、幹比古も少しは癒された様子だった。
美月の向こうでは、エリカが相変わらず机に突っ伏していた。

◇◆◇◆◇◆◇

昼休みになって、エリカがようやく復活した。
そして目を醒ますや否や、美月を捕まえて愚痴り始めた。
「聞いてる？　それまでずっと一匹で逃げてたのに、いきなり三匹に増えたのよ。狡いと思わない？」
誰が聞いているか分からない食堂でこういう話をするのはまずいと判断する分別はあったと見えて、エリカはお昼も摂らずに美月を空き教室――幹比古がよく使っている実験室だ――に連れ込んでいた。
「えっと、そうかな」
勢いに押されて頷く美月だが、実は何の事だかよく分かっていな

い。

辛うじて「吸血鬼」の事だろう、というのは分かったが、状況がサッパリだ。「吸血鬼って一匹、二匹と数えるんだっけ？」というのが美月の心の声である。

「……それより、早く食堂に行こうよ。お昼休み、終っちゃうよ？」

「あんまりお腹空いてないのよね、あたし」

それはずっと寝てたからだよ！　と美月は余程指摘したかったのだが、それを言うとエリカが修復不能なまでに拗ねてしまいそうな気がして、言えなかった。

（はぁ……仕方ないか）

ダイエットをしている訳ではないが――そもそもそんな習慣（？）自体が今では廃れてしまっているが――美月はお昼ご飯を諦めることにした。

今日のカリキュラムには体育も実習も入っていないし、一食くらい抜いても大丈夫、と自分に言い聞かせる。

それよりも、気になることは別にあった。

「ねえ、エリカちゃん。何で達也さんと喧嘩してるの？」

その瞬間、ギクッとエリカの肩が震えた。

「な、なに言ってるのかな、美月は。喧嘩なんかしてないって。してないったらしてないって」

ブンブンと勢いよく首と両手を振る。

春から伸ばしていた成果の、長めのポニーテール――エリカが最近お気に入りのヘアスタイルだ――が、首の動きにつられてブンブン跳ねる。

動揺しているのが丸分かりだった。

「そんなに慌てなくても……別に、エリカちゃんが達也さんに何かしたなんて思ってないから。

エリカちゃんが少しくらい羽目を外したって、達也さんなら笑って流しちゃうでしょ？

だから、エリカちゃんが原因なら、喧嘩になんてなるはずないも

ん」
「そ、それは、褒められてるのか貶されてるのか、微妙……」
言葉通り、「表情の選択に窮した」表情で抗議、らしきもの、を口にするエリカ。
「褒めてもないし、貶してもないよ。単なる事実認識だから」
美月はそれを、バッサリと切り捨てる。
「それを事実と言い切られるのは、なんか、納得できないかも！」
「ハイハイ、とにかく、エリカちゃんが原因だなんて思ってないから」
憤然とした、だが何処か勢いのない反駁も、あっさりと流し去られた。
「美月、強くなったわね……」
「言いたくないならこれ以上訊かないけど？」
芝居じみた台詞回しで誤魔化そうとしても、直球が投げ返される。
エリカは力尽きたように突っ伏した。
「喧嘩じゃないのよ……あたしが一方的に気まずくなってるだけ。明日まで引きずる予定はないから、今日のところは見逃してくれない？」
首を捻って、髪と腕の隙間から気弱な瞳を覗かせるエリカ。
う～ん、とばかり顎に人差し指を当てて、美月は小首を傾げた。
軽く内巻きのクセがある、肩にかかる長さのボブカットの髪が、首の動きに合わせて揺れる。
顔の傾きはすぐに、真っ直ぐに戻った。
「明日になったら元通り、って言い切れるならそれでも良いけど」
気持ちはどうやら、エリカが期待したようには傾かなかったようだ。
「だよねぇ……あーっ、やだやだ」
元々、何もしなくても明日になれば大丈夫、なんてエリカ本人も信じていない。
観念したのか、エリカはさばさばとした顔で身体を起こした。

「結局さ、あたしが達也くんに甘えてるだけなんだよね。
あたしは達也くんに『力を貸して』ってお願いもしてないのに、何も言わなくてもあたしたちの方についてくれるって勝手に決め付けてた。
だからあの女にも手を貸してるのを見て、フタマタだ～って頭に来てさ……やだ、また恥ずかしくなって来ちゃった」
顔を覆った両手の隙間から、赤くなった肌の色が見え隠れしている。恥ずかしいというのは、口先だけでないようだ。
その妙に可愛らしい様を見て、美月は深々とため息をついた。
「……なに、その『心底呆れました』とでも言いたげなため息は」
「心底って程じゃないけど、呆れました」
指の隙間から鋭い眼差しを送りつけて来たエリカに、美月は真っ白な眼差しを送り返した。
エリカの目から、鋭さが消える。
美月はエリカの正面に移動し（と言っても椅子の向きを変えて座り直しただけだが）、手を伸ばして、顔を覆っているエリカの両手を下げさせた。
「結局、意地を張って自己嫌悪に嵌まり込んでいるだけじゃない……そういうの、『独り相撲』って言うんだと思うよ」
「ぐさっ！　美月の容赦ない一言があたしの胸を抉るぅ～」
「真面目な話なんだけど」
「……ごめんなさい」
心なしか、エリカの身体が小さく縮んで見えた。
「エリカちゃん、ハッキリ言うけど、達也さんの方から歩み寄ってくるなんてあり得ないからね」
「……やっぱり？」
「去る者は追わずじゃないけど、避けられてるって思われたら、ずーっと放っとかれちゃうよ？
ただでさえ達也さんの頭の中は深雪さんでいっぱいなんだから。
アピールとまではいかなくても、せめて視界の中に居るようにしな

いと、思い出しても貰えなくなるかもだよ？」
「……それ、ありそう」
「断言しちゃうけど、達也さんはエリカちゃんが気にしてるようなことなんて、全く気にしてないから。
意識するだけ損だよ、きっと」
「そうか……そうよね。
鈍感と言うも生温いあの鋼鉄神経男相手に恥ずかしがってても始まらないか」
エリカはグッと拳を握った。
それを見て、美月が生温い笑みを浮かべる。
幹比古が入って来たのは、ちょうどそんな場面だった。
「あっ、やっぱり何も持って無い」
入ってくるなり、いきなり、そんな言葉を掛ける幹比古。
二人が「何それ？」と問い掛ける前に、手にしたビニール袋からサンドイッチを取り出した。
「はい、エリカ、ニンジンツナポテト。柴田さんは玉子サンドだったよね？」
「えっ、どうして？」
「あっ、ありがとうございます」
「どういたしまして」
これは美月に対する返事。
「どうしてじゃないだろ。
少しくらい食べないと、眠っていても腹は減るんだよ？」
そしてこちらはエリカに対する返事だ。
「へえ……ミキ、気が利くじゃない」
「どういたしまして、と言いたいところだけど、これは達也からの差入れだよ。
自分は避けられているようだから、僕に持って行けってさ」
幹比古の答えを聞いて、エリカと美月は顔を見合わせた。
「忘れられてはないようだけど……」

「早くも放っとかれちゃってるね……」
エリカが突然、決意も顕わに立ち上がった。
「な、なに？」
目を丸くした美月に、エリカは力強いガッツポーズを見せた。
「そっちがその気ならコッチにも考えがあるよ、達也くん！
あたしを空気扱いなんて絶対させないんだから！」
「構われたら逃げてくクセに」
「ミキ、何か言った？」
「別に、早く食べたほうが良いよ、と言ったのさ」
自分の分を取り出しながら、目を合わせずに答える幹比古。
流石に付き合いが長い幼馴染、偶に地雷を踏むとはいえ、エリカの扱い方は心得ていた。

それは、エリカがとりあえず腰を落ち着けて、三人で一緒にサンドイッチに齧り付いた、その直後のことだった。
「痛ッ……！」
美月が突然、顔を顰めて両目をきつく閉じた。
手からこぼれ落ちた玉子サンドを、エリカが空中で器用に掴みとる。
だがそれは反射的な行動で、彼女の目も幹比古の目も、突然苦しみだした美月に向けられていた。
美月はメガネを外して、両手で目を押さえている。
苦しげな呟きが、その唇から漏れた。
「……なに……これ……こんなオーラ、見たことない……」
何が起こっているのか悟った幹比古は、咄嗟に呪符を取り出して霊的波動をカットする結界を張った。ＣＡＤの携帯を禁止する校則の盲点をついた格好だが、そんなことを気にする人間は、今この場にいなかった。
外に意識を向けることで、幹比古もその波動に気づいた。
「これは、『魔』の気配……」

サイオンではなく、プシオンの波。だからエリカには分からないし、幹比古も意識を合わせるまで気づかなかったのだ。
純粋な「魔」の波動が、結界を越えて流れ込んで来ている。
これ程の強さなら、オーラを遮断するレンズの効果を打ち消して、美月の目に影響を与えても不思議はない。
「柴田さん、メガネをかけて」
しかし結界で緩和したこの状態なら、オーラ・カット・コーティング・レンズで波動を遮断できるはずだ。
幹比古の考えたとおり、メガネを掛け直させることで美月の容態は落ち着いた。
そこでやっと、何が起こっているのか考える余裕が生まれて――
――エリカと幹比古は、蒼褪めた顔を見合わせた。
「まさか、吸血鬼が学校に？」
「いい度胸じゃない！　ミキ、場所はっ？」
立ち上がった勢いで倒れた椅子がけたたましい音を立てたが、エリカは一顧だにしなかった。
顔をくっつける勢いで、幹比古に迫る。
「エリカ、落ち着いて」
幹比古も立ち上がり、冷静な、但し厳しい声で答えた。
「まずは得物を取りに行こう。僕も呪符だけじゃ心許ない」
「……そうね。美月、教室で待ってて」
「私も行く」
エリカの当然とも思える指示に、美月は首を横に振った。
「美月？」
「私も行った方が良いような気がするの。理由は……分からないけど」
口調は柔らかなものだったが、その奥から梃子でも動かぬ決意が感じられた。
「……分かった。でも、僕から離れないで」
「ミキ？」

幹比古の思い掛けない言葉に、エリカが目を丸くする。
だが彼の答えもしっかり考えた上でのもので、雰囲気に流された訳ではなかった。
「一人の時に襲われるより、一緒にいた方が対処しやすい。
それに、柴田さんの目は、きっと役に立つ」
「ハァ……ミキ、だったらアンタが責任持って美月をシッカリ守りなさいよ」
これ以上問答している時間がもったいないとばかり、エリカはCADを預けてある事務室へ走り出した。
幹比古もそのすぐ後に続いた。
彼も、そして美月も、ラブコメあるいは青春ドラマを演じている場合じゃないことは、重々理解していた。
ただ、美月を置いてきぼりにしないよう、手をつないで走ったのは、仕方の無いことだ――と、幹比古は自分に言い訳していた。

5－（13）　来訪者の正体（前）（後書き）

【蛇足】

作中に使用した「次元の壁」は、この世界を閉じた系に見せている、エネルギーの漏洩・流入を防止する架空の構造を意味しています。

物理学的な背景は全くありません。

余剰次元理論の解釈も作品に都合が良いようアレンジしたものですので、鵜呑みにしないようご注意下さい。

5－（14）　来訪者の正体（後）（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

5－（14）　来訪者の正体（後）

達也は早々に食堂を後にして、校舎の屋上に来ていた。
今日はエリカが機嫌を損ねていた所為で、達也・深雪・ほのかの三人のランチだった。（幹比古はエリカのフォローに走り回っていた）
傍から見れば、両手に花だ。
いや、実質面でも、両手に花だ。それ以外の何者でもない。
何せ、深雪もほのかも、好意を隠そうとしないのだから。隠す気がないのではなく、隠すというアイデア自体が彼女たちには無い、様に見えた。
無理のないことかもしれないが、チラチラと向けられる視線が、達也の心臓をもってしても、居心地悪過ぎた。
という訳で、逃げてきたのである。
第一高校主校舎の屋上はちょっとした空中庭園になっていて、瀟洒なベンチも置かれた校内の人気スポットになっている。
だが真冬のこの時期に、屋外の吹きさらしのこの場所で過ごす猛者は、ほとんどいない。
今日に限っていえば、彼ら三人だけだ。
寒さは魔法で何とかすれば良い、と思われるかもしれないが、校内は一部の例外を除いてＣＡＤの携帯禁止なのである。
しかしその一部の例外に含まれる深雪が寒気を遮断する魔法を使って、三人は寛ぎの一時を手に入れていた。
繰り返して言うが、三人を包んで深雪の魔法が働いている。
窒素を液化させる凍気を作り出す深雪の魔法だ。方向性が逆でも、氷点下にもならない寒気をシャットアウトするくらい、御茶の子さいさいというものだ。
だから、寒いはずが無い。

それなのにほのかは、達也の腕を隙間も無く抱え込んでいた。
ほのかがその暴挙（？）に出た瞬間は、深雪も醒めた――あるいは冷めた――目を向けたものだが、今では反対側の腕を張り合うように抱え込んでいる。
お蔭で達也は身動きもままならない。
両腕を拘束されているようなものだ。
ここで顔を茹で上がらせていたなら、まだ可愛げもあるというものだが、結構なボリュームのある胸を両側から押し付けられていても、達也は「しょうがないな」と言いたげな顔で苦笑いするだけだった。
後ろから刺されても文句は言えない、と主張する男子生徒は、相当な数に違いない。（仮に刺されたとしても、すぐに復元してしまうだけだが）
深雪もほのかも、さっきから何故か黙り込んでいる。
二人ともよくよく見れば、耳とか頬とかが赤くなっている。
寒いから、という理由ではないはずだから、つまりはそういうことなのだろうが、だったら手を放せば良いのに、と達也は思う。――こんなことを考える達也は、鈍感とは言われないまでも、女心を分かっていないとの誹りは免れないだろう。
もっとも、この状態になってからずっと、そんなことばかりを考えていた訳ではない。
二人が黙ってしまったので、達也は現在直面している事件の情報を頭の中で整理していた。
（「吸血鬼」の正体が古式の魔法師の間で「パラサイト」と分類される存在であるのは間違いない）
（パラサイトが人間の精神活動に由来する独立情報体であるという師匠の仮説も当たっていると考えて良いだろう）
（ＵＳＮＡのマイクロブラックホール実験が事件の引き金になっている、という雫の情報も、信じるに値する）
（ならば、異次元から侵入した情報体により事件が引き起こされた

……というのは、俺の仮説か）

（問題は、異次元から侵入した情報体という概念と、人間の精神活動に由来する情報体という概念が、どう結びつくか、だな）

（そもそも、「精神」の実体はどこにある？　異次元か？　高次世界か？　それとも、「何処にも無い」か？）

（それを言うなら、「イデア」はどこにある？　「エイドス」は？）

思考が袋小路に嵌まりかけているのに気づいて、達也は軽く頭を振った。そのアクションで、思考をリセットする。

（考え方は二通り）

（一つは、「魔界」と仮称した異次元からパラサイトは侵入した）

（もう一つは、「魔界」から流入したコントロールされていないエネルギーで、パラサイトが活性化した）

（結局、パラサイト――人間の精神活動に由来する独立情報体の正体が分からなければ、それ以上のことは分からない、か）

（だとすれば、考えるべきことは、どうやってそれを発見し、解析するかだ）

（精神由来の情報体であるなら、その構成要素はプシオンである可能性が高い）

（俺の知覚力では、発見することは出来ても、解析することは出来ないレベルか……）

彼の思考は、深雪が不意に身動ぎしたことで中断された。

「深雪、どうした？」

今の動きは、じゃれて来るような意図が全く無い、不快感による無意識のものだった。

達也の声音で、それが深雪を贔屓してのものではないと覚って、ほのかも密着していた身体を離す。

それと同時に、ブルッと身体を震わせる。

寒気を遮断していた魔法が効力を失っていた。

「あっ、申し訳ありません」

深雪は空いているほうの手に持ったままだったＣＡＤを、すぐに

操作した。
寒気はたちまち遠ざかった。
だが、深雪の顔色は冴えないままだ。
「いや、それよりどうしたんだ？」
達也は寒さを感じた素振りも見せない。
自己修復の魔法を使って、文字通り死と隣り合わせの鍛錬を積み重ねて来た達也にとって、この程度の寒さは強がる必要も無い。
それより、妹の見せた異常の方が気がかりだった。
「……酷く不快な波動が、肌を掠めたように感じて……いえ、気の所為でしょう」
深雪は申し訳無さそうに首を振った。
達也の寛いだ時間を乱してしまったことに罪悪感を感じているようだった。
だが、達也は深雪の謝罪を受け取らなかった。
「不快な波動？　それはサイオン波か？　それともプシオン波か？」
たった今、考えていたことと妙に符合して、気の所為で済ませることが出来なかった。
ただ、この質問は意味の無いものだった。
「わかりません……けど、お兄様がお気づきにならなかったのであれば、プシオンでは？」
サイオン波であれば、達也が気づかぬはずは無いのだから。
一本取られた、とそれを聞いて達也は感じたのだが、そんな呑気なことを考えている場合ではないとすぐに思い直した。
山のような機密を抱えている国立魔法大学に直結する端末が置かれている魔法科高校は、機密保持の観点から言えば魔法大学と同等のセキュリティを必要とするし、実際、高度なセキュリティが施されていた。不審者や盗撮・盗聴対策はもちろんのこと、魔法的な手段に対しては特に厳重な対抗措置が執られている。
いきなり発生したプシオン波は、対抗措置の術式に引っ掛かったのだろう。人に不快と感じさせる魔法的な波動を常時垂れ流してい

たりすれば、この国の官憲が放置するはずはないのだから。今は感知できなくなっていることから見ても、この波動の主が自分のプシオン波をコントロールする能力を備えていると分かる。

気持ちが悪い、というだけで有害な相手と決め付ける訳には行かないが、楽観視する理由はもっと少ない。今のような状況であれば、尚更のこと。

深雪に不快感を与えた相手は、現在敵対中の「吸血鬼」だと考える方が蓋然性は高い。

そのプシオン波の発生源を探る方法を頭の中でリストにして、どの方法がもっとも適切か検討を開始したところで、情報端末が鳴った。

音声通信の着信サイン。

達也は通話ユニットを耳に当てた。

『達也くん、大変よ！』

何の前置きもなく、この台詞がいきなり受話器から飛び出した。

気の弱い者なら実際には大したことが無くてもこれだけで――例えば「大変よ」の次に「ダルマさんが転んだ」と続いたとしても――軽いパニックに陥りそうな勢いだ。

せめて自分の名前くらい名乗れ、と普段なら思うかもしれないが、今はそんな場合ではないし、達也にとってもちょうど良いタイミングだった。

「七草先輩、細かい位置は分かりますか」

学内のＬＰＳ〔Ｌｏｃａｌ　Ｐｏｓｉｔｉｏｎｉｎｇ　Ｓｙｓｔｅｍ〕に介入すれば、現在位置を特定できる。前生徒会長の真由美は、ＬＰＳの管理者コードを知っているはずだ。（もちろん生徒会長権限を逸脱した違法行為である）

『吸血鬼が校内に――って、知ってるなら話が早いわ。

例のシグナルは通用口から実技棟の資材搬入口へ向けて移動中よ。

今日はマクシミリアンの社員が新型測定装置のデモに来る予定になっていたはずです』

（つまり、その中に紛れ込んでいるということか）
「了解です」
達也は勢い良く立ち上がり、そのままフェンスを跳び越えた。
続いて深雪も飛行魔法を発動させる。
飛行デバイスを持ち歩いていなかったほのかだけが、屋上に置き去りとなった。

◇◆◇◆◇◆◇

校内では生徒会役員、風紀委員など一部の例外を除いて、生徒のＣＡＤ携帯は禁止されている。
そのため生徒は、登校時にＣＡＤを事務室に預け、下校時に受け取ることになる。
預けてあるＣＡＤは、下校時間にならない限り、簡単には返して貰えない。
春の事件の時は、誰の目にも非常事態と分かっていたので、特例的にＣＡＤが返却された。だが今日、異常に気づいているのは生徒と教師のほんの一握りだ。事務室の係員は生憎その一握りに含まれず、エリカと幹比古の返却依頼は受け付けて貰えなかった。
――彼女たちだけでは。
「吉田、どうした……ああ、お前たちも気がついたか」
エリカと係員が口論しているところへやって来たのは克人だった。
「十文字先輩」
いくらエリカが跳ね返りでも、克人には一目置かざるを得ない。
先輩後輩に関係なく、器量と技量の差を無視することは出来ないのだ。
エリカが身を引いたカウンターに手を置き、克人は軽く、身を乗り出した。
それだけで係員――学校の職員が、生徒を相手に、気圧されている。

「緊急事態に付き、ＣＡＤを返却願います」
実は非公式ルールとして部活連の幹部もＣＡＤ所持の特権を与えられているのだが、克人は服部に会頭職を譲ってから、律儀に規則を守っている。
「し、しかし、まだ規定の時間では」
「緊急事態です」
だからといって、規則に縛られるつもりはないようだ。
気丈に職務を果たそうとする女子職員に対し、克人は更にプレッシャーを掛けた。
その結果、いい大人が可哀想に、血の気をすっかり失っている。
「放置すれば重大な結果を招く虞があります。
ＣＡＤの返却を」
「……少々お待ちください」
この職員を「脆弱」と誹ることは出来ないだろう。
余程の猛者でなければ、克人の意志に逆らえるものではない。
「この二人は俺のアシスタントです」
「……分かりました」
ただ、やはり、哀れを誘う姿ではあった。

◇◆◇◆◇◆◇

場所を特定したとはいえ、現場に空中から舞い降りるような乱暴な真似は、達也と深雪にも出来なかった。
首都を騒がせている吸血鬼の一体が校内に侵入したのは間違いないとはいえ、実際に何か騒ぎを起こしている訳ではない。警備の術式に引っ掛かった時点で監視はついているだろうが、マクシミリアンの社員となれば正規の手続きを踏んで校内に入って来ているのだ。
それに監視がついているのは、兄妹には、特に達也には、都合の悪いことだった。
魔法師ではなく魔物を相手にした経験は、達也も今回が初めてだ。

不用意に戦端を開いて、機密指定の術式行使を余儀なくされでもしたら、揉み消しと口封じにどれだけ手間が掛かるか、分かる範囲で想像しただけで憂鬱になってくる。

せめて、パラサイトに寄生されている「吸血鬼」が誰なのか特定できればやりようもあるが、マクシミリアンの社員は六人ものチームで来ている。あれだけ固まって動かれると、誰から電波が出ているのか判別できない。かといって、目撃者込みで全員消して――この場合は文字通りの「消滅」だ――しまうことなど、出来るはずもない。

達也たち兄妹は実験棟の空き教室に隠れて、資材搬入口に横付けされた移動実験室（に貨物室を改造したトレーラー）を見張っていた。

「リーナ？」

不意に深雪が声に出して呟いた。

達也は妹が声にするより早く、リーナがこそこそとトレーラーに近寄っているのに気づいていたが、改めて金髪の留学生に注意を向けた。

昨日の今日――二人の「決闘」は午前零時を過ぎていたから、暦の上では昨日である――で何事もなかったように登校してくる強心臓は、流石に大国の精鋭部隊だが、その図太さに似合わぬ小心な警戒振りだ。

標的に忍び寄っている、という感じではない。

それにしてはこちらの視線にも気づいていない。

単に人目を避けている、という印象だ。

達也が何とは無しにその様子を見ていると、トレーラーの脇に立ち止まったリーナにスーツ姿の女性が歩み寄った。

リーナの唇が「ミア」と動いた。

どうやらこの女性、ＵＳＮＡ軍がマクシミリアンに潜り込ませたエージェントなのだろう。

昨日の訊問で、リーナは吸血鬼を捕獲する為に動いていると言っ

ていた。敵対しているフリではなく、本当に敵対しているのだと。
だが同時に、脱走兵は判っていても協力者は判っていないとも言っていた。自分たちの身内に、吸血鬼化した協力者がいる可能性が高く、その正体は判明していないと。
まさかスターズのシリウスともあろう者が、正面から向き合っていて、何度も交戦し、取り逃がした相手のことが判らないということはないだろうが……達也はその女性に、リスクを冒して彼の「視力」を向けてみることにした。
そして、気づいた。
拡張した知覚に、別の観察者の探査手段が映った。
その女性の周りに、多数の「精霊」が舞っていた。

◇◆◇◆◇◆◇

「彼女です。間違いありません」
声を潜めた幹比古の言葉に、克人は無言で頷いた。
「あれは、リーナ。
そうか……彼女がグルだったのね」
怒気をはらむ声で低く呟いたのは、武装デバイスを小太刀の形態に展開済みのエリカだ。
達也と深雪はそれを誤解だと知っているが、彼女がそう思うのも無理のないことだった。
「視覚と聴覚を遮る結界を張ります。
機械は誤魔化せませんが……」
「そちらは俺が何とかしよう」
幹比古が克人と頷き会う。
幹比古の背後には、怯えを隠せない顔で美月が肩を縮こまらせている。
「エリカ、まだだよ」
「分かってる」

気が逸っているのは確かだが、それでも冷静さを保っている返事に頷いて、幹比古は手にした呪符を投げた。
六枚の短冊が、まるで見えない羽根を備えているように、空中を低く、滑っていく。
呪符は、トレーラーを取り囲む正六角形の頂点に着地した。
「行きます」
幹比古の両手が印を切った。
現代魔法とは術理の異なる、知覚阻害の領域魔法が発動した。

◇◆◇◆◇◆◇

高校生姿を見られることに気恥ずかしさはあったものの、周りが敵ばかりの孤独な任務の最中に仲間と話が出来るのは、やはり気が楽になるものだ。
同じ部屋に住んでいながらすれ違いが続いていた所為で、ミアと四日ぶりに再会したリーナは、顔を合わせるまでの躊躇はすっかり影を潜め、周囲への警戒も怠りがちになっていた。
ミアの方は一時的とはいえ部下という立場もあり、礼儀と遠慮は堅持していたが、それでも十分親しげな表情を見せていた。
当たり障りのない会話を楽しんでいたリーナは、ふとミアが見せた、何かを振り払うような動作に首を傾げた。
「どうしました、ミア。虫でもいましたか？」
四季のハッキリした温帯の真冬に、そうそう虫が飛んでいるとも思えなかったが、ミアの仕草はちょうどそんな感じだったのだ。
「いえ、気の所為のようです」
そう答えるミアの顔は、少し強張って見えた。
雰囲気も、ちょっと変わっている。
何となく、不快感を漂わせている気がする。
（羽虫に刺されたのかしら……？）
ミアが感じている不快感を読み取ったのではなく、不快に感じて

いるのは自分だということに、リーナはまだ気づいていない。
「――何これ？　囲まれた！？」
目の前の女性の雰囲気が一変したことよりも、認識阻害の領域魔法が自分を取り囲んで発生したことに、リーナの意識は奪われた。

◇◆◇◆◇◆◇

「これは、結界ですか！？」
自分が監視していた大型トレーラーが急に見えなくなれば、いくら深雪でも驚かずにはいられない。
自分を振り仰いで問い掛ける妹に、達也は「そうだ」と頷いた。
「幹比古だな。大した腕だ」
「吉田君の？」
一科生とか二科生とかに関係なく、高校一年生の少年がこれ程の規模と強度を持つ認識阻害の陣を構築したことに、深雪は更なる驚きを隠せなかった。
「効果は、視覚遮断と聴覚遮断か。
実体の移動を阻害する効果は無い……な」
どういう意図で動いているのか、打ち合わせがないことに不安はあったが、折角のお膳立てを無駄にするのはもったいなさ過ぎた。
達也は繋ぎっぱなしだった音声通話をサスペンドから復帰させた。
「七草先輩、司波です」
『どうしたの』
返事はすぐに返ってきた。
向こうも接続を維持してくれていたようだ。
「実験棟資材搬入口付近の監視装置のレコーダーをオフにして下さい」
これが街中なら七草家令嬢といえど無茶な要求だが、校内なら、ある意味好き放題なことをやってきた真由美には可能なはずだ。
『何故……と訊いても、答えてはくれないわね』

「お願いします」
『はぁ……ハイ、切ったわよ』
考えてみれば、真由美は随分と達也に甘い。
だが達也の方も真由美には結構甘いところがあるので、これは「お互い様」なのだろう。
あるいは、「持ちつ持たれつ」なのか。
「行くぞ、深雪」
「はい、お兄様」
顔を見合わせて頷き合い、達也と深雪は隠れていた教室の窓から飛び出した。

◇◆◇◆◇◆◇

完全に、直感頼りの行動だった。
ミアを突き飛ばし、リーナはその反動で自分も後ろに転がった。
砂だらけになりながら、内ポケットから旧式の情報端末を取り出す。
リーナが側面のスライドスイッチを滑らせると、端末が前後に割れた。
その中から現れる、板状の汎用型ＣＡＤ。
潜入工作員なら持っていて不思議のないギミックに、襲撃者――エリカも戸惑いはしない。
エリカはリーナに目もくれず、まだ倒れたままのミアに向けて、逆手に握り直した小太刀の先端を向けた。
リーナがエリカを吹き飛ばす為の魔法を発動する。
その魔法は、目の前に立ちはだかる対魔法障壁――事象干渉力の塊に阻まれた
「カツト・ジュウモンジ！？」
愕然として振り返った先には巌のような巨体。
サイズだけを見れば彼女にとって珍しくはない体格だが、その存

在感は見たこともないほど巨大だった。
事前の調査でも、その力量は要注意とされていた。
だが実際に体験してみると、まだこれ程の強敵が潜んでいたのかと驚かずにいられない。
リーナが克人に気を取られた一瞬で、エリカは最後の一歩を詰めていた。
「ミア！？」
仲間を案じた悲鳴は、見たものを信じられない驚愕の叫びに取って代わられる。
ミアが素手で小太刀の切っ先を受け止めていた。
ＣＡＤを使わず、防壁の魔法を掌に纏わせて。
その魔法には見覚えがあった。
ミアが身に纏っている禍々しい空気にも覚えがあった。
「貴女も感染してたの！？」
「何を今更！」
背後から聞こえてくるリーナの叫びを言葉で斬り捨て、刃で斬り伏せるべくエリカはミアに小太刀を振るう。
立ち上がったミアの首へ水平に走った斬撃は、掲げた手をかいくぐり正面から胸を貫いていた。
信じられない、という顔で自分の胸を見下ろすミア。
それはある意味当然の結果だ。
白兵戦の訓練を受けているとはいえ、リーナは魔法師。
武術を修めているとはいえ、幹比古は術者。
そして、魔法を身につけているとはいえ、エリカは剣士。
刀の間合いで、剣と拳で戦えば、エリカの技量はこれまでミアが相手にしてきた魔法師より数段上だ。
だが、次の瞬間、厳しく表情を引き締めたのはエリカだった。
スカートをはいていることに頭から頓着せず、足を振り上げ、ミアの腹を蹴りつける。
その反動で小太刀を抜き、更に軸足でジャンプして大きく後方に

跳び退る。
エリカの残像を、ミアの右手が薙いだ。
鉤爪状に曲げられた指は、角錐状の力場を纏っていた。
貫かれた胸の穴は、エリカやリーナが見ている前で、瞬く間に塞がった。
「本物の化け物ね」
ミアを睨み付けながら、エリカが吐き捨てる。
「だったら、これでどうかしら」
その声は、トレーラの陰から聞こえた。
その声と共に、冬がいきなり、勢力を増した。
ピンポイントに、ミアに向かって凍気が襲い掛かる。
ミアは物理的にも魔法的にも、抵抗する間もなく凍り付いた。

「深雪？」
あまりにも呆気ない結末に、思わず構えを解いたエリカが気の抜けた声で問い掛ける。
彼女の視線の先に姿を現したのは、間違えようもなく、深雪だった。
「ミユキ……タツヤ……」
深雪と、トレーラーの中から出て来てその前に立つ少年の姿に、リーナが口惜しげな呟きを漏らした。
「リーナ、どうやら知り合いらしいが、彼女は貰っていくぞ」
そう言いながら、氷の彫像と化した彼女の同居人へ向けて達也が歩み寄って行く。
「マクシミリアンの人たちは……殺したの？」
「人聞きの悪いことを。少し眠って貰っただけだ」
マクシミリアンの社員は協力者という訳ではなく、ミアの素性も知らなかった。単に、巻き込まれただけに過ぎない民間人だ。
彼らが騒ぎを起こしてくれれば状況打開のチャンスも出て来たかもしれないが、これ以上迷惑を掛けずに済んでホッとした、という

のも確かにリーナの本音だった。
「チョッと待ってよ。勝手に持ってかれちゃ困るんだけど」
仕方なくではあろうが納得して引き下がったリーナに代わり、勝者の権利を主張する構えを見せたのはエリカだった。
「達也くんにはバカバカしく見えるかもしれないけど、あたしたちには面子ってものがあるの。
その女がレオをやったヤツなら、いくら達也くんでも、くれてやる訳にはいかないわよ」
構えこそ取っていないものの、小太刀を握り直した手は、無駄な力が少しもなく、必要な力が余すところ無く込められている、即座に臨戦態勢へ移行できる状態だった。
いや、そんな細かなところを見なくても、向けられた眼差しだけで分かる。
エリカは百パーセント、本気だった。
「別に要らんな」
ただ、甚だしく勘違いしていた。
「えっ？」
案の定、達也の答えに猫騙しを喰らったみたいな顔で呆けている。
「その女は調べて、処分するんだろ？」
処分する、の一言に、リーナがギュッと唇を引き結ぶ。
自分には発言権が無いと、必死に言い聞かせている顔だった。
「調べた結果だけ教えてくれりゃあいい」
その表情を、達也は見ていない。
彼の目は、エリカと克人を同時に視界に収めていた。
「俺の方から連絡しよう」
克人の言葉に、達也が会釈で答える。
達也は克人とエリカを見ており、
克人は達也とリーナを見ており、
エリカは達也と深雪を見ていた。
その場を俯瞰的に見ているのは幹比古だけで、だから異常に気づ

くのは、彼が一番早かった。
「危ないっ！」
咄嗟に放たれた警告は、咄嗟のこと故、その短いフレーズしか口に出来なかった。
それでも、警告の役目は果たした。
放出系の魔法により引き起こされた空中放電は、克人の展開した障壁に阻まれ、達也が放った対抗魔法によりかき消された。
深雪とエリカが魔法を放った術者へ振り返る。
そこで、二人揃って、戸惑いに立ち竦んだ。
電撃の魔法を放った女性は、凍り付いたままだ。
生身の人間が、いや、人間でなくても、この状態で意識があるはずはないし、魔法が使えるはずもない――という、常識。
それが、覆された。
氷の彫像が電光に包まれた。
「自爆！？」
悲鳴を上げたのは、リーナ。
「伏せろ！」
克人と達也が同時に叫んだ。
達也が深雪を抱え込んで、幹比古が美月を両腕に庇って、克人が、エリカが、リーナが、身体を丸めて防御姿勢を取る。
深雪の氷を突き破って、ミアの身体が炎を発した。
乾いた紙の様に、一瞬で燃え尽きる。
そして――舞い散る灰の消え失せた、何もない所から、魔法の雷（いかずち）が達也・深雪・リーナ・エリカ・克人の五人に襲い掛かった。

5－（15）　勝利無き結末（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

5－（15）　勝利無き結末

雷雲どころか薄霞一つ無い空中から、電撃の雨が降り注ぐ。
雷ではない。
その速度は秒速二十万キロメートルに遠く及ばず、目で視認できる速度。
精々、クロスボウから射出される矢のスピードだ。
だがその小型サイズの球電でも、人を行動不能に至らしめるに十分だった。同時に十発も喰らえば、おそらく、死に至る。
それに、いくら目で追えるとはいえ十メートルに満たない距離から撃ち出されては、防壁を準備する時間的な余裕もあまり無い。
初撃を防ぎ止めることが出来たのは、その前の自爆を攻撃と誤認識して展開した防壁の効果が残っていたからだ。
この攻撃がいきなり繰り出されたなら、全員無傷とは行かなかったに違いない。
そしてまだ、危機が去った訳ではなかった。
深雪の背後に生じた閃光を、深雪が振り返るより早く、達也の魔法が消し去った。
エリカの頭上に生じた球電は、深雪が作り出した氷の粒子群を帯電させて消えた。
克人の障壁が電光を阻み、リーナのプラズマが電荷を中和した。
起動式が使用された形跡は見られなかったが、球電を作り出したのも、球電に運動ベクトルを与えたのも、サイオンで編まれた魔法式による事象改変だ。
電子が分子から分離させられ空中に収束する事象改変の兆候を読み取ることで、ランダムなポイントに生じているように見える攻撃に、辛うじて対処が間に合っている。
術者の姿は無い。

少なくとも、達也に「視える」範囲にはいない。
達也が「視界」に捉えているのは、魔法師ではなかった。
（あれがパラサイトか！）
魔法は、情報の海を漂うプシオンの塊から放たれていた。

◇◆◇◆◇◆◇

幹比古と美月は、他の五人からやや離れ、トレーラーの陰に身を潜めていた。
空中に生じた閃光が、友人たちに届く前に四散する。
それが今、美月の見ているものだ。
魔法の兆候や余波は見えていない。
魔法的な波動のほとんどを遮断する結界。
さっきの経験から、美月にはそれが必要だと幹比古は判断したのだった。
そのお蔭で、二人は電撃に曝されないでいる。
肉体を放棄した情報生命体には、光や音を認識する手段が備わっておらず、魔法的な波動でこの世界を知覚しているようだ。
友人たちの置かれた状況は、芳しいものではなかった。
攻撃は散発的であり、不意打ちの性格が強いもので、圧倒されているという感は無い。
だが反撃が出来ない。
攻撃する相手の位置が分からない。
魔物の攻撃が達也たちを傷つけられない代わりに、達也たちも魔物を仕留めることが出来ずにいる。
「おかしいな……何故逃げないんだ……？」
美月の耳に、幹比古の呟きが聞こえた。
それを聞いて、今まで気にならなかったことが、急に気になり始めた。
吸血鬼であったもの――パラサイトは、何故通用しない攻撃を繰

り返しているのだろうか。
パラサイトに意思や判断力があるとは限らないが、仮に本能的な、あるいは機械的な行動だったとしても、この場に留まり執拗に攻撃を続けている理由があるはずだ。
それは一体、何なのだろう？

◇◆◇◆◇◆◇

事象改変に結びつく前に、魔法式を分解する。
起動式の展開プロセス、あるいはそれに代わるものが無かった所為で最初は要領が掴めなかったが、達也は既にほぼ百パーセント、パラサイトの魔法を撃ち落せるようになっていた。
攻撃に対処する余裕が出来たことで、疑問を覚える余裕も心に生じる。
「司波、何故だと思う？」
それは克人も同じであるようだった。
今、達也と克人は、深雪、エリカ、リーナを間に挟む形で、背中合わせの陣形を取っている。
お互いの顔は見えないが、質問の意図を理解するのに不自由は無かった。
「意図的なものか本能的なものか分かりませんが、俺たちをこの場に留めたい理由があるようですね」
「逃げる気になれば、いつでも逃げられるということか」
「少なくとも俺には、拘束する手段がありません」
「俺もだ。そもそも何処にいるのか分からん」
達也も克人と似たようなものだった。
情報の次元の中で何処に位置しているかは視えていても、それが現実世界の何処に対応するのかが分からない。物質次元における座標が明確に定義されていない。
物質的な存在との関連性が酷く希薄で、魔法を発動する為だけに

必要な、細い糸で辛うじてつながっている感じなのだ。
それに相手はプシオン情報体。座標が分かっても構造が解らなければ、達也には攻撃手段が無い。
「リーナ、何か知らないか」
その台詞の最中に、達也は振り返りざまエリカにＣＡＤを向け、引き金を引いた。彼女の隣で生じかけていた魔法の兆候が霧散する。
「……ヴァンパイアの本体はパラサイトと呼ばれる非物質体よ」
達也の質問に黙秘を決め込もうとして、そんな場合じゃないと思い直したのか。リーナは渋々、という口調で答えた。
「ロンドン会議の定義だろう。それは知っている」
だが、達也の返事に、タップリ十秒、絶句した。
「……何なの、アナタたちって。まさか日本の高校生が皆、こんなだって言うんじゃないでしょうね」
「安心しろ。俺たちは色んな意味で例外だ」
特別、とは言わず、例外、と言った、その裏に潜む屈折した心情を、リーナが理解したかどうかは定かでない。
「それで？」
達也自身も明確には意識していなかったのだから、分からなくても不思議はない。
「パラサイトは人間に取り憑いて、人間を変質させる。取り憑く相手は適合性があるらしいんだけど、宿主を求めるのは自己保存本能に等しいパラサイトの行動原理らしいわ」
「つまり、俺たちの誰かに取り憑こうとしているのか」
「多分」
「どうやって」
「知らないわ。ワタシが教えて欲しいくらいよ」
「……使えん」
「悪かったわね！」
憎まれ口を交換している間にも、達也は克人と力を合わせ確実にパラサイトの攻撃をブロックしている。

しかし、パラサイトのエネルギーも限りがあるはず、と達也は、希望ではなく、懸念を抱いた。

情報生命体のエネルギー代謝のシステムは、彼にとって全くの未知。だが、無限に魔法を放ち続けることが出来るとも思えない。

彼らに取り憑くことが出来ないと判断したなら――それが意思的な判断であれ本能的な判断であれ――別の場所に宿主を求めて移動してしまうかもしれない。

だからと言って、わざと寄生させるなど、取り得る手ではない。彼はそこまで、自分のことを過信していなかった。

――打開策が、見えない。

◇◆◇◆◇◆◇

「まずいな……エリカが狙われている」

美月を背中に庇いながら、仲間たちの様子を見ていた幹比古の呟きは、意識せずに漏れたものだった。

「エリカに対抗手段が無いことを察知されたのか……」

エリカの魔法技能は基本的に、実体を持つもの相手の白兵戦技に偏っている。

薄く研ぎ澄ませた衝撃波を飛ばす程度のことは出来るが、実体を持たない敵を相手取るスキルは無かったはずだ。

幹比古本人は認めたがらないかもしれないが、彼は焦っていた。

もう少し落ち着いていたら、美月が聞き耳を立てていたことに気付いたに違いないし、もし気付いていたならこんな不用意な呟きは洩らさなかったはずだ。

「せめて何処にいるのか分かれば、手の出しようもあるんだけど……」

幹比古の独り言を聞いて、美月は決心を固めた。

「吉田くん、結界を解いて下さい」

「えっ？」

美月の存在を忘れていたわけではないが、不意に、思い掛けない要望を受けて、幹比古は狼狽気味に問い返した。
「柴田さん、何を？」
「何処にいるのか、分かるかもしれません」
それを聞いて、心の中で呟いていたつもりの言葉が声になってしまっていたと、幹比古はようやく気付いた。
しまった、という思いが顔に出てしまう。
もっとも、美月にそれを気にした様子は無かった。強い意志を込めて、幹比古をジッと見上げている。
「……ダメだよ、刺激が強過ぎる。
妖気を抑えた状態でもあれだけ影響があったんだ。
妖気を解放した今の状態でアレを直視したら、どんな事になるか分からない。最悪、失明の可能性だってあるんだよ」
「魔法師であることを選んだ以上、リスクは覚悟の上です。
エリカちゃんが危ないんでしょう？　今、役に立たなかったら、私の持っている力は無意味なものだし、私がここにいる意味もありません」
美月の言いたいことは分かる。
幹比古は、そういう価値観の中で育って来たのだから。
だが美月はそれなりに裕福で平凡な――魔法技能を持たないことを平凡と言うならだが――家庭に生まれ、先祖返り的に「見鬼」の能力を持って生まれた少女だったはずだ。彼女が生まれなければ先祖に術者の家系が交わっているということも分からなかった程の、薄い、傍系の血しか持っていない、魔法に携わる者の心構えとは無縁な両親に育てられた少女であるはずなのだ。
そんな覚悟を持つ謂われは無い、
そんな覚悟を持つ必要は無いはずの、少女。
そんなことを言っちゃダメだ――と、幹比古は口にしたかった。
自分を魔法の付属物と見做すような考え方は、魔法によって糧を得、多くの見返りを手にしてきた自分たちの様な人種が持っていれば良

いもので、偶々魔法の才能を持って生まれただけの少女が持つべきものではない、と思った。
自分もまた「少年」でしかないという事実を棚に上げてそんなことを考えていた幹比古は、
「……分かったよ」
結局、美月に頷くことしか出来なかった。
彼自身を縛る、名門魔法師の価値観に強いられて。
幹比古はブレザーのポケットから折り畳んだ布を取り出して美月に渡した。
訳が分からないまま受け取った美月に、「広げてみて」と指示する。
布は、意外に思うほど薄く、ショールと同じくらいの面積があった。
「それを首に掛けて。
危ないと思ったら、その布で目を覆うんだ。
柴田さんが掛けているメガネより効果はあるはずだよ」
幹比古の強い語調に押されたのか、疑問を呈する素振りも無く、美月は薄い布を首に巻いた。
と、幹比古の手が伸びてきて布を首から解き、左右同じ長さになるように肩から胸の前へ垂らした。
首や肩に触れられて美月の身体が緊張に強張ったが、幹比古はまるで気づいていない。
「約束して。決して、無理はしないと。
自分の為に誰かが犠牲になることなんて、エリカは望んでいないはずだから」
「……約束する」
幹比古にじっと見詰められ、美月は羞恥心を忘れて頷いた。
行くよ、という幹比古の声に、美月は彼に渡された布の両端をギュッと握り締めた。

はい、と答えを返すのに、たったそれだけの短い返事に、声が震えないよう気力を振り絞らなければならなかった。
怖くない、と強がることも出来ないほど、怖かった。
ただ不思議と、逃げ出したいという気持ちは起こらなかった。
これは自分の役目だという、奇妙な確信があった。
幹比古が美月に聞き取れない言葉を呟いた。
次の瞬間、混沌の波が押し寄せて来た。
目が痛いと感じる間もなかった。
全身に激痛が走った。
何処が痛いのかさえ、分からない。
折れそうになる膝に精一杯の力を入れ、目を見開く。
普段、自分がどれほど多くのものから目を背け、目を閉ざしているのか――美月はそれを思い知らされた気がした。
異界と化した視界の中で、一際目立つ、異物。
それがパラサイトだと、美月は直感的に理解した。
パラサイトの放つ魔法が、克人の障壁にぶつかり消える。
その電撃に隠れて伸びる細い糸が、美月には見えた。
その糸は魔物の「身体」から何本も伸びている。
長く、細く、深雪に、リーナに、エリカに迫り、克人の壁に阻まれ、達也の銃撃に千切れて消える。
その糸は、電撃に紛れ、生体電流に乗って、人の身体に侵入しようとしているのだと、理由も無く理解できた。
そういう風に「見えて」いた。
「あそこです」
自分の口が勝手に言葉を紡ぎ、自分の腕が勝手に指差すのを、美月は銀幕の向こう側の観客の様に、俯瞰していた。
「エリカちゃんの頭上、約二メートル、右寄り一メートル、後ろ寄り、五十センチ。そこに魔物が使っている接点があります」
糸がこの世界に伸びて来る穴を、美月は指し示す。
幹比古は答える間も惜しんで、ＣＡＤに指を走らせた。

扇形の、専用デバイス。
迦楼羅炎の術式が記された短冊を開き、サイオンを注ぎ込み、形成された起動式を回収する。
対妖魔術式（アンチ・デーモン）・迦楼羅炎――情報体に外的なダメージを与えることを目的とした、「炎」の独立情報体が美月の指定した座標に向けて射出された。

◇◆◇◆◇◆◇

達也は、「燃焼」の概念を持ちながら「何かを燃やす現象」として具現化せず、現象と切り離された情報体として投射された魔法式が、パラサイトにダメージを与えるのを確かに見た。
敵を前にした状況でありながら、驚きを禁じ得なかった。
ＳＢ魔法――精霊魔法の基本原理は達也も知っている。
現象と切り離され情報の次元を浮遊する独立情報体に干渉して、その独立情報体が記録する現象を具現化する、それが精霊魔法のシステム。
今、幹比古が見せた魔法も、理屈は同じだ。
違っていたのは、物質次元に現象として具現化するのではなく、情報として具現化した点だった。
情報の書換そのものを目的とする魔法なら、珍しくも目新しくもない。
彼が使う情報体分解の魔法も、ある意味で情報の書き換え自体を目的とした魔法だ。
だが幹比古の使った魔法は、「現象には情報が伴い、現象に伴う情報は情報の次元に記録される」という、魔法理論の土台を為すシステムを利用して、現象に伴う情報のみを発生させることで物質次元に干渉せず情報の次元にのみ干渉するものだ。現実の世界で生じていない「燃焼」が、情報の次元で「そこにあるものが燃える」という情報の書換を引き起こしているのだ。

魔法のシステムはこういうもの、という概念を逆転させたような魔法。

だが、それ以上に彼を驚かせたのは、今まで曖昧にしか捉えられなかったパラサイトの座標が、急にハッキリと見え始めたことだった。

それはまるで、不確定だったパラメーターに、いきなり具体的な数値が与えられたような感じだった。

シュレーディンガーの猫、というフレーズが脳裏に浮かんだ。

箱の中の猫が生きているのか死んでいるのか、箱を開けてみないと分からない、というあの思考実験の本質は、提唱者の意図に反して、観測者に観測されることによって不確かだった事実が確定する、という点にある。コペンハーゲン解釈を採用してもエヴェレット解釈を採用しても、観測者にとって不確定な事実が確定するという結果は同一だ。

パラサイト――「魔物」と呼ばれる情報体の場合は、観測者に観測されることによって、観測者にとってだけでなく、第三者にとっても同じ事が起こるのだろうか？

美月が視認したことで、物質次元における存在が強まったのだろうか？

だとするならば……

（今度は美月が危ない！）

自らの属性情報に変更を加える程の力を持つ視線に、気づかぬはずはない。

達也は慌てて「眼」を凝らした。

そこでは、彼が懸念したとおりの光景が展開されようとしていた。

思慮は一瞬。

達也は、ＣＡＤを持っていない左手を、美月へ向けて突き出した。

◇◆◇◆◇◆◇

見ている者は、見ている相手から見られている。
ニーチェの言葉を借りるまでもなく、これは道理だ。
見る為には視線の通り道が必要で、視線が通る道筋があれば相手から見ることも可能なのだから。
美月がパラサイトを視認したことで、パラサイトの方も美月に「目を付けた」のだ。
「来ます！」
美月の上げた、悲鳴のような警告を聞いて――あるいは、悲鳴そのものだったのかもしれない――幹比古は咄嗟に結界を再展開した。
「どこに！？」
急拵えの防壁に可能な限りの強度を付加しながら、幹比古はパラサイトの正確な位置を求めた。
ほとんど反射的に発動した防御の魔法は、前（さき）の結界の再展開。
隠蔽を主目的としたものだ。
侵入を防ぐ効き目は薄く、一旦認識されてしまうと隠蔽の効果は半減する。
こちらから攻撃を仕掛ける必要性を、幹比古本人が知っていた。
しかし。
それに応える余裕は、美月に無かった。
彼女は両目を押さえてしゃがみ込んでいた。
幹比古に、それを責めることは出来なかった。
美月が、「魔」と対峙する事など無い、そのような経験とは無縁な、普通の女の子だと幹比古は知っていた。
だからエリカは幹比古に美月を守るよう求めたのだし、幹比古もそのつもりだった。「魔」を目前にして美月が何も出来なくなるのは織り込み済みで、そうならないように距離を取っていたのだ。
それを、彼自身の計算違いで間近に迫られて、予想通り美月がパニックに陥ったからといって、どうして彼女を責められようか。
それに――そんな余裕も、無かった。
パラサイトから「糸」が伸びる。

幹比古にその糸は見えなかったが、電光に紛れて「何か」が美月を絡め捕ろうとしているのは判った。

幹比古も、手を拱いていた訳ではない。

正体を見極められなくても、霊的な干渉を断ち切る術はある。元々、幹比古たち古式の術者は物質的な現象に介入するより、霊的な現象に対処する方が専門分野だ。

だが同時に、古式魔法の伝統的な術法は準備に時間を要するものが多い。咄嗟の対応速度に劣っている、そのことが、現代魔法を主流に押し上げ、古式魔法が傍流に甘んじている理由なのだ。

それでも幹比古は、結界に開いた穴に向かって魔的な干渉を遮断する術法「切り祓い」を行使した。威力は儀式魔法に劣るものの、密教系魔法師の使う「早九字」に匹敵する速度を有する術だ。

剣を模したサイオンがパラサイトから伸びる糸を切り裂く。

だが、所詮は略式の術法。

呪詛を断ち切ることは出来ても、本体を斬り伏せるには及ばない。すかさず伸びてきた別の糸が美月に迫る。

幹比古は千日手を承知で、切り祓いを放とうとした。

――しかし、その刃は振り下ろされなかった。

幹比古が切り祓うより速く、不可視の輝きを帯びた烈風が、その本体ごと「糸」を吹き飛ばしていた。

◇◆◇◆◇◆◇

幹比古に借りた布は、確かに彼女のメガネで遮ることの出来なかった気持ちの悪い波動をシャットアウトしてくれた。

だが不思議なことに、「気持ち悪さ」を感じなくなっただけで、見えなくなった訳ではなかった。ほの暗い光を明滅させ細い糸を何本も垂らして空中を漂う姿は、まるで空を飛ぶクラゲのようだ。

だからといって、少しも恐怖感を和らげはしなかった。

それに、弊害もあった。

瞼を閉じても、見えなくならない。見たくないものが、見えてしまう。

自分を侵そうと伸びてくる、極細の触手。

それが彼女に見えているものだ。

生理的恐怖と本能的恐怖で、まともに思考することも出来ない。

幹比古が何かを叫んでいる、それは知覚していたが、何を叫んでいるのか、認識出来ない。

この時間があと少しでも続いていたなら、彼女の心は深い傷を負っていただろう。

身体が侵されるより早く、心が壊れていたかもしれない。

その彼女を救ったのは、煌めくサイオンの奔流。

半年前、実験室で見たのと同じ光景が、あの時以上の圧倒的な迫力を以て目の前に再現された。

◇◆◇◆◇◆◇

咄嗟のことではあったが、魔法戦闘の最中にサイオンの活性度が不足するということはありえない。

分解系の利き手は右手だが、術式解散（グラム・ディスパージョン）と違い術式解体（グラム・デモリッション）は右左に関係なく、ＣＡＤを持たなくても撃てる。

達也は瞬間出力の最大限まで振り絞ったサイオンを左手に集めた。

やはり、美月に見られることでこの世界における存在が確かなものになっているのだろう。彼女に近づくにつれて、パラサイトの座標情報から揺らぎが減少し、分布が収束している。

情報としては視えていても、何処にいるのか、何処からアクセスすればいいのか分からなかったパラサイトの存在が、今なら達也にもハッキリ判る。

ただ、それを伝える時間は無い。

幹比古に薙ぎ払われた触手――達也のイメージでは、不定形原生生物の糸状仮足に近い――は、すぐに再生され美月へと伸びている。

口惜しいが、選択の余地は無かった。

僅かに目を細め、

照準を見据え、射線をイメージし、

達也は、左手に凝縮したサイオン塊を解放する。

放出点を掌に設定した術式解体のサイオン流が、パラサイトに襲い掛かり、触手と本体を纏めて吹き飛ばした。

◇◆◇◆◇◆◇

「柴田さん、大丈夫！？」

動転の余り今にもひっくり返りそうになっている幹比古の声を聞きながら、達也は掲げていた左手を下ろした。

自らの無系統魔法がもたらした予想どおりの結果に、苦い思いを噛み締めながら。

術式解体は「解体」と名付けられているが、実態はサイオン流の圧力で情報体を押し流す術だ。

対象が魔法式の場合は、エイドスから魔法式を剥ぎ取るように作用することで、魔法を無効化する対抗魔法として機能する。大抵の場合は魔法式の情報構造を、剥離の際の衝撃で破壊するので「解体」という名が付いているのだが、術式解体のサイオン流それ自体に情報体を破壊する効果は無い。魔法式より強固な構造を持つ情報体ならば、情報構造を壊されずに押し流されるだけ、という結果になることは、十分あり得ることなのだ。

それを理解しながら、達也はあそこで、術式解体の使用を決断した。

美月を救う為に。

他の手を、思いつかなかったが故に。
「逃がしたか……」
克人の呟きに、達也は応えを返せなかった。
あの場面で術式解体を使えば、パラサイトを吹き飛ばしてしまうだけで、とどめを刺せずに逃がしてしまう結果になる可能性が高い。
分かっていたことだ。
達也はそう予測し、その通りになった。
「まあ、いい。逃がしたとはいえ、相手も無傷という訳ではあるまい。
今回は被害が出なかったことで、よしとすべきだろう」
克人の言っていることは、全くの気休めという訳ではない。
予想外の反撃を見せたパラサイトに対し、こちらの被害は確かにゼロだ。
だが今回の遭遇戦を仕掛けたのはこちらの方であり、もしかしたら相手に今日この場で戦闘に及ぶ意図は無かったかもしれないのだ。
必ずしも不可避ではなかった戦いを選んだ以上、犠牲者を出さないのは最低ライン。第一目標は敵の捕獲、次善の勝利条件は敵の滅殺。それがダメなら、敵勢力の全容を解明するための新たな、有力な手掛かりを得ること。
つまり、戦闘目的の達成という観点から見れば、今回の結末は零点に近い。辛うじてマイナスにならなかったというだけのものでしかない。
(無様なものだな……)
声に出さなかったのは、せめてもの意地だ。
声に出してしまえば、
深雪が気にする。
美月が気に病む。
エリカが傷つく。
それは達也にとって、無様の上塗りに他ならない。そんな置き土産を手に取るのは、真っ平だった。

5－（16）　スケープゴート（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

5－（16）　スケープゴート

“それ”は弱っていた。

“それ”は元々この世界に属するものではなく、自ら望んでこの世界にやって来た訳でもなかった。

“それ”は強いプシオン波動に引き寄せられる性質を持つ。

狂喜、悲嘆、憎悪、そして、願望。

祈り、と言い換えても良い渇望のプシオンの波動によって、形の無い世界から形を記した世界へ、一刹那だけ揺らいだ「壁」を越えて引きずり込まれた。

壁を越えた時の衝撃で、“それ”は十二に分裂し、“それ”を引き寄せた人間に宿った。

“それ”が存在し続ける為には、プシオンを吸収しなければならない。“それ”は存在するだけで、少しずつプシオンを排出しているからだ。

だが「形ある世界」では、“それ”は独力でプシオンを吸収することが出来ない。プシオンを集めることの出来る、形あるものと一体化しなければ、プシオンを補給できない。

本体だけの状態で何度も力を行使した結果、“それ”は「形ある世界」に来てから貯蔵した大量のプシオンを失っていた。その上、高圧のサイオン流を浴びせられて、物質次元に侵入していた部位が大きく削り取られた。

“それ”本体に、高度な思考力はない。宿主の隠された思考や抑えられた衝動を反映し増幅した結果、魔物と呼ばれているに過ぎない。

“それ”本体には、存在を続けるだけの、本能に似た思考力があるだけだ。

それでも、今の弱った状態では、意思の防壁に穴を穿ち新たな宿主を得ることは難しいと、その乏しい思考力で理解していた。

何処か、休む場所が必要だった。
意思が無く、大量のプシオンを含む場所。
例えば、抜き取られ本体から切り離されたばかりの、血液の中。
例えば、人の形を与えられたことでプシオンを集める、意思無き人形の中。
人気を避けてさまよっていた“それ”は、敷地の端に建つ倉庫の中で、休む「場所」を見つけた。

◇◆◇◆◇◆◇

リーナは人生初とも言うべき居心地の悪さを味わっていた。
屈辱的といえば大統領主催の茶会（ティー・パーティー）に招待された時の、女性にとって屈辱以外の何者でもない徹底したボディチェックを受けさせられた経験があるが、不快感で言えば今この時は、それに匹敵した。
「……では、スターズのシリウスともあろう者が、高校生相手に手も足も出せずに容疑者を奪われた、ということかね」
ミアは自爆したので最終的には奪われていません、と抗弁したかったが、査問委員がそういうことを問題にしているのではないと、流石に理解していたので、大人しく俯いていた。
「しかもその容疑者は、同じ部屋で寝起きしていたオペレーターだということじゃないか。
一ヶ月近く一緒に暮らしていて、気がつかなかったのかね」
その「容疑者」をオペレーターとして潜入任務に不慣れな自分の下につけたのは貴方たちではないか、とリーナは今度こそ声を大にして言い返したかった。
そんなことが言えるはずはない、と分かっているから余計、ストレスはが溜まる一方だ。
更に、ネチネチ、ネチネチと嫌みが続く。
ＵＳＮＡ軍内部にも、若すぎるリーナに嫉妬している者は少なくない。実戦から縁遠い軍官僚ほどその傾向が強く、今、彼女の前に

いる男たちは（何故か女性は査問委員に選ばれていなかった）、典型的な「実戦を知らない」軍官僚たちだった。

真面目に考えたり腹を立てたりするのが馬鹿馬鹿しくなる意味の無い（少なくともリーナの主観では）嫌みをボーっと聞き流していたリーナだったが、

「ところで、少佐のメディカルチェックは万全なのか？

感染者と一ヶ月同居していたのだろう？

少なくとも噛まれた痕が無いかどうか、すぐにでも確認すべきではないか。

もしまだであるなら、今この場ででも、確認すべきだ」

流石にこの暴言というか暴論というか、セクハラもいいところな言い種には、目を覚まさずにいられなかった。

今、ここで、裸になれというのか、この狒々オヤジどもは！

「それは少佐に対して、余りに失礼というものでしょう」

激発寸前で踏みとどまることが出来たのは、このタイミングの良い援軍があったからだ。

お陰でリーナは「若いのに冷静で思慮深い」という評判――評価ではない――を守ることが出来た。

「バランス大佐」

突如、会議――という名の吊し上げ――に乱入して来た女性を怒鳴りつけようとした査問委員は一人や二人ではなかったが、彼女が誰なのかを認識して、その行為を咎めることが出来る豪傑は、委員の中に一人もいなかった。

彼女の名前はヴァージニア・バランス大佐。

スターズという組織を前提に考えるとコードネームとしか思えない姓名だが（ヴァージニア〔乙女座〕にバランス〔天秤座〕だ）、これはれっきとした本名。

つい先日、三十代最後の日を迎えたはずだが、見た目は三十代に突入したばかりにしか見えない、颯爽としたお姉さんである。

だが、彼女が怖れられているのは、大佐という階級の故でも若作

りな外見の故でもない。そもそも階級を問題にするなら、この場に集った軍官僚の過半は将官を査問に掛けた経験を持っている。

委員を（よく言えば）遠慮させているのは、彼女の役職。

ＵＳＮＡ統合参謀本部情報部内部監察局第一副局長。

カナダ軍統合時に改組・新設された、情報部において制服組のみならず私服組の不法行為にも目を光らせている内部監察局のナンバー・ツー。それがバランス大佐の役職だった。

任務の性質上、この場にいてもおかしくない人物であり、寧ろ、最初から呼ばれていないことの方がおかしな人物だ。――彼女の地位と役職からして、この査問に合わせて来日していることを他の委員が知らなかった、などということは、あり得ないのだから。

その彼女がいきなり入ってきたからといって、咎め立てすることは不可能だった。

「失礼、発言をご許可願えますか？」

一段高い場所に座る査問委員をジロリと見渡して、言葉だけは慇懃に、大佐は発言を求めた。

「あ、ああ、許可しよう」

「ありがとうございます。

何故、本官が、この場に最初から呼ばれなかったのかは、別の機会にお訊きするとしまして」

査察委員の半数が怯んだ顔を見せたが、バランス大佐はそちらにチラリと目を向けただけで、リーナへ向き直った。

「今回、シリウス少佐に与えられた任務は、彼女の職務及び能力から見て適正なものではなく、任務の失敗を彼女の責に帰すのは妥当ではないと本官は考えます」

室内にざわめきが走った。

それはすぐに収まったが、それはバランス大佐がここまで真正面からリーナを擁護するとは予想されていなかったことを示していた。

「ですが、責任の有無とは別に、スターズ総隊長の地位にある者が魔法戦闘で遅れを取ったという事実は、憂慮すべきことです。

“シリウス”は、我が軍最強の魔法師なのですから」
リーナが両手をギュッと握り締めた。
バランス大佐の指摘は、誰よりもリーナ本人がそう思っていることだ。
口惜しくて、奥歯がギリギリと音を立て始めそうだ。
「シリウス少佐も当然、雪辱の機会を望んでいるはずです。
そうですね、少佐」
「ハイ……！」
リーナの返事に頷くと、大佐は壇上の一同に目を移した。
「本官はシリウス少佐の現行任務継続を提案します。
それと同時に、現地の支援レベルを最高水準に引き上げることを、合わせて提案いたします」
「最高水準の支援とは、具体的に何を意味しているのですか」
委員の一人が、大佐に問う。
大佐は不敵な笑みを浮かべて答えた。
「駐在武官に対する監査を名目として、本官が東京に駐在しようと思います」
今回沸き起こったざわめきは、中々消えようとはしなかった。
「また、本部長より既に、『ブリオナック』の使用許可を頂いております」
ざわめきがどよめきに変わった。
「大佐殿、それは真でありますか？」
リーナも「信じられない」という表情を浮かべている。
「本当だ」
階級秩序の観点から言えば余り好ましくない類の質問に笑顔で答え、大佐は更に一言、付け足した。
「私が持って来た」

◇◆◇◆◇◆◇

掌の中にサイオンを集め、握り締める。
それは、「術式解体」を行使する際の、いつものイメージ。
通常の術式解体であれば、握り込んだサイオンを展開中の起動式や対象物に作用中の魔法式に叩きつける。
だが今、求めている技術は、情報体が作用している実体を手掛かりに情報体を狙い撃つのではなく、情報の次元において情報体を狙い撃つ技。
情報の海を漂うバラサイトの本体を、直接、攻撃する手立て。
握っていた手を開く。
腕を突き出すことはしない。
物理的な方向性のイメージを補完する為の動作は、かえって邪魔だ。
情報の次元では、軌跡や航跡の類は生じない。何処に何があるか定義されれば、それは、そこに、ある。
標的の孤立情報体――式神の一種らしい――に重なるようにして、達也が放ったサイオン塊が情報次元（イデア）に出現した。
複数の物質が、同時に、同一座標に存在することは出来ない。
だが、情報にはそんな制約は無い。情報次元に存在する情報体には、物理的なアロケーションの制限も無いのだ。
孤立情報体と重なった「座標」で圧縮状態から解放された達也のサイオンは、孤立情報体に何の影響も与えず拡散して消えた。
「クッ……」
奥歯をギリッと噛み締めて悔しさを表す達也を、心配そうな表情で見つめる深雪の隣から、的作りに協力していた八雲がいつもと変わらぬ飄々とした口調で話し掛けた。
「流石の君も苦戦しているね。
出来ない人間にはどんなに努力しても出来ない類の技だからねぇ、これは」
突き放した言い方に、深雪がキッと殺気のこもった目を向ける。
表情を変えなかったのは流石、八雲と言うべきか。もっとも、よ

くよく見れば、こめかみ辺りに冷や汗らしきものが浮いているようにも見えたが。

「……三日で理の世界に遠当てを放てるようになったんだから、適性が全く無いということでもないと思うんだけどね……」

パラサイトが校内に侵入し、勝利無き苦い結末に終わったあの日から、ちょうど一週間。達也はその翌朝から八雲に修行を願い出て、今日で七日目となる。

八雲の言葉とは裏腹に、達也はこの二、三日、才能の壁を改めて実感していた。

三日で情報次元の標的にサイオン弾を当てることが出来た、というのは、並みの修行者からすれば高速で長足の進歩。

だが達也は元から、イデアに漂う情報体を認識することが出来ていた。並の修行者を比較の対象にするなら、彼は修行前から大きなアドバンテージを持っていたのであり、それにも関わらず未だに的に対してサイオン弾を作用させることも出来ない現状は、自分に対してポジティブな評価を下せるものでは、とてもなかったのである。

「まあ、適性の有無は、結果でしか判らないところがあるからねぇ。今日、まるで出来なかったことが、明日になると突然出来るようになったりするのも、術法というものだから」

そんな達也の苛立ちを汲み取ったのか、八雲がそんな慰めを掛ける。

「もっとも、『何時か』を待っていられない状況であるのも、また事実」

無論、ただ慰めるだけで終わるはずもない。

「君の場合は何処を狙えば良いのかは判る訳だから、遠当てとは別の攻撃手段を編み出すのも、一つの手だと思うよ」

それを聞いて、失礼だとは知りつつも、達也は苦笑を漏らしてしまった。

「そんなにホイホイと新しい魔法を開発出来るものじゃありませんよ。

行き詰まっているのは認めますが、それにしたって買い被り過ぎです」

「そうかな？

君は確かに、ある一面では非才だけど、術式の改良や開発に掛けては非凡な才能を持っているじゃないか。

自分から可能性を狭めてしまうのは、得策じゃないと思うけどねぇ」

「そうですよ、お兄様！」

尚も乗り気でない様子の達也を、今度は深雪が激励する。

「お兄様ならば必ずや、余人には考えも及ばない、素晴らしいアイデアを実現することが出来ます」

……いや、激励を通り越して、断言していた。

深雪の言葉は、推測の形すら取っていなかった。

「僭越ながら、どちらも諦めてしまわれる必要は無いかと存じます。術式解体による直接攻撃を第一の対策としつつ、新たな魔法の開発を並行して進めればよろしいのではないでしょうか」

口にしたのが深雪でなければ、達也は「無茶言うな」と一蹴しただろう。あるいは、「過労死させる気か」と笑って冗談で済ませただろう。

だが深雪の、期待と言うも愚かな、信頼しきった眼差しを前にしては、「出来ない」とか「不可能」とかその類の回答を返すことは、それこそ不可能だった。

◇◆◇◆◇◆◇

雪辱を期して動き出していたのは達也とリーナの二人だけではなかった。エリカも、幹比古も、真由美も克人も、それぞれに再戦――個体に対する再戦ではなく、パラサイトという脅威に対する再戦――へ向けて動き始めた二〇九六年一月末、凶報が、太平洋の向こう側から舞い込んだ。

「お兄様、これは……！」
達也たち兄妹は、それを朝食時、テレビのニュースで知った。
まるで日本が朝になるのを待っていたようなタイミングで発信されたそのニュースは、達也を絶句させるに余りある衝撃的なものだった。
「……雫が教えてくれたお話と、同じですよね……？」
「……随分と脚色されているみたいだけどな」
ようやく声を出せるようになった達也は、苦々しい声で答えた。
ニュースの中身は、とある政府関係者による匿名の内部告発の形式をとっていた。
内容は、こうだ。

――政府は、昨年十月三十一日、朝鮮半島南端で使用された日本軍の秘密兵器に対抗する手段の開発を、軍の魔法師に命じた。魔法師たちはダラス国立加速器研究所において、科学者の警告を押し切り、粒子加速器を利用して異次元からデーモンを呼び出した。
魔法師たちはデーモンを使役することで、日本の秘密兵器に対抗しようとしたのである。
しかし彼らは、デーモンの制御に失敗し、身体を乗っ取られてしまった。
昨年末より巷間を騒がせている吸血鬼の正体は、デーモンに憑依された軍の魔法師であり、犠牲者に対して軍は三重の責任を負っている。
一つ目は、無謀な実験を強行した魔法師たちを止められなかったこと。
二つ目は、リスクが高いと分かっていて強行した実験に失敗したこと。
三つ目は、正気を失っている可能性が高いといえども、軍に所属する魔法師が市民に危害を加えていること。
この不祥事の根本的な原因は、軍が魔法師を統制しきれなかった

ことにある。
　魔法という、強力ではあるけれども何時暴走するか分からない超自然的な力を利用することが果たして本当に国益に適っているのかどうか、我々はもう一度、良く考え直してみる必要があるのではないか――

「巧くオブラートに包んではいるが……」
「では、やはり!?」
「魔法師排斥が、本音だろうね」
　強張った表情の深雪に答える達也の苦い声は、憂慮しているというより呆れ気味のものだった。
「根っ子は『人間主義者』と同じか……魔法師でない者の方が圧倒的に多いのだから、メディアがどっちにつくかなんて、考えるまでもないが。
　それより問題は、ニュースソースだな」
　達也は電話機のコンソールに手を伸ばしかけて、その動作を中断した。
　誰に電話を掛けるつもりだったのか……いくつもの候補先の中から、深雪の脳裏には何故か、味方とは言えない相手の顔が浮かんでいた。

◇◆◇◆◇◆◇

　突如降って湧いた爆弾ニュース（スキャンダルの方が妥当かもしれない）に、リーナは（比喩ではなく）頭を痛めていた。
　学校になんて行っている場合じゃない、というのが彼女の率直な思いだったが、だからといって百パーセント実戦要員である彼女がいても事態の沈静化には何の役にも立たないし、彼女に「いつも通り」を指示したのはバランス大佐本人だ。
　上官直々の命令では、サボタージュを決め込むことも出来ない。

リーナはズキズキと痛む頭を抑えて「第一高校前」駅の改札を抜けた。
後は校門まで一本道、なのだが。
「おはよう、リーナ」
突然目の前に立ち塞がった人影に、リーナは頭痛を忘れて踵を返し、脱兎の如く逃げ出した。

「人の顔を見ていきなり逃げ出すってのは、どういう了見なんだ……？」
「ア、アハハハ……」
リーナの逃走は僅か三歩で失敗に終わった。
改札口には、予め深雪が回り込んでいたからだ。
ニッコリ笑うクラスメイトの笑顔を見て、「まさか、読まれていたの！？」とリーナは戦慄を覚えたのだが、それを口に出すのも口惜しかったので、今は笑って誤魔化すことしか出来ずにいた。
「まあ、良い。いや、本当は良くないが、今はそんな話をしている時間が無いからな。
好きこのんで遅刻する必要もないし、歩きながら話そう」
「……何の話？」
警戒感を露わにして、それでも大人しくついて来るのは、こんな所で騒ぎを起こす訳にはいかない自分の立場を弁えているからに他ならない。
彼女が余り忍耐強い方ではないということは短い付き合いで分かっているので、達也は即、本題に入った。
「今朝のニュースは見た？」
「……見た。不本意だけど」
本当に不機嫌そうに、リーナが答える。
端から見ると達也が何か怪しからん事を言ってリーナを怒らせているように見えるが、達也と深雪でリーナの左右をブロックしているので、積極的に覗き見しようとしない限り、第三者に見られるこ

とは無い。（覗き見しようとしている者があれば、達也はもちろん、深雪もリーナも確実に気がつく）

「あれは何処まで本当なんだ？」

達也の質問に正直に答えなければならない義理は無い。

だが、誰かに愚痴をこぼしたい気分だったリーナは、相手が自分の事情を知っていて今更隠す必要が無いのを幸いとばかり、ストレスの発散を始めた。

「肝心なところは全部、嘘っぱちよ！」

流石に声量は抑えているが、声の調子は激しいものだった。

「表面的な事実は押さえてあるから、余計にタチが悪い！

情報操作の典型だわ！」

「やっぱり、世論操作か」

納得、という達也の声音の意味が理解できず、リーナは首を傾げた。

「なに、やっぱりって？　世論操作？」

「いや、単なる推測だ。

それで、表面的な事実関係は正しいんだな？」

「……そうよっ！」

指摘されたくないことをズバッと指摘されて、リーナは数秒前の疑念を忘れ、不本意丸出しで吐き捨てた。

「しかしあの内容なら、当然機密扱いになっていたはずだ。

外部の人間が調べ上げるのは難しいと思うが」

「……『七賢人』よ、多分」

「七賢人？　ギリシャの？」

「“Ｔｈｅ　Ｓｅｖｅｎ　Ｓａｇｅｓ”って名乗ってる組織があるの。正体不明だけど」

リーナのこの台詞には、達也も驚きを禁じ得なかった。

「君たちに正体が判らない？　ステーツの組織なんだろ？

そんなことがあり得るのか？」

「あるのよっ！　口惜しいことに！」

リーナの表情は、本当に口惜しそうなものだった。
「七賢人って組織名も向こうから名乗ってきたもので、どんなに調べても尻尾が掴めないのよ。
辛うじて分かっているのは、セイジ〔Ｓａｇｅ：賢者〕の称号を持つ幹部が七人いるらしいってことだけ」
「まんまじゃないか」
「だから正体が判らないって言ってるでしょうが！」
「チョッと、リーナ。お兄様に当たらないで」
「なっ、わ……」
深雪の余りに盲目的というか、空気を読まない発言に、リーナは「なんですって！」「ワタシが悪いというの！？」と爆発しそうになったが、深呼吸を繰り返すことで何とか人目を集める真似をせずに済ませた。
「……気にしたら負けよ、アンジェリーナ、ミユキはかなりおかしいんだから。あんなブラコン娘のブラコン発言をいちいち気にしてたら限(きり)がないんだから。あんなブラコン気にしちゃ駄目ブラコン気にしちゃ駄目ブラコン駄目ブラコン駄目……」
気持ちを落ち着かせる為に口の中で呪文のように唱えていた言葉を聞き咎められることは、幸いにして無かった。
「リーナ？」
「えっ？　ゴメンナサイ、なに？」
「その七賢人だが、人間主義者とつながっている可能性はないのか」
達也の指摘を、歩きながら少し考えて、リーナは頭(かぶり)を振った。
「百パーセントの否定は出来ないけど、多分、それはない。
過去の例で判断する限り、七賢人はイデオロギーや狂信とは無縁の組織よ」
「狂信はともかく、イデオロギーと無縁の組織なんてあり得るのか？」
「……言い方が悪かったわね。
彼らには、普通に言われているようなイデオロギーは無いわ。

ウチのプロファイラーによると、彼らは刹那的で愉快犯的なメンタリティの持ち主だそうよ。
一つのイデオロギーに執念を燃やし続けるというあり方は、彼らのイメージにそぐわない。
何より、七賢人はワタシたちに協力してくれたこともある。随分、一方的な協力の仕方だったらしいけど」
七賢人の名前はその時に知ったのよ、と付け加えるリーナに、達也は成る程と頷いた。
確かに、人間主義者とはイメージが違う。
「最後に、もう一つだけ訊かせてくれ」
校門まではまだ些かの距離が残っていたが、達也は質問の切り上げを宣言した。
「……なに」
今まで以上の真剣な声に、リーナの返答にも警戒感がみなぎる。
「パラサイトをこの世界に招いたのは、意図した結果か？」
「いいえ」
達也の質問に、リーナはキッパリと否定を返した。
「本気で言ってるのなら、怒るわよ、タツヤ」
そう言いながら、既に結構怒っていた。今はただ、その矛先が達也に向いていないだけだ。
「ワタシは既に、三人の『感染者』を処断しているのよ。
これが誰かの企んだ結果だというなら、ワタシはソイツを許さない」

◇◆◇◆◇◆◇

マイクロブラックホール実験のリーク元と人間主義者の関係を、達也に向かって、リーナはキッパリ否定した。
達也も、リーナの推測を妥当なものと判断した。
だが、そんな二人を嘲笑うように、人間主義者による魔法師排斥

運動は大きな潮流と成って、北アメリカ大陸を東から西に浸食していった。

その潮流が世界に広がるのも時間の問題だった。

季節に遅れること三ヶ月、「冬」が到来しようとしていた。

5－（16）　スケープゴート（後書き）

第五章はこれで終わりです。
第六章は、第五章の続編（解決編）になります。

6－（1）　義理と好意と悪だくみ（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

6－（1）　義理と好意と悪だくみ

かつて、外交と言えば、砲艦外交か密室外交と相場が決まっていた。

やがて、バランス・オブ・パワーの時代を経て大同盟が外交の基本方針となり、それと同時に外交スタイルも会議・セレモニー型が主流となったが、砲艦外交や秘密外交が姿を消したわけではない。

秘密外交はセレモニーを成功させる為に欠くことの出来ない下準備として、これに携わる者は外交の花形から外交の職人として、今も世界を暗躍している。

何時でも、何処でも。

この世から陰謀の種が尽きることはない。

今夜も。

この国でも。

「……全く、狂信者という輩は度し難いものです」

「ハハハ……あの手の連中は、走らせるのは簡単ですが、手綱を取るのは困難ですから」

テーブルを挟んで、スーツ姿の中年の男が、向かい側に座る、やはりスーツ姿の、但しこちらはモンゴロイドではなくコーカソイドの、中年の男に酒を勧めた。

コーカソイドの男は在日期間が長いのか、あるいは趣味、もしくは教育の賜物なのか、差し出された徳利から注がれる透明な液体を小さな杯、つまりお猪口で受けると、作法に従いそのまま口元に運ぶ。

「改めて考えると実に不思議で、何と言いますか上品な酒ですな、この清酒という酒は……蒸留していないのに無色透明なのですから」

そつなく、相手国に対するお世辞を挿むのも忘れない。

「いえいえ、ワインの鮮やかな赤に比べれば華やかさに欠けていることは否めません。
無論、味の方はご満足いただける物をご用意したつもりですが」
お世辞を受けた方も、謙遜とアピールを忘れない。
向かい合う二人の共通点は、心の裡を、見せないこと。
「本当ですね……このまま心地良く酔いしれたいところですが、先程も申しました狂信者どもが無法を尽くしているものですから、なかなかゆっくりは出来ません」
「貴国滞在中の同胞の安全に、特段のご配慮をいただいている件につきましては、感謝にたえません」
二人の声の調子に変化は無い。
顔にも薄い笑みが浮かんだままだ。
だが、この二人と同じ世界に生きる者なら、最前までとは異なる空気を感じ取れたはずだ。
「いえいえ、当然の義務ですから。
とは言うものの、相手は理屈の通じない狂人ですからな……
例えば、中華連合艦隊を殲滅した大爆発は科学的に体系化された魔法技能によるもので、悪魔の仕業などではないと、いくら説明しても聞こうとはしないのですよ」
「相手が聞く耳を持たないからといって、保護すべき外国人に被害が出た時の言い訳にはなりませんからね……ご同情申し上げます」
二人は交互に徳利を傾け（もちろん相手に向けてだ）、示し合わせたように、同時に杯を呷った。
「これは愚痴と思って聞いていただきたいのですが、せめてあの“グレート・ボム”の概要でも明かしていただければ、彼らを大人しくさせることも出来ると思うのです」
「……これも愚痴と思って聞いていただきたいのですが、朝鮮半島南端で使用された兵器については、軍部が情報を握り込んでいるのですよ。
いくら機密性が高いといっても、シビリアンコントロールは民主

主義の基本なのですが……軍人というのは、何故ああも頑固なのか」
二人の視線が瞬時、火花を散らし、刹那の後には、どちらの瞳も空っぽの笑みを浮かべていた。

◇◆◇◆◇◆◇

「今、聞いてもらったとおりよ」
盗聴した会話の再生を止めて、藤林が顔を上げた。
「今回はウチの外交官連中も、結構頑張ってるみたい。流石に『戦略級』の重要性と特殊性は理解出来ているんでしょうね」
「それに」
何事か言い淀んだ達也に向かって「んっ？」と小首を傾げ、藤林が続きを促す。
「……それに、外務省にも面子があるのでしょう。三年前、一方的な侵攻を受けて、日本中から腰抜けの罵倒を受けながらも必死で非軍事的解決を探り奔走していたというのに、その努力を真っ向から虚仮にされたんですから」
「それは中華連合のやったことですよね……？」
藤林には「釈迦に説法」だったようだが、深雪はピンと来なかったようだ。
まあそれが普通だろうと思える程度には、達也にも常識があった。
「日本とＵＳＮＡは同盟国だが、同時に西太平洋地域における潜在的な競合国でもある。
日本の適度な弱体化は、ＵＳＮＡの利益に適っているんだ。
一方、中華連合は大国といっても、日米同盟と正面からやり合う力はない。そんな博打を打たなければならない程、国内状況も追いつめられてはいない。
では何故、中華連合は横浜侵攻という暴挙に出たのか」
達也は一旦言葉を切って、深雪に考える時間を与えた。

彼は妹を、綺麗なだけで頭が空っぽなお人形にしたくなかった。
「……中華連合には日本とアメリカを同時に相手取る力はない……アメリカは日本の同盟国だけど、日本が今よりも少し弱くなれば良いと考えている……」
独り言のようにそう言って、深雪は「あっ！」とばかり口元に手を当てた。
「まさか……中華連合とＵＳＮＡが裏で手を結んでいたのですか？」
達也は「よくできました」と満足げに微笑み、藤林はその二人の様子に見て、苦笑を漏らしていた。
「手を結んでいた、というのは言い過ぎかもしれないけれど、一種の共謀関係にあった可能性は、かなり高いんじゃないかな」
達也が藤林の方へ目を向けると、彼女は苦笑を消して小さく頷いた。
「例えば、中華連合の軍事侵攻に対し、ＵＳＮＡは太平洋艦隊の出動を故意に遅らせる、とかね」
「実際、あの時のＵＳＮＡ艦隊の反応は、後から思い返してみれば、不自然なくらい鈍いものだったわ」
「おそらく中華連合軍の目的は、領土の占領や重要施設の破壊ではなく、技術者と技術の拉致強奪にあったのではないでしょうか？」
「そうでしょうね。場所と戦力から考えると、それ以上の戦果は望めないもの。
艦隊の動員は、あくまでも作戦失敗に備えたものだったのでしょう。
結果は彼らにとって、藪蛇もいいとこだったけど」
「雉も鳴かずば撃たれまい、ではないかと。
藪を突いて出てきた蛇に悩まされているのは、寧ろ俺たちの方ですから」
達也はポーカーフェイスを装っていたが、
「最大の当事者の発言には、流石に実感がこもっているわね」
どうやら藤林には通用しなかったようだ。

「さてと……私はそろそろお暇するね。
いくら『青田刈り』って名目があっても、軍人が日曜日の一般家庭に長居するのは不自然ですものね」
「今日はわざわざ、ありがとうございました」
立ち上がる藤林に、同じく立ち上がりながら達也は謝辞を述べた。
大してお構いも出来ませんで、の類の謙遜はしなかった。本人は意識していないが、深雪がもてなしたのだから、行き届かぬようなところなどあったはずがない、と達也の頭の中では処理されていたのである。
玄関まで見送ったところで、藤林は「あっ、そうそう」と言いながらハンドバッグに手を突っ込んだ。本当に今まで思い出さなかったのではなく、当然これは、演出だ。
彼女が取り出したのは、綺麗にラッピングされた薄い小箱。
「ハイ、二日早いけど義理チョコよ」
「義理ですか」
欠片も期待を持たせない、清々しい正直さ加減だった。
義理チョコという割にはお洒落な包装だが、藤林の何事にも手を抜かない性格は達也も知っているので、そんなことで都合のいい誤解はしなかった。
「義理じゃ不満？」
悪戯っぽく藤林が笑う。
その瞬間、深雪の瞳が鋭い光を帯びたが、
「いえ、まったく」
即返された達也の答えに、錯覚と見紛う程キレイさっぱり、その光は消えた。
お互いに別れの挨拶を交わして閉ざされた扉の向こう側で、若い女性の噴き出す声が聞こえたが、兄妹は何事も無かった顔でリビングに戻った。

◇◆◇◆◇◆◇

戦争（第三次世界大戦）を境にして、この国では文化の潮流がガラッと変わった、というイメージが強い。

だが実際には、それほど大きな変化があった訳ではなく、所謂「軽薄な」風習も廃れず続いているものは多いのだ。

その一つが、明日に控えたバレンタインデー。“聖バレンタイン・デー”は本来、そんな軽薄なものではなく、とか、チョコレートをプレゼントするなんてお菓子会社の陰謀、とか、いくら力説しても無駄なこと。若者はそんな事など百も承知で、自ら踊っているのだから。

バレンタインデーを明日に控え、第一高校の校舎も一日中、浮ついた空気に包まれていた。こういうところは、魔法師（の卵）も普通の少年少女だ。

「……光井さん、今日はもう上がってもらっていいですよ」

放課後の生徒会室。

さっきから繰り返し鳴っているエラー音。

その発生源であるほのかに、苛立って、ではなく、何処か具合が悪いのかと気遣って、あずさがそう声を掛けた。

「そうよ、ホノカ。貴女、今日はもう帰った方が良いわ」

色鮮やかな蒼の瞳を曇らせてそう主張したのは、臨時役員に収まったリーナだ。彼女の正体は一般生徒のみならずあずさや五十里にも伏せられているとはいえ、なかなか大胆といえる。――彼女自身には選択の余地が無かった、という事情もあったりするのだが。

「いえ、大丈夫です」

明らかな不調を見せながら、ほのかは気丈な答えを返す。

……不調の原因を自覚しているから、心遣いに甘えるのが恥ずかしい、という理由があったのだが、思いこみが強くて過剰な責任を抱え込み無理をしがちな普段の彼女を知っている面々にとっては、心配を増幅するものでしかなかった。

「光井さん、責任感が強いのは立派なことだと思うけど、休むのは悪い事じゃないんだよ」

五十里にそう言われてもまだ「じゃあ休みます」と言わないほのかにとどめを刺したのは深雪だった。

「ほのか、本当に無理をしない方が良いわ。いくら頑張っても、今日は仕事にならないでしょう？」

深雪も（表面的には）大層心配そうな顔をしている。ともすれば生身の人間であることを忘れさせる神秘的な美貌の彼女がそういう表情を浮かべると実に様になっていて、あずさと五十里とリーナが一斉に「ウンウン」と頷いた程だ。

だが、自分の「不調」の理由を深雪が察しているということに気付いているほのかとしては、大変居心地の悪い台詞だった。特に、

「今日は仕事にならない」の件（くだり）が。

「そう……ね。じゃあ……」

少しの逡巡を見せた後、ほのかは勢い良く立ち上がって勢い良く頭を下げた。

「まことに申し訳ありません！　今日はお先に失礼させていただきます。明日から、また頑張りますから！」

「ええ、明日は頑張りましょう」

先輩二人に先んじて（差し置いて？）、深雪がほのかに応えを返した。明日「も」ではなく明日「は」と言ったことに、あずさは微かな違和感を覚えたが、その意味を理解出来たのはほのか本人だけだった。

失礼します、と頭を下げて、そのままクルリと踵（きびす）を返したほのかの顔は、頬の辺（あた）りが赤く染まっていた。

◇◆◇◆◇◆◇

「……という一幕がありまして、ほのかは先に帰りました」

学校から駅へと続く帰り道、達也にそんな説明をする深雪の姿が

あった。
「あ～、……もしかして、明日の準備か」
「間違いありません」
深雪が自信たっぷりに頷くと、達也はむず痒さを堪えているような顔になった。
「……ほのかはそういうことに力を入れそうなタイプだからなぁ」
「嬉しいですか、お兄様」
嫉妬を込めて、ではなく、からかう口調で問い掛ける深雪に、動作ではなく雰囲気で、達也は肩を竦めて見せた。
「嬉しいというより、申し訳ない気がするな。品物でお返しは出来ても、肝心のものが返せないからね……」
恰好付けというには些か深刻な声音で呟いた達也の袖を、深雪が遠慮がちに掴んだ。
「……どうか、そのようなお気遣いはご無用に願います。ほのかもわたしも、ただお兄様に喜んでいただきたい一心なのですから」
「……そうか」
「そうです。お兄様は、何も仰らず受け取って下さるだけで良いのです」
「あの～、雰囲気出してるところに申し訳ないのだけど」
言い難そうに、遠慮というよりイヤイヤ、やむを得ずといった顔つきで口を挿んだリーナの方へ、達也は深雪に袖を掴ませたまま目を向けた。
「雰囲気？　おかしな事を言うんだな、リーナは」
おかしいのはあなた達の頭よ！　とリーナは声を大にして主張したかったが、力ずくならともかく口で達也に勝てないのは、散々思い知らされている。こういう時は、言いたいことをさっさと言ってしまうのがベストだ、という学習結果に、リーナは従うことにした。
「要するに、ホノカの調子が悪かったのは、タツヤにあげる明日のチョコレートが気になっていたから？」
「よく分かったわね、リーナ。

チョコレートをあげるのは日本固有の習慣だと思っていたけど」
リーナは達也の顔を見て問い掛けたのだが、答えは当たり前のように深雪から返って来た。……このケースに限って言えば、達也には答えようがない質問だったので、リーナも特に「またこの兄妹は」とは思わなかった。
「そんなことないわよ。
“バレンタインデーにチョコレート”は有名なジャパンカルチャーだもの。
ステイツでも真似してる子は多いし、ミユキ以外のクラスメイトからも散々聞かされてるしね」
深雪の疑問に対するリーナの回答は、少しうんざりした口振りだった。
「ふ～ん……リーナは誰にあげるの？」
「ミユキまでそれを訊くの……？」
嫌そうに顰められた表情から察するに、同じ事を相当しつこく訊ねられているようだ。
どういう形をとるか、は別にして、この手の関心（好奇心）そのものは百年前も同じだったし、あと百年過ぎても変わらないに違いない。
「誰にもあげる予定は無いわよ」
「あら、義理チョコも？
それとも、義理チョコの習慣は伝わらなかったのかしら」
「知ってるわよ、義理チョコくらい」
「だったら、あげると喜ぶ人も多いんじゃない？
留学して来る時にお世話になった人とか」
深雪の顔を、軽く睨みつけるリーナ。
だが深雪の顔からは、軽い好奇心以外、他意は感じられなかった。
「ワタシが個人的な贈り物をしたりしたら、色々と問題が発生するのよ」
「そうなの？

人気者は大変ね」
深雪の呟きに、リーナはグッと息を詰まらせた。
実力よりも人気が先行している、と言われているように感じたからだが、それが被害妄想だということも彼女には分かっていた。
「人気者というならミユキの方が凄いじゃない。
ミユキは誰にあげるの？
やっぱり本命はタツヤ？」
深雪が達也に本命チョコを渡すのは自明のこと、せいぜい惚気なさい、思いっきり弄ってあげるから、とリーナは考えたのだが……
「何を言ってるの、リーナ。
お兄様とわたしは兄妹なのよ。
実の兄を相手に本命チョコなんておかしいでしょう」
「……」
二の句を継げないとはこの事か……と、リーナは心の底から実感した。

◇◆◇◆◇◆◇

「……ねえねえ泉美、お姉ちゃん、何してるんだと思う？」
「チョコレートを作っている……のだと思いますけど」
「じゃあさ……あの含み笑いは何だろうね……？」
七草家の双子の姉妹は、台所の入口でひそひそと耳打ちを交わしていた。
「楽しそうに……見えますけど。一応は」
「でもさ、あれはチョッと、違うんじゃない？」
二人の視線の先には、楽しそうに板チョコを湯煎する真由美の姿。
ただ、楽しそうと言ってもそれは断じて、バレンタインデー前日の恋する乙女が浮かべる笑みではあり得ない。
「……どなたに差し上げるものなのでしょう」
真由美の含み笑いは既に「うふふふふ」を通り越して「フッフッ

フッフ……」とか「クックックック……」とかに近いものになっている。まるで毒殺でも企てているかの如き姉の姿に、双子は蒼褪めた顔を見合わせた。

「香澄ちゃん、お姉さまが使っていらっしゃるチョコレートですけど、あれって……」

「あ～、そうだね……カカオ九十五パーセント、糖類ゼロパーセントってヤツだ……」

過去にはカカオ分九十九パーセントを謳った商品が発売されたこともあるが、現在市販されているものとしては最も苦みの強いチョコレート、それが真由美の使っている材料だった。

「それとさ、あの袋……」

「エスプレッソパウダー、ですわね……」

「お姉ちゃん、何か嫌なことでもあったのかな……」

◇◆◇◆◇◆◇

――圧し固めたサイオンの砲弾が情報（イデア）の次元に出現し、短い軌跡を描いて孤立情報体に激突した。

「今のはまあまあだね。今朝はここまでにしておこうか」

「……ありがとうございました」

八雲に向かい息を整えて一礼する達也の許へタオルを手にした深雪が駆け寄る。

真冬というのに額を伝う大粒の汗を拭い取る達也を暫し気遣わしげに見詰めた後、深雪は八雲へ話し掛けた。

「先生、術式解体にしては、お兄様の消耗が少々激しいように思われるのですが……」

深雪の質問に自分で答えようとした達也を目で制し、八雲は大丈夫とばかり首を振った。

「少しくらい消耗するのは仕方ないよ。

達也くんは理（ことわり）の世界に、本来は存在しない『移動』と『排他』の

概念を持ち込んだのだから」
深雪は達也が対パラサイトの修行を始めた初日以来、「邪魔になるから」と遠慮して立ち会っていない。だから、達也がどんな工夫をしているのか、八雲に聞くまで知らなかった。単に、術式解体を情報次元でも使えるように練習しているとしか思っていなかったのだ。
「それは……何か、副作用を生じるアレンジなのでしょうか」
彼女は、兄が最強の魔法師であることを確信しているが、出来ない事もたくさんあると知っている。勝利の為にそれが必要なのだとしても、兄の心身を損なう――例えば、寿命を縮める――ものであるなら、泣き落としでも何でも使って、すぐに止めて貰うつもりだった。
「いや、そんなものは無いと思うな」
そんな深雪の想いと裏腹に、八雲の回答はあっさりしたものだった。
「達也くんは認識方法を変えているだけだからね。的に直接『当てる』のではなく、的の『手前』から三十二分の一秒刻みで座標を設定し、それを無意識下で繋ぐことで理の世界を『移動』する『排他』の概念弾を作り出した――そうだよね、達也くん」
「そういうことだ、深雪。思考力と認識力をフル回転させる所為で精神的に……ああ、いや、神経的に疲れるだけだ。副作用を負うような危険な真似はしていないから心配するな」
「そうですか……」
達也にハッキリそう言われて、深雪は一安心した様子だった。
「では、パラサイトに対する攻撃手段についても目処が立ったのですね」
流石はお兄様です、とキラキラした目で自分の顔を見上げる妹に、達也は意図せず苦い笑みを浮かべた。
「いや」

「生まれたばかりの“子”なら滅ぼせるだろうね。
でも年月を経て存在が固まった“親”が相手だと、難しいかもしれない」
苦い笑みのまま、首を横に振ろうとした達也。
それを遮って、八雲が微妙な評価を下した。
――おかげで、兄妹は気まずい思いをせずに済んだのだった。

今朝、深雪が達也について来たのは気まぐれではないし、ましてや達也の修行の進捗チェックでも、無論、ない。
二月十四日の朝、深雪が八雲の寺に来るのは、一昨年、昨年に続いて三回目だった。
用件は、言うまでもないだろう。
僧坊に戻り、深雪は、置いてあった鞄から取り出した綺麗な包みを八雲に差し出した。
「先生にとっては異教の風習かと思いますが、どうかお受け取り下さい。先生には兄がいつもお世話になっておりますので」
途端に、八雲の顔がにんまりと笑み崩れる。
「いやいや、異国異教の風習であろうと、良いものはどんどん取り入れていかなければ」
毎年同じことを言ってるよ、この人、と思ったのは、きっと、達也だけではなかった。
「師匠……皆が見ていますよ」
ただ、余りにも締まりのない顔を窘める言葉を発することが出来たのは、達也だけだった。
「んっ？　良いんじゃないかな。修行の励みになって」
八雲には少しも堪えた様子が無かったが。
「色欲は戒律に触れるのでは？」
「肉欲に結びつかなければ構わないんだよ」
口では飄々と受け答えしているが、顔はだらしなくにやけたままだ。

処置無し、と肩を竦めた達也に、八雲の弟子たちから無言の同意が多数寄せられた。

6－（2）　甘くて苦い幕間劇（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

6－（2）　甘くて苦い幕間劇

半世紀前まで使われていた多人数輸送電車が現代の電車（キャビネット）に勝る点があるとすれば、到着時刻の予測性が挙げられよう。

時刻表の用途を考えれば分かることだが、キャビネットには時刻表というものが無い。

その性質上、渋滞も発生しないので到着が大幅に遅れるということもないが、軌道内には法定制限速度も無いので早く到着する分にはかなりの時間差が生じる。

待ち合わせをするには、少し不便になったと言えよう。

一学期には駅で合流して一緒に登校することが多かった達也たちも、最近ではすっかり教室で合流というパターンに落ち着いていた。

「おはようございます、達也さん」

「お早う、ほのか」

そんな不便をものともしないのは、やはり、若さ故だろうか。

あるいは、恋するが故だろうか。

多分、どちらも正解だ。

「あっ、おはようございます、ほのかさん」

「おはよう、美月」

そして、恋する乙女としては、今日ばかりは、同行者が疎ましかった。深雪が一緒にいるのはデフォルトだから仕方がないと、ほのかも思っている。

だが深雪以外は、友達とはいえ、正直、邪魔だった。

いや、友達だからこそ、今日が何月何日か、察して欲しかったとほのかは思う。

――きっと、そんな想いが顔に出たのだ。

ほのかの些細な表情の変化で、美月が空気を読んだ、とも言える。

いきなり、美月がソワソワし始めた。

何とも居心地悪いけれども、然（さ）りとて、いきなり「先に行きます」

とか「用事を思い出しました」とか言い出すのはわざとらしさが過ぎる。

思惑は一致しているのに、そのとおりに動けない、という膠着状態を打破したのは、意外なことに（？）深雪だった。

「美月、貴女、制服に何をつけているの？」

「えっ？」

突然そんなことを言われて、美月は一所懸命首を捻り、肩越しに背中を見ようとする。

そんなことをしても自分の背中に目が届くはずはないし、そもそも汚れなど付いていないのだから徒労でしかないのだが――

「いらっしゃい。とってあげるから。

お兄様、申し訳ありませんが、先に行って下さい。

ほのかも先に行ってくれる？」

「ああ、分かった」

思い掛けない展開にほのかがアワアワしている横で、達也はあっさり頷き、眼差しでほのかを促した。

ギクシャクした足取りで達也の背中に続いたほのかが、上体だけで振り返り、目で深雪に感謝を告げる。

深雪は小さく笑って頷いた。

思い掛けない二人だけの登校に、ほのかの緊張と興奮は天井知らずに高まっていた。

達也に話し掛けられても相槌を打つのがやっと。それも声が掠（かす）れる有様。

達也は寧ろゆっくり歩いているのに、緊張に関節が強張った足は、もつれ、転びそうになる。

あがり症という自己申告は、紛れもない事実だった。

それでもこのまま校舎に入ってしまえば、一科生と二科生は昇降口すら別々だ。折角のチャンスが台無しになってしまうということは、ほのかにも十分解っていた。

送ってもらった塩を使わないのは、ライバルに対する裏切りに他ならない。

「あの、達也さん！」

校門を過ぎた所で、ほのかが達也を呼び止めた。

「少し、お時間をいただいてもよろしいでしょうか！」

まるで何階級も上の上官か何階層も上の役職者に対するような、しゃちほこ張った物言いだった。

「良いよ」

それを、少しの呆れた様子もなく控え目な笑顔で受け止めて、達也は頷いた。

「こっちへ……お願いします」

人目を憚るようにコソコソと（かえって目立っていた）裏庭の方へ急ぎ足で進むほのかを、達也は訝しむことなく追いかけた。

――彼の顔には、全てを予測しているような表情が浮かんでいた。

「あのっ、たちゅ……！」

「……」

校内の密談スポット（告白スポットでも可）として知られるロボ研ガレージ裏手の木陰。（但し特に伝説の類は無い）

達也の前に進み出たほのかが、几帳面にラッピングされた小箱を両手で勢い良く差し出して――思い切り、セリフを噛んだ。

そのままフリーズするほのか。

ロングの髪を首の高さで二つに縛ったヘアスタイルは、赤く染まった耳を隠してくれない。

俯いた顔は、真ん中から左右に分け目をつけた前髪の隙間からのぞく額まで、真っ赤になっている。

身動ぎも出来ない、声も出ない、俗に言う「テンパった」状態だ。

「ありがとう、ほのか」

達也はそんなほのかの、突き出されたままの両手から、チョコレートの小箱を包装が崩れないようにそっと抜き取り、代わりに掌に

収まる程の小さな紙袋を握らせた。
予想外の行動に対する疑問が（一時的に）羞恥心を上回ったのか、ほのかが紙袋を胸元に引き寄せ、キョトンとした表情で顔を上げた。
「あの、達也さん、これ……」
「取り敢えず、お返し。来月分とは別口だから、そっちも期待してもらって良いよ」
見開いていた目にジワッと浮かんできた涙を慌てて拭い、ほのかはぎこちない笑みを浮かべた。
「あ、その、私、まさか、こんな……
あの、達也さん、開けても良いですか？」
「もちろん」
袋の中から取り出したプレゼントを、ほのかは魂を抜かれたような目で見詰めた。
「……ほのか、そろそろ教室に入ろうか」
達也が声を掛けるまで、ほのかはじっと立ち尽くしていた。

その時、誰かに覗き見・盗み聞きされていないか、達也は十分な注意を払っていた。
とはいえ、精霊の眼（エレメンタル・サイト）を使うことまではしていない。
たかが年中行事（バレンタイン）に、機密指定のスキルが露見するリスクは冒せなかった。
だが――達也は、エレメンタル・サイトを使うべきだったのだ。
確かに、盗み聞きを意図した者はいなかった。
その直前まで、ソレは意識を持っていなかったのだから。
心を持たぬ人形の中で微睡（まどろ）んでいたソレは、己をこの世界に引きずり込んだものに似た波動に目を覚ました。
目を覚ました、という表現は、些かの誤解を招くかもしれない。
祈りに似た、強く、純粋な思念を浴びて、ソレに新たな意識が芽生えた。
意思が再構築された、と言う方がより正確だろう。

意思無き人形に宿るソレに、意思が生まれた。
人形に、意思が宿った。

◇◆◇◆◇◆◇

教室に着いたほのかは、荷物を置くや否や、トイレに駆け込んだ。
一足先に到着していた深雪を引きずって。
お目当ては個室ではなく、鏡の前。
髪を縛っていたヘアゴムをもどかしげに抜き取り、一転、慎重な手つきで髪を纏める。
仕上げは達也から貰ったばかりの、一対の髪飾り。台座のついた小さな珠を二個ぶら下げただけの簡素なデザインのヘアゴムだ。
但し、デザインは単純でも造りと材質は安くない。
ゴムは結んで輪にしているのではなく台座に通した後カバーごと輪状に成形したものだし、銀色の台座は細い爪で珠をホールドする形状、珠は純度の高い水晶の真球だった。
水晶は装飾品としてより魔法の補助媒体として現代では価値を認められている（想念波の指向性を高める効果があると言われている）。彼女たち魔法科高校生には最も馴染み深い貴石であり、ほのかにもその価値は判る。達也からのプレゼントなら安物のガラス玉でも大喜びしたに違いない彼女には、感激も一入（ひとしお）だった。
「ねっ、深雪、どうかな？
おかしくない？　似合ってる？」
髪飾りに両手を添えて、少し不安そうに訊ねるほのか。
深雪は笑いもせず、呆れもせず、大真面目に答えた。
「安心しなさい、ほのか。良く似合っているから」
「……本当に？」
「本当よ。
お兄様が似合わない贈り物を選ばれるはずがないでしょう」
深雪の言葉に上気した顔で頷くほのか。

舞い上がっているほのかは、深雪の声が何処か脚本を読んでいるような空々しさを含んでいたことに気付けなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

ほのかと別れて自分の教室に向かう短い道すがら、達也は湧き上がる自己嫌悪と戦っていた。

彼女を騙すような真似をしたことに対する罪悪感も然りながら、妹にその片棒を担がせることに対する後悔が、虫歯のような疼痛となって心の中にじんわりと広がっていた。

ほのかに贈った髪飾りは、実を言えば、深雪が選んだ物だ。

それだけならば「嘘も方便」で済まされる。「達也からのプレゼント」という事実に変わりはないのだし、敢えてほのかをガッカリさせる必要はない。

だが、プレゼントを用意した理由は、そんな無邪気なものではなかった。

自分がチョコのお返しに贈り物をすれば、ほのかの意識はそれだけで飽和してしまうと、達也は読み切っていた。

バレンタインチョコレートの受け渡しに伴って、当然に交換されるべき「気持ち」を表す言葉、二人の関係を縛る「約束」、そういったものが意識の表に浮かび上がってくる余地も無くなるだろうと予測し、事実、そうなった。

それが当日のお返しを用意した理由であり、ほのかの反応は完全に、達也の計算通りだった。

達也は、ほのかの心を弄んだのだ。

我が身に限れば、疾うに諦めている。

自分が人情を解さぬ「人でなし」であるのはもう仕方のないことだし、それが為に愛想を尽かされても、あるいは報復を受けても、

自業自得というものだと思っている（それは諦めではなく開き直りだ、と言われれば、全く以てその通りである）。
しかし、妹が自分に決して逆らわないと分かっていて、先送りの為の姑息な計略に妹を利用したことについては、悔いを覚えずにいられなかった。
――こういう風に考えてしまうこと自体、彼が自分で思っているほどすれていないという証拠なのだが、生憎、達也の周りには、それを教えてやれる大人がいなかった。

「よっ、朝から何か、疲れた顔してんな」
気持ちの切替が間に合わなかったのだろう。
教室に入るなり、そんな言葉を掛けられた。
椅子を跨ぎながら片手を挙げたレオに、達也も手を挙げて応えた。
「そっちは昨日退院したばかりなのに、すっかり元気そうだな」
「二人とも、朝の挨拶は『おはよう』だよ」
そこへ、「仕方がないな」という笑いを浮かべて、幹比古が割り込んで来る。
「ああ、お早う、幹比古」
「オッス」
素直に朝の挨拶を返した達也に対して、レオはあくまで自分流を貫くようだ――別に深い意図も無いのだろうが。
「おはよう。レオはすっかり元通りだね」
幹比古の口にした「元通り」は「相変わらず」という意味だったのだが、
「応よ、医者が中々退院させねえもんだから、体力が余っちまって仕方がないぜ」
レオは分かってか分からずか、言葉通りに解釈した答えを返した。
当初の診断では、少なくとも後一ヶ月は病院暮らしだったはずで、医者が常識はずれの回復力に多少懐疑的になるのは、やむを得ないと思われる。

しかし、現に異常が見られない以上、そして患者本人が退院を望んでいる以上、いつまでも病室に留め置くことは出来ない。そういう訳で、今日から復帰となったのだった。
「で、達也は？　朝から兄妹喧嘩でもしたか？」
「まさか」
この台詞は達也ではなく幹比古のもの。
間髪入れず断言されたことについては、釈然としないでも無かったが、だからといって誤解でもないので反論は出来なかった。
「寧ろ、修羅場に疲れたんじゃない？　今日はバレンタインだし」
おおっ、とレオが大きく頷いている。それがまた癪に障ったが、ここでムキになると泥沼にはまってしまう。
「決まった相手もいないのに、修羅場になどならないさ。
美月。遅かったんだな」
達也は強引に素っ惚け、ちょうど教室に入ってきた美月を利用してあからさまに話を逸らした。
「いえ、チョッと部室に寄って来たものですから。
おはようございます、吉田くん、レオくん」
露骨に話を逸らされて幹比古などは少し口惜しそうな顔をしていたが、それに全く気づかないのが美月の個性だ。
「レオくん、今日から登校なんですね。
思ったより早く治って、良かったです」
実の所、レオが昨日退院して今日から登校することは、先週お見舞いに行った時に聞かされていたことで、美月も当然知っているはずだった。
だから本当なら、今の台詞はおかしいのだが、達也も幹比古も、
「オウ、何回も見舞いに来てくれてアリガトな」
そしてレオ本人も、笑って流していた。
美月は席に着くや否や、掌に収まる程度の小箱を三人に手渡した。
彼女の態度は実にあっさりしたもので、もったいぶった様子も緊

張した様子も恥じらった様子も無い。
年中行事と割り切った顔だ。
その事に少し、不満げな顔を見せた男の子も約一名いたのだが、本人はポーカーフェイスを保っているつもりの様に見受けられたので、他の二人は何も言わなかった。
武士の情けだ。
ちなみにその一名は、レオではない。
ただ彼は、貰った小箱を珍しそうに眺めていただけだ。
どうやら、身内以外からバレンタインにチョコレートを貰ったのは初めてらしい。
かなり意外な気もしたが、中学生時代の彼がどんな生徒だったのか知っている訳ではないので、達也も幹比古も意外感を口には出さなかった。
口を挿んだのは、教室に入ってきたばかりのエリカだった。
「随分急いで退院すると思ったら、チョコが目当てだったの？」
もっともその内容は、意外感の表明どころか、レオにしてみれば聞き流せない誹謗だったが。
「そんなわけねぇだろ！　ふざけんなよ、このアマ！」
単に言い返すだけではなく、椅子を蹴って立ち上がっている。
「あら、もしかして図星？」
確かに、穿った見方をしようと思えば、そうとも解釈できる過剰な反応。
――無理矢理、解釈すれば、だが。
文字で表現すれば「ぐぬぬぬぬぬ」となるであろう歯軋りと呻り声の複合技を繰り出すレオを横目に、人を呪わば穴二つだ、と性格の悪いことを考えながら、
「お早う、エリカ。今日は遅かったんだな」
達也はエリカに声を掛けた。
「おはよ、達也くん」
当然の帰結として、レオは置き去りだ。

まあ、美月も苦笑しているくらいだから、イジメとは程遠いじゃれ合いの一種だが。

「毎年大変なのよ、二月十四日は。ウチは男ばっか大勢だからさ」

もっともエリカは、レオをからかっているというより、本気で愚痴をこぼしていて、そちらの方へ意識がシフトしている様子だった。

「あげないと拗ねちゃう子供みたいなヤツも一人や二人じゃないし、そういうのに限って腕は良かったりするもんだから無視も出来なくて、もう大変よ」

大変、を二回も繰り返したのは、それだけ強く実感しているということなのだろう。

「欲しがっているヤツにだけ渡せば良いんじゃないか？」

「そしたら、不公平、って騒ぎ出すお調子者がいるのよ。そして、ここぞとばかり団結。普段は『まとまり』って言葉を知らないクセにさ。

一応、門下生の親睦の為って名目で親から金は出るし、女の子のお弟子さんが買い出しに付き合ってくれたりもするんだけど」

「それは本当にご苦労様だな」

「本当よ！　もう面倒臭くって……バレンタインなんてさっさと無くなっちゃえばいいのに」

話している内にストレスが噴き出してきたらしい。

エリカはかなり本気で憤っていた。

「ミキの所（トコ）はいいよね」

こういう時は、得てして八つ当たりに走りがちなもの。

「お弟子さん、女の人の方が多いでしょ」

今回のターゲットに選ばれたのは幹比古だった。

「毎年、選り取り見取りなんじゃない？」

「吉田くん……そうなんですか？」

自分が何故、そんなことを言ったのか、美月は良く分かっていなかった。

と言うより、その理由を意識していなかった。
そして幹比古の方も、エリカの台詞そのものより美月のツッコミにダメージを受けていたのだが、その理由を突き詰めて考えようとせず、
「そんなことないよ！」
反射的な答えを返した。
ここでもう少し背景まで考えた対応をすれば色々な面で話が早かったはずだが、十六歳の少年にそこまで求めるのは難しいかもしれない。
「大体、そんな浮ついた気持ちで修行に臨むなんてとんでもないことだよ！」
しかしこれは、不用意な発言だった。
「言ってくれるわね、ミキ。
じゃあ何、ウチの道場が浮ついてるって言いたいワケ？」
「うっ、いや、別にそこまでは……」
「だったら何なのよ」
冷や汗を浮かべ始めた幹比古と、ジトリと据わった眼差しを向けているエリカと、何故か似たような目をした美月を脇に、達也とレオは苦笑いを交わし合った。

◇◆◇◆◇◆◇

浮ついた空気は、放課後になっても収まるどころか盛り上がる一方だった。
特に注意を払わなくても、校内のあちこちで甘酸っぱい光景が繰り広げられている。
今日ばかりは一高生も「魔法師の卵」ではなく「高校生」として青春に浸っているようだ。
祭りの雰囲気に乗れない者にとっては、目の毒だったが。
「あら、達也くん。今日は巡回当番だったの？」

何の因果か、そんな光景を見ないで済ませることが出来なかった達也は、テーブルからに掛けられた声に、気疲れを隠せない顔で頷いた。

「先輩方は皆さん、予定があるらしくて。今日は俺と森崎の一年生二人ですよ」

道連れがいると思えば、普通なら少しは気が晴れるだろう。しかし、その相手が未だに非友好的な態度を崩そうとしない森崎と来れば、微妙な気分になるだけだった。

「つまり、体良く押し避けられた、と」

「そこまでぶっちゃけるつもりはありませんが」

諦観のこもった声に、真由美はコロコロと対照的な笑い声を上げた。

「ところで達也くん」

一頻り笑って満足したのか、真由美は表情を改めて達也に話し掛けた。

――何故か、向かいの席を見ようとはせずに。

「チョッと時間を貰いたいんだけど」

「それは構いませんが、その前に」

そう言って達也は、真由美の向かい側でテーブルに突っ伏した上級生へ目を遣った。

「ここで一体、何があったんですか？」

彼らが今居る場所は、カフェテリアの片隅、パーティションで仕切られた簡易なミーティングスペースが並ぶエリアだ。

ドアも天井もないから、会話は筒抜け。

だが、密室になっていないという点が、かえって安心感をもたらすのだろう。

その人気の高さから、事実上、一科生・三年生御用達となっており、下級生は三年生が一緒でないと中々足を向けられない場所だった。ちなみに達也も、まだ利用したことはない。

では何故、ここにいるのかというと、

「校内で毒物というわけでもないでしょう。
服部会頭は一体何を召し上がったんですか？」
校内巡回の途中で喉を潤そうとカフェに立ち寄ったら、とても苦しげな呻き声が耳に入ったので様子を見に来たという次第だった。
「いえ、まあ……毒じゃないわよ、もちろん」
犯人はすぐに分かった。
服部の正面に、真由美が困惑気味の表情で座っていたからだ。
少し途方に暮れているような佇まいは、珍しいと言える。
今も、ややもすると、視線が泳ぎ出しそうな風情があった。
「……司波」
どう対処すべきか、達也も決めかねているところに、気を失っているようにも見えた服部から、俯せのまま声が掛かった。
「……水を……」
それは、オアシスを前に力尽きた旅人のように、弱々しい声だった。
「少々お待ちを」
ただ、その要求するところは明らかだった。
一瞬、ミネラルウォーターにするかウォータークーラーにするか迷ったが、ウォータークーラーの方が近かったのでそちらを選択、備え付けのコップ（バイオマス由来の非石油系合成樹脂製。省資源の観点から、使い捨ての紙コップは姿を消している）に冷たい水を満たしてテーブルに置いた。
服部は手探りでコップを掴むと、ノロノロと身体を起こし、フラフラと小さく左右に頭を揺らしながら口元に当て、顰め面で一気に飲み干した。
目をつぶったまま、じっと固まっていたが、秒針が九十度ほど回転してようやく目を開け、大きく息を吐いた。
「――司波、礼を言う」
本当に、何があったのだろうか。四月に決闘もどきを演じた時ほどの刺々しさは無くなっているとは言え、今でも服部と達也の関係

は、決して友好的とは言えない。
達也の側には、特に含むものは無い。
服部も、悪意や敵意を懐いているという訳ではなく、自分の感情を持て余しているという感じだが、それでも、こうして素直にお礼をされるのは、意外感を禁じ得ないものだった。
「……大丈夫ですか？」
「……ああ、もう大丈夫だ」
その言葉通り、服部はすっくと立ち上がった。
――無理をしている感は、否めなかったが。
「手間を掛けたな。特に問題が生じた訳ではないから、もう気にしないでくれ。
ではかいちょ、いえ、七草先輩、私は、これで」
服部は真由美に向けて丁寧に一礼し、背筋を伸ばして立ち去った。
一体、何を強がっているのだろう――と、それを見て、達也は思った。

「ええと、取り敢えず、掛けてくれる？」
真由美は白々しさと空々しさが入り交じった、形容しがたい笑みを浮かべて達也に席を勧めた。
服部が異常を来していた理由は間違いなく彼女にあって、それを誤魔化そうとしているのは見え見えだったが、服部本人が庇っているものを暴き立てるのは野暮ったい行為に思えた。
達也は服部の言うとおり、今の一幕を忘れることにした。
別に急ぎの用がある訳でもなく、「分かりました」と頷き返そうとした達也だったが、
「あっ、ここにいた！　スバル、こっちこっち！」
賑やかな声が、彼の出端を挫いた。
パタパタパタ、と軽快に駆けてくる足音。
達也のすぐ横まで来て、ようやくパーティションの内側が視界に入ったのだろう。

ブレーキ音が聞こえてきそうな勢いで、声の主は立ち止まった。
「か、会長っ」
「こら、エイミィ。会長じゃなくて七草先輩だろ」
小突かれた頭を「いたっ！」と可愛らしく押さえ、上目遣いに抗議の眼差しを向けて来る英美（エイミ）からわざとらしく目を逸らして、スバルは真由美へ深めに一礼した。
「お取り込み中の所、お騒がせして申し訳ありません」
思わせ振りな口調に、真由美の目元がヒクッと震えた。
「別に取り込んでなんていないから気にしなくて良いわ、里美さん」
取り澄ました顔で素っ気なく答える真由美。
普通の下級生なら、萎縮してしまったであろう声と口調と眼差しだった。
現に英美は少し固まっている。
「そうですか。コッチの用はすぐ終わりますので」
だが、スバルは中々に強（したた）かだった。
平然とそう切り返して、手に提げた袋（正確には布バッグ）を達也に差し出した。
「受け取ってくれ給え」
「……里美……今日は一段と芝居がかっているな」
「何の因果か、僕とエイミィが代表に選ばれてしまってね。流石の僕も、素面では些か恥ずかしいのだよ」
よく見ると、頬が微かに赤らんでいる。
羞じらいを感じている、というのは、嘘ではないらしい。
「一応、何の代表か訊いてもいいか？」
何となく答えの予想はついていたが、態勢を整える間を稼ぐ為にも、達也は敢えて訊いてみた。
「九校戦一年女子チーム一同からの……そうだね、お礼だよ」
スバルが選んだ名目は達也の予想と違ったが、指している物は同じだ。
つまり、義理チョコだろう。

それにしてもチーム全員からとは、予想もしなかった大収穫だ。
「あっ、一同って言っても、深雪とほのかは入ってないけどね」
硬直が解けた英美の方は、特に羞じらっている様子もない。元々気後れしない性格、プラス、まだまだ男女関係に（良く言えば）天真爛漫な為だろう。彼女の場合は、他に考えることが多過ぎる所為かもしれない。
「あの二人は自分で渡したいだろうからさ」
「変なお節介焼くと怒られちゃいそう」
「その代わりと言っちゃなんだけど、雫の分も入っているから。確かに受け取ったって、後で電話でもメールでもしといて」
「じゃあ、またね。
会長、じゃなかった、七草先輩、お邪魔しました」
後半は口を挿む暇がなかった。
嵐のマシンガントークで達也と真由美を圧倒し、スバルと英美は去っていった。

「……なんて言うか、若いって良いわね」
賑やかな闖入者に調子を狂わせられたのか、真由美は随分と的はずれな感想を漏らした。
もちろん達也は、目の前に地雷が敷設されても、踏んだりはしなかった。
少し前まで服部が座っていた椅子に、無言で腰を下ろす。
同時に達也は、反射的に、眉を顰めた。
「どうしたの？」
「いえ、チョッと臭いが……誰かコーヒーを零（こぼ）したんでしょうか」
コーヒー豆かカカオ豆か、かなり強い臭いが鼻を衝いたのだ。
クリーナーロボットには脱臭機能も備わっていたはずだが……わざわざ人手を使ったのだろうか。
――と、達也が考える一方で、
「そう？　気づかなかったわ」

真相を知る真由美は、知らん顔をしていた。
もっとも、シラを切っても全く意味はないのだが。
「それより、ハイ」
そう言って真由美が差し出した箱から、同じ臭いが漂って来たのだから。
「……これは？」
どうやら、隠す気も誤魔化す気も無いようだ、と達也は認識した。
服部にダメージを与えたのも、これに違いないと直感した。達也はさっき見たものを忘れるつもりだったが、真由美がそれを許してくれないようだ。
形とラッピングと今日の日付から見て、これが何であるかは明らかだったが、それでも訊かずにはいられなかった。
「やあねぇ、決まってるじゃない」
呆れを表す台詞とは裏腹に、真由美の声も表情も、とても楽しそうだった。
「……ありがとうございます」
残念ながら、断る口実は無かった。
先程の一幕がなければ「甘い物は苦手なんです」という常套文句も使えたかもしれないが、スバルたちから大量のチョコレートを受け取った後では説得力皆無だ。
仕方なく、達也は真由美のチョコを受け取った。
かなり、大きい。
手に持った感じで、市販の板チョコの五倍以上の重量がある。
その時点で、この上級生が何を企んでいるのか、達也は大凡（おおよそ）を覚った。
「ね、食べてみて」
「今、ですか？」
「うん。感想を聞かせて欲しいの」
服部先輩で実験済みでしょう、とは、言わなかった。
言っても無駄だということは、分かり切っていた。

多分、達也がどんな顔をするのか目の前で見たいのだろう。
こんな子供っぽいところがあるなんて知らなかったなぁ……と思いながら、達也は包みを一瞥した。
（まあ、いいか）
真由美には訊きたいことがあったところだ。
自分をオモチャにするつもりならば、時間を取って貰うのにちょうど良い、と達也は思った。（というのも、真由美は受験を間近に控えた身だから、長時間拘束するのは気が引けるのである）
「でしたら、場所を変えませんか？
少しご相談したいことがありますので」
「聞かれちゃまずいこと？」
真由美の顔から笑みが消えた。
キュッ、と表情が引き締まる音が聞こえそうな変貌だった。
「はい」
「……分かった。ついて来て」
返事をするまでの間は、携帯情報端末を見て、操作していた時間。
空き部屋を押さえたのだろう。本来、生徒には出来ないことだが、この上級生ならば不思議はなかった。
席を立った真由美を、達也は渡された箱を持って追いかけた。
少なくとも十人以上の視線を感じたが、気にしても仕方がないと割り切った。

携帯端末にダウンロードした使い捨てのキーコードを使って真由美が鍵を開けた部屋は、父兄や業者との面談に使う談話室の一つだった。応接室ほど格式張っていないが、生徒だけで使うには少しばかり気が引ける作りになっていた。
良いのかな、と思わないではなかったが、キーコードをダウンロード出来た時点で、それを問うのは今更だろう。
全自動のティーサーバーが置いてあるのは、飲食可能な部屋を選んだということか。

「紅茶でいい？」
「いえ、お構いなく」
「女に恥をかかせないの」
そこまで言われれば、頷いて見ているしかない。
全自動とはいっても、カップを抽出口の下にセットしたりソーサーを用意したりの手間は掛かる。
その手順を、真由美は楽しそうにこなしていた。
「ハイ、どうぞ」
「ありがとうございます」
礼儀としてカップに一口つけてから、達也は居住まいを正した。
つられたように、真由美も腰を下ろして背筋を伸ばす。
「相談というのは、『吸血鬼』のこと？」
口火を切ったのは、真由美の方だった。
もしかしたら、彼女の方でも達也と話したいと思っていたのかもしれない。
「ええ。マスコミに情報が出て来なくなりましたが、被害は沈静化しているのですか？」
マスコミだけでなく、独立魔装大隊ルートの情報でも、あの日以来、被害情報がパッタリ途絶えている。
単純に考えれば、達也たちがあの吸血鬼を退治したことで事件は解決した、と見ることも出来る。
しかし、暗躍していた魔性存在が複数個体であることは確認できているのだ。
仮にあの「吸血鬼」をあの場で斃せていたのだとしても、それで事件が全て解決したなど、あり得ない。
「表面的には、沈静化しているわね」
真由美は、と言うより七草家は、達也とは別の情報ルートを持っている。
その彼女にも、詳しい現況は分かっていないようだ。
「ただ、行方不明者がいつもの年に比べて多いって事だから、相手

の動きが巧妙化した、と解釈すべきでしょう。
　一匹仕留めたことで、警戒されちゃったのかもね」
「仕留めた、と決まった訳ではありませんが、多分、警戒されているのでしょうね。
　もしかしたら仲間同士、共感覚を備えているのかもしれません」
「きょう……感覚？」
　耳慣れない言葉に、会話の流れを中断して、真由美が小首を傾げた。
「共有感応知覚能力の略語です。
　一卵性双生児の間で観測されることが多い五感外知覚力（イー・エス・ピー）の一種ですよ。
　多いといっても、稀少な事例の中で比較的、ですけど」
「つまり、一個体が見聞きしたものをグループ全体で体験として共有する、ということ？」
「憶測に過ぎませんけどね」
　真由美が、難しい顔で考え込んでしまう。
　達也がその邪魔をしないよう、音を立てずに紅茶を飲んでいると、
「……わからない事ばっかりで嫌になっちゃう……」
　真由美が、そう呟くのが聞こえた。
　全くの同感だったが、達也までそんなことを言い出すと愚痴の零し合いになってしまう。
　それは、非建設的過ぎるように思われた。
「未知の事態は、手探りで対処方法を見つけていくしかありません」
　だから仕方なく口にした、慰めと言うより気休めの言葉。
「……」
　中身がないことを言っている、という自覚があったので、まじまじと見詰められる居心地の悪さは数割増だった。
「……そうじゃないんだけど」
　だがどうやら、真由美の視線には全く別の意思が込められていたようだ。

「共有感応知覚能力、って言葉の意味が全然解らなかったのが、ね……

ねえ、それ、入試には出ないわよね？」

「……ＥＳＰは魔法学とは別の学問領域に属すると見做されていますから、出ないと思います」

居心地の悪さは、最高潮に達した。

何とか気を取り直して情報交換を終えた二人は、「こんなところね」という真由美の総括で一息ついた。

そのまま何食わぬ顔で席を立とうとした達也だったが、向かい側から伸びてきた手に、袖口をガッシリ掴まれてしまった。（躱そうと思えば躱せたのだが、そっちの方が面倒な結果を招きそうだったので自重した）

「それじゃあティータイムにしましょうか」

達也の訝しげな視線（無論、わざとだ）を鉄壁のスマイルで撥ね返し、空いている方の手で、真由美はテーブルの上に置かれたままの小箱をチョンチョンと突いた。

忘れては、くれなかったようだ。

と言うか、何か企んでいるということを最早隠そうともしていない真由美の態度に、達也は小さくため息をついた。

お咎めの言葉は、降って来なかった。

逆に、ドキドキ、ワクワクという目で達也を見ている。

受験ノイローゼで幼児退行してるんじゃないか？　と二重の意味であり得ないことを考えながら（そもそも真由美の成績でノイローゼになんてなるはずがない）、達也は小箱の包装を解いた。

もたもたと手間取るような見え透いた真似はしなかったが、包装紙に破れ目一つ付かないように丁寧に剥がしていったのは、、せめてもの抵抗だった。

出て来たのは上蓋を被せる形の、厚紙の箱。内側をビニール加工してある、自作派御用達の容れ物で、この大きさは所謂「本命用」

だ。

もちろん、そんな勘違いはしなかった。

眩暈（めまい）がしそうなカカオともコーヒーともつかぬ臭いが、そんな妄想を許さなかった。

箱の中身は、ギッシリ詰まったダイス状の黒い物体。

少なくとも、達也が知っている「チョコレート」とは別の物だ。

臭いだけで味の方も予測がつく。

いくらニガい物が苦にならないといっても、質と量に限度がある。

食品と言うより薬品と言いたくなるその物体を、達也は観念して次々と口の中に放り込み、噛み砕いた。

その結果は――真由美が満足げに微笑んだ、とだけ記しておく。

◇◆◇◆◇◆◇

ほのかは生徒会の仕事で、ノート型の大型端末を抱えて部室棟のエリアに来ていた。

陽は既に大きく傾き、気温は大分下がっている。気を抜くと、身体が震え出しそうだ。

だが、彼女はそんな寒さをものともしない精神状態だった。

足取りに合わせて、二つに纏めた髪が揺れる。

一緒に揺れる水晶の珠に、意識がついつい向いてしまう。

口元が緩んでいると自分でも分かっていたが、「今日くらい良いよね」と開き直っていた。

ほのかは自分が、達也の恋人ではない、と自覚している。

告白して断られたことを、忘れてはいない。

既に、ふられているのだ。

それでも達也が拒絶しないのを良いことに、彼に付き纏っている。

そんな自分を「嫌な女の子だな」と感じることもあった。

いっそ拒絶してくれれば吹っ切れるかもしれないのに、と逆恨みする夜もあった。

でも、今日、そんなネガティブな感情が、全て吹き飛んでしまったような気がした。
こんな小さなアクセサリーで懐柔されるなんてお手軽過ぎる、という理屈は、感情の前にまるで無力だった。
「ほのか！」
軽い足取りで部室棟の中へ入ろうとしたほのかは、横合いから掛けられた声に足を止めた。
「あっ、エイミィ」
ルビーのような光沢の、鮮やかな赤い髪が目立つ小柄な少女が、小走りに駆け寄ってくる。
「珍しいね。ほのかが部室棟に来るなんて」
「五十里先輩の代理でね」
そう言ってノート型端末を軽く掲げて見せると、英美も納得の表情を見せた。
「エイミィの方は、クラブ、お休みだったの？」
英美の所属する狩猟部のユニフォームは細身のズボンにブーツ、長袖のアンダーに袖無しジャケットというスタイルだったはずだが、今は制服姿だ。まだクラブ活動が終了する時間でもない。
「今日はミーティングだけだったから」
ほのかが服装を見て質問してきたのはすぐに分かったので、、英美の方から「何故」と問うことは無かった。
「あれ？　それ、水晶？」
その代わり、という訳でもないが、ほのかの髪と一緒に揺れている光を目敏く見留めて、興味津々の口振りで訊いてきた。
「あっ、うん」
はにかんだ表情で「ピン！」と来たのか、英美は嬉しそうな笑みを浮かべた。
「司波くんに貰ったんでしょ」
「……うん、チョコの、お返しにって」
頬を染めたほのかの幸福感が伝染したような嬉しげな笑顔のまま、

英美は目を丸めて見せた。
「へぇ……予めプレゼントを用意しておくなんて、司波くん、やるじゃん。
見掛けは無愛想だけど、そんな気配りが出来るんだ。大人だね～」
ますます幸せいっぱいの笑みを浮かべるほのか。
だがその笑みに、英美の次の一言で、影が差した。
「人気があるのも分かるな～
さっきも会長がチョコ渡そうとしてたけど、もしかしてあれ、本命チョコかも」
「……会長？」
「あっ、違った。前会長。七草先輩」
「七草先輩が？」
「先輩が無理矢理捕まえてた感じだったけどね。司波くん、何となく迷惑そうな顔してたから、心配要らないと思うよ」
あっけらかんと言い放つ英美は、正直な感想を口にしているのだろう。
だが、だからといって、ほのかは心穏やかには、いられなかった。
真由美が達也に特別な想いを懐いているのではないか……とは、彼女が以前から疑っていたことだ。
もし真由美と競争になったら、ほのかには、勝てる自信がなかった。
目下最大のライバルである深雪は、何の彼の言っても最後の一線で「実の兄妹」という枷がある。
最終的に結ばれることは決してないはずだと、ほのかは心の何処かで安心していた。
だが真由美には、そんな制約はない。
ルックスでも魔法の実力でも向こうが上、唯一のアドバンテージは「年上でない」という点だけだ。
しかし、達也が一歳や二歳の年齢差を気にするとも思えなかった。
心の中に漣が生じた。

波は静まる気配も無く、心の中に広がっていく。
波は、ほのかの心の中に止まらなかった。
今朝、あの瞬間、ほのかの歓喜は、人形の内に宿るものを震わせた。
今、あの時につながれたパスを伝って、漣は“ソレ”を再び震わせていた。

6－（3）　祝福されざる者たち（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

6－（3）　祝福されざる者たち

大きな布袋を提げて校門を後にした頃には、既に、日は落ちかけていた。

二月半ばとなれば、昼が最も短い時期を過ぎ、日没も段々遅くなってきている。

反面、寒さは厳しい盛りだ。日照が無くなれば、気温は急激に下がっていく。

自然と肩を寄せ合う距離になるのも、仕方がないことなのかもしれない。

実際、同じように閉門間際まで残っていて追い立てられるように家路を急ぐ生徒たちには、ほとんどゼロ距離で並んで歩いている姿が結構見られた。――但し、カップル限定だが。

達也の両隣、つまり深雪とほのかも、すり寄って来てはギリギリで止まるという動きを、さっきから交互に繰り返していた。

お互いの存在を気にしている、という一面も確かにあるだろうが……

「もしかしてワタシ、先に行った方が良いかしら」

多分それよりも、同行者の目を気にしているのだと思われる。

「いや」

気を使っているというには棒読みなリーナの台詞に、達也は短く否定を返した。

達也と深雪とほのかと、リーナ。

今、一緒にいるのは、この四人。

E組のクラスメイトは、それこそ気を使ったのか、先に帰った。

しかしリーナは、臨時とはいえ生徒会役員。

深雪もほのかも仕事をしているというのに、彼女一人が先に帰る訳にもいかなかった。高校の自治活動など正規軍の任務に比べれば遊びだった（「の様なもの」ではなく）が、疎かにすることは出来

ない。責任感とか潜入任務上の必要性とか以前に、「隊長」でも「処刑人」でもない生活、「シリウス」でない時間を中途半端に流してしまうのは、もったいなかった。

もっとも、その結果として、よりにもよって今日、ただ一人の傍観者として、深雪たちと駅まで同行する羽目になってしまったことについては、現在進行形で深く後悔していた。――達也と深雪は監視対象に指定されているから、本来、日付に関係なく可能な限り目を離してはならないのだが、それをリーナに忘れさせるくらい、第三者には耐え難い空気だったのだ。

「そう？」

達也は構わないと言っているが、他の二人から無言で咎められているような気がしてならない。

やはり、先に行ってしまおうか、と思い詰めたところで――駅が見えた。

と言っても、直線の一本道だから距離はまだ、そこそこあるのだが、

「もう、駅はすぐそこだからな。

先に行くとか、考える必要はないぞ」

そう付け加えた達也の真面目くさった顔を、蹴飛ばしてやろうか、とリーナは思った。

既に説明したとおり、現代（キャビネット）の電車には時刻表が無い。

だが上り下りの別はある。

達也の家とリーナのマンションは同じ上り方向、そしてほのかは下り方向だ。

その日は偶々（たまたま）、上りの車両が残っていなかった。

プラットフォームに表示された待ち時間は約三分。

ほのかを見送った三人は、寒気を遮る透明なシールドの内側で次の車両が回送されてくるのを待っていた。

たかだか三分前後の短い時間だ。

会話が無くても、不自然ではない。
――親しい関係ならば。
逆に、顔を知っている程度の疎遠な間柄ならば、会話が無くて当たり前だ。
居心地の悪い空気が流れているのは、兄妹とリーナが中途半端に親しいからだった。
それぞれ一度ずつ殺し合いを演じた間柄で「親しい」というのは、他人が聞いたら奇異に感じるかもしれない。
だが達也も深雪も、リーナに対してネガティブな感情は懐(いだ)いていない。特に達也は、共感に近いものを感じている。
今はまだ、兵器としての在り方から逃れられない魔法師。
とりわけ自分が、「そういうものである」ということを、達也は忘れたことがない。
それを拒もうとしたならば、国家が、社会が、彼を抹殺しようとするだろう。
彼の魔法は、一国を丸ごと廃墟に変えることが可能なのだから。
――そして、それはリーナも同じ。
――彼女は、自分と同じで、決して兵器であることから逃れられない。
――ある意味でリーナは、深雪よりも、自分に近い存在だ……
「……どうした？」
そんな思惟に耽っていた所為か、リーナが何か言いたそうにしていることに、深雪に袖を引かれて注意を促されるまで達也は気づかなかった。
「……別に、何でもない」
深雪がわざわざ知らせたくらいだから、ほんの数秒、偶々見ていたという程度ではないはずだ。
リーナの不自然な態度からしても、「何でもない」はずはなかった。
「そうか」

だが、達也は、思わせぶりに間を取って、告白を促す真似もしなかった。
そこまでする程お節介でも無かったし、余りリーナに構い過ぎると深雪の機嫌が傾いて行く虞もあった。
それに何より、キャビネットがプラットフォームに近づきつつあった。
「お兄様？」
そして、もう一つ。
「何かいるのですか？」
「いや」
首を振って、達也は妹の肩を抱き寄せた。
この兄妹ならではの、お手軽な口封じ。
達也が感知した視線のことは、彼一人の胸に仕舞い込まれた。

◇◆◇◆◇◆◇

「どうした？」
部下の身体に走った緊張を目敏く認めて、バランス大佐は端的に問い掛けた。
モニターから目を離して振り向いたオペレーターの顔は、戸惑いに揺れていた。
「それが……監視を気づかれたのではないかと」
「何をバカなことを」
筋金入りのリアリストであるバランス大佐は、その部下の戸惑いを、気の迷いと切って捨てた。
「低軌道とはいえ監視衛星のモニターだぞ。
そもそも地上からカメラを裸眼で認識出来るはずがない」
「しかし今、確かにタツヤ・シバの目が、モニターの中から真っ直ぐこちらを見ていました」
それはつまり、真っ直ぐカメラを覗き込んでいたということだが

――

「視力の優れた人間ならば、低軌道衛星の本体を視認することは決して無理ではないだろう。

だが、衛星に付いているカメラを識別するなど、知覚能力を極大化した強化人間にも出来ることではない。

まあいい。念の為だ。

三分前から映像を再生し給え」

「了解（イエス・マム）」

リアルタイム映像がサブディスプレイに切り替わり、メインディスプレイで録画映像の再生が始まる。

高解像度のカメラは、シリウス少佐が落ち着かなげに視線を右、左、右と往復させている様子までハッキリと映し出している。

それはそれでバランスにとっては興味深い（と言うより、無視出来ない）情報だったが、目下の問題となっているタツヤ・シバへ意識を集中させた。

シリウス少佐に向けられていた少年の視線が、チラッと上を向いた。

確かに一瞬、カメラを覗き込んだ、様にも見えた。

だがそれは、そう見ようと思えばそうとも解釈出来る、という程度のもの。

実際のところは、気まぐれに空を見上げただけだろう。

その証拠に、一瞬後には、彼の視線はカメラから外れていた。

「やはり気の所為だ。

気を抜くよりは良いが、警戒し過ぎるのも判断を誤る元だぞ」

そう訓示して、大佐はメインディスプレイから目を離した。

サブディスプレイには、日本で“キャビネット”と呼ばれている小型軌道車輌に乗り込もうとしているシリウス少佐の姿が映っている。

バランスは寧ろ、シリウスの名を冠せられた少女の見せる、不安定な挙動の方が気になった。

◇◆◇◆◇◆◇

セーフハウス（彼女がここに住んでいることは秘匿されていないから、厳密にはただの仮住まい）に戻って来たリーナは、扉の前で深く溜め息をついた。

鞄の中に眠ったままの、ラッピングされたチョコレートの箱を今更のように意識する。

義理チョコを用意したまでは良かったが、切り出す上手い口実が見つからず、結局、持って帰ってきてしまった。

反射的に「何でもない」と誤魔化してしまったが、本当はその後、別れ際に渡そうとしたのだ。

決して深い意味はない。深い意味のあるものではないと、世間的にも定義されているのが「義理チョコ」だ。

それでも、自分としては、一大決心だった。

せっかく準備したんだから、と心の中で何回も自分に言い聞かせて、引きつる顔に何とか笑みを浮かべようとした。

一度は殺し合いを演じた間柄だが、同時に、一度は共闘した仲でもある。

それに、自分の正体を黙っていてくれている。

義理はあるのだから、おかしくはない。おかしな誤解を受ける虞はない。

そう気力を振り絞って、鞄の中から包みを取り出そうとした。

だが、渡せなかった。

突然深雪の肩を抱き寄せた達也の姿を見て、手が動かなくなった。

達也が深雪の肩を抱いたという事実より、自分の手が動かなくなったと言うことに、二重のショックを受けた。

一つは、結局、チョコを無駄にしてしまったということ。しかしこちらは、比較的どうでもいいことだった。

リーナにとって本当に問題なのは、自分がまるで、達也に惹かれ

ているような反応を示したことだった。
冗談ではなかった。
あんな、嫌味な女たらしのシスコンに自分が横恋慕しているなどと、リーナには断じて認められないことだった。
（意識してるのは認めるわよ）
誰に言っているのか分からないまま、リーナは心の中で宣言した。
（ワタシはタツヤのことを意識しているわ。それも並大抵じゃなく、強烈に）
それは、噛み付くような思考だった。やはり、誰に噛み付いているのか彼女自身不明だったが。
（でもそれは！　あの男に与えられた屈辱の所為よ！　あの敗北に雪辱するまで、タツヤを意識せずになんていられないわ！）
だったら用意すべきはチョコレートではなく白手袋ではないか、と普段の彼女ならば自分にツッコミを入れたことだろう。
だが今のリーナに、そんな平常心は存在しなかった。

セーフハウス（くどいようだが厳密には単なる賃借マンション）のドアを開けて、リーナは異常を感知した。
ミアがあんな事になって、現在リーナは一人暮らしだ。
それなのに、人の気配がする。
背筋を冷たい緊張が走り抜けた。
ドアを開けてみるまで気がつかないなんて油断のしすぎだ、と自分を叱咤する。
そうやって気合いを入れ直し、慎重に身体を中へ滑り込ませる。
今更手遅れな配慮だとも思ったが、音を立てないようにそっと扉を閉めた。
靴をどうするか、一瞬悩む。
本当は考えるまでもないのだが、後で掃除する手間のことをつい、考えてしまったのだ。

再度自分を叱りつけてそんなボケた雑念を頭の中から追い出し、鞄をそっと床に置いて、リーナは突入の為にそのまま身を屈めた。

「――知覚系統が得意でない、というのは控え目な表現だったようだな」

そして、頭上から降って来た上官の呆れ声に、彼女の進退は窮まった。

「ご用がおありでしたら、私の方から出頭致しましたが」

決してスムーズとは言えない手際でお茶（とお茶請け）の用意を終えたリーナが、質素なダイニングテーブルの向かい側に座ったバランス大佐に恐る恐る話し掛けた。（短期の拠点という位置付けなので、応接セットのような無くても良い調度品は置いていない）

大佐はリーナの申し出に、直接的な答えを返さなかった。

「あるいは知っているかもしれないが、私の軍歴の大半は後方勤務で占められている。

中でも人事関連業務が主たるキャリアだ」

無論、バランス大佐のような有名人の経歴は、リーナも知っていた。名門ビジネススクールを優秀な成績で卒業し、その肩書きに恥じぬ辣腕を振るっていることも、そのキャリアの中では数少ない前線勤務においても、文句のつけようがない軍功をあげたことも。

「その私の経験が告げているのだが、シリウス少佐」

「ハイ」

リーナはピンと背筋を伸ばして、固い声で応えた。笑顔で聞けない話だと、半ば本能的に理解していた。

「今回の作戦において、貴官はターゲットに過度のシンパシィを寄せているのではないか、と私は懸念している」

バランスの指摘に、リーナは言葉を返せなかった。

心構えは出来ていたつもりだったのだが、いざとなってみると、まるで役に立たなかった。

「……小官は、そのような……」

「そうか？　私の思い過ごしであれば、それに越したことはないが」
そう言って、バランスは椅子の上の、リーナの鞄に目を向けた。
リーナの肩に力が入る。
鞄の中のアレを見られたなら、彼女が偽りを述べていると、そう思われても仕方がない。彼女に対する嫌疑は、確信に近い強いものとなってしまうことだろう。いくら彼女が「誤解だ」と主張しても、信じてもらうのは無理かもしれない……
「貴官の特殊な事情は私も理解しているつもりだ」
だが、バランスは「鞄の中を見せろ」とは命じなかった。
「スターズの歴代総隊長の中で十代にしてその職に就いたのは貴官だけだ。
現代魔法の技術・理論体系により開発された魔法師は、一般に新しい世代ほど魔法のポテンシャルが高いとはいえ、若すぎるという声も少なくなかった。私も意見を求められたならば、貴官の総隊長就任に反対を具申していただろう。
貴官は未だ十六歳。
自分の十六歳当時を振り返ってみても、感情をコントロールするのが難しいのは分かる」
上官が自分のことを真摯に案じてくれていることは口調や雰囲気から判ったので、リーナも神妙な面持ちで耳を傾けていた。
だが、リーナの少し固い表情を見て、バランス大佐は何故か、チョッと拗ねたような顔になった。
「……君から見れば私はオバサンかもしれないが、私にだって十代の頃はあったんだぞ」
「滅相もありません！　小官は決して、その様なことなど！」
思いがけないにもほどがあるバランスの言いがかりに、リーナは飛び上がって必死の勢いで弁明した。
だが驚くのと同時に、リーナは可笑しさと安堵を感じていた。
女性士官として非の打ち所がない、まるで隙が無いように見えていた大佐の見せた、思いがけず「可愛い」姿は、リーナの緊張を和

らげる効果があった。
「……まあ、いい。今の発言は忘れてくれ」
失言だった、という顔をしているところを見ると、意識的な演技ではなく巧まざる素の表情だったのだろう。
「……確かに小官は、タツヤ・シバにＵＳＮＡの軍人として好ましくないシンパシィを懐いています」
だからこそ、リーナも少しは、素直になることが出来たのだろう。
「ですがそれは、決して恋愛感情やそれに類するものではありません。
小官が彼に懐いている感情は、寧ろ、ライバルに対する競争心です」
「ライバルか」
「はい。
大佐殿も報告書でご存知のことと思いますが、小官は一度、タツヤ・シバに後れを取っております」
「なる程。“シリウス”就任以来、魔法戦闘で負けたのは、初めてか」
「はい」
本当は、模擬戦でカノープス少佐を始めとする隊長クラスに苦杯を嘗めたことが何度かあるのだが、それらは何れもこちらが一人、相手が複数の条件だったし、それを今持ち出して、大佐の発言を訂正する必要はなかった。
「分かった。
そういうことなら、話もしやすい」
大佐の語調が微妙に変化し、纏う雰囲気にヒヤリとした冷気が混じった。
それだけでリーナは、モラトリアムの終わりを覚った。
「脱走者の追跡、処分は優先順位を下げる。
シリウス少佐。
現時点より、『質量・エネルギー変換魔法』の術式または使用者

の確保を最優先の任務とする。
確保が不可能な場合は、術式の無力化もやむを得ない」
魔法の術式無力化とは、誰にも使用できなくするということ。
即ち、術者の抹殺だ。
「まず、タツヤ・シバをターゲットと仮定。
第一波として明日の夜、“スターダスト”を使いターゲットに襲撃（アタック）を掛ける。
貴官はブリオナックを装備し、自己の判断により、適時介入せよ」
「――了解（イエス・マム）」
リーナは表情を消して立ち上がり、バランスに向けて敬礼した。

◇◆◇◆◇◆◇

エリカの通学時間は、一高生の中で長い部類に属する。
入学時、学校の傍に部屋を持つことも勧められたが、彼女は自宅から通うことに固執した。
親離れ出来ていないから、ではない。
その逆だった。
父親がマンションを用意するといったので（エリカの為に「借りる」ではなく、エリカに「買ってやる」と父親は言ったのだ）、彼女は「家から通う」と意地になったのだった。
多少の不便は、どうという事もなかった。
父親や長兄の、言いなりになる不快感に比べれば。
駅から自宅まで、すっかり暗くなった通学路を、エリカはコミューターも使わずに歩いて帰る。
彼女のような美少女には余りお勧めできない行為だが、家族は余り――と言うより全く――心配していなかった。
エリカに危害を加えられるような腕の持ち主が、痴漢やひったくりなどという小悪党に甘んじているはずがないからだ。
それは身贔屓ではなく、客観的な事実だった。

今日も何事もなく、エリカは家の門をくぐった。
彼女の部屋は母屋に無く、道場と並んで建てられた離れが彼女の「家」だ。
奇しくもそれは、レオと同じ住環境だった。（但しエリカはそれを知らない）
しかしその背景を成す事情は、まるで異なる。
彼女以外に住む者の無い離れの、自分の部屋に入るや否や、エリカは鞄を放り投げて、制服のままベッドに倒れ込んだ。
今日は朝から毎年恒例のイベントで、いい加減疲れていたところに、一日中窺い見る視線に曝されてウンザリしていたのだ。
自分の容姿がそこそこ優れていることを、エリカは自覚している。
（客観的には、やや控え目な評価だが）
だから今日という日に、同年代の少年（一部少女）から関心を向けられるのは仕方の無い事だと解ってはいるのだが……
（だったらあたしが義理チョコなんてタイプじゃないのも分かるでしょうに）
所詮、見られているのは外見だけか、と自分で出した結論に、疲労感がますます酷くなった。
自分の容姿は、嫌いではない。
不細工よりも、美人の方が良い。
損得抜きで、彼女はそう思っている。
深雪のように美少女過ぎると得な事より苦労の方が多そうなので、自分くらいがちょうど良い、とエリカは思っている。
でも、外見だけで判断されるのは、嫌だった。
見てくれでチヤホヤされるのは、寧ろ嫌いだった。
見た目だけで向けられる好意は、それが過剰な好意であったなら、好きになった側だけでなく好きになられた側にとっても不幸の元でしかない。
エリカはそう、確信している。
目が自然に箪笥の上へ向いた。

そこには小さな写真立てが飾られている。
デジタルフォトではなく、印刷した写真に写っているのは、エリカより更に明るい、金髪に近い栗色の髪の、彼女によく似た面差しの女性。
あと十年も経てば、エリカと写真の中の女性はそっくりになるだろうと思わせる相似性。
エリカが十四歳の時に他界した、彼女の母親の写真だった。
彼女を産んだ女性であり、彼女がこうして離れに独りきりで暮らしている原因を作った女性でもあった。
アンナ＝ローゼン＝鹿取。
それがエリカの母親の名前だ。
名前と外見からある程度予想されるとおりの、日独ハーフ。
そして、姓は「千葉」ではない。
エリカの母親は、エリカの父親、百家・千葉家当主の、今風の婉曲な言い方をすれば「愛人」、昔風の身も蓋もない言い方をすれば「妾（めかけ）」だった。
エリカが「千葉」の姓を名乗るのを許されたのは母親が死んだ後の事で、しかも高校入学直前まで――具体的には「千葉エリカ」の名前で入学試験を受けるまで――は、内々のみで許された事だった。
（だから達也は「千葉エリカ」の存在を知らなかった）
エリカが産まれたのは正妻が病死する前だ。
病床に伏せる妻が在りながら「そういうこと」をしていたのだから、両親共に言い訳の余地は無い、とエリカは思っている。
冷たいようだが、その点については母親に非があると割り切っている。
だからといって、母親だけが悪者扱いされるのは断じて認められなかったが。責任の大半は、あの父親にあるのだから。
蔑みの目の理由も分からず、小さな身体を更に縮め息を潜めて日々を過ごしていた頃もある。
自分と母親を認めさせる為に、ただガムシャラに剣を振っていた

時期もある。（彼女が千葉道場のアイドルになったのはこの頃の事だ。十代、二十代の若手道場生の中でも特に腕利きの弟子が集まって「エリカ親衛隊」が結成され、母親の死を切欠（きっかけ）に剣術に対する熱意を失ったように見えたエリカの為に、色々とお節介を焼いたりもしていた）

過去を振り返ってみれば、今が彼女のこれまでの人生で、一番楽しくて一番充実していると、改めて思える。

素直に「敵わない」と思わせてくれる女友達と、どれだけ目を凝らしても底が見えないボーイフレンドと。

ほのぼのさせてくれるクラスメイト、

弄り甲斐のある喧嘩友達、

同じく弄り甲斐のある幼馴染み。

彼女の「力」を認めてくれる仲間たちと、彼女が力を揮（ふる）うことが出来る機会。

今は、剣を振るのが楽しかった。

斜に構えて時間を無駄にするのが、もったいなかった。

彼らとならば、何処までも上がって行けそうな気がする。

だから――つまらない恋愛遊戯で、煩わせないで欲しかった。

そんな事を考えながら、ボンヤリ天井を見ていると、不意に、ドアホンのチャイムが鳴った。

呼び出しではなく、ドアが開いた合図だ。

鍵を掛けていなかったから、勝手に入って来たのだろう。部屋を覗かれた訳ではないから、そんなに神経質になるつもりも無い。

時計を確認する。

彼女が食卓につくには、まだ早い時間だ。

二人の兄（いずれも異母兄）はともかく、姉（こちらも当然腹違い）は彼女と同席するのを露骨に嫌がるので、彼女の方で時間をずらしているのだ。（姉は生真面目すぎて、からかっても余り面白くなかった）

誰だろう、と身体を起こしたところで、部屋のドアがノックされ

た。
抑えられた足音、乱れの無い息遣い、制御された気配で、該当するのは二人の兄に絞られた。
長兄は例の事件に掛かり切りで、毎晩遅くまで帰って来ないはずだから――
「次兄上(つぐあにうえ)ですか？　どうぞお入り下さい」
そう答えた時には、ベッドの上から机の前へ移動済みだった。
「寛いでいたところに悪いね、エリカ」
エリカは机の前で、ドアの方へ回転させた椅子に、キチンと背筋を伸ばし、両手を膝の上に置いて座っていたのだが、次兄の修次(なおつぐ)はチラリとベッドを一瞥しただけで、申し訳なさそうに、そう口にした。
まあ、「千葉の麒麟児」と謳われるこの兄の眼力を以てすれば、この程度は驚くに当たらない。
実際エリカは、眉一つ動かさなかった。
「いえ、少し身体を休めていただけですので。
それで、何かご用がお有りなのでは？」
夏休みは「あの女」と一緒にいるところを見て、つい逆上してしまったが、そうでもなければこの兄の傍らは、昔から、エリカにとって心の安まる場所だった。
この兄に向かって大声をあげたりするのは、「あの女」が絡んだ時だけだ。
「ああ……言うべきか言わざるべきか、迷ったんだけど……やっぱり伝えておこうと思ってね。
エリカのクラスメイトに司波達也君という少年がいるだろう？」
「ええ。彼が何か……？」
顔には出さなかったが、エリカはこの時、結構動揺していた。
次兄からいきなり達也の名を聞く事になるなど、完全に予想外だった。
「彼は国防軍から監視されている」

「……はっ？」
「いきなりのことで、信じられないのも無理はない。だけど本当の事だ」
確かにいきなりのことで信じられなかったが、信じられない理由は多分、修次が思っているものとは別だった。
エリカは達也が国防軍の部外構成員であるという事を知っている。あの時、彼を連れ去った士官は、達也が国防軍に所属しているのは国家機密だと言っていた。
末端の軍人が彼の身分を知らないという事は、十分にあり得る。だが、非正規とはいえ身内である達也を、同じ国防軍の人員を使って監視することに、笑えもしないバカバカしさを感じたのである。もっとも、呆れていられるのはそれが自分と関わりのない第三者に与えられた任務だからこそで……
「僕も非公式の命令を受けた」
身内が関わるとなれば、バカにしてばかりもいられなかった。
「まだ正式任官前の次兄上を使わなければならない任務ですか？それは一体、どのような……」
「彼を監視し、必要とあれば護衛せよ、と」
「監視と……護衛、ですか？」
「ああ。どうやら司波君は、軍が動くレベルの厄介事に巻き込まれているようだね」
そんなの今更だし、巻き込まれていると言うより当事者そのものじゃないかなぁ、とエリカは思ったが、達也の為にも修次の為にも、それは口にすべきではないと思い、黙っていた。
「エリカ、しばらく司波君の周囲には近づかない方が良いと思う」
「それは、学校の中でも、ということですか？私（わたくし）と彼は同じクラスなのですけど」
いくら尊敬する次兄の指示だからといって聞ける話ではなかったが――相手が長兄ならば鼻先で笑い飛ばしていたに違いなかった――、かなり焦臭（きなくさ）い話のようでもあったので、エリカは取り敢えず探

りを入れてみることにした。
「いや、流石に学校の中で襲われることは無いと思う」
つまり襲撃の主体になるのはリーナとは別口、リーナが襲撃に加わるとしても別の部隊と連携する見込みが高いということか――とエリカは判断した。
「でしたら兄上、ご懸念には及びません。
司波君とは駅まで一緒に帰るくらいで、帰宅後一緒に遊びに行くような仲ではありませんから」
「そうか。
本当は一緒に登下校することも避けるべきなんだが……不安を煽るのも良くないからね」
その言葉で、達也を護衛するより達也を囮にする方が、修次に命令を下した派閥の主な目的だと分かった。
「とにかく、気をつけるんだよ、エリカ」
「ありがとうございます、兄上」
――言われたとおり、達也くんと一緒に気をつけます、とエリカは心の中で付け加えた。

◇◆◇◆◇◆◇

家に帰って深雪が真っ先にしたことは、兄の手からチョコ満載の布袋を奪い取って、そのまま冷蔵庫に放り込むことだった。
去年まではせいぜい一、二個だったので、二人きりになった時の妹の反応が懸念されたのだが、思ったよりも冷静な対応で達也はホッとしていた。
「お兄様、すぐに夕食の準備に取り掛かりますので、しばらくお部屋でお寛ぎください」
キッチンまで様子を見る為について来た達也へ、クルリと振り返って、深雪は不自然な笑顔満開で、そう釘を刺した。
翻訳すれば、呼ばれるまで見に来るな、ということだ。

去年までと異なる展開に一抹の不安を覚えながら、達也は大人しく自室にこもった。

そして、約一時間。

「そう来たか……」

達也は思わず、声に出して呟いていた。

ダイニングに充満するチョコの甘い香り。

真由美の薬モドキとは訳が違う、正真正銘、誤解の余地無き、チョコレートの匂いだった。

深雪が笑顔で――今度は自然な笑みだった――席に着くように促す。

その姿もまた、達也を唖然とさせるものだった。

「どうなさいました？」

笑顔を悪戯っぽいものに変えて、深雪がちょこんと首を傾げた。

明らかに、分かっていてやっている顔だ。

「……その衣装は何処で手に入れたのかと思ってな」

「衣装、ですか？　これは単なる、給仕用の服ですが」

そう言われれば確かに、用途としては合っている、かもしれない。

しかし、ＴとＯはともかく、Ｐについては相応しいと思えなかった。

ここが一般家庭のダイニングではなく、ある種の趣味人が集うレストランであったなら、ＴＰＯに適っているとも言えただろうが。

パフスリーブのブラウスに、胸元が編み上げになったジャンパースカート、フリルたっぷりのエプロンに、頭にはカラフルな三角巾。

つまり、チロリアンドレス・スタイルだった。

料理に合わせたコンセプトは理解できるとしても、少々やり過ぎではないだろうか……

「……あの、似合っておりませんか……？」

「いや、似合っているよ。とても可愛い」

そう思いながらも、妹に不安げな声で問われれば、ついそう答え

てしまう自分に、達也はガラにもなく、頭を机か柱にぶつけたくなった。

「ありがとうございます！」

彼の心中とは裏腹に、深雪は上機嫌で次々と料理を並べて行く。

こうなれば、達也も食卓につかない訳にはいかない。

で、肝心な、今日のメニュー。

メインの肉料理は、鶏肉のチョコレートソースがけ。

付け合わせはナッツぎっしりクッキーのチョコレートフォンデュ。

デザートはフルーツの、こちらはブランデーを加えたホワイトチョコレートフォンデュ。

誇張抜きの、チョコずくめだった。

「お兄様、どうぞ召し上がってください。深雪がお兄様の為だけにご用意した、バレンタインチョコレートです」

確かにこれは、一緒に住んでいないと出来ない真似だ。

お菓子ではなく料理としてチョコレートを出すというのは。

それにこれなら、確実に今日、達也の口に入る。

深雪が知恵を絞った結果だった。

デザートを食べ終わる頃になると、深雪の顔がかなり赤味を帯びてきた。

ホワイトチョコレートのフォンデュを食べながら、ブランデーのアルコールが十分に抜けていないんじゃないか？　と達也は懸念していたのだが、どうやら気の所為ではなかったようだ。

深雪はお付き合い程度の量しか食べていないから、アルコールの摂取量も多寡が知れているはずだが……

「深雪、大丈夫か？」

「はい？　何がでしょうか？」

キョトンとした顔で問い返しながら、片付けに立ち上がる深雪。

その返答は、少しばかり呂律（ろれつ）のあやしいものだった。

深雪はお皿を全て重ねて、一度に持って行こうとしている。

危ない、と達也は感じた。
普段の深雪であれば、二回か三回に分けて運ぶ量だ。
おそらく、意識していない疲労の所為で、一度に済ませてしまおうという無意識の欲求が働いたに違いなかった。
達也は静かに、素早く、テーブルを回り込んで、
「きゃっ！？」
案の定、足をもつれさせた妹の身体を抱き留めた。
食器の割れる音はしなかった。
片腕で深雪を庇うと同時に、もう片方の手でお皿を残さずキャッチしていた。
スムーズに身体を回転させ、食器をテーブルに戻す。
その上で改めて、両手で妹の身体を支え、しっかり立たせた。
「あ……ありがとうございます、お兄様」
「深雪、少しソファで休んでいなさい」
深雪は大丈夫です、とは、強がらなかった。
強がった結果、達也に余計迷惑を掛けるのは、最悪だったからだ。
それに、シンクに食器を積み上げておけば、後はＨＡＲが片付けてくれる。大した手間にはならないと分かっていたから、兄に後片付けをさせることに対する罪悪感は最小限で済んでいる。
ただ、気持ちが落ち込むのは、避けられなかった。
せっかく良い雰囲気で来ていたのに、最後の最後でドジを踏むなんて……というのが、深雪の偽らざる思いだ。
何か、人知を超えた存在の、嫌がらせを疑わずにいられない。
いや、そもそも嫌がらせと言うなら、妨害と言うなら、呪詛と言うなら。
「……何故、わたしはお兄様の、妹なのかしら……」
ため息と共に、つい、口をついて出てしまった言葉。
零れてしまった本音の欠片。
心を映す鏡の、破片。
昨日から何度も、心の中でリフレインされていたフレーズ。

深雪は慌てて振り返った。
今の台詞は、決して兄に聞かれてはならないものだった。
伝えてはならない想いだった。

本当に、達也の妹でいることに、不満はないのだ。

妹だからこそ、深雪は達也と一緒にいられるのだから。
自分が妹だからこそ、兄は常に、自分を気に掛けてくれるのだから。

しかし――別の関係を望む自分も、確かに、心の中にいる。
それは未だ、欠片に過ぎない。
だがいつか、その自分の欠片が、妹で良いと思っている自分に、取って代わるかもしれない。
それを、深雪は、恐れていた。
それを望む自分がいることを、兄に知られるのを、恐れていた。
振り返った視線の先、達也はまだ、シンクの前にいた。
彼の鋭い五感を以てしても、小さな呟きは聞き取れない距離。
深雪は胸を撫で下ろした。
心の片隅で、聞いて貰えなかったことを残念に思いながら。
そんな自分から、目を背けて。

6－（4）　魔性の笑み（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

6－（4）　魔性の笑み

二月十五日。

一高の校舎内には、昨日の浮ついた空気に代わって、奇妙な困惑が漂っていた。

生徒全員が関係者という訳ではない。

逆に、大多数の生徒にとっては、直接関係の無い出来事だ。

それなのに、困惑は好奇心の波に乗って、瞬く間に全校へ広がった。

達也がその現場に足を運んだのは、昼休み、まだ食事前のことだった。

彼が野次馬根性を発揮した訳ではない。

顔見知りの一年生――こっちは正真正銘「当事者」だ――に拝み倒されて渋々ついて来たのである。

「あっ、司波君」

彼の姿を認めて、何処かホッとした声で呼び掛けて来たのは五十里だった。

「五十里先輩、お疲れ様です。

中条先輩も引っ張り出されたんですか？」

達也が「中条先輩」と呼ぶのは、言うまでもなくあずさのことだ。

「会長」と呼ばないのは、彼の中で生徒会長＝真由美のイメージが強すぎる為で、他意は無い。五十里の隣にはデフォルトで花音の姿。

人垣の中に目を凝らしてみれば、服部部活連会頭の影もある。

「この現象には大勢の生徒が不安を感じていますから……」

と、あずさ本人が不安げに応える。呼ばれたはいいものの、余り彼女向きの事案ではないようだ。

「しかし事実とすれば、高校生の手には余る事件だと思いますが。

先生方は何と仰っているんですか？」

事実とすれば、の辺りで彼を引っ張ってきた同級生が不満げに唇を尖らせる気配がしたが、達也にしてみれば到底事実とは思えない話だったのだ。

３Ｈ〔Ｈｕｍａｎｏｉｄ　Ｈｏｍｅ　Ｈｅｌｐｅｒ；人型家事手伝いロボット〕が――機械仕掛けの人形が笑みを浮かべて、魔法の力を放ったというのは。

人形が笑ったというだけなら、これほど関心を集めなかっただろう。表情を変える機能が実装されたヒューマノイド型ロボットも既に試作されている。

その機能が組み込まれていないタイプＰ９４が本当に表情を変えたのなら、それはそれで異常事態だが、機械技術（テクノロジー）に疎い者には、さして気にならないに違いない。そして魔法科高校生は非魔法系＝純粋機械技術には、それほど詳しくない傾向にある。

だが、表情を変えないはずの人形が微笑みながら魔法を行使した（と達也は聞いた）となれば、魔法科高校生にとって、無視することなど出来るはずもない怪奇（ホラー）現象だ。

彼らが使う魔法は「オカルト」ではあっても「ホラー」ではない。超常の理（ことわり）を操る彼らだから余計に、その理から逸脱する現象に恐れと不安を感じるのかもしれない。

「さっきまで甘楽先生が調べていたけど、ハッキリした結論は出せないと仰っていたよ」

「否定することも出来ない？」

「そうだね」

答えながら、五十里の浮かべる困惑の色は一層濃いものとなった。

「Ｐ９４のボディから高濃度のサイオンの痕跡が観測されたよ。先生が言うには、ボディの胸部中心から外部に放出されたものだそうだ」

五十里の回答に、当然かもしれないが、達也の眉が顰められた。

「３Ｈの胸部は電子頭脳と燃料電池の格納容器ですよね？　どちらから？」

３Ｈの構造は、頭部に通信ユニットとメインセンサー、左右の胸に燃料電池が一つずつ、燃料電池に挟まれる形で電子頭脳が配置され、骨格フレームの中を情報ラインとエネルギーラインが通っている。

胸部中心と言うからには、電子頭脳が発生源だろうが……

「電子頭脳がある辺りだって。まったく……出来過ぎだよ」

予想通りの回答。達也は、五十里と一緒に溜め息をつきたくなった。

当たり前だが、電子頭脳にはサイオンを放出する機能はない。電気信号とサイオンを相互変換するには感応石が必要で、ホームオートメーションの端末に過ぎない３Ｈに感応石を組み込む必要はない。実際に、組み込まれてもいない――はずだ。

「……ここのメンバーが改造したとか？」

ここ、とはロボット研究部のことだ。今、彼らが話をしているのは、ロボ研の部室として割り当てられたガレージの中だった。

「もしそうなら、こんなに悩まないんだけどね」

まるで本気がこもっていない声の質問に、乾いた笑い混じりの答えが返る。

つまらない冗談は、気分転換の役にも立ってくれなかった。

「それと、プシオンの痕跡も見られたそうだよ。こっちは発生源が内側か外側か分からないということだけど」

「プシオンの観測機器の性能は、サイオンセンサーに比べればお粗末なものですから」

口では軽く流していたが、五十里から追加でもたらされたこの情報は、達也の思考能力を強く刺激していた。

突拍子もない仮説が、彼の頭の中で組み上がる。

暴走しそうになる思考を意思の力で抑制し、その源である仮説を一旦意識の片隅に押し込んだ。

「コントロールに異常は見られないんですよね？

勝手に動き出すとか……」

「ああ、今のところ、それは無いよ。
今もコマンドに従ってサスペンド状態で待機している」
後ろから、話し掛けたそうにしている気配がした。
このままでは昼食抜きになってしまう達也を懸念して、深雪とほのかがランチパックを買ってきてくれたのだろう。
「それで、俺は何をすればいいんですか？」
しかしまだ、五十里との話が終わっていない。
自分が何のために呼ばれたのか、それも確かめずおちおち食事も摂れなかった。
「Ｐ９４の電子頭脳をチェックして欲しいんだ。
ＣＡＤは電子技術と魔法技術を結びつける機械の最たる物だ。そして我が校でＣＡＤソフトウェアに最も精通した人材は、君だ。少なくとも僕は、そう思ってる。
九校戦で」
そこまで言い掛けて、今更のように野次馬（ギャラリー）の視線に気がついたのか、五十里は声を潜めた。
「九校戦で仕掛けられた例の『電子金蚕』みたいなものが紛れ込んでいないか、確かめて欲しい」
「なる程」
五十里が何を懸念しているのか、達也にもようやく合点がいった。
確かに潜伏型の遅延術式なら、表情の変化はともかく、人形が魔法を使ったように見せることは出来るかもしれない。そんなことをして何になるんだ、とは思うが、愉快犯の仕業という可能性もゼロではない。
「分かりました。
ただ、ここでは十分なチェックが出来ませんので、メンテナンスルームを使わせていただきたいんですが」
「良いですよ。すぐに許可を取ります」
この答えはあずさのもの。
彼女は言葉通り、携帯端末をチョコチョコと慣れた手つきで操作

して、安堵したように小さく息を吐き、顔を上げた。
「メンテ室の使用許可が下りました。時間は四時限目の終わりまでです」
それは暗に、授業をサボれという意味なのか、と達也は心の中でツッコんだ。

◇◆◇◆◇◆◇

自動調整機能付きのＣＡＤ調整機が置かれている部屋は、フィッティングルームと呼ばれている。生徒や職員が自分のＣＡＤを調整する際に使うのは通常こちらの部屋だ。
メンテナンスルームはＣＡＤをユーザーに合わせて調整するだけでなく、ＣＡＤそのもののアレンジやチューニングも行う為の部屋で、詳細な設定変更や簡易な改造を行える機器が置かれている。
利用者が稀な（機器の扱いが難しいからだ）メンテ室へ、達也はＰ９４本体を運び込んだ。
同行者は五十里、あずさに加えて、深雪、ほのか、エリカ、レオ、幹比古、美月の、いつものメンバー。達也のクライアントは、そうそうたる顔ぶれに気圧されたのか身内で固めた面子に居心地が悪くなったのか、そそくさと逃げ出した。
花音は深雪たちに倣って購買に走っている。
余計なギャラリーは服部が閉め出した。その中に服部自身も含まれていたにも関わらず、エリカやレオの同席を認めている辺りに彼の複雑な性格が垣間見える。もっとも、それが短所という訳でもないだろう。現に五十里やあずさは、野次馬的な視線が無くなって幾分ホッとした顔をしている。
「取り敢えず、何が起こったのか教えていただけませんか」
先に食べてて良いという五十里の言葉に甘えてホットサンドを噛りながら、達也はまず正確な情報を求めた。
「俺は校内に流れている噂しか知りませんので」

達也を引っ張り出した同級生は、十分な事態説明もしなかったのだ。

「事件の発端は今朝七時ちょうど」

達也の要請に、五十里は「もっともだ」とばかり頷き、事務的な口調で説明を始めた。

「このＰ９４は毎日朝七時に自己診断プログラムが起動するように設定されている。必然的に、サスペンドも自動的に解除される」

それは別に異例なことではなかった。毎朝使用前に自己診断プログラムを自動実行することは、３Ｈの使用マニュアルで推奨されている手順だ。

相槌の意味で、達也は一つ頷いた。

「自己診断プログラム終了後は異常が有っても無くてもサスペンド状態に戻る」

これも３Ｈの一般的な取扱い。なお異常が見つかった場合は、遠隔管制アプリケーションをインストールされたサーバーにアラームが飛ぶ仕組みになっている。

「自己診断プログラムは滞りなく終了した。結果は、異常箇所無し。ところがＰ９４は機能を停止せずに、サーバーと交信を始めた。アクセスしようとしたデータは、当校の生徒名簿。

遠隔管制アプリはマルウェアに感染した可能性が高いと判定して、強制停止コマンドを送信。３Ｈに限らず強制停止コマンドは全てのコマンドに優先するから、ソフト的に抵抗することは出来ないし、Ｐ９４にはコマンドを無効化するハードも搭載されていない」

これが軍事用機械だと遠隔コマンドをシャットアウトする装置が組み込まれていたりするが、民生用機器にその手のハードウェアが組み入れられることはない。安全に動作を停止するシークエンスに移行するため完全停止まで時間が掛かるということはあっても、コマンド自体を無視することはあり得ない。

「にも関わらず、このＰ９４は機能を停止しなかった」

だが、どうやらその「あり得ない」ことが起こったらしい。

「Ｐ９４のログには、強制停止コマンドを受信し、正規に処理されたプロセスが記されている。しかしサーバーに対するアクセス要求はその後も続き、サーバー側が無線回線を閉じることでようやくＰ９４の異常な稼働は止まった。

その様子が防犯カメラに記録されているけど、見るかい？」

「いえ。しかし察するところ、そのカメラにＰ９４の『笑顔』が映っていたんですね」

「そう……何だかワクワクしているような、何か待ち遠しいような、そんな表情だったよ」

隣で聞いているあずさの表情が少し蒼褪めているように見えるのは、彼女にとってその笑顔が不気味で恐怖を誘うものだったからだろう。

表情を変えるはずがない機械人形にそんな顔をされたら、達也でも不気味に感じるに違いなかった。

「エレクトロニクス的には停止していたはずのＰ９４が稼働を続けていたのは、電子頭脳以外の何かから発せられた電子的なコマンド以外の信号で機体がコントロールされていたから。そしてそれは、サイオン波そのものか、サイオン波を伴う魔法的な力だ、とお考えなんですね」

「流石は司波君、そのとおりだよ。

廿楽先生はそう仰っていたし、僕もそれ以外に説明はつかないと思う」

「分かりました……診てみます」

話を聞く限りは新種のウイルスに感染したと考えるのが最も妥当な気がするが、それでは「笑顔」の説明がつかない。

五十里やあずさの前で「視力」を使うのは躊躇われたが、どうやら「視」てみないことには始まらないようだ。

「ピクシー、サスペンド解除」

自走式の台車に腰掛けた（正確には、台車の上に固定された椅子に腰掛けた）少女型ロボットに、達也はそう話し掛けた。（命じた、

と表現する方が適切かもしれない）

効果は即座に表れた。つまり、音声入力は正常に動いているということだ。

ピクシーという愛称をつけられた機体はパチッと目を開け、椅子から立ち上がると深々と一礼した。

「ご用でございますか」

起動時の決まり文句が小さく動く唇からスムーズに流れ出す。

文節構成を必要としない、プリセットされている定型文は滑らかに再生される仕様、とはいえ、その口調は以前より人間に近く感じられた。

「今朝七時以降のログを閲覧する。その台の上に仰向けに寝て、点検（インスペクション）モードに移行しろ」

「アドミニストレーター権限を確認します」

達也の命令は、管理者権限を必要とするものであり、ピクシーの回答もプリセットされた定型反応だ。

まだ台車から降りていない所為で、達也より僅かに高くなった目線から、彼女（？）は達也の目を覗き込んだ。――無論それは人間の動作に当てはめてみれば、であって、実際には顔全体を見ているのだが。この距離で虹彩（アイリス）認証を行う技術は、まだ実用化されていない。

ところで達也は、ピクシーの管理者として登録されていない。故に顔パス（顔認証でセキュリティを通過）はあり得ず、権限付与を示すエビデンスを提示しなければならない。

実際、達也は管理者権限を示すカードを、胸ポケットにつけていた。

だから本来ならば、ピクシーの視線は顔ではなく胸ポケットに向けられるべきなのだ。

それなのに。

ピクシーの視線は。

達也の顔に固定されたまま、動かない。

見詰めている、と表現するのが最も相応しい、停滞した時間。
達也やあずさだけでなく、全員が「何かおかしい」と感じ始めたところで、ピクシーが動いた。
その口が「ミツケタ」という小さな音声を紡ぎ出し、
慎重と言っていい足取りで、台車から降りると、
次の瞬間、達也に向かって飛び掛かった。

（回避は、不可！）

達也の脳裏に、

（脅威度は、小）

圧縮された思考が閃く。

――達也は、自分より頭一つ以上小さなピクシーのボディを、正面から受け止めた。
３Ｈは民家内で使うことを想定して、軽量素材で作られている。
衝撃は、大したものではなかった。きっと、平均的な成人女性に抱きつかれるのと同程度のものだろう。
声にならない悲鳴が上がった。
ピクシーの両腕は、達也の首にしっかりと回されている。
つまり、正面から、まさしく、抱きついているのだ。
誰もが、達也本人を含めて、言葉を発することが出来なかった。
絶句、という言葉は、こういう場合に使うのだろう。
それ程の驚きが、室内を支配していた。
ロボットが、こんな情熱的な感情表現を行うなんて、ありえない
――
「……へぇ、司波君って、ロボットにまでモテるんだ」
室内を覆う沈黙を打破したのは、衝撃の瞬間に居合わせていなか

った人間だった。
たった今、部屋に入ってきたばかりの花音が、白けた声でツッコミを入れたのだ。
それを切欠に、麻痺していた感情が次々と再起動を始める。
達也は背中に突き刺すような視線を感じた。
真後ろからブリザードじみた冷たい怒気が送られてきている。
フリーズからいち早く常態に復帰したのは深雪だった。
常態、と言って良いのかどうか、些か疑問も無いではなかったが。
「……お兄様に、お人形遊びのご趣味がお有りとは、存じませんでした」
「とにかくまず、落ち着け、深雪」
ほのかから咎めるような視線を向けられるだけならともかく、まさか妹から浮気（？）の濡れ衣を着せられるとは、達也も思っていなかった。――そんなことを常日頃から想定している「兄」は、そちらの方が何処か病んでいるに違いない。
「俺の方から抱きついた訳じゃないぞ。抱きつかれたんだ」
「お兄様の身体能力なら、避けることなど造作も無かったはずです」
確かに避けようと思えば、避けられた。３Ｈの機械的な最大出力は、誤って家具や食器を壊さないように、またそれ以上に、ふとした機（はずみ）でオーナー家族に怪我をさせないように、平均的な成人女性以下に抑えられている。
「俺が避けたら、お前にぶつかっていたじゃないか」
それでも避けなかったのは、真後ろに深雪がいたからだ。達也ならば体重差もあるから飛び掛かられても受け止められるが、深雪だと押し倒されていた可能性が高い。
「おおっ、あの一瞬でそこまで計算してたのかよ」
「見てたら分かるでしょ、それくらい」
レオが今にも手を打ち合わせそうな声で驚きを示すと、エリカが「何を今更」とでも言いたげな声でツッコミを入れた。
「……申し訳ありません、失礼なことを……」

一方、それが分からなかった（というよりそこまで頭が回らなかった）深雪は、両手で口元を押さえた後、シュンと萎れて己が非を詫びた。ただ、落ち込んでいるように見えて、微妙に嬉しそうでもあった。

「それより、ピクシーを何とかしましょう」

ここで、ようやく再起動を果たしたあずさが、遠慮がちな声でそう提案した。

まだ自分に抱きついたままのピクシーを見下ろして、達也がバツの悪そうな笑みを浮かべる。

「ピクシー、離れてくれ」

達也の命令に、軟性樹脂に包まれた機械の腕がピクリと震えた。

――これは、モーターが作動する際の、単なる反動に過ぎないはずだ。

ピクシーは大人しく両腕を解いた。――名残惜しそうに見えたのは、単なる見間違えのはずだ。

達也を見上げる両眼から熱っぽい眼差しが注がれているように見えるのも、気の所為でしかないはずだ。

全ては錯覚でしかないはずなのに――達也には、何故か無視出来なかった。

「モード変更のコマンドは取り消す。ピクシー、その寝台に座れ」

「畏まりました」

今度はすぐに、指示に従った。管理者権限を要する類の命令ではないから、と解釈するのが常識的だが、さっきの異常な動作が目に焼き付いている所為か、達也の命令だから素直に従っている、という風に見えてしまう。

「美月」

次に達也が呼んだのは、美月の名前だった。

「は、はいっ？」

すっかり傍観者気分だった美月は、突然の指名に声をひっくり返らせた。

意外に思ったのは美月本人だけでなく、五十里や花音も訝しげな目を向けて来ている。
「美月、ピクシーの中を覗いてみてくれ。幹比古は美月が大きなダメージを負わないようにガードして欲しい」
「……ピクシーに何か憑いていると考えているのかい？」
そう問い掛ける幹比古は、無意識に声を潜めていた。
「何か、とは、遠回しな言い方を選んだな、幹比古」
達也の回答も直接的なものではなかったが、彼が何を予測しているのか、伝えるには十分だった。
幹比古は（校内での）所持を禁止されているＣＡＤの代わりに呪符を取り出し、念を込める。
美月も達也の考えを覚ったようだ。
緊張した、少し怯えた面持ちで、それでもしっかりとピクシーを見据えて、眼鏡を外した。
美月の目が、見開かれた。
彼女が口を開くより早く、ピクシーに変化が訪れた。
人を模した仮面に、表情が生まれた。
見られることにより、存在が定着する――これもその現象の一つか。
「います……パラサイト、です」
誰かが、息を呑んだ。
美月を除く全員が、それぞれのやり方で驚きを示し、それぞれのスタイルで身構える。
「でも」
美月の呟きは、まだ終わりではなかった。
「このパターンは……」
眉を顰め、「む～っ」と悩んだ後、美月は急に振り返った。
「えっ、なに？」
彼女の視線の先には、ほのかがいた。

じ～っとほのかを凝視した後、美月は何度か、ほのかとピクシーへ交互に視線を向けた。
「このパターン……ほのかさんに似てる」
そして紡ぎ出した美月の結論に、
「ええっ!?」
ほのかが仰天の声を上げた。
「……どういうこと?」
率直な疑問を口にしたのは花音だったが、そう思ったのは彼女だけではなかった。
「パラサイトは、ほのかさんの思念波の影響下にあります」
当然の驚きと当然の疑問を前にして、美月は珍しく、キッパリとした口調で答えた。
「ええと、それって、光井さんのコントロールを受けているということ?」
「いえ、そういうつながりではないと思います」
五十里の問いに、美月は首を横に振った。
「ほのかさんとパラサイトの間にラインがつながっているんじゃなくて、ほのかさんの思念をパラサイトが写し取った感じです。
あるいは、ほのかさんの『想い』が、パラサイトに焼き付けられた、と言うべきでしょうか」
「私、そんなことしてません!」
「ほのかが意図してやったと言ってる訳じゃない」
パニックを起こしかけているほのかを、達也が宥めた。
「そうだろう、美月?」
「あっ、はい。
意識的なものじゃなくて、残留思念に近いと思います」
パニックの発生は防げた。
しかし、疑問の方はまるで解消されていなかった。
「残留思念……つまり、光井さんが何か強く想ったことが、偶々近くを漂っていたパラサイトに写し取られたということかな?

その後、ピクシーに憑依した？
それとも、ピクシーの中に潜んでいたパラサイトに、光井さんの想念が焼き付いた……？」
幹比古の台詞は、自分の思考を纏める為の作業であり、本質は独り言だった。
だが彼の台詞の後、一拍おいて、ほのかが急に俯いた。
両手で顔を覆っている。
その隙間から見える顔の色は、いつもよりかなり赤かった。
どうやら心当たりがあるようだ。
それを誰かが問い詰める前に、

『そのとおりです』

答えは本人――いや、この場合は「本体」と言うべきか――から、もたらされた。
『私は、彼に対する、彼女の想念によって覚醒しました』
ピクシーの唇は、人が言葉を発する時の動きをなぞっている。
しかしその「言葉」は、耳ではなく、意識に響いた。
「能動型テレパシー？」
「残留サイオンの正体は、魔法ではなく、サイキックだったようですね」
あずさの呟きに相槌を返して、達也はピクシーの正面に進み出た。
「音声によるコミュニケーションは可能か？」
『音声を理解することは可能です。
ただ、この身体の発声器官を操作するのは難しいので、こちらの意思伝達はテレパシーを使わせてください』
「器官じゃなくて装置だからな。
それにしても、我々の言語に随分通じているようだが、どうやって修得したんだ？」
『前の宿主より、知識を引き継いでいます』

「お前はやはり、あの時のパラサイトか？」
『パラサイト――寄生体。確かに我々は、そのようなモノです』
「お前たちはそうやって宿主を換えることが出来るのだな。今までに何人を犠牲にした？」
『犠牲――その概念には異議があります。
何人か、という質問には、答えられません。私はそれを、憶えていない』
達也とピクシーの中のパラサイトの会話に、口を挿もうとする者はいなかった。
誰もが固唾を呑んで、一人と一体を見詰めていた。
「憶えていないくらい多数ということか？」
『違います。我々が宿主を移動する際に引き継ぐことが出来るのは、宿主のパーソナリティから乖離した知識だけです。
パーソナリティと結び付いた記憶は、移動の際に失われます』
「なる程、だから前の宿主がどんな人間だったのかは分からない、それが一人なのか二人なのか、もっと大勢なのかも憶えていないということだな」
『そのとおりです。貴方の理解は正確だ』
「質問に対する回答以外に、そうやって感想を述べることも出来るんだな。お前たちにも感情はあるのか？」
『我々にも自己保存の欲求があります』
「つまり、自己の保存に有益か有害かの判断に由来する好悪は存在すると言いたいんだな。
だが、感情の源泉を今ここで論ずるつもりはない。
話を変えよう。
お前のことは何と呼べばいい？」
『我々には名前がありませんので、この個体の名称「ピクシー」で呼んでください』
「電子頭脳からも知識を引き出せるのか？」
『この身体を掌握してから可能になりましたが、個体名称について

は、先程貴方がそう呼んでいました』
「ではピクシー。
お前は、我々に敵対する存在なのか？」
『私は貴方に従属します』
「俺に？　何故？」
『私は彼女――個体名「ほのか」の、「貴方のものになりたい」という想念によって休眠状態から覚醒しました』
声にならない悲鳴の後、塞がれた口から漏れる呻き声が達也の耳に届いた。
チラリと振り返ってみると、深雪とエリカが二人掛かりでほのかの口を押さえていた。
『我々は強い想念に引き寄せられ、その想念を核として「自我」を形成します。
既に述べたとおり、前の宿主の「記憶」は消滅していますから、どのような想いが「私」をこの世界に引きずり込んだのかは分かりません。
そして今、私の核を構成するのは、「貴方のものになりたい」という欲求です。
故に私は、貴方に従属します』
呻き声が激しくなった。
口を塞がれていなかったら、ほのかは叫びだしていただろう。今だってかなりの勢いで、二人掛かりの拘束に抵抗している。
しかし達也は、ほのかの羞恥心に反応を示さなかった。
「興味深い話だ」
達也の意識は今、「情」ではなく「知」に占められていた。
「お前たちに自我があるというのも意外なら、お前たちがあくまで受動的な存在だというのも意外だ。
つまりお前たちは望んでこの世界に来たのではない、ということか」
『我々は本来、ただ在るだけのものです。「望み」は宿主によって

もたらされます』
「耳が痛いな。
まあ、責任の所在は別の機会に追求するとしてだ……
ピクシー、お前は俺に従う、ということで良いんだな」
『それが私の「望み」です』
「では、俺の命令に従え。
今後、俺の許可無くサイキックを行使することを禁止する。
表情を変えているのも念動の一種だろう？　それも禁止だ」
「ご命令の・ままに」
その言葉を自ら証明するように、ぎこちない声で答えるピクシー。
その顔から、笑みが消えた。
機械の骨格に被せられた、元の、仮面の表情。
だがその、仮面の表情は、妖しい笑みを浮かべているようにも見えた。

6－（5）　燃え尽きるさだめ（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

6－（5）　燃え尽きるさだめ

「ロボットに魔物が取り憑くなど、思いも寄りませんでした」
「ヒューマノイドタイプだから、なんだろうな。とんだ付喪神だ」
まだ信じられない、という表情の深雪に、達也は信じたくないと言わんばかりの口振りで答えた。
兄妹が会話している場所は自宅のリビング、ではなく、自動運転車の車中だった。
この車は市民が共用するコミューターではなく、達也の私物だ。名義の上では父親の物だが、購入資金はトーラス＝シルバーとしての収入から出ている。
何故、半世紀前のバスと同じくらい安価に利用できるコミューターがあるにも関わらず、達也が自家用車を持っているかというと、深雪を送り迎えする上での保安対策と箔付けの為だ。
そうと知る者は多くないが、深雪は良家の子女、つまり「お嬢様」である。それも、かなりハイクラスの。
お嬢様の嗜(たしな)みとして、学校以外のお稽古事も欠かせない。
四葉の特殊な事情のお陰で、真由美のように社交の場に顔を出さなければならないということはまだ無いが、上流階級御用達の教室に通う際には、それが個人レッスン形式のものであったとしても、それなりの体裁を整えなければならないのだ。
ＤＣＡＩ（ドライビングコントロール人工知能）はもちろんのこと、軍用車輌並みの防弾、耐熱、衝撃吸収性能を備えた高級車の中で、余所(よそ)行きに着飾った深雪は、華やかな衣装に似合わない、暗い顔で言葉を続けた。
「それでお兄様……どうなさるおつもりですか？」
「どう、とは、ピクシーをどう扱うかということかい？」
一方、暗色のジャケットを羽織ってはいるものの、フォーマルと

は言い難い、ある意味で高校生らしい装いの達也は、苦笑いを浮かべようとして失敗したような、中途半端な表情を浮かべていた。
「家に連れ帰る訳には行かないからな。適当な口実を作って、学校で情報を聞き出すことになるか」
「……連れて帰らないのですか？　ピクシーはそれを望んでいるのでは……」
何処か、怯えの混じった声で、深雪が問う。
「家に入れられるはずがない」
答える達也の顔は、今度は一応、笑いの形になっていた。
「パラサイトの生態や性質はほとんど分かっていないんだ。あのパラサイトが嘘をついていないという保証は、何処にも無い」
妖怪は嘘をつかない、嘘をつくのは人間だけだ、という俗説は、天の邪鬼という妖怪の存在で破綻している。
嘘をつかない妖怪も嘘をつく妖怪も、どちらもお話しの中だけの存在なのに、あの場の誰もピクシーに取り憑いたパラサイトの言葉を疑おうとしなかったのが、達也には信じられなかった。
「ほのかの思念に感応した、という主張はまるで根拠が無いという訳じゃないけどね。それを裏付ける『姿』を美月が見ているのだし。
でもそれ以外の事は、相手がそう言っているというだけだ。どんな能力を持っているのかも分からないのに、懐に入れられるはずがない」
淡々とした口調で断じる答えを聞いて、見る見るうちに、深雪の顔から翳（かげ）りが取れていく。
「しかしそれですと、訊問してもその答えを信じて良いのかどうか、分からないのではありませんか？」
「その点は人間の捕虜を訊問する場合も同じだよ。
もたらされた情報の真偽は、こちらで判断するしかない」
まだ少し硬さは残っているものの、深雪の顔をヴェールのように覆っていた憂いの色は拭い去られていた。

◇◆◇◆◇◆◇

大きくはないものの、およそ庶民感覚とはかけ離れた、瀟洒な洋館のエントランスで達也は護衛の引継ぎを行った。

引継ぎ、と言っても、単に相手の顔を確認するだけだが。

深雪がピアノとマナーのレッスンに通っているこの教室（学校と言った方が良いかもしれない）は男子禁制。上流階級にはつきもののボディガードいえど、中に入れて貰えない。

「いつも通り、時間になったら迎えに来るから」

「はい。お迎えをお待ちしております」

だから必然的に、こういう会話が交わされる段取りになる。

ちなみにお迎えの時間は二時間後。家に帰るには中途半端な時間なので、近場の飲食店で時間を潰すのが常となっている。

達也はナビで適当に選んだ家族向けのレストランに入った。アルコールメインの店でも大人っぽい格好をして行けば追い出されることはないが、今日は最初からそういう気分ではなかった。

夕食は家で済ませているので、飲み物だけを注文する。ドリンクオンリーで二時間近く粘る客は、普通に考えれば店にとって迷惑な客だが、深雪を待つ際は毎回どの店でもそれなりに高いものを注文するようにしている。意図せぬ嫌がらせになってしまう心配はしなくて良いはずだ。

もし嫌な顔をされても、その時は気付かぬフリをするだけなのだが。

窓際の席に陣取った達也は、書籍サイトを開くこともせず、頬杖をついて窓の外を眺めていた。

ボンヤリしている、ように見える。

達也自身も、何かに集中しているという意識はない。

だが、普通の意味で「ボンヤリしている」という状態とは、正反対だった。

彼は意識を集中するのではなく、意識を拡散させていた。

広く、広く、自分と深雪を二つの焦点とするエリアに、知覚を隈(くま)無く敷き詰める。
空の上から俯瞰する、ではなく、情報の次元から俯瞰する。
複焦点の楕円球空間ではなく、物理的な距離とは無関係な、因果律の連結強度で定義されるリレーション空間に、達也はジッと「眼」を凝らす。

深雪に害を為すものを、何一つ見逃さないように。

彼にはこの「眼」があるから、性別の制限を超えて、一人で妹の護衛を務めることが出来るのだ。
但し、普段からこの「視野」を持っていられる訳ではない。
普段は無意識で行っている作業を、今は、意識的に行うことで更に強化している。
突如発生する因果関係、即ち「偶然」が頻繁に作用する物質次元に身を置きながら、視野をリレーション空間に置いていたら、生傷が絶えなくなってしまう。こういう落ち着いて「観測」出来る状況だからこそ、意識をそちらへ移すことが出来るのだ。
リレーション「空間」といっても、そういう次元があるという意味ではない。
認識の枠組み、「見え方」の一種だ。
また、リレーションといっても赤やら黒やらの糸とか鎖とかでつながっているということでもなく、因果関係が有るという情報を読み出すことが出来るに過ぎない。イメージの持ち方によっては糸や鎖が見えるかもしれないが、達也のイメージは認識の焦点を当てた存在の背後に因果関係を持つ存在や事象が透けて見えるというものだ。
原理的にはこのやり方で未来予知も可能なはずだが、達也にはまだ「現在」と最長二十四時間の「過去」しか読み取ることは出来ない。その代わり、索敵には非常に有効だ。遠隔視の先天性スキルに

匹敵するか、それ以上の範囲と精度で「敵」を識別することが出来る。

その視界の中に、迫り来る敵の情報が表示された。

妹ではなく、彼自身へ向けて。

（護衛失格だな、俺は）

自分自身がターゲットになるようでは、護衛対象をかえって危険に曝すことになる。護衛失格というのは強ち自虐発言ではない。

ただ、声にならなかったその呟きには、失意も反省も、何の感情も込められていなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

配置完了、という報告を聞いて、バランス大佐は小さく頷いた。

今回の作戦に先立ち、ターゲットの生活パターンを分析して、襲撃の機会が少なすぎることに彼女は愕然としたものだ。

何しろ、子供らしい（？）夜遊びなど全くしない。

毎朝のトレーニングに通っている先は、おいそれと手を出せないニンジャのドウジョウ。（未だにこの程度の理解しかしていないアメリカ人は大勢いる）

日曜日は二日ともバイクで何処かに出掛けたようだが、尾行してもすぐにまかれてしまうし監視衛星を使っても行き先はまるで分からなかった。

二週間観察して分かったのは、ただの高校生ではあり得ない、ということだ。特殊部隊の工作員とでも考えた方が、余程納得できる。

その疑念がターゲットの特定（正確には仮定）につながったのだから、調査は全くの無駄という訳でもなかったが。

妹が一緒にいる時の難易度は、シリウス少佐が立証済みだ。ターゲットが長時間独りになって、しかも、逃走される可能性が低い機会――今夜はその、数少ないチャンスだった。

「シリウス少佐、聞こえるか」

バランスが直接、通信機で呼び掛けると、すぐにリーナから答えがあった。彼女は予定通り、近くの公園で待機している。

作戦は、こうだ。

強盗を装った「スターダスト」のメンバーでレストランに押し入り、致死性のない攻撃を掛ける。

その場で捕獲が可能なら、そのまま拉致。反撃を受けたら交戦しつつ逃走し、少佐の待つ公園へターゲットを誘導。

ラフな計画だが、不確定要素が多い条件下で緻密なプランを立てても、上役への見栄えが良いだけで実践的でないということを、極めつけの実践である実戦でバランスは学んでいた。

チェスは、相手の手が全て見えているから、あれだけ緻密な戦術が役に立つのだ。

（懸念はスターダストが第一段階で全滅させられることだが……）

その可能性は小さい、とバランスは己の不安をねじ伏せた。

如何に破棄決定済みの失敗作とはいえ、スターダストもＵＳＮＡの魔法工学技術を注ぎ込んだ強化魔法師だ。

五対一でミドルティーンの少年に全滅させられるとは思えない。

彼女の予想通りなら、相手は知られざる戦略級魔法の使い手だが、大規模破壊を目的とする戦略級魔法は対人戦闘に役立たないものが多い。あれ程の破壊力を持つ戦略級魔法であれば尚更のこと、自滅覚悟でなければ使えないだろう。

ブリオナックのような、特殊な道具でも無い限り。

（仮に全滅させられたとしても、全ての記録を抹消された彼らの素性を手繰ることは不可能だ）

だから作戦が失敗したとしても、その影響を案ずる必要はない、と大佐は自身の思惟にケリを付けた。

マーフィの法則のことは、無意識に考えないようにしていた。

◇◆◇◆◇◆◇

バランス大佐との打ち合わせを終えたリーナは、公園の駐車場に駐めたワゴン車の中で戦術魔法兵器「ブリオナック」の最終点検をしていた。

彼女のために製作され、彼女にしか使えない、それなのにＵＳＮＡ魔法師部隊の総隊長である彼女でも一存では使用できない、超兵器。携行兵器でありながら、その威力は最大で戦艦の主砲に匹敵し、それ程の破壊力を持ちながら出力も射程も自由にコントロールできるという非常識兵器の外見は、長さ四フィート程度の太めの棒だった。

手元三分の二がテニスラケットのグリップと同じくらいの太さで、先端三分の一がそれより二回り太い円筒形、その境目に、ちょうど彼女の手で握れる程度の幅と厚みの、短い箱形の棒が十字に取り付けられている。

点検といってもこれは純粋に魔法力で作動する武器だ。

武装一体型ＣＡＤですらない、魔法兵器（マジック・ウエポン）。

電気的な動力どころかスプリングすら無い。これでは機械的な点検はやりようが無く、魔法を発動直前の状態で待機させ、反応を確かめるしかない。

この道具の性質上、複雑な構造には出来ないと分かっていても、見るからに杖とか槍とか棍棒とかの雰囲気を漂わせるブリオナックを携えていると、自分がファンタジーノベル（ゲームでも可）のヒロインになってしまったようで、微妙な気分だった。

微妙な気分、と言えば。

（大佐の能力を疑う訳じゃないけど……上手く行くのかしら？）

本音では、こんな雑な作戦が達也に通用するのだろうかと、リーナは疑っていた。

複雑すぎる作戦は実戦的でない、というのはリーナにも理解できる。

だが作戦の大前提として、「スターダスト」レベルの術者がたった五人では、持ち堪えるのが難しい気がしてならなかった。すぐに

全滅してしまう可能性の方が高いのではないだろうか、と懸念していた。

達也は厄介な相手だが、手強いのは深雪の方、とリーナも最初は考えていた。

だが今では、そんな考えはすっかり消えてしまった。

達也を格下と侮る気持ちは、今や、皆無だった。

自分が不覚を取ったのは決して油断の所為なんかじゃないと、最近になってようやく、リーナはそう思えるようになっていた。

虚勢から解放されると、相手の実力が不気味で底知れぬものに見えてきた。

自分が何をされたのか、実は分かっていないのだと、気づいたからだ。

「ダンジング・ブレイズ」を塵に変えた魔法は何だったのか。

「ムスペルスヘイム」を無効化した術は、一体何だったのか。

あの時は単純に、分子間結合を破壊されたと考えた。

術式を中和されたと考えた。

だが、どうやってそれを可能にしたのか、とまで考えた瞬間、リーナの思考はフリーズした。

そんなことは出来ない、と気がついて。

少なくとも、自分を含めた、スターズの誰にも出来ない。

分子間結合を破壊する方は、まだいい。

ムスペルスヘイムの、無効化の方は。

魔法を中和するには、それを上回る干渉力が必要となる。

干渉力でシリウスである自分を上回った、という点についてはよしとしても、あの場には深雪の魔法も作用していたのだ。

自分の「ムスペルスヘイム」と、深雪の「ニブルヘイム」が、拮抗していた。

逆方向の術式がぶつかり合っても、効果を相殺するだけで、魔法を中和することにはならない。

魔法を中和する為には、魔法式を上書きする術式を作用させなけ

ればならないのだ。
つまりあの時、達也の執った手段が魔法の中和であったならば、彼はリーナの二倍以上の干渉力を発揮したことになる。
そこに考え至った時、リーナは身体の震えを抑えられなかった。
もしそれが可能であるなら、それ程の力を隠しておく技術までも達也は有していることになる。
中和以外の方法で魔法を無効化したとすれば、それは魔法式そのものの破壊以外にあり得ない。
高圧のサイオン流をぶつけて、その衝撃で魔法式を破壊するという手法があるのはリーナも知っていたが、あの時、そんな反応はなかった。
外的な衝撃で破壊するのではなく、情報構造そのものに干渉して破壊する――スターズの副総長、カノープス少佐ならば、達也の使った魔法が「術式解散（グラム・ディスパージョン）」だと見抜いたかもしれない。しかしリーナは、グラム・ディスパージョンの魔法を知らなかった。
若くして（「幼くして」と表現する方が適切かもしれない）スターズに入隊した彼女は、普通の少年少女とは逆に、実戦経験は豊富だが、それに時間を取られていた分、知識が不十分な面がある。無論、普通の（魔法科）高校生に比べれば色々なことを知っているのだが、知識の量は学習時間によって上限が決まってしまうものだ。どれほど物覚えが良くても、学んだことのない知識は頭の中に存在し得ない。
リーナの抱える不安は、学習時間の不足に起因する経験拡張能力の欠如がもたらしているもの。突き詰めて言えば、彼女はスターズの総隊長として、若過ぎるのだ。
完全能力主義の弊害が顕れている、と言っても良いのかもしれない。
今まではそれがマイナスに作用することは無かったが、本国外の任務、支援が手薄な状況で、達也のような、実戦機会の量を質で補い、その分ひたすら知識と技能を詰め込まれた戦闘者（ソルジャー）を相手にして、

実戦偏重のツケが回ってきているのだった。

◇◆◇◆◇◆◇

達也は戦闘愛好者（バトルジャンキー）ではない。少なくとも自分ではそう思っているし、また実際に彼の方から喧嘩を売るのは限られた条件下においてのみだ。（具体的には、深雪の安全や名誉を守る為に必要な場合のみ）

もっとも、無抵抗主義者でもない。平和を守る為には戦って勝ち取ることも必要だという、若者らしい（？）考えも持っている。

（五人か……）

道路の向こう側に停車したボックスワゴンの中で、今にも飛び出そうと身構えている敵の数を確認して、達也は僅かに逡巡した。

この場は、逃げようと思えば逃げられる。車は後からリモートで呼べばいいのだ。

結論は、一秒で出た。

テーブルの端末で勘定を払って立ち上がる。

それを見ていたのだろう、慌ただしくボックスワゴンのドアが開いた。

達也は足早にエントランスへ向かった。

店の玄関は、ワゴンの正面。

スキー帽のような覆面をつけた五人が路上に立つのと、達也が店を出たのは、ほとんど同時だった。

覆面から覗く瞳は青、赤、黒、茶、灰色とカラフルだった。

これがカラーコンタクトで、外国人の犯罪に偽装しているというのなら徹底しているが、多分、そうではあるまい。逆に、外見を隠そうという意図は大して強くないのだろう。顔が割れても正体が特定されない自信があるのかもしれない。

先回りするように自分たちの前に立った達也に、襲撃者たちは戸惑っている様子だった。

ただ、その睨み合いは、長く続かなかった。
達也が、動いた。
進むでもなく、退くでもなく、男たちから視線を外すと、道なりに歩き出したのだ。
呆気にとられている雰囲気が伝わってきた。
達也は足取りを崩さず、彼らから遠ざかる。
五メートルの距離が十メートルになったところで、襲撃者たちは我を取り戻した。
小さく、ガチャリ、と銃を構える音が達也の耳に届いた。
短機関銃形態の大型ＣＡＤではなく、サブマシンガンにＣＡＤを組み込んだ武装デバイス。
この装備だけで、彼らがＵＳＮＡの魔法師だと白状しているようなものだった。
西欧諸国も東欧諸国も新ソ連も、こんな複雑な機構の武器は使わない。
アメリカ軍以外でこんな凝った武器を使うのは、日本の、他ならぬ独立魔装大隊くらいのものか。
展開された起動式から、ケイ素化合物の軟性弾丸に、射出時帯電、着弾によって放電する効果が付与されることが分かる。一種のテイザーガンなのだろう。彼らはどうやら、達也を生け捕りにする命令を受けているようだ。
達也は既に、右手を懐に突っ込んでＣＡＤのグリップを握っていた。その指は引き金を模したスイッチに掛かっている。
覆面の男たちに背を向けたまま、達也はＣＡＤの引き金を引いた。
素早く振り返り、路面を蹴る。
敵が驚愕に固まっている内に間合いを詰める。
達也が無手の間合いに入ったところで、ようやく敵の硬直が解けた。
ショックを受け過ぎだろう、と達也は思うが、あるいは、やむを得ないことかもしれない。

ただでさえ他者の魔法の影響下にある物体に魔法で干渉する為には、相手の魔法力を明白に上回る干渉力が必要となる。その物体と術者の間に身体的な接触がある場合は、難度が更に大きく跳ね上がる。ＣＡＤや武装デバイスを魔法で直接破壊することが不可能に近いと言われている理由はここにある。

しかし、もしそんな理由で彼らが驚いているのであれば、それは勘違いだ。

彼らが使おうとした魔法は、弾丸に帯電と放電の効果を付与する魔法。魔法の対象となっているのは弾丸であって、銃ではない。銃身はＣＡＤとつながっているが、遊底や撃発装置はＣＡＤから独立した機構となっている。

元々、整備の為に分解し易く作られた銃器の部分は、達也の魔法にとって扱い易い物なのだ。

ここまでショックを受けている理由は、あるいは、かつての日本人に日本刀信仰があったように、アメリカ人には銃器信仰があるのかもしれない。

無論、達也はそんな事ばかりノンビリ考えていた訳ではない。

相手の驚く顔を見て反射的にそういう思考が脳裏を走っただけで、意識の焦点は間合いに入った敵に対する攻撃手段に合わされていた。

達也に彼らを生かしておく理由は無い。

だがここは、天下の往来だ。

繁華街ではなく、夜とはいえ、人通りはあるし街路カメラもあちこちに設置されている。

殺してしまうと、色々面倒臭い事になりそうだ。

かと言って、確実に存在する監視者に、「分解」の魔法を何度も見せたくはなかった。部分分解は、使わない方が良い。

そう考えたから、敢えて間合いを詰めたのである。

達也は掌底を突き出した。

狙いは、腹。

鳩尾を狙うような手間は掛けない。

フラッシュ・キャストを使用。
発動する魔法は振動系。
接触した掌から、振動波が敵のボディに叩き込まれる――はずだったのが、
魔法が跳ね返された感触。
達也は即座に、横へ跳んだ。
下から巻き上がる風を感じる。
彼の残像を、黒光りするナックルダスターをはめた敵の拳が突き上げていた。
その脇をすり抜けて背中に回り、もう一度振動波を叩き込む。
死角から放たれた一撃に、男の身体が地に落ちる。
それにしても驚くべき魔法抵抗力だ。
身体的接触により情報強化の鎧が弱体化した部分に魔法を撃ち込んだというのに、それを反射的に発揮した干渉力で打ち消したのだ。
いくら出力に劣る仮想魔法領域から放った魔法とはいえ、普通ならあり得ない事だ。
（調整体――いや、強化人間か）
態勢を立て直した敵の攻撃を後方に跳んで躱しながら、敵の身体情報にアクセスしてその正体を探る。
単に遺伝子改造されただけに止まらない歪な構造情報は、後天的に無理な強化を重ねた結果に違いなかった。
（こいつら、こんな状態で、どうして動ける？）
何百人という死にかけの人間を「視て」きた達也には、彼らが何時斃れてもおかしくない状態だと分かった。
銃やナイフを振り回すより、病院のベッドで点滴を受けている方が、余程相応しかった。
それなのに、この活力。
まるで、燃え尽きる直前の流星だ。
これはまさしく、地球に捕らわれた星屑が、己の身を炎で削って放つ輝きに他ならない――

もっとも、このレベルなら自分が負けるとは思わない。が、こういうイレギュラーな相手はどんな無茶をしてくるか分からない。多少のリスクを冒してでも、早めに決着をつけるべきだ。

――達也はそう、方針を変えた。

更に跳躍して距離を取り、懐のＣＡＤに手を伸ばす。

抜くと同時に、部分分解を四重発動。

それで確実に、相手を停止させる。

達也がそのイメージを固めたのと、偶然にも、同時だった。

彼がその場に、乱入してきたのは。

◇◆◇◆◇◆◇

修次は、焦っていた。

まさかいきなり、ストリートファイトが始まるとは、予想していなかった。

気配に敏い、と調査書に書かれていたので、距離を取って監視していたのが裏目に出た。

座学の成績が特に優秀、というデータから、慎重な性格という先入観があったのだ。

ここは、彼らのいる場所から約八百メートル離れた中層ビルの、三階のテラス。

階段を駆け下りるのも、もどかしかった。

得物を掴み、飛び降りる。

そのまま修次は、路面を蹴った。

神足の魔法（元は仙術の技法）を会得している修次の走るスピードは、短距離であれば最高で時速百二十キロに及ぶ。

この距離ならば、動力車を使うより走った方が早いし、速い。

到着まで、およそ三十秒。

その途中で、振動系魔法の発動を二度、感知した。

背後から掌底突きを受けて、襲撃者が路上に崩れ落ちたのが見え

る。

マジック・アーツを使うのか、と修次は心の中で呟いた。

調査書には載っていなかった情報だ。

判っていて伏せるほどの情報ではないから、情報部でも掴んでいなかったのだろう。

他にも色々と隠し球を持っていそうだ。

監視対象――現況で護衛対象に移行している――「司波達也」に対する興味が、修次の中で膨らんだ。

一体どの程度、闘えるのか……

だがそれを確かめるのは、別の機会だ。修次は、公私のけじめをつけられる人間だった。（と自分では思っている）

手に持つ武装デバイスのスイッチを押し込む。

短い棍棒が、小太刀に変化した。

千葉家が開発し、警察に納入を始めた新製品を、修次が自分用にチューンアップしたものだ。

彼は「雷丸」や「大蛇丸」の様な高性能の一品物より、取り替えの効く汎用品の方を好む。

武器は所詮武器であり、消耗品。それに、使い手次第で名刀にも鈍刀（なまくら）にもなる。

それは「三メートル以内なら世界最強の実戦魔法師の一人」と謳われる自身の腕に対する自負の裏返しだった。

護衛対象の少年が、大きく後方に跳んだ。

相手は“スターダスト”――ＵＳＮＡ軍に所属する強化魔法師、否、魔法生体兵器だ。調整と強化に耐えきれず、一年以内に死亡する事が確実視された魔法師により組織される決死隊。

長く生きられないのであれば、無駄死にはしない……そう方向付けられた心の在り方は、一種の洗脳に違いなかったが、修次はそれを邪とは思わない。使命に――信仰ではなく――文字通り命を懸ける姿勢には、寧ろ共感を覚えている。

だがそれだけに、厄介な相手だ。

死兵はこの世で最も手強い兵士。
いくら腕が立つといっても、高校生には荷が重いだろう。
修次は、達也と“スターダスト”の間に割り込んだ。

◇◆◇◆◇◆◇

自分を監視している目があることは、達也も把握していた。それがスターズ、ＵＳＮＡ軍とは別口であることも。
だが、これほどの短時間で介入してくるとは予想外だった。傍観に徹すると、達也は予想していたのだ。
自分に背中を向けているということは、少なくともこの場においては、自分にとって敵ではないということだろう。
割り込んできたときの横顔で、この人物が誰なのかも分かっていた。
エリカの次兄だ。
しかし、何故自分に助太刀するのか、その理由が分からない。
「司波君」
話し掛けてきたのも予想外なら、
「僕の名は千葉修次。君のクラスメイトの、千葉エリカの兄だ」
自分から素性を明かしたのも予想外だ。
「この場は僕が引き受ける。君は後ろに下がっていなさい」
流石に事情説明は無かったが、そんな場合でもない。
「ありがとうございます」
任せろ、と言うなら、達也に否やは無かった。
足早に後退すると、修次の背中から肩透かしにあったような気配が漂って来た。
もしかして「僕も闘います！」的な台詞を予想していたのだろうか。
生憎達也は、そんな我が侭な性格ではなかった。専門家が下がれと言うなら、素直に従うだけだ。

――彼の益になる限りは。
突然の乱入に相手が戸惑ったのは数秒のこと。
覆面の四人は、何処からか取り出した拳銃を修次に向かって突き出した。
現代魔法はスピードを重視する技術体系で、ＣＡＤはその解答。
それでも、起動式を処理して魔法式を構築しなければならない魔法より、ただ引き金を引く方が速い。この距離ならば照準に時間を掛ける必要も無い。
この男たちは相当実戦慣れしているのだろう。魔法という特殊技能に頼るより、速やかに障碍を排除する手段を迷い無く選択した。魔法を全く放棄しているのでもなく、移動系魔法の発動処理を同時進行させている。おそらくは、相手の飛び道具を防ぐ為のものだ。
矛としての銃と、盾としての魔法。
それぞれの特性を活かした使い分けだ。思うに、達也に対しては「生け捕り」という足枷があって、本来の戦闘力を発揮できていなかったのだろう。問答無用で敵を斃す、それが彼らの、本来の戦い方に違いなかった。合理性を追求した戦闘スタイルは、大抵の敵を打ち倒すに足りるものだ。

ただ、千葉修次は、普通の相手ではなかった。

男たちが引き金を引くより速く、修次は距離を詰めていた。詰め寄られた当人以外には、修次が消えたように見えたに違いない。達也でも意識を集中していなければ見失いそうな速度だ。
すれ違いざま、小太刀を一閃する。
拳銃を握る手の、手首から先が落ちた。
斬撃の一瞬、「高周波ブレード」が発動していたことに、男たちは気づいたかどうか。
仲間の苦鳴に構わず、三人は修次に銃口を向け直した。
銃弾は修次の残像を貫いた。

ガラスが砕ける音をＢＧＭに、修次が間合いを詰める。
神速、という程ではないのに、照準が定まらない。
実像と虚像が重なり合う。
達也も、至近距離で相対したなら、実像を捉えきれる自信が無かった。
分身のタネは、突進と停止の繰り返しだ。
突進、停止、方向転換、突進、停止を繰り返すことにより、相手の網膜に残像を生み出している。
本来、剣の術理は、停止＝居着きを嫌う。細かい理屈を抜きにすれば、居着きとは筋肉の硬直であり、足を止めるという動作は、足の筋肉を硬直させ、その状態に固定するもので、居着きに陥る原因の一つとなる。
しかしそれは、筋力だけで動いている場合の話だ。
修次は「起こり」、つまり肉体の初動を魔法で管制することにより、完全に停止した状態からタイムラグ無しでトップスピードに移行している。
だがこれは、言うは易く、実践は困難を極める。
思考より動作が先行するのは、武術の世界で当たり前に起こることであり、考えるより先に動くことが出来なければ一流には成れない、とも言える。
修次のやっていることは、思考を追い越す肉体の動作を、更に先取りして魔法を発動する、というもの。
そういえば先程の高周波ブレードも、相手に、どころか傍（はた）から見ている者にも察知されない程、一瞬で発動し一瞬で終了していた。
あれでは相手は手の内を読めず、対策も取れないだろう。
この切替の、オン・オフの速さこそが、千葉修次を世界で十本の指に入ると言わしめている源泉に違いない、と達也は思った。

◇◆◇◆◇◆◇

達也が修次の戦力分析をしている間に、覆面の男たちは全員、無力化された。
修次が小太刀を持つ手を下ろす。
警戒を解いている様子は無かったが、多少、緊張を緩めた感はあった。
それは達也も同じだった。
助太刀の礼を言うべく、修次に向かって足を進めた、三歩目で、

強烈な危機感が、達也を襲った。

修次もそれを、感じ取っていた。
達也が身を伏せるのと、修次が小太刀を立てたのは、ほとんど同時だった。
その直後、
煌めく光条が修次に襲い掛かった。
小太刀が光条――高エネルギープラズマのビームを迎え撃つ。
刀身に当たる直前で、光条が左右に分かれている。
おそらく、ベクトル改変の魔法でビームを曲げているのだろう。
だが、電磁波の影響を遮断するには、不十分だった。
光条が消える。
不思議なことに、プラズマは街並みに被害を与えていない。
修次の身体が路上に倒れる。
細かく震えているのは、至近距離で浴びた電磁波に筋肉が痙攣しているのだろう。
高出力のスタンガンを喰らったようなものだ。
達也は光条の推定射出地点へ目を向けた。

遠く、闇に霞む車道の中央、

街灯にボンヤリ浮かび上がる、

深紅の髪と、金色（こんじき）の瞳。

杖のような物をこちらへ向けて、「アンジー・シリウス」が、誘（いざな）う眼差しで達也を見ていた。

6－（6）　模造神器（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

6－（6）　模造神器

「――ねっ、酷いと思わないっ？　あれじゃ私、晒し者よ、晒し者っ」

『……もう四度目』

テレビ電話のこちら側と向こう側で、真夏と真冬くらいの温度差がある。

とは言っても、どちらも北半球であり、季節の上では同じく冬。比喩的な意味で、精神的な温度差がそれ程に違うということだが。

「いいじゃない、それくらい恥ずかしかったんだから」

『それは分かったから、こっちの事情も分かって欲しい。今、何時だと思ってるの？』

台詞に合わせて、三針式の置き時計がディスプレイいっぱいに映し出された。

短針は文字盤の？と？の中間を指していた。

『せめてあと二時間待って欲しかった』

今にも瞼が閉じそうな目で雫がぼやくと、流石に申し訳なさそうな顔でほのかは肩を窄めた。

「これでも一時間は待ったんだけど……」

ほのかの言い訳に、寝ぼけ眼を瞬かせながら、雫は諦念をため息に換えて吐き出した。

『そういうとこ、昔から少しも変わらない……』

「いつもいつもご迷惑をお掛けします……」

『迷惑じゃないよ……時間さえ気にしてくれれば』

「うっ……ごめんなさい」

言い訳も出て来なくなったほのかを画面越しに見て、雫はもう一度溜め息をついた。

今度はため息と一緒に眠気も吐き出したのか、目が半分しか開いていないのを除けば、かなりしっかりした顔つきになった。

『でも、結果的に良かったのかも』
声も抑揚が乏しい――のはいつものこととして、発音が鮮明になっている。
「何をよ？　何がよっ？　良かったことなんて無いよ！」
慰めにしては突き放したような台詞に、ほのかはたった今まで萎れていたのも忘れて猛然と食って掛かった。
『でも、自分の口からは言えなかったでしょ』
しかし、雫はいい加減な気持ちで「良かった」と言った訳ではない。
その口調の所為なのか思わせ振りな台詞そのものの所為なのか、ほのかの抗議は喉元で詰まった。
『依存癖、自覚してるよね？』
「そんなもの……」
反射的に否定しようとしたほのかだが、自分でも否定しきれないと思っているのか、最後まで言えずフェードアウトした。
『ほのか、私たち、何年の付き合いと思ってるの』
そこに優しく言い聞かせる口調でダメ押しが掛かる。
「……だって、仕方ないじゃない」
ほのかは、観念したような、開き直ったような声で雫の指摘を認めた。
「私は『エレメンツ』の血統なんだから」
遺伝子に性格まで書き込めるものなのかな？　と雫は毎度のことながら疑問に思ったが、そんなことで口論しても意味はないし、議論が必要なことでもないのは分かっていた。
『依存したがるのが良いとか悪いとかじゃないよ。リーダーばっかりじゃ、世の中回っていかないし。
私が言いたいのは、達也さんはほのかが依存するのにちょうど良い相手だってこと』
「そう……かな？」
『うん』

恐る恐る訊ねるほのかに、雫は刹那も迷う素振り無く頷いた。
『達也さんは基本的に、相手が求める分だけしか応えない人だと思う。
その代わり、求めたことにはキチンと応えてくれる人』
「ハッキリ言わなきゃ、分かって貰えないってこと？」
『そうだね。それに、きっと、淡泊だから』
「……えっと、それって……？」
『言いなりになっても、無理やりエッチなことされたりしない、ってこと』
ほのかの顔がみるみる赤く染まった。
ただ、赤面しながらも、少し残念そうな表情が垣間見えている。
『ほのかは少しくらい強引に迫って欲しいかもしれないけど』
「雫っ！」
ほのかは声を荒げて画面を睨み付けた。が、そこには「だって、本当のこと」という顔をした雫が映っているだけだった。
「もうっ！」
拗ねて顔を背けてみても、
「……」
「……雫」
先に音を上げたのは、やっぱり、ほのかの方だった。
「私、どうすればいいのかな」
『積極的になるしかない』
雫も経験豊富というわけでは無かったが（寧ろ、経験に乏しかったが）、あれこれ考えすぎて袋小路に陥っている感じの親友に対し、敢えてシンプルに、断言した。
「今だって精一杯積極的なつもりなんだけど……」
『つもり、じゃダメ。ライバルが手強すぎる』
「ライバルって……？」
『深雪に勝つのは難しいよ』
「深雪っ？　だって、深雪と達也さんは」

『兄妹だね。それが？』
常識的な反論をしたほのかに、何を今更そんなことは分かっているはず、というニュアンスを一言に込めて雫は返した。
「そんな、だって、そんなの」
『ほのかは達也さんとセックスしたくて付き合っている訳じゃないよね』
「あ、当たり前じゃない！
……そりゃ、全く興味が無いって訳じゃないけど……」
モジモジし始めたほのかに、雫は画面の向こう側から「なに言ってるんだコイツ」という目を向けた。ただ、ここで黙り込んでしまって居心地が悪くなるのは彼女の方だ。
雫は強引に話を纏めに掛かった。
『血縁が邪魔になるのは、そういうコトをする時だけだよ。一緒にいるだけで満足なら、血のつながりは障碍にならない。
私、深雪に訊いてみたんだ』
「……何を？」
聞きたくない、でも聞かずにいられない……そんな顔で、ほのかが問い返した。
『達也さんのこと、どう思ってるか』
「……それで？」
『愛してる、って』
「そう……やっぱり……」
真っ青な顔で、それでも悲鳴を上げたりすることなく、代わりにポツリと、ほのかは呟いた。
『恋じゃなくて、愛だって』
「……そうなの？」
『女の子として、男の人を好きになる気持ちじゃないって言ってたよ。
単に、妹だから、ってだけじゃなさそうだったけど』
「？」

だが、追加でもたらされた情報については、どう受け止めて良いのか決めかねている様子だった。
『でも……』
「でも？」
『それは自分でも気がついていない建前で、深雪はやっぱり、女の子として達也さんのことが好きなんだと思う』
「雫もそう思うんだ……」
『うん。だからね、気がつくまでが勝負だと思う』
「どういう意味？」
『深雪が開き直っちゃう前に、ほのかが達也さんの一番になるんだよ』
「そんなの、無理だよ……」
『諦めるのは、ダメだった時だよ。今度のことは災難だったけど、アピールには使えると思う』
「達也さんに対する？」
『そう。どうせだから、全部打ち明けちゃえばいい』
「うるさがられないかな……」
『大丈夫。達也さんはきっと、負担に感じたりしないから』

◇◆◇◆◇◆◇

雫がほのかを焚きつけている、ちょうどその頃。

達也は「アンジー・シリウス」に変身したリーナと対峙していた。

深紅の髪、金色の瞳、顔立ちも背丈も変わっていて（全て見掛けの上でのことだが）、到底リーナと同一人物には見えない。仮面で顔を隠さない方が、かえって別人物だという印象を強くする気がする程だ。

達也は注意深くその姿を観察した。彼もこの二週間、遊んでいたのではない。八雲の「纏衣」を練習相手に、情報改竄（かいざん）魔法「パレード」の対策を積み上げている。

今は外見を変えるだけに止め、座標情報の書換は行っていない、と分かる。この手応えならば、座標を改竄されても、照準に捉えることが出来ると達也は思った。

だからといって、楽観できる状況ではなかったが。

リーナが外見しか弄っていないのは、余裕や油断の故ではないはずだ。寧ろ、余裕が無いからだろう。

（つまり、今の魔法はそれだけのキャパシティを必要とする、ということか）

ＵＳＮＡ軍最高峰（それは同時にＵＳＮＡ最高峰にも等しいはずだ）の“シリウス”が、それだけ力を集中しなければならない魔法――

（今の術式は、おそらく……「ヘビィ・メタル・バースト」）

十三使徒アンジー・シリウスの戦略級魔法「ヘビィ・メタル・バースト」。重金属を高エネルギープラズマに変化させ、気体化を経てプラズマ化する際の圧力上昇を更に増幅して広範囲に散撒（ばらま）く魔法。

しかし、「ヘビィ・メタル・バースト」は高エネルギープラズマを爆心地点から全方位に放射する魔法だったはずだ。それなのに、千葉修次を襲ったプラズマは指向性を持つビームとなっていた。

（収束されていただけじゃない。有効射程……拡散範囲もコントロールされていた）

修次から逸れたプラズマ光条が道路沿いの建物に被害を与えなかったのは、プラズマが届かなかったからだ。標的を通り過ぎるとプラズマがエネルギーを失うように術式が組まれていたのか、あるいはビームの終点にストッパーの役目を果たす力場を設定していたのか。

どうやってそんなことを可能にしたのか、一度見ただけでは分からなかったが、おそらくは――

（あの「杖」か）

リーナが手に持つ、あの杖が、それを可能にしているのだろう。

おそらくはＵＳＮＡの開発した術式補助装置。立場が違えば素晴らしいと称賛を惜しまないであろう、技術だ。

（だが今は、最高度の脅威）

プラズマ流制御のシステムを解明するには至らなかったが、何も分からなかった訳ではない。

もう一度「視」れば対策を立てられる。希望的観測か？　という思惟は自身で即否定した。こういう時に弱気になっても、良いことは何もない。

寧ろ、問題となるのは、

（直接喰らって、反撃の余力が残っているかどうか、だな）

物理的な攻撃に対してある意味で無制限の再生能力を持つ達也だが、彼に出来るのはあくまで「再成」であって「防御」ではない。

無制限というのは損傷の程度であって、回数ではないのだ。

今のビームは、光速には程遠い。発生から落雷までの平均で音速の約六百倍となる雷光にも劣っていた。精々、音速の百倍程度だろう。

しかしそれでも現在の間合い、六十メートルの距離を埋めるのに二ミリ秒を要さない。それは一瞬と同義だ。見て、回避することは不可能。

だが……

（それだけの速度で高熱源体が移動すれば、それが希薄なガスだったとしても、強い衝撃波が発生するはずだ。

それが無かったということは、予め通り道が作られていたということに他ならない）

その「道」の生成を察知できれば、射線から身を躱すことが出来る。

達也は知覚を総動員してリーナを睨み付けた。

闇を隔てた街灯の下、リーナは達也の視線からついと目を逸らし、

クルリと踵を返し、チラリと振り返って、薄く、笑った。
誘っているのは、明らかだった。
達也は迷った。
罠であることは間違いないが、罠というなら、既に達也はその顎（ア）門（ギト）の内に在る。
誘いに乗らなかったからといって、無事に帰してくれるとは思えない。
相手の狙いを外す為であっても、こんな所で撃ち合うのは論外だ。
どうすべきか決めかねている達也の視線の先で、リーナの足が、軽やかに路面を蹴った。
それが、迷いを断ち切るきっかけになった。
走る、というより跳びながら、高速で遠離っていく深紅の髪。
同じように重力制御を発動して、達也はその背中を追いかけた。

◇◆◇◆◇◆◇

「シリウス少佐、ターゲットに接触！」
「応答は？」
「ありません！」
ＵＳＮＡ軍がダミー企業の日本支社内に設けた秘密指揮指令室（コントロール・ルーム）は、ある種のパニック状態に陥っていた。
捕獲作戦は第一歩から変更を余儀なくされていたが、ヴァージニア・バランスの手足はその程度で動揺したりしない。
日本軍（のエージェントと思しき戦闘員）の介入は、寧ろ予想通りだった。
原因は、別にある。
リーナが独断で配置を離れたのが、混乱の始まりだった。
スターズ総隊長「シリウス」は単独で行動する権限が与えられているので、軍規違反とは言い切れない。しかし今は、チームによる作戦が進行中なのだ。許容されているからといって、何をやっても

良いということではない。
また、ブリオナックの使用をリーナの自主判断に任せたのはバランスだが、往来の真ん中でぶっ放すとは予想外もいいところだった。
「ターゲットはシリウス少佐の追跡を始めました」
新たな報告に、コントロール・ルームの雰囲気が多少の落ち着きを取り戻す。
スターダストの回収も含めて後始末を考えると頭が痛くなってくる。だが取り敢えず、作戦は当初のシナリオに復帰した。
――と、バランス大佐を除いては、考えていた。
（作戦の中止条件を徹底しておくべきだったか……）
「中継車を呼び出せ」
内心の苛立ちを微塵も覚らせない抑制の効いた声で、大佐はオペレーターに命じた。

◇◆◇◆◇◆◇

灯りが隈（くま）無く街を照らしているように見えて、フッと光が途切れている箇所がある。
不夜城に生まれた、黒い空白地帯。
誘い込まれた公園も、街の灯りの狭間にあった。
いや、ここは公園というより、空き地というべきか。
生け垣は手入れされているが、遊具どころかベンチも無い。街灯も申し訳程度にしか配置されていないが、多分、戦時中に防災空地として確保された公有地が、再開発の過程で放置されたのだろう。
リーナはその、疎らな街灯の下で黄金の髪を曝していた。
頭上には蓋をしたような暗闇が被さっている。
今夜は元々、月も星も見えない曇り空だが、それだけでないのは一目で分かった。
監視衛星や成層圏プラットフォームのカメラを遮る光学系魔法が作用している。

ここは敵の包囲の中。
罠と知って飛び込んだのだから、今更驚きも焦りもしない。
隠蔽以外の魔法が作用している痕跡の無いことの方が、達也には意外だった。
（魔法同士の干渉を嫌ったのか……）
つまり、リーナが使おうとしている魔法は、彼女にとっても、それほど高度な術式であり、集団で攻撃するより彼女の単独攻撃に任せる方が効果的と友軍に考えさせるほど強力なものだということだ。
幻影を解除したのも、おそらくは、攻撃術式に意識を集中する為。
（やはり、「ヘビィ・メタル・バースト」）
「タツヤ」
達也が改めてリーナの手札に関する推理を強めたところで、リーナが口を開いた。
「ノコノコついて来るとは思わなかったわ」
「しつこく付き纏われるのは迷惑だからな」
人を食った回答を聞いて、リーナが酷薄な笑みを浮かべた。
「自信家ね。でも、今度ばかりは自惚れ過ぎよ。
タツヤ、投降しなさい。アナタがどんな手段で魔法を無効化しているのか知らないけれど、このブリオナックを無力化することは出来ないわ」
手に持つ杖を脇の下に手挟む形で達也に向けて、リーナはそう告げた。
それは、彼女にとっては単なる投降勧告以上のものではなかったが、
（ブリオナック……Ｂｒｙｉｏｎａｋ？　Ｂｒｉｏｎａｃ〔ブリューナク〕か？）
達也の頭の中では、彼女の言葉を手掛かりにパズルのピースが完成間近まで組み上がっていた。
名前には意味がある。
完成した後に付けられる名前は、その属性の一部を示しているこ

とが多い。
観察と思考に意識を取られて、達也はリーナの勧告に対する回答を忘れていた。
リーナはそれを、拒絶と取った。
短絡的、と誹ることは出来ない。
うっかり回答に時限を設けるのを忘れていたとはいえ、投降勧告に対する無回答は慣習上、拒絶を意味するのだから。
リーナが杖から水平に突き出している横木の片側を握った。
そのパーツは、グリップの役目を果たす物に違いなかった。
瞬時に構築された魔法式を感知して、達也は術式解散を発動しようとし――間に合わないと悟って、中断した。

杖の先端が煌めいた。

細く絞り込まれた光条が、達也の右腕を掠めた。
掠めただけなのに――達也の右腕は、肘から上が、炭化して消し飛んだ。
衝撃に身体が捩(よじ)れる。
その勢いに身を委ね且つ利用して、達也は背後の生け垣に飛び込んだ。
リーナがブリオナックを長物のように構えて突進した。
間合いを詰め、達也が隠れた生け垣に向けて、水平に振り回す。
生木がたちどころに燃え散った。
生け垣の、灌木だけが。
その後ろの達也には、プラズマが届いていない。
右肩を押さえ右半身を後ろに隠し、片膝をついた達也の視線の先で、光を放っていたプラズマの刃が幻のように消えて行く。
「ブリオナック……貫くもの、ブリューナク。
神話の武器を再現した、ということか？」
その姿勢のまま、歩み寄って来たリーナに達也が問う。

その声に苦痛が滲んでいないのは、痛みに対する耐性が高いからだろう、とリーナは思った。
対拷問訓練を積んでいる特殊な兵士には珍しいことではない。
「そんなことが気になるの？
タツヤは今、生きるか死ぬかの瀬戸際なのに」
杖の中で再び、魔法式が瞬間発動する。
押し固めた金属の粉を、高エネルギープラズマに分解する魔法。
魔法によって作り出された「高エネルギープラズマ」という事象が、それを包む容器の中で、リーナの意思によって形を変える。
鼻先に電撃と灼熱の刃を突きつけられて、達也の頭の中で、思考の最後のピースがはまった。
「気になるさ。
人は名前に意味を持たせたがるものだ。
ブリューナクは相手を貫く光の穂先を発生させる槍とも、自在に飛び回る槍あるいは光弾とも伝えられている。
この場合、自在に、というところが肝なんだろうな。
神話の武器を模した、模造神器ブリオナック。
ＦＡＥ理論を実用化していたとは、流石だな、ＵＳＮＡの技術力は」
それまで達也の台詞を興味薄そうに聞いていたリーナだったが、
「ＦＡＥ」のフレーズに、目を見開き、顔を強張らせた。
「……どうしてＦＡＥセオリーを、アナタが知っているの？」
「別におかしくはないだろう。
ＦＡＥ理論は元々、日米共同研究の中で唱えられた仮説なんだから」
「あれは極秘研究よ！　しかも、破棄されたはずの研究だわ！」
「だが実際には破棄されていなかった。
君の手に持つその模造神器が何よりの証拠じゃないか。
ＦＡＥ――Ｆｒｅｅ　Ａｆｔｅｒ　Ｅｘｅｃｕｔｉｏｎ　……実行後は自由、か。

日本語では後発事象可変理論とか呼ばれていたが、フリー・アフター・エグゼキューションの方が内容を良く表しているよ。

魔法で改変された結果として生じる事象は、本来この世界には無いはずの事象であるが故に、改変の直後は物理法則の束縛が緩い。魔法によって生じる事象に物理法則が作用するには、極短いタイムラグが存在する、と言い換えても良いか。

ＦＡＥ理論に従えば、魔法によって作り出されたプラズマは、無秩序に拡散するはずの運動に指向性を与えることも容易ければ、本来の冷却速度に関わらず高熱状態から任意の時間で常温に戻して無害化することも出来る。拡散しようとする性質を抑えて、一定の形状に維持することも可能だ。そういう風にな」

達也の長広舌を遮ることも忘れ、リーナはただ、ブリオナックの柄を強く握り締めていた。

「だが、ＦＡＥ理論において、物理法則が作用するタイムラグは、ほんの一瞬だった。

そんな短時間に、魔法発動直後の魔法師が、作り出された事象に新たな定義を加えるのは、不可能だと考えられていた。

そりゃそうだ。一ミリ秒以下の時間で事象を定義するなんて、人間に可能なことじゃない。

それを……世界の、物理法則の影響を遮断する結界容器の中で魔法を実行することによって、物理法則が作用するまでのタイムラグを引き延ばすとはね。

素直に称賛しよう。

潔く脱帽しよう。

その『ブリオナック』を作った人物は、本物の天才だ」

「タツヤ！」

プラズマの刃が消えたブリオナックを再び砲撃姿勢に構えて（つまり、横に突き出たグリップを握って）、リーナは達也の台詞を遮った。――遮ったといっても、彼の推理はそれで終わりだったのだが。

「もう一度言うわ。投降しなさい！
片腕では得意の武術も使えない。アナタに勝ち目は無いわ！」
リーナの叫びを聞いて、達也は酷薄な笑みを浮かべた。
それは、先程リーナが見せた笑みより、更に非人間的な、ゾッとする笑みだった。
「俺を捕らえて何がしたい？
人体実験か？
アイツらのように？」
不幸にして、アイツら、というのがスターダストを指していると理解できる程度には、リーナは頭が良かった。
緊張と衝撃の相乗効果で、リーナの顔が、血の気を失う。
「当たり前だが……モルモットになるのはお断りだ」
「だったら動けなくして連れて行くまでよ！」
ブリオナックの先端が、至近距離で、片膝立ちの足に向けられる。
その筒先に、達也は、拳銃形態のＣＡＤをねじ込んだ。

焼け落ちたはずの、右腕で。

「その腕！？」
リーナが悲鳴を上げた。
悲鳴を上げた分、術式の発動が遅れた。
達也の魔法は、既に組み上がっていた。
突っ込まれたＣＡＤの「銃口」――照準補助機構が、結界容器の中に狙いを導く。
“シリウス”の力が満ちているはずの模造神器の内部で、分解魔法「雲散霧消」が発動する。
ブリオナックの筒先から、常温のガスと化した金属粒子が勢い良く噴き出す。
ガス圧に負けて、達也の右手からトライデントが飛んだ。
だが、受けた影響はリーナの方が大きかった。

しっかり握っていたのが、裏目に出た。
意図せぬ噴射の反動で、身体ごと、後方に吹き飛ぶ。
地面に叩きつけられた衝撃で、リーナの纏う情報強化の鎧が揺らいだ。
拾い上げるのももどかしく、達也は「再成」を発動した。
ＣＡＤの構造情報と座標情報が復元され、「トライデント」が修復された状態で彼の手の中に戻る。
六連発で放たれた達也の「分解」が、リーナの魔法防御を無効化し、その四肢を貫いた。
両腕、両脚の付け根に、針で突いたような細い穴が穿たれる。
四つの微小な傷が、神経を直接ヤスリで削るに等しい激痛をリーナにもたらした。
苦痛を叫び声で表現する間もなく、精神のブレーカーが落ちる。
リーナの意識は、白い闇に呑み込まれた。

◇◆◇◆◇◆◇

「……リーナ」
一仕事を終えてリーナの所へ戻って来た達也は、まだ意識を失ったままグッタリと地面に横たわる身体を見下ろし、聞こえていないと知りつつ、彼女へ向けて呟いた。
「君はすぐにでも、軍を辞めた方が良い」
先程の一戦は、彼女の甘さに助けられた。
戦力だけを考えれば、もっと苦戦していたはずだった。
右腕を消し炭にされた一発目、グラム・ディスパージョンを中断したのは、ビームを収束していた情報構造を破壊することによってプラズマが拡散し、より大きなダメージを受けることになるのを回避する為だった。始めから収束度を落としていれば、プラズマがもっと拡散するように撃っていれば、彼は右腕だけでなく半身を焼かれ身体の自由を失っていただろう。無論それでも、彼は一瞬で肉体

を復元していただろうが、決め手となった、右腕を手品のタネとした奇襲は使えなかった。

始めから、というなら、砲撃の際に二次被害を抑える為の「道」を作り出すような余分な工程は挿むべきではなかった。射線に沿って発生する衝撃波も、彼の反撃を阻害するダメージを与えていたに違いないのだ。

生け垣を薙ぎ払った時も、彼に傷を与えることを避けるべきではなかった。敵の抵抗力を奪うのに、ダメージを蓄積させていくのは基本のはずだ。

ＦＡＥ理論の長話に付き合う必要も無かった。秘密兵器の作動原理がばれたからといって、動揺しなければならない理由は全く無い。

最後の攻撃は、足を狙うのではなく、皮膚の表面を焼くに止めるよう威力を調節して放つべきだった。ブリオナックの向きを変えることで、彼女は決定的な時間をロスした。右腕が再生されていたことに驚いたタイムラグではなく、ブリオナックを動かすことにより生じたタイムラグの方が、実は致命的だったのだ。

「君に向いている仕事とは、思えない」

彼女の身体を担ぎ上げながら、達也はもう一言、呟いた。

6－（7）　人・対・人（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

6－（7）　人・対・人

瞼を開いて視界に飛び込んできた物は、見覚えのある大型ワゴン車――移動中継基地――の天井だった。
淀んだ、ぬるま湯のような空気が肌にまとわりつく。
だがあの寒空に放置されては、流石に風邪を引いただろうから、換気の不足に不満を唱えるのは贅沢というもの……リーナはそう考えた。
覚醒が中途半端な状態で、リーナは左右を見回した。
特に何か、目的があっての動作ではなかったが……彼女の中で段々と、違和感が膨らんでいった。
何かがおかしい。
何がおかしいのか考えに至ったことにより、彼女の中に残っていた眠気は一気に拭い去られた。
「誰もいない……？」
頭がハッキリしてしまえば、考えるまでもなくあり得ないことだ。
車体こそ「キャンピングカーとしても使える」が売りの大型ワゴン車だが、彼女たちは遊びに来ていたのではない。
アクシデントに遭遇すれば様子を見に出て行くこともあるだろう。
リーナが倒されたということ自体、大きなアクシデントだ。偵察、救出、援護など、複合的な目的で人員を割くことは十分考えられる。
しかし、全員が同時にいなくなることは、あり得ない。
（何故よっ？）
自分たちの意思で、同時に移動中継基地を放棄することは無いはずだ。
ならば、誰が、彼らを――
ハッと気づいて、リーナはモニターのコンソールに向かった。
同じ操作を何度も繰り返し、遂には、大きな音を立てて手を操作

盤に叩きつけた。掌と指がジンジン痛んだが、そんなことはどうでも良いと思えるほど彼女は苛立っていた。

データが全て抹消されていることに対して。

（そうだ。コントロール・ルームに報告しなきゃ）

だが、リーナは再度、癇癪を破裂させる羽目に陥った。

通信機器も全て、外から見ただけでは分からないよう巧妙に、破壊されていた。

二度、三度とコンソールに掌を叩きつけた後、彼女は力なく座り込んだ。

両手が痺れ、熱を持っている。

ノロノロと手を挙げ、怪我が無いか、見て確かめる。

幸い何処にも、血の滲んでいる箇所は無かった。

「怪我はしていないようね……」

ヒステリーを起こして自分で自分を傷つけるなど、子供っぽいにも程がある。そんなみっともない姿を晒さずに済んで、リーナは幾分、ホッとした。

少し気持ちが落ち着いて――彼女は更に大きな違和感に気がついた。

「怪我が……痛みが、無い？」

まず両腿に手をやり、交互に左右の肩口を撫でた。

彼女に激痛を与え、意識を失わせた傷が、跡形もない。

単に傷が無いだけでなく、服にも穴が空いていない。血の痕も無い。

「どういうこと……？」

急に、現実感が失せた。

何処までが現実だったのか。

自分は本当に、傷を負っていたのか。

そう思わされただけではなかったのか。

もしかしたら、彼らも――

（まさか、精神攻撃……系統外魔法？）

ゾクッ、と身体が震えた。
自分たちはとんでもない思い違いをしていたのではないか……そんな疑念に、リーナは襲われていた。

◇◆◇◆◇◆◇

リーナがミスディレクション（と言うほど大したものではなく、単に四肢の傷と服を修復しただけだ）に従って都合の良い思い違いをしてくれたかどうか、達也には確かめる術がない。
それよりも今は、急ぎ片付けなければならない用件があった。
深雪を迎えに行く時間まで、あと二十分。
出来ればその前に、手配を終えておきたかった。
達也は全自動運転の車中で、厳重に暗号化された映像回線を開いた。
『おや、達也殿。どうしましたかな』
「葉山さん、夜分遅くにすみません」
応答したのは四葉家の、と言うより、四葉真夜の執事、葉山。
この回線は、真夜へのホットラインだった。
『遅いと言うほどの時刻でもないが、奥様は生憎、電話口には出られぬご用の最中でいらっしゃる』
「それは失礼しました」
時間から見て、入浴中だろうか。確かにこれはうっかりしていた。
『謝罪には及ばない。君の方から連絡して来たことなど、私の記憶する限り初めてだ。余程の事態なのだろう』
確かに老執事の指摘したとおり、この直通回線を達也の方から開いたのはこれが初めてだ。
四葉に頼るのは、本音を言えば、達也にとって癪に障ることでもあり避けたいことだが、今回は意地を張っていられない。無頭竜（ノー・ヘッド・ドラゴン）の一件や中華連合侵攻の時のように力押しで何とかなる状況ではないのだ。

四葉家の中枢にいる葉山ならば、今回の事情を達也以上に把握しているはずだが、力を借りるなら順序として、達也の口から現状を説明するのが筋だろう。

「実は先程、ＵＳＮＡ軍の小部隊より攻撃を受けました。第一波は千葉家次男、千葉修次の介入により撃退しましたが、千葉修次はスターズ総隊長アンジー・シリウスの攻撃を受け戦闘不能に、その後、自分がシリウスと交戦し……」

◇◆◇◆◇◆◇

リーナを倒した達也は、彼女を拘束する間も惜しんで公園（空き地？）に隣接した駐車場へ向かった。

仮に意識を回復しても、リーナは動けない。

痛覚を遮断しても、運動神経が切断されたままの状態でいる限り、立ち上がることも這うことも出来ない。

そういう風に四肢を撃ち抜いたのだ。

それに、痛みに耐える訓練を積んでいるなら、最初から気を失うことはなかった。リーナが意識を回復することは当分無いと達也は判断していた。

それよりも優先すべきは、バックアップチームの方だ。

上空からの「視線」を遮る光学系（光波振動系）魔法は尚も継続中だ。リーナの素顔を撮影されるわけにはいかない、という事情がある以上、当然の措置だが、それは同時に彼らがこの場から動けないということでもある。

ＵＳＮＡ軍が“シリウス”を切り捨てるはずはなかった。

彼らが撤退する為には、人員を割いてリーナを回収しなければならない。

その為の時間が、達也の付け入るべき隙だ。

彼らも達也の襲撃を予想しているだろう。

警戒されているはずだ。何といっても、目の前で“シリウス”が

打ち倒された様を見ているのだから。
しかしそれでも、バックアップチームを放置するという選択肢は、達也には無い。
リーナを殺すことは出来ない。
殺すだけでなく、拘束することも、だ。
彼女は殺すにも捕虜にするにも、大物過ぎる。
達也は既に、国家公認戦略級魔法師、通称「十三使徒」の一人を葬っている。
意図してのことではないが、それによって世界のパワーバランスに少なからぬ影響を与えている。
ここでまた一人、世界の軍事バランスに算入されている戦略級魔法師を消し去ったとして、それが世界情勢にどんな影響を与えるのか、懸念される要素が大き過ぎた。
しかし、その支援要員の方は別だ。
明白な害意を以て――おそらくは、自分を人体実験の材料にしようとする悪意を持って襲い掛かってきた集団。それは、自分を殺そうとした相手に等しい。
そんな相手に、甘い対応で済ませる余地はない。
司波達也に暗闘を仕掛けることのコストを、しっかりと認識させなければならない。
リーナと相対している最中は支援部隊に意識を割く余裕は無かったが、再び知覚の糸を伸ばしてみると、最初に感知した所から動いていなかった。
エースが敗れるという予想外の事態に、本隊の指示を仰いでいるのだろう。そうでなければこの反応の鈍さは説明がつかない。
仕方のないことかもしれないが、甘いな、と達也は感じた。
負けた場合の撤退手順は、作戦に組み込んでおくべき必須事項だ。
油断、と言うべきだろう。
もっとも、
(油断してくれた方がありがたいけどな)

正面からまともにやり合えば、物量で押し切られるのは最初から火を見るより明らかだ。
リーナと一対一の状況を作ったことからして、相手の油断に他ならない。
無論その背後には、他国の首都で余り派手なことは出来ないという事情もあるだろう。
達也としては、そういう事情をひっくるめて、そこに付け入るだけだ。
照準のアクションも惜しんで、自身の能力のみで狙いを定め、達也は手に持ったままのＣＡＤの引き金を引いた。
ターゲットはワゴン車の電子機器。
一発目で通信機の配線を、二発目で車外カメラの電源ラインを、三発目で車内カメラの電源ラインを取り外す。
本来、魔法はこういう機械的な精密作業に適さない技術だが、藤林と真田の二人掛かりで散々しごかれたお陰だ。
携帯端末の通信機能はまだ生きているはずだが、構わず、達也はワゴン車の扉に手を掛けた。
鍵は掛かっていなかった。
生体認証を使った防盗装置も無かった。
その代わり、弾幕の歓迎が待っていた。
余程高性能のサプレッサーを使っているのか、炸薬そのものも特殊なのか、銃撃音がほとんどしない。ドアの影に潜んだ達也の耳にも、サブマシンガンのスライドが開閉する機械音の方が寧ろ響いて来る程だ。
その僅かな銃声も、すぐに止んだ。
銃器の解体は分解魔法の中で最も数多く練習を積んだ項目の一つだ。
開け放ったドアから大型ナイフを手にした男が飛び出して来た。
車内で起動式が展開された。
白兵要員に目を惹きつけ、後背から飛び道具で――この場合、魔

法で攻撃する。古典的だが、有効な戦術と言える。
相手が起動式を視て認識できる達也でなかったならば。
起動式を展開している段階ならば、「分解」でなくてもサイオンの弾丸を飛ばすだけで対処は可能だ。
達也は空いている左手を前に突き出した。
ここのところ散々練習した「遠当て」の、基本形態たる圧縮したサイオンの弾丸を左手の中に作り出し、展開中の起動式だけでなく全ての敵に撃ち込む。
砕け散る起動式。
敵の魔法師はサイオンの逆流を良く防いだが、時間差で飛来したサイオン弾を受け損なったようで、次の魔法が準備されている気配はない。
飛び出してきた白兵戦闘員は三名で、その内の二人は足下が覚束無くなっている。
遠当てに影響を受けるのは肉体ではなくアストラル体。魂魄の「魄」の部分。意思の力で肉体を制御する能力に長けている者ほどサイオン弾によるダメージを受け易いが、気魄の扱いに熟達するとサイオン弾自体を撥ね返したり逸らしたり出来るようになる。
つまり、意思で肉体をコントロールする修行を中途半端に積んだ者が、最も遠当ての餌食になりやすい。
達也の前で倒れないように足を踏ん張っている二人はそうした中途半端な修行者で、残る一人はその手の東洋的な修行には見向きもしない肉体の信奉者（フィジカリスト）なのだろう。
そういう単純な手合いの方が、かえって手強いものだ。
達也は敢えて、先手を取った。
リーナが身につけていたナイフ形態の武装デバイスを男に向けて投げつける。
と言っても、ただ投げたのではない。
手裏剣術の技法に従い、運動量が衝撃となって切っ先に真っ直ぐ集中する投擲。

それを胸の中央目掛けて撃ち込んだのだ。
ただ払い除けても無傷では済まない。
ここで「躱す」という選択肢を選び取った判断力は流石、玄人（プロ）だ。
男は、達也の注文通りにナイフを躱した。
合理的な行動だからこそ、読み易い。
左肩と左足を引き、右手に持つナイフを外から内に回して、ナイフの軌道を身体の外側に逸らす。
右半身（はんみ）で右手が身体の左に振り切られた体勢。
死角となった右の背中側から、ではなく、次の攻め手は下からだった。
達也の右足が跳ね上がる。
投擲の軸足になった足が蹴り上げられるという変則的な動きは、男の意表をついた。
右側からのフックや回し蹴りを警戒して体を戻しつつあった男の右手を達也の足の甲が捉えた。
男はナイフを手放さなかった。
手首を貫く痛みを堪え、反対に蹴りを打ち落とそうとする。
軸足を蹴り足に使う為には、軸足でジャンプするしかない。
事実、達也の両足は地面から離れている。
蹴りの勢いを止めれば、体格の優位で達也の体勢を崩すことは可能だった。
これが、純粋に体術の勝負ならば。
達也は仮想魔法領域に準備していた重力制御の魔法を発動した。
持続時間を三秒、軌道変更を十回に限定した飛行魔法の術式。
ブロックされた右足を畳み、新たに地面を蹴ることなく上昇した達也は、左の回し蹴りを繰り出した。
今度こそ、男の反応は間に合わない。
左足の甲が、男の首筋に吸い込まれた。
鈍い音と、確かな手応え。
それは、達也にとってお馴染みの、骨を蹴り折る感触だった。

男の身体が横に飛ぶ。
自分の罪深さと異常性に浸っている時間はなかった。
達也の身体は、慣性に逆らって左にスライドした。
その残像を、ナイフが貫く。
遠当てのダメージに抗って、男の仲間が投げつけたものだ。
飛行魔法の効果はまだ続いていたが、達也は両足を地面につけた。
地面を蹴る勢いを、魔法で後押しする。
肉体だけでは――少なくとも達也の筋力では不可能な速度で、達也は二人目の懐に入った。
右手に握っていたＣＡＤは、ホルスターの中へ疾うに移動している。
魔法で身体を停止させるのではなく、踏み込む足で運動エネルギーを受け止める。
地面を揺らす足音と同時に、運動エネルギーを吸い上げた右手が男の胸に打ち込まれた。
拳ではなく掌で、心臓の真上を強打。
男は受け身を取ることも出来ず、真後ろにひっくり返った。
達也は身を深く沈めた体勢から、両足で一気に地面を蹴った。
飛行魔法の効果持続時間、残り一秒。
二メートルの高さに浮き上がった足の下を、背後から浴びせられた銃弾が通過する。
車内からの銃撃だ。
サブマシンガンの代わりに拳銃を取り出したのだろう。
この対応は、寧ろ遅いくらいだ。
達也は腰から拳銃を抜いた。
拳銃形態のＣＡＤではなく、実弾銃。これもリーナから奪い取った物だ。
空中で身を捻り、窓から身体を乗り出している狙撃手に鉛弾をお見舞いする。
そのまま三人目の上に着地した。

右足で肩の骨を踏み抜き、左足で首を横向きに踏み畳む。
魔法の効果が切れた身体は、三人目の後方に着地した。
次々と浴びせられる銃弾は、射手のパニックを示していた。
三人目の身体を盾にして、達也も銃戦に応じる
車体に傷を付けないよう狙いを定めるのが難しかったが、射手が一人だったことが幸いした。
銃撃戦を制して車内に突入した達也は、拍子抜けを味わった。
射殺した二人以外に、二人の男が昏倒していた。
腕に巻いたＣＡＤが、バックアップの魔法師であることを示している。
遠当てが、予想外の効果を発揮したらしい。
自分で思っていた以上に、八雲との特訓は効いていたようだ。
念の為に一回ずつ踵で鳩尾を踏みつけて、反応を確認した上で、達也は死体と一緒に気絶した身体を車外へ放り出した。
リーナの拳銃が小口径だったのが幸いして、弾は貫通していなかった。肉片は飛んでおらず、血もそれほど散っていない。
データキューブを失敬してバックアップを取った上で、車載コンピュータに残っていたデータを全て抹消する。
どうせ次のお客さんが綺麗に掃除してくれるだろうが、簡単に血糊を拭き取って、達也はワゴン車を後にした。
最後まで、気配を殺して潜んでいた監視者の目には気付かないフリを押し通した。

◇◆◇◆◇◆◇

「自分がアンジー・シリウスを移動中継車に運んで来た時には、仕留めたバックアップチームの姿はありませんでした」
『監視していた何者かが連れ去ったということだね？』
「自分の監視を続けるよりも優先度が高いと判断したのでしょう。行動不能状態にあった千葉修次も、自分が戻って来た時には姿が

ありませんでした」
達也の報告を聞き終えた葉山は、少し、思案している素振りを見せた。そこにわざとらしさが全く無いのは、年の功と言うべきだろうか。
『その監視は七草家の息が掛かった者たちでありましょうな』
「七草家ですか？　千葉家ではなく？」
『東京は現在、七草家の勢力圏内。弘一殿が手の者を動かして何やら画策しているご様子とも耳にしていた』
弘一殿、とは七草家当主、七草弘一のことだと達也も知っている。十師族当主の氏名は、日本人魔法師にとって一般的な知識だ。
『魔法の使用を最小限に抑え、近接戦技で対応したのは、その監視者の目を意識してのことかもしれぬが、監視をつけられた時点で望ましいこととは言えませんな』
四月から立て続けに遭遇した事件の内、達也の方から仕掛けたものは一つも無い。全て、彼は巻き込まれた立場だ。とはいえ、護衛役が目立ってしまうのは下手の仕業だと自覚しているので、反論は出来なかった。
『だが、達也殿が何か失態を犯したわけでもないのは重々承知。また、次期当主候補であられる深雪様をお守りするのは達也殿のお役目だが、達也殿だけの責務でもない。
真夜様におかれても、深雪様のお立場を他家に知られるのは時期尚早とのお考えだ。
もっとも、弘一殿のことだ。察してはおられるだろうが……』
察している、というのは達也が四葉の縁者であることを察している、という意味だろう。「薄々」ですらないのか、と達也は密かに感心した。
『それでも、推測以上の確証を捕まれるのは好ましくない。
達也殿がバックアップしたデータをこちらに送ってください。ひとまず、米軍の方を何とかしよう』
サラリと紡がれた葉山の台詞を、達也は大言壮語と思わなかった。

四葉家は、数の上で七草家や一条家に著しく劣っている。
だが、戦力で劣っている訳ではない。
一人一人の質では、寧ろ上回っていると言って良い。
政府機関からカウンターテロの切り札として超法規的業務を受注するに足りるだけの人員は抱えている。
秘密裏に活動している破壊工作部隊や暗殺部隊を闇から闇に葬る仕事は、「数字付き」の中で四葉家が最も長けているという評価もある程だ。
『国防軍を動かす口実が無くなれば、弘一殿も当面の所は手を引かれるでしょう』
他の取り巻きならいざ知らず、葉山の言ならば達也も信用出来る。
データを回線に送り込み、達也はカメラに向かって頭を下げた。

◇◆◇◆◇◆◇

迎えに行った達也と顔を合わせた瞬間、深雪は怪訝そうな目を向けた。
「どうかしたのか？」
「いえ、何でもありません」
と、その場では答えていたが、それが他人の耳を意識しての建前であることは明白だった。
淑女の笑顔で挨拶を交わし、達也にエスコートされて車内に乗り込み、自走車が走り出したところで――
「お兄様、お怪我はありませんかっ？」
深雪がいきなり、達也に縋り付いてきた。
これには、達也も流石に、面食らった。
「いや、深雪、少し落ち着け」
「落ち着いてなどいられません！
この『臭い』……お兄様、リーナと戦われたのでしょう！？
しかも、一対一ではありませんね！？　少なくとも十人以上と刃

を交えられた『臭い』です！」
達也が「情報」を視覚的に捉えるように、深雪は「情報」を触覚的に捉える。しかし深雪の場合はそれだけでなく、直感的な認識を嗅覚的に解釈することもある。
物理的な痕跡は何一つ残していないはずだが、戦いの跡を「嗅ぎ付けられて」しまったようだ。
「いや、頼むから落ち着いてくれ」
心配してくれるのは正直嬉しかった。だが、落ち着いてくれないことには話も出来ないというのも、達也の正直なところだった。
「俺に怪我を『残す』ことなど誰にも出来ないと知っているだろう？」
困惑気味のその言葉に、深雪はハッとした表情を浮かべた。
段々と興奮が収まっていく。
深雪の息遣いが平静を取り戻したのは、五秒後のことだった。
「……申し訳ありません、お兄様。お見苦しい姿を……」
言葉だけでなく、恥ずかしげに縮こまった妹に、達也は控え目な笑顔――多分に作り笑い――で頭（かぶり）を振った。
「いや、俺の方こそ、心配を掛けて済まない」
「そんなこと……兄の心配をするのは、妹として当然です！」
当然なのか？　という反射的な疑問が達也の脳裏に浮かんだが、それを口にする愚は犯さなかった。
ただ、心の中で思っただけだ。
家族の心配をするのは確かに当たり前かもしれないが、ここまで熱烈なのは、実は珍しいのではないだろうか、と。
「無論、リーナが何度挑もうと、お兄様には勝てないということも承知しております。
お兄様に勝てる者など、世界中を探してもいるはずがないのですから」
いつもの様に熱く断言する妹を、何処か醒めた目で見ている自分を達也は自覚した。

深雪の信頼が重いとは感じない。
深雪が自分を信じるならば、自分はそれに何処までも応えてみせる、という想いが達也の中にはある。
それは、決意であり、自負であり、覚悟だ。
だが、そんな覚悟とは別に、今回は危なかった、と客観的に分析している自分もいる。
相手が精神的に未熟な十六歳の少女でなかったならば、相手にその戦闘力を十全に発揮できる意志力があったならば、倒されていたのは自分の方だったかもしれない、と。
しかし、そんな弱気を、護る相手に覚られるのは、仕事とか使命とかを抜きにしても、拙かった。
だから今は、殊更、強気な態度を意識した。
「お前が待っていてくれるんだ。
だから俺は、誰にも負けない」
しかし、この台詞は、言い過ぎだった。
あるいは、やり過ぎだった、と表現すべきか。
深雪の瞳に、霞が掛かる。
熱に浮かされた様な眼差しに、達也は自分の失策を覚った。
しかし、一度口にした言葉は取り消せない。
いや、普通なら取り消しの効く言葉でも、この状況では取り消せなかった。
（……まあ、根掘り葉掘り訊かれるよりはいいか）
達也は逃避気味に、そんなことを考えた。

◇◆◇◆◇◆◇

帰りの足がないリーナが自分のマンションに帰り着いたのは、日付が変わった後だった。
それも直後ではないくらいの「後」だ。
まだ未明でないのが、せめてもの慰めだった。

装備を根こそぎ剥ぎ取られていたが、何故かブリオナックが手元に残されていたので、身の危険を感じるという意味で心細くはなかった。

だが情報端末が予備も含めて奪われていた所為で、迎えの車も呼べなかった。

普段データ通貨しか使わない関係で、元々財布は持っていない。お陰で家まで、自力で帰らなければならなかった。

特化型ＣＡＤだけでなく汎用型ＣＡＤまで取られていたので、飛行魔法も高速走行の魔法も満足に使えない。

断続的に跳躍の術式を組み立てて、ようやくマンションが見えた時には思わず涙が出そうになった。（もしそんな姿を知り合いに見られていたなら、反射的にブリオナックをぶっ放したかもしれない）

生体認証のお陰で、部屋に入るのに苦労は無かった。

ホッとすると同時に、ムラムラと怒りがこみ上げてきた。

（ワタシに何の恨みがあるのよ、タツヤ！）

客観的に見て、恨まれる理由は山ほどある。

しかし、それが感情というものだ。

軍人としての訓練の賜物か、そんな具合に感情的になっていても、真っ先にするべき事は、忘れていなかった。

指揮指令室との通信回線を開く。

だが、いくら呼び出しても、応答が無かった。

背筋を冷や汗が伝う。

不吉な予感を打ち消す為に、リーナは頭を勢い良く左右に振った。

予備の携帯端末で、もう一度コントロール・ルームを呼び出す。

通信機能の不調か、という一縷の望みは、延々と続くコールサインによって遂に絶たれた。

大佐たちの身に何かが起こったのだ、と覚らずにはいられなかった。

リーナは手早くＣＡＤその他の装備を身につけると、疲れた身体にむち打って、ベランダから夜空に舞い上がった。

行き先は、秘密裏に指揮指令室が置かれたビル。
そこで待っている者を、彼女はまだ知らない。
そこに待っている者は誰一人いないということを彼女が思い知らされるのは、徹底的な捜索を終えた一時間後のことだった。

◇◆◇◆◇◆◇

翌日の朝。
ＵＳＮＡ海軍所属の小型艦船が日本の領海を航行中、機関トラブルにより漂流していたところを防衛海軍に保護された、というニュースが活字、映像両メディアを賑わした。
その船には何故か、高位の東京大使館駐在武官が乗り込んでいたが、それが報道されることは無かった。

また、その日、第一高校の美少女留学生は、体調不良により前日に引き続いて学校を休んだ。

6－（8）　裏×裏≠表（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

6－（8）　裏×裏≠表

朝の報道番組を見ていた達也は、無意識に頷いている自分に気づいて、慌てて首の動きを止めた。

幸い、深雪の目もテレビ画面に向かっていて、達也の奇行に気がついた様子はなかった。

「機器の故障でしょうか？　嵐だったり濃い霧が立ちこめていたりという悪天候は、特に見られなかったようですが」

深雪が首を傾げているのは、アメリカ海軍所属の小型艦船が千葉県沖の日本領海内で漂流していたというニュースだった。

「計器が一斉に故障するというのは考え難いから、動力系統のトラブルじゃないかな。

ここまで自動化が進んだ時代に、人為的なミスだけで舵を失うこともないだろうし」

自分の言葉を疑う様子も無く頷く妹の無垢な（？）姿を見ていると、自分の汚れきった心まで洗われていくような気がする。――無論それは錯覚に過ぎないと、達也は自覚していたが。

それにしても……

（叔母上直々の下知があったとしても、この対応は早過ぎる）

漂流船が「保護」された時刻から見て、達也が葉山に連絡してから、半日どころか更にその半分程度の時間で襲撃から後始末まで完了させた計算になる。

戦力の運用に制限のある秘密作戦中とはいえ、相手は一国の正規軍、それも地方軍閥に毛が生えた程度の小国の軍隊ではなく、極めつけの大国の、おそらくは精鋭部隊だ。

いかに四葉の工作部隊が有能だからといって、一から動いていたのではあり得ない早さ。

それはつまり、

（俺が連絡した時には、戦力を配置済みだったということか）

そこにどんな意図があったのかは、分からない。
偶々タイミングが合っただけかもしれないし、出来る限り介入しないというスタンスだったのかもしれない。
達也が頭を下げてくるまで待っていた、という可能性もある。
（もしそうだったとしても、借りに感じたりはしないけどな）
どんな背景があったとしても、結果として事態が好転すれば、達也にとっては十分だった。

◇◆◇◆◇◆◇

動力系統のトラブル、という言葉に頷いて見せて、深雪はそっと、兄の顔を窺った。
特に不審を持たれている様子は無かった。
兄を騙すような真似は辛かったが、彼女にだって偶には、兄に知られたくないことがある。
自分は何も知らないままだと、兄には思っていて欲しかった。
このニュースを深雪は、テレビで見るまでもなく知っていた。
いつもの様に、達也が朝の修行に出掛けた後。
深雪は真夜から電話を受けていた。
内容は「達也の身辺を脅かしていたＵＳＮＡ軍排除完了」の知らせ。
具体的に四葉一族の誰が動いていたのか、深雪は知らない。
だから深雪が感謝を向けることの出来る相手は、真夜だけだ。
それが支配のためのテクニックだと分かっていても、今回は本心から感謝を覚えた。
深雪が、兄も自分も普段は面従腹背の相手である真夜を頼った、ということを達也に伏せてくれていることも含めて。
（ずるいな、わたし……本当のことを知ったら、きっとお兄様、わたしのこと、イヤな娘だって思われるでしょうね……）
深雪は達也に、バカな子だと思われたくない、と思っている。

しかし同時に、あまり賢い子だと思われるのも避けたい、と思っている。

深雪は、兄の重荷になりたくない、と心から思っている。

それと同時に、「自分はもう妹に必要ない」と思わせることは、絶対に避けたいと思っている。

自分が四葉の当主として、自立してやって行ける……そう判断した時、兄は自分の許から去って行くかもしれない。

去らないまでも、距離を置くかもしれない。

それは、深雪を苛んでいる悪夢だ。

深雪と達也は実の兄妹。

大人になれば兄離れをするのは当然だし、妹離れをするのも当然だ。

自分もいずれは結婚しなければならない。

兄でない誰かを、夫に迎えなければならない。

それも、そんなに遠い未来ではなく。

現在、魔法師は早婚であることが求められている。

特に女性魔法師は、早くに結婚して、早くに子供を産むことが求められている。

何故なら魔法師は、代が新しくなる程、先天的に高い能力を持っている傾向があるからだ。

科学者はそれを「魔法が遺伝子に馴染む」という言い方をしている。

トップクラスの能力レベルに世代間の差異は見られないが、平均的な能力を比べれば確かに、祖父の世代より父の世代、父の世代より自分たちの世代の方がレベルが高い。

いずれは均衡点が訪れるだろうが、今はまだ、次の世代を早く産み出すことが強く期待されている。

魔法大学を育児休学する女子学生が珍しくない程に。

寿命の不安定な調整体はその限りでないが、それでも第二世代、第三世代になると若年出産が義務のような目を向けられているのが

現状だ。
晩婚だった兄妹の母や、独身を貫いている叔母は稀な例外で、それだって身体的にやむを得ない理由が無ければ認められなかっただろう。
深雪は完全な健康体で、その条件に合致しない。
まして彼女は、四葉の次期当主と目される、優秀な因子の持ち主なのだ。
（ダメな妹でもいい……ううん、頼りない、ダメな妹と思われる方がずっといい。それでお兄様が、傍にいてくださるなら……）
そう思いながら、その一方で、達也に嫌われたくなくて、愛想を尽かされたくなくて、頑張ってしまう。
それは深雪の抱える、深刻なジレンマだった。

◇◆◇◆◇◆◇

教室に入った達也は、いつもと違う空気を嗅ぎ取って、左右に目を走らせた。
原因は、すぐに分かった。
一クラス二十五人の机の配置は、男女が交互の縦五十音順。
達也の前がレオ、左隣が美月で――暗雲の源は、一列とばした窓際の席だった。
エリカがムスッとした顔で窓の外を眺めていた。
体中から不機嫌のオーラが湧き出しているような姿だ。
（まあ……仕方ないだろうな）
不機嫌の原因も、達也にはピンと来た。
夏に見た、あの傾倒ぶりでは、昨夜の顛末は受け容れ難いものだろう。
「達也さん……エリカちゃん、どうしちゃったんでしょう？」
エリカの姿を一瞥しただけで腰を下ろした達也に、隣から問い掛ける声があった。

達也の顔を見ながら、美月の意識の半分はエリカに向けられている様子だった。

それでもエリカに対して八割とか九割でないのは、達也が事情を知っているらしいと敏感に察したからに他ならない。

気づいてみると、幹比古にレオまで美月と同じような目を向けて来ていた。

しかし、頼られても応えられない事だってあるのだ。

少なくとも、「昨晩、エリカの次兄がリーナにやられた」なんて言える訳がない。

「どうしたんだろうな？」

結局、とぼけて見せるしか達也に出来ることは無かった。

ここで食い下がったりしないのは、この友人たちの美点だろう。

美月は生来の気質で、幹比古とレオは「人には訊かれたくないことがある」と身を以て知っているから、という違いはあるにしても。

ただ、微妙に居心地の悪い空気が流れ込むのは避けられなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

ぎこちない雰囲気はその後もしつこく続いた。

お昼もクラスメイト五人、久々にバラバラだった程だ。（クラスメイト、と敢えて言ったのは、深雪とほのかはいつも通りだったからである）

変化が訪れたのは、放課後のことだった。

昨晩妹に告げたとおり、達也は早速持ち主と（裏工作込みで）交渉して、ピクシーを個人的に借り出した。

遊ぶ為、ではなく訊問する為だが、ロボ研のガレージは訊問に向かない。

かと言って、あの服装で校内を連れ回すのは目立ち過ぎる。あら

ぬ疑いを（主に趣味方向で）掛けられるのは勘弁して欲しかったし、目的を考えれば目立つことそのものからしてＮＧである。

という訳で、美月経由で美術部から借りた女子の制服（人物画のモデル用だ）に着替えさせて、実験棟の空き教室に連れ込んだ。人間の骨格とはフレームの構造が違うので着替えが可能かどうか心配だったが、３Ｈのボディは予想以上に柔軟でワンピースを脱ぐのも制服を着るのも問題なく可能だった。（ロボットの着替えを目の当たりにしても達也は何も感じなかったことを、念の為に記しておく。また「連れ込んだ」と言っても、変（態的）な意図はないので誤解してはいけない）

能動型テレパシーが脳裏に響く違和感は良いとして、無機物の光学センサーに宿る熱い眼差しに未知の居心地悪さを感じながら、達也は質問を重ねていった。

――犠牲者から血を抜き取ったのはパラサイトの仕業か？

――Ｙｅｓ

――何故、人の生き血が必要だったのか？

――増殖に必要なプシオンを補給する為

――仲間はこの国に何体いるのか？

――このボディに宿る直前の時点で六体

――パラサイト同士で交信は可能か？

――Ｙｅｓ

――交信が可能な範囲は？

――国境の内側であれば交信可能

――他のパラサイトの居場所は？

――現在位置不明。このボディに宿ってから、仲間との接続が切れている

達也の質問に、ピクシーは淀みなく答えた。

その顔に表情は無かったが、思念波が嬉しそうに聞こえるのは、多分、彼の錯覚ではない。

テレパシーがどの程度感情を表現するものなのか、どの程度感情

を偽装できるものなのか分からないが、伝わって来る限りでは、達也の役に立つことが本当に嬉しいようだ。

魔物から好意を向けられていると思うと、薄情なようだが、気色の悪さを禁じ得ない。だが宿主が人間ではなく「物」である分、気が楽だった。所有物と割り切って、利用するだけ利用することに、罪悪感を持たずに済む。

二人きり（正確には一人と一体）の教室にエリカが入って来たのは、訊問が一段落ついたちょうどその時だった。

「達也くん、チョッといい？」

聞き耳を立てタイミングを計っていたのか、単なる偶然か、それは分からない。

盗み聞きされてもエリカならば構わないし、そもそも能動型テレパシーを介して答えを得ていたのだから、どんなに頑張っても達也の質問しか聞こえなかったはずだ。

いきなり入って来たことに、文句は無かった。

着替え中という訳でもなかったし、自分の部屋でもないのに「ノックしろ」などと要求する気も起きない。

ただ、

「話を聞くのは構わないから、そう殺気立たないでくれ。俺だって、何も感じない訳じゃない」

もう少し、落ち着いて欲しかった。

「あっ、ゴメンなさい――」

エリカ本人は、意識していなかったようだ。

達也の指摘を受けて、恥ずかしそうに顔を赤らめている。

「いや、分かってくれれば良いよ」

本当に自覚が無かったらしく、エリカが纏っていたハリネズミのような気配は見る見る空中に融けて行く。

つまり、それだけ思い入れがあるということだろう。

何となく自分の妹にも似たところが有る気がして、漏れそうになる苦笑を意識的に押し止めなければならなかった。

「ピクシー、鍵を閉めてくれ」
『かしこまりました』
ピクシーと入れ替わるようにして、エリカが達也の前に立った。
座るように勧められても、腰を下ろそうとしない。
椅子に座る達也を、立ったまま見下ろすエリカ。
気持ちも分からないではなかったので達也も無理強いはしなかった。
「それで、話って？」
「分かってるでしょ」
「予想はつくが？」
「そうね……昨日の晩、ウチの兄が醜態を曝した件よ」
エリカの回答は予想どおりのものだったが、達也が予想していた回答は、一種類ではない。
「その件だけか？」
「取り敢えず、コッチが先」
なる程、順序がある訳だ。
「相手は誰なの？」
何の前置きもない、実に端的な問い掛けだった。それにしても、話相手の相槌も待たないとは、随分と気が急いている、のかもしれない。
「ＵＳＮＡ軍、スターズ総隊長、アンジー・シリウス」
対する達也の回答も、端的で、あっさりしたものだった。
すぐに答えが返ってくるとは予想していなかったのか、戸惑った気配をエリカが漏らした。
「で、それを聞いてどうするんだ？」
エリカが戸惑っている隙をついて、今度は達也が問い掛ける。
「そんなの……決まってるじゃない」
真っ向から浴びせられた反問にエリカは面食らった様子だったが、すぐに、強気な顔で言い返した。
「どう決まっているのか、大体分かる気がするけど……止めておけ、

エリカ」
「あたしじゃ無理だって言いたいの？」
先程までの無意識な怒気ではない。
意識的に放出されたそれを、達也は眉一つ動かさず受け止めた。
「無理だな。実力的にじゃなくて、結果的に」
「……どういうこと？」
台詞の前半で膨れ上がった怒気は、台詞の後半で訝しさに置き換わった。
「今朝のニュースは見た？　映像でも活字でも良いが」
「見たけど、どのニュースのこと？」
「ＵＳＮＡの小型艦船が漂流していたニュースだよ」
「アレね……まさかっ？」
「察しが良いな」
サッと顔色を変えたエリカを、達也はリップサービスでなく、称賛した。
「多分、だけどね……『シリウス』も、もう出て来ない。穿り返しても、お互いに良いことは無いだろうな」
達也のアドバイスに、エリカは諾とも否とも答えなかった。
「達也くん……」
その代わり、彼女はマジマジと、正体不明の怪人物を見るような目で、達也を見詰めた。
「貴方……何者なの……？」
いや、「ような」ではなく、そのまんま怪人扱いだった。
「あんな事、少なくともウチには……千葉には、無理だわ」
「そうかな」
「ウチだけじゃない。五十里だって、千代田だって、十三束だって、きっと無理。
何をどうしたのか知らないけど、あんな結果が出せるのは、十師族の、それも……」
「もう止めないか？」

「特に、力を持っている一族。
首都圏を地盤にしているか、地域に関係なく活動できる家」
「もう止めた方が良いぞ？」
「北陸が地盤の一条は除くとして……七草か、十文字。あるいは……四葉。
達也くん、貴方、まさか」
「エリカ、もう止せ」
「っ！」
達也は声を荒げた訳ではない。
声の調子や大きさではなく、そこに込められた意志が、エリカに口をつぐませた。
「それ以上は、お互いにとって不愉快なことになる」
達也は静かに、そう告げた。
修羅場をくぐった経験は、エリカも並ではない。
気圧されて、黙ったのではなかった。
密度の濃い経験があるからこそ、覚ったのだ。
軽率にも、自分が、境界線の向こう側に踏み込もうとしていたことを。
「……ゴメン」
「分かってくれれば良いさ」
先程と似た台詞。
先程と同じ、軽い口調。
だが、エリカの背中には、冷や汗が浮かび、流れていた。
「エリカ、シリウスが誰かなんて詮索しても、もう誰も得をしない。だから、その件はお終いにしよう」
「……そうね」
達也が話をすり替えたのも、半分は自分の為だと分かった。
エリカは、達也の提案に頷いた。
「じゃあ、もう一つの用件を聞こうか。多分、パラサイトの残党の

ことだと思うけど」
「ご名答、と言うほどじゃないよね。この程度の話が通じないなら達也くんじゃないから」
ようやくいつもの調子を取り戻した、様に見えるのは、意識してのことだろう。
「褒められているのか、それ？」
「少なくとも、貶しているつもりはないよ？」
演じている内に、エリカも段々いつもの調子が戻って来たようだ。
この立ち直りの早さは、羨ましくもある。
「俺も放っておくつもりは無いよ。
何か分かったら教えるから安心してくれ」
「絶対、よ？　その代わり、あたしもこの件では隠し事しないから」
この件では、と条件を付ける辺りが、如何にもエリカらしい。
「ああ、約束するよ」
彼女との付き合いは、この程度の距離感がちょうど良かった。
「じゃあね、達也くん。邪魔してゴメンね」
「ああ。お兄さんにもよろしく」
ドアに手を掛けたエリカの背中がビクッと震えたが、そのまま何事もなかったように、エリカは教室を後にした。
達也もそれ以上の言葉は掛けなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

達也と密談（？）していた教室を出て、足早に廊下を歩く。
人気（ひとけ）の乏しい実験棟から本棟に戻って来たところで、エリカは廊下の壁に背中を預けた。
大きく、息を吐き出す。
今更のように、冷たい汗がこめかみを伝う。
今の一幕を振り返って、落ち込みはしないが、反省は心に深く刻まれた。

今更ながら、今日の自分はおかしかった、と自覚する。
普段であれば、あんな、虎の尻尾をまともに踏みつけるような真似はしなかったはずだ。
いや、あれは虎の尻尾どころか、竜の逆鱗だった。
お陰で、分かってしまった。
知る必要のないことを、知ってしまった。
（……サイテー）
自嘲の笑みがこぼれる。
こういう裏があったのか、と分かってしまえば、色々なことが納得できる。
だがそれを、他人に話すことは出来ない。
話すなと、知られるなと、釘を刺されてしまった。
それは、多分、自分だけではなく……
（次兄上に何て言おう……）
最後の台詞は、多分、そういう意味だ。
元々エリカは、次兄を使ってまで達也の身辺を探ろうとする「誰か」が気に喰わず、達也の味方をしてその邪魔をしてやろう、と思っていた。
達也の秘密を守ってやろうと考えていたのだ。
それが、どういう訳か、「守ってやろう」ではなく、「守らなければならない」立場に追い込まれてしまった。
別に、エリカが秘密を漏らしたからと言って、達也は報復したりしないだろう。
笑ってスルーしそうな気がする。
だが、万が一、ということがある。
それを試してみる気にはなれない。
達也の実力だけでも厄介極まりないのに、その上――かもしれないのだ。
（あ～あ……ドジったな。ホント、「触らぬ神に祟りなし」よね）
何故、あんな話になったのだろうか。

今にして思えば、自分が気づくように誘導された気さえしてくる。
（まさかね……いくら達也くんが性格悪いからって、それは考え過ぎでしょ）
エリカは強引に、自分の疑念を笑い飛ばした。
その程度のことはやりそうだ、という思いから、全力で目を逸らして。

◇◆◇◆◇◆◇

（……やぶ蛇だったかな？）
エリカが出て行った後のドアを見詰めたまま、達也は心の中で独白した。
昨日の千葉修次による介入は、千葉家が一族ぐるみで七草家の、あるいは七草家に使嗾された国防陸軍情報部の手先となって探りを入れてきたものか、とも考えたのだが、少なくともエリカは関与していなかったようだ。
単に知らされていなかっただけかもしれないが。
（まあいいか。遅かれ早かれ気づかれていただろうしな）
エリカには既に、色々なものを見せている。自分の力だけでなく、深雪の「コキュートス」まで見られているのだ。彼女の勘の良さなら、今回余計なことを言わなくても、時間の問題だった。
（結果的に、巻き込むことも出来そうだし）
達也もこの展開を最後まで企んでいた訳ではなかったが、どうやら結果オーライで済みそうだ、と考えた。
一般に、秘密を守る為には、協力者の存在が不可欠だ。
当人たちだけではどうしても手が回らないこともある。何故なら、秘密を探り出そうとする者は、それを当人に隠れて行うものだからだ。そういう時、見かけ上は第三者の協力者がいてくれると何かと都合が良い。
達也はそんな、かなりエゴイスティックな結論で無言の独白に幕

を下ろした。
「ピクシー」
『はい、ご主人さま（マスター）』
ピクシーとの会話で、テレパシーが言葉ではなく概念を伝えるものであるということを、達也は実感覚で理解していた。
相手が伝えようとしているイメージが、伝えられる側の語彙を使って翻訳されているのだと。
使用人の格好ならまだしも、同じ学校の制服姿で「マスター」とか「ご主人さま」とか呼ばれるのは落ち着かなかったが、相手がそう思っているのだから、テレパシーでコミュニケーションをとる以上、慣れるしかなかった。
寧ろ「マイ・ロード」とか「ミ・ロード」とか翻訳されなかったことに、安心することにした。主に、自分自身の言語センスに対して。
彼女（？）が使っているのは能動型テレパシーだから、達也が考えていることは分からない。
電子頭脳にインプットされていたマニュアルから名前を呼ばれた場合の行動パターンを読み出して、達也の正面に移動する。
「そのボディに宿る以前、お前たちは共通の目的意識を持ち、組織的に行動していた様に見える。
お前たちの中に、指揮官に該当するものは存在するのか？」
『我々の中に指揮命令関係は存在しません』
「ではどうやって、組織的な行動を維持していた？」
『生命体を宿主とした場合、その最も根源的な欲求に影響を受けることは避けられません。
我々は生存本能と生殖本能という共通の欲求の下、生存と自己複製を共同で行っていました』
「仲間同士で交信が可能と言っていたな。
では、生存と自己複製以外の目的については、協力関係はなかったということか？」

『宿主が共通に持つ欲求に対しては共同で、個別に持つ欲求に対しては個別に対応します。
今回は、宿主が組織的な目的を欲求としていましたので、マスターがその様に感じられたのだと思います』
「なる程な……」
達也は言葉を切って、考え込んだ。
そこで余計な口を挟まないのは、彼女が人間でないからか、それとも機械を宿主としているからか。
「では、今のお前はその共通の目的から外れた、異端の存在ということになる。
仲間の中に異端が発生した場合、お前たちはそれを排除しようとしないのか？」
『我々に異端の排除という欲求はありません。
ただ、私が彼らの目的を妨げると判断したなら、優先的に攻撃を仕掛けてくる可能性はあります』
「そうか……あと一つ質問だ。
お前は現在、仲間との接続が切れた状態だと言っていたが、仲間の存在を全く感知できないのか？」
『相手の活性が高まっている状態であれば、感知可能です。
逆に言えば、現在の私は、同じ地域内にいれば、彼らに感知可能な状態です』
「そうか。
ピクシー、ガレージに戻って元の服装に着替え、スリープ状態で待機。
また後で、用がある」
『かしこまりました。ご用命をお待ちしております』
ピクシーは折り目正しい、言い方を換えれば硬い動作でお辞儀をして、ガレージへ向かった。
達也は必要な装備を頭の中でピックアップしながら、一旦家に戻るべく、深雪を迎えに生徒会室へ足を向けた。

6－（9）　少女たちの献身（？）（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

6－（9）　少女たちの献身（？）

午後七時。

既に生徒は全員下校し、教職員もごく一部が残っているだけの校舎はシンと静まり返っている。

校門も閉鎖され、翌日まで、一部の例外を除いて人の出入りは許されない。

教材や購買部の商品、学食の食材も、基本的に日中、裏門からの搬入となる。

出入りが許されるのは宿直の職員、契約している警備会社の警備員、夜間でなければ作業できないシステムメンテナンスのエンジニア他、学校が特に認めた者と、生徒会が特に認めた生徒だけだ。

生徒自治にしては少々行き過ぎにも見えるこの権限は、去年、真由美が生徒会長当時に導入したものだ。その背後には七草家の思惑と権威が少なからず絡んでいたようだが、利用する側になってみれば利便性だけが重要だった。職員室にもっともらしい理由を並べた申請書を提出せずに済むのはありがたい。本当の理由を明かせない場合には特に。

一旦家に戻った達也は、帰宅途中にあちこち手配して、帰り着いた時には届けられていた荷物を詰めたバッグを肩に、学校へ戻っていた。通用口の守衛に生徒会長の承認コードが打ち込まれた夜間入構許可証を提出して来訪者用のＩＤカードを三枚受け取る。夜間はこのＩＤカードが無ければ不審者として警備システムに引っ掛かる、という仕組みだ。

何故三枚かというと、一枚目はもちろん、自分用。

二枚目を後に続く深雪に渡す。

深雪は満足げな笑顔でカードを受け取った。

本当は、深雪を連れてくるつもりはなかったのだ、達也は。今日は留守番をさせておく予定だった。

ところが、夜間入構許可証発行の際に、深雪から条件をつけられてしまったのである。

自分も、連れて行けと。

許可証の発行権限は、生徒会長のあずさにある。

だが、現生徒会の真の権力者は会長ではなく副会長だ、という口さがない噂を裏付けるような一幕が、約三時間前、達也の前で繰り広げられた。

妙に頑なな妹の説得に失敗して、達也は同行を認めざるを得なかった。

深雪と、更にもう一人。

三枚目を、駅で合流したほのかに渡す。

深雪と違い、ほのかは恐縮した顔で達也の手からＩＤカードを受け取った。

登校時は休日であっても制服着用が第一高校のルールだが、夜間入構時はその限りではない。

通信機能のついたＩＤカード所持が必須だから制服を着用する必要がない、というのが表向きの理由だが、夜中に街中を制服でウロウロするな、という裏の意図もある。

学校側にとって一種のリスク回避――別名事なかれ主義――で、それを理解している達也は注文どおり、荒事用の、例のブルゾン姿だ。深雪も兄に倣って、ハーフコートにストレッチパンツ、ロングブーツのアクティブなスタイルで決めている。

ところが、ほのかのコートの下は、制服のままだった。

これから何をするのか理解していないのではないか、と疑わせる姿だったが、それを声や表情に出す達也ではない。

「ほのか、貴女、お家に帰らなかったの？」

兄の疑念をマイルドな表現で代弁したのは深雪だった。

「えっ？　ううん、帰ったけど」

ほのかは一人暮らしで、借りている部屋は兄妹の家よりも学校に近い。着替える時間がなかった、ということはないはずだ。

「もしかして……制服じゃ、拙かったんですか……？」
「拙い、という程でもないが……少し、都合が悪いかもしれないな」
責めるようなことは言いたくなかったが、今夜は色々とアクシデントも予想される。そして、ほのかはそれを想定していないようだ。こんなことならしっかり説明しておくべきだったか、と達也は少し後悔を覚えた。
そんな達也の思惟を敏感に読み取ったのか、ほのかは廊下を歩きながら俯き気味だ。
「お兄様、一旦ほのかのマンションへ寄りませんか？」
気まずい空気の解消を図ったのは深雪だった。
「ほのかが着替えている間、下で待っていれば」
深雪には「敵に塩を送る」という意識は無かっただろう。おそらく、達也が困っているから解決策を提案しただけに過ぎない。
「そうだな。お邪魔するには遅い時間だし……ほのかが良ければ、そうさせて貰おうか」
「いえ！　私は、その、来ていただいても少しも構いません。お時間を頂けるのでしたら、是非上がっていってください」
しかし、深雪の思惑とは無関係に、ほのかにとっては願ってもない話だった。

そんな、すれ違いが一回転して歯車が噛み合った会話を交わしている内に、三人はロボ研のガレージに着いた。
当然鍵が掛かっているが、鍵というものは大抵、内側から開ける分には特段何も必要としない。
達也は携帯端末の近距離通信モードを立ち上げ、今日作成したばかりの、認証キーを兼ねた暗号文を送信した。
反応はすぐに返ってきた。
『お呼びですか、マスター』
扉一枚程度、それが薄さに似合わぬ強度を持つ装甲扉であっても、テレパシーの妨げにはならない。

「入口を開けてくれ」
『かしこまりました』
返事があってすぐに、ガレージの扉は開かれた。
そのすぐ内側に、深々と腰を折るメイド服の人形の姿。
中に魔性が宿っていても、プログラムされた基本行動パターンは遵守されるようだ。
ピクシーが顔を上げるのを待って、達也は鞄の中から最初の荷物を取り出した。
「ピクシー、これに着替えてくれ」
如何に夜中とはいえ、いや、ある意味で夜中だからこそ、この格好（即ちメイド姿）で連れ歩くわけにはいかない。だからといって、制服姿も前の理由でNG。今回の作戦に当たり、達也がまず手配したのはピクシーが着る服だった。
この程度のことに返事は不要と判断したのだろう。
ピクシーはいきなり、身に着けたバルンスリーブのワンピースを脱ぎ始めた。
達也もそれを、当然という目で見ている。「彼女」の着替えを見るのは放課後に続いて二回目だし、人形と人間を混同するような性向を彼は持ち合わせていないから、ピクシーの着替えはバイクのカバーシートを被せたり外したりするのと同じ様なものだった。
「お兄様っ？　何を平然と見ておられるのですか！」
だが、深雪にとってそれは、認め難いことだったようだ。
見ればほのかも、同じ様な非難の眼差しを彼に向けていた。
「何をって、深雪、ピクシーはロボットだぞ？」
「ロボットでも女の子ですよ！」
「いや、確かに人型だけど、そこまで精巧に人体を模倣している訳じゃ……」
達也の言うとおり、３Ｈは「服を着れば人間と見間違う」ように作られた人型ロボットであって、服で隠れる部分のディテールは女性の裸体とまるで違う。疑似性行為に用いる遥かに安価な人形の方

が「そういう」部分の再現度はずっと高い。
上半身は「肌色のレオタードを着た女性」に近いが、それも腰の上まで。腰部から足の付け根の部分の外形は明らかにロボットと分かるもので、タイトなボトムを着かせると後ろ姿だけで人間でないと分かる。裾が広がったスカートがデフォルトなのはそういう理由からだ。
しかし二人の少女にとっては、そんな客観的な事実より主観的な外見の方が優先するようだった。
達也は深雪によって後ろを向かされ、ほのかがピクシーを隠すように二人の間に立っている。
理不尽と思わないでもなかったが、同時に、着替えているところを見たいわけでもない。
達也は二人の許可が出るまで、大人しく背中を向けていた。
「達也さん、もういいですよ」
ほのかに声を掛けられ、念の為に深雪の表情を確認してから、達也は振り返った。
達也が持って来た衣装は、襟を立てるタイプのオーバージャケットの下に伸縮性の高いセーター、ヒッププラインを隠す三段フリル付きの膝上丈スカートだ。
首元は長目のマフラーを二重巻きに。
顔を隠す帽子の類は敢えて省いた。
脚には厚手のタイツとブーツを履かせ、細部を隠しながら脚のシルエットを強調している。――これは服を用立ててくれた独立魔装大隊補給担当の女性士官のアドバイスを全面的に採用したものだった。
ほのかがどこからか取り出したブラシでピクシーの髪を弄っているが、ピクシーはそれに構わず、真っ直ぐに立ったまま身動ぎもしない。それは、どんなに外見を真似ても彼女が人間ではなく人形であることを示すものだったが、達也はピクシーに、そこまで高度な要求をするつもりは無かった。

道を歩いていて、不審尋問を受けない程度で構わないのだ。
その点で言えば、ピクシーの今の姿は合格だった。
「ピクシー、ついてこい」
達也は作戦開始を宣言する代わりに、こう告げた。
奴隷に命ずるが如く、傲然と。
無感情に。

◇◆◇◆◇◆◇

エリカは兄の部屋の前で、立ち竦んでいた。
彼女にしてみれば、全くの予想外で予定外だ。自分にこんな気弱なところが残っていたとは。
母屋に入るのに気後れはないが、父親や姉と会うのは避けたい。
その二人ほど抵抗は無いが、長兄と顔を合わせるのも気が進まない。
幸いこの時間なら長兄はまだ帰っていないはずだが。
とにかく、さっさと用件を済ませて離れの自室に戻るのが最良であり、廊下でグズグズしているのは最悪だ。
「次兄上、エリカです」
自分を鼓舞して、声を掛ける。
「入りなさい」
返事が返ってくるまで、やや、間が空いた。
不機嫌ではないが、余り歓迎されていない声だ。
いや、芳しくない気分を無理に取り繕っているのだろう。
そのまま「回れ右」したくなる衝動に逆らって、エリカは扉を開けた。
「こんな時間にどうしたんだい？」
修次はライティングデスクの椅子に座っていた。椅子を回転させて、身体ごとエリカの方へ向いている姿勢だ。しかしエリカは、デスクの向かいのベッドに、たった今まで人が寝ていた痕跡を認めた。
一昨日と逆の立場だったが、エリカはそのことを口に出して指摘

したりはしなかった。
「少し、お耳に入れたいことが」
エリカの口調は歯切れの悪いものだった。
修次の、無理に浮かべている笑みが、そうさせていた。
「言ってごらん」
修次の応えは、余り熱意の感じられないものだった。
言葉を飾らずに言うなら、義理で聞こう、という姿勢が感じられる。
ただそれはエリカを軽んじている為、という訳ではなく、他のことに気をとられている印象があった。
「兄上は、第１０１旅団・独立魔装大隊という名前の部隊をご存知ですか？」
「何故エリカがその名を知っているんだ？」
素っ気なさに挫けてしまいそうになる心を奮い起たせて告げたエリカの言葉に、一転、修次は強い関心を示した。
「実は……」
ここまで来てなお、躊躇はしつこくエリカの脚に絡み付いていた。だが、他に巧い手は思いつかない。
「兄上の護衛対象である私のクラスメイト、司波達也くんは、その独立魔装大隊の特務兵なのです」
「何だって……？」
迷い、と言うより怖れを振り切ってエリカが明かした事実に、修次は驚きを隠せなかった。
「申し訳ございません。本来ならば、先日お話を伺った際にお伝えしておくべきことだったのですが、風間少佐と仰る方より、国家機密に属する事項だと固く口止めされていたものですから」
「風間少佐……？
――『大天狗』風間玄信か！」
「大天狗、ですか？」
兄の反応に、今度はエリカの方が驚きと共に首を傾げた。

とかく魔法師には（相手を萎縮させる為のハッタリを兼ねて）大袈裟な二つ名が与えられがちだが、『大天狗』というのはその中でも際だっている。大仰すぎて、かえって何か謂われがあるのでは、と思ってしまう。

「風間少佐のことを、次兄上はご存知なのですか？」

「ああ……山岳戦・森林戦における世界的なエキスパートとして知られている古式魔法師だ。空挺部隊の運用においても、現在、国内屈指の名指揮官と言われている人だよ。

インドシナ半島で南進を目論む中華連合を相手にゲリラ戦を繰り広げていたベトナム軍に加わって、中華連合軍、中でもその先遣隊となった高麗軍から、悪魔か死神の様に恐れられたそうだ。

それが二十代前半……今の僕とそれほど変わらない年頃でのことだというのだから、ある意味で、伝説の人物だね。もっともその所為で、中華連合との正面衝突を回避したかった当時の軍中枢部から睨まれ、出世コースから外されてしまったそうだけど」

兄の話に、目の前の懸案も忘れて、エリカは「ヤレヤレ……」と溜め息をつきたくなった。

功労者が事なかれ主義の犠牲になる構図がここにもある。

いつかそれが、国を滅ぼすのではないだろうか。

自分のような小娘の考えることではないと分かっていても、考えずにいられない。

「噂の独立魔装大隊は、風間少佐が率いる部隊だったのか……ならばあの、都市伝説じみた数々のエピソードも頷ける。

そして司波達也君がその部隊の一員だというなら、年に似合わぬあの技量も少しは納得できるというものだ」

エリカが心の中で独白するのに並行して、修次も自分に言い聞かせるように呟いていた。

お陰でエリカは、意識を本来の目的に引き戻すことが出来た。

「兄上。私が風間少佐にお目に掛かったのは横浜事変の折です。あのような非常時でなければ、司波くんの秘密を明かされることはな

かったでしょう。それほど重要度の高い機密だと、私はその時に感じました」

「う～ん……独立魔装大隊自体が、秘密部隊の性格を持っているからね。そこに高校生が非正規兵として加わっているとなると、確かに、余程の理由が存在しているんだろうな」

「私が禁を破って兄上に司波くんのことをお伝えしたのは、まさにその事を分かって頂きたかったからです」

「つまりエリカは、これ以上、彼の内情に踏み込むべきではないと言うんだね？」

「ハイ。藪をつついて蛇を出す結果になっては、兄上の為にも、千葉家の為にもならないと存じます。

ましてやその蛇が、猛毒を持つ大蛇かもしれないとなれば」

「ふむ……確かに、エリカの意見は理に適っている。

しかし、学生とはいえ僕は既に軍属だ。正式な命令には逆らえない」

「でしたら、表向きの命令にのみ従えばよろしいのではありませんか？

あくまでも護衛として振る舞い、彼に対する攻撃があった場合に、対応するに止めるのです」

「なる程……分かった。その線で考えてみよう」

……何とか、「四葉」の名を出さずに次兄を説得することが出来たようだ。

エリカは安堵した顔を見られぬよう一礼し、目を合わせぬまま修次の部屋を辞去した。

◇◆◇◆◇◆◇

ほのかの借りている部屋は、本当にこぢんまりとした賃貸マンションだった。

間取り的には１ＬＤＫだが、ダイニングは申し訳程度にキッチン

に附属しているだけで、実質的には１ＬＫの広さしかない。
それでもリビングとは別に自分の部屋を持っているのは、女の子として譲れないものがあるのだろう。玄関を開けるとすぐに自分の寝ているベッドが見えるというのは、男の達也でも余りいい気はしない。
達也はそのリビングで、深雪と共にお茶を飲んでいた。
ピクシーが元々の製造目的に従い手を出そうとするのを遮って、ほのかがあたふたと用意したものだ。
出て来たのが番茶だったのは、ほのかの嗜好なのだろう。
当のほのかは、別の部屋で着替え中。
防音は完璧だが、何となく、バタバタとした雰囲気が伝わって来ている。
それに気付かないフリをするくらいの礼儀は弁えていたが。
ほのかが姿を見せたのは、兄妹がちょうど緑茶を飲み干したところだった。（無論、達也は、そうなるようにタイミングを計っていたのである）
「お待たせしました！」
勢い込んで出て来たほのかのファッションは、基本的に深雪と似たスタイルだった。
上半身はハーフコート。コートの下に見えるのはタートルネックのセーター。
但しボトムは、丈の長いストレッチパンツではなくショートパンツに厚手のレギンスを組み合わせていた。トレンカとも呼ばれる、裾が輪になって爪先と踵だけが外に出るタイプのものだ。
ショートパンツはハーフコートの裾にちょうど隠れる長さなので、少し見ただけではレギンスの上に何も着けていないようにも見える。
中々人目を――と言うか、男の目を惹きそうなコーディネートだった。
「ふむ……じゃあ行こうか」
もっとも、実用性が無いという訳でもない。

ほのかのレギンスは保温性と共に強度に優れた繊維で織られたもので、同じ繊維が野戦用のコートにも使われていることを達也は知っている。

頷く達也のその仕草をどう解釈したのか、ほのかは笑み崩れる一歩手前の顔でその背中について行く。

髪には、達也から貰った左右一対の水晶。

その煌めきに、ほんの一瞬、ピクシーが目を奪われたような仕草をしたのに、達也も深雪も、ほのか本人も、気づかなかった。

「お兄様、これからどちらへ向かわれるのですか？」

改札を抜けプラットフォームに上がるエスカレーターの上で、ちょうど人気が無くなったのを見計らって、深雪が達也にそう訊ねた。

目的地が何処であろうと深雪は達也についていくだけだが、何処に行こうとしているのか関心が無いわけではないのだ。

「青山霊園だ」

関心があるのはほのかも同じだが、達也の答えを聞いて頬を引きつらせたのは、時間を考慮すれば、好意とか信頼とかは別にして仕方のないことかもしれない。

眉一筋動かさなかった深雪の方が、ティーンの女の子としては少数派に違いない。

「季節外れの肝試し……というわけでもありませんよね。お化けはそういう場所に出る、ということですか？」

「察しが良いな」

間接的に妹の推測を肯定した達也の顔は、抑えられてはいるが、微妙に嬉しそうだった。

「それはもう、お兄様がお考えになることでしたら」

深雪も満更でなさげに、笑みを返した。

ほのかの胸に、小さな棘が刺さる。

「あの、達也さん、今の時間でしたらもう閉鎖されているのでは……？」

一昨日までの彼女であれば、棘の痛みに怯んで引き下がっていただろう。

だが昨日の夜、親友から発破を掛けられた言葉が、ほのかの意識に、ではなく、彼女の胸に残っていた。

エスカレーターの一つ上の段から、割り込むように話し掛ける。

深雪は「あら？」という顔をしたが、達也に気にした様子はなかった。

「中には入れないだろうね。

でもそれならそれで構わないんだ。近くにいれば、向こうから出て来る。その為にピクシーを連れて行くんだから」

ピクシーを訊問した結果、他のパラサイトは今のピクシーの在り方を許容しないだろうと達也は考えた。

生命体として歩調を合わせている他の個体にとって、自己増殖の欲求を失った「ピクシー」は外れてしまった存在だ。個体数が極めて少数であるなら、彼らは機械の中に囚われている「ピクシー」を取り戻そうとするだろう。

自己防衛と種族維持、この二つの基本衝動に支配されているならば、その為の行動パターンも人間と同じであるはずだった。

「もし誰かに見咎められたとしても、ほのかが何とかしてくれるだろう？」

彼女の「光学迷彩」の腕前は、聞いているだけでなく目の前で実演して貰って、達也も知っている。

ＵＳＮＡ軍のバックアップ要員が使った「暗幕」とは比べものにならない高度な技術、高度な技量。ほのかは、姿を隠すにはうってつけの魔法師だ。

もっとも、これは達也のリップサービスである。

実際に姿を隠さなければならない状況が生じるとは考えていない。

しかし。

達也には、まだ良く理解できていなかった。

ほのかには、この手の冗談が通じないということを。

「任せてください」
自信満々に、寧ろ穏やかな口調で胸を叩いたほのかを見て、オーバーアクションだな、というとんでもない勘違いを達也はしていた。

◇◆◇◆◇◆◇

市ヶ谷の一角にある中層ビルの地下。
ここには知る人ぞ知る、国防軍情報部の分室が置かれている。
防衛省内の本部が表向きの国防軍諜報活動の中枢なら、この「地下分室」は裏側の、真の中枢の一つ。
中枢であるなら「一つ」という言い方は本来おかしいのだが、「本部がやられて機能麻痺」という事態に陥らない為の、リスクコントロールの産物である。
無論そこには、普通ではない組織形態を作った事の副作用として、大きな弊害が生じている。
諜報組織には「右手が何をしているのか左手は知らない」という側面がつきまとうものだが、ここではそれが特に顕著だ。自分たちだけで好き勝手をやらないのはまだ救いがあると言えるが、各セクションに別々の後援者がついて、その意向に従いバラバラに活動しているのが実情だった。
国防軍情報部は、組織内に酷い不統一を抱え込んでいるのである。
「監視対象は都心方面へ移動中。同行者は妹他二名」
この地下分室のパトロンは大手電機メーカーの業界団体で、それは同時に国内第二位の軍需産業グループだ。そして、その連合体に七草家が深く食い込んでいるのだった。
「映像を照合します……一人は国立魔法大学付属第一高校一年生、光井ほのか」
「同級生か。妹を連れてデートとは変わった趣味だな」
どうやらこの場の責任者らしき人物の応えは嘲る口調のものだったが、受け取りようによっては僻みの様にも聞こえた。

「もう一人の方は……いえ、これは人間ではありませんね。タイプＰ９４のヒューマノイド・ホーム・ヘルパーと思われます」
「ＨＡＲの人型端末か？　そんな物を連れて何処へ行こうとしているのだ？
キャビネット運行システムへの侵入はまだか」
「ハッ、プロテクトが固く……申し訳ありません！」
部下の泣き言とも取れる発言を、責任者の男は叱責しなかった。
公共交通システムがそう簡単に侵入を許すようでは、テロの方が心配だと彼も理解していた。
「主任、ターゲットを乗せたキャビネットが軌道を変更しました」
「赤坂……いや、青山か？」
モニターに表示されたキャビネットの進路から推測した行き先を呟き、主任は僅かな間をおいて命令を下した。
「警官に偽装したオペレーターを青山通りに配置しろ。ターゲット一行が魔法を行使したところを、逮捕を装い捕獲する」
命令受領の返事と通信機に向けた指示の声が飛び交う中、主任はモニターを見詰め続けた。

◇◆◇◆◇◆◇

バランス大佐は長期滞在用に大使館が用意した週契約家具付き賃貸マンション（所謂ウィークリーマンション）でグッタリと座り込んでいた。
臨時とはいえ作戦本部に侵入を許し、更に戦闘らしい戦闘もさせて貰えず拉致され、海上を漂流しているところを他国の艦船に救出されるという醜態を晒したのだ。彼女のキャリアと矜持を大きく傷つける大失態だった。
意外なことに、本国からも大使館に駐在している軍官僚からも特に責める言葉は無かった。今回醜態を晒したのは彼女だけでなく、臨時本部の警護に派遣されていた特殊部隊、小型艦船をハイジャッ

クされた海軍も同様だから（というより、ＵＳＮＡ海軍のプライドは彼女以上にズタボロだった）彼女だけを責められない、という事情は分かる。

だが、それだけではない、と推測できる程度には、彼女もまだ気力を残していた。

しかし、大きく失調していることも否めない。

不意に鳴ったドアホンに顔を上げて、夜もすっかり更けていることに初めて気づいた程に。

護衛の女性下士官がドアホンに応対している声が聞こえる。

クッ、と息を呑む気配。

「失礼します」

彼女が占拠している居間に近づく足音も、入室の許可を請う声も、動揺に乱れていた。

「入れ」

バランスはソファの上で姿勢を正して、しっかりした発音を心掛けながら応えた。

階級が下の者に弱気な姿を見せられない――彼女の意思や感情を超えてすり込まれた士官の心得が彼女にそうさせていた。

目の前で敬礼したのはパンツスーツ姿の長身の女性。容姿や学歴よりも個人戦闘能力を優先して選んだ護衛で、腕も胆力も超一流。昨晩も彼女が傍にいれば少しは違う結果になったかもしれないと考える程に、バランスは彼女のことを評価していた。

だが――その彼女が、蒼褪めて、顔を強張らせている。

ただごとではない、と直感して、バランスはソファから立ち上がった。

「何事だ」

「大佐殿に、ご面会を求めている者がおります」

「なに……？」

軍の人間が（ＵＳＮＡ軍の、という意味だ）彼女に会いに来ただけで、護衛の軍曹がこれほど緊張する謂われはない。大使館員でも

同様だ。
彼女がここに滞在していることは秘密にされている。
つまり来訪者は、ＵＳＮＡ軍の情報封鎖にも関わらず、部外者でありながら、彼女がここにいると知って会いに来ているということだ。
軍曹に命令する時間ももどかしく、バランスは自分でリモコンを操作してドアホンのモニター映像を居間の大型スクリーンへ転送した。
そこに映っていたのは、神妙な顔で佇む、クラシックなドレス姿の、可憐な少女だった。
意外感が限界を超えて、バランスはたっぷり五秒間、フリーズした。
「……何者だ？」
ようやく再起動を果たした意識は、少女の背後に控える体格の良い男性二名を認識した。
一人は少女の物と思しきコートを丁寧に持っているので、おそらく彼女のお付きの者、ボディガードだろう。
見るからにただ者ではないボディガードを従えた、おそらくはミドルティーンの少女。
警戒しなければならないと分かっているのに、現実感が浸食されていくのを止められない。
「名はアヤコ・クロバ」
軍曹が言葉を切った。唾を飲み込むような仕草を見せたが、次の言葉を聞いて、それもやむを得ないとバランスは思った。
「ヨツバ家のエージェントを名乗っております」
「お目にかかれて光栄ですわ、ミズ・バランス。
わたくしは黒羽亜夜子と申します。
本日は、四葉家の代理人としてお邪魔いたしました」
少女は綺麗な英語でバランスにそう挨拶した。

但し、軍人に、高級士官に対する敬称は一切用いずに。
これだけ完璧な発音を身につけていて、その程度のボキャブラリーが無いということは考え難い。
つまり、わざと、だ。
自らの名を告げる時にファミリーネームを先にしたのも、同じくわざとだろう。
「ＵＳＮＡ軍統合参謀本部大佐、ヴァージニア・バランスです。失礼ながら、ご用件を伺う前に一つお訊ねしたいのだが」
「あら、何でしょうか？　お答えできることでしたらよろしいのですが」
年齢はおそらく、シリウス少佐よりも下だが、交渉相手としての強かさではこの少女の方が勝っているように見える。
まがりなりにも、ＵＳＮＡ軍魔法師隊総隊長として様々な場を経験してきた彼女よりも。
目の前にいるのは、ただの少女ではない。それをバランスは、改めて心に留めた。
「ヨツバ家というのは……あの『四葉』ですか？」
抽象的な言い方になったのは、万が一、勘違いだった時を考えてのこと。
しかし、その具体性に欠ける問い方にも関わらず、少女はニッコリと微笑んだ。
「ええ、その四葉です。
十師族が一、四葉家の当主、四葉真夜の代理人として、本日はお願いに参りましたの」
外れている可能性はほとんど無いと心構えをしていても、あっさりと告げられたその事実を受け止めるのは、簡単ではなかった。
日本の、四葉。
それは魔法に関わる者にとって、ある種の不可触領域（アンタッチャブル）だ。特に、魔法の軍事利用に関わっている者にとって。
彼らはシリウス少佐の様に、たった一人で一軍に匹敵する大破壊

力を有しているという訳ではない。
四葉の在り方は、その対極。
今は（取り敢えず）日本政府に従ってる形だが、もし彼らが地下に潜りテロリストと化したなら、四回目の世界大戦の引き金が引かれると言う者までいる。
魔法というものの一面を、そこまで狂的に突き詰めた集団として、彼らは尊敬されるのではなく、ただ恐怖されていた。
「お願い、ですか？」
「はい。是非とも、お聞き入れいただきたいお願いがございまして」
「伺いましょう」
今更ながら、客を迎えてお茶も出していないことにバランスは気づいた。
しかし、ここで飲み物を用意して話の腰を折るのは、それこそ今更だった。
バランスは、少女が紡ぎ出そうとしている言葉に意識を集中した。
「ではお言葉に甘えて。
ミズが手掛けておいでの、我が国の魔法師に対する干渉を中止していただきたいのです」
「……」
お願い、というのがその件である可能性は、もちろん考えていた。と言うより、最も可能性が高いと予想していた。
しかし予想以上の直截な要求に、すぐには反応を返せなかった。
「ミズ・バランスにおかれましては、我が国の『十師族』というシステムがどの様なものであるか、ご存知のことと思いますわ」
もし知らないなら教えて差し上げてよ、とでも言いたげな口振りに、反感を覚えながらもバランスは頷いた。
しらばくれても、意味のないことだった。
「わたくしどもの当主、四葉真夜は、あなた方の過剰な干渉に憂慮しております。
貴国と我が国は同盟国ですから、この様なことを火種にしたくな

いと申しておりますの」
「……それは警告か？　手を引かねば、火がつくという」
亜夜子は、バランスの質問に答えず、もう一度ニッコリ微笑んだ。
「ミズ、昨晩は良くお休みになられましたか？」
「あれは貴様らが！？」
気がつけば、バランスはソファから立ち上がり、身を乗り出していた。
もう少しテーブルの幅が狭ければ、少女の襟首を掴み上げていたかもしれない。
「ええと、何のことでしょう？
ミズのお顔の色があまりよろしくないご様子でしたので、僭越ながらご案じ申し上げただけですが」
案じている、と言いながら、少しも心配そうな顔はしていない。
少女は、笑っている。
全てを心得た、訳知り顔を隠そうともせずに。
「ミズ・バランス、どうかお気を鎮めてくださいませ。
わたくしどもは、出来ますならば、ミズと良好な関係を築きたいのです」
「良好な関係だと……？」
少女に言われたからではないが、今ここで彼女を締め上げても無意味なばかりか有害だ、と気づいてソファに戻ったバランスに投げ掛けられた言葉は、彼女の感情を更に逆撫でするものだった。
「四葉の実力は、ミズもご存知のとおりです。
そしてわたくしどもも、ミズのお力は良く存じ上げております」
感情は最悪に近かったが、理性は、少女の話に耳を傾けろとバランスに命じていた。
四葉家の代理人を名乗った少女は今、ＵＳＮＡ軍の力でもスターズの力でもなく、バランスの力を知っている、と言った。
それは、つまり……
「ミズが今回の一件から手を引くお手配をくださるなら、わたくし

どもはミズ個人に対して感謝を忘れません、と当主は申しております。

今後もし、機会がございましたなら、ミズのお力になれるでしょう、とも」

それは、魅力的な提案だった。

あの「四葉」と個人的なコネクションを持てるというなら、軍内部において、昨晩の一件で失った地歩を補って余りある武器となる。

彼らの実力は、昨晩、身を以て思い知ったばかりだ。

婉然と、少女が微笑む。

葛藤の天秤は、理性の側に傾いた。

欲という名の、理性の側に。

バランス大佐は、美しい少女の容姿（かたち）をした悪魔の差し出す契約書に、サインすることを決意した。

6－（10）　拒絶の理由（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

6－（10）　拒絶の理由

青山の高架駅から地上第一層の歩道に降りた途端、達也はねっとりと絡み付く監視の目を感知した。

四葉が話をつけたのはＵＳＮＡ軍の方で、七草の影響下にある情報部（の某セクション）は様子見という話だったので、監視が続くことは予想していた。とはいえ、ここまで熱心に人員を投入してくるとは、予想を超えていた。

七草と手を組んでいる勢力は、それほど大切なスポンサーだということだろうか？

兄妹と四葉の関係（に関する推測）を教えられていて、それで多めに戦力を投入している、ということはないだろう。

そもそも、いかに七草がバックについているとはいえ、この国の諜報機関が、四葉と衝突するリスクを冒すとは思えない。

四葉と事を構えたらどうなるか……兄妹の母親と叔母がまだ少女の頃に巻き込まれたあの事件で、内情も公安も情報部もそれを思い知ったはずだ。報復の巻き添えになっただけでターゲットそのものではなかったにも関わらず、あそこまで徹底的に叩きのめされた記憶を、二十年や三十年で忘れられるものではない。ましてや四葉の力――権力というより暴力という意味の「力」――は、あの頃より更に強化されているのだ。

――達也はそこで、思考を打ち切った。

彼らを見る視線に、新たな目が加わったからだ。

新たな、異質な、視線。

人とは異質な、魔の眼差しだった。

◇◆◇◆◇◆◇

プロの諜報員に対して、高校生三人と家事ロボット一体を監視す

る、という任務が与えられれば、命令された者が多少気を緩めていても、やむを得ないと思われる。

キャリアを積むということには、手の抜き方を覚えるという一面がある。中にはどんな時でも全力投球、仕事中は一切手を抜かない、という真面目すぎる仕事人間もいるにはいるが、手を抜くということとサボるということは、似ているけれども、違う。

手抜き、と言うとどうしても印象が悪くなるが、手の抜き方とは要するにペース配分のことだ。五の力で必要な仕事に、十の力を注がない、ということなのだ。

仕事の難易度に関わらず常に十の力を注いでいるより、五の仕事には五の力しか使わないようにする方が、その場その場の出来上がりは遅くても、結局、より多くの仕事を片付けられるようになる。

「慣れ」もまた一種のスキルである。

ただ、メリットばかりでなくデメリットが存在するのも、また事実。

警官に変装した中堅の諜報員にとって、尾行と監視は数多くこなした任務だ。その豊富な経験が告げるところに従い集中力を無意識にセーブしていたことが、今回は裏目に出た。

彼らに与えられた任務は、監視対象が魔法を使用したらすぐに、逮捕を装い拘束・拉致すること。

その為に渡された検出器が魔法を感知。

その、メーターの変化ではなく、アラーム音に身構えた直後――

――男の視界いっぱいに眩い光の洪水が押し寄せた。

思い掛けない先制攻撃。

まさかの敵対行為。

反撃の意思は、イルミネーションの水底に沈んだ。

◇◆◇◆◇◆◇

「達也さん、私たちを見張っていた人たちには、全員眠って貰いま

した」
「ご苦労様」
得意げに告げるほのかを労うのに、顔が引きつらないようにするのは、達也にとっても結構な苦労だった。
今も感じている異質な視線。
人外……ほぼ間違いなく、パラサイト。その相手をするのに、人間の監視者は邪魔だった。
街中で勝手に魔法を使うのは、本来違法行為なのだ。
こんな粘ついた視線を絡みつかせてくる相手が善良な市民や真っ当な公僕であるはずはなかったが、真っ当でないから余計に、魔法を撃ち合っている姿を見られるのは、都合が悪い。
達也が同行者にそれを伝えたのは、監視の目を振り切るまで不用意に魔法を使わないよう注意する為だった。
実際、達也は言葉にして、そう続けるつもりだった。
しかしそれより、ほのかが行動を起こす方が早かった。

――もし誰かに見咎められたとしても、ほのかが何とかしてくれるだろう？――

ほのかは達也のこの台詞を、ステキに拡大解釈していた。
実のところ彼女は、「達也さんが初めて私を頼ってくれた！」と、かなり舞い上がっていたのだ。
普段から割と思い込みの強い面を見せているので、達也ばかりか深雪も余り気にしていなかったのだが、今日は、いつもとは、一味違った。
ほのかの得意魔法は光波振動系。
光を操るのが彼女の得意技だ。
達也から監視者の配置を聞き出し自分でも光を曲げたり増幅したりして位置を確認すると、いきなり、相手のまさしく目の前に、激しく明滅する光の塊を作り出したのだ。

洗脳用魔法、「邪眼（イビル・アイ）」の光を。

それに気づいた達也は、流石に焦った。

暗示効果が単に「眠らせる」だけだったから発動の邪魔はしなかったが、その判断が正しかったという自信はない。

魔法の中でも暗示効果を持つ術式は、肉体を直接害する術式と同じレベルで違法の度合いが悪質と判断される。

本物の警察に掴まれば、注意程度では済まない。未成年であっても実刑――おそらく「魔法を使った勤労奉仕」という名目の懲役刑――は免れないだろう。

テロ組織「ブランシュ」のリーダーとは比べものにならないスピードと精度で、しかも同時に四人を相手にして「邪眼」を発動した技量に舌を巻きつつ、達也は早急に移動する必要を感じた。

「そいつらの仲間が駆けつけてくる前に、ここを離れよう」

やはり、ほのかを連れてきたのは失敗だったか……と今更なことを考えながら、達也は同行者にそう告げた。

◇◆◇◆◇◆◇

「困ったお嬢さんだこと……」

街頭監視システム――街路カメラをメインに、有毒ガスの検出器や違法に高出力な電波の検知機と合わせて組み込まれた、魔法の無許可使用を見つけ出すサイオン波センサーのモニターを前にして、藤林は無意識にため息をついていた。

「見事な腕前じゃないか。彼女は確か、『光井ほのか』といったね？」

背後から聞こえてくる、純粋に魔法師としての技量を評価する声。

裏も透かしもないお気楽な祖父の発言に、藤林はもう一度ため息をつきたくなった。

「そうですわ、お祖父様。第一高校一年生の、光井ほのかさんです」
「あの系統の魔法を得意としていて『光井』というと、光のエレメンツの血統かね？」
「さあ、そこまでは。調べておきましょうか？」
「いや、わざわざ調べる必要は無いよ」
孫娘に問われて、九島老人は人の好い笑みを浮かべたまま首を横に振った。
「それにしても……力ある者は力ある者を、異能は異能を呼ぶということかな、これは。
彼の周りには面白い人材が多い」
「能力面だけでなく、人間的にも面白い子が多いようですけど」
何気なく酷いことを言いながら、藤林はオペレーション用の薄い手袋に覆われた指をタッチパネル・コンソール上で忙しく滑らせている。
街頭監視システムは、システム的に見れば、ハードもソフトも強固で融通の利かないシステムだが、その代わり運営面で融通を利かせられる。
無差別に記録をとられては都合の悪い連中が、政府部内にもあちらこちらにいるのだ。手動で記録を制限できるようにしておかなければ、これほど包括的な監視システムを張り巡らせることはできなかっただろう。
今回の吸血鬼騒動においても、魔法の無断使用に対する免責を確実なものとする為に、七草や千葉から監視システムにデータが残らないよう手配されていた。
情報管制の一環として真由美がその指揮をとっていたのだが、受験を間近にした彼女の代役を藤林が務めているのだった。
もっとも、藤林の場合は誰かにやらせるのではなく、自分でコンソールを操作しているのだが。藤林は真由美と違って、七草家当主が娘の手駒の情報隠蔽に手を貸す一方で、娘に内緒で覗き見をやらせていることを、更にその覗き見をして知っていたから、他人に任

せる気にはなれなかった。
ハッキングではなく正規のオペレーターとしてシステムを動かしているので、いつもより技術的には楽だが、同時に操作性の面では不自由で窮屈だ。
だがそれも仕方のないこと。
依頼を受けた形をとりながら、実はそうなるように手を回して割り込んだ役目だ。いつもの様に好き勝手するわけにはいかない。
背後で祖父が見ているとなれば、尚更に。
彼女にとっても彼女を派遣した人間（イコール、彼女に代役が回ってくるよう画策した人間）にとっても、この場に九島老人が立ち会っているのは、想定外の事態だった。
何故ここにいるのか、とは、藤林は訊かなかった。
祖父とはいえ、それほど親しいわけではない。
彼女は藤林家の人間として、九島家の先代に対し余り馴れ馴れしい態度を見せないように心掛けてきた。
それに、七草家と四葉家の間に火種が生じたとなれば、九島烈がそれを消火すべく動くことに何の不思議もない。
藤林響子の祖父は、司波達也の正体を知る数少ない人間の一人なのだ。
「類は友を呼ぶのか……それとも、呼ばれた側か。
いずれにしても、平穏とは程遠い星の下に生まれたようだな、彼は」
「そうですね。
振り回す側のように見えて、実は振り回される側なのかもしれません」
モニターを見詰めながら、藤林はそう相槌を打った。
もし振り返って祖父の顔を見たならば、その発言の裏にあるものを覚ったかもしれない。
しかし、そうはならなかった。
類が友を、の中には風間を始めとした独立魔装大隊の面々、その

一員として彼女自身も含まれていたのだが、祖父の意図は、不幸にしてか幸いにもか、孫娘には伝わらなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

予想どおり、青山霊園の中には入れなかった。

その必要も無かった。

戦後に造られた高い塀（死者に対して不敬な撮影等をする不心得者対策）に沿って夜の散歩と洒落込んでいた（？）三人と一体に、前後から近づく気配があった。

『マスター、「パラサイト」四体が接近中です』

ピクシーのテレパシーに、達也は足を止めた。

機体のスピーカーを使わせるのではなくテレパシーを許可しているのは、パラサイトを呼び寄せる為だ。

テレパシーは深雪とほのかにも伝わるように命じてある。

達也が足を止めるのとほぼ同時に、少女二人も立ち止まり、達也の左右に身を寄せた。

二人とも、恐怖の色はなかったが、緊張は隠せていない。

達也自身も緊張していないわけではないので、二人の態度に不満は無かった。

打ち合わせ通り、達也は携帯端末の送信スイッチを押した。

ナビゲーションシステムから取得した現在位置が、エリカと幹比古と克人の許へ送られたはずだ。

もっとも、相手の出方次第では、仲間が到着するのを待っているつもりはない。

達也は左の懐から銀色の愛機を抜いた。

拳銃形態・特化型ＣＡＤ「トライデント」を持つ右手を自然に垂らし、人に寄生した妖魔の到来を待つ。

達也の背後を守るように、深雪が情報端末形態のＣＡＤを構えて背中合わせに立ち、左手に巻いたブレスレット形態のＣＡＤに右手

を添えたほのかが、達也の隣で前と後ろを交互に見ている。
中々頼もしい姿に、我知らず笑みが浮かんでくる。
思わぬ所で、緊張がほぐれた。
彼の緊張の源泉は、この二人の少女に危害が及ぶ懸念だ。
この二人なら大丈夫だろう、と感じたことで、それが解消された。
改めて、街灯の明かりの向こう側へ目を凝らす。
近づいてくる人影――人の形をした影は三つ。
前後同数ではなく、前から三、後ろから一だったわけだ。
ただ、その程度のことは計算違いどころか誤差にも入らない。
どちらも手を出さぬまま、更に距離が詰まる。
立ち止まったままの達也へ向けて、四体の妖魔が歩み寄って来る。
その姿がハッキリと見えるようになるに連れて、違和感が強まって行く。
違和感の正体は、すぐに見当がついた。
目から入ってくる情報と、肌で感じる情報の喰い違い。
人の形をしているのに、人ではないものの気配がする。
これが妖気というものだろうか。
達也とパラサイトを隔てる距離の減少は、双方の声が届き表情が読み取れる間合いで止まった。
「司波達也、話がしたい」
達也の方から話し掛けるつもりはなかったから、相手が口火を切ったのは予定通りだった。
それが会話という、（言葉遣いは別にして）穏やかな形態だったことも、一応、予想の範疇だった。
しかし、相手が自分を名前で呼んだのは、少し意外だった。
「俺はお前のことを何と呼べばいい？」
対して、達也はこう応えた。
パラサイトに憑依された男は、開きかけた口から台詞の続きを口にすることができなかった。
この程度のことに絶句するとは、随分と人間らしいことだ、と達

也は感じた。人格を乗っ取られても、感情のベースは変わらないらしい。

あるいは、乗っ取る、という理解が間違っているのかもしれない。

「マルテ」

なる程、勘違いしそうになる流暢な日本語だが、よくよく見れば日系の顔立ちではない。髪は黒いが顔の彫りは深いし、瞳の色は黒というにはやや薄い。本名であれコードネームであれ、いや、十中八九コードネームだろうが、マルテ（火星）と名乗ってもおかしくはなかった。

「では、ミスター・マルテ。いや、セニョール・マルテかな？一体、何の用だ」

自分で話の腰を折っておきながら、いけしゃあしゃあと「何の用」と訊ねる達也に、マルテと名乗った男はムッとした顔を見せたが、自制を失うほどではなかった。

「ミスターの方だよ、ボーイ」

ただ、わざわざ「ボーイ（坊主）」という小馬鹿にした表現を使っているあたり、沸点が高い方ではないようだった。

「それで、何の用だ」

時間稼ぎにこのまま挑発合戦を続けても達也としては構わなかったが、同行者が徐々に落ち着きを無くして来ているのを見て、話を進めることにした。

「……司波達也。我々はこれ以上、君たちに敵対する意図は無い」

どうやら「ミスター・マルテ」にとっては、「ボーイ」よりもフルネーム呼び捨ての方が礼儀に適っているようだ。

達也には（最初から礼儀など期待していないという意味で）どうでも良いことだったが。

「抽象的すぎて言っていることが理解できないな。我々とは誰のことだ？君たちとは誰のことで、敵対とは何を指している？」

そんなことより、相手が何を言おうとしているのか、そちらの方

が遥かに重要だった。
「――我々デーモンは、君たち日本の魔法師に対して、今後、敵対行動をとるつもりはない」
（デーモンと来たか……）
デビルでもゴーストでもスペクターでもなく、デーモン。それが彼らの自己認識らしい。
ピクシーからこの単語は聞かなかったから、人間に対して自分たちをどう呼ぶか、この交渉に先立って相談でもしていたのだろう。
達也が苦笑を漏らしかけたのは、彼の分解魔法を「デーモン・ライト（悪魔の右手）」と呼ぶ者がいることを知っているからだ。
これは彼が分解魔法を発動する際、対象に右手のＣＡＤを向けることが多いからだが、だからといって親近感を覚えたりはしなかった。
「それで？　他にも用があるんじゃないか？」
マルテと名乗ったパラサイト（自称デーモン）の短い台詞に対し、達也には言いたいことがあった。
だがひとまず、相手に言わせるだけ言わせてみることにした。
「君たちに敵対しないことを約束する代わりに、そのロボットを我々に引き渡して貰いたい」
ピクシーがビクリと身体を震わせた、ように見えたのは、達也の錯覚だろう。中に何が入っているとしても、ロボットはそういう生理的反応と無縁のはずだ。
「……あのな、ミスター・マルテ。
もう少し、丁寧に話してくれないか。
引き渡せ、と言われても、何の為に引き渡しを求めるのか、それを説明して貰わなければ答えようがない」
「説明など必要ないと思うが？
君たちにそのロボットを庇う理由など、それこそ無いはずだ」
「理由の有無は俺たちが決める」
達也の回答にマルテが顔を顰めた。不快げな表情も、一回り以上

外見年齢が違うことを考えれば、不思議の無い反応と言えるだろう。
「……そのロボットの中に囚われている同胞を解き放つ為だ」
「どうやって」
「機体を破壊する。
宿主を失えば、新たな宿主に移動することができる」
「なる程ね……ということらしいぞ、ピクシー。
お前は、そこから解放されることを望むか？」
『嫌です、マスター！』
達也も本気で訊ねたわけではない。
無生物に宿っていても、自己保存の欲求がある以上、破壊されることを是とするはずは無かった。３Ｈの基本プログラムにも、ロボット三原則は可能な範囲で適用されている。
ただ、念話で示された拒絶の意思は、予想したよりずっと強いものだった。
『私は、私です。
私の望みは、マスターの物であること。
それが私です。
私が元々どのような存在であり、私の核を成すこの願いが何処から得られたものかなんて、今の私にはどうでもいいことです。
私は、私が私でなくなるのは、嫌です』
ピクシーのテレパシーを、達也だけでなく、四体のパラサイトだけでなく、ほのかも、深雪も、聞いた。
ほのかが唇をキュッと引き締めた。
深雪の唇が笑みにほころんだ。
「達也さん……」
「だ、そうですよ、お兄様」
「そうだな」
達也の唇にも、微笑が浮かんでいた。
思い掛けない熱弁に、不思議と苦笑いは湧いてこなかった。
ロボットに宿る魔性から向けられたその想いに、忌避は、何故か

感じなかった。
「さて、こちらの回答はもう、ある程度予想できると思うが……ハッキリと答えてやる前に、二、三、訊きたいことがある」
「思ったよりも愚かだったようだな、司波達也。失望したよ……いいとも、訊きたいことというのを、言ってみろ」
「お前、さっき『魔法師に対して』敵対するつもりは無い、と言ったな？
何故『人間に対して』ではなく『魔法師に対して』と言ったんだ？」
答えは、無かった。
いや、嘲るように歪められた唇が、答えだった。
「魔法師に対しては、敵対しない。
では、魔法師でない人間にとっては、どうなんだ？」
「……」
「ピクシーの機体を破壊した後、今度は何を宿主にするつもりだった？
いや、答える必要は無い。
聞かなくても分かっている」
「……回らなくても良い猿知恵ばかりを持ち合わせている」
鋼の眼差しを宿した達也と、その背後で少女が身構えるのを見て、マルテはわざとらしく肩を竦めた。
「理解できんな。
お前たちとは敵対しないと言っているのに、何故それで満足しようとしない？
我々デーモンと人間が相容れないものであるように、お前たち魔法師と人間もまた異質なものではないか」
「ほぉ？」
突如、演説を始めたパラサイトに対して、達也は白々しい合いの手を入れた。
しかし、演説と言ってもアジ演説の類だ。

口調の白々しさを気にするような殊勝な心掛けなど、伴っているはずもなかった。
「私の宿主も魔法師だった」
そう言って、大袈裟な手振りで自分の胸に掌を当てる。
もしかしてこの男、パラサイトに取り憑かれる前は煽動工作が専門だったのだろうか。であるなら、「マルテ（マルス）」というコードネームはミスマッチだ。寧ろ「メルクリウス」とかの方が相応しいように思われる。
「だから分かるぞ。魔法師が、人間に、どのような扱いを受けているのか」
「どういう扱いを受けてると言うんだ？」
「人間にとって魔法師は、道具であり実験動物だ。
魔法師の意思など、人間は顧みない。
魔法という力を利用する為の道具として扱い、魔法という力をより多く引き出す為の実験材料としか見ていない。
自分たちを利用することしか考えていない人間に、何故義理立てしようとする？
君たちに、そんな義理は無い。
君たちには、君たちの意思があり希望がある。そうだろう？」
演説を終えたマルテの顔を、その真意を推し量るように、達也はジッと見詰めた。
マルテは如何にも誠実そうな顔で達也を見返している。
達也はフウッ、と溜め息をついた。
「別に、利用されているのは魔法師だけとは限らないと思うがね」
気色ばむパラサイトの宿主に、言い含めるような口調で言葉を返す。
「何というか……マニュアル通りの台詞にしか聞こえないな」
そして、唇に嘲笑を浮かべる。
「人のことを愚か者扱いする割には……バカだな、お前」
男の目に怒気が揺らめく。

それは、パラサイトの感情だったのか、それとも、宿主の感情だったのか。
マルテが何事か言い掛けた台詞に被せて、達也は言葉を続けた。
「俺たち魔法師に危害を加えない。
実に結構なことだ。
だがな、お前たちは既に、俺の仲間に危害を加えている。
俺の友人の、魔法師に対して、だ。
その事について一言の詫びも無しに、今後危害を加えないという台詞を信じられる理由が何処にある？
そんなものは、魔法師の人権を尊重するというお題目と何も変わらんよ。
ましてやそんな空言と交換にこちらから何かをせしめようなんて、厚かましいにも程があるぞ。
そういえば、さっきの答えがまだだったな。
答えは、ノーだ」
「小僧……」
「後悔するな、なんて決まり文句は吐くなよ？
相手をしているのが恥ずかしくなる」
マルテが殺気だった目で、右手を振った。
袖口からナイフが現れる。
柄にコードがつながっているところをみると、ただの小型ナイフではなく、何かのギミックが仕込んであるようだ。
他のパラサイトも、同じようにナイフを手に取った。
達也はそれを見て、冷笑を浮かべた。
「実に分かり易いな。
では、俺の方も分かり易く言ってやろうか」
達也は、外連味たっぷりに、ニヤリと笑った。
「武器を捨てて、大人しく投降しろ。
そうすれば、痛い目を見なくて済む。
幸せな実験動物としての待遇を保証するぞ？」

「この……人間の、犬がっ！」

取り憑いた人間を支配したパラサイトは、宿主となった人間の強い「望み」に支配される。

支配し、支配される、メビウスのループ。

おそらく、取り憑かれる前の「魔法師」マルテは、自分を支配する人間に対し、恨みと憎しみを秘めていたのだろう。

そう思わせる、怒りに満ちた叫びだった。

起動式の展開もなく、魔法発動の兆候が現れる。

やはりパラサイトは、魔法を使うのに起動式や呪文の類を必要としないようだ。

もっともそれは、達也の方も似たようなものだが。

パラサイトの魔法が発動するより早く、達也の「分解」が事象を改変する為の情報体を破壊する。

全ての魔法師の天敵たる異能、情報体の直接分解。

その魔法、「術式解散」は人外の術に対しても有効だった。

音も光もない、静かな攻防。

だが魔法が発動することを前提とした攻撃態勢をとっていたマルテは、魔法をキャンセルされるという思い掛けない事態に立ち竦んでしまう。

達也がその隙を見逃すはずもなかった。

四肢の付け根を撃ち抜かれ、マルテが路上にひっくり返る。

パラサイトが宿っていても、人体の基本構造に逆らうことはできない。痛みを無視することはできても、腱を断ち切られては手足を動かせない。

達也は何も持っていない左手を、路上のパラサイトへ向けた。

肉体を破壊すれば、別の宿主を求めて飛び去って行く。

深雪の魔法で凍らせても、自爆して逃げ去ってしまう。

起動式を必要としないパラサイトは、身体を動かせなくてもおそらく、魔法は使える。

パラサイトを無力化する為には、精神情報体に直接ダメージを与

える必要がある。
掌中に、サイオンの塊を握り締める。
これで、効果があるという確信はない。
だが、迷いは無かった。
これでダメなら、古式魔法の封印術式を会得した術者を連れて来るしかないのだ。
迷いは今、有害無益。
ただ「拒絶」の念を込めて、左手をパラサイトへ向けて突き出した。
硬く凝縮されたサイオンの砲弾が、パラサイトの胸を撃った。
脳髄ではなく、心臓。
これはピクシーから得た情報を元に、八雲と相談して決めたことだ。
彼らは、肉体的な器官に憑依しているのではなく、人の精神に憑依している。
だから身体の何処に当たっても、本質的な違いはない。
ならば全身と最もつながりの深い場所、細胞に活動する為の燃料を送っている心臓を狙うべきだと。
効果は予想以上に、劇的なものだった。
海から引き離されたばかりの海老のように、パラサイトの身体が激しく屈伸する。
のたうち回る。
パラサイトに侵された身体が、拒絶している。
パラサイトに撃ち込まれた達也の思念が、パラサイトを拒絶し、パラサイトに拒絶されているのだ。
「お兄様！」
しかし残念ながら、その姿をじっくりと観察している余裕はなかった。
切羽詰まった、深雪の叫び。
だが、達也は深雪から「眼」を離していない。

深雪の身に危機が迫っているならば、声を掛けられるまでもなく察知する。
果たして、振り向いた先では、
四肢そのものではなく服を凍らせることで動きを封じ、相手の魔法を広域干渉――この場合、「領域干渉」と呼ぶべきか――で抑え込んでいる深雪の向こう側で、
ナイフの刃を有線で操る敵の武装デバイスに翻弄されるほのかと、彼女の盾となって攻撃を受けるピクシーの姿があった。
「ほのか！」
「大丈夫です！」
達也の助っ人を拒むように、ほのかが強い口調で応える。
ほのかの瞳に、強い光が宿る。
足手まといには、決してならないと、その強い想いが光となって宿る。
ほのかの瞳と、
彼女の髪飾りに。
サイオン波の急激な高まりを達也は感じた。
それは、思念エネルギーの増大を表す徴（しるし）。
魔法ではない。
もっと直接的な、思念の干渉。
直後、
強力なサイキックが、ピクシーから放たれた。

6－（11）　魔法・機械・兵器（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

6－（11）　魔法・機械・兵器

緻密な制御の為されていない、荒削りである代わりに猛々しい事象改変の力に、深雪が構築していた干渉力の力場が揺らいだ。
現存する魔法師の中でも、おそらくは有数の強さを持つ深雪の干渉力場が。
達也は新たに作り出したサイオン弾を、妹が相手をしていたパラサイトへ撃ち込んだ。
再現される、拒絶反応のダンス。
しかし今、達也と、そして深雪の関心は、そこには無かった。
単純な運動状態改変の事象干渉力――所謂「サイコキネシス」が放出された、その場所では。
いきなり強力なサイオン波に晒されて目を回しているほのかと、彼女を守るように立つピクシーの姿。
二人が相対していた二体のパラサイトは、視界の外に吹き飛ばされていた。

◇◆◇◆◇◆◇

モニター画面の中で展開された光景に言葉を失っていた藤林は、背後から聞こえてきた楽しそうな含み笑いに我を取り戻した。
「……いや、思いがけず、面白いものを見せて貰った」
椅子を回して不謹慎を咎める視線を向けてくる孫娘に向けて、九島老人は一つ咳払いをした後、言い訳するような口調でそう言った。
「最後のサイコキネシスは、３Ｈから放たれたものだろう？
サイキックを使うロボットが開発されたという話は、聞いたことがない」
藤林が座っているのは、サイオン波センサーのモニターコンソー

ルだ。
　目の前に表示されている測定結果は、誤魔化しようがない。
「……私も聞いたことがありません。
　今の技術では、不可能だと思います」
「そうだな。現行の技術では、魔法であれサイキックであれ、サイキカルな力を機械のみで再現することは不可能だ。
　つまり、あの３Ｈには、機械以外の要素が宿っているということになる」
「……」
　小さく、吐息とも呻き声とも取れる音が、藤林の唇から漏れた。
「ロボットに、妖魔が宿ったか」
「……」
「パラサイトのことは報告を受けているが、この事は聞いていなかったな」
「我々も報告を受けているわけではありません。私的な会話で耳にしただけです」
「いやいや」
　硬い表情で答える孫娘を、宥めるように九島老人は手を振った。
「響子、私は責めているんじゃないよ。最早そういう立場でもないし。
　ただ、興味深いなと思ってね」
　藤林が装っていた、ポーカーフェイスが崩れた。
　動揺を浮かべて見上げる、その視線の先には。
　祖父の顔に、久しく見ることのなかった、野心の影が垣間見えていた。
「人型ロボットにこういう使い方があったとはな……」

◇◆◇◆◇◆◇

　いつもの藤林であれば、気がついたかもしれない。

だがハッカーとしてではなくオペレーターとして、システムに定められたとおりの操作しか行い得ない今日の彼女は、システムの防御能力を超えた傍観者に気づくことが出来なかった。

ちょうどその場面へ目を向けていた傍観者、四葉真夜は、目を覆うシェード型のモニター装置を外し、背もたれに体重を掛けて目を閉じた。

時間にして、およそ十秒。

彼女はモニターをデスクの中に収納すると、脇に置かれていたハンドベルを手に取り、振った。

澄んだ音が、一人きりの静かな室内に鳴り響く。

「お呼びでしょうか、奥様」

扉を開けて、真夜の執事であり腹心である葉山老人が彼女の前へ歩み来た。

「青木さんを呼んで頂戴」

「畏まりました」

丁寧に一礼し、葉山執事は再び部屋の外へ出て行く。

今度は少し、待つ時間があった。

足音こそしないが、慌ただしい気配が近づき、扉を叩く音がした。

「入りなさい」

「失礼します」

葉山の落ち着いた声が返ってくる。

気忙(ぜわ)しい気配は、その隣から発せられている。

入って来たのは、葉山と、彼よりもかなり年下の（それでも真夜よりは年上の）壮年の執事だった。

「遅い時間にごめんなさいね、青木さん」

「滅相もございません。奥様のお呼びとあらばこの青木、地球の裏側からでもすぐに参上致します」

青木は瞬間移動の術を会得していないので（そもそも瞬間移動は実現されていない）、「すぐに」というのは物理的に不可能なのだが、彼が大袈裟な物言いをするのはいつものことなので、真夜も葉

山も気にしなかった。
「早速ですけど、入手して欲しい物があります」
「はい」
青木は四葉の資産管理を任せられている金庫番。彼に声が掛かるということは、単なる買い物ではないということだ。四葉にとっても安くない（世間にとっては大層高価な）物か、購入自体が難しい稀少品や非売品の類か。
だがそれでも、青木の顔に緊張の色はなかった。
そういうリクエストに応えてこそ自分の存在意義があると彼は思っているし、性格面で問題を抱えているとはいえ、実力の方は合法的な面でも非合法の面でも確かに一流と言えるだけのものを備えていた。
「魔法大学付属第一高校に貸し出されている３Ｈ－Ｐ９４を至急買い取って頂戴。
金額も手段も問いません」
真夜が「金額を問わない」と言うのは珍しくないが、「手段を問わない」と明言するのは珍しいことだった。
「畏まりましてございます」
一瞬、動揺を見せたが、それを声に反映させず、青木は恭しく一礼した。

青木が急ぎ足で退出した後、側らに控えたままの葉山に、真夜は探るような目を向けた。
「……何か言いたいことがあるのではなくて？」
だが結局、葉山のポーカーフェイスを突破できず、真夜は自分からそう促した。
「まことに僭越ながら……」
水を向けられ、前置きの言葉と共に腰を折る。
決まり文句と言っても良い台詞だったが、その微妙な口調から真夜はそれが余り愉快な話題でないと覚った。

「“フリズスキャルヴ”のご利用は、少々控えられた方がよろしいのではないでしょうか」
だからといって、今更発言――諫言を止めさせることは出来なかった。
予想どおりの耳に痛い忠言に、真夜は眉を顰めながらも、それに対して怒りを見せることも出来なかった。
アレの利用がメリットばかりでないということは、オペレーターである真夜が誰よりも――彼女と同じアクセス権を持った、残る六人のオペレーターを例外として――弁えていることだったからだ。
「――アレは純然たる科学技術の産物ですよ。まだブラックボックスの部分が少なくない魔法より、よほど副作用のリスクは小さいはずです」
「真夜様、私めは、そのようなことを申し上げているのではありません」
屁理屈でしかないと自分でも分かっている反論をバッサリと切り捨てられて、真夜はバツの悪そうな表情を浮かべた。
「それにブラックボックスというならば、フリズスキャルヴは本体の設置場所すら分かっておりません。
今まで嘘をつかなかったからといって、これからもそうだという保証は何処にもない、と存じます」
葉山の主張には、確かに道理がある。
それに、彼が指摘しなかった危険性も、真夜には分かっていた。
「そうですね……葉山さん、貴方の言うとおりでしょう。
私は最近、アレの情報収集能力に頼り過ぎていたようです」
「確かに捨ててしまうには惜しい性能です。
私めが愚考いたしますに、達也殿であればフリズスキャルヴの本体が何処にあるのか、突き止められるのではないでしょうか。
本体に直接アクセスできれば、フリズスキャルヴを独占的に支配することも、あるいは可能かと」
葉山のこの発言は、真夜にとって完全に予想外だった。

意表をつかれ、短くない時間考え込んだ後、真夜は首を横に振った。
「まだ早いわ」
何が早いのか、解釈の余地を残した回答。
葉山は一礼して、真夜を残し、部屋を後にした。

◇◆◇◆◇◆◇

「しかしまずいな……」
思わず口をついてでた独白に、目を回していた（めまいを起こしていた、という意味）ほのかの介抱をしている深雪が振り向いた。
「そう言えば……そうですね。お兄様、一旦この場を離れませんか？」
余りにも自然に応えが返ってきたので、達也はそのまま頷いてしまいそうになった。
（……いや、それは別に構わないんだが……）
この打てば響く理解力を当たり前のものと思っていると、いつか大きなしっぺ返しを喰らいそうで怖かった。
閑話休題（それはともかくとして）。
先程の大規模なサイキック。
あの反応は、この青山・赤坂一帯で観測されたに違いない。
もうすぐ望まざる客人が種々押しかけて来るだろう。
つい今し方迄のたうち回っていたパラサイトは、力尽きたのか大人しくなっている。
一応後ろ手に縛り上げているが、どの程度意味があるのか、達也にも分からない。
何せ相手には「自爆」という最終手段があるのだ。
（そうだな……古式に何か適当な術式があればいいんだが）
「達也くん！」
「ゴメン、遅くなった！」

噂をすれば、ではなく、ちょうど顔を思い浮かべていたところに、本人の声が聞こえた。

ようやくお出ましのようだ。

しかし「遅い」と責めるつもりはなかった。

彼らは彼らで、パラサイトを探し回っていたのだから。（実際には、エリカが家を出る時間が遅かったのが主な理由である）

サボっていたわけではないのだから、文句などつけられない。

そう……荒事が全部終わった後にのこのこ顔を出しても、そんなことで文句をつけたりはしない。

「えっと……達也？　何だか、顔が怖いよ……？」

「俺は強面だからな」

「いや、強面っていうのは、微妙にそういう意味じゃないと思うんだけど……」

何故か（？）ビクビクしている幹比古を一瞥して、予定より一名多いその当人に声を掛ける。

「レオ、お前も来たんだな」

「ああ。リハビリがてら、付き合わせて貰ってるぜ」

「無理はするなよ。

で、エリカ」

「ん？　なに？」

厳しい目つきで捕虜を見ているエリカに話し掛けると、意外に平静な声が返ってきた。

「なるべく早くこの場から離れなければならないんだが、こいつらを運ぶ手段は用意してるのか？」

「えっ、何で？」

「何でって、エリカ」

この台詞は、達也ではない。

幹比古が、焦りを隠せぬ顔で口を挿んだのだ。

「さっきの念波を感じなかったの？

あれだけ派手に魔力を撒き散らしたんだ。

寄って来るのは普通の警察だけじゃないと思うよ」
「そんなの最初から覚悟の上よ、と言いたいところだけど……達也くんたちに迷惑掛けちゃ拙いか」
少し窺い見るような目つきになった以外は、いつものエリカだった。
少なくとも、レオや幹比古が気づかない程度には。
「えっと、ミキのトコの倉に運ぶけど、いいよね？」
エリカは「倉」と言っているが、もちろん、文字通りの倉庫ではあるまい。
千葉家の施設ではなく吉田家の管理下にわざわざ運び入れるということは、パラサイトの魔法を封じて拘束する適当な術法があるということだろう。
「良いのか、幹比古？」
「えっ？　もちろんだよ。
そもそもこれは、本来僕たちの仕事だ」
僕たち、というのは古式の術者のことだろう。
魔を封じるのは陰陽師の仕事、と言いたいのかもしれない（吉田家は陰陽道ではなく神道系だが）。
「じゃあここは、あたしとミキと、ついでにレオで引き受けた。
達也くんたちは先に帰った方が良いよ」
「何故だ？　積み込む時間くらい、待ってるが」
俺はついでかよっ！、と憤るレオを放置して、達也が訝しげに問い掛ける。
答えは、大層歯切れの悪いものだった。
「達也、その、ね……」
達也が、言い難そうにしている幹比古の視線を、辿ってみると。
その先には、スカートが所々裂けているピクシーと、ハーフコートに不自然なスリットが複数追加されているほのかの姿。
「……車を呼ぶか」
「その方が良いと思う」

達也はエリカたちにこの場を任せることにした。

◇◆◇◆◇◆◇

達也たち兄妹の自宅は自動管制区域内だが、ほのかのマンションはギリギリでオートドライブの管制区域から外れている。

結局四人は、駅からキャビネットに乗り換えることにした。

相当奇抜なファッションでも、大して注目されないのは都会のありがたいところだ。

思ったより人目を集めることなく（深雪が同行している時点で、全く注目されないということはあり得ない）、達也たちは四人乗りのキャビネットに乗り込んだ。

「あの、達也さん……？」

乗り込む動作が自然だった所為で、ほのかが疑問を覚えたのはキャビネットが走り出した後だった。

方向が同じであっても、キャビネットは途中下車できないのだが……

「送っていくよ」

そうして欲しい、と思いつつ口には出せなかった言葉を達也から聞いて、ほのかは頬りに遠慮する台詞を口にしつつ、嬉しそうな表情を隠せずにいた。

四人用のキャビネットは、座席を対面レイアウトに変更することが出来る。

達也の隣には深雪、向かいにはほのか。

達也は斜向かい（はす）のピクシー（何故か荷物ではなく、乗客扱いになっている）に目を遣り、それからほのかへ目を向ける、をさっきから無言で繰り返している。

「……お兄様、そろそろ何か声を掛けてあげませんと、ほのかがもちませんよ？」

達也が目を向けるたびに緊張の度合いを高めていくほのかを見かねて、深雪が横からそっと囁いた。
「ああ、悪い」
達也には自覚がなかったようだ。
妹に窘められて、ハッとした顔で謝罪を口にする。
「ええと、ほのか。
何と言えばいいのか……脱力感は無い？」
次の言葉は説明ではなく質問だった。
唐突な問い掛けに戸惑いながらも、ほのかは首を横に振った。
「そうか……ピクシー、お前はどうだ。疲労……という表現は適切じゃないな。お前の本体を構成するサイオンやプシオンの消耗は感じられないか？」
『消耗は自然回復が可能な範囲です、マスター』
「そうか……」
「お兄様、何をご懸念されていらっしゃるのですか？」
「懸念、と言うほどではないが……」
妹に首を振って見せた後、達也は再度、ほのかへ目を向けた。
「さっき、ピクシーが強力な念動力を放った時のことなんだが……ほのか、何が起こったか、自覚はある？」
「……いいえ、何のことでしょう？」
ほのかは瞳に不安を湛えて問い返した。
確かに、不安を覚えても仕方のない意味ありげな質問だ。
もっともそれは、もちろんのこと、殊更不安を煽る意図のものでは無かった。
「冷静に聞いて欲しいんだが」
わざわざこんな前置きをする程、達也自身、困惑していた。
「ピクシーが念動を放つ直前、ほのかからピクシーに、サイオンが供給されていた」
「えっ？」
達也の言葉に、ほのかは目を丸めて絶句した。

「……ほのかがピクシーに力を供給したということですか？」
「いや、そういう感じじゃなかったな」
深雪の問いに答える達也の声は、珍しく、自信無さそうなものだった。
「起動式を展開する為、ＣＡＤへサイオンを注入するプロセスに似ていた。
呼び水……みたいなものかな。あるいは、共振か」
ほのかが怯えを含んだ視線をピクシーへ向けた。
ピクシーに――３Ｈ－Ｐ９４に取り憑いたパラサイトに、それを気にした様子はない。と言っても、表情が変わらない（と言うより無い）から本当のところは分からないが。
魔法師と機械がサイオンを遣り取りする。
その現象自体は、達也にとって、いや、現代魔法の術者にとってお馴染みのものだ。
だがそれは、魔法工学によって「そういう風に」作られたシステムを組み込まれている機械との間に起こる現象であり、３Ｈにそういう機能は存在しない。
機械は、与えられた以外の能力を持たない。自分で新たな機能を会得することはない。
故にこの現象は……ピクシーの「機体」との間に生じたものではなく、ピクシーの「本体」との間に生じたものとしか、考えられない。
不安を覚え、怯えに捕らわれたとしても、無理はない。
「美月はああ言っていたが……ほのかとピクシーの間には、やはり、ある種のパスが通じているようだ。
そしてどうやら」
達也が急に、口ごもった。
何やら苦々しげに、言い難そうにしている兄へ、深雪が訝しげな目を向けた。
無言の問い掛けを肌で感じて、達也は観念した顔で、言葉を続け

た。
「……どうやら、その媒体となっているのが、ほのかの髪飾りみたいなんだ」
「えっ？」
さっきから驚いたり怯えたりで忙しいほのかだが、今回の驚きぶりは際だっていた。
驚いているのは彼女だけではなかった。
深雪も、マジマジと、ほのかの髪を縛るゴムを凝視していた。
「正確には、その水晶だな。
一体、どういう理屈でそんな事になっているのかは分からないが……」
ほのかの両手が髪飾りの水晶に触れる。
無意識のもので、特に何らかの結果を意図したものではなかった。
しかしその直後、達也の推理を裏付けるような現象が生じた。
ピクシーの身体、その胸の中央から、霊的な光が放たれたのだ。
強い光ではない。視覚的に言えば、ランタン程度の明るさだ。
しかしその関連を疑うには、同期性が強すぎた。
達也と深雪の視線が、髪飾りに集中する。
ほのかは水晶の飾り玉を両手で包み込んだ。
まるで、奪われるのを、怖れるように。
「原理的なことはひとまず置いといて……コントロール法を見つけなきゃな」
警戒する小動物を宥める口調で呟く達也。
警戒感を意外感に替えて、ほのかが見詰め返す。
達也は、ほのかからピクシーへ、視線を移した。
「取り敢えず、ピクシーを買い取っておいて、正解だったか」

◇◆◇◆◇◆◇

エリカが自分たちだけで駆けつけたのは、今晩動員しているメン

バーの中で彼らが最も強かったからに他ならない。
成績はイマイチでも、実戦闘能力はずば抜けている三人だ。
高校生という範疇のみならず、大人たちに混じっても、兵器の操作技術を度外視すれば、個人としての実力は上位に位置づけられる。
その結果、拘束したパラサイトを見張りつつ、護送車を待つ、という状況に置かれている訳だが……護送の車より先に、厄介な相手に見つかっていた。
「おい、そこで何をしている！」
街灯の向こうに自転車（モーター付き）を止めて、大声で詰問しながら駆け寄って来たのは、警察の制服を着た二人の若い男だった。
二人を見て、幹比古は顔に狼狽を浮かべ、レオは不貞不貞しい嗤いを唇に刻み、エリカは無言で挑戦的な視線を向けた。
「何だこれは！？　お前たち、高校生だろう。一体何をしていた！？」
後ろ手に縛られて路上に横たわる二人の男を見て、背の高い方が声を尖らせる。
確かに、夜の路上で市民が縛られて転がっているのを見れば、警官としては当然の反応かもしれない。
「いえ、これは、そのですね」
職質を受けた、と思っている幹比古が言い訳にならない言い訳を必死に捻り出そうとする。
「アンタたちこそ、何者？」
だが、それを押しのけて、エリカが高圧的に反問した。
「何だと！？」
「おい、エリカ！」
思いも寄らない反抗的な態度に、男たちは怒気を強め、幹比古は「信じられない」という目を向けた。
「幹比古」
その肩を掴んで、グッと引き寄せる手があった。
幹比古が振り返ると、レオが面白くて仕方がないという笑みを浮

かべていた。
「聞こえなかった？　アンタたちは何、って訊いたのよ」
警帽の下から送られてくる威嚇の視線を、エリカは鼻先で笑い飛ばした。
「知らない？　現在この区画に、警官はいないの。そういう命令が出ているからね。
ウチのバカ兄貴も、こういう所で抜かったりしない」
エリカの言葉には、何の根拠も伴っていない。
本物の警官であれば、鼻先で笑い飛ばして然るべき台詞だった。
それなのに、彼女の前に立つ若者は、動揺を見せてしまった。
「何をバカなことを」
動揺は、ほんの一瞬で収まった。
だが、エリカはそれを見逃しはしなかったし、何の反応も返ってこなくても、一向に構わなかったのだ。
彼女が言っていることは、ハッタリではないのだから。
「変装するなら、私服刑事にするんだったね。
そしたら話くらい聞いてあげたのに」
聞いてあげるだけだけどね、と嘯くエリカ。
彼女を怒鳴りつけようとした長身の若者を、同僚が押し止めた。
入れ替わりに、前へ出る。
比較すれば背は低いが体格はこちらの方がガッチリしている。
威圧感も一回り上だった。
「訳の分からない言い逃れをしようとしても無駄だぞ。
暴行の現行犯だ。一緒に来て貰おう」
「へぇ。あくまでシラを切るんだ」
もっとも、エリカが畏れ入るほどではなかった。
変わらず、白けた目つきで、挑戦的な眼差しを返している。
「でもお生憎様。
この二人は婦女暴行未遂の現場をあたしたちが取り押さえたの。
私人逮捕ってヤツね。

で、本物の警察官が来るのを待ってるとこって訳。
偽物さんが出る幕じゃないのよ、お・分・か・り？」
スラスラともっともらしい話をでっち上げる幼馴染みを、幹比古は感心しながら見ていた。嘘だと分かっていても、騙されてしまいそうだ。
――その所為で、忍び寄る気配に気づくのが、一拍遅れた。
「ミキ！」「幹比古！」
音もなく――誇張表現ではなく、本当に全く音がしなかった――黒い影が頭上から襲い掛かる。
霊園を囲む塀を跳び越えて襲って来たのだ、と認識した時には、迎撃が間に合わないタイミングだった。
幹比古は肩に衝撃を感じた。
突き飛ばされた、と気づいたのは、無意識に前転受け身をとった後だった。
頭上に掲げたレオの腕が、振り下ろされた棍棒を受け止めている。音だけで威力が推し量れる打撃だったが、常人なら骨折間違い無しのその一撃を、レオは平然と受け止めている。
のみならず、着地したばかりの相手に対して、風を切る勢いの鉄拳を叩き込もうとしていた。
「チッ！」
しかしその拳は、襲撃者の身体を浅く捉えただけで引き戻された。
街灯の弱々しい光の中で、閃く電光を幹比古は見た。
その男は、接触する相手に高圧電流を流し込むスーツを身に纏っていたのだ。
手首を押さえて、一歩後退するレオ。
棍棒を手にした男が追撃の構えを見せる。
「レオ、離れて！」
幹比古は左腕を勢い良く振った。
袖口から飛び出して来た扇子形のＣＡＤを慣れた手つきでキャッチする。

レオを襲った男へ向けて援護の術を放とうとするが、何か輪のような物が横合いから飛んできてＣＡＤにぶつかった。
ＣＡＤを落とすことはしなかったが、術は中断を余儀なくされる。
幹比古の術を中断した物体は、弧を描いて元来た方へ飛び戻った。
それが一種のブーメランだと、投擲した敵の手に戻ってようやく分かる。
予期せぬ電撃を受けたレオは、路上を自ら転がり振り下ろされる棍棒をかいくぐって、距離をとり、体勢を立て直している。
そちらを気に掛けている余裕は、幹比古にはなかった。
敵は一人ではなかった。
プシュッ、と圧搾空気の解放された音が聞こえたかと思うと、昔のジュース缶二つをつなげた程もある砲弾が道路の向こう側から飛んでくる。
幹比古は風の塊を飛ばして砲弾を迎え撃った。
砲弾が空中で停止する。
と見た、次の瞬間、砲弾の中から網が広がり、幹比古目掛けて襲い掛かる。
八角形の網の八つの頂点では、超小型のロケットモーターが火を噴いて相殺された運動量を補っていた。
そんなのアリ！？　というのが幹比古の偽らざる心境だった。
スピードは大したこともないが、網にどんなギミックが仕込まれているか分かったものではない。
幹比古は「跳躍」の術式を使って、網を避けた。
空中で彼を待ち受ける人影。
詰み将棋のような、周到な布陣。
並の術者なら、ここでまさしく「詰み」だっただろう。
だが今の幹比古は、並ではない。
天才児と呼ばれていた頃の力を完全に取り戻し、その更に先へ進んでいる。
空中で、空気を足場にして更に「跳躍」することにより、三つの

円環とその主たる男の襲撃を躱す。
空中から、細い得物（多分、乗馬鞭のようなもの）を空振りした男の頭を見下ろす。
見上げた顔に、動揺が浮かんでいる。
ようやく、幹比古のターン。
彼は曲げていた脚を伸ばした。
その足が、男の額に触れる。
その動作自体が、魔法を発動する「印」だった。
足と額の接触点から電撃の網が広がり、男の全身を駆け抜けた。
再び風を蹴って、幹比古は塀の上に着地する。
そこからレオとエリカの姿を探す。
レオは最初の奇襲から立ち直っていた。
棍棒を持つ相手と、素手で激しく打ち合っている。
電撃のダメージを受けていないのは、そういう術式を纏っているからだろう。
相手の男もなかなかの腕だが、スピードでもパワーでも、レオの方が少しずつ上回っていた。
問題はエリカだった。
最初に声を掛けてきた二人、演技の方はお粗末だったが荒事の方はかなりの腕だった。
何しろ、エリカの打ち込みに耐えている。
制服の下に特性のアーマーを着込んでいるか、制服自体が特別製なのだろう。
しかし、ただ硬いだけで、エリカの剣撃に対することは出来ない。
エリカの剣を受けるたびに、服の表面から細かな粉が飛び散っている。
エリカはそれを警戒して、とどめの一歩を踏み込めずにいる。
彼女の得物がもう少し長ければ、これほど手間取ることはなかっただろう。
だが今日の得物は、小太刀に変形する短い棍棒だ。

薬物の可能性が高い粉の飛散を避けて、ヒットアンドアウェイを余儀なくされている。
状況を俯瞰する高い視点を得たことで、幹比古ははじめて、それに気づいた。
縛り上げたパラサイトから、彼ら三人が少しずつ引き離されていることに。
まだ、三人より近い距離に入り込まれてはいない。
だがこのままズルズルと引き離されれば、応援が来る前に捕虜を横取りされるかもしれない。
多少無理をしてでも、手早く片付ける必要がある。
そう決意した、直後のことだった。
いや、おそらくは、相手もこれ以上はもたない、と判断したのだろう。
時機に関する、幹比古の判断と、敵の判断が、一致して、
敵の行動の方が、一歩、早かった。
頭上から何かが落ちてくる、音が聞こえた。
レオは相手を蹴り飛ばし、エリカは鋭い連撃を浴びせ、共に敵から距離をとった。
「伏せて！」
叫ぶと同時に、空気の繭がエリカとレオを覆った。
幹比古が作り出した防護結界。
頭上より落とされた爆弾は、地面に落ちる前に破裂して、街灯の明かりを煙幕で隠した。
何か重い金属が落下する音が続いた。
幹比古の起こした風が、煙幕を吹き払う。
何が起こっているのか、明らかになった。
上空から垂らされた金属のアームが、パラサイトの身体を掴み取り、急速に巻き上げている。
ワイヤーの出所は、漆黒の飛行船だった。
驚くほど小型で静粛だが、魔法を使っている形跡は無かった。

音もなく、魔法の波動も放たない、それ故に気づかれず三人の頭上をとった正体不明の飛行船。
捕虜の身体が、ゴンドラの中に消えていった。
エリカが斬り上げの構えを見せる。
「ダメだ、エリカ！」
しかし、幹比古に制止されて、渋々構えを解いた。
こんなところで飛行船を撃ち落としては大惨事になると、彼女にも分かっていた。
飛行船に気をとられている内に、襲撃者の姿も消えていた。
「参ったわね、これは……」
全く同感だ、と深く頷いていた幹比古の方へ、エリカがやけに愛想の良い笑顔で振り返った。
「達也くんに何て言おう？」
幹比古はレオに助けを求めた。
レオは幹比古の視線に肩を竦めた。
結局――答えは、何処からも返って来なかった。

6－（12）　人でなく、魔でもなく（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

6－（12）　人でなく、魔でもなく

ほのかを部屋まで送りピクシーを元のガレージに置いてきて、達也と深雪が家に帰ったのは、日付こそ変わっていないものの真夜中と呼んで差し支えのない時間だった。

とはいえ、兄妹の年頃からすれば、特別に遅い時間ということでもない。

戦闘も能力全開には程遠く、神経に興奮を残すだけで逆に眠気を遠ざけていた。

「お兄様、深雪です。少しよろしいでしょうか……？」

食事入浴その他諸々を済ませた後、地下の研究室ではなく自分の部屋で、珍しく魔法学以外の勉強をしていた達也の許へ深雪が訪れたのも、中々寝付けない所為だろう。

達也が教材を開いていたのも睡眠導入剤の代わりみたいなものだ。兄妹とはいえ寝室（兼用の私室）を訪れるには不適当な時間だが、深雪と話をするのも気が紛れて良いかもしれない……達也はそう思った。

「いいよ、お入り」

「はい、失礼します」

達也はディスプレイを倒して（背面がそのまま机の天板になるタイプ）、パタンと閉じる音のした扉の方へ振り返った。

「……それで、どうしたんだ？」

どもったり声が上ずったりしなかったのは、流石と言えよう。

それでも、不自然に間を取る結果になってしまったが。

兄の問い掛けに対してすぐには答えず、深雪は神妙な顔でベッドに腰を下ろした。

それにしても……と、意識の中に疑問が湧き上がってくるのを、達也は止められなかった。

――ついこの間まで、妹はパジャマを愛用していたはずだが。

――もしかして、このあいだの雫の格好に感化されたのだろうか。

要するに、深雪は寝間着姿だった。

具体的に言うなら、ネグリジェ姿だった。

流石にキチンとガウンを羽織って、帯もしっかり締めている。

だが胸元とか膝下とかから、薄衣(うすぎぬ)越しに透けて見える素肌が、直に見えているより艶めかしい。

(俺が相手だから良いものの……年頃の女の子の自覚が足りないんじゃないか?)

達也は兄として、密かに妹の警戒心の欠如を危ぶんだ。――それが妥当なものか、的はずれなものか、今ここに判定を下すジャッジはいない。

一方、深雪は、達也に穴が空くほど見詰められて満足したのか、はにかんだ笑みを浮かべると、すぐに、真顔に戻った。

「もしや、お勉強の邪魔をしてしまいましたか……?」

「いや。俺にそんなものは必要ないということは、深雪も知ってのとおりだよ」

聞きようによっては、と言うか、それを耳にしたほとんどの人間が嫌味に感じるであろう台詞だったが、深雪は羨むことも、感嘆することも、称賛することさえもなく、ただ当たり前のこととしてその言葉を受け止めていた。

達也は机の前から立ち上がり、ベッドの上へ移動した。

深雪の隣に、腰を下ろす。(もちろん、十分な間隔を空けて、だが)

正面からではなく、横からの視線で「何の用?」と促されて、深雪は怖(お)ず怖(お)ずと切り出した。

「お兄様……深雪は、混乱しています」

「混乱？」
控え目に言っても、唐突な発言だった。
達也は深雪の台詞の一部をオウム返しに呟いて、深雪の顔をマジマジと見詰めた。が、深雪は達也の方を見ていなかった。
「わたし、わからなくなってしまいました。
魔法とは何なのか……わたしたち魔法師とは、何なのか……」
達也の顔に困惑が過ぎる。
予想もしなかった、高度な問い掛けだった。
この論題は、魔法学の領域というより哲学の領域に属するもののような気がする。
自分の手に負えるものとは思えなかったが、だからといって、深雪の相談を適当にあしらうという選択肢は、無い。
「何故、そんなことを？」
取り敢えず、達也は続きを促した。
「魔法と超能力は本質的に同じもの。これが単なる理論ではなく事実に他ならないことは、お兄様が誰よりもご存知です」
「誰よりも、というのは大袈裟だが……それで？」
「一方でパラサイト――妖魔も、魔法を使います。
彼らが使う魔法とわたしたちが使う魔法の間に、発動プロセス以外の違いはありませんでした」
「そうだね」
膝の上でギュッと握った自分の両手を見詰めていた深雪が、身体を捻って、胸から上を達也へ向けた。
達也が隙間を空けた二人の間に深雪の手が置かれ、身を乗り出すようにして達也の顔を見上げている。
その目に、不安と怯えが潜んでいた。
「それは……妖魔が魔法師に取り憑いているからだと、わたしは思っていました。
妖魔が魔法師の精神を利用して、魔法を使っていたのだと。
でも、ピクシーが使ったサイキックを見て、その後お兄様のお話

を聴いて、それが間違いだったと気づきました」
「さっきのサイコキネシスかい？」
「はい……
テレパシーは精神と精神の間で作用する能力です。元が精神体に近いパラサイトが使えても、不思議には思いませんでした。
表情を作るのにサイコキネシスを使った、と聞いた時も、その程度のことならと、気に掛けておりませんでした」
深雪の顔が少し近づいたように、達也は感じた。
瞳の中の感情の揺らぎが、よりハッキリと見える。
「ですが、先程の念動力は……構成こそ粗いものの、あれは移動系魔法に他なりませんでした。
しかもその魔法は、ほのかとの共鳴によって発動したのですよね？」
「……ああ」
達也は躊躇いがちに頷いた。
さっきは曖昧な言い方をしたが、ほのかとピクシーの間に生じた現象が、血の近い魔法師の間で稀に観測される「共鳴」――片方の魔法演算領域の活性化が、もう片方の魔法演算領域の活性を高める現象――に違いないと、達也はほぼ確信していた。
「３Ｈに……機械に魔法を出力する機能はありません。ですから、ピクシーが使ったサイキックは、宿主の能力ではなく、パラサイトの、妖魔そのものの、能力です。
魔法とサイキックは同じもの。
つまり妖魔は、わたしたち魔法師と同じ力を持っているということになります」
妹が何に不安を感じているのか、達也はようやく理解した。
「魔法が何故、魔の法と呼ばれているのか……わたしたちの力は、彼らに由来するものなのでしょうか？」
深雪の顔が、更に近づいてくる。
息の掛かる距離になる、その直前に、達也はベッドから立ち上が

った。
スルリと身を躱した、様に見えたが、そうではなかった。
達也は深雪の正面に膝をついて、視線の高さを合わせた。
「深雪……考え過ぎだ」
なよやかに腰を捻り、斜めに傾いた身体を両手で支えて、深雪は達也の視線を受け止める――受け容れる。
達也は妹の両肩を掌で両側から包み込んで、ゆっくり、真っ直ぐに、座らせた。
「魔法は日本語では確かに『魔の法』だけど、例えば英語のＭａｇｉｃは『賢者の技』という意味だよ」
深雪が「あっ」と小さな声を上げた。
「魔法が一体何に由来する力なのか、まだほとんど分かっていないんだ。
魔法式でエイドスを上書きすれば事象の改変が起こる、というシステムは分かっていても、何故そんなことが出来るのか、魔法演算領域と名付けられた人間の無意識領域に何故そんな力があるのか、全く分かっていないと言っていい。
魔法が本当に魔法師から産み出されているのかどうかすら定かでないのに、妖魔が魔法を使ったからといって、魔法師と妖魔を結びつけて考えるのは、短絡しすぎている」
「そう、ですね……」
「そもそもパラサイトの正体は、人間の精神に由来する独立情報体、と考えられている。
人間の精神に由来するものなら、その力は人間に与えられたものだ。
魔法師の魔法が妖魔に由来するんじゃなくて、妖魔の魔法が人間の魔法師に由来するという考え方だって出来るんだよ」
「はい……お兄様の仰るとおりです」
深雪の瞳から、不安が払拭された。
達也にすれば、納得するのが早過ぎる気もしたが、枯れ尾花に怯

えるよりは余程、建設的だ。わざわざ水を差す気にはならなかった。
「自分が妖魔の、人でないものの眷属かもしれない、そう思って、不安で眠れなかったんだね？」
達也は別に、妹をからかう意図でそう訊ねたのではない。
だが深雪は、何がスイッチに触れたのか、いっそ見事と言いたくなるほど頬を真っ赤に染めた。
顔を隠すことも忘れてフリーズした深雪は、再起動を果たすと同時にクルリと背を向けた。
珍しく足を崩した座り方でベッドの上に上がり込んで、壁を向いたまま微動だにしない。
そんなに恥ずかしがることないのに……と思いながら、そんな妹の姿が、達也には妙に可愛く思えた。
「眠れるまで」
そっと唇を寄せ、耳元で囁く。
そんな悪戯心を起こしてしまう程に。
果たして深雪は、派手に身体を震わせた。
天井まで飛び上がりそうな勢いだ。
「傍についていてあげようか？」
深雪は首だけでゆっくりと振り返り、顔を赤く染めたまま、上目遣い、か細い声で、こう応えた。
「……手を、握っていてくださいますか……？」
やりすぎたかな、と、達也は思った。

達也に拒否権などあるはずもなく。
彼は深雪が眠りにつくまで、ベッドサイドに座り手を握っていなければならなかった。
幸いなことに、深雪はすぐに、夢の国へ旅立った。
妹の幸せそうな寝顔は達也にとって十分な報酬になったが、それでも、精神的に疲れ切ってしまうのは避けられなかった。
お陰で、すぐに眠れそうだが。

灯りを点けぬまま危なげない足取りで、達也は深雪の枕元を後にした。

音も無く扉を閉めて、自分の部屋へ戻る。

その途中で、達也は気づいてしまった。

魔法師として高度な教育を受けている深雪が、魔法の一面だけを以て、魔法師と妖魔を結びつけてしまった。

魔法師を、人とは別のものとして、見てしまった。

魔法のことを良く知っている深雪でもそういう思い込みに囚われるなら。

魔法について良く知らない、魔法師でない人々が、魔法師と魔性の人外を同列視しても不思議はない。

魔法師を人外、「人ではない何か」と考えても、何の不思議もない……

◇◆◇◆◇◆◇

翌朝。

達也は登校直後、エリカとレオと幹比古に捕まって教室から連れ出された。美月がオロオロした顔で見ていたが、救出は彼女の手に余るようだった。

行き先は、屋上。

ただでさえ気温が上がっていない朝一番、屋外の、吹きさらしの屋上には、彼ら以外の誰もいなかった。

達也も、長居をしたい場所ではなかった。

「何か話があるんだろ？」

黙り込んでいるわけではなかったが、わざわざこんな場所まで連れて来る必要の無い世間話ばかり続ける三人に、やや焦れた口調でそう促したとしても、達也の気が短いとは言えないはずだ。

三人は顔を見合わせ、一様に、観念した表情を浮かべた。

観念した顔のまま、無言かつ猛スピードでスポークスマンを押し

付けあった結果。
「達也、その、実は……」
ビクビクしながらそう切り出したのは、やはりと言うべきか、幹比古だった。
「もしかして、パラサイトに逃げられでもしたか？」
達也は用件をさっさと済ませる為にきっかけを作っただけに過ぎなかったのだが、ギクリという聞こえて来るはずのない音が聞こえてきそうな勢いで顔を強張らせた幹比古を見て、我知らずため息を漏らした。
「……そんなことで怒ったりしないから安心しろよ。
また捕まえることを考えると面倒臭いが……逃げられたものは仕方がない」
失望は隠せなかったが、取り返しがつかないという程のことでもない。
その意思表示をして暖かな教室に戻ろうとした達也だったが、
「いや、違うんだ、達也！」
幹比古が、それを必死になって引き留めた。
「そうよ！　逃げられたんじゃないわ！
……いや、逃げられたのは逃げられたんだけど……」
矛盾することを言って言葉を濁し、どうにも要領を得ない二人から、達也はレオへ視線を転じた。
「横から、かっ攫われたんだよ」
「そんなに手強い相手だったのか？」
レオの告白に対する達也の反応は、一般的なものとは少し違っていたかもしれない。
だが達也にとっては、そこに最も関心があった。
同じクラスになって、もうすぐ一年。
今やこの三人の実力は、一線級の実戦魔法師にも、具体的に言えば独立魔装大隊の隊員にも、そうそう引けはとらない、と達也は評価していた。

無論、風間や柳にはまだまだ及ばないが（「トライデント」を使わなければ達也もこの二人には敵わない）、少なくとも中堅どころが相手なら、良い勝負が出来るはずだ。

「負け惜しみに聞こえるかもしれないけど、実力で言えば、そんなに手強い相手じゃなかったと思う」

「ただ、装備が周到でよ。殴ったらコッチが痺れるスーツなんて、初めてだぜ」

「やったら硬いアーマーを着込んでいる上に、打ち込むと何か粉が飛び散るんだもん。

もっとリーチのある得物を持って行けば良かったわ」

「なる程」

随分と特徴的な装備品だ。お陰で、すぐに正体が特定できた。

「最後は真っ黒な飛行船で持って行かれちゃったのよ。もう、腹が立ったら」

「いや、大事にならなくて良かったよ」

達也の台詞に、と言うより彼の口調に、エリカが「んっ？」という目を向ける。

「達也くん、相手が何だったのか、知ってるの？」

「多分ね。

直接やり合った訳じゃないから推測でしかないけど」

「何者？」

答えの性質を考えれば、はぐらかしても、あるいは黙秘しても、おかしくはなかった。

「国防軍情報部防諜第三課。

そういう面白装備を採用していて、ステルス仕様の飛行船を運用しているとなると、第三課で間違いないと思う」

だが達也は、あっさり回答した。

余り、秘密を守ろうという姿勢が見えない。

もしかしたら、エリカだけでなくレオと幹比古も、自分の事情に巻き込むつもりなのかもしれない。

「それ……達也くんが独立魔装大隊の隊員だから知ってるの？」
「あれっ？」
とはいえ、
「エリカに所属部隊を教えた記憶は……」
覚えのないことを指摘されれば、やはり首を傾げてしまう。
「……そうか、深雪に聞いたんだな」
「あんなの見せられちゃ、訊きたくなるわよ」
エリカがあんなの、と言っているのは、ムーバル・スーツのことだ。
達也の素性を勘付いているエリカも、「灼熱のハロウィン」（既にこの名称が広まりつつあった）と達也を結びつけるには至っていない。
「実力抵抗した以上、もしもの時は所属指揮系統を明示する必要があったし、仕方ないか。
でも、他人には黙っていてくれよ」
「分かってる。スパイ容疑でしょっ引かれたくないもんね」
国家機密保護法違反は、スパイ容疑と同義だ。前世紀後半と異なり、それを不名誉と感じる市民が多数派を占める程度には、この国も「普通の国」になっていた。
「ねっ、相手の正体が判るんだったら、何処に連れて行かれたのかも分かるんじゃない？」
切替と立ち直りが早いことに、エリカが期待に満ちた声でそう訊ねる。
しかし、
「目的が分からなきゃ絞り込めないな」
達也は素っ気なく頭（かぶり）を振った。
現実はこんなものである。
「そうだよね……相手は政府機関、拠点なんていくらでも持っているだろうし」
「予算、ってヤツがあるからな。いくらでもってことはねえだろ。

それでも、虱潰しが効かない程度にはあちこちに隠しているだろうけどな」

幹比古の言うとおり、今回の相手は国家機関だ。不法に侵入してきた外国勢力とは利用できる作戦資源の質が違う。今までアドバンテージとなっていた地の利は、今回、相手側にある。

「それより、教室に戻ろう。いい加減、寒くなってきた」

この程度の寒さで音を上げる人間はこの場にいなかったが、それでも寒いものは寒い。

三人は異を唱えることなく、達也の背中に続いた。

◇◆◇◆◇◆◇

その日最初の授業は、一般科目だった。

テキストを読み、問題を解くスタイルで、生徒の好みにより音声読み上げ機能も利用できる。

いつもはテキストを自動スクロールさせていくだけの達也だが、今日はイヤホンを耳に当てた。

無線のレシーバーから流れてくる合成音声を聞き流しながら、達也は授業と関係ないことを考えていた。

防諜第三課の名前と特徴を知っていたのは、確かに独立魔装大隊経由だ。

だが、数ある情報部の一部門として知っていたわけではなかった。

情報部の中で特に、七草家の息が掛かったセクション。積極的に七草家の手足となって動く部隊。正確には、七草家が裏で糸を引くスポンサーの手足と言うべきだが、達也の仮想敵勢力として候補に挙げられた名前だ。

しかし今回の、パラサイトを横取りするという真似は、七草家のやり方ではないような気がする。

根拠は無い。

達也は、七草の当主・七草弘一の為人（ひととなり）を知らないのだから。
だがこんな、博打（ばくち）じみた強引なスタイルでこれ迄も通してきたのだとしたら、とっくの昔に四葉と正面衝突を引き起こしていたはずだ。
一体、誰が、何を意図しての狼藉なのか。
（軍がスポンサーの意向を逸脱した行動をとったのだとしたら……その動機は、軍の存在意義そのものに関わる目的に沿ったものに違いない）
軍の目的とは何か。
国家権力を実現する為の暴力機関であり、他国の直接的暴力に対して正当かつ直接的に対抗する唯一の手段。その性質は複雑で、一言二言では言い尽くせない。
しかし、軍の目的を現象面から見るならば、意外に単純だ。
軍の目的は、勝利すること。
あとの目的は、付随的なものでしかない。
勝利の形は様々で、負けなければ良いという戦局で負けないことも、勝利の一形態だ。
だが、とにかく、勝つ。
勝った後のことは政治の領分であって、軍は勝つことだけを考えていれば良い。
故に軍は、力を求める。
情報部が独り善がりに暴走したとしても、それは力を求めた結果に違いない。
そこまで思考を進めて、達也は背筋に薄ら寒さを覚えた。
もしかして第三課は、パラサイトを――妖魔を軍事利用しようと考えたのだろうか。
それは余りに危険だ、と達也は思った。
ＵＳＮＡで広がっている魔法師に対するネガティブキャンペーンのメインツールは、デーモンをこの世界に招いたことに対する非難だ。

軍事的野心の為に意図してデーモンを招いた、という言いがかりでしかないアジテーションだが、パラサイトを軍事利用しようとする企みは、魔法師排斥派に同じ口実を与えることにならないだろうか。

もし自分が考えたとおりなら……七草家にコンタクトすることが必要だ、と達也は思った。

こういう時こそ、影響力を発揮して貰わなければならない。

受験が間近に迫っている真由美には気の毒だが、時間を作ってもらわなければならないだろう。

場合によっては、七草の当主と直談判することも必要になるかもしれない。

気分がグッと憂鬱になったが、何もせずにいる、というのは難しそうだった。

◇◆◇◆◇◆◇

授業を途中からエスケープして（受講状況を監督するシステムを誤魔化すことは、難しいが不可能ではない）真由美へ送ったメールに返信があったのは、送信してから僅か一分後のことだった。

確かに、【至急】コードをつけたとはいえ……

（あの人、一般受験だったよな？）

受験まで、残り約半月。

落ちる心配はほとんど無い、とはいえ、それで良いのか受験生、と思ってしまう。

まあ……余計なお世話、なのだろう。

至急のメールにすぐ返事が返ってきたのだから、文句をつけることではない。

そんなことを考えながら、達也はメールを開いた。

達也が送った内容は「相談したいことがあるので一両日中に会えないか」。

真由美の返事は「すぐに生徒会室へ来て」。
彼女はどうやら、自由登校にも関わらず学校に出て来ているらしい。
今いる場所は、教室でも図書室でもなく、生徒会室らしい。
……本当に、これで良いのか、受験生？

達也の方から持ちかけた事だし、早ければ早いほど望ましい事でもあったので、達也はそのまま生徒会室へ足を向けた。
本人の知らないところで入室の権限が再設定されていた自分のＩＤカードを使ってドアを開ける。
授業中ということもあってか、待っていたのは真由美一人だった。
お互いに気安い挨拶を交わした後――真由美の方はそれで良いとして、達也のとるべき態度としてはどうなのだろうか――達也は真由美の正面に腰を下ろし、早速、事のあらましを語った。
「……で、要するに達也くんは、私に父を説得しろと言いたいのね？
情報部が横取りした捕虜をエリカちゃんたちに返すように」
どうでもいいことだが、真由美のエリカを呼ぶ言い方が、いつの間にか「エリカちゃん」になっていた。エリカ本人はそれを聞くたびに嫌そうな顔をするが（美月にそう呼ばれても平気なのだから、相手によるのだろう）、自分も幹比古のことを「ミキ」と呼んで改めなかったのだから、達也などからすると「因果応報」という気がする。
閑話休題。
真由美の質問に、達也は頭を振りながら「返せとまでは言いませんが」と前置きした上で、こう答えた。
「パラサイトを持っていった理由を確認した上で、もし実験以外の使い道を考えているようなら、釘を刺していただきたいんです。
軍がパラサイトを利用した事が世間にばれて、その所為で魔法師が不利益を被った場合は、その損失を組織として償って貰うと」
「怖いこと言うのね」

声と口調は呆れ混じりのものだったが、瞳に揺れる光は、その台詞が単なる憎まれ口にとどまるものではないと物語っていた。
「ＵＳＮＡで起こっている事を見れば、その程度の脅しは必要だと思います」
真由美も、魔法師に対する嫌がらせが日に日に激しくなっているのは知っている。
国土の狭い日本で同じ事が起これば、言論にとどまらない衝突に変化するのは、こちらの方が早いかもしれなかった。
「……了解よ。父に話してみる。
でも、結果については約束できないから、余り期待しないでよ。
私は十文字くんと違って七草の跡取りって訳じゃないんだから」
真由美の付け加えた言葉に、達也がチョッとした意外感を表す。
「……なによ？」
「いえ……七草家というのは、意外に家父長的な家風なのだな、と思いまして」
「達也くんのトコはどうなのよ？」
恥ずかしがっているのか、ヘソを曲げたのか、達也に、この反応の裏にある真由美の真意は、分からなかった。
ただ、言う必要のないことを言ってしまったのは確かだ。
軽く反省しながら、達也は罰ゲームみたいな気持ちで真由美の問いに答えることにした。
「ウチは父親の権威なんて、有って無いようなものです。
親父は後妻の持っているマンションに行ったきりですから」
真由美の瞳が、右に左に、泳いだ。
この程度のことで動揺できるピュアな面を見ると、年上とはいえ女の子だなぁ、と達也は思う。
大人びて見えることもあるが、やはり、まだまだ「大人の女性」とは言えないな、と。
「愛人じゃないだけケジメはつけていると思いますけどね」
「大人、なんだね」

「諦めているだけですよ。
大人になるということの意味が『諦める』ことだとは……思いたく、ないですね」
すっかり諦めきった口調で、達也は真由美にそう答えた。

◇◆◇◆◇◆◇

悪い予感も、偶(たま)には外れるものだ。
国防軍情報部がパラサイトを利用して何かをやらかす、という達也の予想は、現実のものとならなかった。
ただ、「幸いにも」とは、言い難い。
翌日の朝。

『防諜第三課のスパイ収容施設が襲撃されて、捕まっていたパラサイトが殺された』

真由美から届いたメールには、そう書かれていた。

6－（12）　人でなく、魔でもなく（後書き）

いつも拙作をお読みいただきありがとうございます。
遅れております感想のお返事は、日曜日から順次お返しして行く予定ですので、今暫くお待ち願います。

6－（13）　賢者の脚本（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

6－（13）　賢者の脚本

――情報部の施設が襲撃されて、収容されていた妖魔（パラサイト）が殺された――

すぐに真由美とコンタクトして詳しい事情を聴きだす、という欲求を苦労して抑え、達也はひとまず浴室へ向かった。

鍛錬の汗を熱いシャワーで洗い流しながら、これからどうするか、考えを纏める。

深雪にはまだ、知らせていない。

八雲の寺から帰って来てシャワーを浴びる。それはいつも通りのパターンで、シャワーの前にメールを見ていたからといって、それだけで何かあったとは思わないはずだ。

（いや……隠しても無駄だろうな）

このまま知らせずにおこうか、と考えて、達也はそのアイデアを即座に却下した。

勘の鋭い妹が、何時までも気づかずにいるはずが無い。自分が全く関与していない事柄ならともかく、深雪はこの件に達也と同じくらい深く関っているのだから。

妹に気取られないようコソコソ立ち回るのではなく堂々と調べることに決めて、達也はシャワーを止めた。

地下室に据えつけられたワークステーションのコンソールに、達也は指を躍らせていた。もっともその様を形容するなら「華麗に」ではなく「素早く」「正確に」となるあたりは、彼の個性と言うべきだろうか。

今日は土曜日、午前中だけとはいえ、授業はある。

だが調査に時間が掛かるようなら、学校をズル休みすることも達也は考えていた。

ただその場合、当然の如く隣にいる（本人にとっては議論の余地無く「当然」なのだろう）深雪も、これまた当然の如く（本人にとっては「必然」かもしれない）今日を自主的な休日とするに違いないから、ズル休みの決断はギリギリまで先送りにするつもりだった。

幸いなことに、お目当てのデータはすぐに見つかった。

国防軍情報部の分散型サーバーに不正アクセスを仕掛けていた訳だが、「電子の魔女（エレクトロン・ソーサリス）」藤林響子謹製のハッキングプログラムを相手にするには、情報部のシステムといえど一セクションのローカルシステム（ここでいう「ローカル」はスタンドアロンの意味ではなく、局部的な、の意味）ではかなり力不足だったようだ。もっとも、情報システムの細分化（セグメンテーション）は特定セクションの脆弱性を全体の情報漏洩に直結させないというリスク対策の一種なので、一長一短と評価すべきかもしれないが。

まあ今回は達也にとって好都合な結果につながったのだから、ケチをつける筋合いではない。

そこに記録されていた映像は、ショッキングなものだった。

残虐な、とか、冷酷な、とか、そういう生理的な衝撃を伴うという意味ではなく、

そこで行われたこと、それを為した人物が、兄妹に小さくない衝撃をもたらした。

闇に紛れて侵入する小柄な人影。

警報とともに点った灯りに照らされる、深紅の髪の仮面の少女。

立ち塞がる私服の兵士を金色の瞳の一睨みで吹き飛ばし、複雑な紋様がビッシリと刻まれた扉に向かって、拳銃の引金を引き絞る。

四つに分割された画面の一つに、部屋の中が映っていた。

拘束衣で両手の自由を奪われ、目隠しをされ、猿轡を噛まされた男が扉に向かって簡易ベッドの上に腰掛けていた。

目隠しと猿轡の所為で人相が分かり難かったが、ほぼ間違いなく、マルテと名乗ったあのパラサイトに違いなかった。

その胸を、扉を貫通した銃弾が穿つ。
男の身体が床に転げ落ちた。
その背中に、二発目の銃弾が撃ち込まれた。扉越しにも関らず、見えているような正確さで。
突如、男の身体が燃え上がった。
考え得る火種は、撃ち込まれた銃弾のみ。
貫通と燃焼の時差発動魔法だろう。
深紅の髪の少女、アンジー・シリウスは、次の部屋の前で同じ行為を繰り返した。
明らかに「中身」のことを考えていない殺害行動。「容れ物」を燃やすことだけを目的とした、それは「処刑」だった。

悠々と脱出する少女の映像を見ながら、達也は無意識にため息を漏らした。
シリウスの任務に叛逆魔法師、脱走魔法師の処刑が含まれている、ということは知っていた。
魔法師の人道的処遇など空念仏でしかないということも重々承知しているが、それでもため息をつきたくなる気持ちを止められなかった。
酷(むご)い事をするものだ、と達也は思った。
十六歳の少女に殺し屋の役割を負わせるなど、ＵＳＮＡ軍幹部は一体何を考えているのか。
マフィアでも、もう少し人選に配慮しそうなものだ。
これでは聖戦の名の下に少年少女をテロへ駆り立てる宗教原理主義者と変わらないではないか。
「お兄様、今のは……リーナですか？」
深雪にはシリウスの秘密、『パレード』のことを教えてある。
あの粗い映像で、殺し屋がシリウス＝リーナだったと判ったらしい。
「多分」

深雪も少ながらずショックを受けている様子だったが、達也は上手い言葉を見つけられなかった。

人殺しそのものについて今更どうこう言うつもりは無い。自分にそんな資格があるとも思っていない。

公に出来ない任務は色々あるし、汚れ仕事の中では、暗殺は寧ろキレイな部類に属するとも言える。

だが同時に、孤独で陰鬱な仕事だ。

性格的に余程の適合性が無ければ、ティーンの少女には重過ぎる。その重さを支えきれず、心が少しずつ壊れて行く程に。

そして達也の見るところ、リーナに暗殺者たる適性は無い。

深雪も同じ意見であることは、達也に向けた声と眼差しで分かる。

このままでは、一日暗い気分を抱えて過ごすことになったかもしれない。

しかし幸いなことに（？）、陰鬱を吹き飛ばす更にショッキングな出来事が、その直後に起こった。

達也が防諜第三課のビデオサーバーをハッキングしていたモニター画面に、突如、全く別の映像が浮かび上がったのだ。

金髪碧眼の、見るからにアングロサクソン的な少年の胸像。

子供っぽく見えるが、年齢はおそらく達也と同程度。

深雪が狼狽の声を漏らしかけて自分で自分の口を押さえていたが、達也は落ち着いていた。

ハッキングに使っているこのワークステーションは元々他のシステムと切り離されているし、回線も専用のものを使用、この部屋にマイク、カメラの類はない。こちらが一方的に見聞きするだけで、回線の向こうからこちらの様子を窺い知る術は無いと分かっているからだ。

『ハロー、聞こえているかな？　聞こえていることを前提で話をさせてもらうけど』

案の定、モニターに映った少年は、こちらとコミュニケーションをとろうとせず一方的に話し始めた。

『まずは自己紹介と行こう。
僕の名前はレイモンド・セイジ・クラーク。“七賢人”の一人だよ』
何時の間にか、達也の両肩に置かれていた深雪の手に力が入った。
その感触で、自分も肩に力が入っていると、達也は自覚した。
『君の事はティア……じゃなかった、シズクに聞いて知ってるよ。
よろしくね、タツヤ』
なる程、この少年は雫の留学先の生徒らしい。
加えて例の情報提供者だろう。
雫の情報ソースがリーナの言っていた「七賢人」ならば、オフレコ情報が仕入れられるのも不思議は無い。
しかし、その七賢人が一体何の用だろうか。
わざわざ自分の姿を達也の目に曝してまで。
この映像がダミーという可能性も無いではなかったが、達也はこれが、レイモンド・セイジ・クラークの素顔だと直感していた。
『単刀直入に言おう。……ああ、良い言葉だね、これ』
ちなみにレイモンドは日本語で喋っている。「単刀直入」も、少しクセは残っているものの流暢に発音した。もっとも話し方は少しも「単刀直入」ではなかったが。
『アンジー・シリウスに、ここのことを教えたのは僕だ』
達也は反射的に、「単刀直入」の用法を間違っているぞ、と思った。それを指摘する術はなかったが。
ここ、が防諜第三課を指していることは、考えるまでもなく分かった。
『そして君にも、特ダネを提供しようと思っている』
特ダネとは、随分と俗な言葉を知っているものだ。もしかして、マスコミ屋から言葉を習ったのだろうか。
『君にとって、とても有意義なネタだと思うよ。
お代は見てのお帰り、と言いたいところだけど、今回はお近づきの印に無料で提供させてもらう』

聞こえないと知りつつ、「頼んだわけじゃないぞ」と達也は呟いた。

だが、余裕を保てたのは、ここまでだった。

『現在ステイツで猛威を振るい、日本にも飛び火しつつある魔法師排斥運動は、七賢人の一人、ジード・セイジ・ヘイグが仕掛けたものだ』

あまりにもいきなりだった為、いくら達也でも驚愕を禁じ得なかった。

『ジード・ヘイグ、またの名を顧傑（グ・ジー）。無国籍の華僑で国際テロ組織「ブランシュ」の総帥。君が捕まえたブランシュ日本支部のリーダー、司一（つかさ・はじめ）の親分だよ。

国際犯罪シンジケート「ノー・ヘッド・ドラゴン」の前首領、リチャード＝孫の兄貴分でもあるね。ノー・ヘッド・ドラゴンでは「黒の老師」「黒顧大人（ヘイグ）」と呼ばれていた』

次々と並ぶ憶えのある名前に、達也はまじまじとモニターを見詰めた。

『あっ、念の為に言っておくけど、七賢人だからといって僕と共謀関係は無いからね。

七賢人というのは一つの組織の名前じゃなくて、フリズスキャルヴのアクセス権を手に入れた七人のオペレーターのことなんだから』

会話が――質問できないのが、この時ばかりはもどかしかった。

フリズスキャルヴ……噂だけなら、一度だけ耳にしたことがある。

都市伝説じみた噂だったが、実在していたというのか。

それは、噂に聞いたとおりの物なのだろうか。

『フリズスキャルヴというのは』

達也のそんな思いを見透かしたようなタイミングで、レイモンドが説明を始める。

『全地球傍受システム「エシェロン？」の追加拡張システムの一つでね。エシェロン？のバックドアを利用しているからシステム内に潜むハッキングシステムと表現する方が妥当なのかな？

タツヤ、君はどう思う?』

どう思う、と訊かれても回答の手段が無い。

それはレイモンドにも当然分かっていて、彼は達也の答えを待たずに説明を続けた。

『フリズスキャルヴの本体が何処にあるのか、僕たちオペレーターにも分からない。

もしかしたら純粋にプログラムだけの存在で、ハード的な本体なんて無いのかもしれないけど。

とにかくフリズスキャルヴは、エシェロン?のメインシステムを上回る効率で世界中から情報を集めて、オペレーターの検索にヒットする情報をもたらしてくれる。

そのオペレーターの選出は、システムそれ自体が行っていて、選出基準に法則性は見つかっていない。

見かけ上、完全にアトランダムなんだ。

あえて共通点を挙げるなら、高度な情報システムを自前で扱えるだけの財力が必要というところかな?

それだって大富豪である必要は無くて、スティツや日本なら平均的な中産階級の生活水準があれば十分だけど』

とんでもない話だ。

それが、ここまでレイモンドの説明を聞いた達也の感想だった。

フリズスキャルヴを作った人間は、一体何を考えていたのか。

とんでもなく刹那的で享楽的な愉快犯気質のハッカーだったとしか思えない。

『まっ、実際にはそう大したシステムじゃないんだ。

ハード的には、フリズスキャルヴはエシェロン?に完全依存するシステムで、情報の取捨選択を効率化しているに過ぎないし、そもそも傍受システムだからストレージに格納されたデータを漁(あさ)ることはできない。オマケに、検索結果を外部ストレージに保存できないようシステムガードが掛かっている。もたらされた情報は、オペレーターの脳内限定だ。

精々、その情報収集能力で、個人的に「賢者（セイジ）」を名乗ることが出来る程度の代物なんだ』

いや、それだけでも重大な脅威だ。

今や、意味のあるデータは全てネットワークを移動していると言って良い。

一度も通信されないデータが、一体どれだけあるというのか。

『それに、フリズスキャルヴの使用には、オペレーターにとってもリスクがある。

フリズスキャルヴは検索を効率化する為、フギンとムニンという二種類のエージェントを使っている。

で、オペレーターの検索履歴がムニンに記録されてしまう。

一人のオペレーターが調べたことは、他のオペレーターに知られてしまうんだよ。

僕がジード・ヘイグのことを知ったのも、ムニンの記録からだ』

ここで達也は「おやっ？」と思った。

その理屈で言えば、レイモンド・クラークの素性もジード・ヘイグに知られているのではないだろうか。

『ブランシュ日本支部の壊滅とノー・ヘッド・ドラゴンの日本拠点喪失によって、ヘイグは日本に干渉する手段を失っていた。

パラサイトが日本に渡るよう仕向けたのもヘイグで、その目的は騒ぎに乗じて日本における工作拠点を再建する為だ。

彼の目的は、魔法を社会的に葬り去ることだと僕は分析している。

魔法技術が駆逐されれば、魔法後進国である中華連合は一気に軍事力バランスを改善できるからね。

魔法の無い世界で覇権を手にする、それがヘイグと、その背後にいる者たちの目的だと思う』

所々飛躍があるように見えるが、全体としてみれば論理的だ、と達也も認めざるを得なかった。

それに、中華連合が魔法技術の抹殺を望んでいるのは、達也自身も感じていることだった。

『それは、僕の望むところじゃない。
……ロマンチストと笑ってくれても良いけど、魔法は人類の革新につながるものだと僕は思っているんだ』
向こうに聞こえていないと分かっていてこそだが、達也は実際に噴き出していた。
どうも、この少年とは根本的な部分で意見が合わないようだ。
『そんな訳で、僕は今後、継続的に、君に必要な情報を提供しようと思う。
タツヤ・シバ――戦略級魔法師“破壊神（ザ・デストロイ）”』
レイモンドが口にした大袈裟な二つ名に、達也は思い切り顔を顰めた。
安っぽいビデオゲームのボスキャラに出てきそうな名前ではないか。
もしかしてこの少年、世界共通語となった「オタク」なのだろうか。
『チョッとばかり、長話になっちゃったね。
要するに今回は、パラサイトの駆逐に僕も手を貸そう、という提案なんだ』
チョッとじゃないだろ、と達也は思ったが、モニターのスイッチは切らなかった。
『ジード・ヘイグに関する情報はタダ。信憑性は君の判断次第。
今から僕が告げる事を君が信用するかどうかも、君の判断次第。
信用してくれたら、君の労働で代金を支払って欲しい』
レイモンドは一旦、言葉を切った。
もったいぶっている、という訳ではなく、緊張しているのだ、ということは、画面に映る表情で分かった。
『明日の夜、第一高校裏手の野外演習場にパラサイトを誘導する。
そこでパラサイトを殲滅して欲しい。
なおこの情報はアンジー・シリウスにも、既に伝えてある。
協力するも、競争するも、君のお好み次第だ』

モニターがいきなり暗くなった。
頭上で大きく息を吐く音がした。
深雪が詰めていた息を一気に吐き出したようだ。
達也も、肩の力を抜いて息をついた。
「そろそろ出ないと遅刻するぞ？」
立ち上がり、振り返って、達也は深雪にそう声をかけた。

◇◆◇◆◇◆◇

一年Ｅ組の二時限目の授業は実技だった。
授業と言っても、相変わらず教師はいない。壁面のモニターに示されるガイダンスに従って、生徒が勝手にＣＡＤと計測器を操作するだけだ。
生徒たちも既に慣れたもので、監督の目が無い気楽さを享受する余裕も生まれて来ている。――それは自らの境遇に対する諦めと表裏一体のものだったが、それがいつ裏返るのか、それとも表を向いたままなのか、それは一人一人の資質によるだろう。
多分この男などは、ずっと表を向いたままに違いない。
余り大きな声で言えない用事を済ませる為、実習室に遅れてやってきたレオは、キョロキョロと左右を見回し、幹比古、エリカ、美月の姿を認めて、彼らの許へ悠然と歩み寄った。
「……遅刻だよ、レオ」
「堅（かて）えこと言うなよ」
持ち前の生真面目さを発揮して――これでも随分、神経質なところは緩和されてきている――棘のある声で咎める幹比古に、レオはあっけらかんとして、かつ不敵な笑顔で応じた。
その笑顔はすぐに、「おやっ？」という表情に切り替わった。
「達也は？」
レオの問い掛けに、美月が「お客様みたいですよ？」と答えを返した。

口調が疑問形だったのは、美月も訝しく思っていたからだろう。
「客？　学校に？」
眉を顰めて質問を重ねるレオに、美月は曖昧な笑顔を返すことしか出来なかった。
「そんなことよりサッサと終わらせましょ」
横からエリカが、どうでもよさげな声で口を挿んだ。
ただその無関心の裏側には、プライベートな事情に踏み込むことを戒めている雰囲気があった。
「そうだね。今日の課題は、チョッと苦労しそうだし」
幹比古がそう言って、ＣＡＤのセッティングに取り掛かる。エリカが他人事の様な、美月が少し不安げな、レオが軽く引きつった感じの、それぞれの笑顔で頷いた。

一方、達也は不機嫌風味のポーカーフェイスで、応接室のソファーに腰を下していた。
向かい側には高級スーツ姿の、壮年の（見掛けだけは）紳士。こちらは本格的に不機嫌な顔をしていた。
お互い不機嫌な顔を突き合わせて、中々話を始めようとしない。
先にシビレを切らしたのは、授業中強引に呼び出された達也の方だった。
「青木さん、そろそろ用件をお聞かせ願えませんか」
言葉遣いはともかく、決して丁寧とは言えない口調で問われた青木は、首から上で示している不機嫌のレベルを更に一段階引き上げた。
青木も、相手が達也だから、こうも易々と心情を顕わにするのだろう。地下経済に巣食う魑魅魍魎を相手に十年以上四葉の金庫を守り続けて来た青木に、本来であれば、仮面の一枚や二枚被れないはずはなく、舌の三枚や四枚使い分けられないはずは無い。
それが彼の仕事を困難にしていると、解っていないはずもなかった。だが青木は、四葉家における序列、自分が拠り所とする組織内

部の階級に意識を縛られていた。
階級意識は、人を斯くも愚かにする。
「……自分は授業中ですので、ご用が無ければ失礼させていただきますが」
「待ちたまえ」
達也の突きつけた最後通牒に、青木はようやく口を開いた。渋々、ではあったが。
「君は先日、３Ｈ－Ｐ９４を購入しているな」
事務的な口調を努めているのが手に取るように分かる口振りだった。
滑稽だ、と達也は思ったが、笑いはしなかった。
そんなつまらない報復をしても、多分、気晴らしにもならない。
「正確には一昨日ですが」
達也は同じように、事務的に対応することにした。残念ながら、その決意はすぐに崩れてしまうことになるのだが。
「それを奥様が欲していらっしゃる。
君が支払った金額の倍額を出すから、すぐに引き渡したまえ」
達也は慌てて立ち上がり、目を凝らして盗聴や盗撮が行われていないかどうか確かめた。
魔法的な力の使用を観測する機器が常に作動している魔法科高校の校内で気軽に「眼」を使うわけには行かなかったが、肉眼もそれなりに鍛え上げている。取り敢えず、今の話を見聞きされた兆候は無かった。
達也は内ポケットから携帯端末を取り出してケーブルを繋ぎ、そのもう一方の端を青木の目の前に突き出した。
よく考えてみれば――いや、良く考えなくても礼を失している振る舞いだが、達也の有無を言わせぬ眼光に、青木は眉を顰めながらも自分の端末を取り出してケーブルを繋いだ。
『青木さん、熱でもあるんですか』
最初に送信されたメッセージが、いきなりこれだった。

青木は反射的に達也を怒鳴りつけようとしたが、向かい側から放射されているただならぬプレッシャーによって、図らずも、自制した。

『今日は土曜日です。あと四時間もすれば人目に付かない所へ自分を呼び出すことも出来たはずだ。

何故学校の応接室で、家の用事を話すようなリスクを冒すんですか。

家とのつながりを覚られるような真似は慎むよう、叔母上から命じられていることはご存知のはずです』

青木の、冷静を装う仮面が剥がれた。

唇の端が細かく震えている。顔色も、やや蒼褪めていた。

青木がこんな不用心な真似をした魂胆は分かっている。

深雪のいるところを避けて、四葉家の序列を盾に、横車を押し通そうとしたのだろう。

それを達也に見透かされたことも、分かったはずだ。

それでも、返事を書くペンの動きに淀みが生まれないのは流石だった。

『私は早急にという奥様のご意向に従おうとしただけだ。

そんな事より、３Ｈを引き渡したまえ。

そうすれば私はすぐにお暇する』

『そんなことが出来る訳ないでしょう。所有権が自分に移転しても、一高に対する貸借契約の効力は存続したままですよ。

自分が３Ｈ－Ｐ９４を買い取ったのは第三者に持ち去られるのを防ぐ為です。

あの３Ｈは自分が責任を持って管理します。

叔母上にはそうお伝え下さい』

青木の顔色が、蒼から赤に変化した。

彼はいつもの調子で怒鳴りつけようとしていた。

「言いつけに背くつもりですか」

しかし、達也から浴びせられた言葉と視線に、青木の怒気と気力

は見る見る萎(しぼ)んで行った。

◇◆◇◆◇◆◇

青木を昇降口まで送り出し（もちろん、手ぶらで）、達也は実習室へ足を向けた。

既に二時限目の半分を過ぎているが、記録を取る程度のことはできるだろう、と考えてのことだった。

しかし達也の足は、昇降口から廊下へ入ったところで止まった。

「リーナ」

久し振りに見る留学生の顔は、随分とやつれていた。

健康を害している様子は無い。

ただ、精彩がなかった。

精神的な疲労が積み重なっているように見える。

精神的に、かなり追い詰められているように見受けられる。

もっともそれが、陰のある儚げな美しさを醸(かも)し出していて、いつもとは逆方向の魅力を演出していた。

女性の外見にそれほど興味が無い――と言うよりすっかり慣れてしまっている達也でも、美少女はお得だな、と思った程だ。

「タツヤ」

だからと言って、見とれていて反応が遅れるというベタな展開にはならなかった。

名前を呼ばれて、真っ直ぐ、サファイアブルーの瞳に視線を合わせる。

「話は聞いた？」

「ああ」

省略された言葉が多すぎる会話だったが、二人とも、自分の意図が伝わっていることを全く疑っていなかった。

「誰だか分かったか？」

「いいえ」

どうやらリーナの方に顔見せはしなかったらしい、とその答えを聞いて達也は思った。
それもある意味当然だろう。ＵＳＮＡ軍が賢者（セイジ）の身元を突き止めたなら、その知識の泉の正体を徹底的に追求するに違いないのだから。
「そうか、残念だったな」
「まあね。
でも今回は、いいわ」
言葉を切って、リーナは、タツヤへ、挑みかかる様な目を向けた。
「タツヤ」
強い、眼光。
殺し合いを演じたあの夜よりも、強い意志が込められた眼差し。
「ワタシは、馴れ合わないわよ」
分かっていたことだが、達也は改めて悟った。
好む好まざる以前に、共闘するという選択肢は、最初から無かったのだと。
「分かっている。
所詮俺たちは、住む世界が違う」
達也の答えは、古典的な（この場合、古臭いと同義）ロマンス小説（映画でも可）の別れのシーンで使われるような台詞だった。
敢えて誤解されやすい台詞回しを選んだのは、盗み聞きしている者がいた場合に備えてのことだ。
見ればリーナは、罵倒しかけた言葉を飲み込んでいた。
僅かなタイムラグで、達也の意図に気づいたらしい。
とはいえ、顔に血の気が上ったままだったが。
「バッカじゃないの！」
クルリと踵（きびす）を返しながら吐き捨てられた言葉は、
果たして、達也の演技に便乗した台詞だったのか、
それとも、リーナの本心だったのか。
この時、達也に分かっていたことは。

――今日の放課後は実技の居残りだな、という諦めを伴う現状認識だけだった。

６－（１４）　人と魔と魔物の宴（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

6－（14）　人と魔と魔物の宴

海の向こうからもたらされた情報を、全面的に信用したわけではなかった。

レイモンド・クラークという少年が雫の留学先に在学していることは裏付け調査済みだ。学校（ハイスクール）のサーバーに保存されていた写真の顔は、あのビデオメールのキャスターの人相と同じだった。

だがそれだけでは、レイモンド・クラークが真実を語っていた保証にはならない。

匿名の情報が常にデマとは言えないのと同じで、実名の情報が常に信用できるとは限らないのだ。

しかし達也は、こうして指定された場所――第一高校野外演習場へ足を運んでいる。

それは、他に有力な手掛かりがないからだった。

向こうから出て来るのを待つ、あるいは偶然に期待する、それ以外に手立てのない現状では、偽情報（ガセネタ）に振り回されて一日を無駄にしても、大して違いはなかった。

高校としては異例に広い敷地の背後に広がる人工森林。いや、正確に言えばそこも第一高校の敷地内なのだが、自然の山林と見分けがつかないそのフィールドが学校の一部であるとは、知識として判っていても実感するのは難しい。輪郭すら定かでない夜更けとなれば、尚更に。

時刻はまだ午後七時を回ったばかりだ。

夜更け、という表現は、本来当たらないかもしれない。

しかし、灯火が暗闇を圧倒する都心部と異なり、街灯一つ無い本物の闇に沈む夜の森に、宵の口といった類の形容は相応しくなかった。

間違って部外者が入り込まないよう、演習場の周りは高いフェンスで囲まれている。魔法を撃ち合っている最中に一般人（魔法を使

えない市民という意味）が迷い込みでもしたら、どんな惨事にならないとも限らないからだ。

もっとも、フェンスなど無くても町の住人が演習場に入り込む心配はほとんど要らない。ここが第一高校の実習フィールドということは、少なくともこの近辺に暮らす者なら誰でも知っている。

そもそもこの地域に魔法科高校と無関係の民家は無い。ここに第一高校が建てられた時、政府が強制しなくても、魔法と無関係の市民、魔法が使えず、魔法と関わり合いになりたくない市民は、相応の補償金と引き替えに自ら居を移した。この地域に残った人々は、魔法科高校の野外演習場に足を踏み入れることの危険性をよく弁えている。

特に警備システムの類が無いのは、そういう背景があってのことだ。演習場といっても単なる人工森林だから盗まれる物も無いし、コストを掛けて侵入者を防ぐ必要が無いのだった。

「跳べるか？」

達也は高さ約三メートルのフェンスを見上げながら、同行者に声を掛けた。入口は第一高校の裏門から続く直通の通路にあるだけだから、中に入る為にはフェンスを越えなければならない。

「もちろんです、お兄様」

「あたしも大丈夫」

「この程度なら問題ないぜ」

達也の問いに対し、深雪、エリカ、レオの順に答えが返って来た。

『可能です』

そして最後に、この問い掛けをした本来の相手、ピクシーからの念話が届く。

今夜の同行者は、この三人と一体だった。

――達也の予定では、深雪を連れてくるつもりはなかった。エリカにも、これまでの経緯があるので取り敢えず話をしておくだけのつもりだった。

しかし、今夜のことを知られた時点で、大人しく待たせておくの

は無理であろう事も分かっていた。
出掛けに深雪が当然のような顔でついてきた時も、エリカが自分から待ち合わせ時間を指定してきた時も、達也は特に抵抗しなかった。徒労に終わると分かっている抵抗は、時間の無駄でしかないからだ。
改めて意識を演習場へ向けると、森の空気がざわめいている気がした。
どうやら他の役者は、既に舞台へ上がっているようだ。
達也はＣＡＤを操作したフリをしながら――この期に及んで、彼は守秘義務を忘れていなかった――記憶の中から「跳躍」の術式を呼び出し、先頭を切ってフェンスを跳び越えた。

◇◆◇◆◇◆◇

広い人工の森林を、四人と一体は一塊になって進む。散開して標的を探す方法は採らなかった。
この広さ、この暗さの中に、たったの四人では別々に探し回っても各個撃破のリスクを高めるだけで、メリットは見込めない。
それに、わざわざ探しに行かなくても、向こうから寄って来るのは青山で実証済みだ。今回は向こうが用心して出て来ない、という可能性も無いわけではないが、それは考えても仕方のないことだった。これでパラサイトが見つからなければ、明日からまた地道な捜索に戻るだけだ。
それに、ヤツらは出て来るだろう、という予感が達也にはあった。
予知ではない。
合理的な推理でもない。
根拠は無いに等しかったが、一種の確信を持って達也は木々の間を突き進む。
ハンドライトの明かりは地面のごく一部を照らしているだけだったが、木の根や枯れ枝に足を取られる者はいなかった。

新しい足跡が残されていないかどうか、目を凝らしながら、日中と変わらぬペースで奥へ奥へと進むこと、およそ十五分。

『達也さん、止まってください』

片耳にはめたフリーハンドの通信機から、美月の声が聞こえた。

会議モードの通信は、全員の受話器に届いている。

『現在の進行方向正面から右手三十度の方向に、パラサイトのオーラ光が見えます』

美月は達也たちに同行する代わりに、野外演習場を見渡すことができる屋上から、その「目」で四人をナビゲートしている。

『私も確認しました！　男性二人、女性一人の三人組です』

美月が捉えたオーラの光を参考にして、ほのかの魔法が映像を撮り込む。光学魔法により取得した映像は、昼間に至近距離から撮影したものと同等の鮮明な姿をカメラのレンズに送り込み、無線を通じて達也たちの情報端末へ届けた。

美月とほのか、魔法師としても特異なタレントを有するこの二人がいなければ、実現不可能だった索敵スキームだ。

その有用性が今夜のミッションに不可欠だと判断したからこそ、貴重な戦力である幹比古を二人の側に護衛として貼り付けてある。

幹比古自身も、この配役に不満は述べなかった。これが重要な役目だと理解していたし、自分が適役だと納得もしていたからだ。

『あっ！　達也さんたちの反対側から、パラサイトに仮面の女の子が近づいています』

再び、ほのかから報告が入る。

パラサイトのオーラ光が活性化したのは、どうやらリーナを迎え撃つ為だったようだ。

達也は手振りで移動を指示した。

深雪、エリカ、レオ、そしてピクシーが頷く。

次の瞬間、達也は森を吹き抜ける疾風（かぜ）となった。

彼のすぐ後ろにエリカが続き、レオは左右に目を配りながら、深雪、ピクシーと速さを合わせて走り出した。

◇◆◇◆◇◆◇

達也たちのグループ、パラサイトの一団、そしてリーナとそのバックアップチーム。

今、この場に集っているのはこの三つの勢力だと、達也もリーナも考えていた。

国防軍の中にパラサイトの捕獲を目論む集団があることを達也は知っていたが、それは七草家の影響下にあるグループだと認識していた。真由美を通じた警告、間違いなく動いているであろう四葉家の牽制、そして“アンジー・シリウス”にから受けた大きな打撃によって、彼らの意図は挫かれたと達也は判断していた。少なくとも昨日の今日で手を出してくる余裕は無いと考えていたのである。

ところが、実際には。

樹木と下生えの作り出す陰を伝い、達也とリーナ、それぞれから見て側面より接近する一団があった。

全員が近接戦闘を得意とする魔法師で構成された国防陸軍第一師団所属の遊撃歩兵小隊、通称「抜刀隊」。その名のとおり、銃器を使わない、刀剣型デバイスによる奇襲攻撃を専らとする部隊だった。

今回彼らが動員されているのは東京が第一師団の管轄だということ、任務の性質上から隠密行動が要求されるということ、この二点に加えて、彼らが九島家の影響下にある部隊だという事情がある。いや、寧ろ最後の事情が最大の理由かもしれない。

達也は千里眼ではない。

自分の知らないことは計算に入れようが無く、結果的に答えを間違えることも当然ある。

九島老人がパラサイトの兵器的価値に興味を持ち、僅か三日で手勢を送り込んでくるなど、達也が知る由もないことだった。

そして更に、もう一つ。あるいは、もう一人と言うべきだろうか。

単身、抜刀隊を追跡する人影があった。

今、第一高校野外演習場では、五つの勢力が不可避の衝突を待っていた。

◇◆◇◆◇◆◇

スターズ総隊長として、“シリウス”の任務だけは果たす。
今、リーナを支えているのは、この矜持だけだった。
日本に来るまで、彼女も、挫折を全く知らなかった訳ではない。
ペンタゴンが運営する年少者士官向けの教育プログラムでは、代数と生物学で結局Cまでしか取れなかった。
格闘術訓練では、同じグループの中に、どうしても勝てない化け物じみた身体能力を持つ同い年の少女兵がいた。
乗用機械の操縦訓練は、ハッキリ言って苦手だった。
だが、魔法では、負けたことが無かった。
スターズ総隊長、アンジー・シリウス。
世界最強の魔法師の一人。
皆が彼女のことをそう褒め称え、自分でも魔法技能に絶対の自信を持っていた。
ところが、この日本において。
彼女は、あの兄妹に、負けた。
初戦は、彼女のペースだった。
撤退は予定の行動で、寧ろ「まんまと逃げ遂(おお)せた」格好だ。
二戦目は達也の「カミカゼ」の前に組み伏せられた形となったものの、最終的には思い掛けない伏兵に敗れたのであって、作戦上は負けていても魔法で負けた訳ではなかった。
だが、それに続く深雪との一騎打ちは、彼女の敗北だった。
不利な条件だったとはいえ、それを言い訳に出来るとはリーナ自身が思っていない。
正面から戦って、深雪に負けた。
その敗北は、リーナに一層の闘志をもたらした。

敗北に心折れることなく、自分に雪辱を誓った。
だが、
雪辱を期したあの一戦で、
リーナは、達也に、完敗した。
一対一の状況に引きずり込んで、戦術魔法兵器「ブリオナック」まで使用して、それで、敗れた。
達也に対して、口惜しさはあっても、恨みや憎しみは無い。
達也はリーナを辱めるどころか、拘束することすらしなかったのだ。
あの戦い自体も、フェアなものだった。いや、彼女の方が有利な条件だった。
達也は魔法技能と、それ以上に精神力で、自分を上回っていた…
…リーナはそう、納得している。
しかしあの敗北は、間違いなく、彼女の存在意義を揺るがすものでもあった。
世界最強の実戦魔法師、シリウス。
それはスターズが「世界最強」を名乗る上で不可欠の看板だ。
それ故にスターズの総隊長は年齢・性別を問わずＵＳＮＡ最強の魔法師が選ばれる。その魔法師が軍に属していなかった場合、謀略を用いてでも軍に引きずり込んで、スターズ総隊長“シリウス”の地位に据える。
今回の敗北が外部に漏れる可能性は、ほとんど無い。
そもそも、達也と深雪と、その背後にいる者が、それを忌避している。
あの戦いの当事者であった誰もが、シリウスの看板に傷をつけることを望んでいない。
しかし、第三者に知られることはなくとも、負けたという事実は、厳然として、ある。
その失点を挽回する為、リーナは、シリウスの職務を果たす能力を実証しなければならないのだった。

彼女がシリウスであり続ける為に。
彼女がシリウスとなった時、代わりにいなくなってしまった少女、失われた可能性の中の自分、アンジェリーナ＝シールズの為に。

◇◆◇◆◇◆◇

達也が現場を肉眼に捉えた時、深紅の髪に黄金の瞳、仮面を被ったリーナが、一人でパラサイト三体を相手にしていた。
起動式を必要とせず、念じるだけで攻撃の魔法を繰り出すパラサイトに対し、リーナは一歩も引いていない。
攻守の割合はリーナが七、パラサイトが三といったところか。
ただパラサイトの内の一体が厄介な能力を持っていて、その所為で止めが刺せずにいるようだ。
その能力は、擬似瞬間移動。
魔法の種類で言えば、慣性中和と高速移動の複合術式。
その機動力と人工林の木立ちを使い、三次元的に移動しては出現先から銃撃や魔法を浴びせる。攻撃に使われる魔法は干渉力の低いものであり、リーナの魔法力を以てすれば脅威となるものではなかったが、だからといって無防備で敵の攻撃を浴びるわけにも行かず、防御魔法を展開する都度、他の敵に対する攻撃が途切れてしまう、という展開が続いている――状況を一瞥して、達也はそう判断した。
リーナの助太刀をするつもりは無かったが、達也は足を止めて、擬似瞬間移動を使うパラサイトに「分解」の照準を合わせた。
多くの魔法師は、五感で魔法の狙いをつける。
五感外の知覚を利用する場合でも、狙うのは対象の座標だ。
それが、普通。
だが達也は、対象の情報そのものを照準することが出来る。
座標の情報が目まぐるしく変化しても、その値自体が認識出来ていれば照準を固定する障害とはならない。
擬似瞬間移動は達也にとって、めくらましとはならないのだ。

「任せて！」

しかしそれは、達也だけの話ではなかった。

足を止めた達也に追いついたエリカが、そのまま達也を追い越して、慣性制御を発動した。

擬似瞬間移動が脅威となるのは、相対する者の手が、足が、そして何より目が追いつかないからだ。

故に、相手のスピードが術者のスピードを上回っていたなら、擬似瞬間移動による三次元機動は無駄な曲芸にしかならない。

エリカは五十里家に作ってもらい達也に調整させた（調整してもらった、ではない）『大蛇丸』のダウンサイジング版武装一体型ＣＡＤ『ミズチ丸』を携え、一直線に加速する。

その行く先は、幹と枝を蹴ったパラサイトがまさに着地しようとしている地点だった。

類稀な動体視力、慣性中和術式下でも体勢を崩さないボディコントロール、不要に身体を浮かせることなく地面を掴んで前に進む足捌き、そして相手が着地する瞬間をピンポイントに捉える洞察力。

魔法の力はパラサイトの方が上だろう。

だがエリカの、武芸者としての実力が、その差を覆していた。

エリカがミズチ丸を一閃する。

研ぎ澄まされた刃は一切の躊躇無く、パラサイトの胴を薙いだ。

達也は部分分解術式の照準を変更してエリカに念動をぶつけようとしていたパラサイトの四肢を撃ち抜き地を這わせ、エリカが返す刀でとどめを刺したパラサイトの宿主、その亡骸へ向けて左手を突き出した。

パラサイトが宿主から抜け出すのを妨げる結界を、幹比古が張っている。校舎の屋上に築いた簡易式の祭壇の中から。

幹比古を屋上に残してきたのは、美月とほのかの護衛の為だけでなく、遠隔の結界術式を使えるからだった。

とはいえ、結界の効果は完全なものではない。幹比古の技量の問題ではなく、術式の性質の問題だ。結界とは本来、こんな風に即席

で構築する術式ではない。エリカがパラサイトを殺してしまった以上、そちらを先に処理しなければならなかった。

達也の掌からサイオンの塊そのものが撃ち出され、パラサイトの本体からサイオンを剥ぎ取る。いや、イメージ的には「剥ぎ取る」というより「吹き散らす」という方が近いだろう。

前回の戦闘結果を達也、深雪、幹比古の三人で検証して（他のメンバーには尻込みされた）、達也たちはパラサイトがプシオン情報体を核としその外側に繊維状の（もちろん比喩的なイメージだ）サイオン情報体をプシオン核と絡めるように纏い、魔法を行使する際にサイオンを消費しているという仮説に至った。

本体のプシオン情報体そのものを破壊するのは、達也の能力では難しい。それは二度の対戦で実証済みだ。

しかし同時に、弱らせることは出来る、という手応えがあった。

そして幹比古は、そのままの状態のパラサイトを自分の力で封じるのは難しいが、弱って魔法的な抵抗力を失った状態であれば自分にも封印が可能だと請け合った。

「幹比古！」

受信機とセットになったフリーハンドの送話機に向かって達也が呼び掛ける。

本来これは、必要の無い行為だった。ほのかの光学魔法と美月の「目」で、幹比古はこの場の状況を掴んでいるのだから。まあ、気分の問題だ。

幹比古がこの場を「見て」いた証拠に、

天から細い雷光が落ちて来たのは、達也が呼びかけたのとほとんど同時だった。

雷光は宿主の亡骸を撃ち、その皮膚を黒く焦がす。肌に残された焼け跡は規則性のある模様――幾何学模様と文字を刻んでいた。

「一丁上がりね！」

エリカが快哉を叫ぶ。達也の視力にも、宿主から情報体が抜け出す光景は映らなかった。

だが、エリカに同調している余裕は、達也には無かった。
自分が四肢の自由を奪ったパラサイトに遠当てを撃ち込む。
生体反応を残している宿主の身体が激しく跳ね回る。
再び天より落ちる、封印の雷（いかずち）。
視界の端で、異なる電光がスパークした。
リーナの魔法により黒焦げになったパラサイトの宿主。
こちらは既に、抜け殻だった。
「一匹逃げた。美月、分かるか？」
『すみません、ここからだと、一つ一つの動きは……』
反射的に、通信機へ問い掛けてみるも、返って来たのは申し訳なさそうな声。
それも少し考えれば当然のことで、美月は五感の視覚を拡張する形で見えないものを見ているのであって、遠くのものを拡大して見ることが出来るわけではないのだ。
「そうか。いや、無理を言った。気にするな」
美月にそうフォローを入れて、達也は苦い顔をリーナと、エリカに向けた。
「アンジー・シリウス」
仮面の向こう側に動揺が見えたのは、達也の錯覚ではあるまい。
「何だ」
だが一応、会話をする気はあるようだ。声が変わっているのは、これも『パレード』の効果か。
「封印が済むまで、殺さないでくれないか。後始末が面倒臭い」
短く、絶句する気配。達也が偽悪趣味で「面倒臭い」と言っているのではなく、人の――元、人であったものの生死を、本心から「面倒」程度にしか思っていないことが直感で分かったのだろう。
それでもリーナの答えに変わりは無かったが。
「ワタシには関係ない。ワタシは脱走兵を処理するだけだ」
口調も意識して変えているようだが、イントネーションで丸分かりだぞ、と達也は思った。

無論、口にしたのは別のことだ。
「シリウスの任務か……だからそれは、パラサイトの本体を封印してからにしてもらいたいんだが。
現に、一匹、逃げられた」
「重ねて言うが、パラサイトなどワタシには関係ない」
そう言い捨てて、リーナは森の中に姿を消した。
肩をすくめたくなる気持ちを抑えて、達也はエリカに向き直る。
「出て来たね、シリウス」
エリカからいきなりジャブが飛んで来た。
あの時の事を根に持っている、訳ではないのは、ニンマリとした笑顔で分かったので、達也も苦笑いで応じた。
笑顔を得意げなものに変えた後、笑みを消し、
「あれ……リーナでしょ？　まるっきり別人に見えるけど」
エリカは真顔で、そう訊ねた。
「丸きり別人なのに何故そう思うんだ？」
「仕草、かな。手足の運びや首の振り方、目付けなんかで大体分かるよ」
「流石だな……」
エリカの観察力に、達也は舌を巻かずにいられなかった。
顔の形から体格まで見た目を変える『パレード』の偽装を、そんな些細な特徴で見抜く。長い年月にわたり磨き抜かれ、鍛え抜かれた人の技は、魔法以上にマジカルでミラクルだ。
だが、いつまでも感心ばかりはしていられない。
「分かっていると思うけど、これもオフレコだ。
それよりエリカにも、リーナに言ったのと同じことを言いたいんだが」
「殺すな、って？」
「そうだ。エリカは説明を聞いていたよな。
宿主が死なない限り、パラサイトはその中から脱出して逃げることが出来ない。

逃走を妨げる結界は張ってあるけど、殺さず無力化する方が確実だ」

達也の要請は合理的なものだ。

それはエリカにも理解できている。

「ゴメン、達也くんには悪いけど、それは出来ない」

だが、エリカは首を横に振った。

「剣で人を斬る覚悟を決めた時から、相手に斬られる覚悟も持ってるつもり。

だから、自分が斬られた時のことを考えるとね……わざと殺さずに苦痛を長引かせるなんて出来ないよ。

殺さずに助けるのならともかく、封印は殺しちゃうのと一緒でしょ？　だったら、相手が人間じゃなくても、長く苦しまずに済むように、とどめを刺してあげたいんだ」

エリカの顔に、彼女の瞳に、気負っている風は見られなかった。

しかし彼女は、確かにある種の、覚悟を示していた。

「仕方ないな」

殺しは絶対の略奪であり、苦しませて殺しても苦しませずに殺しても、殺すという結果に何の違いも無い、と達也は思っている。

しかし、だからといって、エリカを説得しようとも思わなかった。

価値観は人それぞれだ。

その中には、他人の口出しが許されないものもある。

「まあ、俺が苦労すれば良いだけか」

パラサイト退治が、その禁忌を犯してまで為さなければならないことだとは、達也は考えていなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

達也の後を追いかけていたレオが、雷光やサイオン光が閃く戦闘現場の少し手前で、突然、足を止めた。

ほとんど遅れることなく、深雪も足を止める。

機械のボディを持つピクシーが蹈鞴を踏んだほど、唐突な停止だった。
「西城君、気をつけて」
「そりゃ、オレの台詞だぜ」
レオの口調は「軽口」と言って良いものだったが、その目は油断無く左右を見回している。
「囲まれた……訳じゃ無さそうだな。そう感じさせてるだけみてぇだ。右手が空いてっけど、深雪さん、どうする？」
透視や赤外線知覚の類ではない。特にその種の訓練を積んでいないにも関らず、レオは半包囲の態勢をとる相手の小細工を気配だけで見破った。
「迎え撃ちましょう」
深雪の回答は、短く、分かりやすいものだった。
「……随分な思い切りだな」
かつ、レオが応えに詰まるほど、強気なものだった。
「そうかしら？　でも、怯える必要なんて何処にも無いでしょう？　だって、わたしの手に負えなければ、すぐにお兄様が助けに来てくださるもの」
「あ～、はいはい」
しかし、種明かしを聞いてみれば、実にカワイイものだった。
思わず半眼になって呆れ声が出てしまったほどだ。
「でも、あまりお兄様の御手を煩わせるのも申し訳ないわね……ピクシー、わたしの後ろへいらっしゃい」
「ハイ」
左側の繁みに身体を向けて、深雪がピクシーに指示を下す。達也から深雪の言葉に従うよう命令されているピクシーは、必要最小限の返事と共に、言われたとおりの位置へ移動した。
深雪の左手には携帯端末タイプのＣＡＤがスタンバイ状態で握られている。
いつの間に準備を整えていたのか、ずっと隣にいたにも関らず気

づけなかったレオは、改めて深雪に感心と称賛の目を向けた。
しかし、レオには気の毒なことかもしれないが、彼の視線は深雪の意識に留まらなかった。（いわゆる、「眼中に無い」というやつだ）
深雪の指が滑らかに動いた。
ＣＡＤを持つ左手の親指が、三列四行のキーパッド上を素早く舞う。
彼女から警告の類は一切無かった。
森の空気に、小さな煌きが混じった。幹や枝、地面に落ちる細かな氷の粒。細氷、ダイヤモンドダストと呼ばれる現象だ。
二月、内陸部の、夜の山林。環境条件を考えれば、あり得ないとまでは言い切れない。
だがこれを自然現象と勘違いする者は、敵味方の双方にいなかった。
一瞬で半径百メートルのエリアにダイヤモンドダストを発生させた魔法。しかしこれは、攻撃用の術式でも防御用の術式でもなかった。
深雪はただ、敵意の定かでない相手が攻撃して来た場合に備えて、周囲の空間を自分の認識下に置いただけだった。
薄く、事象干渉の力を広げただけで、気象条件を変化させる力。
かつて、十月の横浜事変において、摩利は深雪の魔法を「戦術級と言っても差し支えない」と評価した。
その評価は一部正しく、一部不正確だ。
深雪の魔法は、「言っても差し支えない」ではなく、戦術級そのものだった。
深雪にとって魔法の技術とは、効果を高めるものというより、影響範囲を狭く抑えるものという側面が強い。
無作為に放てば、見渡す限りの世界を白く染める力――それが深雪の魔法だった。

この有様を前にして、レオは本気で焦った。

レオにとって喧嘩は「話をつける」為の手段だった。

横浜の時の様に、相手がこちらと話をする気がないと分かっている場合は、力ずくで「お引取り頂く」。

相手がコッチを侮ってちょっかいをかけて来ているのであれば、自分は安く（易く）ないと拳で「分かってもらう」。

知り合いが迷惑をこうむっているのであれば、チョッと荒っぽく揺さぶって「手を引かせる」。

話し合いというには少し（？）乱暴かもしれないが、喧嘩はあくまでも交渉ごとの一部だ。

しかし深雪のこの力は、相手の主張どころか存在そのものを軽く吹き飛ばしてしまいかねない。

ネズミを嬲るネコというより、蟻を踏み潰す象だ。

これは相手が気の毒すぎる。

レオの流儀に反している。

「深雪さん、コイツらはオレが相手をする。

アンタは達也が来るまで、援護に回ってくれ」

薄っすらと氷の欠片が積もった世界に、指向性を持つ戦意が生じていた。

敵意ではなく、戦意。否定感情を伴わない、目的意識。

相手は街のチンピラなど比べ物にならない戦いのプロだが、それでも、深雪の前には鎧袖一触だろう。おそらく、最初から「話にならない」。

「そう？　でしたら、お任せします」

深雪はレオの言葉に、あっさりと一歩下がった。

しかし、森をすっぽりと覆う冷気は、居座ったままだ。

こりゃ引けねえぞ、とレオは気合を入れた。

木立ちの影から、繁みの中から、大振りのナイフを構えた野戦服の男たちが次々に姿を現す。

総勢十名を数えたところで、増加は止まった。
進行方向に生じていた閃光は何時の間にか見えなくなり、闘争のざわめきは聞こえなくなっていた。
向こうはどうやら一段落したらしい。
「パンツァー〔Ｐａｎｚｅｒ〕」
早く来てくれよ、達也、と心の中で呟きながら、レオは起動式展開の音声コマンドを唱えた。
皮肉にも、それが合図になった。
声も無く、音も無く、一人の兵士が正面から突っ込んで来た。
速い、とレオが思う間も無く、
突き出されるナイフ。
それをレオは左腕で弾く。
レオと兵士は、共に驚愕していた。
但しそれは、停滞につながらない。
ナイフを持っていない兵士の左手が、レオの顔面へ伸びる。
まだ十分な間隔が存在したにも関らず、レオは本能の命じるままに、右へ身体を投げ出した。
顔の横を、衝撃波が突き抜ける。
鼓膜――正常。バランス器官――ダメージ小。
受けたダメージを確認しながら、レオは地面を転がってすぐに立ち上がった。
本当はもう少し距離を取りたかったところだったが、そんな生易しい相手ではない。
起き上がった直後、突き込まれるナイフ。あのまま地面を転がっていたら、上からのし掛かられてチェックメイトだっただろう。
肩の付け根を目掛けて突き出された刃先を――相手兵士も同国人の高校生を殺すつもりは無かったようだ――レオは腕を立てて受けた。
ナイフに掛けられた「貫通」の魔法と、フェイクレザーの袖に掛けられた「硬化」の魔法が激突した。

ナイフはレオの皮膚に届かず、レオの拳が兵士の顎を抉った。
豪快な左フック。
遺伝子操作による強化に加えて、たゆまない鍛錬の結果生まれた常識外れのパワーが、一撃で訓練されたソルジャーをノックアウトするという非常識を生んだ。
そのあり得ざる光景に唖然として、残り九人の動きが止まる、ことは、しかし、無かった。
間髪入れず、レオの左右から襲い掛かってくるナイフ。
一人でも持て余し気味だったのが、今度は二人同時。
しかも左右のナイフの刃渡りが異なるというおまけ付きだ。
余程の剣の名手でも、受け切るのは困難であろうコンビネーション。
いくら人間離れした反射神経、超人的な運動神経を持っていると言っても、レオは剣の達人というわけではない。
薄羽蜻蛉を修得する為、短期間とはいえ千葉道場で修行を積んだ成果で、レオにはそこらの有段者に後れをとらない刀剣戦闘力がある。しかし、所詮は促成栽培。運動能力という豊かな土壌だけでは通用しない嵐に見舞われた時、出来ることには限りがある。
レオは己の魔法を信じて、左の敵に集中した。
右側から迫る刃を視界から閉め出す。
鎖骨の下を狙う細身の直剣を、下からはね上げながら左腕をしならせる――
フリッカー気味のパンチが相手の鼻面を捉えるのと、右側方で刃が打ち合わされる硬質な響きが生じたのは、ほぼ同時だった。
「――助かったぜ」
レオのフリッカーパンチは相手の顔を浅く捉えただけで、決定打には程遠かった。
襲い掛かってきた二人の兵士は、間合いの外に跳び退っている。
内一人は、無手だ。
彼が持っていたナイフは、レオの足下に転がっている。

「流石のアンタも苦戦しているようね」
ナイフを打ち落としたのはエリカの刀だった。
「まあ、あたしが手を出さなくても深雪がカバーしてたみたいだけど」
レオが目線だけで振り返ると、深雪が微かな笑みを返した。どうやら、エリカの援護が間に合わなかった場合、敵兵士の腕は凍りつくことになっていたらしい。
レオは密かに、戦慄を覚えた。
「達也はどうした？」
動揺を消す為、話題を変える。
「後ろに回り込んだ連中の相手をしているわ」
エリカはわざと、大きな声で答えた。
果たして彼女の注文通り、兵士たちの間に動揺が走る。
「深雪、達也くんが自分と合流しなさいって」
「ピクシーはどうするの？」
後ろで傍観者に徹していた深雪が、エリカの伝言に、少しソワソワした声で問い返した。
――笑っている場合ではないのに、笑いの衝動がエリカの喉元までこみ上げた。
「ピクシーはあたしたちのお手伝い。ピクシー、達也くんから指示が来てるでしょ？」
「マスターの・命令と、サイキックの、使用・許可を、確認しました」
「そういう訳よ。深雪、ここは任・せ・な・さい」
こんな場面にもかかわらず、余裕タップリにおどけてみせるエリカ。
「じゃあ、お願いするわね」
深雪は短く応えると、振り返りもせず駆けて行った。
「あ～あ……何処にいるのか分かるの、なんて、野暮なんでしょうねぇ」

「そりゃ、あの二人だからな」
そう言うレオの顔にも、さっきまでとはまるで違う、不敵な表情が浮かんでいた。（本人は必死になって否定するに違いなかったが）
「さてと……お願いされたことだし、チャッチャと片付けますか」
レオの変化に気づいていながら、敢えてそれを指摘せず、ミズチ丸をエリカが握り直した、その時。
「いや、ここまでだ。
エリカ、刀を引け」
新たな役者が舞台に上がった。
エリカが、息を呑む。
人工の林が織り成す闇の中から出て来た長身の影は、
「次兄上……」
エリカの次兄、千葉修次のものだった。

6－（15）　シナジー（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

6－（15）　シナジー

剣の魔法師。

千葉家に与えられたこの二つ名は、かの家がいち早く、刀剣と魔法を併用する近接戦闘技術を確立したことに由来する。

魔法による近接戦闘技術、と言うなら別に、千葉家の専売特許ではない。

スターズが海兵隊（マリーン）から分離する前に編み出したマーシャル・マジック・アーツの方が、時期としては早いだろう。ＵＳＮＡと対抗するように、新ソ連でもコマンド・サンボと俗称される軍隊格闘術を母体とした格闘戦用魔法技術が開発された（こちらはすぐに廃れてしまったが）。インド・ペルシア連邦形成の動乱期にはデリーを中心とする北部地域で銃剣術を応用した近接武器術が生み出された。

しかし、日本以外で生まれた魔法併用型近接戦闘技術は、知られている限り全てが、銃器や「飛び道具としての魔法」を補助するものとして開発された。その主な形態は接近された状態において、銃器に匹敵する攻撃力や銃器を無害化する防御力を発揮することにある。

これに対して千葉家が体系化した「剣術」は、刀剣による白兵戦闘をメインに据える技術体系だ。自分自身に魔法を掛けて銃器の間合いから刀剣の間合いへ飛び込み、素手やナイフより攻撃力に勝る刀剣を以って静かに、速やかに敵を斃す。奇襲性と隠密性に優れたこの技術は、都市ゲリラ戦、対テロリスト作戦における日本軍、日本警察の大きなアドバンテージとなった。

剣術自体は千葉家が編み出したものではない。日本において魔法の軍事利用が研究され始めるのとほぼ同時に、刀剣術との併用というアイデアは様々な魔法師の手で試行錯誤された。千葉家はそれを、修得しやすく体系化しただけだ。

しかし、伝達しやすい形に体系化するという行為は、「技」を「技術」に昇華する。技術の普及にとって、画期的な意味を持つ。千葉家の先代当主は「現代の（上泉）信綱」と称賛され、その功績に対する敬意を以って千葉家は「剣の魔法師」と呼ばれるようになったのだ。

そうした歴史的経緯を背景に、陸軍の歩兵部隊と警察の機動隊に所属する魔法師の実に七割から八割が、一度は千葉の剣術を学ぶと言われている。

陸軍第一師団・遊撃歩兵小隊、通称「抜刀隊」。彼らは九島家の派閥に属する集団だが、同時に刀剣と近距離魔法を使った近接戦闘の部隊であり、歩兵部隊の中でも特に千葉一門の教えを受けた時間が長かった。

彼らにとって千葉家はいわば、師匠筋である。公の席に顔を出すことが無かったエリカのことは知らなくても、「千葉の麒麟児」として有名な修次のことは当然知っている。いや、知っているどころか、この分隊の指揮官からして、修次に剣の手解きを受けた経験を有していた。

従って、

「師範代……」

修次が突然姿を見せて、彼らが硬直してしまったのは、理由のある反応だったのだ。

軍の階級で言えば、まだ学生の修次より正規の士官である分隊指揮官の方が上。

だが今、この場を支配しているのは、武門の序列だ。

修次は、動きを止めた彼らの脇を通り抜け、エリカと向かい合わせに立った。

エリカが怯んだ表情を見せる。

しかしすぐに、強気な眼差しで修次を見返した。

虚勢、であっても、エリカにとって、それ以上に修次にとって、これは画期的なことだった。

エリカが修次に、剣を向けるというのは。
実際に刃を突きつけ合っている訳ではない。
二人とも、得物の切っ先は地面に向けている。
だがそれでも、気持ちの上で、修次とエリカは剣尖を向け合っていた。
この腹違いの妹には、自分に依存している部分があることを、修次は気づいていた。それも無理からぬことだ、と彼は考えていた。
誰にも寄りかからずに生きていけるほど、子供は強い生き物ではない――修次はそう思っている。
自分自身がそうだったのだ。だから少なくとも自分には、自分以外の誰かに対して「誰にも寄りかからずに大人になれ」と強いる資格はない、それが彼の考え方だった。
普通なら、親がいる。親は、子供が無条件で寄りかかって良い存在だ。
だがエリカの場合、これは当てはまらなかった。母親は弱く、父親は親の役目を最初から果たす気がなかった。
実は修次も、自分の父親が嫌いだ。彼がエリカの言う「小手先の技」にのめりこんだのは、半ば父親へのあてつけだった。何故か兄や姉は、親の義務を放棄している父親を見て、それがおかしいと思わないようだ。おかしいどころか、百家の当主として、それが当然と考えている節がある。
修次は、この腹違いの妹に、共感を覚えていたのかもしれない。だから家族の中でただ一人、彼だけが彼女に優しく接し、時に甘えさせ、時に励まし、自分に依存することを許容してきた。
だが、どうやらこの妹も、大人になる時期が来たようだ、と修次は思った。
試しに修次は、剣気を放ってみた。気当たり、と呼ばれる技法だが、高レベルの魔法師が行う場合、切られたと錯覚した相手の身体に直線状の痣が生じたり実際に皮膚が裂け血が流れたりすることもある。

修次の剣気を、エリカは自分の剣気ではね返して見せた。
逸らす、いなすではなく、正面から対抗して見せたのだ。
我知らず、修次の唇に笑みが浮かんでいた。
右手が上がった。
得物を持ち上げた、と見えた時には、エリカへ向けて刃が振り下ろされていた。
目にも留まらぬ剣速、という訳ではない。
極端に予備動作が少ない、予備動作と本動作の境目が認識できない、技による「早さ」。相手の認識の死角を衝く、虚の剣技。ただ手足を動かすだけでそれが技となる、天才の剣。
修次の斬撃を、エリカの刀が受け止めていた。
最初から寸止めにするつもりではあったが、手を抜いてはいない。その修次の技、「早さ」を、エリカは卓越した反応速度と太刀行きの「速さ」で防ぎ止めたのだ。
修次の唇に浮かんだ微笑は、今や、ハッキリとした、獰猛な笑みに変わっていた。
エリカの瞳を染める緊張の色が濃くなった。
片手で押し込まれる修次の刀を、両手で懸命に押し返す。
唐突に、圧力が消えた。
エリカは刹那も遅れず、体(たい)を引いた。
体勢を立て直すことすら必要とせず、再び対峙する兄と妹。
クルリと修次が背中を向けた。
意表をつかれて、エリカの構えに「虚」が生じる。
その隙を衝く一撃、は、やって来なかった。
「次兄上……？」
訝しむ妹には応えず、修次は抜刀隊へ、剣気を向けた。
抜刀隊から狼狽が伝わって来る。
構えを取ってはいるが、修次の見るところ、彼らの反応はエリカより鈍かった。
――彼らには、面白みが無い。

修次の顔から笑みが消えた。
「防衛大学・特殊戦技研究科所属、予備役少尉・千葉修次」
刀を前に掲げたまま、所属・階級・氏名のみの名乗りを上げる修次。（なお、在学中、しかもまだ二年生であるにも関らず予備役とはいえ少尉の階級を与えられているのは、それに見合う実績を残しているからに他ならない）
「小官は現在、テロリストの標的となった民間人護衛の任務を遂行中である。貴殿らの所属・階級・氏名と目的を伺いたい！」
掌を返したように見える修次の行動に、エリカがレオと顔を見合わせた。
「もし貴殿らが民間人に危害を加える目的で出動しているのであれば、それは民主主義に対する叛逆行為だ。
小官は断固として阻止させていただく」
十師族や百家が民主主義を掲げるのは、ある意味で詐欺の様なものだ。彼らは国民の利益よりも魔法師の利益を追求しているのだから。
修次の台詞を聞いていたエリカはそう思ったし、修次本人も、実はそう思わないでもなかった。
しかし、修次の発する気迫に、些細な揺らぎも無い。
彼が突きつけた刃によって、局面は膠着状態に移行した。

◇◆◇◆◇◆◇

達也が深雪を自分の許へ呼んだのは、妹のことが心配だったから、という訳ではない。
そういう要素が全く無い、とは言い切れないが、少なくとも意識されていた理由は、深雪の力が必要になると考えたからであり、エリカとレオの能力では対処できない事態が発生しているのを察知したからである。
そして、達也が推測したとおりの事態が生じていた。

すぐ後ろで、深雪が息を呑んでいる。
彼の前に広がる惨状に。
彼の前には、三々五々、地面に倒れ伏した遊撃歩兵小隊別働隊士卒たち。十名中八名が死体、残る二人も立つことの出来ない重傷――つまりは、全滅だ。
この戦果は、達也のものではない。
今、リーナと交戦している、パラサイトによるものだった。
「リーナ、下がれ！」
「余計なお世話よ！」
達也もただ観戦していた訳ではない。
それどころか、彼も交戦の真っ最中だった。
パラサイトに取り憑かれたＵＳＮＡ軍脱走兵――その中にはスターズの構成員も含まれている――の集団に突撃するリーナ。相手の頭数は六。既に片付けた人数を計算すると、ピクシーから聞いた数よりも増えている。
たった六人と、普通の相手ならば言うことも出来ただろう。シリウスの名前は伊達ではないし、脱走魔法師の「処理」はシリウスに与えられた中心的な任務だ。
だが、リーナは苦戦していた。
彼女に襲い掛かる魔法を達也が分解し続けていなければ、あるいは、やられていたかもしれない。
リーナの最大の武器は、魔法発動の速さだ。
その圧倒的なスピードを以て、例え後出しでも、結果的に、相手に何もさせずに倒す。それがリーナの得意とするスタイル。拳銃の武装デバイスを愛用するのも、このスタイルにマッチしているからだ。
しかしパラサイトは、文字通り想うだけで、魔法を放つ。イメージすることがそのまま、魔法につながっている。起動式その他の発動媒体を必要としない点で、「超能力者」と同じ特性を持っている。
パラサイトは、長所だけでなく、短所も超能力者と似ている。そ

れは、行使できる能力の、バリエーションの乏しさ。人間とは異なる理由で、魔物にも具現化できるイメージに制限があるのだろう。

現代魔法はバリエーションを増やすことにメリットを見出して発達してきた体系だ。超能力のスピードを犠牲にする代わり、多様性と安定性を持たせる。それが有益な変化であることは、数々の実験が証明してきた。だからこそ、この方向性で今まで突き進んで来たのだ。

但しそれは、単独あるいは少数で様々な状況に対応出来るという形の有益性であり、限定された対応に集中すれば良い場合、例えば目視した敵を斃す、というようなケースではやはり、スピードが大きな意味を持つ。

ＣＡＤは正しく、速度と多様性を両立させるためのツールとして開発された。しかしそのＣＡＤの中に、特化型という多様性を犠牲にして速度を優先したカテゴリーが生じていることだけを見ても、スピードの優位がどれほど大きなものであるかが分かる。

ただでさえスピードに優れているパラサイトが、先程の三体に対して、今度は六体。

単純に二倍、とは言えない。

ランチェスターの第二法則によれば、有視界（認識可能領域内）の砲撃・射撃戦闘において戦力比は兵数（兵器数、戦闘力単位数）の二乗に比例する。仮にこの法則が魔法戦闘にも適用されるとすれば、単位時間当たりの魔法発動可能数一対三の場合の戦力比は一対九でその差が八、魔法発動可能数二対六の場合は戦力比四対三十六で、その差は三十二。

それだけの手数の差が生じることになる。

達也やリーナが多数を相手に出来るのは、人数差を単位時間当たりの魔法発動可能数で覆すことが出来るからだ。

この点で優位に立てない今の状況では、達也もリーナも防御を優先せざるを得なかった。特に達也は、自分と、リーナに向けて放たれた魔法を分解することだけで完全に手が塞がっていた。

深雪を呼び寄せたのは、この状況を前以て推測したからだった。
「深雪！」
「はい、お兄様！」
二人が交わした言葉は、たった、それだけ。
ただ名前を呼ばれただけで、深雪は兄が自分に求めるものを、完全に理解していた。
深雪の身体から、正確に言えば深雪の身体が存在する座標から、高圧の事象干渉力が放たれた。
広域干渉。
事象改変の結果を定義せず、ただ干渉力のみを一定領域に作用させる対抗魔法。
事象を改変させない魔法。
ランチェスターの法則は点在する標的に対する攻撃力を定量化できる場合に成立する経験則である。
同じ尺度で測ることが出来ない圧倒的な面制圧力に対して、適用することは出来ない。
深雪の広域干渉は、この場に魔法の空白地帯を作り出した。
達也とリーナが、細く高密度に絞り込んだ魔法を構成する。
彼らは深雪の広域干渉に対抗するだけの干渉力を持っている。
深雪の広域干渉下で深雪に対して直接攻撃を仕掛けるのはこの二人にも難しいが、そうでなければ、数や速度で著しい低減効果を受けるとしても、魔法を発動すること自体は可能だ。
しかしパラサイトには、二人に、否、達也、深雪、リーナの三人に匹敵する事象干渉力は、無かった。
達也とリーナが続け様に魔法を発動した。
達也の魔法の半分は、パラサイトの宿主を殺してしまおうとするリーナの魔法を妨げる為のものだった。
その結果、
三体のパラサイトがリーナに貫かれて絶命し、
三体のパラサイトが、達也の魔法に貫かれた後、自爆した。

◇◆◇◆◇◆◇

修次と抜刀隊の対峙は、少し離れたところで生じた、サイオン波の爆発的な放出により断ち切られた。

『エリカ、レオ、気をつけて！』

『そっちにパラサイトの本体が！』

早口でもつれ気味の、焦りを顕わにした声が通信機から飛び出した。

幹比古と、美月の声だ。

警告としては不完全。

「次兄上！　パラサイトの本体がこちらへ向かっているようです！」

だが二人が何を言いたいのか、エリカは正確に推理した。

そのエリカの台詞に、より強い警戒を示したのは、抜刀隊の方だった。

考えてみれば修次は、パラサイトについて詳しい説明を受けていない可能性が高い。

ヤツラの脅威を何と説明すれば良いか、エリカは迷い、焦った。

その時、

『ほのか、ピクシーをフォローしてくれ』

グループ通信モードに設定していた音声通信ユニットから、達也の声が流れ出た。

その直後のことだった。

ピクシーが、サイオン波の放出があった方角、深雪が駆けて行った方向、達也がいるであろう方へ向けて走り出した。

◇◆◇◆◇◆◇

『ほのか、ピクシーをフォローしてくれ』

「分かりました！」

受信機から舞い込んできた達也の指示に、ほのかは間髪を入れず頷いた。

了解の応答を返してから、フォローといっても一体何をすれば良いのか分からないことに気がついた。

実にほのからしい話であるが、それに続く対応がまた、彼女らしかった。

フォローするにも、とにかく相手の状況を確認しなければ、と光学魔法で視線の通り道をピクシーの所まで通したのである。

案ずるより産むが易し。

怪我の功名。

言い方は色々あるにしても、その選択が偶々、ほのかからピクシーへ通じるサイオンの回路を開いた。

◇◆◇◆◇◆◇

情報部の監獄で、リーナに殺されたもの、二体。

今日の戦闘中、リーナに殺されたもの、四体。

自爆したもの、三体。

それが宿主を失い、今、この場に集ったパラサイトの数。

本体を剥き出しにして、ピクシーに引かれ集まった、妖魔の数だ。

彼らは同じ異世界から招かれたプシオン情報体。

一つの願望によって招かれた、一つの「意識」。

その本体が剥き出しとなったことによって、彼らは一つの存在に戻ろうとしていた。

九体のパラサイトは、既に合体を果たしている。

一つの意識でありながら九つの意志を持つ、不定形の情報体。

一本の幹から九つに枝分かれしたようなその構造は、プシオンを「見る」ことが出来る「目」の持ち主ならば、この国において最も有名な大妖より更に一つ多くの首を持つ、彼(か)の大蛇の同族に見えたかもしれない。

そして、ソレは、また一つ、己の欠片を取り込もうとしていた。
九つの鎌首を広げて、ピクシーを喰らおうとする「大蛇」。
ピクシーは「意志」の防壁を以て、その圧力に耐えていた。
その意志は、今の「彼女」を決定づけた、彼女の「母」とも呼べる人間から分け与えられたもの。
今もサイオンの回路を通じて、サイオンに混じって、「母」から流れ込んでくるもの。

自分は「ソレ」の一部ではないという意志。

自分は自分だけのものではないという意志。

自分は「彼」のものであるという意志。

一個人から派生する意志など、普通なら、「ソレ」に対抗出来るはずも無かった。
だがピクシーの「母」は、ほのかは、普通では無かった。
彼女は「エレメンツ」の末裔。「光」のエレメンツの血を受け継ぐ者。

エレメンツは、数字付き（ナンバーズ）の開発が始まる前に、この国で最初に作られようとした魔法師だ。当時はまだ四系統八種の分類・体系化が確立しておらず、伝統的な属性、「地」「水」「火」「風」「光」「雷」といった分類に基づくアプローチが有効だと考えられていた時期だった。エレメンツの開発も、このコンセプトに従って進められた。

しかし、四系統八種の体系が確立することにより、伝統的な属性に基づく魔法師の開発は非効率と見做されるようになり、エレメンツの開発は中止された。

それだけなら、魔法師開発の公にされない歴史の中で、よく有るエピソードの一つと言える。

だが、エレメンツの場合、魔法の才能以外にも、先天的に与えられた――与えられようとしたものがあった。

魔法師開発研究の最初期。魔法に対する権力者の怖れが迷信的なほどに強かった時代。

エレメンツ開発を決定した権力者たちは、作り上げられた「魔法使い」や「魔女」が、自分たちに決して牙を剥かない保証を求めた。

主に対する絶対服従の因子を、遺伝子に組み込むことを科学者に命じたのだ。

性格は遺伝するのか？

それは、今尚答えが出ない、遺伝学者と心理学者を悩ませているテーマだ。

一卵性双生児でも、全く異なる性格に育つ。この事実を前にすれば「性格は遺伝しない」という結論に飛びつきたくなる。

しかし一方で、親と子、祖父母と孫、曾祖父母、曾孫、そうした縦の血縁で見たならば、単に「環境によるもの」では片付けられない類似性が表れる傾向も、確かに否定できない。

遺伝子工学者は権力者に与えられた課題に沿って、出来る限りの措置を施した。

その結果（と言い切って良いのかどうか）、「エレメンツの末裔」には高い確率で、ある性向が見られる。

それは、依存癖。

誰か特定の人間、多くの場合、異性を定めて、その人間に徹底的に依存する傾向が大きな割合で共通して観測されるのだ。

彼らエレメンツの末裔は、それが遺伝子に刻まれた自らの宿命と考えている。

もしかしたら、そういう言い訳で、他者に依存する自分を許しているのかもしれない。

しかし彼ら、彼女たちの「依存」は、世間一般に見られる「弱い」感情では無い。

彼らの「依存心」には、もっと適切な別の言葉が有る、と主張し

た学者もいる。
即ち、「忠誠心」。
揺るぎなき「自分は彼のものである」という意志。
それは、合体し相乗された妖魔の意志を押し返す程、強固なものだった。

◇◆◇◆◇◆◇

達也がパラサイトと交戦していた地点と、エリカが修次と対峙した地点。
ピクシーが「ソレ」と戦っていたのは、ソレの攻撃に耐えていたのは、ちょうどその中間地点だった。
その地点に到達した達也は、鎌首をもたげて次々とピクシーに食らいつこうとする九頭竜の姿を見た。
彼にプシオン情報体の構造は解らない。
だが、そこに「ある」ということは解る。存在していることは「視」える。
九つのプシオン情報体が根元で一つにつながり、九に分岐したインターフェイスでピクシーを取り込もうとしているその状態が、九頭竜のイメージと合致したのだ。
「なにアレ!?」
何故か達也に着いてきたリーナが、驚きの声を上げた。
「見えるのか?」
「見えてる……訳じゃ無いけど、何となく分かる。あの人形に巨大な『力』が、圧し掛かってる。
タツヤ、あれは一体、なに?」
「貴女がお兄様の言うことを聞かなかった結果よ」
リーナに答えたのは、達也では無く、深雪だった。
素っ気なく、かつ氷点下の声に、反発を覚えたリーナも、取り敢えず沈黙を守った。

「お兄様が殺すなと仰ったのに、貴女が考え無しにパラサイトの宿主を殺しまくったから、本体が自由になって暴れているのよ。
リーナ、貴女、この不始末にどう決着をつけるつもりなの？」
だが今度は流石に、黙っていられなかった。
「不始末って何よ！　ワタシは自分の任務を果たしただけだわ！」
「だったら最後の後始末まで自分でやりなさい。
貴女にそれが出来るの？
お兄様でさえ、封印という消極的な手段を執らざるを得なかったのに」
先程の戦闘以来、この二人の美少女の間には、険悪そのものの空気が流れていた。
そこに、この売り言葉である。
「やるわよ！　見てなさい！」
リーナは思い切り、高値でこの難題を買い取った。
「おい、リーナ」
いくら何でも止めざるを得ない。対抗法の確立していない相手に、ただ突っ込んでいくのは無謀すぎる。
達也はそう考えて、宥めるように声を掛けたのだが。
「うるさい！　タツヤは黙ってて！」
とりつく島も無かった。
「ワタシはこの任務を成功させなきゃならないのよ！　そうでなきゃ、ワタシは何でこんなトコにいるのよ！」
リーナの癇癪は、達也だけに向けられたものでは無かった。この叫びを聞いて、達也にもそれが分かった。
こんなトコ、というのは、場所だけを指しているのでは無い。
寧ろ、今の状況、今の立場、彼女が「アンジェリーナ・シールズ」ではなく「アンジー・シリウス」として今ここに在ること。
それを指しているのだ。
彼女の抱える重荷が垣間見えて、達也は次の言葉を躊躇した。
その隙に、リーナが、自分の持つありったけの魔法を放った。

次々と撃ち出されては空振りに終わる、数多の魔法。
それも当然のことだ。
リーナの魔法は、物理的な事象を改変するものであり、精神体に働きかける魔法を彼女は有していないのだから。
ソレの意識が、リーナへ向いた。
九つの頭が、リーナの方へ向きを変えたように、達也には「視えた」。
途端に襲い掛かる、魔法の嵐。
それを撃ち落とすのに、達也は全力を振り絞らねばならなかった。
第一高校で情報体と化したパラサイトと戦った時は、一人の人間に憑依していた一個体だけが相手だった。
それで、あれ程、苦労した。
それが今回は、九人分。
これでは遠当てを練る隙もない。
いや、それどころか今現在、彼一人で「ソレ」の猛攻を凌ぎ切れている訳ではないのだ。
彼の後ろでは、深雪が「ソレ」の存在するであろうエリアを中心とする球体状の広域干渉フィールドを支え続けている。
だが深雪は、プシオン情報体を感知する「触覚」は持っていても、それを俯瞰する「視覚」を持たない。その為どうしても、領域の指定が甘くなってしまっている。かと言ってこの場の全てを覆うフィールドを形成すれば、達也の術式解散まで妨害してしまうことになる。
ギリギリのせめぎ合いが続いているこの状況で、味方の戦力を少しでも殺ぐ虞のあるオペレーションは、リスクが高すぎた。
ブルゾンの背中をギュッと握る感触。
深雪も不安を覚えているのだろう。
宿主を失ったパラサイトは魔法を「消費」することによって力を失っていくと分かっていても、一体あとどの位の時間を持ち堪えれば良いのか分からない状況というのは、著しく精神力を消耗するも

のだ。
　このままでは深雪やリーナの方が「ソレ」よりも先に参ってしまうかもしれない。
　さっきの無茶の所為で、既にリーナは情報強化の殻の中に閉じ籠もることしか出来ない、という状態になっている。
　やはり、こちらから有効な攻撃が出来ないというのは、大き過ぎるハンデだ。
　物理的な事象に干渉する魔法は通用しない。
　物理攻撃は論外だ。
　可能性があるとすれば、精神に作用する魔法――
（――もう、これしかない）
　達也はギリッと奥歯を噛み締めて、賭に出る覚悟を決めた。
「幹比古、こちらの状況は見えているか？」
『分かってる。今、大急ぎで封陣を組み立てているところだから、もう少しだけ待って』
　音声通信ユニットから聞こえて来る声は、達也以上に焦りの色が濃かった。
「その封陣でコレを抑えられる可能性はどの程度だ？」
　返答は、短い沈黙。
『……正直言って、五割も無いと思う』
　そして、苦渋の滲む告白。
　この回答を聞いても、達也は幹比古のことを非力だとは思わなかった。安請け合い出来る相手でないことは、こうして直接対峙している達也の方が良く分かっているはずだった。
「幹比古、一時的なもので良い。十秒だけ、コレを抑えられないか？」
　達也が初めて示す懇願に、幹比古だけでなく、この通信を聞いていた全員が息を呑んだ。
　何の裏付けも無く、ただ「やってくれ」と頼む。（悪い意味での）他力本願と言えるだろう。

しかしこれは、相手に対する信頼が無いと出来ないことだ。
『……分かった』
少なくとも、幹比古はそう感じた。
『十秒だけ、何があってもソレを抑えてみせる。合図するから、達也は自分の思い通りにやって欲しい』
何か策があって、その為に十秒の時間が必要なのだと。
その時間を確保する為に、自分の力が必要なのだと。
『達也さん、私も協力します！』
ほのかの力強い声が、幹比古の台詞の後に続いた。
張り合っているのではない。ただ、力になりたいと、その一心で。
「分かった。じゃあ幹比古、合図を頼む」
『ＯＫ……三、二、一、今だ！』
自らの掛け声と同時に、幹比古の対妖魔術式（アンチ・デーモン）・迦楼羅炎が放たれた。
ソレ――九頭竜と化したパラサイトの統合体に、「炎」の独立情報体がうねりながら巻き付く。それはあたかも、二匹の龍蛇が互いを喰らい合う姿のようだった。
その下から、ピクシーが思念で「ソレ」を押し戻そうと力を加える。ピクシーの保有するサイオンは、消費するのと同じ速度で補充されている。ほのかはピクシーに対するサイオン供給のコツを完全に掴んだようだ。
無論、達也はそれを黙って見ていた訳ではない。
達也は幹比古の合図と同時に、ＣＡＤを握っていない左腕を背後に回した。
その腕で、
深雪の腰を、
強引に、抱き寄せる。

「！」

声にならない悲鳴。いや、それはもしかしたら、歓喜の声だったかもしれない。

その瞬間、深雪の広域干渉も達也の術式解散も途絶えたが、幹比古とほのかは、達也に約束したとおり「ソレ」を抑え込んでいる。

達也の腕に抱え込まれた深雪は、驚愕のあまり表情を失った顔で、達也を見上げている。

爪先立ちになり至近距離で自分を見上げる妹の顔へ、達也は更に、近づいた。

額と額を合わせ、

視線と視線を融け合わせ、

鼻と鼻が触れ合う距離で、唇と唇が触れ合わんばかりの距離で、

「深雪、“視”ろ！」

達也は、深雪に、力強く、囁いた。

達也から深雪へ、不可視の光が流れ込む。

深雪から達也へ、不可視の光が流れ込む。

二人の間を、二人のオーラが循環する。

「“視”えます、お兄様！」

それはもしかしたら、唇から紡がれた言葉ではなく、心で語られた言葉だったのかもしれない。

二人のコミュニケーションは、一瞬のものだった。

与えられた十秒という時間は、まだ半分が残っていた。

達也の左手は、深雪の頭を自分の胸に抱え込んでいた。

深雪の両手は、達也の胸に添えられていた。

達也の右手が、「ソレ」を指し示していた。

深雪の意識に、「ソレ」の姿が映し出されていた。

達也の、情報体を「視る」力。

深雪は達也の「眼」を通じて「ソレ」を視認し、

封を解かれた、彼女本来の魔法を放つ。

系統外・精神干渉魔法「コキュートス」

精神を、凍りつかせる魔法

精神そのものに作用する深雪の魔法は、プシオン情報体を凍りつかせ――

――器を持たぬ「ソレ」は、粉々に砕けて虚空に散った。

6－（16）　終わりは始まり（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

6－（16）　終わりは始まり

妖魔の本体を視認する知覚を持たないリーナにも、ソレの滅びる様が感じ取れた。停止――凍結し、砕け散る「情報」の塊。情報次元におけるサイオン情報体を操作出来ることが魔法師の条件であるならば、最高レベルの魔法師である“シリウス”が、本体の崩壊と共に撒き散らされた大量のサイオンに気づかないはずは無かった。

「ルーナ・マジック〔Ｌｕｎａｒ　Ｍａｇｉｃ〕……？」

そして自身では精神に干渉する魔法を使えなくても、引き起こされた結果から使われた魔法を推測する事も、リーナの魔法感受性を以てすれば可能だ。

月の魔法（ルーナ・マジック）とは英語圏の魔法師が精神干渉系統の魔法の中でも特に精神を攻撃する、精神に直接ダメージを与える魔法を指して言う名称で、系統外魔法の中で最も有名な魔法の一つである精神攻撃魔法「ルナ・ストライク」に由来する名前だ。

ルナ・ストライクは精神干渉系の系統外魔法には珍しくプロセスが定式化されている魔法であり、スターズの「一等星」クラスはルナ・ストライクを使う魔法師と相対した時、これをどう防ぐか、その対処法を修得する目的でルナ・ストライクの術式を学ぶ。

当然リーナも、ルナ・ストライクを何度も目にしており、その経験故に、初見のコキュートスをそのメカニズムは理解出来ずとも、精神に直接、致命的なダメージを与える魔法だと正しく推測した。

そして、それを繰り出したのが深雪であるということも。

「こんな強力なルーナ・マジックを……ミユキ、アナタ……いえ、アナタたち兄妹は一体……」

地面にへたりこんだまま呆然と呟くリーナ。

決闘の時にこの魔法を使われていたら……という思考は、彼女の意識の中で明確な形にならなかった。今はまだ、大きすぎる驚きが彼女の心を占めていた。

実は深雪も、この時、似たような状態だった。
忘我の淵に半身を浸しながら、達也の胸に身体を預けている。こちらは久々に全力を振り絞った魔法の行使に加えて、初めて目にした達也の視界の、その情報量の多さに酔ってしまったのだろう。
険悪ムードだった二人が正気を失っている（？）この状態は、チャンスだった。
達也は耳から通信機を外して、スイッチを切った。
「リーナ、今見たことは、他言無用だ」
見下ろす視線、幾分低めた声、威圧する口調。
「な、なによ、いきなり……」
普段の彼女なら、こういう高圧的な物言いは逆効果だっただろう。だが達也が予想したとおり、リーナは普段の彼女ではなかった。大きなストレスに晒され、張り詰めた糸に過大な負荷が掛かっていたところに、当面の標的が消失し一種の虚脱状態に陥っていた。
“説得”にはもってこいの状態だった。
「その代わり、アンジー・シリウスの正体について、沈黙を守ると誓おう。この誓約は俺と深雪だけでなく、今日この件に関わったこちら側の全員に適用される」
答えは、リーナから中々返って来なかった。
見下ろす達也の目を、ジッと見返す瞳。その中に、徐々に、思考力が戻って来ているのが達也には見て取れた。
義務感。
猜疑心。
保身。
自己弁護。
様々な思惟がリーナの瞳を過ぎり、彼女の中で（心理学的な）合理化が図られている。達也には精神分析のノウハウも精神感応のスキルも無いのでそこまで明確に理解しているわけでは無かったが、リーナが何とか自分を納得させようとしていることは直感的に解った。

リーナの葛藤は、それほど長く続かなかった。
「……ワタシに拒否権は無いんでしょう？」
「そんなことは無い」
諦念の滲むリーナの台詞を達也は否定したが、拒否した場合にどうなるか、彼は語らなかった。
猜疑は不安を育む。
口にされなかった言葉、というより、口にしなかったという行動が、リーナに対する最後の一押しになった。
「いいわよ……黙っていて貰えるなら、ワタシにとっても悪い話じゃ無いし。
タツヤとミユキことは黙ってる。……どうせ誰にも取り合って貰えないだろうし」
最後のフレーズは口の中で呟かれたもので、達也には聞き取れなかった。
聞き返すことも、達也はしなかった。
彼は、まだ足に力が入らない深雪の身体を横抱きに抱え上げ、いきなり我に返ってじたばたと腕の中で暴れ出した妹に「大人しくしていろ」と命じて、リーナに背を向けた。
背を向けただけで、歩き出さなかった。
不審に思ったリーナが達也に声を掛けようとした、その直前、
「リーナ」
逆に、達也がリーナの名前を呼んだ。
「まだ何かあるの？」
言葉面だけで判断すれば苛立っているようにも解釈出来る台詞だったが、リーナの声は、言葉ほど不機嫌では無かった。
さっきまでの追い詰められていた雰囲気が、憑き物でも落ちたかのように消えていた。
「もしリーナがスターズを退役したければ……」
「えっ？」
「もし軍人であることを辞めたければ、力になれると思うぞ。

いや、俺自身には大した力も無いが、力を貸してくれそうな知り合いに心当たりがある」

「タツヤ？　アナタ、何を言ってるの？」

リーナは「余計なお世話だ」と怒り出すことも「バカげたことを」と笑い飛ばすこともしなかった。

「ワタシは別に、スターズを抜けたいなんて……“シリウス”を辞めたいだなんて思ってないわよ」

ただ不思議そうに、そう答えた。

「そうか」

達也は振り返らぬまま、その答えに短い返事を返して、歩き始めた。

「待って、タツヤ！　何故そんなことを訊くの!?」

大声で呼び止めるリーナへ、遂に振り返ることなく、

「悪かったな、変なことを言って」

それだけを言い残して、達也は遠離って行く。

彼に付き従う機械人形は、当たり前だが、リーナに見向きもしない。

ただ達也に抱き上げられた深雪だけが、兄の肩越しに、気遣わしげな眼差しをリーナへ送っていた。

◇◆◇◆◇◆◇

達也の姿が夜の木陰の闇に消えて、リーナはハッと我に返った。

自分が身動(みじろ)ぎもせず達也の後ろ姿を見詰めていたことに気がついて、慌てて地べたから立ち上がる。

何故、自分の瞳は達也の背中を追いかけていたのか……そんな思いが脳裏に浮かんで、リーナは勢い良く頭(かぶり)を振った。

（タツヤが変なことを言うからよ。そうに決まってる）

意識するまでは、本当に目で後ろ姿を追っていただけだった。

それが、自分の行動を自覚した途端、鼓動の加速と頬の加熱を自

覚した。
実のところこれは、単に自分の思考に引きずられただけの「勘違い」なのだが、自縄自縛に陥っているリーナに、その様な自分を客観化した冷静な分析が出来るはずも無かった。
今の彼女は、吊り橋効果と類似した心理状態に囚われているのだった。
在りもしない「恋心」から意識を逸らす為に、リーナは、何でも良いから別のことを考えようとした。その結果、自然と思考が直近の疑問に吸い寄せられる。
達也の不可解な提案。
彼は何故あんな事を言ったのだろうと、リーナは改めて首を捻った。
魔物に侵された同胞を処分する自分の顔が、自分の姿が、辛そうに見えたのだろうか。
だとしたら、とんだ誤解だ、とリーナは思った。
確かに「身内」へ銃を向けるのは、胸が痛む。
（……だけど、魔物になって生きるよりは）
――安らかな眠りを与えてやる方が慈悲深い、とリーナは考えている。
人間の、魂の尊厳は、それほどに尊いものだと教わってきた。
確かに辛い仕事だが、誰かがやらなければならない務めだ。
自分はそこから逃げ出すつもりは無い。
強い魔法力を持つ魔法師が魔道に落ちたなら、それを討伐する仕事は最強の魔法師たるシリウス、つまり、自分にしか出来ないのだから。
（……自分にしか？）
しかし、思い掛けないところでリーナの思考は躓いた。
新たな犠牲者を出すこと無く、正気を失った魔法師を処分する。
その任務は、確かに、最強の魔法師である彼女が最も適していた。
その事に疑いは無かった――今までは。

今は、必ずしもそうで無いことを知っている。
彼女がやらなくても、あの二人がやってくれる。
彼女が辛い思いをしなくても、同胞殺しの罪悪感に苦しまなくても、異邦人であるあの二人が――
（そうか……だからワタシ、迷って、焦ってたんだ）
この一ヶ月近く、頭の中にずっと居座っていたモヤモヤが、急に晴れたような気がした。

自分がやらなくても、誰かがやってくれる。

それはリーナにとって、思いもよらない発見だった。
決まっていると思っていた、変えられないと思っていた未来が、実は選べるものだと判った。
ずっと一本だと思っていた道が、目の前で急に枝分かれした――例えて言うなら、そんな、期待と不安。
一つの迷いからようやく抜け出したばかりだというのに、リーナの意識はすっかり混乱していた。

◇◆◇◆◇◆◇

達也が向かっていた先は、パラサイトの封印に成功した二体を転がして置いた場所だ。
しかし彼が足を向けた時には既に、そこには先客がいた。
二つのグループが向かい合っていた。
一方は積み重ねた歳月を表す深い皺を刻みながらもピンと姿勢の伸びた老人に率いられた黒服の一団。
もう一方は、豪奢な黒のワンピースに身を包む可憐な少女に率いられた、やはり、黒服の一団。
向かい合っている、といっても、敵対的に睨み合っている訳では無かった。

少なくとも少女に率いられた一団は、老人に率いられた一団に対して敵意を見せていない。それはおそらく、彼らの主である少女が、老人に敵対の意思を持っていないからだった。

少女が老人を見る眼差しには、寧ろ敬意が込められていた。

――少なくとも、表に出ている限りでは。

「九島閣下、お目にかかれまして光栄に存じます」

少女は老人の前に進み出ると、優雅に見える仕草で膝を折った。

但し、優雅ではあっても貞淑なイメージは無かった。貞淑と評価するには、瞳に宿る光が強すぎた。

「わたくしは黒羽亜夜子と申します。四葉の末席に連なり、当主・真夜の使いを務めさせていただいているものですわ」

下げていた頭を上げて、亜夜子はニッコリと微笑んだ。

挑発的でありながら、引き込まれるような妖しい笑み。

だが流石に、九島烈は動じることが無かった。

「四葉殿の代理の方か。道理でその若さにもかかわらずしっかりしている。

私のことは知っているようだね。それとも、名乗った方が良いかな？」

親しい（仲が良い、という意味では無い）者の前では「真夜」と呼ぶ九島だったが、公的には同列・対等な十師族の当主だ。「四葉殿」という言い方は、孫のような年齢の亜夜子を今この場で対等の、敵対者として見ていることの表明でもあった。

「いえ、その様に畏れ多いことは申しません。

ところで閣下、余り時間的な余裕も無いことですし、一つご相談したいことがあるのですけれども」

性急、と評すべき態度だったが、九島老人は特に不快感の類を示さなかった。

時間が無いとまでは思っていなかったが、手早く作業を終えたいという思いは同じだったからだ。

「言ってみなさい」

「ありがとうございます」
鷹揚に頷いた老人にもう一度、芝居がかった仕草でお辞儀をして、亜夜子は真っ直ぐに老人の目を見上げた。
「畏れながら、閣下のご意向はここに封じられたパラサイトと呼ばれる魔物を持ち帰ることにお有りかと存じますが、実を申しますとわたくしが当主より申しつかって参りました用件も封印済みのパラサイトを持ち帰ることなのです」
「ほう」
九島の目に、老いてなお衰えぬ眼光が宿った。
その光をまともに浴びた亜夜子が、僅かに怯んだ顔を見せたが、その表情はすぐに、強気な笑みで塗りつぶされた。
「――幸いこの場に、封印済みの器が二つ。ここは閣下とわたくしで一つずつ、ということで如何でしょうか？」
亜夜子が強気な笑みを維持したまま、老人の眼光を正面から受け止め、答えを待つ。
不意に九島が笑い出した。
声を上げて、楽しそうに。
「いやはや……大したものだ。君は確か、まだ中学生だったはずだが」
亜夜子は自分の年齢を九島に告げていない。彼のこの台詞は、亜夜子が名乗る前から、老人が彼女のことを調査済みだったと言外に告げている。
しかし今度は、亜夜子に動揺した気配は無い。九島烈が自分のことを含めて四葉の手駒を調べ上げていても不思議は無い、という程度の心構えは彼女にも出来ていた。
九島烈がこの場に出て来ることを自分が知っていたのだから、その程度のことを知られていないとすれば寧ろ不思議で不自然だった。
「よかろう。
ここは仲良く、一つずつと行こうではないか」

「ありがとうございます、閣下」
表情を変えず、内心で亜夜子はホッと胸を撫で下ろした。
彼女は自分の魔法力を過大に評価していない。亜夜子は達也のように特定の魔法しか使えないという訳ではないが、深雪のように万能型という訳でもなく、寧ろ得意・不得意がハッキリ分かれるタイプの魔法師だ。そして彼女は、近距離直接戦闘の魔法が余り得意ではない。
かつて「世界最巧」と呼ばれた魔法師と正面からやり合って、自分に勝ち目があるとは考えていなかった。
獲物が二つ転がっていた偶然に、亜夜子は無言の感謝を捧げた。
そして――
（達也さん、お陰様で無事に任務を達成出来そうです）
達也が協力を受諾した事実もなければ、それ以前に協力要請すらしていないにも関わらず、亜夜子はチャッカリ、心の中でそう呟いた。

◇◆◇◆◇◆◇

達也の腕の中で、深雪は身を硬くして小さくなっていた。
彼女がいくら懇願しても、今日に限って達也は妹を腕の中から放そうとしない。深雪は女性として特に小柄という訳ではなく、体重だってそれなりだ。いくら達也が鍛えているからといってもずっと抱えていれば重くないはずはないのだが、深雪の身体を抱き支える達也の腕は小揺るぎもしない。それどころか、凹凸の激しい山林の地面にも関わらず、深雪に揺れを感じさせないほど、丁寧に彼女を抱いていた。
普段の行動・言動からすれば、深雪の方から積極的にスキンシップを図る方が自然に思われる、かもしれない。ところが深雪は、達也の首にしがみつくことすらせず、自分の胸の前で両手をギュッと握って羞恥に耐えているだけだった。

沈黙が、苦しかった。
辛い、ではなく、胸が苦しい。
このままでは、息が止まって、心臓が破裂してしまいそうだ――
他人から見れば「何を大袈裟な」と呆れるに違いなかったが、深雪本人は相当切羽詰まっていて、何か話題を、と熱に浮かされた頭で必死に考えていた。
「お兄様、リーナは」
その結果、出て来たテーマがこれだった。
達也はリーナを、並々ならず気に掛けている。少なくとも、ただの友人に対する気遣いの域を超えて。
それが分かっているから、本音の部分では兄の前でリーナの話題は、余り出したくないと深雪は思っている。
しかし今は、すぐに思いつく話題がそれ以外に無かった。
「うん？」
「リーナは……お兄様の仰ったことを、キチンと受け止めてくれるでしょうか？」
それに今は、深雪もリーナのことが気になっていた。
「分からないな。俺に分かるはずがない。俺は彼女じゃないからな」
達也の口調に何処か自嘲の響きが垣間見えるのは、余計なお節介だったと感じているからだろうか。
もちろん深雪は、兄の言葉が単なるお節介ではないと知っている。
（あるいは、知っている気になっている）
深雪の目から見ても、善良で直情的なリーナは軍人に向いていない。彼女が気に掛けることではないのかもしれないが、リーナを見ていると非常に危うく感じるのだ。
「リーナにはリーナの事情があるんだろう。自分のことを自分の思い通りに出来ないのは、何も彼女に限った話じゃない」
「それでもお兄様は手を差し伸べられたんですよね……？
何故なのですか」
「何故、とは？」

「いきなり思っても見なかった方向に話が転がりかけているのを深雪は自覚した。
立ち止まるなら今しかない、ということも。
「お兄様は……何故リーナを助けようと為さるのですか？
リーナに……特別な感情を持たれているからなのですか……？」
妹の言葉を聞いて達也は目を丸くしたが、それは本当に一瞬のことだった。
「色々と誤解があるようだが……
まずリーナだけを、って深雪は言うけど、リーナのような立場の人間と交流を持ったのはこれが初めてだ。今まで軍の人間といえば、自分よりずっと年上で、職業として軍人の道を選んだ人たちばかりだったからね。
次に、俺がリーナに懐いている感情は、お前が思っているような種類のものじゃない。身も蓋もない言い方をすると、リーナにスターズを抜けてもらった方が、将来的に都合が良いと考えているだけだよ。出来れば軍を抜けるだけじゃなくて、コッチに移住して欲しい。日本に帰化してくれればベストだな」
達也の言葉に、嘘は感じられなかった。
こうして零（ゼロ）の距離でお互いを感じているのだ。兄の言葉に少しでも偽りがあれば、深雪にはそれを見抜く自信があった。
「もちろん、同情していない訳じゃないぞ。
ある意味で、俺とリーナは良く似ている。同じカテゴリーに属する、と表現した方が良いのかな。
俺もリーナも『今の立場』に置かれるにあたり、事実上、選択肢が無かった。
一高生になったのは、俺がもぎ取った『選択』と言えないことも無いが、リーナには多分、そんな些細な選択肢も無かったと思う。
俺はいずれ、与えられていない選択肢を作り出し、選び取る。
割り当てられた役（ロール）を捨てて、与えられた舞台から飛び出す。
もしリーナが同じ事を望むなら、同類の誼（よしみ）で力になってやろう、

と思ったんだが……」
言い淀んだ達也は、バツの悪そうな笑みを浮かべた。
「どうやら、余計なお世話だったよう、だ？」
達也の口調の乱れには、ちゃんと、訳があった。
今まで彼の腕の中で縮こまっていた深雪が、彼の首に腕を回して、息が詰まるほどの力でギュッと抱きついていた。
達也は思わず、妹を抱き支えていた手を放してしまった。
だからといってドスンと落とすような真似はせず、深雪の身体をそっと足から下ろしたのは、身体にすり込まれた無意識の技か。
地面に足をつけても、首に回された深雪の腕は離れなかった。
「余計なお世話なんかじゃありません……お兄様のお心遣いは、いつかきっと、いいえ、遠くない未来に、リーナの心へ届くに違いありません。
だってリーナは、この度の一件で『今の自分』に『疑い』を持ったに違いありませんもの。
少し単純ですけど、リーナは賢い子です。お兄様とこれほど深く関わって、何の疑問も懐かないということはあり得ません」
「単純はひどいな」
兄妹はクスッと笑い合って、仲良く並んで歩き始めた。
――機械でありながら、と言うべきか、機械ならでは、と言うべきか、空気を読んで（？）文字通りの置物と化していたピクシーが、黙ってその後に続いた。

◇◆◇◆◇◆◇

兄妹のほのぼのとした空気も、これを見ては流石に変わらざるを得なかった。
最初にパラサイトを封印した場所は、もぬけの殻だった。
封印したパラサイト二体は、何者かに持ち去られていた。
『すみません、達也さん……目を離したつもりは無かったんですが

……』

『……達也さん、申し訳ありません……』

『達也、柴田さんと光井さんを責めないで欲しい。

二人が気を抜いた訳じゃないのは、僕が保証するよ。

封印済みの「器」が持ち去られたのに、僕も気づかなかったんだ。

僕の封印なのに……』

「三人とも、そんなに自分を責めるな。

俺は全く、気にしていない」

通信機から聞こえてきた、すっかり気落ちした声と、自己嫌悪に浸り掛けている声と、口惜しさに歯がみしそうな声に、達也は努めて明るい声で答えを返した。

『達也さん……』

何やら感激した声が返ってきたのは、多分、誤解しているのだろう。

達也の態度は相手を思い遣っての演技ではなく、本当に、大して気にしていないだけなのだ。

……流石に、呆れてはいたが。

「鳶（トンビ）に油揚げをさらわれた格好だけど、今回は相手の方が一枚上手だったというだけのことだ。

元々捕まえた後のことはそれほど深く考えていなかったのだし、いつまでも拘っているべきことじゃない」

達也の言葉通り、「捕まえた後でどうするか」について、彼らは具体的な計画（プラン）を立てていなかった。

漠然と「幹比古の実家に任せれば良いか」と考えていただけであり、封印したパラサイトの利用方法など全く頭に無かった。

そういう意味では、彼らに持って行かれた方が有効活用のような気もする。

彼らなら、うっかりパラサイトを逃がしてしまう等という間抜けな真似もしないだろうし。

（しかし、まあ……狙っていたのかね？）

「お兄様？」
黙り込んでしまった理由を勘違いしたのだろう。
気遣わしげに問い掛けてくる深雪に、達也は何でも無いと手を振った。
達也の様子から、犯人の見当は付いていると深雪は理解したようだ。多分、情報遡及の力を使って犯人を突き止めたと考えたのだろう。
実際に「視力」も使っていた。その結果、ここで何があったのか、彼は大凡（おおよそ）のところを把握している。
しかしそれ以前に、ここには「犯人」の片方から達也へ向けてメッセージが残されていた。彼が脱力していたのは、主にその所為だ。
一陣の風が吹き抜け、土に還らず形を残していた枯葉を巻き上げた。
その中に黒い羽（おそらく、鴉の羽）が混じっているのを夜目の利く達也の両眼は捉えていた。

◇◆◇◆◇◆◇

達也がエリカ・レオのコンビと合流した時には、修次も抜刀隊も撤収済みだった。
彼らはお互いを労い、何があったのか互いに深く詮索すること無く、帰途についた。
ピクシーはそのまま、学校のガレージに置いてきた。
校内に入る為、一旦フェンスを跳び越えてから、改めて正門に回るという手間を掛けなければならなかったが、エリカもレオも「面倒臭いから帰る」とは言わなかった。
幹比古たちと合流した四人は、七人のグループになってゾロゾロと学校を後にした。
この時間にこの人数、校門を出る際、流石に守衛から不審げな目を向けられたが、この時間でなければ実践出来ない儀式魔法の実験、

という予め用意しておいた言い訳と、女性陣のまぶしい笑顔の威光で、特に問い詰められることなく脱出に成功した。

こうして、一つの長い夜が終わりを告げた。

今夜の出来事が、人と、魔と、魔物が、人の世の陰で争う暗闘の歴史の新たな幕開けになったと、この時の達也にはまだ、知る由もなかった。

6－（16）　終わりは始まり（後書き）

いつも本作をお読みいただきありがとうございます。
今後の予定を活動報告に掲載致しましたので、是非ご一覧ください。

6－（17）　エピローグ～別れと再会と予期せぬ再会～（前書き）

この物語はフィクションです。
この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

6－（17）　エピローグ～別れと再会と予期せぬ再会～

風に乗って楽しげなざわめきが聞こえてくる。第一高校の校内は、喜びの声に満たされていた。

耳を澄ませばその中に混じる泣き声も聞き取ることが可能だったが、それは決して不幸な出来事の故ではないと分かっている。

対照的に、カフェテリアは閑散としていた。

まばらな人影は、両手の指に満たない数だった。

別に、今が授業中でここにいる生徒がサボっている、という訳ではない。

今日は、卒業式だったのだ。

達也は紙コップではなくちゃんとセラミックのカップに入れられたコーヒーを一口含み、カップをソーサーではなく直接テーブルに置いた（ソーサーは最初からついていなかった）。

魔法師の間では余り使われることのない多目的腕時計に目を落とす。

式自体は既に終わっている時間だ。

あの声は、式が終わって校庭に出て来た卒業生たちのものだろう。

この後、二つの小体育館を使ってパーティが開かれることになっている。

こんな時まで一科生と二科生を分けるのは嫌らしい気もするが、多分、その方が当人たちも気楽で良いのだろう。

正しいことが常に最適なこととは限らないのだ。二科生は一科生が一緒だと変に萎縮してしまうだろうし、一科生は二科生を（主に魔法大学への進学率の点で）気にして存分に騒げなくなるかもしれない。二つの会場で料理にも飲み物にもその他の面でも差は無いのだから、正しさに拘る必要がある場面ではないだろう、と達也も思っている。

ただ会場を分けている所為で、しなくてもいい苦労をしている人間も確かにいる。会場の設営に当たった業者や料理を提供する学食のスタッフは、会場が二つになっている分、追加で報酬を得るのだから「余分な」苦労とは言わないだろうが、例えば卒業パーティを主催している生徒会は、余分な苦労を強いられている人間として真っ先に名前が挙げられる口だった。

もうお分かりのことだろう。

達也は、卒業パーティの当日の運営で大忙しの深雪を待っているのだった。

誤解の無きよう言い添えておくが、彼も準備や運営を「手伝おうか？」と申し出たのである。それも、結構繰り返し。

あずさなどは、あからさまに、手伝って欲しそうにしていた。

だが深雪が断固として、達也の手助けを拒んだのである。

『こんなことでお兄様の御手を煩わせるわけには参りません！』

と一歩も引かない勢いで言われては、あずさもすごすごと引き下がるしかなかった。

まあ、妹の過剰な思いやり（？）を抜きにしても、達也の存在は多くの一科生にとって、そして少なくない二科生にとって、複雑で微妙なものである。

一科生と二科生を隔ててきた物差しそのものに疑問を投げ掛ける能力と実績の持ち主。

三年生にとっては、最後の年にいきなり投げ込まれた波乱の種だ。出しゃばらないのが、正解だったのだろう。

もっとも、最終的に彼が今日のパーティを手伝わないことが決まった時に、達也がそれとなく「これで良かった」みたいなことを口にした時、偶々（？）その場にいた真由美は何故か大層ご立腹だったが。

その真由美は無事、魔法大学に合格した。彼女の実力と実績ならば当然とも思われるが、「あの夜」以来パッタリと「吸血鬼」の被害が途絶えたことも、余計な気がかり無く受験に専念できたという

意味でプラスに働いたに違いなかった。
彼女はこの四月から、同じく順当に合格した鈴音や克人と共に、魔法大学で学ぶことになる。
摩利は、魔法大学を受験しなかった。彼女は防衛大学に進学することになった。理由は言うまでもない。ただこのことは直前まで真由美も知らなかったようで、達也も一度、真由美が摩利を散々冷やかしている——多分、その裏で寂しがっている——場面を目にしている。
魔法大学と防衛大学はそれほど離れているわけでもないし、会おうと思えばいつでも会えるのだが、同じ大学へ進学すると思っていた親友が——二人は親友という言葉で括られるのを嫌がるかもしれないが、周りの人間にとっては今更だった——別の学校に進むとなれば、やはり平気ではいられないのだろう。
防衛大学に進む、と言えば——
「司波」
そう考えた達也に、声が掛けられた。
「小早川先輩、もうパーティが始まる時間では？」
相手は、彼が思い浮かべた当人だった。
「ああ、まあそうだけど、君がここにいるって摩利に聞いたものでね」
九校戦で事故を起こした小早川の魔法技能は、懸命のリハビリにも関わらず、結局、回復しなかった。魔法感受性は損なわれていなかったが、魔法を使うこと、「魔法が使える」ということに対する猜疑心を取り除けなかった。
小早川は十月の時点で、退学を決意していたらしい。
しかし残り半年では、文科高校や理科高校に転校するにしても、進学の準備期間としては明らかに足りない。
彼女は、転校し、一年浪人して、新たな進路を探すつもりだったようだ。
「俺に何か？」

「ああ、その、何だ……面と向かうと、やはり言いにくいな……いや、要するにだ、君に……お礼を言いたくてね」

恥ずかしそうに顔を赤らめた小早川に、達也は割と本気で首を傾げた。

「小早川先輩に礼を言われるようなことはしていませんが」

「そんなことはない！」

人気の少ないカフェテリアに、小早川の張り上げた声は良く響いた。

本人にとっても思い掛けないことだった様子で、首を竦めながら一層赤面した顔でボソボソと続けた。

「魔法が使えなくても魔法に関する知識と感受性を活かす道がある、というあのアドバイスは、君のものだったんだろう？」

達也は一瞬、顔を顰めそうになったが、小早川の心情を考えて嫌そうな顔を堪えた。

「渡辺先輩が喋ってしまわれたんですか……」

それでも、呆れ声まで隠すことは出来なかったが。

「そう言わないでくれ。あたしが摩利から無理矢理聞き出したんだよ」

「渡辺先輩にはご自分のアイデアだということにしておいてくれるように言ってあったんですが」

小早川のことは、摩利も真由美も、九校戦の代表に選ばれた三年生女子全員が悩んでいた。中でも同じように事故を起こして、辛うじて事なきを得た摩利にとっては、到底他人事とは思えなかったようだ。小早川の事故に端を発して、十月に平河千秋が事件を起こしたことも、摩利の悩みに拍車を掛けた。

その事件の後、摩利は達也に愚痴をこぼしたことがある。彼の責任ではないと解っているが、との前置きがついていたが、彼女の愚痴を要約すれば、小早川の事故は本当に防止できなかったのか、という趣旨のものだった。

達也はその疑問に対する答えを持っていた。

答えは「出来ない」である。
彼は全知全能ではない。いや、この際「全能」は度外視するとしても、「全知」ではない。彼の注意力は深雪と自分と、自分の担当範囲をカバーするのが精一杯で、他に目を配っている余裕は無かった。それは他のメンバーも同じで、小早川本人と彼女のＣＡＤを担当していた平河（姉）が細工に気づかなかったのだから、他の誰も気づきようは無かった。
しかし、そう冷たく切り捨てるのも気が引ける場面だった。だから達也は、仮定の話として別の道を示唆したのである。
彼は、魔法を作戦に組み込む際に魔法のことが分かっている作戦スタッフが不足している、という話を藤林から何度か聞かされていた。魔法技能の持ち主はその絶対的な数の不足から常に前線へ回され、必然的に後方で作戦を管理するスタッフは魔法のことを机上でしか知らない非魔法師ばかりになっているのが実情だと。
何らかの理由で魔法を使えなくなった優秀な魔法師が作戦スタッフに加わってくれたら、前線の魔法師は今よりずっと動きやすくなるのに、と前線・後方の兼務を余儀なくされている藤林は達也に向かって愚痴っていた。その話を、固有名詞を使わずに摩利に聞かせたのである。
「そうらしいな。だが摩利は、余り隠す気は無かったようだぞ」
「全く、あの人は……」
「あたしも、話してくれて嬉しかった」
達也が忌々しげにこぼした台詞を、小早川の真摯な声が遮った。
「自分では意識していなかったけど、あの言葉を聞くまで、あたしは自分に絶望していた。
負けるもんか、と強がっていたけど、そう思っていること自体が、既に負けてしまっている自分を誤魔化す為のものだった。
だけど摩利から君が話してくれたことを聞いて、あたしは本当に、目の前が開けた気がしたんだ。自分の進むべき道はこれだって思った。それはあたし一人にとどまるものじゃなくて、あたしと同じよ

うに魔法師の道を絶たれた魔法科高校生にとっての希望になると思った。

あの土壇場で進路をいきなり変えて、たった半年で合格できるまで頑張れたのは、その思いがあったからだと思う」

小早川の顔が再び赤く染まっているのは、口にするには恥ずかしい台詞だと思っているからに違いなかった。

達也は別に、恥ずかしい台詞を聞いているとは感じなかったのだが。

「だから、司波、いいえ、司波君、ありがとうございます」

口調を丁寧なものに変えて深々と一礼する小早川。

これを前にして座ったままでいられるほど、達也も図太くは無い。

椅子から立ち上がり、踵を鳴らして足を揃えた。

いきなり鳴り響いた靴音に驚いて顔を上げた小早川だけでなく、カフェにいた少数の客全員の視線を集めていたが、達也はそれを特に意識することもなく無視して、小早川に独立魔装大隊で叩き込まれた敬礼を送った。

「司波君……」

「小早川先輩、月並みですが、頑張ってください」

敬礼を解いて、達也は照れもせず、笑いもせず、そう言った。

小早川の目に涙が浮かびかけたが、彼女は泣き出さずに、微笑んで頷いた。

「先輩、パーティが始まっていますよ」

「そうだな。じゃあ、これで。君も頑張ってくれ」

小走りに去って行く小早川を見送って、達也は腰を下ろした。

ぬるくなったコーヒーも、不思議と不味くは感じなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

「お兄様、お待たせしました」

弾む息の中から掛けられた声に、達也は携帯情報端末で作成中の

草稿から目を離して顔を上げた。
「達也くん、何を書いていたの？」
顔を上げた彼に声を掛けてきたのは深雪ではなく、卒業証書の入った筒――こういう物は、やはり紙が使われている――を胸に抱えるように持ってニコニコ笑っている真由美だった。
「魔法の持続時間を引き延ばすシステム的なアシストに関する、チョッとした覚え書きです」
「……いや、そんな何でも無いことのように流してしまうテーマじゃないと思うんだが」
呆れ顔でこちらを見る摩利に、達也は軽く肩を竦めて見せた。
反射的に、小早川の件で嫌味を言ってやろうかとも思ったのだが、今日は彼女たちが主役の目出度い日だ、そう思い、自粛した。
「それより皆さんお揃いでどうしたんですか？
七草先輩にしても渡辺先輩にしても、二次会のお誘いが無かったとは思えませんが」
達也の言葉に顔を見合わせた女子生徒たちの背後から、克人がぬっと顔を出した。
「その前に、お前に挨拶しておこうと思ってな」
「……恐縮です。わざわざお運びいただかなくても後ほど俺の方から伺うつもりでしたが……」
「あら、そうなの？
パーティの間中、こんな所に引っ込んでいる達也くんのことだから、知らん顔して帰っちゃうかと思ったんだけど」
拗ねた顔全開で嫌味を言う真由美に、それが演技だと分かっていても、言い訳しなければ、という気持ちに達也はさせられた。
「生徒会役員でもない俺が卒業パーティに顔は出せないでしょう。まして、一科生の方のパーティには」
「何でよ！」
建前論を振りかざした達也の弁明に、いきなり本気で突っかかってきた台詞があった。

卒業生をかき分けて、まぶしい金色の頭が達也の前に現れた。
「どうして正規の生徒会役員でもないワタシがパーティの手伝いをさせられて、風紀委員のタツヤが何もしないで良くなるのよ！？」
達也に食って掛かったのは、チャッカリ人手に数えられていたリーナだった。
「……風紀委員は生徒会役員じゃないぞ。それに、臨時であってもリーナは生徒会役員じゃないか」
「納得できないわ！」
卒業生の目もリーナには大して気にならないのだろう。
困惑する真由美たちを前に、リーナはいつも通り憤っていた。
「チョッとリーナ、お兄様に失礼なことを言わないで」
そして、そんな彼女に立ち向かった（？）のは、いつもどおり深雪の兄思いな言葉だった。
「貴女が臨時生徒会役員なのもお兄様が風紀委員でいらっしゃるのも、卒業パーティの準備が始まる前から決まっていたことじゃないの。
第一、今更何を不満じみたことを言っているの。あんなにノリノリだったじゃない」
何が「ノリノリ」だったのか達也には分からないが、リーナが真っ赤になったところを見ると、人目を集めることだったに違いない。
「深雪、ノリノリって？」
ここで「何があったか敢えて訊かない」という選択肢は、達也には無かった。
「タツヤ、何でも無いわよ！」
「臨時の役員であるリーナに、余り手が掛かる類の準備をやってもらうのは流石に気の毒でしたので、当日の余興を担当してもらったのですが……」
「ミユキ！」
「余興と言っても、自分で何かをするというのではなく、在校生や卒業生の方々から希望者を募るだけで良かったんですが」

「ミユキ、言わないで！」
「リーナはどうやら勘違いしたようで」
「ミユキ、お願い！　言っちゃダメ！」
リーナは必死に深雪の言葉を遮ろうとしていたが、面白がっている真由美と摩利が、彼女の動きを巧みにブロックしていた。
「それで？」
深雪はあまりに必死なリーナの声に、チラッと彼女の方を見たが、達也に促されると、あっさり眼差しを兄へ戻した。
「自分でバンドを率いてステージに上がったんです。立て続けに十曲くらい歌って、すごく盛り上がって」
「うん、中々見事なステージだった。プロ顔負けだったな」
深雪の説明に、摩利が何度も頷くと、
「本当、シールズさん、とっても歌が上手いのね。ステキな声だったわよ」
満更お世辞でも無さそうな口調で、真由美がリーナの歌を賞賛した。
「うっ……」
赤い顔で俯くリーナ。
怒っている顔ではなく、明らかに照れている顔で。
それを見て、達也は微笑ましい気持ちになった。
「そうか……良い思い出になったな、リーナ」
「……知らないわよ」
ぷいっ、とそっぽを向いた仕草に、彼女を除いた人数分の、暖かな笑い声が上がった。

◇◆◇◆◇◆◇

（リーナを見たのはあれが最後だったな）
卒業式を最後に、リーナは学校に出て来なくなった。
深雪に訊いたところ、Ａ組では「帰国の準備で忙しい」という説

明がされていた。
だが思うに、それ以前から撤収命令が出ていたのだろう。
それでもあの日までリーナが登校を続けたのは、卒業パーティの準備という、高校生として割り当てられた役目を果たす為だったのではないだろうか。
もしそうであるなら、彼女も少しは高校生であることをエンジョイできたのだろう。
――到着便の遅延案内を見ながら、達也はそんなことを考えていた。
一昨日で三学期は終了した。
つまり、高校生活最初の一年が終了したということだ。
達也の成績は相変わらずだった。
理論科目の点数が極端に良く、
実技科目の点数がかなり悪い。
総合順位は中の下。
だがそれも気にならない。
この一年、色々なトラブルに巻き込まれ続けてきたが、着実に目標へ近づいている。
予想外にいい友人関係も築くことが出来た。
事件の連続というマイナス面を考慮しても、上々の一年だったと言えるだろう。
今日はその友人を出迎える為に、東京湾海上国際空港に来ていた。
もちろん、一人ではない。
彼の左右には深雪とほのかが、彼の前にはレオとエリカと幹比古と美月が座っている。
あと小一時間ほどで、雫を乗せた飛行機が到着する予定だった。
「でもやはり、アメリカ本土からですと時間が掛かりますね」
達也の左から深雪がそう話し掛けると、
「軍用機は四分の一以下の時間で太平洋を横断するそうですけど、民間機は何故こんなに時間が掛かるんでしょう？」

右隣から、ほのかが問い掛ける。
すると、
「エンジンが違うぜ。軍用機は大気圏外周まで上がるからな。民間機は、安全性と経済性優先だ」
正面からレオが口を挿み、
「あら、良く知ってるのね。馬に蹴られる野蛮人のくせに」
エリカが茶々を入れる。
「んだとゴラァ」
「レオ、よしなよ」
「エリカちゃんも一々茶々入れないの」
そして幹比古と美月が苦労して仲裁に入るのも、まあ、いつものことだ。
その時、達也はロビーの人混みの中に見覚えのある金色の輝きを見つけた。
急に立ち上がった達也を、何事かと友人たちが見上げる。
続いて素早く立ち上がったのは深雪だった。
彼女も、僅かに遅れて、達也と同じものを見つけていた。
短く「少し外すぞ」と断りを入れて歩き出した達也に、深雪が続く。
慌ててほのかも立ち上がったが、何故か、正面に座っていたエリカにスプリングコートの裾を引っ張られた。
「ほのか、邪魔しちゃダメだよ。
ライバルとのお別れなんだからさ」
行儀悪く背もたれに身体を預けて振り返ったエリカの視線の先には、
達也に見つかって逃げ出すのではなく、寧ろ彼ら兄妹の方へ歩いてくるリーナの姿があった。

◇◆◇◆◇◆◇

「タツヤ、ミユキ、ワタシの見送りに来てくれたの」
普通に声の届く距離まで近づいて、先に口を開いたのはリーナだった。
「まあな。ここで会えたのは偶然だが」
リーナは一時期の思い詰めた様子がすっかり消えて、飾らない気さくな笑みを浮かべている。ただ、完全に元通り、という感じはしなかった。来日したばかり頃には無かった、迷いの影が瞳の奥に見える。それが彼女を、僅かな期間で随分と大人っぽくなったように見せていた。
「あらっ？　今日発つって言ってなかったかしら」
「聞いてないわね」
すっとぼけて嘯くリーナの戯れ言を、深雪が一刀両断する。
とは言え深雪も気を悪くしている訳ではなく、苦笑気味に笑みを浮かべていた。
「まあ、冗談はこの位にして、と……二人とも、お世話になったわね」
笑みをふてぶてしいものへと変えたリーナに、
「迷惑を掛けた、の間違いじゃないか」
達也はサラリと嫌味を返した。
「迷惑をこうむったのはこっちの方よ。……本当に、最後まで容赦の無い人ね、タツヤ」
「手加減してもらって喜ぶリーナでもあるまいに……それに、最後じゃないだろう？」
達也の問いに、リーナは肩を竦めた。
「どうかしら。
ワタシがそんなに気安く本国を離れられるとは思えないんだけど」
リーナの声には、諦念が混じっていた。
しかし、それをかき消すように、
「でも、これが最後なんかじゃないわ」
深雪が強い意志を込めた言葉を挿んだ。

「ミユキ？」
「だからわたしは、さようならは言わないわよ、リーナ」
「……ミユキ、それって何だか、告白みたいよ？」
目を丸くして深雪を凝視していたリーナの顔が、悪戯っぽい笑顔に変わる。
「そうね、一種の告白かも。
貴女は、わたしのライバルよ、リーナ」
深雪はそれに動じることなく、揺るぎない声で言い切った。
「貴女はきっと、お兄様が差し伸べられた手を取ることになるわ。
貴女はきっと、お兄様の仲間になる。
そこからがわたしたちの、本当の勝負。
だから、さよならは言わない。
また会いましょう、リーナ」
リーナは、再び目を丸くした。そして今度は、柔らかな、彼女の髪と瞳の色に相応しいお日様のような笑みを浮かべた。
「……アナタの言うことは、ワタシには良く理解できないのだけど……ミユキ、きっとアナタの言うとおりになるって、今、ワタシも予感している。
だから、また会いましょう、ミユキ、タツヤ」

◇◆◇◆◇◆◇

「ただいま」
リーナがゲートに消えて一時間後、雫の第一声が、これだった。
「お帰り、雫」
潤んだ目で抱きつくほのかの背中をポンポンと叩いて宥め、雫は達也へ目を向けた。
「お帰り、雫。無事で何よりだ」
「うん」
短い受け答えは留学前と変わらなかったが、

「雫、雰囲気が変わったわね」
「そうだね、大人っぽくなった」
深雪とエリカが言うように、身に纏う雰囲気が随分大人びていた。
「なにかイケナイ体験でもしちゃったのかな？」
「エリカちゃん！？」
ニンマリと笑ったエリカの台詞に反応したのは美月で、当の雫は軽く小首を傾げるばかり。それ自体は以前と変わらぬ景色だったが、以前よりも余裕のようなものが強く感じられる。
「達也さん」
「うん？」
ほのかがようやく抱擁を解いて離れると、雫は達也の前に歩み寄って、彼の顔を見上げた。
「お話ししたいことがいっぱいある。レイからもたくさん伝言を預かってる。
聞いてくれる？」
「良いよ。是非聞かせてくれ」
それは多分、彼女がアメリカで獲得した、多くの知識によるものだろう。
達也はそう思った。

◇◆◇◆◇◆◇

雫の話はかなり長いものだった。
それでも、全てを話し終えることは出来なかった。
レイ――レイモンド・クラークの伝言は、他の友人たちの前で話せることではなかった。
（招待を受けざるを得ない、か……）
残った話をする為に、雫は達也を自分の家に招待した。
大実業家、「北方潮」の私邸へ、だ。
それは四葉にとっても、小さくない意味を持つものだった。

しかし、招待を受けないという選択肢は無い。
彼女が持ち帰った情報は、これからの行動方針を決めるのに、必要なものだ。
最初から決まっている結論を、自宅のリビングで達也は改めて確認した。
その時、呼び鈴が鳴った。
ドアホンに出た深雪があげた驚きの声が、達也の耳に届いた。
達也の前に姿を見せた深雪の顔には、驚愕と、焦りの色が浮かんでいた。
「あの、お兄様、お客様なのですが……」
「俺が出ようか？」
達也は、何か強面の招かれざる客でも来たのか、と思って腰を上げかけたのだが――
「いえ、それには及びませんが……お客様は、四葉本家で会った、桜井水波ちゃんなんです」
「なに……？」
それは、達也にとっても、全く予期しない来訪者だった。

◇◆◇◆◇◆◇

達也の隣には深雪、彼の前には春らしいパステルカラーのワンピースの少女。
彼女、桜井水波は丁寧に一礼した後、達也に一通の封書を手渡した。
達也は水波に座るよう言って、自身もソファに腰を下ろした。
水波の見ている前で、その視線に促されて封を切り、中の手紙に目を通す。
読み進めて行くに連れて、口の中に幻覚の苦みが広がっていくのを達也は感じた。
差出人は、四葉真夜。

手紙には、決まり文句の季節の挨拶の後に、こう書かれていた。

『この春、水波ちゃんを第一高校へ入学させることになりました。ついては達也さん、貴方たちのお家に水波ちゃんを住まわせてあげてくださいな。

彼女は一人前の家政婦として、既に十分な技能を持っています。メイドロボを購入する位なのだから、家事をする手が必要なのでしょう？　貴方も深雪さんも、高校二年生ともなれば色々と忙しくなるでしょうからね。

彼女には住み込みのメイドとして働くように言い含めてありますので、お家のことを気兼ねなく言いつけてください。

それから、水波ちゃんにはガーディアンとしての仕事も覚えてもらうつもりです。

先輩として、色々教えてあげてくださいね』

紙面から、叔母の高笑いが聞こえてきた、ような気がした。

達也が手紙を折り畳んで封筒に戻し、テーブルの上に置くと、その仕草に何かを感じたのか、深雪が「お兄様？」と気遣わしげに声を掛けた。

達也は一つ深呼吸して、深雪に手紙を渡した。

しばらくして、息を呑む音が深雪の喉から発せられた。

深雪が手紙から目を離すのを待っていたように、水波が向かい側で立ち上がった。

「未熟者ですが、よろしくお願いいたします。奥様のお言いつけどおり、精一杯務めさせていただきます」

深々と水波が頭を下げる。

彼女が真夜から打ち込まれた楔と分かっていても、穂波と同じ顔をした彼女を拒絶することは、達也にも深雪にも出来なかった。

叔母の皮肉が効いた苦すぎる「贈り物」に、達也はポーカーフェイスを装って頷くことしか出来なかった。

――四月から始まる新年度は、今まで以上に波乱に富んだものになる――

そんな、ありがたくない予感が、達也の胸に居座って消えようとはしなかった。

〔初年度の部　完〕

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2569f/

魔法科高校の劣等生～初年度の部～

2011年3月21日16時27分発行